2026年度
大学院人文科学研究科
講義概要（シラバス）

法政大学

科目一覧 ［発行日：2026/5/1］最新版のシラバスは、法政大学Webシラバス（https://syllabus.hosei.ac.jp/）で確認してください。

凡例　その他属性

〈他〉：他学部公開科目
〈優〉：成績優秀者の他学部科目履修制度対象科目
〈S〉：サティフィケートプログラム_SDGs
〈ダ〉：サティフィケートプログラム_ダイバーシティ
〈カ〉：サティフィケートプログラム_カーボンニュートラル
〈グ〉：グローバル・オープン科目
〈実〉：実務経験のある教員による授業科目
〈ア〉：サティフィケートプログラム_アーバンデザイン
〈未〉：サティフィケートプログラム_未来教室

哲学専攻_（修士課程）【X0000】 言語分析哲学研究Ⅰ－１［中釜　浩一］ 春学期授業/Spring 1
哲学専攻_（修士課程）【X0001】 言語分析哲学研究Ⅰ－２［中釜　浩一］ 秋学期授業/Fall 2
哲学専攻_（修士課程）【X0002】 言語分析哲学研究Ⅱ－１［中釜　浩一］ 春学期授業/Spring 3
哲学専攻_（修士課程）【X0003】 言語分析哲学研究Ⅱ－２［中釜　浩一］ 秋学期授業/Fall 4
哲学専攻_（修士課程）【X0004】 形而上学研究Ⅰ－１［齋藤　元紀］ 春学期授業/Spring 5
哲学専攻_（修士課程）【X0005】 形而上学研究Ⅰ－２［齋藤　元紀］ 秋学期授業/Fall 6
哲学専攻_（修士課程）【X0008】 古代哲学史研究Ⅰ－１［文 景楠］ 春学期授業/Spring 7
哲学専攻_（修士課程）【X0009】 古代哲学史研究Ⅰ－２［文 景楠］ 秋学期授業/Fall 8
哲学専攻_（修士課程）【X0010】 古代哲学史研究Ⅱ－１［文 景楠］ 春学期授業/Spring 9
哲学専攻_（修士課程）【X0011】 古代哲学史研究Ⅱ－２［文 景楠］ 秋学期授業/Fall 10
哲学専攻_（修士課程）【X0012】 論理学研究Ⅰ－１［安東　祐希］ 春学期授業/Spring 11
哲学専攻_（修士課程）【X0013】 論理学研究Ⅰ－２［安東　祐希］ 秋学期授業/Fall 12
哲学専攻_（修士課程）【X0016】 近代倫理学史研究Ⅰ－１［菅沢　龍文］ 春学期授業/Spring 13
哲学専攻_（修士課程）【X0017】 近代倫理学史研究Ⅰ－２［菅沢　龍文］ 秋学期授業/Fall 15
哲学専攻_（修士課程）【X0018】 近代倫理学史研究Ⅱ－１［菅沢　龍文］ 春学期授業/Spring 17
哲学専攻_（修士課程）【X0019】 近代倫理学史研究Ⅱ－２［菅沢　龍文］ 秋学期授業/Fall 19
哲学専攻_（修士課程）【X0020】 中世哲学研究Ⅰ－１［内山　真莉子］ 春学期授業/Spring 21
哲学専攻_（修士課程）【X0021】 中世哲学研究Ⅰ－２［内山　真莉子］ 秋学期授業/Fall 22
哲学専攻_（修士課程）【X0024】 近代ドイツ哲学史研究Ⅰ－１［吉田　敬介］ 春学期授業/Spring 23
哲学専攻_（修士課程）【X0025】 近代ドイツ哲学史研究Ⅰ－２［吉田　敬介］ 秋学期授業/Fall 25
哲学専攻_（修士課程）【X0030】 近世西洋哲学研究Ⅰ－１［佐藤　真人］ 春学期授業/Spring 27
哲学専攻_（修士課程）【X0031】 近世西洋哲学研究Ⅰ－２［佐藤　真人］ 秋学期授業/Fall 29
哲学専攻_（修士課程）【X0032】 近世西洋哲学研究Ⅱ－１［佐藤　真人］ 春学期授業/Spring 31
哲学専攻_（修士課程）【X0033】 近世西洋哲学研究Ⅱ－２［佐藤　真人］ 秋学期授業/Fall 33
哲学専攻_（修士課程）【X0038】 近代西洋哲学研究Ⅰ－１［松井　久］ 春学期授業/Spring 35
哲学専攻_（修士課程）【X0039】 近代西洋哲学研究Ⅰ－２［松井　久］ 秋学期授業/Fall 36
哲学専攻_（修士課程）【X0040】 近代フランス哲学史研究Ⅰ－１［大池　惣太郎］ 春学期授業/Spring 37
哲学専攻_（修士課程）【X0041】 近代フランス哲学史研究Ⅰ－２［大池　惣太郎］ 秋学期授業/Fall 38
哲学専攻_（修士課程）【X0050】 ヨーロッパ精神史研究Ⅱ－１［長谷川　悦宏］ 春学期授業/Spring 39
哲学専攻_（修士課程）【X0051】 ヨーロッパ精神史研究Ⅱ－２［長谷川　悦宏］ 秋学期授業/Fall 40
哲学専攻_（修士課程）【X0052】 法哲学研究 １［内藤　淳］ 春学期授業/Spring 41
哲学専攻_（修士課程）【X0053】 法哲学研究 ２［内藤　淳］ 秋学期授業/Fall 43
哲学専攻_（修士課程）【X0054】 哲学ドイツ語研究 １［吉田　敬介］ 春学期授業/Spring 45
哲学専攻_（修士課程）【X0055】 哲学ドイツ語研究 ２［吉田　敬介］ 秋学期授業/Fall 47
哲学専攻_（修士課程）【X0056】 哲学フランス語研究 １［大池　惣太郎］ 春学期授業/Spring 49
哲学専攻_（修士課程）【X0057】 哲学フランス語研究 ２［大池　惣太郎］ 秋学期授業/Fall 50
哲学専攻_（修士課程）【X0058】 哲学基礎研究Ⅰ ［関口 貴太］ 春学期授業/Spring 51
哲学専攻_（修士課程）【X0059】 哲学基礎研究Ⅱ ［澤田　直］ 秋学期集中/Intensive(Fall) 52
哲学専攻_（修士課程）【X0060】 日本思想史研究Ⅰ-１［頼住　光子］ 春学期授業/Spring 53
哲学専攻_（修士課程）【X0061】 日本思想史研究Ⅰ-２［頼住　光子］ 秋学期授業/Fall 54
哲学専攻_（修士課程）【X0062】 日本思想史研究Ⅱ-１［山本　伸裕］ 春学期授業/Spring 55
哲学専攻_（修士課程）【X0063】 日本思想史研究Ⅱ-２［山本　伸裕］ 秋学期授業/Fall 56
哲学専攻_（修士課程）【X0064】 現象学研究Ⅰ-１［君嶋　泰明］ 春学期授業/Spring 57
哲学専攻_（修士課程）【X0065】 現象学研究Ⅰ-２［君嶋　泰明］ 秋学期授業/Fall 58

日本文学専攻_（修士課程）【X0100】 日本文芸学Ａ　［庄司　達也］ 春学期授業/Spring 59
日本文学専攻_（修士課程）【X0101】 日本文芸学Ｂ［庄司　達也］ 秋学期授業/Fall 60
日本文学専攻_（修士課程）【X0102】 日本文芸批評史Ａ［田中　和生］ 春学期授業/Spring 61
日本文学専攻_（修士課程）【X0103】 日本文芸批評史Ｂ［田中　和生］ 秋学期授業/Fall 63
日本文学専攻_（修士課程）【X0104】 日本古代文芸原典研究Ａ［森　陽香］ 春学期授業/Spring 65
日本文学専攻_（修士課程）【X0105】 日本古代文芸原典研究Ｂ［森　陽香］ 秋学期授業/Fall 66
日本文学専攻_（修士課程）【X0106】 日本古代文芸演習Ａ［加藤　昌嘉］ 春学期授業/Spring 67
日本文学専攻_（修士課程）【X0107】 日本古代文芸演習Ｂ［加藤　昌嘉］ 秋学期授業/Fall 68
日本文学専攻_（修士課程）【X0108】 日本中世文芸原典研究Ａ［阿部　真弓］ 春学期授業/Spring 69
日本文学専攻_（修士課程）【X0109】 日本中世文芸原典研究Ｂ［阿部　真弓］ 秋学期授業/Fall 70
日本文学専攻_（修士課程）【X0110】 日本中世文芸演習Ａ［伊海　孝充］ 春学期授業/Spring 71
日本文学専攻_（修士課程）【X0111】 日本中世文芸演習Ｂ［伊海　孝充］ 秋学期授業/Fall 72
日本文学専攻_（修士課程）【X0112】 日本近世文芸原典研究Ａ［小林　ふみ子］ 春学期授業/Spring 73
日本文学専攻_（修士課程）【X0113】 日本近世文芸原典研究Ｂ［小林　ふみ子］ 秋学期授業/Fall 74
日本文学専攻_（修士課程）【X0114】 日本近世文芸演習Ａ［丸井　貴史］ 春学期授業/Spring 75
日本文学専攻_（修士課程）【X0115】 日本近世文芸演習Ｂ［丸井　貴史］ 秋学期授業/Fall 76
日本文学専攻_（修士課程）【X0118】 日本近代文芸演習ＩＡ［藤村　耕治］ 春学期授業/Spring 77
日本文学専攻_（修士課程）【X0119】 日本近代文芸演習ＩＢ［藤村　耕治］ 秋学期授業/Fall 78
日本文学専攻_（修士課程）【X0122】 日本言語学原典研究Ａ［間宮　厚司］ 春学期授業/Spring 79
日本文学専攻_（修士課程）【X0123】 日本言語学原典研究Ｂ［間宮　厚司］ 秋学期授業/Fall 80
日本文学専攻_（修士課程）【X0124】 日本言語学演習ＩＡ［尾谷　昌則］ 春学期授業/Spring 81
日本文学専攻_（修士課程）【X0125】 日本言語学演習ＩＢ［尾谷　昌則］ 秋学期授業/Fall 82
日本文学専攻_（修士課程）【X0126】 日本言語学演習ⅡＡ［王　安］ 春学期授業/Spring 83
日本文学専攻_（修士課程）【X0127】 日本言語学演習ⅡＢ［王　安］ 秋学期授業/Fall 85
日本文学専攻_（修士課程）【X0128】 日本語学特講Ａ［古牧　久典　］ 春学期授業/Spring 87
日本文学専攻_（修士課程）【X0129】 日本語学特講Ｂ［古牧　久典　］ 秋学期授業/Fall 88
日本文学専攻_（修士課程）【X0130】 沖縄文芸史Ａ［福　寛美］ 春学期授業/Spring 89
日本文学専攻_（修士課程）【X0131】 沖縄文芸史Ｂ［福　寛美］ 秋学期授業/Fall 91
日本文学専攻_（修士課程）【X0132】 中国文学Ａ［遠藤　星希］ 春学期授業/Spring 93
日本文学専攻_（修士課程）【X0133】 中国文学Ｂ［遠藤　星希］ 秋学期授業/Fall 95
日本文学専攻_（修士課程）【X0134】 日本文芸特講ＩＡ（文芸と音楽）［スティーヴン・ネルソン］ 春学期授業/Spring 97
日本文学専攻_（修士課程）【X0135】 日本文芸特講ＩＢ（文芸と音楽）［スティーヴン・ネルソン］ 秋学期授業/Fall 98
日本文学専攻_（修士課程）【X0136】 日本文芸特講ⅡＡ（ｱｰﾄﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ研究）［中沢　けい］ 春学期授業/Spring 99
日本文学専攻_（修士課程）【X0137】 日本文芸特講ⅡＢ（ｱｰﾄﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ研究）［中沢　けい］ 秋学期授業/Fall 100
日本文学専攻_（修士課程）【X0140】 女性文学Ａ［藤木　直実］ 春学期授業/Spring 101
日本文学専攻_（修士課程）【X0141】 女性文学Ｂ［藤木　直実］ 秋学期授業/Fall 102
日本文学専攻_（修士課程）【X0142】 文芸と視聴覚芸術Ａ［越川　道夫］ 春学期授業/Spring 103
日本文学専攻_（修士課程）【X0143】 文芸と視聴覚芸術Ｂ［越川　道夫］ 秋学期授業/Fall 104
日本文学専攻_（修士課程）【X0144】 学際的文学論Ａ（文学の境界領域、文学と宗教等）［アンドレ・リネペ］ 春学期授業/Spring 105
日本文学専攻_（修士課程）【X0145】 学際的文学論Ｂ（文学の境界領域、文学と宗教等）［アンドレ・リネペ］ 秋学期授業/Fall 106
日本文学専攻_（修士課程）【X0146】 文学と風土Ａ［多田　蔵人］ 春学期授業/Spring 107
日本文学専攻_（修士課程）【X0147】 文学と風土Ｂ［多田　蔵人］ 秋学期授業/Fall 108
日本文学専攻_（修士課程）【X0148】 能楽作品研究Ａ［佐藤　和道］ 春学期授業/Spring 109
日本文学専攻_（修士課程）【X0149】 能楽作品研究Ｂ［佐藤　和道］ 秋学期授業/Fall 110
日本文学専攻_（修士課程）【X0150】 能楽資料研究Ａ［宮本　圭造］ 春学期授業/Spring 111
日本文学専攻_（修士課程）【X0151】 能楽資料研究Ｂ［宮本　圭造］ 秋学期授業/Fall 112
日本文学専攻_（修士課程）【X0152】 現代能楽論［深澤希望・観世喜正・観世淳夫］ 秋学期授業/Fall 113
日本文学専攻_（修士課程）【X0153】 日本語・日本文学の基礎Ａ［竹林　一志］ 春学期授業/Spring 115
日本文学専攻_（修士課程）【X0154】 日本語・日本文学の基礎Ｂ［竹林　一志］ 秋学期授業/Fall 116
日本文学専攻_（修士課程）【X0157】 表現と社会［平井　彰司］ 秋学期授業/Fall 118
日本文学専攻_（修士課程）【X0158】 編集理論［仲俣　暁生］ 秋学期授業/Fall 119
日本文学専攻_（修士課程）【X0159】 作家特殊研究Ａ［乗代　雄介］ 春学期授業/Spring 120
日本文学専攻_（修士課程）【X0160】 作家特殊研究Ｂ［乗代　雄介］ 秋学期授業/Fall 121
日本文学専攻_（修士課程）【X0161】 文芸創作研究Ａ［川本　直］ 春学期授業/Spring 122
日本文学専攻_（修士課程）【X0162】 文芸創作研究Ｂ［川本　直］ 秋学期授業/Fall 123

日本文学専攻_（修士課程）【X0165】 日本文芸特殊研究ⅡA［小秋元　段］ 春学期授業/Spring 124
日本文学専攻_（修士課程）【X0166】 日本文芸特殊研究ⅡB［小秋元　段］ 秋学期授業/Fall 125
日本文学専攻_（修士課程）【X0167】 日本文芸特殊研究ⅢA［小林　ふみ子］ 春学期授業/Spring 126
日本文学専攻_（修士課程）【X0168】 日本文芸特殊研究ⅢB［小林　ふみ子］ 秋学期授業/Fall 127
日本文学専攻_（修士課程）【X0169】 日本文芸特殊研究ⅣA［スティーヴン・ネルソン］ 春学期授業/Spring 128
日本文学専攻_（修士課程）【X0170】 日本文芸特殊研究ⅣB［スティーヴン・ネルソン］ 秋学期授業/Fall 130
日本文学専攻_（修士課程）【X0171】 日本文学・国際日本学基礎演習［本塚　亘］ 秋学期授業/Fall 132
日本文学専攻_（修士課程）【X0172】 日本文学・国際日本学論文作成基礎実習［金子　広幸］ 秋学期授業/Fall ... 133
英文学専攻_（修士課程）【X0216】 英米文学特殊研究A［波戸岡　景太］ 春学期授業/Spring 135
英文学専攻_（修士課程）【X0217】 英米文学特殊研究B［波戸岡　景太］ 秋学期授業/Fall 136
英文学専攻_（修士課程）【X0218】 英米文学演習第二（American Fiction）A［波戸岡　景太］ 春学期授業/Spring 137
英文学専攻_（修士課程）【X0219】 英米文学演習第二（American Fiction）B［波戸岡　景太］ 秋学期授業/Fall 138
英文学専攻_（修士課程）【X0221】 英米文学演習第三（British Fiction）B［小澤　央］ 秋学期授業/Fall 139
英文学専攻_（修士課程）【X0224】 英語学概論A［廣田　友晴］ 春学期授業/Spring 140
英文学専攻_（修士課程）【X0225】 英語学概論B［北澤　茉奈］ 秋学期授業/Fall 141
英文学専攻_（修士課程）【X0226】 言語学概論A［石川　潔］ 春学期授業/Spring 142
英文学専攻_（修士課程）【X0227】 言語学概論B［石井　創］ 秋学期授業/Fall 143
英文学専攻_（修士課程）【X0228】 英語学演習（英語史・言語変化理論）A［福元　広二］ 春学期授業/Spring ... 145
英文学専攻_（修士課程）【X0229】 英語学演習（英語史・言語変化理論）B［片見　彰夫］ 秋学期授業/Fall 146
英文学専攻_（修士課程）【X0230】 言語学演習（応用言語学）A［川﨑　貴子］ 春学期授業/Spring 147
英文学専攻_（修士課程）【X0231】 言語学演習（応用言語学）B［川﨑　貴子］ 秋学期授業/Fall 148
英文学専攻_（修士課程）【X0236】 言語学特殊研究（理論言語学・認知科学）A［石川　潔］ 春学期授業/Spring 149
英文学専攻_（修士課程）【X0237】 言語学特殊研究（理論言語学・認知科学）B［石川　潔］ 秋学期授業/Fall ... 150
英文学専攻_（修士課程）【X0238】 英語教育学研究A［印南　洋］ 春学期授業/Spring 151
英文学専攻_（修士課程）【X0239】 英語教育学研究B［印南　洋］ 秋学期授業/Fall 153
英文学専攻_（修士課程）【X0240】 英語発音法A［髙橋　豊美］ 春学期授業/Spring 155
英文学専攻_（修士課程）【X0241】 英語発音法B［髙橋　豊美］ 秋学期授業/Fall 157
英文学専攻_（修士課程）【X0248】 英米文学特殊演習A［小島　尚人］ 春学期授業/Spring 159
英文学専攻_（修士課程）【X0249】 英米文学特殊演習B［小島　尚人］ 秋学期授業/Fall 161
英文学専攻_（修士課程）【X0250】 文学方法論A［宮川　雅］ 春学期授業/Spring 163
英文学専攻_（修士課程）【X0251】 文学方法論B［宮川　雅］ 秋学期授業/Fall 164
英文学専攻_（修士課程）【X0252】 英語音声・応用研究A［田嶋　圭一］ 春学期授業/Spring 165
英文学専攻_（修士課程）【X0253】 英語音声・応用研究B［田嶋　圭一］ 秋学期授業/Fall 166
英文学専攻_（修士課程）【X0254】 理論言語学・認知科学A［常本　亜希］ 春学期授業/Spring 167
英文学専攻_（修士課程）【X0255】 理論言語学・認知科学B［常本　亜希］ 秋学期授業/Fall 169
英文学専攻_（修士課程）【X0260】 言語科学方法論A［石川　潔］ 春学期授業/Spring 171
英文学専攻_（修士課程）【X0261】 言語科学方法論B［ブライアン・ウィスナー］ 秋学期授業/Fall 172
英文学専攻_（修士課程）【X0262】 音声言語科学特論［田嶋　圭一］ 春学期授業/Spring 173
英文学専攻_（修士課程）【X0263】 音声言語科学演習［田嶋　圭一］ 秋学期授業/Fall 175
英文学専攻_（修士課程）【X0268】 Academic English (Effective Writing) A［安部　義治］ 春学期授業/Spring 177
英文学専攻_（修士課程）【X0269】 Academic English (Effective Writing) B［安部　義治］ 秋学期授業/Fall ... 178
英文学専攻_（修士課程）【X0270】 Academic English (Oral Presentation) A［安部　義治］ 春学期授業/Spring 179
英文学専攻_（修士課程）【X0271】 Academic English (Oral Presentation) B［安部　義治］ 秋学期授業/Fall .. 180
史学専攻_（修士課程）【X0300】 日本史学研究Ⅰ［小倉　慈司］ 春学期授業/Spring 181
史学専攻_（修士課程）【X0301】 日本史学研究Ⅱ［及川　亘］ 春学期授業/Spring 182
史学専攻_（修士課程）【X0302】 日本史学原典研究Ⅰ［大塚　紀弘］ 春学期授業/Spring 184
史学専攻_（修士課程）【X0303】 日本史学原典研究Ⅱ［大塚　紀弘］ 秋学期授業/Fall 185
史学専攻_（修士課程）【X0304】 日本古代史特殊研究Ⅰ［山口　英男］ 春学期授業/Spring 186
史学専攻_（修士課程）【X0305】 日本古代史特殊研究Ⅱ［山口　英男］ 秋学期授業/Fall 187
史学専攻_（修士課程）【X0306】 日本中世史特殊研究Ⅰ［末柄　豊］ 春学期授業/Spring 188
史学専攻_（修士課程）【X0307】 日本中世史特殊研究Ⅱ［末柄　豊］ 秋学期授業/Fall 189
史学専攻_（修士課程）【X0308】 日本中世史特殊研究Ⅲ［仁平　義孝］ 春学期授業/Spring 190
史学専攻_（修士課程）【X0309】 日本中世史特殊研究Ⅳ［仁平　義孝］ 秋学期授業/Fall 191
史学専攻_（修士課程）【X0310】 日本近世史特殊研究Ⅰ［山崎　圭］ 春学期授業/Spring 192
史学専攻_（修士課程）【X0311】 日本近世史特殊研究Ⅱ［山崎　圭］ 秋学期授業/Fall 193
史学専攻_（修士課程）【X0312】 日本近世史特殊研究Ⅲ［西沢　淳男］ 春学期授業/Spring 194
史学専攻_（修士課程）【X0313】 日本近世史特殊研究Ⅳ［西沢　淳男］ 秋学期授業/Fall 195

史学専攻_（修士課程）【X0314】 日本近代史特殊研究Ⅰ ［内藤　一成］ 春学期授業/Spring 196
史学専攻_（修士課程）【X0315】 日本近代史特殊研究Ⅱ ［内藤　一成］ 秋学期授業/Fall 197
史学専攻_（修士課程）【X0316】 日本近代史特殊研究Ⅲ ［森田　貴子］ 春学期授業/Spring 198
史学専攻_（修士課程）【X0317】 日本近代史特殊研究Ⅳ ［森田　貴子］ 秋学期授業/Fall 199
史学専攻_（修士課程）【X0318】 日本考古学特殊研究Ⅰ ［高橋　健］ 春学期授業/Spring 200
史学専攻_（修士課程）【X0319】 日本考古学特殊研究Ⅱ ［高橋　健］ 秋学期授業/Fall 201
史学専攻_（修士課程）【X0320】 日本考古学特殊研究Ⅲ ［小倉　淳一］ 春学期授業/Spring 202
史学専攻_（修士課程）【X0321】 日本考古学特殊研究Ⅳ ［小倉　淳一］ 秋学期授業/Fall 203
史学専攻_（修士課程）【X0322】 日本古代史演習Ⅰ ［小口　雅史］ 春学期授業/Spring 204
史学専攻_（修士課程）【X0323】 日本古代史演習Ⅱ ［小口　雅史］ 秋学期授業/Fall 205
史学専攻_（修士課程）【X0324】 日本古代史演習Ⅲ ［小口　雅史］ 春学期授業/Spring 206
史学専攻_（修士課程）【X0325】 日本古代史演習Ⅳ ［小口　雅史］ 秋学期授業/Fall 207
史学専攻_（修士課程）【X0326】 日本中世史演習Ⅰ ［大塚　紀弘］ 春学期授業/Spring 208
史学専攻_（修士課程）【X0327】 日本中世史演習Ⅱ ［大塚　紀弘］ 秋学期授業/Fall 209
史学専攻_（修士課程）【X0328】 日本近世史演習Ⅰ ［松本　剣志郎］ 春学期授業/Spring 210
史学専攻_（修士課程）【X0329】 日本近世史演習Ⅱ ［松本　剣志郎］ 秋学期授業/Fall 211
史学専攻_（修士課程）【X0330】 日本近代史演習Ⅰ ［内藤一成］ 春学期授業/Spring 212
史学専攻_（修士課程）【X0331】 日本近代史演習Ⅱ ［内藤一成］ 秋学期授業/Fall 213
史学専攻_（修士課程）【X0332】 日本考古学演習Ⅰ ［小倉　淳一］ 春学期授業/Spring 214
史学専攻_（修士課程）【X0333】 日本考古学演習Ⅱ ［小倉　淳一］ 秋学期授業/Fall 216
史学専攻_（修士課程）【X0334】 日本古文書学研究Ⅰ ［大塚　紀弘］ 春学期授業/Spring 218
史学専攻_（修士課程）【X0335】 日本古文書学研究Ⅱ ［大塚　紀弘］ 秋学期授業/Fall 219
史学専攻_（修士課程）【X0336】 日本古代史研究Ⅰ ［春名　宏昭］ 春学期授業/Spring 220
史学専攻_（修士課程）【X0337】 日本古代史研究Ⅱ ［春名　宏昭］ 秋学期授業/Fall 221
史学専攻_（修士課程）【X0338】 日本古代史料研究［武井　紀子］ 春学期授業/Spring 222
史学専攻_（修士課程）【X0339】 日本中世史研究［及川　亘］ 秋学期授業/Fall 223
史学専攻_（修士課程）【X0340】 日本近世史料学研究Ⅰ ［松本　剣志郎］ 春学期授業/Spring 224
史学専攻_（修士課程）【X0341】 日本近世史料学研究Ⅱ ［松本　剣志郎］ 秋学期授業/Fall 225
史学専攻_（修士課程）【X0342】 日本近代史研究Ⅰ ［内藤　一成］ 春学期授業/Spring 226
史学専攻_（修士課程）【X0343】 日本近代史研究Ⅱ ［内藤　一成］ 秋学期授業/Fall 227
史学専攻_（修士課程）【X0344】 沖縄学入門Ⅰ ［大里　知子］ 春学期授業/Spring 228
史学専攻_（修士課程）【X0345】 沖縄学入門Ⅱ ［大里　知子］ 秋学期授業/Fall 229
史学専攻_（修士課程）【X0346】 東洋史学特殊研究Ⅰ ［塩沢　裕仁］ 春学期授業/Spring 230
史学専攻_（修士課程）【X0347】 東洋史学特殊研究Ⅱ ［塩沢　裕仁］ 秋学期授業/Fall 231
史学専攻_（修士課程）【X0348】 東洋史学特殊研究Ⅲ ［大島　誠二］ 春学期授業/Spring 232
史学専攻_（修士課程）【X0349】 東洋史学特殊研究Ⅳ ［大島　誠二］ 秋学期授業/Fall 233
史学専攻_（修士課程）【X0350】 東洋史学演習Ⅰ ［齋藤　勝］ 春学期授業/Spring 234
史学専攻_（修士課程）【X0351】 東洋史学演習Ⅱ ［齋藤　勝］ 秋学期授業/Fall 235
史学専攻_（修士課程）【X0352】 東洋史学演習Ⅲ ［徳留 大輔］ 春学期授業/Spring 236
史学専攻_（修士課程）【X0353】 東洋史学演習Ⅳ ［徳留 大輔］ 秋学期授業/Fall 238
史学専攻_（修士課程）【X0354】 東洋史学演習Ⅴ ［久野 美樹］ 春学期授業/Spring 240
史学専攻_（修士課程）【X0355】 東洋史学演習Ⅵ ［久野 美樹］ 秋学期授業/Fall 241
史学専攻_（修士課程）【X0356】 東洋古代史研究Ⅰ ［齋藤　勝］ 春学期授業/Spring 242
史学専攻_（修士課程）【X0357】 東洋古代史研究Ⅱ ［齋藤　勝］ 秋学期授業/Fall 243
史学専攻_（修士課程）【X0358】 東洋中世史研究Ⅰ ［宇都宮 美生］ 春学期授業/Spring 244
史学専攻_（修士課程）【X0359】 東洋中世史研究Ⅱ ［宇都宮 美生］ 秋学期授業/Fall 245
史学専攻_（修士課程）【X0360】 東洋近代史研究Ⅰ ［芦沢　知絵］ 春学期授業/Spring 246
史学専攻_（修士課程）【X0361】 東洋近代史研究Ⅱ ［芦沢　知絵］ 秋学期授業/Fall 247
史学専攻_（修士課程）【X0362】 西洋史学特殊研究Ⅰ ［内川　勇太］ 春学期授業/Spring 248
史学専攻_（修士課程）【X0363】 西洋史学特殊研究Ⅱ ［内川　勇太］ 秋学期授業/Fall 249
史学専攻_（修士課程）【X0364】 西洋史学特殊研究Ⅲ ［篠原　琢］ 春学期授業/Spring 250
史学専攻_（修士課程）【X0365】 西洋史学特殊研究Ⅳ ［篠原　琢］ 秋学期授業/Fall 252
史学専攻_（修士課程）【X0366】 西洋史学特殊研究Ⅴ ［ 中込　さやか］ 春学期授業/Spring 254
史学専攻_（修士課程）【X0367】 西洋史学特殊研究Ⅵ ［中込　さやか］ 秋学期授業/Fall 256
史学専攻_（修士課程）【X0368】 西洋史学演習Ⅰ ［内田　康太］ 春学期授業/Spring 258
史学専攻_（修士課程）【X0369】 西洋史学演習Ⅱ ［内田　康太］ 秋学期授業/Fall 259
史学専攻_（修士課程）【X0370】 西洋史学演習Ⅲ ［皆川　卓］ 春学期授業/Spring 260

史学専攻_（修士課程）【X0371】 西洋史学演習Ⅳ ［皆川　卓］ 秋学期授業/Fall 262
史学専攻_（修士課程）【X0372】 西洋史学演習Ⅴ ［中込　さやか］ 春学期授業/Spring 264
史学専攻_（修士課程）【X0373】 西洋史学演習Ⅵ ［中込　さやか］ 秋学期授業/Fall 265
史学専攻_（修士課程）【X0374】 西洋古代史研究Ⅰ ［内田　康太］ 春学期授業/Spring 267
史学専攻_（修士課程）【X0375】 西洋古代史研究Ⅱ ［内田　康太］ 秋学期授業/Fall 268
史学専攻_（修士課程）【X0376】 西洋中世史研究Ⅰ ［内川　勇太］ 春学期授業/Spring 269
史学専攻_（修士課程）【X0377】 西洋中世史研究Ⅱ ［伊丹　聡一朗］ 秋学期授業/Fall 270
史学専攻_（修士課程）【X0378】 ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅰ ［皆川　卓］ 春学期授業/Spring 271
史学専攻_（修士課程）【X0379】 ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅱ ［皆川　卓］ 秋学期授業/Fall 273
史学専攻_（修士課程）【X0380】 アーカイブズ学Ⅰ ［宮間　純一］ 春学期授業/Spring 275
史学専攻_（修士課程）【X0381】 アーカイブズ学Ⅱ ［宮間　純一］ 秋学期授業/Fall 276
史学専攻_（修士課程）【X0382】 文書館管理研究Ⅰ ［鈴木宏宗・大塩勇生］ 春学期授業/Spring 277
史学専攻_（修士課程）【X0383】 文書館管理研究Ⅱ ［芳澤　直之］ 秋学期授業/Fall 278
史学専攻_（修士課程）【X0384】 記録史料学研究Ⅰ ［小宮山　敏和］ 春学期授業/Spring 279
史学専攻_（修士課程）【X0385】 記録史料学演習Ⅰ ［小宮山　敏和］ 秋学期授業/Fall 280
史学専攻_（修士課程）【X0386】 記録史料学研究Ⅱ ［淺井　良亮］ 春学期授業/Spring 281
史学専攻_（修士課程）【X0387】 記録史料学演習Ⅱ ［淺井　良亮］ 秋学期授業/Fall 282
地理学専攻_（修士課程）【X0400】 地形学研究Ⅰ ［前杢　英明］ 春学期授業/Spring 283
地理学専攻_（修士課程）【X0401】 地形学研究Ⅱ ［前杢　英明］ 秋学期授業/Fall 284
地理学専攻_（修士課程）【X0402】 地形学演習Ⅰ ［前杢　英明］ 春学期授業/Spring 285
地理学専攻_（修士課程）【X0403】 地形学演習Ⅱ ［前杢　英明］ 秋学期授業/Fall 286
地理学専攻_（修士課程）【X0404】 気候学研究Ⅰ ［山口　隆子］ 春学期授業/Spring 287
地理学専攻_（修士課程）【X0405】 気候学研究Ⅱ ［山口　隆子］ 秋学期授業/Fall 288
地理学専攻_（修士課程）【X0406】 気候学演習Ⅰ ［山口　隆子］ 春学期授業/Spring 289
地理学専攻_（修士課程）【X0407】 気候学演習Ⅱ ［山口　隆子］ 秋学期授業/Fall 290
地理学専攻_（修士課程）【X0408】 水文学研究Ⅰ ［小寺　浩二］ 春学期授業/Spring 291
地理学専攻_（修士課程）【X0409】 水文学研究Ⅱ ［小寺　浩二］ 秋学期授業/Fall 292
地理学専攻_（修士課程）【X0410】 水文学演習Ⅰ ［小寺　浩二］ 春学期授業/Spring 293
地理学専攻_（修士課程）【X0411】 水文学演習Ⅱ ［小寺　浩二］ 秋学期授業/Fall 294
地理学専攻_（修士課程）【X0412】 自然地理学文献講読Ⅰ ［山口　隆子］ 春学期授業/Spring 295
地理学専攻_（修士課程）【X0413】 自然地理学文献講読Ⅱ ［山口　隆子］ 秋学期授業/Fall 296
地理学専攻_（修士課程）【X0414】 自然地理学特殊講義Ⅰ ［三坂　育正］ 春学期授業/Spring 297
地理学専攻_（修士課程）【X0415】 自然地理学特殊講義Ⅱ ［澤柿　教伸］ 春学期集中/Intensive(Spring) 298
地理学専攻_（修士課程）【X0416】 自然地理学特殊講義Ⅲ ［藁谷　哲也］ 春学期授業/Spring 299
地理学専攻_（修士課程）【X0417】 人文地理学研究Ⅰ ［甲斐　智大］ 春学期授業/Spring 301
地理学専攻_（修士課程）【X0418】 人文地理学研究Ⅱ ［甲斐　智大］ 秋学期授業/Fall 302
地理学専攻_（修士課程）【X0419】 人文地理学演習Ⅰ ［甲斐　智大］ 春学期授業/Spring 303
地理学専攻_（修士課程）【X0420】 人文地理学演習Ⅱ ［甲斐　智大］ 秋学期授業/Fall 304
地理学専攻_（修士課程）【X0421】 社会経済地理学研究Ⅰ ［伊藤　達也］ 春学期授業/Spring 305
地理学専攻_（修士課程）【X0422】 社会経済地理学研究Ⅱ ［伊藤　達也］ 秋学期授業/Fall 306
地理学専攻_（修士課程）【X0423】 社会経済地理学演習Ⅰ ［小原　丈明］ 春学期授業/Spring 307
地理学専攻_（修士課程）【X0424】 社会経済地理学演習Ⅱ ［小原　丈明］ 秋学期授業/Fall 308
地理学専攻_（修士課程）【X0425】 文化地理学研究Ⅰ ［村田　陽平］ 春学期授業/Spring 309
地理学専攻_（修士課程）【X0426】 文化地理学研究Ⅱ ［村田　陽平］ 秋学期授業/Fall 310
地理学専攻_（修士課程）【X0427】 文化地理学演習Ⅰ ［村田　陽平］ 春学期授業/Spring 311
地理学専攻_（修士課程）【X0428】 文化地理学演習Ⅱ ［村田　陽平］ 秋学期授業/Fall 312
地理学専攻_（修士課程）【X0429】 地域社会論研究Ⅰ ［佐々木　達］ 春学期授業/Spring 313
地理学専攻_（修士課程）【X0430】 地域社会論研究Ⅱ ［佐々木　達］ 秋学期授業/Fall 314
地理学専攻_（修士課程）【X0431】 地域社会論演習Ⅰ ［佐々木　達］ 春学期授業/Spring 315
地理学専攻_（修士課程）【X0432】 地域社会論演習Ⅱ ［佐々木　達］ 秋学期授業/Fall 316
地理学専攻_（修士課程）【X0433】 空間構成論研究Ⅰ ［小田　宏信］ 春学期授業/Spring 317
地理学専攻_（修士課程）【X0434】 空間構成論研究Ⅱ ［小田　宏信］ 秋学期授業/Fall 319
地理学専攻_（修士課程）【X0435】 歴史地理学研究Ⅰ ［米家　志乃布］ 春学期授業/Spring 321
地理学専攻_（修士課程）【X0436】 歴史地理学研究Ⅱ ［米家　志乃布］ 秋学期授業/Fall 322
地理学専攻_（修士課程）【X0437】 歴史地理学演習Ⅰ ［米家　志乃布］ 春学期授業/Spring 323
地理学専攻_（修士課程）【X0438】 歴史地理学演習Ⅱ ［米家　志乃布］ 秋学期授業/Fall 324
地理学専攻_（修士課程）【X0439】 人文地理学文献講読Ⅰ ［甲斐　智大］ 春学期授業/Spring 325

地理学専攻_（修士課程）【X0440】 人文地理学文献講読Ⅱ ［甲斐　智大］ 秋学期授業/Fall 326
地理学専攻_（修士課程）【X0441】 人文地理学特殊講義Ⅰ ［川添　航］ 春学期集中/Intensive(Spring) 327
地理学専攻_（修士課程）【X0442】 人文地理学特殊講義Ⅱ ［山本　匡毅］ 秋学期授業/Fall 329
地理学専攻_（修士課程）【X0443】 地理情報システム研究Ⅰ ［中山　大地］ 春学期授業/Spring 331
地理学専攻_（修士課程）【X0444】 地理情報システム研究Ⅱ ［中山　大地］ 秋学期授業/Fall 333
地理学専攻_（修士課程）【X0445】 地理情報システム演習［小寺　浩二］ 秋学期授業/Fall 334
地理学専攻_（修士課程）【X0446】 地理学現地研究Ⅰ ［専任教員が担当］ 春学期集中/Intensive(Spring) 335
地理学専攻_（修士課程）【X0447】 地理学現地研究Ⅱ ［専任教員が担当］ 秋学期集中/Intensive(Fall) 336
地理学専攻_（博士後期課程）【X0460】 地理学特別演習Ⅰ ［前杢　英明］ 春学期授業/Spring 337
地理学専攻_（博士後期課程）【X0461】 地理学特別演習Ⅱ ［前杢　英明］ 秋学期授業/Fall 338
地理学専攻_（博士後期課程）【X0462】 地理学特別演習Ⅰ ［小原　丈明］ 春学期授業/Spring 339
地理学専攻_（博士後期課程）【X0463】 地理学特別演習Ⅱ ［小原　丈明］ 秋学期授業/Fall 340
地理学専攻_（博士後期課程）【X0466】 地理学特別演習Ⅰ ［佐々木　達］ 春学期授業/Spring 341
地理学専攻_（博士後期課程）【X0467】 地理学特別演習Ⅱ ［佐々木　達］ 秋学期授業/Fall 342
地理学専攻_（博士後期課程）【X0468】 地理学特別演習Ⅰ ［米家　志乃布］ 春学期授業/Spring 343
地理学専攻_（博士後期課程）【X0469】 地理学特別演習Ⅱ ［米家　志乃布］ 秋学期授業/Fall 344
地理学専攻_（博士後期課程）【X0470】 地理学特別演習Ⅰ ［山口　隆子］ 春学期授業/Spring 345
地理学専攻_（博士後期課程）【X0471】 地理学特別演習Ⅱ ［山口　隆子］ 秋学期授業/Fall 346
地理学専攻_（博士後期課程）【X0472】 自然地理学特別講義Ⅰ ［三坂　育正］ 春学期授業/Spring 347
地理学専攻_（博士後期課程）【X0473】 自然地理学特別講義Ⅱ ［澤柿　教伸］ 春学期集中/Intensive(Spring) 348
地理学専攻_（博士後期課程）【X0476】 人文地理学特別講義Ⅰ ［川添　航］ 春学期集中/Intensive(Spring) 349
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0500】 心理学研究法演習Ⅰ ［竹島　康博］ 春学期授業/Spring 351
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0501】 心理学研究法演習Ⅱ ［竹島　康博］ 秋学期授業/Fall 352
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0502】 心理学研究法演習Ⅰ ［木村　健太］ 春学期授業/Spring 353
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0503】 心理学研究法演習Ⅱ ［木村　健太］ 秋学期授業/Fall 354
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0504】 心理学研究法演習Ⅰ ［渡辺　弥生］ 春学期授業/Spring 355
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0505】 心理学研究法演習Ⅱ ［渡辺　弥生］ 秋学期授業/Fall 357
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0506】 心理学研究法演習Ⅰ ［福田　由紀］ 春学期授業/Spring 359
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0507】 心理学研究法演習Ⅱ ［福田　由紀］ 秋学期授業/Fall 361
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0508】 心理学研究法演習Ⅰ ［島宗　理］ 春学期授業/Spring 363
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0509】 心理学研究法演習Ⅱ ［島宗　理］ 秋学期授業/Fall 365
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0510】 心理学研究法演習Ⅰ ［越智　啓太］ 春学期授業/Spring 367
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0511】 心理学研究法演習Ⅱ ［越智　啓太］ 秋学期授業/Fall 368
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0512】 心理学研究法演習Ⅰ ［藤田　哲也］ 春学期授業/Spring 369
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0513】 心理学研究法演習Ⅱ ［藤田　哲也］ 秋学期授業/Fall 371
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0514】 心理学研究法演習Ⅰ ［田嶋　圭一］ 春学期授業/Spring 373
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0515】 心理学研究法演習Ⅱ ［田嶋　圭一］ 秋学期授業/Fall 374
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0518】 心理学研究法演習Ⅰ ［林　容市］ 春学期授業/Spring 375
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2026年度以降入学者）【X0519】 心理学研究法演習Ⅱ ［林　容市］ 秋学期授業/Fall 377

心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2026年度以降入学者）【X0520】 学習心理学特論［藤田　哲也］ 春学期授業/Spring 378
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（入学年度共通）【X0521】 音声言語科学特論［田嶋　圭一］ 春学期授業/Spring 380
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2026年度以降入学者）【X0522】 社会心理学特論［越智　啓太］ 春学期授業/Spring 382
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2026年度以降入学者）【X0523】 読書心理学特論［平山　祐一郎］ 秋学期授業/Fall 384
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2026年度以降入学者）【X0524】 教育心理学特論［平山　祐一郎］ 秋学期授業/Fall 385
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2026年度以降入学者）【X0525】 司法犯罪心理学特論［越智　啓太］ 秋学期授業/Fall 386
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2026年度以降入学者）【X0526】 知覚認知心理学特論［竹島　康博］ 秋学期授業/Fall 387
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（入学年度共通）【X0527】 音声言語科学演習［田嶋　圭一］ 秋学期授業/Fall 389
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2026年度以降入学者）【X0528】 生理心理学特論［木村　健太］ 秋学期授業/Fall 391
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2026年度以降入学者）【X0529】 プレゼンテーション演習［藤田　哲也］ 春学期授業/Spring 392
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2026年度以降入学者）【X0530】 臨床心理学特論［中村　玲子］ 春学期授業/Spring 394
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2026年度以降入学者）【X0531】 発達心理学特論［渡辺　弥生］ 春学期授業/Spring 395
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2026年度以降入学者）【X0532】 発達臨床心理学特論［奥田　健次］ 秋学期集中/Intensive(Fall) 397
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2026年度以降入学者）【X0533】 パーソナリティ心理学特論［大森　美香］ 春学期授業/Spring 399
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2026年度以降入学者）【X0534】 言語心理学特論［福田　由紀］ 春学期授業/Spring 401
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2026年度以降入学者）【X0535】 対人発達の心理学［渡辺　弥生　］ 秋学期授業/Fall 403
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2026年度以降入学者）【X0536】 行動分析学特論［島宗　理］ 春学期授業/Spring 405
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2026年度以降入学者）【X0537】 コミュニケーション心理学［福田　由紀］ 春学期授業/Spring 407
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2026年度以降入学者）【X0538】 シングルケースデザイン法演習［島宗　理］ 秋学期授業/Fall 408
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（入学年度共通）【X0540】 心理教育アセスメント演習［熊　仁美］ 春学期集中/Intensive(Spring) 410
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2026年度以降入学者）【X0542】 健康心理学特論［林　容市］ 春学期授業/Spring 412
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2026年度以降入学者）【X0543】 基礎心理学実験法演習［竹島　康博］ 春学期授業/Spring 413
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（入学年度共通）【X0544】 応用心理統計Ⅰ［山口　剛］ 春学期授業/Spring . 414
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（入学年度共通）【X0545】 応用心理統計Ⅱ［山口　剛］ 秋学期授業/Fall 416
心理学専攻_（修士課程）-自由科目【X0546】 心理統計法実習Ⅰ［伊藤　尚枝］ 春学期授業/Spring 418
心理学専攻_（修士課程）-自由科目【X0547】 心理統計法実習Ⅱ［伊藤　尚枝］ 秋学期授業/Fall 420
心理学専攻_（修士課程）-自由科目【X0555】 生理心理学実習［木村　健太］ 秋学期授業/Fall 421
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0600】国際日本学演習Ⅰ［君嶋　泰明］春学期授業/Spring 422
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0601】国際日本学演習Ⅱ［君嶋　泰明］秋学期授業/Fall 423
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0604】国際日本学演習Ⅰ［伊海　孝充］春学期授業/Spring 424
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0605】国際日本学演習Ⅱ［伊海　孝充］秋学期授業/Fall 425
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0606】国際日本学演習Ⅰ［遠藤　星希］春学期授業/Spring 426
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0607】国際日本学演習Ⅱ［遠藤　星希］秋学期授業/Fall 428
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0608】国際日本学演習Ⅰ［王　安］春学期授業/Spring 430
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0609】国際日本学演習Ⅱ［王　安］秋学期授業/Fall . 432
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0610】国際日本学演習Ⅰ［尾谷　昌則］春学期授業/Spring 434
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0611】国際日本学演習Ⅱ［尾谷　昌則］秋学期授業/Fall 435
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0612】国際日本学演習Ⅰ［小秋元　段］春学期授業/Spring 436
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0613】国際日本学演習Ⅱ［小秋元　段］秋学期授業/Fall 437

国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0614】 国際日本学演習Ⅰ ［小林　ふみ子］ 春学期授業/Spring 438
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0615】 国際日本学演習Ⅱ ［小林　ふみ子］ 秋学期授業/Fall 439
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0616】 国際日本学演習Ⅰ ［スティーヴン・ネルソン］ 春学期授業/Spring 440
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0617】 国際日本学演習Ⅱ ［スティーヴン・ネルソン］ 秋学期授業/Fall 442
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0618】国際日本学演習Ⅰ ［間宮　厚司］春学期授業/Spring 444
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0619】国際日本学演習Ⅱ ［間宮　厚司］ 秋学期授業/Fall 445
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0620】国際日本学演習Ⅰ ［川﨑　貴子］春学期授業/Spring 446
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0621】国際日本学演習Ⅱ ［川﨑　貴子］ 秋学期授業/Fall 447
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0622】国際日本学演習Ⅰ ［福元　広二］春学期授業/Spring 448
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0626】国際日本学演習Ⅰ ［大塚　紀弘］春学期授業/Spring 449
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0627】国際日本学演習Ⅱ ［大塚　紀弘］ 秋学期授業/Fall 450
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0628】 国際日本学演習Ⅰ ［松本　剣志郎］ 春学期授業/Spring 451
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0629】 国際日本学演習Ⅱ ［松本　剣志郎］ 秋学期授業/Fall 452
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0630】国際日本学演習Ⅰ ［甲斐　智大］春学期授業/Spring 453
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0631】国際日本学演習Ⅱ ［甲斐　智大］ 秋学期授業/Fall 454
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0632】国際日本学演習Ⅰ ［小原　丈明］春学期授業/Spring 455
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0633】国際日本学演習Ⅱ ［小原　丈明］ 秋学期授業/Fall 456
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0634】国際日本学演習Ⅰ ［佐々木　達］春学期授業/Spring 457
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0635】国際日本学演習Ⅱ ［佐々木　達］ 秋学期授業/Fall 458
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0636】国際日本学演習Ⅰ ［村田　陽平］春学期授業/Spring 459
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0637】国際日本学演習Ⅱ ［村田　陽平］ 秋学期授業/Fall 460
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0642】国際日本学演習Ⅰ ［髙田　圭］春学期授業/Spring 461
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0643】 国際日本学演習Ⅱ ［髙田　圭］ 秋学期授業/Fall 463
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0644】 国際日本学演習Ⅰ ［波戸岡　景太］ 春学期授業/Spring 465
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0645】 国際日本学演習Ⅱ ［波戸岡　景太］ 秋学期授業/Fall 466
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0646】国際日本学演習Ⅰ ［石川　潔］春学期授業/Spring 467
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0647】 国際日本学演習Ⅱ ［石川　潔］ 秋学期授業/Fall 468
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0648】 国際日本学合同演習Ⅰ ［川﨑　貴子］ 春学期授業/Spring 469
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-必修科目【X0649】 国際日本学合同演習Ⅱ ［川﨑　貴子］ 秋学期授業/Fall 470
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0650】 世界の日本論と日本学Ⅰ ［アンドレ・リネペ］ 春学期授業/Spring 471
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0651】 世界の日本論と日本学Ⅱ ［アンドレ・リネペ］ 秋学期授業/Fall 472
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0652】 国際日本学論文作成実習（英語）Ⅰ ［スティーヴン・ネルソン］ 春学期授業/Spring 473
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0653】 国際日本学論文作成実習（英語）Ⅱ ［スティーヴン・ネルソン］ 秋学期授業/Fall 475
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0656】 日本語論文作成実習Ⅰ ［山中　玲子］ 春学期授業/Spring 477
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0657】 日本語論文作成実習Ⅱ ［山中　玲子］ 秋学期授業/Fall 478
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0658】 日本語論文作成基礎ＡⅠ ［幸田　佳子］ 春学期授業/Spring 479
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0659】 日本語論文作成基礎ＡⅡ ［中島　久朱］ 春学期授業/Spring 481
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0660】 日本語論文作成基礎ＡⅢ ［幸田　佳子］ 秋学期授業/Fall 482

国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0661】日本語論文作成基礎AIV［中島　久朱］秋学期授業/Fall 484
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0662】日本語論文作成基礎BⅠ［幸田　佳子］春学期授業/Spring 485
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0663】日本語論文作成基礎BⅡ［中島　久朱］春学期授業/Spring 487
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0664】日本語論文作成基礎BIII［幸田　佳子］秋学期授業/Fall 488
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0665】日本語論文作成基礎BIV［中島　久朱］秋学期授業/Fall 490
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0666】日本語の性格Ⅰ［滝浦　真人］春学期授業/Spring 491
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0667】日本語の性格Ⅱ［滝浦　真人］秋学期授業/Fall 493
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0668】伝統文化と民衆世界Ⅰ［ヤナ・ウルバノヴァー］春学期授業/Spring 495
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0669】伝統文化と民衆世界Ⅱ［ヤナ・ウルバノヴァー］秋学期授業/Fall 497
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0670】日本の思想・西欧の思想Ⅰ［髙田　圭］春学期授業/Spring 499
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0671】日本の思想・西欧の思想Ⅱ［髙田　圭］秋学期授業/Fall 501
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0672】史料から読む琉球とアジアⅠ［得能　壽美］春学期授業/Spring 503
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0673】史料から読む琉球とアジアⅡ［得能　壽美］秋学期授業/Fall 504
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0674】戦後沖縄と対外関係Ⅰ［明田川　融］春学期授業/Spring 505
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0675】戦後沖縄と対外関係Ⅱ［明田川　融］秋学期授業/Fall 506
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0676】仏教思想と仏教美術Ⅰ［高橋　悠介］春学期授業/Spring 507
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0677】仏教思想と仏教美術Ⅱ［高橋　悠介］秋学期授業/Fall 508
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0678】データ分析法Ⅰ［田中　邦佳］春学期授業/Spring 509
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0679】データ分析法Ⅱ［田中　邦佳］秋学期授業/Fall 510
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0680】サブカルチャー論Ⅰ［倉本　さおり］春学期授業/Spring 511
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-基幹科目【X0681】サブカルチャー論Ⅱ［倉本　さおり］秋学期授業/Fall 513
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0682】日本文学・国際日本学基礎演習［本塚　亘］秋学期授業/Fall 515
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0683】日本文学・国際日本学論文作成基礎実習［金子　広幸］秋学期授業/Fall 516
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0684】近代の文芸批評Ⅰ［田中　和生］春学期授業/Spring 518
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0685】近代の文芸批評Ⅱ［田中　和生］秋学期授業/Fall 520
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0686】神話と歌Ⅰ［森　陽香］春学期授業/Spring .. 522
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0687】神話と歌Ⅱ［森　陽香］秋学期授業/Fall 523
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0688】平安時代の物語Ⅰ［加藤　昌嘉］春学期授業/Spring 524
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0689】平安時代の物語Ⅱ［加藤　昌嘉］秋学期授業/Fall 525
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0690】書誌学と文献学Ⅰ［阿部　真弓］春学期授業/Spring 526
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0691】書誌学と文献学Ⅱ［阿部　真弓］秋学期授業/Fall 527
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0692】能と楽劇Ⅰ［佐藤　和道］春学期授業/Spring 528
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0693】能と楽劇Ⅱ［佐藤　和道］秋学期授業/Fall ... 529
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0694】江戸の文芸と文化Ⅰ［小林　ふみ子］春学期授業/Spring 530
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0695】江戸の文芸と文化Ⅱ［小林　ふみ子］秋学期授業/Fall 531
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0696】江戸の思想史Ⅰ［丸井　貴史］春学期授業/Spring 532

国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0697】 江戸の思想史Ⅱ ［丸井　貴史］ 秋学期授業/Fall 533
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0698】 日本語の歴史と現在Ⅰ ［竹林　一志］ 春学期授業/Spring 534
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0699】 日本語の歴史と現在Ⅱ ［竹林　一志］ 秋学期授業/Fall 535
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0700】 現代日本語のしくみⅠ ［古牧　久典　］ 春学期授業/Spring 537
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0701】 現代日本語のしくみⅡ ［古牧　久典　］ 秋学期授業/Fall 538
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0702】 沖縄文芸史Ⅰ ［福　寛美］ 春学期授業/Spring 539
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0703】 沖縄文芸史Ⅱ ［福　寛美］ 秋学期授業/Fall ... 541
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0706】 女性文学Ⅰ ［藤木　直実］ 春学期授業/Spring 543
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0707】 女性文学Ⅱ ［藤木　直実］ 秋学期授業/Fall ... 544
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0708】 文学と映画Ⅰ ［越川　道夫］ 春学期授業/Spring 545
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0709】 文学と映画Ⅱ ［越川　道夫］ 秋学期授業/Fall . 546
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0710】 文学と風土Ⅰ ［多田　蔵人］ 春学期授業/Spring 547
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0711】 文学と風土Ⅱ ［多田　蔵人］ 秋学期授業/Fall . 548
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0712】 表現と社会［平井　彰司］ 秋学期授業/Fall 549
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0713】 編集理論［仲俣　暁生］ 秋学期授業/Fall 550
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0714】 英語発音法Ⅰ ［髙橋　豊美］ 春学期授業/Spring 551
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0715】 英語発音法Ⅱ ［髙橋　豊美］ 秋学期授業/Fall . 553
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0716】 行動科学方法論Ⅰ ［石川　潔］ 春学期授業/Spring 555
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0721】 西欧の思想Ⅰ ［関口 貴太］ 春学期授業/Spring 556
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0722】西欧の思想Ⅱ［澤田　直］秋学期集中/Intensive(Fall) 557
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0723】 東北アジアの文化伝播Ⅰ－1［高橋　健］ 春学期授業/Spring 558
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0724】 東北アジアの文化伝播Ⅰ－2［高橋　健］ 秋学期授業/Fall 559
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0725】 東北アジアの文化伝播Ⅱ－1［小倉　淳一］ 春学期授業/Spring 560
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0726】 東北アジアの文化伝播Ⅱ－2［小倉　淳一］ 秋学期授業/Fall 561
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0727】 東北アジアの文化伝播Ⅲ－1［小倉　淳一］ 春学期授業/Spring 562
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0728】 東北アジアの文化伝播Ⅲ－2［小倉　淳一］ 秋学期授業/Fall 564
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0729】 東アジアの律令文化Ⅰ－1［小口　雅史］ 春学期授業/Spring 566
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0730】 東アジアの律令文化Ⅰ－2［小口　雅史］ 秋学期授業/Fall 567
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0731】 東アジアの律令文化Ⅱ－1［小口　雅史］ 春学期授業/Spring 568
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0732】 東アジアの律令文化Ⅱ－2［小口　雅史］ 秋学期授業/Fall 569
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0733】王権の政治文化Ⅰ［春名　宏昭］春学期授業/Spring 570
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0734】 王権の政治文化Ⅱ［春名　宏昭］ 秋学期授業/Fall 571
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0735】 天皇制と政務・儀礼Ⅰ ［山口　英男］ 春学期授業/Spring 572
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0736】 天皇制と政務・儀礼Ⅱ ［山口　英男］ 秋学期授業/Fall 573
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0737】日本の歴史と宗教［及川　亘］春学期授業/Spring 574
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0738】 古文書から読む江戸社会・入門編Ⅰ ［松本　剣志郎］ 春学期授業/Spring 576
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0739】 古文書から読む江戸社会・入門編Ⅱ ［松本　剣志郎］ 秋学期授業/Fall 577
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0740】江戸の地方文化Ⅰ［西沢　淳男］春学期授業/Spring 578
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0741】 江戸の地方文化Ⅱ ［西沢　淳男］ 秋学期授業/Fall 579

国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0742】日本文化と西洋文化Ⅰ［森田　貴子］春学期授業/Spring 580
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0743】日本文化と西洋文化Ⅱ［森田　貴子］秋学期授業/Fall 581
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0744】日本の近代と国際社会Ⅰ［内藤　一成］春学期授業/Spring 582
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0745】日本の近代と国際社会Ⅱ［内藤　一成］秋学期授業/Fall 583
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0746】沖縄学入門Ⅰ［大里　知子］春学期授業/Spring 584
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0747】沖縄学入門Ⅱ［大里　知子］秋学期授業/Fall . 585
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0748】アーカイブズ学Ⅰ［宮間　純一］春学期授業/Spring 586
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0749】アーカイブズ学Ⅱ［宮間　純一］秋学期授業/Fall 587
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0750】文書館管理研究Ⅰ［鈴木宏宗・大塩勇生］春学期授業/Spring 588
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0751】文書館管理研究Ⅱ［芳澤　直之］秋学期授業/Fall 589
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0752】記録史料学研究Ⅰ［小宮山　敏和］春学期授業/Spring 590
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0753】記録史料学演習Ⅰ［小宮山　敏和］秋学期授業/Fall 591
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0754】記録史料学研究Ⅱ［淺井　良亮］春学期授業/Spring 592
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0755】記録史料学演習Ⅱ［淺井　良亮］秋学期授業/Fall 593
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0756】日本の環境論Ⅰ［甲斐　智大］春学期授業/Spring 594
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0757】日本の環境論Ⅱ［甲斐　智大］秋学期授業/Fall 595
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0758】日本の都市と産業Ⅰ［伊藤　達也］春学期授業/Spring 596
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0759】日本の都市と産業Ⅱ［伊藤　達也］秋学期授業/Fall 597
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0760】日本の農業と農村Ⅰ［佐々木　達］春学期授業/Spring 598
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0761】日本の農業と農村Ⅱ［佐々木　達］秋学期授業/Fall 599
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0762】地図の文化誌Ⅰ［米家　志乃布］春学期授業/Spring 600
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0763】地図の文化誌Ⅱ［米家　志乃布］秋学期授業/Fall 601
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0764】感情と健康の空間論Ⅰ［村田　陽平］春学期授業/Spring 602
国際日本学インスティテュート_（修士課程）-関連科目【X0765】感情と健康の空間論Ⅱ［村田　陽平］秋学期授業/Fall 603
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2025年度以前入学者）【X0900】心理学研究法演習Ⅰ［島宗　理］春学期授業/Spring 604
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2025年度以前入学者）【X0901】心理学研究法演習Ⅱ［島宗　理］秋学期授業/Fall 606
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2025年度以前入学者）【X0902】心理学研究法演習Ⅰ［荒井　弘和］春学期授業/Spring 608
心理学専攻_（修士課程）-必修科目（2025年度以前入学者）【X0903】心理学研究法演習Ⅱ［荒井　弘和］秋学期授業/Fall 610
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2025年度以前入学者）【X0904】学習心理特論［藤田　哲也］春学期授業/Spring 612
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2025年度以前入学者）【X0905】社会心理特論［越智　啓太］春学期授業/Spring 614
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0906】読書心理特論［平山　祐一郎］秋学期授業/Fall 616
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0907】教育心理特論［平山　祐一郎］秋学期授業/Fall 617
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0908】犯罪心理特論［越智　啓太］秋学期授業/Fall 618
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0909】知覚研究論演習［竹島　康博］秋学期授業/Fall 619
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0910】精神生理特論［木村　健太］秋学期授業/Fall 621
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0911】認知学習過程演習［藤田　哲也］春学期授業/Spring 622
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0912】臨床心理特論［中村　玲子］春学期授業/Spring 624
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2025年度以前入学者）【X0913】発達心理特論［渡辺　弥生］春学期授業/Spring 625

心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0914】 障害児心理特論［奥田　健次］ 秋学期集中/Intensive(Fall) 627
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0915】人格心理特論［大森　美香］春学期授業/Spring 629
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2025年度以前入学者）【X0916】言語心理特論［福田　由紀］春学期授業/Spring 631
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0917】 学校カウンセリング演習［渡辺　弥生　］ 秋学期授業/Fall 633
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2025年度以前入学者）【X0918】 発達行動特論［島宗　理］ 春学期授業/Spring 635
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0919】言語心理演習［福田　由紀］春学期授業/Spring 637
心理学専攻_（修士課程）-展開科目（2025年度以前入学者）【X0920】 学校コンサルテーション特論［島宗　理］ 秋学期授業/Fall 638
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2025年度以前入学者）【X0923】 健康心理特論［林　容市］ 春学期授業/Spring 640
心理学専攻_（修士課程）-基礎科目（2025年度以前入学者）【X0924】 心理研究法特論［竹島　康博］ 春学期授業/Spring 641
哲学専攻_（博士後期課程）【X1002】 哲学特殊研究１［中釜　浩一］ 春学期授業/Spring 642
哲学専攻_（博士後期課程）【X1003】 哲学特殊研究２［中釜　浩一］ 秋学期授業/Fall 643
哲学専攻_（博士後期課程）【X1006】 言語分析哲学特殊講義１［中釜　浩一］ 春学期授業/Spring 644
哲学専攻_（博士後期課程）【X1007】 言語分析哲学特殊講義２［中釜　浩一］ 秋学期授業/Fall 645
哲学専攻_（博士後期課程）【X1008】 古代哲学史特殊講義１［文 景楠］ 春学期授業/Spring 646
哲学専攻_（博士後期課程）【X1009】 古代哲学史特殊講義２［文 景楠］ 秋学期授業/Fall 647
哲学専攻_（博士後期課程）【X1010】 論理学特殊講義１［安東　祐希］ 春学期授業/Spring 648
哲学専攻_（博士後期課程）【X1011】 論理学特殊講義２［安東　祐希］ 秋学期授業/Fall 649
哲学専攻_（博士後期課程）【X1012】 近代倫理学史特殊講義１［菅沢　龍文］ 春学期授業/Spring 650
哲学専攻_（博士後期課程）【X1013】 近代倫理学史特殊講義２［菅沢　龍文］ 秋学期授業/Fall 652
哲学専攻_（博士後期課程）【X1014】 中世哲学特殊講義１［内山　真莉子］ 春学期授業/Spring 654
哲学専攻_（博士後期課程）【X1015】 中世哲学特殊講義２［内山　真莉子］ 秋学期授業/Fall 655
哲学専攻_（博士後期課程）【X1016】 近代ドイツ哲学史特殊講義１［吉田　敬介］ 春学期授業/Spring 656
哲学専攻_（博士後期課程）【X1017】 近代ドイツ哲学史特殊講義２［吉田　敬介］ 秋学期授業/Fall 658
哲学専攻_（博士後期課程）【X1018】 近世西洋哲学特殊講義１［佐藤　真人］ 春学期授業/Spring 660
哲学専攻_（博士後期課程）【X1019】 近世西洋哲学特殊講義２［佐藤　真人］ 秋学期授業/Fall 662
哲学専攻_（博士後期課程）【X1022】 近代フランス哲学史特殊講義１［大池　惣太郎］ 春学期授業/Spring 664
哲学専攻_（博士後期課程）【X1023】 近代フランス哲学史特殊講義２［大池　惣太郎］ 秋学期授業/Fall 665
哲学専攻_（博士後期課程）【X1026】 法哲学特殊講義１［内藤　淳］ 春学期授業/Spring 666
哲学専攻_（博士後期課程）【X1027】 法哲学特殊講義２［内藤　淳］ 秋学期授業/Fall 668
哲学専攻_（博士後期課程）【X1028】 現象学特殊講義１［君嶋　泰明］ 春学期授業/Spring 670
哲学専攻_（博士後期課程）【X1029】 現象学特殊講義２［君嶋　泰明］ 秋学期授業/Fall 671
哲学専攻_（博士後期課程）【X1030】 日本思想史特殊講義１［頼住　光子］ 春学期授業/Spring 672
哲学専攻_（博士後期課程）【X1031】 日本思想史特殊講義2 ［頼住　光子］ 秋学期授業/Fall 673
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1100】 日本文学特殊演習Ａ［加藤　昌嘉］ 春学期授業/Spring 674
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1101】 日本文学特殊演習Ｂ［加藤　昌嘉］ 秋学期授業/Fall 675
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1102】 日本文学特殊演習Ａ［遠藤　星希］ 春学期授業/Spring 676
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1103】 日本文学特殊演習Ｂ［遠藤　星希］ 秋学期授業/Fall 677
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1110】 日本文学特殊演習Ａ［藤村　耕治］ 春学期授業/Spring 678
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1111】 日本文学特殊演習Ｂ［藤村　耕治］ 秋学期授業/Fall 679
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1112】 日本文学特殊演習Ａ［田中　和生］ 春学期授業/Spring 680
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1113】 日本文学特殊演習Ｂ［田中　和生］ 秋学期授業/Fall 681
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1114】 日本文学特殊演習Ａ［尾谷　昌則］ 春学期授業/Spring 682
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1115】 日本文学特殊演習Ｂ［尾谷　昌則］ 秋学期授業/Fall 683
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1118】 日本文学特殊演習Ａ［宮本　圭造］ 春学期授業/Spring 684
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1119】 日本文学特殊演習Ｂ［宮本　圭造］ 秋学期授業/Fall 685
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1122】 日本文芸学特殊研究Ａ［庄司　達也］ 春学期授業/Spring 686
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1123】 日本文芸学特殊研究Ｂ［庄司　達也］ 秋学期授業/Fall 687
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1124】 日本文芸批評史特殊研究Ａ［田中　和生］ 春学期授業/Spring 688
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1125】 日本文芸批評史特殊研究Ｂ［田中　和生］ 秋学期授業/Fall 690
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1126】 日本古代文芸特殊研究Ａ［森　陽香］ 春学期授業/Spring 692
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1127】 日本古代文芸特殊研究Ｂ［森　陽香］ 秋学期授業/Fall 693
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1128】 日本中世文芸特殊研究Ａ［阿部　真弓］ 春学期授業/Spring 694
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1129】 日本中世文芸特殊研究Ｂ［阿部　真弓］ 秋学期授業/Fall 695

日本文学専攻_（博士後期課程）【X1130】 日本近世文芸特殊研究Ａ［小林　ふみ子］ 春学期授業/Spring 696
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1131】 日本近世文芸特殊研究Ｂ［小林　ふみ子］ 秋学期授業/Fall 697
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1134】 日本言語学特殊研究Ａ［間宮　厚司］ 春学期授業/Spring 698
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1135】 日本言語学特殊研究Ｂ［間宮　厚司］ 秋学期授業/Fall 699
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1136】 能楽作品特殊研究Ａ［佐藤　和道］ 春学期授業/Spring 700
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1137】 能楽作品特殊研究Ｂ［佐藤　和道］ 秋学期授業/Fall 701
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1138】 能楽資料特殊研究Ａ［宮本　圭造］ 春学期授業/Spring 702
日本文学専攻_（博士後期課程）【X1139】 能楽資料特殊研究Ｂ［宮本　圭造］ 秋学期授業/Fall 703
英文学専攻_（博士後期課程）【X1201】 英米文学特殊演習Ｉ Ｂ［小澤　央］ 秋学期授業/Fall 704
英文学専攻_（博士後期課程）【X1202】 言語学特殊演習 Ｉ Ａ［ブライアン ウィスナー］ 春学期授業/Spring 705
英文学専攻_（博士後期課程）【X1203】 言語学特殊演習 Ｉ Ｂ［ブライアン ウィスナー］ 秋学期授業/Fall 706
英文学専攻_（博士後期課程）【X1204】 文学方法論特講 Ａ［宮川　雅］ 春学期授業/Spring 707
英文学専攻_（博士後期課程）【X1205】 文学方法論特講 Ｂ［宮川　雅］ 秋学期授業/Fall 708
英文学専攻_（博士後期課程）【X1206】 言語科学方法論特講 Ａ［石川　潔］ 春学期授業/Spring 709
英文学専攻_（博士後期課程）【X1207】 言語科学方法論特講 Ｂ［ブライアン ウィスナー］ 秋学期授業/Fall 710
英文学専攻_（博士後期課程）【X1211】 英米文学特講Ⅱ Ｂ［小澤　央］ 秋学期授業/Fall 711
英文学専攻_（博士後期課程）【X1214】 英米文学特講Ⅳ Ａ［波戸岡　景太］ 春学期授業/Spring 712
英文学専攻_（博士後期課程）【X1215】 英米文学特講Ⅳ Ｂ［波戸岡　景太］ 秋学期授業/Fall 713
英文学専攻_（博士後期課程）【X1226】 言語科学特講Ⅱ Ａ［福元　広二］ 春学期授業/Spring 714
英文学専攻_（博士後期課程）【X1227】 言語科学特講Ⅱ Ｂ［片見　彰夫］ 秋学期授業/Fall 715
英文学専攻_（博士後期課程）【X1228】 言語科学特講Ⅲ Ａ［石川　潔］ 春学期授業/Spring 716
英文学専攻_（博士後期課程）【X1229】 言語科学特講Ⅲ Ｂ［石川　潔］ 秋学期授業/Fall 717
英文学専攻_（博士後期課程）【X1230】 言語科学特講Ⅳ Ａ［川﨑　貴子］ 春学期授業/Spring 718
英文学専攻_（博士後期課程）【X1231】 言語科学特講Ⅳ Ｂ［川﨑　貴子］ 秋学期授業/Fall 719
英文学専攻_（博士後期課程）【X1232】 言語科学特講Ⅴ Ａ［常本　亜希］ 春学期授業/Spring 720
英文学専攻_（博士後期課程）【X1233】 言語科学特講Ⅴ Ｂ［常本　亜希］ 秋学期授業/Fall 722
史学専攻_（博士後期課程）【X1300】 史学特殊演習ＡⅠ［小口　雅史］ 春学期授業/Spring 724
史学専攻_（博士後期課程）【X1301】 史学特殊演習ＡⅡ［小口　雅史］ 秋学期授業/Fall 725
史学専攻_（博士後期課程）【X1302】 史学特殊演習ＡⅠ［大塚　紀弘］ 春学期授業/Spring 726
史学専攻_（博士後期課程）【X1303】 史学特殊演習ＡⅡ［大塚　紀弘］ 秋学期授業/Fall 727
史学専攻_（博士後期課程）【X1304】 史学特殊演習ＡⅠ［松本　剣志郎］ 春学期授業/Spring 728
史学専攻_（博士後期課程）【X1305】 史学特殊演習ＡⅡ［松本　剣志郎］ 秋学期授業/Fall 729
史学専攻_（博士後期課程）【X1306】 史学特殊演習ＡⅠ［内藤　一成］ 春学期授業/Spring 730
史学専攻_（博士後期課程）【X1307】 史学特殊演習ＡⅡ［内藤　一成］ 秋学期授業/Fall 731
史学専攻_（博士後期課程）【X1308】 史学特殊演習ＡⅠ［内田　康太］ 春学期授業/Spring 732
史学専攻_（博士後期課程）【X1309】 史学特殊演習ＡⅡ［内田　康太］ 秋学期授業/Fall 733
史学専攻_（博士後期課程）【X1310】 史学特殊演習ＡⅠ［齋藤　勝］ 春学期授業/Spring 734
史学専攻_（博士後期課程）【X1311】 史学特殊演習ＡⅡ［齋藤　勝］ 秋学期授業/Fall 735
史学専攻_（博士後期課程）【X1312】 史学特殊演習ＡⅠ［小倉　淳一］ 春学期授業/Spring 736
史学専攻_（博士後期課程）【X1313】 史学特殊演習ＡⅡ［小倉　淳一］ 秋学期授業/Fall 737
史学専攻_（博士後期課程）【X1314】 史学特殊演習ＡⅠ［塩沢　裕仁］ 春学期授業/Spring 738
史学専攻_（博士後期課程）【X1315】 史学特殊演習ＡⅡ［塩沢　裕仁］ 秋学期授業/Fall 739
史学専攻_（博士後期課程）【X1316】 日本史学特殊講義ＡⅠ［高橋　健］ 春学期授業/Spring 740
史学専攻_（博士後期課程）【X1317】 日本史学特殊講義ＡⅡ［高橋　健］ 秋学期授業/Fall 741
史学専攻_（博士後期課程）【X1318】 日本史学特殊講義ＢⅠ［山口　英男］ 春学期授業/Spring 742
史学専攻_（博士後期課程）【X1319】 日本史学特殊講義ＢⅡ［山口　英男］ 秋学期授業/Fall 743
史学専攻_（博士後期課程）【X1320】 日本史学特殊講義ＣⅠ［末柄　豊］ 春学期授業/Spring 744
史学専攻_（博士後期課程）【X1321】 日本史学特殊講義ＣⅡ［末柄　豊］ 秋学期授業/Fall 745
史学専攻_（博士後期課程）【X1322】 日本史学特殊講義ＤⅠ［山崎　圭］ 春学期授業/Spring 746
史学専攻_（博士後期課程）【X1323】 日本史学特殊講義ＤⅡ［山崎　圭］ 秋学期授業/Fall 747
史学専攻_（博士後期課程）【X1324】 日本史学特殊講義ＥⅠ［森田　貴子］ 春学期授業/Spring 748
史学専攻_（博士後期課程）【X1325】 日本史学特殊講義ＥⅡ［森田　貴子］ 秋学期授業/Fall 749
史学専攻_（博士後期課程）【X1326】 東洋史学特殊講義ＡⅠ［大島　誠二］ 春学期授業/Spring 750
史学専攻_（博士後期課程）【X1327】 東洋史学特殊講義ＡⅡ［大島　誠二］ 秋学期授業/Fall 751
史学専攻_（博士後期課程）【X1328】 東洋史学特殊講義ＢⅠ［徳留　大輔］ 春学期授業/Spring 752
史学専攻_（博士後期課程）【X1329】 東洋史学特殊講義ＢⅡ［徳留　大輔］ 秋学期授業/Fall 754
史学専攻_（博士後期課程）【X1330】 西洋史学特殊講義ＡⅠ［内川　勇太］ 春学期授業/Spring 756

史学専攻_（博士後期課程）【X1331】 西洋史学特殊講義ＡⅡ ［内川　勇太］ 秋学期授業/Fall 757
史学専攻_（博士後期課程）【X1332】 西洋史学特殊講義ＢⅠ ［篠原　琢］ 春学期授業/Spring 758
史学専攻_（博士後期課程）【X1333】 西洋史学特殊講義ＢⅡ ［篠原　琢］ 秋学期授業/Fall 760
史学専攻_（博士後期課程）【X1334】 西洋史学特殊講義ＣⅠ ［中込　さやか］ 春学期授業/Spring 762
史学専攻_（博士後期課程）【X1335】 西洋史学特殊講義ＣⅡ ［中込　さやか］ 秋学期授業/Fall 764
史学専攻_（博士後期課程）【X1336】 史学特殊演習ＢⅠ ［小口　雅史］ 春学期授業/Spring 766
史学専攻_（博士後期課程）【X1337】 史学特殊演習ＢⅡ ［小口　雅史］ 秋学期授業/Fall 767
史学専攻_（博士後期課程）【X1338】 史学特殊演習ＢⅠ ［大塚　紀弘］ 春学期授業/Spring 768
史学専攻_（博士後期課程）【X1339】 史学特殊演習ＢⅡ ［大塚　紀弘］ 秋学期授業/Fall 769
史学専攻_（博士後期課程）【X1340】 史学特殊演習ＢⅠ ［松本　剣志郎］ 春学期授業/Spring 770
史学専攻_（博士後期課程）【X1341】 史学特殊演習ＢⅡ ［松本　剣志郎］ 秋学期授業/Fall 771
史学専攻_（博士後期課程）【X1342】 史学特殊演習ＢⅠ ［内藤　一成］ 春学期授業/Spring 772
史学専攻_（博士後期課程）【X1343】 史学特殊演習ＢⅡ ［内藤　一成］ 秋学期授業/Fall 773
史学専攻_（博士後期課程）【X1344】 史学特殊演習ＢⅠ ［内田　康太］ 春学期授業/Spring 774
史学専攻_（博士後期課程）【X1345】 史学特殊演習ＢⅡ ［内田　康太］ 秋学期授業/Fall 775
史学専攻_（博士後期課程）【X1346】 史学特殊演習ＢⅠ ［齋藤　勝］ 春学期授業/Spring 776
史学専攻_（博士後期課程）【X1347】 史学特殊演習ＢⅡ ［齋藤　勝］ 秋学期授業/Fall 777
史学専攻_（博士後期課程）【X1348】 史学特殊演習ＢⅠ ［小倉　淳一］ 春学期授業/Spring 778
史学専攻_（博士後期課程）【X1349】 史学特殊演習ＢⅡ ［小倉　淳一］ 秋学期授業/Fall 779
史学専攻_（博士後期課程）【X1350】 史学特殊演習ＢⅠ ［塩沢　裕仁］ 春学期授業/Spring 780
史学専攻_（博士後期課程）【X1351】 史学特殊演習ＢⅡ ［塩沢　裕仁］ 秋学期授業/Fall 781
心理学専攻_（博士後期課程）【X1500】 心理学特殊研究Ⅰ ［福田　由紀］ 春学期授業/Spring 782
心理学専攻_（博士後期課程）【X1501】 心理学特殊研究Ⅱ ［福田　由紀］ 秋学期授業/Fall 784
心理学専攻_（博士後期課程）【X1502】 心理学特殊研究Ⅰ ［島宗　理］ 春学期授業/Spring 786
心理学専攻_（博士後期課程）【X1503】 心理学特殊研究Ⅱ ［島宗　理］ 秋学期授業/Fall 788
心理学専攻_（博士後期課程）【X1504】 心理学特殊研究Ⅰ ［藤田　哲也］ 春学期授業/Spring 790
心理学専攻_（博士後期課程）【X1505】 心理学特殊研究Ⅱ ［藤田　哲也］ 秋学期授業/Fall 792
心理学専攻_（博士後期課程）【X1506】 心理学特殊研究Ⅰ ［木村　健太］ 春学期授業/Spring 794
心理学専攻_（博士後期課程）【X1507】 心理学特殊研究Ⅱ ［木村　健太］ 秋学期授業/Fall 795
心理学専攻_（博士後期課程）【X1508】 心理学特殊研究Ⅰ ［越智　啓太］ 春学期授業/Spring 796
心理学専攻_（博士後期課程）【X1509】 心理学特殊研究Ⅱ ［越智　啓太］ 秋学期授業/Fall 797
心理学専攻_（博士後期課程）【X1510】 心理学特殊研究Ⅰ ［田嶋　圭一］ 春学期授業/Spring 798
心理学専攻_（博士後期課程）【X1511】 心理学特殊研究Ⅱ ［田嶋　圭一］ 秋学期授業/Fall 799
心理学専攻_（博士後期課程）【X1512】 心理学特殊研究Ⅰ ［竹島　康博］ 春学期授業/Spring 800
心理学専攻_（博士後期課程）【X1513】 心理学特殊研究Ⅱ ［竹島　康博］ 秋学期授業/Fall 801
心理学専攻_（博士後期課程）【X1514】 心理学特殊研究Ⅰ ［荒井　弘和］ 春学期授業/Spring 802
心理学専攻_（博士後期課程）【X1515】 心理学特殊研究Ⅱ ［荒井　弘和］ 秋学期授業/Fall 804
心理学専攻_（博士後期課程）【X1516】 心理学特殊研究Ⅰ ［渡辺　弥生］ 春学期授業/Spring 806
心理学専攻_（博士後期課程）【X1517】 心理学特殊研究Ⅱ ［渡辺　弥生］ 秋学期授業/Fall 808
心理学専攻_（博士後期課程）【X1520】 大学教員心理学基礎講座［藤田　哲也］ 秋学期授業/Fall 810
心理学専攻_（博士後期課程）【X1521】 心理学英語論文作成指導［田嶋　圭一］ 秋学期集中/Intensive(Fall) 812
心理学専攻_（博士後期課程）【X1522】 知覚認知心理学特殊講義［竹島　康博］ 秋学期授業/Fall 813
心理学専攻_（博士後期課程）【X1523】 生理心理学特殊講義［木村　健太］ 秋学期授業/Fall 815
心理学専攻_（博士後期課程）【X1524】 発達心理学特殊講義［渡辺　弥生］ 春学期授業/Spring 816
心理学専攻_（博士後期課程）【X1525】 言語心理学特殊講義［福田　由紀］ 春学期授業/Spring 817
心理学専攻_（博士後期課程）【X1526】 行動分析学特殊講義［島宗　理］ 春学期授業/Spring 819
心理学専攻_（博士後期課程）【X1527】 司法犯罪心理学特殊講義［越智　啓太］ 秋学期授業/Fall 821
心理学専攻_（博士後期課程）【X1528】 学習心理学特殊講義［藤田　哲也］ 春学期授業/Spring 822
心理学専攻_（博士後期課程）【X1529】 音声言語科学特殊講義［田嶋　圭一］ 春学期授業/Spring 824
心理学専攻_（博士後期課程）【X1531】 健康心理学特殊講義［林　容市］ 春学期授業/Spring 825
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1600】 国際日本学研究Ⅰ ［君嶋　泰明］ 春学期授業/Spring 826
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1601】 国際日本学研究Ⅱ ［君嶋　泰明］ 秋学期授業/Fall ... 827
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1608】 国際日本学研究Ⅰ ［川﨑　貴子］ 春学期授業/Spring 828
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1609】 国際日本学研究Ⅱ ［川﨑　貴子］ 秋学期授業/Fall ... 829
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1618】 国際日本学研究Ⅰ ［尾谷　昌則］ 春学期授業/Spring 830
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1619】 国際日本学研究Ⅱ ［尾谷　昌則］ 秋学期授業/Fall ... 831
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1620】 国際日本学研究Ⅰ ［伊海　孝充］ 春学期授業/Spring 832

国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1621】 国際日本学研究Ⅱ ［伊海　孝充］ 秋学期授業/Fall … 833
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1622】 国際日本学研究Ⅰ ［髙田　圭］ 春学期授業/Spring .. 834
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1623】 国際日本学研究Ⅱ ［髙田　圭］ 秋学期授業/Fall ….. 836
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1624】 国際日本学研究Ⅰ ［福元　広二］ 春学期授業/Spring 838
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1625】 国際日本学研究Ⅱ ［福元　広二］ 秋学期授業/Fall … 839
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1627】 国際日本学特殊講義ＢⅠ ［滝浦　真人］ 春学期授業/Spring …… 840
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1628】 国際日本学特殊講義ＢⅡ ［滝浦　真人］ 秋学期授業/Fall 842
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1629】 国際日本学特殊講義ＣⅠ ［ヤナ・ウルバノヴァー］ 春学期授業/Spring …… 844
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1630】 国際日本学特殊講義ＣⅡ ［ヤナ・ウルバノヴァー］ 秋学期授業/Fall …… 846
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1631】 国際日本学特殊講義ＤⅠ ［髙田　圭］ 春学期授業/Spring 848
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1632】 国際日本学特殊講義ＤⅡ ［髙田　圭］ 秋学期授業/Fall 850
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1633】 国際日本学特殊講義ＥⅠ ［得能　壽美］ 春学期授業/Spring …… 852
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1634】 国際日本学特殊講義ＥⅡ ［得能　壽美］ 秋学期授業/Fall 853
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1635】 国際日本学特殊講義ＦⅠ ［明田川　融］ 春学期授業/Spring …… 854
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1636】 国際日本学特殊講義ＦⅡ ［明田川　融］ 秋学期授業/Fall 855
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1637】 国際日本学特殊講義ＧⅠ ［高橋　悠介］ 春学期授業/Spring …… 856
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1638】 国際日本学特殊講義ＧⅡ ［高橋　悠介］ 秋学期授業/Fall 857
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1641】 国際日本学特殊講義ＪⅠ ［田中　邦佳］ 春学期授業/Spring …… 858
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1642】 国際日本学特殊講義ＫⅠ ［田中　邦佳］ 秋学期授業/Fall 859
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1643】 国際日本学特殊講義ＬⅠ ［倉本　さおり］ 春学期授業/Spring …… 860
国際日本学インスティテュート_（博士後期課程）【X1644】 国際日本学特殊講義ＬⅡ ［倉本　さおり］ 秋学期授業/Fall …… 862

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

言語分析哲学研究Ⅰ－１

中釜　浩一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
プラグマティズムという哲学的立場は、現代の言語哲学・認識論・倫理学等々に深い影響を与えている。この授業では、Brandomの著作Perspectives on Pragmatismを精読することで、プラグマティズムとその帰結を検討する。

【到達目標】
現代プラグマティズムの特徴とそのインパクトをを正しく理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
R. Brandom　'Perspectives on Pragmatism'関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。解釈上の問題点・注意点等については、教員が適宜フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	教員による一般的解説
第2回	Introduction secs.1-3	pp.1-13
第3回	Introduction sec.4	pp.13-21
第4回	Introduction sec.5	pp.21-26
第5回	Introduction secs.6-7	pp.26-34
第6回	Chap.1 Classical American Pragmatism secs.1-3	pp.35-42
第7回	IChap.1 Classical American Pragmatism secs.4-5	pp.43-48
第8回	Chap.1 Classical American Pragmatism secs. 6-7	pp.48-55
第9回	Chap.2 Analyzing Pragmatism secs.1-4	pp.56-63
第10回	Chap.2 Analyzing Pragmatism secs.5-7	pp.63-70
第11回	Chap.2 Analyzing Pragmatism secs.8-9	pp.70-77
第12回	Chap.2 Analyzing Pragmatism secs.10-11	pp.77-82
第13回	Chap.3 A Kantian Rationalist Pragmatism sects. 1-2	pp.83-89
第14回	Chap.2 Analyzing Pragmatism secs.3	pp.89-94

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】
Robert B. Brandom, Perspectives on Pragmatism, Harverd University Press, 2011

【参考書】
Peice, James, Rorty,Putnamらの諸著作。

【成績評価の方法と基準】
Pragumatismの理解度に関して、レジュメの作成　６０％
ディスカッションでの貢献　４０％で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
＜研究テーマ＞
パースペクティヴィズムと現代形而上学
＜主要研究業績＞
著訳書　「できごとと対象―ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、II」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージェスク・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】
Course outline: This course deals with Pragmatism and its impacts on philosophies of language, epistemology, and ethics.
Learning Objectives: To acquire a deeper understanding of today's pragmatism by carefully reading R. Brandom's 'Perspectives on Pragmatism'.
Learning activities outside of classroom: After each class meeting,
students are expected to spend four hours to understand the content of the day's discussion and to prepare for the next class meeting.
Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

言語分析哲学研究Ⅰ－２

中釜　浩一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
1-1に続いて、Brandomの著作Perspectives on Pragmatismを精読することで、プラグマティズムとその帰結を検討する。

【到達目標】
現代プラグマティズムの特徴とそのインパクトを正しく理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
R. Brandom　'Perspectives on Pragmatism'関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。解釈上の問題点・注意点等については、教員が適宜フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Chap.3 Kantian Rationalist Pragmatism sec.4	pp.94-102
第2回	Chap.3 Kantian Rationalist Pragmatism secs.5-6	pp.102-106
第3回	Chap.4 Linguistic Pragmatism and Pragmatism about Norms Secs.1-3	pp.107-112
第4回	Chap.4 Linguistic Pragmatism and Pragmatism about Norms Secs. 4-5	pp. 112-115
第5回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Secs. 1-3	pp.116-122
第6回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Secs. 4-5	pp.122-126
第7回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Secs. 6-6	pp.126-133
第8回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Secs. 8-9	pp.133-141
第9回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Sec. 10	pp.141-146
第10回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Sec. 11	pp.146-153
第11回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Sec. 12	pp.153-157
第12回	Chap. 6, Toward an analytical Pragmatism Sec1-2	pp.158-164
第13回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Secs. 3-4	pp.164-176
第14回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Sec.5	pp. 176-189

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】
Robert B. Brandom, Perspectives on Pragmatism, Harverd University Press, 2011

【参考書】
Peice, James, Rorty,Putnamらの諸著作。

【成績評価の方法と基準】
Pragmatismの理解度に関して、レジュメの作成　６０％
ディスカッションでの貢献　４０％で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
＜研究テーマ＞
パースペクティヴィズムと現代形而上学
＜主要研究業績＞
著訳書　「できごとと対象―ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、II」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージェスク・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】
Course outline: This course deals with Pragmatism and its impacts on philosophies of language, epistemology, and ethics.
Learning Objectives: To acquire a deeper understanding of today's pragmatism by carefully reading R. Brandom's 'Perspectives on Pragmatism'.
Learning activities outside of classroom: After each class meeting,
students are expected to spend four hours to understand the content of the day's discussion and to prepare for the next class meeting.
Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

言語分析哲学研究 II － 1

中釜　浩一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
イギリス古典経験論最大の哲学者David Humeの代表作A Treatise of Human Natureを精読し、現代哲学に大きなインパクトをもたらしたその因果や自己に関する議論を検討する。

【到達目標】
Humeのテキストの正確な読解を通して、ヒュームの懐疑論への理解を深める

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
担当者がテキストに関するレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。解釈上の問題点・注意点等については、教員が適宜フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	Hume理論哲学の一般的説明
第2回	Treatise Book1 Part4 section 5(1)	Of the immateriality of the soul par.1-6
第3回	Treatise Book1 Part4 section 5(2)	Of the immateriality of the soul par. 7-11
第4回	Treatise Book1 Part4 section 5(2)	Of the immateriality of the soul par.12-14
第5回	Treatise Book1 Part4 section 5(3)	Of the immateriality of the soul par.15-20
第6回	Treatise Book1 Part4 section 5(4)	Of the immateriality of the soul par.21-24
第7回	Treatise Book 1 Part4 section 5(5)	Of the immateriality of the soul par. 25-29
第8回	Treatise Book 1 Part4 section 5 (6)	Of the immateriality of the soul par. 30-31
第9回	Treatise Book 1 Part4 section 5 (7)	Of the immateriality of the soul par. 32-35
第10回	Treatise Book 1 Part4 section 6(1)	Of personal identity par. 1-5
第11回	Treatise Book 1 Part4 section 6 (2)	Of personal identity par. 6-7
第12回	Treatise Book 1 Part4 section 6(3)	Of personal identity par. 8-12
第13回	Treatise Book 1 Part4 section 6 (4)	Of personal identity par. 13-16
第14回	Treatise Book 1 Part4 section6(5)	Of personal identity par.17-23

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。他の者はテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】
David Hume, A Treatise of Human Nature（Selby Bigge版あるいはDavid Norton版 ）
木曾好能訳　人間本性論　第1巻 (法政大学出版局)

【参考書】
Locke, Berkeley,Humeの諸著作。

【成績評価の方法と基準】
Hume哲学の理解度を、レジュメの作成　６０％　ディスカッションでの貢献　４０％　で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
＜研究テーマ＞
パースペクティヴィズムと現代形而上学
＜主要研究業績＞
著訳書　「できごとと対象―ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、II」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージェスク・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】
Course outline:　This course deals with David Hume's 'A Treatise of Human Nature'
Learning Objectives:　To acquire a deeper understanding of Hume's arguments and their impacts on modern philosophy.
Learning activities outside of classroom:　After each class meeting,
students are expected to spend four hours to understand the content of the day and to prepare for the next class meeting.
Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

言語分析哲学研究 II － 2

中釜　浩一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
イギリス古典経験論最大の哲学者David Humeの代表作A Treatise of Human Natureを精読し、現代哲学に大きなインパクトをもたらしたその因果や自己に関する議論を検討する。

【到達目標】
Humeのテキストの正確な読解を通して、因果論や自己の問題への理解を深める

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
担当者がテキストに関するレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。解釈上の問題点・注意点等については、教員が適宜フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	Sec5と６のまとめ
第2回	Treatise Book1 Part4 section 7 (1)	Conclusion of this book par. 1-3
第3回	Treatise Book1 Part4 section 7 (2)	Conclusion of this book par.4-6
第4回	Treatise Book1 Part4 section 7 (3)	Conclusion of this book par. 7-9
第5回	Treatise Book1 Part4 senction 7 (4)	Conclusion of this book par. 10-13
第6回	Treatise Book1 Part4 section 7(5)	Conclusion of this book par. 14-15
第7回	Treatise Book1 Appendix(1)	par. 1-3
第8回	Treatise Book1 Part4 Appendix(2)	par4-5
第9回	Treatise Book1 Part34 Appendix(3)	par. 6-9
第10回	Treatise Book1 Part4 Appendix(4)	par. 10-15
第11回	Treatise Book1 Part4 Appendix(5)	par. 16-19
第12回	Treatise Book1 Part4 Appendix(6)	par. 20-21
第13回	Treatise Book1 Part4 Appendix(7)	par.22
第14回	全体のまとめ	Hume哲学に関するdiscussion

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。他の者はテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】
David Hume, A Treatise of Human Nature（Selby Bigge版あるいはDavid Norton版 ）
木曾好能訳　人間本性論　第１巻　（法政大学出版局）

【参考書】
Locke, Berkeley, Humeの諸著作。

【成績評価の方法と基準】
Hume哲学の理解度を、レジュメの作成　６０％　ディスカッションでの貢献　４０％で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
＜研究テーマ＞
パースペクティヴィズムと現代形而上学
＜主要研究業績＞
著訳書　「できごとと対象―ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、II」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージェスク・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】
Course outline:　This course deals with David Hume's 'A Treatise of Human Nature'
Learning Objectives:　To acquire a deeper understanding of Hume's arguments and their impact on modern philosophy.
Learning activities outside of classroom:　After each class meeting,
students are expected to spend four hours to understand the content of the day and to prepare for the next class meeting.
Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

形而上学研究Ⅰ－１

齋藤　元紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、マルティン・ハイデガー著『存在と時間』(M. Heidegger, *Sein und Zeit*）の読解をとおして、学生が批判的な哲学的思考力を獲得することを目指す。

【到達目標】
この授業では、ハイデガーの主著『存在と時間』の精密な読解と討論をとおして、学生が（１）哲学的文章を原文で読み解き、（２）彼の存在論についての理解を深め、さらに（３）自ら批判的な哲学的考察ができるようになることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
ハイデガーの主著『存在と時間』は、従来のさまざまな哲学思想を引き受けながら、西洋哲学に対する抜本的批判を企てた書物である。そこには、古代ギリシア哲学にはじまり、中世神学、近世・近代哲学、そして現象学や解釈学をはじめとする当時の同時代の哲学思想との対決が織り込まれている。またその対決をとおして展開された彼の思想は、哲学のみならず、現代の諸学問に今なお甚大な影響を与えている。この授業では、ドイツ語原文の精確な読解をとおして、上述のような多様な位相にわたるハイデガーの存在論的思考の本質を見極めてゆくことに努める。読解にあたっては、のちのハイデガー自身の『存在と時間』に対する自己批判の言及もあわせて検討し、中後期思想への展開の意図についても考察を行う。理解を深めるため、ディスカッション、関連文献の読解、研究報告等も適宜織り交ぜる。ドイツ語以外の言語（日・英・仏）による参加にも配慮する。春学期は、『存在と時間』第一部第二編第70節から読み始める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション①	授業の進め方の説明・ハイデガー哲学の全体像
第2回	イントロダクション②	『存在と時間』の全体像
第3回	イントロダクション③	『存在と時間』の基本思想
第4回	第70節の読解①	空間性と時間性
第5回	第70節の読解②	脱自的・地平的時間性に基づく空間性
第6回	第71節の読解①	日常性とその時間的意味
第7回	第72節の読解①	歴史の問題の提示
第8回	第72節の読解②	伸張としての生起
第9回	第72節の読解③	時間性と歴史性
第10回	第73節の読解①	歴史の通俗的了解
第11回	第73節の読解②	現存在の生起
第12回	第73節の読解③	現存在の歴史性
第13回	第74節の読解①	歴史性の根本体制
第14回	第74節の読解②	歴史性と運命

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
事前にテキストを精読したうえで参加すること。また事典や関連文献を参考に、主要な概念や術語の意義についても確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1927.
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*(Gesamtausgabe Bd. 2), Vittorio Klostermann, 1977.
Martin Heidegger, *Zu eigenen Veröffentlichungen*(Gesamtausgabe Bd. 82), Vittorio Klostermann, 2018.
原佑・渡邊二郎訳『存在と時間II』中公クラシックス、2003年。
細谷貞夫訳『存在と時間』ちくま学芸文庫、1994年。
熊野純彦訳『存在と時間』岩波文庫、2013年。
高田珠樹訳『存在と時間』作品社、2013年。

【参考書】
①木田元『存在と時間の構築』岩波現代文庫、2000年。
②細川亮一『ハイデガー哲学の射程』創文社、2000年。
③齋藤元紀『存在の解釈学――ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局、2012年。
④齋藤元紀（共編著）『始まりのハイデガー』晃洋書房、2015年。
⑤渡邊二郎編『ハイデガー『存在と時間』入門』講談社学術文庫、2011年。
⑥A. Luckner, *Martin Heidegger: » Sein und Zeit «* , 3. vollst. überarb., Schöningh 2025.
⑦M. King(Author), J. Llewelyn(ed.), *A Guide to Heidegger's Being and Time*, SUNY Press, 2001.
⑧T. Rentsch(Hg.), *Sein und Zeit*, 2. Aufl., Akademie Verlag 2008.
⑨M. A. Wrathall(ed.), *The Cambridge Companion to Heidegger's 'Being and Time'*, Cambridge University Press, 2013.
⑩M. Heinz und T. Bender (Hg.), *Sein und Zeit neu verhandelt*, Felix Meiner Verlag, 2019.
⑪ハイデガー・フォーラム編『ハイデガー事典』昭和堂、2021年。
⑫ G. Thonhauser, *Heideggers „ Sein und Zeit" Einführung und Kommentar*, J.B. Metzler, 2022.

【成績評価の方法と基準】
上記「到達目標」で示した達成度を授業中の参加の度合（35％）、貢献度（35％）に加え、レポート（30％）を考慮し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
厳密な読解と徹底した議論をとおして哲学的思考を深める講義は例年好評を得ている。本年も基本的にその形式を踏襲し、ハイデガー存在論のさらなる理解を進めてゆく予定。積極的な授業参加を期待する。

【その他の重要事項】
ドイツ語辞書（紙・電子媒体いずれでもよい）を持参のこと。ただし初級用ではなく、『独和大辞典』（小学館）クラスが望ましい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
哲学・倫理学・思想史。
＜研究テーマ＞
ハイデガーをはじめとする現代哲学・現象学・解釈学・実存哲学の研究。環境思想や身体論等の応用哲学・応用倫理学研究。哲学対話をはじめとする哲学教育研究。
＜主要研究業績＞
「理解とは何か――ハイデガー・アーレント・ガダマーにおける和解をめぐって――」（ガダマー協会編『ガダマー研究』第１号、2024 年）、「出来事の解釈学――ハイデガーにおける渦動の思考」(Heidegger-Forum 第18号、2024年)、Transformation of Hermeneutics in Heidegger's Black Notebooks(Kritike: An Online Journal of Philosophy 16(3) 2023, pp. 156-171)、「自己解体としての出来事――ハイデガーの『黒ノート』における現象学の存在史的変容」（東京都立大学哲学会編『哲学誌』第65号、2023年)、『ハイデガー事典』（共編、昭和堂、2021年)、「『存在と時間』――ハイデガーの衝撃」（『ドイツ文化事典』丸善出版、2020年)、「存在論の神話」（『現代思想』青土社、2018年2月臨時増刊号)、「気遣いえぬもの」（ハイデガー研究会編『Zuspiel』第1号、2017年)『終わりなきデリダ――ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』（共編著、法政大学出版局、2016年)、『21世紀の哲学をひらく――現代思想の最前線への招待』（共編著、ミネルヴァ書房、2016年)、『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か――黒ノートをめぐる討議』(共編著、水声社、2015年)、『現代日本の四つの危機』(編著、講談社選書メチエ、2015年)、『始まりのハイデガー』(共編著、晃洋書房、2015年)、『ハイデガー読本』(共著、法政大学出版局、2015年)『存在の解釈学――ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』（法政大学出版局、2012年)、『科学と技術への問い――ハイデッガー研究会第三論集』(共編著、理想社、2012年)、『概説 現代の哲学・思想』(共編著、ミネルヴァ書房、2012年)、『ヨーロッパ現代哲学への招待』（共編著、梓出版社、2009年)、『ハイデッガー『存在と時間』の現在　刊行80周年記念論集』（共著、南窓社、2007年)、『ハイデッガーと思索の将来――哲学への〈寄与〉』（共著、理想社、2006年)。リチャード・J・バーンスタイン『暴力――手すりなき思考』（監訳、法政大学出版局、2020年)、ユルゲン・トラバント『人文主義の言語思想――フンボルトの伝統』（監訳、岩波書店、2020年)、ギュンター・フィガール『問いと答え――ハイデガーについて』（監訳、法政大学出版局、2017年)、トム・ロックモア『カントの航跡のなかで――二十世紀の哲学』（共訳、法政大学出版局、2008年)。

【Outline (in English)】
In this course, students will read Martin Heidegger's "Being and Time". On top of deepening their understandings of this book, this course aims for students to acquire the ability to better think in a critical and philosophical manner. Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your required study time is at least four hour for each class meeting. Final grade will be calculated according to the following process each reading report on each class meeting (35%), in-class contribution(35%), and term-end report (30%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

形而上学研究Ⅰ－２

齋藤　元紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、マルティン・ハイデガー著『存在と時間』(M. Heidegger, *Sein und Zeit*）の読解をとおして、学生が批判的な哲学的思考力を獲得することを目指す。

【到達目標】
この授業では、ハイデガーの主著『存在と時間』の精密な読解とそれをめぐる討論をとおして、学生が（１）哲学的文章を原文で読み解き、（２）彼の存在論・現象学・解釈学についての理解を深め、（３）西洋哲学史上のさまざまな知識に習熟するとともに、（４）自ら批判的な哲学的考察ができるようになることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
ハイデガーの主著『存在と時間』は、従来のさまざまな哲学思想を引き受けながら、西洋哲学に対する抜本的批判を企てた書物である。そこには、古代ギリシア哲学にはじまり、中世神学、近世・近代哲学、そして現象学や解釈学をはじめとする当時の同時代の哲学思想との対決が織り込まれている。またその対決をとおして展開された彼の思想は、哲学のみならず、現代の諸学問に今なお甚大な影響を与えている。この授業では、ドイツ語原文の精確な読解をとおして、上述のような多様な位相にわたるハイデガーの存在論的思考の本質を見極めてゆくことに努める。読解にあたっては、のちのハイデガー自身の『存在と時間』に対する自己批判の言及もあわせて検討し、中後期思想への展開の意図についても考察を行う。理解を深めるため、ディスカッション、関連文献の読解、研究報告等も適宜織り交ぜる。ドイツ語以外の言語（日・英・仏）による参加にも配慮する。秋学期は、春学期に続き『存在と時間』第一部第二編第75節から読み進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション①	授業の進め方の説明・ハイデガー哲学の概要
第2回	イントロダクション②	『存在と時間』の全体像
第3回	イントロダクション③	『存在と時間』の基本思想
第4回	第75節の読解①	世界内存在の生起としての歴史の生起
第5回	第75節の読解②	世界歴史
第6回	第75節の読解③	本来的歴史性と非本来的歴史性
第7回	第76節の読解①	歴史学の歴史性
第8回	第76節の読解②	現存在の歴史性に基づく歴史学の歴史性
第9回	第76節の読解③	ニーチェによる歴史学の三区分
第10回	第77節の読解①	歴史性の問題の展開
第11回	第77節の読解②	ディルタイの生の哲学と歴史性
第12回	第77節の読解③	ヨルクのディルタイ批判（比較をめぐって）
第13回	第77節の読解④	ヨルクのディルタイ批判（潜勢力をめぐって）
第14回	まとめ	『存在と時間』の制約と可能性

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
事前にテキストを精読したうえで参加すること。また事典や関連文献を参考に、主要な概念や術語の意義についても確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1927.
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*(Gesamtausgabe Bd. 2), Vittorio Klostermann, 1977.
Martin Heidegger, *Zu eigenen Veröffentlichungen*(Gesamtausgabe Bd. 82), Vittorio Klostermann, 2018.
原佑・渡邊二郎訳『存在と時間II』中公クラシックス、2003年。
細谷貞夫訳『存在と時間』ちくま学芸文庫、1994年。
熊野純彦訳『存在と時間』岩波文庫、2013年。
高田珠樹訳『存在と時間』作品社、2013年。

【参考書】
①木田元『存在と時間の構築』岩波現代文庫、2000年。
②細川亮一『ハイデガー哲学の射程』創文社、2000年。
③齋藤元紀『存在の解釈学――ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局、2012年。
④齋藤元紀（共編著）『始まりのハイデガー』晃洋書房、2015年。
⑤渡邊二郎編『ハイデガー『存在と時間』入門』講談社学術文庫、2011年。
⑥A. Luckner, *Martin Heidegger:* » *Sein und Zeit* « , 3. vollst. überarb., Schöningh 2001.
⑦M. King(Author), J. Llewelyn(ed.), *A Guide to Heidegger's Being and Time*, SUNY Press, 2001.
⑧T. Rentsch(Hg.), *Sein und Zeit*, 2. Aufl., Akademie Verlag 2008.
⑨M. A. Wrathall(ed.), *The Cambridge Companion to Heidegger's 'Being and Time'*, Cambridge University Press, 2013.
⑩M. Heinz und T. Bender (Hg.), *Sein und Zeit neu verhandelt*, Felix Meiner Verlag, 2019.
⑪ハイデガー・フォーラム編『ハイデガー事典』昭和堂、2021年。
⑫ G. Thonhauser, *Heideggers „ Sein und Zeit" Einführung und Kommentar*, J.B. Metzler, 2022.

【成績評価の方法と基準】
上記「到達目標」で示した達成度を授業中の参加の度合（35%）、貢献度（35%）に加え、レポート（30%）を考慮し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
厳密な読解と徹底した議論をとおして哲学的思考を深める講義は例年好評を得ている。本年も基本的にその形式を踏襲し、ハイデガー存在論のさらなる理解を進めてゆく予定。積極的な授業参加を期待する。

【その他の重要事項】
ドイツ語辞書（紙・電子媒体いずれでもよい）を持参のこと。ただし初級用ではなく、『独和大辞典』（小学館）クラスが望ましい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
哲学・倫理学・思想史。
＜研究テーマ＞
ハイデガーをはじめとする現代哲学・現象学・解釈学・実存哲学の研究。環境思想や身体論等の応用哲学・応用倫理学研究。哲学対話をはじめとする哲学教育研究。
＜主要研究業績＞
「理解とは何か――ハイデガー・アーレント・ガダマーにおける和解をめぐって――」（ガダマー協会編『ガダマー研究』第１号、2024 年）、「出来事の解釈学――ハイデガーにおける渦動の思考」(Heidegger-Forum 第18号、2024年)、Transformation of Hermeneutics in Heidegger's Black Notebooks(Kritike: An Online Journal of Philosophy 16(3) 2023, pp. 156-171),「自己解体としての出来事――ハイデガーの『黒ノート』における現象学の存在史的変容」（東京都立大学哲学会編『哲学誌』第65号、2023年)、『ハイデガー事典』(共編、昭和堂、2021年)、「『存在と時間』――ハイデガーの衝撃」（『ドイツ文化事典』丸善出版、2020年)、「存在論の神話」(『現代思想』青土社、2018年2月臨時増刊号)、「気遣いえぬもの」（ハイデガー研究会編『Zuspiel』第1号、2017年)『終わりなきデリダ――ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』（共編著、法政大学出版局、2016年)、『21世紀の哲学をひらく――現代思想の最前線への招待』（共編著、ミネルヴァ書房、2016年)、『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か――黒ノートをめぐる討議』(共編著、水声社、2015年)、『現代日本の四つの危機』(編著、講談社選書メチエ、2015年)、『始まりのハイデガー』(共編著、晃洋書房、2015年)、『ハイデガー読本』(共著、法政大学出版局、2015年)『存在の解釈学――ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』(法政大学出版局、2012年)、『科学と技術への問い――ハイデッガー研究会第三論集』(共編著、理想社、2012年)、『概説 現代の哲学・思想』(共編著、ミネルヴァ書房、2012年)、『ヨーロッパ現代哲学への招待』(共編著、梓出版社、2009年)、『ハイデッガー『存在と時間』の現在　刊行80周年記念論集』（共著、南窓社、2007年)、『ハイデッガーと思索の将来――哲学への〈寄与〉』（共著、理想社、2006年)。リチャード・J・バーンスタイン『暴力――手すりなき思考』（監訳、法政大学出版局、2020年)、ユルゲン・トラバント『人文主義の言語思想――フンボルトの伝統』（監訳、岩波書店、2020年)、ギュンター・フィガール『問いと答え――ハイデガーについて』（監訳、法政大学出版局、2017年)、トム・ロックモア『カントの航跡のなかで――二十世紀の哲学』（共訳、法政大学出版局、2008年)。

【Outline (in English)】
In this course, students will read Martin Heidegger's "Being and Time". On top of deepening their understandings of this book, this course aims for students to acquire the ability to better think in a critical and philosophical manner. Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your required study time is at least four hour for each class meeting. Final grade will be calculated according to the following process each reading report on each class meeting (35%), in-class contribution(35%), and term-end report (30%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

古代哲学史研究Ⅰ－１

文 景楠

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アリストテレス『自然学』第3巻を読む。本巻は彼の自然学における重要概念である「運動変化」と「無限」を扱う巻であり、様々な解釈的論点を含む。この授業では、最新の研究状況を参照しながらこれらを読み解くことを目指す。

【到達目標】
アリストテレス『自然学』第3巻の基本的構造を理解し、特に「運動変化」と「無限」に関する論点を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者が事前にテクストを読みレジュメを準備する演習形式で進める。学期末には4000字程度のレポートを課す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容と評価基準の紹介
2	ギリシア哲学を研究する	現代的な研究方法の概観
3	背景の確認1	アリストテレス『自然学』の基礎知識
4	背景の確認2	アリストテレス『自然学』第3巻の概観
5	『自然学』第3巻第1章：200b12-25	探究対象の設定
6	『自然学』第3巻第1章：200b26-1a9	運動変化の種類
7	『自然学』第3巻第1章：201a9-b15	運動変化の定義1
8	議論1	論点の確認と討論
9	『自然学』第3巻第2章：201b16-2a3	運動変化の定義2
10	『自然学』第3巻第2章：202a3-12	運動変化するものとさせるもの
11	『自然学』第3巻第3章：202a13-b5	運動変化の所在1
12	『自然学』第3巻第3章：202b5-29	運動変化の所在2
13	議論2	論点の確認と討論
14	まとめ	授業内容の振り返りとレポート構想の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回全員がテクストと注釈を事前に読み、担当になった回ではレジュメを用意すること。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
ギリシア語のテクストは次のものを用いるが、教員が配布する。
- W. D. Ross. 1936. Aristotle's Physics. Oxford: Clarendon Press.
日本語訳は次のものを用いる。
- 内山勝利（2017）『自然学』新版アリストテレス全集、岩波書店.
- 出隆（1968）『自然学』アリストテレス全集、岩波書店.
ギリシア語未修者の参加も可能だが、その場合は英語または仏独語などで書かれた注釈を担当してもらう。以下はその一例である。
- Hussey, Edward. 1983. Physics: Books III and IV. Oxford: Oxford University Press.

【参考書】
講義中に随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
「到達目標」に記した内容の到達度に照らして、① 平常時の参加度（60%）② 期末レポート（40%）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】
今年度は該当なし

【その他の重要事項】
古代哲学史研究I－2と合わせて受講することを勧める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
古代ギリシア哲学
＜研究テーマ＞
特に心の哲学と形而上学を中心に、アリストテレス哲学全般に関心がある。
＜主要研究業績＞
（2023）「Λ前半部の展開」『ギリシャ哲学セミナー論集』19、1－14頁.
（2022）「アイティアーのもつれ」『哲學』第73号、363－374頁.
2021. Aristotle's disturbing relatives. Apeiron 54, no.4: 451－472.

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course focuses on Book III of Aristotle's Physics. Book III addresses the concepts of "change" and "the infinite," which are central to Aristotle's natural philosophy, and raises a range of interpretive issues. In this course, we aim to read and interpret these topics in light of recent scholarship.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students will be able to understand the basic structure of Book III of Aristotle's Physics and explain the issues related particularly to "change" and "the infinite."
（Learning activities outside of classroom）
For each class meeting, all students must complete the assigned readings in advance, and those assigned as presenters are required to prepare a written summary. Before and after each class meeting, students are expected to spend approximately four hours preparing for and reviewing the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following: 1. Class participation: 60%, 2. Term-end paper: 40%.

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

古代哲学史研究Ⅰ－2

文 景楠

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アリストテレス『自然学』第3巻を読む。本巻は彼の自然学における重要概念である「運動変化」と「無限」を扱う巻であり、様々な解釈的論点を含む。この授業では、最新の研究状況を参照しながらこれらを読み解くことを目指す。

【到達目標】
アリストテレス『自然学』第3巻の基本的構造を理解し、特に「運動変化」と「無限」に関する論点を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者が事前にテクストを読みレジュメを準備する演習形式で進める。学期末には4000字程度のレポートを課す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	先学期の内容の振り返り
2	レポートの検討	先学期のレポート内容の発表
3	『自然学』第3巻第4章：202b30-3b2	無限に関する先人の説の紹介
4	『自然学』第3巻第4章：203b3-4a7	無限の基礎的考察
5	『自然学』第3巻第5章：204a8-5a7	先人の批判1
6	『自然学』第3巻第5章：205a8-6a8	先人の批判2
7	議論1	論点の確認と討論
8	『自然学』第3巻第6章：206a9-b3	可能的な無限
9	『自然学』第3巻第6章：206b3-7a32	付加による無限と分割による無限
10	『自然学』第3巻第7章：207a33-b27	様々な無限
11	『自然学』第3巻第7章：207b27-8a4	数学者の実践、質料としての無限
12	『自然学』第3巻第8章	諸見解の批判的検討
13	議論2	論点の確認と討論
14	まとめ	授業内容の振り返りとレポート構想の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回全員がテクストと注釈を事前に読み、担当になった回ではレジュメを用意すること。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
ギリシア語のテクストは次のものを用いるが、教員が配布する。
- W. D. Ross. 1936. Aristotle's Physics. Oxford: Clarendon Press.
日本語訳は次のものを用いる。
- 内山勝利（2017）『自然学』新版アリストテレス全集、岩波書店.
- 出隆（1968）『自然学』アリストテレス全集、岩波書店.
ギリシア語未修者の参加も可能だが、その場合は英語または仏独語などで書かれた注釈を担当してもらう。以下はその一例である。
- Hussey, Edward. 1983. Physics: Books III and IV. Oxford: Oxford University Press.

【参考書】
講義中に随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
「到達目標」に記した内容の到達度に照らして、① 平常時の参加度（60%）② 期末レポート（40%）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】
今年度は該当なし

【その他の重要事項】
古代哲学史研究Ⅰ－1と合わせて受講することを勧める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
古代ギリシア哲学
＜研究テーマ＞
特に心の哲学と形而上学を中心に、アリストテレス哲学全般に関心がある。
＜主要研究業績＞
（2023）「Λ前半部の展開」『ギリシャ哲学セミナー論集』19、1－14頁.
（2022）「アイティアーのもつれ」『哲學』第73号、363－374頁.
2021. Aristotle's disturbing relatives. Apeiron 54, no.4: 451－472.

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course focuses on Book III of Aristotle's Physics. Book III addresses the concepts of "change" and "the infinite," which are central to Aristotle's natural philosophy, and raises a range of interpretive issues. In this course, we aim to read and interpret these topics in light of recent scholarship.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students will be able to understand the basic structure of Book III of Aristotle's Physics and explain the issues related particularly to "change" and "the infinite."
（Learning activities outside of classroom）
For each class meeting, all students must complete the assigned readings in advance, and those assigned as presenters are required to prepare a written summary. Before and after each class meeting, students are expected to spend approximately four hours preparing for and reviewing the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following: 1. Class participation: 60%, 2. Term-end paper: 40%.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

古代哲学史研究 II － 1

文 景楠

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
プラトン『国家』第1巻を読む。『国家』はプラトンの代表作であり、そこで論じられる内容は多岐にわたる。この授業では、「正義について」という副題とともに知られてきた第1巻を最新の注釈を参照しながら読み解く。

【到達目標】
プラトン『国家』第1巻の基本的構造を理解し、関連する諸論点を批判的に検討することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者が事前にテクストを読みレジュメを準備する演習形式で進める。学期末には4000字程度のレポートを課す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容と評価基準の紹介
2	プラトンについて	プラトンの人物と著作の紹介
3	背景の確認	プラトン『国家』第1巻の導入
4	『国家』第1巻：327a-329d	舞台設定とケパロスとの対話1（老年の幸福）
5	『国家』第1巻：329d-331d	ケパロスとの対話2（富、正義の分析）
6	議論1	論点の確認と討論
7	『国家』第1巻：331e-333d	ポレマルコスとの対話1（正義の分析と文脈の明確化）
8	『国家』第1巻：333e-335b	ポレマルコスとの対話2（ソクラテスの反論1）
9	『国家』第1巻：335b-336a	ポレマルコスとの対話3（ソクラテスの反論2）
10	議論2	論点の確認と討論
11	『国家』第1巻：336b-338a	トラシュマコスの登場
12	『国家』第1巻：338a-339b	トラシュマコスによる正義の定義
13	『国家』第1巻：339b-341a	定義の明瞭化と吟味
14	まとめ	授業内容の振り返りとレポート構想の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回全員がテクストと注釈を事前に読み、担当になった回ではレジュメを用意すること。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
ギリシア語のテクストは次のものを用いるが、教員が配布する。
- S. R. Slings. 2003. Platonis Respublica. OCT. Oxford: Clarendon Press.
日本語訳は次のものを用いる。
- 藤沢令夫（2008）『国家』全2巻、改版、岩波文庫、岩波書店.
ギリシア語未修者の参加も可能だが、その場合は英語または仏独語などで書かれた注釈を担当してもらう。以下はその一例である。
- David Sansone. 2023. Plato. Republic: Book I. Cambridge Greek and Latin Classics. Cambridge: Cambridge University Press.

【参考書】
講義中に随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
「到達目標」に記した内容の到達度に照らして、① 平常時の参加度（60%）② 期末レポート（40%）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】
今年度は該当なし

【その他の重要事項】
古代哲学史研究II － 2と合わせて受講することを勧める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
古代ギリシア哲学
＜研究テーマ＞
特に心の哲学と形而上学を中心に、アリストテレス哲学全般に関心がある。
＜主要研究業績＞
（2023）「Λ前半部の展開」『ギリシャ哲学セミナー論集』19、1－14頁.
（2022）「アイティアーのもつれ」『哲學』第73号、363－ 374頁.
2021. Aristotle’s disturbing relatives. Apeiron 54, no.4: 451－472.

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course focuses on Book I of Plato’s Republic. The Republic is one of Plato’s major works and encompasses an exceptionally wide range of themes. In this course, we aim to read and interpret Book I — long known by the subtitle “On Justice” — with reference to some recent commentaries.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students will understand the basic structure of Book I of Plato’s Republic and will be able to critically examine the related issues.
（Learning activities outside of classroom）
For each class meeting, all students must complete the assigned readings in advance, and those assigned as presenters are required to prepare a written summary. Before and after each class meeting, students are expected to spend approximately four hours preparing for and reviewing the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following: 1. Class participation: 60%, 2. Term-end paper: 40%.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

古代哲学史研究 II － 2

文 景楠

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
プラトン『国家』第1巻を読む。『国家』はプラトンの代表作であり、そこで論じられる内容は多岐にわたる。この授業では、「正義について」という副題とともに知られてきた第1巻を最新の注釈を参照しながら読み解く。

【到達目標】
プラトン『国家』第1巻の基本的構造を理解し、関連する諸論点を批判的に検討することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者が事前にテクストを読みレジュメを準備する演習形式で進める。学期末には4000字程度のレポートを課す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	先学期の内容の振り返り
2	レポートの検討	先学期のレポート内容の発表
3	『国家』第1巻：341a-342e	技術との関連からの吟味
4	『国家』第1巻：343a-344c	実践者の利益のための技術
5	『国家』第1巻：344d-345e	対象の利益のための技術
6	『国家』第1巻：345e-347a	支配者になること
7	議論1	論点の確認と討論
8	『国家』第1巻：347a-348b	グラウコンの介入
9	『国家』第1巻：348b-349c	正しい生の優位性1
10	『国家』第1巻：349c-351c	正しい生の優位性2
11	議論2	論点の確認と討論
12	『国家』第1巻：351c-353a	正しい生の優位性3
13	『国家』第1巻：353a-354c	正しい生の優位性4
14	まとめ	授業内容の振り返りとレポート構想の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回全員がテクストと注釈を事前に読み、担当になった回ではレジュメを用意すること。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
ギリシア語のテクストは次のものを用いるが、教員が配布する。
- S. R. Slings. 2003. Platonis Respublica. OCT. Oxford: Clarendon Press.
日本語訳は次のものを用いる。
- 藤沢令夫（2008）『国家』全2巻、改版、岩波文庫、岩波書店.
ギリシア語未修者の参加も可能だが、その場合は英語または仏独語などで書かれた注釈を担当してもらう。以下はその一例である。
- David Sansone. 2023. Plato. Republic: Book I. Cambridge Greek and Latin Classics. Cambridge: Cambridge University Press.

【参考書】
講義中に随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
「到達目標」に記した内容の到達度に照らして、① 平常時の参加度（60%）② 期末レポートの内容（40%）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】
今年度は該当なし

【その他の重要事項】
古代哲学史研究II － 1と合わせて受講することを勧める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
古代ギリシア哲学
＜研究テーマ＞
特に心の哲学と形而上学を中心に、アリストテレス哲学全般に関心がある。
＜主要研究業績＞
（2023）「Λ前半部の展開」『ギリシャ哲学セミナー論集』19、1－14頁.
（2022）「アイティアーのもつれ」『哲學』第73号、363－ 374頁.
2021. Aristotle’s disturbing relatives. Apeiron 54, no.4: 451－472.

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course focuses on Book I of Plato’s Republic. The Republic is one of Plato’s major works and encompasses an exceptionally wide range of themes. In this course, we aim to read and interpret Book I — long known by the subtitle “On Justice” — with reference to some recent commentaries.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students will understand the basic structure of Book I of Plato’s Republic and will be able to critically examine the related issues.
（Learning activities outside of classroom）
For each class meeting, all students must complete the assigned readings in advance, and those assigned as presenters are required to prepare a written summary. Before and after each class meeting, students are expected to spend approximately four hours preparing for and reviewing the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following: 1. Class participation: 60%, 2. Term-end paper: 40%.

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

論理学研究Ⅰ－１

安東　祐希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ゲンツェンの基本定理の証明を学ぶ。

【到達目標】
基本定理の証明を細部にわたり理解し、自ら証明を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	証明の方針	論文(III:3.1前文)部分
第2回	自由変数の付け替え	論文(III:3.10)部分
第3回	左上式が公理	論文(III:3.111-112)部分
第4回	左上式が右弱化	論文(III:3.113.1-2)部分
第5回	上式が左右連言等	論文(III:3.113.31-32)部分
第6回	上式が左右全称等	論文(III:3.113.33-36)部分
第7回	右階数が1より大	論文(III:3.121前文)部分
第8回	Ⅰが左構造規則	論文(III:3.121.21)部分
第9回	Ⅰの上式が一つ	論文(III:3.121.22)部分
第10回	Ⅰの上式が二つ	論文(III:3.121.23)部分
第11回	右階数が1	論文(III:3.122)部分
第12回	NJにおける切断	論文(III:3.21)部分
第13回	階数が2	論文(III:3.231)部分
第14回	階数が2より大	論文(III:3.232)部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。なお、予復習時間の標準は4時間である。

【テキスト（教科書）】
G. Gentzen, Untersuchungen über das logische Schließen, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szaboによる英訳、Investigations into logical deduction, in *The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】
・Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
・A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】
到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容（60%）において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答（40%）において評価する。

【学生の意見等からの気づき】
具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
数理論理学（証明論）
〈研究テーマ〉
証明図の正規化手続きに関する諸性質
〈主要研究業績〉
・Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.
・A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.
・Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline (in English)】

[Course outline]
This course deals with the proof of Gentzen's Hauptsatz.

[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the followings:
-To comprehend the logical sysmtems where Hauptsatz is expressed.
-To prove Hauptsatz in detail.

[Learning activities outside of classroom]
Students will be expected to do exercises with many sheets of paper. Your study time will be more than four hours for a class.

[Grading Criteria/Policies]
Final grade will be calculated according to the following process:
Presentation as the person in charge for a part of the text (60%) and contribution in question-and-answer sections (40%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

論理学研究Ⅰ－２

安東　祐希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ゲンツェンの基本定理の応用例を学ぶ。合わせて、複数の体系に関する同等性を学ぶ。

【到達目標】
直観主義命題論理の決定問題などに対して基本定理を応用できて、基本定理で使用される体系と他の体系との同等性を証明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	命題論理の無矛盾性	論文(IV:1.1)部分
第2回	直観主義の決定問題	論文(IV:1.2)部分
第3回	排中律	論文(IV:1.3)部分
第4回	強い形の基本定理	論文(IV:2.1)部分
第5回	強い定理の証明	論文(IV:2.2)部分
第6回	定理の他の強め方	論文(IV:2.3)部分
第7回	算術の体系	論文(IV:3.1)部分
第8回	帰納法無しの算術	論文(IV:3.2)部分
第9回	体系の拡張	論文(IV:3.3)部分
第10回	同等性と既存体系	論文(V:§1-2)部分
第11回	LHJからNJ	論文(V:§3)部分
第12回	NJからLJ	論文(V:§4)部分
第13回	LJからLHJ	論文(V:§5)部分
第14回	LHK、NKとLK	論文(V:§6)部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。なお、予復習時間の標準は4時間である。

【テキスト（教科書）】
G. Gentzen, Untersuchungen über das logische Schließen, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szaboによる英訳、Investigations into logical deduction, in *The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】
・Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
・A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】
到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容（60%）において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答（40%）において評価する。

【学生の意見等からの気づき】
具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
数理論理学（証明論）
〈研究テーマ〉
証明図の正規化手続きに関する諸性質
〈主要研究業績〉
・Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.
・A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.
・Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline (in English)】

[Course outline]
This course deals with some applications of Gentzen's Hauptsatz and with the equivalence of related logical systems.

[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the followings:
-To apply Hauptsatz to other theorems.
-To prove that the logical system LK and LJ are equivalent to other known systems respectively.

[Learning activities outside of classroom]
Students will be expected to do exercises with many sheets of paper. Your study time will be more than four hours for a class.

[Grading Criteria/Policies]
Final grade will be calculated according to the following process:
Presentation as the person in charge for a part of the text (60%) and contribution in question-and-answer sections (40%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近代倫理学史研究Ⅰ－１

菅沢　龍文

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「有（存在）への問い」はハイデッガー哲学の根本問題である。この問題を『有に関するカントのテーゼ』でハイデッガーは、カントの陳述を追思索するなかで深めていく。ゼミでは、そのハイデッガーの歩みをドイツ語原典テキストに沿って読み取りつつ、ハイデッガーと共に思索する。これにより、「有（存在）」の意味についての考えを深める。（昨年度の続きを読み進めて、春学期に読み終えます。秋学期にはハイデッガーの『カントと形而上学の問題』を読み進める予定です。）

【到達目標】
原典テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。
（1）原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
（2）対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
（3）他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
（4）テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
（5）レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
（6）ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
（7）日本語、英語その他の翻訳書を主に用いる参加者は、訳文や専門語の意味を正確に読みとれる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
事前に訳読担当者は訳読文をPDFでゼミ内に配布する。そしてプロトコル（前回のまとめ）担当者は前回の復習用レジュメをゼミ内に配布する。その後にゼミ本番では次のように進行する。
（1）最初に前回ゼミのプロトコル担当者の発表があり、これについての質疑応答をする。
（2）テキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
（3）テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
（4）ドイツ語の初学者も、プロトコルやレポート発表などで積極的に参加する。
（5）英訳書による参加者は、英語テキストの訳読をして、ゼミではドイツ語原文を参照しつつ、テキストの意味を考える。
（6）初めてハイデッガーのテキストに挑戦する人も、初歩的な質問をして基本理解をゼミ内で共有する。
（7）必要に応じて、オンラインでの参加も可能である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	・オリエンテーション	・ゼミの進め方 ・テキストに関して ・『有に関するカントのテーゼ』(『テーゼ』と略記）の昨年度ゼミの内容について
第2回	・可能的／現実的／必然的に有る	『テーゼ』467-468ページ
第3回	・「有と思惟」	同上468-469ページ
第4回	・「感覚を通しての触発」	同上470ページ
第5回	・「客観的レアリテート」	同上470-471ページ
第6回	・カント対ライプニッツ	同上471-472ページ
第7回	・「超越論的反省」	同上472-473ページ
第8回	・「反省に関する反省」	同上473-474ページ
第9回	・「実質と形式」	同上474-475ページ
第10回	・「存在< existentia > 」	同上475-476ページ
第11回	・「命題－主語」と「我－主語」	同上476-477ページ
第12回	・「有と思惟」における「と」	同上477-478ページ
第13回	・「各自の時に－住するもの< das Je-Weilige> 」	同上478-479ページ
第14回	・「非覆蔵性」	同上479-480ページ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備学習（2時間）：訳読担当者は翻訳文およびコメントを作成して共有する。各人は予め当該テキストを読んで内容を把握しておく。
復習・宿題（2時間）：プロトコル担当者は復習用レジュメを作成する。各人は事前に共有された復習用レジュメおよびコメントを読んで、自分の理解を確認する。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Wegmarken*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1976, pp. 445-480.

【参考書】
M・ハイデッガー『道標』（ハイデッガー全集 第９巻）辻村公一／ハルトムート・ブフナー訳、創文社、1985年、555-595頁
英訳書その他については、ゼミでお伝えします。

【成績評価の方法と基準】
（1）プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察され
る到達目標達成度
（2）レポート課題で確認される到達目標達成度
（1）を70 %、（2）を30 %で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
言葉を明瞭に発音するように心がける。
定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
西洋近代の哲学・倫理学
＜研究テーマ＞
カント哲学
＜主要研究業績＞
・「カントの永遠平和論――― 政治と宗教の観点から」『カントと二一世紀の平和論』日本カント協会編、人文書院、2025年。
・「カントとケーニヒスベルク大学――アリストテレス主義の観点で――」『日本カント研究　23』、2022年。
・「カントにおける「人間性の権利」概念について――カントの『法論』は批判哲学に基づくのか――」『法政大学文学部紀要』第80号、2020年。
＜その他＞
▶《三木清研究》「三木清の思想形成とハイデッガーの1924年夏学期講義――― 「ロゴスとパトスの弁証法的統一」への道――― 」『法政大学文学部紀要』第92号、2026年。
▶《翻訳：共訳》マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017年。
▶《欧文》Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.

【Outline (in English)】
（**Course outline**）

The question of being is a fundamental problem in Heidegger's philosophy. In "Kant's Thesis about Being", Heidegger deepens this question through his contemplation of Kant's statements. In this seminar, we will read Heidegger's progress by reading the original German texts and engage in reflection alongside him. In this way, we will deepen our understanding of the meaning of'Being (Sein)'.

(**Learning Objectives**)

Develop the following attitudes, skills and knowledge in relation to the source texts

(1) Return to the original texts to discover the thinkers' ideas themselves.

(2) Deepen our understanding of the subject by discovering, investigating and considering questions.

(3) Form more convincing opinions by considering the opinions of others.

(4) Compare and contrast ideas uncovered from the text with other ideas.

(5) Convey content clearly and accurately in reports.

(6) Participants who translate German texts will be able to read and understand the original German texts accurately.

(7) Participants who mainly use Japanese, English or other translations will be able to realize the meaning of translated sentences and technical terms accurately.

(**Learning activities outside of classroom**)

Preparatory study (2 hours): The translators will prepare and share their translated text and comments. Each person reads the assigned text beforehand to grasp its content.

Review and homework (2 hours): Protocol staff will prepare a summary for review and comments shared in advance of the seminar to check understanding. Each person reads the shared summary and comments beforehand to confirm their understanding.

(**Grading Criteria /Policy**)

(1) Achievement of learning objectives observed through protocol presentations (previous session summary), text comprehension, and Q&A

(2) Achievement of learning objectives assessed through report assignments

(1) accounts for 70% of the grade, and (2) accounts for 30% of the grade.

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近代倫理学史研究Ⅰ－２

菅沢　龍文

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「形而上学の根拠づけ」をカント『純粋理性批判』に探る、これをハイデッガーは『カントと形而上学の問題』の課題とする。この根拠づけは、カントの「構想力」概念を通じて遂行される。この試みは「『有と時』の問題提起の視野」の下での『純粋理性批判』解釈である（第四版への前書き）。ゼミでは、この解釈をドイツ語原典テキストに沿って読み取りつつ、追思索する。これにより、形而上学の根拠づけについての考えを深める。秋学期は、序論と第一章「発端における形而上学の根拠づけ」を読み切る。

【到達目標】
原典テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。
（1）原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
（2）対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
（3）他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
（4）テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
（5）レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
（6）ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
（7）日本語、英語その他の翻訳書を主に用いる参加者は、訳文や専門語の意味を正確に読みとれる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
事前に訳読担当者は訳読文をPDFでゼミ内に配布する。そしてプロトコル（前回のまとめ）担当者は前回の復習用レジュメをゼミ内に配布する。その後にゼミ本番では次のように進行する。
（1）最初に前回ゼミのプロトコル担当者の発表があり、これについての質疑応答をする。
（2）テキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
（3）テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
（4）ドイツ語の初学者も、プロトコルやレポート発表などで積極的に参加する。
（5）英訳書による参加者は、英語テキストの訳読をして、ゼミではドイツ語原文を参照しつつ、テキストの意味を考える。
（6）初めてハイデッガーのテキストに挑戦する人も、初歩的な質問をして基本理解をゼミ内で共有する。
（7）必要に応じて、オンラインでの参加も可能である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	・オリエンテーション ・「基礎的オントロギー」	・ゼミの進め方 ・テキストについて ・テキスト：1頁
第2回	・「形而上学の根拠づけ」	・テキスト：1-3頁
第3回	・形而上学	・テキスト：5－6頁
第4回	・アリストテレスの形而上学	・テキスト：6－7頁
第5回	・「第一哲学」	・テキスト：7－8頁
第6回	・「特殊形而上学」と「一般形而上学」	・テキスト：8－9頁
第7回	・「超感性的に有るもの」	・テキスト：9－10頁
第8回	・「オンティッシュな認識」と「オントローギッシュな認識」	・テキスト：10－11頁
第9回	・「オントロギー」	・テキスト：11－12頁
第10回	・「オントローギッシュな真理」	・テキスト：12－13頁
第11回	・「アプリオリな綜合的判断」	・テキスト：13－14頁
第12回	・「純粋理性批判」	・テキスト：14－15頁
第13回	・「超越論的哲学」	・テキスト：15－16頁
第14回	・「超越論的真理」	・テキスト：16－18頁

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備学習（2時間）：訳読担当者は翻訳文を作成する。事前にゼミ内で共有された翻訳文およびコメントを読んで内容を把握する。
復習・宿題（2時間）：プロトコル担当者は復習用レジュメを作成する。事前に共有された復習用レジュメおよびコメントを読んで、理解を確認する。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, Gesamtausgabe Band 3, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1991.

【参考書】
M・ハイデッガー『カントと形而上学の問題』（ハイデッガー全集 第３巻）門脇卓爾／ハルトムート・ブフナー訳、創文社、2003年
英訳書その他については、ゼミでお伝えします。

【成績評価の方法と基準】
（1）プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度
（2）レポート課題で確認される到達目標達成度
（1）を70 %、（2）を30 %で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
言葉を明瞭に発音するように心がける。
定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
西洋近代の哲学・倫理学
＜研究テーマ＞
カント哲学
＜主要研究業績＞
・「カントの永遠平和論――― 政治と宗教の観点から」『カントと二一世紀の平和論』日本カント協会編、人文書院、2025年。
・「カントとケーニヒスベルク大学――アリストテレス主義の観点で――」『日本カント研究　23』、2022年。
・「カントにおける「人間性の権利」概念について――カントの『法論』は批判哲学に基づくのか――」『法政大学文学部紀要』第80号、2020年。
＜その他＞
▶《三木清研究》「三木清の思想形成とハイデッガーの1924年夏学期講義――― 「ロゴスとパトスの弁証法的統一」への道――― 」『法政大学文学部紀要』第92号、2026年。
▶《翻訳：共訳》マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017年。
▶《欧文》Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.

【Outline (in English)】
（**Course outline**）

Exploring the “grounding of metaphysics” in Kant’s *Critique of Pure Reason*: this is the task Heidegger sets in his *Kant and the Problem of Metaphysics*. This grounding is accomplished through Kant’s concept of “imagination.” This endeavor constitutes an interpretation of the *Critique of Pure Reason* “under the perspective of the problem of *Being and Time*” (Preface to the Fourth Edition). In this seminar, we will read and reflect on Heidegger’s interpretation alongside the original German texts. This will deepen our understanding of the grounding of metaphysics. During the spring semester, we will complete the Introduction and Chapter 1: “The Justification of Metaphysics in the Beginning.”

（**Learning Objectives**）

Develop the following attitudes, skills and knowledge in relation to the source texts

(1) Return to the original texts to discover the thinkers’ ideas themselves.

(2) Deepen our understanding of the subject by discovering, investigating and considering questions.

(3) Form more convincing opinions by considering the opinions of others.

(4) Compare and contrast ideas uncovered from the text with other ideas.

(5) Communicate content clearly and accurately in reports.

(6) Participants who translate German texts will be able to read and understand the German original accurately.

(7) Participants who mainly use Japanese, English or other translations will be able to realize the meaning of translated sentences and technical terms accurately.

（**Learning activities outside of classroom**）

Preparatory study (2 hrs): The translators will prepare their translations. Read the translations and comments shared in the seminar in advance to understand the content.

Review and homework (2 hours): Protocol staff will prepare resumes for review. Protocol officers will prepare review resumes and comments shared in advance of the seminar to check understanding.

（**Grading Criteria /Policy**）

(1) Achievement of learning objectives observed through protocol presentations (previous session summary), text comprehension, and Q&A

(2) Achievement of learning objectives assessed through report assignments

(1) accounts for 70% of the grade, and (2) accounts for 30% of the grade.

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近代倫理学史研究 II － 1

菅沢　龍文

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
カント『実践理性批判』を読む。『実践理性批判』はカントの実践哲学全体の原理を論究する書である。『実践理性批判』の前半の「分析論」では、カントの道徳原理である定言命法と自由の根拠付けの問題について論ぜられている。これらの議論を検討することにより、カントの道徳論がどれだけの深みと広がりを持つのか考える。春学期は冒頭の「序言」を読み、カント哲学において『実践理性批判』のもつ意味と意義について考える。

【到達目標】
原典テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。
（1）原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
（2）対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
（3）他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
（4）テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
（5）レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
（6）ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
（7）日本語、英語その他の翻訳書を主に用いる参加者は、訳文文や専門語の意味を正確に読みとれる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
ゼミの前に訳読担当者は訳読文をPDFでゼミ内に配布する。そしてプロトコル（前回のまとめ）担当者は前回の復習用レジュメをゼミ内に配布する。その後にゼミ本番では次のように進行する。
（1）最初に前回ゼミのプロトコル担当者の発表があり、これについての質疑応答をする。
（2）テキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
（3）テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
（4）ドイツ語の初学者も、プロトコルやレポート発表などで積極的に参加する。
（5）英訳書による参加者は、英語テキストの訳読をして、ゼミではドイツ語原文を参照しつつ、テキストの意味を考える。
（6）初めてカントのテキストに挑戦する人も、初歩的な質問をして基本理解をゼミ内で共有する。
（7）対面での参加も可能である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	・イントロダクション	・ゼミ紹介 ・カント『実践理性批判』について、他。
第2回	・超越論的自由	テキスト：3 － 4頁
第3回	・理性の実践的使用	テキスト：4 － 5頁
第4回	・神／自由／不死	テキスト：5 － 6頁
第5回	・自由の実在性	テキスト：6 － 7頁
第6回	・本体／現象体としての自己	テキスト：7 － 8頁
第7回	・自由の概念	テキスト：8 － 9頁
第8回	・「実践理性一般の批判」	テキスト：9 － 10頁
第9回	・生／欲求能力／快	テキスト：10 － 11頁
第10回	・「一つの純粋な理性能力」	テキスト：11 － 12頁
第11回	・「新造語」について	テキスト：12 － 14頁
第12回	・「知恵」その他の語句	テキスト：14頁
第13回	・アプリオリな認識	テキスト：14 － 16頁
第14回	・デイヴィッド・ヒューム	テキスト：16 － 17頁

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備学習（2時間）：訳読担当者は翻訳文およびコメントを作成して共有する。各人は予め当該テキストを読んで内容を把握しておく。
復習・宿題（2時間）：プロトコル担当者は復習用レジュメを作成する。各人は事前に共有された復習用レジュメおよびコメントを読んで、自分の理解を確認する。

【テキスト（教科書）】
I. Kant, Kritik der praktischen Vernunft, Felix Meiner Verlag.
（翻訳書）『カント全集』岩波書店版・第7巻、理想社版・第七巻など。単行本では、以文社版、岩波文庫版、光文社古典新訳文庫版、作品社版など。（英訳：ケンブリッジ版など）。

【参考書】
御子柴善之『カント　実践理性批判』（角川選書）
高峯一愚『カント実践理性批判解説』（論創社）
Ｌ・Ｗ・ベック『カント『実践理性批判』の注解』（藤田昇吾訳、新地書房）
Ｈ・Ｊ・ペイトン『定言命法』（杉田聡訳、行路社）
その他の関連する入門書や解説書や研究文献は、ゼミで適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
（1）プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察され
る到達目標達成度
（2）レポート課題で確認される到達目標達成度
（1）を70 %、（2）を30 %で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
言葉を明瞭に発音するように心がける。
定刻どおりに終わるように心がける。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン接続のためのノートパソコン（推奨）、またはタブレットやスマホ

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
西洋近代の哲学・倫理学
＜研究テーマ＞
カント哲学
＜主要研究業績＞
・「カントの永遠平和論――― 政治と宗教の観点から」『カントと二一世紀の平和論』日本カント協会編、人文書院、2025年。
・「カントとケーニヒスベルク大学――アリストテレス主義の観点で――」『日本カント研究　23』、2022年。
・「カントにおける「人間性の権利」概念について――カントの『法論』は批判哲学に基づくのか――」『法政大学文学部紀要』第80号、2020年。
＜その他＞
▶《三木清研究》「三木清の思想形成とハイデッガーの1924年夏学期講義――― 「ロゴスとパトスの弁証法的統一」への道――― 」『法政大学文学部紀要』第92号、2026年。
▶《翻訳：共訳》マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017年。
▶《欧文》Kant und das Problem des Lügens.　Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.

【Outline (in English)】
【Course outline】

We read Kant's *Critique of Practical Reason*. The Critique of Practical Reason is a work that investigates the principles underlying Kant's entire practical philosophy. The first part of the Critique of Practical Reason, the "Analytics," discusses Kant's moral principle, the categorical imperative, and the problem of justifying freedom. By examining these discussions, we consider the depth and breadth of Kant's moral theory. In the spring semester, we will read the opening "Preface" and consider the meaning and significance of the *Critique of Practical Reason* within Kant's philosophy.
【Learning Objectives】
Develop the following attitudes, skills and knowledge in relation to the source texts
(1) Return to the original texts to discover the thinkers' ideas themselves.
(2) Deepen our understanding of the subject by discovering, investigating and considering questions.
(3) Form more convincing opinions by considering the opinions of others.
(4) Compare and contrast ideas uncovered from the text with other ideas.
(5) Convey content clearly and accurately in reports.
(6) Participants who translate German texts will be able to read and understand the original German texts accurately.
(7) Participants who mainly use Japanese, English or other translations will be able to realize the meaning of translated sentences and technical terms accurately.
【Learning activities outside of classroom】
Preparatory study (2 hours): The translators will prepare and share their translated text and comments. Each person reads the assigned text beforehand to grasp its content.
Review and homework (2 hours): Protocol staff will prepare a summary for review and comments shared in advance of the seminar to check understanding. Each person reads the shared summary and comments beforehand to confirm their understanding.
【Grading Criteria / Policy】
(1) Achievement of learning objectives observed through protocol presentations (previous session summary), text comprehension, and Q&A
(2) Achievement of learning objectives assessed through report assignments
(1) accounts for 70% of the grade, and (2) accounts for 30% of the grade.

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近代倫理学史研究 II － 2

菅沢　龍文

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
カント『実践理性批判』を読む。『実践理性批判』はカントの実践哲学全体の原理を論究する書である。『実践理性批判』の前半の「分析論」では、カントの道徳原理である定言命法と自由の根拠付けの問題について論ぜられている。これらの議論を検討することにより、カントの道徳論がどれだけの深みと広がりを持つのか考える。秋学期は「序言」に続く「序論」から始め「分析論」の「§３」まで進む。

【到達目標】
原典テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。
（1）原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
（2）対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
（3）他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
（4）テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
（5）レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
（6）ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
（7）日本語、英語その他の翻訳書を主に用いる参加者は、訳文や専門語の意味を正確に読みとれる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
ゼミの前に訳読担当者は訳読文をPDFでゼミ内に配布する。そしてプロトコル（前回のまとめ）担当者は前回の復習用レジュメをゼミ内に配布する。その後にゼミ本番では次のように進行する。
（1）最初に前回ゼミのプロトコル担当者の発表があり、これについての質疑応答をする。
（2）テキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
（3）テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
（4）ドイツ語の初学者も、プロトコルやレポート発表などで積極的に参加する。
（5）英訳書による参加者は、英語テキストの訳読をして、ゼミではドイツ語原文を参照しつつ、テキストの意味を考える。
（6）初めてカントのテキストに挑戦する人も、初歩的な質問をして基本理解をゼミ内で共有する。
（7）対面での参加も可能である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	・「純粋理性だけが無条件的に実践的であること」	テキスト：18 － 19頁
第2回	・『実践理性批判』の区分	テキスト：19 － 20頁
第3回	・原則／格率／法則	テキスト：23 － 24頁
第4回	・命法	テキスト：24 － 25頁
第5回	・定言命法	テキスト：25 － 26頁
第6回	・快／不快	テキスト：26 － 27頁
第7回	・「自愛もしくは自分自身の幸福」	テキスト：27 － 28頁
第8回	・「快の感情」	テキスト：28 － 29頁
第9回	・「いっそうすぐれた喜びもしくは愉悦」	テキスト：29 － 30頁
第10回	・エピクロス	テキスト：30 － 31頁
第11回	・上級／下級認識能力	テキスト：31 － 32頁
第12回	・幸福の概念	テキスト：32 － 33頁
第13回	・自愛の原理	テキスト：33 － 34頁
第14回	・レポート発表会	『実践理性批判』「分析論」の「§３」までに関して

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備学習（2時間）：訳読担当者は翻訳文およびコメントを作成して共有する。各人は予め当該テキストを読んで内容を把握しておく。
復習・宿題（2時間）：プロトコル担当者は復習用レジュメを作成する。各人は事前に共有された復習用レジュメおよびコメントを読んで、自分の理解を確認する。

【テキスト（教科書）】
I. Kant, Kritik der praktischen Vernunft, Felix Meiner Verlag.
（翻訳書）『カント全集』岩波書店版・第７巻、理想社版・第七巻など。単行本では、以文社版、岩波文庫版、光文社古典新訳文庫版、作品社版など。（英訳：ケンブリッジ版など）。

【参考書】
御子柴善之『カント　実践理性批判』（角川選書）
高峯一愚『カント実践理性批判解説』（論創社）
Ｌ・Ｗ・ベック『カント『実践理性批判』の注解』（藤田昇吾訳、新地書房）
Ｈ・Ｊ・ペイトン『定言命法』（杉田聡訳、行路社）
その他の関連する入門書や解説書や研究文献は、ゼミで適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
（1）プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察され
る到達目標達成度
（2）レポート課題で確認される到達目標達成度
（1）を70 %、（2）を30 %で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
言葉を明瞭に発音するように心がける。
定刻どおりに終わるように心がける。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン接続のためのノートパソコン、またはタブレットやスマホ

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
西洋近代の哲学・倫理学
＜研究テーマ＞
カント哲学
＜主要研究業績＞
・「カントの永遠平和論――― 政治と宗教の観点から」『カントと二一世紀の平和論』日本カント協会編、人文書院、2025年。
・「カントとケーニヒスベルク大学――アリストテレス主義の観点で――」『日本カント研究　23』、2022年。
・「カントにおける「人間性の権利」概念について――カントの『法論』は批判哲学に基づくのか――」『法政大学文学部紀要』第80号、2020年。
＜その他＞
▶《三木清研究》「三木清の思想形成とハイデッガーの1924年夏学期講義――― 「ロゴスとパトスの弁証法的統一」への道――― 」『法政大学文学部紀要』第92号、2026年。
▶《翻訳：共訳》マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017年。
▶《欧文》Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.

【Outline (in English)】
【Course outline】

We read Kant's *Critique of Practical Reason*. The Critique of Practical Reason is a work that investigates the principles underlying Kant's entire practical philosophy. The first part of the Critique of Practical Reason, the "Analytics," discusses Kant's moral principle, the categorical imperative, and the problem of justifying freedom. By examining these discussions, we consider the depth and breadth of Kant's moral theory. In the fall semester, we will begin with the "Introduction" following the 'Preface' and proceed until "§3" of the "Analysis."
【Learning Objectives】
Develop the following attitudes, skills and knowledge in relation to the source texts
(1) Return to the original texts to discover the thinkers' ideas themselves.
(2) Deepen our understanding of the subject by discovering, investigating and considering questions.
(3) Form more convincing opinions by considering the opinions of others.
(4) Compare and contrast ideas uncovered from the text with other ideas.
(5) Convey content clearly and accurately in reports.
(6) Participants who translate German texts will be able to read and understand the original German texts accurately.
(7) Participants who mainly use Japanese, English or other translations will be able to realize the meaning of translated sentences and technical terms accurately.
【Learning activities outside of classroom】
Preparatory study (2 hours): The translators will prepare and share their translated text and comments. Each person reads the assigned text beforehand to grasp its content.
Review and homework (2 hours): Protocol staff will prepare a summary for review and comments shared in advance of the seminar to check understanding. Each person reads the shared summary and comments beforehand to confirm their understanding.
【Grading Criteria / Policy】
(1) Achievement of learning objectives observed through protocol presentations (previous session summary), text comprehension, and Q&A
(2) Achievement of learning objectives assessed through report assignments
(1) accounts for 70% of the grade, and (2) accounts for 30% of the grade.

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

中世哲学研究Ⅰ－１

内山　真莉子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
春学期はトマス・アクィナスの『神学大全』の中から、前年度に引き続き〈法〉について扱っている箇所を抜粋し精読する。トマスにおいて〈法〉は、「永遠法」・「自然法」・「人定法」・「神法（旧法・新法）」と区分けされているが、その中でも特に今学期は「自然法」に焦点を当てる。我々人間の理性は、世界の秩序を構成する神の理念とどのように関わり、断絶しているのかについて考察を深めたい。ラテン語原典または英語訳を使用する。

【到達目標】
・『神学大全』の正確な訳読・読解ができる。
・テキストの内容について理解し、自分なりの言葉で論理的に議論を再構成できる。
・他者との議論の中で内容理解を深め、自分自身の問題意識も深めることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
①全受講者にそれぞれ担当箇所を割り当て、その箇所について担当者は事前に日本語訳を作成する。
②担当箇所を音読し、日本語訳を述べ、内容について説明する。
③各箇所について全員で質疑、議論を行い、内容についての理解を深める。
④教員が質疑、議論の内容について適宜フィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキストの説明と今後の進め方について
第2回	第2-1部第94問題第1項①	「自然法は習慣か」序文・異論・反対異論
第3回	第2-1部第94問題第1項②	「自然法は習慣か」主文
第4回	第2-1部第94問題第1項③	「自然法は習慣か」異論回答
第5回	第2-1部第94問題第2項①	「自然法は多数の規定を含むか」異論・反対異論
第6回	第2-1部第94問題第2項②	「自然法は多数の規定を含むか」主文
第7回	第2-1部第94問題第2項③	「自然法は多数の規定を含むか」異論回答
第8回	第2-1部第94問題第3項①	「徳は全て自然法に属するか」異論・反対異論
第9回	第2-1部第94問題第3項②	「徳は全て自然法に属するか」主文
第10回	第2-1部第94問題第3項③	「徳は全て自然法に属するか」異論回答
第11回	第2-1部第94問題第4項①	「自然法は万人において一つか」異論・反対異論
第12回	第2-1部第94問題第4項②	「自然法は万人において一つか」主文
第13回	第2-1部第94問題第4項③	「自然法は万人において一つか」異論回答
第14回	修士論文進捗報告	研究の進捗報告を受けて、内容について議論・検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に各授業回の該当箇所を熟読し、内容理解に努める。
訳読担当者は該当箇所の日本語訳を作成し、内容について説明できるようにする。
本授業の準備学習・復習は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
Thomas Aquinas, Summa Theologiae, ed. Commissio Leonina, Opera Omnia, vol. IV-XII, Rome, 1888-1906.
※授業内での使用箇所についてコピーを配布する予定。

【参考書】
〈英語訳〉
Summa Theologiae: Latin text and English translation, introductions, notes, appendices, and glossaries St Thomas Aquinas, trans.by Timothy McDermott O.P., Cambridge University Press; Reissue, 2008.
〈邦訳〉
トマス・アクィナス『神学大全』高田三郎・日下昭夫・大鹿一正ほか訳、創文社、1960年。
その他、授業内で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
上記の到達目標に即して、平常点にて評価する。
①訳読担当者としての発表内容：70％
②質疑応答・議論への参加：30％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞西洋中世哲学（特にトマス・アクィナス）
＜研究テーマ＞トマス・アクィナスにおける類比思想と存在について
＜主要研究業績＞「〈シンポジウム提題〉トマス・アクィナス『形而上学注解』とアナロギア」（中世哲学会『中世思想研究』第65号、2023）、「キリストとソクラテスは一義的に「人間」と言われるか」（京大中世哲学研究会『中世哲学研究』第40号、2021）、「類概念の名称は類比的に用いられ得るのか ―トマス・アクィナスにおける「物体」という名称に関する考察―」（日本哲学会『哲學』第72号、2021）など。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In the spring semester, we will read excerpts from Thomas Aquinas's "Summa Theologiae" in detail, focusing on his discussions of law, continuing from the previous year. For Aquinas, law is divided into "eternal law," "natural law," "human law," and "divine law (old law and new law)," and this semester we will focus in particular on "natural law." We would like to consider in depth how our human reason is related to and disconnected from the divine ideal that constitutes the order of the world.
【Learning Objectives】
This course aims to develop translation and reading accuracy, logical reconstruction of arguments, and self-awareness through discussions. Doctoral students aim to gain a deeper understanding of medieval philosophy, develop their own views, and master the relevant terminology. Students may use either the Latin original or the English translation for their studies.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to read the relevant chapter from the textbook before each class meeting. The person in charge will provide a Japanese translation and explain the content. You are required to dedicate at least four hours to studying for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Contents of presentation as person in charge: 70%, in-class contribution: 30%

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

中世哲学研究Ⅰ－２

内山　真莉子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
秋学期はトマス・アクィナスの『神学大全』の中から、自然法に関する箇所を抜粋し精読する。自然法は人間理性にとって理解可能なものであり、それゆえ全ての人が遵守できる法なのだが、それは「どこから」、「どのように」下されるのかが問題となる。この箇所の精読を通じて、「人定法」についての考察を深めることも目指す。ラテン語原典または英語訳を使用する。

【到達目標】
・『神学大全』の正確な訳読・読解ができる。
・テキストの内容について理解し、自分なりの言葉で論理的に議論を再構成できる。
・他者との議論の中で内容理解を深め、自分自身の問題意識も深めることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
①全受講者にそれぞれ担当箇所を割り当て、その箇所について担当者は事前に日本語訳を作成する。
②担当箇所を音読し、日本語訳を述べ、内容について説明する。
③各箇所について全員で質疑、議論を行い、内容についての理解を深める。
④教員が質疑、議論の内容について適宜フィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキストの説明と今後の進め方について
第2回	第2-1部第94問題第5項①	「自然法は改変可能か」異論・反対異論
第3回	第2-1部第94問題第5項②	「自然法は改変可能か」主文
第4回	第2-1部第94問題第5項③	「自然法は改変可能か」異論回答
第5回	第2-1部第94問題第6項①	「自然法は人の心から消えるか」異論・反対異論
第6回	第2-1部第94問題第6項②	「自然法は人の心から消えるか」主文
第7回	第2-1部第94問題第6項③	「自然法は人の心から消えるか」異論回答
第8回	第2-1部第95問題第1項①	「人定法は有益か」異論・反対異論
第9回	第2-1部第95問題第1項②	「人定法は有益か」主文
第10回	第2-1部第95問題第1項③	「人定法は有益か」異論回答
第11回	第2-1部第95問題第2項①	「人定法は全て自然法に由来するか」異論と反対異論
第12回	第2-1部第95問題第2項②	「人定法は全て自然法に由来するか」主文
第13回	第2-1部第95問題第2項③	「人定法は全て自然法に由来するか」異論回答
第14回	修士論文進捗報告	研究の進捗報告を受けて、内容について議論・検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に各授業回の該当箇所を熟読し、内容理解に努める。
訳読担当者は該当箇所の日本語訳を作成し、内容について説明できるようにする。
本授業の準備学習・復習は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
Thomas Aquinas, Summa Theologiae, ed. Commissio Leonina, Opera Omnia, vol. IV-XII, Rome, 1888-1906.
※授業内での使用箇所についてコピーを配布する予定。

【参考書】
〈英語訳〉
Summa Theologiae: Latin text and English translation, introductions, notes, appendices, and glossaries St Thomas Aquinas, trans.by Timothy McDermott O.P., Cambridge University Press; Reissue, 2008.
〈邦訳〉
トマス・アクィナス『神学大全』高田三郎・日下昭夫・大鹿一正ほか訳、創文社、1960年。
その他、授業内で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
上記の到達目標に即して、平常点にて評価する。
①訳読担当者としての発表内容：70％
②質疑応答・議論への参加：30％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞西洋中世哲学（特にトマス・アクィナス）
＜研究テーマ＞トマス・アクィナスにおける類比思想と存在について
＜主要研究業績＞「〈シンポジウム提題〉トマス・アクィナス『形而上学注解』とアナロギア」（中世哲学会『中世思想研究』第65号、2023）、「キリストとソクラテスは一義的に「人間」と言われるか」（京大中世哲学研究会『中世哲学研究』第40号、2021）、「類概念の名称は類比的に用いられ得るのか ―トマス・アクィナスにおける「物体」という名称に関する考察―」（日本哲学会『哲學』第72号、2021）など。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In the fall semester, students will continue to examine passages on "natural law" taken from Thomas Aquinas's “Summa Theologiae.” Natural law is understandable to human reason, and therefore a law that everyone can abide by, but the question is "where does it come from" and "how" it is decreed. By studying these passages, students will also enhance their understanding of the "human law."
【Learning Objectives】
This course aims to develop translation and reading accuracy, logical reconstruction of arguments, and self-awareness through discussions. Doctoral students aim to gain a deeper understanding of medieval philosophy, develop their own views, and master the relevant terminology. Students may use either the Latin original or the English translation for their studies.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to read the relevant chapter from the textbook before each class meeting. The person in charge will provide a Japanese translation and explain the content. You are required to dedicate at least four hours to studying for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Contents of presentation as person in charge: 70%, in-class contribution: 30%

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近代ドイツ哲学史研究Ⅰ－１

吉田　敬介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業では、テオドール・W・アドルノ『否定弁証法』における「形而上学についての省察」を講読します。
　哲学的主著『否定弁証法』（*Negative Dialektik*, 1966）の最終部におかれた「形而上学についての省察」（"Meditationen zur Metaphysik"）において、アドルノは、「アウシュヴィッツ以後」という具体的状況に定位しながら、形而上学をめぐる哲学的思考を展開しています。その際にアドルノは、カント、ヘーゲル、ショーペンハウアー、キルケゴール、ニーチェ、ベンヤミン、ハイデッガーらの思想と対峙しながら、「形而上学的経験」の概念とともに、世俗化した世界においてなおも既存の現実からの超越に参与する可能性について、考察しています。
　授業では、上記テクストの精読を通して、「形而上学的経験」をめぐるアドルノの思想を正確に理解するとともに、その思想史・哲学史上の意義を考察することを試みます。さらに、そこから読み取れる思想モチーフについて、現代のコンテクストを見据えつつ、批判的に議論することも目指されます。春学期には、上記テクストの前半から中盤にかけてのドイツ語原文を講読し、議論をする予定です（英語訳での参加も可能です）。

【到達目標】
（A）『否定弁証法』の「形而上学についての省察」におけるアドルノの思想を、テクストに即して精確に理解できる。
（B）アドルノの思想の思想史・哲学史的意義を考察できる。
（C）理解・考察したことを、現代のコンテクストから批判的に再検討できる。
※修士課程と博士後期課程では、それぞれ相応の学修と成果が求められます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　はじめにアドルノの生涯や思想、著作について導入をした後、『否定弁証法』における「形而上学についての省察」のドイツ語原文を輪読形式で講読します（英語訳での参加も可能です）。
　講読に際しては、受講者全員が事前にテクストを十分に予習していることを前提とします。予習した内容に基づき、テクストを精確に訳読し、意味内容を厳密に確認した上で、疑問点や議論したい点を発言してもらいます。また各回に記録担当者を設定します。該当者には、担当する回の講読内容やなされた議論を記録し、レジュメにまとめて次回の冒頭に発表してもらいます。その他、進捗や要望に応じて、受講者による研究発表を行ってもらう可能性があります。発言や発表に対するフィードバックは、授業の中で適宜行うようにします。受講者には、積極的な参加が望まれます。
　なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、学習支援システムを確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション　アドルノ「形而上学についての省察」の導入	授業の進め方の確認　アドルノの生涯や思想、講読テクストの背景や主要論点の導入
第2回	「形而上学についての省察」講読（1）	354-355頁の精読、検討
第3回	「形而上学についての省察」講読（2）	355-356頁の精読、検討
第4回	「形而上学についての省察」講読（3）	356-357頁の精読、検討
第5回	「形而上学についての省察」講読（4）	357-358頁の精読、検討
第6回	「形而上学についての省察」講読（5）	358-359頁の精読、検討
第7回	「形而上学についての省察」講読（6）	359-361頁の精読、検討
第8回	「形而上学についての省察」講読（7）	361-363頁の精読、検討
第9回	「形而上学についての省察」講読（8）	363-366頁の精読、検討
第10回	「形而上学についての省察」講読（9）	366-368頁の精読、検討
第11回	「形而上学についての省察」講読（10）	369-371頁の精読、検討
第12回	「形而上学についての省察」講読（11）	371-372頁の精読、検討
第13回	「形而上学についての省察」講読（12）	372-374頁の精読、検討
第14回	春学期のまとめ	春学期の講読内容の整理・検討　議論と展望

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備としては、訳読ができるよう、わからない単語・熟語に関して辞書を丁寧に引き、欧文テクストを予習しておく必要があります。また復習としては、辞書や専門の事典を参照しつつ、訳読内容や授業で議論された内容を整理しておくことが望まれます。

【テキスト（教科書）】
・Th. W. Adorno, *Negative Dialektik*, in: *Gesammelte Schriften*, Suhrkamp, Bd. 6, S. 7-412（ドイツ語原文）
※テクストの詳細や入手方法に関しては、第1回の授業で説明をするので、準備はそれからで構いません。
※英語訳（*Negative Dialectics*）についての詳細も、第1回の授業時にお知らせします。

【参考書】
・テオドール・W・アドルノ『否定弁証法』木田元／徳永恂／渡辺祐邦／三島憲一／須田朗／宮武昭（訳）、作品社
・アドルノ『否定弁証法講義』細見和之／河原理／高安啓介（訳）、作品社
・麻生博之「アドルノ」（『哲学の歴史 第10巻 危機の時代の哲学【20世紀I】』中央公論新社、588-620頁所収）
その他の参考文献は、授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
成績配分は、平常点（講読時のテクスト理解、議論への参加、その他の授業への取り組みなどの総合評価）60％、発表への取り組み40％です。成績評価に際しては、【到達目標】（A）～（C）を基準とし、その達成度合いを考慮します。

【学生の意見等からの気づき】
・読解のスピードや方法について、受講者の人数やテクスト理解の度合に応じて、柔軟に無理なく進めるよう努めます。
・わかりにくい概念や思想内容、歴史的・思想的背景について、丁寧に説明するよう努めます。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業の場合に必要となるため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】
春学期と秋学期、合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
社会哲学、宗教哲学、美学
＜研究テーマ＞
キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想
＜主要研究業績＞

・「美的経験における「神学の刺」の救出―― 宗教的なものの世俗化としてのアドルノのキルケゴール受容」（論文、『マテリエ』第2号、2025年）〔ドイツ語版："Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen", *Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie*, 2018〕
・「「自然の追想」としての美学―― アドルノとメンケの主体性論からみる批判理論と美学」（論文、『思想』No.1208、2024年）
・「主体性を問うことのアクチュアリティ―― アドルノの批判的キルケゴール受容からの一試論」（論文、『法政哲学』第20号、2024年）
・クリストフ・メンケ『力――美的人間学の根本概念』（共訳、人文書院、2022年）
・「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール」（論文、『社会思想史研究』第45号、2021年）
・「隠された内面性から、外的世界との衝突へ――キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文、『哲学』第72号、2021年）
・「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文、『学習院大学人文科学論集』第22号、2013年）〔ドイツ語版："Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance", *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2015〕

【Outline (in English)】
Course outline: This course deals with Adorno's philosophy on metaphysics in his "Meditations on Metaphysics" from *Negative Dialectics* (1966).
Learning Objectives: The goals of this course are to (A) understand Adorno's philosophy on metaphysics, (B) discuss its significance in the history of philosophy, and (C) examine it in the contemporary context.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (60%), and in-class presentations (40%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近代ドイツ哲学史研究Ⅰ－２

吉田　敬介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業では、テオドール・W・アドルノ『否定弁証法』における「形而上学についての省察」を講読します。
　哲学的主著『否定弁証法』（*Negative Dialektik*, 1966）の最終部におかれた「形而上学についての省察」（"Meditationen zur Metaphysik"）において、アドルノは、「アウシュヴィッツ以後」という具体的状況に定位しながら、形而上学をめぐる哲学的思考を展開しています。その際にアドルノは、カント、ヘーゲル、ショーペンハウアー、キルケゴール、ニーチェ、ベンヤミン、ハイデッガーらの思想と対峙しながら、「形而上学的経験」の概念とともに、世俗化した世界においてなおも既存の現実からの超越に参与する可能性について、考察しています。
　授業では、上記テクストの精読を通して、「形而上学的経験」をめぐるアドルノの思想を正確に理解するとともに、その思想史・哲学史上の意義を考察することを試みます。さらに、そこから読み取れる思想モチーフについて、現代のコンテクストを見据えつつ、批判的に議論することも目指されます。秋学期には、春学期に引き続き、上記テクストの中盤から後半にかけてのドイツ語原文を講読し、議論をする予定です（英語訳での参加も可能です）。

【到達目標】
（A）『否定弁証法』の「形而上学についての省察」におけるアドルノの思想を、テクストに即して精確に理解できる。
（B）アドルノの思想の思想史・哲学史的意義を考察できる。
（C）理解・考察したことを、現代のコンテクストから批判的に再検討できる。
※修士課程と博士後期課程では、それぞれ相応の学修と成果が求められます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　はじめに春学期の講読内容を確認した後、引き続き、『否定弁証法』における「形而上学についての省察」のドイツ語原文を輪読形式で講読します（英語訳での参加も可能です）。
　講読に際しては、受講者全員が事前にテクストを十分に予習していることを前提とします。予習した内容に基づき、テクストを精確に訳読し、意味内容を厳密に確認した上で、疑問点や議論したい点を発言してもらいます。また各回に記録担当者を設定します。該当者には、担当する回の講読内容やなされた議論を記録し、レジュメにまとめて次回の冒頭に発表してもらいます。その他、進捗や要望に応じて、受講者による研究発表を行ってもらう可能性があります。発言や発表に対するフィードバックは、授業の中で適宜行うようにします。受講者には、積極的な参加が望まれます。
　なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、学習支援システムを確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション 春学期の振り返り	授業の進め方の確認 「形而上学についての省察」354-374頁の内容・論点の確認
第2回	「形而上学についての省察」講読（1）	374-376頁の精読、検討
第3回	「形而上学についての省察」講読（2）	376-377頁の精読、検討
第4回	「形而上学についての省察」講読（3）	377-379頁の精読、検討
第5回	「形而上学についての省察」講読（4）	379-381頁の精読、検討
第6回	「形而上学についての省察」講読（5）	381-382頁の精読、検討
第7回	「形而上学についての省察」講読（6）	382-384頁の精読、検討
第8回	「形而上学についての省察」講読（7）	384-386頁の精読、検討
第9回	「形而上学についての省察」講読（8）	386-388頁の精読、検討
第10回	「形而上学についての省察」講読（9）	388-391頁の精読、検討
第11回	「形而上学についての省察」講読（10）	391-394頁の精読、検討
第12回	「形而上学についての省察」講読（11）	394-397頁の精読、検討
第13回	「形而上学についての省察」講読（12）	397-400頁の精読、検討
第14回	秋学期のまとめ	秋学期の講読内容の整理・検討 議論と展望

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備としては、訳読ができるよう、わからない単語・熟語に関して辞書を丁寧に引き、欧文テクストを予習しておく必要があります。また復習としては、辞書や専門の事典を参照しつつ、訳読内容や授業で議論された内容を整理しておくことが望まれます。

【テキスト（教科書）】
・Th. W. Adorno, *Negative Dialektik*, in: *Gesammelte Schriften*, Suhrkamp, Bd. 6, S. 7-412（ドイツ語原文）
※テクストの詳細や入手方法に関しては、第1回の授業で説明をするので、準備はそれからで構いません。
※英語訳（*Negative Dialectics*）についての詳細も、第1回の授業時にお知らせします。

【参考書】
・テオドール・W・アドルノ『否定弁証法』木田元／徳永恂／渡辺祐邦／三島憲一／須田朗／宮武昭（訳）、作品社
・アドルノ『否定弁証法講義』細見和之／河原理／高安啓介（訳）、作品社
・麻生博之「アドルノ」（『哲学の歴史 第10巻 危機の時代の哲学【20世紀I】』中央公論新社、588-620頁所収）
その他の参考文献は、授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
成績配分は、平常点（講読時のテクスト理解、議論への参加、その他の授業への取り組みなどの総合評価）60％、発表への取り組み40％です。成績評価に際しては、【到達目標】（A）～（C）を基準とし、その達成度合いを考慮します。

【学生の意見等からの気づき】
・読解のスピードや方法について、受講者の人数やテクスト理解の度合に応じて、柔軟に無理なく進めるよう努めます。
・わかりにくい概念や思想内容、歴史的・思想的背景について、丁寧に説明するよう努めます。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業の場合に必要となるため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】
春学期と秋学期、合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
社会哲学、宗教哲学、美学
＜研究テーマ＞
キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想
＜主要研究業績＞

・「美的経験における「神学の刺」の救出―― 宗教的なものの世俗化としてのアドルノのキルケゴール受容」（論文、『マテリエ』第2号、2025年）〔ドイツ語版："Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen", *Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie*, 2018〕
・「「自然の追想」としての美学―― アドルノとメンケの主体性論からみる批判理論と美学」（論文、『思想』No.1208、2024年）
・「主体性を問うことのアクチュアリティ―― アドルノの批判的キルケゴール受容からの一試論」（論文、『法政哲学』第20号、2024年）
・クリストフ・メンケ『力――美的人間学の根本概念』（共訳、人文書院、2022年）
・「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール」（論文、『社会思想史研究』第45号、2021年）
・「隠された内面性から、外的世界との衝突へ――キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文、『哲学』第72号、2021年）
・「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文、『学習院大学人文科学論集』第22号、2013年）〔ドイツ語版："Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance", *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2015〕

【Outline (in English)】
Course outline: This course deals with Adorno's philosophy on metaphysics in his "Meditations on Metaphysics" from *Negative Dialectics* (1966).
Learning Objectives: The goals of this course are to (A) understand Adorno's philosophy on metaphysics, (B) discuss its significance in the history of philosophy, and (C) examine it in the contemporary context.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (60%), and in-class presentations (40%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近世西洋哲学研究Ⅰ－１

佐藤　真人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
講読書は以下の候補から受講者と話し合って決めたいと考えています。
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*（ライプニッツ『形而上学叙説』。前年度からの継続ですが、今年度からの参加ももちろん可）。
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*（ライプニッツ『実体の自然本性と連結についての新しい体系』とその他の前期の著述）。
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*（ライプニッツ『人間知性新論』）。
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*（ソルボンヌ大学名誉教授でライプニッツ研究者のミッシェル・フィシャンによる1のGallimard版の序文で、非常に明晰なライプニッツ哲学の解説）。
ライプニッツの壮大な哲学の考察をいずれかの著述の読解によって行います（仏語原典・英訳のいずれで参加しても可）。
ライプニッツのいずれの著述にも表れているのは、デカルト、スピノザやロックら先行の哲学者たちの思想を批判的に超克し、新たな独自の哲学体系を示そうという壮大な意図です。そしていずれの著作にも、ライプニッツが考案した様々な概念や用語によって、数多の思想が不可分に連関しつつ多様な形をとって現れます。いずれかの著述の精読を通じ、ライプニッツ哲学の内実と達成の考察をめざします。

【到達目標】
① ライプニッツ哲学（または研究書）の精確な訳読と読解ができる。
② 内容を精確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
③ テーマや問題点を自ら探し、必要な文献を読んで考察を深め、文章で表すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
以下の手順で進めます。
① 担当者による訳読と、内容の意味、意義や背景等の説明
② 質疑応答や全体での議論（フランス語や和訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	テクストの決定と今後の進め方
第2回	（以下は講読書によって変わります）『形而上学叙説』の場合は第十七項	自然法則について①
第3回	第一七項	自然法則について②
第4回	第一八項	運動量と力の区別について
第5回	第一九項	自然学における目的因について
第6回	第二〇項	自然界における善と美について
第7回	第二一項	自然界における形而上学について
第8回	第二二項	自然界における目的因と作用因の和解について
第9回	第二三項	観念における可能性と必然性について
第10回	第二四項	認識の種類について
第11回	第二五項	明晰な認識と直観について
第12回	第二六項	観念の潜勢と想起について
第13回	第二七項	観念ないし概念の起源について
第14回	第二八項	知覚における神の働きについて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
訳読担当者は、担当箇所についての説明（解釈）を準備する。和訳は予め書いてくるのではなく、原文をその場で読みながら訳すこと。その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。
本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
下記のいずれかを受講者と話し合って決定。
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*, Gallimard, 2004.
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*, GF-Flammarion, 1994.
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, GF-Flammarion, 1993.
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*（上記1の序文）.
和訳はG. W. ライプニッツ『形而上学叙説　他五篇』（佐々木能章訳）、岩波文庫、2025年。
『ライプニッツ著作集８　前期哲学』、工作舎、1990年；2018年。

【参考書】
まずは参考書に頼らず、原典の熟読から始め、内容の精確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書を各自で探すこと（授業内でも参考書については適宜言及します）。
ネット上の哲学辞典としては、「スタンフォード哲学百科事典」を勧めます。
https://plato.stanford.edu/index.html

【成績評価の方法と基準】
発表者としての内容（訳読と説明）25%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート50%（またはレポートを課さない場合、発表内容45%、参加内容55%）の割合で、【到達目標】欄に記載した①～③の達成度合いに応じて評価します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度に応じて、内容の難易度と進展の速さ、読解の内容等を勘案します。

【その他の重要事項】
受講者の関心や講義の進展等により、他の著述を読む可能性もあります。

【担当教員の専門分野等】
デカルトの哲学、フランスと西洋近世の哲学

【研究テーマ】
主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】
「哲学史を知らねばなぜ哲学できないのか ―ジャン＝リュック・マリオンによる『形而上学の終わり』と哲学の革新について」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第30号、2025年）
「神学と人間学の交錯 ―デカルトの愛について 」（法政哲学会、『法政哲学』、第19号、2023年）
「信仰を支える人間的な論拠―デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）
「デカルト形而上学の論証の方法―類比の考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）
「デカルトの『自然の教え』とは何か―ストア派の自然本性概念との対比で―」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）
「無限か広大無辺か―デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）
「デカルトはラムス主義者か―初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）
「『規則論』は断絶した著作か―自然学と神の問題における『規則論』の方法―」（『理想』、第699号、2017年）

« La métaphysique de la « nature » dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第21号、2016年）等。

【Outline (in English)】
The primary reading for the seminar will be decided in consultation with the participants, selected from the following candidates:
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*, Gallimard, 2004.
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*, GF-Flammarion, 1994.
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, GF-Flammarion, 1993.
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*.
Participants may engage with the texts either in French or in English translation. Through close textual analysis, the seminar will examine, either Leibniz's philosophy especially in its contrast with Cartesian philosophy, or Fichant's interpretations on Leibniz's philosophy.
Students are expected by the end of the course (i) to be able to read accurately Leibniz's or Fichant's text, (ii) to understand the content and innovations of Leibniz's philosophy with precision and to be able to explain and discuss them logically, and (iii) to be able to search for problems on one's own, to deepen one's understanding and reflection by referring to the necessary literature, and to formulate arguments.
Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of the presentation of the day are to prepare translations and arguments in question. Required study time is two hours each before and after the class.
The grade will be decided on the following proportion. Presentation: 25%, In-class contribution: 25%, Term-end paper: 50% (if no paper is assigned, Presentation: 45% & In-class contribution: 55%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近世西洋哲学研究Ⅰ－２

佐藤　真人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
以下の候補のうち、春学期に定めたものを講読します。
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*（ライプニッツ『形而上学叙説』。前年度からの継続ですが、今年度からの参加ももちろん可）。
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*（ライプニッツ『実体の自然本性と連結についての新しい体系』とその他の前期の著述）。
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*（ライプニッツ『人間知性新論』）。
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*（ソルボンヌ大学名誉教授でライプニッツ研究者のミッシェル・フィシャンによる1のGallimard版の序文で、非常に明晰なライプニッツ哲学の解説）。
ライプニッツの壮大な哲学の考察をいずれかの著述の読解によって行います（仏語原典・英訳のいずれで参加しても可）。
ライプニッツのいずれの著述にも表れているのは、デカルト、スピノザやロックら先行の哲学者たちの思想を批判的に超克し、新たな独自の哲学体系を示そうという壮大な意図です。そしていずれの著作にも、ライプニッツが考案した様々な概念や用語によって、数多の思想が不可分に連関しつつ多様な形をとって現れます。いずれかの著述の精読を通じ、ライプニッツ哲学の内実と達成の考察をめざします。

【到達目標】
① ライプニッツ哲学（または研究書）の精確な訳読と読解ができる。
② 内容を精確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
③ テーマや問題点を自ら探し、必要な文献を読んで考察を深め、文章で表すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
以下の手順で進めます。
① 担当者による訳読と、内容の意味、意義や背景等の説明
② 質疑応答や全体での議論（フランス語や和訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	第二九項	知覚における観念の役割について
第2回	第三〇項①	われわれの魂における神の作用について
第3回	第三〇項②	われわれの魂の原初的な不完全性と恩寵について①
第4回	第三〇項③	われわれの魂の原初的な不完全性と恩寵について②
第5回	第三一項①	神の選択、信仰、中間的学知について
第6回	第三一項②	神の恩寵と絶対的な決定について
第7回	第三二項	宗教における諸原理の有効性
第8回	第三三項	心身の結合について
第9回	第三四項	精神とそれ以外の諸実体の相違について
第10回	第三五項①	精神の優越性について
第11回	第三五項②	精神の表出と神について
第12回	第三六項①	神の統治と精神について①
第13回	第三六項②	神に統治と精神について②
第14回	第三七項	キリストによる至福について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
訳読担当者は、担当箇所についての説明（解釈）を準備する。和訳は予め書いてくるのではなく、原文をその場で読みながら訳すこと。その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。
本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
下記のいずれかを受講者と話し合って決定。
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*, Gallimard, 2004.
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*, GF-Flammarion, 1994.
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, GF-Flammarion, 1993.
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*（上記1の序文）.
和訳はG. W. ライプニッツ『形而上学叙説　他五篇』（佐々木能章訳）、岩波文庫、2025年。
『ライプニッツ著作集８　前期哲学』、工作舎、1990年；2018年。

【参考書】
まずは参考書に頼らず、原典の熟読から始め、内容の精確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書を各自で探すこと（授業内でも参考書については適宜言及します）。
ネット上の哲学辞典としては、「スタンフォード哲学百科事典」を勧めます。
https://plato.stanford.edu/index.html

【成績評価の方法と基準】
発表者としての内容（訳読と説明）25%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート50%（またはレポートを課さない場合、発表内容45%、参加内容55%）の割合で、【到達目標】欄に記載した①～③の達成度合いに応じて評価します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度に応じて、内容の難易度と進展の速さ、読解の内容等を勘案します。

【その他の重要事項】
受講者の関心や講義の進展等により、他の著述を読む可能性もあります。

【担当教員の専門分野等】
デカルトの哲学、フランスと西洋近世の哲学

【研究テーマ】
主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】
「哲学史を知らねばなぜ哲学できないのか ―ジャン＝リュック・マリオンによる『形而上学の終わり』と哲学の革新について」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第30号、2025年）
「神学と人間学の交錯 ―デカルトの愛について 」（法政哲学会、『法政哲学』、第19号、2023年）
「信仰を支える人間的な論拠―デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）
「デカルト形而上学の論証の方法―類比の考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）
「デカルトの『自然の教え』とは何か―ストア派の自然本性概念との対比で―」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）
「無限か広大無辺か―デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）
「デカルトはラムス主義者か―初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）
「『規則論』は断絶した著作か―自然学と神の問題における『規則論』の方法―」（『理想』、第699号、2017年）

« La métaphysique de la « nature » dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第21号、2016年）等。

【Outline (in English)】
The primary reading for the seminar will be decided in consultation with the participants, selected from the following candidates:
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*, Gallimard, 2004.
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*, GF-Flammarion, 1994.
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, GF-Flammarion, 1993.
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*.
Participants may engage with the texts either in French or in English translation. Through close textual analysis, the seminar will examine, either Leibniz's philosophy especially in its contrast with Cartesian philosophy, or Fichant's interpretations on Leibniz's philosophy.
Students are expected by the end of the course (i) to be able to read accurately Leibniz's or Fichant's text, (ii) to understand the content and innovations of Leibniz's philosophy with precision and to be able to explain and discuss them logically, and (iii) to be able to search for problems on one's own, to deepen one's understanding and reflection by referring to the necessary literature, and to formulate arguments.
Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of the presentation of the day are to prepare translations and arguments in question. Required study time is two hours each before and after the class.
The grade will be decided on the following proportion. Presentation: 25%, In-class contribution: 25%, Term-end paper: 50% (if no paper is assigned, Presentation: 45% & In-class contribution: 55%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近世西洋哲学研究 II － 1

佐藤　真人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
講読書は以下の候補から受講者と話し合って決めたいと考えています。
1] Gilles Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Les Éditions de Minuit, 1968（ドゥルーズ『スピノザと表現の問題』）.
2] Gilles Deleuze, *Spinoza : philosophie pratique*, Les Éditions de Minuit, 1970 ;1981（ドゥルーズ『スピノザ：実践の哲学』。こちらのほうが1よりはわかりやすい）.
3] Gilles Deleuze, *Sur Spinoza : cours novembre 1980 – mars 1981*, Les Éditions de Minuit, 2024（邦訳未出。ドゥルーズによるスピノザ哲学の講義録で、さらにわかりやすい）.
4] J.-L. Marion, *Sur la pensée passive de Descartes*, PUF, 2013（邦訳未出。デカルト研究の世界的権威で当代随一の哲学者であるジャン＝リュック・マリオンによるデカルト情念論の研究書）.
ドゥルーズが「最も真剣に勉強した」と語るスピノザ哲学の解釈、もしくはマリオンによるデカルトの情念論解釈について講読・考察したいと思います（仏語原典・英訳のいずれで参加しても可）。
論証の全体的な幾何学的連鎖と備考の出現による唐突な断絶によって「二重に表現的」（ドゥルーズ）である『エチカ』を中心とするスピノザ哲学のダイナミズムを、ドゥルーズによる第一級の表現によって味読しつつ考察すること、または流麗さと力強さを併せ持つマリオンの解釈によるデカルト情念論を考察することが本講義の狙いです。

【到達目標】
① ドゥルーズないしマリオンのテクストの精確な訳読ができる（フランス語の初学者や英訳書による受講者は、著述内容の精確な理解ができる）。
② スピノザ哲学ないしデカルト情念論の内容と革新性を精確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
③ 問題点を自ら探し、必要な文献を参照して理解と考察を深め、議論を組み立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
以下の手順で進めます。
① 担当者による訳読と、内容の意味、意義や背景等の説明
② 質疑応答や全体での議論（フランス語や和訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	テクストの決定と今後の進め方
第2回	（以下は講読書によって変わります）『スピノザと表現の問題』の場合は第一部第二章①	表現としての属性①
第3回	第一部第二章②	表現としての属性②
第4回	第一部第三章①	属性と神の名称①
第5回	第一部第三章②	属性と神の名称②
第6回	第一部第三章③	属性と神の名称③
第7回	第一部第四章①	絶対者とは何か①
第8回	第一部第四章②	絶対者とは何か②
第9回	第一部第五章①	力とは何か①
第10回	第一部第五章②	力とは何か②
第11回	第一部第五章③	力とは何か③
第12回	第一部第五章④	力とは何か④
第13回	第二部第六章①	並行論における表現①
第14回	第二部第六章②	並行論における表現②

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
訳読担当者は、担当箇所についての説明（解釈）を準備する。和訳は予め書いてくるのではなく、原文をその場で読みながら訳すこと。その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。
本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
下記のいずれかを受講者と話し合って決定。
1] Gilles Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Les Éditions de Minuit, 1968.
2] Gilles Deleuze, *Spinoza : philosophie pratique*, Les Éditions de Minuit, 1970 ;1981.
3] Gilles Deleuze, *Sur Spinoza : cours novembre 1980 – mars 1981*, Les Éditions de Minuit, 2024.
4] J.-L. Marion, *Sur la pensée passive de Descartes*, PUF, 2013.

【参考書】
まずは参考書に頼らず、原典（一次文献）の熟読から始め、内容の精確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書（二次文献）を各自で探すこと（授業でも参考書については適宜言及します）。
ネット上の哲学辞典としては「スタンフォード哲学百科事典」がお勧め。
https://plato.stanford.edu/index.html

【成績評価の方法と基準】
発表者としての内容（訳読と説明）25%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート50%（またはレポートを課さない場合、発表内容45%、参加内容55%）の割合で、【到達目標】欄に記載した①～③の達成度合いに応じて評価します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度に応じて、内容の難易度と進展の速さを勘案します。

【その他の重要事項】
受講者の関心や進展等に応じ、他の著述を読む可能性もあります。また、読了することより、受講者の丁寧な読解と議論を重視したいので、年度中に読了しない可能性もあります。

【担当教員の専門分野等】
デカルトの哲学、フランスと西洋近世の哲学

【研究テーマ】
主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】
「哲学史を知らねばなぜ哲学できないのか ―ジャン＝リュック・マリオンによる『形而上学の終わり』と哲学の革新について」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第30号、2025年）
「神学と人間学の交錯 ―デカルトの愛について 」（法政哲学会、『法政哲学』、第19号、2023年）
「信仰を支える人間的な論拠―デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）
「デカルト形而上学の論証の方法―類比の考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）
「デカルトの『自然の教え』とは何か―ストア派の自然本性概念との対比で―」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）
「無限か広大無辺か―デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）
「デカルトはラムス主義者か―初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）

「『規則論』は断絶した著作か―自然学と神の問題における『規則論』の方法―」（『理想』、第699号、2017年）
« La métaphysique de la « nature » dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第21号、2016年）等。

【Outline (in English)】
The primary reading for the seminar will be decided in consultation with the participants, selected from the following candidates:
1] Gilles Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Les Éditions de Minuit, 1968 (a continuation from the previous academic year; new participants are of course welcome).
2] Gilles Deleuze, *Spinoza : philosophie pratique*, Les Éditions de Minuit, 1970 ;1981.
3] Gilles Deleuze, Sur Spinoza : cours novembre 1980 – mars 1981, Les Éditions de Minuit, 2024.
4] J.-L. Marion, *Sur la pensée passive de Descartes*, PUF, 2013.
Participants may engage with the texts either in French or in English translation. Through close textual analysis, the seminar will examine, either Deleuze's interpretations on Spinoza's philosophy in its contrast with Cartesian philosophy, or Marion's interpretations on Descartes' passions of the soul.
Students are expected by the end of the course (i) to be able to read accurately Deleuze's or Marion's text, (ii) to understand the content and innovations of Spinoza's philosophy or Descartes' philosophy with precision and to be able to explain and discuss them logically, and (iii) to be able to search for problems on one's own, to deepen one's understanding and reflection by referring to the necessary literature, and to formulate arguments.
Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of the presentation of the day are to prepare translations and arguments in question. Required study time is two hours each before and after the class.
The grade will be decided on the following proportion. Presentation: 25%, In-class contribution: 25%, Term-end paper: 50% (if no paper is assigned, Presentation: 45% & In-class contribution: 55%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近世西洋哲学研究 II － 2

佐藤　真人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
以下の候補のうち、春学期に定めたものを講読します。
1] Gilles Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Les Éditions de Minuit, 1968（ドゥルーズ『スピノザと表現の問題』）.
2] Gilles Deleuze, *Spinoza : philosophie pratique*, Les Éditions de Minuit, 1970 ;1981（ドゥルーズ『スピノザ：実践の哲学』。こちらのほうが1よりはわかりやすい）.
3] Gilles Deleuze, *Sur Spinoza : cours novembre 1980 – mars 1981*, Les Éditions de Minuit, 2024（邦訳未出。ドゥルーズによるスピノザ哲学の講義録で、さらにわかりやすい）.
4] J.-L. Marion, *Sur la pensée passive de Descartes*, PUF, 2013（邦訳未出。デカルト研究の世界的権威で当代随一の哲学者であるジャン＝リュック・マリオンによるデカルト情念論の研究書）.
ドゥルーズが「最も真剣に勉強した」と語るスピノザ哲学の解釈、もしくはマリオンによるデカルトの情念論解釈について講読・考察したいと思います（仏語原典・英訳のいずれで参加しても可）。
論証の全体的な幾何学的連鎖と備考の出現による唐突な断絶によって「二重に表現的」（ドゥルーズ）である『エチカ』を中心とするスピノザ哲学のダイナミズムを、ドゥルーズによる第一級の表現によって味読しつつ考察すること、または流麗さと力強さを併せ持つマリオンの解釈によるデカルト情念論を考察することが本講義の狙いです。

【到達目標】
① ドゥルーズないしマリオンのテクストの精確な訳読ができる（フランス語の初学者や英訳書による受講者は、著述内容の精確な理解ができる）。
② スピノザ哲学ないしデカルト情念論の内容と革新性を精確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
③ 問題点を自ら探し、必要な文献を参照して理解と考察を深め、議論を組み立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
以下の手順で進めます。
① 担当者による訳読と、内容の意味、意義や背景等の説明
② 質疑応答や全体での議論（フランス語や和訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	第二部第七章①	二つの力と神の観念①
第2回	第二部第七章②	二つの力と神の観念②
第3回	第二部第八章①	表現と観念①
第4回	第二部第八章②	表現と観念②
第5回	第二部第九章①	非十全性について①
第6回	第二部第九章②	非十全性について②
第7回	第二部第一〇章①	デカルトに抗するスピノザ①
第8回	第二部第一〇章②	デカルトに抗するスピノザ②
第9回	第二部第一〇章③	デカルトに抗するスピノザ③
第10回	第二部第一一章①	表現の内在とその歴史的内容について①
第11回	第二部第一一章②	表現の内在とその歴史的内容について②
第12回	第二部第一一章③	表現の内在とその歴史的内容について③
第13回	第二部第一一章④	表現の内在とその歴史的内容について④
第14回	第二部第一一章⑤	表現の内在とその歴史的内容について⑤

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
訳読担当者は、担当箇所についての説明（解釈）を準備する。和訳は予め書いてくるのではなく、原文をその場で読みながら訳すこと。その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。
本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
下記のいずれかを受講者と話し合って決定。
1] Gilles Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Les Éditions de Minuit, 1968.
2] Gilles Deleuze, *Spinoza : philosophie pratique*, Les Éditions de Minuit, 1970 ;1981.
3] Gilles Deleuze, *Sur Spinoza : cours novembre 1980 – mars 1981*, Les Éditions de Minuit, 2024.
4] J.-L. Marion, *Sur la pensée passive de Descartes*, PUF, 2013.

【参考書】
まずは参考書に頼らず、原典（一次文献）の熟読から始め、内容の精確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書（二次文献）を各自で探すこと（授業でも参考書については適宜言及します）。
ネット上の哲学辞典としては「スタンフォード哲学百科事典」がお勧め。
https://plato.stanford.edu/index.html

【成績評価の方法と基準】
発表者としての内容（訳読と説明）25%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート50%（またはレポートを課さない場合、発表内容45%、参加内容55%）の割合で、【到達目標】欄に記載した①～③の達成度合いに応じて評価します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度に応じて、内容の難易度と進展の速さを勘案します。

【その他の重要事項】
受講者の関心や進展等に応じ、他の著述を読む可能性もあります。また、読了することより、受講者の丁寧な読解と議論を重視したいので、年度中に読了しない可能性もあります。

【担当教員の専門分野等】
デカルトの哲学、フランスと西洋近世の哲学

【研究テーマ】
主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】
「哲学史を知らねばなぜ哲学できないのか ―ジャン＝リュック・マリオンによる『形而上学の終わり』と哲学の革新について」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第30号、2025年）
「神学と人間学の交錯 ―デカルトの愛について 」（法政哲学会、『法政哲学』、第19号、2023年）
「信仰を支える人間的な論拠―デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）
「デカルト形而上学の論証の方法―類比の考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）
「デカルトの『自然の教え』とは何か―ストア派の自然本性概念との対比で―」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）
「無限か広大無辺か―デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）
「デカルトはラムス主義者か―初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）
「『規則論』は断絶した著作か―自然学と神の問題における『規則論』の方法―」（『理想』、第699号、2017年）

« La métaphysique de la « nature » dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第21号、2016年）等。

【Outline (in English)】

The primary reading for the seminar will be decided in consultation with the participants, selected from the following candidates:

1] Gilles Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Les Éditions de Minuit, 1968 (a continuation from the previous academic year; new participants are of course welcome).

2] Gilles Deleuze, *Spinoza : philosophie pratique*, Les Éditions de Minuit, 1970 ;1981.

3] Gilles Deleuze, Sur Spinoza : cours novembre 1980 – mars 1981, Les Éditions de Minuit, 2024.

4] J.-L. Marion, *Sur la pensée passive de Descartes*, PUF, 2013.

Participants may engage with the texts either in French or in English translation. Through close textual analysis, the seminar will examine, either Deleuze's interpretations on Spinoza's philosophy in its contrast with Cartesian philosophy, or Marion's interpretations on Descartes' passions of the soul.

Students are expected by the end of the course (i) to be able to read accurately Deleuze's or Marion's text, (ii) to understand the content and innovations of Spinoza's philosophy or Descartes' philosophy with precision and to be able to explain and discuss them logically, and (iii) to be able to search for problems on one's own, to deepen one's understanding and reflection by referring to the necessary literature, and to formulate arguments.

Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of the presentation of the day are to prepare translations and arguments in question. Required study time is two hours each before and after the class.

The grade will be decided on the following proportion. Presentation: 25%, In-class contribution: 25%, Term-end paper: 50% (if no paper is assigned, Presentation: 45% & In-class contribution: 55%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近代西洋哲学研究Ⅰ－１

松井　久

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アンリ・ベルクソン最後の主著『道徳と宗教の二つの源泉』をフランス語で読む。テクストを批判的に読みながら、個人と社会の問題、哲学と科学の問題を深めることが目的である。

【到達目標】
哲学の古典を原語で正確に理解できるようになる。ベルクソンの議論を哲学史・科学史の文脈の中で理解できるようになる。ベルクソンのテクストの検討から出発して、社会と個人の問題に新しいアプローチができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、前回までの内容等、受講者からの問題提起、指摘から出発して議論したあと、一文ずつ訳しながらテキストのフランス語を検討し、内容を議論する。進度は、一回につき、1〜2ページくらいのペース。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方の紹介と自己紹介
第2回	第2章　静的宗教　作話機能（1）	111ページMais, justementで始まる6段落の訳読、内容の検討
第3回	作話機能（2）	113ページIl est vraiで始まる7段落の訳読、内容の検討
第4回	作話と生	115ページTel est en effetで始まる8段落の訳読、内容の検討
第5回	生のはずみの意義（1）	115ページRevenons donc surで始まる9段落の訳読、内容の検討
第6回	生のはずみの意義（2）	9段落の訳読、内容の検討の続き。117ページMaintenant, ces directionsから
第7回	生のはずみの意義（3）	9段落の訳読、内容の検討の続き。118ページMaintenant, ne peut-onから
第8回	生のはずみの意義（4）	120ページAinsi envisagéeで始まる10段落、11段落の訳読、内容の検討
第9回	生のはずみの意義（5）	121ページPour commencerで始まる12段落の訳読、内容の検討
第10回	生のはずみの意義（6）	122ページNous ne reviendrons pas surで始まる13段落の訳読、内容の検討
第11回	生のはずみの意義（7）	123ページEn étudiant alorsで始まる14段落の訳読、内容の検討
第12回	作話の社会的役割（1）	124ページParmi les observationsで始まる15段落の訳読、内容の検討
第13回	作話の社会的役割（2）	125ページImaginons alorsで始まる16段落の訳読、内容の検討
第14回	作話の社会的役割（3）	127ページMais nous n'obtenons ainsiで始まる17段落の訳読、内容の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
テキストを読む。わからない単語は調べ、すべて文法的に説明できるようにする。毎回、内容的に、明確な問題提起を行えるようにする。

【テキスト（教科書）】
Bergson, Henri, Les deux sources de la morale et de la religion (1932), l'édition critique, Paris, PUF, 2013.

【参考書】
授業中に適宜指示する。
翻訳は
『道徳と宗教の二つの源泉』（ちくま学芸文庫）合田正人、小野浩太郎訳、筑摩書房、2015年。
『道徳と宗教の二つの源泉』全2巻（中公クラシックス）森口美都男訳、中央公論新社、2003年。

【成績評価の方法と基準】
授業での訳読によってフランス語の習熟度を評価し（50％）と議論への参加と学期末のレポートでベルクソン哲学への理解度を評価（50％）する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞生物学の哲学、19世紀哲学
＜研究テーマ＞生物学における個体性、環境概念の歴史的考察
＜主要研究業績＞
« L'individualité biologique chez Bergson », Implications philosophiques, Bergson ou la science (Ebook), 2013, p. 8-26.
« La "métaphysique positive" de Bergson et la pensée positive en France au 19e siècle », Tetsugaku : International Journal of the Philosophical Association of Japan, vol. 1, 2017, p. 58-72.
« Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu », フランス哲学・思想研究22号, 2017, p. 231-241.

【Outline (in English)】
(Course outline) This seminar analyzes Bergson's Les deux sources de la morale et de la religion.
(Learning Objectives) The goals are to read the original philosophical text precisely, to propose a new approach to the relations between the individual and the society.
(Learning activities outside of classroom) Before and after each class meeting, participants will be expected to spend two hours to understand the text.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be based on in-class contribution(50%) and term-end paper (50%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近代西洋哲学研究Ⅰ－2

松井　久

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アンリ・ベルクソン最後の主著『道徳と宗教の二つの源泉』をフランス語で読む。テクストを批判的に読みながら、個人と社会の問題、哲学と科学の問題を深めることが目的である。

【到達目標】
哲学の古典を原語で正確に理解できるようになる。ベルクソンの議論を哲学史・科学史の文脈の中で理解できるようになる。ベルクソンのテクストの検討から出発して、社会と個人の問題に新しいアプローチができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、前回までの内容等、受講者からの問題提起、指摘から出発して議論したあと、一文ずつ訳しながらテキストのフランス語を検討し、内容を議論する。進度は、一回につき、1〜2ページくらいのペース。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	作話の社会的役割（4）	127ページDans des sociétésで始まる18段落の訳読、内容の検討
第2回	作話の社会的役割（5）	128ページD'autre partで始まる19段落の訳読、内容の検討
第3回	断片的人格	129ページEnfin nous parlionsで始まる20段落の訳読、内容の検討
第4回	組織を解体させないようにする（1）	20段落の訳読、内容の検討の続き。131ページQuand nous lisonsから。
第5回	組織を解体させないようにする（2）	20段落の訳読、内容の検討の続き。133ページMais il y a lieu から
第6回	落ち込ませないようにする	134ページNous venons d'indiquerで始まる21段落と22段落の訳読、内容の検討
第7回	有益な作話の一般的な主題	137ページÀ cette réactionで始まる23段落と24段落の訳読、内容の検討
第8回	非合理的なものの増殖（1）	140ページNous ne définirons pas encore で始まる25段落の訳読、内容の検討
第9回	非合理的なものの増殖（2）	141ページL'influence exercée ne seraitで始まる26段落の訳読、内容の検討
第10回	予見不可能なものへの保険（1）	144ページNous venons de déterminerで始まる27段落の訳読、内容の検討
第11回	予見不可能なものへの保険（2）	27段落の訳読、内容の検討の続き。145ページMais il est de l'essence d'un pareil idéalから
第12回	成功への意志（1）	146ページChacun de nous peut faireで始まる28段落と29段落の訳読、内容の検討
第13回	成功への意志（2）	147ページMais remarquezで始まる30段落の訳読、内容の検討
第14回	成功への意志（3）	148ページL'activité humaineで始まる31段落の訳読、内容の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
テキストを読む。わからない単語は調べ、すべて文法的に説明できるようにする。毎回、内容的に、明確な問題提起を行えるようにする。

【テキスト（教科書）】
Bergson, Henri, Les deux sources de la morale et de la religion (1932), l'édition critique, Paris, PUF, 2013.

【参考書】
授業中に適宜指示する。
翻訳は
『道徳と宗教の二つの源泉』（ちくま学芸文庫）合田正人、小野浩太郎訳、筑摩書房、2015年。
『道徳と宗教の二つの源泉』全2巻（中公クラシックス）森口美都男訳、中央公論新社、2003年。

【成績評価の方法と基準】
授業での訳読によってフランス語の習熟度を評価し（50％）と議論への参加と学期末のレポートでベルクソン哲学への理解度を評価（50％）する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞生物学の哲学、19世紀哲学
＜研究テーマ＞生物学における個体性、環境概念の歴史的考察
＜主要研究業績＞
« L'individualité biologique chez Bergson », Implications philosophiques, Bergson ou la science (Ebook), 2013, p. 8-26.
« La "métaphysique positive" de Bergson et la pensée positive en France au 19e siècle », Tetsugaku : International Journal of the Philosophical Association of Japan, vol. 1, 2017, p. 58-72.
« Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu », フランス哲学・思想研究22号, 2017, p. 231-241.

【Outline (in English)】
(Course outline) This seminar analyzes Bergson's Les deux sources de la morale et de la religion.
(Learning Objectives) The goals are to read the original philosophical text precisely, to propose a new approach to the relations between the individual and the society.
(Learning activities outside of classroom) Before and after each class meeting, participants will be expected to spend two hours to understand the text.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be based on in-class contribution(50%) and term-end paper (50%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近代フランス哲学史研究Ⅰ－１

大池　惣太郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ミシェル・ド・セルトーのLe lieu de l'autre（Seuil, 2005）を通読する。フランス現代思想におけるセルトーの特異な立ち位置を理解するとともに、現代において「神」についての言説がどのような制約と批評的位置に置かれているかを考察する。

【到達目標】
⑴ ミシェル・ド・セルトーの思想と議論を一定程度の水準で理解し、批評できるようになる。
⑵ フランス現代思想における「神」に関するディスクールの問題を批評的に考察できるようになる。
⑶ 原典の精読を通じて、フランス語による高水準の哲学的言説を読解する言語力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・毎回課題範囲を全員が読んで授業にのぞむ。
・授業内でディスカッションしながら、正確な訳読と内容理解を試みる。
・場合によっては、関連する別のテクストやテーマについて、参加者が発表を行う場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方とあつかうテクストの紹介
第2回	『他者の場所』講読1	p.11～p.23の検討
第3回	『他者の場所』講読2	p.24～p.36の検討
第4回	『他者の場所』講読3	p.37～p.49の検討
第5回	『他者の場所』講読4	p.50～p.62の検討
第6回	『他者の場所』講読5	p.63～p.75の検討
第7回	『他者の場所』講読6	p.76～p.88の検討
第8回	『他者の場所』講読7	p.89～p.101の検討
第9回	『他者の場所』講読8	p.102～p.114の検討
第10回	『他者の場所』講読9	p.115～p.127の検討
第11回	『他者の場所』講読10	p.128～p.140の検討
第12回	『他者の場所』講読11	p.141～p.153の検討
第13回	『他者の場所』講読12	p.154～p.166の検討
第14回	『他者の場所』講読13	p.167～p.179の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・毎回課題範囲を各自が読み、不明点を明確にしてからゼミに臨む。
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Michel de Certeau, Le lieu de l'autre. Histoire religieuse et mystique, Seuil, 2005.

【参考書】
『思想』2025年第12号「ミシェル・ド・セルトー―― 生誕一〇〇年」no.1220（岩波書店、2025年）
ジャン=リュック・ナンシー『神的な様々の場』（松籟社、2001年）

【成績評価の方法と基準】
到達目標３項目の達成度合いに応じて、平常点（訳出への貢献30％、内容理解への貢献30％、ディスカッションへの貢献40％）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
とくになし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
フランス現代哲学、表象文化論
＜研究テーマ＞
バタイユ思想研究、東西神秘主義比較研究、20・21世紀フランス思想・文学、言語と経験の哲学
＜主要研究業績＞
・「生成AIとの対話―バタイユの「接地」不安について」（『明學佛文論叢』58号、2025年）
・「バタイユと虫たち―動物性をめぐるバタイユ的想像力について」（『明學佛文論叢』56号、2023年）
・「供犠の思考、内在性の思考―ジョルジュ・バタイユ『無神学大全』三部作の通時的読解」（『フランス語フランス文学研究』117巻、2021年）

【Outline (in English)】
This course offers a complete reading of Michel de Certeau's Le lieu de l'autre (2005). Students will examine Certeau's unique position in modern French thought and consider how discourse on "God" is shaped by intellectual limits and critical perspectives in contemporary contexts.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Evaluation:Translation work: 30% + Contribution to content understanding: 30% + Participation in discussion: 40%

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

近代フランス哲学史研究Ⅰ－２

大池　惣太郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ミシェル・ド・セルトーのLe lieu de l'autre（Seuil, 2005）を通読する。フランス現代思想におけるセルトーの特異な立ち位置を理解するとともに、現代において「神」についての言説がどのような制約と批評的位置に置かれているかを考察する。

【到達目標】
⑴ ミシェル・ド・セルトーの思想と議論を一定程度の水準で理解し、批評できるようになる。
⑵ フランス現代思想における「神」に関するディスクールの問題を批評的に考察できるようになる。
⑶ 原典の精読を通じて、フランス語による高水準の哲学的言説を読解する言語力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・毎回課題範囲を全員が読んで授業にのぞむ。
・授業内でディスカッションしながら、正確な訳読と内容理解を試みる。
・場合によっては、関連する別のテクストやテーマについて、参加者が発表を行う場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	前期のふりかえり	前期のふりかえりとディスカッション
第2回	『他者の場所』講読14	p.180～p.192の検討
第3回	『他者の場所』講読15	p.193～p.205の検討
第4回	『他者の場所』講読16	p.206～p.218の検討
第5回	『他者の場所』講読17	p.219～p.231の検討
第6回	『他者の場所』講読18	p.232～p.244の検討
第7回	『他者の場所』講読19	p.245～p.257の検討
第8回	『他者の場所』講読20	p.258～p.270の検討
第9回	『他者の場所』講読21	p.271～p.283の検討
第10回	『他者の場所』講読22	p.284～p.296の検討
第11回	『他者の場所』講読23	p.297～p.309の検討
第12回	『他者の場所』講読24	p.310～p.322の検討
第13回	『他者の場所』講読25	p.323～p.331の検討
第14回	総括 現代と神学	まとめと全体をふまえたディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・毎回課題範囲を各自が読み、不明点を明確にしてからゼミに臨む。
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Michel de Certeau, Le lieu de l'autre. Histoire religieuse et mystique, Seuil, 2005.

【参考書】
『思想』2025年第12号「ミシェル・ド・セルトー―― 生誕一〇〇年」no.1220（岩波書店、2025年）
ジャン=リュック・ナンシー『神的な様々の場』（松籟社、2001年）

【成績評価の方法と基準】
到達目標３項目の達成度合いに応じて、平常点（訳出への貢献30％、内容理解への貢献30％、ディスカッションへの貢献40％）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
とくになし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
フランス現代哲学、表象文化論
＜研究テーマ＞
バタイユ思想研究、東西神秘主義比較研究、20・21世紀フランス思想・文学、言語と経験の哲学
＜主要研究業績＞
・「生成AIとの対話―バタイユの「接地」不安について」（『明學佛文論叢』58号、2025年）
・「バタイユと虫たち―動物性をめぐるバタイユ的想像力について」（『明學佛文論叢』56号、2023年）
・「供犠の思考、内在性の思考―ジョルジュ・バタイユ『無神学大全』三部作の通時的読解」（『フランス語フランス文学研究』117巻、2021年）

【Outline (in English)】
This course offers a complete reading of Michel de Certeau's Le lieu de l'autre (2005). Students will examine Certeau's unique position in modern French thought and consider how discourse on "God" is shaped by intellectual limits and critical perspectives in contemporary contexts.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Evaluation:Translation work: 30% + Contribution to content understanding: 30% + Participation in discussion: 40%

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

ヨーロッパ精神史研究Ⅱ－１

長谷川　悦宏

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ミルの『功利主義論』における倫理学上の諸問題について考察する。

【到達目標】
ミルと現代の哲学者との倫理学上の対立点を、今日的課題として、明確に述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
第三章冒頭より輪読形式で読み進める。授業内発表も行う（発表に対する講評・解説も行う）。あわせて受講生の疑問・質問等に対する検討をその都度行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	講義要綱及び諸注意	『功利主義論』第一・二章の解説
2	道徳の強制力	テキスト295-301頁
3	先天性、後天性	テキスト301-3頁
4	利他主義	テキスト303-7頁
5	功利主義と徳	テキスト307-11頁
6	意志、欲望、習慣	テキスト311-14頁
7	自由、所得、権利	テキスト314-17頁
8	応報、信頼、平等	テキスト317-19頁
9	正義と法	テキスト319-23頁
10	正義と心情	テキスト323-26頁
11	正義の多様性	テキスト326-32頁
12	正義の拘束力	テキスト332-34頁
13	功利の原理	テキスト335-38頁
14	第三・四・五章の総括	全体の内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文法や内容に関する疑問点などのメモを作成する（予習）。講義で紹介された関連分野の書籍・論文に目を通す（復習）。予習・復習ともに各二時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
第一回目授業時に、テキストのコピーを配布します。

【参考書】
邦訳はJ・S・ミル『功利主義論』（川名雄一郎・山本圭一訳、京都大学学術出版会、2010）がある。その他は必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】
訳読60％、討論参加30％、レポート10％の割合で評価する。訳読は内容の正確な理解が、討論は主張の客観性が重視される。レポートは思想史的背景或いは関連諸分野との関係に関する基本事項を押さえているものを評価します。

【学生の意見等からの気づき】
歴史的背景に関する説明に配慮しつつ、受講者の関心（今日的関心）も重視し、両者のバランスの取れた解説を心がけたいと思います。

【担当教員の専門分野】
< 専門領域>　19世紀実証主義思想
< 研究テーマ>　コントとJ.S.ミルの思想の比較考察
< 主要研究業績>
①「人類教の二つの解釈」(『社会思想史研究』第29号、2005)
②『自然と人間』(共著、梓出版、2006)
③「J.S.ミルの宗教思想ー希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのかー」(『法政大学文学部紀要』第57号、2008)

【Outline (in English)】
J.S. Mill's thoughts in his 'Utilitarianism' are examined, and a problem of ethics is considered. At the end of course, students are expected to
talk the argument points between Mill and critical philosophers of him. Before/After each class meeting, students are expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided on reading and translation (60％), in class contribution (30％) and short reports（10％）.

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

ヨーロッパ精神史研究 II － 2

長谷川　悦宏

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
J.S. ミルの『代議制統治論』を精読し、民主主義とは何かについて考察する。

【到達目標】
ミルの自由主義及び政治・社会哲学の持つ積極面と問題点を理解し、その上で今日における民主主義の持つ意味について述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
冒頭より輪読形式で読み進める。授業内発表も行う（発表に対する講評・解説を発表後行う）。あわせて、受講生の疑問・質問等に対する検討もその都度行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	講義要項及び諸注意、ミルと代議制	今日の政治哲学におけるミルの位置
2	政治制度についての二つの対抗理論	テキスト374-76頁
3	統治にとっての諸障害	テキスト376-78頁
4	既存の習慣・感情と政治制度の関係	テキスト378-80頁
5	社会的勢力と統治形態	テキスト380-82頁
6	統治の基準について	テキスト383-84頁
7	秩序について	テキスト384-87頁
8	進歩について	テキスト387-89頁
9	統治者の資質	テキスト389-90頁
10	機構自体の資質	テキスト390-92頁
11	統治の二つの機能の相違と関連性	テキスト392-94頁
12	文明以前の事例	テキスト394-96頁
13	東方民族の事例	テキスト396-98頁
14	第一、二章の総括	全体の内容の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文法や内容に関する疑問点などのメモを作成する(予習)。講義で紹介された関連分野の書籍・論文に目を通す(復習)。予復習とも二時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
第一回授業時にコピー（トロント大学版）を配布いたします。

【参考書】
邦訳は水田洋『代議制統治論』（岩波書店、1997）がある。その他は必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】
訳読60％、討論参加30％、レポート10％の割合で評価する。訳読は内容の正確な理解が、討論は主張の客観性が重視される。レポートは思想的背景或いは関連諸分野との関係に関する基本事項を押さえているものを評価します。

【学生の意見等からの気づき】
民主主義をうたう国家において「分断」が無視出来ない今日です。あらためて民主主義とミルの思想について、可能な限り丁寧に論じたいと思います。

【担当教員の専門分野】
< 専門領域>　19世紀実証主義思想
< 研究テーマ>　コントとJ.S. ミルの思想の比較考察
< 主要業績>①『自然と人間』(共著、梓出版、2006)②「J.S. ミルの宗教思想ー希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのかー」(『法政大学文学部紀要』第57号、2008)③「ミル経験主義とプラグマティズム序論」(『法政哲学』14号、2018)

【Outline (in English)】
J. S. Mil's thoughts in his 'Considerations on representative government' are examined, and a problem of democracy is considered. At the end of course, students are expected to talk it. Before/after each class meeting, students are expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided on reading and translation(60 %), in class contribution(30 %) and short reports(10 %).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

法哲学研究 1

内藤　淳

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業のテーマは「道徳の動機」である。「人はなぜ道徳的に行動するのか？」は倫理学の基本的な問いのひとつだが、その動機について心理学的に分析したベイトソンの論文を精読することにより、道徳の意義を突き詰めて考えるのがこの授業の目的になる。西洋の倫理学では「道徳に従おうとする意志」などにその動機を見出す考え方が知られているが、そうではなくて「道徳的に見られようとする意識」すなわち「道徳的偽善」に根本的な動機を見出すのがベイトソンの主張で、従来の倫理学の考え方と対比しつつこの主張の中身を多角的に吟味するのが授業の内容である。

【到達目標】
①道徳を進化的な視点で分析する視点を理解する。
②道徳行動に伴う人間の内面作用を心理学的・実証的に分析する視点を理解し、倫理学・哲学的な分析との違いが分かるようになる。
③人間にとっての道徳行動の意義について自分の考えを持ち、その内容を論理的に説明できるようになる。
④その説明を文章で書く際に、正確な日本語で論理的な組み立てができるようになる。
⑤英語の専門文献を精密に読解し、それについての正確な日本語訳が作れるようになる。
＊学部生が受講する場合は、このうち①〜④が主な到達目標になる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
対面授業を行う。毎回担当者を決め、テキスト担当箇所の日本語訳の作成を課題として課す。個々の授業においてその訳文の吟味・検討を行い、問題個所を修正する。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討、受講者からの質問や意見へのフィードバックを行う。具体的な題材や内容は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第2回	「道徳の動機」の分析について	道徳行動とそれを生み出す内面作用の関連についての解説
第3回	テキスト論文の全体像について	テキスト論文51頁の訳と解釈
第4回	道徳原理と動機の関係について	テキスト論文51-52頁の訳と解釈
第5回	道徳の偽善的側面について	テキスト論文52-53頁の訳と解釈
第6回	道徳の統合的側面について	テキスト論文53頁の訳と解釈
第7回	道徳の動機の調査方法について	テキスト論文53-54頁の訳と解釈
第8回	道徳の動機に関する調査実験内容について	テキスト論文54-55頁の訳と解釈
第9回	道徳の動機に関する調査結果の分析	テキスト論文55-56頁の訳と解釈
第10回	調査実験についての考察と評価	受講者による報告とディスカッション
第11回	心理学と倫理学の関係について	参考論文3-9頁の検討
第12回	道徳判断を生み出す内面過程について	参考論文9-17頁の検討
第13回	道徳意識の発達について	参考論文18-23頁の検討
第14回	道徳の動機の実証的研究手法について	テキスト論文前半の総合的検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文や報告の担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日本語訳やレジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】
C. Daniel Batson, Moral Masquerades: Experimenatal Exploration of the Nature of Moral Motivation, Phenom Cogn Sci(2008)7:51-66.
［参考論文］
太田紘史「モラル・サイコロジーの展開」太田紘史編著『モラル・サイコロジー：心と行動から探る倫理学』春秋社、2016年、所収

【参考書】
太田紘史編著『モラル・サイコロジー：心と行動から探る倫理学』春秋社、2016年
ロバート・クルツバン『だれもが偽善者になる本当の理由』柏書房、2014年
クリストファー・ボーム『モラルの起源：道徳、良心、利他行動はどのように進化したのか』白揚社、2014年
リチャード・ランガム『善と悪のパラドックス：ヒトの進化と〈自己家畜化〉の歴史』NTT出版、2020年
スティーブン・ピンカー『人間の本性を考える』（上）〜（下）日本放送出版協会、2004年
スティーブン・ピンカー『心の仕組み』（上）〜（下）日本放送出版協会、2003年
その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
担当箇所の訳文・発表内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①〜⑤の達成度（学部生の場合は「到達目標」①〜④）を評価する。担当箇所の訳文・発表内容の評価：80％。それ以外での授業での議論内容：20％。

【学生の意見等からの気づき】
訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。文法など、基礎的な要素の理解の徹底にも努めたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞法哲学
＜研究テーマ＞進化心理学に基づく人間本性と道徳の基礎の研究
＜主要研究業績＞
「進化的暴露論証の基底の批判的検証：道徳性と利他性の関連について」(1)(2・完)法政大学文学部紀要87・88号、2023-24年
「功利原理と人間本性：ミルを進化心理学で批判する」法政大学文学部紀要78号、2018年
「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要75号、2017年
「平和は『絶対に』求めるべきか？　：ホッブズを進化心理学で修正する」（1）（2・完）法政大学文学部紀要71号・72号、2015年
「憲法学は立憲的憲法を正当化できるか？」(1)(2・完)一橋法学12巻2号・3号、2013年
「一夫一婦制と『憲法の目的』」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012年
「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座　人権論の再定位５）』法律文化社、2010年
「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容をも持ちうるか」『新世代法政策学研究』第８号、2010年

【Outline (in English)】
（Course outline）
The theme of this class is “Moral Motivation.” While Western ethics often locates motivation in concepts like “the will to follow morality,” we will examine a paper that instead identifies the fundamental motivation as “the desire to be seen as moral” — that is, “moral hypocrisy.” The class will involve comparing this argument with traditional ethical perspectives and critically analyzing its substance from multiple angles.
（Learning Objectives）
The goals of this course is to help students form their own opinions about the foundations and significance of morality, based on an understanding of the motivation behind human moral behavior.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expedted to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on the score of translations or presentations of assigned sections of the text(80%), plus in-class contribution(20%).

PHL600B1（哲学 / Philosophy 600）

法哲学研究 2

内藤　淳

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
春学期に続いて「道徳の動機」を授業テーマとしてベイトソンの論文精読を中心にその検討を行う。「人はなぜ道徳的に行動するのか？」は倫理学の基本的な問いのひとつだが、その動機について心理学的に分析したベイトソンの論文の内容分析を通して、道徳の意義を突き詰めて考えるのがこの授業の目的になる。西洋の倫理学では「道徳に従おうとする意志」などにその動機を見出す考え方が知られているが、そうではなくて「道徳的に見られようとする意識」すなわち「道徳的偽善」に根本的な動機を見出すのがベイトソンの主張で、従来の倫理学の考え方と対比しつつこの主張の中身を多角的に吟味するのが授業の内容である。

【到達目標】
①道徳を進化的な視点で分析する視点を理解する。
②道徳行動に伴う人間の内面作用を心理学的・実証的に分析する視点を理解し、倫理学・哲学的な分析との違いが分かるようになる。
③人間にとっての道徳行動の意義について自分の考えを持ち、その内容を論理的に説明できるようになる。
④その説明を文章で書く際に、正確な日本語で論理的な組み立てができるようになる。
⑤英語の専門文献を精密に読解し、それについての正確な日本語訳が作れるようになる。
＊学部生が受講する場合は、このうち①〜④が主な到達目標になる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
対面授業を行う。毎回担当者を決め、テキスト担当箇所の日本語訳の作成を課題として課す。個々の授業においてその訳文の吟味・検討を行い、問題個所を修正する。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討、受講者からの質問や意見へのフィードバックを行う。具体的な題材や内容は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第2回	「道徳の動機」の心理学的分析の概要について	春学期の内容のポイント確認
第3回	道徳の動機に関する第二実験の方法について	テキスト論文56-57頁の訳と解釈
第4回	道徳の動機に関する第二実験の内容について	テキスト論文57頁の訳と解釈
第5回	実験結果を通じた道徳判断過程の分析について	テキスト論文57-58頁の訳と解釈
第6回	実験結果を通じた道徳認識過程の分析について	テキスト論文58-59頁の訳と解釈
第7回	道徳の動機に関する第三実験の方法について	テキスト論文59-60頁の訳と解釈
第8回	道徳の動機に関する第三実験の内容について	テキスト論文60-61頁の訳と解釈
第9回	道徳的偽善と道徳的統合性の関係について	テキスト論文61-62頁の訳と解釈
第10回	道徳的偽善を生み出す内面作用について	テキスト論文62-63頁の訳と解釈
第11回	道徳的偽善の適応的機能について	テキスト論文63-64頁の訳と解釈
第12回	道徳的偽善の効果について	テキスト論文64頁の訳と解釈
第13回	本研究の課題について	テキスト論文全体に関する批判的検討
第14回	心理学的道徳研究の展開可能性について	参加者によるディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文や報告の担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日本語訳やレジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】
C. Daniel Batson, Moral Masquerades: Experimenatal Exploration of the Nature of Moral Motivation, Phenom Cogn Sci(2008)7:51-66.

【参考書】
太田紘史編著『モラル・サイコロジー：心と行動から探る倫理学』春秋社、2016年
ロバート・クルツバン『だれもが偽善者になる本当の理由』柏書房、2014年
クリストファー・ボーム『モラルの起源：道徳、良心、利他行動はどのように進化したのか』白揚社、2014年
リチャード・ランガム『善と悪のパラドックス：ヒトの進化と〈自己家畜化〉の歴史』NTT出版、2020年
スティーブン・ピンカー『人間の本性を考える』（上）〜（下）日本放送出版協会、2004年
スティーブン・ピンカー『心の仕組み』（上）〜（下）日本放送出版協会、2003年
その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
担当箇所の訳文・発表内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①〜⑤の達成度（学部生の場合は「到達目標」①〜④）を評価する。担当箇所の訳文・発表内容の評価：80％。それ以外での授業での議論内容：20％。

【学生の意見等からの気づき】
訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。文法など、基礎的な要素の理解の徹底にも努めたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞法哲学
＜研究テーマ＞進化心理学に基づく人間本性と道徳の基礎の研究
＜主要研究業績＞
「進化的暴露論証の基底の批判的検証：道徳性と利他性の関連について」(1)(2・完)法政大学文学部紀要87・88号、2023-24年
「功利原理と人間本性：ミルを進化心理学で批判する」法政大学文学部紀要78号、2018年
「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要75号、2017年
「平和は『絶対に』求めるべきか？　：ホッブズを進化心理学で修正する」（1）（2・完）法政大学文学部紀要71号・72号、2015年
「憲法学は立憲的憲法を正当化できるか？」(1)(2・完)一橋法学12巻2号・3号、2013年
「一夫一婦制と『憲法の目的』」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012年

「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座　人権論の再定位５）』法律文化社、2010年
「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容をも持ちうるか」『新世代法政策学研究』第８号、2010年

【Outline (in English)】
（Course outline）
The theme of this class is “Moral Motivation.” While Western ethics often locates motivation in concepts like “the will to follow morality,” we will examine a paper that instead identifies the fundamental motivation as “the desire to be seen as moral” — that is, “moral hypocrisy.” The class will involve comparing this argument with traditional ethical perspectives and critically analyzing its substance from multiple angles.
（Learning Objectives）
The goals of this course is to help students form their own opinions about the foundations and significance of morality, based on an understanding of the ｍotivation ｂehind human moral behavior.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expedted to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on the score of translations or presentations of assigned sections of the text(80%), plus in-class contribution(20%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

哲学ドイツ語研究 1

吉田　敬介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業では、ドイツ語で書かれたテクストを読めるようになることを目指し、ドイツ語を基礎文法から学びます。ドイツ語の未習者、もしくは既習者で知識を深めたいと思う方が対象です。読解の技能を身に付けることが主眼ですが、一般的なドイツ語の知識も得られるようにします。
　春学期には、教科書内の練習テクストを読解できるようになることを目指します（秋学期には、ニーチェのテクストをドイツ語原文で読解することに挑戦する予定です）。

【到達目標】
（A）ドイツ語を正しく発音できる。
（B）ドイツ語読解のための基本的な文法事項を理解できる。
（C）基本的な文法知識を用い、簡単なドイツ語のテクストを読める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　教科書に基づいて進めます。まずは文法事項を説明し、それから練習問題や練習テクストを通して学習事項を定着していきます。受講者には、発音や文法事項の確認、テクスト内容の議論をしてもらうため、積極的な参加が望まれます。
　理解度の確認のため、進度に応じてドイツ語に関する課題を出す予定です。必要に応じて、解説・フィードバックを行います。
　なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、学習支援システムを確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション、ドイツ語の発音	授業の進め方の確認 ドイツ語の発音 (1)
第2回	Lektion 1 (1)	ドイツ語の発音 (2) 動詞の現在人称変化 seinとhabenの現在人称変化
第3回	Lektion 1 (2) 練習テクスト読解 Lektion 2 (1)	動詞の位置 "Deutschland"の読解 名詞の性 名詞の格変化（1格と4格）
第4回	Lektion 2 (2) 練習テクスト読解 Lektion 3 (1)	不規則動詞werden ja, nein, dochの使い方 "Fußball"の読解 不規則動詞の現在人称変化
第5回	Lektion 3 (2) 練習テクスト読解	名詞の複数形 名詞の2格と3格 "Die EU"の読解
第6回	Lektion 4 練習テクスト読解	前置詞と名詞の格 副文 "Mahlzeit, Mahlzeit!"の読解
第7回	ここまでの振り返り Lektion 5 (1)	ここまでの学習内容の確認・復習 人称代名詞の3格と4格 再帰代名詞と再帰動詞
第8回	Lektion 5 (2) 練習テクスト読解	非人称のes "Gute Besserung!"の読解
第9回	Lektion 6	定冠詞類 不定冠詞類 否定冠詞keinと否定文
第10回	練習テクスト読解 Lketion 7 (1)	Ingeborg Bachmann "Malina"の読解 zu不定詞句
第11回	Lektion 7 (2)	分離動詞 非分離動詞
第12回	練習テクスト読解 Lektion 8 (1)	Erich Kästner "Das doppelte Lottchen"の読解 話法の助動詞
第13回	Lektion 8 (2) 練習テクスト読解 ここまでの振り返り	未来形 Michael Ende "Momo" (1)の読解 ここまでの学習内容の確認・復習
第14回	春学期のまとめと解説	春学期の学習内容のまとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
学習事項の定着のため、その都度、宿題や予習、課題を指示します。

【テキスト（教科書）】
・『ドイツ語の時間―読解編―（読めると楽しい！）』朝日出版社

【参考書】
・独和辞典（必須）
・『必携ドイツ文法総まとめ（改訂版）』白水社
・細見和之（編著）『ニーチェをドイツ語で読む』白水社

【成績評価の方法と基準】
成績配分は、平常点（予習、授業への取り組みなどの総合評価）60％、課題への取り組み40％です。成績評価に際しては、【到達目標】（A）～（C）を基準とし、その達成度合いを考慮します。

【学生の意見等からの気づき】
・わかりにくい事項やドイツに関するトピックについて、参考書などを紹介しながら丁寧に説明するよう努めます。
・扱う事項に関連して、適宜、哲学に関連するトピックにも言及するよう努めます。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業の場合に必要となるため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】
春学期と秋学期、合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
社会哲学、宗教哲学、美学
＜研究テーマ＞
キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想
＜主要研究業績＞
・「美的経験における「神学の刺」の救出―― 宗教的なものの世俗化としてのアドルノのキルケゴール受容」（論文、『マテリエ』第2号、2025年）〔ドイツ語版："Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen", *Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie*, 2018〕
・「「自然の追想」としての美学―― アドルノとメンケの主体性論からみる批判理論と美学」（論文、『思想』No.1208、2024年）
・「主体性を問うことのアクチュアリティ―― アドルノの批判的キルケゴール受容からの一試論」（論文、『法政哲学』第20号、2024年）
・クリストフ・メンケ『力――美的人間学の根本概念』（共訳、人文書院、2022年）
・「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール」（論文、『社会思想史研究』第45号、2021年）
・「隠された内面性から、外的世界との衝突へ――キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文、『哲学』第72号、2021年）
・「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文、『学習院大学人文科学論集』第22号、2013年）〔ドイツ語版："Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance", *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2015〕

【Outline (in English)】
Course outline: The aim of this course is to help students acquire basic knowledge of German grammar. It also enhances the development of student's reading competence in German.
Learning Objectives: The goals of this course are to (A) pronounce German words, (B) understand the basic grammar of German language, and (C) read simple texts in German.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (60%), and short reports (40%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

哲学ドイツ語研究 2

吉田　敬介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業では、ドイツ語で書かれたテクストを読めるようになることを目指し、ドイツ語を基礎文法から学びます。ドイツ語の未習者、もしくは既習者で知識を深めたいと思う方が対象です。読解の技能を身に付けることが主眼ですが、一般的なドイツ語の知識も得られるようにします。
　秋学期は、前半には教科書に沿って進め、後半にはニーチェのテクストをドイツ語原文で読解することに挑戦します。

【到達目標】
（A）ドイツ語読解のための基本的な文法事項を身に付ける。
（B）基本的な文法知識を用い、一般的なドイツ語のテクストを読める。
（C）辞書や参考書を用い、専門的なドイツ語のテクストの大意を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　前半は、教科書に基づいて進めます。まずは文法事項を説明し、それから練習問題や練習テクストを通して学習事項を定着していきます。後半は、ニーチェのテクストをドイツ語原文で読解することに挑戦します（テクストの詳細は授業時にお知らせします）。受講者には、発音や文法事項の確認、テクスト内容の議論をしてもらうため、積極的な参加が望まれます。
　理解度の確認のため、進度に応じてドイツ語に関する課題を出す予定です。必要に応じて、解説・フィードバックを行います。
　なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、学習支援システムを確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション、既習事項の復習	授業の進め方の確認 教科書Lektion 1〜8の既習事項の復習
第2回	Lektion 9 (1)	動詞の三基本形 過去形 現在完了形
第3回	Lektion 9 (2) 練習テクスト読解	受動態 "Die Sommerzeit"の読解
第4回	Lektion 10 (1)	形容詞の用法 形容詞の格変化
第5回	Lektion 10 (2) 練習テクスト読解	比較級と最上級 Franz Kafka "Die Verwandlung"の読解
第6回	Lektion 11	関係代名詞 命令形
第7回	練習テクスト読解 Lektion 12 (1)	Michael Ende "Momo" (2)の読解 接続法とは
第8回	Lektion 12 (2)	接続法の人称変化 接続法の用法
第9回	練習テクスト読解 ここまでの振り返り	Michael Ende "Die unendliche Geschichte"の読解 ここまでの学習内容の確認・復習
第10回	テクスト講読(1)	ニーチェの生涯や思想、講読テクストについて導入 ニーチェのテクストのドイツ語原文での読解(1)
第11回	テクスト講読(2)	ニーチェのテクストのドイツ語原文での読解(2)
第12回	テクスト講読(3)	ニーチェのテクストのドイツ語原文での読解(3)
第13回	テクスト講読(4)	ニーチェのテクストのドイツ語原文での読解(4)
第14回	秋学期のまとめと解説	秋学期の学習内容のまとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
学習事項の定着のため、その都度、宿題や予習、課題を指示します。

【テキスト（教科書）】
・『ドイツ語の時間―読解編―（読めると楽しい！）』朝日出版社
※講読するニーチェのテクストの詳細については、授業時にお知らせします。

【参考書】
・独和辞典（必須）
・『必携ドイツ文法総まとめ（改訂版）』白水社
・細見和之（編著）『ニーチェをドイツ語で読む』白水社

【成績評価の方法と基準】
成績配分は、平常点（予習、授業への取り組みなどの総合評価）80％、課題への取り組み20％です。成績評価に際しては、【到達目標】（A）〜（C）を基準とし、その達成度合いを考慮します。

【学生の意見等からの気づき】
・わかりにくい事項やドイツに関するトピックについて、参考書などを紹介しながら丁寧に説明するよう努めます。
・扱う事項に関連して、適宜、哲学に関連するトピックにも言及するよう努めます。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業の場合に必要となるため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】
春学期と秋学期、合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
社会哲学、宗教哲学、美学
＜研究テーマ＞
キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想
＜主要研究業績＞
・「美的経験における「神学の刺」の救出―― 宗教的なものの世俗化としてのアドルノのキルケゴール受容」（論文、『マテリエ』第2号、2025年）〔ドイツ語版："Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen", *Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie*, 2018〕
・「「自然の追想」としての美学―― アドルノとメンケの主体性論からみる批判理論と美学」（論文、『思想』No.1208、2024年）
・「主体性を問うことのアクチュアリティ―― アドルノの批判的キルケゴール受容からの一試論」（論文、『法政哲学』第20号、2024年）
・クリストフ・メンケ『力――美的人間学の根本概念』（共訳、人文書院、2022年）
・「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール」（論文、『社会思想史研究』第45号、2021年）
・「隠された内面性から、外的世界との衝突へ――キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文、『哲学』第72号、2021年）
・「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文、『学習院大学人文科学論集』第22号、2013年）〔ドイツ語版："Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance", *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2015〕

【Outline (in English)】
Course outline: The aim of this course is to help students acquire basic knowledge of German grammar. It also enhances the development of student's reading competence in German.
Learning Objectives: The goals of this course are to (A) acquire basic knowledge of German grammar, (B) read various texts in German, and (C) understand academic texts in German.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (80%), and short reports (20%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

哲学フランス語研究 1

大池　惣太郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
哲学書、または哲学的な主題を含む文学テクストをフランス語で読解することを通じて、哲学研究に最低限必要な標準的フランス語読解能力を身につける。教材はいくつか候補があるが（Julien Benda, Essai d'un disours cohérent sur les rapports de Dieu et du monde, 1931; Georges Matisse, La philosophie de la Nature, Identité du monde et de la connaissance, 1938; Brian Evenson, L'Antre, 2021）、参加者の専門と語学力に応じて相談しながら決めたい。

【到達目標】
【修士課程】
①初級文法を復習して確実にフランス語の基盤を作る。
②さらに中級文法へ理解を高める。
③哲学書または哲学的主題を含むフランス語の原文を読めるように語学力をアップする。
【博士後期課程】
上記①と②と③においてより高度の知見への到達をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
1）毎回担当箇所を予習し、文法的な説明ができるように準備しておく。
2）課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業紹介	春学期の予定説明、課題テクストの選定。
第2回	テクスト講読1（どうやってフランス語を読み進めればいいか）	文の構造の取り方
第3回	テクスト講読2（叙法の基礎整理）	法le modeの扱い
第4回	テクスト講読3（時制の整理1）	複合過去と半過去の時制的価値について
第5回	テクスト講読4（時制の整理2）	単純過去と半過去の時制的価値について
第6回	テクスト講読5（時制の整理3）	未来形と条件法の過去未来的用法について
第7回	テクスト講読6（代名動詞の基礎）	代名動詞の基礎的用法の確認
第8回	テクスト講読7（修飾関係を整理する）	文の要素の掛かりを体系的に捉える
第9回	テクスト講読8（代名詞の基礎）	代名詞の基本と種類、用法の確認
第10回	テクスト講読9（挿入節の捉え方）	挿入節のタイプと扱い方
第11回	テクスト講読10（語彙場、意味場への注目）	論理的な文章も巧みにイメージを使っていることについて
第12回	テクスト講読11（接続法の特徴）	接続法の叙法的価値をより深く理解する
第13回	テクスト講読12（条件法の特徴）	条件法の叙法的価値をより深く理解する
第14回	総括	今学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
事前に担当範囲を予習する際は、単に訳文を作るだけでなく、文法的な説明が可能であるように準備すること。

【テキスト（教科書）】
Julien Benda, Essai d'un disour cohérent sur les rapports de Dieu et du monde, 1931; Georges Matisse, La philosophie de la Nature, Identité du monde et de la connaissance, 1938; Brian Evenson, L'Antre, 2021

【参考書】
中辞典以上のフランス語辞書（出版社は問わない）
スマホ検索は不可とする

【成績評価の方法と基準】
【修士課程】
①毎回の担当箇所の予習（80％）
②授業への参加度（質問、応答、内容理解）（20％）
≪到達目標との対応≫
上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。
【博士課程】
①毎回の担当箇所の予習、および文体の評価（80％）
②授業への参加度（質問、応答、内容理解、文脈理解）（20％）
≪到達目標との対応≫
上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
フランス現代哲学、表象文化論
＜研究テーマ＞
バタイユ思想研究、東西神秘主義比較研究、20・21世紀フランス思想・文学、言語と経験の哲学
＜主要研究業績＞
・「生成AIとの対話―バタイユの「接地」不安について」（『明學佛文論叢』58号、2025年）
・「バタイユと虫たち―動物性をめぐるバタイユ的想像力について」（『明學佛文論叢』56号、2023年）
・「供犠の思考、内在性の思考―ジョルジュ・バタイユ『無神学大全』三部作の通時的読解」（『フランス語フランス文学研究』117巻、2021年）

【Outline (in English)】
The purpose of this course is to learn the fundamental of French grammar.Especially by the end of this course, students are expected to have a good comprehension of reading French texts that contain philosophical matters. This is mainly achieved through learning the fundamentals of French grammar.
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.
Your overall grade in the class will be based on the following: 80% for translation in each class meeting and 20% for exercises in each class meeting.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

哲学フランス語研究 2

大池　惣太郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
哲学書、または哲学的な主題を含む文学テクストをフランス語で読解することを通じて、哲学研究に最低限必要な標準的フランス語読解能力を身につける。教材はいくつか候補があるが（Julien Benda, Essai d'un disours cohérent sur les rapports de Dieu et du monde, 1931; Georges Matisse, La philosophie de la Nature, Identité du monde et de la connaissance, 1938; Brian Evenson, L'Antre, 2021）、参加者の専門と語学力に応じて相談しながら決めたい。

【到達目標】
【修士課程】
①初級文法を復習して確実にフランス語の基盤を作る。
②さらに中級文法へ理解を高める。
③哲学書または哲学的主題を含むフランス語の原文を読めるように語学力をアップする。
【博士後期課程】
上記①と②と③においてより高度の知見への到達をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
1）毎回担当箇所を予習し、文法的な説明ができるように準備しておく。
2）課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業紹介	秋学期の予定説明、課題テクストの選定。
第2回	テクスト講読1（代名動詞の応用）	代名動詞の幅広い用法（再帰代名詞がどれだけ重宝されるか）
第3回	テクスト講読2（叙法的価値を持つ時制について）	時制にも叙法的価値があることを学ぶ
第4回	テクスト講読3（条件法の深い理解1）	はっきり批判せずに批判する方法
第5回	テクスト講読4（叙法の深い理解2）	断定と叙法化：主観的表現について
第6回	テクスト講読5（トーンの深い理解3）	口語的・文語的の違い
第7回	テクスト講読6（さまざまな接続詞1）	論述の綾としての接続詞：原因と結果
第8回	テクスト講読7（さまざまな接続詞2）	論述の要としての接続詞：目的と様態
第9回	テクスト講読8（さまざまな接続詞3）	論述の要としての接続詞：譲歩構文とその度合い
第10回	テクスト講読9（独立構文の捉え方）	独立節のタイプと扱い方
第11回	テクスト講読10（文法の曖昧さ）	テクストに残る意図的な意味の曖昧さについて
第12回	テクスト講読11（読む速度を考える）	遅読、速読のメリット、デメリット
第13回	テクスト講読12（文章の空気）	文体論的な哲学研究のための序説
第14回	総括	今学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
事前に担当範囲を予習する際は、単に訳文を作るだけでなく、文法的な説明が可能であるように準備すること。

【テキスト（教科書）】
Julien Benda, Essai d'un disour cohérent sur les rapports de Dieu et du monde, 1931; Georges Matisse, La philosophie de la Nature, Identité du monde et de la connaissance, 1938; Brian Evenson, L'Antre, 2021

【参考書】
中辞典以上のフランス語辞書（出版社は問わない）
スマホ検索は不可とする

【成績評価の方法と基準】
【修士課程】
①毎回の担当箇所の予習（80％）
②授業への参加度（質問、応答、内容理解）（20％）
≪到達目標との対応≫
上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。
【博士課程】
①毎回の担当箇所の予習、および文体の評価（80％）
②授業への参加度（質問、応答、内容理解、文脈理解）（20％）
≪到達目標との対応≫
上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
フランス現代哲学、表象文化論
＜研究テーマ＞
バタイユ思想研究、東西神秘主義比較研究、20・21世紀フランス思想・文学、言語と経験の哲学
＜主要研究業績＞
・「生成AIとの対話―バタイユの「接地」不安について」（『明學佛文論叢』58号、2025年）
・「バタイユと虫たち―動物性をめぐるバタイユ的想像力について」（『明學佛文論叢』56号、2023年）
・「供犠の思考、内在性の思考―ジョルジュ・バタイユ『無神学大全』三部作の通時的読解」（『フランス語フランス文学研究』117巻、2021年）

【Outline (in English)】
The purpose of this course is to learn the fundamental of French grammar.Especially by the end of this course, students are expected to have a good comprehension of reading French texts that contain philosophical matters. This is mainly achieved through learning the fundamentals of French grammar.
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.
Your overall grade in the class will be based on the following: 80% for translation in each class meeting and 20% for exercises in each class meeting.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

哲学基礎研究 I

関口 貴太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本講義の目的は、哲学の基本的なテーマの学習を通して、哲学の基本的な知識を身に着けるとともに、その知識に内在する「哲学的に考える」能力を養うことにあります。哲学的な思考は、「私たちの心を超えた世界は存在するか」、「他人の心を知ることはできるか」、「私たちには自由意志はあるのか」、「人生に意味はあるのか」など、哲学的な問題に対して、自身の知識を動員しながら、自分自身で考える能力です。
本講義では、このような能力を養うために、基本的な哲学の問いに取り組むことになります。それと並行して、過去の主要な哲学者たちが、哲学の基本的な問題をどのように考察していたかを学びます。
本講義は、これらの学びを通して、哲学の知識に基づいた哲学的思考の習得を目指します。

【到達目標】
本講義の到達目標は、以下の三点です。
・現代の問題や自身の専門研究などについて、自分自身で問いを立て、哲学的に考える能力を身に着ける。
・西洋哲学史の基本的な概念の知識を学ぶ。
・過去の哲学者たちの思考方法を学び、それを自身の研究に活用する能力を身に着ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本講義の進め方は、教員が用意した資料を配布して、解説を行います。必要に応じて哲学的テキストの読解を行います。また、哲学的テキストの内容について、受講者に発表してもらったり、テキストの読解について討議したりします。
なお、受講生の理解度や興味関心に応じて授業内容を調整します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	・授業概要の説明 ・レジュメやレポート等の書き方の説明 ・参考文献紹介
第2回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』①「どうやって私たちは何かを知るのだろうか」	・二元論 ・独我論 ・懐疑論
第3回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』②「他人の心」	・知ることについて ・心について ・他者の心を知ることはできるのか？
第4回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』③「心－身問題」	・物心二元論 ・身体論
第5回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』④「ことばの意味」	・ことばとはどのようなものか ・意味論
第6回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑤「自由意志」	・決定論と自由意志 ・自由と責任
第7回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑥「正しいことと不正なこと」	・道徳について ・功利主義 ・義務論
第8回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑦「正義」	・正義について ・平等について
第9回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑧「死」	・私たちは「死」についてどのように考えるのか？ ・時間について
第10回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑨「人生の意味」	・目的論 ・本質と実存
第11回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑩まとめ	・これまでの議論のまとめ ・全員でのディスカッション
第12回	20世紀の哲学①	・フロイト ・解釈学 ・現象学前史
第13回	20世紀の哲学②	・現象学の展開 ・言語哲学 ・実存主義 ・ポストモダン
第14回	講義全体のまとめ	・21世紀の哲学に向けて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
受講者は、配布した資料や参考文献に挙げたテキストなどを事前に精読してください。
必要に応じて、配布された資料を基にレジュメを作成してもらうことがあります。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
担当教員が作成した資料を授業内で配布します。

【参考書】
・トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？ ――とっても短い哲学入門』、岡本裕一朗・若松良樹訳、昭和堂、1993年
・Thomas Nagel, What does it all mean? : a very short introduction to philosophy, Oxford University Press, 1987.
・バートランド・ラッセル『哲学入門』、高村夏輝訳、ちくま学芸文庫、2005年
・カール・ヤスパース『哲学入門』、草薙正夫訳、新潮文庫、1954年
・新田義弘『哲学の歴史――哲学は何を問題にしてきたか』、講談社、1989年
・内山勝利編『哲学の歴史1』、中央公論新社、2008年（『哲学の歴史』シリーズ）など
・そのほか、適宜授業で紹介します。

【成績評価の方法と基準】
リアクションペーパーやレジュメ、授業への取り組みなどの平常点50％と学期末の課題レポート（50％）。この評価方法を基に上記三点の「到達目標」について、60%以上の目標達成をした者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
・リアクションペーパーなどを使用して受講生の疑問・質問等へのフィードバックを行います。
・課題提出等に授業支援システムを利用することがあります。授業前後に確認してください

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
西洋哲学、現象学
＜研究テーマ＞
フッサールを中心とした現象学の研究。現代の現象学
＜主要研究業績＞
博士論文「フッサール現象学における「あいだ」の研究――原創設と追創設の反復運動を手掛かりに」、法政大学、2025年
論文「現象学における「あいだ」の究明― E・フッサールの「危機」概念を手掛かりに」、法政大学大学院編『法政大学大学院紀要』第89号、2022年
論文「世代発生的現象学における「現象学的出生」の内実――フッサールの「伝統」概念を手掛かりに」、実存思想協会編『実存思想論集　XXXV　実存とケア』、知泉書館、2020年

【Outline (in English)】
(Course outline)
This course aims to provide students with a basic understanding of philosophical topics, while fostering the ability to engage in "philosophical thinking" based on that understanding.
(Learning Objectives)
(１) Develop the ability to formulate original questions regarding contemporary issues and one's own field of research, and to address them through philosophical thinking.
(２) Acquire a basic knowledge of the key concepts within the history of Western philosophy.
(３) Study the methodologies of past philosophers and develop the capacity to apply these modes of thought to one's own research.
(Learning activities outside of classroom)
Students are expected to thoroughly read the distributed materials and the texts listed in the bibliography prior to each class.
(Grading Criteria /Policy)
The grade consists of 50% for class participation (including reaction papers, handouts, and class engagement) and 50% for the final term paper.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

哲学基礎研究 II

澤田　直

備考（履修条件等）：1/28、29、2/1、2、3　各日2〜4限を予定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
概要
この授業では、学生はフランスの実存主義哲学について学びます。より具体的には、、ジャン=ポール・サルトルとシモーヌ・ド・ボーヴォワールの思想を中心に、二人の著作のみならず、その実践活動などについても学びます。
目的・意義
フランス20世紀の重要な思想である実存主義を学ぶことは、哲学一般を理解するのに有意義であるだけでなく、世界や現実を理解することを助けます。

【到達目標】
学生は、サルトルとボーヴォワールの思想を、その著作と実践の両面から学ぶことで、20世紀フランス哲学に関する理解を深めることを目指します。主要なテクストを実際に読むことで、正確な理解ができるとともに、多くの思索的刺激を受けることができます。
課題の文章だけでなく、参考文献などにも目を通すことで、新たな知見を得られるとともに、これまで学んだ思想についても深まります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、講師による概説のあとに、具体的な著作を読解する機会も設けて授業を進めます。
また受講者による発表なども随時行う予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	フランス実存主義が誕生した背景
第2回	サルトルとボーヴォワール紹介	二人の生涯および活動の概観
第3回	サルトル（1）	小説『嘔吐』とその問題系
第4回	サルトル（2）	イメージ論
第5回	サルトル（3）	『存在と無』1
第6回	サルトル（4）	『存在と無』2
第7回	ボーヴォワール（1）	両義性のモラル
第8回	サルトル（5）	モラル論
第9回	サルトル（6）	戯曲の世界
第10回	サルトル（7）	植民地問題
第11回	サルトル（8）	評伝の問題
第12回	サルトル（9）	『弁証法的理性批判』
第13回	ボーヴォワール（2）	老いの問題
第14回	総括	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読むことが必要です。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
資料を配付する。

【参考書】
澤田直『新・サルトル講義』平凡社新書、2002年
澤田直　『サルトルのプリズム　二十世紀フランス文学・思想論』法政大学出版局、2019年

【成績評価の方法と基準】
到達目標の達成度合いに応じて以下の配分で成績評価する。
平常点60%、レポート40%

【学生の意見等からの気づき】
「特になし」

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
哲学
＜研究テーマ＞
２０世紀フランス思想
＜主要研究業績＞
『〈呼びかけ〉の経験　サルトルのモラル論』人文書院、2002年
『ジャン＝リュック・ナンシー　分有のためのエチュード』白水社、2013年
『サルトルのプリズム　二十世紀フランス文学・思想論』法政大学出版局、2019年

【Outline (in English)】
（Course outline）
In this course, students will study French existentialist philosophy. More specifically, they will focus on the thought of Jean-Paul Sartre and Simone de Beauvoir, examining not only their writings but also their practical activities.
（Learning Objectives）
Studying existentialism, a major intellectual movement of 20th-century France, is not only valuable for understanding philosophy in general but also aids in comprehending the world and reality.
（Learning activities outside of classroom）
Students will be expected to read reference books
（Grading Criteria /Policy）
Short reports : 40%、in class contribution: 60%

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

日本思想史研究Ⅰ-１

頼住　光子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、道元の主著である『正法眼蔵』の主要巻について、その思想構造や思想史的意義を中心に検討する。
また、この授業では、修士論文、博士論文、学会誌投稿論文をはじめとする論文を執筆するための指導も行う。参加者が、自分自身の研究テーマに基づいて発表を行い、それに基づいて議論を行ってテーマに対する理解を深める。
授業は、演習形式と講義で行う。演習としては、当番が発表を行い、それに基づいて参加者と議論を行う。
なお、必要に応じて講義を行い、教員から授業に関して必要事項を補足する。

【到達目標】
本講義を受講することによって、道元の思想構造についての基本知識を得ることができる。特に、『正法眼蔵』の主要な巻を読解することを通じて、禅仏教の専門用語に熟達し、仏教思想をより深く幅広く正確に理解することが可能となる。
あわせて修士論文、博士論文、学会誌投稿論文などの論文を執筆するための準備を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
当番の学生が発表し、それに基づいて議論を行う。必要事項について教員の方から補足説明を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入と授業方法についての説明、打ち合わせ	この授業の意図と授業方法等について説明する。
第2回	『正法眼蔵』とは何か	『正法眼蔵』についてその概要を講義形式で説明する。
第3回	『正法眼蔵』講読（1）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第4回	『正法眼蔵』講読（2）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第5回	『正法眼蔵』講読（3）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第6回	論文構想発表（1）	論文についての構想を各自発表する。発表内容について議論やアドヴァイスを行う。
第7回	論文構想発表（2）	論文についての構想を各自発表する。発表内容について議論やアドヴァイスを行う。
第8回	論文構想発表（3）	論文についての構想を各自発表する。発表内容について議論やアドヴァイスを行う。
第9回	『正法眼蔵』講読（4）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第10回	『正法眼蔵』講読（5）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第11回	『正法眼蔵』講読（6）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第12回	論文構想発表（4）	論文についての構想を各自発表する。発表内容について議論やアドヴァイスを行う。
第13回	論文構想発表（5）	論文についての構想を各自発表する。発表内容について議論やアドヴァイスを行う。
第14回	総括	『正法眼蔵』の思想構造について総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
水野弥穂子校注『正法眼蔵』（1）岩波文庫

【参考書】
授業中に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
「到達目標」の達成度合いに応じて以下の配分で評価する。
発表４０％
平常点６０％

【学生の意見等からの気づき】
仏教の基本用語についてはなるべく丁寧に思想的観点から説明する。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
質問については随時、お答えする。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
倫理学・日本倫理思想史
＜研究テーマ＞
日本中世仏教
＜主要研究業績＞
『日本倫理思想の考え方』山川出版社、2025
『原文で読む日本の思想』放送大学教育振興会、2024
『正法眼蔵入門』角川ソフィア文庫、2014など

【Outline (in English)】
In this class, we will examine the major volumes of Dogen's main work, the Shobogenzo, focusing on the structure of his thought and its significance in the history of thought.
This class will also provide guidance for writing master's theses, doctoral dissertations, and papers for academic journals. Participants will give presentations based on their own research themes and engage in discussions based on their presentations to deepen their understanding of the themes.
Classes will be conducted in the form of exercises and lectures. As for exercises, the person in charge will give a presentation and discuss with participants based on the presentation.
Lectures will be given as necessary, and the instructor will supplement the class with necessary information.
Grading will be decided based on presentation for 40% and in-class contribution for 60%.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

日本思想史研究Ⅰ-2

頼住　光子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、道元の主著である『正法眼蔵』の主要巻について、その思想構造や思想史的意義を中心に検討する。
また、この授業では、修士論文、博士論文、学会誌投稿論文などの論文を執筆するための指導も行う。参加者が、自分自身の研究テーマに基づいて発表を行い、それに基づいて議論を行ってテーマに対する理解を深める。
授業は、演習形式と講義で行う。演習としては、当番が発表を行い、それに基づいて参加者と議論を行う。
なお、必要に応じて講義を行い、教員から授業に関して必要事項を補足する。

【到達目標】
・「弁道話」『正法眼蔵』の記述を読解することを通じて、仏教の基礎概念を習得し、道元の思惟方法についての理解を深める。
・道元の思想の表現方法の特性を理解し、それを応用して道元の他の文章も理解できるようになる。
・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
（1）受講者全員に『正法眼蔵』の担当箇所を割り当てる。
（2）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、演習で発表をする。
（3）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
（4）討論の中で見出された重要な論点については、次回以降の演習でも継続的に議論していく。
（5）講師から『正法眼蔵』を読解するために不可欠な仏教思想の基本知識に関する知識について、適宜、補足説明する。
（6）理解の到達度を計るために適宜リアクションペーパーを提出してもらい、次回の授業においてフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	『正法眼蔵』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	『正法眼蔵』巻講読（1）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第3回	『正法眼蔵』講読（2）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第4回	『正法眼蔵』講読（3）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第5回	『正法眼蔵』講読（4）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第6回	『正法眼蔵』講読（5）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第7回	『正法眼蔵』講読（6）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第8回	『正法眼蔵』巻講読（7）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第9回	『正法眼蔵』講読（8）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第10回	『正法眼蔵』講読（9）	『正法眼蔵』巻について当番が発表し議論を行う。
第11回	『正法眼蔵』講読（10）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第12回	論文指導（1）	各自が執筆すべき論文について構想発表や中間報告を行う。
第13回	論文指導（2）	各自が執筆すべき論文について構想発表や中間報告を行う。
第14回	総括	『正法眼蔵』各巻から道元の思想構造の概略を理解し、検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の該当箇所を熟読した上で演習に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。
本授業の準備・復習時間は、計6時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
『正法眼蔵』（一）（岩波文庫）
参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】
まずは『正法眼蔵』の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。
参考文献は演習の際に適宜、示す。

【成績評価の方法と基準】
【到達目標】欄に記載した4点の達成度を基準としながら、発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（40％）と、演習内での発言や演習への参加姿勢（60％）によって評価する。
演習においては毎回の発言・質問を「必須」とするので、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で演習に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】
『正法眼蔵』の用語や語法について、できる限り丁寧に説明する。

【学生が準備すべき機器他】
発表担当の際には必ず紙媒体のレジュメを作成し配布すること。

【その他の重要事項】
質問は随時受け付ける。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
倫理学・日本倫理思想史
＜研究テーマ＞
日本中世仏教
＜主要研究業績＞
『日本倫理思想の考え方』山川出版社、2025
『原文で読む日本の思想』放送大学教育振興会、2024
『正法眼蔵入門』角川ソフィア文庫、2014など

【Outline (in English)】
In this class, we will examine the major volumes of Dogen's main work, the Shobogenzo, focusing on the structure of his thought and its significance in the history of thought.
This class will also provide guidance for writing master's theses, doctoral dissertations, and papers for academic journals. Participants will give presentations based on their own research themes and engage in discussions based on their presentations to deepen their understanding of the themes.
Classes will be conducted in the form of exercises and lectures. As for exercises, the person in charge will give a presentation and discuss with participants based on the presentation.
Lectures will be given as necessary, and the instructor will supplement the class with necessary information.
Grading will be decided based on the quality of the students' experimental performance in the lab 40%, in-class contribution 60%.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

日本思想史研究Ⅱ-１

山本　伸裕

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習では、西田幾多郎の主著『善の研究』を全編精読し、日本近代哲学の出発点をなす初期西田思想の体系的構造を理解することを目的とする。「純粋経験」を中心概念として、認識・行為・倫理・宗教がいかに一体的に構想されているかを検討し、西洋哲学との比較を踏まえつつ、日本哲学独自の問題設定を読み取る。

【到達目標】
『善の研究』における主要概念（純粋経験・思惟・意志・知的直観・善）を体系的に理解する。
西田哲学における倫理・宗教・認識の非分離的構造を説明できるようになる。
哲学的テキストを精読し、論点を整理して口頭および文章で表現する力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・受講生には、毎回、テキストの担当範囲で論点となりそう箇所をレジュメとしてまとめ、30分〜49分程度で発表してもらう。
・議論は、受講生が主体的にすすめてもらいたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	第1回　ガイダンス	演習の目的と方法 『善の研究』成立史（1911年） 西田哲学における位置づけ 岩波文庫版の構成確認
第2回	第2回　純粋経験①（概念導入）	講読範囲 第一編「純粋経験」第一章
第3回	第3回　純粋経験②（主客未分）	講読範囲 第一編「純粋経験」第二章
第4回	第4回　純粋経験③（意識・判断）	講読範囲 第一編「純粋経験」第三章
第5回	第5回　純粋経験④（経験と知）	講読範囲 第一編「純粋経験」第四章
第6回	第6回　実在①（統一としての実在）	講読範囲 第二編「実在」第一章
第7回	第7回　実在②（個物と統一）	講読範囲 第二編「実在」第二章
第8回	第8回　実在③（意志・目的）	講読範囲 第二編「実在」第三章
第9回	第9回　善①（善の定義）	講読範囲 第三編「善」第一章
第10回	第10回　善②（自己実現）	講読範囲 第三編「善」第二章
第11回	第11回　善③（道徳・人格）	講読範囲 第三編「善」第三章
第12回	第12回　宗教①（宗教的意識）	講読範囲 第四編「宗教」第一章
第13回	第13回　宗教②（神・絶対）	講読範囲 第四編「宗教」第二章
第14回	第14回　前期まとめ	『善の研究』の全体構造整理 純粋経験・実在・善・宗教の連関 後期テキストへの接続

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
西田幾多郎『善の研究』岩波文庫、1979年

【参考書】
小坂国継『善の研究 < 全注釈> 』講談社学術文庫　2006年

【成績評価の方法と基準】
到達目標の達成度合いに応じて、おおよそ以下の配分で総合的に成績を評価する。
・発表の意欲（40％）
・クオリティ（30％）
・授業態度（30％）

【学生の意見等からの気づき】
・質問相談等は、授業の前後などに、適宜受け付ける。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本倫理思想史
インド学・仏教学
死生学
＜研究テーマ＞
近代日本の宗教哲学
死生学（医療倫理）
＜主要研究業績＞　直近3点
１.『日本人の死生観を問う―「やまと言葉」の倫理学』NHKブックス、2026年
２.『清沢満之の宗教哲学』筑摩選書、2025年
３.「宗教」とは何か―「信」の救済力」（『宗教と救済・和解の哲学』丸善、2025年）所収

【Outline (in English)】
This seminar closely examines Nishida Kitarō's major work An Inquiry into the Good in its entirety, with the aim of understanding the systematic structure of his early philosophy, which marks a starting point of modern Japanese philosophy. Centering on the concept of "pure experience," the course analyzes how cognition, action, ethics, and religion are conceived as an integrated whole, while situating Nishida's thought in comparison with Western philosophy and highlighting its distinctive problem-setting.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

日本思想史研究Ⅱ-２

山本　伸裕

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この演習では、『思索と体験』所収の主要論考を精読し、『善の研究』以後の西田哲学の展開と変容を検討する。体系書から論文形式へと移行する中で、西田が直面した方法論的困難や、行為・宗教・自己をめぐる思索の深化を読み取り、後期西田哲学への思想史的接続を視野に入れる。

【到達目標】
『思索と体験』各論考の主題と問題構造を理解する。
『善の研究』との連続性と差異を思想史的に説明できるようになる。
日本哲学を宗教哲学・倫理学の文脈で比較的に考察する力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・受講生には、毎回、テキストの担当範囲で論点となりそう箇所をレジュメとしてまとめ、30分〜49分程度で発表してもらう。
・議論は、受講生が主体的にすすめてもらいたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	第1回　導入：『思索と体験』の位置づけ	・論文集としての性格 ・初期西田思想の転回点
第2回	第2回　「思索と体験」（前半）	・思索と生の乖離問題 ・哲学的方法の再検討
第3回	第3回　「思索と体験」（後半）	・体験の深化 ・哲学と言語の限界
第4回	第4回　「自覚に於ける直観と反省」①	・自覚概念の成立 ・反省の構造
第5回	第5回　「自覚に於ける直観と反省」②	・直観と論理 ・後期思想への萌芽
第6回	第6回　「宗教と道徳」	・宗教的体験の独自性 ・倫理との緊張関係
第7回	第7回　「芸術と道徳」	・表現行為の哲学 ・美と善の交差点
第8回	第8回　「知識と愛」	・認識と関係性 ・他者論への射程
第9回	第9回　「自己の意識」	・自己とは何か ・内面性批判
第10回	第10回　「行為的直観」①	・行為と直観の統合 ・『善の研究』との比較
第11回	第11回　「行為的直観」②	・実践哲学としての西田 ・武士道・宗教思想との接点
第12回	第12回　後期全体の再構成	・各論文の相互関係 ・思想的一貫性と揺らぎ
第13回	第13回　総合討論準備	・受講生報告 ・論点整理
第14回	第14回　後期まとめ（討論）	・『善の研究』からの連続と断絶 ・西田哲学の現代的意義

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各３時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
西田幾多郎『思索と体験』岩波文庫　1980年

【参考書】
参考書は特に指定しない。

【成績評価の方法と基準】
到達目標の達成度合いに応じて、おおよそ以下の配分で総合的に成績を評価する。
・発表の意欲（40％）
・クオリティ（30％）
・授業態度（30％）

【学生の意見等からの気づき】
質問・相談等は、授業の前後の時間に随時受け付ける。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本倫理思想史
インド学・仏教学
死生学
＜研究テーマ＞
近代日本の宗教哲学
死生学（医療倫理）
＜主要研究業績＞　直近3点
１.『日本人の死生観を問う―「やまと言葉」の倫理学』NHKブックス、2026年
２.『清沢満之の宗教哲学』筑摩選書、2025年
３.「宗教」とは何か―「信」の救済力」（『宗教と救済・和解の哲学』丸善、2025年）所収

【Outline (in English)】
This seminar examines major essays from Intuition and Reflection in Self-Consciousness in order to explore the development of Nishida Kitarō's philosophy after An Inquiry into the Good. Focusing on his transition from a systematic work to essay-based writings, the course considers key methodological issues and Nishida's evolving reflections on action, religion, and the self, with reference to his later philosophy.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

現象学研究Ⅰ-1

君嶋　泰明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』（1927年）を読みます。同書でハイデガーは、「存在」という概念がその意味をつねに「時間」から得ている／同概念がつねに「時間」を地平として理解されていると考え、そのことを論証しようとしました。同書をドイツ語原文で精読することを通じて、これがいかなる企図かを理解することを目指します。ドイツ語が読めない受講生は英訳での参加も可です。ドイツ語初学者や学部生の参加も歓迎します。

【到達目標】
①『存在と時間』のドイツ語原文（ないし英訳）の正確な訳読ができる。
②同書の思想を理解し、自分の理解したことを噛み砕いて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示します。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深めます。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行います。なお、以下の授業計画のページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	『存在と時間』の概要の説明
第2回	『存在と時間』の読解①	報告と討議（1-3頁）
第3回	『存在と時間』の読解②	報告と討議（4-6頁）
第4回	『存在と時間』の読解③	報告と討議（7-9頁）
第5回	『存在と時間』の読解④	報告と討議（10-13頁）
第6回	『存在と時間』の読解⑤	報告と討議（14-16頁）
第7回	『存在と時間』の読解⑥	報告と討議（17-19頁）
第8回	『存在と時間』の読解⑦	報告と討議（20-22頁）
第9回	『存在と時間』の読解⑧	報告と討議（23-25頁）
第10回	『存在と時間』の読解⑨	報告と討議（26-28頁）
第11回	『存在と時間』の読解⑩	報告と討議（29-31頁）
第12回	『存在と時間』の読解⑪	報告と討議（32-34頁）
第13回	『存在と時間』の読解⑫	報告と討議（35-36頁）
第14回	『存在と時間』の読解⑬	報告と討議（37-39頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨みます。参加者は該当箇所を熟読してきます。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer.
希望者には該当箇所のコピーを配布します。

【参考書】
適宜授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
担当者としての評価が80%、議論への参加度の評価が20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
現象学、技術の哲学
＜研究テーマ＞
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討、技術と人間の関係の研究
＜主要研究業績＞
・「ハイデガーの存在概念を再構成する」（『哲学研究』613号、2025年）
・「初期ハイデガーの実存思想――キルケゴール受容の観点から」（『法政哲学』20号、2024年）
・「存在要求の要求とそれへの応答――ハイデガー技術論の理解のために」（『Heidegger-Forum』17号、2023年）
・「ボルグマンからハイデガーへ――ハイデガー技術論再考」（『法政哲学』18号、2022年）
・「「存在忘却」とは何か」（『法政大学文学部紀要』82号、2021年）
・「信仰と哲学――ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」（『アルケー』26号、2018年）

【Outline (in English)】
(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's *Sein und Zeit*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand the thought in *Sein und Zeit*.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

現象学研究Ⅰ-2

君嶋　泰明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
春学期に引き続き、マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』（1927年）を読みます。同書でハイデガーは、「存在」という概念がその意味をつねに「時間」から得ている／同概念がつねに「時間」を地平として理解されていると考え、そのことを論証しようとしました。同書をドイツ語原文で精読することを通じて、これがいかなる企図かを理解することを目指します。ドイツ語が読めない受講生は英訳での参加も可です。ドイツ語初学者や学部生の参加も歓迎します。

【到達目標】
①『存在と時間』のドイツ語原文（ないし英訳）の正確な訳読ができる。
②同書の思想を理解し、自分の理解したことを噛み砕いて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示します。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深めます。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行います。なお、以下の授業計画のページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	『存在と時間』の概要の説明
第2回	『存在と時間』の読解①	報告と討議（40-42頁）
第3回	『存在と時間』の読解②	報告と討議（43-46頁）
第4回	『存在と時間』の読解③	報告と討議（47-49頁）
第5回	『存在と時間』の読解④	報告と討議（50-53頁）
第6回	『存在と時間』の読解⑤	報告と討議（54-56頁）
第7回	『存在と時間』の読解⑥	報告と討議（57-59頁）
第8回	『存在と時間』の読解⑦	報告と討議（60-62頁）
第9回	『存在と時間』の読解⑧	報告と討議（63-65頁）
第10回	『存在と時間』の読解⑨	報告と討議（66-68頁）
第11回	『存在と時間』の読解⑩	報告と討議（69-71頁）
第12回	『存在と時間』の読解⑪	報告と討議（72-74頁）
第13回	『存在と時間』の読解⑫	報告と討議（75-76頁）
第14回	『存在と時間』の読解⑬	報告と討議（77-79頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨みます。参加者は該当箇所を熟読してきます。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer.
希望者には該当箇所のコピーを配布します。

【参考書】
適宜授業で指示します

【成績評価の方法と基準】
担当者としての評価が80%、議論への参加度の評価が20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
現象学、技術の哲学
＜研究テーマ＞
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討、技術と人間の関係の研究
＜主要研究業績＞
・「ハイデガーの存在概念を再構成する」（『哲学研究』613号、2025年）
・「初期ハイデガーの実存思想――キルケゴール受容の観点から」（『法政哲学』20号、2024年）
・「存在要求の要求とそれへの応答――ハイデガー技術論の理解のために」（『Heidegger-Forum』17号、2023年）
・「ボルグマンからハイデガーへ――ハイデガー技術論再考」（『法政哲学』18号、2022年）
・「「存在忘却」とは何か」（『法政大学文学部紀要』82号、2021年）
・「信仰と哲学――ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」（『アルケー』26号、2018年）

【Outline (in English)】
(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's *Sein und Zeit*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand the thought in *Sein und Zeit*.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本文芸学Ａ

庄司　達也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　受講生は、講師の所蔵する近現代の作家や詩人、歌人、評論家らの直筆資料を対象として、翻刻、調査、分析を行い、報告をする。
　受講生は、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げる事の出来る力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】
資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、作品の読解に活用できる。また、その成果を自らの発表や論文で充分に発揮できる。
To become familiar with the basic procedures for reading materials, acquire basic skills for reading and understanding, and be able to draw out the rich information possessed by each material and use it in the reading of a work. The student should also be able to fully demonstrate the results of their reading in their own presentations and papers.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　毎回の講義では必ず報告者を立て、その報告を巡って意見を交わし、互いの読みを深める。
　なお、発表者は発表の前日15時までに配付資料（レジュメ）をPDFの形でLMSにアップロードし、他の受講者は授業までにあらかじめ目を通しておく。
In each lecture, there will always be a presenter, and students will exchange opinions and deepen each other's readings of the reports.
　The presenter must upload his/her resume in PDF format to the LMS by 3:00 p.m. on the day before the presentation, so that other students can read it before class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する資料についての説明。
第2回	担当教員による報告１	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス１
第3回	担当教員による報告２	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス２
第4回	受講者による報告１	発表と質疑応答
第5回	受講者による報告２	発表と質疑応答
第6回	受講者による報告３	発表と質疑応答
第7回	受講者による報告４	発表と質疑応答
第8回	受講者による報告５	発表と質疑応答
第9回	受講者による報告６	発表と質疑応答
第10回	受講者による報告７	発表と質疑応答
第11回	受講者による報告８	発表と質疑応答
第12回	受講者による報告９	発表と質疑応答
第13回	受講者による報告10	発表と質疑応答
第14回	総括	振り返り。 課題についての説明。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料や作品に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.Students are expected to obtain basic information about the materials each time.

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。
No specific designation.

【参考書】
特に指定しない。
No specific designation.

【成績評価の方法と基準】
講義中での報告とコメント（50％）、レポート等の提出物（50％）による総合評価。
Overall evaluation based on in-class presentations and comments (50%) and submitted assignments such as reports (50%).

【学生の意見等からの気づき】
受講生らの気付きを大切にする講義を行う。
Conduct lectures that value the insights of the students.

【学生が準備すべき機器他】
特に無し
Nothing in particular

【その他の重要事項】
受講生と相談の上、学外授業としての文学館見学を実施することもある。
　Depending on the student's preference, a field trip to the Museum of Literature may be arranged as an off-campus class.

【担当教員の専門分野等】
専門領域＞日本近代文学
＜研究テーマ＞芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容
＜主要研究業績＞
編著『芥川龍之介ハンドブック』〈2015　鼎書房）・共編『改造社のメディア戦略』〈2013　双文社出版）

【Outline (in English)】
Students will transcribe, investigate, analyze, and report on original manuscripts and materials from modern and contemporary writers, poets, songwriters, and critics held in the instructor's collection.
Students will cultivate the ability to engage with materials without preconceptions, extracting their rich information, while also aiming to apply these findings to literary research.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本文芸学Ｂ

庄司　達也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　前期開講科目「日本文芸学Ａ」に引き続き、受講生は講師の所蔵する近現代の作家や詩人、歌人、評論家らの直筆資料を取り上げ、翻刻、調査、分析を行い、報告をする。
　受講生は、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げる事の出来る力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】
資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、作品の読解などに活用できる。また、その成果を自らの発表や論文で充分に発揮できる。
To become familiar with the basic procedures for reading materials, acquire basic skills for reading and understanding, and be able to draw out the rich information possessed by each material and use it in the reading of a work. The student should also be able to fully demonstrate the results of their reading in their own presentations and papers.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　毎回の講義では必ず報告者を立て、その報告を巡って意見を交わし、互いの読みを深める。
　なお、発表者は発表の前日15時までに配付資料（レジュメ）をPDFの形でLMSにアップロードし、他の受講者は授業までにあらかじめ目を通しておく。
In each lecture, there will always be a presenter, and students will exchange opinions and deepen each other's readings of the reports.
　The presenter must upload his/her resume in PDF format to the LMS by 3:00 p.m. on the day before the presentation, so that other students can read it before class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する資料についての説明。
第2回	担当教員による報告１	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス１
第3回	担当教員による報告２	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス２
第4回	受講者による報告１	発表と質疑応答
第5回	受講者による報告２	発表と質疑応答
第6回	受講者による報告３	発表と質疑応答
第7回	受講者による報告４	発表と質疑応答
第8回	受講者による報告５	発表と質疑応答
第9回	受講者による報告６	発表と質疑応答
第10回	受講者による報告７	発表と質疑応答
第11回	受講者による報告８	発表と質疑応答
第12回	受講者による報告９	発表と質疑応答
第13回	受講者による報告10	発表と質疑応答
第14回	総括	振り返り。 課題についての説明。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料や作品に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。
　The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.Students are expected to obtain basic information about the materials each time.

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。
No specific designation.

【参考書】
特に指定しない。
No specific designation.

【成績評価の方法と基準】
講義中のコメントと報告（50％）、レポート等の提出物（50％）による総合評価。
Overall evaluation based on in-class comments and reports (50%) and submitted assignments such as reports (50%).

【学生の意見等からの気づき】
学生の気付きを大切にする。
I value students' insights.

【学生が準備すべき機器他】
特に無し。
Nothing in particular.

【その他の重要事項】
受講生と相談の上、学外授業としての文学館見学を実施することもある。
　Depending on the student's preference, a field trip to the Museum of Literature may be arranged as an off-campus class.

【担当教員の専門分野等】
専門領域＞日本近代文学
＜研究テーマ＞芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容
＜主要研究業績＞
編著『芥川龍之介ハンドブック』〈2015　鼎書房）・共編『改造社のメディア戦略』〈2013　双文社出版）

【Outline (in English)】
　Following the first-semester course "Japanese Literary Studies A," students will examine original manuscripts from modern and contemporary writers, poets, songwriters, and critics held in the instructor's collection. They will transcribe, research, analyze, and report on these materials.
Students will cultivate the ability to engage with the materials without preconceptions, extracting their rich information, while also aiming to apply these findings to literary research.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本文芸批評史Ａ

田中　和生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】
〈修士課程〉
　まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。
〈博士課程〉
　近代文学における批評の役割を理解し、日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れていることを前提とし、自分の研究テーマに基づいた注釈や解説が的確にできることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　講義と発表を組みあわせて進めます。
　まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。
　また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。
　授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第2回	森鷗外と北村透谷	森鷗外「早稲田文学の没理想」と北村透谷「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を読み、その意義を理解します。
第3回	正岡子規と作家夏目漱石の誕生	正岡子規「歌よみに与ふる書」を読み、写生文の意義と夏目漱石の文学について解説します。
第4回	坪内逍遙『小説神髄』を読む	日本の近代文学の出発点として、坪内逍遙『小説神髄』について発表してもらいます。
第5回	自然主義と1910年	田山花袋「露骨なる描写」を読み、日本の近代文学史における自然主義の隆盛と1910年の状況を理解します。
第6回	正宗白鳥の評論文を読む	印象批評の例として、正宗白鳥の評論文について発表してもらいます。
第7回	佐藤春夫と永井荷風	佐藤春夫「創作月旦」と永井荷風「花火」を読み、その意義を理解します。
第8回	小林秀雄の登場	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第9回	私小説から心境小説へ	広津和郎「散文芸術の位置」と久米正雄「『私』小説と『心境』小説」を読み、その意義を理解します。
第10回	保田與重郎の批評	戦前における文芸評論の到達点の一つである、保田與重郎の評論文について発表してもらいます。
第11回	プロレタリア文学と芥川龍之介の死	蔵原惟人「プロレタリア・レアリズムへの道」と宮本顕治「『敗北』の文学」を読み、その意義を理解します。
第12回	中村光夫の再出発	戦後文学の空間をかたちづくる、中村光夫の評論文について発表してもらいます。
第13回	河上徹太郎と平野謙	河上徹太郎「配給された『自由』」と平野謙「ひとつの反措定」を読み、その意義を理解します。
第14回	江藤淳の登場	戦後文学を問い直す視点を提示しつづけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』［明治・大正篇］および［昭和篇］（岩波文庫）

【参考書】
　必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
　成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。
　まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。
　また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】
　発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【その他の重要事項】
　文芸評論家として創作を批評する経験をもつ者が、その知見を生かして講義します。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉
　現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることです。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口などを準備しています。
〈主要研究業績〉
　1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
　2、『あの戦場を越えて――日本現代文学論』（講談社）2005年
　3、『新約太宰治』（講談社）2006年
　4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
　5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年
　6、『なぜ文芸時評は終わるのか』（アーツアンドクラフツ）2024年

【Outline (in English)】
< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.
< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in modern literature, and the second is to gain a relative perspective on the history of modern Japanese literature. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.
< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of modern Japanese literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.
< Grading Criteria/Policy> Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports.In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class.In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本文芸批評史Ｂ

田中　和生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　日本の現代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】
〈修士課程〉
　まず現代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の現代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。
〈博士課程〉
　現代文学における批評の役割を理解し、日本の現代文学史を相対化する視点を手に入れていることを前提とし、自分の研究テーマに基づいた注釈や解説が的確にできることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　講義と発表を組みあわせて進めます。
　まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。
　また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。
　授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	日本の現代文学について	現代ヨーロッパと現代日本を比較して、現代文学全体について概説します。
第2回	中野重治と高見順	中野重治「閏二月二九日」と高見順「描写のうしろに寝てゐられない」を読み、その意義を理解します。
第3回	1945年と無頼派の誕生	日本の敗戦の年である1945年前後の文学における変化に注意しながら、坂口安吾「堕落論」を読みます。
第4回	吉本隆明の出発	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第5回	戦前批判と戦後文学のはじまり	宮本百合子「歌声よ　おこれ」と小野十三郎「詩論」を読み、その意義を理解します。
第6回	奥野健男の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、奥野健男の評論文について発表してもらいます。
第7回	武田泰淳と竹内好	武田泰淳「滅亡について」と竹内好「近代主義と民族の問題」を読み、その意義を理解します。
第8回	磯田光一の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、磯田光一の評論文について発表してもらいます。
第9回	福田恒存と国語の問題	福田恒存「私の国語教室」を読み、その意義を理解するとともに大岡昇平の新字新かなに対する態度について考察します。
第10回	蓮実重彦の登場	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、蓮実重彦の評論文について発表してもらいます。
第11回	言語論と吉本隆明	20世紀以降の言語論の意義について考察した上で吉本隆明の評論文を読み、その意義を理解します。
第12回	加藤典洋の出発	ポストモダン派と戦後文学を架橋する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第13回	ポストモダン文学論	1970年代以降の日本のポストモダン派の評論文について考察を加え、その意義を理解します。
第14回	斉藤美奈子の批評	フェミニズム批評の代表的な評論家である、斉藤美奈子の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　日本の現代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】
　必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
　成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。
　まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。
　また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】
　発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【その他の重要事項】
　文芸評論家として創作を批評する経験をもつ者が、その知見を生かして講義します。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉
　現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることです。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口などを準備しています。
〈主要研究業績〉
　1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
　2、『あの戦場を越えて――日本現代文学論』（講談社）2005年
　3、『新約太宰治』（講談社）2006年
　4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
　5、『敗戦後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年
　6、『なぜ文芸時評は終わるのか』（アーツアンドクラフツ）2024年

【Outline (in English)】
< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese contemporary literature through the writings of each critic and the stream of criticism.
< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in contemporary literature, and the second is to obtain a perspective that relativizes the history of contemporary literature in Japan. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.
< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of Japanese contemporary literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics to be discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.
< Grading Criteria/Policy> Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports.In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class.In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本古代文芸原典研究Ａ

森　陽香

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
主な上代文学作品（『万葉集』『古事記』『日本書紀』『風土記』）を通して、日本の古代および古代性について研究します。春学期は、任意の作品を一つ研究対象として取り上げ、その作品を見つめ、疑問に気づき、その疑問を解き明かしてゆくための研究方法を、履修者各自が模索します。

【到達目標】
（１）修士課程の人は、研究するための具体的な手段を体験し、自分が知りたいと思うことに対して適切な研究方法をとることができるようになることが目標です。
（２）博士課程の人は、自由で創造性の高い研究活動を行い、自分が設定した問いに対して、はっきりとした成果・結論を出すことを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
はじめは、教員の側から研究方法の例をいくつか講義形式で示し、その後、履修者各自の演習形式で進めます。授業内で発表された内容に対してはその場でフィードバックを行うほか、授業時間外にも学生からの求めがあれば個別指導を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	履修者の興味関心を確認するとともに、授業全体の進め方を説明します。
第2回	研究方法の例１	『万葉集』を研究するための方法の一例を、教員側から提示します。
第3回	研究方法の例２	『風土記』を研究するための方法の一例を、教員側から提示します。
第4回	予行演習１	履修者各自が、自分で選択した作品について、疑問点などを発表します。
第5回	予行演習２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第6回	予行演習３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第7回	演習１	履修者各自が、予行演習として発表した疑問点について、具体的に調査してきた成果を発表します。
第8回	演習２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第9回	演習３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第10回	演習４	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第11回	演習５	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第12回	研究発表１	履修者各自が、半年間の研究成果をまとめて、発表します。
第13回	研究発表２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第14回	研究発表３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
演習形式のため、授業内における発表の準備（調査研究・発表資料作成など）が必要です。少なくとも、授業の準備・復習それぞれ、各2時間程度を要します。

【テキスト（教科書）】
教員主導で行う最初の数回は、プリントを配布します。履修者の発表では、発表者が自分で資料を作成します。よって、履修者全員が共通で購入すべきテキストはありません。

【参考書】
授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
予行演習（１０%）・演習（２０%）・研究発表（４０%）と、最低３回は発表が回ってくる予定ですので、それぞれの発表内容、および、他の履修者の発表に対する質疑応答の積極性（３０%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】
履修者によって、上代文学に対する基礎知識に差があるので、上代文学専門の学生にとっても、それ以外の学生にとっても有意義な研究の場になるよう、特に学期の最初の数回の授業でよく相談を重ねてから進めたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
どのような方法で発表資料の授受を行うか、初回授業時に相談します。

【その他の重要事項】
特にありません。

【Outline (in English)】
We study ancient Japan and its antiquity through major works of ancient literature (Man'yoshu, Kojiki, Nihon Shoki, and Fudoki).
By the end of the course, students should be able to do the followings:
For　master's program ： The goal is to be able to use appropriate research methods for what you want to know.
For　doctoral course ： We aim to carry out free and highly creative research activities and produce clear results and conclusions.
Your study time will be more than four hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Research presentation: 70%、question and answer session:30%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本古代文芸原典研究Ｂ

森　陽香

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
主な上代文学作品（『万葉集』『古事記』『日本書紀』『風土記』）を通して、日本の古代および古代性について研究します。秋学期は、一つの「素材」を決めて、上代文学作品を横断しながら、その素材について、あるいは、その素材をとおして疑問点を見出し、その疑問を解き明かしてゆくための研究方法を、履修者各自が模索します。

【到達目標】
（１）修士課程の人は、研究するための具体的な手段を体験し、自分が知りたいと思うことに対して適切な研究方法をとることができるようになることが目標です。
（２）博士課程の人は、自由で創造性の高い研究活動を行い、自分が設定した問いに対して、はっきりとした成果・結論を出すことを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
はじめは、教員の側から研究方法の例をいくつか講義形式で示し、その後、履修者各自の演習形式で進めます。授業内で発表された内容に対してはその場でフィードバックを行うほか、授業時間外にも学生からの求めがあれば個別指導を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	履修者の興味関心を確認するとともに、授業全体の進め方を説明します。
第2回	研究方法の例１	「素材」を研究するための方法の一例を、教員側から提示します。
第3回	研究方法の例２	前回とはまた別の「素材」を選び、その研究方法の一例を、教員側から提示します。
第4回	予行演習１	履修者各自が、自分で選択した素材について、疑問点などを発表します。
第5回	予行演習２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第6回	予行演習３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第7回	演習１	履修者各自が、予行演習として発表した疑問点について、具体的に調査してきた成果を発表します。
第8回	演習２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第9回	演習３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第10回	演習４	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第11回	演習５	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第12回	研究発表１	履修者各自が、半年間の研究成果をまとめて、発表します。
第13回	研究発表２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第14回	研究発表３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
演習形式のため、授業内における発表の準備（調査研究・発表資料作成など）が必要です。少なくとも、授業の準備・復習それぞれ、各2時間程度を要します。

【テキスト（教科書）】
教員主導で行う最初の数回は、プリントを配布します。履修者の発表では、発表者が自分で資料を作成します。よって、履修者全員が共通で購入すべきテキストはありません。

【参考書】
授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
予行演習（１０%）・演習（２０%）・研究発表（４０%）と、最低３回は発表が回ってくる予定ですので、それぞれの発表内容、および、他の履修者の発表に対する質疑応答の積極性（３０%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】
履修者によって、上代文学に対する基礎知識に差があるので、上代文学専門の学生にとっても、それ以外の学生にとっても有意義な研究の場になるよう、特に学期の最初の数回の授業でよく相談を重ねてから進めたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
どのような方法で発表資料の授受を行うか、初回授業時に相談します。

【その他の重要事項】
特にありません。

【Outline (in English)】
We study ancient Japan and its antiquity through major works of ancient literature (Man'yoshu, Kojiki, Nihon Shoki, and Fudoki).
By the end of the course, students should be able to do the followings:
For master's program ： The goal is to be able to use appropriate research methods for what you want to know.
For doctoral course ： We aim to carry out free and highly creative research activities and produce clear results and conclusions.
Your study time will be more than four hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Research presentation: 70%、question and answer session:30%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本古代文芸演習Ａ

加藤　昌嘉

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
◆『源氏物語』を、写本の原文に基づいて、正確に解読してゆきます。注釈書・現代語訳は多く存在しますが、『源氏物語』の文章・場面は、まだ、きちんと、読み解かれていないからです。
◆本年度は、河内本の「花宴」巻の後半と、「葵」巻の前半を解読してゆきます。

【到達目標】
以下の３点を身に付けることが目標です。
●古文を正確に訳す能力
●文法・語法を調べる能力
●先行の注釈書を比較する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
発表者は、河内本『源氏物語』の影印を元に、整定本文と、現代語訳と、注釈を、作成し、プレゼンテーションを行います。それを元に、参加者全員でディスカッションをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「花宴」	左大臣邸で楽器演奏
3	「花宴」	右大臣邸の藤の花の宴
4	「花宴」	右大臣邸の藤の花の宴
5	「花宴」	朧月夜の女君と再会
6	「花宴」	朧月夜の女君と再会
7	「葵」	桐壺帝、譲位
8	「葵」	六条御息所の娘
9	「葵」	六条御息所の娘
10	「葵」	六条御息所と朝顔の姫君
11	「葵」	葵上、懐妊
12	「葵」	新しい斎院、着任
13	論文合評	先行論文を検証する
14	まとめ	半年間の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
市販の『源氏物語』テキストで、「若紫」巻、「紅葉賀」巻、「花宴」巻を読むこと。
予習復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『尾州家河内本源氏物語』（八木書店）を使用しますが、この影印については、授業時に詳しく説明します。

【参考書】
▼『源氏物語』のテキスト（原文＋注釈）として、以下のいずれかを、座右に置いて、読み進めてください。
◎柳井滋ほか『源氏物語』１，２（岩波文庫）
◎玉上琢弥『源氏物語　現代語訳付き』１，２（角川ソフィア文庫）
◎石田穣二ほか『新潮日本古典集成　源氏物語』１，２（新潮社）
◎鈴木一雄ほか『源氏物語の鑑賞と基礎知識　紅葉賀・花宴』（至文堂）
◎鈴木一雄ほか『源氏物語の鑑賞と基礎知識　葵』（至文堂）
◎阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集　源氏物語』１，２（小学館）→法政大学図書館オンラインデータベース、ジャパンナレッジLibで、閲読可能
▼『源氏物語』の現代語訳として、以下の物も参考になります。
◎林望『謹訳源氏物語　改訂新修』１，２（祥伝社文庫）
◎大塚ひかり『源氏物語』１（ちくま文庫）
◎今泉忠義『源氏物語　新装版』１（講談社学術文庫）
◎角田光代『源氏物語』１，２（河出文庫）

【成績評価の方法と基準】
以下の２点を重視して評価します。
●発表プリントとプレゼンテーションの質、５０％
●ディスカッション参加度、５０％。

【学生の意見等からの気づき】
議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】
◆専門領域：日本古典文学
◆研究テーマ：平安時代の物語
◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版、2011年）、『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版、2014年）ほか

【Outline (in English)】
Outline and objectives:
We will accurately decipher *The Tale of Genji* based on the original manuscript.
This year, we will decipher the latter half of the “Hana-no-en” chapter and the first half of the “Aoi” chapter of the Kawachi-bon.
Goal:
The goal is to master the following three skills:
● The ability to accurately translate classical Japanese texts
● The ability to research grammar and usage
● The ability to compare existing commentaries
Work to be done outside of class:
Before each class meeting,students will be expected to have read "Wakamurasaki", "Momiji-no-ga" and "Hana-no-en" chapter.
Preparation and review time shall be two hours each as standard.
Grading criteria:
The following two points will be emphasized in the evaluation:
● Quality of presentation handouts and presentation, 50%
● Participation in discussions, 50%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本古代文芸演習Ｂ

加藤　昌嘉

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
◆『源氏物語』を、写本の原文に基づいて、正確に解読してゆきます。注釈書・現代語訳は多く存在しますが、『源氏物語』の文章・場面は、まだ、きちんと、読み解かれていないからです。
◆秋学期は、河内本の「葵」巻を解読してゆきます。

【到達目標】
以下の３点を身に付けることが目標です。
●古文を正確に訳す能力
●文法・語法を調べる能力
●先行の注釈書を比較する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
発表者は、河内本『源氏物語』の影印を元に、整定本文と、現代語訳と、注釈を、作成し、プレゼンテーションを行います。それを元に、参加者全員でディスカッションをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「葵」	葵祭（賀茂祭）
3	「葵」	葵上の車と六条御息所の車
4	「葵」	葵上の車と六条御息所の車
5	「葵」	六条御息所の屈辱
6	「葵」	六条御息所の屈辱
7	「葵」	光源氏の勇姿
8	「葵」	朝顔の姫君の思い
9	「葵」	事件を知る光源氏
10	「葵」	光源氏と紫上
11	「葵」	光源氏と紫上
12	「葵」	源典侍登場
13	論文合評	先行論文を検証する
14	まとめ	半年間の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
市販の『源氏物語』テキストで、「若紫」巻、「紅葉賀」巻、「花宴」巻を読むこと。
予習復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『尾州家河内本源氏物語』（八木書店）を使用しますが、この影印については、授業時に詳しく説明します。

【参考書】
▼『源氏物語』のテキスト（原文＋注釈）として、以下のいずれかを、座右に置いて、読み進めてください。
◎柳井滋ほか『源氏物語』１，２（岩波文庫）
◎玉上琢弥『源氏物語　現代語訳付き』１，２（角川ソフィア文庫）
◎石田穣二ほか『新潮日本古典集成　源氏物語』１，２（新潮社）
◎鈴木一雄ほか『源氏物語の鑑賞と基礎知識　葵』（至文堂）
◎阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集　源氏物語』１，２（小学館）→法政大学図書館オンラインデータベース、ジャパンナレッジLibで、閲読可能
▼『源氏物語』の現代語訳として、以下の物も参考になります。
◎林望『謹訳源氏物語　改訂新修』１，２（祥伝社文庫）
◎大塚ひかり『源氏物語』１（ちくま文庫）
◎今泉忠義『源氏物語　新装版』１（講談社学術文庫）
◎角田光代『源氏物語』１，２（河出文庫）

【成績評価の方法と基準】
以下の２点を重視して評価します。
●発表プリントとプレゼンテーションの質、５０％
●ディスカッション参加度、５０％。

【学生の意見等からの気づき】
議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】
◆専門領域：日本古典文学
◆研究テーマ：平安時代の物語
◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版、2011年）、『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版、2014年）ほか

【Outline (in English)】
Outline and objectives:
We will accurately decipher *The Tale of Genji* based on the original manuscript.
This year, we will decipher the first half of the “Aoi” chapter of the Kawachi-bon.
Goal:
The goal is to master the following three skills:
● The ability to accurately translate classical Japanese texts
● The ability to research grammar and usage
● The ability to compare existing commentaries
Work to be done outside of class:
Before each class meeting,students will be expected to have read "Wakamurasaki", "Momiji-no-ga" and "Hana-no-en" chapter.
Preparation and review time shall be two hours each as standard.
Grading criteria:
The following two points will be emphasized in the evaluation:
● Quality of presentation handouts and presentation, 50%
● Participation in discussions, 50%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本中世文芸原典研究Ａ

阿部　真弓

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。
　今年度は、鴨長明の歌論書『無名抄』を取り上げます。随筆『方丈記』の作者として有名な鴨長明ですが、長明は六条源家の俊恵から和歌を学び、後鳥羽院にその才を認められた歌人で、『無名抄』はそうした立場から著された作品です。ただ、歌論書に分類されてはいますが、和歌理論だけでなく、歌人の逸話や自身の回想等も多く含んでおり、説話集的でもあり、随筆的でもある作品です。
　春学期の授業では、歌論や実作上の注意に関わる内容等を中心に、適切かつ詳細に注釈を施して現代語に訳し、鴨長明の和歌観について考察します。

【到達目標】
①適切に文献を調査し、和歌を読み解く能力を身につける。
②くずし字を読むことができる。
③プレゼンテーション能力を身につける。
④ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
影印本をテキストとします。教員の講義、くずし字を読む練習、受講生の発表・討論を取り混ぜながら、『無名抄』を精読します。なお、受講生からの質問や意見を随時受け付け、討論へ進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要の説明
2	『無名抄』概説	『無名抄』に関する問題を整理し、説明する。
3	鴨長明について	鴨長明の事績等の説明
4	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する。
5	変体仮名について	変体仮名の解説・解読練習
6	くずし字について	漢字のくずし字に関する説明、解読練習
7	『無名抄』読解	受講生Ａによる発表、受講生による討論
8	『無名抄』読解	受講生Ｂによる発表、受講生による討論
9	『無名抄』読解	受講生Ｃによる発表、受講生による討論
10	『無名抄』読解	受講生Ｄによる発表、受講生による討論
11	『無名抄』読解	受講生Ｅによる発表、受講生による討論
12	『無名抄』読解	受講生Ｆによる発表、受講生による討論
13	『無名抄』読解	受講生Ｇによる発表、受講生による討論
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　授業前には参考書等を読み、『無名抄』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。
　発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者は参考書等を確認し、どのような問題点のある章段なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。
　本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
『無名抄 現代語訳付き (角川ソフィア文庫)』（KADOKAWA、2013年）
『鴨長明と寂蓮 (コレクション日本歌人選 49)』（小林一彦、笠間書院、2012年）

【成績評価の方法と基準】
【授業の到達目標】①～④に照らし、発表内容またはレポート70％（①～④）、討論への参加度30％（④）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の関心に応じた教材を適宜配布します。また、随時、くずし字を読む練習も行います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞日記文学、和歌
＜主要研究業績＞「『とはずがたり』の恋―物語る二条」（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論―糾える言葉の連鎖―」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひぢ』考―藤原為家の涙―」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline (in English)】
Course outline:
This course deals with *Mumyō shō* (a poetic treatise by Kamo no Chōmei) .
Learning Objectives:
The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy:
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本中世文芸原典研究Ｂ

阿部　真弓

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。
　今年度は、鴨長明の歌論書『無名抄』を取り上げます。随筆『方丈記』の作者として有名な鴨長明ですが、長明は六条源家の俊恵から和歌を学び、後鳥羽院にその才を認められた歌人で、『無名抄』はそうした立場から著された作品です。ただ、歌論書に分類されてはいますが、和歌理論だけでなく、歌人の逸話や自身の回想等も多く含んでおり、説話集的でもあり、随筆的でもある作品です。
　秋学期の授業では、歌人の伝記や逸話に関わる内容等を中心に、適切かつ詳細に注釈を施して現代語に訳し、鴨長明の和歌観について考察します。

【到達目標】
①適切に文献を調査し、和歌を読み解く能力を身につける。
②くずし字を読むことができる。
③プレゼンテーション能力を身につける。
④ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
影印本をテキストとします。教員の講義、くずし字を読む練習、受講生の発表・討論を取り混ぜながら、『無名抄』を精読します。なお、受講生からの質問や意見を随時受け付け、討論へ進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概要の説明
第2回	『無名抄』概説	『無名抄』に関する問題を整理し、説明する。
第3回	院政期から鎌倉時代の歌壇	歌道家（六条源家、六条藤家、御子左家）の動向に関する説明
第4回	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する。
第5回	くずし字について	変体仮名の解説・解読練習
第6回	『無名抄』読解	受講生Aによる発表、受講生による討論
第7回	『無名抄』読解	受講生Bによる発表、受講生による討論
第8回	『無名抄』読解	受講生Cによる発表、受講生による討論
第9回	『無名抄』読解	受講生Dによる発表、受講生による討論
第10回	『無名抄』読解	受講生Eによる発表、受講生による討論
第11回	『無名抄』読解	受講生Fによる発表、受講生による討論
第12回	『無名抄』読解	受講生Gによる発表、受講生による討論
第13回	『無名抄』読解	受講生Hによる発表、受講生による討論
第14回	まとめ	秋学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　授業前には参考書等を読み、『無名抄』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。
　発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者は参考書等を確認し、どのような問題点のある章段なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。
　本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
『無名抄 現代語訳付き (角川ソフィア文庫)』（KADOKAWA、2013年）
『鴨長明と寂蓮 (コレクション日本歌人選 49)』（小林一彦、笠間書院、2012年）

【成績評価の方法と基準】
【授業の到達目標】①～④に照らし、発表内容またはレポート70％（①～④）、討論への参加度30％（④）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の関心に応じた教材を適宜配布します。また、随時、くずし字を読む練習も行います。

【その他の重要事項】
秋学期科目のみの履修も可能ですが、理解を深めるために春学期科目Aの受講をおすすめします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞日記文学、和歌
＜主要研究業績＞「『とはずがたり』の恋―物語る二条」（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論―糾える言葉の連鎖―」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひぢ』考―藤原為家の涙―」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline (in English)】
Course outline:
This course deals with *Mumyō shō* (a poetic treatise by Kamo no Chōmei) .
Learning Objectives:
The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy:
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本中世文芸演習Ａ

伊海　孝充

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本講義では、世阿弥伝書のうち、『花伝』第二物学条々を読む。世阿弥伝書の概略と『花伝』研究の現状を確認した上で、物学条々の諸本比較・校訂本文作成を行ない、作品研究に結びつける問題点を探る。

【到達目標】
本講義では、『花伝』第二物学条々の精読を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法の習得を目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点の見つけ、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
演習形式によって進める。参加者で当該資料を分担し、諸本比較・注釈等を行なう。また、その資料の解釈をもとに、自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談
第2回	世阿弥伝書概略（１）	世阿弥伝書の種類
第3回	世阿弥伝書概略（２）	先行研究
第4回	『花伝』概略（１）	構成と諸本
第5回	『花伝』概略（２）	先行研究
第6回	物学条々「女」	校異と校訂本文の作成
第7回	物学条々「老人」	校異と校訂本文の作成
第8回	物学条々「直面」「法師」	校異と校訂本文の作成
第9回	物学条々「物狂」	校異と校訂本文の作成
第10回	物学条々「修羅」	校異と校訂本文の作成
第11回	物学条々「神」	校異と校訂本文の作成
第12回	物学条々「鬼」	校異と校訂本文の作成
第13回	物学条々「唐事」	校異と校訂本文の作成
第14回	まとめ	本講義内容の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業内に指示する。

【参考書】
授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】
講義での発表　７０％
講義での発言　３０％

【学生の意見等からの気づき】
専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞能楽
＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011年）「「江戸時代初期観世流整版謡本群の研究（三）」（『能楽研究』49号、2025年3月）

【Outline (in English)】
Course Outline: In this lecture we will study the theory of Noh mimicry as described in “Kaden”. In the process, we learn about the outline of the scrolls written by Zeami.
Learning Objectives: The goals of this course are to learn how to treat classical literature and how to read variant kana through exposure to a large number of sources.
Learning Activities Outside of the Classroom: Your study time will be more than four hours for a class.
Grading Criteria/Policy: Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本中世文芸演習Ｂ

伊海　孝充

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この講義では、春学期から引き続き、世阿弥伝書を通して、能の物真似理論を研究する。具体的には、以下の２点。
①　世阿弥の物真似理論の展開を考察する。
②　具体的な作品を用いて、世阿弥の物真似理論を考察する。

【到達目標】
本講義では、世阿弥伝書と作品の分析を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法の習得を目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、世阿弥伝書と作品を関係づけて分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
演習形式によって進める。参加者で当該資料を分担し、伝書・作品を分析する。また、発表者には「結論」がある考察を示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談
第2回	『花伝』第二物学条々の概略	春学期の復習
第3回	世阿弥伝書概略	春学期の復習
第4回	「先能其物成」	『花鏡』を中心に
第5回	「似せぬ位」	『花伝第七別紙口伝』を中心に
第6回	「似得る位」	『拾玉得花』を中心に
第7回	「無主風」「有主風」	『至花道』以降の伝書
第8回	「女」の物真似	受講者による作品分析
第9回	「老人」の物真似	受講者による作品分析
第10回	「修羅」の物真似	受講者による作品分析
第11回	「物狂」の物真似	受講者による作品分析
第12回	「神」の物真似	受講者による作品分析
第13回	「鬼」の物真似	受講者による作品分析
第14回	まとめ	本講義内容の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内に指示する。

【参考書】
授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】
講義での発表　７０％
講義での発言　３０％

【学生の意見等からの気づき】
専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞能楽
＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011年）「「江戸時代初期観世流整版謡本群の研究（三）」（『能楽研究』49号、2025年3月）

【Outline (in English)】
Course Outline: This lecture examines the theory of mimicry in Noh based on the treatise written by Zeami. It also applies this theory to the analysis of specific works.
Learning Objectives: The goals of this course are to learn how to treat classical literature and how to analyze Noh plays on my own.
Learning Activities Outside of the Classroom: Your study time will be more than four hours for a class.
Grading Criteria/Policy: Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本近世文芸原典研究Ａ

小林　ふみ子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
18世紀後半～19世紀前半おける江戸狂歌の流行を背景として制作された狂歌摺物（私家版の浮世絵）のうち、和漢の古典籍をテーマとして制作された作品を読解する。現段階では四方連制作、北斎画「馬尽」をとりあげる予定。当時の和漢の学芸の流行をふまえて設定されたテーマを題として詠まれた狂歌と、それに取り合わされた北斎の挿絵は、どのような関係にあるのか。いまだ定説をみないこの謎に挑んでみましょう！

【到達目標】
（１）作品を翻刻し、みずから注釈を施ししながら読む力をつける。
（２）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
背景についての概説のあと、まずは作品を割り当ててテキストを翻刻し、相互に確認しましょう。
その後、それぞれの図像の分析とテキストとの関係について発表してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講義1	江戸狂歌の流行と摺物制作について
第2回	講義2	浮世絵の歴史のなかの摺物 受講生の発表作品選定
第3回	講義3	絵師北斎について
第4回	翻刻をしてみよう1	くずし字の基本
第5回	翻刻をしてみよう2	各自の担当作品の翻刻確認
第6回	学生の発表1	作品1　馬貝（例）
第7回	学生の発表2	作品2　駒形堂（例）
第8回	学生の発表3	作品3　駒止石（例）
第9回	学生の発表4	作品4　馬蹄石（例）
第10回	学生の発表5	作品5　駒鳥（例）
第11回	学生の発表6	作品6　初午詣（例）
第12回	学生の発表7	作品7　木馬（例）
第13回	学生の発表8	作品8　有馬産（例）
第14回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎週、次回の場面を確認してきましょう。
発表担当者は作品解釈の発表を用意してください。

【テキスト（教科書）】
とくになし。

【参考書】
江戸狂歌の基本については江戸狂歌研究会編『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院　2014）参照。

【成績評価の方法と基準】
毎回の出席は当然の前提とした上で、報告70％、授業中の質疑などの参加態度30％によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。
各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【その他の重要事項】
授業の実施形態は受講生の様子を見てみんなで相談して決めましょう。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化
＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作
＜著書＞
【単著】
『へんちくりん江戸挿絵本』インターナショナル新書（集英社インターナショナル、2019）
『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店　2014→角川ソフィア文庫2024）
『天明狂歌研究』（汲古書院　2009）
【共編著】
『水都としての東京とヴェネツィア』（法政大学出版局　2022）
『最後の文人　石川淳の世界』集英社新書（集英社　2021）
『東アジア文化講座3東アジアに共有される文学圏』（文学通信　2021）
『好古趣味の歴史　江戸東京からたどる』（文学通信　2020）
『北斎　視覚のマジック　小布施・北斎館名品集』（平凡社　2019）
『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史』（文学通信　2019）
『別冊太陽　歌麿決定版』（平凡社　2016）
『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院　2015）
『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院　2014）
『別冊太陽　北斎決定版』（平凡社　2010）

【Outline (in English)】
(Outline) Reading surimono, or privately published prints with verses produced in 18-19th century Edo to analyze relationship between texts and images.
(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(70%) and in-class contribution(30%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本近世文芸原典研究Ｂ

小林　ふみ子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸時代の絵入の作品を、挿絵と合わせて読解する。秋学期は、春学期の受講生と相談して作品を決定する。今のところの提案予定は黄表紙の名手芝全交作に北尾政美（のちの鍬形蕙斎）が挿絵を担当して縦横に妖怪を活躍させた『俵藤太振出薬』（寛政2年鶴屋喜右衛門版）https://kokusho.nijl.ac.jp/work/366018?ln=ja。

【到達目標】
【修士課程】
（1）作品を翻刻し、みずから注釈を施ししながら読む基礎的な力をつける。
（2）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献を知る。
【博士後期課程】
（1）作品を翻刻し、みずから注釈を施ししながら読む力を確実にする。
（2）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	概説	作者と画工、時代状況についての概説
第2回	学生の発表	上巻1
第3回	学生の発表	上巻2
第4回	学生の発表	上巻3
第5回	学生の発表	上巻4
第6回	学生の発表	中巻1
第7回	学生の発表	中巻2
第8回	学生の発表	中巻3
第9回	学生の発表	中巻4
第10回	学生の発表	下巻1
第11回	学生の発表	下巻2
第12回	学生の発表	下巻3
第13回	学生の発表	下巻4
第14回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎週、次回のテキストを読んでくる。
発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】
なし

【参考書】
長島弘明編『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典』（文学通信　2019）・小林ふみ子『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル・インターナショナル新書　2019）その他、適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
毎回の出席は当然の前提とした上で、報告70％、授業中の質疑などの参加態度30％によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
翻刻を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。
各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化
＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作
＜近年の論文・その他書き物＞
【論文】
「大田南畝　遊女の声を伝える」『日本歴史』932号　2026年
「近世随筆における考証の意義　大田南畝から考える「考証随筆」」『国語と国文学』102巻2号2025
「狂歌連中、摺物をつくる」『レスコビッチコレクションの摺物―パリから来た北斎・広重・北渓・岳亭―』大和文華館2024
「懐古趣味流行のなかの鍬形蕙斎」『國華』1542号 2024
「大田南畝の狂詩と明詩」『明清文学論集　その楽しさ その広がり』東方書店2024
'Generative Interactions:The Osmotic Boundaries Between Kusazōshi and Ukiyo-e',Graphic Narratives from Early Modern Japan :The world of Kusazoshi, Brill,2024
「作者の虚構性と実体性：大田南畝周辺から 」『國文論叢別冊』1号 2023
「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113号　2021（査読付）
「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印―浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号　2020（査読付）
「書籍を模擬する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から―」『京都語文』26号　2018
「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

【Outline (in English)】
(Outline)Reading illustrated works to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.
（Learning activities outside of classroom） Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(70%) and in-class contribution(30%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本近世文芸演習Ａ

丸井　貴史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近世小説の研究方法を学ぶ。工具書の利用法や先行研究の整理のしかたなど、基礎的な事柄を確認したうえで、作品本文に注釈をつけ、読解する。また、自らの解釈が研究史的にいかに位置づけられるかを的確に把握できるようにする。

【到達目標】
（１）作品と作家に関する知識を身につけることができる。
（２）作品の本文に対して適切な注釈を施すことができる。
（３）作品について自ら問いを立て、分析することができる。
（４）自らの意見や解釈を論理的に説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式とし、受講者による発表とディスカッションを中心とする（対象とする作品については、履修者と相談のうえ決定する）。なお、課題等の提出・フィードバックはWebClassを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要の把握	ガイダンス
第2回	作品概要の把握	作品についての概説
第3回	作品精読	受講者による発表1
第4回	作品精読	受講者による発表2
第5回	作品精読	受講者による発表3
第6回	作品精読	受講者による発表4
第7回	作品精読	受講者による発表5
第8回	作品精読	受講者による発表6
第9回	作品精読	受講者による発表7
第10回	作品精読	受講者による発表8
第11回	作品精読	受講者による発表9
第12回	作品精読	受講者による発表10
第13回	作品精読	受講者による発表11
第14回	今学期のふりかえり	総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しない。作品のコピーを配布する。

【参考書】
指定しない。

【成績評価の方法と基準】
発表（80％）・授業への貢献度（20％）を成績評価の対象とする。
発表は、内容の充実度・レジュメの作り方・発表態度などを総合的に評価する。
授業への貢献度は、ディスカッションの際の積極性を特に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
発表を踏まえたディスカッションの時間を十分に確保することと、発表に対するフィードバックを充実させることに留意したい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近世文学
＜研究テーマ＞
読本を中心とする近世小説の研究、近世日本における白話文学受容の研究
＜主要研究業績＞
『白話小説の時代―日本近世中期文学の研究―』（汲古書院、2019年）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course introduces the methods for researching early modern novels to students taking this course.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
(1) Be able to acquire knowledge about works and artists.
(2) Appropriate annotations can be made to the text of the work.
(3) Be able to ask and analyze questions about the work.
(4) Be able to logically explain one's own opinions and interpretations.
（Learning activities outside of classroom）
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be based on in-class presentations (80%), and attendance (20%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本近世文芸演習Ｂ

丸井　貴史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近世小説の研究方法を学ぶ。工具書の利用法や先行研究の整理のしかたなど、基礎的な事柄を確認したうえで、作品本文に注釈をつけ、読解する。また、自らの解釈が研究史的にいかに位置づけられるかを的確に把握できるようにする。

【到達目標】
（１）作品と作家に関する知識を身につけることができる。
（２）作品の本文に対して適切な注釈を施すことができる。
（３）作品について自ら問いを立て、分析することができる。
（４）自らの意見や解釈を論理的に説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式とし、受講者による発表とディスカッションを中心とする（対象とする作品については、履修者と相談のうえ決定する）。なお、課題等の提出・フィードバックはWebClassを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要の把握	ガイダンス
第2回	作品概要の把握	作品についての概説
第3回	作品精読	受講者による発表1
第4回	作品精読	受講者による発表2
第5回	作品精読	受講者による発表3
第6回	作品精読	受講者による発表4
第7回	作品精読	受講者による発表5
第8回	作品精読	受講者による発表6
第9回	作品精読	受講者による発表7
第10回	作品精読	受講者による発表8
第11回	作品精読	受講者による発表9
第12回	作品精読	受講者による発表10
第13回	作品精読	受講者による発表11
第14回	今学期のふりかえり	総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しない。作品のコピーを配布する。

【参考書】
指定しない。

【成績評価の方法と基準】
発表（80％）・授業への貢献度（20％）を成績評価の対象とする。
発表は、内容の充実度・レジュメの作り方・発表態度などを総合的に評価する。
授業への貢献度は、ディスカッションの際の積極性を特に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
発表を踏まえたディスカッションの時間を十分に確保することと、発表に対するフィードバックを充実させることに留意したい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近世文学
＜研究テーマ＞
読本を中心とする近世小説の研究、近世日本における白話文学受容の研究
＜主要研究業績＞
『白話小説の時代―日本近世中期文学の研究―』（汲古書院、2019年）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course introduces the methods for researching early modern novels to students taking this course.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
(1) Be able to acquire knowledge about works and artists.
(2) Appropriate annotations can be made to the text of the work.
(3) Be able to ask and analyze questions about the work.
(4) Be able to logically explain one's own opinions and interpretations.
（Learning activities outside of classroom）
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be based on in-class presentations (80%), and attendance (20%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本近代文芸演習ＩＡ

藤村　耕治

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
１．日本近・現代の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に扱う。
２．受講者は自身の研究テーマに即して研究報告としてのレジュメを作成し、発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く緻密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。

【到達目標】
１．受講者が選択した作品の、作家の全業績における位置づけ及び文学史全体における位置づけを明確にし、作家論的な視点と歴史的な視点の双方を導入することによって、より幅広い文学的な視野と知見を身につける。
２．レジュメの作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、最終的にはその成果を学術論文・修士論文にまとめられる高度な文章力・論理構成力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　各回の発表担当者が、自身のテーマとする日本近・現代の作家・評論家・詩人等の作品についてレジュメを作成して発表、他の受講者を交えて討議する形で行う。受講者の人数によって若干異なるが、担当回数は二回程度を目処とする。そのため、取り上げる具体的な作品に関しては、受講者の関心・研究テーマによって決定する。セメスター末には、発表・討議を通しての考察を踏まえた、総括的な成果報告を行う。
　上記のように、特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に取り上げるが、必要に応じてそれ以前の文学者についても取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマについて聞く。
第2回	担当者１による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第3回	担当者１による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第4回	担当者２による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第5回	担当者２による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第6回	担当者３による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第7回	担当者３による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第8回	担当者４による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第9回	担当者４による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第10回	担当者５による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第11回	担当者５による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第12回	担当者６による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第13回	担当者６による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第14回	各発表担当者による総括	各自の発表・報告・討議に基づいた総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　発表担当者は、選択した作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、主題・動機・時代背景・人物・構造・文体等についても目を配りながら、毎回2000字から4000字程度の報告用レジュメを作成する。したがって、発表担当者は準備に5～10時間程度を要することになります。
　担当者以外の受講者も、当該作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってくること。単に一通り眼を通すというのではなく、担当者と互角に討議し、適確な批評が可能となるように充分な準備をしてくる必要がある。また、担当者以外の受講生にも、当該作品に関する小レポートを提出してもらう。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】
　必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
１．発表・報告時におけるレジュメとプレゼンテーションの内容（40%）
２．総括レポートとしての論文の内容（30%）
３．担当時以外の小レポートの内容（10%）
４．討議の場における積極的な参加態度及び発言（20%）

【学生の意見等からの気づき】
　各人の修士論文の一部を構成しうるような高度な論文を年間に一本は完成させることを目指せるよう指導する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近・現代文学
〈研究テーマ〉特に第二次大戦後の戦後派文学および彼らの文学精神・意識を継承した作家・作品。
〈近年の主要な研究業績〉
①「高橋和巳　未完の可能性」（『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018）
②「高橋和巳と三島由紀夫覚書」（「新世紀人文学論究』第6号、2022）
③「「コンビニ人間」－変容の可能性としての物語－」（鼎書房、2024）
④「大江健三郎　最晩年のスタイル」（『現代文藝研究』第3号、2024）

【Outline (in English)】
Course outline
1.The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.
2.Students present their research results according to their own themes.
3.To acquire advanced writing and logical composition skills for master's writing.
Learning Ojectives
1.Learners will acquire a broad literary perspective and knowledge through the presentation of the person in charge.
2.Learners will acquire the ability finish academic papers based on the resumes they have created.
Learning activities outside of classroom
Presenters spend 5 to 10 hours preparing resumes, and other students spend 2 hours preparing to participate in the discussion.
Grading Criteria/policy
Evaluate by 40% of the presentation, 30% of the content of the report, 10% of the content of the sub-report, and 20% attendance attitude.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本近代文芸演習ＩＢ

藤村　耕治

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
１．日本近・現代の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に扱う。
２．受講者は自身の研究テーマに即して研究報告としてのレジュメを作成し、発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く緻密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。

【到達目標】
１．受講者が選択した作品の、作家の全業績における位置づけ及び文学史全体における位置づけを明確にし、作家論的な視点と歴史的な視点の双方を導入することによって、より幅広い文学的な視野と知見を身につける。
２．レジュメの作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、最終的にはその成果を学術論文・修士論文にまとめられる高度な文章力・論理構成力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　各回の発表担当者が、自身のテーマとする日本近・現代の作家・評論家・詩人等の作品についてレジュメを作成して発表、他の受講者を交えて討議する形で行う。受講者の人数によって若干異なるが、担当回数は三回程度を目処とする。そのため、取り上げる具体的な作品に関しては、受講者の関心・研究テーマによって決定する。セメスター末には、発表・討議を通しての考察を踏まえた、総括的な成果報告を行う。
　上記のように、特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に取り上げるが、必要に応じてそれ以前の文学者についても取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマについて聞く。
第2回	担当者１による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第3回	担当者１による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第4回	担当者２による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第5回	担当者２による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第6回	担当者３による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第7回	担当者３による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第8回	担当者４による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第9回	担当者４による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第10回	担当者５による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第11回	担当者５による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第12回	担当者６による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第13回	担当者６による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第14回	各発表担当者による総括	各自の発表・報告・討議に基づいた総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　発表担当者は、選択した作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、主題・動機・時代背景・人物・構造・文体等についても目を配りながら、毎回2000字から4000字程度の報告用レジュメを作成する。したがって、発表担当者は準備に5～10時間程度を要することになります。
　担当者以外の受講者も、当該作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってくること。単に一通り眼を通すというのではなく、担当者と互角に討議し、適確な批評が可能となるように充分な準備をしてくる必要がある。また、担当者以外の受講生にも、当該作品に関する小レポートを提出してもらう。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】
　必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
１．発表・報告時におけるレジュメとプレゼンテーションの内容（40%）
２．総括レポートとしての論文の内容（30%）
３．担当時以外の小レポートの内容（10%）
４．討議の場における積極的な参加態度及び発言（20%）

【学生の意見等からの気づき】
　各人の修士論文の一部を構成しうるような高度な論文を年間に一本は完成させることを目指せるよう指導する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近・現代文学
〈研究テーマ〉特に第二次大戦後の戦後派文学および彼らの文学精神・意識を継承した作家・作品。
〈近年の主要な研究業績〉
①『高橋和巳　未完の可能性」（『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018）
②『高橋和巳と三島由紀夫覚書」（『新世紀人文学論究』第6号、2022）
③「コンビニ人間－変容の可能性としての物語－」(鼎書房、2024）
④「大江健三郎　最晩年のスタイル」（『現代文藝研究』第3号、2024）

【Outline (in English)】
Course outline
1.The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.
2.Students present their research results according to their own themes.
3.To acquire advanced writing and logical composition skills for master's writing.
Learning Objectives
1.Learners will acquire a broad literary perspective and knowledge through the presentation of the person in charge.
2.Learners will acquire the ability finish academic papers based on the resumes they have created.
Learning activities outside of classroom
Presenters spend 5 to 10 hours preparing resumes, and other students spend 2 hours preparing to participate in the discussion.
Grading Criteria/policy
Evaluate by 40% of the presentation, 30% of the content of the report, 10% of the content of the sub-report, and 20% attendance attitude.

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本言語学原典研究Ａ

間宮　厚司

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語学の研究方法について学びます。この授業では、上代・中古・中世における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】
日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	上代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	上代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	上代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	上代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	中古文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	中古文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	中古文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	中古文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	中世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	中世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	中世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	中世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究テーマや課題について、先ずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】
『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】
春学期における発表とレポートを各50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
留学生の受講生が、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】
日本古典語学・日本語史
＜研究テーマ＞
『万葉集』や『おもろさうし』等の言語研究
＜主要研究業績＞
『おもろさうしの言語』（笠間書院、2005年）
『沖縄古語の深層[増補版]』（森話社、2014年）
『万葉異説[増補版]』（森話社、2021年）

【Outline (in English)】
This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.
Learning objectives of this class:
Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.
Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.
Acquire the necessary skill and knowledge for writing master's thesis.
Learning activities outside of classroom:
Students need to research about their study theme and subject via website such as CiNii and make sure if there is still room for research.
Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation before or after the class if needed.
As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.
Grading Criteria/Policies:
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Presentation (50%), Report (50%).

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本言語学原典研究Ｂ

間宮　厚司

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語学の研究方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】
日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	近世文学作品の言語学的研究（１）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	近世文学作品の言語学的研究（２）	課題の発表と次回の課題
第4回	近世文学作品の言語学的研究（３）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	近世文学作品の言語学的研究（４）	小レポート提出と解説
第6回	近代文学作品の言語学的研究（１）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	近代文学作品の言語学的研究（２）	課題の発表と次回の課題
第8回	近代文学作品の言語学的研究（３）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	近代文学作品の言語学的研究（４）	小レポート提出と解説
第10回	現代文学作品の言語学的研究（１）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	現代文学作品の言語学的研究（２）	課題の発表と次回の課題
第12回	現代文学作品の言語学的研究（３）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	現代文学作品の言語学的研究（４）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究テーマや課題について、先ずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】
『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】
秋学期における発表とレポートを各50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
留学生の受講生が、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】
日本古典語学・日本語史
＜研究テーマ＞
『万葉集』や『おもろさうし』等の言語研究
＜主要研究業績＞
『おもろさうしの言語』（笠間書院、2005年）
『沖縄古語の深層[増補版]』（森話社、2014年）
『万葉異説[増補版]』（森話社、2021年）

【Outline (in English)】
This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.
Learning objectives of this class:
Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.
Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.
Acquire the necessary skill and knowledge for writing master's thesis.
Learning activities outside of classroom:
Students need to research about their study theme and subject via website such as CiNii and make sure if there is still room for research.
Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation before or after the class if needed.
As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.
Grading Criteria/Policies:
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Presentation (50%), Report (50%).

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本言語学演習ＩＡ

尾谷　昌則

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、前半の４週間で認知言語学（認知意味論）の基本的な考え方を学ぶためにテキストを１冊を読み終える。後半で１０週間は、その考え方を応用して日本語の意味分析をしている研究論文を取り上げて、それぞれに関する質疑応答・討論をする。受講生は、要約レポート（もしくは論文レビュー）を毎週作成し、授業開始時に提出する。毎回の授業は、テキストを読むのではなく、テキストの内容に関する質疑応答、疑問点・批判点の提示をしてもらいながら進めるため、なるべく多くの疑問点・批判点を考えてくることが毎週の課題である。ただ座って話を聴いているだけでの授業ではないので、留学生が「日本語について勉強したい」という程度の動機で受講することは勧めない。

【到達目標】
テキストに出てくる認知言語学および言語学一般の基礎概念・用語を理解するとともに、具体例を挙げながら他者にそれらの概念を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
▼指定したテキストや論文について毎回質疑応答・討論を繰り返す。当日の授業開始時までにクリティカル・レポートをHoppiiへ提出することが求められる。
▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行うことがある。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。
▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ		内容
第1回	学習の仕方、要約の書き方、各種参考資料について		要約レポートの書き方などをレクチャーする
第2回	テキスト１	第１、２章	認知言語学について、受講生による発表・討論
第3回	テキスト１	第３、４章	カテゴリー化について、受講生による発表・討論
第4回	テキスト１	第５章	メタファーについて、受講生による発表・討論
第5回	テキスト１	第６章	次章構造について、受講生による発表・討論
第6回	テキスト１	第７、８章	構文について、受講生による発表・討論
第7回	テキスト１	第９章	文法化について、受講生による発表・討論
第8回	テキスト２	第１章	伝統文法から構文文法への史的展開について、受講生による発表・討論
第9回	テキスト２	第２章の前半	認知文法について、受講生による発表・討論
第10回	テキスト２	第２章の後半	構文拡張と類推について、受講生による発表・討論
第11回	テキスト２	第５章第１～３節	グローバル構文について、受講生による発表・討論
第12回	テキスト２	第５章第４節	構文拡張と語用論的意味について、受講生による発表・討論
第13回	テキスト２	第５章第５節	構文拡張と再分析について、受講生による発表・討論
第14回	まとめ		本授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
【宿題】
(1) テキストの該当箇所もしくは課題論文のクリティカル・レポート（A4用紙一枚）。毎週、授業開始時までに提出する。（２時間程度）
(2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。（１時間程度）
(3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく。（１時間程度）

【テキスト（教科書）】
テキスト１『認知言語学』（大堀壽夫、2002年、東京大学出版会、3000円＋税）
テキスト２『構文ネットワークと文法』（尾谷昌則・二枝美津子、2011年、研究社、3200円＋税）

【参考書】
『認知言語学大事典』（朝倉書店）★重要
『意味論キーターム事典』（開拓社）
『新編　認知言語学キーワード事典』（研究社）
『ことばの認知科学事典』（大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（明治書院）
『日本語学研究事典』（明治書院）
『語用論キーターム事典』　（開拓者）
『日本語研究のための認知言語学』（籾山洋介著、研究社）
『認知意味論のしくみ』（籾山洋介著、研究社）
『認知意味論の新展開―メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）
『認知言語学　基礎から最前線へ』（森雄一・高橋英光編著、くろしお出版）
『認知言語学のはなし』（高橋英光著、2010年、北海道大学出版会、1760円）

【成績評価の方法と基準】
宿題(1)「クリティカル・レポート」（50 %）
宿題(2)(3) 質疑応答・ディスカッションへの参加態度（50 %）

【学生の意見等からの気づき】
言語を分析する際の知識（＝道具）が不足しているとの声があったので、春学期は敢えて論文を読まずに、分析の道具に関する知識を集中的に扱う構成にした。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
＜研究テーマ＞
　認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
＜主要研究業績＞
　「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）
　「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第7号, pp.17-30. 2005年）
　『構文ネットワークと文法　―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline (in English)】
Course Outline:
To understand the basic concepts of cognitive linguistics, we read the textbook for cognitive linguistics(semantics) and academic papers on (cognitive) semantics. Students are supposed to submit a summary of the chapter(or a paper) that we are to read on the day.
Learning Objectives:
The objectives of this course are (1)to learn the basic (Cognitive) linguistic terms, (2)to aquire the ability to explain them with a lot of examples to other people.
Learning Activities Outside of the Classroom:
Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policy:
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
asignments (50%), discussions (50%).

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本言語学演習ＩＢ

尾谷　昌則

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、(認知) 言語学的な研究手法を学ぶことができる雑誌記事・学術論文を読む。論文ごとに担当者を決め、担当者には、論文の要旨を分かりやすくレジュメにまとめたものを授業で配付し、口頭でリポートしてもらう。その後、質疑応答・ディスカッションを行い、論文の分析手法について批判的に検討する。

【到達目標】
(1) 論文における主張と根拠を的確に理解し、分かりやすく要約してリポートができるようになる。
(2)言語学の諸概念が言語分析においてどのように応用されているのかを理解し、具体例を挙げながら、それらについて説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
演習形式で行う。発表者はレジュメを作って、論文の内容を分かりやすく他の受講者に伝える。知らない概念などは事前にすべて調べておき、それらについても補足的に説明できるるよう準備しておく。受講者は、事前に論文の不明点や欠点について容赦なく質問し、発表者とひたすらディベートを行う。最後に皆でその論文の欠点と改善点について考える。
▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。
▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業の進め方、課題リポートの方法について	論文の要約の仕方を学ぶ
第2回	論文リポート(1)　スキーマとプロトタイプ	論文に関する質疑応答
第3回	論文リポート(2)　意味拡張と意味ネットワーク	論文に関する質疑応答
第4回	論文リポート(3)　形容詞の意味分析	論文に関する質疑応答
第5回	論文リポート(4)　名詞の意味分析	論文に関する質疑応答
第6回	論文リポート(5)　動詞の意味分析	論文に関する質疑応答
第7回	論文リポート(6)　構文の拡張と文法化	論文に関する質疑応答
第8回	論文リポート(7)　構文の拡張と類推	論文に関する質疑応答
第9回	論文リポート(8)　構文の拡張と再分析	論文に関する質疑応答
第10回	論文リポート(9)　主観化	論文に関する質疑応答
第11回	論文リポート(１０)　主体化	論文に関する質疑応答
第12回	論文リポート(１１)　若者ことば	論文に関する質疑応答
第13回	論文リポート(１２)　若者ことば	論文に関する質疑応答
第14回	まとめ	総括をする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
【宿題】
(1) 教科書／課題論文の要約レポート（A4用紙一枚）。毎週、授業開始時に提出する。(１時間程度)
(2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。(２時間程度)
(3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめる（１時間程度)。

【テキスト（教科書)】
なし。適宜プリントを配布する。

【参考書】
『認知言語学大事典』(朝倉書店)
『意味論キーターム事典』(開拓社)
『新編　認知言語学キーワード事典』(研究社)
『ことばの認知科学事典』(大修館書店)
『日本語学キーワード事典』(朝倉書店)
『言語学大辞典』(三省堂)
『日本語文法大辞典』(明治書院)
『日本語学研究事典』(明治書院)
『語用論キーターム事典』　(開拓者)
『日本語研究のための認知言語学』(籾山洋介著、研究社)
『認知意味論: 言語から見た人間の心』(ジョージレイコフ著、紀伊国屋書店)
『認知意味論のしくみ』(籾山洋介著、研究社)
『認知意味論の新展開―メタファーとメトニミー』(谷口一美著、研究社)
『概念化と意味の世界　認知意味論のアプローチ』(深田智・仲本康一郎著、研究社)
『認知言語学　基礎から最前線へ』(森雄一・高橋英光編著、くろしお出版)

【成績評価の方法と基準】
宿題(1)(2)(3)　50％
授業中の議論　　50％

【学生の意見等からの気づき】
論文の書き方が具体的に理解できた、というコメントが多かったので、今年度の実際に多くの論文を取り上げる予定である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
＜研究テーマ＞
　認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
＜主要研究業績＞
　「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」(『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年)
　「構文文法の歴史的背景と今後の展望」(『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年)
　「接続詞ケドの手続き的意味」(『語用論研究』第7号, pp.17-30. 2005年)
　『構文ネットワークと文法　―認知文法論のアプローチ』(共著、研究社、2011年)

【Outline (in English)】
Course Outline: We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.
Learning Objectives:The objectives of this class are as follows. (1)To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.
Learning Activities Outside of the Classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policy:
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
asignments (50%), discussions (50%).

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本言語学演習ⅡA

王　安

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日中対照研究に関する重要なトピックを中心に，重要文献・論文を精読し，日中両言語の類似性及び相違点への理解を深め、対照研究の方法を学ぶ。

【到達目標】
１、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
２、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象や問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
３、対照研究の研究方法を用いて自分の興味ある言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文１本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ(A4サイズ３～４枚／一人で担当する場合は6枚)を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく(例えば質問リストを作成するなど)。
授業形式について、基本的に対面形式で行う予定。授業計画について変更がある場合、学習支援システムでまたは前回の授業で知らせる。授業のフィードバックは随時授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第2回	対照研究の研究方法	教員が講義を行う
第3回	ミニ研究発表	ミニ研究発表
第4回	論文解説(１)	日中感情形容詞について
第5回	論文解説（２）	日中動詞について
第6回	discussion	以上の論文につして議論を行う
第7回	論文解説（３）	日中動詞について（その２）
第8回	論文解説（４）	意味分析について
第9回	論文解説（５）	意味分析について（その２）
第10回	論文解説（６）	日中同形語について
第11回	フォローアップ	全体議論
第12回	論文解説（７）	その他
第13回	ミニ発表	各自の研究についてミニ発表を行う
第14回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ(最終レポートにするテーマ)について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
１、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。
２、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する(論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たりA4サイズ3～4枚、一人で発表する場合は6枚以内)
３、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく(課題として論文の要約と質問を作成して提出してもらう)
本授業の準備学習・復習時間は、各１０～１２ 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】
＜中国語学＞
○『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕　監訳　2004　三省堂
○『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編　2003　商務印書館
『現代中国語文法総覧』劉月華他1996　くおしお出版
『現代漢語専題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編　2003　北京大学出版社
『語法講義』朱徳熙1982　商務印書館
『語法問答』朱徳熙1986
『現代漢語語法研究教程』陸倹明　2005　北京大学
『現代中国語用法辞典』呂叔湘　1983　現代出版
『現代漢語八百詞』呂叔湘　2008　商務印書館（虚詞が中心）
『漢語基本知識(語法篇)』施春宏　2011　北京語言大学出版社
『中国語学概論』王占華他　2004　駿河台出版社
＜対照言語学関係参考文献＞
井上優(2002)『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究X,国立国語研究所
石綿敏雄　高田誠（1990)『対照言語学』桜楓社
生越直樹（2002)『シリーズ言語科学４対照言語学』東京大学出版会
大河内康内編（1997）『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
寺村秀夫(1982)「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学10 外国語との対照』 明治書院
中川正之(1997)「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
張　黎（2012）『漢語意合語法研究』白帝社
張麟声（2007）「言語研究のための対照研究について―日本国内の事例を中心に―」『言語文化学研究―言語情報編2』1-14. 大阪府立大学.
＜中国語教育参考書＞
『中国語文法教室』杉村博文　1994　大修館書店
『中国語の文法書』相原茂　他　1996　同学社
『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他　高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】
論文要約レポート(30%) + 論文内容発表(30％)＋質問・発言(40％)で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
対照言語学、現代中国語文法、認知言語学
＜研究テーマ＞
形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究
＜主要研究業績＞
「中国語の＜主観性 ＞の再考察―使役表出文を例として―」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編. pp.35-50. 2018. 開拓社
「感情の普遍性とその言語化―感情表現の類型論的研究に向けて―」『ことばのパースペク ティヴ』 (中村芳久教授退職記念論文集刊行会編. pp.71-84. 2018. 開拓社
第8章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版

「感情表現における日中対照研究―感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して―」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline (in English)】
The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.
（Learning Objectives）
1.To capture the differences and similarities between Chinese and Japanese languages, and study the research methods of comparative study theoretically and systematically.
2. Cultivate the ability to read papers critically, and develop the problem awareness and analytical ability to discover language phenomena and problem points.
3. Improve research ability, and be able to explain language phenomena.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class, students will be expected to spend 10 hours reviewing the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Overall grade in the class will be decided based on the following parts:
- presentation: 40%
- discussion:20%
- final report:40%

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本言語学演習ⅡＢ

王　安

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
引き続き日中対照研究に関する重要なトピックを中心に，重要文献・論文を精読し，日中両言語の類似性及び相違点への理解を深める。また、学期後半の授業では各自の研究について発表をしてもらい、議論を行う。

【到達目標】
１、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
２、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象、問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
３、対照研究の研究方法を用いて自分の興味持つ言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文１本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ(A4サイズ３～４枚／一人で担当する場合は6枚)を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく。
授業は対面形式で行う予定ですが、変更があった場合学習支援システムにてお知らせします。また、授業のフィードバックは随時授業内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第2回	論文解説(その１)	形容詞関係
第3回	論文解説(その２)	感情表現関係
第4回	論文解説(その３)	ヴォイス関係
第5回	論文解説（その４）	指示詞関係
第6回	研究報告（１）	研究発表１
第7回	研究報告（２）	研究発表２
第8回	研究報告（３）	研究発表３
第9回	これまでのまとめ	全体議論
第10回	論文解説（その５）	コロケーション関係
第11回	論文解説（その６）	形容詞関係
第12回	論文解説（その７）	メタファー関係
第13回	論文解説（その８）	多義性研究
第14回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ(最終レポートにするテーマ)について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
１、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。
２、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する(論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たりA4サイズ3～4枚、一人で発表する場合は6枚以内)
３、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく(課題として論文の要約と質問を作成して提出してもらう)
本授業の準備学習・復習時間は、各１０～１２ 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】
＜中国語学＞
○『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕　監訳　2004　三省堂
○『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編　2003　商務印書館
『現代中国語文法総覧』劉月華他1996　くおしお出版
『現代漢語専題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編　2003　北京大学出版社
『語法講義』朱徳熙1982　商務印書館
『語法問答』朱徳熙1986
『現代漢語語法研究教程』陸倹明　2005　北京大学
『現代中国語用法辞典』呂叔湘　1983　現代出版
『現代漢語八百詞』呂叔湘　2008　商務印書館（虚詞が中心）
『漢語基本知識(語法篇)』施春宏　2011　北京語言大学出版社
『中国語学概論』王占華他　2004　駿河台出版社
＜対照言語学関係参考文献＞
井上優(2002)『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究X,国立国語研究所
石綿敏雄　高田誠（1990)『対照言語学』桜楓社
生越直樹（2002)『シリーズ言語科学４対照言語学』東京大学出版会
大河内康内編（1997）『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
寺村秀夫(1982)「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学10 外国語との対照』 明治書院
中川正之(1997)「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
張　黎（2012）『漢語意合語法研究』白帝社
張麟声（2007）「言語研究のための対照研究について―日本国内の事例を中心に―」『言語文化学研究―言語情報編2』1-14. 大阪府立大学.
＜中国語教育参考書＞
『中国語文法教室』杉村博文　1994　大修館書店
『中国語の文法書』相原茂　他　1996　同学社
『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他　高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】
論文要約レポート(30%) + 論文内容発表(30％)＋質問・発言(40％)で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
対照言語学、現代中国語文法、認知言語学
＜研究テーマ＞
形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究
＜主要研究業績＞
「中国語の＜主観性 ＞の再考察―使役表出文を例として―」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編. pp.35-50. 2018. 開拓社
「感情の普遍性とその言語化―感情表現の類型論的研究に向けて―」『ことばのパースペク ティヴ』(中村芳久教授退職記念論文集刊行会編. pp.71-84. 2018. 開拓社
第8章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版
「感情表現における日中対照研究―感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して―」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline (in English)】
The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.
（Learning Objectives）
1.To capture the differences and similarities between Chinese and Japanese languages, and study the research methods of comparative study theoretically and systematically.
2. Cultivate the ability to read papers critically, and develop the problem awareness and analytical ability to discover language phenomena and problem points.
3. Improve research ability, and be able to explain language phenomena.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class, students will be expected to spend 10 hours reviewing the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Overall grade in the class will be decided based on the following parts:
－ presentation: 40%
－ discussion:20%
－ final report:40%

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本語学特講Ａ

古牧　久典

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
認知言語学（主に認知意味論）とレトリック研究が交差する領域の基本的な見解を理解し、現代日本語の分析技法を学ぶ。指定教科書を通じて、シミリーとメタファーの概要をとらえ、実例分析・考察を行う。認知意味論を踏まえた現代日本語についての論文の読解や執筆につながる能力を身につける。

【到達目標】
・日本語学の見地から、現代日本語を観察することができる。
・レトリック研究の基本的な考え方を理解することができる。
・認知言語学の基盤に沿って、現代日本語を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は、演習形式を基本とする。テキストに沿って理解し、内容に応じて、関連の重要文献や最新文献にも触れる。事前に担当が割り当てられるので、担当学生は文献の内容を発表する。内容に基づき、要点整理、疑問点、理解確認、発展可能性に関するディスカッションを実施する。内容によっては講義形式での解説からも学習する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス／認知意味論の概要	授業概要・形式と進め方・導入／認知意味論の基本理解
第2回	認知意味論とレトリック研究	認知意味論とレトリック研究の関係の理解
第3回	認知意味論と日本語	認知意味論から日本語の分析・考察・検討
第4回	シミリー	テキスト 1章導入節（日本語の分析・考察・討論）
第5回	シミリーとメタファー	テキスト 1章1節（日本語の分析・考察・討論）
第6回	シミリー標識	テキスト 1章2節（日本語の分析・考察・討論）
第7回	典型的なシミリー	テキスト 1章3節（日本語の分析・考察・討論）
第8回	周辺的なシミリー	テキスト 1章4節（日本語の分析・考察・討論）
第9回	シミリーからメタファーへ	テキスト 1章5-6節（日本語の分析・考察・討論）
第10回	メタファー	テキスト 2章導入節（日本語の分析・考察・討論）
第11回	メタファーの種類	テキスト 2章1節（日本語の分析・考察・討論）
第12回	根源的メタファー	テキスト 2章2節（日本語の分析・考察・討論）
第13回	概念メタファー	テキスト 2章3節（日本語の分析・考察・討論）
第14回	メタファー研究／授業全体総括	テキスト 2章4-5節（日本語の分析・考察・討論）／授業全体の総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
・日本語学や言語学の最低限の基礎知識を事前に準備学習として各自習得しておくこと。（授業と並行して学習を進めることも可。）
・受講学生は指定概説文献を事前に読み、疑問点などを挙げて整理しておく。
・発表担当回の学生は発表資料を準備し、項目内容を授業内で説明できるようにしておく。

【テキスト（教科書）】
瀬戸賢一 (2024)『レトリック探究（レトリックの世界１）』, ひつじ書房.

【参考書】
池上嘉彦 (2006)『英語の感覚・日本語の感覚』, ＮＨＫブックス.
池上嘉彦・山梨正明 編 (2020)『認知言語学Ⅰ（講座 言語研究と革新と継承４）』, ひつじ書房.
池上嘉彦・山梨正明 編 (2020)『認知言語学Ⅱ（講座 言語研究と革新と継承５）』, ひつじ書房.
大堀壽夫 (2002)『認知言語学』, 東京大学出版会.
児玉一宏・谷口一美・深田智 編著 (2020)『はじめて学ぶ認知言語学』, ミネルヴァ書房.
高橋英光・野村益寛・森雄一 編 (2018)『認知言語学とは何か－あの先生に聞いてみよう』, くろしお出版.
谷口一美 (2006)『学びのエクササイズ　認知言語学』, ひつじ書房.
辻幸夫 編 (2013)『新編　認知言語学キーワード事典』, 研究社.
辻幸夫 編集主幹 (2019)『認知言語学大事典』, 朝倉書店.
西村義樹・野矢茂樹 (2013)『言語学の教室－哲学者と学ぶ認知言語学』, 中公新書.
野村益寛 (2014)『ファンダメンタル認知言語学』, ひつじ書房.
籾山洋介 (2010)『認知言語学入門』, 研究社.
籾山洋介 (2014)『日本語研究のための認知言語学』, 研究社.
籾山洋介 (2020)『実例で学ぶ認知意味論』, 研究社.
森雄一 (2012)『学びのエクササイズ　レトリック』, ひつじ書房.
山梨正明 (2000)『認知言語学原理』, くろしお出版.
吉村公宏 (2004)『はじめての認知言語学』, 研究社.
（上記以外は授業時に提示。）

【成績評価の方法と基準】
テキスト内容紹介とディスカッションへの参加度（紹介方法を含む）（50 %）
小レポート（レジュメ・リアクションペーパー等含む）（25 %）
期末レポート（25 %）

【学生の意見等からの気づき】
受講者同士のディスカッションからの学びを大事にします。

【その他の重要事項】
日本語学・英語学・中国語学などの言語学関連の学部教養科目程度の知識を必須とする。
秋学期開講の同科目Ｂも合わせての履修することを推奨する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　認知言語学、意味論、語用論、コーパス言語学
＜研究テーマ＞　認知意味論と（認知）語用論の接点
＜主要研究業績＞
「＜重複＞表現とメトニミ」（坂原茂編 『日仏名詞限定表現の対照研究』 平成18～20年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究成果報告書 2009年）
「トートロジー構文から迫る認知語用論」（山梨正明他編 『認知言語学論考No.10』 ひつじ書房 2012年）
『語用論キーターム事典』（共訳 開拓社 2014年）
「語彙語用論と認知意味論」（辻幸夫 編集主幹 『認知言語学大事典』 朝倉書店 2019年）

【Outline (in English)】
Course outline: This course gives an overview of basic theories with special reference to modern Japanese language, within the cross fields of Cognitive Semantics and Rhetoric studies, such as simile, metaphor, and polysemy. The aim of this class is to help students learn cognitive-semantic analysis to linguistic meaning in Japanese.
Learning Objectives: The goals of this course are to understand modern Japanese language from the linguistic perspectives; to understand basic cognitive-semantic concepts; and to apply them to Japanese language.
Learning activities outside of classroom: Students will be expected to spend four hours each class on out-of-class preparation by reading the required papers and giving brief and/or detailed presentations on it, to understand the course content.
Grading Criteria /Policy: Your overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution (50%); short reports (25%); term-end report (25%).

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本語学特講Ｂ

古牧　久典

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
認知言語学（主に認知意味論）とレトリック研究が交差する領域の基本的な見解を理解し、現代日本語の分析技法を学ぶ。指定教科書を通じて、シネクドキとメトニミーの概要をとらえ、実例分析・考察を行う。認知意味論を踏まえた現代日本語についての論文の読解や執筆につながる能力を身につける。

【到達目標】
・日本語学の見地から、現代日本語を観察することができる。
・レトリック研究の基本的な考え方を理解することができる。
・認知言語学の基盤に沿って、現代日本語を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は、演習形式を基本とする。テキストに沿って理解し、内容に応じて、関連の重要文献や最新文献にも触れる。事前に担当が割り当てられるので、担当学生は文献の内容を発表する。内容に基づき、要点整理、疑問点、理解確認、発展可能性に関するディスカッションを実施する。内容によっては講義形式での解説からも学習する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス／認知意味論からみた日本語レトリック研究	授業概要・形式と進め方・導入
第2回	シネクドキ	テキスト 3章導入節（日本語の分析・考察・討論）
第3回	シネクドキの定義	テキスト 3章1節（日本語の分析・考察・討論）
第4回	分節分類と包摂分類	テキスト 3章2節（日本語の分析・考察・討論）
第5回	シネクドキの類と種	テキスト 3章3節（日本語の分析・考察・討論）
第6回	シネクドキの認識	テキスト 3章4節（日本語の分析・考察・討論）
第7回	シネクドキの周辺	テキスト 3章5-6節（日本語の分析・考察・討論）
第8回	メトニミー	テキスト 4章導入節（日本語の分析・考察・討論）
第9回	メトニミーの定義	テキスト 4章1節（日本語の分析・考察・討論）
第10回	空間のメトニミー	テキスト 4章2節（日本語の分析・考察・討論）
第11回	時間のメトニミー	テキスト 4章3節（日本語の分析・考察・討論）
第12回	特性のメトニミー	テキスト 4章4-5節（日本語の分析・考察・討論）
第13回	認識の三角形	テキスト 補章1-2節（日本語の分析・考察・討論）
第14回	多義構造／授業全体総括	テキスト 補章3節（日本語の分析・考察・討論）／授業全体の総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・準備学習・復習・宿題等の時間は、授業の前と後で、それぞれ２時間を標準とする。
・日本語学や言語学の最低限の基礎知識を事前に準備学習として各自習得しておくこと。（授業と並行して学習を進めることも可。）
・受講学生は指定概説文献を事前に読み、疑問点などを挙げて整理しておく。
・発表担当回の学生は発表資料を準備し、項目内容を授業内で説明できるようにしておく。

【テキスト（教科書）】
瀬戸賢一 (2024)『レトリック探究（レトリックの世界１）』, ひつじ書房.

【参考書】
池上嘉彦 (2006)『英語の感覚・日本語の感覚』, ＮＨＫブックス.
池上嘉彦・山梨正明 編 (2020)『認知言語学Ⅰ（講座 言語研究と革新と継承４）』, ひつじ書房.
池上嘉彦・山梨正明 編 (2020)『認知言語学Ⅱ（講座 言語研究と革新と継承５）』, ひつじ書房.
大堀壽夫 (2002)『認知言語学』, 東京大学出版会.
児玉一宏・谷口一美・深田智 編著 (2020)『はじめて学ぶ認知言語学』, ミネルヴァ書房.
高橋英光・野村益寛・森雄一 編 (2018)『認知言語学とは何か－あの先生に聞いてみよう』, くろしお出版.
谷口一美 (2006)『学びのエクササイズ　認知言語学』, ひつじ書房.
辻幸夫 編 (2013)『新編　認知言語学キーワード事典』, 研究社.
辻幸夫 編集主幹 (2019)『認知言語学大事典』, 朝倉書店.
西村義樹・野矢茂樹 (2013)『言語学の教室－哲学者と学ぶ認知言語学』, 中公新書.
野村益寛 (2014)『ファンダメンタル認知言語学』, ひつじ書房.
籾山洋介 (2010)『認知言語学入門』, 研究社.
籾山洋介 (2014)『日本語研究のための認知言語学』, 研究社.
籾山洋介 (2020)『実例で学ぶ認知意味論』, 研究社.
森雄一 (2012)『学びのエクササイズ　レトリック』, ひつじ書房.
山梨正明 (2000)『認知言語学原理』, くろしお出版.
吉村公宏 (2004)『はじめての認知言語学』, 研究社.
（上記以外は授業時に提示。）

【成績評価の方法と基準】
テキスト内容紹介とディスカッションへの参加度（紹介方法を含む）（50 %）
小レポート（レジュメ・リアクションペーパー等含む）（25 %）
期末レポート（25 %）

【学生の意見等からの気づき】
受講者同士のディスカッションからの学びを大事にします。

【その他の重要事項】
日本語学・英語学・中国語学などの言語学関連の学部教養科目程度の知識を必須とする。
春学期開講の同科目Ａも合わせての履修することを推奨する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　認知言語学、意味論、語用論、コーパス言語学
＜研究テーマ＞　認知意味論と（認知）語用論の接点
＜主要研究業績＞
「＜重複＞表現とメトニミ」（坂原茂編 『日仏名詞限定表現の対照研究』 平成18～20年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究成果報告書 2009年）
「トートロジー構文から迫る認知語用論」（山梨正明他編 『認知言語学論考No.10』 ひつじ書房 2012年）
『語用論キーターム事典』（共訳 開拓社 2014年）
「語彙語用論と認知意味論」（辻幸夫 編集主幹 『認知言語学大事典』 朝倉書店 2019年）

【Outline (in English)】
Course outline: This course gives an overview of basic theories with special reference to modern Japanese language, within the cross fields of Cognitive Semantics and Rhetoric studies, such as synecdoche, metonymy, and polysemy. The aim of this class is to help students learn cognitive-semantic analysis to linguistic meaning in Japanese.
Learning Objectives: The goals of this course are to understand modern Japanese language from the linguistic perspectives; to understand basic cognitive-semantic concepts; and to apply them to Japanese language.
Learning activities outside of classroom: Students will be expected to spend four hours each class on out-of-class preparation by reading the required papers and giving brief and/or detailed presentations on it, to understand the course content.
Grading Criteria /Policy: Your overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution (50%); short reports (25%); term-end report (25%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

沖縄文芸史Ａ

福　寛美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・琉球王国初の文字資料『おもろさうし』に親しむ。
・琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝（いろうせつでん）』の説話を読む。
・また簡単な発表を通し、神歌や口頭伝承への理解を深める。
・琉球文学の古典に親しむ。

【到達目標】
・『おもろさうし』はおもろと称する神歌を集成した冊子である。おもろは日本本土のどのような歌謡とも似ていない。その世界観、そして神霊観を知ることを目的とする。
・また琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝（いろうせつでん）』の説話を読み、その説話に影響を与えたと考えられる事象の考察も目的とする。
・琉球文学の古典に親しむことを目的とする。
・琉球文学を深く理解することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・講義形式と演習形式をまぜて行う。
・講義をした後、講義の内容にかかわる事象を学生が調べ発表する、という形をとる。
・調べものは琉球・沖縄に関する基本的な文献（辞典など）を使う程度とする。
・対面形式の授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷲の用例を読む1	おもろの読み方を知り、おもろ世界の鷲の用例を読む。
第2回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷲の用例を読む2	おもろ世界の鷲の用例を読んでいく。
第3回	第1回、第2回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球・沖縄の文学や民俗に関する辞典の記述を読み、簡単に発表する。
第4回	おもろ世界の鷲の霊能、鷲のつく地名を考察する	おもろ世界の鷲は霊能ある存在とされている。そのことを考察していく。
第5回	鷲、そして鷲羽には戦勝の霊力があるとされた。そのことを考察する	おもろ世界の鷲、そして鷲羽の用例のうち、戦勝と関わる用例をみていく。
第6回	第4回、第5回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	『おもろさうし』の研究書で鷲の用例を考察したものを読み、簡単に発表する。
第7回	おもろ世界の船と猛禽類のダブルイメージのおもろを読む	おもろ世界では船が猛禽類とダブルイメージされることがある。その用例を読んでいく。
第8回	琉球船は実際に猛禽類と重ね合わされていた。そのことを考察する	琉球船には猛禽類の目玉模様が付けられていた。その意味を考察していく。
第9回	第7回、第8回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球船の絵図は残っており、インターネットでも検索できる。その絵図、またおもろについて調べ、簡単に発表する。
第10回	『遺老説伝』を知る	琉球の口頭伝承を集成した『遺老説伝』について学び、鷲羽の説話を読む。
第11回	鷲のイメージを考察する	おもろ世界の鷲のイメージ形成に関与した、と思われる神話を読む。また矢羽根として珍重された鷲の尾羽について学ぶ。
第12回	第10回、第11回の講義ををふまえ、学生が調べたことを発表する	『遺老説伝』の現代語訳を読む、またインターネットで読める文献を読み、簡単に発表する。
第13回	鳥の墓の伝承、現代の八重山諸島で愛される「鷲之鳥節」について考察する	多良間（たらま）島の鳥の墓の伝承、現代も愛される「鷲之鳥節」とおもろ世界の鷲を比較する。
第14回	春学期の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	主に第13回の講義に関わる事象を簡単に調べ、発表し、春学期をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・『火山と竹の女神』（教科書）の「おもろ世界の鷲」の部分を読む。
・授業支援システムにおもろの読み方、「おもろ世界の鷲」に関わる事柄を記したプリントをアップするので、あわせて読む。
・大学の沖縄文化研究所にはおもろ、ほか琉球文学に必要な文献が揃っているので、発表する時はそこで辞書を引いたり、参考文献を読んだりする。
・学習時間は各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】
・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021年）本体2500円＋税

【参考書】
・『喜界島・鬼の海域』（福寛美、新典社、2008年）
・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（福寛美、森話社、2013年）
・『ぐすく造営のおもろ』（福寛美、新典社、2015年）
・『奄美群島おもろの世界』（福寛美、南方新社、2018年）

【成績評価の方法と基準】
・期末試験は、問題を複数提示し、2問を選んでそれぞれ400字以上記述することとする。
・平常点に含まれる、出席回数、発表への積極性も評価基準とする。
・期末試験70%、平常点30%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
担当者は琉球文学のほか、民俗学、神話学も専攻している。
そのため、『おもろさうし』以外の学生の関心に応えることも可能である。
学生からの申し出があった場合、『おもろさうし』のほか、シャーマン、神話なども積極的に授業で対応していきたい。
過去の授業では、学生からの申し出によってシャーマンについて述べた。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
春学期、秋学期ともに同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
琉球文学（『おもろさうし』）
民俗学（南西諸島のシャーマン）
神話学（日本神話、琉球神話）

【＜研究テーマ＞】
現在の研究テーマの中心は南西諸島の神霊観である。また『おもろさうし』の言語の中に奈良時代の東国方言と同じものがあることに注目し、研究を進めている。

【＜主要研究業績＞】
『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015年）
『うたの神話学』（森話社、2014年）
『ユタ神誕生』（南方新社、2013年）

『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013年）
『夜の海、永劫の海』（新典社、2011年）

【主要研究業績】
『琉球の恋歌』（新典社、2010年）
『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008年）
その他
『奄美三少年　ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017年）の監修

【Outline (in English)】
The Omoro Soshi is the first written compilation of sacred songs and poems collected by Ryukyu kingdom. The Ryukyuan folklores in the Irousetsuden and the Okinawan cultural background may have affected the development of its oral traditions. In this course, you will learn the Ryukuan sacred songs and literature are related to the cultures of surrounding areas and developed their own unique styles. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings.The goal is to have a deep understanding of Ryukyuan literature. For learning outside of class hours, read textbooks and references carefully. The method and criteria for grade evaluation are to attend at least 6 times and take a test.The test is 70% and the normal score is 30%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

沖縄文芸史Ｂ

福　寛美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・琉球文学・民俗を考察する際には南九州（薩摩）や薩南の島々についてよく知ることが必要である。・古代日本の神話において、南九州を重視する箇所がある。
・そのことを考察し、沖縄島を中心とする南西諸島への理解を深めるようつとめる。
・日本神話における隼人の重要性を理解することを到達目標とする。

【到達目標】
・日本神話の従来の研究とは別の視点で神話を考察することにより、見えてくるものは多い。そのことを学ぶ。
・日本神話を火山や噴火という視点で考察する研究はあまり見られなかった。しかし、火山列島の日本で古代の噴火は神の仕業とされていた。そのことに注目し、新たな知見を得る。
・神話のコノハナノサクヤビメと『竹取物語』のカグヤヒメを比較検討する。
・日本語のヨ（世・代・節）は南西諸島の祭祀においても重要な存在である。またヨは世界観や時間意識を表現する語でもあるので、そのことを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・講義を数回した後、学生が講義に関わる事象について簡単な発表をする、という形をとる。
・講義と演習の混合形式で授業を進める。
・対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	噴火・火山の女神	古代における火山の噴火と、火山の女神とされるコノハナノサクヤビメについて考察する。
第2回	コノハナノサクヤビメの行動	コノハナノサクヤビメが天上のアマテラス同様の行動をとったり、隼人の女神らしく振舞ったりすることを考察する。
第3回	ヨ（節）	ヨが竹の節を意味する事例を考察し、『竹取物語』のカグヤヒメがそこにいた意義を考察する。
第4回	学生の発表	第1〜3回の講義の中で関心のある箇所を調べ、簡単に発表する。辞書を引く、参考文献の粗筋を紹介する、などの発表をする。
第5回	ヨと輝き・カグヤヒメのカグ	カグヤヒメは竹の節の間におり、ヨ（節）は輝いていた。カグヤヒメと香具山、火の神カグツチを比較検討する。
第6回	影（カゲ）	カグと関わるカゲ（影）は霊力や魂、そして光とも結びつく語である。そのことを考察する。
第7回	隼人と畿内	隼人は畿内に移住し、その痕跡は考古学的事象、地名などに残っている。そのことを考察する。
第8回	学生の発表	第4〜7回の講義の中で、学生が興味を持った箇所について発表する。
第9回	コノハナノサクヤビメ・ナヨタケノカグヤヒメ	コノハナノサクヤビメとカグヤヒメが神話的に極めて興味深い対応をしていることを考察する。
第10回	富士山	コノハナノサクヤビメは富士山の女神とされている。その意義を考察する。
第11回	隼人と水の献上	隼人は朝廷で水を献上する役割を担っていた。そのことの意義を考察する。
第12回	日向出身の皇妃	日本古代、日向（現在の宮崎県）出身、つまり隼人の女性が皇妃になったことが語られる。そのことの意義を考察する。
第13回	隼人と狗吠え（いぬぼえ）	隼人は魔を祓うため狗吠えという特殊な声を出す役割を担っていた。そのことを考察する。
第14回	学生の発表	第9〜13回の講義で学生が興味を持った箇所を調べ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・『火山と竹の女神』の「火山と竹の女神」をよく読むこと。
・教科書の理解を助けるため、学習支援システムにプリントをアップするので、プリントもあわせて読むこと。
・参考文献、インターネットで読める参考文献を指示するので、それも読むこと。
・学習時間については、各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】
・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021年）本体2500円＋税

【参考書】
・『夜の海、永劫の海』（福寛美、新典社、2011年）
・『うたの神話学』（福寛美、森話社、2014年）
・『新うたの神話学』（福寛美、新典社、2020年）

【成績評価の方法と基準】
・学期末に期末試験を行う。問題を複数提示し、2問選んでそれぞれ400字以上記述する、という形をとる。
・平常点も評価に加える。最低6回は出席すること。
・期末試験を70%、平常点を30%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
・筆者は琉球文学のほかに、南西諸島のシャーマン（ユタガミ・ユタ）の研究もしている。
・学生の関心が琉球文学や神話学よりもシャーマンの場合、シャーマンについても講じることは可能である。
・シラバスに沿った授業のほかに関心がある、という申し出が過去にあり、その対応をしたこともある。そのような場合、授業の時に申し出てほしい。
・また授業の内容があまり馴染みのないものであると、難解すぎる、という声が聞かれる。なるべくわかりやすく解説するようにつとめる。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
・春学期、秋学期は共に同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
・琉球文学（『おもろさうし』）
・神話学
・民俗学（シャーマン研究）

【＜研究テーマ＞】
・『おもろさうし』の文学研究
・日本神話・琉球神話研究
・奄美のシャーマン研究

【＜主要研究業績＞】
・『新うたの神話学』（新典社、2020年）
・『奄美群島おもろの世界』（南方新社、2018年）
・『歌とシャーマン』（南方新社、2015年）

【＜主要研究業績＞】
・『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015年）
・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013年）
・『ユタ神誕生』（南方新社、2013年）
・『夜の海、永劫の海』（新典社、2011年）

【＜主要研究業績＞】
・『うたの神話学』（森話社、2010年）
・『琉球の恋歌』（新典社、2010年）
・『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008年）
その他
『奄美三少年　ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017年）の監修

【Outline (in English)】
The myth and folklore of Nansei Islands are closely related to Southern Kyushu. The Hayato were the people who sailed across the Southern Kyushu and Southern Satsuma islands. In this course, the myth of the Hayato and the people of the sea who sailed across the Nansei areas will be learned. The relationship between the Hayato from the Southern Kyushu and Japanese myths reveals the presence of Hayato people in Japanese myths. The culture of ancient Kyushu will be deeply learned. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings.The goal is to understand the importance of Hayato in Japanese mythology. For learning outside of class hours, read textbooks and references carefully. The method and criteria for grade evaluation are to attend at least 6 times and take a test.The test is 70% and the normal score is 30%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

中国文学Ａ

遠藤　星希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
司馬遷の『史記』を精読する。『史記』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、『源氏物語』にもその影響が色濃く見えるのみならず、その後の日本文学にも影響力を持ち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（三家注や瀧川資言『史記會注考證』等）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ、『史記』巻八十六「刺客列伝」を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深め、そこに描かれた人々の英知を吸収すると同時に、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】
１．『史記』についての基礎的な知識を習得する。
２．漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に頻出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
３．漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『史記』本文を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『史記』の本文を数行ずつ区切ってそれぞれ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。質問は授業中に随時受け付け、その場で返答できない場合は、次週の授業の冒頭に口頭で返答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（１）	『史記』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（２）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	『史記』精読（１）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第１段落）
第4回	『史記』精読（２）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第２段落）
第5回	『史記』精読（３）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第３段落）
第6回	『史記』精読（４）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第４段落）
第7回	『史記』精読（５）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第５段落）
第8回	『史記』精読（６）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第６段落）
第9回	『史記』精読（７）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第７段落）
第10回	『史記』精読（８）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第８段落）
第11回	『史記』精読（９）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第９段落）
第12回	『史記』精読（１０）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第１０段落）
第13回	『史記』精読（１１）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第１１段落）
第14回	『史記』精読（１２）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第１２段落）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当部分について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】
・点校本二十四史修訂本『史記』（中華書局、2014）
・瀧川資言『史記會注考證』（上海古籍出版社、2015）
・吉田賢抗〔ほか〕著『史記』1-15（明治書院、1973-2014）
・小川環樹〔ほか〕訳『史記列伝』（岩波文庫、1975）
・小竹文夫, 小竹武夫訳『列伝』1-4（ちくま学芸文庫、1995）
・武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（講談社文芸文庫、1997）
・宮崎市定『史記を語る』（岩波文庫、1996）
その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
担当者としての発表内容（７０％）、討論への参加度・貢献度・積極性（３０％）。

【学生の意見等からの気づき】
授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】
授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
中国古典文学
＜研究テーマ＞
時間意識・空間意識という側面からの分析を通した、中国文学・思想史上における李賀の定位の再検討
＜主要研究業績＞
「唐代伝奇「定婚店」をめぐる一考察」（『青山語文』46号、2016・3）
「遺臣のゆれる心――杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12）
「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中國學會報』65集、2013・10）など

【Outline (in English)】
Course Outline: In this course, we will closely read Sima Qian's *Shiji* (The Records of the Grand Historian). *Shiji* is one of the most familiar Chinese classics that not only exerted strong influence on the Tale of Genji but also had enduring effects on the subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in literary Chinese (So-called Sanjia Zhu — three standard commentaries — and *Shiki kaichu kosho* by Sukenobu Takigawa). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and absorb wisdom of people described therein through close reading of Chapter 86, Biographies of Assassins, of *Shiji*, and develop basic skills for close reading of Chinese classic writings.
Learning Objectives: By the end of the course, students should be able to do the followings:
– A. Acquire basic knowledge of *Shiji*.
– B. Acquire the basic skills necessary to read and comprehend Chinese materials.
– C. Critically examine existing translations with reference to notes written in Chinese, and acquire the ability to interpret the text of *Shiji* in an original way.

Learning Activities Outside of the Classroom: Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.
Grading Criteria/Policy: 70% for preparation of materials used in class: 30% for active participation in class discussion.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

中国文学Ｂ

遠藤　星希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
梁の昭明太子が編纂した『文選』所収の詩を精読する。『文選』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、その後も日本文学に影響力を持ち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（李善注や五臣注など）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ『文選』所収の詩を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深めつつ、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】
１．『文選』についての基礎的な知識を習得する。
２．漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に頻出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
３．漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『文選』所収の詩を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『文選』所収の詩の中から比較的有名なものを精選し、一首ずつ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。質問は授業中に随時受け付け、その場で返答できない場合は、次週の授業の冒頭に口頭で返答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（１）	『文選』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（２）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	『文選』精読（１）	「古詩十九首・其九」前半部分
第4回	『文選』精読（２）	「古詩十九首・其九」後半部分
第5回	『文選』精読（３）	曹植「公讌詩」前半部分
第6回	『文選』精読（４）	曹植「公讌詩」後半部分
第7回	『文選』精読（５）	王粲「七哀詩二首・其一」前半部分
第8回	『文選』精読（６）	王粲「七哀詩二首・其一」後半部分
第9回	『文選』精読（７）	潘岳「悼亡詩三首・其一」前半部分
第10回	『文選』精読（８）	潘岳「悼亡詩三首・其一」後半部分
第11回	『文選』精読（９）	謝霊運「登石門最高頂」前半部分
第12回	『文選』精読（１０）	謝霊運「登石門最高頂」後半部分
第13回	『文選』精読（１１）	謝朓「晩登三山還望京邑」前半部分
第14回	『文選』精読（１２）	謝朓「晩登三山還望京邑」後半部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当する詩について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】
・『文選』（上海古籍出版社、1986）
・『文選』（中華書局、1977）
・『六臣注文選』（浙江古籍出版社、1999）
・『唐鈔文選集註彙存』（上海古籍出版社、2011）
・小尾郊一・花房英樹『文選』（集英社、1974-1976）
・内田泉之助・網祐次〔ほか〕『文選』（明治書院、1963-2001）
・斯波六郎・花房英樹『文選』（筑摩書房、1963）
・興膳宏・川合康三『文選』（角川書店、1988）
・高橋忠彦・神塚淑子『文選』（学習研究社、1985）
その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
担当者としての発表内容（７０%）、討論への参加度・貢献度・積極性（３０%）。

【学生の意見等からの気づき】
授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】
授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
中国古典文学
＜研究テーマ＞
時間意識・空間意識という側面からの分析を通した、中国文学・思想史上における李賀の定位の再検討
＜主要研究業績＞
「唐代伝奇「定婚店」をめぐる一考察」（『青山語文』46号、2016・3）
「遺臣のゆれる心――杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12)
「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中國學會報』65集、2013・10）など

【Outline (in English)】
Course Outline: In this course, we will closely read poetry contained in the anthology *Wen Xuan*, which was compiled by Xiao Tong, a Crown Prince of the Chinese Liang Dynasty. *Wen Xuan* was one of the most familiar Chinese classics for aristocrats in the Heian period and has been influential in subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in Literary Chinese (Li Shan and Commentaries by Five Officials). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and while developing basic skills for reading Chinese classical writings through close reading of poetry contained in *Wen Xuan*.
Learning Objectives: By the end of the course, students should be able to do the followings:
– A. Acquire basic knowledge of *Wen Xuan*.
– B. Acquire the basic skills necessary to read and comprehend Chinese materials.
– C. Critically examine existing translations with reference to notes written in Chinese, and acquire the ability to interpret the text of *Wen Xuan* in an original way.
Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to read the presentation material prior to each class. Study time will be a minimum of 4 hours per class.

Grading Criteria/Policy: 70% for preparation of materials used in class: 30% for active participation in class discussion.

ART500B2（芸術学 / Art studies 500）

日本文芸特講ＩＡ（文芸と音楽）

スティーヴン・ネルソン

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本年度のテーマは「『源氏物語』と音楽」とします。これには：1）『源氏物語』の中の音楽、2）『源氏物語』と同時代（10世紀～11世紀初頭）の音楽史との関係、3）『源氏物語』が後世の音楽・芸能に及ぼした影響（源氏能、箏組歌など）の事柄が含まれます。春学期はまず『源氏物語』第二部の冒頭、「若菜 上」・「若菜 下」巻の音楽場面を研究対象とし、特に音楽関係の用語に注意を払いながら、その場面場面の内容を「正しく読む」こと、それについて「わかりやすく書く」ことを目的とします。

【到達目標】
・『源氏物語』の音楽場面を正しく把握し、説明できること
・問題点を発見し、詳しく調査した上で、自らの見解が述べられること
・発表が明快に行えること
・問題点について客観的に討論できること
・万葉仮名や変体仮名、及び平安時代に成立した楽譜が読めるようになること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
導入はネルソンによる講義・解説が中心ですが、第5回以降は学生による発表・質疑応答が中心になります。なお、少人数参加の演習形式であり、学生個人個人に合せた指導をしますので、下記「授業計画」はあくまでも予定であり、実施に際して変更が当然生じてくるものと考えてください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス①	自己紹介（全員）、授業の進め方の説明、発表スケジュールの調整など
第2回	ガイダンス②	紫式部と音楽 音楽場面の調査方法について
第3回	ガイダンス③ 平安時代の音楽①	『源氏物語』に現れる楽器とその楽譜
第4回	ガイダンス④ 平安時代の音楽②	年中行事や社寺の音楽、舞楽と国風歌舞
第5回	ガイダンス⑤	御遊び、呂律、時の調子、音楽論
第6回	ガイダンス⑥	様々な声楽（詩歌の朗唱、催馬楽、風俗歌など） 教習と伝授、音楽の伝承と「血統」
第7回	「若菜 上」巻について 「若菜 上」を読む①	梗概と音楽場面の紹介 発表と討論　第12段
第8回	「若菜 上」巻を読む②	発表と討論　第12段（続き）
第9回	「若菜 上」巻を読む③	発表と討論　第21段
第10回	「若菜 上」巻を読む④	発表と討論　第23段
第11回	「若菜 下」巻について 「若菜 下」巻を読む①	梗概と音楽場面の紹介 発表と討論　第9段
第12回	「若菜 下」巻を読む②	発表と討論　第10段
第13回	「若菜 下」巻を読む③ これまでの内容の確認と再検討	発表と討論　第12段 補遺と討論
第14回	春学期のまとめ	春学期の授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することことが述べられるように考えておくこと。
第2～6回　事前配付の資料を読んでくること。
第7～13回　発表の準備とレジュメ作成。
第14回　期末レポート・楽譜課題作成。
本授業の準備・復習時間は合わせて4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
阿部秋生他 校注・訳『源氏物語』④（小学館新編日本古典文学全集、全6冊のうち）。JapanKnowledgeで閲覧可能。

【参考書】
秋山虔他 編『源氏物語図典』（小学館）
小町谷照彦・倉田実 編著『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院）
今井源衛『源氏物語への招待』（小学館）
遠藤徹 構成『雅楽』（平凡社、別冊太陽）

【成績評価の方法と基準】
発表（詳しく調査した結果を明快に発表できたか）30％、平常点とディスカッション（毎回出席し、意欲的に、積極的に発言したか）30％、レポートと楽譜課題（論証のしっかりしたレポートと誤りのない楽譜課題を提出したか）40％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉 日本音楽史学
〈研究テーマ〉日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、 日本古典文学の英訳など
〈主要研究業績〉『源氏物語』・『平家物語』と音楽関連のもの
①〈研究ノート〉「『源氏物語』における絃楽器の曲種と調絃について ―古楽譜研究者の立場から―」（『日本文学誌要』92、2015年）
②「『源氏物語』の音楽を読む ―現実と虚構、準拠と創作―」（芳賀徹企画・総監修、伊井春樹監修『源氏物語国際フォーラム集成』、源氏物語千年紀委員会、2009年）
③「平家語りの成り立ち ―平家語りの音楽生成論へ向けて―」（明治学院大学教養教育センター付属研究所編『カルチュール』3、2006年）

【Outline (in English)】
Course Outline: This is a graduate class on the music of *The Tale of Genji*. This topic includes: 1. the depiction of music in the tale; 2. its relationship to the music history of the time it depicts (10th to early 11th century); and 3. the influence of the tale and its music on later genres of performing arts, including *nō* and *sōkyoku* (music for 13-stringed zither *koto* of the early modern period). In the spring semester, introductory lectures by the instructor are followed by close reading of sections from the chapters *Wakana Jō* (‘Spring Shoots !’) and *Wakana Ge* (‘Spring Shoots II’).
Learning Objectives: Through this study of music in *The Tale of Genji*, students learn to identify research issues, undertake basic research, give effective presentations, and participate actively in critical, objective debate. They also learn to read old written Japanese of various types, and traditional music notation.
Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to read materials distributed ahead of class by the instructor for the first few lessons, to prepare presentations on sections of the tale, and then to compile a research survey on a topic developed in consultation with the instructor during the semester.
Grading Criteria/Policy: presentations 30%; participation in discussion 30%; final paper and music assignment (transnotation) 40%.

ART500B2（芸術学 / Art studies 500）

日本文芸特講ＩＢ（文芸と音楽）

スティーヴン・ネルソン

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本年度のテーマは「『源氏物語』と音楽」とします。これには：1）『源氏物語』の中の音楽、2）『源氏物語』と同時代（10世紀～11世紀初頭）の音楽史との関係、3）『源氏物語』が後世の音楽・芸能に及ぼした影響（源氏能、箏組歌など）の事柄が含まれます。秋学期では、春学期で行った『源氏物語』第二部「若菜 下」巻の音楽場面の精読を続けるとともに、『源氏物語』の影響を受けて成立した源氏能と箏組歌の例を取り上げ、影響の有り様を明らかにします。

【到達目標】
・『源氏物語』の音楽場面を正しく把握し、説明できること
・問題点を発見し、詳しく調査した上で、自らの見解が述べられること
・発表が明快に行えること
・問題点について客観的に討論できること
・万葉仮名や変体仮名、平安時代に成立した楽譜が読めるようになること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
導入はネルソンによる講義・解説が中心ですが、第5回以降は学生による発表・質疑応答が中心になります。なお、少人数参加の演習形式であり、学生個人個人に合せた指導をしますので、下記「授業計画」はあくまでも予定であり、実施に際して変更が当然生じてくるものと考えてください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス①	学期レポートの講評、発表スケジュールの調整
第2回	ガイダンス②	『源氏物語』の音楽研究、『源氏物語』音楽研究史概説
第3回	ガイダンス③	古注釈と音楽 ①
第4回	ガイダンス④	古注釈と音楽 ②
第5回	「若菜 下」巻を読む①	発表と討論　第13～15段
第6回	「若菜 下」巻を読む②	発表と討論　第16段
第7回	「若菜 下」巻を読む③	発表と討論　第17・18段
第8回	「若菜 下」巻を読む④	発表と討論　第19段
第9回	「若菜 下」巻を読む⑤	発表と討論　第19段（続き） 発表と討論　第20・21段
第10回	「若菜 下」巻を読む⑥	発表と討論　第38・40段
第11回	ガイダンス⑤	『源氏物語』の影響を受けて成立した作品とその調査方法について
第12回	作品①	発表と討論　題材は未定（源氏能か箏組歌）
第13回	作品②	発表と討論　題材は未定（源氏能か箏組歌）
第14回	秋学期のまとめ	秋学期の授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1～4、11回　事前配付の資料を読んでくること。
第5回以降　発表の準備とレジュメ作成。
第14回　期末レポート・楽譜課題作成。
本授業の準備・復習時間は合わせて4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
阿部秋生他 校注・訳『源氏物語』④（小学館新編日本古典文学全集、全6冊のうち）。JapanKnowledgeで閲覧可能。

【参考書】
秋山虔他 編『源氏物語図典』（小学館）
小町谷照彦・倉田実 編著『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院）
今井源衛『源氏物語への招待』（小学館）
遠藤徹 構成『雅楽』（平凡社、別冊太陽）

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーション（詳しく調査した結果を明快に発表できたか）30％、平常点とディスカッション（毎回出席し、意欲的に、積極的に発言したか）30％、レポートと楽譜課題（論証のしっかりしたレポートと誤りのない楽譜課題を提出したか）40％

【学生の意見等からの気づき】
該当なし。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉 日本音楽史学
〈研究テーマ〉日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、 日本古典文学の英訳など
〈主要研究業績〉『源氏物語』・『平家物語』と音楽関連のもの
①〈研究ノート〉「『源氏物語』における絃楽器の曲種と調絃について ―古楽譜研究者の立場から―」（『日本文学誌要』92、2015年）
②「『源氏物語』の音楽を読む ―現実と虚構、準拠と創作―」（芳賀徹企画・総監修、伊井春樹監修『源氏物語国際フォーラム集成』、 源氏物語千年紀委員会、2009年）
③「平家語りの成り立ち ―平家語りの音楽生成論へ向けて―」（明治学院大学教養教育センター付属研究所編『カルチュール』3、2006年）

【Outline (in English)】
Course Outline: This is a graduate class on the music of *The Tale of Genji*. This topic includes: 1. the depiction of music in the tale; 2. its relationship to the music history of the time it depicts (10th to early 11th century); and 3. the influence of the tale and its music on later genres of performing arts, including *nō* and *sōkyoku* (music for 13-stringed zither *koto* of the early modern period). In the autumn semester, introductory lectures by the instructor are followed by close reading of sections from the chapter *Wakana Ge* ('Spring Shoots II'), and analysis of pieces from the *nō* and/or *koto-kumiuta* repertoires, as selected by the participating students.
Learning Objectives: Through this study of music in *The Tale of Genji*, students learn to identify research issues, undertake basic research, give effective presentations, and participate actively in critical, objective debate. They also learn to read old written Japanese of various types, and traditional music notation.
Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to read materials distributed ahead of class by the instructor for the first few lessons, to prepare their presentations on sections of the tale, the *nō* play, and/or *koto kumiuta*, and then to write a final paper on a topic developed in consultation with the instructor during the semester.
Grading Criteria/Policy: presentations 30%; participation in discussion 30%; final paper and music assignment (transnotation) 40%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本文芸特講ＩＩＡ（ｱｰﾄﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ研究）

中沢　けい

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「表現者のための憲法入門　第二版」をテキストに創作表現行為と日本国憲法の関係を考察いたします。

【到達目標】
「表現の自由」は憲法で保障された権利です。しかし、「表現の自由」はなにを表現しても良いとされているわけではありません。「表現の自由」はそのほかの権利との関係において制限される場合もあります。また時代によって価値観の変化があり、それぞれに時代の政治的問題と表現が緊張関係を持つことがあります。この授業では、日本の法律の根幹をなす憲法と表現がどのような関係を持っているのかその概略をつかむことを目的とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と受講生による発表および質疑応答

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	なぜこの授業を設けたのか	創作（文芸）を志す人はなぜ文化を支える社会的仕組みについて学ぶ必要があるのかをお話します。
第2回	法律と表現の関係	法律と表現の関係について皆さんのお考えをお尋ねします。
第3回	「法の下の平等」1	昨年度、テキストから選んでもらった主題を生美ます。 主題の提案者の発表をお願いします。
第4回	「法の下の平等」2	質疑応答
第5回	「非嫡出子相続分違憲決定(最高裁2013[平成25])年9月4日決定」1	主題の提案者の発表をお願いします。
第6回	「非嫡出子相続分違憲決定(最高裁2013[平成25])年9月4日決定」2	質疑応答
第7回	「東大ポポロ劇団事件」1	主題の提案者の発表をお願いします。
第8回	「東大ポポロ劇団事件」2	質疑応答
第9回	マクリーン事件（最高裁1978.10.4）1	主題の提案者の発表をお願いします。
第10回	マクリーン事件（最高裁1978.10.4）2	質疑応答
第11回	法律と創作について	Ｍ１の皆さんにここまで授業を受けてきた感想を伺います。
第12回	秋学期にむけテキストから主題を選ぶ。	Ｍ１の皆さんにテキストをもとに興味を持った判例を選んでもらい、発表してもらいます。
第13回	番外１　生成ＡＩを巡る動向について	生成ＡＩは技術の進歩と社会的制度の間で大きな動きを見えています。ここでは最新の動きについて把握しましょう。
第14回	番外２　ＳＮＳの取り扱いについて	ＳＮＳは社会に大きな影響力を発揮しています。ＳＮＳを巡る最新の動きについてまとめます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
「表現者のための憲法入門」をテキストに日本国憲法と表現、創作について学びますので、用語などになれるために、テキストをよく読み込んでください。また生成ＡＩやＳＮＳと社会制度の関係も学びますので、最新動向について新聞記事などで情報の取得につとめてください。

【テキスト（教科書）】
志田陽子「表現者のための憲法入門」（武蔵野美術大学出版部局）２０２４年刊
２８６０円
授業時に配布する資料とレジュメのプリント

【参考書】
必要があれば授業時に提示します。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な参加と授業時の発表　５０％
期末レポート　５０％

【学生の意見等からの気づき】
あまり関心を持っていなかった分野かもしれませんが、初歩的な関心からより深い関心へと意識を高めることにようって、創作家としてのセンスを身に着けてもらうように努力します。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文芸創作。
＜研究テーマ＞小説、エッセイ、評論などの執筆＜主要研究業績＞
主要作品に「海を感じる時」「水平線上にて」「女ともだち」「楽隊のうさぎ」はある。いずれも小説。

【Outline (in English)】
Using the text "Introduction to the Constitution for Artists, Second Edition," we will examine the relationship between creative expression and the Constitution of Japan.
Learn about the relationship between law and expressive behavior
Active participation in class 50%
Report 50%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本文芸特講ＩＩＢ（ｱｰﾄﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ研究）

中沢　けい

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「表現者のための憲法入門」をもとに法律と表現の関係を考察します。春学期授業を前提として秋学期は適宜にテーマを提案して行きます。

【到達目標】
テキスト「表現者のための憲法入門」をもとに法律の表現の関係を考察します。また、新しく登場した技術の生成ＡＩやＳＮＳなどと法律の関係を考察して行きます。表現技術の変化と社会的な規制の関係について、基礎的な認識を持つことが目標になります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と受講生による発表および質疑応答

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	春学期授業の振り返り	春学期授業内容を振り返りながら夏季休業中に気づいたことについて、受講生に話をしてもらいます。
第2回	Ｍ1生による判例の選定	授業内で取り上げる判例をＭ1生に選んでもらい発表してもらいます。
第3回	判例1	判例の説明と質疑応答
第4回	判例2	判例の説明と質疑応答
第5回	判例3	判例の説明と質疑応答
第6回	法の精神と表現の精神	これまでの授業をもとに法律と表現の関係を考察してもらいます。
第7回	印刷技術の変遷	活版印刷→写植印刷→デジタル技術とインターネット→ＳＮＳの登場→生成ＡＩと変化した技術についての講義をします。
第8回	ＳＮＳは何か問題なのか1	最新の報道をもとにＳＮＳの何が問題になっているのかを考察します。
第9回	ＳＮＳは何が問題なのか2	ＳＮＳ登場によって変化した表現環境について講義をいたします。
第10回	修士副論文提出予定者の発表と質疑応答　2	修士副論文は各自の興味関心によってテーマが選ばれていますので、これまでの授業進行と関連はしていませんので、御注意ください。
第11回	修士副論文提出予定者の発表と質疑応答　3	発表を聞き、質問をし、答えるという技術を磨きましょう。
第12回	生成ＡＩの現在	生成ＡＩの最新動向について受講生に発表をしてもらい質疑応答を行います。
第13回	文芸および文学の変化について	文化形成の在り方の中から文芸および文学の変化について受講生相互の意見交換を行います。
第14回	創作者として考えなければならないこと	春学期、秋学期を通じて創作者として考えなければならないことには、どういうことがあるかを受講生各自に発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
表現行為と法律の関係が問題とされる報道に注意を払い、報道内容を収集すること。著作権なども含む。またＳＮＳ、生成ＡＩについては報道内容を時系列で収集することを求める。

【テキスト（教科書）】
志田陽子「表現者のための憲法入門　第二版}（武蔵野美術大学出版局）
2024年刊　2860円

【参考書】
必要があれば随時に提示します。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な参加と発表　５０％
期末レポート　５０％

【学生の意見等からの気づき】
あまり関心を持っていなかった分野かもしれませんが、初歩的な関心からより深い関心へと意識を高めることにようって、創作家としてのセンスを身に着けてもらうように努力します。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません。

【その他の重要事項】
特にありません。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文芸創作。
＜研究テーマ＞小説、エッセイ、評論などの執筆＜主要研究業績＞主要作品に「海を感じる時」「水平線上にて」「女ともだち」「楽隊のうさぎ」はある。いずれも小説。

【Outline (in English)】
Based on "An Introduction to the Constitution for Artists," we will consider the relationship between the law and expression.
（Learning Objectives）
Collecting the latest information
（Learning activities outside of classroom）
（Grading Criteria /Policy）
Active participation in class 50%
Report 50%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

女性文学Ａ

藤木　直実

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】
この授業においては、現代の女性作家による文学テクストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説　ガイドブック』（ひつじ書房、2023年）の内容に基づき、演習形式で進める。担当者はあらかじめ対象のセクションや作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス①	授業の目的、計画、方法についての概説
第2回	ガイダンス②	発表分担の決定
第3回	文学史・文学場	担当者による報告と受講生による討議
第4回	ジェンダーカテゴリー	担当者による報告と受講生による討議
第5回	女性作家・ガイノクリティシズム	担当者による報告と受講生による討議
第6回	ライトノベルとジェンダー	担当者による報告と受講生による討議
第7回	脱構築・クィア批評	担当者による報告と受講生による討議
第8回	メディア論	担当者による報告と受講生による討議
第9回	恋愛	担当者による報告と受講生による討議
第10回	セクシュアリティ	担当者による報告と受講生による討議
第11回	少女マンガとジェンダー	担当者による報告と受講生による討議
第12回	結婚・家族	担当者による報告と受講生による討議
第13回	母性・生殖	担当者による報告と受講生による討議
第14回	まとめ	春学期の学修内容と各自の課題の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する（20時間）。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく（4時間）。
【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める（2時間）。

【テキスト（教科書）】
飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説　ガイドブック』（ひつじ書房、2023年）。その他開講時に指示する。

【参考書】
岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』（晶文社、2014）、その他、授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
期末レポート（50％）に加えて、報告の内容と水準（30％）、授業中の貢献度（20％）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評
＜研究テーマ＞森鷗外と女性、女性文学
＜主要研究業績＞『子どもの本でジェンダーレッスン』(編著)、『〈妊婦〉アート論』(共編著)、『現代女性文学論』(共著)

【Outline (in English)】
We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay. between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

女性文学Ｂ

藤木　直実

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】
この授業においては、現代の女性作家による文学テクストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説　ガイドブック』（ひつじ書房、2023年）の内容に基づき、演習形式で進める。担当者はあらかじめ対象のセクションや作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス①	授業の目的、計画、方法についての概説
第2回	ガイダンス②	担当作品の決定
第3回	少女・学校・友情	担当者による報告と受講生による討議
第4回	ケア	担当者による報告と受講生による討議
第5回	アニメーションとジェンダー	担当者による報告と受講生による討議
第6回	暴力	担当者による報告と受講生による討議
第7回	消費文化・装い	担当者による報告と受講生による討議
第8回	労働・資本主義・社会運動	担当者による報告と受講生による討議
第9回	災害・エコロジー	担当者による報告と受講生による討議
第10回	映画とジェンダー	担当者による報告と受講生による討議
第11回	戦争・帝国主義・植民地	担当者による報告と受講生による討議
第12回	越境・日本語文学	担当者による報告と受講生による討議
第13回	今期のまとめ	今期の学修内容の振り返り
第14回	今年度のまとめ	今年度の学修内容のふりかえり・レポート作成上の注意など

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する（20時間）。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく（4時間）。
【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める（2時間）。

【テキスト（教科書）】
開講時に指示する

【参考書】
岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』（晶文社、2014）、飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説　ガイドブック』（ひつじ書房、2023）、その他授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
期末レポート（50％）に加えて、報告の内容と水準（30％）、授業中の貢献度（20％）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評
＜研究テーマ＞森鷗外と女性、女性文学
＜主要研究業績＞『子どもの本でジェンダーレッスン』（編著）、『〈妊婦〉アート論』(共編著)、『現代女性文学論』（共著）

【Outline (in English)】
We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay. between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

ART500B2（芸術学 / Art studies 500）

文芸と視聴覚芸術Ａ

越川　道夫

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通して、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。

【到達目標】
担当講師の作品だけでなく、参考作品を鑑賞し、または関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
担当講師の講義、場合よっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。またオンラインの授業になった場合も各回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に応答する形で授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の概説
第2回	講義１／現場からの報告①	毎年のことながら、映画の原理を知ることから授業を始めます。
第3回	講義２／現場からの報告②	講師の映画制作現場での経験に則しながら、できるだけ具体的に映画の原理と身体との関係を学びます。
第4回	講義３／現場からの報告③	実際の映画制作者が映画の現場において何を考えているかということを伝えていきます。
第5回	講義４／現場からの報告④	必要に応じて文献を読んだり、作品を見ることを指示します。
第6回	講義５／現場からの報告⑤	随時質問や学生の考えを吸い上げ、それに応える形で有機的に授業を進めていく予定です。
第7回	参考作品①／鑑賞	鑑賞する作品は、学生の感心の持ち方を掬い上げながら可能なものの中から適宜指示します。
第8回	参考作品①／ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第9回	参考作品①／ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第10回	講義６／現場からの報告⑥	前回までのディスカッションを受けての講義
第11回	参考作品②／鑑賞	参考作品②の鑑賞
第12回	参考作品②／ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第13回	参考作品②／ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第14回	講義７／現場からの報告⑦	講師による講義 春期授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。
またオンライン授業の場合はYouTubeに授業動画をアップするので、視聴後感想、質問等のメールを必ず講師に送ること。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』(岩波現代文庫)
前田英樹『小津安二郎の家―持続と浸透』(書肆山田)
この2冊には通年必ず言及します。またその他の文献に関しては適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
研究発表、レポート(50％)、授業参加度等(50％)によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
授業で作品を見るだけでなく、各自で作品を見てもらうことがあります。その場合は、その都度視聴方法を指示します。視聴した作品を受けての授業を行いますので、授業に参加できなかった場合は、何を視聴したかを掲示板にあげますので、必ず見るようにしてください。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞映画
＜研究テーマ＞映画
＜主要研究業績＞『アレノ』（監督・脚本／2015）
『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）
『月子』（監督・脚本／2017）
『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）
『夕陽のあと』（監督／2019）
『水いらずの星』（監督／2023）など
またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline (in English)】
Through discussion and research, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, and the relationship between the body and the foundation of each.

ART500B2（芸術学 / Art studies 500）

文芸と視聴覚芸術Ｂ

越川　道夫

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通じて、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。また秋期は特に映画表現の多様性に触れることも目的とする。

【到達目標】
主に参考映画作品を鑑賞し、その作品に関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
担当講師の講義、場合よっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。オンラインの授業になった場合も各回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に応答する形で授業を進めていく。秋期はできるだけ多くの映画を鑑賞し考察することによって、映画表現の多様性に触れていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講義１／現場からの報告①	秋期の授業についてのガイダンス
第2回	参考作品①／鑑賞	参考作品①を鑑賞する
第3回	参考作品①／ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第4回	参考作品①／ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第5回	参考作品②／鑑賞	参考作品②を鑑賞する
第6回	参考作品②／ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第7回	参考作品②／ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第8回	講義２／現場からの報告②	秋期はできるだけ多様な映画表現に触れることを目標とします。
第9回	参考作品③鑑賞	参考作品③を鑑賞する
第10回	参考作品③／ディスカッション①	参考作品③についてのディスカッション
第11回	参考作品③／ディスカッション②	参考作品③についてのディスカッション
第12回	参考作品④鑑賞	参考作品④を鑑賞する
第13回	参考作品④／ディスカッション①	参考作品④についてのディスカッション
第14回	秋学期のまとめ	秋学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』(岩波現代文庫)
前田英樹『小津安二郎の家ー持続と浸透』（書肆山田）
この2冊には通年必ず言及します。またその他の文献に関しては適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
研究発表、レポート(50％)、授業参加度等(50％)によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
授業で作品を見るだけでなく、各自で作品を見てもらうことがあります。その場合は、その都度視聴方法を指示します。視聴した作品を受けての授業を行いますので、授業に参加できなかった場合は、何を視聴したかを掲示板にあげますので、必ず見るようにしてください。
また講師のメールにて随時質問などを受け付けます。その回答に関しては個別、または授業内で行います。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞映画
＜研究テーマ＞映画
＜主要研究業績＞『アレノ』（監督・脚本／2015）
『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）
『月子』（監督・脚本／2017）
『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）
『夕陽のあと』（監督／2019）
『水いらずの星』（監督／2023）『Uquwa ことばと音の間』（監督／2024）など。またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline (in English)】
Through discussions and research presentations of their works, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, the relationship between the body and the foundation of each, and the diversity of film expression.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

学際的文学論Ａ（文学の境界領域、文学と宗教等）

アンドレ・リネペ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業で゛は１９世紀半ば以降、日本人と外国人によって書かれた著作を精読しなが゛ら、「日本」はど゛のように構想され、その日本像は歴史的な文脈においてど゛のような意味が゛あったのかという問題を考えます。前期の授業では明治維新の前後から明治20年頃にかけての著名な文献資料を検討します。「文明」や「武士道」などのキーワードがある明治時代の日本論は後の時代にも大きな影響をおよぼ゛すこととなります。その日本論の系譜を検討しなが゛ら、現代の日本学の可能性を探ります。

【到達目標】
・世界の日本論の言説史を説明できる
・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・授業内の購読(クロース・リーディングの方法による)
・授業内の発表(ショートプレゼンテーション、文献資料の紹介)
・ディスカッション(グループワーク、ペアワーク)
・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本授業の問題関心と授業の進め方の説明、文献資料の紹介
第2回	イントロダクション	日本論の前史と先行研究の説明
第3回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（福沢諭吉『西洋事情』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第4回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（中江兆民『三酔人経綸問答』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第5回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（エリザベス・バード『日本奥地紀行』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第6回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（ラフカディオ・ハーン『知られぬ日本の面影』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第7回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（バジル・ホール・チェンバレン『日本事物誌』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第8回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（雑誌「日本及日本人」）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第9回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（徳富蘇峰『将来之日本』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第10回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（新渡戸稲造『武士道』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第11回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（内村鑑三『代表的日本人』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第12回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（岡倉天心『茶の本』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第13回	明治期の日本論を読む	資料の精読（夏目漱石「私の個人主義」）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第14回	総括：現代の日本論と日本学の可能性を考える	学生からの感想文、総括ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
・本授業で指示した文献を読み、歴史的・思想的背景について調べる
・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、文献資料の解説）

【テキスト（教科書）】
教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配布する予定。
また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】
・大久保橋樹（2003）『日本文化論の系譜:『武士道』から『「甘え」の構造』まで』中公新書
・佐伯彰一・葉が徹編（2001）『外国人による日本論の系譜』中公新書
・船曳健夫（2010）『「日本人論」再考』講談社学術文庫
・南博（1994）『日本人論:明治から今日まで』岩波書店
・山口輝臣編（2018）『はじめての明 治史 東大駒場 連続講義』ちくまプリマー新書

【成績評価の方法と基準】
・平常点（30％）：授業への参加、発言、提出課題などを総合的に評価する
・発表（40％）：数回のショートプレゼンテーションを総合的に評価する
・期末課題の提出（30％）

【学生の意見等からの気づき】
なし。

【学生が準備すべき機器他】
なし。

【その他の重要事項】
なし。

【日本思想史】
＜専門領域＞近世日本政治思想史
＜研究テーマ＞知識論、服制論論、時間論
＜主要研究業績＞『山鹿素行の政治思想における「知」と「行」という概念』（独、2023年）

【Outline (in English)】
This course introduces students to major discourses on Japanese culture, offering an overview of key texts and concepts from the Meiji period to the present within an international perspective. By engaging with a range of representative writings, students will develop the ability to participate in informed discussions on interpretations of Japanese culture and to reflect on current challenges and future directions in Japanese Studies. In the spring term, the course will focus on key texts from the Meiji period (1867-1912). Grading Criteria: (1) Attendance and in-class participation: 30% (2) Short presentations: 40% (3) End-of-term assignment: 30%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

学際的文学論Ｂ（文学の境界領域、文学と宗教等）

アンドレ・リネペ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業で゛は１９世紀半ば以降、日本人と外国人によって書かれた著作を精読しなが゛ら、「日本」はど゛のように構想され、その日本像は歴史的な文脈においてど゛のような意味が゛あったのかという問題を考えます。後期の授業では20世紀前期から戦後期にかけての著名な文献資料を検討します。「禅」や「美」などのキーワードがある昭和前期の日本論は後の時代にも大きな影響をおよぼ゛すこととなります。その日本論の系譜を検討しなが゛ら、現代の日本学の可能性を探ります。

【到達目標】
・世界の日本論の言説史を説明できる
・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・授業内の購読(クロース・リーディングの方法による)
・授業内の発表(ショートプレゼンテーション、資料の紹介)
・ディスカッション(グループワーク、ペアワーク)
・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本授業の問題関心と授業の進め方の説明、文献資料の紹介
第2回	イントロダクション	日本文論の前史と日本論の先行研究の紹介
第3回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（柳田國男『山の人生』）、学生のショートプレゼントです、討論
第4回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（折口信夫『古代研究』）、学生のショートプレゼントです、討論
第5回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（九鬼周造『「いき」の構造』）、学生のショートプレゼントです、討論
第6回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（和辻哲郎『風土』）、学生のショートプレゼントです、討論
第7回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（鈴木大拙『禅と日本文化』）、学生のショートプレゼントです、討論
第8回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（ブルーノ・タウト『日本美の再発見』）、学生のショートプレゼントです、討論
第9回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（オイゲン・ヘリゲル『日本の弓術』）、学生のショートプレゼントです、討論
第10回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（西田幾多郎『日本文化の問題』）、学生のショートプレゼントです、討論
第11回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（ルース・ベネディクト『菊と刀』）、学生のショートプレゼントです、討論
第12回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（三島由紀夫「文化防衛論」）、学生のショートプレゼントです、討論
第13回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（丸山眞男『日本の思想』）、学生のショートプレゼントです、討論
第14回	総括	学生からの感想文、総括ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
・本授業で指示した文献を読み、歴史的・思想的背景について調べる
・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、文献資料の解説）

【テキスト（教科書）】
教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配
布する予定。
また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】
・大久保橋樹（2003）『日本文化論の系譜:『武士道』から『「甘え」の構造』まで』中公新書
・佐伯彰一・葉が徹編（2001）『外国人による日本論の系譜』中公新書
・藤田正勝（2024）『日本哲学入門』講談社現代新書
・船曳健夫（2010）『「日本人論」再考』講談社学術文庫
・南博（1994）『日本人論：明治から今日まで』岩波書店

【成績評価の方法と基準】
・平常点（30％）：授業への参加、発言、提出課題などを総合的に評価する
・発表（40％）：数回のショートプレゼンテーションを総合的に評価する
・期末課題の提出（30％）

【学生の意見等からの気づき】
なし。

【学生が準備すべき機器他】
なし。

【その他の重要事項】
なし。

【日本思想史】
＜専門領域＞近世日本政治思想史
＜研究テーマ＞知識論、服制論、時間論
＜主要研究業績＞『山鹿素行の政治思想における「知」と「行」という概念』（独、2023年）

【Outline (in English)】
This course introduces students to major discourses on Japanese culture, offering an overview of key texts and concepts from the Meiji period to the present within an international perspective. By engaging with a range of representative writings, students will develop the ability to participate in informed discussions on interpretations of Japanese culture and to reflect on current challenges and future directions in Japanese Studies. In the autumn term, the course will focus on key texts from the Taisho period (1912-26) to the early Showa period (1926-89).
Grading Criteria: (1) Attendance and in-class participation: 30% (2) Short presentations: 40% (3) End-of-term assignment: 30%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

文学と風土Ａ

多田　蔵人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代文学の優れた作品を読み、オーソドックスな調査と分析の経験を培う。
直筆資料以来の改稿過程、文体的特徴、他作品・他ジャンルとの関連、作品が発表されたメディアを含む環境、後代への影響といった諸点を探求するなかで、論文執筆に必要なスキルを身につけ、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】
資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、自らの発表や論文で充分に活用できる。
To become familiar with the basic procedures for reading materials and acquire basic skills for reading and understanding them. By doing so, students will be able to extract rich information from each material and fully utilize it in their own presentations and papers.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。最初の時間に要領を説明する。
The seminar will consist of a presentation by the instructor and discussion by all students. The first hour of the seminar will be devoted to explaining the procedure.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する書簡資料についての説明と担当する書簡資料の決定。
第2回	担当教員による報告1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス１
第3回	担当教員による報告1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス１
第4回	受講者による報告１	担当する資料体についての報告
第5回	受講者による報告２	担当する資料体についての報告
第6回	受講者による報告３	担当する資料体についての報告
第7回	受講者による報告４	担当する資料体についての報告
第8回	受講者による報告５	担当する資料体についての報告
第9回	受講者による報告６	担当する資料体についての報告
第10回	受講者による報告７	担当する資料体についての報告
第11回	受講者による報告８	担当する資料体についての報告
第12回	受講者による報告９	担当する資料体についての報告
第13回	受講者による報告10	担当する資料体についての報告
第14回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Students are expected to obtain basic information about the materials each time.

【テキスト（教科書）】
教員により、提供される。

【参考書】
特に指定しない。適宜指示。

【成績評価の方法と基準】
講義中のコメント（20％）、発表（40％）、レポート等の提出物（40％）による総合評価。
Overall evaluation based on comments during lectures (20%), presentations (40%), and reports and other submissions (40%).

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
受講生から希望が出れば、学外授業としての文学館見学を実施する。
Depending on the student's preference, a field trip to the Museum of Literature may be arranged as an off-campus class.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代文学
＜研究テーマ＞永井荷風、幕末～戦後文学における文体史

【Outline (in English)】
【Course outline】With reading works of Modern Japanese Literature, this course aims each participants acquire the skills of research and analysis.
Ability of reading autographs, stylistics, intertextuality, mediology, historical approach, will be required.
【Learning Objectives】Through the exploration of what it means to read autographs, the program aims to cultivate the ability to face materials without preconceptions and to extract rich information from them, as well as to apply the results to literary research.
【Learning activities outside of classroom】The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Students are expected to obtain basic information about the materials each time.
【Grading Criteria /Policy】Overall evaluation based on comments during lectures (20%), presentations (40%), and reports and other submissions (40%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

文学と風土Ｂ

多田　蔵人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代文学の優れた作品を読み、オーソドックスな調査と分析の経験を培う。
直筆資料以来の改稿過程、文体的特徴、他作品・他ジャンルとの関連、作品が発表されたメディアを含む環境、後代への影響といった諸点を探求するなかで、論文執筆に必要なスキルを身につけ、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】
資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、自らの発表や論文で充分に活用できる。
Become familiar with the basic procedures for reading materials and acquire basic skills for reading and understanding them. As a practice of these skills, students will be able to extract rich information from each material and fully utilize it in their own presentations and papers.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。最初の時間に要領を説明する。
The format is an exercise with a presentation by the person in charge and discussion by all participants. The outline will be explained at the beginning of the session.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する原稿（草稿）資料についての説明と担当する原稿（草稿）資料の決定。
第2回	担当教員による報告1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス１
第3回	担当教員による報告1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス１
第4回	受講者による報告１	担当する資料体についての報告
第5回	受講者による報告２	担当する資料体についての報告
第6回	受講者による報告３	担当する資料体についての報告
第7回	受講者による報告４	担当する資料体についての報告
第8回	受講者による報告５	担当する資料体についての報告
第9回	受講者による報告６	担当する資料体についての報告
第10回	受講者による報告７	担当する資料体についての報告
第11回	受講者による報告８	担当する資料体についての報告
第12回	受講者による報告９	担当する資料体についての報告
第13回	受講者による報告10	担当する資料体についての報告
第14回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Students are expected to obtain basic information about the material each session.

【テキスト（教科書）】
教員により、提供される。
The faculty will provide.

【参考書】
特に指定しない。適宜指示。
Not specified.

【成績評価の方法と基準】
講義中のコメント（20％）、発表（40％）、レポート等の提出物（40％）による総合評価。
Overall evaluation based on comments during lectures (20%), presentations (40%), and reports and other submissions (40%).

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
受講生の希望によっては、学外授業としての文学館見学を実施する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代文学
＜研究テーマ＞永井荷風、幕末～戦後文学における文体史

【Outline (in English)】
【Course outline】With reading works of Modern Japanese Literature, this course aims each participants acquire the skills of research and analysis.
Ability of reading autographs, stylistics, intertextuality, mediology, historical approach, will be required.
【Learning Objectives】Become familiar with the basic procedures for reading materials and acquire basic skills for reading and understanding them. As a practice of these skills, students will be able to extract rich information from each material and fully utilize it in their own presentations and papers.
【Learning activities outside of classroom】The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Students are expected to obtain basic information about the material each session.
【Grading Criteria /Policy】Overall evaluation based on comments during lectures (20%), presentations (40%), and reports and other submissions (40%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

能楽作品研究Ａ

佐藤　和道

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
室町時代に書かれた金春禅鳳の謡本を用いて、能楽の作品を研究するための基本的な方法を学ぶ。春学期では、作品研究を行う前提となる校訂本文を作成する。金春禅鳳の謡本は、崩し字で書かれている。崩し字を読んだ経験がなくても受講できるが、既修者以上に準備の時間が必要である。

【到達目標】
1) 翻刻、校合を経て校訂本文を作成することができる。
2) 室町時代から現代に至る謡本の変遷について基礎知識を得る。
3) 謡本の詞章、演出注記の読み方に関する基礎知識を得る。
4) 能の小段構造、各小段の特徴に関する基礎知識を得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
20曲ほどある金春禅鳳自筆謡本から1曲を選び、担当曲の翻刻、校合、校訂本文作成を行う。シラバスには11曲を載せているが、受講者の人数や希望によって曲数や曲目は変更される可能性がある。授業内で1〜2回の口頭発表、授業の最後に作成した校訂本文を提出する必要がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス・概説１	世阿弥自筆本から現代の謡本に至る歴史的な変遷の解説。担当曲目の決定。
第2回	概説２	校訂本文を作成するための基本的な資料、謡本に記されている注記の意味、小段理論などの説明。
第3回	金春禅鳳謡本の読解（１）	〈自然居士〉の翻刻と校合。観阿弥の能についての解説。
第4回	金春禅鳳謡本の読解（２）	〈百万〉の翻刻と校合。世阿弥の能についての解説。
第5回	金春禅鳳謡本の読解（３）	〈実盛〉の翻刻と校合。修羅能についての解説。
第6回	金春禅鳳謡本の読解（４）	〈隅田川〉の翻刻と校合。観世元雅の能についての解説。
第7回	金春禅鳳謡本の読解（５）	〈三輪〉の翻刻と校合。神能についての解説。
第8回	金春禅鳳謡本の読解（６）	〈定家〉の翻刻と校合。金春禅竹の能についての解説。
第9回	金春禅鳳謡本の読解（７）	〈碇潜〉の翻刻と校合。平家物語を題材とする能についての解説。
第10回	金春禅鳳謡本の読解（８）	〈邯鄲〉の翻刻と校合。唐物の能についての解説。
第11回	金春禅鳳謡本の読解（９）	〈東方朔〉の翻刻と校合。金春禅鳳の能についての解説。
第12回	金春禅鳳謡本の読解（１０）	〈道成寺〉の翻刻と校合。室町後期の能についての解説。
第13回	金春禅鳳謡本の読解（１１）	〈放下僧〉の翻刻と校合。仇討ち物の能についての解説。
第14回	総括	各自作成した校訂本文を提出し、その概要を発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当回までに謡本を翻刻、校合し、発表資料を作成する。最終回までに発表資料を踏まえて校訂本文を作成する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。ただし、受講者の崩し字の習熟度によって作業時間は異なる。

【テキスト（教科書）】
野上記念法政大学能楽研究所「能楽資料総合デジタルアーカイブ」所載の金春禅鳳謡本
https://nohken-digitalarchives.hosei.ac.jp/

【参考書】
児玉幸多 編『くずし字用例辞典』東京堂出版、1993年
横道萬里雄・表章 校注『日本古典文学大系40・41　謡曲集　上・下』岩波書店、1960・1963年
伊藤正義 校注『新潮日本古典集成　謡曲集　上・中・下』新潮社、1983〜1988年
竹本幹夫・橋本朝生 校注・訳『日本の文学　古典編36　能　能楽論　狂言』ほるぷ出版、1987年

【成績評価の方法と基準】
口頭発表（70％）、提出された校訂本文（30％）

【学生の意見等からの気づき】
本年度より授業担当者変更のためフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン・タブレットなどの情報端末。

【その他の重要事項】
能楽作品研究Bと通年で受講することが望ましい。
しっかり準備をして授業に臨んでください。準備しても分からない点は、フォローしますが、準備不足は厳しい評価となります。崩し字は、学習すればだれでも読めるようになります。新しい言語を学ぶつもりで、意欲をもって取り組んでください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞能楽
＜研究テーマ＞近代以降の能楽の歴史
＜主要研究業績＞
「中世宗像の能―宗像大社文書「古能台本」をめぐって―」『中世文学』70号、2025年6月
「近代日本人移民と能楽―1930年代ハワイ・ブラジルの事例を中心に―」『演劇学論集』80号、2025年6月
「太平洋戦争下の日系人収容所発行新聞に見る能楽」『能と狂言』22号、2024年12月

【Outline (in English)】
(Course outline)
This course introduces methods for researching Noh plays through the study of utaibon written by Komparu Zenpō. Students will read a base text written in kuzushiji, collate it with other versions, and produce a critical text that forms the foundation of scholarly research on Noh plays.
(Learning Objectives)
By the end of this course, students will be able to:
1.Acquire a fundamental method for producing critical texts for Noh play research.
2.Understand the historical development of utaibon from the Muromachi period to the present.
3.Develop basic skills in reading and interpreting lyrics and performance annotations in utaibon.
4.Understand the basic structure (shōdan) of Noh plays.
(Learning activities outside of classroom)
Students are required to decipher the base text, collate it with other versions, and produce a critical text.
(Grading Criteria /Policy)
Oral presentations:70%, Final report:30%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

能楽作品研究Ｂ

佐藤　和道

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
室町時代に書かれた金春禅鳳の謡本を用いて能楽の作品を研究するための基本的な方法を学ぶ。秋学期では、春学期で作成した校訂本文を用いて作品研究を行う。まず正確な現代語訳を作成した後、先行研究を踏まえて各自の論題を設定し、論を展開する。研究手法は必ずしも文学的なアプローチである必要はないが、テキストの正確な理解が研究の前提となる。

【到達目標】
１）詞章を正確に現代語訳することができる。
２）作品が成立した背景や享受の様相についての基礎知識を得る。
３）演出資料を通じて作品を演劇として理解することができる。
４）論拠を明示し、説得力ある主張を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
金春禅鳳自筆謡本から1曲を選び、担当曲の解釈及び作品研究を行う。参加者は2度の発表を通じて自身の作品理解を深め、その結果をレポートとしてまとめる。シラバスには便宜上6曲を載せているが、参加者の人数、希望によって、曲数や曲目は変更の可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	作品解釈の方法と必要な資料の紹介。担当曲目の決定。
第2回	金春禅鳳謡本の読解（１）	〈百万〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第3回	金春禅鳳謡本の読解（２）	〈実盛〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第4回	金春禅鳳謡本の読解（３）	〈定家〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第5回	金春禅鳳謡本の読解（４）	〈三輪〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第6回	金春禅鳳謡本の読解（５）	〈道成寺〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第7回	金春禅鳳謡本の読解（６）	〈邯鄲〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第8回	中間的な総括とフォローアップ	論題の発表。問題点の整理とアドバイス。
第9回	研究発表（１）	〈百万〉の作品研究。質疑応答。講評。
第10回	研究発表（２）	〈実盛〉の作品研究。質疑応答。講評。
第11回	研究発表（３）	〈定家〉の作品研究。質疑応答。講評。
第12回	研究発表（４）	〈三輪〉の作品研究。質疑応答。講評。
第13回	研究発表（５）	〈道成寺〉の作品研究。質疑応答。講評。
第14回	研究発表（６）・総括	〈邯鄲〉の作品研究。質疑応答。講評。レポートの提出。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自の設定した論題に従って、資料を調査し、発表資料をまとめる作業が必要である。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない

【参考書】
横道萬里雄・表章 校注『日本古典文学大系40・41　謡曲集　上・下』岩波書店、1960・1963年
伊藤正義 校注『新潮日本古典集成　謡曲集　上・中・下』新潮社、1983～1988年
小山弘志・佐藤健一郎 校注・訳『新編日本古典文学全集58・59　謡曲集1・2』小学館、1997・1998年
佐成謙太郎『謡曲大観』（首巻・第１～５巻・別巻）明治書院、1930・1931年

【成績評価の方法と基準】
口頭発表２回（70％）、レポート（30％）

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン・タブレットなどの情報端末。

【その他の重要事項】
能楽作品研究Aと通年で受講することが望ましい。そうでない場合、各自で校訂本文を作成して授業に臨むこと。
独創的な論が展開できれば、学会発表等につなげることができます。発表担当以外の受講者も、作品に関する基本的な情報を把握し、議論に積極的に参加してください。意欲的な参加を期待します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞能楽
＜研究テーマ＞近代以降の能楽の歴史
＜主要研究業績＞
「中世宗像の能―宗像大社文書「古能台本」をめぐって―」『中世文学』70号、2025年6月
「近代日本人移民と能楽―1930年代ハワイ・ブラジルの事例を中心に―」『演劇学論集』80号、2025年6月
「太平洋戦争下の日系人収容所発行新聞に見る能楽」『能と狂言』22号、2024年12月

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course introduces a fundamental method for researching Noh plays through the study of utaibon written by Komparu Zenpō. In the fall semester, students will conduct research on individual works based on the critical texts produced in the spring semester. Students will first prepare accurate modern Japanese translations, review previous researches, and then develop their own arguments.
（Learning Objectives）
By the end of this course, students will be able to:
1.Produce accurate modern Japanese translations of Noh texts.
2.Acquire basic knowledge of the historical background of Noh plays.
3.Acquire fundamental knowledge for understanding Noh plays as theatrical works.
4.Present persuasive arguments supported by appropriate evidence.
（Learning activities outside of classroom）
Students are required to conduct research according to their individual research topics.
（Grading Criteria /Policy）
Oral presentations:70%, Final report:30%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

能楽資料研究Ａ

宮本　圭造

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
能楽資料を用いた基礎的研究の方法を学ぶ。
能楽研究の基礎となる資料にはどのようなものがあるか。その概説からはじめ、主に能及び狂言の実際の上演に関わる台本・演出資料の紹介、それらの資料に基づく能楽研究の方法と課題について考察する。

【到達目標】
能楽研究を進める上で最低限必要な文献学的な知識を身に着けるとともに、資料を読解する力、そこから問題点と解決を自ら導き出す力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
研究の基礎となるのは資料であり、資料をいかに集め、それをいかに読解・解釈して真実に近づくかが、研究者の腕の見せ所です。それは、能楽研究においても例外ではありません。戦後、能楽研究を大きく推進する原動力となったのは、新しい資料の発掘と、その精緻な解読作業の積み重ねでした。この授業では、能楽研究を進めていく上で必要となる、能楽資料に関する基本的な知識を身に着けることと、資料に基づいて研究を構築する方法をそれぞれが見出すことを目的とするものです。法政大学能楽研究所は、日本でも有数の能楽資料のコレクションを所蔵することで知られています。その中には、能に関するありとあらゆる種類の資料が含まれていますが、今年度は特に「世阿弥時代の能の改作」に焦点を当てて、世阿弥時代の能の作品成立をめぐる問題につて考えていきたいと思います。授業は前半を講義主体で進める予定ですが、後半では学生による発表の場を持ちたいと考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	能楽資料の概要	能楽資料にはどのようなものがあるのか。その概要を紹介する。
第2回	能の作品が生まれた環境	能の作品がどのような環境で生み出されたのかを考察します。
第3回	世阿弥以前の古作能	世阿弥以前の古作能にはどのような特徴があっかのかを紹介します。
第4回	古作能の改作	世阿弥以前の古作能が、どのような改作を経て現在にいたるのかを考察します。
第5回	自然居士の改作	古作能の一つである自然居士の改作過程について考察する。
第6回	卒都婆小町の改作	古作能の一つである卒都婆小町の改作過程について考察する。
第7回	汐汲の改作	古作能の一つである汐汲の改作について考察する。
第8回	求塚の改作	世阿弥による改作の可能性が想定される求塚の改作過程について考察する。
第9回	柏崎の改作	世阿弥が改作を施した柏崎の改作過程について考察する。
第10回	養老の改作	脇能の古態を留める養老の改作の有無について考察する。
第11回	江口の改作	世阿弥が改作を施した江口の制作過程について考察する。
第12回	鵜飼の改作	世阿弥が改作を施した鵜飼の制作過程について考察する。
第13回	通盛の改作	世阿弥が改作を施した通盛の制作過程について考察する。
第14回	総括	これまでの授業を踏まえ、能楽資料を用いた作品研究の可能性を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
能楽に関する基本的な著書（岩波講座『能・狂言』など）を読んでおくことが望ましい。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しないが、毎回プリントを参考資料として配布する。

【参考書】
岩波講座『能・狂言』
平凡社『別冊太陽　能』

【成績評価の方法と基準】
出席平常点３０パーセント、発表・レポート課題７０パーセント
資料を分析し、自ら問題点を見出すことができているか、それを論理的に説明・文章化することができているかを評価のポイントとする。

【学生の意見等からの気づき】
授業の進め方・内容については学生の要望に応じて変更するなど、柔軟な対応をとる予定である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　能楽研究　芸能史
＜研究テーマ＞　能楽史、能面史など
＜主要研究業績＞
①『上方能楽史の研究』（和泉書院、2005年）
②『近代日本と能楽』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）
③『金春家文書の世界』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）

【Outline (in English)】
This course deals with the Noh-related materials dating from the Muromachi period to the Meiji period.By the end of the course, students should be able to deeply research documentary materials of Noh.Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books.Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

能楽資料研究Ｂ

宮本　圭造

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
能楽資料を用いた基礎的研究の方法を学ぶ。
能楽研究の基礎となる資料にはどのようなものがあるか。その概説からはじめ、主に能及び狂言の実際の上演に関わる台本・演出資料の紹介、それらの資料に基づく能楽研究の方法と課題について考察する。

【到達目標】
能楽研究を進める上で最低限必要な文献学的な知識を身に着けるとともに、資料を読解する力、そこから問題点と解決を自ら導き出す力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
研究の基礎となるのは資料であり、資料をいかに集め、それをいかに読解・解釈して真実に近づくかが、研究者の腕の見せ所です。それは、能楽研究においても例外ではありません。戦後、能楽研究を大きく推進する原動力となったのは、新しい資料の発掘と、その精緻な解読作業の積み重ねでした。この授業では、能楽研究を進めていく上で必要となる、能楽資料に関する基本的な知識を身に着けることと、資料に基づいて研究を構築する方法をそれぞれが見出すことを目的とするものです。法政大学能楽研究所は、日本でも有数の能楽資料のコレクションを所蔵することで知られています。その中には、能に関するありとあらゆる種類の資料が含まれていますが、今年度は特に「室町中期以後の能の改作」「狂言の改作」に焦点を当てて、室注記町以後から近代にかけての能の作品成立をめぐる問題、狂言の改作をめぐる問題につて考えていきたいと思います。授業は前半を講義主体で進める予定ですが、後半では学生による発表の場を持ちたいと考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	室町中期以後の能楽	室町中期以後の能楽がどのような状況にあったかを紹介する。
第二回	室町中期以後の能作品の特徴	室町中期以後の能の作品にはどのような特徴があったかを解説する。
第三回	鐘巻から道成寺へ	鐘巻から道成寺への改作がどのように行われたかを考察する。
第四回	浦嶋の改作	脇能である浦嶋の改作過程について考察する。
第五回	賀茂の改作	脇能である賀茂の改作過程について考察する。
第六回	初雪の改作	室町後期の作品である初雪の改作過程について考察する。
第七回	弱法師の演出改訂	弱法師の演出改訂の様相について考察する。
第八回	雷電と来殿	雷電に基づき江戸後期に改作された来殿の改作過程について考察する。
第九回	要石の改作	幕末に制作された要石と喜多流における改作上演について考察する。
第十回	狂言の流儀と改作	狂言の改作がどのように行われたか、流儀と改作との関係をめぐって考察する。
第十一回	狂言の趣向と改作	狂言の改作とは何か。趣向取りとの関係から、狂言の改作の意味を考察する。
第十二回	狂言の作者と改作	狂言の改作の意味について、作者との関係から考察する。
第十三回	天正狂言本に見える原曲	狂言の改作過程が窺える事例として、天正狂言本に見える原曲の作品のいくつかを取り上げて考察する。
第十四回	総括	これまでの授業を踏まえ、能楽資料を用いた能・狂言研究の可能性を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
能楽に関する基本的な著書（岩波講座『能・狂言』など）を読んでおくことが望ましい。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しないが、毎回プリントを参考資料として配布する。

【参考書】
岩波講座『能・狂言』
平凡社『別冊太陽　能』

【成績評価の方法と基準】
出席平常点３０パーセント、発表・レポート課題７０パーセント
資料を分析し、自ら問題点を見出すことができているか、それを論理的に説明・文章化することができているかを評価のポイントとする。

【学生の意見等からの気づき】
授業の進め方・内容については学生の要望に応じて変更するなど、柔軟な対応をとる予定である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　能楽研究　芸能史
＜研究テーマ＞　能楽史、能面史など
＜主要研究業績＞
①『上方能楽史の研究』（和泉書院、2005年）
②『近代日本と能楽』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）
③『金春家文書の世界』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）

【Outline (in English)】
This course deals with the Noh-related materials dating from the Muromachi period to the Meiji period.Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books.Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

ART500B2（芸術学 / Art studies 500）

現代能楽論

深澤希望・観世喜正・観世淳夫

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本が世界に誇る伝統芸能、能について基本的な知識を身につけ、その身体表現の特徴を知るとともに、現在の能をとりまく環境（少子高齢化や新型コロナウイルス流行など）の影響を通して、今を生きる能の課題と展望を考える。

【到達目標】
1）能について、参考書を丸写しにした知識だけではなく、自分の言葉で説明できる。
2）能の謡や所作の基本、舞台や装束の特性等を、体験によって知り、自分の言葉で伝えることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
オムニバス方式の授業である。授業日程には通常と異なる部分があるので、「授業計画」をよく確認してほしい。
1）映像資料も用いながら能についての基礎知識を学ぶ授業と、2）第一線で活躍中の能楽師による、「役者の身体やその基礎となる稽古」「現代における能の公演形態の問題等を考える授業」を組み合わせ、現代の能楽に関する総合的な知見を身につけていく。能楽堂における実地授業（4コマ分）もおこなう。授業の初めに、前回の授業で提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	9月21日　能の基礎知識（深澤）	講義・実習についてのガイダンス及び、受講に必要な最低限の基礎知識の学習。
第2回	9月28日　9時30分～12時30分　実習①矢来能楽堂（観世喜正・深澤）	矢来能楽堂での実習。能舞台と能面について知る。謡と所作を体験する。第3回と連続授業。
第3回	9月28日　9時30分～12時30分　実習②矢来能楽堂（観世喜正・深澤）	矢来能楽堂での実習。能装束に触れ、扱い方を学ぶ。第2回と連続授業。
第4回	10月5日　室町時代の能（深澤）	能の大成者である世阿弥と、能の作品（戯曲構成・演出など）について知る。
第5回	10月19日　能楽師の生活、能の興行―計画から当日まで―（観世喜正）	家元制度や内弟子制度など、現代に生きる能楽師の暮らし（活動の実態）と、能を興行する際の計画から当日までの流れを知る。
第6回	10月26日　能楽鑑賞の予習（深澤）	第7回の能楽鑑賞に向けて能〈鉄輪〉の内容と演出をおさえる。
第7回	11月8日（日）15時30分～17時頃　能楽鑑賞（深澤）	観世九皐会（矢来能楽堂）定例会第2部の能〈鉄輪〉を鑑賞する。
第8回	11月9日　9時30分～12時30分　実習③銕仙会能楽研修所（観世淳夫・深澤）	青山の銕仙会能楽研修所での実習。能舞台の上を歩く。謡と所作を体験する。舞について知る。第9回と連続授業。
第9回	11月9日　9時30分～12時30分　実習④銕仙会能楽研修所（観世淳夫・深澤）	青山の銕仙会能楽研修所での実習。能装束・能面について知る。第8回と連続授業。
第10回	11月16日　実習のフィードバック・能楽師の修業（観世淳夫）	質疑応答によって実習で生じた疑問点等を共有する。能がどのように伝承されているのか、能楽師の修業について知る。
第11回	11月30日　能楽享受の諸相―江戸から近現代―（深澤）	能がどのように享受され、現代へとつながるのか、そのおおまかな流れを知る。
第12回	12月14日　能の海外展開・能界の今（観世喜正）	海外にむけた能の活動を知る。
第13回	12月21日　能の特色（観世淳夫）	能楽師自身の言葉を通して、能の芸の特色を知る。
第14回	1月18日　レポート発表とディスカッション（深澤）	各自レポートの内容を発表し、討議をおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
今年度は11月8日（日）に授業の1コマ分として能楽鑑賞会の学外授業を設定している。その外にも、NHKの古典芸能番組やYouTubeの動画など、実際の能の演技や演出に触れる機会は多くある。ぜひ、そうした動画などにも触れて、率直な感想や疑問点などを積極的に講師にぶつけてほしい。

【テキスト（教科書）】
テキストは用いない。適宜プリントを配布する。

【参考書】
受講前に、市販のガイドブックや宣伝チラシなど、何でも良いので自分なりに能についての情報を得ておいてほしい。
能楽に関する基本情報は「文化デジタルライブラリー」にもある。
http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/

【成績評価の方法と基準】
レポート（30％：課題「現在の社会状況において能楽を普及、活性化するにはどうしたらよいか」）、2回の実習および能楽鑑賞会への参加（50％）、平常点（20％：講義中の発言等）を総合して決める。

【学生の意見等からの気づき】
文系・理系の学生が混ざる珍しいクラスなので、最終回に出席者が互いの意見を聞き合う機会を設けている。最終回に限らず、通常の授業中でも、ちょっとした感想、小さな疑問など、遠慮せず、積極的に発言してほしい。

【学生が準備すべき機器他】
★能楽堂の実習では白足袋（費用 1,500円程度）が必要となる。入手方法はガイダンスの際に伝えます。

【その他の重要事項】
★第一線で活躍中の能楽師を講師に招いての授業なので、授業日程が変則的である。特に2回の実習授業は、学外の施設にて、1限・2限の時間帯2コマ分を使っての授業となる。単位取得には2回の実習授業出席は必須のため、よく考えて受講計画をたてること。
★11月8日（日）15時30分～17時頃の矢来能楽堂の定例会を鑑賞する（費用 2,000～3,000円）。「能楽堂で実際に能を見ること」も単位取得に必須である。やむを得ない事由で、この会に参加できない場合は、講義内で推奨する他の公演を必ず鑑賞すること。詳細はガイダンスの際に説明する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞能楽・中世文学
＜研究テーマ＞能の作品研究・演出研究。型付の系統研究。
＜主要研究業績＞「金春流型付の展開―安照型付から重勝型付へ―」『楽劇学』第23号、2016。「被相伝者から見る金春安照型付」『金春家文書の世界』能楽研究叢書7、2017。「型を分析する視点を追う」『わざを伝える』能楽研究叢書9、2024。

【Outline (in English)】
(Course outline)　The aim of this class is to acquire a basic knowledge of Noh, learn about the characteristics of its physical expression, and consider the current environment and issues surrounding Noh and its future prospects.

Learning objectives of this class are: 1) to learn basic information about Noh and its body techniques, 2) to think about the meaning of Noh in modern society.
Outside of the classroom, students are required to watch a Noh performance at a Noh theater.
（Grading Criteria /Policy）*Report 30 %. Participation in practical training and viewing of Noh plays 50%. Ordinary marks 20%.

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本語・日本文学の基礎Ａ

竹林　一志

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本古典文学の言語表現は如何なるものか、それをどのように解析すればよいのか、ということを学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。一字一句をゆるがせにせず、古典本文を丁寧に読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】
１．日本古典文学の言語表現の特徴について、特定の作品の具体例を挙げつつ説明することができる。
２．日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
いわゆる「古典文法」の基礎知識を確認した後、古代・中世・近世の文学作品を対象として表現解析を行う。授業は、テキストと配付プリントを用い、おもに講義形式で進める。提出物（授業内容に関するワークシート）に対するフィードバックは次の授業回において口頭で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の全体像を伝える。
第2回	古典文法	助詞・助動詞を中心に古典文法の基礎知識を確認する。
第3回	表現解析の方法	日本古典文学の表現解析法について概説する。
第4回	『古今和歌集』所収歌の読解（先行研究についての検討）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に16番歌）について先行研究の論を検討する。
第5回	『古今和歌集』所収歌の読解（新たな解釈の提示）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に16番歌）の表現を解析する。
第6回	『枕草子』冒頭部の読解（先行研究についての検討）	『枕草子』冒頭部について先行研究の論を検討する。
第7回	『枕草子』冒頭部の読解（新たな解釈の提示）	『枕草子』冒頭部の表現を解析する。
第8回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（先行研究についての検討）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現について先行研究の論を検討する。
第9回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（新たな解釈の提示）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現を解析する。
第10回	『徒然草』第89段の読解（先行研究についての検討）	『徒然草』第89段について先行研究の論を検討する。
第11回	『徒然草』第89段の読解（新たな解釈の提示）	『徒然草』第89段の表現を解析する。
第12回	松尾芭蕉の俳句の読解（先行研究についての検討）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」について先行研究の論を検討する。
第13回	松尾芭蕉の俳句の読解（新たな解釈の提示）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」の表現を解析する。
第14回	総括	本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間（計４時間）を標準とする。
各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。
授業後は、ノート、テキストや配付物を見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】
『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院、2009年、2,200円（税別）

【参考書】
『徒然草抜書』小松英雄、講談社
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】
学期末レポート（上記の到達目標に関連する課題を出す）：60％
提出物：30％
受講姿勢：10％

【学生の意見等からの気づき】
専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学
＜研究テーマ＞
文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など
＜主要研究業績＞
単著：
『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年
『三浦綾子文学の本質と諸相』新典社、2022年

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class we study about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to improve the skills for reading Japanese classical literature. We try not to neglect any word or phrase in the texts. This class is mainly intended for overseas students.
【Learning Objectives】
The goals of this course are as follows:
1. Students can explain the characteristics found in the expressions of Japanese classical literature, drawing instances from works.
2. Students acquire the methods and attitudes for analyzing the expressions of Japanese classical literature.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class meeting, you will be expected to have read the relevant chapter from the text. And after each class meeting, you will be expected to reread your notes, text and handouts. Your study time will be about four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Term-end report: 60%, Works to be submitted: 30%, in-class contribution 10%

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本語・日本文学の基礎Ｂ

竹林　一志

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
『伊勢物語』第１段～第15段を丁寧に読み解きながら、日本古典文学の言語表現と、その解析法について学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。仮名文の性質を理解し、ディスコースの中で表現を読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】
１．『伊勢物語』の言語表現の特徴について、具体例を挙げつつ説明することができる。
２．日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
テキストと配付プリントを用い、担当教員の講義と演習形式（受講者の分担発表と出席者全員による討議）で進める。提出物（授業内容に関するワークシート）に対するフィードバックは次の授業回において口頭で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」の読解	本授業の全体像を伝えた後、テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」を一緒に読む。発表の分担も行う。
第2回	テキスト「イントロダクション」の読解	担当教員作成のワークシートをもとに、テキスト「イントロダクション」を読み解く。
第3回	第１段「昔、をとこ」～「心地まどひにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第１段「昔、をとこ」～「心地まどひにけり」の表現を解析する。
第4回	第１段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第１段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の表現を解析する。
第5回	第２段・第３段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第２段・第３段の表現を解析する。
第6回	第４段・第５段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第４段・第５段の表現を解析する。
第7回	第６段～第８段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第６段～第８段の表現を解析する。
第8回	第９段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第９段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の表現を解析する。
第9回	第９段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第９段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の表現を解析する
第10回	第９段「なほ行き行きて」～「こぞりて泣きにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第９段「なほ行き行きて」～「こぞりて泣きにけり」の表現を解析する。
第11回	第10段～第12段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第10段～第12段の表現を解析する。
第12回	第13段・第14段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第13段・第14段の表現を解析する。
第13回	第15段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第15段の表現を解析する。
第14回	総括	本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間（計４時間）を標準とする。
各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。
授業後は、ノートやテキスト、配付物を見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】
『伊勢物語の表現を掘り起こす』小松英雄、笠間書院、2010年、1,900円（税別）

【参考書】
『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】
発表：60％
提出物：30％
受講姿勢：10％

【学生の意見等からの気づき】
専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
春学期科目「日本語・日本文学の基礎A」（「日本語の歴史と現在Ⅰ」）を受講していることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学
＜研究テーマ＞
文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など
＜主要研究業績＞
単著：
『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年
『三浦綾子文学の本質と諸相』新典社、2022年

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class we carefully read ‘The tales of Ise’ (from chapter 1 through 15) for studying about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to understand the characteristics of classical texts written in *kana* and interpret the linguistic expressions precisely in the context. This class is mainly intended for overseas students.
【Learning Objectives】
The goals of this course are as follows:
1. Students can explain the characteristics found in the expressions of ‘The tale of Ise’, drawing instances from the work.
2. Students acquire the methods and attitudes for analyzing the expressions of Japanese classical literature.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class meeting, you will be expected to have read the relevant chapter from the text. And after each class meeting, you will be expected to reread your notes, text and handouts. Your study time will be about four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Presentation: 60%, Works to be submitted: 30%, in-class contribution 10%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

表現と社会

平井　彰司

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
条文や判例、学説を追いながら著作権法の基礎を学習し、著作権思想の全体像をつかむ。また著作権と社会との関係、制度構築の実際、ビジネスやテクノロジーとの相克についても考察を広げる。

【到達目標】
著作権の歴史と権利の淵源を概観するとともに、著作権法の主要な規定について、その内容と効用を理解することを目指す。併せて社会全体の視座から著作権が創作・媒介・受容の営みに果たす役割について考察し、現代に必要な著作権リテラシーを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義を中心としつつ、要所々々で各人の意見、解釈などを求める他、討議の機会を設ける。なお受講者の人数や関心の所在に応じたフレキシブルに展開を心掛ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	著作権とは	著作権に対する一般的なイメージを解きほぐし、法的権利の一態様としての性格を概観する。
第2回	創作の系譜と近代著作権思	創作行為と受容の類型を理解し、著作権誕生の背景とそれを支える思想・概念の変遷をたどる。
第3回	法体系における著作権法	我が国の法秩序における来歴と位置づけを確認し、法律全体の基本的な構成を概観する。
第4回	著作物とは何か　著作者とは誰か	著作物の要件としての著作性について考え、著作者と著作権者との違いとは何かを整理する。
第5回	保護の対象・期間と権利の種類・内容	法律で保護される種類と範囲を確認し、専有する権利（支分権）の詳細を理解する。
第6回	権利の制限	例外的に権利者の許諾なしに利用可能な場合と要件を整理し、私権と公益の関係について考察する
第7回	討議Ⅰ	これまでの講義を基に著作物の適切な利用等についてケーススタディを行う。
第8回	著作者人格権・著作隣接権	著作者の財産権以外で法律に規定されている権利の実際を知る。
第9回	許諾・契約、登録・裁定	著作物の利用許諾や利用契約の実際に触れる。併せて制度の運用に関する行政の役割を紹介する。
第10回	紛争処理・罰則、制度改正	民事解決と刑事罰水準について裁判例を見ていくとともに、法律改正のプロセスを理解する。
第11回	印刷物の歴史と複製・伝達技術の展開	グーテンベルク以前から現代まで、ジャンルを超えた創作と伝達を支える技術の歴史をたどる。
第12回	デジタルテクノロジーと出版物の電子化	デジタルアーカイブやフリーテキストの動向と印刷媒体デジタルシフトがもたらす影響を探る。
第13回	討議Ⅱ	ＡＩ・メタバース時代における著作権の役割を総合的見地から探る。
第14回	再び、著作権とは	現在の著作権システムの考察を通じて、創作・媒介・受容の未来を展望する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で紹介した参考文献・資料等には極力目を通しておくこと。折に触れて、世界史や国際関係、ビジネスに関する知識が求められる。各受講者の必要に応じた予備学習を心掛けること。
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
最新の著作権法をネットや図書館等を通じて準備すること。

【参考書】
随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
授業への参加態度等の平常点40％、期末レポートの内容60％を評価の目安とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
日本文藝家協会事務局長。筑摩書房にて知的財産の保護・活用、デジタルビジネスの企画・開発、表現の自由と人権問題等の編集コンプライアンスを掌管。著作権領域に関する出版界全体の調整、著作者団体・各種利用者・関係省庁等へのロビイングに従事。2021年より現職。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞出版分野を中心とした著作権実務全般
＜研究テーマ＞著作権制度、メディア論、出版論
＜主要研究業績＞特になし

【Outline (in English)】
This course aims to provide an overview of the history of copyright and the origins of rights, as well as to understand the content and effectiveness of the main provisions of copyright law. At the same time, students will consider the role that copyright plays in creation, mediation, and reception from the perspective of society as a whole, and acquire the copyright literacy necessary in modern times.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

編集理論

仲俣　暁生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「編集」（エディターシップ）がもつ本質的な機能と意味を理解する

【到達目標】
書物や雑誌、ウェブといったさまざまなメディアを「編集」という観点から理解し、あわせてこれらのメディアの現代史についての基礎的な知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義を中心としつつも、各自が課題を設定しての研究レポートや討論をおりまぜる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	「編集」（エディターシップ）とは何か	この講義において取り扱う「編集」の範囲について確定し、全体のオリエンテーションとする。
第2回	編集されたメディアとしての「雑誌」	「雑誌」というメディアを編集という観点から概観する。
第3回	雑誌における「編集者」とはなにか	雑誌において「編集者（editor）」が担うさまざまな機能を理解する。
第4回	「雑誌」のケーススタディ①〜文芸誌／論壇誌の場合	おもに文芸、論説などをあつかう雑誌を「編集」という観点から分析する。
第5回	「雑誌」のケーススタディ②〜ビジュアル雑誌の場合	グラフィカルな要素をもつ雑誌を「編集」という観点から分析する。
第6回	「雑誌」のケーススタディ③〜ジャンル雑誌の場合	特定のジャンルに根ざした雑誌を「編集」という観点から分析する。
第7回	「雑誌」のケーススタディ④〜ミニコミ、ジンの場合	ミニコミやジンと呼ばれる「小さなメディア」を「編集」という観点から分析する。
第8回	「雑誌」における編集についての中間まとめ	ケーススタディ①から③までを受けて学生をまじえてディスカッションを行う。
第9回	「編集」の拡散	出版以外の世界に「編集」という行為が広がっていることを理解する。
第10回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ①〜ワールドワイドウェブの登場	インターネット上における「編集」行為の場としてのWWWのもつ意義を理解する。
第11回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ②〜ウェブ2.0以後	「ウェブ2.0」以後に起きたWWWの変質について「編集」という観点から理解する。
第12回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ③〜ソーシャルメディア	ソーシャルメディア勃興による「編集」の危機について理解する。
第13回	あらたな「編集」に向けての討議	これまでの講義を受けて、現在のメディア環境のなかでどのような「編集」が可能かを討議する。
第14回	総まとめ	講義全体のまとめとレポートについてのガイダンスを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講義内で培った「編集」への問題意識をもとに、身のまわりの出版物やメディア環境をとらえかえすこと。具体的な出版物（雑誌や書物、ウェブサイト）およびそれを編集している人物（編集者）や出版主体について、つねに関心を抱くことが望まれる。

【テキスト（教科書）】
必要な教材は講義の際に配布する。とくに教科書は指定しないが、参考図書には自発的に目を通すことを推奨する。

【参考書】
・外山滋比古『新・エディターシップ』（みすず書房、2009）
・佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』（岩波書店、2015）
・野中モモ、ばるぼら『日本のZINEについて知ってることすべて: 同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史1960〜2010年代』（誠文堂新光社、2017）
・赤田祐一、ばるぼら『20世紀エディトリアル・オデッセイ: 時代を創った雑誌たち』（誠文堂新光社、2014）
・仲俣暁生『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）
・岡本真、仲俣暁生編『ブックビジネス2.0〜ウェブ時代の新しい本の生態系』（実業之日本社、2010）

【成績評価の方法と基準】
講義に対する姿勢＝３０％、自主課題への取り組み＝３０％、最終レポート＝４０％

【学生の意見等からの気づき】
今季からの講義のため現時点ではなし。

【学生が準備すべき機器他】
とくになし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞出版論、メディア論
＜研究テーマ＞雑誌研究、メディア環境論、現代日本文学論
＜主要研究業績＞
①『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）
②編著『「電子社会」誕生〜日本語ワープロからインターネットまで』（晶文社、1998）
③『極西文学論』（晶文社、2004年）

【Outline (in English)】
To understand how editorship worked on remarkable modern Japanese magazines.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

作家特殊研究Ａ

乗代　雄介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
豊富なキャリアをもちなお第一線で活躍をつづける文芸創作家が授業を担当し、学生たちはその作家の作品をとりあげ作家自身の前で研究発表を行います。それを通じて、授業の場で文芸創作家と大学院による創造的な対話を行います。

【到達目標】
　担当講師が創作して発表した文学作品を、担当講師とともに研究することによって作品生成のプロセスを学び、創作へのヒントや作品研究への新しい視点、文学作品や文芸創作家が置かれている社会的状況などへの理解を多角的に、かつ総合的に獲得することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
ゼミナール形式の研究発表を中心として、必要に応じて講義形式を織り交ぜながら授業を進めます。学生それぞれが担当講師の作品研究を行い、その文学についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義の内容について概説する。
第2回	研究作品決定	研究発表する作品を決定する。
第3回	作家との対話１	受講生の質問を通して、作家と対話する。
第4回	作品研究１	作品研究を発表する。
第5回	作家との対話２	受講生の質問を通して、作家と対話する。
第6回	作品研究２	作品研究を発表する。
第7回	作家との対話３	受講生の質問を通して、作家と対話する。
第8回	作品研究３	作品研究を発表する。
第9回	作家との対話４	受講生の質問を通して、作家と対話する。
第10回	作品研究４	作品研究を発表する。
第11回	作家との対話５	受講生の質問を通して、作家と対話する。
第12回	作品研究５	作品研究を発表する。
第13回	作家との対話６	受講生の質問を通して、作家と対話する。
第14回	春学期のまとめ	春学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
必要に応じて授業内で指示します。

【テキスト（教科書）】
基本的に担当講師の文学作品をテキストとします。使用テキストの選定は、今年度は受講者が行います。

【参考書】
とくに指定しませんが、必要に応じて授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】
作品研究の内容（３割）、および受講態度（７割）によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】
担当講師が単年交代する授業であるため、とくにありません。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文芸創作
＜研究テーマ＞小説
＜主要研究業績＞『本物の読書家』（講談社／2017）、『旅する練習』（講談社／2021）、『それは誠』（文藝春秋／2023）など。

【Outline (in English)】
（Course outline）
A literary creator with a rich career who is active with his/her writing in the frontline initiates this class, and the students take up the writer's works and give research presentations to the writer himself/herself. Through this process, we will develop creative dialogues between the graduate school and the literary creator.
（Learning Objectives）
By studying literary works created and published by the lecturer together with the lecturer him/herself, students will learn about the process of creating the works, and gain hints for creative writing and new perspectives on the study of works. Also overall the course aims to nurture a comprehensive and multilateral understanding of literary works and the social conditions in which literary creators are placed.
（Learning activities outside of classroom）
Instructions will be given in class as needed.
（Grading Criteria /Policy）
The overall evaluation will be based on the content of the writer's research (30%) and the attitude of the student (70%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

作家特殊研究Ｂ

乗代　雄介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
豊富なキャリアをもちなお第一線で活躍をつづける文芸創作家が授業を担当し、学生たちはその作家の作品をとりあげ作家自身の前で研究発表を行います。それを通じて、授業の場で文芸創作家と大学院による創造的な対話を行います。

【到達目標】
担当講師が創作して発表した文学作品を、担当講師とともに研究することによって作品生成のプロセスを学び、創作へのヒントや作品研究への新しい視点、文学作品や文芸創作家が置かれている社会的状況などへの理解を多角的に、かつ総合的に獲得することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
ゼミナール形式の研究発表を中心として、必要に応じて講義形式を織り交ぜながら授業を進めます。研究発表では、学生それぞれが作家研究の冊子に寄せる企画を一つ提出しますが、企画には作家研究、作品研究、授業で学んだことを生かした文芸創作、インタビュー、書誌など読み物としての雑誌を構成する記事がすべて含まれます。企画は授業内で発表の上、修正して冊子にまとめます。なおインタビューと書誌作成はかならず行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究冊子について	作家研究の冊子作成について説明する。
第2回	企画提出	冊子のための企画を提出・検討する。
第3回	企画の修正・決定	冊子のための企画を再提出・決定する。
第4回	インタビュー依頼	作家へのインタビューを模擬依頼する。
第5回	インタビュー収録	作家へのインタビューを収録する。
第6回	作家研究１	企画に応じた研究を発表する。
第7回	作家研究２	企画に応じた研究を発表する。
第8回	作家研究３	企画に応じた研究を発表する。
第9回	作家研究４	企画に応じた研究を発表する。
第10回	作家研究５	企画に応じた研究を発表する。
第11回	作家研究６	企画に応じた研究を発表する。
第12回	冊子原稿完成・入稿	研究冊子の原稿の最終確認をする。
第13回	冊子著者校正	研究冊子の著者校正を行う。
第14回	秋学期のまとめ	秋学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
必要に応じて授業内で指示します。

【テキスト（教科書）】
基本的に担当講師の文学作品をテキストとします。使用テキストの選定は、今年度は受講者が行います。

【参考書】
とくに指定しませんが、必要に応じて授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】
作家研究の内容（３割）、および受講態度（７割）によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】
担当講師が単年交代する授業であるため、とくにありません。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文芸創作
＜研究テーマ＞小説
＜主要研究業績＞『本物の読書家』（講談社／2017）、『旅する練習』（講談社／2021）、『それは誠』（文藝春秋／2023）など。

【Outline (in English)】
（Course outline）
A literary creator with a rich career who is active with his/her writing in the frontline initiates this class, and the students take up the writer's works and give research presentations to the writer himself/herself. Through this process, we will develop creative dialogues between the graduate school and the literary creator.
（Learning Objectives）
By studying literary works created and published by the lecturer together with the lecturer him/herself, students will learn about the process of creating the works, and gain hints for creative writing and new perspectives on the study of works. Also overall the course aims to nurture a comprehensive and multilateral understanding of literary works and the social conditions in which literary creators are placed.
（Learning activities outside of classroom）
Instructions will be given in class as needed.
（Grading Criteria /Policy）
The overall evaluation will be based on the content of the writer's research (30%) and the attitude of the student (70%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

文芸創作研究Ａ

川本　直

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文学とは技術である。創作、批評がそのまま商品となるような実践的な指導を目指すが、表現手段は小説、詩、映像などさまざまな形態が考えられる。古今東西の主要作品がどのように技術的に描かれてきたかの検証を行いつつ、より能動的に創作活動を行い、書きつつ学ぶ。

【到達目標】
春学期・秋学期一編ずつの短編もしくは通年で一本の中編を仕上げる。その作業は各自で行うが、世界文学（翻訳）・日本文学の古典の読解を行ったり、現代文学の書評・批評を試みたりする。文芸誌の新人賞獲得を目指し、さらには書き手としての実践的ノウハウを身につける。授業内で発表した小説、学期末に完成させた小説を評価の対象とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
春学期に技術獲得のための講義を重点的に行い、秋学期に技術運用のためのワークショップを行う。個々のテーマによる創作は、随時発表の機会を作る。書くことと読むことは表裏一体であり、書く技術の研究を通じて読み巧者となるべく、実例を挙げつつ、実作者の立場から小説の書き方を技術的に論じる。また古典や文学作品を研究し、文章表現のプロセスを検証し、書評・批評執筆を試みる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	文学とは何か	文学は技術で成り立っている 読み巧者になることが創作への道を開く
第2回	世界文学の技法Ⅰ	古代から中世までの古典の技法を学ぶ
第3回	世界文学の技法Ⅱ	近世から近代までの古典の技法を学ぶ
第4回	世界文学の技法Ⅲ	モダニズム、ポストモダニズム、マジックリアリズムの技法を学ぶ
第5回	日本文学の技法Ⅰ	日本の中世から近世までの古典の技法を学ぶ
第6回	日本文学の技法Ⅱ	明治・大正・昭和文学の古典の技法を学ぶ
第7回	日本文学の技法Ⅲ	日本現代文学の代表作の技法を学ぶ
第8回	文章技術論	澁澤龍彦を模範にエッセイ・小説・批評・翻訳あらゆるジャンルに応用できるライティングの技術を学ぶ
第9回	書評執筆	実践編：実際に書評を執筆する
第10回	短編小説講義Ⅰ	短編小説の構造分析 短編小説の代表的な二つの型
第11回	短編小説講義Ⅱ	短編小説の視点を分析する 一人称・三人称・それ以外
第12回	短編小説講義Ⅲ	短編小説の語りを分析する 描写か叙述か
第13回	短編小説講義Ⅳ	短編小説の主題を分析する
第14回	短編小説執筆	各人のテーマと題材による短編執筆指導

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
指示したテキストを読み込んでくること。文芸誌の新人賞への応募。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
ジョン・サザーランド著『若い読者のための文学史【イェール大学出版局 リトル・ヒストリー 第2期】』河合祥一郎訳、すばる舎、2020年
島田雅彦著『深読み日本文学』集英社インターナショナル新書、2017年
筒井康隆著『短篇小説講義 増補版』岩波新書、2019年

【参考書】
授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】
出席、各回の課題の消化具合、セメスター末に提出が義務づけられている創作の出来で評価する。評価基準はレポート課題80％、平常点20％とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
創作、批評、翻訳、日本近現代文学、アメリカ文学、イギリス文学
＜研究テーマ＞
小説論、批評理論、アメリカ文学、イギリス文学、オスカー・ワイルド、ゴア・ヴィダル、吉田健一、澁澤龍彦
＜主要研究業績＞
『ジュリアン・バトラーの真実の生涯』（河出書房新社、2021年）
『「男の娘」たち』（河出書房新社、2014年）
『吉田健一ふたたび』（共編著、冨山房インターナショナル、2019年）
『吉田健一に就て』（共編著、国書刊行会、2023年）
『世界文学としての日本文学　アウリオン叢書第22号』（共著、弘学社、2024年）

【Outline (in English)】
Literature is a technique.
This course aims to provide practical instruction in which creative writing and literary criticism can function directly as marketable forms of work. While the primary focus is on literature, modes of expression may include fiction, poetry, film, and other media.
By examining how major works from different periods and cultures have been constructed at the level of technique, students will engage more actively in creative practice, learning through the very process of writing itself.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

文芸創作研究Ｂ

川本　直

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文学とは技術である。創作、批評がそのまま商品となるような実践的な指導を目指すが、表現手段は小説、詩、映像などさまざまな形態が考えられる。古今東西の主要作品がどのように技術的に描かれてきたかの検証を行いつつ、より能動的に創作活動を行い、書きつつ学ぶ。

【到達目標】
春学期・秋学期一編ずつの短編もしくは通年で一本の中編を仕上げる。その作業は各自で行うが、世界文学（翻訳）・日本近代文学の古典の読解を行ったり、現代文学の書評・批評を試みたりする。文芸誌の新人賞獲得を目指し、さらには書き手としての実践的ノウハウを身につける。授業内で発表した小説、学期末に完成させた小説を評価の対象とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
春学期に技術獲得のための講義を重点的に行い、秋学期に技術運用のためのワークショップを行う。個々のテーマによる創作は、随時発表の機会を作る。書くことと読むことは表裏一体であり、書く技術の研究を通じて読み巧者となるべく、実例を挙げつつ、実作者の立場から小説の書き方を技術的に論じる。また古典や文学作品を研究し、文章表現のプロセスを検証し、書評・批評執筆を試みる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	文芸批評演習Ⅰ	編集者・下読み・選考委員は小説をどう読むか 編集者・下読みの目で担当講師が日本現代小説1作品を用いて講評を実演
第2回	文芸批評演習Ⅱ	実践：受講者が編集者・下読みの目で上記と同じ1作品に対して講評を実践
第3回	文芸批評演習Ⅲ	文芸批評演習Ⅰ・Ⅱで用いた同じ1作品に対して、編集者・下読みの目ではなく、批評家の目で本格的な文芸批評執筆を実践的に指導する
第4回	映画脚本の分析	映画脚本を分析することによってシーン構成と台詞の運用を学ぶ
第5回	小説の世界	いかなる世界≒主題を提示するか
第6回	小説の場所	小説における場所
第7回	小説の時間	歴史、記憶、時間軸、回想
第8回	小説の情報	小説における情報の量と質
第9回	小説の語り・構造	文体と構造 語りを世界に合わせるか、世界に語りを合わせるか
第10回	キャラクター・メイキング	魅力的な人物造型の実践 競作
第11回	創作Ⅰ	小説世界≒主題の設定、文体の選択、プロット作り
第12回	創作Ⅱ	細部の検討・構築
第13回	創作中間発表	進行状況の報告
第14回	個人面談	細部のチェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
指示したテキストを読み込んでくること。文芸誌の新人賞への応募。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
デイヴィッド・ロッジ著『小説の技巧』柴田元幸、斎藤兆史訳、白水Uブックス、2026年
ノエル・キャロル著『批評について: 芸術批評の哲学』森功次訳、勁草書房、2017年
川本直著『ジュリアン・バトラーの真実の生涯』河出文庫、2023年

【参考書】
授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】
出席、各回の課題の消化具合、セメスター末に提出が義務づけられている創作の出来で評価する。評価基準はレポート課題80％、平常点20％とする

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
創作、批評、翻訳、日本近現代文学、アメリカ文学、イギリス文学
＜研究テーマ＞
小説論、批評理論、アメリカ文学、イギリス文学、オスカー・ワイルド、ゴア・ヴィダル、吉田健一、澁澤龍彦
＜主要研究業績＞
『ジュリアン・バトラーの真実の生涯』（河出書房新社、2021年）
『「男の娘」たち』（河出書房新社、2014年）
『吉田健一ふたたび』（共編著、冨山房インターナショナル、2019年）
『吉田健一に就て』（共編著、国書刊行会、2023年）
『世界文学としての日本文学　アウリオン叢書第22号』（共著、弘学社、2024年）

【Outline (in English)】
Literature is a technique.
This course aims to provide practical instruction in which creative writing and literary criticism can function directly as marketable forms of work. While the primary focus is on literature, modes of expression may include fiction, poetry, film, and other media.
By examining how major works from different periods and cultures have been constructed at the level of technique, students will engage more actively in creative practice, learning through the very process of writing itself.

OTR600B2（その他 / Others 600）

日本文芸特殊研究ⅡA

小秋元　段

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では大学院生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期は古活字本『承久記』を扱う。

【到達目標】
古活字本『承久記』を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は、古活字本『承久記』をテキストとして、履修者が各種の工具書、資史料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』より適宜の分量を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	作品解説１（概要）	『承久記』の概要について講義する。
第2回	作品解説２（研究方法）	『承久記』の研究法について講義する。
第3回	作品講読『承久記』1	p.371～p.372の講読。
第4回	作品講読『承久記』2	p.373～p.374の講読。
第5回	作品講読『承久記』3	p.375～p.376の講読。
第6回	作品講読『承久記』4	p.377～p.378の講読。
第7回	作品講読『承久記』5	p.379～p.380の講読。
第8回	作品講読『承久記』6	p.381～p.382の講読。
第9回	作品講読『承久記』7	p.383～p.384の講読。
第10回	作品講読『承久記』8	p.385～p.386の講読。
第11回	作品講読『承久記』9	p.387～p.388の講読。
第12回	作品講読『承久記』10	p.389～p.390の講読。
第13回	作品講読『承久記』11	p.391～p.392の講読。
第14回	作品講読『承久記12	p.393～p.394の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
分担箇所の語釈・口語訳の作成。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
久保田淳ほか校注『保元物語 平治物語 承久記』（岩波書店・新日本古典文学大系、1992年）

【参考書】
長谷川端ほか編『承久記・後期軍記の世界』（汲古書院、1999年）
大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編『平家物語大事典』（東京書籍、2010年）

【成績評価の方法と基準】
発表の完成度（70％）、討論への貢献（30％）

【学生の意見等からの気づき】
初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学、書誌学
＜研究テーマ＞軍記物語、古活字版
＜主要研究業績＞『太平記新考』（汲古書院、2024年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）、『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）

【Outline (in English)】
(Course outline) In this course, we will read *Kokatsuji-bon Jokyūki*.
(Learning Objectives) The goals of this course are to Learn the skills to read classical literature.
(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report (70%) and in-class contribution（30％）.

OTR600B2（その他 / Others 600）

日本文芸特殊研究ⅡB

小秋元　段

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では大学院生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期はお伽草子を扱う。

【到達目標】
お伽草子を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は、お伽草子の複数作品をテキストとして、履修者が各種の工具書、資史料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は岩波書店・日本古典文学大系本より適宜の分量を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	作品解説１（概要）	お伽草子の概要について講義する。
第2回	作品解説２（研究方法）	お伽草子の研究法について講義する。
第3回	作品講読「熊野の御本字のさうし」1	p.411～p.413の講読。
第4回	作品講読「熊野の御本字のさうし」2	p.414～p.416の講読。
第5回	作品講読「熊野の御本字のさうし」3	p.417～p.419の講読。
第6回	作品講読「熊野の御本字のさうし」4	p.420～p.422の講読。
第7回	作品講読「熊野の御本字のさうし」5	p.423～p.425の講読。
第8回	作品講読「熊野の御本字のさうし」6	p.426～p.428の講読。
第9回	作品講読「熊野の御本字のさうし」7	p.429～p.431の講読。
第10回	作品講読「熊野の御本字のさうし」8	p.432～p.433の講読。
第11回	作品講読「御曹子島渡」1	p.102～p.104の講読。
第12回	作品講読「御曹子島渡」2	p.105～p.107の講読。
第13回	作品講読「御曹子島渡」3	p.108～p.110の講読。
第14回	作品講読「御曹子島渡」4	p.111～p.113の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
分担箇所の語釈・口語訳の作成。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
市古貞次校注『御伽草子』（岩波書店・日本古典文学大系、1958年）

【参考書】
徳田和夫編『お伽草子事典』（東京堂出版、2002年）
神田龍身・西沢正史編『中世王朝物語・御伽草子事典』（勉誠出版、2002年）

【成績評価の方法と基準】
発表の完成度（70％）、討論への貢献（30％）

【学生の意見等からの気づき】
初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学、書誌学
＜研究テーマ＞軍記物語、古活字版
＜主要研究業績＞『太平記新考』（汲古書院、2024年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）、『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）

【Outline (in English)】
(Course outline) In this course, we will read Otogi-zoshi.
(Learning Objectives) The goals of this course are to Learn the skills to read classical literature.
(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report (70%) and in-class contribution（30％）.

OTR600B2（その他 / Others 600）

日本文芸特殊研究III A

小林　ふみ子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では研究文献を読むことを通じて通じて日本文学とその周辺各分野の研究法を学び、その要件を考える。江戸時代をおもな対象とし、日本近世文学や絵本・浮世絵を中心に文学、美術史、およびその関連分野の論考を取りあげる。あわせてM2の指導生を中心に、修士論文に向けた研究発表をしてもらい、具体的に研究をいかに進めるかをともに考える。

【到達目標】
（1）各分野の研究アプローチの方法や要件を知り、またそれらに共通する点について説明できるようになる。
（2）文献から論点を探し、研究を発展させる視点を自分なりに獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生の研究テーマを勘案して毎回、前の週に論文を配付する。各回の担当者は、その論文のテーマとその背景、内容、課題・問題をまとめて発表し、全員で議論する。そのなかでよい論文に求められるものについての理解を深める。
発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究とは	日本近世文学・浮世絵研究の課題・視点
第2回	授業の進め方	一文献を例に本授業の発表方法についての理解を共有する。
第3回	文献講読1	（出版についての論文1）
第4回	文献講読2	（出版についての論文2）
第5回	文献講読3	（文芸についての論文1）
第6回	文献講読4	（文芸についての論文2）
第7回	文献講読5	（浮世絵についての論文1）
第8回	文献講読6	（浮世絵についての論文2）
第9回	文献講読7	（その他1）
第10回	文献講読8	（その他2）
第11回	文献講読9	（その他3）
第12回	修論研究報告1	学生による発表＋質疑1
第13回	修論研究報告2	学生による発表＋質疑2
第14回	まとめ	今学期に学んだことをふりかえる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
前の週に配られた文献を読んでくること。

【テキスト（教科書）】
コピーを配布する。

【参考書】
適宜、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
毎回の出席は当然の前提とした上で、報告50％、授業中の質疑などの参加態度50％によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の関心に即して文献を選択するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化
＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌を中心とする近世中期文学・文化の研究
＜近年の主要著書＞
『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル［インターナショナル新書］ 2019）
『大田南畝　江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店　2014→角川ソフィア文庫　2024）
〈共編著〉
『水都としての東京とヴェネツィア』（法政大学出版局　2022）
『墨水四時雑詠』（太平書屋　2021）
『最後の文人石川淳の世界』（集英社［集英社新書］2021）
『好古趣味の歴史　江戸東京からたどる』（文学通信　2020）
『北斎　視覚のマジック　小布施・北斎館名品集』（平凡社　2019）
『奇と妙の江戸文学史』（文学通信　2019）
『別冊太陽　歌麿決定版』（平凡社　2016）
『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編　笠間書院　2015）
『化物で楽しむ江戸狂歌』（江戸狂歌研究会編　共著　笠間書院　2014）

【Outline (in English)】
(Course outline) Learing diffrence of disciplines to approach Tokugawa period cultures by reading essays from the fields of art history and those related to them.
(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read designated papers. Your required study time is four hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

OTR600B2（その他 / Others 600）

日本文芸特殊研究III B

小林　ふみ子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、受講生相互の研究分野についての発表を通じて、研究をいかに意義づけるかについて、多様な視点から考える。

【到達目標】
（1）日本近世文化研究がどのような学問領域にまたがっているかを認識する。
（2）日本文化史研究という広い視野で自らの研究の位置づけを説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
前半は受講生が自らの研究において最重要と考える文献を紹介することを通じて、事例に則して「いい論文」とは何かを考える。後半は受講生相互の研究発表とする。発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	研究をどう意義づけるか（講義）
第2回	文献講読 先行研究Aに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（1）
第3回	文献講読 先行研究Bに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（2）
第4回	文献講読 先行研究Cに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（3）
第5回	文献講読 先行研究Dに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（4）
第6回	文献講読 先行研究Eに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（5）
第7回	文献講読 先行研究Fに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（6）
第8回	中間まとめ 討論	「いい論文」「いい研究」とは？
第9回	研究発表　学生A	受講生相互の研究発表と討論1
第10回	研究発表　学生B	受講生相互の研究発表と討論2
第11回	研究発表　学生C	受講生相互の研究発表と討論3
第12回	研究発表　学生D	受講生相互の研究発表と討論4
第13回	研究発表　学生E	受講生相互の研究発表と討論5
第14回	まとめ	全体をふり返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
事前に配付された文献を読んでくるようにしましょう。

【テキスト（教科書）】
適宜配付します。

【参考書】
随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】
毎回の出席は当然の前提とした上で、報告50％、授業中の質疑などの参加態度50％によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の積極的な討論を期待します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世文芸・文化
＜研究テーマ＞近世中期文学・文化の研究
＜近年の論文＞
「大田南畝：遊女の声を伝える」『日本歴史』932号　2026
「栃木の門人と大田南畝―狂歌の添削から― 」『喜多川歌麿と栃木の狂歌』栃木市美術館2025
「近世随筆における考証の意義　大田南畝から考える「考証随筆」」『国語と国文学』102巻2号2025
「狂歌連中、摺物をつくる」『レスコビッチコレクションの摺物―パリから来た北斎・広重・北渓・岳亭―』大和文華館2024
「懐古趣味流行のなかの鍬形蕙斎」『國華』1542号 2024
「大田南畝の狂詩と明詩」『明清文学論集　その楽しさ その広がり』東方書店2024
'Generative Interactions:The Osmotic Boundaries Between Kusazōshi and Ukiyo-e',Graphic Narratives from Early Modern Japan :The world of Kusazoshi, Brill,2024
「作者の虚構性と実体性：大田南畝周辺から 」『國文論叢別冊』1号 2023

【Outline (in English)】
(Outline) Thinking how to attach significance to your interdisciplinary study/dissertation in a field of Japanese Studies.
(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read designated papers. Your required study time is four hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

OTR600B2（その他 / Others 600）

日本文芸特殊研究ⅣA

スティーヴン・ネルソン

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本などを用いて、『古今著聞集』巻第五 和歌第六、巻第六 管絃歌舞第七の説話を講読する（2026年度）。

【到達目標】
国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程1年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程2年次生は中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 講読序説 ①	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明 『古今著聞集』巻第五 和歌第六、巻第六 管絃歌舞第七 について
第2回	研究課題の紹介（2年次生）① 購読序説 ②	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 『古今著聞集』諸本について
第3回	研究課題の紹介（2年次生）② 講読 ①	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話142
第4回	研究課題の紹介（2年次生）③ 講読 ②	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話230
第5回	関心対象の紹介（1年次生）① 講読 ③	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話143
第6回	関心対象の紹介（1年次生）② 講読 ④	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話231
第7回	修士課程の中間報告（2年次生）① 講読 ⑤	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話144
第8回	修士課程の中間報告（2年次生）② 講読 ⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話232
第9回	研究動向の確認（1年次生） 講読 ⑦	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討 説話145
第10回	先行研究の論旨の整理（2年次生）① 講読 ⑧	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話233
第11回	先行研究の論旨の整理（2年次生）② 講読 ⑨	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話146
第12回	先行研究の論旨の整理（1年次生）① 講読 ⑩	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話234
第13回	先行研究の論旨の整理（1年次生）② 講読 ⑪	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話147
第14回	夏期休暇中の作業計画立案 講読 まとめ	各自が行うべき作業の検討 春学期総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後　各自の研究、講読の準備を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書を使用しない。

【参考書】
副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今著聞集』を用いるが、入手方法については第1回講義の際に案内する。その他、必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表・各種作成資料の内容50％、討論への参加等の平常点50％。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　日本音楽史学
＜研究テーマ＞　日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
＜主要研究業績＞
①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現　資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）
②「「秘曲尽くし」再現―『文机談』に見える秘曲を聴く―」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013年）◇ 付録CD「「秘曲尽くし」再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：篳篥《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》
③「工尺譜の起源をめぐって　―唐代の文字譜との関係―」（磯水絵編『論集 文学と音楽史　―詩歌管絃の世界―』、和泉書院、2013年）

【Outline (in English)】
Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic year 2026, we will also read sections from the '*Waka*' ('Japanese poetry') and '*Kangen-kabu*' ('Music, song and dance') chapters of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their theses in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.
Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their theses, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.
Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class: 50% for active participation in class discussion.

OTR600B2（その他 / Others 600）

日本文芸特殊研究ⅣＢ

スティーヴン・ネルソン

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本などを用いて、『古今著聞集』巻第五 和歌第六、巻第六 管絃歌舞第七の説話を講読する（2026年度）。

【到達目標】
国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程1年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程2年次生は中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第2回	修士論文構想の報告（2年次生）① 講読 ①	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話235
第3回	修士論文構想の報告（2年次生）② 講読 ②	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話148
第4回	先行研究の紹介と整理（1年次生）① 講読 ③	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話236
第5回	先行研究の紹介と整理（1年次生）② 講読 ④	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話149
第6回	修士課程の中間報告（1年次生）① 講読 ⑤	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話237
第7回	修士課程の中間報告（1年次生）② 講読 ⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話150
第8回	修士論文の中間報告（2年次生）① 講読 ⑦	修士論文執筆の進捗状況に関する報告 説話238
第9回	修士論文の中間報告（2年次生）② 講読 ⑧	修士論文執筆の進捗状況に関する報告 説話151
第10回	修士論文の構想発表（1年次生）① 講読 ⑨	学術的な論理展開に基づき、修士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す 説話239
第11回	修士論文の構想発表（1年次生）② 講読 ⑩	学術的な論理展開に基づき、修士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す 説話152
第12回	修士論文提出前の総点検（2年次生） 講読 ⑪	論文構成、要旨、英文要旨、参考文献などについて点検を行う 説話240
第13回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義
第14回	まとめ 講読 まとめ	1年次生は春季休暇中の作業課題に関する計画を示し、2年次生は提出論文について報告し、講評を受ける

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。
以後　各自の研究を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書を使用しない。

【参考書】
副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今著聞集』を用いる。その他、必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表・各種作成資料の内容50％、討論への参加等の平常点50％。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　日本音楽史学
＜研究テーマ＞　日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
＜主要研究業績＞
①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現　資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）
②「「秘曲尽くし」再現―『文机談』に見える秘曲を聴く―」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013年）◇ 付録CD「「秘曲尽くし」再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：篳篥《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》
③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆フローラ、2009年）

【Outline (in English)】
Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic year 2026, we will also read sections from the '*Waka*' ('Japanese poetry'), and '*Kangen-kabu*' ('Music, song and dance') chapters of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their theses in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.
Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their theses, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.
Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class: 50% for active participation in class discussion.

BSP500B2（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本文学・国際日本学基礎演習

本塚　亘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この科目は修士進学前の外国人留学生（なかでも中国５大学入試により入学した特別研修生）を対象としています。日本に関する各種の文献を読み、その内容を要約し、それに対する自分自身の見解を小論文形式の文章にまとめることで、日本研究に求められる基礎的能力を養います。またアウトリーチ（非専門家に向けた発信）用の解説文を作成することで、各自の研究内容・論理展開を客観的にとらえ直しつつ、非専門家の疑問に段階的に応えながら論点を焦点化し、議論の流れを設計して自身の研究課題へ導くことを目標とします。これらの実践を通じて、研究倫理（適切な引用・参照、剽窃の防止、生成AIの適切な利用）についても学習していきます。

【到達目標】
１、日本の言語・文学・歴史・文化・社会等に関する論文を読み、要約する作業を通して、読解力と文章力を高める。
２、自分自身の見解を小論文形式でまとめ、学術論文に相応しい文章を書けるようにする。
３、非専門家の疑問に段階的に応えつつ論点を焦点化し、議論の流れを設計して自身の研究課題へ導く解説文を作成する。
４、研究倫理を理解し、適切な引用・参照を行い剽窃を防ぎ、生成AIを用いる場合も自己の思考と責任のもとで課題に取り組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　原則として、対面形式での授業を行います。カリキュラムは大きく二つに分かれます。
① 各回の課題を通じて、日本語の文章力を高めます。日本の各分野（言語・文学・歴史・文化・社会等）に関する論文を読み、その内容を300字程度の文章で要約し、自分自身の見解を小論文にまとめます。さらに、履修者同士で小論文を読み合い、論文の内容について討論を行います。
② おおむね月ごとに、各自の研究内容に関する非専門家向けの解説文を段階的に作成していきます（Q&A→資料準備→草稿→最終提出）。各自が専門とする研究内容を客観的にとらえ直し、非専門家の関心や疑問の流れに沿って応えつつ、論点を焦点化して自身の研究課題へ導く解説文を取りまとめます。
　履修者が執筆した要約・小論文・解説文については、すべて担当教員が添削を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 国際日本学とは何か	国際日本学とは何かを解説し、大学院修士課程での研究の進め方について説明する。
第2回	課題文Ａ（研究倫理） 内容確認 ／ Q&A作成指示	課題文Ａを読む。剽窃をはじめとする研究不正およびAI活用のあり方について考える。／自身の研究対象に関する一般向けのQ&Aを作成し、次週以降順次発表する。
第3回	要　約 ／ Q&A発表①	課題文Ａを読み、要約する。
第4回	意見文 ／ Q&A発表②	課題文Ａに関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第5回	討　論 ／ Q&A発表③	課題文Ａに関して、他の履修者と討論する。
第6回	課題文Ｂ（日本語） 内容確認 ／ 資料の準備指示	課題文Ｂを読む。日本語表現に関する知識共有を行う。／自身の研究対象について解説するための具体的な資料を準備し、次週以降順次発表する。
第7回	要　約 ／ 資料の準備発表①	課題文Ｂを読み、要約する。
第8回	意見文 ／ 資料の準備発表②	課題文Ｂに関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第9回	討論 ／ 資料の準備発表③	課題文Ｂに関して、他の履修者と討論する。
第10回	課題文Ｃ（政治経済） 内容確認 ／ 解説文作成指示	課題文Ｃを読む。日本における環境政策についての知識共有を行う。／自身の研究対象について解説文を作成し、次週以降順次発表する。
第11回	要　約 ／ 解説文発表①	課題文Ｃを読み、要約する。
第12回	意見文 ／ 解説文発表②	課題文Ｃに関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第13回	討　論 ／ 解説文発表③	課題文Ｃに関して、他の履修者と討論する。
第14回	意見交換	履修者全員でそれぞれの解説文に関する意見交換を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
　毎時の宿題として作文等を課します。また、各自の発表日程にあわせて、発表資料（A4用紙2枚）を準備していただきます。期末には最終提出物として解説文の完成稿を提出していただきます。
　課題に取り組むにあたって生成AIを利用した場合は、合わせて、利用の詳細を示すもの（チャットログ等）を提出しなければいけません。もし履修者の不適切な生成AI利用が発覚した場合、適宜【注意】、【警告】、【大学院課への通報】などの対応をとります。

【テキスト（教科書）】
　なし。プリント等を適宜配付します。

【参考書】
　授業時に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
・毎回の提出物：60％
・最終提出物（解説文）：40％

【学生の意見等からの気づき】
　個々の学生の専門になるべく関連のある内容を取り扱えるよう善処します。また学生同士の議論が活発になるような環境の醸成に努めます。

【その他の重要事項】
１．この科目は修士進学前の外国人留学生（なかでも中国5大学入試により入学した特別研修生）を対象とします。
２．新型コロナウイルスに関する大学の方針変更等の事由により、上記の授業内容を変更する可能性があります。変更があった場合は、学習支援システムにて連絡いたします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本古代歌謡 日本音楽史
＜研究テーマ＞催馬楽
＜主要研究業績＞「催馬楽の成立に関する研究 」（博士論文、2017）、「催馬楽「同音グループ」における「替え歌」生成の原理について：歌の詞章と旋律の関係を中心に 」（『日本歌謡研究』59号、2019年）、「古楽譜解読プロセスの可視化：琵琶譜 『三五要録』 による催馬楽旋律分析を例に」（『じんもんこん2025論文集』、2025）

【Outline (in English)】
Outline: The course aims to develop the basic skills required for Japanese studies, including reading various texts on Japan, summarizing their contents, and producing essay-style writing to express their own opinions. Additionally, the course aims to develop students' ability to write an outreach-oriented explanatory text for non-specialist readers and to apply basic research ethics to all written work, including appropriate citation, preventing plagiarism, and the responsible use of generative AI.
Goal: By the end of the course, students should be able to do the following:
- Read various articles on Japanese language, literature, history, culture, and society and summarize their contents to improve reading and writing skills.
- Compose one's own opinions into essay-style writing and write academic papers in an appropriate format.
- Write an outreach-oriented explanatory text that answers non-specialists' questions step by step, sharpens the focus of the discussion, designs the flow of the argument, and leads to one's own research question.
- Understand research ethics, practice appropriate citation and referencing, prevent plagiarism, and, when using generative AI, work on assignments with one's own thinking and responsibility.
Learning activities outside of classroom: Students are expected to spend about four hours before and after each class period on assignments and independent study.
Grading Criteria / Policies: In accordance with the above Goals, the following two will be assessed.
- Assignments 60%.
- Outreach-oriented explanatory writing 40%.

BSP500B2（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本文学・国際日本学論文作成基礎実習

金子　広幸

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
先行研究の閲覧から自らの研究課題の明確化を行い、
研究活動における手法・手順・発表などを学ぶことができる。
あわせてその過程から自らの日本語の問題点についての解決策を導くことができる。

【到達目標】
1.研究の方向性を明確化することができる。具体的には、その研究課題について、何を明らかにするかを表明できるようになる。
2.研究の手法・手順を学び、日本語の能力向上と併せて、進めることができるようになる。
3.自らの研究課題などを研究言語である日本語で他者に明確に伝えることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
このクラスは【秋学期だけ】に開講される
教育支援システム（グーグルクラスルームやズームなど）を使用する。
1.研究課題・計画を精緻化し明文化する作業を共同で行う。
2.先行研究の文献・研究手法についての模擬的な発表をする。
3.学期中に「ミニ調査（パイロット調査）」を行い、研究の方向性を探る材料とする。
4.後半日程には、研究の進度について成果の発表を行う。
5.図表やグラフ・データなどを示しながら発表する方策を考える
6.完成した論文がどのようなものになるのか想定する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	参加者の研究の課題を確認、学期全体の進め方とスケジュールを決める。
第2回	私の研究課題	これまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する
第3回	私の研究課題（先行研究の模索）	これまでに構築した研究課題をもとに、先行研究を新たに探す【自らの日本語の問題点を探る】
第4回	私の研究課題（参考文献の引用と発表の方法）	先行研究の引用について学ぶ【発表時に必要な日本語について模索する】【参考文献の引用などの扱い方、スライドの作り方、発表レジュメの書式などを学ぶ】
第5回	先行研究発表（先行研究の要旨を作成）	各自が探した先行研究について発表する。【要旨をまとめる時の日本語の使い方を学ぶ】
第6回	先行研究発表（先行研究の参考をもとに調査の概要決定）	各自が探した先行研究について発表する。【ミニ調査の概要提示】
第7回	先行研究発表（調査のテーマを確定）	各自が探した先行研究について発表する。【ミニ調査のテーマを確認する】
第8回	研究手法発表（先行研究の研究手法）	研究の過程で必要な手法について学ぶ。【研究・調査・発表時に必要な日本語について学ぶ。待遇表現の基礎や、調査依頼など】
第9回	研究手法発表（図表・グラフ・データの提示）	得られた結果をもとに作成された図表・グラフ・データの提示の方法を学ぶ
第10回	研究手法発表（調査の方法を発表）	ミニ調査の方法を共有する
第11回	調査発表（要旨の表現を学ぶ）【ミニ調査研究の発表①】	調査の結果を通して　要旨に含められる表現を学び、最終提出物を作成する
第12回	調査発表（研究手法の表現を学ぶ）【ミニ調査研究の発表②】	調査の結果を通して、研究手法の表現を学び、最終提出物を作成する
第13回	調査発表（目次の作り方を学ぶ）【ミニ調査研究の発表③】	調査の結果を通して、研究論文全体を概観し、目次を作成、最終提出物を作成する
第14回	成果発表 今後の課題を明確化する	要旨・研究方法・目次の提示をしながら今後の研究の展開を模索する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、1回の講義に対して、以下のことを行うにあたって、各3時間を標準とします。
1.研究の方向性を明確にするために、常に文献を探し、クラスで簡単に発表できるよう要点をまとめておくこと。
2.クラスでは問題を共有し、積極的に発言し、手法等について工夫を重ねること。
3.日本語能力については、とくにスタイルや表現の選択を中心とした、「研究時に必要な日本語」を究明すること。
4.発表がある場合には必ず「スライド」と「レジュメ」をその都度提出・配付すること。
5.日本語使用者としての自覚に基づいて、クラスでの課題を作成・提出すること。
6.発表や課題提出の時などは、必要ならクラスメート同士相互にチェックすること。

【テキスト（教科書）】
研究課題明確化が主目的なので教科書は使用しません。

【参考書】
金子広幸（2014）『初級が終わったら始めよう　新・にほんご敬語トレーング』
https://www.ask-books.com/978-4-87217-856-2/
研究活動を行うにあたってはメールで依頼する、調査時の使用言語など、敬語が必要です。敬語に関する知識・練習が足りない人は自主学習として使用してください。
日本版以外に中国版・台湾版・韓国版と　KINDLE版があります。最新版であることを確認してください。
この参考資料はクラス活動としては使いませんが、学期の後半に敬語の能力チェックをする予定です。各自準備しておいてください。

【成績評価の方法と基準】
・提出物の完成度（研究計画書　発表時のスライド・レジュメ　日本語に関する宿題、「今週の学び」　最終提出物（要旨と目次）など）15％
・提出物の期限厳守の提出15％
・発表参加20％
・発表・スライド・資料などの完成度20％
・日本語能力振り返り・小試験（2回程度実施予定）10％
・クラスでの参加態度（積極的な発言、オンラインでも顔を出しての参加など）20％
成績評価は100点満点で採点。60点以上が合格。

【学生の意見等からの気づき】
参加者の皆さんへ。（修了生からのコメントを参考に活動を再考しています）

●毎回参加者の発表があり、それについての教師のコメントや参加者の参加討議でクラスが進みます。外国語である日本語でチャレンジすることを忘れないでください。
●参加人数にもよりますが、１学期あたり、４回程度の発表があります。他にもスライドやレジュメの作成、先行研究を探すことなど、様々な課題があります。積極的に参加してください。
●準備してきた資料を読むだけでは、いい発表にはなりません。準備をさらに充実させて、視覚資料を使ったり、わかりやすく研究テーマを説明できるよう、教師といっしょに方法を探してください。もちろん自宅で発表の練習を「十分に」してください。
●「今週の学び」を初めとして、 毎回の講義には課題が出ます。時間厳守で提出してください。
●これからの学術の世界を考える時、国際学術会議などでのオンライン発表は重要な鍵となります。対面クラスになっても、このオンライン発表などにぜひチャレンジしてください。
●大学院生には「時間厳守提出」が大切です。提出物を時間厳守で提出してください。遅れると減点対象になります。
●クラスには「ミニ調査研究」が準備されています。小規模な調査を行い、研究の手順や、結果の分析の方法についてシミュレーションを行います。歴代の卒業生からもとても信頼された活動です。積極的に参加してください。

【学生が準備すべき機器他】
●　ZOOM・グーグルクラスルームなどが使える機器・ネット環境の準備をお願いします。
クラスでのお知らせ・課題の提示・提出・連絡などは全てグーグルクラスルームで行います。
● クラスにアクセスする場合は法政大学のGoogleアカウントが必要です。

【その他の重要事項】
●クラスのスケジュールが決まった後、第３回目以降はクラスに新しく参加できなくなります。
第１回と第２回に必ず出席してください。
●日本語能力が不十分であることを恥じることはありませんが、しっかりと挑戦してください。
●オフィスワークの時間は設定しませんが、オンラインで相談に乗ることはできます。メールをしてください。
hiroyuki.kaneko.75@hosei.ac.jp

【担当者の研究背景】
＜専門領域＞日本語教育学　社会言語学　地理学　歴史学　日本文化
＜研究テーマ＞敬語など待遇表現　日本語クラス活動　地域日本語支援　留学生相談業務　日中言語比較
＜主要研究業績＞
①『初級が終わったら始めよう　にほんご敬語トレーニング』（アスク　2006年）
②『初級が終わったら始めよう　新・にほんご敬語トレーニング』（アスク2014年）
③『人と人とをつなぐ日本語クラスアクティビティ50』（アスク2005年）
④「日中漢字音対照研究の成果と今後の教学応用への可能性の模索」基礎研究その１　（『日中学院紀要教学』　2008年）
⑤「初級日本語クラスで使用する絵の要素の分析」（桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修士論文　2012年）
⑥河内 彩香, 米谷 章子, 村田 道明, 山本 そのこ, 金子 広幸（2022）「初級日本語のオンライン試験における不正行為対策」『多文化社会と言語教育』

【担当者の出演番組】
日本語教育関係のNHKの番組の出演・監修しています。
NHK国際放送で放送された番組はこちらです。
https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/easyjapaneseforwork/ja/

【担当者の社会への発信】
①地域日本語支援の支援者への支援を目指した記事の連載
東京日本語、ボランティアネットワークニュースレター　https://www.tnvn.jp/
②同ネットワークの講演担当

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
The students of this class can clarify their own research issues by browsing previous research, and learn methods, procedures, and presentation methods in their research activities.　At the same time, they can draw solutions for their Japanese language usage problems from the process.
【到達目標（Learning Objectives）】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1. To clarify the direction of research. Specifically, to be able to state what they will clarify about the research subject.
2.　To be able to learn research methods and procedures and proceed with improving their Japanese proficiency.
3.　To be able to clearly convey research topics to others in Japanese, which is the research language.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
The standard preparation and review time for this class is 3 hours each for doing the following for each lecture.
1.　In order to clarify the direction of your research, always search the literature and summarize the points so that you can easily present it in the class.
2. In the class, share the problem, speak positively, and devise methods.
3.　Regarding Japanese proficiency, investigate "Japanese necessary for research", especially focusing on the selection of styles and expressions in formal situations.
4.　Whenever there is a presentation, submit and distribute "slides" and "resumes" each time.
5. Create and submit assignments in the class based on your awareness as a Japanese language “user” not as a “learner”.
6.　When presenting or submitting assignments, check with each other in class if necessary.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
・ Completion of submissions (slides and resumes at the time of presentation of the research plan, homework related to Japanese, "learning of the week", final submissions (summary and table of contents), etc.) 15%
・ Submissions that adhere to the deadline for submissions 15%
・ Participation in the presentation 20%
・ Completion of presentation 20%
・ Review of Japanese proficiency
・ Small exam (scheduled to be held about twice) 10%
・ Participation attitude in class (active remarks, face-to-face participation(even if it was online session), etc.) 20%
Grades are evaluated on a scale of 100 points. Passed 60 points or more.

LIT500B3（文学 / Literature 500）

英米文学特殊研究Ａ

波戸岡　景太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
おもしろい物語とはいったい何だろうか？　古くて新しいこの問いに答えるため、本授業では、映画*Star Wars*シリーズの成立にも多大な影響を与えたことでも有名な比較神話学者ジョーゼフ・キャンベルの思想を学ぶ（キャンベルによれば、私たちが物語に求めているのは「生きることの意味」ではなく「いま生きているという経験」だという）。具体的には、キャンベルの著作をひもときながら、Netflixドラマ*Stranger Things* (2016-2025)を分析し、その「おもしろさ」を言語化する方法を学んでいく。
＊本授業は、人文科学研究科（大学院）主催の授業「英米文学特殊研究」との相互乗り入れ科目です。
〈講義題目〉Joseph Campbellで*Stranger Things*を読解する

【到達目標】
(1) 現代文学にあらわれた「神話」の構造を理解する。
(2) ジョーゼフ・キャンベルというアメリカの知識人が提唱した理論の普遍性と時代性を（批判的にも）説明することができるようになる。
(3) 論文執筆に際しての二次文献の蒐集と活用の仕方を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式をメインとしながら、教員による解説も行います。演習回では、履修者は各自の担当章についてプレゼンテーションを行い、それへのフィードバックを、教員と他の履修者が行います。なお、教室内でのドラマの鑑賞などは行いません。履修者は、各自で事前に作品を鑑賞し、授業にのぞんでください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	ジョーゼフ・キャンベルの経歴と仕事
第2回	「神話と現代の世界」について	教科書『神話の力』第1章の概要を解説する
第3回	『ストレンジャー・シングス』Season1（Episode1-2）について	教科書・第1章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第4回	『ストレンジャー・シングス』Season1（Episode3-4）について	教科書・第1章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第5回	「内面への旅」について	教科書・第2章の概要を解説する
第6回	『ストレンジャー・シングス』Season1（Episode5-6）について	教科書・第2章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第7回	『ストレンジャー・シングス』Season1（Episode7-8）について	教科書・第2章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第8回	「ストーリーテラー」について	教科書・第3章の概要を解説する
第9回	『ストレンジャー・シングス』Season2（Episode1-2）について	教科書・第3章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第10回	『ストレンジャー・シングス』Season2（Episode3-4）について	教科書・第3章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第11回	「犠牲と至福」について	教科書・第4章の概要を解説する
第12回	『ストレンジャー・シングス』Season2（Episode5-6）について	教科書・第4章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第13回	『ストレンジャー・シングス』Season2（Episode7-8）について	教科書・第4章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第14回	まとめ／期末試験（小論文）	『神話の力』を振り返りながら、ファイナルエピソード（S2-E9）についての小論文を授業内で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。ドラマの各エピソードは事前に視聴し、配布資料の予習・復習、および授業内で示される課題対応を実施してください。

【テキスト（教科書）】
キャンベル、ジョーゼフ、ビル・モイヤーズ『神話の力』（早川書房、2025年）Campbell, Joseph and Bill Moyers. *The Power of Myth*. Anchor Books, 1991.

【参考書】
授業内で適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
・授業内プレゼンテーション：70％
・期末試験（小論文）：30％
以上を合計し60％以上を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【Outline (in English)】
This course explores the "power of myth" in American literature and culture through an analysis of *Stranger Things* in relation to the works of Joseph Campbell.
Students will be introduced to comparative mythology as a mode of inquiry. By examining the responses of intellectuals, novelists, and filmmakers, we will expand and rethink our understanding of the role of "narrative" today.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.
Grading shall be as follows:
1) Class presentation (70%)
2) Essay exam (30%)

LIT500B3（文学 / Literature 500）

英米文学特殊研究Ｂ

波戸岡　景太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
春学期に引き続き、「おもしろい物語とはいったい何だろうか？」という古くて新しい問いに答えるため、本授業では、映画*Star Wars*シリーズの成立にも多大な影響を与えたことでも有名な比較神話学者ジョーゼフ・キャンベルの思想を学ぶ（キャンベルによれば、私たちが物語に求めているのは「生きることの意味」ではなく「いま生きているという経験」だという）。具体的には、キャンベルの著作をひもときながら、Netflixドラマ*Stranger Things* (2016-2025)を分析し、その「おもしろさ」を言語化する方法を学んでいく。
＊本授業は、文学部主催の授業「英語圏文学研究Ｂ」との相互乗り入れ科目です。
〈講義題目〉Joseph Campbellで*Stranger Things*を読解する

【到達目標】
(1) 現代文学にあらわれた「神話」の構造を理解する。
(2) ジョーゼフ・キャンベルというアメリカの知識人が提唱した理論の普遍性と時代性を（批判的にも）説明することができるようになる。
(3) 論文執筆に際しての二次文献の蒐集と活用の仕方を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式をメインとしながら、教員による講義も行います。演習回では、履修者は各自の担当章についてプレゼンテーションを行い、それへのフィードバックを、教員と他の履修者が行います。なお、教室内でのドラマの鑑賞などは行いません。履修者は、各自で事前に作品を鑑賞し、授業にのぞんでください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	ジョーゼフ・キャンベルの再評価について
第2回	「英雄の冒険」について	教科書『神話の力』第5章の概要を解説する
第3回	『ストレンジャー・シングス』Season3（Episode1-3）について	教科書・第5章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第4回	『ストレンジャー・シングス』Season3（Episode4-6）について	教科書・第5章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第5回	「女神からの贈り物」について	教科書・第6章の概要を解説する
第6回	『ストレンジャー・シングス』Season3（Episode7-8）について	教科書・第6章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第7回	『ストレンジャー・シングス』Season4（Episode1-3）について	教科書・第6章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第8回	「愛と結婚の物語」について	教科書・第7章の概要を解説する
第9回	『ストレンジャー・シングス』Season4（Episode4-6）について	教科書・第7章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第10回	『ストレンジャー・シングス』Season4（Episode7-9）について	教科書・第7章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第11回	「永遠性の仮面」について	教科書・第8章の概要を解説する
第12回	『ストレンジャー・シングス』Season5（Episode1-4）について	教科書・第8章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第13回	『ストレンジャー・シングス』Season5（Episode5-7）について	教科書・第8章のキーワードを参考に、個人発表を行う。
第14回	まとめ／期末試験（論述形式）	『神話の力』を振り返りながら、ファイナルエピソード（S5-E9）についての小論文を授業内で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。ドラマの各エピソードは事前に視聴し、配布資料の予習・復習、および授業内で示される課題対応を実施してください。

【テキスト（教科書）】
キャンベル、ジョーゼフ、ビル・モイヤーズ『神話の力』（早川書房、2025年）Campbell, Joseph and Bill Moyers. *The Power of Myth*. Anchor Books, 1991.

【参考書】
授業内で適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
・授業内プレゼンテーション：70％
・期末試験（論述形式）：30％
以上を合計し60％以上を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【Outline (in English)】
This course explores the "power of myth" in American literature and culture through an analysis of *Stranger Things* in relation to the works of Joseph Campbell.
Students will be introduced to comparative mythology as a mode of inquiry. By examining the responses of intellectuals, novelists, and filmmakers, we will expand and rethink our understanding of the role of "narrative" today.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.
Grading shall be as follows:
1) Class presentation (70%)
2) Essay exam (30%)

LIT600B3（文学 / Literature 600）

英米文学演習第二（American Fiction） A

波戸岡　景太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、米文学を研究する際に避けて通れない「文学理論」について、ジョナサン・カラーの著作を中心に概観します。履修者は、20世紀の終わりから現在にかけて世界規模で整備されてきた「セオリー」の有効性を再検証することで、さまざまな米文学作品を理論的に読解できるようになることを目指します。
〈講義題目〉
文学理論を再考する

【到達目標】
(1) 現代アメリカ文学研究における「理論」の役割を理解する。
(2) ジョナサン・カラーの仕事について、その歴史的な意義を説明できるようになる。
(3) 文体やメッセージといったものを、多角的な視点で捉えられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式です。履修者は各自の担当章についてプレゼンテーションを行い、それへのフィードバックを、教員と他の履修者が行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	教科書・序章
第2回	理論の中の文学	教科書・第1章前半
第3回	ジュディス・バトラー	教科書・第1章後半
第4回	小説と国民国家	教科書・第2章前半
第5回	ベネディクト・アンダーソン	教科書・第2章後半
第6回	理論への抵抗	教科書・第3章前半
第7回	ポール・ド・マン	教科書・第3章後半
第8回	テクスト、その運命の転変	教科書・第4章前半
第9回	ジャック・デリダ	教科書・第4章後半
第10回	記号について	教科書・第5章前半
第11回	ソシュールとデリダ、恣意性について	教科書・第5章後半
第12回	行為遂行的なもの	教科書・第6章前半
第13回	クィアについて	教科書・第6章後半
第14回	まとめ／期末試験	小論文形式で試験を実施

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。配布資料の予習・復習、および授業内で示される課題対応を実施してください。

【テキスト（教科書）】
カラー、ジョナサン『文学と文学理論』（折島正司訳、岩波書店、2011年）

【参考書】
Culler, Jonathan. *The Literary in Theory*. Stanford UP, 2007.
カラー、ジョナサン『文学理論〈1冊でわかる〉シリーズ』（荒木映子、富山太佳夫訳、岩波書店、2003年）

【成績評価の方法と基準】
・授業内プレゼンテーション：70％
・期末試験（小論文）：30％
以上を合計し60％以上を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本授業での学びを直接・間接に自身の修論作成に取り入れた履修者が多かったため、今年度も引き続き、批評の「読み方」と「書き方」の両方の指導に力を入れたいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
アメリカ文学、ポピュラーカルチャー
＜研究テーマ＞
現代アメリカ文学・文化における動物表象、アダプテーション理論を応用したポピュラーカルチャーの分析
＜主要研究業績＞
『スーザン・ソンタグ：「脆さ」にあらがう思想』（集英社新書、2023年）
Thomas Pynchon's Animal Tales: Fables for Ecocriticism（Lexington Books、2022）

【Outline (in English)】
This course gives you a thorough overview of literary theory by reading Jonathan Culler's *The Literature in Theory*. Eventually, students will be able to understand different American literary works by thinking about what they mean in theory.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.
Grading shall be as follows:
1) Class presentation (70%)
2) Essay exam (30%)

LIT600B3（文学 / Literature 600）

英米文学演習第二（American Fiction）B

波戸岡　景太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、米文学を研究する際に避けて通れない「文学理論」について、秋学期も引き続き、ジョナサン・カラーの著作を中心に概観します。履修者は、20世紀の終わりから現在にかけて世界規模で整備されてきた「セオリー」の有効性を再検証することで、さまざまな米文学作品を理論的に読解できるようになることを目指します。
〈講義題目〉
文学理論を再考する

【到達目標】
(1) 現代アメリカ文学研究における「理論」の役割を理解する。
(2) ジョナサン・カラーの仕事について、その歴史的な意義を説明できるようになる。
(3) 文体やメッセージといったものを、多角的な視点で捉えられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式です。履修者は各自の担当章についてプレゼンテーションを行い、それへのフィードバックを、教員と他の履修者が行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	理論、国民国家、行為遂行的なもの
第2回	解釈について	教科書・第7章前半
第3回	トニ・モリスン	教科書・第7章後半
第4回	全知について	教科書・第8章前半
第5回	一九世紀小説と二〇世紀小説	教科書・第8章後半
第6回	悪い文章と良い哲学	教科書・第9章前半
第7回	ウィトゲンシュタイン	教科書・第9章後半
第8回	批評的著述	教科書・第10章前半
第9回	バーバラ・ジョンソン	教科書・第10章後半
第10回	カルチュラル・スタディーズ	教科書・第11章前半
第11回	ミーケ・バル	教科書・第11章後半
第12回	比較文学について	教科書・第12章前半
第13回	インター・テクスチュアリティ	教科書・第12章後半
第14回	まとめ／期末試験	小論文形式で試験を実施

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
カラー、ジョナサン『文学と文学理論』（折島正司訳、岩波書店、2011 年）

【参考書】
Culler, Jonathan. *The Literary in Theory*. Stanford UP, 2007.
カラー、ジョナサン『文学理論〈1 冊でわかる〉シリーズ』（荒木映子、富山太佳夫訳、岩波書店、2003 年）

【成績評価の方法と基準】
・授業内プレゼンテーション：70 %
・期末試験（小論文）：30 %
以上を合計し60 %以上を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本授業での学びを直接・間接に自身の修論作成に取り入れた履修者が多かったため、今年度も引き続き、批評の「読み方」と「書き方」の両方の指導に力を入れたいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
アメリカ文学、ポピュラーカルチャー
＜研究テーマ＞
現代アメリカ文学・文化における動物表象、アダプテーション理論を応用したポピュラーカルチャーの分析
＜主要研究業績＞
『スーザン・ソンタグ：「脆さ」にあらがう思想』（集英社新書、2023 年）
Thomas Pynchon's Animal Tales: Fables for Ecocriticism (Lexington Books、2022)

【Outline (in English)】
This course gives you a thorough overview of literary theory by reading Jonathan Culler's *The Literature in Theory*. Eventually, students will be able to understand different American literary works by thinking about what they mean in theory.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.
Grading shall be as follows:
1) Class presentation (70%)
2) Essay exam (30%)

LIT600B3（文学 / Literature 600）

英米文学演習第三（British Fiction） B

小澤　央

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
＜講義題目＞Mary Shelley, *Frankenstein* 精読
　この授業では、Mary Shelleyの*Frankenstein* (1818, rev. 1831)を原文で精読し、書かれている内容や扱われているテーマや問題についてみなで議論する。映画や先行研究も参考にする。
　文学を解釈するための専門的技術を身につけ、自分の解釈を説得力をもって主張することが目的である。

【到達目標】
この授業を履修することで、学生は
・*Frankenstein*を読了し、その背景事情を含めて説明できる
・歴史的文脈やほかの作品との関係でテクストの意義を論じられる
・先行研究を踏まえて、自分の解釈を明確に表現できる
・長編小説を読み通せるだけの英語力をつける

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　原則的に毎回レジュメ担当者を決め、その発表に基づいてみなで議論する。学期末にはレポートを書く。
　発表に対してはその場で、レポートに対しては返却時にフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方の確認、作品の背景の説明
第2回	Shelleyの生涯についての映画(1)	前半の鑑賞と議論
第3回	Shelleyの生涯についての映画(2)	後半の鑑賞と議論
第4回	テクスト精読(1)	作品を8等分した場合の第1部の発表と議論
第5回	テクスト精読(2)	第2部の発表と議論
第6回	テクスト精読(3)	第3部の発表と議論
第7回	テクスト精読(4)	第4部の発表と議論
第8回	テクスト精読(5)	第5部の発表と議論
第9回	テクスト精読(6)	第6部の発表と議論
第10回	テクスト精読(7)	第7部の発表と議論
第11回	テクスト精読(8)	第8部の発表と議論
第12回	先行研究のレビュー(1)	伝統的批評に関する発表と議論
第13回	先行研究のレビュー(2)	最近の批評に関する発表と議論
第14回	まとめ	作品と批評の総括、期末レポートのテーマについての話し合い

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　発表者はレジュメを必ず用意すること。レジュメには、要約のみならず論点や意見などの提示が必要である。発表にあたっていなくても、テクストをしっかりと読み、自身の考えをまとめてゼミに参加すること。
　予習・復習は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
Mary Shelley, *Frankenstein*, ed. Maurice Hindle, Penguin Classics, 2003.

【参考書】
・シェリー著、『フランケンシュタイン』、小林章夫訳、光文社新訳文庫、2010年
・廣野由美子著、『批評理論入門――『フランケンシュタイン』解剖講義』、中公新書、2005年
・Laura Nicosia and James F Nicosia, eds., *Critical Insights: Frankenstein; or, the Modern Prometheus*, Salem Press, 2024.

【成績評価の方法と基準】
・議論への貢献度：30%
・発表：30%
・期末レポート：40%

【学生の意見等からの気づき】
学生のレジュメをもとにした議論をさらに充実させる。

【その他の重要事項】
　基本的に全回に出席することが望ましい。この場合の「出席」とは、該当範囲を予習してきて、積極的にゼミに参加することを意味する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　イギリス文学、ユートピア文学
＜研究テーマ＞
　イギリス小説、ユートピア／ディストピア、帝国主義、ジェンダー
＜主要研究業績＞
・*Wastelands and Wonderlands: Utopias and Dystopias in Film and Literature* (共著, SUNY Press, 2026)
・*Huxley, ce méconnu*（共著, Edizioni Effigi, 2025）
・*Critical Insights: Frankenstein; or, the Modern Prometheus* (共著, Salem Press, 2024)
・*Orientalism and Reverse Orientalism in Literature and Film: Beyond East and West* (共著, Routledge, 2021)
・サンダー・L・ギルマン著『肥満男子の身体表象――アウグスティヌスからベーブ・ルースまで』（共訳, 法政大学出版局, 2020）
・フレドリック・ジェイムソン他著『アメリカのユートピア――二重権力と国民皆兵制』（共訳, 書肆心水, 2018）

【Outline (in English)】
In this course, students are expected to carefully read Mary Shelley's *Frankenstein* (1818, rev. 1831) and discuss the text and its relevant themes and issues. The course also refers to films and studies on the author and her work. The goals of this course are to acquire the technique of interpreting literature and present a new interpretation convincingly. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. The final grade will be calculated according to the following process: participation in discussion (30%), presentation (30%) and term-end essay (40%).

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

英語学概論A

廣田　友晴

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
英語学研究の諸領域を2セメスターにわたって概観します。春学期は、世界の英語、形態論、意味論、語用論、社会言語学、英語教育を中心に、英語学研究の基礎的な考え方を学びます。今後の英語学研究の基礎となる科目ですので、なるべく1年次に、春学期・秋学期を連続して履修することをお勧めします。

【到達目標】
英語学研究の諸分野における主要な内容と研究アプローチを体系的に理解し、先行研究を踏まえつつ自身の関心分野を明確化するとともに、今後の研究テーマを英語学研究の中に適切に位置づけられるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
「言語」と一口にいっても、話し言葉、書き言葉、文法、話者の頭の中にある言語知識など、研究者によって捉え方は異なります。こうした捉え方の違いは、研究アプローチに反映されることも少なくありません。英語学には、理論的な側面から取り組む分野もあれば、具体的な言語事象に着目する分野もあります。本科目では、できるだけ多くの分野を講義形式で紹介していきます。リアクション・ペーパーは毎時間提出していただきます。興味深いコメントについては授業内で紹介し、さらなる学びや議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	春学期の授業の進め方、教科書、履修条件について
第2回	英語学とは	英語学研究の概説
第3回	世界の英語（1）	世界語としての英語について
第4回	世界の英語（2）	英語が話されている国と地域、英語のバリエーションについて
第5回	形態論（1）	形態論の概説、単語ができる仕組み
第6回	形態論（2）	形態論と形態素
第7回	意味論（1）	意味論の概説
第8回	意味論（2）	意味の拡張としてのメタファー、メトニミー
第9回	語用論（1）	語用論の概説、言葉の意味について
第10回	語用論（2）	語用論の演習、コミュニケーション論の概説
第11回	言葉と社会	社会言語学の概説
第12回	英語教育	英語教育の現状と問題点
第13回	春学期の振り返り	春学期の講義内容についての復習と演習
第14回	期末試試験験	試験・まとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本科目では次々と新しい内容を扱うため、教科書を事前に読んでから授業に出席してください。教科書は英語で書かれているため、辞書を引きながら読み、授業を通して復習し、理解を深めることを心がけましょう。授業後には、学んだ内容を再度確認することで、知識の定着や新たな視点の獲得につながります。本科目における予習・復習の目安時間は、それぞれ2時間です。

【テキスト（教科書）】
影山太郎・デ・シェン，ブレント・日比谷潤子・タツキ，ドナ（2021）『First Steps in English Linguistics (2nd edition) 英語言語学の第一歩』くろしお出版.

【参考書】
内容ごとに参考文献や資料を適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点を40%、期末試験を60%とし、授業で取り扱う各分野の基礎知識を十分に理解できているかどうかで評価します。

【学生の意見等からの気づき】
本科目の担当は今年度が初めてです。気づいた点などがあれば、授業内外でお気軽にお知らせください。

【その他の重要事項】
英語学の基礎的知識を身につけるため、1年次には秋学期開講の「英語学概論B」とあわせて履修することを推奨します。授業の構成や進度については、学生の理解度に応じて適宜調整する場合があります。

【Outline (in English)】
(Course outline) This course introduces students to various fields in English linguistics, with a focus on World Englishes, morphology, semantics, pragmatics, sociolinguistics, and English teaching.
(Learning objectives) The primary goal of this course is for students to acquire an overview of English linguistics and to be able to locate their own research interests within the field.
(Learning activities outside of classroom) Students are required to read the relevant textbook chapter before class and review the content covered after class. Students are expected to spend approximately four hours per class.
(Grading criteria/policy) Students will be assessed based on their understanding of the course content: attendance and in-class contributions (40%) and a final examination (60%).

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

英語学概論B

北澤　茉奈

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、英語学概論として、英語の歴史、統語論、音声学・音韻論、言語習得といった英語学の主要分野について、基礎的な概念や用語を学ぶことを目的とする。英語の発音の仕組みや文構造に関する基礎知識を身につけ、実際の英文を用いた分析や構造表記の練習を通して、英語という言語の成り立ちを理解する。また、日本語との共通点や相違点にも目を向けながら、英語がどのように理解され、習得されてきたのかを考察する。これらの学習を通して、英語を単なる学習対象として見るのではなく、言語そのものへの理解を深めるための基礎的な視点を身につけることを目指す。

【到達目標】
本授業を通して、学生は英語の歴史、音声学・音韻論、統語論、言語習得といった英語学の主要分野について、基礎的な概念や用語を確認・整理することを目標とする。英語が誕生してから現代に至るまでの歴史的変化、英語の音の体系、統語論における基本的な考え方、ならびに言語習得や伝統的文法から生成文法に至る理論の変遷について、英語学全体の中での位置づけを理解する。また、言語学研究の諸分野のアプローチや研究の現状を踏まえ、英語という対象への理解をより深めるとともに、英語学研究における基礎的知識をもとに、自身の研究テーマをどのように位置づけることができるのかを明確にするための基盤を養うことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は、英語が誕生してから現代に至るまでの歴史、英語の音の体系、言語習得、ならびに学校文法から生成文法に至るまでの基礎的な概念や用語、理論の変遷について、講義形式を中心に進めます。発展的な内容については、動画等の教材も取り入れながら理解を深めます。また、事前に教科書内容の簡単なまとめや実例への気づきを準備してもらい、その一部を授業内で紹介してもらうことがあります。授業の冒頭では、前回提出されたリアクションペーパーの内容をいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で共有し、議論の発展に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方、教科書・参考文献、履修条件および評価方法の説明
第2回	英語学とは何か	英語学の対象と主要分野の概説
第3回	英語の歴史（1）	英語史の概説と英語の成立
第4回	英語の歴史（2）	英語の変化と語彙の成り立ち
第5回	統語論の基礎	統語論の概説と言語構造の基本的な考え方
第6回	統語構造	生成文法による統語構造の分析
第7回	統語構造の発展	助動詞・補文標識・疑問文の構造
第8回	音声・音韻論（1）	英語の音の体系と母音の仕組み
第9回	音声・音韻論（2）	子音の分類と英語の発音の特徴
第10回	言語習得（1）	言語習得の基礎的概念
第11回	言語習得（2）	言語習得を説明する主な理論
第12回	第二言語習得（1）	外国語習得の特徴と影響要因
第13回	第二言語習得（2）	外国語習得の過程と英語学習への示唆
第14回	期末試験	試験・全体のまとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の授業に先立ち、教科書の該当箇所に目を通し、内容の概要を把握しておく。また、授業で扱うテーマに関連する身近な言語使用の実例や疑問点を探し、簡単に整理・まとめる。授業後は、講義内容や配布資料、授業内での議論を振り返り、理解を深めるとともに、リアクションペーパーや課題に取り組む。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『First Steps in English Linguistics 英語言語学の第一歩』
影山太郎, ブレント・デ・シェン, 日比谷潤子, ドナ・タツキ 著
くろしお出版

【参考書】
適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
期末試験40%、授業内課題 30%、平常点（参加度、リアクションペーパー等）30%

【学生の意見等からの気づき】
リアクションペーパー等を参考にしながら、可能な範囲で皆さんの意見や希望を授業に反映していきたいと考えています。

【担当教員の専門分野等】
https://researchmap.jp/manakitazawa

【Outline (in English)】
This course introduces students to major areas of English linguistics, including the history of English, syntax, phonetics and phonology, and language acquisition. Through the study of basic concepts and terminology, as well as analysis of actual English examples and occasional comparison with Japanese, students explore how English is structured, how it has changed over time, and how it is understood and acquired as a language.
The aim of this course is to help students develop a foundational understanding of English as a linguistic system, and to situate key theories and approaches within the broader field of linguistic research, providing a basis for further study in English linguistics.
Students are expected to read assigned materials before class, review lecture content after class, and complete short reaction papers or assignments. The standard amount of preparation and review time is approximately two hours per class.
Final grades will be evaluated based on the following criteria: final examination (40%), in-class assignments (30%), and class participation including reaction papers (30%).

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

言語学概論Ａ

石川　潔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　知識ゼロの人向けの言語科学の案内です。知識を得るというより、取り上げるそれぞれの分野の「ノリ」を実感していただくことを目指します。どの分野を自分が楽しめそうか、楽しめなさそうかの判断の材料としてお使いください。

【到達目標】
- 「言語」についての世間にあふれた誤解を解く。
- それぞれの分野への自分の向き・不向きの判断の材料を得る
　（あくまで「材料」に過ぎませんが）。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　具体的な謎の解明を通して、言語科学の様々な分野を紹介します。
　基本的には講義です。
　リアクションペーパーを募りますが、特に重要なものには口頭でのフィードバックを行う予定です。
　学生の理解度や要望などに応じて、スケジュールは柔軟に変えたいと思います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入、および「音素」その１（音声学・音韻論）	この授業の紹介、および、*party* はカタカナで何と言うべき？
第2回	「音素」その２（音声学・音韻論）	英語には日本語流の「長母音・短母音」は存在しない、その他
第3回	「音節」その１（音声学・音韻論）	アメリカ人いわく、「英単語のカタカナ発音をするのは、つらい」……なぜ？
第4回	「音節」その２（音声学・音韻論）	英語にも存在する母音挿入
第5回	日本語動詞（形態論）	日本語における「規則動詞」と「不規則動詞」
第6回	今日の文法理論その１（統語論）	統語論「研究」実体験：日本語を例として
第7回	今日の文法理論その２（統語論）	「５文型」の不適切さ、X-bar Theory
第8回	今日の文法理論その３（統語論）	英語の「動詞句」って何だろう？そんなもの、本当に native speaker の頭の中にあるの？
第9回	今日の文法理論その４（意味論・語用論）	英語の進行形の基本的意味
第10回	今日の文法理論その５（意味論・語用論）	なぜ進行形で丁寧さが出せるか
第11回	人間はどのように文を理解するか（心理言語学）	*Without her contributions failed to come in.* ってどういう意味？ ……「文の曖昧さ」およびそれへの対処
第12回	人間はどのように文を理解するか（心理言語学）	実験方法、そして人間の文処理の方式の理由
第13回	言語習得（心理言語学）	言語生得説、そして U-curve development
第14回	まとめ	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　リアクションペーパー。また、授業で学んだ方法論を、自分の身近な問題に応用して考えてみましょう。
　なお本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　学習支援システムにて教材を配布します。

【参考書】
　参考書は適宜指示。

【成績評価の方法と基準】
　期末試験、100％。
　公平性を最重視するので、個人的な事情は一切考慮しません。
　但し、授業外での実験参加による加点が行なわれる場合があります（純粋加点であり、参加なしの人への減点はありません）。

【学生の意見等からの気づき】
　割と良い評価をいただけたと思うのですが、理解度はもっと上げたいと思います。

【その他の重要事項】
　この授業は『言語学概論Ｂ』とは独立していますが、両方とも合わせて受講することをお勧めします。

【Outline (in English)】
（Course outline）An introduction to linguistic sciences for novice.
（Learning Objectives）To clear up common misconceptions concerning language, and to get a feel of how research in each of the fields is typically conducted.
（Learning activities outside of classroom）Reaction papers
（Grading Criteria /Policy）Final (100%)

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

言語学概論Ｂ

石井　創

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業の内容は、「『経験科学』」としての言語学入門」である。統語論・形態論・意味論・音声学・音韻論といった理論言語学の諸分野について、主要な研究トピックを紹介しながら、それぞれの基礎知識を説明していく。そして受講者に、その紹介を学位論文のための研究トピックを探すのに活用してもらうこと、そして「理論言語学が科学方法論に基づいた学問である」ことを再認識してもらうことが授業の目的である。

【到達目標】
１．言語学の各分野のうち、自分の専門ではないものについて、その基礎知識を理解できる
２．言語学で自分が専門とする分野における主要な研究トピックを具体的に説明できる
３．研究計画を経験科学の手続きに則って正しく作成できる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
１．形態
教室での「対面授業」を毎回実施する予定ですが、諸事情により部分的に「オンライン授業」を実施する場合がありえます。
２．進め方
講義形式が基本となりますが、内容理解を助けるために、受講者が授業内や宿題で練習問題を解く機会も適宜設けていきます。
教員は具体的な言語現象とそれにまつわる謎を提示しながら、その謎に対する答えを出すのに必要な基礎的な知識を説明していきます。しかし、教員が教える答えはいずれも「仮説」であり、「正解」ではありません。受講者は教えられた答えを鵜呑みにせず、そのもっともらしさを自分で疑う姿勢を大切にし、その姿勢によって得られた疑問点や不明点を授業内の質疑応答やリアクションペーパーで積極的に発信することが望まれます。また、リアクションペーパーで得られた面白い質問や意見は、時間の許す限りその後の授業内で紹介して、授業における話題や議論を広げるのに役立てていきます。
なお、受講者の理解度などに応じ、説明にかける授業の回数等は柔軟に調整します。よって、以下の授業計画は参考例となります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概要説明、「言語学って何をするの？」、「語学と違うの？」、「言語学が科学？」
第2回	理論言語学とは？	下位分野とそれぞれで扱われる謎の種類
第3回	言語理論と言語観の変遷１	Saussure ～アメリカ構造主義言語学
第4回	言語理論と言語観の変遷２	Chomsky ～認知言語学
第5回	形態論１	語の内部構造と形態素
第6回	形態論２	語形成（派生と屈折）
第7回	音声学１	音声産出と子音・母音の体系
第8回	音声学２	異なる子音・母音の聞き分けとその手がかり
第9回	言語学と科学方法論	言語研究における問い・仮説・予測・データの関係
第10回	統語論１	句構造と X-bar Theory
第11回	統語論２	句構造から文構造へ（生成文法における「移動」）
第12回	意味論１	意味の記述と語彙分解
第13回	意味論２	述語のアスペクト
第14回	音韻論	音節とモーラ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業１回あたりの標準の準備・復習時間は、各２時間とします。
１．準備
事前配布されるその授業日のハンドアウトにあらかじめ目を通しておくと、その日の授業内容の理解の助けになるでしょう。また、前回の授業内容を理解していることを前提にその日の授業は行われます。よって、例えば統語論の回なら、それ以前の統語論の授業内容を見直す、というように、授業前にそれ以前の関連内容を思い返す作業を必ず行ってください。
２．復習（宿題、その他応用学習も含む）
その日の授業内容をハンドアウトやノートを用いて整理し、さらに宿題が課されていた場合はそれに取り組んでください。そして、これらの過程で疑問点・不明点が出てきたら、ハンドアウトの引用文献に当たるなど、まずは自分で答えを出す努力をしてみてください。その成果をリアクションペーパーや授業後の質問などにて教員に示してもらえれば、こちらもそれに対してさらなるリアクションをいたします。また、授業で出てきた言語現象と似たものを日々の生活の中で見つけたら、授業で学んだ方法でその現象について考えてみる習慣を身に付けていただきたいです。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用せず、代わりに適宜ハンドアウトを配布します。授業日の前にその日に使用するハンドアウトの PDF ファイルを学習支援システムにアップロードしますので、受講者は必ず各自でファイルを事前にダウンロードし、手元に用意した状態で授業に臨んでください。なお、ハンドアウトに直接書き込みをしたい人は、紙に印刷するか、もしくはファイルに直接書き込みができるタッチペン等のデバイスを用意してください。

【参考書】
参考書は授業内で必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
１．期末試験：100%
最終授業後の定期試験期間に実施します。
２．プラスアルファの加点
上記の通り、本科目の成績は期末試験による一発勝負での評価となりますが、それに加え、下記の項目を満たした受講生には若干の加点をいたします。
(a) リアクションペーパーや質疑応答などで、授業内容に対し良い質問やコメントを行った者
(b) 授業外で学内教員の実施する実験に参加した者
３．出席の確認
授業では出席を取りません。また、リアクションペーパーは出席票ではなく、授業の内容や方法に対して受講者が意見・質問・希望などを記すものであり、「出さないと減点される」という類のものではありません。

【学生の意見等からの気づき】
１．昨年度は「内容が面白い」、「説明がわかりやすい」等の好意的な感想を一昨年度よりも多くもらうことができ、一昨年度からのハンドアウトや説明方法の改善の効果を実感できた。他方で、「話を聞くだけのことが多く、どうしても眠くなってしまった」という意見もいただいたので、練習問題の提示方法・頻度や下記のコメントアプリの使い方などをもう一度見直して、受講生が自分で手を動かしながらより主体的に学べるように授業の進め方を工夫したい。
２．本科目では、受講生が授業中にスマホや PC から送信したコメントが教室内スクリーン上に匿名で流れるアプリを導入しているが、昨年度は受講生がアプリでコメントを送信する頻度が一昨年度よりも大幅に減ってしまった。教員・学生間の双方向の自由な意見交換や受講生の理解度確認のために、コメントアプリの授業における使用実例等を参考にして、学生が気軽にコメントを送信できる環境作りを進めたい。

【学生が準備すべき機器他】
「オンライン授業」が実施される場合、受講生は以下の機器・環境を準備する必要があります。
(a) 双方向通信アプリの Zoom を使用できるデバイス
(b) Zoom によるリアルタイム配信授業の視聴が可能なインターネット回線

【その他の重要事項】
学習支援システムからの授業や期末試験などに関するお知らせメールをきちんと受け取れるように、法政 Gmail の設定を行っておいてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
心理言語学、理論言語学、日本語学
＜研究テーマ＞
テンス・アスペクトの意味論・統語論および実時間における意味処理
＜主要研究業績＞
Ishii, S., &Ishikawa, K. (2016). The bi-directionality and the graded nature of aspectual coercion: An eye tracking study. The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers IEICE Technical Report, Vol. 116, No. 159, pp. 43-48.
石井創・石川潔 (2014).「意味カテゴリーは離散か連続か―アスペクトの実時間処理に基づく検討―」、『日本認知科学会第 31 回大会発表論文集』、pp. 318-324.
石井創・石川潔 (2010).「状態述語化と従属節時制の解釈」、『日本語文法』 10 (2)、pp. 109-125.

【Outline (in English)】
1. Course outline
This is an introductory course on linguistics as an empirical science. It covers main areas of linguistics (e.g., syntax, morphology, semantics, phonetics, and phonology) and gives basic knowledge and illustrates specific research topics in these areas. This course aims to help students find a research topic for their theses and reaffirm that theoretical linguistics is a discipline based on the scientific method.
2. Learning objectives
In this course, students are expected to acquire the following ability:
(a) to understand basic knowledge in each linguistic field that is not their area of expertise.
(b) to illustrate major research topics in their linguistic field of expertise.
(c) to make a research proposal based on the general procedure of empirical science.
3. Learning activities outside of classroom
Preparatory study and review time for this course are 2 hours each.
(a) Preparation

Before each class meeting, take a look at the handout to be delivered beforehand. In addition, you should also refresh your memory of the contents of the previous class meeting that are related to the upcoming meeting.
(b) Review
You should reflect on what you have learned in the classroom, and work on the assignment if any. If you encounter a problem, you should first tackle it yourself, and let me know the results, however imperfect they are; I will then give a feedback to your attempt. Furthermore, employ the analysis methods you have learned to solve the problem you encounter in your daily life that is similar to the phenomenon taken up in the class.
4. Grading Criteria /Policy
Term-end examination: 100%

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

英語学演習（英語史・言語変化理論）A

福元　広二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
英語がどのようにして世界中で使用されるようになり、世界共通語となってきたかを解説します。また、語用論的な視点から英語史を学ぶことで、現代の英語に対してさらに理解を深めることを主な目的としています。

【到達目標】
英語史における語用論的分析について説明できるようになります。語用論について書かれた文献をきちんと正確に読めるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に関心のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。
　リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業内容の紹介
第2回	教科書　Chapter 1 歴史語用論の概要	pp.1-7
第3回	教科書　Chapter 1 歴史語用論の範囲	pp.8-12
第4回	教科書　Chapter 2 歴史語用論のデータ	pp.13-18
第5回	教科書　Chapter 2 歴史語用論の最近の傾向	pp.19-30
第6回	教科書　Chapter 3 歴史語用論の方法論	pp.31-43
第7回	教科書　Chapter 3 歴史語用論の応用	pp.44-52
第8回	教科書　Chapter 4 談話標識の分析	pp.54-63
第9回	教科書　Chapter 4 間投詞の分析	pp.64-72
第10回	教科書　Chapter 5 中英語の呼びかけ語	pp.73-79
第11回	教科書　Chapter 5 近代英語の呼びかけ語	pp.80-91
第12回	プレゼンテーション(1)	論文紹介（1）
第13回	プレゼンテーション(2)	論文紹介（2）
第14回	春学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に教科書を読んで、予習をしてください。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
（英文学専攻）Jucker Andreas and Irma Taavitainen (2013) English Historical Pragmatics. (Edinburgh University Press)

【参考書】
適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
平常点とレポートで総合的に評価します。（平常点60点、レポート40点）

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
英語学・英語史
＜研究テーマ＞
初期近代英語期の文法
＜主要研究業績＞
「第6章　Shakespeareの英語」
『英語教師のための英語史』
開拓社 (2018)

【Outline (in English)】
The purpose of this course is to introduce the major changes in English grammar from Old English to Present-day English. The goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand the history of the English language. Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
Final grades will be calculated according to the following process:
Mid-term report (40%) and in-class contribution (60%)

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

英語学演習（英語史・言語変化理論）B

片見　彰夫

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、語用論（pragmatics）を中心とする英語学演習科目です。語用論は、発話が置かれる文脈、話し手の意図、聞き手との関係、社会的・文化的規範などを考慮しながら、言語の意味と機能を分析する言語学分野です。本授業では、発話行為理論、含意、前提、指示表現、ポライトネス、ディスコースといった語用論の主要概念を体系的に学びます。教科書『はじめての語用論』を基礎として、関連の英語論文を読み、発表を行います。英語の具体的な使用例を分析する演習を行い、受講生が「文の意味」と「発話の意味」の違いを理論的に理解し、説明できるようになることを目的としています。英語を実際に使われる言語として捉える視点を養うことが、本授業の意義となります。

【到達目標】
語用論の主要概念（発話行為、含意、前提、ポライトネス等）を説明できるようになります。
文脈を考慮して英語の発話の意味を分析できるようになります。
英語の具体的使用例を理論に基づいて解釈できるようになります。
語用論的分析結果を論理的に説明できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義と演習を組み合わせて授業を進めます。各回、教科書の該当章に基づく理論解説の後、英語の会話例や文章例を用いた分析演習を行います。また関連する英語論文を読解し、担当者はレポートを行います。受講者は発表やグループディスカッションを通じて語用論的解釈を検討し、教員から随時フィードバックを受けることになります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション 教科書　第1章語用論とは何か	コンテクスト、言語学における語用論の勃興と発展等pp.1-23
第2回	教科書　第2章　グライス語用論	言われた事柄と推意された事柄、会話的推移等pp.24-40
第3回	教科書　第3章　情報語用論	2種の情報構造、語用論的機能等　pp.41-56
第4回	教科書　第4章　対人語用論	なぜポライトネスか？、コミュニケーション、言語ゲームへのアプローチ等　pp.57-76
第5回	教科書　第5章　指示語用論	ダイクシス表現、人称ダイクシス等　pp.77-92
第6回	教科書　第6章　言語行為論	言語行為論の成立、言語行為論の現在等　pp.93-108
第7回	教科書　第7章　関連性理論	関連性と発話解釈、アドホック形成概念等　pp.109-124
第8回	教科書　第8章　認知言語学と語用論	認知言語学の考え方、カテゴリー化とプロトタイプ等 pp.125-140
第9回	教科書　第9章　文法研究と語用論	語用論的な文法研究の歴史、文法の中に潜む語用論等 pp.141-157
第10回	教科書　第10,11章　会話分析、メタ語用論	会話分析の方法論、談話標識等 pp.158-193
第11回	教科書　第12章　歴史語用論	歴史語用論の方向性、マクロの視点とミクロの視点等 pp.194-210
第12回	プレゼンテーション	受講生自らが、指定された論文の紹介と解説を行う（1）
第13回	プレゼンテーション	受講生自らが、指定された論文の紹介と解説を行う（2）
第14回	秋学期のまとめ	1．既習事項の補足とまとめを行う。 2．受講生が自ら取り組んでいる関連研究を紹介する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
加藤重弘・澤田淳 (2020)『はじめての語用論』研究社

【参考書】
適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
レポート課題：40％
発表：30％
平常点（討論・演習への参加）：30％

【学生の意見等からの気づき】
初年度のため、記入不可。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
英語学基礎科目の履修が望ましいです。
生成AIは、構想や分析補助に限り使用可とし、提出物では必ず明示すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞英語史・英語学・文体論
＜研究テーマ＞中英語から、近代英語における文体と文法
＜主要研究業績＞第1章『近代英語における文法的・構文的変化』開拓社(2023)
編著『英語教師のための英語史』開拓社（2018)

【Outline (in English)】
(Course outline) This seminar introduces core concepts of pragmatics, focusing on how meaning is constructed through context, speaker intention, and interaction. Students analyze English data based on fundamental pragmatic theories.
(Learning Objectives) By the end of the course, students should be able to:
explain key concepts and theories in pragmatics,
analyze English utterances in relation to context and interaction,
apply pragmatic concepts to real examples of language use.
(Learning activities outside of classroom) Students are expected to read assigned chapters from the textbook and complete preparatory and review tasks. Required study time is more than four hours per class meeting (two-credit course).
(Grading Criteria /Policy) Final grades will be based on written assignments, presentations, participation in discussion, and a final report.

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

言語学演習（応用言語学）A

川﨑　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
音声/音韻に関する論文・本を読み、発表することにより、理論についての理解を深め、問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる力を身につけることを目的とする。

【到達目標】
本授業では、特に音韻分野の第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
論文を読み、毎回全員で発表・議論する演習方式で行う。主に音声・音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。
授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	リサーチメソッド・授業プランの作成	課題論文リストの提示と概要の説明
3	音声言語習得研究	音声の第一言語習得と第二言語習得
4	第二言語習得の理論	音韻習得理論を取り上げ、概要を紹介する
5	SLA Phonology 論文発表（1）	SLA Phonology 論文発表と分析手法について
6	SLA Phonology 論文発表（2）	分析手法について・演習
7	研究計画発表1	修士2年生による研究テーマ発表
8	研究計画発表2	修士1年生による研究テーマ発表
9	エラーに関する研究	エラーのタイプについての分析
10	処理可能性理論（1）	処理可能性理論についての概要、理論の説明
11	処理可能性理論（2）	処理可能性理論に関する論文発表
12	履修者等による発表（1）	レビュー論文
13	履修者等による発表（2）	履修者等による論文のポスター発表（1）
14	履修者等による発表（3）	履修者等による論文のポスター発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で必要に応じて論文を指定する。

【参考書】
授業内でその都度、指定する。

【成績評価の方法と基準】
＜修士課程学生＞
授業での議論への参加：40%
授業内発表：40%
研究計画書：20%

【学生の意見等からの気づき】
学生の研究発表の時間を多くとりたいと考えている。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　音韻論、第二言語習得
＜研究テーマ＞　音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など
＜主要研究業績＞
川﨑貴子・田中邦佳「L 2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)
川﨑貴子 「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)
Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Through reading Phonetics/Phonology papers, students will learn how to set their research theme and test their hypotheses.
Learning Objectives: This course aims to deepen the student's understanding of theories of SLA and research methodologies in the field and help them to find their research topics.
Learning activities outside the classroom: Students must read the assigned papers before class. Students are required to study for about 4 hours outside of the classroom.
Grading Criteria:
In-class participation: 40%
In-class presentation：40%
Research abstract：20%

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

言語学演習（応用言語学）B

川﨑　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の、特に音韻・音声習得の研究論文を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる理論、研究法を学ぶ。

【到達目標】
ー音韻論、及びSLAの音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法についての知識を身に付ける。
ー自らの研究計画を策定、研究を遂行し、論文の執筆に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などを学ぶ。
授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容の説明
2	修士２年生の研究発表（１）	研究の進捗状況発表（修士２年生）（１）
3	修士２年生の研究発表（２）	研究の進捗状況発表（修士２年生）（２）
4	修士１年生の研究発表（１）	研究の進捗状況の発表（修士１年生、および研修生）（１）
5	修士１年生の研究発表（２）	研究の進捗状況の発表（修士１年生、および研修生）（２）
6	論文購読ー母語音声の影響に関する論文	母語の目録のL2への影響（解説）
7	論文購読ー母語音声の影響(研究方法)	母語の目録のL2への影響（履修者等による発表）(1)
8	論文購読ー母語音声の影響（分析方法・結果記述）	母語の目録のL2への影響（履修者等による発表）(2)
9	論文購読ー音韻・語彙習得	語彙の特定と音韻処理ー（履修者等による発表）(1)
10	論文購読ー音韻・語彙習得（研究手法）	語彙の特定と音韻処理ー（履修者等による発表）(2)
11	論文購読ー音韻・語彙習得（分析）	語彙の特定と音韻処理ーデータ分析演習
12	修士１年生による修論計画発表	修士１年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表
13	修士２年生による修論発表	修士２年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】
必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
＜修士課程＞
授業発表....40%
授業内での発言・議論への貢献....40%
学期末論文・研究計画書....20%

【学生の意見等からの気づき】
引き続き理解を確認しつつ、授業を進めてまいりたいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　音韻論、第二言語習得
＜研究テーマ＞　音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など
＜主要研究業績＞
川﨑貴子・田中邦佳「L２英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)
川﨑貴子 「カタカナ代用による第２言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)
Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Through reading papers on phonological and phonetic acquisition, students will learn theories and research methods that will form the basis of their own papers.
Learning Objectives:
-To acquire knowledge of research methods in the field of second language acquisition and teaching, while reading basic literature in the field of phonology and SLA phonology and vocabulary.
-Students will be able to formulate their own research plan, conduct research, and produce a thesis.
Learning activities outside of classroom ： Students are required to read assigned papers and prepare for their presentations. Students are expected to study at least 4 hours outside of classroom.
Grading Criteria:
In-Class presentations....40%
In-Class participation....40%
Term paper....20%

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

言語学特殊研究（理論言語学・認知科学） A

石川　潔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アスペクトに関する第２言語習得研究
＜講義題目＞アスペクトに関する第２言語習得研究

【到達目標】
実験研究の技法と報告の仕方、およびアスペクトの諸理論とその習得の先行研究の入門的知識を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
文献の輪読と講義を組み合わせる予定です。
発表に対してコメントを返します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業内容とやり方の説明
第2回	multidimensional scaling	基本的な考え方および問題点
第3回	アスペクトの実時間処理の文献１	問いの設定
第4回	アスペクトの実時間処理の文献２	実験１など
第5回	アスペクトの実時間処理の文献３	全体の考察
第6回	英語の完了形と日本語の「ている」	テンスなのか、アスペクトなのか（特に perfective vs. imperfective や Reichenbach 理論との関連において）
第7回	習得についてのアスペクト仮説１	アスペクト仮説の文献輪読１
第8回	習得についてのアスペクト仮説２	アスペクト仮説の文献輪読２
第9回	習得についてのアスペクト仮説３	アスペクト仮説の文献輪読３
第10回	Vendler 分類についての再考	Whether the classification should be seen in terms of lexical items or in terms of compositional phrasal semantics
第11回	日本語のアスペクトの分析１	先行研究のまとめの文献の輪読１
第12回	日本語のアスペクトの分析２	先行研究のまとめの文献の輪読２
第13回	日本語のアスペクトの分析３	先行研究のまとめの文献の輪読３
第14回	まとめ	今後の研究に向けての指針の議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
指定された文献を読んで発表の準備をしてください。
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で適宜、指示します。

【参考書】
授業にて適宜、指示。

【成績評価の方法と基準】
授業での議論への参加：50％
授業内発表：50％

【学生の意見等からの気づき】
N/A。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）
＜研究テーマ＞音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係
＜主要研究業績＞http://www.i.hosei.ac.jp/ kiyoshi/research.html を参照。

【Outline (in English)】
（Course outline）Introduction to L2 research on aspect
（Learning Objectives）To gain (1) very introductory skills for designing and reporting an experimental study, and (2)introductory knowledge of theories of aspect as well as past research on its acqusition.
（Learning activities outside of classroom）Preparation for presentations in class by working through assigned readingss.
（Grading Criteria /Policy）Participation (50%), presentations (50 %).

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

言語学特殊研究（理論言語学・認知科学）B

石川　潔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
外国語教育や音声学は昔から実験科学分野だが、近年は統語論研究においても実験研究への志向が見られる。しかし、実験計画法や（実験データの処理のための）統計学は、日本の言語学教育の一部になっているとは言いがたい。よって、教育・音声・統語解析・理論言語学を専門とする皆様のために、実験データ分析の中級レベルの導入を行いたい。
＜講義題目＞心理言語学データの分析法（中級編）

【到達目標】
本来このような大学院科目は、履修者のニーズに応じて内容自体を変えるべきであり、具体的に何を目指すかは履修者の希望と照らし合わせて決定する。しかし今回は、履修者ニーズがある読めているため、混合効果一般化線形モデルの入門とする。到達目標は以下の通り：
・正規分布しないデータ（特定の選択肢の「選択率」やコーパスでのカウント数など）を一般化混合モデルで分析できるようになること。
・伝統的な分散分析では扱えない、実験参加者に加えて言語刺激についても一般化が必要になる通常の心理言語学実験のデータを、混合効果モデルで分析できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
以下の授業計画は例示に過ぎない。履修者の理解度などに応じて変更があり得る。
試験（練習問題を含む）に際しては、模範解答、講評などのフィードバックを与える予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	環境整備	統計環境 R の導入
2	モデルの構築という考え方	線形回帰、およびその統計量の意味
3	線形回帰モデルの構築法	最小二乗法、最尤法
4	重回帰分析の基礎１	複数の変数による予測
5	重回帰分析の基礎２	モデル全体としての予測と、個々の予測変数の寄与度との、違い
6	重回帰分析の基礎３	モデル間の比較による、個々の予測変数の寄与度の評価
7	重回帰分析の基礎４	分布に関する前提
8	線形モデル	伝統的な分散分析や *t* 検定の、線形回帰モデルとしての表現
9	選択率データの分布	２項分布、arcsine square-root transformation、logit transformation
10	ロジスティック回帰１	ロジット及びロジスティック関数、線形予測子、リンク関数、separation
11	混合効果モデル１	固定因子および変量因子の概念
12	混合効果モデル２	subject analysis と item analysis
13	混合効果モデル３	変量因子にもとづく傾き・切片
14	この先の勉強に向けて	分布のシミュレーション、ベイズ統計学に向けて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい（わからない箇所は教員または周囲に尋ねること）。
また、
・実験技法を学んだら、同じ（または似た）技法を使った他の論文を自分で読んでみる。
・統計技法を学んだら、同じ（または似た）技法を使った他の論文を自分で読んでみたり、自分の手持ち（または架空）のデータを分析してみる。
といった作業を行うと良いでしょう。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.
久保拓弥 (2012).『データ解析のための統計モデリング入門―一般化線形モデル・階層ベイズモデル・MCMC』東京：岩波書店.
Sonderegger, M. 2023. *Regression Modeling for Linguistic Data*. MIT Press.
Windter, B. 2019. *Statistics for Linguists: An Introduction Using R*. Routledge
その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】
平常点 50 %、学期末試験 50 %

【学生の意見等からの気づき】
N/A.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）
＜研究テーマ＞　音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係
＜主要研究業績＞
http://www.i.hosei.ac.jp/ kiyoshi/research.html を参照。

【Outline (in English)】
(Course outline)
An intermediate-level course on statistical analysis of experimental data.
(Learning objectives)
Generalized liner mixed-effects model building for data not normally distributed on the one hand, and for linguistics data that need generalizations not only over participants but also stimuli.
(**Learning activities outside of classroom**)
Read papers employed those techniques taught, and try analyzing (possibly fake) data using them.
(**Grading Criteria /Policy**)
In-class participations 50 %, final exam 50%

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

英語教育学研究Ａ

印南　洋

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
＜講義題目＞Second language acquisition and pedagogy
This course introduces some stimulating issues on second language acquisition and pedagogy. In particular, it focuses on the questions that people often have about language learning. The students will also examine and discuss various issues in in L2 situations.

【到達目標】
In this course, students will learn about (1) second language acquisition and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context. Through discussions after reading the course textbook and handouts, students will acquire a deeper understanding of these two issues. Repeating this process throughout the semester will help students develop their understanding of second language education and its application to pedagogy better, based on empirical evidence.
By the end of this course, students will be able to better understand (1) second language acquisition and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Most classes consist of lectures, group discussions, and student presentations on topics in second language acquisition and pedagogy. Students are assigned readings from the textbook chapters. リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	Introduction; Literature search	Overview of the course and presentation schedule; Literature search using digital and library resources
第2回	第1章SLA研究から考える英語学習の大原則	臨界期仮説、インプット仮説
第3回	第2章単語の学習	頻度、語曲知識の深さ
第4回	第3章文法の学習	インテイク、宣言的知識・手続き的知識
第5回	第4章発音の学習	スキル習得理論、明瞭性・理解
第6回	第5章リスニングの学習	音声知槌、意味理解
第7回	第6章リーデイングの学習	パラグラフ、和訳
第8回	第7章スピーキングの学習	整合性、プラニング
第9回	第8章ライティングの学習	独り言、流暢性
第10回	第9章英語学習と個人差	註語適性、ワーキング・メモリ
第11回	第10章動機づけ・学習スタイル・学習ストラテジー	個人差、やる気
第12回	第11章子どもの英語学習	日本語能力、ESL・EFL現境
第13回	第12章留学による英語学習	流暢さ、ホームステイ
第14回	Student presentation	Presentation and feedback

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
Before attending the class every week, students are required to read the assigned chapter of the textbook and write a reaction paper.

【テキスト（教科書）】
中田達也 &鈴木祐一. (2022).『英語学習の科学』. 研究社. ISBN-10: 4327453072

【参考書】
Joy Reid with Keith S. Folse, Cynthia M. Schuemann, Pat Byrd and John Bunting, Ken Hyland, Dana Ferris, Susan Conrad, Sharon Cavusgil, &Paul Kei Matsuda. (2008). *Writing myths: Applying second language research to classroom teaching*. ISBN 978-0-472-03257-0
Keith S. Folse. (2004). *Vocabulary myths: Applying second language research to classroom teaching*. ISBN 978-0-472-03029-3
望月昭彦、磐崎弘貞、卯城祐司、久保田章(著). (2010).『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』. 大修館書店. ISBN: 978-4469245585
Patsy M. Lightbown &Nina Spada. (2013). *How languages are learned* (4th edition.). Oxford University Press.
Steven Brown. (2011). *Listening myths: Applying second language research to classroom teaching*. ISBN 978-0-472-03459-8

【成績評価の方法と基準】
Reaction paper (60%); Chapter presentation (10%); Student project (30%)

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし
Feel free to ask questions. I look forward to working with you.

【その他の重要事項】
今までの履修者には、社会人や他大学からの受講生もいらっしゃいました。多様な形式で学びを促進できればと思い、本授業は全回とも対面でなくオンライン形式となります。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
Applied linguistics, language education, language testing, and program evaluation
＜研究テーマ＞
Test method effects on test performance
Construct validation study of a test/instrument/questionnaire
Meta-analytic inquiry into the variability of effects
Longitudinal measurement of change in language proficiency and program evaluation
Secondary analysis of survey and administrative datasets
Application of measurement models to language test data (especially, meta-analysis and structural equation modeling)
＜主要研究業績＞
In'nami, Y., &Koizumi, R. (2013). Statistics and software for test revisions. In A. Kunnan (ed.), *Companion to language assessment (Vol. II: Approaches and Development, Part 7: Assessment Development* (pp.925 – 943). New York: Wiley-Blackwell.
卯城祐司編著。『英語リーディングテストの考え方と作り方』。共著(第5章 テスト得点解釈の留意点 [pp. 78-87]を担当)。平成24年9月。研究社。
竹内理・水本篤編著。『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』。共著 (第14章SEM入門 [pp. 194-206]、第16章 メタ分析入門 [pp. 227-239]を担当)。平成24年5月。松柏社。

【Outline (in English)】
＜講義題目＞Second language acquisition and pedagogy
This course introduces some stimulating issues on second language acquisition and pedagogy. In particular, it focuses on the questions that people often have about language learning. By the end of this course, students will be able to better understand (1) second language acquisition and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context. Before attending the class every week, students are required to read the assigned chapter of the textbook and write a reaction paper. Grading will be decided based on: Reaction paper (60%); Chapter presentation (10%); and Student project (30%).

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

英語教育学研究Ｂ

印南　洋

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
＜講義題目＞Language testing and assessment
This course is mainly provided for student teachers to give an insight into how to evaluate learner knowledge and performance in L2 education. The course also introduces some stimulating issues on second language testing and assessment. In particular, it focuses on the questions that people often have about language testing and assessment. The students will also examine, discuss, and create types of assessing practices in L2 situations.

【到達目標】
In this course, students will learn about (1) language testing and assessment and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context. Through discussions after reading the course textbook and handouts, students will acquire a deeper understanding of these two issues. Repeating this process throughout the semester will help students develop their understanding of language testing and assessment and its relationship with pedagogy better, based on empirical evidence. By the end of this course, students will be able to better understand (1) language testing and assessment and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Most classes consist of lectures, group discussions, and student presentations on topics in language testing and assessment. Students are assigned readings from the textbook chapters. リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	Introduction; Literature search	Overview of the course and presentation schedule; Literature search using digital and library resources
第2回	第1章外国語評価リテラシー	評価リテラシーの重要性
第3回	第1章外国語評価リテラシー	学習者による評価活動
第4回	第2章テスト作成に関わるリテラシー	テストで測る力
第5回	第2章テスト作成に関わるリテラシー	筆記テストの作り方
第6回	第3章テスト実施と採点に関わるリテラシー	コンピュータを用いたテスト
第7回	第3章テスト実施と採点に関わるリテラシー	AIを使ったスピーキングテスト
第8回	第4章テスト結果の分析と活用に関わるリテラシー	筆記テストの結果を分析するには
第9回	第4章テスト結果の分析と活用に関わるリテラシー	テスト(調査)結果の読み解き方
第10回	第5章外国語評価リテラシーを高めよう	外国語評価リテラシーの向上に役立つリソース
第11回	第5章外国語評価リテラシーを高めよう	オープンサイエンスの基礎知識
第12回	第6章テストを効果的に使うために	テスト受験者の権利と責任
第13回	第6章テストを効果的に使うために	プラスの波及効果を起こすための計画と行動
第14回	Student presentation	Presentation and feedback

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
Before attending the class every week, students are required to read the assigned chapter of the textbook and write a reaction paper.

【テキスト（教科書）】
『高めよう！ 外国語評価リテラシー～英語力の測り方から指導改善まで～』
(Enhancing Foreign Language Assessment Literacy: Concepts, Design, and Use for Better Teaching and Testing).
小泉利恵・濱田 彰 編。2026年4月に大修館書店から発行予定。

【参考書】
J. Charles Anderson, Caroline Clapham, and Dianne Wall. (2001). *Language test construction and evaluation*. Cambridge University Press. ISBN: 978-0521478298
小泉利恵、印南洋、深澤真 (編著). (2017). 『実例でわかる英語テスト作成ガイド』. 大修館書店. ISBN: 978-4469246100
望月昭彦, 深澤真, 印南洋, 小泉利恵 (編著). (2015). 『英語4技能評価の理論と実践: CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで』. 大修館書店. ISBN: 978-4469245912

【成績評価の方法と基準】
Reaction paper (60%); Chapter presentation (10%); Student project (30%)

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし
Feel free to ask questions. I look forward to working with you.

【その他の重要事項】
今までの履修者には、社会人や他大学からの受講生もいらっしゃいました。多様な形式で学びを促進できればと思い、本授業は全回とも対面でなくオンライン形式となります。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
Applied linguistics, language education, language testing, and program evaluation
＜研究テーマ＞
Test method effects on test performance
Construct validation study of a test/instrument/questionnaire
Meta-analytic inquiry into the variability of effects
Longitudinal measurement of change in language proficiency and program evaluation
Secondary analysis of survey and administrative datasets
Application of measurement models to language test data (especially, meta-analysis and structural equation modeling)
＜主要研究業績＞
In'nami, Y., &Koizumi, R. (2013). Statistics and software for test revisions. In A. Kunnan (ed.), *Companion to language assessment (Vol. II: Approaches and Development, Part 7: Assessment Development* (pp.925 – 943). New York: Wiley-Blackwell.
卯城祐司編著。『英語リーディングテストの考え方と作り方』。共著(第5章 テスト得点解釈の留意点 [pp. 78-87]を担当)。平成24年9月。研究社。

竹内理・水本篤編著。『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』。共著 (第14章SEM入門 [pp. 194-206]、第16章 メタ分析入門 [pp. 227-239]を担当)。平成24年5月。松柏社。

【Outline (in English)】

＜講義題目＞Language testing and assessment

This course is mainly provided for student teachers to give an insight into how to evaluate learner knowledge and performance in L2 education. The course also introduces some stimulating issues on second language testing and assessment. In particular, it focuses on the questions that people often have about language testing and assessment. The students will also examine, discuss, and create types of assessing practices in L2 situations. By the end of this course, students will be able to better understand (1) language testing and assessment and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context. Before attending the class every week, students are required to read the assigned chapter of the textbook and write a reaction paper. Grading will be decided based on: Reaction paper (60%); Chapter presentation (10%); and Student project (30%).

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

英語発音法Ａ

髙橋　豊美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。
＜講義題目＞
英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】
　分節音の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。
(A) 分節音の体系、分布、音声変化について、理論的に説明できる。
(B) 発話を聞いて、分節音を発音記号で正確に書き取ることができる。
(C) 発音記号を適切な発音で読むことができる。
(D) 与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業では、英国標準英語を主な対象とし、個々の分節音の調音的・音響的特徴、分節音の体系について学んだ上で、授業計画に示すように分節音がかかわるさまざまな音声現象の仕組みを理解する。【到達目標(A)】
　配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取り、発音記号による発話モデルの作成などの練習などを行う。【到達目標(B)(C)】
　課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。この課題については、返却時にコメントを付し、また、返却後の授業で全体的なフィードバックを行う。【到達目標(D)】
　リアクションペーパーは学習支援システムで回収し、個別のフィードバックは同システムで、全体に共通するフィードバックは授業で行う。
　授業は対面で実施する予定であるが、台風等の影響がある場合や感染症が拡大している場合は、ビデオ会議システム（Zoom）と学習支援システム（Hoppii）を併用したオンライン授業に切り替えて実施するので、授業前に学習支援システムのお知らせを確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第01回	授業案内	授業の概要／参考文献／分節音の関わる現象について／課題1
第02回	音声の基礎、母音	発声の仕組み／英語音声の調音的特徴／課題2
第03回	子音、音素論	音声の分類／分節音と超分節音／リズムの基本単位／課題3
第04回	音節の機能、構造	音節現象／音節構造と音声分布／課題4
第05回	音節現象	音節区分／音節子音／中和／音節圧縮／課題5
第06回	音節とリズム	語の分類と強勢／引用形と弱形
第07回	母音の変化	機能語の弱形／課題6
第08回	弱形	音声変化の概要／子音の分布／語境界の音の連結／課題7
第09回	分節音現象	子音現象（脱落・同化・挿入）／課題8
第10回	連結、脱落	母音現象（接続）／諸アクセントにおける r の分布／課題9
第11回	交替、挿入、短縮	歯茎破裂音の挿入／硬音前母音短縮／課題10
第12回	地域的な音声変化	諸アクセントにおける母音体系／声門音化
第13回	総括	歯茎破裂音の挿入・脱落／阻害音の無声化／まとめと考察
第14回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を目安とする。
　資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。また、授業を受けた後で学習内容を振り返り、知識の定着を図ること。【到達目標(A)】
　授業では、学んだ知識を実践に活かすための発音・聴き取りの練習を行う。授業を受けた後で、要点を確認しながら練習を重ねて技術の向上を目指すこと。【到達目標(B)(C)】
　この授業では、10回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をとおして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上でコメントと共に返却される。また、返却後の授業では全体的な解説が行われる。チェックを受けた部分及び解説の要点をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。【到達目標(D)】
　授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】
　教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】
・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.
・BBC Learning English: Pronunciation Tips < http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/grammar/pron/>

【成績評価の方法と基準】
　平常点(35％)、課題(35％)、試験(30％)に基づき成績を評価する。
・平常点【到達目標(B)(C)】
　音声のしくみの知識と技術は体得する要素が多いので、平常点として、授業における発音・聴き取り練習への取り組み、授業中の発言・質問の頻度と内容を評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備、授業内容の振り返り）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。
・課題【到達目標(A)(D)】
　課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。課題ごとに示す評価のポイントをよく確認した上で、授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。
・試験【到達目標(A)(B)(C)(D)】
　試験（実技を含む）では、各到達目標に対応した設問により、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
毎回の授業のリフレクションでは、総じて否定的な評価はなく、授業の難易度や進度については概ね適切であったと思われる。ただし、特に言語学系以外の専攻の学生にとっては前提となる文法知識等が難しいところもあり、円滑な授業運営のためにそのような知識等を補完するよう心がけている。毎回の授業の要点を掲示板に記録しているほか、課題のフィードバックの際に個別に誤りのポイントを示し確認を促すようにしている。

【学生が準備すべき機器他】
資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システムHoppiiを使用する。

【その他の重要事項】
英文学専攻では「英語発音法Ｂ」、日本国際学専攻では「英語発音法Ⅱ」とあわせて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
音声学、音韻論
＜研究テーマ＞
音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育
＜主要研究業績＞
・Toyomi Takahashi (2014). Identity avoidance in the onset. Nasukawa, Kuniya &Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.
Unique Path. 『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.
・Toyomi Takahashi (2008). Unique Path.『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.
・高橋豊美（2005）.『弁別素性理論』. 西原哲雄・那須川訓也（編著）『音韻理論ハンドブック』. 英宝社. 131-142.
・Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. &Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline (in English)】
[Course outline]
The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.
This course aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.
This course discusses segmental aspects of English pronunciation. Its topics include the articulatory features of individual sounds, their accentual variations, the syllable structure, the distribution of sounds, and connected speech phenomena (lenition, alteration and insertion). These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.
This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.
[Learning Objectives]
Students are expected to understand the segmental features and to be able to apply that knowledge to their performance. The specific objectives are as follows:
(A) to describe the theory of English phonemic inventory, distribution and alteration,
(B) to dictate spoken words and phrases in phonemic transcription,
(C) to read out given phonemic transcriptions with appropriate pronunciation,
(D) and to provide a transcription of a model pronunciation including possible alterations for a given passage.
[Learning activities outside of classroom]
Students should spare sufficient time for the following activities before/after each class (roughly four hours or more per week):
- Look over handouts provided beforehand in preparation, and go through them more carefully after class to check their understanding. [Objective (A)]
- Go over pronunciation/dictation exercises practised in class, checking their focus, and try to improve skills in question. [Objective (B)(C)]
- Complete assignments in which students are required to demonstrate their knowledge of segmental features and skills of applying that knowledge to practice through the production of model pronunciation. Students are advised to work on the assignments all by themselves first, and then to make corrections in red referring to handouts and dictionaries; this way they should learn where they tend to make mistakes. Submitted assignments are returned with marks and comments and are also discussed in class in order to help students enhance their knowledge and skills. [Objective (D)]
[Grading Criteria /Policy]
The course final grade will be calculated according to the following components and weights: in-class activities (35%), assignments (35%), and the course-final exam (30%).
- In-class activities are mostly related to skill-oriented Objectives (B) and (C). Pronunciation/dictation skills are sometimes hard to acquire through just four-month practices, depending on whether one is a quick learner or not, so this course attach importance to the effort students make in in-class activities that, if continued, will in due course help improve their skills. Students are advised to engage in in-class activities without worrying about making mistakes, not to hesitate making questions and/or comments.
- Assignments are related to Objectives (A) and (D). Students are expected to demonstrate not only the knowledge they have learnt through this course but also the ability to make use of that knowledge when planning model pronunciation.
- The exam comprises components corresponding to each Objective, and is intended to evaluate the overall learning outcomes of the course.

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

英語発音法Ｂ

髙橋　豊美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。
＜講義題目＞
英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】
　韻律の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。
(A) 音節の強さと発音の特徴、強勢の配置と役割、イントネーションのパターンと機能について、理論的に説明できる。
(B) 発話を聞いて、強勢とイントネーションを含めて発音記号で正確に書き取ることができる。
(C) 発音記号を適切な発音で読むことができる。
(D) 与えられた英文について、基本的なリズムとイントネーションのパターンを予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業では、英国標準英語（Received Pronunciation）を主な対象とし、日本語との比較を適宜行いながら、リズムが形成される仕組みと、イントネーションの形式と機能を学び、韻律を含めた基本的な発話モデルの組み立てや、談話分析の方法を理解する。【到達目標(A)】
　配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取りの練習、発音記号で発話モデルを提示したり発話を書き取ったりする練習などを行う。【到達目標(B)(C)】
　課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。この課題については、返却時にコメントを付し、また、返却後の授業で全体的なフィードバックを行う。【到達目標(D)】
　リアクションペーパーは学習支援システムで回収し、個別のフィードバックは同システムで、全体に共通するフィードバックは授業で行う。
　授業は対面で実施する予定であるが、台風等の影響がある場合や感染症が拡大している場合は、ビデオ会議システム（Zoom）と学習支援システム（Hoppii）を併用したオンライン授業に切り替えて実施するので、授業前に学習支援システムのお知らせを確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業案内／語の強勢	授業概要／参考文献／強勢の音声的特徴／語強勢／課題1
第2回	強勢現象	複合語と句の強勢／強勢移動／課題2
第3回	文強勢とリズム	文強勢／韻脚／課題3
第4回	イントネーションの形式と機能	イントネーション句／音調アクセント／課題4
第5回	イントネーションの構造	イントネーション句の構成／イントネーション核の声調／課題5
第6回	イントネーション核	核の配置と焦点領域
第7回	イントネーション節	頭部と前頭部の声調／イントネーション節の種類／課題6
第8回	イントネーションの概形と意味	イントネーション節の基本的な意味／声域と意味／課題7
第9回	イントネーションの用法(1)：下降声調	下降声調の表す意味と用法／課題8
第10回	イントネーションの用法(2)：非下降声調	非下降声調の表す意味と用法／課題9
第11回	イントネーションの定型(1)	修飾語句／複文と重文／同格と呼格／課題10
第12回	イントネーションの定型(2)	限定的・非限定的修飾／比較・対照
第13回	イントネーションの定型(3)	慣習的表現
第14回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を目安とする。
　資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。また、授業を受けた後で学習内容を振り返り、知識の定着を図ること。【到達目標(A)】
　授業では、学んだ知識を実践に活かすための発音・聴き取りの練習を行う。授業を受けた後で、要点を確認しながら練習を重ねて技術の向上を目指すこと。【到達目標(B)(C)】
　この授業では、10回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をとおして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上でコメントと共に返却される。また、返却後の授業では全体的な解説が行われる。チェックを受けた部分及び解説の要点をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。【到達目標(D)】
　授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】
　教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】
・Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.

【成績評価の方法と基準】
　平常点(35％)、課題(35％)、試験(30％)に基づき成績を評価する。
・平常点【到達目標(B)(C)】
　音声のしくみの知識と技術は体得する要素が多いので、平常点として、授業における発音・聴き取り練習への取り組み、授業中の発言・質問の頻度と内容を評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備、授業内容の振り返り）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。
・課題【到達目標(A)(D)】
　課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。課題ごとに示す評価のポイントをよく確認した上で、授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。
・試験【到達目標(A)(B)(C)(D)】
　試験（実技を含む）では、各到達目標に対応した設問により、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
毎回の授業のリフレクションでは、総じて否定的な評価はなく、授業の難易度や進度については概ね適切であったと思われる。ただし、特に言語学系以外の専攻の学生にとっては前提となる文法知識等が難しいところもあり、円滑な授業運営のためにそのような知識等を補完するよう心がけている。毎回の授業の要点を掲示板に記録しているほか、課題のフィードバックの際に個別に誤りのポイントを示し確認を促すようにしている。

【学生が準備すべき機器他】
資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システムHoppiを使用する。

【その他の重要事項】
この授業は英文学専攻では「英語発音法A」、日本国際学専攻では「英語発音法Ⅰ」の内容を前提としている。「英語発音法A」・「英語発音法Ⅰ」を履修していない場合は、できるだけ履修登録の前に担当教員まで連絡すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
音声学、音韻論
＜研究テーマ＞
音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育
＜主要研究業績＞
・Toyomi Takahashi (2014). *Identity avoidance in the onset*. Nasukawa, Kuniya &Henk van Riemsdijk (eds.) Identity Relations in Grammar. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton.101-120.
・Toyomi Takahashi (2008). *Unique Path*.『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.
・高橋豊美（2005）. 弁別素性理論. 西原哲雄・那須川訓也（編著）音韻理論ハンドブック. 英宝社. 131-142.
・Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. &Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline (in English)】
[Course outline]
The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.
This course aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.
This course discusses prosodic aspects of English pronunciation. Its topics include the location and interpretation of stress in different domains (word/phrase/sentence), the components of intonational phrase and their pitch patterns, the location of nuclear accents and their focusing function, and the types and usage/meaning of tunes. These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.
This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.
[Learning Objectives]
Students are expected to understand the prosodic features and to be able to apply that knowledge to their performance. The specific objectives are as follows:
(A) to describe the theory of English syllable structure and prominence, stress system, and the inventory of intonational contours and their functions,
(B) to dictate spoken words and phrases in phonemic transcription including prosodic features,
(C) to read out given phonemic transcriptions with appropriate pronunciation, rhythm and intonation,
(D) and to provide a transcription of a model pronunciation including relevant rhythmic stress and intonation for a given passage.
[Learning activities outside of classroom]
Students should spare sufficient time for the following activities before/after each class (roughly four hours or more per week):
- Look over handouts provided beforehand in preparation, and go through them more carefully after class to check their understanding. [Objective (A)]
- Go over pronunciation/dictation exercises practised in class, checking their focus, and try to improve skills in question. [Objective (B)(C)]
- Complete assignments in which students are required to demonstrate their knowledge of segmental features and skills of applying that knowledge to practice through the production of model pronunciation. Students are advised to work on the assignments all by themselves first, and then to make corrections in red referring to handouts and dictionaries; this way they should learn where they tend to make mistakes. Submitted assignments are returned with marks and comments and are also discussed in class in order to help students enhance their knowledge and skills. [Objective (D)]
[Grading Criteria /Policy]
The course final grade will be calculated according to the following components and weights: in-class activities (35%), assignments (35%), and the course-final exam (30%).
- In-class activities are mostly related to skill-oriented Objectives (B) and (C). Pronunciation/dictation skills are sometimes hard to acquire through just four-month practices, depending on whether one is a quick learner or not, so this course attach importance to the effort students make in in-class activities that, if continued, will in due course help improve their skills. Students are advised to engage in in-class activities without worrying about making mistakes, not to hesitate making questions and/or comments.
- Assignments are related to Objectives (A) and (D). Students are expected to demonstrate not only the knowledge they have learnt through this course but also the ability to make use of that knowledge when planning model pronunciation.
- The exam comprises components corresponding to each Objective, and is intended to evaluate the overall learning outcomes of the course.

LIT500B3（文学 / Literature 500）

英米文学特殊演習Ａ

小島　尚人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
講義題目：アメリカ小説史研究の現在とこれから
本授業では、アメリカ小説史研究の最新の成果である Jennifer Fleissnerの大著*Maladies of the Will: The American Novel and the Modernity Problem* (2022) における小説論を下敷きに、小説とは何か、アメリカ小説とは何か、を1年間考えていく。具体的には、Fleissnerが取り上げて論じている長編作品を精読し、代表的な先行研究を参照しつつ、Fleissnerの提示する解釈がどのぐらい新しくどのぐらい妥当なのか、どのように応用・発展させられそうか検討する。そうした問題意識のもと、春学期は、Nathaniel Hawthorneの*The Scarlet Letter*（1850）を読む。
なお、本授業は英文学科専門科目「英語圏文学演習Ａ」としても開講され、学部3・4年生も履修する。学部生と共に受講し、授業内で大学院生が指導的役割を演じる機会を得ることも目的の重要なひとつである。

【到達目標】
・作品の細部に目を配り、正確に意味をとって読解しようとする習慣をつける。
・他者の考えに耳を傾けて理解し、建設的なやり方で応答することができる。
・自分の考えを分かりやすく効果的に伝えることができる。
・自分の解釈を論理的に記述することができる。
・多様な批評の方法についての知識を得て、関心を持つ。
・小説の歴史と諸理論の概要について理解する。
・学部生に対して指導的な役割を演じられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者は毎週予習として作品または批評を読み、発言できるよう準備をした上で授業に臨む。
授業は講義と演習を織り交ぜたかたちで進める。受講者の発表担当がある回では、発表者がハンドアウトを作成してプレゼンテーションをおこない、担当コメンテーターによるコメント・質問、そして全体でのディスカッションをする。適宜教員による補足説明がなされる。発表担当者は、担当範囲の内容を要約したうえで、重要と思われる箇所をいくつか引用して分析し、ディスカッションのためのトピックを提示する。
発表に対しては授業内で口頭によるレスポンスがなされ、レポートに対してはフィードバックのコメントをつけたファイルが返却される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明
第2回	近代小説の歴史と理論①	Watt, Chase, Moretti, Armstrongなど
第3回	近代小説の歴史と理論②	Jennifer Fleissner, *Maladies of the Will: The American Novel and the Modernity Problem*
第4回	作品読解①	Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*: "The Custom-House"
第5回	作品読解②	Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*: Chapters 1-8
第6回	作品読解③	Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*: Chapters 9-13
第7回	作品読解④	Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*: Chapters 14-20
第8回	作品読解⑤	Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*: Chapters 21-24
第9回	作品読解⑥	関連短編を読む
第10回	批評論文の読解①	1970年代までの研究動向
第11回	批評論文の読解②	1980～1990年代の研究動向
第12回	批評論文の読解③	2000～2010年代の研究動向
第13回	批評論文の読解④	あらためてFleissner（2022)の議論を検討する
第14回	まとめのワークショップ	受講者が各自の期末レポートの構想を発表してディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回事前に課題（作品または批評）を読んで、ディスカッションに積極的に参加できるように準備する。面白かった点、考察したい点、質問したい点、気になった表現などについてメモをとっておく。分からない用語や固有名詞はできるだけ自分で調べる。（8時間以上）

【テキスト（教科書）】
Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter and Other Writings* (Norton Critical Edition, 2017).
ISBN: 9780393264890

【参考書】
【主要参考書】
Jennifer L. Fleissner, *Maladies of the Will: The American Novel and the Modernity Problem* (U of Chicago P, 2022)
【そのほかの参考書】
★小説の理論と歴史
Thomas G. Pavel, *The Lives of the Novel: A History* (Princeton UP, 2013)
Franco Moretti, ed., *The Novel: History, Geography, and Culture* (Princeton UP, 2006)
Franco Moretti, ed., *The Novel: Forms and Themes* (Princeton UP, 2006)
Dorothy J. Hale, ed., *The Novel: An Anthology of Criticism and Theory, 1900-2000* (Blackwell, 2006)
Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719– 1900* (Columbia UP, 2005)
Michael McKeon, ed., *Theory of the Novel: A Historical Approach* (Johns Hopkins UP, 2000)
Deidre Lynch and William B. Warner, eds. *Cultural Institutions of the Novel* (Duke UP, 1996)
★アメリカ小説論・アメリカ小説史
Nancy Armstrong and Leonard Tennenhouse, *Novels in the Time of Democratic Writing: The American Example* (U of Pennsylvania P, 2018)
Lawrence Buell, *The Dream of the Great American Novel* (Harvard UP, 2014)
Philip F. Gura, *Truth's Ragged Edge: The Rise of the American Novel* (Farrar, 2013)
Alfred Bendixen, *A Companion to the American Novel* (Blackwell, 2012)
Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby, and Benjamin Reiss, eds., *The Cambridge History of the American Novel* (Cambridge UP, 2011)
Paul Giles, *The Global Remapping of American Literature* (Princeton UP, 2011)
平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010年）
Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Stain and Day, 1960; 1966)
Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins UP, 1957)

【成績評価の方法と基準】
・授業への貢献度（ちゃんと予習ができているか、討議に積極的に参加しているか）：30％
・プレゼンテーション（担当箇所の内容を正確に把握できているか、引用箇所の分析がよくできているか、討議のための主題を提示できているか）：30％
・期末レポート（自分の解釈を提示し、リサーチにもとづいて、適切な箇所を引用しながらその解釈の妥当性を論証する）：40％

【学生の意見等からの気づき】
批評については、受講者各自の研究の興味関心に応じて読む文献を調整する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞アメリカ文学
＜研究テーマ＞19世紀後半から世紀転換期の米国小説とナショナル・アイデンティティ、小説の歴史と理論
＜主要研究業績＞
①「ジェイムズのキャリア転換期における「南部」の断続的回帰」『アメリカ文学』（2023年）
②「「国際小説家」が南部と出会うとき――ヘンリー・ジェイムズの再建期」『フォークナー』（2022年）
③「"My Beth"――*Little Women*におけるベスの病とジョーのキャリア」『英文學誌』（2021年）
④「Transbellumとは何か、あるいは作者の不死について――アメリカ文学研究のTemporal Turnとその帰結」『英文學誌』（2020年）
⑤「ギルバート・オズモンドはどこ出身か―― *The Portrait of a Lady*と南北和解のナラティブ」『英文學誌』（2018年）

【Outline (in English)】
This class is a seminar on studies in the American novel. The course begins with a historical and theoretical survey of the novel genre, focusing particularly on Jennifer Fleissner's *Maladies of the Will: The American Novel and the Modernity Problem* (2022). Through a close reading of Nathaniel Hawthorne's *The Scarlet Letter* (1850) as well as various criticisms, students develop their skills to analyze literary texts in a critical way with focus both on their individuality and historicity.
Most classes consist of presentations by students, class discussions, and lectures. Before each meeting, students are expected to spend 8 or more hours completing reading assignments and preparing for class discussion.
Grades will be determined based on the following:
1) Participation and discussion (30%)
2) Presentations (30%)
3) Final paper (40%)

LIT500B3（文学 / Literature 500）

英米文学特殊演習Ｂ

小島　尚人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
講義題目：アメリカ小説史研究の現在とこれから
本授業では、アメリカ小説史研究の最新の成果であるJennifer Fleissnerの大著*Maladies of the Will: The American Novel and the Modernity Problem* (2022) における小説論を下敷きに、小説とは何か、アメリカ小説とは何か、を1年間考えていく。具体的には、Fleissnerが取り上げて論じている長編作品を精読し、代表的な先行研究を参照しつつ、Fleissnerの提示する解釈がどのぐらい新しくどのぐらい妥当なのか、どのように応用・発展させられそうか検討する。そうした問題意識のもと、秋学期は、Henry Jamesの*The Ambassadors*（1903）を読む。
なお、本授業は英文学科専門科目「英語圏文学演習Ｂ」としても開講され、学部3・4年生も履修する。学部生と共に受講し、授業内で大学院生が指導的役割を演じる機会を得ることも目的の重要なひとつである。

【到達目標】
・作品の細部に目を配り、正確に意味をとって読解しようとする習慣をつける。
・他者の考えに耳を傾けて理解し、建設的なやり方で応答することができる。
・自分の考えを分かりやすく効果的に伝えることができる。
・自分の解釈を論理的に記述することができる。
・多様な批評の方法についての知識を得て、関心を持つ。
・小説の歴史と諸理論の概要について理解する。
・学部生に対して指導的な役割を演じられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者は毎週予習として作品または批評を読み、発言できるよう準備をした上で授業に臨む。
授業は講義と演習を織り交ぜたかたちで進める。受講者の発表担当がある回では、発表者がハンドアウトを作成してプレゼンテーションをおこない、担当コメンテーターによるコメント・質問、そして全体でのディスカッションをする。適宜教員による補足説明がなされる。発表担当者は、担当範囲の内容を要約したうえで、重要と思われる箇所をいくつか引用して分析し、ディスカッションのためのトピックを提示する。
発表に対しては授業内で口頭によるレスポンスがなされ、レポートに対してはフィードバックのコメントをつけたファイルが返却される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	春学期の振り返りと秋学期の展望
第2回	近代小説の歴史と理論	Fleissnerの小説史におけるヘンリー・ジェイムズの位置づけについて
第3回	作品読解①	Henry James, *The Ambassadors*: Books 1-2
第4回	作品読解②	Henry James, *The Ambassadors*: Books 3-4
第5回	作品読解③	Henry James, *The Ambassadors*: Books 5-6
第6回	作品読解④	Henry James, *The Ambassadors*: Books 7-8
第7回	作品読解⑤	Henry James, *The Ambassadors*: Books 9-10
第8回	作品読解⑥	Henry James, *The Ambassadors*: Books 11-12
第9回	作品読解⑦	ジェイムズによるニューヨーク版序文を読む
第10回	批評論文の読解①	1970年代までの研究動向
第11回	批評論文の読解②	1980～1990年代の研究動向
第12回	批評論文の読解③	2000～2010年代の研究動向
第13回	批評論文の読解④	あらためてFleissner（2022)の議論を検討する
第14回	まとめのワークショップ	受講者が各自の期末レポートの構想を発表してディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回事前に課題（作品または批評）を読んで、ディスカッションに積極的に参加できるように準備する。面白かった点、考察したい点、質問したい点、気になった表現などについてメモをとっておく。分からない用語や固有名詞はできるだけ自分で調べる。（8時間以上）

【テキスト（教科書）】
Henry James, *The Ambassadors* (Penguin Classics, 2008).
ISBN: 9780141441320

【参考書】
【主要参考書】
Jennifer L. Fleissner, *Maladies of the Will: The American Novel and the Modernity Problem* (U of Chicago P, 2022)
【そのほかの参考書】
★小説の理論と歴史
Thomas G. Pavel, *The Lives of the Novel: A History* (Princeton UP, 2013)
Franco Moretti, ed., *The Novel: History, Geography, and Culture* (Princeton UP, 2006)
Franco Moretti, ed., *The Novel: Forms and Themes* (Princeton UP, 2006)
Dorothy J. Hale, ed., *The Novel: An Anthology of Criticism and Theory, 1900-2000* (Blackwell, 2006)
Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719– 1900* (Columbia UP, 2005)
Michael McKeon, ed., *Theory of the Novel: A Historical Approach* (Johns Hopkins UP, 2000)
Deidre Lynch and William B. Warner, eds. *Cultural Institutions of the Novel* (Duke UP, 1996)
★アメリカ小説論・アメリカ小説史
Nancy Armstrong and Leonard Tennenhouse, *Novels in the Time of Democratic Writing: The American Example* (U of Pennsylvania P, 2018)
Lawrence Buell, *The Dream of the Great American Novel* (Harvard UP, 2014)
Philip F. Gura, *Truth's Ragged Edge: The Rise of the American Novel* (Farrar, 2013)
Alfred Bendixen, *A Companion to the American Novel* (Blackwell, 2012)
Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby, and Benjamin Reiss, eds., *The Cambridge History of the American Novel* (Cambridge UP, 2011)
Paul Giles, *The Global Remapping of American Literature* (Princeton UP, 2011)
平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010年）
Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Stain and Day, 1960; 1966)
Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins UP, 1957)

【成績評価の方法と基準】
・授業への貢献度（ちゃんと予習ができているか、討議に積極的に参加しているか）：30％

・プレゼンテーション（担当箇所の内容を正確に把握できているか、引用箇所の分析がよくできているか、討議のための主題を提示できているか）：30％
・期末レポート（自分の解釈を提示し、リサーチにもとづいて、適切な箇所を引用しながらその解釈の妥当性を論証する）：40％

【学生の意見等からの気づき】
批評については、受講者各自の研究の興味関心に応じて読む文献を調整する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞アメリカ文学
＜研究テーマ＞19世紀後半から世紀転換期の米小説とナショナル・アイデンティティ、小説の歴史と理論
＜主要研究業績＞
①「ジェイムズのキャリア転換期における「南部」の断続的回帰」『アメリカ文学』（2023年）
②「「国際小説家」が南部と出会うとき――ヘンリー・ジェイムズの再建期」『フォークナー』（2022年）
③「"My Beth"――*Little Women*におけるベスの病とジョーのキャリア」『英文學誌』（2021年）
④「Transbellumとは何か、あるいは作者の不死について――アメリカ文学研究のTemporal Turnとその帰結」『英文學誌』（2020年）
⑤「ギルバート・オズモンドはどこ出身か―― *The Portrait of a Lady*と南北和解のナラティブ」『英文學誌』（2018年）

【Outline (in English)】
This class is a seminar on studies in the American novel. The course begins with a historical and theoretical survey of the novel genre, focusing particularly on Jennifer Fleissner's *Maladies of the Will: The American Novel and the Modernity Problem* (2022). Through a close reading of Henry James's *The Ambassadors* (1903) as well as various criticisms, students develop their skills to analyze literary texts in a critical way with focus both on their individuality and historicity.
Most classes consist of presentations by students, class discussions, and lectures. Before each meeting, students are expected to spend 8 or more hours completing reading assignments and preparing for class discussion.
Grades will be determined based on the following:
1) Participation and discussion (30%)
2) Presentations (30%)
3) Final paper (40%)

LIT500B3（文学 / Literature 500）

文学方法論Ａ

宮川　雅

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テクストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。

【到達目標】
英文学テクストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　プリントを使用して批評理論について学ぶ。３ないし４つの異なるジャンルの英米文学作品の原文テクストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。
　中心的な「教科書」として、W・L・ゲーリン 『文学批評入門』. 青木健・日下洋右 訳. 彩流社, 1986 を原書と比べながら読む。参考にその後の原書の改訂版も眺める（いずれも教員が準備する）。
　上記の研究書（訳書）は、それなりに評価のあったものだが（原著は版を改訂して――― 6th ed., 2010――映像を含む古典テクスト以外への目配りを見せた）、半世紀近く前の批評の状況を、その後の「ポストモダン」な批評意識と比べるべく、ピーター・バリー『文学理論講義――新しいスタンダード』. 高橋和久監訳, ミネルヴァ書房, 2014 や日本人による最近の研究書などを時々参照する。翻訳を吟味することで、日本人がどのように文学理論を受容してきたかも考える（たとえばディコンストラクションの長引く受容の問題）。
　授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション：“Armed Vision” (S. Hyman)「はじめに――文学理論は死んだ、文学理論せよ」（大橋洋一）	いかにテクストにむかうか
第2回	テクストとは何か	テクスト概念の変容
第3回	テクスチュアル・クリティシズム	本文校訂または批評以前の批評
第4回	印象批評とは何か	作家・作品・読者の三角形
第5回	印象批評の実践	レポーターによる発表と討論
第6回	フォルマリズム	形式主義的批評とテクスト分析
第7回	フォルマリズム批評の実践	レポーターによる発表と討論
第8回	文化人類学と文学	神話批評
第9回	神話批評の実践	レポーターによる発表と討論
第10回	文学と心理分析	フロイト、ユング、その後
第11回	精神分析批評の実践	レポーターによる発表と討論
第12回	注釈	釈義学から解釈学へ
第13回	その実践	レポーターによる発表と討論
第14回	ディコンストラクションからニューヒストリシズムへ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
批評の対象となる作品テクストを読み進めること。自身の研究を進めて、批評理論の応用を考えること（秋の中間報告にむけて資料収集をしたり bibliography をつくったりする）。予習・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”
Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*
Shakespeare, *Hamlet*
Andrew Marvell, "To His Coy Mistress"
W・L・ゲーリン 『文学批評入門』. 青木健・日下洋右 訳. 彩流社, 1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント
David Lodge, *The Art of Fiction* , rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】
テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か――現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）
筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）
大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）
小倉孝誠編『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社、2023）
大橋洋一・三原芳秋編『文学理論の名著50』（平凡社、2025）

【成績評価の方法と基準】
授業への参加度70パーセント、レポート30パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
学習支援システムの「教材」に（あとからも）参照可能なかたちで資料ファイルを整理して蓄積する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　　近代アメリカ文学
＜研究テーマ＞　　アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
＜主要研究業績＞　「*Ormond* におけるピクチャレスクな意匠をめぐって」『英文學誌』47号（2005年3月）: 27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十） 第五章　ポーと現代――ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）: 91-110、「Re: Ripの妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51号（2005年9月）: 1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』(研究社、2009) 251-67.

【Outline (in English)】
【Learning Objectives】
Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read various critical approaches applied to them.
[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend two hours respectively to understand the course content.
[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%),final report [paper] (30%).

LIT500B3（文学 / Literature 500）

文学方法論Ｂ

宮川　雅

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テクストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。Ｂの過半は学生自身の実践的発表と質疑が主となる予定だが、春学期からの「教科書」として、Ｗ・Ｌ・ゲーリン『文学批評入門』.青木健・日下洋右 訳.彩流社, 1986 を参照・検討する。また、ピーター・バリー『文学理論講義』. 高橋和久監訳, ミネルヴァ書房, 2014 で、1980年代には見られなかった理論について学ぶ。考えを補うべく、近年の参考書として、小倉孝誠編『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社、2023）
大橋洋一・三原芳秋編『文学理論の名著50』（平凡社、2025）などを参照する。（今年度は特に、日本で「審級」と訳されてきた Instanz [独],instance/ agency [英], instance [仏]という、精神分析と物語論に曖昧なままにまたがる概念を、「主体」の問題があらわれたものとして、あるしゅ中心に置いて考えてみたい）

【到達目標】
英文学テクストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みる。
中間報告をおこない、その反省のもとに自分の研究内容の修正作業をする。批評理論と現代思想の関係について問題意識と共に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　プリントを使用して批評理論を学ぶ。作品の原文テクストを読むとともに、批評理論を作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。
　授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。
　後期秋学期は10月までは大学院中間報告会に向けてリハーサルと配布資料のチェックなどを相互におこない、その後は Barry の本を章分担でレポートしてもらい、議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	分析と解釈の実践（1）	イメジ、シンボル、アレゴリー
第2回	分析と解釈の実践（2）	比喩と脱比喩
第3回	分析と解釈の実践（3）	プロットの構築
第4回	分析と解釈の実践（4）	キャラクター分析
第5回	中間まとめ	中間報告の反省
第6回	ニューヒストリシズムからカルチュラル・スタディーズへ	1980年代からの流れ
第7回	精神分析理論	プリント講読
第8回	フェミニズム批評	プリント講読
第9回	ジェンダー理論	プリント講読
第10回	ナラトロジー理論	プリント講読
第11回	分析と解釈の実践（5）	視点と声
第12回	分析と解釈の実践（6）	ナラトロジー
第13回	分析と解釈の実践（7）	ソース・スタディー
第14回	総まとめ	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
テクストの下調べ。自身の研究テーマの探求。

【テキスト（教科書）】
Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”
Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*
Shakespeare, *Hamlet*
Ｗ・Ｌ・ゲーリン『文学批評入門』.青木健・日下洋右 訳.彩流社, 1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント
David Lodge, *The Art of Fiction* , rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】
テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か――現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）
筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）
大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）
小倉孝誠編『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社、2023）
大橋洋一・三原芳秋編『文学理論の名著50』（平凡社、2025）

【成績評価の方法と基準】
授業への参加度70パーセント、レポート30パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の積極的な参加を促せるようにつとめたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　近代アメリカ文学
＜研究テーマ＞　アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
＜主要研究業績＞　「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』(研究社、2009) 251-67.「Cacotype――言葉の影、または引用について」(『英文學誌』58、2016）35-60.「Wot’s the hodds so long as you’re ’appy――いいじゃないの幸せならば、またはWebの効用について」(『英文學誌』59, 2017）33-48.「狂気と理性の問題、そしてゴシック――リチャード・ウィルバーのポー論から考える」(『英文學誌』66, 2024）42-66.

【Outline (in English)】
【Learning Objectives】
Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read various critical approaches applied to them.
[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.
[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%),final report [paper] (30%).

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

英語音声・応用研究A

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
調音音声学の基礎を学ぶ。

【到達目標】
音声言語（spoken language）がどのような仕組みで産出されるのかを理解し他者に説明できるようになること。音声学の中でも特に調音音声学（articulatory phonetics）について，用語や基本概念を自分の言葉で説明できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
言語音の調音の仕組み，言語音の表記方法，英語や日本語の母音・子音・リズム・イントネーション，音の素性などについて，順を追って理解を深めてゆく。欧米の音声学の授業などでは古典とされるPeter Ladefoged著*A Course in Phonetics*をテキストとし，受講者による担当箇所の発表および全員での内容の議論を中心に授業を進める予定。また，授業中に，受講者による発表や全員での議論について，クラス全体に向けてフィードバックを行う。授業は以下の授業計画に沿って進める予定だが，受講生の要望などによって変更する可能性がある。
なお，現時点では対面で開講する予定ではあるが，受講生と相談の上，一部をオンラインに切り替える可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	導入，言語学と音声学	シラバスの説明，言語学における音声学の位置づけ
第2回	言語音とその調音	音声産出，音波，母音・子音の調音的記述，韻律
第3回	音声表記と音韻論	子音と母音の表記方法，音韻論
第4回	英語の子音	閉鎖音，摩擦音，鼻音，接近音，英語の子音異音変化規則
第5回	英語の母音	母音の表記法，母音の音色，聴覚的母音空間，二重母音，弱母音，緊張・弛緩母音など
第6回	母音の調音	日本語・英語の母音，MRIで見る母音
第7回	英語の語と文の特徴	連続音声中の単語，強勢，リズム，イントネーション
第8回	呼気流と発声の仕組み	声門の状態，VOT
第9回	子音の調音	調音動作の標的，調音動作の種類，調音様式
第10回	音響音声学	音源フィルタ理論，音響分析，子音の音響的特徴，スペクトログラムの見方
第11回	母音	基本母音，諸言語の母音，R音化母音，母音の鼻音化，半母音
第12回	音節と韻律	音節，強勢，長さ，タイミング，強勢・声調・ピッチアクセント言語
第13回	空気力学	口腔内気圧変化，空気の流れを測る
第14回	言語学的音声学，総括	「個人」と「社会」の音声学，国際音声字母，素性階層，音声と記憶，授業のまとめと振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
（1）毎回指定範囲を読み，授業での討論に備えること，（2）発表担当の場合，事前に発表用資料などを準備し，授業にてディスカッションをリードすること。本授業の準備学習・復習時間は，各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
以下をテキストとして使用する予定。ただし，受講者と相談の上，変更する可能性がある。
Ladefoged, P. &Johnson, K. (2010). *A Course in Phonetics, international edition*. Heinle.

【参考書】
参考書として以下を挙げておく。
川原 繁人（2018）.『ビジュアル音声学』三省堂.

【成績評価の方法と基準】
平常点40%，発表60%の割合で評価する。指定範囲をよく読み，理解しておくことはもちろん，疑問点を考えたり，他の文献を調査したり，積極的な参加姿勢を特に重視する。原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または無断で発表を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート未実施につき該当なし

【その他の重要事項】
授業計画や運営方針の説明などをするので，受講者は初回授業に必ず出席すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳 (2017).『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010).「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this course, students will learn the basics of articulatory phonetics.
[Learning Objectives]
At the end of the course, students should be able to explain to others how spoken language is produced. In particular, students should be able to explain the basic concepts and terminology of articulatory phonetics.
[Learning activities outside of classroom]
(1) Students should do the weekly assigned reading and prepare for in-class discussion, (2) when it is their turn to present, students should prepare handouts and lead the discussion, and (3) if homework is assigned, students should work on the assignment and complete it before the deadline. The standard study time required before and after each class is 4 hours total.
[Grading criteria/policy]
Grades will be determined based on class attendance and participation (40%) and presentation (60%).

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

英語音声・応用研究Ｂ

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
音響・聴覚音声学の基礎を学ぶ。

【到達目標】
音声言語がどのような特徴を持ち，人間がどのような仕組みで音声言語を産出・知覚するのかを理解し，説明できるようになること。音声学の中でも特に音響音声学（acoustic phonetics）および聴覚音声学（auditory phonetics）の基礎的な概念や研究スキルを習得し，関連分野の学術論文の内容が理解できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
音響学の基礎，音声をPC上で扱う際の基礎知識，聴覚と音声知覚，音声産出の音響理論，様々な母音や子音の音響的特徴などについて，順を追って理解を深めてゆく。音響音声学と聴覚音声学を扱うテキストとしてKeith Johnson著*Acoustic and Auditory Phonetics*を用い，受講者による担当箇所の発表および全員での内容の議論を中心に授業を進める予定。また，授業中に，受講者による発表や全員での議論について，クラス全体に向けてフィードバックを行う。授業は以下の授業計画に沿って進める予定だが，受講生の要望などによって変更する可能性がある。
なお，現時点では対面で開講する予定ではあるが，受講生と相談の上，一部をオンラインに切り替える可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	導入，調音音声学	シラバスの説明，調音音声学の復習
第2回	音響学の基礎とフィルタ	音の感覚，単純周期音，複合周期音，非周期音，音響フィルタ
第3回	音声のデジタル信号処理	デジタル信号とアナログ信号，標本化と量子化，様々な音声分析
第4回	聴覚の基礎	聴覚末梢系，ラウドネス，音声の聴覚的表象
第5回	音声知覚	音声知覚実験，知覚的距離と知覚的写像
第6回	音声産出と音響理論	有声化，声道フィルタ，母音フォルマント，LPC
第7回	母音	母音産出の音響管理論，摂動理論，音響的母音空間，言語間での母音知覚
第8回	摩擦音	乱流，摩擦音の調音点，摩擦音の知覚的次元
第9回	閉鎖音と破擦音	閉鎖音と破擦音の音源特性，閉鎖音の声道特性
第10回	鼻音と側音	帯域幅，鼻音，鼻音化，側音，鼻音の知覚
第11回	母音・二重母音の音響特性	母音生成のモデル，母音の音響的記述
第12回	子音の音響特性	閉鎖子音，摩擦子音，鼻音，わたり音，流音
第13回	文脈や話者が及ぼす音響効果	調音結合，超分節素，話者変数：年齢と性別，言語障害
第14回	授業の振り返り	授業のまとめ，フィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
（1）毎回指定範囲を読み，授業での討論に備えること，（2）発表担当の場合，事前に発表用資料などを準備し，授業にてディスカッションをリードすること。本授業の準備学習・復習時間は，各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
以下をテキストとして使用する予定。ただし，受講者と相談の上，変更する可能性がある。
Johnson, K. (2003). *Acoustic and Auditory Phonetics*. Malden, MA:Blackwell Publishing.

【参考書】
参考書として以下を挙げておく。
レイ・D・ケント, チャールズ・リード（著）, 荒井 隆行, 菅原 勉（監訳）(1996). 『音声の音響分析』海文堂.

【成績評価の方法と基準】
平常点40%，発表60%の割合で評価する。指定範囲をよく読み，理解しておくことはもちろん，疑問点を考えたり，他の文献を調査したり，積極的な参加姿勢を特に重視する。原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または無断で発表を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート未実施につき該当なし

【その他の重要事項】
授業計画や運営方針の説明などをするので，受講者は初回授業に必ず出席すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳 (2017). 『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010). 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this course, students will learn the basics of acoustic and auditory phonetics.
[Learning Objectives]
At the end of the course, students should be able to explain to others how spoken language is produced and perceived. In particular, students should be able to explain the basic concepts and terminology of acoustic and auditory phonetics.
[Learning activities outside of classroom]
(1) Students should do the weekly assigned reading and prepare for in-class discussion, (2) when it is their turn to present, students should prepare handouts and lead the discussion, and (3) if homework is assigned, students should work on the assignment and complete it before the deadline. The standard study time required before and after each class is 4 hours total.
[Grading criteria/policy]
Grades will be determined based on class attendance and participation (40%) and presentation (60%).

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

理論言語学・認知科学Ａ

常本　亜希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theories, research, and pedagogy. Students critically engage with key concepts and research methodologies, develop insights into second language acquisition (SLA), and apply theoretical knowledge to practical language teaching and learning contexts.
< 講義題目>
第二言語習得　Second Language Acquisition

【到達目標】
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:
1. Explain the core issues in L2 acquisition research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students will engage with research articles pertinent to each week's theme, deepening their understanding of the subject matter. Students are encouraged to select a question of personal interest within the field, synthesize existing research related to this question, and report their findings through presentations. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	Introduction to the course	Presentation of key concepts in second language acquisition and teaching
第2回	First language acquisition	Examine how children acquire their first language (L1), including stages and theories of L1 acquisition, to understand the basis of language learning
第3回	Second language acquisition	Delve into key theories of second language (L2) acquisition, highlighting differences in learning processes between L1 and L2
第4回	Cognitive approaches to SLA	Focus on how cognitive processes such as memory, attention, and perception affect the learning of a second language
第5回	Cognitive-Interactionist Perspectives	Explore the role of interaction in SLA from a cognitive-interactionist viewpoint, including input, output, and feedback mechanisms
第6回	Analysing Learner Language	Study the evolution of learner language, focusing on error analysis and the concept of interlanguage
第7回	Age Effects in SLA	Investigate how age impacts language learning capabilities, including critical period hypotheses and age-related differences in acquisition
第8回	Crosslinguistic Influences	Examine how learners' L1 can influence the acquisition of an L2, including transfer, interference, and facilitation effects
第9回	Individual Differences in SLA (1)	Focus on the cognitive and affective dimensions of individual differences, including how personal beliefs, aptitudes, and emotional states shape the language learning process
第10回	Individual Differences in SLA (2)	Examines the strategic and psychological aspects of individual differences such as learning strategies, self-regulation, anxiety, and enjoyment
第11回	Motivation in SLA	Delve into various types of motivation and their impact on L2 learning
第12回	Social Approaches to SLA	Examine the influence of sociocultural contexts on language acquisition, focusing on key concepts and methodologies that explore the role of social interaction in L2 learning
第13回	Research presentations	Research project presentations
第14回	Feedback on research presentations and review	Discussion of and feedback on students' research projects and course review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class— this entails meeting and coordinating with your group members.

【テキスト（教科書）】
Patsy M. Lightbown, and Nina Spada. (2021). *How languages are learned (5th edition).* Oxford University Press.

【参考書】
Zoltán Dörnyei and Ema Ushioda. (2021). *Teaching and researching motivation (3rd edition).* Routledge.
Susan M. Gass, Jennifer Behney, and Luke Plonsky. (2020). *Second language acquisition: An introductory course (5th edition).* Routledge.
Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition.* Hodder Education.
Rod Ellis. (2015). *Understanding second language acquisition (2nd edition).* Oxford University Press.
大関浩美（2010）『日本語を教えるための第二言語習得入門』くろしお出版
新多了, 馬場今日子（2016）『はじめての第二言語習得論講義: 英語学習への複眼的アプローチ』大修館書店

【成績評価の方法と基準】
In-class presentations: 50%
Written report: 50%
Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class. Students are expected to attend every class. A grade of "E" will be given for being absent from four or more classes.

【学生の意見等からの気づき】
Not applicable.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
applied linguistics, foreign language education, second language speech production and perception
＜研究テーマ＞
Linguistic and non-linguistic features relevant to second language speech perception
Second language speakers' self- and other-assessments of pronunciation
Teachers' cognition of second language pronunciation teaching
＜主要研究業績＞
Tsunemoto, A., &Trofimovich, P. (2024). Coherence and comprehensibility in second language speakers' academic speaking performance. *Studies in Second Language Acquisition, 46*, 795－817.
Tsunemoto, A., &Trofimovich, P. (2023). Pre- and in-service teachers' beliefs about second language pronunciation teaching, their experience, and speech assessments. *System, 118*, 103125
Tsunemoto, A., Lindberg, R., Trofimovich, P., &McDonough, K. (2022). Visual cues and rater perceptions of second language comprehensibility, accentedness, and fluency. *Studies in Second Language Acquisition, 44,* 659－ 684.

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theories, research, and pedagogy.
（Learning Objectives）
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:
1. Explain the core issues in L2 acquisition research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following
In-class presentations: 50%
Written report: 50%

LIN600B3（言語学 / Linguistics 600）

理論言語学・認知科学Ｂ

常本　亜希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course offers an in-depth exploration of second language acquisition (SLA), enabling students to critically engage with contemporary research articles and apply findings to both teaching practices and personal research interests. Students enhance their teaching methods or research projects, bridging theoretical knowledge with practical application.
< 講義題目>
第二言語習得　Second Language Acquisition

【到達目標】
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:
1. Critically analyze and synthesize SLA research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students will engage with research articles pertinent to each week's theme, deepening their understanding of the subject matter. Students are encouraged to select a question of personal interest within the field, synthesize existing research related to this question, and report their findings through presentations. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	Introduction to the course	An introduction or refresher on how first and second language acquisition differ and key concepts in SLA and teaching
第2回	Acquisition of grammar	Investigating how learners acquire and process grammar, the role of explicit instruction, and the timing of grammar teaching in SLA
第3回	Acquisition of vocabulary	Investigating the process of lexical development and processing, and effective strategies for teaching vocabulary
第4回	Acquisition of pronunciation	Examining the acquisition of pronunciation and methods for teaching pronunciation skills effectively
第5回	Interaction and collaborative learning	Exploring the role of interaction in SLA from cognitive and sociocultural perspectives and how collaboration enhances learning
第6回	Corrective feedback	Examining the types and effectiveness of oral and written corrective feedback, with a focus on learner-centered approaches
第7回	Cognitive individual differences and technology	Investigating the role of cognitive abilities in SLA and how AI and technology can personalize language learning
第8回	Affective individual differences	Analyzing motivation, emotions, and engagement in SLA, with insights from dynamic and psychological frameworks
第9回	Learning through practice	Understanding the role of structured practice, including PPP, shadowing, and skill acquisition, in language learning.
第10回	Learning through task	Examining Task-Based Language Teaching (TBLT), the role of task complexity, and hybrid curriculum approaches
第11回	Age and curriculum	Evaluating the impact of learning onset age, curriculum design constraints, and innovations in early and intensive programs
第12回	Gesture and Multimodality	Investigating the role of gesture and multimodal resources in language learning and teaching
第13回	Research presentations	Research project presentations
第14回	Feedback on research presentations and review	Discussion of and feedback on students' research projects and course review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class— this entails meeting and coordinating with your group members.

【テキスト（教科書）】
鈴木祐一. (2024).『あたらしい第二言語習得論』. 研究社. ISBN: 9784327411114

【参考書】
Susan M. Gass, Jennifer Behney, and Luke Plonsky. (2020). *Second language acquisition: An introductory course (5th edition).* Routledge.
Patsy M. Lightbown, and Nina Spada. (2021). *How languages are learned (5th edition).* Oxford University Press.
Shawn Loewen. (2020). *Introduction to instructed second language acquisition (2nd edition).* Routledge.
Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition.* Hodder Education.
Rod Ellis. (2015). *Understanding second language acquisition (2nd edition).* Oxford University Press.
大関浩美（2010）『日本語を教えるための第二言語習得入門』 くろしお出版
新多了, 馬場今日子（2016）『はじめての第二言語習得論講義: 英語学習への複眼的アプローチ』大修館書店

【成績評価の方法と基準】
In-class presentations: 50%
Written report: 50%
Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class. Students are expected to attend every class. A grade of "E" will be given for being absent from four or more classes.

【学生の意見等からの気づき】
Not applicable.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞

applied linguistics, foreign language education, second language speech production and perception
＜研究テーマ＞
Linguistic and non-linguistic features relevant to second language speech perception
Second language speakers' self- and other-assessments of pronunciation
Teachers' cognition of second language pronunciation teaching
＜主要研究業績＞
Tsunemoto, A., &Trofimovich, P. (2024). Coherence and comprehensibility in second language speakers' academic speaking performance. *Studies in Second Language Acquisition, 46*, 795－817.
Tsunemoto, A., &Trofimovich, P. (2023). Pre- and in-service teachers' beliefs about second language pronunciation teaching, their experience, and speech assessments. *System, 118*, 103125
Tsunemoto, A., Lindberg, R., Trofimovich, P., &McDonough, K. (2022). Visual cues and rater perceptions of second language comprehensibility, accentedness, and fluency. *Studies in Second Language Acquisition, 44,* 659－ 684.

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course aims to help students critically engage with contemporary research articles in second language acquisition (SLA) and apply findings to teaching practices and personal research interests.
（Learning Objectives）
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:
1. Critically analyze and synthesize SLA research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following
In-class presentations: 50%
Written report: 50%

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学方法論Ａ

石川　潔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
言語研究の方法論としての以下の２つの入門的な把握を目指す。
・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法
・実験設計およびデータの統計処理
＜講義題目＞言語科学の研究に必要な方法論の修得

【到達目標】
自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定で比較できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義およびパソコン実習。
試験には採点コメントを返す予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること、注目していない要因の効果の除去
第4回	論文執筆の基本	構成、引用の方法
第5回	統計学的検定の基本 1	帰無仮説および対立仮説、有意性
第6回	統計ツール	Excel、ANOVA4、SPSS、R、JASP、etc.
第7回	統計学的検定の基本 2	帰無仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	*t* 検定（その１）	被験者間要因の場合
第11回	*t* 検定（その２）	１サンプルの *t* 検定
第12回	*t* 検定（その３）	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。
パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。
わからない箇所は教員や周囲に質問すること。
また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおしてみること。

【テキスト（教科書）】
学習支援システムでハンドアウトおよびデータ・セットを配布。

【参考書】
A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.
大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし．日科技連.
Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology.* (6th ed.) Wadsworth.
Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS.* Sage.
Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data.* Cambridge University Press.
その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】
学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】
「全員、期末試験は満点！」という結果を目指したい。

【その他の重要事項】
この授業は原則、英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）
＜研究テーマ＞
音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係
＜主要研究業績＞
http://www.i.hosei.ac.jp/ kiyoshi/research.html などを参照。

【Outline (in English)】
[Course outline]
An introduction to research methodology in linguistic sciences
[Learning Objectives]
- Scientific construction and evaluation of theories
- Experimental design and statistical data analysis
- Realization of the (in)validities of the above
[Learning activities outside of classroom]
Practice of PC skills, applications of the methods to various issues encountered outside of the classroom
[Grading Criteria/Policy]
Final 100%

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学方法論Ｂ

ブライアン・ウィスナー

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.
＜講義題目＞
Research Methods in the Linguistic Sciences

【到達目標】
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. This course is conducted in English. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	Research methods in the linguistic sciences	Introduction to why research is conducted and the concepts covered in this course
第2回	Variables &levels of measurement	Classification and measurement of variables
第3回	Visual descriptive statistics	Creating graphs and plots
第4回	Statistical assumptions	Methods of addressing statistical assumptions
第5回	Correlation	Background and calculation of Pearson's correlation coefficient
第6回	Other methods of correlation	Calculation of Spearman's correlation coefficient
第7回	T-tests and research design	Background of t-tests and calculation of a paired-samples t-test
第8回	Between-group designs	Calculation of an independent samples t-test
第9回	Linear regression	Background and calculation of linear regression
第10回	ANOVA, planned comparisons, and post-hoc tests	Background and calculation of ANOVA
第11回	Factorial ANOVA	Background and calculation of factorial ANOVA
第12回	Repeated-measures ANOVA	Background and calculation of repeated-measures ANOVA
第13回	Individual presentations	Research article presentation and discussion
第14回	Review of the course content and final assignment	Review the concepts covered in the course and complete the final data analysis assignment

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】
There is no required textbook for this course.

【参考書】
Jenifer Larson-Hall. (2016). *A guide to doing statistics in second language research using SPSS and R* (2nd ed.). Routledge.
Andy Field. (2013). *Discovering statistics using SPSS* (4th ed.). Sage.
Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】
Presentations: 50%; Final Data Analysis Assignment: 50%
Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】
Not applicable.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　第二言語習得・英語教育学
＜研究テーマ＞　第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性
＜主要研究業績＞
・『MY WAY: English Communication I』 共著　2013年3月　三省堂
・『MY WAY: English Expression I』　共著　2013年3月　三省堂
・『英語教育学の実証的研究法入門』　共著　2012年8月　研究社

【Outline (in English)】
This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.
Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.
Final grades will be calculated based on the following:
Presentations: 50%; Final Data Analysis Assignment: 50%

PSY500B3（心理学 / Psychology 500）

音声言語科学特論

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人間に特有の能力とされる言語がどのような原理によって成立しているのかを科学的に追究する言語学の基礎を概観する。

【到達目標】
言語の音（音声学，音韻論），語彙（形態論），文の作り方（統語論），語句の意味や対話の中での役割（意味論，語用論）など，言語学の諸分野について，基礎概念を学び，問題を解く能力を身に付けることを本授業の目標とする。授業では言語学を初めて学ぶ学生を想定しているが，受講生の既有知識に応じて進度を適宜調整する。授業終了時には，言語に関する様々な現象や疑問について吟味し解決できるようになることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
言語学の諸分野の中から適宜重要なトピックを取り上げる予定である。扱う内容については受講者と相談のうえ重み付けを調整する可能性がある。日本語や英語などの諸言語から様々な具体例を検討し，問題を実際に解く作業を通して，言語学の基礎概念や分析方法を身に付ける。また，音声学分野で広く利用されているフリーソフトPraatの実習も取り入れる予定である。授業は，教員による講義，課題に関するディスカッション，教員から全員に向けてのその場でのフィードバックなどを織り交ぜながら進める予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入，言語と言語学	シラバスの説明，言語と言語学，話し言葉と書き言葉，「真の言語」
第2回	音声学・音韻論：母音と子音	発話のメカニズム，母音と子音
第3回	音声学・音韻論：音素	音素，音素分析，日本語の音韻変化
第4回	音響音声学：基礎	音の種類，音を可視化する方法，フィルタ，アナログ信号とデジタル信号
第5回	音響音声学：音源フィルタ理論	音声産出の音源フィルタ理論，基本周波数，フォルマント周波数
第6回	実験音声学：音声分析	Praatを使った音声の録音・可視化・編集・分析・ラベリング
第7回	実験音声学：音声合成	Praatを使った音声の再合成
第8回	実験音声学：音声知覚	Praatを使った音声知覚実験
第9回	形態論：形態素，語形成	心内辞書と一般辞書，形態論と形態素，形態素の種類，偶発的な語形成，少し規則的な語形成，規則性の高い語形成，複合
第10回	形態論：複合，派生	主要部，複合語の種類，複合語の意味，派生語の樹形図
第11回	形態論：屈折，形態素解析	屈折と活用，形態素解析の方法
第12回	統語論：導入，カテゴリー，意味役割，マージ	格，言語の階層構造，項と意味役割，マージ，樹形図（ツリー）
第13回	統語論：文の組み立て	句の主要部と補部，文の樹形図
第14回	総括，振り返り	文の樹形図，期末レポート

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回，テキストの指定範囲を読み，課題に取り組み，次回の授業で解答を発表したり議論したりするための準備をすること。本授業の準備学習・復習時間は，計4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
以下の文献の一部を授業で使用する予定。
西光 義弘（編集）(1999). 日英語対照による英語学概論：増補版 くろしお出版.
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳 (2017). 音声学を学ぶ人のためのPraat入門　ひつじ書房.

【参考書】
参考書は適宜授業内にて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点・課題60%，期末レポート40%の割合で評価する。言語学は知識の段階的な学習とともに，問題を解く能力の習得が求められるので，授業参加と課題を重視する。原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または無断で発表を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
6名の回答者全員が「履修してよかった」「理解できた」「工夫されていた」と回答してくれました。授業外学習時間については「3時間以上」が2名，「2〜3時間」が4名でした。「毎週課題があるおかげで理解している範囲・理解しきれていない範囲が自覚出来てとてもよかった」「答え合わせの時間でわからないことを気軽に共有・質問できて深い理解につながった」「クラスの皆が積極的に授業に参加しており、活発な雰囲気だった」といったコメントをいただきました。今後も事前課題＋授業での答え合わせとディスカッションという形式を継続したいと思います。

【その他の重要事項】
授業計画や運営方針の説明などをしますので，受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一 (2011). 音声分析ソフトウェアPraatを用いた聴取実験：F0再合成による刺激作成と実験の制御　日本音響学会誌, 67, 345-350.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して　法政大学文学部紀要, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course introduces students to the fundamentals of linguistics, the scientific study of language.
[Learning objectives]
Students should develop an understanding of the basic principles and terminology in subareas of linguistics such as phonetics, phonology, morphology, syntax, semantics, and pragmatics, and be able to solve various problems in these areas. By the end of the course, students should be able to identify and attempt to solve practical problems related to language.
[Learning activities outside of classroom]

(1) For each class period, students should do the assigned reading, work on homework assignments, and prepare for presentation and discussion for the next class. (2) Toward the end of the course, students should select and read an academic paper pertaining to language, and present its contents to the class. The standard study time required before and after each class is 4 hours total.
[Grading criteria/policy]
Grades will be determined based on class participation and homework (60%), and final exam (40%).

PSY500B3（心理学 / Psychology 500）

音声言語科学演習

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人間にとって最も自然なコミュニケーション手段といえる音声言語（話し言葉）について，その仕組みや認知処理過程について体系的に学ぶ。

【到達目標】
音声言語が話し手にどのように産出され，音としてどのような特徴を持ち，聞き手にどのように知覚されるのかについて，説明できるようになることが目標である。また，音声分析ソフトを使って音声言語の特徴を分析できるようになることも目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
音声言語の発話と知覚の仕組み，音声の物理的な特徴，乳幼児による母国語の知覚能力の発達，成人による外国語音声の学習などについて，言語心理学や音声科学の知見を学ぶ。授業は講義，課題に関するディスカッション，教員による解説やフィードバックを中心に進める予定である。また，音声分析ソフトPraatを使った課題や演習も盛り込む予定である。授業の内容や進め方については受講生の人数や理解度・要望に応じて変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	シラバスの説明，音声言語と文字言語，「言葉の鎖」
第2回	音声とは	音声の確実性と速さ，音声産出のメカニズム，母音と子音
第3回	音響音声学の基礎（1）	音の正体，音の種類，音を可視化する方法，音声のデジタル化
第4回	音声の音響分析	Praatを使った音声の録音・可視化・編集・分析
第5回	音響音声学の基礎（2）	フィルタ，音声産出の音源フィルタ理論，基本周波数，フォルマント周波数
第6回	母音の知覚	聴覚器官，母音の特徴と知覚，母音の正規化
第7回	子音の知覚（1）	音響的不変性の欠如，ローカス理論，音声の符号化
第8回	音声の再合成	Praatを使った音声の録音・分析・再合成
第9回	子音の知覚（2），カテゴリー知覚	調音点の知覚，声の有無の知覚，分節音と韻律，カテゴリー知覚とは，同定と弁別
第10回	音声知覚の実験	同定課題と弁別課題の演習
第11回	音声知覚の発達	生得と学習，乳児の音声知覚，満1歳までに起こる変化
第12回	外国語の音声知覚	成人による外国語音の学習，知覚と産出の関係，外国語音の知覚的同化
第13回	文脈の影響	トップダウン処理とボトムアップ処理，音声知覚と単語認知のモデル
第14回	音声知覚言語と社会的認知，総括	話し方と対人認知の関係，授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
（1）毎回，授業にて指示された範囲を読み，課題に取り組み，次回の授業で議論をするための準備をすること。（2）音声分析用ソフトを使った課題に取り組み，成果を提出すること。本授業の準備学習・復習時間は，計4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特になし。

【参考書】
ジャック・ライアルズ（著），今富 摂子他（訳）（2003）.『音声知覚の基礎』海文堂.
石川 圭一（2005）.『ことばと心理』くろしお出版.
川崎 恵里子（編著）（2005）.『ことばの実験室』ブレーン出版.
重野 純（2003）『音の世界の心理学』ナカニシヤ出版.
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳（2017）.『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房.

【成績評価の方法と基準】
平常点・課題60%，発表・レポート40%の割合で評価する予定。
原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または発表・レポート提出を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
2024年秋学期は，授業開始時に受講者と相談した結果，2名ずつのグループを作り，各グループで音声言語に関わる独自のミニ研究プロジェクトを立案し，実行し，発表するという内容の授業を行いました。その結果，3名の回答者全員が「工夫していた」「理解できた」「履修してよかった」と回答してくれました。「毎回授業外で行った活動について授業内で報告や説明を行い，先生からさまざまなコメントをいただくことで，自分の不足している点をすぐに理解できるようになりました。また，ミニプロジェクトを最後まで完了させたことで，実際の研究において何をすべきかを一つ一つ学ぶことができました。この経験は，自分の修論研究に向けて非常に役立つものでした。」といったコメントをいただきました。今後も学生にとって有益となる知識やスキルの修得に貢献できる授業を受講生の皆さんと協議しながら提供できればと思います。

【その他の重要事項】
授業の内容や運営方法の詳細について説明しますので，受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一 (2011). 音声分析ソフトウェアPraatを用いた聴取実験：F0再合成による刺激作成と実験の制御　日本音響学会誌, 67, 345-350.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して　法政大学文学部紀要, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this course, students will learn about the fundamental principles and cognitive mechanisms that underlie the processing of spoken language.
[Learning objectives]
By the end of the course, students should be able to describe the physical properties of spoken language and the mechanisms underlying how it is produced and perceived by humans. Students should also be able to analyze speech using appropriate software.
[Learning activities outside of classroom]

(1) For each class period, students should do the assigned reading, work on homework assignments, and prepare for presentation and discussion for the next class. (2) Students should also spend time using speech analysis software and present its output in class. The standard study time required before and after each class is 4 hours total.
[Grading criteria/policy]
Grades will be determined based on class participation and homework (60%), and final presentation and paper (40%).

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

Academic English (Effective Writing) A

安部　義治

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】
英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセーが書けるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は原則として対面で行うものとする。ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセーを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセーを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションの終了後には良かった点や改善すべき点を口頭でフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Skills and Strategies(1): Finding the Meanings of Words	問題演習
第2回	Borders on the Land, in the Ocean, and in the Air: Reading	問題演習
第3回	Borders on the Land, in the Ocean, and in the Air: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第4回	Walls as Borders: Reading	問題演習
第5回	Walls as Borders: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第6回	Skills and Strategies(2): Finding the Topic of a Paragraph	問題演習
第7回	Border Control: Reading	問題演習
第8回	Border Control: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第9回	Skills and Strategies(3): Noticing Parts of Words	問題演習
第10回	Where Does Your Name Come From?: Reading	問題演習
第11回	Where Does Your Name Come From?: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第12回	Changing Names: Reading	問題演習
第13回	Changing Names: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第14回	Making Connections	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。指定されたトピックに関するエッセーを各ユニット毎に書くことが必要となる。

【テキスト（教科書）】
Williams, J. *Making Connections 1. 2nd edition.* CUP, 2013.

【参考書】
特になし

【成績評価の方法と基準】
偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞第二言語習得、TESOL
＜研究テーマ＞第二言語学習者による項構造の習得
＜主要研究業績＞日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010年12月 *Second Language*. vol.9, pp.19-48.

【Outline (in English)】
【Course Outline】
Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to write cogent English essays.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to read the relevant part of the textbook before the class. Writing specified essays is compulsory.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be decided based on presentation (50%) and class participation (50%).

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

Academic English (Effective Writing) B

安部　義治

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】
英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセーが書けるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は原則として対面で行うものとする。ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセーを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセーを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションの終了後には良かった点や改善すべき点を口頭でフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Skills and Strategies(5): Collocations	問題演習
第2回	Food from the Old World and the New World: Reading	問題演習
第3回	Food from the Old World and the New World: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第4回	Fast Food: Reading	問題演習
第5回	Fast Food: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第6回	Skills and Strategies(6): Finding Supporting Details	問題演習
第7回	Table Manners: Reading	問題演習
第8回	Table Manners: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第9回	Skills and Strategies(7): Phrases	問題演習
第10回	A Short History of Public Transportation: Reading	問題演習
第11回	A Short History of Public Transportation: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第12回	Bicycles for City Transportation: Reading	問題演習
第13回	Bicycles for City Transportation: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第14回	Making Connections	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。指定されたトピックに関するエッセーを各ユニット毎に書くことが必要となる。

【テキスト（教科書）】
Williams, J. *Making Connections 1. 2nd edition.* CUP, 2013.

【参考書】
特になし

【成績評価の方法と基準】
偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞第二言語習得、TESOL
＜研究テーマ＞第二言語学習者による項構造の習得
＜主要研究業績＞日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010年12月 *Second Language*. vol.9, pp.19-48.

【Outline (in English)】
【Course Outline】
Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to write cogent English essays.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to read the relevant part of the textbook before the class. Writing specified essays is compulsory.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be decided based on presentation (50%) and class participation (50%).

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

Academic English (Oral Presentation) A

安部　義治

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】
英米圏の大学で必要とされる英語レベルでプレゼンテーションができるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は原則として対面で行うものとする。ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセーを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセーを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションの終了後には良かった点や改善すべき点を口頭でフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Skills and Strategies(9): Finding the Meanings of Words	問題演習
第2回	The Importance of Sleep: Reading	問題演習
第3回	The Importance of Sleep: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第4回	Getting Enough Sleep: Reading	問題演習
第5回	Getting Enough Sleep: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第6回	Skills and Strategies(10): Finding Causes and Effects	問題演習
第7回	Your Body Clock: Reading	問題演習
第8回	Your Body Clock: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第9回	Skills and Strategies(11): Noticing Parts of Words	問題演習
第10回	The Power of Music: Reading	問題演習
第11回	The Power of Music: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第12回	Can Anyone Be a Musician?: Reading	問題演習
第13回	Can Anyone Be a Musician?: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第14回	Making Connections	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。指定されたトピックに関するエッセーを各ユニット毎に書くことが必要となる。

【テキスト（教科書）】
Williams, J. *Making Connections 1. 2nd edition.* CUP, 2013.

【参考書】
特になし

【成績評価の方法と基準】
偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞第二言語習得、TESOL
＜研究テーマ＞第二言語学習者による項構造の習得
＜主要研究業績＞日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010年12月 *Second Language*. vol.9, pp.19-48.

【Outline (in English)】
【Course Outline】
Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do a decent presentation.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to read the relevant part of the textbook before the class. Writing specified essays is compulsory.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be decided based on presentation (50%) and class participation (50%).

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

Academic English (Oral Presentation) B

安部　義治

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】
英米圏の大学で必要とされる英語レベルでプレゼンテーションができるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は原則として対面で行うものとする。ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセーを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセーを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションの終了後には良かった点や改善すべき点を口頭でフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Skills and Strategies(13): Collocations	問題演習
第2回	The Dark Side of Nature: Reading	問題演習
第3回	The Dark Side of Nature: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第4回	Predicting and Preparing for Natural Disasters: Reading	問題演習
第5回	Predicting and Preparing for Natural Disasters: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第6回	Skills and Strategies(14): Organizing Notes in Outlines	問題演習
第7回	A Natural Disaster from Outer Space?: Reading	問題演習
第8回	A Natural Disaster from Outer Space?: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第9回	Skills and Strategies(15): Phrases	問題演習
第10回	Work and Leisure: Reading	問題演習
第11回	Work and Leisure: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第12回	Leisure Activities: Reading	問題演習
第13回	Leisure Activities: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第14回	Making Connections	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。指定されたトピックに関するエッセーを各ユニット毎に書くことが必要となる。

【テキスト（教科書）】
Williams, J. *Making Connections 1. 2nd edition.* CUP, 2013.

【参考書】
特になし

【成績評価の方法と基準】
偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞第二言語習得、TESOL
＜研究テーマ＞第二言語学習者による項構造の習得
＜主要研究業績＞日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010年12月 *Second Language*. vol.9, pp.19-48.

【Outline (in English)】
【Course Outline】
Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do a decent presentation.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to read the relevant part of the textbook before the class. Writing specified essays is compulsory.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be decided based on presentation (50%) and class participation (50%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学研究 I

小倉　慈司

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
儀式書から検討する日本古代史。儀式書を題材に古代史料を独力で読解できるようにし、大学院生にふさわしい研究能力・論文執筆能力を身につける。

【到達目標】
儀式書を独力で読解できるようにする。文字の異同も含めた本文検討ができるようにする。史料をもとに先行研究を把握し、自ら課題を発掘して研究を進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
古代の儀式書のなかから一点を選び、その読解を行ない当該史料の歴史的意義や先行研究、関連史料、問題点について報告する。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。なお、授業は原則、対面授業でおこなう予定であるが、状況に応じ、参加者と相談の上、オンライン授業に切り替えることがある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	儀式書の研究史	ガイダンス（1）
第2回	儀式書の研究法	ガイダンス（2）
第3回	『西宮記』巻1四方拝	左記史料の検討
第4回	『西宮記』巻1朝拝	左記史料の検討
第5回	『西宮記』巻1供御薬事	左記史料の検討
第6回	『西宮記』巻1小朝拝	左記史料の検討
第7回	『西宮記』巻1元日節会(1)	左記史料の検討
第8回	『西宮記』巻1元日節会(2)	左記史料の検討
第9回	『西宮記』巻1童親王拝覲事	左記史料の検討
第10回	『西宮記』巻1二宮大饗（1）	左記史料の検討
第11回	『西宮記』巻1二宮大饗（2）	左記史料の検討
第12回	『西宮記』巻1国忌	左記史料の検討
第13回	『西宮記』巻1叙位（1）	左記史料の検討
第14回	『西宮記』巻1叙位（2）	左記史料の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回、次回の授業範囲を予習する。特に発表担当者は担当史料の読解や問題点を調べ、レジュメを作成する。本授業の準備時間は平均して毎回４時間以上を標準とし、復習時間は毎回１時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
神道大系『西宮記』神道大系編纂会
故実叢書『西宮記』明治書院

【参考書】
尊経閣善本影印集成『西宮記』『北山抄』『江家次第』『内裏式』
宮内庁書陵部本影印集成『西宮記』
神道大系『内裏式』『儀式』『北山抄』『江家次第』
故実叢書『内裏式』『内裏儀式』『北山抄』『江家次第』
西本昌弘『新撰年中行事』八木書店
橋本義彦『日本古代の儀礼と典籍』青史出版
所功『平安朝儀式書成立史の研究』『宮廷儀式書成立史の再検討』国書刊行会
ジャパンナレッジ等の活用は必須。
他、参考文献は適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
配分：平常点（50％）および発表内容（50％）
評価基準：授業参加と発表における取り組み、史料の理解度

【学生の意見等からの気づき】
該当なし

【その他の重要事項】
受講者との相談により、取り上げる儀式書を変更する場合もある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本古代史、史料学
＜研究テーマ＞古代神祇祭祀制度、延喜式、禁裏公家文庫研究など
＜主要研究業績＞
『古代律令国家と神祇行政』（同成社　2021年）
『事典 日本の年号』（吉川弘文館　2019年）
（共著）天皇の歴史9『天皇と宗教』講談社学術文庫　2018年）

【Outline (in English)】
This course aims to help students acquire the necessary skills and knowledge needed to conduct studies on the classical history of Japan. We will study some ritual books.
The goals of this course are to acquire research and writing skills appropriate for graduate students in classical Japanese history.
Before each class meeting, students will be expected to spend four hours understanding the course content, and after each class meeting,　will be expected to spend one hour reviewing.
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Report contents: 50%、in class contribution: 50%

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学研究 II

及川　亘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の16世紀末～17世紀初頭は城郭建設の時代である。天下人徳川家康の城郭建設に関する諸大名の間もしくは大名と家臣の間で取り交わされた書状を中心に読解し、当時の政治・社会の在り方について考える。

【到達目標】
16～17世紀の日本史を研究するうえで、書状の読解は重要な要素であるが、難しい点の一つは、書状には基本的に日付のみで年次が記されないことにある。書状の年次を確定することは、その内容を正確に把握するうえで必要不可欠であり、一方で書状の年次を確定するためには、その内容を正確に把握しなければならない。本授業では城郭建設に関する書状の読解を通じて、16～17世紀史料の取り扱いの基礎的技術を獲得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
細川家（豊前小倉・肥後熊本）、鍋島家（肥前佐賀）、毛利家（長門萩）、浅野家（安芸広島）など、主に西国大名の史料を史料写真を用いて読解する。
最初の数回は教員側で史料読解の方法を例示する。その後は担当者を決めて、担当史料の内容解釈・解説をしてもらい、参加者全員で討論する。教員側からは参加者の読みを訂正し、関連史料などを提示して解説するという形でフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業方法と使用テキストに関する説明。
第2回	徳川家康による築城に関する史料を読む	教員による史料読解の例示
第3回	徳川家康による築城に関する史料を読む	教員による史料読解の例示
第4回	徳川家康による築城に関する史料を読む―伏見城①	担当者による報告と討論
第5回	徳川家康による築城に関する史料を読む―伏見城②	担当者による報告と討論
第6回	徳川家康による築城に関する史料を読む―江戸城①	担当者による報告と討論
第7回	徳川家康による築城に関する史料を読む―江戸城②	担当者による報告と討論
第8回	徳川家康による築城に関する史料を読む―江戸城③	担当者による報告と討論
第9回	徳川家康による築城に関する史料を読む―駿府城	担当者による報告と討論
第10回	徳川家康による築城に関する史料を読む―名古屋城①	担当者による報告と討論
第11回	徳川家康による築城に関する史料を読む―名古屋城②	担当者による報告と討論
第12回	徳川家康による築城に関する史料を読む―その他①	担当者による報告と討論
第13回	徳川家康による築城に関する史料を読む―その他②	担当者による報告と討論
第14回	まとめ―書状から読み解く時代性	第13回までの全体の内容について討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間（合計4時間）を標準とする。
報告担当者は、担当史料を読解し、その年次・内容について十分に調査検討することが求められる。もちろん担当者以外も予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】
教科書は用いず、テキストはプリントを配布する。

【参考書】
『大日本史料』第十二編之一～六十三
『大日本古文書』「毛利家文書」「吉川家文書」「浅野家文書」
『佐賀県史料集成』一～三〇
『佐賀県近世史料』第一編・第二編
『大日本近世史料』細川家史料
『松井家文庫所蔵古文書調査報告書』一～二十
『出水叢書　綿考輯録』一～四
『萩藩閥閲録』一～五
『山口県史』史料編近世二
など

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業内での担当箇所の報告と授業への参加度）により評価する。（100%）

【学生の意見等からの気づき】
関連史料なども使いながら、中近世の政治・社会が具体的にイメージできるようにしたい。また実践を通じて史料読解の方法が身に着くようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
基本的に対面で授業を進める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本中・近世史
＜研究テーマ＞
中近世移行期の政治・社会・経済の研究
公儀普請の研究
＜主要研究業績＞
論文「「公儀御普請」―現場監督する大名―」（『城郭史研究』41号、2022年）
論文「「名古屋御城石垣絵図」を読む」（名古屋城調査研究センター編『史料が語る　名古屋城石垣普請の現場』名古屋城調査研究報告3　資料調査研究報告書1、2022年）
編著『近世統一政権の成立と天下普請の展開』（東京大学史料編纂所研究成果報告2021-18、2022年
論文「現場監督する大名―多久家文書にみる公儀普請―」小宮木代良編『近世前期の公儀軍役負担と大名家―佐賀藩多久家文書を読みなおす―』（岩田書院、2019年）
論文「旅行者と通行証―関所通過のメカニズム―」高橋慎一朗・千葉敏之編『移動者の中世―史料の機能、日本とヨーロッパ―』（東京大学出版会、2017年）
編著『薬師寺の中世文書』東京大学史料編纂所研究成果報告2015-3、2016年
論文「中世の戦争と商人」（高橋典幸編『生活と文化の歴史学5　戦争と平和』竹林舎、2014年）
論文「町の経済―算用帳にみる京都の人的結合―」（高橋慎一朗・千葉敏之編『中世の都市―史料の魅力、日本とヨーロッパ―』東京大学出版会、2009年）

論文「戦国期の薬師寺と唐招提寺」（勝俣鎮夫編『寺院・検断・徳政―戦国時代の寺院史料を読む―』山川出版社、2004年）

【Outline (in English)】
【Course outline】
From the end of the 16th century to the beginning of the 17th century, Japan entered the era of castle construction. Read mainly the letters regarding the construction of the castle during by Tokugawa Ieyasu, and think about the state of politics and society at that time.
【Learing Objectives】
Reading comprehension of letters is an important factor in studying Japanese history in the 16th and 17th centuries, but one of the difficulties is that the letters are basically dated only and do not include the year. Determining the year of a letter is indispensable for accurately grasping its contents, while in order to determine the year of a letter, it is necessary to accurately grasp its contents. The goal of this class is to acquire the basic skills of handling historical materials from the 16th to 17th centuries through reading comprehension of letters on castle construction.
【Work to be done outside of class (preparation, etc.) 】
The standard preparatory study / review time for this class is 2 hours each.
The reporter is required to read the historical materials in charge and thoroughly investigate and examine the year and contents. Of course, it is required to prepare for others.
【Grading Criteria】
Evaluate based on normal points (report of the part in charge in the class and degree of participation in the class). (100%)

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学原典研究Ⅰ

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
鎌倉時代後期に編纂された公家の歴史書である『百練抄』を講読する。中世史料の日本漢文を訓読する基礎的な能力を持つことを前提とし、内容を深く理解する力を養成する。『百練抄』のうち、鎌倉時代前期の記事を取り上げ、本文を訓読・現代語訳し、内容を理解する。その際、同時代の公家日記である『玉葉』『明月記』、鎌倉幕府の『吾妻鏡』などの史料や先行研究を参照し、当該記事に関する史実について議論する。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】
講読・研究発表や議論、レポート執筆を通じて、中世の国家・政治や社会について研究する方法、研究成果を公表する方法を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『百練抄』とは	履修のガイダンス
第2回	『百練抄』講読（1）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第3回	『百練抄』講読（2）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『百練抄』講読（3）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第6回	『百練抄』講読（4）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『百練抄』講読（5）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第9回	『百練抄』講読（6）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『百練抄』講読（7）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第12回	『百練抄』講読（8）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	『百練抄』と公家の日記	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講読する記事について予習しておく。担当者は担当範囲を読解し、関係する史料や研究論文を収集する。また、発表レジュメを用意し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員にファイルを配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『新訂増補国史大系　日本紀略（後篇）百錬抄』（吉川弘文館、２００７年）
「学習支援システム」の「教材」から、講読する部分のコピー（ＰＤＦファイル）を配布する。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点５０%、学期末レポート点５０%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
議論が活発になるように努める。

【学生が準備すべき機器他】
「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードすること。また、「掲示場」に発表レジュメ等を掲示したり、ダウンロードしたりすること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞日中国際交流史・日本仏教史
＜主要研究業績＞『中世禅律仏教論』（山川出版社、2009年）・『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学原典研究 II

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
鎌倉時代後期に編纂された公家の歴史書である『百練抄』を講読する。中世史料の日本漢文を訓読する基礎的な能力を持つことを前提とし、内容を深く理解する力を養成する。『百練抄』のうち、鎌倉時代前期の記事を取り上げ、本文を訓読・現代語訳し、内容を理解する。その際、同時代の公家日記である『玉葉』『明月記』、鎌倉幕府の『吾妻鏡』などの史料や先行研究を参照し、当該記事に関する史実について議論する。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】
講読・研究発表や議論、レポート執筆を通じて、中世の国家・政治や社会について研究する方法、研究成果を公表する方法を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『百練抄』とは	履修のガイダンス
第2回	『百練抄』講読（1）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第3回	『百練抄』講読（2）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『百練抄』講読（3）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第6回	『百練抄』講読（4）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『百練抄』講読（5）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第9回	『百練抄』講読（6）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『百練抄』講読（7）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第12回	『百練抄』講読（8）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	『百練抄』と公家の日記	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講読する記事について予習しておく。担当者は担当範囲を読解し、関係する史料や研究論文を収集する。また、発表レジュメを用意し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員にファイルを配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『新訂増補国史大系　日本紀略（後篇）百錬抄』（吉川弘文館、２００７年）
「学習支援システム」の「教材」から、講読する部分のコピー（ＰＤＦファイル）を配布する。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点５０%、学期末レポート点５０%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
議論が活発になるように努める。

【学生が準備すべき機器他】
「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードすること。また、「掲示場」に発表レジュメ等を掲示したり、ダウンロードしたりすること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞日中国際交流史・日本仏教史
＜主要研究業績＞『中世禅律仏教論』（山川出版社、2009年）・『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本古代史特殊研究Ⅰ

山口　英男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】
平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第3回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第4回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第5回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第6回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第7回	行政実務関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第8回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第9回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第10回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第11回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第12回	武芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	武芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します
第13回	武芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第14回	武芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】
事前に印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】
『大日本史料』第１・２・３編
『訳注延喜式』上・中・下
『読み解き古代史料』（山川出版社　2024年）
「駒牽関係史料」（『山梨県史　資料編３』山梨県、2001年、山口英男編纂担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史　通史編１』2004年、山口英男執筆担当）
「編年史料編纂支援資源化データベースMIDOH」（東京大学史料編纂所）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w28/search
「大日本史料総合データベース」（同上）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w61/search

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】
授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『読み解き古代史料』山川出版社　2024年（共著）
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年
「畿内近傍の牧と馬寮の馬」（広瀬和雄・山中章・吉川真司編『講座畿内の古代学』Ⅳ軍事と対外交渉　雄山閣　2022年）
「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店　2021年）
「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社　2021）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）

【Outline (in English)】
Course outline
To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.
Learning Objectives
Be able to read and understand historical materials related to government affairs and ceremonies in the Heian period
Learning activities outside of classroom
Read through the historical materials to be covered in class in advance. The standard time for preparation and review for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
The grade will be assessed comprehensively based on active participation in class, the content of the report, the materials prepared, participation in discussions, and the content of the report.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本古代史特殊研究 II

山口　英男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】
平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	仏事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	仏事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第3回	仏事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第4回	仏事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第5回	仏事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第6回	神事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	神事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します
第7回	神事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第8回	神事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第9回	神事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第10回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式書・法制史料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第11回	朝廷儀礼関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第12回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第13回	朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第14回	平安時代の政務・儀式の展開と特質	平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】
担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】
『読み解き古代史料』山川出版社、2024年
『大日本史料』第１・２・３編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史　資料編３』山梨県、2001年、山口英男編纂担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史　通史編１』2004年、山口英男執筆担当）
「編年史料編纂支援資源化データベースMIDOH」（東京大学史料編纂所）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w28/search
「大日本史料総合データベース」（同上）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w61/search

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】
授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『読み解き古代史料』山川出版社　2024年（共著）
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年
「畿内近傍の牧と馬寮の馬」（広瀬和雄・山中章・吉川真司編『講座畿内の古代学』Ⅳ軍事と対外交渉　雄山閣　2022年）
「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店　2021年）
「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社　2021）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）

【Outline (in English)】
Course outline
To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.
Learning Objectives
Be able to read and understand historical materials related to government affairs and ceremonies in the Heian period
Learning activities outside of classroom
Read through the historical materials to be covered in class in advance. The standard time for preparation and review for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
The grade will be assessed comprehensively based on active participation in class, the content of the report, the materials prepared, participation in discussions, and the content of the report.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本中世史特殊研究Ⅰ

末柄　豊

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
室町時代の日記を読む

【到達目標】
室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明5年（1473）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	概要の説明、分担箇所の決定
第2回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】
『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】
元木泰雄・松薗斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】
報告内容および討論への参加（100％）

【学生の意見等からの気づき】
該当なし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞室町時代の政治史・文化史・史料論
＜主要研究業績＞
『戦国時代の天皇〈日本史リブレット82〉』（山川出版社、2018年）
「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）
「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

【Outline (in English)】
In this course, students will read a diary from the Muromachi period. The purpose of this course is to learn how to read and understand diaries, as well as to deepen understanding of politics, society, culture, religion, etc. of the period.
The presenter will examine the diaries in detail, and will also wade through relevant historical documents and previous research in order to present a thorough report. Grading will be based on the content of the report and participation in the discussion (100%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本中世史特殊研究 II

末柄　豊

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
室町時代の日記を読む

【到達目標】
室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明5年（1473）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第2回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読14	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】
『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】
元木泰雄・松薗斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】
報告内容および討論への参加（100％）

【学生の意見等からの気づき】
該当なし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞室町時代の政治史・文化史・史料論
＜主要研究業績＞
『戦国時代の天皇〈日本史リブレット82〉』（山川出版社、2018年）
「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）
「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

【Outline (in English)】
In this course, students will read a diary from the Muromachi period. The purpose of this course is to learn how to read and understand diaries, as well as to deepen understanding of politics, society, culture, religion, etc. of the period.
The presenter will examine the diaries in detail, and will also wade through relevant historical documents and previous research in order to present a thorough report. Grading will be based on the content of the report and participation in the discussion (100%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本中世史特殊研究III

仁平　義孝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
西園寺公衡の日記『公衡公記』を講読し、鎌倉時代後期の政治や社会について考察する。

【到達目標】
中世記録史料の読解力や、鎌倉時代の政治・社会、とくに公家社会に関する研究に必要な方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は受講生による輪番報告を中心に進め、報告に対する質疑・討論を通して条文の理解を深めていきたい。今年度は正和4年(1315)3月12日条から講読する。
報告者は、担当条文から読み取った事柄について詳細に報告し、その報告内容に関して参加者全員で討論する。報告内容に対するフィードバックは、その場で行う。
また、受講生の個人研究発表の機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業方法の説明、分担の決定
第2回	『公衡公記』講読1	担当者の報告、質疑・討論
第3回	『公衡公記』講読2	担当者の報告、質疑・討論
第4回	『公衡公記』講読3	担当者の報告、質疑・討論
第5回	『公衡公記』講読4	担当者の報告、質疑・討論
第6回	研究発表1	個人研究の発表
第7回	『公衡公記』講読5	担当者の報告、質疑・討論
第8回	『公衡公記』講読6	担当者の報告、質疑・討論
第9回	『公衡公記』講読7	担当者の報告、質疑・討論
第10回	研究発表2	個人研究の発表
第11回	『公衡公記』講読8	担当者の報告、質疑・討論
第12回	『公衡公記』講読9	担当者の報告、質疑・討論
第13回	『公衡公記』講読10	担当者の報告、質疑・討論
第14回	まとめ	春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
担当条文について詳細に調べ、関連史料や先行研究などを精査して十全な準備をする。

【テキスト（教科書）】
『公衡公記』（史料纂集）

【参考書】
授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点（100％）。

【学生の意見等からの気づき】
とくになし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞鎌倉時代政治史
＜主要研究業績＞「執権政治期の幕政運営について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』45集、1992年）
「鎌倉幕府発給文書にみえる年号裏書について」（中野栄夫編『日本中世の政治と社会』吉川弘文館、2003年）
「執権時頼・長時期の幕政運営について」（『法政史学』79号、2013年）

【Outline (in English)】
（Course Outline）
This course studies society of the last part of Kamakura era.
（Learning 0bjectives）
The goals of this course are to acquisition of the study method of the Kamakura era.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria/Policies）
Your overall grade in the class will be decided based on the following
in class contribution:100%

HIS500B4（史学 / History 500）

日本中世史特殊研究Ⅳ

仁平　義孝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
西園寺公衡の日記『公衡公記』を講読し、鎌倉時代後期の政治や社会について考察する。

【到達目標】
中世記録史料の読解力や、鎌倉時代の政治・社会、とくに公家社会に関する研究に必要な方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は受講生による輪番報告を中心に進め、報告に対する質疑・討論を通して条文の理解を深めていきたい。春学期に講読した条文に続けて読み進めていく。
報告者は、担当条文から読み取った事柄について詳細に報告し、その報告内容に関して参加者全員で討論する。報告内容に対するフィードバックは、その場で行う。
また、受講生の個人研究発表の機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『公衡公記』講読1	担当者の報告、質疑・討論
第2回	『公衡公記』講読2	担当者の報告、質疑・討論
第3回	『公衡公記』講読3	担当者の報告、質疑・討論
第4回	『公衡公記』講読4	担当者の報告、質疑・討論
第5回	研究発表1	個人研究の発表
第6回	『公衡公記』講読5	担当者の報告、質疑・討論
第7回	『公衡公記』講読6	担当者の報告、質疑・討論
第8回	『公衡公記』講読7	担当者の報告、質疑・討論
第9回	『公衡公記』講読8	担当者の報告、質疑・討論
第10回	研究発表2	個人研究の発表
第11回	『公衡公記』講読9	担当者の報告、質疑・討論
第12回	『公衡公記』講読10	担当者の報告、質疑・討論
第13回	『公衡公記』講読11	担当者の報告、質疑・討論
第14回	まとめ	秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
担当条文について詳細に調べ、関連史料や先行研究などを精査して十全な準備をする。

【テキスト（教科書）】
『公衡公記』（史料纂集）

【参考書】
授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点（100％）。

【学生の意見等からの気づき】
とくになし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞鎌倉時代政治史
＜主要研究業績＞「執権政治期の幕政運営について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』45集、1992年）
「鎌倉幕府発給文書にみえる年号裏書について」（中野栄夫編『日本中世の政治と社会』吉川弘文館、2003年）
「執権時頼・長時期の幕政運営について」（『法政史学』79号、2013年）

【Outline (in English)】
（Course Outline）
This course studies society of the last part of Kamakura era.
（Learning 0bjectives）
The goals of this course are to acquisition of the study method of the Kamakura era.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria/Policies）
Your overall grade in the class will be decided based on the following
in class contribution:100%

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近世史特殊研究Ⅰ

山崎　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自ら研究テーマを設定した上で、そのテーマに関する研究状況を整理して論点を導き出し、必要な史料を博捜して丁寧に読み解くことで答えを出す力を身につけることを目標とする。

【到達目標】
①先行研究を踏まえて議論することができる。
②史料をもとに歴史像を組み立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、授業の概要説明、発表順の決定
第2回	研究発表（１）	研究発表と質疑
第3回	研究発表（２）	研究発表と質疑
第4回	研究発表（３）	研究発表と質疑
第5回	研究発表（４）	研究発表と質疑
第6回	研究発表（５）	研究発表と質疑
第7回	論文講読（１）	研究発表と質疑
第8回	論文講読（２）	研究発表と質疑
第9回	論文講読（３）	研究発表と質疑
第10回	論文講読（４）	研究発表と質疑
第11回	論文講読（５）	研究発表と質疑
第12回	研究計画発表（１）	テーマ設定と研究史整理
第13回	研究計画発表（２）	テーマ設定と史料状況
第14回	まとめ	総括と質疑

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
各自研究を進める。論文講読にあたっては、事前に対象論文を読んでおくこと。また、この講読を機に関係する主要論文も読むことが望ましい。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
質疑の時間を十分にとり、受講者の疑問点を掘り下げたり、問題意識を確認したりする。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞地域社会論、災害史
＜主要研究業績＞「近世水害村の存続条件―赤沼河原新田と千曲川―」（『中央大学文学部紀要・史学』70号、2025年）、『近世幕領地域社会の研究』（校倉書房、2005年）

【Outline (in English)】
（Course outline）
The aim of this course is to help students acquire historical research methods.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
- Be able to discuss based on previous research.
- Be able to construct a historical image based on historical documents.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content
（Grading Criteria /Policy）
Final grade will be calculated according to the following process
In-class contribution.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近世史特殊研究 II

山崎　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自ら研究テーマを設定した上で、そのテーマに関する研究状況を整理して論点を導き出し、必要な史料を博捜して丁寧に読み解くことで答えを出す力を身につけることを目標とする。

【到達目標】
修士論文の作成に必要な能力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックする。史料講読は、事前に割り当てを決めず、全員で検討するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究発表と質疑
第3回	研究発表（2）	研究発表と質疑
第4回	研究発表（3）	研究発表と質疑
第5回	研究発表（4）	研究発表と質疑
第6回	研究発表（5）	研究発表と質疑
第7回	史料講読（1）	順番に史料を読み下し、現代語訳し、内容を検討する。
第8回	史料講読（2）	順番に史料を読み下し、現代語訳し、内容を検討する。
第9回	史料講読（3）	順番に史料を読み下し、現代語訳し、内容を検討する。
第10回	史料講読（4）	順番に史料を読み下し、現代語訳し、内容を検討する。
第11回	史料講読（5）	順番に史料を読み下し、現代語訳し、内容を検討する。
第12回	研究計画発表（1）	テーマ設定と研究史整理
第13回	研究計画発表（2）	テーマ設定と史料状況
第14回	まとめ	総括と質疑

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
質疑の時間を十分にとり、受講者の疑問点を掘り下げたり、問題意識を確認したりする。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞地域社会論、災害史
＜主要研究業績＞「近世水害村の存続条件―赤沼河原新田と千曲川―」（『中央大学文学部紀要・史学』70号、2025年）、『近世幕領地域社会の研究』（校倉書房、2005年）

【Outline (in English)】
（Course outline）
The aim of this course is to help students acquire historical research methods.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to acquire the skills necessary to write a master's thesis.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course contents.
（Grading Criteria /Policy）
Final grade will be calculated according to the following process
In-class contribution.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近世史特殊研究III

西沢　淳男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一国（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物価・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】
日本近世社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていくことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がりは、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配付し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、 授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第2回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義
第3回	「豊田友直日記」(1)	日記の講読と質疑・応答
第4回	「豊田友直日記」(2)	日記の講読と質疑・応答
第5回	「豊田友直日記」(3)	日記の講読と質疑・応答
第6回	「豊田友直日記」(4)	日記の講読と質疑・応答
第7回	「豊田友直日記」(5)	日記の講読と質疑・応答
第8回	「豊田友直日記」(6)	日記の講読と質疑・応答
第9回	「豊田友直日記」(7)	日記の講読と質疑・応答
第10回	「豊田友直日記」(8)	日記の講読と質疑・応答
第11回	「豊田友直日記」(9)	日記の講読と質疑・応答
第12回	「豊田友直日記」(10)	日記の講読と質疑・応答
第13回	「豊田友直日記」(11)	日記の講読と質疑・応答
第14回	「豊田友直日記」(12)	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】
西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1 (岩田書院、2019年)7,000円＋税。必要に応じて教員がコピーを配付します。購入希望の場合は、教員より半額で購入できます。

【参考書】
西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015年)920円＋税。その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】
各自の発表と討論参加(70％)、平常点(30％)

【学生の意見等からの気づき】
より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【学生が準備すべき機器他】
資料の閲覧等もあるためパソコン・タブレット等の持参が望ましい。

【その他の重要事項】
原則教室における対面で行いますが、受講生の都合・状況に応じてオンラインにも対応します。

【担当教員の専門分野等】
https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline (in English)】
(Course outline)
This class, you will read the diary of a local official of the Edo Shogunate.
(Learning Objectives)
The goals of this course are to understand the local life and culture of the Edo period.
(Learning activities outside of classroom)
Students will be expected to read and review the historical materials thoroughly. Your study time will be more than four hours for a class.
(Grading Criteria /Policies)
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Presentation and discussion participation : 70%, normal score:30%

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近世史特殊研究Ⅳ

西沢　淳男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一国（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物価・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】
日本近世社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていくことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がりは、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。フィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配付し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、 授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第2回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義 新規受講者がいない場合は講読とします。
第3回	「豊田友直日記」1	日記の講読と質疑・応答
第4回	「豊田友直日記」2	日記の講読と質疑・応答
第5回	「豊田友直日記」3	日記の講読と質疑・応答
第6回	「豊田友直日記」4	日記の講読と質疑・応答
第7回	「豊田友直日記」5	日記の講読と質疑・応答
第8回	「豊田友直日記」6	日記の講読と質疑・応答
第9回	「豊田友直日記」7	日記の講読と質疑・応答
第10回	「豊田友直日記」8	日記の講読と質疑・応答
第11回	「豊田友直日記」9	日記の講読と質疑・応答
第12回	「豊田友直日記」10	日記の講読と質疑・応答
第13回	「豊田友直日記」11	日記の講読と質疑・応答
第14回	「豊田友直日記」12	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】
西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1 (岩田書院、2019年)7,000円＋税。必要に応じて教員がコピーを配付します。購入希望の場合は、教員より半額で購入できます。

【参考書】
西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015年)920円＋税。その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】
各自の発表と討論参加(70％)、平常点(30％)

【学生の意見等からの気づき】
より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【学生が準備すべき機器他】
資料の閲覧等もあるためパソコン・タブレット等の持参が望ましい。

【その他の重要事項】
原則教室における対面で行いますが、受講生の都合・状況に応じてオンラインにも対応します。

【担当教員の専門分野等】
https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline (in English)】
（Course outline）
This class, you will read the diary of a local official of the Edo Shogunate.
（Learning Objectives）
The goals of this course are to understand the local life and culture of the Edo period.
（Learning activities outside of classroom）
Students will be expected to read and review the historical materials thoroughly. Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policies）
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Presentation and discussion participation : 70%, normal score:30%

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近代史特殊研究Ⅰ

内藤　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近現代史では、新たな史料が発掘、公開されることにより、研究水準が引き上げられ、新たな議論が展開されることが珍しくない。授業では、最新の史料をテキストに、内容を分析しながら議論を深めていく。新史料を場として最先端の研究に取り組むスキルを身につけることをめざす。

【到達目標】
新たに発掘、公開された史料を場として、①歴史学的に有効な事実や問題を見出せるようになる、②従来の研究を再確認し、適切な批判ができるようになる、③独創的な研究テーマを考案できるようになる、ことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義と演習、両方式を折衷させる。テキストをもとに個人またはグループにより発表を行い、引き続き教員・学生によるディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	昭和天皇拝謁記研究1	『昭和天皇拝謁記を読む』の書評・研究1
第3回	昭和天皇拝謁記研究2	『昭和天皇拝謁記を読む』の書評・研究2
第4回	昭和天皇拝謁記研究3	『昭和天皇拝謁記を読む』の書評・研究3
第5回	昭和天皇拝謁記研究4	『昭和天皇拝謁記を読む』の書評・研究4
第6回	発表（昭和28年その1）	テキストに関する発表とディスカッション1
第7回	発表（昭和28年その2）	テキストに関する発表とディスカッション2
第8回	発表（昭和28年その3）	テキストに関する発表とディスカッション3
第9回	発表（昭和28年その4）	テキストに関する発表とディスカッション4
第10回	発表（昭和28年その5）	テキストに関する発表とディスカッション5
第11回	発表（昭和28年その6）	テキストに関する発表とディスカッション6
第12回	発表（昭和28年その7）	テキストに関する発表とディスカッション7
第13回	発表（昭和28年その8）	テキストに関する発表とディスカッション8
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストの予習・復習は平素よりコンスタントに進めておく。発表では発表者以外の学生も積極的な議論が行えるようレジュメの内容を予習しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
『昭和天皇拝謁記』5（岩波書店、2022年）

【参考書】
宮内庁編『昭和天皇実録』全19巻（東京書籍、2015～19年）、古川隆久ほか『昭和天皇拝謁記を読む』（岩波書店、2024年）

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業時の積極性などを総合し、これを平常点（100％）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムの利用が可能なIT機器

【その他の重要事項】
・「日本近代史特殊研究」Ⅱ（秋学期）との継続履修を推奨する。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
In this course, students will use the latest historical materials to analyze the contents and hold discussions to improve their research abilities. You will work on the latest themes with the goal of being able to do creative research.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
－ A.Be able to notice historical facts and problems of academic significance.
－ B.Acquire the ability to critique previous research.
－ C.Be able to create an original research theme.
（Learning activities outside of classroom）
Students should read the materials distributed in advance.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and in-class contribution.Combine all elements to make 100%

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近代史特殊研究 II

内藤　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近現代史では、新たな史料が発掘、公開されることにより、研究水準が引き上げられ、新たな議論が展開されることが珍しくない。授業では、最新の公開史料をテキストに、内容を分析しながら議論を深めていく。新史料を場として最先端の研究に取り組むスキルを身につけることをめざす
。

【到達目標】
新たに発掘、公開された史料を場として、①歴史学的に有効な事実や問題を見出せるようになる、②従来の研究を再確認し、適切な批判ができるようになる、③独創的な研究テーマを考案できるようになる、ことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義と演習、両方式を折衷させる。テキストをもとに個人またはグループにより発表を行い、引き続き教員・学生によるディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	百武三郎日記研究1	『百武三郎日記』の書評・研究
第3回	百武三郎日記研究2	『百武三郎日記』の書評・研究2
第4回	百武三郎日記研究3	『百武三郎日記』の書評・研究3
第5回	百武三郎日記研究4	『百武三郎日記』の書評・研究4
第6回	発表（昭和15年その1）	テキストに関する発表とディスカッション1
第7回	発表（昭和15年その2）	テキストに関する発表とディスカッション2
第8回	発表（昭和15年その3）	テキストに関する発表とディスカッション3
第9回	発表（昭和15年その4）	テキストに関する発表とディスカッション4
第10回	発表（昭和15年その5）	テキストに関する発表とディスカッション5
第11回	発表（昭和15年その6）	テキストに関する発表とディスカッション6
第12回	発表（昭和15年その7）	テキストに関する発表とディスカッション7
第13回	発表（昭和15年その8）	テキストに関する発表とディスカッション8
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストの予習・復習は平素よりコンスタントに進めておく。発表では発表者以外の学生も積極的な議論が行えるようレジュメの内容を予習しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
『百武三郎日記』第2巻（岩波書店、2025年）

【参考書】
宮内庁編『昭和天皇実録』全19巻（東京書籍、2015～19年）、木戸日記研究会編『木戸幸一日記』下巻（東京大学出版会、1966年）

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業時の積極性などを総合化し、これを平常点（100％）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムが利用できるIT機器

【その他の重要事項】
・「日本近代史特殊研究」 I （春学期）との継続履修を推奨する。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
In this course, students will use the latest historical materials to analyze the contents and hold discussions to improve their research abilities. You will work on the latest themes with the goal of being able to do creative research.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
－ A.Be able to notice historical facts and problems of academic significance.
－ B.Acquire the ability to critique previous research.
－ C.Be able to create an original research theme.
（Learning activities outside of classroom）
Students should read the materials distributed in advance.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and in-class contribution.Combine all elements to make 100%

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近代史特殊研究III

森田　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　渋沢栄一は、９１年の生涯に約５００の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。
　近代日本の社会構造について、渋沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】
　近代日本の社会構造について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　テーマと史料は、第１回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。
　受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。
　発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	渋沢栄一	渋沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（１）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（２）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（１）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（２）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（１）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（２）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（１）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（２）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（１）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（２）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（１）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（２）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。
本授業の準備・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
適宜、レジュメ・資料を配布する。

【参考書】
適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
報告内容（70％）、コメント等の授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】
２０２５年度とテーマを継続しています。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・Zoom接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近現代史
＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史
＜主要研究業績＞
森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）
森田貴子『三野村利左衛門と益田孝――三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）
森田貴子「華族資本の形成と家政改革――岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済――資本主義への道』日本経済評論社、2004年）
森田貴子「不動産――岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市３　インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline (in English)】
This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business. The goals of this course are to acquire the technique of criticizing historical materials and the ability to compose issues. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近代史特殊研究Ⅳ

森田　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
渋沢栄一は、９１年の生涯に約５００の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。
近代日本の社会構造について、渋沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】
近代日本の社会構造について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
テーマと史料は、第１回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。
受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。
発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	渋沢栄一	渋沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（１）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（２）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（１）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（２）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（１）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（２）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（１）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（２）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（１）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（２）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（１）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（２）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。
本授業の準備・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
適宜レジュメ・資料を配布する。

【参考書】
適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
報告内容（70％）、コメント等の授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】
２０２５年度とテーマを継続しています。
対面授業を予定していますが、事情によりオンライン（リアルタイム）での実施へ変更することがあります。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・Zoom接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近現代史
＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史
＜主要研究業績＞
森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）
森田貴子『三野村利左衛門と益田孝――三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）
森田貴子「華族資本の形成と家政改革――岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済――資本主義への道』日本経済評論社、2004年）
森田貴子「不動産――岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市３　インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline (in English)】
This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business. The goals of this course are to acquire the technique of criticizing historical materials and the ability to compose issues. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本考古学特殊研究Ⅰ

高橋　健

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学者V.G.チャイルドの著作『考古学の方法』（日本語訳）をテキストとして、文献講読と議論を行う。
この授業の目的は、考古資料から人間の過去に迫るための方法論を学ぶことである。

【到達目標】
考古資料から過去の人間に迫るための方法と、そうした方法をめぐって展開されてきた考古学上の議論について理解する。自らの研究対象に対してどのようなアプローチが適切なのかを検討する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式とし、担当部分について発表した上で、議論しながら内容の理解を深める。受講者数によって進め方は変更するが、常時質問を受け付け、オープンに議論を行う。発表に対してのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の方針と内容の説明
第2回	V.G.チャイルドの考古学	講義
第3回	コッシナの文化論	講義
第4回	日本考古学における受容	講義
第5回	考古学とは何か	文献の講読と検討
第6回	考古学の起源と発達	文献の講読と検討
第7回	考古学的資料の本体	文献の講読と検討
第8回	機能の判定	文献の講読と検討
第9回	編年ー文化連続の設定	文献の講読と検討
第10回	時代と時期と年代	文献の講読と検討
第11回	分布区分の設定	文献の講読と検討
第12回	文化の変化	文献の講読と検討
第13回	考古学の本領	文献の講読と検討
第14回	まとめ	現代考古学における位置づけ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
テキストを熟読するとともに、関連する論文の検討が必要になる。

【テキスト（教科書）】
V.G.チャイルド（近藤義郎訳）1964『考古学の方法』（原著：V.G.Child 1983 Piecing together the past. Routledge &Kegan Paul, London.）

【参考書】
授業内で適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表（50％）とレポート（50％）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】
少人数の場合、教員による講義形式の割合を増やす。

【その他の重要事項】
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、実物資料の解釈を意識した授業を行う。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　考古学
＜専門領域＞
考古学
＜研究テーマ＞
北方考古学、骨角器・狩猟漁労具
＜主要研究業績＞
『日本列島における銛猟の考古学的研究』北海道出版企画センター　2008年
「オクヴィク遺跡における銛頭の再加工について」『比較考古学の新地平』同成社　2010年
「石倉貝塚における釣針の製作技法」『動物考古学』30　2013年
「アイヌ文化の骨角製品」『季刊考古学』133　2015年
「オホーツク文化の牙製婦人像」『横浜ユーラシア文化館紀要』9　2021年
「骨角器研究の進展」『季刊考古学』別冊42　2023年
「骨角製漁具の伝播と受容」『考古学研究』70(2)　2023年

【Outline (in English)】
（Course outline）
We will read and discuss "Piecing together the past" (Japanese translation) by V. Gordon Child.
（Learning Objectives）
The purpose of this class is to learn the methodology for approaching the human past from archaeological remains.
（Learning activities outside of classroom）
The standard time for preparation and review for this class is two hours each. Students are asked to read the text carefully and consider related papers.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on in-class presentation (50%) and. term-end report (50%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本考古学特殊研究 II

高橋　健

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
受講者それぞれの問題関心に沿った海外・国内の論文を講読し、議論する。
さまざまな分野の考古学研究において、どのような研究方法が採用されているのかを学ぶ。

【到達目標】
考古学の先行研究においてどのような研究方法が採られているのか、それにはどのような背景があるのかを理解する。さらに、各自のテーマについてどのような方法が適切なのかを検討し、適用する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　対面授業の演習形式とするが、必要に応じて講義時間を設ける。各自の関心のあるテーマに沿った形でいくつかの論文を選び、講読・検討を行う。それを踏まえて、各自のテーマに対してどのような方法が適切であるのか、議論を通じて考察する。順番や内容は、受講者に応じて入れ替える場合がある。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の方法と内容
第2回	研究の実例1	講義とそれにもとづく討論
第3回	研究の実例2	講義とそれにもとづく討論
第4回	海外論文の検討1	発表とそれにもとづく討論
第5回	海外論文の検討2	発表とそれにもとづく討論
第6回	海外論文の検討3	発表とそれにもとづく討論
第7回	縄文時代の論文の検討1	発表とそれにもとづく討論
第8回	縄文時代の論文の検討2	発表とそれにもとづく討論
第9回	弥生時代の論文の検討1	発表とそれにもとづく討論
第10回	弥生時代の論文の検討2	発表とそれにもとづく討論
第11回	各自のテーマの検討1	発表とそれにもとづく討論
第12回	各自のテーマの検討2	発表とそれにもとづく討論
第13回	各自のテーマの検討3	発表とそれにもとづく討論
第14回	総括	振り返りと討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
担当する文献の事前の読み込みと資料作成が必要となる。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。

【参考書】
必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表・討論（50％）とレポート（50％）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【その他の重要事項】
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、考古資料を分析することを念頭において授業を実施する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
考古学
＜研究テーマ＞
北方考古学、骨角器・狩猟漁労具
＜主要研究業績＞
『日本列島における銛猟の考古学的研究』北海道出版企画センター　2008年
「オクヴィク遺跡における銛頭の再加工について」『比較考古学の新地平』同成社　2010年
「石倉貝塚における釣針の製作技法」『動物考古学』30　2013年
「アイヌ文化の骨角製品」『季刊考古学』133　2015年
「オホーツク文化の牙製婦人像」『横浜ユーラシア文化館紀要』9　2021年
「骨角器研究の進展」『季刊考古学』別冊42　2023年
「骨角製漁具の伝播と受容」『考古学研究』70(2)　2023年

【Outline (in English)】
（Course outline）
Students will read and discuss international and domestic papers that are relevant to their own issues and interests.
（Learning Objectives）
Students will learn what methods are used in archaeological research in various fields.
（Learning activities outside of classroom）
The standard time for preparation and review for this class is two hours each. It is necessary to read the relevant literature in advance and create handout materials.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based in-class presentation and discussion (50%) and term-end report (50%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本考古学特殊研究III

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】
物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。
実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術を高める必要がある。本講義では考古学資料から情報を引き出すための方法論について、資料調査（整理・修復）・講読と発表を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。
１）考古学資料の整理・修復等の方法に関する実践・検討
２）考古学の方法論に関する論文・書籍の講読
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	実習資料の概要把握	対象資料の選定と資料整理に関わる予備調査
第3回	資料整理の実践（１）	土器の拓本
第4回	資料整理の実践（２）	土器の断面実測
第5回	資料整理の実践（３）	写真撮影
第6回	資料整理の実践（４）	事実記載
第7回	考古学方法論に関する文献講読（１）	『考古学の方法』（第１章）講読（１）
第8回	考古学方法論に関する文献講読（２）	『考古学の方法』（第１章）講読（２）
第9回	考古学方法論に関する文献講読（３）	『考古学の方法』（第２章）講読（１）
第10回	考古学方法論に関する文献講読（４）	『考古学の方法』（第２章）講読（２）
第11回	考古学方法論に関する文献講読（５）	『考古学の方法』（第３章）講読（１）
第12回	考古学方法論に関する文献講読（６）	『考古学の方法』（第３章）講読（２）
第13回	考古学資料の見学	博物館等での考古学資料の見学と解説
第14回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
第1回　自己の実習計画の立案
第2回　選定した考古学資料に関する学習と整理方針のまとめ
第3回～第6回　実習内容の復習　用具・用材の特性の理解
第7回～第12回　テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
第13回　見学対象資料についての事前学習
第14回　成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】
V.G.チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】
コリン・レンフルー，ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学　理論・方法・実践』東洋書林
ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な貢献20％（実習・講読への積極的な参加・平常点）
個別発表の水準30％（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）
討論の成果20％（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末リポート（成果報告）30％（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】
前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】
※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社　2011年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷―壺形土器を中心として―」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会　2014年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集　環濠集落の諸問題2015』（環濠（壕）論集刊行会　2015年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会　2017年）
「早渕川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期―権田原遺跡の検討を中心として―」『法政考古学』第45集（法政考古学会　2019年）
「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会　2019年）
「権田原遺跡の環濠―大塚遺跡との比較を通じて―」『法政考古学』第47集（法政考古学会　2021年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.
Students will be able to examine and explain archaeological materials from multiple perspectives. Students will be able to write papers based on archaeological materials to the required standard.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本考古学特殊研究Ⅳ

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】
物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。
実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためは、資料を表現する技術も高める必要がある。本講義では考古学資料から得られる情報を表現するための方法について、資料実測・文献講読と発表等を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。
１）考古学資料の整理・作図の方法に関する実践・検討
２）考古学の方法論に関する論文・書籍の講読
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	実習資料の検討	対象資料の概要把握と整理方法の検討
第3回	資料整理の実践（１）	土器の実測
第4回	資料整理の実践（２）	石器の実測
第5回	資料整理の実践（３）	資料のトレース
第6回	資料整理の実践（４）	デジタルトレースの概要と実技
第7回	資料整理の実践（５）	挿図・図版の構成
第8回	考古学方法論に関する文献講読（１）	『考古学の方法』（第４章）講読（１）
第9回	考古学方法論に関する文献講読（２）	『考古学の方法』（第４章）講読（２）
第10回	考古学方法論に関する文献講読（３）	『考古学の方法』（第５章）講読（１）
第11回	考古学方法論に関する文献講読（４）	『考古学の方法』（第５章）講読（２）
第12回	考古学方法論に関する文献講読（５）	『考古学の方法』（第６章）講読（１）
第13回	考古学方法論に関する文献講読（６）	『考古学の方法』（第６章）講読（２）
第14回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
第1回　自己の実習計画の立案
第2回　発掘調査報告書等からみる報告計画のまとめ
第3回～第4回　実習内容の復習
第5回～第7回　トレースの復習と図化の完了
第8回～第13回　テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
第14回　成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】
V.G.チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】
コリン・レンフルー，ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学　理論・方法・実践』東洋書林
ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な貢献20％（実習・講読への積極的な参加・平常点）
個別発表の水準30％（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）
討論の成果20％（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末リポート（成果報告）30％（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】
前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】
※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社　2011年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷―壺形土器を中心として―」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会　2014年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集　環濠集落の諸問題2015』（環濠（壕）論集刊行会　2015年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会　2017年）
「早渕川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期―権田原遺跡の検討を中心として―」『法政考古学』第45集（法政考古学会　2019年）
「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会　2019年）
「権田原遺跡の環濠―大塚遺跡との比較を通じて―」『法政考古学』第47集（法政考古学会　2021年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.
Students will be able to examine and explain archaeological materials from multiple perspectives. Students will be able to write papers based on archaeological materials to the required standard.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS600B4（史学 / History 600）

日本古代史演習Ⅰ

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である「田令集解」があるが、実態との比較も大切である。今年度は「尾張国郡司百姓等解文」を素材に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書なども参照しながら古代の実態に迫っていきたい。

【到達目標】
日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、「尾張国郡司百姓等解文」のような実態を示し史料と比較して史実を導き出す方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業形式は対面授業を原則とする。春学期は第１条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。
発表へのフィードバックについては、次回の授業の初めに、前回の授業での提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	「尾張国郡司百姓等解文」第27条講読(1)	元命の子弟郎等とは何か
第3回	「尾張国郡司百姓等解文」第27条講読（2）	乞い取る「雑物」とは何か
第4回	「尾張国郡司百姓等解文」第27条講読（3）	元命の京洛の邸宅の実態について
第5回	「尾張国郡司百姓等解文」第27条講読（4）	元命息男頼方について
第6回	「尾張国郡司百姓等解文」第27条講読（5）	部内郡司の実態について
第7回	「尾張国郡司百姓等解文」第28条講読(1)	夫駄の賦課とは似か
第8回	「尾張国郡司百姓等解文」第28条講読(2)	絹色の実態について
第9回	「尾張国郡司百姓等解文」第28条講読(3)	「五家の財」とは何か
第10回	「尾張国郡司百姓等解文」第28条講読(4)	旧領田地の実態について
第11回	「尾張国郡司百姓等解文」第29条講読(1)	佃数料の実態について
第12回	「尾張国郡司百姓等解文」第29条講読(2)	国司交替の日について
第13回	「尾張国郡司百姓等解文」第29条講読(3)	官物の実態について
第14回	元命の着服の実態	半年間の講読を踏まえて10世紀の諸税の着服が可能になった背景について検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に２時間程度、聴講者の準備学習は標準的に１時間程度を要する。復習はそれぞれ１時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途１時間程度。

【テキスト（教科書）】
『新修稲沢市史』資料編三尾張国解文

【参考書】
条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表が中心となるが、難解な「尾張国郡司百姓等解文」に描かれた実態と批判の論理を構成する記述を正しく理解できたか、諸説の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて出挙の実態についての論理を正しく構築できたかを重視する（75％相当）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（25％相当）。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【その他の重要事項】
ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.
Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.
Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.
Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %). code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B4（史学 / History 600）

日本古代史演習 II

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である「田令集解」があるが、実態との比較も大切である。今年度は「尾張国郡司百姓等解文」を素材に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書なども参照しながら古代の実態に迫っていきたい。

【到達目標】
日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、「尾張国郡司百姓等解文」のような実態を示し史料と比較して史実を導き出す方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業形式は対面授業を原則とする。秋学期は第５条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。
発表へのフィードバックについては、次回の授業の初めに、前回の授業での提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読 (1)	有官散位の正体について
第3回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読 (2)	天文博士・内舎人について
第4回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読 (3)	元命にしたがった五位以下諸官人について
第5回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読 (4)	検田使をめぐって
第6回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読（5）	垸飯の実態について
第7回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読（6）	借家鋪設とは何か
第8回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読 (1)	諸国頒下の官符の内容について
第9回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読 (2)	兵仗を帯すること
第10回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読 (3)	前司填納分について
第11回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読 (4)	王臣家の封戸について
第12回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読（5）	税の銭納の実態について
第13回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読 (6)	家薗とは何か
第14回	律令的国司給与の変貌について	半年間の講読を踏まえて律令的給与制が10世紀にはどのように変質していたのかについて意見交換を行う。修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に２時間程度、聴講者の準備学習は標準的に１時間程度を要する。復習はそれぞれ１時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途１時間程度。

【テキスト（教科書）】
『新修稲沢市史』資料編三尾張国解文

【参考書】
条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表が中心となるが、難解な「尾張国郡司百姓等解文」に描かれた実態と批判の論理を構成する記述を正しく理解できたか、諸説の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて出挙の実態についての論理を正しく構築できたかを重視する（75 %相当）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（25 %相当）。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【その他の重要事項】
ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.
Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.
Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.
Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS600B4（史学 / History 600）

日本古代史演習III

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度と土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、今年度は、日本の税制を定めた養老賦役令と、その直接の母法となった唐賦役令とを比較研究しながら、日唐の違いを析出し、そこから日本古代の特性を描き出すことを目的とする。

【到達目標】
日本の賦役令は中国の賦役令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的な改編なのかを、両者を比較しながら識別する能力を身につける。
単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。また海外史料を自力で読み解く技術も身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業形式は対面授業を原則とする。本年度は賦役令集解第１条から開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。発表へのフィードバックについては、次回の授業の初めに、前回の授業での提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	賦役令集解第10条講読（1）	辺縁国とは
第3回	賦役令集解第10条講読（2）	夷人とは
第4回	賦役令集解第10条講読（3）	雑類とは
第5回	賦役令集解第10条講読（4）	律令法における身分秩序について（倭類を中心に）
第6回	賦役令集解第10条講読（5）	律令法における身分秩序について（外蕃を中心に）
第7回	賦役令集解第10条講読（6）	中華世界と小中華
第8回	賦役令集解第11条講読（1）	免課役の手法
第9回	賦役令集解第11条講読（2）	位記の処理法
第10回	賦役令集解第11条講読（3）	雑任について
第11回	賦役令集解第11条講読（4）	免課役の手法
第12回	賦役令集解第11条講読（5）	蠲符とは
第13回	賦役令集解第11条講読（6）	大宝令との異同について
第14回	春学期の総括	免税措置を中心に日唐比較を整理し、日本古代の特徴を浮かび上がらせる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に2時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に1時間以上を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途１時間程度。

【テキスト（教科書）】
『新訂増補国史大系令集解』

【参考書】
唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表が中心となるが、海外史料である唐令拾遺の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて税制についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表70％）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加30％）。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.
Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".
Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.
Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS600B4（史学 / History 600）

日本古代史演習Ⅳ

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度と土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、今年度は、日本の税制を定めた養老賦役令と、その直接の母法となった唐賦役令とを比較研究しながら、日唐の違いを析出し、そこから日本古代の特性を描き出すことを目的とする。

【到達目標】
日本の賦役令は中国の賦役令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的な改編なのかを、両者を比較しながら識別する能力を身につける。
単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。また海外史料を自力で読み解く技術も身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業形式は対面授業を原則とする。本年度は賦役令集解第１条から開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。発表へのフィードバックについては、次回の授業の初めに、前回の授業での提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	賦役令集解第12条講読（1）	春季課税について
第3回	賦役令集解第12条講読（2）	詐冒の手法
第4回	賦役令集解第12条講読（3）	課役忌避の手法
第5回	賦役令集解第12条講読（4）	逃亡の実態
第6回	賦役令集解第12条講読（5）	夏季課税について
第7回	賦役令集解第12条講読（6）	本司之役割は何か
第8回	賦役令集解第13条講読（1）	課口とは
第9回	賦役令集解第13条講読（2）	篤疾の場合
第10回	賦役令集解第13条講読（3）	侍丁について
第11回	賦役令集解第13条講読（4）	高齢者の処遇法の実態
第12回	賦役令集解第13条講読（5）	課役徴収者死亡の場合
第13回	賦役令集解第13条講読（6）	印記とは何か
第14回	秋学期の総括	日唐の課税方法の違いについて比較史的に総括する。祥瑞についても比較検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に2時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に1時間以上を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途１時間程度。

【テキスト（教科書）】
『新訂増補国史大系令集解』

【参考書】
唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表が中心となるが、海外史料である唐令拾遺の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて税制についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表70％）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加30％）。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.
Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".
Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.
Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS600B4（史学 / History 600）

日本中世史演習Ⅰ

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
三条西実隆（1455～1537）の日記『実隆公記』の講読を中心とし、担当者の読解・考察についての報告を基に全員で議論する。中世史料の日本漢文を訓読する基礎的な能力を持つことを前提とし、中世後期の日記の内容を深く理解する力を養成する。それにより、当時の国家・社会・文化等について批判的に研究する方法を習得することを目的とする。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】
中世史料の日本漢文を正しく訓読した上で、語句を調べ、内容を正確に理解し、現代語訳することができる。所定の事項を満たしたレジュメを作成し、発表することができる。関連史料や先行研究を収集・読解・整理し、自分なりの論点を提示することができる。室町時代を中心に、日本中世史に関する事柄について、自身の見解を提示あるいは発言することができる。所定の条件を満たしたレポートを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『実隆公記』とは	履修のガイダンス
第2回	『実隆公記』講読（1）	読解・考察の報告と議論
第3回	『実隆公記』講読（2）	読解・考察の報告と議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『実隆公記』講読（3）	読解・考察の報告と議論
第6回	『実隆公記』講読（4）	読解・考察の報告と議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『実隆公記』講読（5）	読解・考察の報告と議論
第9回	『実隆公記』講読（6）	読解・考察の報告と議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『実隆公記』講読（7）	読解・考察の報告と議論
第12回	『実隆公記』講読（8）	読解・考察の報告と議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	戦国時代の貴族と京都	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
全員が事前に講読する部分の訓読文を作成する。担当者は担当部分を読解し、関係する論文や史料を収集・読解・整理し、発表レジュメを用意し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員に配布する。発表後、レジュメを修正し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員に配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『実隆公記』（史料纂集）
「学習支援システム」の「教材」から、講読する部分のコピー（ＰＤＦファイル）を配布する。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点５０%、学期末レポート点５０%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
議論が活発になるように努める。

【学生が準備すべき機器他】
「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードすること。また、「掲示場」に発表レジュメ等を掲示したり、ダウンロードしたりすること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞日中国際交流史・日本仏教史
＜主要研究業績＞『中世禅律仏教論』（山川出版社、2009年）・『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS600B4（史学 / History 600）

日本中世史演習 II

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
三条西実隆（1455～1537）の日記『実隆公記』の講読を中心とし、担当者の読解・考察についての報告を基に全員で議論する。中世史料の日本漢文を訓読する基礎的な能力を持つことを前提とし、中世後期の日記の内容を深く理解する力を養成する。それにより、当時の国家・社会・文化等について批判的に研究する方法を習得することを目的とする。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】
中世史料の日本漢文を正しく訓読した上で、語句を調べ、内容を正確に理解し、現代語訳することができる。所定の事項を満たしたレジュメを作成し、発表することができる。関連史料や先行研究を収集・読解・整理し、自分なりの論点を提示することができる。室町時代を中心に、日本中世史に関する事柄について、自身の見解を提示あるいは発言することができる。所定の条件を満たしたレポートを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『実隆公記』とは	履修のガイダンス
第2回	『実隆公記』講読（1）	読解・考察の報告と議論
第3回	『実隆公記』講読（2）	読解・考察の報告と議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『実隆公記』講読（3）	読解・考察の報告と議論
第6回	『実隆公記』講読（4）	読解・考察の報告と議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『実隆公記』講読（5）	読解・考察の報告と議論
第9回	『実隆公記』講読（6）	読解・考察の報告と議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『実隆公記』講読（7）	読解・考察の報告と議論
第12回	『実隆公記』講読（8）	読解・考察の報告と議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	戦国時代の貴族と京都	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
全員が事前に講読する部分の訓読文を作成する。担当者は担当部分を読解し、関係する論文や史料を収集・読解・整理し、発表レジュメを用意し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員に配布する。発表後、レジュメを修正し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員に配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『実隆公記』（史料纂集）
「学習支援システム」の「教材」から、講読する部分のコピー（ＰＤＦファイル）を配布する。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点５０%、学期末レポート点５０%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
議論が活発になるように努める。

【学生が準備すべき機器他】
「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードすること。また、「掲示場」に発表レジュメ等を掲示したり、ダウンロードしたりすること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞日中国際交流史・日本仏教史
＜主要研究業績＞『中世禅律仏教論』（山川出版社、2009年）・『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS600B4（史学 / History 600）

日本近世史演習Ⅰ

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
①研究論文の位置を理解することができる。
②史料から議論を立ち上げることができる。
③学会発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定、清水幾太郎『論文の書き方』について
第2回	研究発表（１）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（２）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（３）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（４）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（５）	学会発表をめざして
第7回	論文講読（１）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（２）	論文構成の方法
第9回	論文講読（３）	史料批判
第10回	論文講読（４）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（５）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（１）	今後の方針
第13回	研究計画発表（２）	史料採訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞都市論、記憶論
＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】
This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS600B4（史学 / History 600）

日本近世史演習 II

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
論文を執筆することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックとする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞都市論、記憶論
＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】
This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS600B4（史学 / History 600）

日本近代史演習 I

内藤一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近現代史の研究能力を高めるためのトレーニングを行う。最終的には修士論文を完成させるための能力を身につける。

【到達目標】
本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向を把握し、高いレベルで理解する、②独創的な研究テーマを深める、③高い実証に基づく説得力をもった自論を展開させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式をとる。発表者は独自の研究関心やテーマに基づき、積極的に各種の発表に取り組む。他の参加者は積極的にディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	書評1	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第3回	史料紹介1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第4回	調査報告1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第5回	自由発表1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第6回	書評2	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第7回	史料紹介2	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第8回	調査報告2	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第9回	自由発表2	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第10回	書評3	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第11回	史料紹介3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第12回	調査報告3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第13回	自由発表3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。学術論文評に際しては、該当する論文を事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に用いない。※授業の進度等によっては、一次史料の解読を取り入れる場合もある。

【参考書】
『岩波講座 日本歴史　近現代』全5巻、『日本の歴史』20～24（講談社学術文庫）、『日本の近代』1～8（中公文庫）

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100％）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムの利用が可能なIT機器

【その他の重要事項】
・「日本近代史演習」II（秋学期）との継続履修を推奨する。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course aims to improve the research ability of modern Japanese history. You will make presentations and hold discussions based on their own research interests and themes. You will eventually acquire the abilities needed to complete your master's thesis.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
－ A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.
－ B.Create an original research theme.
－ C.Complete a high-level dissertation.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and in-class contribution.Combine all elements to make 100%

HIS600B4（史学 / History 600）

日本近代史演習 II

内藤一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近現代史の研究能力を高めるためのトレーニングを行う。最終的には修士論文を完成させるための能力を身につける。

【到達目標】
本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向を把握し、高いレベルで理解する、②独創的な研究テーマを深める、③高い実証に基づく説得力をもった自論を展開させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式をとる。発表者は独自の研究関心やテーマに基づき、積極的に各種の発表に取り組む。他の参加者は積極的にディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	書評1	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第3回	史料紹介1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第4回	調査報告1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第5回	自由発表1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第6回	書評2	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第7回	史料紹介2	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第8回	調査報告2	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第9回	自由発表3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第10回	書評3	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第11回	史料紹介3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第12回	調査報告3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第13回	自由発表3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。学術論文評に際しては、該当する論文を事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に用いない。※授業の進度等によっては、一次史料の解読を取り入れる場合もある。

【参考書】
『岩波講座 日本歴史　近現代』全5巻、『日本の歴史』20～24（講談社学術文庫）、『日本の近代』1～8（中公文庫）

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100％）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムの利用が可能なIT機器

【その他の重要事項】
・「日本近代史演習」Ｉ（春学期）との継続履修を推奨する。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course aims to improve the research ability of modern Japanese history. You will make presentations and hold discussions based on their own research interests and themes. You will eventually acquire the abilities needed to complete your master's thesis.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
－ A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.
－ B.Create an original research theme.
－ C.Complete a high-level dissertation.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and in-class contribution.Combine all elements to make 100%

HIS600B4（史学 / History 600）

日本考古学演習Ⅰ

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。
考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】
受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。
先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
考古学資料を用いた実践研究の成果を受講者各々が発表し、内容について検討する。受講者は研究論文の体裁と形式をふまえたうえで、具体的な考古学資料を提示するとともに考古学の方法にもとづいて発表内容を作成する。実際の発表においてはレジュメをまとめ、研究の詳細を報告するものとする。次いで全員での討論に移り、発表者の研究目的と問題の所在がいかなるところにあり、設定された問題が適切であるかどうかを検討し、さらに取り扱う資料群の全体が議論にふさわしいものであるのか、提示された方法が適切であるか、考察および結論が正しいか等についても検討する。
また、本授業では各自の研究に関連する課題論文の講読も合わせて行うこととする。受講者は研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。
これらの後に、自らの論文の構想発表指導を行う。
上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第3回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）
第4回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第5回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第6回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第7回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第8回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第9回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第10回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第11回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第12回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第13回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第14回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
第1回　自己の学習計画の立案
第2回～第5回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第6回～第9回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習
第10回～第13回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第14回　成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】
発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】
コリン・レンフルー，ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学　理論・方法・実践』東洋書林
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な貢献20％（平常点）
個別発表の水準30％（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果20％（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末リポート（成果報告）30％（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】
前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】
※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社　2011年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷―壺形土器を中心として―」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会　2014年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集　環濠集落の諸問題2015』（環濠（壕）論集刊行会　2015年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会　2017年）
「早渕川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期―権田原遺跡の検討を中心として―」『法政考古学』第45集（法政考古学会　2019年）
「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会　2019年）

「権田原遺跡の環濠―大塚遺跡との比較を通じて―」『法政考古学』第47集（法政考古学会　2021年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.
Students will understand the academic standards of a master's thesis and cultivate their competence.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS600B4（史学 / History 600）

日本考古学演習 II

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。
考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】
受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。
先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
考古学の分野で自らの論文を執筆する受講者に対して、論文構想の提示、研究上の最重要文献の講読、実践研究の報告などを行う。まず、自らの論文構想を提示し、具体的な資料検討状況についても報告し、それにもとづいた討議を行う。
次いで、今後の研究の核となる先行研究の成果について論文をもとに報告し、研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。
さらに、受講者それぞれの研究状況を具体的に報告し、討議を行う。
上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第3回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第4回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第5回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第6回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第7回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第8回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第9回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第10回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第11回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）
第12回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第13回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第14回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
第1回　自己の学習計画の立案
第2回～第5回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第6回～第9回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習
第10回～第13回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第14回　成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】
発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】
コリン・レンフルー，ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学　理論・方法・実践』東洋書林
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な貢献20％（平常点）
個別発表の水準30％（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果20％（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末リポート（成果報告）30％（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】
前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】
※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社　2011年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷―壺形土器を中心として―」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会　2014年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集　環濠集落の諸問題2015』（環濠（壕）論集刊行会　2015年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会　2017年）
「早渕川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期―権田原遺跡の検討を中心として―」『法政考古学』第45集（法政考古学会　2019年）
「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会　2019年）
「権田原遺跡の環濠―大塚遺跡との比較を通じて―」『法政考古学』第47集（法政考古学会　2021年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

Students will understand the academic standards of a master's thesis and cultivate their competence.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本古文書学研究Ⅰ

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
教科書を基に日本古文書学を体系的に学ぶとともに、古文書読解の基礎的な能力を身につける。日本古代（奈良時代から平安時代）に成立した代表的な古文書の様式・機能について理解し、日本漢文を読解する力を養成することを目的とする。

【到達目標】
律令に規定された公式様文書、公式様文書から派生した公家様文書の機能と様式について理解することができる。教科書に取り上げられた古文書や関連する古文書の日本漢文を正確に訓読し、内容の概要を読み取ることができる。また、簡単な崩し字を解読することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
教科書の内容に沿いつつ、配布プリントを基に講義を進める。古文書について解説した後、参加者に日本漢文を訓読してもらう。また、古文書写真のプリントを配布し、参加者に翻刻してもらう機会を設ける。配布プリント（ＰＤＦファイル）は、事前に各章ごとに「学習支援システム」にアップロードする（印刷プリントは配布しない）。日本古代史または日本中世史で卒論を書く予定の学生を主な対象とする。漢文訓読の基礎知識を有することを前提に進める。引き続き秋学期に「日本古文書学Ⅱ」を履修することが望ましい。授業の初めに、前回の授業で訓読した古文書をいくつか取り上げ、フィードバックを行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	古文書学とは	履修のガイダンス
第2回	検非違使別当宣	古文書に親しむ
第3回	紛失状	古文書に親しむ
第4回	公式様文書　宣命・詔	様式・機能の解説と訓読
第5回	公式様文書　符（１）	様式・機能の解説と訓読
第6回	公式様文書　符（２）	様式・機能の解説と訓読
第7回	公式様文書　移	様式・機能の解説と訓読
第8回	公式様文書　牒	様式・機能の解説と訓読
第9回	公式様文書　解	様式・機能の解説と訓読
第10回	公式様文書　宣旨	様式・機能の解説と訓読
第11回	公家様文書　官宣旨	様式・機能の解説と訓読
第12回	公家様文書　院庁下文	様式・機能の解説と訓読
第13回	公家様文書　摂関家政所下文	様式・機能の解説と訓読
第14回	公式様文書と公家様文書	授業内容の総括（試験）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
教科書を用いて予習し、教科書、プリント等を用いて復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
佐藤進一『新版　古文書学入門』（法政大学出版局、２００３年）

【参考書】
日本歴史学会編『概説古文書学　古代・中世編』（吉川弘文館、１９８３年）
久留島典子・五味文彦編『史料を読み解く１　中世文書の流れ』（山川出版社、２００６年）
苅米一志『日本史を学ぶための古文書・古記録訓読法』（吉川弘文館、２０１５年）

【成績評価の方法と基準】
学期末試験の点数１００％で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
次回取り上げる文書を予告する。

【学生が準備すべき機器他】
「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードする。

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students learn Japanese archaeological studies systematically. The goals of this course are to acquire the basic ability of reading old documents. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. term-end examination : 100%.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本古文書学研究 II

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「日本古文書学Ｉ」から継続し、教科書を基に日本古文書学を体系的に学ぶとともに、古文書読解の基礎的な能力を身につける。日本中世（平安時代から室町時代）に成立した代表的な古文書の様式・機能について理解し、日本漢文を読解する力を養成することを目的とする。

【到達目標】
公家様文書および公家様文書から派生した武家様文書の機能と様式について理解することができる。教科書に取り上げられた古文書や関連する古文書の日本漢文を正確に訓読し、内容の概要を読み取ることができる。また、簡単な崩し字を解読することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
教科書の内容に沿って、配布プリントを基に講義を進める。古文書について解説した後、参加者に訓読してもらう。また、古文書写真のプリントを配布し、参加者に翻刻してもらう機会を設ける。配布プリント（ＰＤＦファイル）は、事前に各章ごとに「学習支援システム」にアップロードする（印刷プリントは配布しない）。日本古代史または日本中世史で卒論を書く予定の学生を主な対象とする。漢文訓読の基礎知識を有することを前提に進める。春学期に「日本古文書学Ｉ」を履修することを必須とする。授業の初めに、前回の授業で訓読した古文書をいくつか取り上げ、フィードバックを行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	古文書学とは	履修のガイダンス
第2回	公家様文書　国司庁宣	様式・機能の解説と訓読
第3回	公家様文書　綸旨	様式・機能の解説と訓読
第4回	公家様文書　院宣	様式・機能の解説と訓読
第5回	公家様文書　御教書	様式・機能の解説と訓読
第6回	武家様文書　下文（１）	様式・機能の解説と訓読
第7回	武家様文書　下文（２）	様式・機能の解説と訓読
第8回	武家様文書　下知状（１）	様式・機能の解説と訓読
第9回	武家様文書　下知状（２）	様式・機能の解説と訓読
第10回	武家様文書　鎌倉幕府の御教書	様式・機能の解説と訓読
第11回	武家様文書　室町幕府の奉書	様式・機能の解説と訓読
第12回	武家様文書　室町幕府の直状	様式・機能の解説と訓読
第13回	起請文・売券・譲状	様式・機能の解説と訓読
第14回	公家様文書と武家様文書	授業内容の総括（試験）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
教科書を用いて予習し、教科書、プリント等を用いて復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
佐藤進一『新版　古文書学入門』（法政大学出版局、２００３年）

【参考書】
日本歴史学会編『概説古文書学　古代・中世編』（吉川弘文館、１９８３年）
久留島典子・五味文彦編『史料を読み解く１　中世文書の流れ』（山川出版社、２００６年）
苅米一志『日本史を学ぶための古文書・古記録訓読法』（吉川弘文館、２０１５年）

【成績評価の方法と基準】
学期末試験の点数１００％で判定する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
次回取り上げる文書を予告する。

【学生が準備すべき機器他】
「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードする。

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students learn Japanese archaeological studies systematically. The goals of this course are to acquire the basic ability of reading old documents. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. term-end examination : 100%.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本古代史研究Ⅰ

春名　宏昭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「平安時代と貴族社会」と題して講義します。平安前期の改革の時代の国家・政治のあり方、貴族たちのあり方を理解するようつとめます。

【到達目標】
平安時代の貴族社会のあり方の把握を目指します。基礎的な知識を得て、その上でそれぞれの事象に興味を持ってアプローチし、国家・政治の本質を理解できる能力を身につけましょう。平安時代の官僚のあり方は現代の日本にも通じるオンタイムの問題ですから、現代の政治が抱える問題点も理解できるようになるでしょう。そのような視点から課題レポートにも取り組んで下さい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
平安前期の改革によって国家・政治のあり方がどのように変わっていったのか、この変化が平安中期の王朝貴族の時代に帰結していったのかを検証していきます。この授業では、一般啓蒙書に書かれることのない天皇や貴族たちのあり方を見ていきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組むことが必要です。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。質問がある場合は、授業後に対応します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の内容の説明
第2回	〈時代〉の変化	ワンランク上の国家を目指して
第3回	官人たちの変化	良吏政治のスタート＝大同元年勅
第4回	天皇の性格変化	桓武天皇と平城天皇
第5回	良吏政治の展開	嵯峨朝への政策継承
第6回	良吏政治の実践	弘仁三年勅から天長元年官符へ
第7回	承和の変の前奏（1）	嵯峨朝の政治状況
第8回	承和の変の前奏（2）	淳和朝の政治状況
第9回	承和の変の前奏（3）	仁明朝の政治状況
第10回	承和の変	母橘嘉智子と娘正子内親王
第11回	貴族の時代へ	文徳朝・清和朝の様相
第12回	応天門の変	安定の時代、摂関政治へ
第13回	藤原基経の国政運営	清和天皇の悲嘆と陽成天皇の廃位
第14回	平安前期という時代	平安時代史概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
平安時代に関して問題意識を持つには、その前提として平安前期・中期の知識が必要ですし、奈良時代から平安時代への推移についても概括的な理解は必要です。それらを得るために、どれでも参考書（該当巻）を読んでみて下さい。ただし、著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。
この講義では、通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということを述べます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。また、平城天皇の事績をより詳しく知るには私の『平城天皇』（吉川弘文館人物叢書）を、延喜年間以降については『岩波講座日本歴史』第５巻の「摂関時代と政治構造」を読んで下さい。
また、講義内容が分かりにくかった時には、私の（春名宏昭）『〈謀反〉の古代史　平安朝の政治改革』(吉川弘文館)を読んで下さい。
この講義の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】
中央公論社(文庫)・小学館(文庫)・集英社・講談社(文庫)から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波書店の『シリーズ日本の古代史』(新書)、『岩波講座日本歴史』の該当巻。

【成績評価の方法と基準】
平常点とレポートで評価します。基準は平常点30％、レポート70％です。レポートで取り上げる範囲は平安時代に限りますが、テーマは学生各人で選んでよいことにしています。ただ、どのようなテーマを選んでも、授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】
板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につきません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作って下さい。

【Outline (in English)】
This lecture is attended under the heading of “The Heian period and the aristocracy". This course introduces how should be the nation and aristocrats in the former term of the Heian period to students taking this course. By the end of the course, students should be able to understand the essence of the nation and politics. Before/after each class meetings, students will be expected to spend four hours to read the textbook and one of reference books introduced. Grading will be decided based on term-end report(70%) and usual contribution(30%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本古代史研究 II

春名　宏昭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「続日本紀の史料学」と題して講義を行ないます。八世紀の日本は、当時先進の文化を誇った中国のような国家建設を目標に掲げて邁進していました。『続日本紀』を題材に史料への取り組み方を学び、日本古代史における歴史の流れ、あり方の把握を目指します。

【到達目標】
続日本紀の記事を数点取り上げ、史料へのアプローチの仕方を習得することができる。この授業を通して、奈良時代の基礎的な理解を身につけ、他の史料に対してもつねに興味を持って臨めるようになり、それを論理的に解析し正しい理解に到達できる技能を身につけられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
取り上げた記事を糸口に、その背後にある問題点を探り出し検証していきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組むことが必要です。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。質問がある場合は、授業後に対応します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	続日本紀とはどのような史料か？
第2回	ガイダンス（2）	続日本紀のテキスト
第3回	オオキミへの疑念（1）	続日本紀の宣命と稲荷山古墳鉄剣銘
第4回	オオキミへの疑念（2）	天皇と親王・諸王
第5回	天平二年の太政官奏（1）	天平二年六月甲寅朔条の紹介
第6回	天平二年の太政官奏（2）	続日本紀の３つのテキスト
第7回	天平二年の太政官奏（3）	わずか31文字の史料の“奥行”
第8回	慶雲元年の公廨銀（1）	慶雲元年七月庚子条の紹介
第9回	慶雲元年の公廨銀（2）	公廨銀から見えてくるもの
第10回	左右京尹の設置（1）	天平宝字五年二月丙辰朔条の紹介
第11回	左右京尹の設置（2）	左右京尹に対する理解
第12回	左右京尹の設置（3）	左右京尹の新たなる性格分析
第13回	税司主鎰（1）	大宝二年二月乙丑条の紹介
第14回	税司主鎰（2）	大宝令施行直後の地方政治

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
取り上げた記事が含む意味を理解するためには、それぞれの記事に現れた事象の時代背景を知る必要があります。そのためには、どれでもいいですから参考書（奈良時代該当巻）を読んでみて下さい。著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。
この講義では、現在の通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということを述べていきます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。
この講義の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特に定めません。授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】
岩波書店・新日本古典文学大系『続日本紀』が基本です。他に平凡社『続日本紀』、現代思潮社『続日本紀』があります。一般啓蒙書として、中央公論社(文庫)・小学館(文庫)・集英社・講談社(文庫)から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波新書『シリーズ日本の古代史』、『岩波講座日本歴史』の該当巻があります。

【成績評価の方法と基準】
平常点とレポートで評価します。基準は平常点30％、レポート70％です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】
板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につきません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作って下さい。　”自分で考える”がキーポイントです。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本古代政治史
〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制
〈主要研究業績〉
『律令国家官制の研究』(吉川弘文館)
『平城天皇』(吉川弘文館)
『皇位継承　歴史をふりかえり変化を見定める』（共著、山川出版社）
『〈謀反〉の古代史　平安朝の政治改革』(吉川弘文館)

【Outline (in English)】
This lecture is offered under the title of “The world of Shokunihongi”. It deals with key aspects of ancient Japanese history, particularly referring to “shokunihongi”. By the end of the course, students will be able to understand how to make a new approach to historical sources. Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the Term-end examination (70%) and usual contribution (30%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本古代史料研究

武井　紀子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この講義では、日本古代史で扱う史料のうち、木簡・漆紙文書・墨書土器などの出土文字資料を取り上げて、その史料的特質や扱い方、研究の視角などについて学びます。

【到達目標】
出土文字資料は、古代社会の実像を今に伝える貴重な資料です。一点一点の史料から導き出せる事柄は少ないですが、そこに書かれた文字情報だけではなく、大きさや形状の特徴、出土した遺跡や遺構の性格、文献資料との比較など、様々な側面から検討することで、より豊かな情報を私たちにもたらしてくれます。本講義では、出土文字資料に対する考え方を学び、文字資料から情報を引き出し古代史研究に活かす手法を習得することを目指します。また、自らの研究課題の中で出土文字資料を適切に用いて、文献史料とあわせて古代史像を描くことができるようになることを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
講義形式で行います。必要に応じて、講義内容の理解度を問う小課題やリアクションペーパーの提出を求めます。また、実際に出土文字資料を読む練習を行ってもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス―古代史の史料について―	授業の目標と進め方の説明、一次史料と二次史料、出土文字資料と古代史研究
第2回	木簡(1)	木簡の資料的特徴、宮都木簡と地方木簡
第3回	木簡(2)	文書木簡を読む
第4回	木簡(3)	荷札・付札木簡を読む
第5回	木簡(4)	帳簿木簡を読む
第6回	木簡(5)	その他の木簡
第7回	漆紙文書(1)	漆紙文書の資料的特徴
第8回	漆紙文書(2)	漆紙文書を読む
第9回	墨書土器(1)	墨書土器の資料的特徴
第10回	墨書土器(2)	墨書土器を読む
第11回	遺跡と出土文字資料(1)	具体的な遺跡を取り上げ、そこから出土した文字資料から遺跡の性格を探る
第12回	遺跡と出土文字資料(2)	具体的な遺跡を取り上げ、そこから出土した文字資料から遺跡の性格を探る
第13回	出土文字資料の広がり	列島の南北と出土文字資料、東アジアの文字資料
第14回	まとめ	講義のまとめとレポート課題の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講義で扱う内容は、高校教科書程度の知識を前提とします。講義内容をよりよく理解するために、日本古代史に関する概説書などに目を通して置いてください。本授業の準備学習・復習時間は各2時間程度を標準とします。

【テキスト（教科書）】
講義時に担当教員が作成した資料を配付します。

【参考書】
木簡学会編『木簡から古代がみえる』（岩波書店、2010年）
渡辺晃宏『平城京と木簡の世紀』（講談社、2001年）
平川南・沖森卓也・栄原永遠男・山中章編『文字と古代日本』1～5（吉川弘文館、2004～2006年）
鐘江宏之『日本史リブレット15　地下から出土した文字』（山川出版社、2007年）
吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編『シリーズ古代史をひらく 文字とことば』（岩波書店、2020年）

【成績評価の方法と基準】
成績評価は、授業への積極的な貢献度（20％）、および小課題レポート（30%）、期末レポート（50%)によって行います。
小課題レポートは授業の進捗に合わせて、２～３回出す予定です。

【学生の意見等からの気づき】
講義のみにならないように、資料の解読やディスカッションなども取り入れていきます。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本古代史
〈研究テーマ〉日唐律令制比較研究、古代財政史研究、古代地方支配研究
〈主要研究業績〉
「日本古代倉庫制度の構造とその特質」『史学雑誌』118(10)、2009年
「律令財政と貢納制」岩波講座『日本歴史』3古代3、岩波書店、2014年
「東アジアの中の日本文字資料―人・物の管理方法を中心として―」犬飼隆編『古代文学と隣接諸学4 古代の文字文化』竹林舎、2017年

【Outline (in English)】
This course will examine excavated written materials—such as wooden tablets, lacquered paper documents, and ink-inscribed pottery—used in the study of ancient Japanese history. We will explore their characteristics as historical sources, methods for handling them, and perspectives for research.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本中世史研究

及川　亘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の16世紀末～17世紀初頭は築城の時代であり、現代人が思い浮かべる城郭はほとんどがこの時期に建設された。それはまた徳川家康が「天下人」として君臨した時期にちょうど重なる。なぜこの時期に築城が盛んに行われたのだろうか。史料の読解を通じて、徳川権力の確立過程を築城と関連させて考える。

【到達目標】
16世紀末～17世紀初頭の築城に関連する書状など文献史料とともに絵図・絵画などの画像史料の読解を通じて、当該期の政治・経済・社会のあり方を学び、併せて史料読解の基礎を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は対面で講義形式で行うが、前もって関連史料のプリントを配布し、参加者には史料の音読と解釈をしてもらう。それに対して訂正・補足説明（フィードバック）して、さらにその内容を参考史料を提示しながら解説する。併せてそれぞれの史料が持つ城郭史における意義を政治・社会の状況と関連付けて検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス―なぜ築城か―	授業テーマ・進め方、授業で築城を取り上げる意図について説明する。
第2回	天下人家康の時代	関ヶ原の戦い前後の政治的課題について解説する。
第3回	公儀普請（天下普請）による城郭建設	主に家康による公儀普請について概説する。
第4回	伏見城の修築①	慶長七年（1602）の伏見城の修築前後の築城について解説する。
第5回	伏見城の修築①	慶長七年（1602）の伏見城の修築について解説する。
第6回	江戸城の巡見	江戸城（皇居東御苑）の石垣・堀を実地見学する。
第7回	江戸城の築城①	慶長八年（1603）・慶長十一年（1606）の江戸城の築城について解説する。
第8回	江戸城の築城②	慶長十九年（1614）の江戸城の築城について解説する。
第9回	駿府城の築城	慶長十二年（1607）・慶長十三年（1608）の駿府城の築城について解説する。
第10回	築城の風景①	名古屋市博物館所蔵「築城図屏風」を読み解く。
第11回	名古屋城の築城①	慶長十五年（1610）の名古屋城の築城について大名細川家の史料を用いて解説する。
第12回	名古屋城の築城②	慶長十五年（1610）の名古屋城の築城について細川家以外の大名の史料を用いて解説する。
第13回	築城の風景②	靖國神社遊就館所蔵「名古屋御城石垣絵図」を読み解く。
第14回	期末試験―まとめ―	期末試験を実施し、天下人家康の時代についておさらいする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
史料読解の予習・復習が必要である。（合計4時間程度）

【テキスト（教科書）】
教科書は使用せず、史料プリントを配布する。

【参考書】
及川亘「名古屋御城石垣絵図を読む」（名古屋城調査研究センター編『史料が語る　名古屋城石垣普請の現場』名古屋城調査研究報告3史料調査研究報告書1、2022年）
同「「公儀御普請」―現場監督する大名」（『城郭史研究』41号、2022年）
北原糸子『江戸城外堀物語』ちくま新書、1999年
斎藤慎一・向井一雄『日本城郭史』吉川弘文館、2016年
白峰旬『日本近世城郭史の研究』校倉書房、1998年
同『豊臣の城・徳川の城』校倉書房、2003年
『日本名城集成　江戸城』小学館、1986年
『日本名城集成　名古屋城』小学館、1985年
『日本名城集成　大坂城』小学館、1985年
『大御所徳川家康の城と町』（駿府城関連史料調査報告書）静岡市教育委員会、1999年
など

【成績評価の方法と基準】
平常点30％、期末試験70％で評価する。
積極的な授業参加を期待する。

【学生の意見等からの気づき】
歴史学では必ずしも一つの答えが見つかるわけではないが、史料読解や論理展開にいくつかの可能性がある場合も、参考史料なども提示しながらそれらをなるべく分かりやすく整理して解説したい。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
特になし

【Outline (in English)】
【Course outline】
The late 16th century to the early 17th century was an era of castle construction in Japan, and most of the castles that modern Japanese think of were built during this period. This also coincides with the period when Tokugawa Ieyasu reigned as "the ruler of Japan". Why was castle construction so active during this period? Through reading historical documents, we will consider the process of the Tokugawa's establishment of power in relation to castle construction.
【Learning Objective】
Through reading and interpreting written historical documents such as letters relating to castle construction from the late 16th century to the early 17th century, as well as visual historical materials such as drawings and paintings, students will learn about the state of politics, economy, and society during that period, and also acquire the basic skills of handling historical materials.
【Learning activities outside of classroom】
A total of 4 hours of preparation and review of reading comprehension of historical materials is required.
【Grading Criteria/Policy】
Evaluation is based on 30% of the average score and 70% of the final exam.
Expect active class participation.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近世史料学研究Ⅰ

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近世史研究において、くずし字の解読能力を身につけていることは、研究の幅を大きく広げると同時に、学問をより深めるものとなる。本授業は、基礎的な読解能力を養成することを目的とする。あわせて基本的な近世文書の種類を覚えていってもらいたい。※学部設置科目である。

【到達目標】
①くずし字の読解能力を身につける。
②基本的な近世文書の種類を覚える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
講義と演習を併用するかたちをとる。古文書のコピーをHoppiiにアップするので、まずは自力で解読に取り組む（教室でプリントは配布しない）。授業時に割り当てるので、学生はこれを板書し、答え合わせをする。教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。なお受講希望多数の場合、抽選とする。その際、近世史ゼミ生を優先する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	くずし字の辞典について
第2回	古文書解読入門	近世史料学講義
第3回	検地帳読解（1）	数字を覚えよう
第4回	検地帳読解（2）	単位を覚えよう
第5回	武家屋敷組合名簿読解（1）	名前を覚えよう
第6回	武家屋敷組合名簿読解（2）	通称を覚えよう
第7回	領知宛行状読解	大名家領の安堵
第8回	年貢割付状読解	年貢請求書
第9回	年貢皆済目録読解	年貢領収書
第10回	宗門人別改帳読解	江戸時代の家族
第11回	五人組帳前書読解	百姓への規制
第12回	変体仮名読解	俳句をよむ
第13回	金子借用証文読解	年貢滞納
第14回	試験とまとめ	解説とも

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に、配布された古文書のコピーを辞書を引きながら予習すること。事後には、読めなかった字を必ず復習すること。とにかく古文書をながめる時間をたくさんとること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『新編古文書解読字典』（柏書房、1993年）￥3,107
辞書は必須。毎回持参のこと。

【参考書】
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）など

【成績評価の方法と基準】
期末試験（90％）、平常点（10％）

【学生の意見等からの気づき】
まずは自分で辞書をひきながら読むことが大事です。

【その他の重要事項】
本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline (in English)】
This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following Term-end examination: 90%, in class contribution: 10%.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近世史料学研究 II

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
多様な近世史料の読解能力を養うことを目的とする。さまざまなくずし字を解読すると同時に、読解した史料の意味を理解することが重要となる。※学部設置科目である。

【到達目標】
①くずし字を解読することができる。
②読解した史料の意味を理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
本授業は日本近世史料学 I を履修済みであることを前提として授業を進める。Hoppiiに古文書のコピーをアップするので、これにまずは自力で解読に取り組む。授業時に答え合わせし、教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。古文書解読の中級編として、近世の行政文書のほか、書状や発句など書体の異なる史料も対象とする。なお、近世ゼミの夏合宿で撮影した古文書をテキストとすることがある。また、現物古文書の整理作業を体験することもある。なお受講希望者が多数の場合、抽選とし、その際近世史ゼミ生を優先する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	発句読解	変体仮名
第2回	離縁状読解	三行半
第3回	触書読解（1）	ペリー来航
第4回	触書読解（2）	株仲間再興
第5回	武家文書読解（1）	御堀の管理
第6回	武家文書読解（2）	橋梁の管理
第7回	武家文書読解（3）	三方領地替（前半）
第8回	武家文書読解（4）	三方領知替（後半）
第9回	漢詩読解	七言絶句
第10回	書状読解（1）	松平容保書簡（前半）
第11回	書状読解（2）	松平容保書簡（後半）
第12回	日記読解（1）	自家年譜（前半）
第13回	日記読解（2）	自家年譜（後半）
第14回	試験とまとめ	解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に配布された古文書のコピーを、辞書を使って自力で読むこと。事後には、必ず復習すること。多くの古文書に触れることが重要である。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『新編古文書解読字典』（柏書房、1993年）￥3,107
辞書は必須。毎回持参のこと。

【参考書】
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）ほか

【成績評価の方法と基準】
期末試験（90％）、平常点（10％）

【学生の意見等からの気づき】
筆の動きをみることが、古文書読解能力向上のためのポイントです。

【その他の重要事項】
本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline (in English)】
This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following Term-end examination: 90%, in class contribution: 10%.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近代史研究Ⅰ

内藤　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近代史を、立憲政治の観点から、立法府を中心に読み解いていく。帝国議会は貴族院と衆議院により構成されるが、本講義では、特に貴族院に注目して考察をはかる。授業を通じて、実証研究の蓄積が学問領域に新たな地平を開くことを明らかにしていく。

【到達目標】
①日本近代史を立憲政治の観点から理解する。②帝国議会を構成する貴族院・衆議院について、特に前者の役割について理解を深める。③歴史の連続性について考える手がかりを得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義形式とし、板書とパワーポイントを併用させる。適宜史料のコピー等を配布し、史料を音読したり、内容を検討することもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	日本における議会制の導入	欧米の議会制度と日本での導入をめぐる議論について論じる
第3回	憲法の制定と帝国議会の発足	大日本帝国憲法の制定と帝国議会について考察する
第4回	初期議会	初期議会の政府と帝国議会について考察する
第5回	藩閥と政党	藩閥政府と議会の関係を考察する
第6回	桂園時代	桂園時代の歴代政権と帝国議会の関係について考察する
第7回	転換期としての大正	大正政変とその後の政治の推移について帝国議会の見地から考察する
第8回	大正デモクラシー	原敬内閣の誕生を機に起きた帝国議会の変化を考察する
第9回	政党内閣期	第二次護憲運動後に到来した政党内閣期における帝国議会について考察する
第10回	昭和初期の政治	昭和初期、政党政治が揺らぐなかでの帝国議会のあり方を考察する
第11回	軍部の台頭と帝国議会	軍部が台頭するなか、帝国議会のあり方を考察する
第12回	大戦下の議会	第二次世界大戦下における帝国議会について考察する
第13回	帝国議会から国会へ	第二次世界大戦後、帝国議会から国会への変遷を考察する
第14回	まとめ　総括と質疑応答	講義全体のまとめ、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に配布する資料には必ず目を通しておく。授業後には内容をよく確認し、指示のあった文献や資料に目を通しておく。平素より参考文献を読んでおくことが望ましい。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは用いない。参照が必要な文献等がある場合には、講義の際、指示する。

【参考書】
『議会制度百年史』全12巻、『貴族院』（同成社）

【成績評価の方法と基準】
平常点（40％）、期末試験（60％）をもとに総合的に評価する。期末試験はノート持ち込み可。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受けない場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】
クエスチョンタイムに相当する時間を適宜設けるなどして、授業理解が得られるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムの利用が可能なIT機器

【その他の重要事項】
・「日本近代史料学」（秋学期・学部合同科目・大学院科目「日本近代史研究」Ⅱ）との継続履修を推奨する。
・学部合同科目（「日本近代史」）である。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course examines the modern era of Japan with a focus on the Imperial Diet.In particular, I will focus on the character of the House of Peers and the role it played in history.　What is particularly important in this course is the correct and historical understanding of the development of modern Japanese history and constitutional politics.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
－ A.Understanding modern Japanese history through the development of constitutional politics.
－ B.Deepening understanding of the role of the Imperial Diet centered on the House of Peers.
－ C.Get clues to think about the continuity of history.
（Learning activities outside of classroom）
Students should read the materials distributed in advance.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Term-end examination: 60%, in class contribution: 40%

HIS500B4（史学 / History 500）

日本近代史研究 II

内藤　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近代史研究では、数多くの、かつさまざまな史（資）料を駆使して議論を組み立てることが珍しくない。本授業では各種の史（資）料を取り上げ、それぞれの特色や限界を明らかにしていく。さらに自ら史料発掘やオーラルヒストリーに取り組むときの手順についても学ぶことで、実践的なスキルを磨くことができるようにする。

【到達目標】
①一次・二次史料の違いと、それぞれの特色を理解する。②公文書・私文書の違いとそれぞれの特色を理解する。③文字・非文字資料の違いと、それぞれの特色を理解する。①～③を総合し、近代史（資）料について基礎的な理解をはかる。また独自に史（資）料調査を行う際に必要となる知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義形式をとる。板書とパワーポイントを併用する。授業で使用する史（資）料は、学習支援システムを利用して配布する。史（資）料は授業時に音読したり、内容の検証を行う。状況が許せば学外で行う講義もある。
また講義時には、質疑応答の時間を設けるほか、学習支援システムに課題の回答を掲示するなどフィードバックに関しても適宜対応していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	書簡研究（1）	近代の書簡の形態・書式等について
第3回	書簡研究（2）	近代の書簡の内容について（政治家の書簡を読む）
第4回	書簡研究（3）	近代の書簡の内容について（文化人の書簡を読む）
第5回	日記研究（1）	近代の日記の形態・書式等について
第6回	日記研究（2）	近代の日記の内容について（政治家の日記を読む）
第7回	日記研究（3）	近代の日記の内容について（文化人の日記を読む）
第8回	公文書研究	さまざまな公文書の特色について
第9回	新聞、雑誌、書籍の世界	新聞、雑誌や各種書籍といった活字資料の特色と歴史研究での活用法について学ぶ
第10回	史料調査の世界	史料調査の手順や注意点について学ぶ
第11回	オーラルヒストリーの世界	オーラルヒストリーとは何か、調査の手順、注意点について学ぶ
第12回	金石文の世界	金石文の特色について、フィールドワークとともに学ぶ
第13回	編纂史料の世界	翻刻された史料や伝記などの編纂物の特色について
第14回	まとめ　総括と質疑応答	講義全体のまとめ、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に配布する史（資）料には必ず目を通しておく。その際、読みや意味のわからない文字を調べ、さらに記された内容や、作成した人物についても予習しておく。授業後には内容を再確認することで、知識の定着をはかる。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキストに使用する史（資）料は、学習支援システムにより事前に配布する。

【参考書】
五味文彦・杉森哲也編『日本史史料論』（放送大学教育振興会）、中村隆英・伊藤隆編『近代日本研究入門［増補版］』（東京大学出版会）、佐々木隆「近代文書と政治史研究」（『日本の時代史30　歴史と素材』吉川弘文館）、御厨貴編著『近現代日本を史料で読む』（中公新書）、『日記に読む近代日本』全5巻（吉川弘文館）、御厨貴編『オーラル・ヒストリーに何ができるか』（岩波書店）

【成績評価の方法と基準】
平常点（40％）、期末試験（60％）をもとに総合的に評価する。期末試験はノート持ち込み可。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受けない場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】
クエスチョンタイムに相当する時間を適宜設けるなどして、授業理解が得られるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムの利用が可能なIT機器

【その他の重要事項】
・大学院における学部合同科目（学部講義名は「日本近代史料学」）である。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムのお知らせ機能や、授業内掲示板機能を利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
In this course, I will explain the characteristics and limitations of each of the various modern Japanese historical materials while analyzing them in detail. I will also teach you the steps to discover historical sources and conduct oral history research yourself. Through the lessons, you will gain basic knowledge and understanding of historical materials.
（Learning Objectives）
The goal of this course is to recognize the characteristics of various historical materials and to acquire the professional abilities necessary for documentary research.
（Learning activities outside of classroom）
Students should read the materials distributed in advance.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Term-end examination: 60%, in class contribution: 40%

HIS500B4（史学 / History 500）

沖縄学入門 I

大里　知子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。
「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】
琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけたうえで、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第2回	琉球・沖縄史概説	時代区分論、基礎資料・文献、研究動向など
第3回	欧米船の来航	19世紀以降の欧米のアジア進出と琉球への欧米船来航
第4回	「琉球処分」琉球国併合	琉球藩設置以降の琉球国併合過程、「分島・改約」交渉
第5回	初期県政	沖縄県設置後の初期県政における「旧慣温存」政策と県内の状況
第6回	沖縄における民権運動	宮古島における人頭税廃止運動、謝花昇と沖縄倶楽部
第7回	「旧慣」の改革	土地整理事業、沖縄県及島嶼町村制、徴兵制の実施
第8回	日清戦争後の文化、教育	沖縄学と日琉同祖論、尋常中学校ストライキ事件、河上肇舌禍事件
第9回	「ソテツ地獄」と沖縄振興計画	沖縄における恐慌、救済論と振興計画
第10回	海外移民と出稼ぎ	海外への移民、本土への出稼ぎ、大東島の開拓
第11回	沖縄における労働問題	西表炭鉱、沖縄青年同盟と労働運動
第12回	近代沖縄の文化	新聞の発刊、文学、美術、音楽、近代演劇
第13回	第1次世界大戦前後の沖縄	台湾における霧社事件と沖縄出身者、満州開拓移民
第14回	戦時下の沖縄	標準語の励行、改姓改名運動と日本民芸協会・柳宗悦らとの「方言論争」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】
①沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編『概説沖縄の歴史と文化』（2000）
②沖縄県教育委員会編『沖縄の歴史と文化』（2000）沖縄県HPに掲載
①については、適宜資料を配布するので自分で用意する必要はありません。
②は補助テキストとして使用します。

【参考書】
・沖縄歴史教育研究会『琉球・沖縄史探究―探究心を育てるためのもう一つの眼差し』（2024）東洋企画
・『大学で学ぶ　沖縄の歴史』（2023）吉川弘文館
・前田勇樹・古波蔵契・秋山道宏編『つながる沖縄近現代史』（2021）ボーダーインク
・新城俊昭『教養講座　琉球・沖縄史』（2014）東洋企画
・沖縄県教育委員会編『沖縄県史　各論編第5巻　近代』（2011）東洋企画

【成績評価の方法と基準】
平常点70％、レポート30％　毎回の授業への参加態度に、授業に取り組む姿勢や意欲があらわれるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】
「入門」という科目のため、基本的な内容をベースにしているが、より専門的なディスカッションを求める学生に対して個別に対応する工夫が必要となる。

【その他の重要事項】
当科目を履修する場合は、春学期、秋学期合わせての履修を望みます。

【Outline (in English)】
In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.
It also another purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.
Before and after each class meeting, students will be expected to spend one hours to understand the course content.
Your overall grade in the class will be decided on the following Term-end report:(50％), and in-class contribution:(50%).

HIS500B4（史学 / History 500）

沖縄学入門II

大里　知子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。
「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】
琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけたうえで、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第2回	伊波普猷と「沖縄学」	伊波普猷と沖縄学
第3回	伊波普猷と「日琉同祖論」	伊波普猷の歴史思想
第4回	沖縄戦の実相	学童疎開と空襲、地上戦「鉄の暴風」、集団死、宮古・八重山での戦争マラリア
第5回	収容所からはじまった戦後	米軍支配の始まりと住民の暮らし
第6回	土地の強制収用と基地の成り立ち	米軍による接収だけではない基地の成り立ち
第7回	沖縄戦体験の語りと記録	語りなおされる沖縄戦、沖縄戦像と記憶、記述
第8回	アメリカ世の沖縄	アメリカのアジア戦略と核兵器配備
第9回	島ぐるみ闘争	基地の拡大と「島ぐるみ闘争」、「命どう宝」の訴え
第10回	日本への「復帰運動」	「復帰運動」が生んだ亀裂
第11回	戦後移民	移民政策と沖縄経済、「世界のウチナーンチュ」
第12回	「復帰」後の沖縄	「日本復帰」と「沖縄イメージ」
第13回	沖縄ブームと基地問題	終わらない基地問題、共同体の解体
第14回	近現代沖縄の歴史	これまでのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】
①沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編『概説沖縄の歴史と文化』（2000）
②沖縄県教育委員会編『沖縄の歴史と文化』（2000）沖縄県HPに掲載
①については、適宜資料を配布するので自分で用意する必要はありません。
②は補助テキストとして使用します。

【参考書】
・沖縄歴史教育研究会『琉球・沖縄史探究―探究心を育てるためのもう一つの眼差し』（2024）東洋企画
・『大学で学ぶ　沖縄の歴史』（2023）吉川弘文館
・前田勇樹・古波蔵契・秋山道宏編『つながる沖縄近現代史』（2021）ボーダーインク
・新城俊昭『教養講座　琉球・沖縄史』（2014）東洋企画
・沖縄県教育委員会編『沖縄県史　各論編第5巻　近代』（2011）東洋企画
・金城正篤・高良倉吉『「沖縄学」の父　伊波普猷［新訂版］』（2017）清水書院

【成績評価の方法と基準】
平常点70％、レポート30％　毎回の授業への参加態度に、授業に取り組む姿勢や意欲が顕れるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】
「入門」という科目のため、基本的な内容をベースにしているが、より専門的なディスカッションを求める学生に対して個別に対応する工夫が必要となる。

【その他の重要事項】
当科目を履修する場合は、春学期・秋学期合わせての履修を望みます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞
http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/105/0010447/profile.html

【Outline (in English)】
In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.
It also another purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.
Before and after each class meeting, students will be expected to spend one hours to understand the course content.
Your overall grade in the class will be decided on the following Term-end report:(50％), and in-class contribution:(50%).

HIS600B4（史学 / History 600）

東洋史学特殊研究Ⅰ

塩沢　裕仁

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国考古学資料の解読

【到達目標】
　近年膨大な資料が提示されている中国考古学の現状を理解するとともに研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　東アジア文化の発達やその変遷を探索しようとするならば必然的にその淵源たる中国古代文化を研究する必要がある。その方法としては第一に文献を理解することが求められるが、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。古代中国文化の中心地といえば河南洛陽である。本講座では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解を通して中国物質文化への理解を深めていきたいと思う。具体的には春学期は隋唐洛陽城の考古調査資料を読み進めていく。
　課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。
　授業形式（対面）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	中国考古学の状況と考古学報告活用の意味
第2回	隋唐洛陽城Ⅰ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅰ
第3回	隋唐洛陽城Ⅱ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅱ
第4回	隋唐洛陽城Ⅲ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅲ
第5回	隋唐洛陽城Ⅳ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅳ
第6回	隋唐洛陽城Ⅴ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅴ
第7回	隋唐洛陽城Ⅵ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅵ
第8回	隋唐洛陽城Ⅶ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅶ
第9回	隋唐洛陽城Ⅷ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅷ
第10回	隋唐洛陽城Ⅸ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅸ
第11回	隋唐洛陽城Ⅹ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅹ
第12回	隋唐洛陽城Ⅺ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅺ
第13回	隋唐洛陽城Ⅻ	隋唐洛陽城考古資料の講読Ⅻ
第14回	まとめ	史資料の整理とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
　資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで中国語を学んだことがなくとも十分に対応ができよう積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。

【テキスト（教科書）】
　授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】
塩沢裕仁『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010年

【成績評価の方法と基準】
[評価配分（%）]　発表内容：50、討論への参加姿勢：50

【学生の意見等からの気づき】
　特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理
＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。
＜主要研究業績＞
『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010年
「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新67号、2010年
『関野貞大陸調査と現在Ⅰ・Ⅱ』東京大学東洋文化研究所、2012年、2014年
「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012年
『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013年
「函谷関遺跡考証―四つの函谷関遺跡について」『東京大学東洋文化研究所紀要』169冊、2016年
「城壁・烽火台遺構よりみた潼関城址」『国際シンポジウム・前近代中国における交通路と関津に関する環境史学的研究』2017年

【Outline (in English)】
【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports , we will able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.
【Learning activities outside of classroom】Need four hours.
【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

HIS600B4（史学 / History 600）

東洋史学特殊研究 II

塩沢　裕仁

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　中国考古学資料の解読

【到達目標】
　近年膨大な資料が提示されている中国考古学の現状を理解するとともに研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　東アジア文化の発達やその変遷を探索しようとするならば必然的にその淵源たる中国古代文化を研究する必要がある。その方法としては第一に文献を理解することが求められるが、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。古代中国文化の中心地といえば河南洛陽である。本講座では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解を通して中国物質文化への理解を深めていきたいと思う。具体的には秋学期は後漢洛陽城関連資料として後漢刑徒墓関連資料を読み進めていく。
　課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。
　授業形式（対面）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	後漢洛陽城Ⅰ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅰ
第2回	後漢洛陽城Ⅱ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅱ
第3回	後漢洛陽城Ⅲ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅲ
第4回	後漢洛陽城Ⅳ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅳ
第5回	後漢洛陽城Ⅴ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅴ
第6回	後漢洛陽城Ⅵ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅵ
第7回	後漢洛陽城Ⅶ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅶ
第8回	後漢洛陽城Ⅷ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅷ
第9回	後漢洛陽城Ⅸ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅸ
第10回	後漢洛陽城Ⅹ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅹ
第11回	後漢洛陽城Ⅺ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅺ
第12回	後漢洛陽城Ⅻ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読Ⅻ
第13回	後漢洛陽城ⅩⅢ	後漢洛陽城刑徒墓関連考古資料の講読ⅩⅢ
第14回	まとめ	史資料の整理とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
　資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで中国語を学んだことがなくとも十分に対応ができよう積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。

【テキスト（教科書）】
　授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】
　塩沢裕仁『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010年
　塩沢裕仁『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013年

【成績評価の方法と基準】
[評価配分（%）]　発表内容：50、討論への参加姿勢：50

【学生の意見等からの気づき】
　特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理
＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。
＜主要研究業績＞
『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010年
「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新67号、2010年
『関野貞大陸調査と現在Ⅰ・Ⅱ』東京大学東洋文化研究所、2012年、2014年
「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012年
『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013年
「函谷関遺跡考証―四つの函谷関遺跡について」『東京大学東洋文化研究所紀要』169冊、2016年
「城壁・烽火台遺構よりみた潼関城址」『国際シンポジウム・前近代中国における交通路と関津に関する環境史学的研究』2017年

【Outline (in English)】
【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports , we will able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.
【Learning activities outside of classroom】Need four hours.
【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋史学特殊研究III

大島　誠二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』下巻を用いる。前期は、「中国古代都城考古学述論」を輪読する。どのように中国古代都城に対する研究が進展したのか、その過程を追い、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考察する。

【到達目標】
①考古学資料による分析方法を身につける。
②中国古代社会の成立過程を理解する。
③中国古代における都市の形態と役割、発展について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式。受講者の発表によって進行する。
課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の確認
第2回	中国歴史上的古代都城研究	中国における都城研究の歴史的推移をたどる
第3回	中国古代都城考古的発展①	「中国古代都城考古学的始創期」を読み、殷墟発掘を中心とする戦前の都城遺跡調査の状況を学ぶ。
第4回	中国古代都城考古的発展②	「中国古代都城考古学的発展期」を読み、中華人民共和国建国直後の都城遺跡の調査状況を学ぶ。
第5回	中国古代都城考古的発展③	「中国古代都城考古学的発展期」を読み、1960年代前半の都城遺跡の調査状況を学ぶ。
第6回	中国古代都城考古的発展④	「中国古代都城考古学的継続発展期」を読み、1970年代の都城遺跡の調査状況を学ぶ。
第7回	中国古代都城考古的発展⑤	「中国古代都城考古学的継続発展期」を読み、1980年代の都城遺跡の調査状況を学ぶ。
第8回	中国古代都城考古的発展⑥	「中国古代都城考古学的継続発展期」を読み、1990年代の都城研究の状況を学ぶ。
第9回	中国古代都城研究術略①	「中国古代都城考古学研究」を読み、報告書の出版状況と、研究の深化について学ぶ。
第10回	中国古代都城研究術略②	「中国古代都城的歴史学研究」を読み、都市論の変化について学ぶ。
第11回	中国古代都城研究術略③	中国古代都城的歴史地理研究」「中国古代都城的建築史学研究」を読み、古代都城史研究が、歴史地理史、建築史に与えた影響について学ぶ。
第12回	中国古代都城考古学理論与方法的発展①	「関于古代都城界定認識変化的理論志向」を読み、都城の定義について考察する。
第13回	中国古代都城考古学理論与方法的発展②	「中国古代都城考古発現所掲示都城布局形制変化的理論認識」を読み、都城の配置や形態の変化から、都城の果たしていた機能について考察する。
第14回	まとめ	中国古代の都城についてその特色を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参加者は、事前にテキストを読んでおく。
発表担当者は、注の文献などにも目を通して、内容の理解を深め、参加者の理解のためにレジュメを作成する。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
参加者は、博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】
劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』下巻　社会科学文献出版社　2016年1月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】
中国社会科学院考古研究所『中国考古学　夏商巻』中国社会科学出版社　2003年（2011年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学　両周巻』中国社会科学出版社　2004年（2011年重印）

【成績評価の方法と基準】
発表50％、レポート作成50％

【学生の意見等からの気づき】
画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国古代史、中国考古学
＜研究テーマ＞秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究
＜主要研究業績＞
「秦の東進と陝県社会」『アジア史における制度と社会』　刀水書房　1996年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版部　2005年
「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行　2008年

【Outline (in English)】
【Course outline】
Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.
As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief,“The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital” Second volume. In this term, we read the part of ｀A Review of the Archaeology of Ancient Chinese Capitals、. We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the “Development of the city and the formation of an ancient state”.
【Learning Objectives】
By the end of the course,students should be able to do the followings:
A. Learn how to analyze archaeological data.
B. Understand the formation process of ancient Chinese society.
C. Understand the morphology, function and development of ancient Chinese cities.
【Learning activities outside of classroom】
Before after each class meeting,students will be expected to spend two hours to understand the course content
【Grading Criteria/Policies】
Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report 50 % , and in-class contribution 50%

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋史学特殊研究Ⅳ

大島　誠二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』下巻を用いる。今期は、「古代都城布局形制與社会形態変化研究」を輪読する。どのように中国古代都城に対する研究が進展したのか、その過程を追い、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考察する。

【到達目標】
①考古学資料による分析方法を身につける。
②中国古代社会の成立過程を理解する。
③中国古代における都市の形態と役割、発展について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式。受講者の発表によって進行する。
課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の確認
第2回	中国古代都市遺址布局形制的考古発現概述①	「夏商西周時期都城遺址布局形制的考古発現」を読み、上古三代の都城遺跡の概要を学ぶ。
第3回	中国古代都市遺址布局形制的考古発現概述②	「春秋戦国時期都城遺址布局形制的考古発現」を読み、春秋戦国の都城遺跡の概要を学ぶ。
第4回	中国古代都市遺址布局形制的考古発現概述③	「秦漢時期都城遺址布局形制的考古発現」を読み、秦漢帝国時代の都城遺跡の概要を学ぶ。
第5回	中国古代都市遺址布局形制的考古発現概述④	「魏晋南北朝至隋唐時期都城遺址布局形制的考古発現」を読み、魏晋南北朝時代から隋唐帝国時代の都城遺跡の概要を学ぶ。
第6回	中国古代都市遺址布局形制的考古発現概述⑤	「宋遼金元時期都城遺址布局形制的考古発現」を読み、宋遼金元時代の都城遺跡の概要を学ぶ。
第7回	史前聚落、城、都城発展史与社会形態的考古学研究①	「史前時期聚落的考古発現」を読み、旧石器時代から新石器時代に至る集落内の変化を学ぶ。
第8回	史前聚落、城、都城発展史与社会形態的考古学研究②	「史前時期城址的考古発現」を読み、新石器後期に出現する城址遺跡の構造を学ぶ。
第9回	史前聚落、城、都城発展史与社会形態的考古学研究③	「古代文明形成、国家建立与古代都城出現」を読み、国家形成と都城建設の関係を学ぶ。
第10回	史前聚落、城、都城発展史与社会形態的考古学研究④	「中国古代都城、城的等級与王国、帝国的社会政治架構」を読み、政治機構の発展と都市構造の関係について考察する。
第11回	“単城制”“双城制”“三城制”与社会形態変化的考古学研究①	「“単城制”与“邦国”“方国”的社会形態研究」を読み、城郭集落と社会の発展について学ぶ。
第12回	“単城制”“双城制”“三城制”与社会形態変化的考古学研究②	「“双城制”与“王国”社会形態的研究」を読み、宮城の出現と国家組織の発展について学ぶ。
第13回	“単城制”“双城制”“三城制”与社会形態変化的考古学研究③	「“三城制”与“帝国”時代社会形態的研究」を読み、皇城の出現と国家組織の発展について学ぶ。
第14回	まとめ	城郭遺跡から、どのように社会形態の変化を読み取るかを考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参加者は、事前にテキストを読んでおく。
発表担当者は、注の文献などにも目を通して、内容の理解を深め、参加者の理解のためにレジュメを作成する。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
参加者は、博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】
劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』下巻　社会科学文献出版社　2016年1月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】
中国社会科学院考古研究所『中国考古学　夏商巻』中国社会科学出版社　2003年（2011年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学　両周巻』中国社会科学出版社　2004年（2011年重印）

【成績評価の方法と基準】
発表50％、レポート作成50％

【学生の意見等からの気づき】
画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国古代史、中国考古学
＜研究テーマ＞秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究
＜主要研究業績＞
「秦の東進と陝県社会」『アジア史における制度と社会』　刀水書房　1996年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版部　2005年
「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行　2008年

【Outline (in English)】
【Course outline】
Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.
As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief,“The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital” Second volume. In this term, we read the part of ｀Research on the layout and form of ancient capitals and changes in social structure｀. We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the “Development of the city and the formation of an ancient state”.
【Learning Objectives】
By the end of the course,students should be able to do the followings:
A. Learn how to analyze archaeological data.
B. Understand the formation process of ancient Chinese society.
C. Understand the morphology, function and development of ancient Chinese cities.
【Learning activities outside of classroom】
Before after each class meeting,students will be expected to spend two hours to understand the course content
【Grading Criteria/Policies】
Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report 50 % , and in-class contribution 50%

HIS600B4（史学 / History 600）

東洋史学演習 I

齋藤　勝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国古代史研究の展開
自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】
中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。課題に対してのフィードバックは、講読、整理発表の中で適宜行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	概論	授業の趣旨と進め方
第2回	漢文史料を読む	講読 『三国志』
第3回	前回の史料についての検討	『三国志』の成書と内容についての検討
第4回	漢文史料を読む	講読 『晋書』
第5回	前回の史料についての検討	『晋書』の成書と内容についての検討
第6回	漢文史料を読む	講読 『世説新語』
第7回	前回の史料についての検討	『世説新語』の成書と内容について
第8回	歴史評論を読む	講読 『日知録』
第9回	『日知録』を理解するために	顧炎武とその時代について
第10回	『日知録』を読むために	典故について
第11回	『日知録』を考える	講読 『日知録』についての諸研究
第12回	これまでの整理	これまで読んできたものについての比較検討
第13回	参加者各自の問題意識と先行研究	講読 参加者任意の文献
第14回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】
授業計画参照。適宜、配布します。
扱う内容は受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】
随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点100％
課題の達成度よって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　中国古代史
＜研究テーマ＞　唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容
＜主要研究業績＞
「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年
「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年
「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline (in English)】
Course outline: The aim of this course is to help students improve skills and critical minds to study the history of ancient China.
Learning objectives: At the end of the course, students are expected to promote their understanding of the way to describe the history in ancient China.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS600B4（史学 / History 600）

東洋史学演習 II

齋藤　勝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国古代史研究の展開
自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】
中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。課題に対してのフィードバックは、講読、整理発表の中で適宜行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	概論	授業の趣旨と進め方
第2回	漢文史料を読む	講読 『資治通鑑』
第3回	前回の史料についての検討	『資治通鑑』の成書と内容について
第4回	研究文献を読む	講読 陳垣『通鑑胡注表微』
第5回	前回の文献についての検討	陳垣とその時代について
第6回	前回の文献に関する補足	胡三省とその時代について
第7回	研究文献を読む	講読 桑原隲蔵の諸論文
第8回	前回の文献についての検討	桑原隲蔵とその時代について
第9回	研究文献を読む	講読 陳垣の諸論文
第10回	研究の比較	桑原隲蔵と陳垣の比較検討
第11回	研究文献を読む	講読 陳寅恪の諸論文
第12回	研究の比較	陳寅恪と陳垣の比較検討
第13回	参加者各自の問題意識の提示	講読 参加者任意の文献
第14回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】
授業計画参照。適宜、配布します。
扱う内容は受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】
随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点100％
発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　中国古代史
＜研究テーマ＞　唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容
＜主要研究業績＞
「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年
「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年
「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline (in English)】
Course outline: The aim of this course is to help students improve skills and critical minds to study the history of ancient China.
Learning objectives: At the end of the course, students are expected to promote their understanding of the way to describe the history in ancient China.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋史学演習III

徳留 大輔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【授業の概要】陶磁器から社会を考える―― 中国陶磁史を中心に
【目的・意義】人類にとって初めて化学変化を利用した道具であるやきもの（陶磁器）。東北アジアは長いやきものの歴史を有する。本授業では中国陶磁史を中心に、土器・陶磁器の歴史的な展開・様式の変遷を学ぶ。そして陶磁器がもつ器としての機能以外に、社会にどのような役割や意義を有してきたのか、「技術」・「様式」・「交流」・「秩序」・「権力」といった視点を持ちながら陶磁器から各時代の社会のあり方を学ぶ。

【到達目標】
陶磁器の種類・造形・意匠が多様化した背景には、技術の発展と異文化との接触・交流がある。この背景を「考古学」「美術史」「歴史学」の研究方法から探る。つまり本講義では「考古学」「美術史」「歴史学」的研究方法と思考を習得できる。また陶磁史を理解する上で中国・日本・朝鮮や東南アジア・西アジアの歴史・美術の知識の習得もでき、あわせて「国際性」を身につけることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の形態は講義方式を中心としますが、陶磁器・考古学に関するテーマから受講生自身が興味ある資料を調べ・発表する時間も設けます。また陶磁器に関する展覧会を１～２回、博物館・美術館にて見学する予定（事前に予定は調整します。また交通費と博物館入館料は各自で準備すること）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	「陶磁器（やきもの）」とはいったいどのような物質なのか。やきものは何のために、なぜ生まれたのか？ 素材の特徴や分類など、陶磁器の基本的な基礎知識について理解を深める。
第2回	中国新石器時代の土器文化ーその1	中国考古学における陶磁器研究の学史と枠組み（「区系類型論」など）を理解した上で、紀元前8000年頃～3000年頃における新石器時代前中期の土器文化について理解を深める。とくに彩陶を中心に紹介する。
第3回	中国新石器時代の土器文化ーその2	紀元前3000年頃～2000年頃における新石器時代後期・末期の土器文化について理解を深める。社会の複雑化が進むこの時代における土器様式はどのような展開を見せるのか。また社会の階層化の進展と土器製作における専業化などにとくに注目する。
第4回	初期王朝時代の土器文化	中国の初期の王朝とされる夏商周時代（なお夏王朝の存在については様々な見解がある）、中でも夏王朝の時代とされる二里頭時代の土器文化、また青銅器の出現し広がりをみせるなかでの土器の有する社会的・機能的な変化について理解を深める。
第5回	戦国秦漢時代の陶磁器	この時代、鉛釉陶器や彩色陶器、建築・動物模型など墓に副葬するための陶磁器が数多く作られる。鉛釉はどこから来たのか。また副葬明器にはどのような種類や思想が込められているのかについて理解を深める。さらに陶磁器を含め工芸品に着目すると、海上ルートを利用した東アジアと西アジアの交流がはじまる。青銅器、ガラス製品を含めて東西交流の歴史の始まりについて考察する。
第6回	魏晋南北朝時代の陶磁器	南北朝時代、とくに北方地域では明器が中心となるが複雑な造形・意匠の陶磁器文化が展開する。それと同時に中国の南方地域に起源がある青磁が北方地域でも流通し、また生産されるようになる。また中国陶磁史上はじめて白磁が登場する。白磁は後に、青花（染付）が生まれるために必須の陶磁器である。ただしこの白磁の起源については諸説存在しており、この陶磁史上における重要な学説についても認識を深める。
第7回	唐時代の陶磁器文化	唐代に唐三彩に代表される新たな陶磁文化が形成される。それらの造形はユーラシア交易の富の象徴や貴族を中心に人々の死後の世界観も大きく反映されている。中でも金銀器、ガラス製品は陶磁器文化と密接な繋がりをもつ。またこれらは国際色豊かな唐時代の社会・文化を極めてよく表すものである。東西交流の中身の理解について陶磁器の造形性や意匠などから迫る。
第8回	宋時代の陶磁器文化	宋代には宮廷による直接的な陶磁生産（官窯）が始まる。一方で民窯の陶磁生産も各地で発達する。官窯と民窯のそれぞれの特質および相互の影響関係について文献史学・考古学の成果から整理する。
第9回	元時代の陶磁器文化	中国陶磁器を代表する青花磁器（染付）。西アジア地域の交流の中でその様式は生み出され、西アジアへ輸出されるだけでなく、中国国内でも広く流通する。どのようなインパクトにより、元青花が生まれ、それは他の国・地域にどのような影響を与えたのか。そのプロセスを見ていく。

第10回	明清時代の陶磁器文化	中国陶磁史上大きな画期を迎える明時代。陶磁生産を支える官僚機構も整備される。ここでは、どのような多様な陶磁文化が明時代に形成され、それが清時代に継承されていくのか、景徳鎮で生み出された各種作品を通してその大枠を理解することを目的とする。
第11回	陶磁・考古学に関する 研究発表	あらかじめ定めたテーマを受講生自身で調べて、発表を行う。 一人 20 分程度。またその内容をもとに参加者同士でディスカッション を行う。
第12回	中国の窯業技術の変遷ー新石器時代から明清時代まで	中国における窯業技術の発展を窯業技術という視点から理解する。とくにハードウェアとして位置づけられる窯構造の変化と技術の伝播、また国家や王朝と主要な手工業生産である窯業の関わりに注目していく。
第13回	博物館における陶磁器の見学	展覧会を通して実際の陶磁器作品を見る。またどのようなコンテクストで各時代の陶磁器が位置づけられているのか、理解する。
第14回	まとめ	本学期の内容について整理を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
講義の際にレジュメの配布ならびに内容にあわせて参考文献を紹介します。授業の前・後に読んで要点をまとめて授業に臨んでください。また授業では課題を出しますので、次回の講義時に提出してください。

【テキスト（教科書）】
講義では教科書は使用しません。毎回レジュメを配布します。ただし、【参考書】に関してはぜひ一読してください。

【参考書】
葉喆民原著、出川哲朗 監訳、徳留大輔／新井崇之 訳『中国陶磁史』科学出版社東京、国書刊行会、2019年
徳留大輔責任編集『茶の湯の茶碗　唐物茶碗』淡交社、2021年

【成績評価の方法と基準】
期末レポート50％、各講義時に課す課題（宿題）20％、平常点30％

【学生の意見等からの気づき】
受講生が研究テーマとしている内容などに関しては、積極的に学生の研究成果と結びつけながら、講義参加者全員でディスカッションを行い、新しい研究上の課題や方向性を議論するようにしている。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
本講義の担当者者は美術館に勤務する学芸員であり、陶芸を中心とする工芸分野を担当しています。可能な限り、実物作品の実見や資料などの観察の方法のレクチャーや資料にふれる機会を設けるようにします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞考古学・東洋陶磁史
＜研究テーマ＞中国初期王朝形成過程の考古学的研究、中国陶磁史
＜主要研究業績＞
徳留大輔責任編集『茶の湯の茶碗　第一巻　唐物茶碗』淡交社、2021年
葉喆民原著、出川哲朗 監訳、徳留大輔／新井崇之 訳『中国陶磁史』科学出版社東京、国書刊行会、2019年
徳留大輔編集『宋磁ー神秘のやきもの』（展覧会・図録）、出光美術館、2018年

【Outline (in English)】
（Course outline）Considering Society through Ceramics: Focusing on the History of Chinese Ceramics
（Learning Objectives）Ceramics was the first tool that utilized chemical change for human beings. Northeast Asia has a long history of ceramics. In this class, we will study the historical development and stylistic transition of earthenware and ceramics, focusing on the history of Chinese ceramics. We will also study the role and significance of ceramics in society, in addition to their function as vessels, from the perspectives of "technology," "style," "exchange," "order," and "power," as well as the state of society in each period.
（Learning activities outside of classroom）Visiting exhibitions at museums
（Grading Criteria /Policy）Final report: 60%, homework assignments: 20%, regular marks: 20%.

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋史学演習Ⅳ

徳留 大輔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【授業の概要】陶磁器から社会を考える②—— 中国陶磁の歴史とその受容を中心に
【目的・意義】前期に行った中国陶磁史の展開における理解を深めた上で、中国陶磁史における代表的な陶磁器の種類である白磁・青磁、黒釉、青花、色絵について理解を深める。またそれら中国だけでなく日本や世界でどのように受容され、またそれぞれの地域でどのような新しい文化や伝統を築いてきたのかについて、比較しながら陶磁文化を学ぶ。そして古代から近世における様々な国や地域における中国陶磁器の「受容」の歴史を、「考古学」「美術史」「歴史学」の研究方法を取得しながら学ぶ。そして中国・韓国・日本、東南アジア、西アジアなどで展開される「模倣」「創造」という視点から交流の歴史を学ぶとともに、「国際性」を身につけることができる。

【到達目標】
前期に行った中国陶磁史の展開における理解を深めた上で、中国陶磁史における代表的な陶磁器の種類である白磁・青磁、黒釉、青花、色絵について理解を深める。またそれら中国だけでなく日本や世界でどのように受容され、またそれぞれの地域でどのような新しい文化や伝統を築いてきたのかについて、比較しながら陶磁文化を学ぶ。そして古代から近世における様々な国や地域における中国陶磁器の「受容」の歴史を学び研究するための、「考古学」「美術史」「歴史学」の研究方法を取得できる。そして中国・韓国・日本、東南アジア、西アジアなどで展開される「模倣」「創造」という視点から交流の歴史を学ぶとともに、「国際性」を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の形態は講義方式を中心としますが、陶磁器・考古学に関するテーマから受講生自身が興味ある資料を調べ・発表する時間も設けます。また陶磁器に関する展覧会を 1 ～ 2 回、博物館・美術館にて見学する予定（事前に予定は調整します。また交通費、入館料は各自で準備すること）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	官窯の歴史	皇帝・宮廷用の陶磁器生産における官窯とその生産システムの歴史的展開を学ぶ。
第2回	白磁・青花の歴史	白磁ならびに青花の技術・様式的展開について学ぶ
第3回	青磁の歴史	青磁の技術・様式的展開について学ぶ
第4回	黒釉の歴史	黒釉の技術・様式展開について学ぶ
第5回	色絵・五彩の歴史	色絵・五彩磁器の技術・様式展開について学ぶ
第6回	沈没船が語る陶磁史	中国陶磁器の流通と消費、また年代を考える上で近年沈没船から引き揚げられた陶磁器が注目されている。発見された沈没船は時代・場所により、航路や目的地が異なるため積載される陶磁器の組合せは様々である。東アジア・東南アジアの海域で発見されている沈没船資料を紐解きながら、交流の歴史を探る
第7回	エジプトフスタート遺跡出土の中国陶磁器	東アジアから遠く離れたエジプトカイロに所在する都市遺跡のフスタート遺跡。ここから8世紀から19世紀頃まで、中国陶磁をはじめ、日本陶磁や東南アジア、またそれらの影響をうけて在地で作られた陶磁器が出土している。それらがエジプトでなぜ発見されているのか、どのような交易・交流の歴史があったかの、発見されている陶磁器を通して学ぶ。
第8回	韓国陶磁史における中国陶磁の影響	中国陶磁の朝鮮半島における流通とその影響について、理解を深める。この中では簡単に韓国陶磁史についても学ぶ。
第9回	茶の湯にみる陶磁史	日本における中国陶磁の舶来は、唐物という言葉にも知られるように大きな影響を与えた。中でも茶の湯における中国陶磁器の重要は極めて大きい。陶磁器の受容史を「茶の湯」という視点から見ていく。この講義では黒釉碗、天目、青磁を中心に学ぶ。
第10回	儀礼と陶磁器—— 大名の儀礼・御成と陶磁器	日本における中国陶磁の舶来は、唐物という言葉にも知られるように大きな影響を与えた。この講義では、儀礼と陶磁器の関係に注目する。具体的には江戸時代における大名儀礼・御成において、中国陶磁器がどのような役割を果たしたのかを理解を深める。
第11回	欧州におけるアジアの陶磁文化の影響	大航海時代以降、中国陶磁、日本陶磁は欧州へ輸出され大きな影響を与えた。それは欧州における陶磁史にも新しい創造をもたらした。その影響関係が見られる陶磁作品を通して、影響・模倣・創造のプロセスについて学ぶ。
第12回	近代における陶磁器鑑賞の歴史	明治時代以降、中国陶磁器に対する見方は多様化する。唐物・茶の湯（煎茶を含む）・華道以外に、鑑賞陶器という捉え方が生み出される。欧州からの影響を受けた新しい陶磁器の見方・受容のあり方について学ぶ。
第13回	博物館見学	講義に関連する陶磁器の見学を行う。
第14回	後期のまとめ	後期で学んだことについて、まとめと整理を行う。また事前にテーマを選び受講生が興味をもった陶磁器・考古学のテーマに関して具体的に作品を選び、それに関する研究発表を行う。一人15点程度。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。講義の際にレジュメの配布ならびに内容にあわせて参考文献を紹介します。授業の前・後に読んで要点をまとめて授業に臨んでください。また授業では課題を出しますので、次回の講義時に提出してください。

【テキスト（教科書）】
講義では教科書は使用しません。毎回レジュメを配布します。ただし、【参考書】に関してはぜひ一読してください。

【参考書】
葉喆民原著、出川哲朗 監訳、徳留大輔／新井崇之 訳『中国陶磁史』科学出版社東京、国書刊行会、2019年
徳留大輔責任編集『茶の湯の茶碗　唐物茶碗』淡交社、2021年

【成績評価の方法と基準】
期末レポート50％、各講義時に課す課題（宿題）20％、平常点30％

【学生の意見等からの気づき】
受講生の研究内容と結びつけながら、いくつか物質文化資料をとりあげて、受講生どうしてその資料に関するディスカッションを行う。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
本講義の担当者者は美術館に勤務する学芸員であり、陶芸を中心とする工芸分野を担当しています。可能な限り、実物作品の実見や資料などの観察の方法のレクチャーや資料にふれる機会を設けるようにします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞考古学・東洋陶磁史
＜研究テーマ＞中国初期王朝形成過程の考古学的研究、中国陶磁史
＜主要研究業績＞
徳留大輔責任編集『茶の湯の茶碗　第一巻　唐物茶碗』淡交社、2021年
葉喆民原著、出川哲朗 監訳、徳留大輔／新井崇之 訳『中国陶磁史』科学出版社東京、国書刊行会、2019年
徳留大輔編集『宋磁ー神秘のやきもの』（展覧会・図録）、出光美術館、2018年

【Outline (in English)】
(Course outline) Considering Society through Ceramics (2) – Focusing on the History of Chinese Ceramics and its Acceptance
(Learning Objectives) After deepening their understanding of the development of Chinese ceramic history in the first semester, students will deepen their understanding of the representative types of Chinese ceramics history: white porcelain, celadon, black glaze, underglaze blue, and overglaze, as well as the new cultures and traditions that have developed in each region. Students will also learn about ceramic culture by comparing how ceramics were accepted not only in China but also in Japan and other country or regions, and how new cultures and traditions were established in each region. The history of the "reception" of Chinese ceramics in various countries and regions from ancient times to the modern period will be studied while acquiring research methods of "archaeology," "art history," and "historiography. Then, students will learn the history of exchange from the viewpoint of "imitation" and "creation" developed in China, Korea, Japan, Southeast Asia, and West Asia, as well as acquire "internationality".
(Learning activities outside of classroom) Visiting exhibitions at museums
(Grading Criteria /Policy) Final report: 60%, homework assignments: 20%, regular marks: 20%.

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋史学演習Ⅴ

久野 美樹

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
インド、中央アジア、中国北魏の仏教美術史
仏教・仏教美術の基本を学ぶと共に、インド、中央アジア、中国北魏を中心とした物質文化、思想を理解することができます。

【到達目標】
インドに始まる仏教・仏教美術の基本と中央アジア、北魏の物質文化と思想の研究方法を習得します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　仏教史、仏教美術史は一般に高校、大学で学ぶことはないため、まず仏教、仏教美術史の基本を学びます。
　授業の1週間前にレジュメをお渡しするので、あらかじめそのレジュメの内容に目を通しておいてください。
　授業内ではスライドを使用して講義します。
　タイミングが合えば、学生さんに修論の中間報告をしていただき、授業時間内に討論をしたり、教員がアドヴァイスをするなどを考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	美術史学について。仏教・仏教美術の基本	美術史学についてと、釈迦の生涯、仏教美術の基本
第2回	B.C.4c.-A.D.2c.の北西インド（1）	仏像出現以前、以後の北西インド
第3回	B.C.4c.-A.D.2c.の北西インド（2）	仏像の起源論争
第4回	大乗の仏像の誕生	阿弥陀仏像、釈迦・弥勒・観音菩薩像の誕生
第5回	インドの石窟寺院	アジャンタ石窟の壁画史、エローラ石窟
第6回	中央アジアの美術	西域北道クチャ、キジル石窟、西域南道ホータンの美術
第7回	古代中国の死生観	死者の魂の昇天思想
第8回	小金銅仏と石窟美術の始まり	小金銅仏と炳霊寺石窟
第9回	敦煌莫高窟初期窟	禅観修行の場の造形
第10回	魏晋南北朝の絵画と理論	魏晋南北朝絵画にみる漢民族様式,絵画理論、北方民族様式
第11回	北魏の漢化と雲岡石窟	祭天儀礼にみる北魏の漢化と雲岡石窟概説
第12回	雲岡石窟大仏像	高僧雲曜（どんよう）が造営した五大仏像と北魏皇帝の関係
第13回	龍門石窟北魏窟	龍門石窟　古陽洞と賓陽中洞
第14回	修士論文の中間報告	修士論文の中間報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
授業内で随時紹介。

【成績評価の方法と基準】
授業内に意見を述べ、積極的に授業に参加しているかをみます、100%。

【学生の意見等からの気づき】
仏教美術の基本が理解できるよう丁寧な指導を心がけます。

【学生が準備すべき機器他】
なし。

【その他の重要事項】
　学生は事前配布する資料を当該授業までに読み、コメント、質問、質疑応答の準備をします。
　学生は教員に対しどのようなことでも質問や意見を出してほしいと考えます。教員へのメールも歓迎します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国を中心としたアジア仏教美術史、石窟美術研究
＜研究テーマ＞5c.頃から8c.頃の石窟美術にみられる浄土観、仏身観
＜主要研究業績＞「龍門石窟北魏窟」『アジア仏教美術論集　東アジアⅠ　後漢・三国・南北朝』中央公論美術出版　2017年、「鴻慶寺石窟第一窟について」『法政史学』第84号　2015年、『唐代龍門石窟の研究』中央公論美術出版　2011年

【Outline (in English)】
(Course outline)　Buddhist Art History of India,Central Asia and Northern Wei Dynasty.
(Learning Objectives)　By the end of course, students should be able to do the followings: understanding Asian Material Culture and Asian Thought.
(Learning activities outside of classroom)　Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
(Grading Criteria /Policy)　Your overall grade in the class will be decided based on the following in class contribution:100%

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋史学演習VI

久野 美樹

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国北朝期、唐代および日本の仏教美術史

【到達目標】
物質文化研究の方法及び中国北朝期と唐、日本古代を中心とした仏教美術を理解します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　授業で使用するレジュメは１週間前にお渡しするので、その内容に目を通しておいてください。
　授業ではスライドを使用した講義形式を主としますが、授業内容に対して積極的に意見を述べ、討論に参加してください。
　授業内容は若干変更の可能性がありますが、変更する際には事前にお知らせします。
　適当な時期に1回は学生さんに修論の中間報告をしていただき、授業時間内に討論をしたり、教員がアドヴァイスをすることを考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	修士論文の中間発表	仮設定ですが、春学期最後に修論中間発表された方は夏季休暇を経ての進捗状況報告。別に修論作成年に当たる方は年度末提出予定の修論内容を中間発表
第2回	中国北朝期の法華経信仰の美術	中国北朝期の造形の重要な思想的背景である法華信仰を雲岡石窟、北朝期仏像にみていく
第3回	敦煌莫高窟西魏窟	禅観修行の場と造形。インド・中央アジアの西方様式と漢民族様式
第4回	唐代の世俗王権と仏教美術(1)	肥田路美「一州一寺制と皇帝等身像」
第5回	唐代の世俗王権と仏教美術（２）	優填王像（うでんおうぞう）の流行と意義
第6回	唐代龍門石窟の一仏多菩薩像	久野「唐代龍門石窟の一仏多菩薩像」
第7回	敦煌莫高窟壁画史	中国仏教の変遷を敦煌莫高窟の壁画にみる
第8回	敦煌莫高窟の大画面形式壁画	観音信仰、阿弥陀信仰の造形
第9回	唐代龍門石窟の三大仏像	賓陽南洞像、賓陽北洞像、潜渓寺洞像
第10回	龍門石窟奉先寺洞像	日本奈良東大寺大仏像の思想的淵源であり、A.D.700頃の日本美術史に影響を与えた唐の都の仏像様式
第11回	初唐の仏教思想の反映を敦煌、龍門の造形にみる	釈迦であり阿弥陀である仏像
第12回	初唐文化の日本への影響	奈良薬師寺金堂薬師三尊
第13回	大唐長安の栄華	大唐長安の栄華と正倉院宝物
第14回	密教美術	密教と曼荼羅

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
学生さん個人で東京国立博物館を見学することをお勧めします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
授業内で随時紹介。

【成績評価の方法と基準】
各授業内容に対するコメント、質問、教員との質疑応答100％、物質資料についての正確な理解と研究者としての論理の構築ができているかをみます。

【学生の意見等からの気づき】
仏教美術の基本が理解できるよう丁寧な指導を心がけます。

【学生が準備すべき機器他】
なし。

【その他の重要事項】
学生さんは事前配布する資料を当該授業までに読み、議論の準備をします。
学生さんは教員に対しどのようなことでも質問や意見を出してほしいと考えます。教員へのメールも歓迎します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞アジア仏教美術史、石窟美術研究
＜研究テーマ＞5c.頃から8c.頃の石窟美術にみられる浄土観、仏身観
＜主要研究業績＞「唐代龍門石窟の一仏多菩薩像」『唐代史研究』第25号　2022年、「唐代龍門石窟」『アジア仏教美術論集Ⅱ　隋・唐』中央公論美術出版　2019年、「釈迦であり阿弥陀である仏像ー初盛唐期法華経関連の造形を中心としてー」『法政史学』第91号　2019年、『唐代龍門石窟の研究』中央公論美術出版、2011年

【Outline (in English)】
(Course outline) Buddhist Art History of the Chinese Northern Dynasty Period, Tang Dynasty and Japan .
(Learning Objectives) By the end of the course, students should be able to do the followings: understanding Chinese Material Culture and Asian Thought.
(Learning activities outside of classroom) Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
(Grading Criteria /Policy) Your overall grade in the class will be decided based on the following in class contribution:100%.

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋古代史研究Ⅰ

齋藤　勝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国古代史の基礎史料の講読
中国古代史研究に必要な漢文史料の読解力を高める。

【到達目標】
中国古代史研究に用いる漢文史料を多読し、自力で研究を進めていくために必要な漢文読解力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎回、課題となる漢文史料についての講読を行う。課題に対してのフィードバックは、講読の中で適宜行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	儒家の文献を読む	講読『論語』
第2回	儒家の文献を読む	講読『孟子』
第3回	儒家の文献を読む	講読『荀子』
第4回	儒家の文献を読む	講読『春秋左氏伝』
第5回	儒家の文献を読む	講読『春秋公羊伝』
第6回	墨家の文献を読む	講読『墨子』
第7回	道家の文献を読む	講読『老子』
第8回	道家の文献を読む	講読『荘子』
第9回	法家の文献を読む	講読『管子』
第10回	法家の文献を読む	講読『商君書』
第11回	法家の文献を読む	講読『韓非子』
第12回	史書を読む	講読『史記』
第13回	史書を読む	講読『漢書』
第14回	史書を読む	講読『資治通鑑』

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】
授業計画参照。適宜、配布します。
扱う内容は受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】
随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点100％
課題の達成度によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
例年、授業内容、特に漢文訓読に関心の無い方が履修されることが多いのですが、関心を持っている履修者の学習の妨げになりうるので、よく授業内容を理解した上で履修してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　中国古代史
＜研究テーマ＞　唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容
＜主要研究業績＞
「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年
「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年
「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline (in English)】
Course outline: The aim of this course is to help students improve skills to read texts of the history of ancient China.
Learning objectives: At the end of the course, students are expected to acquire skills to read texts of the history of ancient China in order to study for themselves.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋古代史研究 II

齋藤　勝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国古代史の基礎史料の講読
中国古代史研究に必要な漢文史料の読解力を高める。

【到達目標】
中国古代史研究に用いる漢文史料を多読し、自力で研究を進めていくために必要な漢文読解力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎回、課題となる漢文史料についての講読を行う。課題に対してのフィードバックは、講読の中で適宜行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「塩商婦」(1)	「塩商婦」の原文
第2回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「塩商婦」(2)	「塩商婦」に関連する諸史料
第3回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「塩商婦」(3)	「塩商婦」をめぐる陳寅恪の所説
第4回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「陰山道」(1)	「陰山道」の原文
第5回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「陰山道」(2)	「陰山道」に関連する諸史料－伝世史料
第6回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「陰山道」(3)	「陰山道」に関連する諸史料－新出史料
第7回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「陰山道」(4)	「陰山道」をめぐる陳寅恪の所説
第8回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「七徳舞」(1)	「七徳舞」の原文
第9回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「七徳舞」(2)	「七徳舞」に関連する諸史料
第10回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「七徳舞」(3)	「七徳舞」をめぐる陳寅恪の所説
第11回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「法曲」(1)	「法曲」の原文
第12回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「法曲」(2)	「法曲」に関連する諸史料
第13回	陳寅恪『元白詩箋証稿』と白居易「法曲」(3)	「法曲」をめぐる陳寅恪の所説
第14回	漢文の文献と中国語　漢文史料と研究の関係の考察の研究を読む	

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】
授業計画参照。適宜、配布します。
扱う内容は、受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】
随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点100％
発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
例年、授業内容、特に漢文訓読に関心の無い方が履修されることが多いのですが、関心を持っている履修者の学習の妨げになりうるので、よく授業内容を理解した上で履修してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　中国古代史
＜研究テーマ＞　唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容
＜主要研究業績＞
「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年
「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年
「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline (in English)】
Course outline: The aim of this course is to help students improve skills to read texts of the history of ancient China.
Learning objectives: At the end of the course, students are expected to acquire skills to read texts of the history of ancient China in order to study for themselves.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋中世史研究Ⅰ

宇都宮 美生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近年注目されているグローバル・ヒストリー研究の研究動向を紹介し、グローバルな観点から中国を中心としたユーラシア大陸東部の広域経済圏を見ていく。それにより、従来の各国の歴史ではなく、世界史の大きな流れをつかむことを学習のねらいとする。

【到達目標】
多くの図表を読み解く力をつけ、視覚的に歴史の流れが把握できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
初回に分担をするので、各自調べて発表し、それについて討論する。発表の担当がない受講生も予習をしておく。なお、受講生の希望により、学習内容は前後することがある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	グローバル・ヒストリーの理論と方法
第2回	交通の役割	農牧境界地帯から沿岸地帯への移行
第3回	政権の拠点地	境界都市の形成
第4回	環境と歴史の構造	ユーラシア大陸東部の世界システム
第5回	農牧境界地帯	牧畜と遊牧
第6回	アフロ・ユーラシア大陸の歴史空間	世界システムの変化
第7回	中国大陸の歴史空間	大中国と小中国
第8回	時間区分	時代に基づく時期空間
第9回	世界史の三段階	形成と進展
第10回	初期国家1	研究動向
第11回	初期国家2	国家のはじまり
第12回	古典国家1	遊牧国家の形成と農業国家の再編
第13回	古典国家2	秦漢と匈奴
第14回	学習のまとめ	東アジアにおけるグローバル・ヒストリー

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業の前にテキストの地図や図表を分析する。関連する論文を読んで知識を深める。予習・復習あわせて各回4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部、2021年、￥3,000＋税。この本を使うので各自1冊用意すること。

【参考書】
適時指示をする。

【成績評価の方法と基準】
授業態度（発表と討論）50％、期末レポート50％

【学生の意見等からの気づき】
わかりやすい授業を心掛ける。

【学生が準備すべき機器他】
色のついた筆記用具

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
中国古代史
〈研究テーマ〉
都城史・水利史・交流史・交通史
〈主要研究業績〉
『隋唐洛陽の都城と水環境』雄山閣、2023年

【Outline (in English)】
Outline and objectives:　This course introduces an understanding of Chinese history in respect to international relations with other areas.　The aim of this course is to help students acquire historical changes in politics, economy, organization, military affairs, agriculture, culture and diplomacy.
Learning Objectives: The goal of this course is to understand the flow of Chinese history, the factors and backgrounds that created the historical facts, their influence and development, and the mutual influence and international relations with the surrounding areas.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Your overall grad in the class will be decided based on assignments at each class meeting (50%) and term-end report (50%).

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋中世史研究 II

宇都宮 美生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近年注目されているグローバル・ヒストリー研究の研究動向を紹介し、グローバルな観点から中国を中心としたユーラシア大陸東部の広域経済圏を見ていく。それにより、従来の各国の歴史ではなく、世界史の大きな流れをつかむことを学習のねらいとする。

【到達目標】
多くの図表を読み解く力をつけ、視覚的に歴史の流れが把握できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
初回に分担をするので、各自調べて発表し、それについて討論する。発表の担当がない受講生も予習をしておく。なお、受講生の希望により学習内容は前後することがある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方と春学期のおさらい
第2回	農牧複合国家1	人間の移動
第3回	農牧複合国家2	漢から唐へ
第4回	世界宗教圏1	中国大陸と世界宗教
第5回	世界宗教圏2	宗教と個人
第6回	都城時代1	東アジアの都城時代
第7回	都城時代2	日本の王権理論
第8回	商業帝国1	ソグド商人
第9回	商業帝国2	イスラーム商人
第10回	ユーラシア大陸のルネサンス1	8～14世紀の古典文化復興運動
第11回	ユーラシア大陸のルネサンス2	複数の古典文化復興運動
第12回	西欧の勃興とグローバル・ヒストリー1	世界システム論の現在
第13回	西欧の勃興とグローバル・ヒストリー2	近代港湾都市網の形成
第14回	学習のまとめ	グローバル・ヒストリーとしての現在と未来

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業の前にテキストの地図や図表を分析する。関連する論文を読んで知識を深める。予習・復習あわせて各回4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部、2021年、￥3,000＋税。この本を使うので各自1冊用意すること。

【参考書】
随時指示をする。

【成績評価の方法と基準】
授業態度（発表と討論）50％、期末レポート50％

【学生の意見等からの気づき】
わかりやすい授業を心掛ける。

【学生が準備すべき機器他】
色のついた筆記用具

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
中国古代史
〈研究テーマ〉
都城史・水利史・交流史・交通史
〈主要研究業績〉
『隋唐洛陽の都城と水環境』雄山閣、2023年

【Outline (in English)】
Outline and objectives:　This course introduces an understanding of Chinese history in respect to international relations with other areas.　The aim of this course is to help students acquire historical changes in politics, economy, organization, military affairs, agriculture, culture and diplomacy.
Learning Objectives: The goal of this course is to understand the flow of Chinese history, the factors and backgrounds that created the historical facts, their influence and development, and the mutual influence and international relations with the surrounding areas.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Your overall grad in the class will be decided based on assignments at each class meeting (50%) and term-end report (50%).

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋近代史研究Ⅰ

芦沢　知絵

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は「中国近現代史のなかの政治と社会・文化」をテーマとする。
現在の中国は、自他ともに認める「グローバル大国」である。しかし、そこに至る近現代の中国の歴史は、対外関係の大きな変化から始まる激しい政治変動に揺さぶられてきた。そうした政治変動とともに、中国の社会や人々の生活も大きく変容し、例えば思想、文学、教育、メディア、日常の生活様式など、様々な面で新しい文化潮流が生み出された。
本授業では、中国近現代史における政治変動と、それにともなう社会・文化の変遷を追いながら、現在の中国がどのように形成されてきたのか概観する。同時に、現代中国にみられる政治と社会・文化の関係性や、そこから見出される諸問題について、歴史的な視点から共に考えていきたい。

【到達目標】
近現代中国における政治変動と社会・文化の歴史的変遷をたどり、中国近現代史に関する知識や理解を深めるとともに、現在の中国が形成された過程、及び現代中国の政治と社会・文化の関係性や諸問題について、主体的に考察する。その上で、自身の専門分野・研究テーマとも比較検証しながら、歴史研究における史料分析や課題解明の方法をより具体的に学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
原則として対面授業を実施する。基本的に講義形式をとり、毎回授業後にリアクションペーパーを提出する。提出されたリアクションペーパーは、次回授業時に一部を公開・回答し、フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	中国近現代史入門	中国近現代史を学ぶ意義・方法
第2回	中国の近代	アヘン戦争と「西洋近代」との遭遇
第3回	清朝の危機	洋務から変法への思想展開
第4回	中華民国の成立	辛亥革命と進む「近代化」
第5回	軍閥割拠の時代	五四期の新文化運動とナショナリズム
第6回	南京国民政府の成立	国民党の国家建設と都市大衆文化
第7回	満州事変の勃発	「抗日」運動とプロパガンダ
第8回	日中戦争への突入	戦時期の中国民衆と知識人
第9回	中華人民共和国の成立	国共内戦下の中国共産党と農村社会
第10回	社会主義体制の確立	統制される社会・思想・人民
第11回	プロレタリア文化大革命	毛沢東の政治闘争と社会混乱
第12回	改革開放の始動	経済成長と変わりゆく生活文化
第13回	現代中国の行方	「グローバル大国」を生きる人々
第14回	中国近現代史の課題と展望	中国近現代史をめぐる諸問題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回授業後にリアクションペーパーを提出する。また、授業内で紹介した参考文献や配布資料をもとに知識と理解を深めるほか、現在の中国に関するニュースや新聞・雑誌記事にも自主的に目を通し、問題意識を高める。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特になし

【参考書】
主な概説書は以下。その他は授業内で紹介する。
田中仁・菊池一隆・加藤弘之・日野みどり・岡本隆司・梶谷懐『新・図説中国近現代史（改訂版）――日中新時代の見取図』法律文化社，2020年.
久保亨・土田哲夫・高田幸男・井上久士・中村元哉『現代中国の歴史――両岸三地100年の歩み（第2版）』東京大学出版会，2019年.
吉澤誠一郎他『中国近現代史①～⑥』岩波書店（岩波新書），2010～17年.
坂元ひろ子『中国近代の思想文化史』岩波書店（岩波新書），2016年.

【成績評価の方法と基準】
①　平常点　30％
主に毎回授業後に提出するリアクションペーパーを評価対象とする。
②　期末試験　70％
授業内容に関する論述問題を出題する。

【学生の意見等からの気づき】
初学者にも理解しやすい講義を心がけ、写真や映像などの視覚的な資料も多く用いる。また、毎回リアクションペーパーへのフィードバックを行う。

【学生が準備すべき機器他】
授業連絡・資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
中国近現代史、中国経済史
＜研究テーマ＞
近代中国の紡織業、企業経営、「在華紡」
＜主要研究業績＞
芦沢知絵「在華紡の福利厚生―内外綿上海工場の事例を手がかりとして―」（『中国研究論叢』第7号，霞山会，2007年）.
芦沢知絵「内外綿の中国人管理者と監督的労働者―『特選工』から『役付工』へ（1911-45年）―」（富澤芳亜・久保亨・萩原充編著『近代中国を生きた日系企業』大阪大学出版会，2011年）.

【Outline (in English)】
This course introduces the history of modern China focusing on political, social and cultural changes from the Opium War to the present time.
The goal of this course is to understand the historical nation-building process and various problems of modern China.
After each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.
Final grade will be decided based on term-end examination (70%) and in-class contribution (30%).

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋近代史研究 II

芦沢　知絵

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　本授業は「近現代の中国経済史」をテーマとする。
　中国の経済発展は今や目覚ましい。一方、中国がなぜこれほど急速な発展を遂げたのか、また中国経済の実態や構造はどのようなものなのか、疑問を持つ人も多いであろう。そもそも歴史を振り返ってみれば、近代以前の中国は、政治的にも経済的にもアジアの中心であった。しかし、近代以降は列強の進出や戦争の影響により、中国経済は「停滞」したとされる。もっとも、近年の研究では、上海などの沿海都市部における、近代産業の発展的側面も明らかにされつつある。
　本授業では、こうした最新の研究成果や諸資料をもとに、中国がどのような過程を経て今日の経済発展に至ったのか概観する。その上で、現在にも通じる中国経済の特質・問題点とは何か、歴史的な視点から共に考えていきたい。

【到達目標】
近現代における中国経済の変遷をたどり、中国近現代史及び中国経済史に関する知識や理解を深めるとともに、歴史的視点からみた中国経済の特質・問題点について、主体的に考察する。その上で、自身の専門分野・研究テーマとも比較検証しながら、歴史研究における史料分析や課題解明の方法をより具体的に学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
原則として対面授業を実施する。基本的に講義形式をとり、毎回授業後にリアクションペーパーを提出する。提出されたリアクションペーパーは、次回授業時に一部を公開・回答し、フィードバックを行う。また、本授業ではやや専門的な内容を扱うため、中国近現代史の概略については、各自である程度の予習が必要となる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	中国経済史入門	中国経済史を学ぶ意義・方法
第2回	前近代の中国経済	伝統的商業秩序の形成
第3回	清末の近代化①	開港と外国資本
第4回	清末の近代化②	洋務運動と殖産興業
第5回	民国期の産業勃興①	新興資本家の出現
第6回	民国期の産業勃興②	軍閥と地方財政
第7回	国民政府の経済政策①	中央集権化と幣制改革
第8回	国民政府の経済政策②	戦時下の動員・統制
第9回	戦後の香港・台湾経済	冷戦期の華人資本
第10回	社会主義計画経済①	集団化と国有化
第11回	社会主義計画経済②	政治運動と混乱・停滞
第12回	改革開放と経済成長①	市場経済への移行
第13回	改革開放と経済成長②	WTO加盟とグローバル化
第14回	現在の中国経済	発展と社会矛盾

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回授業後にリアクションペーパーを提出する。また、授業内で紹介した参考文献や配布資料をもとに知識と理解を深めるほか、中国経済に関するニュースや新聞・雑誌記事にも自主的に目を通し、問題意識を高める。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特になし

【参考書】
主な概説書は以下。その他は授業内で紹介する。
岡本隆司編『中国経済史』名古屋大学出版会，2013年.（第4・5章）
久保亨・加島潤・木越義則『統計でみる中国近現代経済史』東京大学出版会，2016年.
丸川知雄『現代中国経済 新版』有斐閣，2021年.

【成績評価の方法と基準】
①　平常点　30％
主に毎回授業後に提出するリアクションペーパーを評価対象とする。
②　期末レポート　70％
授業内容に関するテーマをもとにレポートを執筆し提出する。

【学生の意見等からの気づき】
初学者にも理解しやすい講義を心がけ、写真や映像などの視覚的な資料も多く用いる。また、毎回リアクションペーパーへのフィードバックを行う。

【学生が準備すべき機器他】
授業連絡・資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用する。

【その他の重要事項】
中国経済の動向に合わせて、授業計画を一部変更する場合がある（授業内で通知）。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
中国近現代史、中国経済史
＜研究テーマ＞
近代中国の紡織業、企業経営、「在華紡」
＜主要研究業績＞
芦沢知絵「在華紡の福利厚生―内外綿上海工場の事例を手がかりとして―」（『中国研究論叢』第7号，霞山会，2007年）.
芦沢知絵「内外綿の中国人管理者と監督的労働者―『特選工』から『役付工』へ（1911-45年）―」（富澤芳亜・久保亨・萩原充編著『近代中国を生きた日系企業』大阪大学出版会，2011年）.

【Outline (in English)】
This course introduces the history of the modern Chinese economy. The goal of this course is to understand the historical process and problems of China's economic growth.
After each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.
Final grade will be decided based on term-end report (70%) and in-class contribution (30%).

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊研究Ⅰ

内川　勇太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、初期中世ブリテンに関する英語で書かれた学術的文献を講読することで、研究を遂行するために必要な語学力や、文献の扱い方、初期中世ブリテンに関する知識を習得することを目指す。

【到達目標】
この授業は、以下の3点を到達目標に設定する。
（1）英語で書かれた学術文献を正確に読むことができる。
（2）初期中世ブリテン史における基礎的事項を体系的に理解できる。
（3）文献における論点を正確に把握し、さらに掘り下げることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業では、初期中世ブリテンの政治・社会・文化に関する英語文献を講読する。 授業は、輪読形式で進められ、受講者には事前にテキストを読み授業に臨むことが求められる。ある程度テキストが読み進められた段階で、それまで出てきた問題点などについて、受講者に報告をしてもらうことも考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方の確認。文献に関する説明。
第2回	文献講読1	第1章講読
第3回	文献講読2	第1部第2章講読
第4回	文献講読3	第1部第3章講読
第5回	文献講読4	第1部第4章講読
第6回	文献講読5	第1部第5章講読
第7回	文献講読6	第1部第6章講読
第8回	文献講読7	第1部の重要事項の確認と調査報告。
第9回	文献講読8	第2部第7章講読
第10回	文献講読9	第2部第8章講読
第11回	文献講読10	第2部第9章講読
第12回	文献講読11	第2部第10章前半講読
第13回	文献講読12	第2部第10章後半講読
第14回	まとめ	第2部の重要事項の確認と調査報告。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に指定された英文テキストの箇所を読んでくること。また、該当箇所に出てくる人物名や地名、史料なども可能な限り調べてくること。

【テキスト（教科書）】
講読する文献として、R. Naismith, Early Medieval Britain: c. 500-1000 (Cambridge, 2021)を考えている。なお、こちらでコピーないしはPDFファイルを用意するので、購入の必要はない。

【参考書】
1.近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社2010
2.青山吉信編『世界歴史体系イギリス史１：先史- 中世』山川出版社1991
3.トマス・チャールズ=エドワーズ編・常見信代監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史２：ポスト・ローマ』慶應義塾大学出版会2010
4.ウェンディ・デイヴィス編・鶴島博和監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史３：ヴァイキングからノルマン人へ』慶応義塾大学出版会2015
5.川北稔編『新版世界各国史11イギリス史』山川出版社1998

【成績評価の方法と基準】
平常点100%
授業に臨む姿勢（準備や討論への参加）と内容理解度から総合的に判断する

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class, we will develop the skills necessary to carry out research (language skills, how to handle documents, and knowledge about early medieval British history) by reading academic literature written in English on early medieval British history.
【Learning Objectives】
This class will set the following three goals.
(1) Be able to read academic literature written in English accurately.
(2) Be able to systematically understand basic matters in early medieval British history.
(3) Be able to accurately grasp the points at issue in the literature and dig deeper into them.
【Learning activities outside of classroom】
The standard time for preparation and review for this class is two hours each. Read a portion of the English text specified in advance. Also, try to investigate as much as possible the names of people, places, and historical materials that appear in the relevant passages.
【Grading Criteria /Policy】
Class engagement 100%
Comprehensively judged based on attitude toward class (preparation and participation in discussion) and level of understanding of content.

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊研究 II

内川　勇太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、初期中世ブリテンに関する英語で書かれた学術的文献を講読することで、研究を遂行するために必要な語学力や、文献の扱い方、初期中世ブリテンに関する知識を習得することを目指す。

【到達目標】
この授業は、以下の3点を到達目標に設定する。
（1）英語で書かれた学術文献を正確に読むことができる。
（2）初期中世ブリテン史における基礎的事項を体系的に理解できる。
（3）文献における論点を正確に把握し、さらに掘り下げることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業では、初期中世ブリテンの政治・社会・文化に関する英語文献を講読する。 授業は、輪読形式で進められ、受講者には事前にテキストを読み授業に臨むことが求められる。ある程度テキストが読み進められた段階で、それまで出てきた問題点などについて、受講者に報告をしてもらうことも考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	復習	春学期の復習
第2回	文献講読1	第3部第11章講読
第3回	文献講読2	第3部第12章前半講読
第4回	文献講読3	第3部第12章後半講読
第5回	文献講読4	第3部第13章講読
第6回	文献講読5	第3部第14章前半講読
第7回	文献講読6	第3部第14章後半講読
第8回	文献講読7	第3部第11章から第14章の重要事項の確認と調査報告。
第9回	文献講読8	第3部第15章講読
第10回	文献講読9	第3部第16章講読
第11回	文献講読10	第3部第17章講読
第12回	文献講読11	第3部第18章講読
第13回	文献講読12	第3部第15章から第18章の重要事項の確認と調査報告。
第14回	まとめ	授業全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に指定された英文テキストの箇所を読んでくること。また、該当箇所に出てくる人物名や地名、史料なども可能な限り調べてくること。

【テキスト（教科書）】
講読する文献として、R. Naismith, Early Medieval Britain: c. 500-1000 (Cambridge, 2021)を考えている。なお、こちらでコピーないしはPDFファイルを用意するので、購入の必要はない。

【参考書】
1.近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社2010
2.青山吉信編『世界歴史体系イギリス史１：先史- 中世』山川出版社1991
3.トマス・チャールズ=エドワーズ編・常見信代監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史２：ポスト・ローマ』慶應義塾大学出版会2010
4.ウェンディ・デイヴィス編・鶴島博和監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史３：ヴァイキングからノルマン人へ』慶応義塾大学出版会2015
5.川北稔編『新版世界各国史11イギリス史』山川出版社1998

【成績評価の方法と基準】
平常点100%
授業に臨む姿勢（準備や討論への参加）と内容理解度から総合的に判断する

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class, we will develop the skills necessary to carry out research (language skills, how to handle documents, and knowledge about early medieval British history) by reading academic literature written in English on early medieval British history.
【Learning Objectives】
This class will set the following three goals.
(1) Be able to read academic literature written in English accurately.
(2) Be able to systematically understand basic matters in early medieval British history.
(3) Be able to accurately grasp the points at issue in the literature and dig deeper into them.
【Learning activities outside of classroom】
The standard time for preparation and review for this class is two hours each. Read a portion of the English text specified in advance. Also, try to investigate as much as possible the names of people, places, and historical materials that appear in the relevant passages.
【Grading Criteria /Policy】
Class engagement 100%
Comprehensively judged based on attitude toward class (preparation and participation in discussion) and level of understanding of content.

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊研究III

篠原　琢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
18世紀末から第一次世界大戦期までの「長い19世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝国的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。
　ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い19世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった・・・。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation Stateを近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。
　果たして帝国の19世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。

【到達目標】
受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。
授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ1. 帝国概論	ハプスブルク帝国とはどのような帝国だったのか、概説的に解説する。
第2回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ2. 帝国を思い出す	ハプスブルク帝国崩壊後、帝国にどのようなイメージが存在したのか、代表的な流れを考える。
第3回	ハプスブルク帝国史研究の歴史1. 帝国解体は必然だったのか？	ハプスブルク帝国後継諸国の歴史認識を問う。
第4回	ハプスブルク帝国史研究の歴史2. 時代錯誤の帝国？	Oscar Jaszi, The Dissolution of Habsburg Monarchy
第5回	ハプスブルク帝国史研究の歴史3. 帝国の長い解体過程	Alan Sked, The Fall and Decline of the Habsburg Monarchy
第6回	ハプスブルク帝国史研究の歴史4. 帝国解体は必然ではない！	Pieter Judson, Habsburg Empire. New History
第7回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史1. 諸国民社会の形成	Miroslav Hroch, Social Preconditions of National Revival in Europe
第8回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史2. できごととしてのネイション	Rogers Brubacker, Nation without Groups
第9回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史3. National Indifference	Tara Zahra, "Imagined Non-communities"
第10回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史4. 国民化する帝国	Alexei Miller, Nationalizing Empires
第11回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国1. ガリツィア・ブコヴィナ	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第12回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国2. 文明化の使命	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第13回	ハンナ・アーレント『全体主義の起原』から帝国を考える	ハンナ・アーレント、『全体主義の起原』のうち、第二巻「帝国主義」を扱う。
第14回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業時に扱うテキストはPDFで配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備してくること。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New Historyを教科書とする。

【参考書】
授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】
演習への貢献度、演習時の報告を40%、学期末のレポートを60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は受講者がいなかったので、該当しない。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中央ヨーロッパ近現代史
＜研究テーマ＞中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline (in English)】
Learning objectives
We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleologicl concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of defferent territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic exixtence by itsself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anormality deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summerizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.
Learning activities outside of classroom:
Critical reading of academic essays on the topic in advance.
Grading Criteria:
Comments and discussion in the class: 40%
Final report: 60%

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊研究Ⅳ

篠原　琢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
18世紀末から第一次世界大戦期までの「長い19世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝国的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。

ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い19世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった・・・。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation Stateを近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。

果たして帝国の19世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。前期は帝国史について、方法論を主に検討したが、後期は帝国の諸地域を具体的に検討する。

【到達目標】
受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ボヘミア（ベーメン）史1. チェコ「国民再生」の思想と運動 1.	「国民再生」概念について概説する。
第2回	ボヘミア（ベーメン）史2. チェコ「国民再生」の思想と運動 2.	Vladimír Macuraを読む
第3回	ボヘミア（ベーメン）史3. 1848年革命　1	「フランクフルトへの手紙」を考える
第4回	ボヘミア（ベーメン）史4. 1848年革命　2	「フランクフルトへの手紙」を考える
第5回	ボヘミア（ベーメン）史5. 19世紀後半のチェコ社会	チェコ・ナショナリズムと「ボヘミア王国の歴史的権利」
第6回	ボヘミア（ベーメン）史6. 「言語闘争」	19世紀のハプスブルク帝国の「ナショナリズム」問題について、「言語闘争」は典型的だと考えられてきた。その問題について批判的に検討を加える。
第7回	ボヘミア（ベーメン）史7. 第一次世界大戦とチェコ社会	第一次世界大戦中の「帝国愛国主義」とチェコスロヴァキア独立論について検討する。
第8回	チェコにおけるユダヤ人社会	ボヘミア・モラヴィアにおける「ユダヤ人社会」、その同化とユダヤ・ナショナリズムを考える。
第9回	ガリツィア史1. 「ガリツィアの虐殺」	1846年のガリツィア蜂起、およびそれに伴って起こった「ガリツィアの虐殺」をナショナリズムの観点から考える。
第10回	ガリツィア史2. ポーランド貴族とポーランド王国の正統性	ポーランド分割後のポーランド貴族の政治的影響力について考える。
第11回	ガリツィア史4. 農民ナショナリズムの進展	19世紀後半のポーランドの国民形成過程を農民を中心に考える。
第12回	ガリツィア史5. ウクライナのピエモンテ？	ポーランド貴族の政治的・文化的ヘゲモニーに抗して進展したウクライナ・ナショナリズムをリヴィウを中心に考える。
第13回	ガリツィア史6. ガリツィアにおけるユダヤ人社会	ガリツィアにおけるシオニズム、ユダヤ自治主義、同化主義の問題を考える。
第14回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業時に扱うテキストはPDFで配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備してくること。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New Historyを教科書とする。

【参考書】
授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】
演習への貢献度、演習時の報告を40%、学期末のレポートを60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
受講人数が少ないことが見込まれるので、参加者の研究内容に寄せながら授業を組み立てる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中央ヨーロッパ近現代史
＜研究テーマ＞中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline (in English)】
Learning objectives
We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleologicl concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of defferent territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic exixtence by itsself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anormality deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summerizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.
Learning activities outside of classroom:
Critical reading of academic essays on the topic in advance.
Grading Criteria:
Comments and discussion in the class: 40%
Final report: 60%

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊研究Ⅴ

中込　さやか

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代西洋社会で構築されたジェンダー秩序は、近代国民国家と近代社会の重要な構成要素として、西洋社会のみならず植民地社会やその他の国や地域に国境を超えて「近代化」の一要素として普及した。本授業では近代社会のジェンダー秩序が西洋社会においていかに構築され、維持され、そして変化したのかを、近代イギリスの社会と教育に関連するテーマに基づいて、歴史的アプローチを用いて検証する。
各授業回では上記のテーマに関連した文献読解とディスカッションを行う。
また、履修学生の学位論文の執筆に関連するテーマの文献講読や研究報告、ディスカッションも行う。

【到達目標】
学生は、欧米の歴史・社会・教育・ジェンダーに関する日本語文献や外国語文献を正確に読解した上で、その内容について検討し、自らの見解を述べる力を身に付けることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は演習形式で行う。授業参加にあたり、学生は以下に取り組むことが求められる。
1) 各授業回で扱う文献を批判的に読解し、授業内ディスカッションに備える。
2) 各授業回の報告担当者は報告用スライド（またはハンドアウト）を準備する。
3) 履修学生の学位論文のに関する研究報告を行い、その内容についてディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の概要と本授業で取り扱うテーマの意義について説明する。 第2回以降で取り扱う文献の決定、各回の報告担当者を決定する。
第2回	文献輪読 1-1	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第3回	文献輪読 1-2	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第4回	文献輪読 1-3	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第5回	文献輪読 1-4	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第6回	文献輪読 1-5	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第7回	文献輪読 1-6	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第8回	研究報告 1	学生自身の研究テーマに関連する報告を行う。
第9回	文献輪読 2-1	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第10回	文献輪読 2-2	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第11回	文献輪読 2-3	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第12回	文献輪読 2-4	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第13回	文献輪読 2-5	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第14回	研究報告 2	学生自身の研究テーマに関連する報告を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の事前学習では、各授業回で取り扱う文献の該当部分をよく読んだ上で文献の重要な点、疑問点を準備すること。
復習では、配布された授業内で共有されたスライド等を元に文献や議論の内容を改めて検討し、理解を深める。
事前学習、復習について各２時間程度の学習が必要になる。

【テキスト（教科書）】
参考文献にあげたものが文献講読で使用するテキストの候補である。ただし、最終的には履修学生の研究テーマ等を考慮して初回授業時にテキストを設定する。

【参考書】
Rose, S. O. (2010). What is gender history? Polity.
Davidoff, L &Hall, C. (2019). Family fortunes: Men and women of the English middle class, 1780-1850) (3rd ed.). Routledge.
Thane, P. (1996). The Foundations of the Welfare State (Longman Social Policy In Britain Series) (2nd ed.). Longman.
河村貞枝・今井けい編（2006）『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店。
香川せつ子・河村貞枝編著（2008）『女性と高等教育：機会拡張と社会的相克』昭和堂。

【成績評価の方法と基準】
平常点100%。各回の事前学習、授業用スライド等の作成、授業時の議論への参加、各自の研究テーマに基づく報告等を元に総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
本年度から新規のため過去のフィードバックはなし。授業の進め方、内容、文献講読のテキスト等は、適宜、履修学生からの相談や意見を踏まえて適宜変更する。

【学生が準備すべき機器他】
毎回の授業にノートPCを持参すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
近現代イギリス女子教育史、比較教育社会史、ジェンダー史
＜研究テーマ＞
①1870～1910年代のイギリスのミドルクラス向け女子教育における家庭科／家政学の実施について
②明治～大正期の日本人女性教育者のイギリス留学、日・英・ヨーロッパにおけるトランスナショナルな家庭科／家政学の伝播
＜主要研究業績＞
・Sayaka Nakagomi. (2025). Ō e Sumi's transnational experience in the UK, Europe, and Japan: The construction of the modern Japanese housewife and mothers through domestic economy from the 1900s to the 1920s. In Joyce Goodman& Setsuko Kagawa. (Eds.). Women and Educational Reform in History: Japan in a Transnational World. Routledge.

・中込さやか（2022）「ミドルクラスの「女性らしさ」と女子教育：ノース・ロンドン・コリージェト・スクールと家庭科関連科目群1871～1894年」『歴史学研究』1018、1-14。
・Keiko Sasaki, Yuri Uchiyama, Sayaka Nakagomi. (2020). Study Abroad and the Transnational Experience of Japanese Women from 1860s – 1920s: Four Stages of Female Study Abroad, Sumi Miyakawa and Tano Jōdai. Espacio, Tiempo y Educación, 7(2), 5-28.

【Outline (in English)】
The modern gender order constructed in modern Western societies served as an important component of modern nation-states and modern societies.
The modern gender order was widely shared across national borders beyond Western societies in colonial societies and other countries and regions, as an element of 'modernization'.
In this course, we will examine how the gender order was constructed, maintained, and transformed in Western societies, based on themes related to modern British society and education and taking an historical approach.
Each session will involve critical reading and discussions related to the above themes based on the given reading materials.
Additionally, students are also asked to do readings, presentations and discussions based on their own research interests.
The goal of this course is 1) to accurately understand reading materials written in Japanese and foreign languages in the fields of history, society, education, and gender in the Western world and 2) to examine the contents, and to develop the ability to express their own opinions.
In preparation for this class, students must carefully read the relevant sections of the reading material to be covered in each class, and prepare for discussion points.
In review, to deepen their understanding of the topics, students are expected to reconsider the contents of the reading material and discussions based on the course slides shared in class.
About two hours of study each will be required for preparation and review.
In-class points 100%. Comprehensive judgment will be made based on students' class participation and their understanding of the topic.

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊研究VI

中込　さやか

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代西洋社会で構築されたジェンダー秩序は、近代国民国家と近代社会の重要な構成要素として、西洋社会のみならず植民地社会やその他の国や地域に国境を超えて「近代化」の一要素として普及した。本授業では近代社会のジェンダー秩序が西洋社会においていかに構築され、維持され、そして変化したのかを、近代イギリスの社会と教育に関連するテーマに基づいて、歴史的アプローチを用いて検証する。
各授業回では上記のテーマに関連した文献読解とディスカッションを行う。
また、履修学生の学位論文の執筆に関連するテーマの文献講読や研究報告、ディスカッションも行う。

【到達目標】
学生は、欧米の歴史・社会・教育・ジェンダーに関する日本語文献や外国語文献を正確に読解した上で、その内容について検討し、自らの見解を述べる力を身に付けることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は演習形式で行う。授業参加にあたり、学生は以下に取り組むことが求められる。
1) 各授業回で扱う文献を批判的に読解し、授業内ディスカッションに備える。
2) 各授業回の報告担当者は報告用スライド（またはハンドアウト）を準備する。
3) 履修学生の学位論文のに関する研究報告を行い、その内容についてディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の概要と本授業で取り扱うテーマの意義について説明する。 第2回以降で取り扱う文献の決定、各回の報告担当者を決定する。
第2回	文献輪読 1-1	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第3回	文献輪読 1-2	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第4回	文献輪読 1-3	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第5回	文献輪読 1-4	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第6回	文献輪読 1-5	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第7回	文献輪読 1-6	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第8回	研究報告 1	学生自身の研究テーマに関連する報告を行う。
第9回	文献輪読 2-1	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第10回	文献輪読 2-2	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第11回	文献輪読 2-3	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第12回	文献輪読 2-4	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第13回	文献輪読 2-5	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第14回	研究報告 2	学生自身の研究テーマに関連する報告を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の事前学習では、各授業回で取り扱う文献の該当部分をよく読んだ上で文献の重要な点、疑問点を準備すること。
復習では、配布された授業内で共有されたスライド等を元に文献や議論の内容を改めて検討し、理解を深める。
事前学習、復習について各２時間程度の学習が必要になる。

【テキスト（教科書）】
参考文献にあげたものが文献講読で使用するテキストの候補である。ただし、最終的には履修学生の研究テーマ等を考慮して初回授業時にテキストを設定する。

【参考書】
Goodman, Joyce &Martin, Jane. (eds.). (2002). Gender, colonialism and education: The politics of education. Routledge.
Fuchs, Eckhardt Fuchs&Vera, Eugenia Roldán. (eds.). (2019). The transnational in the history of education: Concepts and Perspectives. Palgrave Macmillan.
Mayer, Christine&Arredondo, Adelina (eds.). (2020). Women, power relations, and education in a transnational world. Palgrave Macmillan.
Yamaguchi, Midori. (2014) Daughters of Anglican clergy: Religion, gender and identity in Victorian England. Palgrave Macmillan.

【成績評価の方法と基準】
平常点100%。各回の事前学習、授業用スライド等の作成、授業時の議論への参加、各自の研究テーマに基づく報告等を元に総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
本年度から新規のため過去のフィードバックはなし。授業の進め方、内容、文献講読のテキスト等は、適宜、履修学生からの相談や意見を踏まえて適宜変更する。

【学生が準備すべき機器他】
毎回の授業にノートPCを持参すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
近現代イギリス女子教育史、比較教育社会史、ジェンダー史
＜研究テーマ＞
①1870～1910年代のイギリスのミドルクラス向け女子教育における家庭科／家政学の実施について
②明治～大正期の日本人女性教育者のイギリス留学、日・英・ヨーロッパにおけるトランスナショナルな家庭科／家政学の伝播
＜主要研究業績＞

・Sayaka Nakagomi. (2025). Ō e Sumi's transnational experience in the UK, Europe, and Japan: The construction of the modern Japanese housewife and mothers through domestic economy from the 1900s to the 1920s. In Joyce Goodman& Setsuko Kagawa. (Eds.). Women and Educational Reform in History: Japan in a Transnational World. Routledge.
・中込さやか（2022）「ミドルクラスの「女性らしさ」と女子教育：ノース・ロンドン・コリージェト・スクールと家庭科関連科目群1871～1894年」『歴史学研究』1018、1-14。
・Keiko Sasaki, Yuri Uchiyama, Sayaka Nakagomi. (2020). Study Abroad and the Transnational Experience of Japanese Women from 1860s – 1920s: Four Stages of Female Study Abroad, Sumi Miyakawa and Tano Jōdai. Espacio, Tiempo y Educación, 7(2), 5-28.
・中込さやか（2018）「イングランドのミドルクラス向け女子教育と家庭科関連科目群：マンチェスタ女子ハイ・スクールのカリキュラムと生徒層 一八九四-一九一四」『史苑』78(1)、117-142。

【Outline (in English)】

The modern gender order constructed in modern Western societies served as an important component of modern nation-states and modern societies.
The modern gender order was widely shared across national borders beyond Western societies in colonial societies and other countries and regions, as an element of 'modernization'.
In this course, we will examine how the gender order was constructed, maintained, and transformed in Western societies, based on themes related to modern British society and education and taking an historical approach.
Each session will involve critical reading and discussions related to the above themes based on the given reading materials.
Additionally, students are also asked to do readings, presentations and discussions based on their own research interests.
The goal of this course is 1) to accurately understand reading materials written in Japanese and foreign languages in the fields of history, society, education, and gender in the Western world and 2) to examine the contents, and to develop the ability to express their own opinions.
In preparation for this class, students must carefully read the relevant sections of the reading material to be covered in each class, and prepare for discussion points.
In review, to deepen their understanding of the topics, students are expected to reconsider the contents of the reading material and discussions based on the course slides shared in class.
About two hours of study each will be required for preparation and review.
In-class points 100%. Comprehensive judgment will be made based on students' class participation and their understanding of the topic.

HIS600B4（史学 / History 600）

西洋史学演習 I

内田　康太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
西洋前近代史の修士論文執筆に必要な専門的技術・知識を習得する。

【到達目標】
この授業の到達目標は以下のとおり。
・外国語で書かれた学術文献を正確かつ批判的に読解できること。
・西洋前近代史の研究に必須となるラテン語史料を正確かつ批判的に読解できること。
・自身の研究を進展させるとともに、研究について論理的かつ説得的な報告ができること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は、ローマ共和政が帝政へと転換する契機となったカエサルとポンペイウスのあいだに生じた内乱について、当事者であるカエサル自身がその経緯を綴った『内乱記』を精読する。ラテン語の史料を日本語に訳出するかたちで講読を進め、辞書や文法書の使い方を身につけることはもとより、訳書（日本語訳・英語訳・仏語訳）や注釈書（英語）を適宜参照することで史料に関する理解を深める。あらかじめ訳読の担当者を決めることはせず、受講生全員が十分な予習を毎回してくることが必要となる。なお、第12回・第13回については、受講生による修士論文中間報告の機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	受講生の研究テーマ紹介と講読史料についての説明
第2回	ラテン語史料講読（1）	カエサル『内乱記』第1巻第1節の読解
第3回	ラテン語史料講読（2）	カエサル『内乱記』第1巻第2節の読解
第4回	ラテン語史料講読（3）	カエサル『内乱記』第1巻第3節の読解
第5回	ラテン語史料講読（4）	カエサル『内乱記』第1巻第4節の読解
第6回	ラテン語史料講読（5）	カエサル『内乱記』第1巻第5節の読解
第7回	ラテン語史料講読（6）	カエサル『内乱記』第1巻第6節の読解
第8回	ラテン語史料講読（7）	カエサル『内乱記』第1巻第7節の読解
第9回	ラテン語史料講読（8）	カエサル『内乱記』第1巻第8節の読解
第10回	ラテン語史料講読（9）	カエサル『内乱記』第1巻第9節の読解
第11回	ラテン語史料講読（10）	カエサル『内乱記』第1巻第10節の読解
第12回	修士論文報告（1）	受講生による修士論文中間報告と質疑応答・討議
第13回	修士論文報告（2）	受講生による修士論文中間報告と質疑応答・討議
第14回	まとめ	到達度の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の授業外学習時間は4時間以上となる。授業に臨むにあたってはラテン語史料の所定箇所について訳文を準備し、授業後には自身の訳文を再検討することが必要となる。また、自身の研究を進めるとともに、自らの研究についての報告準備を行うことも求められる。

【テキスト（教科書）】
J. M. Carter, *Julius Caesar, the Civii War. Books I and II*, Warminster, 1991.

【参考書】
カエサル『内乱記』（國原吉之助訳），講談社学術文庫，1994年.
カエサル『カエサル戦記集　内乱記』(高橋宏幸訳), 岩波書店, 2015年.
C. Damon, *Caesar, Civil War*, Cambridge / Massachusetts / London, 2016.
P. Fabre, *César, Guerre civile, Livres I et II*, Paris, 2019.

【成績評価の方法と基準】
授業に対する予習度（40％）
ラテン語史料読解の精度（40％）
質問やコメント等、授業への積極的参加度（20％）

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は開講されなかったためフィードバックできない。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞古代ローマ史
＜研究テーマ＞共和政末期から帝政初期の政治史・法制史
＜主要研究業績＞
・『元老院と民会　共和政末期ローマにおける立法』，山川出版社，2023年.
・「共和政期ローマの執政官選挙と優先投票ケントゥリア（Centuria Praerogativa）」『西洋古典学研究』第61号，2013年.
・（共著）『名著で読む世界史120』，山川出版社，2016年.

【Outline (in English)】
(Course outline) This course helps students acquire the professional skills and knowledge to write their master's thesis on pre-modern western history.
(Learning Objectives) The followings are the goals of this course.
- Students are able to read accurately and critically academic texts written in foreign languages.
- Students are able to read accurately and critically historical sources written in Latin.
- Students are able to progress their research and to make a logical and convincing presentation on it.
(Learning activities outside of classroom) Students' study time will be at least four hours for a class. They are expected to make a translation of the assigned Latin text before each class meeting, and after the class to review their own translation. They are also required to progress their own research and prepare to make a presentation on it.
(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on the preparation for each class meeting (40%), the reading comprehension of Latin texts (40%), and in-class contribution (20%).

HIS600B4（史学 / History 600）

西洋史学演習 II

内田　康太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
西洋前近代史の修士論文執筆に必要な専門的技術・知識を習得する。

【到達目標】
この授業の到達目標は以下のとおり。
・外国語で書かれた学術文献を正確かつ批判的に読解できること。
・西洋前近代史の研究に必須となるラテン語史料を正確かつ批判的に読解できること。
・自身の研究を進展させるとともに、研究について論理的かつ説得的な報告ができること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は、ローマ共和政が帝政へと転換する契機となったカエサルとポンペイウスのあいだに生じた内乱について、当事者であるカエサル自身がその経緯を綴った『内乱記』を精読する。ラテン語の史料を日本語に訳出するかたちで講読を進め、辞書や文法書の使い方を身につけることはもとより、訳書（日本語訳・英語訳・仏語訳）や注釈書（英語）を適宜参照することで史料に関する理解を深める。あらかじめ訳読の担当者を決めることはせず、受講生全員が十分な予習を毎回してくることが必要となる。なお、第12回・第13回については、受講生による修士論文中間報告の機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	受講生の研究状況の確認と講読史料についての説明
第2回	ラテン語史料講読（1）	カエサル『内乱記』第１巻第１１節の読解
第3回	ラテン語史料講読（2）	カエサル『内乱記』第１巻第１２節の読解
第4回	ラテン語史料講読（3）	カエサル『内乱記』第１巻第１３節の読解
第5回	ラテン語史料講読（4）	カエサル『内乱記』第１巻第１４節の読解
第6回	ラテン語史料講読（5）	カエサル『内乱記』第１巻第１５節の読解
第7回	ラテン語史料講読（6）	カエサル『内乱記』第１巻第１６節の読解
第8回	ラテン語史料講読（7）	カエサル『内乱記』第１巻第１７節の読解
第9回	ラテン語史料講読（8）	カエサル『内乱記』第１巻第１８節の読解
第10回	ラテン語史料講読（9）	カエサル『内乱記』第１巻第１９節の読解
第11回	ラテン語史料講読（１０）	カエサル『内乱記』第１巻第２０節の読解
第12回	修士論文報告（1）	受講生による修士論文中間報告と質疑応答・討議
第13回	修士論文報告（2）	受講生による修士論文中間報告と質疑応答・討議
第14回	まとめ	到達度の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の授業外学習時間は４時間以上となる。授業に臨むにあたってはラテン語史料の所定箇所について訳文を準備し、授業後には自身の訳文を再検討することが必要となる。また、自身の研究を進めるとともに、自らの研究についての報告準備を行うことも求められる。

【テキスト（教科書）】
J. M. Carter, *Julius Caesar, the Civii War. Books I and II*, Warminster, 1991.

【参考書】
カエサル『内乱記』（國原吉之助訳），講談社学術文庫，1994年.
カエサル『カエサル戦記集　内乱記』(高橋宏幸訳), 岩波書店, 2015年.
C. Damon, *Caesar, Civil War*, Cambridge / Massachusetts / London, 2016.
P. Fabre, *César, Guerre civile, Livres I et II*, Paris, 2019.

【成績評価の方法と基準】
授業に対する予習度（40％）
ラテン語史料読解の精度（40％）
質問やコメント等、授業への積極的参加度（20％）

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は開講されなかったためフィードバックできない。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞古代ローマ史
＜研究テーマ＞共和政末期から帝政初期の政治史・法制史
＜主要研究業績＞
・『元老院と民会　共和政末期ローマにおける立法』，山川出版社，2023年.
・「共和政期ローマの執政官選挙と優先投票ケントゥリア（Centuria Praerogativa）」『西洋古典学研究』第61号，2013年.
・（共著）『名著で読む世界史120』，山川出版社，2016年.

【Outline (in English)】
(Course outline) This course helps students acquire the professional skills and knowledge to write their master's thesis on pre-modern western history.
(Learning Objectives) The followings are the goals of this course.
- Students are able to read accurately and critically academic texts written in foreign languages.
- Students are able to read accurately and critically historical sources written in Latin.
- Students are able to progress their research and to make a logical and convincing presentation on it.
(Learning activities outside of classroom) Students' study time will be at least four hours for a class. They are expected to make a translation of the assigned Latin text before each class meeting, and after the class to review their own translation. They are also required to progress their own research and prepare to make a presentation on it.
(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on the preparation for each class meeting (40%), the reading comprehension of Latin texts (40%), and in-class contribution (20%).

HIS600B4（史学 / History 600）

西洋史学演習III

皆川　卓

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
受講者の専門とするテーマおよび語学力を考慮しながら、Joachim Whaley, Germany and the Holy Roman Empire(Oxford University Press, 2012)2巻のうちいずれかを講読し（どちらを読むかは受講者の研究計画ヒアリングを経て決定)、他の関連文献も参考にしてその内容を批判的に検討します。
【授業の目的】「主権国家」の対極にある秩序を構成した近世神聖ローマ帝国の統治を通じて、近世ヨーロッパ政治における伝統的アイデンティティと機能的革新の緊張関係、およびその共生のメカニズムを学びます。

【到達目標】
・近世ヨーロッパ史におけるアイデンティティと機能の相関関係について、基礎的知識を身につけることができる。
・近世西中欧の政治構造とその背景にある制度的条件について、自分なりの認識を持つことができる。
・近世西中欧の事例と比較して、近世・近代に関する自身の研究テーマについて、新たな角度からの見方や足りない部分について認識し、その研究テーマに活かすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
（学期の途中で変更になる場合には、別途提示します。 /If the Method(s) is changed, we will announce the details of any changes. ）
テキストを中心とした演習ですが、章立て順に逐語訳をするのではなく、テーマを中心に据えテキストからそれに関わる情報を発見し検討するスタイルを取ります。またその記述内容や取り扱いが受講者の研究テーマから見てどのように評価されるか、また受講者の研究テーマにフィードバックするとどのようなことが言えるかを発問し、授業後次の回までにリアクションペーパーとして共有します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	「帝国改革」の成立／「ウェストファリアの和」に基づく国制	いずれかのテーマを通じて、神聖ローマ帝国国制の枠組みを学びます。
第2回	宗教改革」の発生と拡大／「三十年戦争」の処理	いずれかのテーマを通じて、西中欧における宗派の影響力を理解します。
第3回	「宗教和議」の締結／帝国裁判所の機能の拡大	いずれかのテーマを通じて、神聖ローマ帝国における「平和」の概念を検討します。
第4回	「帝国執行令」の発布と発動令／「帝国イタリア」の変容	いずれかのテーマを通じて、神聖ローマ帝国の地域的多元性を学びます。
第5回	帝国裁判所の運営と発展／バロック宮廷文化とハビトゥス	いずれかのテーマを通じて、西中欧における支配の正統性の特徴を学びます。
第6回	対オスマン帝国政策／帝国秩序と国際関係	いずれかのテーマを通じて、西中欧における当該期の「外交」の多元性を検討します。
第7回	同宗派諸国間の調整と制度化／帝国軍制	いずれかのテーマを通じて、西中欧の群小国間におけるコンセンサスの形成を検討します。
第8回	帝国政治における宗派対立／帝国公法学	いずれかのテーマを通じて、西中欧における宗教と法の秩序構成力を検討します。
第9回	帝国政治における宗派対立／帝国公法学	いずれかのテーマを通じて、西中欧における宗教と法の秩序構成力を検討します。
第10回	宗派化」の限界／領邦高権の至上権化	いずれかのテーマを通じて、近世ヨーロッパにおける「国家理性」の特性を学びます。
第11回	文学・視聴文化・メディアの役割／ハプスブルク家「断絶」の衝撃	いずれかのテーマを通じて、西中欧のハビトゥス形成における伝統の影響力を分析します。
第12回	「三十年戦争」の勃発／啓蒙改革と帝国	いずれかのテーマを通じて、メディアと黎明期の「世論」の影響力を検討します。
第13回	「ドイツの自由」－伝統的国制のアイデンティティ化／ドイツ・エスニシティの勃興	いずれかのテーマを通じて、統治者層ないし知識層のアイデンティティの発信について考えます。
第14回	「ウェストファリアの和」締結の目的／帝国解体の背景	いずれかのテーマを通じて、諸領邦の連合の背景にある精神的・社会的背景を検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等)】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書)】
・Joachim Whaley, Germany and the Holy Roman Empire, Vol.1(Oxford University Press, 2012)
または
・Joachim Whaley, Germany and the Holy Roman Empire, Vol.2(Oxford University Press, 2012)
テキストは部分コピーにて用意します。自身のテーマに深く関わる方は購入しても構いません。為替レートによって上下しますが、kindle版で3000-4000円程度、ペーパーバックで6000-8000円程度です。

【参考書】
・Peter H. Wilson, Heart of Europe: A History of the Holy Roman Empire(Harvard University Press, 2016)
・Peter H.Wilson, The Holy Roman Empire: A Thousand Years of Europe's History(Penguin, 2017)
その他英語・ドイツ語文献等および史料を教場で指示します。

【成績評価の方法と基準】
各回の課題の遂行と発表、平常点によります（100%)。

【学生の意見等からの気づき】
・受講者の専門研究に資するよう内容を調整します。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません（kindle版を使う場合、開く端末)。

【その他の重要事項】
特にありません。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞近世神聖ローマ帝国史（西中欧・北イタリアの一部）
＜研究テーマ＞『等族制国家から国家連合へ』（創文社 2005）
＜主要研究業績＞"Der Kapuziner Marco d'Aviano und die Reichspolitik des Kaisers Leopold I", Annali dell' Istituto Storico Italo-Germanico 43(2016)他

【Outline (in English)】
(Course outline) Taking into consideration students' field of expertise and language ability, students will read one of the two volumes of Joachim Whaley's Germany and the Holy Roman Empire (Oxford University Press, 2012) (the choice to read will be decided after hearing about students' research plans), and will critically examine its contents while also referring to other related literature.

（Learning Objectives）Through the rule of the early modern Holy Roman Empire, which constituted an order at the polar opposite of the "sovereign state," students will learn about the tension between traditional identity and functional innovation in early modern European politics, and the mechanisms of their coexistence.
（Learning activities outside of classroom）None.
（Grading Criteria /Policy）
・Participants shuould be able to acquire basic knowledge about the correlation between identity and function in early modern European history.
・ Participants should be able to gain your own understanding of the political structure of early modern Western and Central Europe and the institutional conditions behind it.
・ By comparing with the case of early modern Western and Central Europe, they should be able to look at your own research topic related to early modern and modern times from a new angle and identify shortcomings, and apply this knowledge to your research topic.

HIS600B4（史学 / History 600）

西洋史学演習Ⅳ

皆川　卓

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
受講者の研究計画ヒアリングに基づいて西洋近世・近代に関する欧語文献（英語、ドイツ語、イタリア語、フランス語）もしくは史料（近世を含む高地ドイツ語、低地ドイツ語／オランダ語、イタリア語、英語、ラテン語のいずれか。マニュスクリプトを含む）を講読し、その専門に即した先行研究知識および史料批判能力を陶冶し、研究者としての力量を習得する。

【到達目標】
大学院生として自分の問題関心を明確に言葉に表し、史料操作能力を獲得し、独自研究を確立して自立的に研究活動を行えるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
殴語の先行研究を渉猟し、史料操作能力を向上させると共に、これらのスキルに基づく研究報告を定期的に課し、研究内容をブラシュアップすることで、研究者としての基礎能力の向上を目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	希望によるテキスト選定	受講者へのヒアリングに基づいてその準備状況を把握し、テキストを提案し、選定する。受講者の研究テーマが複数にわたる場合は、全体に関わる文献を選ぶか、パレオグラフィー（文書解読）の演習を実施する。
第2回	テキスト講読①	対象となるテキストを講読する。その際、各受講者のテーマの近さに応じてテキスト内容の背景に関する調査を割り当て、次回に解説を求める。
第3回	テキスト講読②	対象となるテキストを講読する。その際、各受講者のテーマの近さに応じてテキスト内容の背景に関する調査を割り当て、次回に解説を求める。
第4回	テキスト講読③	対象となるテキストを講読する。その際、各受講者のテーマの近さに応じてテキスト内容の背景に関する調査を割り当て、次回に解説を求める。
第5回	研究報告①	テキスト講読で習得したスキルを用いて各受講者の専門に関する報告を行い、それに関する討論を通じて各研究を深める。
第6回	テキスト講読④	対象となるテキストを講読する。その際、各受講者のテーマの近さに応じてテキスト内容の背景に関する調査を割り当て、次回に解説を求める。
第7回	テキスト講読⑤	対象となるテキストを講読する。その際、各受講者のテーマの近さに応じてテキスト内容の背景に関する調査を割り当て、次回に解説を求める。
第8回	テキスト講読⑥	対象となるテキストを講読する。その際、各受講者のテーマの近さに応じてテキスト内容の背景に関する調査を割り当て、次回に解説を求める。
第9回	テキスト講読⑦	対象となるテキストを講読する。その際、各受講者のテーマの近さに応じてテキスト内容の背景に関する調査を割り当て、次回に解説を求める。
第10回	研究報告②	テキスト講読で習得したスキルを用いて各受講者の専門に関する報告を行い、それに関する討論を通じて各研究を深める。
第11回	テキスト講読⑧	対象となるテキストを講読する。その際、各受講者のテーマの近さに応じてテキスト内容の背景に関する調査を割り当て、次回に解説を求める。
第12回	テキスト講読⑨	対象となるテキストを講読する。その際、各受講者のテーマの近さに応じてテキスト内容の背景に関する調査を割り当て、次回に解説を求める。
第13回	テキスト講読⑩	対象となるテキストを講読する。その際、各受講者のテーマの近さに応じてテキスト内容の背景に関する調査を割り当て、次回に解説を求める。
第14回	研究報告③	テキスト講読で習得したスキルを用いて各受講者の専門に関する報告を行い、それに関する討論を通じて各研究を深める。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
初回の選定に基づいてテキストのコピーを配布する。

【参考書】
講読用テキストおよび各受講者の研究報告内容に合わせてその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】
各回の課題の遂行と報告回における報告内容の発展による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】
・受講者の専門研究に資するよう内容を若干調整します。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません。

【その他の重要事項】
西洋史学演習Ⅲの履修を前提とします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞西洋史
＜研究テーマ＞近世神聖ローマ帝国史（西中欧・北イタリアの一部）
＜主要研究業績＞『等族制国家から国家連合へ』（創文社 2005）
"Der Kapuziner Marco d'Aviano und die Reichspolitik des Kaisers Leopold I", Annali dell' Istituto Storico Italo-Germanico 43(2016

【Outline (in English)】
(Course outline) Based on the participants' research plan interview, participants will read European language literature (English, German, Italian, French) or historical materials (High German, Low German/Dutch, Italian, English, Latin, including early modern period documents, including manuscripts) related to the Western modern period.

（Learning Objectives）Participants should develop knowledge of previous research and the ability to critically examine historical documents in accordance with their field of expertise, and acquire the skills necessary to become a researcher.
（Learning activities outside of classroom）None.
（Grading Criteria /Policy）Evaluation will be based on the progress of research.

HIS600B4（史学 / History 600）

西洋史学演習 V

中込　さやか

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
西洋近現代史における福祉とジェンダーという問題に焦点をあて、関連する外国語文献を講読し、議論する。また、修士論文の執筆に向けて、中間報告を行う。

【到達目標】
・研究動向に照らしながら外国語文献を正確かつ批判的に読解する能力を身につける。
・自分の研究内容を簡潔かつ説得的に発表する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は演習形式で行う。授業では、課題文献の内容についてみなで吟味し、議論する。また、受講生が自身の研究を定期的に報告する機会を設ける。課題や質問に対するフィードバック・コメントは、授業時間内に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要と進め方を説明し、役割分担を決める。
第2回	文献講読と議論①	課題文献を講読し、内容を議論する。
第3回	文献講読と議論②	課題文献を講読し、内容を議論する。
第4回	文献講読と議論③	課題文献を講読し、内容を議論する。
第5回	文献講読と議論④	課題文献を講読し、内容を議論する。
第6回	文献講読と議論⑤	課題文献を講読し、内容を議論する。
第7回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第8回	文献講読と議論⑥	課題文献を講読し、内容を議論する。
第9回	文献講読と議論⑦	課題文献を講読し、内容を議論する。
第10回	文献講読と議論⑧	課題文献を講読し、内容を議論する。
第11回	文献講読と議論⑨	課題文献を講読し、内容を議論する。
第12回	文献講読と議論⑩	課題文献を講読し、内容を議論する。
第13回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第14回	まとめ	授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に課題文献や報告レジュメを精読し、質問や議論したい点などをあらかじめ準備して授業にのぞむこと。また、授業後には、議論で出た論点や自身の理解を再確認し、さらなる学びを主体的に進めること。

【テキスト（教科書）】
参考文献にあげたものが課題文献の候補である。ただし、最終的には履修学生の研究テーマ等を考慮して初回授業時にテキストを設定する。

【参考書】
Worth, E. (2023). Welfare State Generation, The: Women, Agency and Class in Britain since 1945 (New Directions in Social and Cultural History) . Bloomsbury Academic.
Beaumont, C., Colpus, E.&Davidson, R. (Eds.). (2024) Everyday Welfare in Modern British History: Experience, Expertise and Activism (Palgrave Studies in the History of Experience). Palgrave Macmillan.
Berthezne, C., Downs, L. L.&Gottlieb J. V.(Eds.). (2026). Women on the Right: Politics and Social Action in Comparative and Transnational Perspective, 1870s-1990s. Bloomsbury USA Academic.

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業参加度、課題への取り組み、研究報告の質）：100％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
近現代イギリス女子教育史、比較教育社会史、ジェンダー史
＜研究テーマ＞
①1870～1910年代のイギリスのミドルクラス向け女子教育における家庭科／家政学の実施について
②明治～大正期の日本人女性教育者のイギリス留学、日・英・ヨーロッパにおけるトランスナショナルな家庭科／家政学の伝播
＜主要研究業績＞
・Sayaka Nakagomi. (2025). Ō e Sumi's transnational experience in the UK, Europe, and Japan: The construction of the modern Japanese housewife and mothers through domestic economy from the 1900s to the 1920s. In Joyce Goodman& Setsuko Kagawa. (Eds.). Women and Educational Reform in History: Japan in a Transnational World. Routledge.
・中込さやか（2022）「ミドルクラスの「女性らしさ」と女子教育：ノース・ロンドン・コリージェット・スクールと家庭科関連科目群1871～1894年 」『歴史学研究』1018、1-14。
・Keiko Sasaki, Yuri Uchiyama, Sayaka Nakagomi. (2020). Study Abroad and the Transnational Experience of Japanese Women from 1860s – 1920s: Four Stages of Female Study Abroad, Sumi Miyakawa and Tano Jōdai. Espacio, Tiempo y Educación, 7(2), 5-28.

【Outline (in English)】
< Course outline>
This course examines issues concerning welfare and gender in modern and contemporary western history. Students are expected to participate actively in discussion on relevant literature and give presentation about their own research projects on regular basis.
< Learning objectives>
1) Students are able to read academic books and articles with precision and criticism in view of developing historiography.
2) Students are able to present their arguments articulately.
< Learning activities outside of classroom>
Students are required to take on every assignment - reading assigned part of textbook, preparing oral presentation, writing academic essay - seriously. After the class, they have to review what they have learned in the class and continue their independent research.
< Grading policy>
Grade is given based on class participation and quality of assignments presented/submitted.

HIS600B4（史学 / History 600）

西洋史学演習Ⅵ

中込　さやか

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
西洋近現代史における福祉とジェンダーという問題を、史資料を用いて考察する。また、修士論文の執筆に向けて、中間報告を行う。

【到達目標】
・研究動向を意識しながら外国語の史資料を批判的に読解する力を身につける。
・史資料から得た知見に独自の考察を加え、それを口頭と文章で効果的に発表する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は演習形式で行う。授業では、課題文献と関連する史料の内容をみなで吟味し、議論する。また、受講生が自身の研究を定期的に報告する機会を設ける。課題や質問に対するフィードバック・コメントは、授業時間内に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要と進め方を説明し、役割分担を決める。
第2回	文献および関連史料の講読と議論①	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第3回	文献および関連史料の講読と議論②	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第4回	文献および関連史料の講読と議論③	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第5回	文献および関連史料の講読と議論④	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第6回	文献および関連史料の講読と議論⑤	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第7回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第8回	文献および関連史料の講読と議論⑥	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第9回	文献および関連史料の講読と議論⑦	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第10回	文献および関連史料の講読と議論⑧	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第11回	文献および関連史料の講読と議論⑨	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第12回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第13回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第14回	まとめ	授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に課題文献や報告レジュメを精読し、質問や議論したい点などをあらかじめ準備して授業にのぞむこと。授業後には、議論で出た論点や自身の理解を再確認し、さらなる学びを主体的に進めること。また、授業の内容や自分の研究に関連する史資料を幅広く集めつつ、その批判的な読解につとめ、自らの知見を発表する準備を進めること。

【テキスト（教科書）】
参考文献にあげたものが課題文献の候補である。ただし、最終的には履修学生の研究テーマ等を考慮して初回授業時にテキストを設定する。
また、法政大学が契約しているThe Times Digital ArchiveやNew York Timesなどのデータベースから得られる史料も活用する。

【参考書】
Worth, E. (2023). Welfare State Generation, The: Women, Agency and Class in Britain since 1945 (New Directions in Social and Cultural History) . Bloomsbury Academic.
Beaumont, C., Colpus, E.&Davidson, R. (Eds.). (2024) Everyday Welfare in Modern British History: Experience, Expertise and Activism (Palgrave Studies in the History of Experience). Palgrave Macmillan.
Berthezne, C., Downs, L. L.&Gottlieb J. V.(Eds.). (2026). Women on the Right: Politics and Social Action in Comparative and Transnational Perspective, 1870s-1990s. Bloomsbury USA Academic.

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業参加度、課題への取り組み、研究報告の質）：100％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
近現代イギリス女子教育史、比較教育社会史、ジェンダー史
＜研究テーマ＞
①1870～1910年代のイギリスのミドルクラス向け女子教育における家庭科／家政学の実施について
②明治～大正期の日本人女性教育者のイギリス留学、日・英・ヨーロッパにおけるトランスナショナルな家庭科／家政学の伝播
＜主要研究業績＞
・Sayaka Nakagomi. (2025). Ō e Sumi's transnational experience in the UK, Europe, and Japan: The construction of the modern Japanese housewife and mothers through domestic economy from the 1900s to the 1920s. In Joyce Goodman& Setsuko Kagawa. (Eds.). Women and Educational Reform in History: Japan in a Transnational World. Routledge.
・中込さやか（2022）「ミドルクラスの「女性らしさ」と女子教育：ノース・ロンドン・コリージェット・スクールと家庭科関連科目群1871～1894年 」『歴史学研究』1018、1-14。
・Keiko Sasaki, Yuri Uchiyama, Sayaka Nakagomi. (2020). Study Abroad and the Transnational Experience of Japanese Women from 1860s – 1920s: Four Stages of Female Study Abroad, Sumi Miyakawa and Tano Jōdai. Espacio, Tiempo y Educación, 7(2), 5-28.

【Outline (in English)】
< Course outline>
This course examines issues concerning welfare and gender in modern and contemporary western history using primary and secondary sources. Students are expected to participate actively in discussion on relevant literature and give presentation about their own research projects in preparation for writing MA dissertations.
< Learning objectives>
1) Students are able to read academic books and articles with precision and criticism in view of developing historiography.
2) Students are able to critically assess historical sources and present their arguments articulately based on their findings.

< Learning activities outside of classroom >
Students are required to take on every assignment - reading assigned part of textbook, preparing oral presentation, writing academic essay - seriously. After the class, they have to review what they have learned in the class and continue to advance their research projects for MA dissertations.
< Grading policy >
Grade is given based on class participation and quality of assignments presented/submitted.

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋古代史研究Ⅰ

内田　康太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
古代ローマ史に関する諸問題のうち、「共和政ローマの終焉とカエサル」を取り上げる。伝統的秩序の破壊者とも評されるカエサルの生涯を時系列に沿って分析することにより、共和政末期ローマの歴史の概要を学習するとともに、彼が目指した新しい統治機構の姿とその実際を探求する。

【到達目標】
到達目標は以下のとおり。
・共和政末期ローマの歴史について基礎的知識を習得する。
・一次資料の扱い方を習得し、カエサルが共和政の終焉に対して果たした役割について自ら考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は主として講義形式で行うが、受講生による史料分析・ディスカッションの時間も用意する。また、授業時間内に質疑応答の機会を設けるとともに、終了後に毎回リアクションペーパーを提出してもらうことで、受講生の理解度、関心事項、疑問点等を確認しながら授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	古代ローマ史のなかのカエサル
第2回	生い立ち	共和政末期という時代
第3回	政治家への道	カエサルの政治戦略と経歴
第4回	政治的台頭	第1回三頭政治の形成とカエサルの執政官職
第5回	軍事的功績	第1回三頭政治の持続とカエサルのガリア遠征
第6回	内乱の前夜	第1回三頭政治の崩壊とカエサルのルビコン渡河
第7回	内乱の推移と結末	対ポンペイウス戦争の展開とカエサルの勝利
第8回	カエサルの時代（1）	カエサルによる諸改革
第9回	カエサルの時代（2）	独裁官カエサル
第10回	カエサルの時代（3）	カエサルの暗殺
第11回	新たな内乱	暗殺者たちの行方と後継者争い
第12回	人物と評価（1）	カエサルは共和政ローマの破壊者であったか？
第13回	人物と評価（2）	カエサルは共和政ローマの再建者であったか？
第14回	試験・まとめと解説	到達度の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。参考書として挙げた書籍などを用いて、自主的に学習することが求められる。

【テキスト（教科書）】
特になし。担当教員が作成したレジュメ・資料を配布する。

【参考書】
小池和子『カエサル　内戦の時代を駆けぬけた政治家』，岩波新書，2020年.
長谷川博隆『カエサル』，講談社学術文庫，1994年.
長谷川岳男／樋脇博敏『古代ローマを知る事典』，東京堂出版，2004年.

【成績評価の方法と基準】
期末の筆記試験（80％）
リアクションペーパーや質問等、授業への積極的参加度（20％）

【学生の意見等からの気づき】
一次資料（日本語訳）を読み解く技術を身につけられるように、講義に史料分析を組み合わせる授業形式を継続する。また、リアクションペーパーを通じた質疑応答を積極的に利用し、受講生の関心にも沿ったかたちで授業を進める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞古代ローマ史
＜研究テーマ＞共和政末期から帝政初期の政治史・法制史
＜主要研究業績＞
・『元老院と民会　共和政末期ローマにおける立法』，山川出版社，2023年.
・「共和政期ローマの執政官選挙と優先投票ケントゥリア（Centuria Praerogativa）」『西洋古典学研究』第61号，2013年.
・（共著）『名著で読む世界史120』，山川出版社，2016年.

【Outline (in English)】
Course outline: This course deals with the fall of the Roman Republic and Caesar's role in it. Analyzing chronorogically the life of Caesar, the destroyer of the traditional order, it helps students learn the outline of this period and explore the new system he schemed and its reality.
Learning Objectives: The followings are the goals of this course.
- Students are able to acquire fundamental knowledge concerning the history of the late Roman Republic.
- Using primary sources properly, students are able to estimate the role of Caesar played in the fall of the Roman Republic.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. They are required to read relevant books, such as those listed in the reference section, and learn by themselves.
Grading Criteria: Grading will be decided based on term-end examination (80%) and in-class contribution (20%).

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋古代史研究 II

内田　康太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
古代ローマ史に関する諸問題のうち、「元首政ローマの誕生とアウグストゥス」を取り上げる。帝政の創始者とも評されるアウグストゥスの生涯を時系列に沿って分析することにより、共和政終焉期から元首政初期に至るローマの歴史の概要を学習するとともに、彼が目指した新しい統治機構の姿とその実際を探求する。

【到達目標】
到達目標は以下のとおり。
・共和政終焉期から元首政初期に至るローマの歴史について基礎的知識を習得する。
・一次資料の扱い方を習得し、アウグストゥスが元首政の誕生に対して果たした役割について自ら考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は主として講義形式で行うが、受講生による史料分析・ディスカッションの時間も用意する。また、授業時間内に質疑応答の機会を設けるとともに、終了後に毎回リアクションペーパーを提出してもらうことで、受講生の理解度、関心事項、疑問点等を確認しながら授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	古代ローマ史のなかのアウグストゥス
第2回	生い立ち	内乱の一世紀という時代
第3回	政界への進出	オクタウィアヌスの経歴と養父カエサル
第4回	カエサル暗殺と内乱の行方（1）	後継者争いと第2回三頭政治の形成
第5回	カエサル暗殺と内乱の行方（2）	第2回三頭政治の崩壊とオクタウィアヌスの勝利
第6回	アウグストゥスの誕生	内乱の終焉と共和政体の復活
第7回	アウグストゥスの時代（1）	権威（アウクトリタス）と権力（ポテスタス）
第8回	アウグストゥスの時代（2）	政治家アウグストゥス
第9回	アウグストゥスの時代（3）	軍人アウグストゥス
第10回	アウグストゥスの時代（4）	建築事業と文化活動
第11回	継承と持続	アウグストゥスの家系と後継者問題
第12回	人物と評価（1）	アウグストゥスは帝政ローマの創始者であったか？
第13回	人物と評価（2）	アウグストゥスは共和政ローマの再建者であったか？
第14回	試験・まとめと解説	到達度の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。参考書として挙げた書籍などを用いて、自主的に学習することが求められる。

【テキスト（教科書）】
特になし。担当教員が作成したレジュメ・資料を配布する。

【参考書】
バーバラ・レヴィック『アウグストゥス：虚像と実像』（マクリン富佐訳），法政大学出版局，2020年.
ロナルド・サイム『ローマ革命―共和政の崩壊とアウグストゥスの新体制』(逸身喜一郎ほか訳）上・下，岩波書店，2013年.
長谷川岳男／樋脇博敏『古代ローマを知る事典』，東京堂出版，2004年.

【成績評価の方法と基準】
期末の筆記試験（80％）
リアクションペーパーや質問等、授業への積極的参加度（20％）

【学生の意見等からの気づき】
一次資料（日本語訳）を読み解く技術を身につけられるように、講義に史料分析を組み合わせる授業形式を継続する。また、リアクションペーパーを通じた質疑応答を積極的に利用し、受講生の関心にも沿ったかたちで授業を進める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞古代ローマ史
＜研究テーマ＞共和政末期から帝政初期の政治史・法制史
＜主要研究業績＞
・『元老院と民会　共和政末期ローマにおける立法』，山川出版社，2023年.
・「共和政期ローマの執政官選挙と優先投票ケントゥリア（Centuria Praerogativa）」『西洋古典学研究』第61号，2013年.
・（共著）『名著で読む世界史120』，山川出版社，2016年.

【Outline (in English)】
Course outline: This course deals with the birth of the Principate and Augustus' role in it. Analyzing chronorogically the life of Augustus, the founder of the monarchic government, it helps students learn the outline of this period and explore the new system he schemed and its reality.
Learning Objectives: The followings are the goals of this course.
- Students are able to acquire fundamental knowledge concerning the history of Rome from the late Republic to the Principate.
- Using primary sources properly, students are able to estimate the role of Augustus played in the birth of the Principate.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. They are required to read relevant books, such as those listed in the reference section, and learn by themselves.
Grading Criteria: Grading will be decided based on term-end examination (80%) and in-class contribution (20%).

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋中世史研究Ⅰ

内川　勇太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アングロ＝サクソン期イングランドの歴史を、写本や文書などの文字資料・貨幣・考古学資料等の画像を積極的に活用しながら概観する。前半において政治史を中心に歴史的展開を整理したのち、後半においてテーマ別にアングロ＝サクソン期イングランドの諸側面を考察する。

【到達目標】
アングロ＝サクソン期イングランド（450年頃から1066年）の歴史的展開を、政治・宗教・社会・文化等の諸側面から説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義形式で行う。毎回終了後にリアクションペーパーを提出してもらい、全体に共有すべき質問等は次回の授業冒頭において取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	アングロ＝サクソン期イングランドの概要
第2回	イングランドの政治的統合過程①	アングロ＝サクソン人の移住と諸王国の成立
第3回	イングランドの政治的統合過程②	キリスト教への改宗と教会組織の整備
第4回	七王国（ヘプターキー）概念とブリテンの覇者（ブレトワルダ）概念	歴史学用語としての七王国（ヘプターキー）とブリテンの覇者（ブレトワルダ）の成立とその是非
第5回	イングランドの政治的統合過程③	マーシア王国の覇権
第6回	イングランドの政治的統合過程④	ヴァイキングの侵入
第7回	イングランドの政治的統合過程⑤	ウェセックス王国によるイングランド地域の政治的統合
第8回	イングランドの政治的統合過程⑥	デーン人とノルマン人による２度の征服とアングロ＝サクソン期イングランドの終焉
第9回	物質文化	アングロ＝サクソン期の考古学的遺物と写本
第10回	ラテン語と古英語	アングロ＝サクソン期イングランドのラテン語・古英語併用状況
第11回	集会を通じた統治と文書利用	アングロ＝サクソン期イングランドの集会における文書利用を通じた統治
第12回	貨幣	アングロ＝サクソン期イングランドの貨幣の発掘、貨幣の種類、貨幣制度の発展
第13回	『アングロ＝サクソン年代記』の２つの「十字」と天文・大気光学現象	『アングロ＝サクソン年代記』の２つの「十字」が指す天文・大気光学現象とその科学史上の意義
第14回	まとめ	授業の復習とレポートの解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
配布資料の予習、授業内容の復習、参考書等の学修を合わせて各回4時間以上の予習・復習を行う。

【テキスト（教科書）】
講義で使用する資料は全てpdfあるいはパワーポイント形式で配布する。

【参考書】
1.近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社2010
2.青山吉信編『世界歴史体系イギリス史１：先史- 中世』山川出版社1991
3.トマス・チャールズ=エドワーズ編・常見信代監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史２：ポスト・ローマ』慶應義塾大学出版会2010
4.ウェンディ・デイヴィス編・鶴島博和監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史３：ヴァイキングからノルマン人へ』慶応義塾大学出版会2015
5.川北稔編『新版世界各国史11イギリス史』山川出版社1998

【成績評価の方法と基準】
期末レポート(70%)、毎回のリアクションペーパー(30%)で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
参考資料のアクセシビリティを改善する必要を感じた。

【学生が準備すべき機器他】
参考資料を参照可能な機器（パソコン、タブレット、スマートフォン等）。

【Outline (in English)】
Course outline:An overview of the history of Anglo-Saxon England will be presented by using written sources, coin finds and archaeological finds. The first part concerns with the political development of the period while the second part considers its various aspects.
Learning Objectives:This course aims to outline the history of Anglo-Saxon England (c. 450-1066) from political, religious, social and cultural perspectives.
Learning activities outside of classroom:reading of the text before and after each class, reading of references
Grading Criteria/Policy:Report(70%), Reaction Papers(30%)

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋中世史研究 II

伊丹　聡一朗

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本講義では、9-16世紀にかけてのルーシ地域と周辺諸地域との相互関係について概観した上で、そこから現在のロシア国家へと繋がるモスクワ政治権力が分かれ出てきた歴史的経緯について論じる。

【到達目標】
1. 「ルーシ」から「ロシア」へと至る歴史的経緯を包括的に理解できる。
2. 北欧、ビザンツ、モンゴルがルーシの歴史に与えた影響を理解できる。
3. 14世紀ルーシにおける政治秩序の再編とその歴史的意義を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本講義は講義形式で実施する。授業で配布したプリントをその都度見返し、さらに参考文献を読むことで、授業内容についての理解を定着させること。なお、毎回リアクションペーパーを配布・回収し、翌週の講義冒頭でフィードバックをおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本講義の目的と概要、授業の進め方について
第2回	ロシア中世史学概論	歴史学研究において「ルーシ」はどのように見られてきたのか
第3回	ヴァイキングとルーシ①	ヴァイキングの登場と東方進出について
第4回	ヴァイキングとルーシ②	キエフ大公国の成立と発展にヴァイキングが果たした役割について
第5回	ビザンツとルーシ①	ビザンツ帝国を中心とする東方正教世界の特徴について
第6回	ビザンツとルーシ②	ルーシのキリスト教化にビザンツ帝国が果たした役割について
第7回	モンゴルとルーシ①	モンゴル帝国によるルーシ支配の展開について
第8回	モンゴルとルーシ②	モスクワ大公国の台頭とその後の対モンゴル関係について
第9回	14世紀ルーシにおける政治秩序の再編①	14世紀以前のノヴゴロド共和国による河川網を通じた北方地域進出について
第10回	14世紀ルーシにおける政治秩序の再編②	ヴォルガの河川賊ウシクイニクの活動について
第11回	14世紀ルーシにおける政治秩序の再編③	全ルーシ府主教座の政治的役割及び修道院運動の展開について
第12回	14世紀ルーシにおける政治秩序の再編④	ペルミの宣教師ステファンの活動について
第13回	「ルーシ」から「ロシア」へ	15世紀以降のモスクワによる河川網を通じた辺境進出について
第14回	試験・まとめと解説	本講義の総括及び授業内レポート試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備学習：事前に参考書の関連箇所を読み、授業内容の背景を理解しておく。
復習：配布資料を用いて授業内容を振り返る。
本授業の準備学習・復習時間は1回あたり4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用せず、授業でプリントを配布する。

【参考書】
田中陽兒・倉持俊一・和田春樹共編『世界歴史体系 ロシア史1：9〜17世紀』山川出版社、1995年。
宮野裕『世界史リテラシー 「ロシア」はいかにして生まれたのか：タタールのくびき』NHK出版、2023年。

【成績評価の方法と基準】
期末レポート（80%）
リアクションペーパーを用いた平常点（20%）

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
特になし。

【Outline (in English)】
（Course outline）
This lecture will provide an overview of the interrelationships between the Rus' and the surrounding areas from the 9th to the 16th centuries, and then discuss the historical process through which Muscovite political power emerged from the Rus', eventually leading to the present Russian state.
（Learning Objectives）
The goals of this course are to understand medieval Russian history, understand the influence of neighboring powers on the Rus', and understand the restructuring of the political system in 14th century Rus' and its historical significance.
（Learning activities outside of classroom）
Students should consolidate their understanding of the course content by reviewing the handouts and reading the bibliography.
（Grading Criteria /Policy）
Term-end examination: 80%, in class contribution: 20%

POL500B4（政治学 / Politics 500）

ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅰ

皆川　卓

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中世から近代までの歴史を通してヨーロッパの「国家的アイデンティティ」（national identity）を学びます。最初に近代の「ナショナリズム」の構造を紹介し、近代人の中にも無限に多様な「ナショナリズム」があること、しかしそれにも拘わらず何らかの歴史的事情によって一定の地域毎に統合されていることを確認します。そののちそれぞれタイプの異なるフランス、ブリテン（イギリス）およびドイツ（旧神聖ローマ帝国）の状況を概観し、何がそれぞれをまとめるのかを学びます。

【到達目標】
「ナショナリズム」が近代主権国家の諸条件のもとで成立すること、その方向性が各国の近世の歴史的発展に依拠することを学ぶとともに、そこで創られたさまざまなコンセプトが、どのようなメカニズムのもとで国への感情的執着に発展するのかを、それぞれタイプの違う近世史を抱えるヨーロッパ三か国の例から理解し、歴史的観点から合理的・客観的に説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
スライドとプリントによる系統的なスタイルでの講義形式を中心に行います。単元の終了毎（原則として対面ですが、オンライン回にせざるを得ない場合はその都度）に、オンライン掲示による小テストを実施し、到達度を測ります。対面による質問は随時受け付けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	国家的アイデンティティ」(national identity)とは何か	受講者が日々触れる現代生活における文化と情念の関係を分析しながら、社会秩序や社会的価値への愛情が成立・発展する心的条件を論じます。
第2回	ナショナリズムの光と影	ナショナリズムの出発点となる情念が社会価値化するメカニズムを解析し、ナショナリズムの多義性と多様性を各国近世・近代史の特徴的な出来事から明らかにします。
第3回	近代以前に国民主義は存在するか（1）	ナショナリズム現象とされる活動を歴史の諸例から取り上げ、ゲルナー、ホブズボーム、アンダーソン、スミスなど近年の諸説に照らしながら、その類型を提示します。
第4回	近代以前に国民主義は存在するか（2）	前近代史の中に、近代になって初めてナショナリズムの神話形成に用いられるトピックが多数あることを確認します。
第5回	歴史の中のエスニシティとその分析方法（1）	現代ヨーロッパにおける遺伝子ビッグデータの成果などから、「民族」が文化的集団であることを確認し、その基準であるエスニシティとは何かを、機能的な側面から分析します。
第6回	歴史の中のエスニシティとその分析方法（2）	エスニシティを分析するには、その歴史的文脈、特に集団同士の関係に注目することがポイントであることを実証的に紹介します。
第7回	近世の国家と個人の帰属意識を重ねる試み―「王国」のフランス（1）	君主の身体と血統の中にエスニシティを見る伝統を発展させたフランス王国の例を紹介し、他のエスニック要素も展望しながらそのメカニズムを解き明かします。
第8回	近世の国家と個人の帰属意識を重ねる試み―「王国」のフランス（2）	君主の血統の中にエスニシティを見る伝統を発展させたフランス王国の例を紹介し、他のエスニック要素も展望しながら、普遍的な性格を持つ新しいエスニシティを発見する過程を分析します。
第9回	近世の国家と個人の帰属意識を重ねる試み―「帝国」のブリテン（1）	「議会の中の王」「幸いなる島国」「反カトリシズム」「商業国家」など多様なエスニック要素を組み合わせて小国を束ね、大国化したブリテン（イギリスの）例を紹介します。
第10回	近世の国家と個人の帰属意識を重ねる試み―「帝国」のブリテン（2）	ブリテンに束ねられたスコットランド、アイルランドなどの小国の視点とそれらのリアクション形成、そしてそこから生じる垂直的・水平的なアイデンティティの多元性を論じます。
第11回	近世の国家と個人の帰属意識を重ねる試み―「民族」のドイツ（1）	統一的な主権国家とは異なり、新旧の要素が同居する多元的な秩序を生み出した神聖ローマ帝国の特徴と、それをサポートするものとして生み出された「ドイツ」の観念の起こりを紹介します。
第12回	近世の国家と個人の帰属意識を重ねる試み―「民族」のドイツ（2）	神聖ローマ帝国の国家連合化によるアイデンティティの空白を埋める目的で「ドイツ」が文化的共同体に発展する過程を論じます。
第13回	近世の国家と個人の帰属意識を重ねる試み―「民族」のドイツ（3）	「ドイツ」アイデンティティが他国との関係に対する優越的価値「民族」となり、秩序も個人もそれに支配されていく過程を分析します。
第14回	総合評価とまとめ－「愛国」のカルテ	近世ヨーロッパ各国の国家的アイデンティティを構成する要素とその組み合わせのタイプを振り返り、それらとの比較から歴史的な「愛国」とは何かを、「少数民族」の観点も展望しながら相対化し、批判的にまとめます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・事前に配布されるプリントは必ず授業前に読み、大まかな内容は頭に入れておきます（毎回１時間）。
・授業前に参考書やネットを通じて、始めて知る言葉、名前しか知らない言葉について一通り調べ、プリントにメモをします（毎回１時間）。
・授業終了後、授業中に分からなかった点について、自分で調べたり教員に質問します（毎回１時間）。
・授業を聞いて考えた点をメモを取り、期末レポートの作成に備えておきます（毎回１時間）

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。（配布プリントがその機能を担います）

【参考書】
E. ホブズボウム／T. レンジャー『創られた伝統』紀伊国屋書店 1992
E. ゲルナー『民族とナショナリズム』岩波書店 2000
B. アンダーソン『想像の共同体』NTT出版 1997
A.D. スミス『ネイションとエスニシティー歴史社会的考察』名古屋大学出版会 1999
F. ブローデル『フランスのアイデンティティ』（第１篇・第２編）論創社 2015
H. トーマス『中世の「ドイツ」－カール大帝からルターまで』創文社 2005
松本彰・立石博高『国民国家と帝国』山川出版社 2005
谷川稔『国民国家とナショナリズム』山川出版社 1999
指昭博編『王はいかに受け入れられたか―政治文化のイギリス史』刀水書房 2008
岩井淳・指昭博編『イギリス史の新潮流―修正主義の近世史』彩流社 2000
その他教場で指示します。

【成績評価の方法と基準】
・評価は平常点（30%）、単元毎の小テスト（20%）、期末レポート（50%）を総合して評価します。
・ナショナリズムを含む国家的アイデンティティの歴史的変遷を知識として正確に把握できているか【第１評価プロセス：単元毎の小テスト20%に照応】、各時代の国家的アイデンティティを歴史学の方法に従って経験科学的・論理的に分析し、説明できるか【第２評価プロセス：期末レポート50%に対応】、が基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
・欠席者がついて行けなくなる事態を防ぐため、最初に15～20分程度、前回の内容の復習時間を取ることにします。
・小テストの回答はある程度時間を取っていますが（2週間程度）、事情により遅れても提出できるようにします（ただしやむを得ない事情以外、期日を守っている受講生との公平性を考慮し、一定の減点をします）。
・院生が小テストやレポートにAIを使用するようになったため、成果物がそのまま学生の理解を反映しなくなっている。AI使用を前提とし、成果物をリアクションペーパーなどと照合し、学生の思考の足跡をも平常点に反映する。また自ら問いを立てる能力を計測できるよう、小テストや期末レポートの内容を工夫する。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません。

【その他の重要事項】
特にありません。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞近世神聖ローマ帝国史（西中欧・北イタリアの一部）
＜研究テーマ＞『等族制国家から国家連合へ』（創文社 2005）
＜主要研究業績＞"Der Kapuziner Marco d'Aviano und die Reichspolitik des Kaisers Leopold I", Annali dell' Istituto Storico Italo-Germanico 43(2016)他

【Outline (in English)】
(Course outline) This course explores European national identity through history from the Middle Ages to modern times.

(Learning Objectives) First, we will introduce the structure of modern "nationalism" and confirm that there is an infinite variety of "nationalism" among modern people, but that nonetheless, due to some historical circumstances, it is unified in certain regions.
(Learning activities outside of classroom) None.
(Grading Criteria /Policy) Evaluation will be based on a combination of regular class marks (30%), short tests for each unit (20%), and final reports (50%).

POL500B4（政治学 / Politics 500）

ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅱ

皆川　卓

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近世ヨーロッパにおきる社会的流動性（social mobility：地位、身分、職業や職場、信仰、居住地などの変更）が、人や人の集団同士の生活やアイデンティティ、仕組みに与えた影響かについて、近年の研究成果を紹介します。受講者はそこから、社会的流動性が歴史の発展に深くかかわっていることを学ぶとともに、さまざまな成長期の社会に生きる人々が、いかにして社会に前向きに関われるかを省察します。

【到達目標】
近世ヨーロッパの人々は、現代から見れば経済成長率が極端に低い中にあっても、自ら身分や地位、職業や活動地域の変更を求め、異なる環境の衝撃に耐えて自らを活かす可能性を拓くばかりでなく、自分の求めた自分を実現する社会的枠組みをも形成していった。この近世ヨーロッパ「社会」の動的側面の実相と、それが近代の形成に果たした役割を多角的に学び、社会的流動性が持つ可能性を客観的に理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
スライドとプリントによる系統的なスタイルでの講義形式を中心に行います。単元の終了毎（原則として対面ですが、オンライン回にせざるを得ない場合はその都度）に、オンライン掲示による小テストを実施し、到達度を測ります。対面による質問は随時受け付けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	社会的流動性とは何か（1）	社会的流動性（社会移動）は人間生活の活力を左右する基礎的条件ですが、それが分析の対象となることは多くありません。身近な生活を例に、社会的流動性とは何かを簡単に紹介します。
第2回	社会的流動性とは何か（2）	社会的流動性を歴史的に見ると、どのようなことが分かってくるかを、高校までの既習知識の中にある事例から指摘し、それが過去の社会の分析に有効であることを論じます。
第3回	中世ヨーロッパの社会的流動性（1）	中世ヨーロッパの厳格な身分が、権力者に強制された制度ではなく、むしろ職業教育の未発達やコミュニケーションの未熟な中、人々自身から作られたものであることを論じます。
第4回	中世ヨーロッパの社会的流動性（2）	中世後期に徐々に活発化する社会的流動性が、人々の認識の変化を促し、それが社会の集団意識に逆反射して、仕組みや制度をも徐々に変えていく実態を紹介します。
第5回	社会的流動性の舞台【教会と信仰】（1）	近世ヨーロッパの人々に自分の生活環境を変えるチャンスとなった様々な場の中で、キリスト教の教会組織と信仰によるネットワークが大きな影響を及ぼしたことを論じます。
第6回	社会的流動性の舞台【教会と信仰】（2）	教会組織や信仰のネットワークにおける社会的流動性が、次第に既存の組織の持つバイアスを変化させ、教会の改革や信仰の自由に導いていく展開を説明します。
第7回	社会的流動性の舞台【宮廷と軍隊】（1）	近世の厳格な身分の壁を超える場の一つに、権力者が営む宮廷と軍隊がありました。そのうち宮廷に注目し、どのような人材がそれを利用して流動性の波に乗れたのかを詳しく論じます。
第8回	社会的流動性の舞台【宮廷と軍隊】（2）	前回に続いて軍隊に注目し、そこでどのような能力が評価されたのか、またそこにはどのような限界があり、結果として軍隊の流動性はどのようなものになったのかを分析します。
第9回	社会的流動性の舞台【都市とビジネス】（1）	近世ヨーロッパの都市は、ビジネスを通じてそれまで閉じ込められていた境遇から自分を解放し、流動性の波に乗る重要な場でした。そこではどのような可能性があったのかを概観します。
第10回	社会的流動性の舞台【都市とビジネス】（2）	都市とビジネスの流動性は、そこで動く人々の内面をも変化させました。それがどのようなものであり、彼らはより望ましい場の実現を求めてどのような社会を促したのかを論じます。
第11回	社会的流動性の舞台【教育機関・文化とメディア】（1）	近世ヨーロッパでは、様々な教育の場が、本来の目的であった宗教や職業を超えて生活に広く役立てられました。そこから生まれた流動性の特徴を、いくつかの事例に即して検討します。
第12回	社会的流動性の舞台【教育機関・文化とメディア】（2）	近世ヨーロッパの流動性の特徴として、メディアによる流動性があります。直接地位や居住地を変えなくても、認識を共有した集団の中から生み出されたコミュニケーションと価値に注目します。
第13回	社会的流動性の変質と「社会」の誕生	近世ヨーロッパの流動性は、身分や資産の上下に留まらず、好み（ハビトゥス）や人生観、知性など精神面の発展も促しました。それが自由な個人の支える社会という発想を生み出すまでを論じます。
第14回	総合評価とまとめ	近世ヨーロッパの流動性が、単なる地位や富の上下を超え、多様性を承認する「市民」という新たな秩序の枠組みを創造しえたのはなぜなのか、これまでの授業を振り返りながらまとめます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・事前に配布されるプリントは必ず授業前に読み、大まかな内容は頭に入れておきます（毎回１時間）。
・授業前に参考書やネットを通じて、始めて知る言葉、名前しか知らない言葉について一通り調べ、プリントにメモをします（毎回１時間）。
・授業終了後、授業中に分からなかった点について、自分で調べたり教員に質問します（毎回１時間）。
・授業を聞いて考えた点をメモを取り、期末レポートの作成に備えておきます（毎回１時間）

【テキスト（教科書）】
テキストは使用しません。（レジュメがテキストの機能を担います）

【参考書】
清水廣一郎『中世イタリアの都市と商人』講談社 2021
成瀬治『近代ヨーロッパへの道』講談社 2011
高澤紀恵／G・カレ『「身分」を交差させる―日本とフランスの近世』東京大学出版会 2023
L・ストーン（佐田玄治訳）『エリートの攻防―イギリス教育革命史』お茶の水書房 1985
角山栄他『生活の世界歴史(10)産業革命と民衆』河出書房新社 1992
Ch・ハルツィヒ他（大井由紀訳）『移民の歴史』筑摩書房 2023

【成績評価の方法と基準】
・評価は平常点（30%）、単元毎の小テスト（20%）、期末レポート（50%）を総合して評価します。
・ヨーロッパ近世史の中に展開される社会的流動性の概要を理解することができ【第１評価プロセス：単元毎の小テスト20%に照応】、そこから歴史のマクロ的な動きを読み取り、受講者の活きる現代社会と比較・相対化することで、歴史を客観的に論じるための俯瞰的な視点をどれだけ達成しているか【第２評価プロセス：期末レポート50%に対応】をみとります。

【学生の意見等からの気づき】
・様々な研究対象を持つ受講生の理解のために、現代社会や他の時代・地域との比較を交えながら論じます。
・受講生が欠席のため授業内容について行けなくなる事態を抑制するため、授業の最初に15～20分の復習を行います。そのため進度は多少変動します。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません。

【その他の重要事項】
特にありません。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞近世神聖ローマ帝国史（西中欧・北イタリアの一部）
＜研究テーマ＞『等族制国家から国家連合へ』（創文社 2005）
＜主要研究業績＞"Der Kapuziner Marco d'Aviano und die Reichspolitik des Kaisers Leopold I", Annali dell' Istituto Storico Italo-Germanico 43(2016)他

【Outline (in English)】
(Course outline) This session will introduce the results of recent research into the impact that social mobility (changes in status, status, occupation, workplace, faith, place of residence, etc.) in early modern Europe had on the lives, identities, and structures of individuals and groups of people.

(Learning Objectives) Participants should learn that social mobility is deeply connected to historical development, and will reflect on how people living in societies undergoing various periods of growth can positively engage with society.
(Learning activities outside of classroom) None.
(Grading Criteria /Policy) Evaluation will be based on a combination of regular class marks (30%), short tests for each unit (20%), and final reports (50%).

CUM500B4（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

アーカイブズ学Ⅰ

宮間　純一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アーカイブズ学の概要と基本理念を理解する。また、記録管理のあり方をその背景にある人間社会の営みと関連付けて考える思考力を身につける。
アーカイブズとは、①組織や個人の活動のなかで蓄積された記録（とくに、永久保存される文書）、②記録を管理・公開する組織や施設のことを意味する用語であり、アーカイブズ学とはアーカイブズを支える学問分野である。

【到達目標】
アーカイブズ学の諸分野について具体的に探求するとともに、自己の研究領域とアーカイブズの関係を認識し、具体的な研究課題を発見・設定することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義を中心とするが一部演習形式で実施する。第１回から１０回は講義とし、第１１回から１３回は演習形式で論文講読を行う。論文講読は、受講生が分担して担当・発表したのち、教員が解説を加え、ディベートを実施する。第１４回は、総括討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の概要と学ぶ意義に関する講義
第2回	アーカイブズ学総論	アーカイブズの歴史と基本理念に関する講義
第3回	アーカイブズと周縁の学問領域	アーカイブズと歴史学・博物館学・図書館学などに関する講義
第4回	前近代のアーカイブズ	前近代のアーカイブズに関する講義
第5回	近代日本の官僚組織と記録管理	近代日本の官僚組織と記録管理に関する講義
第6回	戦争と記録	戦争と記録に関する講義
第7回	アーカイブズと現代社会	アーカイブズと現代社会に関する講義
第8回	オーラル・ヒストリー	オーラル・ヒストリーに関する講義
第9回	近世「家」文書の構造	近世日本の文書群の構造分析に関する講義
第10回	近現代行政文書の構造	近現代の行政組織と公文書の構造に関する講義
第11回	近現代の企業記録	近代の企業記録に関する文献を講読する
第12回	評価選別論	アーカイブズの評価選別論に関する文献を講読する
第13回	アーカイブズの編成と記述	アーカイブズの編成と記述に関する論文を講読する
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回に指示する論文および関連する文献を各自が事前に目を通してくる。
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003年）

【参考書】
安澤秀一『史料館・文書館学への道-記録・文書をどう残すか-』（吉川弘文館、1985年）
大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986年）
鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002年）
下重直樹・湯上良編『アーキビストとしてはたらく』（山川出版社、2022年）
他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】
平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う
2016年4月 - 2018年3月国文学研究資料館研究部　准教授
2011年4月 - 2016年3月宮内庁書陵部宮内公文書館　内閣府事務官
2007年4月 - 2011年3月千葉県文書館県史・古文書課　嘱託職員

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史・近代史およびアーカイブズ学
＜研究テーマ＞政治史、地域史、記録管理
＜主要研究業績＞
『明治維新という物語』（中央公論新社、2025年）／『公文書管理法後の自治体と文書管理』（編著、勉誠出版、2022年）／『天皇陵と近代－地域の中の大友皇子伝説－』（平凡社、2018年）／『国葬の成立－明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015年）／『戊辰内乱期の社会－佐幕と勤王のあいだ－』（思文閣出版、2015年）

【Outline (in English)】
（Course outline）This course introduces overview and philosophy of archival science to students taking this course.
（Learning Objectives）The goals of this course are to master the basics of archival science.
（Learning activities outside of classroom）Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policy）Your overall grade in the class will be decided based on the following
in class contribution: 100%

CUM500B4（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

アーカイブズ学Ⅱ

宮間　純一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アーカイブズ学におけるアーカイブズ資源研究の基本的な理念・手法を理解し、具体的な文書群の構造分析を行うことができるようになる。
アーカイブズ資源研究とは、記録管理に関わる研究、記録の伝来をめぐる研究、アーカイブズの構造分析などからなる分野である。

【到達目標】
アーカイブズ学資源研究の理念・手法を踏まえて、自己の研究において利活用している（あるいはこれから利活用することが予定されている）文書群を対象としたアーカイブズ学的分析を具体的に行い、その成果・課題を適切に示すことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義および演習。第１回から１０回は講義とし、第１１回から１３回は演習形式で、受講生が具体的な文書群に関わる研究発表を行う（文書群や研究テーマは各自が設定する、授業計画に示したのは例）。発表ののちディベートを実施する。第１４回は、 総括討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の理念・概要に関する講義
第2回	アーカイブズ資源研究の方法論	アーカイブズ資源研究の研究史・方法論に関する講義
第3回	古代朝廷の文書管理	古代朝廷の文書管理に関する講義
第4回	戦国大名の文書管理	戦国大名の文書管理に関する講義
第5回	徳川幕府の文書管理	徳川幕府の官僚組織と文書管理に関する講義
第6回	前近代の「家」と文書管理	前近代の「家」における文書管理に関する講義
第7回	近代官僚組織と文書管理	近代官僚組織の成立・展開と文書管理に関する講義
第8回	軍隊と文書管理	軍隊と文書管理に関する講義
第9回	政治家と文書管理	政治家と文書管理に関する講義
第10回	企業と文書管理	企業と文書管理に関する講義
第11回	寺院と文書管理	寺院と文書管理に関する研究報告
第12回	神社と文書管理	神社と文書管理に関する研究報告
第13回	天皇と文書管理	天皇と文書管理に関する研究報告
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の発表担当者は関連する史料・文献を熟読し、報告の準備をする。それ以外の受講生は、発表担当者から事前に紹介された参考文献に目を通してくる。
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003 年）

【参考書】
安澤秀一『史料館・文書館学への道－記録・文書をどう残すか－』（吉川弘文館、1985 年）
大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986 年）
鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002年）
国文学研究資料館編『近世大名のアーカイブズ資源研究』（思文閣出版、2016年）
他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】
平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う
2016年4月-2018年3月国文学研究資料館　研究部准教授
2011年4月-2016年3月宮内庁書陵部宮内公文書館　内閣府事務官
2007年4月-2011年3月千葉県文書館県史・古文書課　嘱託職員

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代史およびアーカイブズ学
＜研究テーマ＞政治史、地域史、記録管理
＜主要研究業績＞
『明治維新という物語』（中央公論新社、2025年）／『公文書管理法時代の自治体と文書管理』（勉誠社、2022年）／『天皇陵と近代－地域の中の大友皇子伝説－』（平凡社、2018 年）／『国葬の成立－明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015年）

【Outline (in English)】
（Course outline）This course introduces the archival study of resources to students taking this course.
（Learning Objectives）The goals of this course are to master the basics of archival study of resources.
（Learning activities outside of classroom）Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policy）Your overall grade in the class will be decided based on the following
in class contribution: 100%

CUM500B4（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

文書館管理研究Ⅰ

鈴木宏宗・大塩勇生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業の概要：収集アーカイブズにおける個人文書の特性や取扱いについて、アーキビストの実務を通して学ぶ。
目的：アーキビストとして個人文書に対応するための識見・能力を高め、その基本的な考え方及び技能を身につける。

【到達目標】
到達目標：１）個人文書を対象とするアーカイブズについて深く理解し、その意義を自覚すると共に他者に説明することができる。２）アーキビストとしての技能を身に着け、実践するための方法を考え、論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の進め方：授業は講義形式で行う。
方法：対面授業とする。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答およびフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的・発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義概要（鈴木）
第2回	個人文書とは	個人文書と所蔵について概略（鈴木）
第3回	個人文書の所蔵機関	憲政資料室など具体例（大塩）
第4回	個人文書をめぐる法と制度	情報公開法関連法規等（鈴木）
第5回	個人文書の収集	収集方針、方法（大塩）
第6回	個人文書についての情報収集	関連機関との連携など（鈴木）
第7回	個人文書の整理(総論)	一般論と構造化（大塩）
第8回	個人文書整理の実際	具体例を検討（大塩）
第9回	個人文書の利用環境	閲覧、複写など（鈴木）
第10回	個人文書の保存対策	保存資材、書庫など（大塩）
第11回	個人文書のデジタル化	デジタル化　（媒体変換の意義、方針と実際（鈴木）
第12回	個人文書の情報提供	レファレンス、広報の面（鈴木）
第13回	個人文書の展示	実物展示、電子展示など（大塩）
第14回	試験・まとめ	講義の総括（鈴木）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備学習・復習：参考書や各回で言及した文献をひもとき、準備・復習し、理解を深めること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する予定。

【参考書】
国文学研究資料館編『アーカイブズ学入門』（勉誠社、2024年）
知的資源イニシアティブ 編『これからのアーキビスト』（勉誠出版、2014）
青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』（岩田書院、2004年）
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房、2003年）

【成績評価の方法と基準】
平常点50％、期末試験50％。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】
受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【その他の重要事項】
担当教員は、国立国会図書館憲政資料室に勤務しており、同室での政治家をはじめとる個人文書を取り扱った実践及び知見、研究を踏まえて授業を行う。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
・アーカイブズ学（鈴木）
・図書館史（鈴木）
＜研究テーマ＞
・近代日本の図書館史（鈴木）
＜主要研究業績＞
・鈴木宏宗「明治10年代「図書館」は「書籍館」に何故取って代ったか―「図書」の語誌に見る意味変化と「東京図書館における「館種」概念の芽生え―」『近代出版研究』1巻、2022年
・鈴木宏宗「日本近現代政治史料とアーキビスト」的資源イニシアティブ 編『これからのアーキビスト』（勉誠出版、2014）

【Outline (in English)】
(Course outline) Course Overview: Learn about the characteristics and handling of personal papers in collection archives through the practical work of an archivist.
Objective: To enhance the knowledge and ability to deal with personal papers as an archivist and acquire the basic concepts and skills required.
(Learning Objectives) Students will gain a deep understanding of archives that target personal papers, become aware of their significance, and be able to explain them to others.
(Learning activities outside of classroom) Consult reference books and literature mentioned in each session, prepare and review, and deepen your understanding.
(Grading Criteria /Policy) 50% regular grades and 50% final exam.

CUM500B4（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

文書館管理研究 II

芳澤　直之

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業の概要と目的：アーカイブズ（記録と文書館）とアーキビストの歴史と現在について、また、その実務について学ぶ。
目的：アーキビストとしての識見・能力を高め、その基本技能を身につける。
なお、この授業は、文書館管理研究Ⅰ（春学期）と連続して受講することを必須とする。

【到達目標】
(1)アーカイブズ（記録と文書館）について深く理解し、その意義を自覚すると共に説明することができる。(2) アーキビストとしての技能を身に付け、実践することができる。(3) アーカイブズ及びアーキビストについてグローバルな視点から考え、論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
対面授業とする。その具体的方法については、学習支援システムで通知する。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答及びフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的、発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業全体の概要説明と受講上の注意
第2回	国立博物館とアーカイブズ１	アーカイブズ機関としての国立博物館の特徴
第3回	国立博物館とアーカイブズ２	国立博物館が保有する記録資料の法的位置づけ－公文書管理法と文化財保護法に注目して－
第4回	国立博物館とアーカイブズ３	国立博物館における記録資料管理の理論と方法
第5回	国立博物館における記録資料活用の前提１	多量で多様な形態の記録資料群と目録編成
第6回	国立博物館における記録資料活用の前提２	写真資料の技法に基いた目録編成
第7回	国立博物館における記録資料活用の前提３	記録資料の情報化・デジタル化等に関する理念及び方法論
第8回	国立博物館における記録資料活用の前提４	収蔵品公開システムと記録資料の公開
第9回	国立博物館と組織文書１	国立博物館における電子文書の運用
第10回	国立博物館と組織文書２	国立博物館における情報システム構築
第11回	国立博物館と組織文書３	国立博物館と情報公開法等関係法令
第12回	国立博物館における記録資料の保存１	記録資料の保存に関する基本的な理念と方法論
第13回	国立博物館における記録資料の保存２	記録資料の保存・修復及び保存科学
第14回	海外博物館の事例	英国ロイヤルコレクション・トラストが所蔵する記録資料の特徴

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する。

【参考書】
国文学研究資料館・史料館編『史料の整理と管理』(岩波書店、1988年)
新井浩文『文書館の仕事：アーキビストと史料保存』(吉川弘文館、2024年)
福島幸宏責任編集『ひらかれる公共資料』(勉誠社、2023年)
宇賀克也『情報公開と公文書管理』(有斐閣、2010年)
宇賀克也『新・情報公開法の逐条解説〔第8版〕』(有斐閣、2018年)
大林賢太郎『写真保存の実務』(岩田書院、2010年)

【成績評価の方法と基準】
平常点50％、期末試験（リポート形式）50％。なお特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】
受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【その他の重要事項】
履修済（合格）の再履修は認めない。
スケジュール等の急な変更は学習支援システムのお知らせで通知するため、授業前に必ず確認すること。お知らせに記載がない場合は、予定通り対面授業を行う。
以下のアーカイブズ機関・博物館での実践・研究をふまえた授業を行う。
2024年10月 - 現在（独）国立文化財機構　皇居三の丸尚蔵館　研究員
2021年4月 - 2024年9月　宮内庁三の丸尚蔵館　内閣府事務官（研究職）
2016年4月 - 2021年3月　外務省外交史料館　期間業務職員（『日本外交文書』編纂補助）

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代史、アーカイブズ学
＜研究テーマ＞近代日本の宮中外交
＜主要研究業績＞
芳澤直之「昭和戦前期における宮内省御用掛と外交官」(外務省外交史料館編『外交史料館報』第30号、2017年3月)
芳澤直之「昭和戦前期の宮内官吏と非官吏」(『学習院史学』59、2021年3月)
芳澤直之「土方久元宛て伊藤博文書簡について－『芳蘭帖」を中心に」(皇居三の丸尚蔵館編『尚蔵』2号、2026年3月)

【Outline (in English)】
Course outline: Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below.(1)What's an archives? (2)What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4)What's the skills of an archivist working for an archives? Student's questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed.
Learning Objectives: The goal of this course is to understand practical and basic knowledge and skills as an archivist.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on assignments at each class meeting (50%) and term-end Examination (50%)

CUM500B4（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

記録史料学研究Ⅰ

小宮山　敏和

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
前近代の記録史料(古文書・古記録)についての理解を深めるため、アーカイブズ学等の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】
前近代の幕府や朝廷等の政治組織、村・町・寺社等の組織構造をまず理解することが求められる。その上で、前近代の組織にとって、記録を作成し残すことの意味や記録管理システム等の特質を探求するとともに、アーカイブズ学と前近代の記録史料の関係等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
論文講読等の演習形式と講義で授業を進める。各テーマに沿った講義も想定しているが、参加者が順番に関連論文について報告し討論を行うことを重視する。よって、参加人数や専門分野等の状況によっては講義内容の組み替え等を行う場合がある。担当論文、順番等については参加者の人数や属性(専門分野等)を考慮しガイダンスの際に決定するが、その後も調整等行う。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。対面での授業を想定している。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	目的　計画　報告者の調整　etc
第2回	記録史料とアーカイブズ学	古文書学、記録史料学、アーカイブズ学などの整理、日本の前近代文書の特徴等
第3回	前近代の組織とアーカイブズ	前近代の組織の構造や特質等
第4回	記録史料の特性(1)	中世の武家における記録・文書の管理
第5回	記録史料の特性(2)	江戸幕府における記録・文書の管理 Ⅰ
第6回	記録史料の特性(3)	江戸幕府における記録・文書の管理 Ⅱ
第7回	記録史料の特性(4)	藩における記録・文書の管理
第8回	記録史料の特性(5)	中世の朝廷・公家における記録・文書の管理
第9回	記録史料の特性(6)	朝廷における記録・文書の管理
第10回	記録史料の特性(7)	公家における記録・文書の管理
第11回	記録史料の特性(8)	村方における記録・文書の管理
第12回	記録史料の特性(9)	町方における記録・文書の管理
第13回	記録史料の特性(10)	寺社その他における記録・文書の管理
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。報告担当者は報告準備を行う。報告担当者以外も報告対象となる論文を精読して不明な点などをまとめておく。
安藤正人『記録史料学と現代――アーカイブズの科学をめざして―』(吉川弘文館,1998年)は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用しない。

【参考書】
安藤正人『記録史料学と現代』(吉川弘文館)
日本歴史学会編『概説古文書学』近世編(吉川弘文館)
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）
アーカイブズ学用語研究会編『アーカイブズ用語辞典』（柏書房）

【成績評価の方法と基準】
平常点50％／研究発表50％

【学生の意見等からの気づき】
参加者の専門分野が多様になること、逆に特定の時代・地域に限定される場合も想定されるため、その点も踏まえた授業構成等とする予定です。

【その他の重要事項】
本授業担当者は、歴史学を専門にしつつ、国立公文書館の認証アーキビストとしてアーカイブズ機関での実務経験を有しており、アーカイブズ機関における資料の評価選別、整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして、アーカイブズ機関の観点からの情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近世史、アーカイブズ学
〈研究テーマ〉幕藩関係論、幕府制度論等
〈研究業績〉『譜代大名の創出と幕藩体制』（吉川弘文館、2015年）、「江戸幕府の行政運用における申合の機能」(幕藩研究会編『論集 近世国家と幕府・藩』、岩田書院、 2019年)「農林水産省の文書管理と移管文書の特徴」(『北の丸』44号、2012年)、
アーカイブズ学用語研究会編『アーカイブズ用語辞典』(柏書房、2024年、項目執筆)等

【Outline (in English)】
This course deals with the basic concepts and principles of premodern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.
The goals of this course are to understand the premodern organizational structure of shogunate and the imperial court, villages and towns.In addition, we will explore the characteristics of record management systems for pre-modern organizations.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process report (50%) and in-class contribution(50%).

CUM500B4（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

記録史料学演習Ⅰ

小宮山　敏和

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸時代の記録史料(古文書・古記録)調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】
記録史料学研究Ⅰの内容を踏まえ、より深く江戸時代の文書の保存・調査(整理)・管理について実践的に習得することを到達目標とする。実際の記録史料群をいかに構造的に理解し、有効な検索システムを構築するか。そのためには個々の史料を理解し、それを史料群全体に位置づけるという作業が必要となる。このとき史料群を生み出した人ないし組織への理解が必要不可欠となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
実際の史料群の整理作業、参加者による史料内容および史料整理・目録編成等に関する論文等の報告、報告をもとにしたディスカッション等を行う。参加者の人数や属性(専門分野や調査経験、くずし字読解能力等)を考慮し、授業内容は調整等することがある(例えば未経験者が含まれれば活字史料の活用や報告の比重を増やす、近世史専門の参加者のみであれば、未整理の古文書の整理を行うなど)。課題等に対するフィードバックは授業の中でおこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	目的　計画　報告者の調整　etc
第2回	記録史料の調査（1）	史料調査論 史料1
第3回	記録史料の調査（2）	史料2
第4回	記録史料の調査（3）	史料3
第5回	記録史料の調査（4）	史料4
第6回	史料群構造の理解（1）	目録論等 史料群1
第7回	史料群構造の理解（2）	史料群2
第8回	史料群構造の理解（3）	史料群3
第9回	記録史料の取扱い（1）	様式論、料紙その他 古文書1
第10回	記録史料の取扱い（2）	古文書2
第11回	記録史料の取扱い（3）	古文書3
第12回	記録史料の取扱い（4）	古文書4
第13回	利用提供	利用閲覧、展示論
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。報告担当者は報告準備を行う。報告担当者以外も報告対象となる論文を精読して不明な点などをまとめておく。
安藤正人『記録史料学と現代――アーカイブズの科学をめざして―』(吉川弘文館,1998年)は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】
翻刻された近世文書または文学部史学科所蔵の古文書原本等。

【参考書】
安藤正人『記録史料学と現代』(吉川弘文館)
日本歴史学会編『概説古文書学』近世編(吉川弘文館)
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）
児玉幸多編『くずし字解読辞典』(東京堂出版)
児玉幸多編『くずし字用例辞典』(東京堂出版)
アーカイブズ学用語研究会編『アーカイブズ用語辞典』（柏書房）

【成績評価の方法と基準】
平常点50％／発表50％

【学生の意見等からの気づき】
参加者の専門分野が多様になること、逆に特定の時代・地域に限定される場合も想定されるため、その点も踏まえた授業構成等とする予定です。

【その他の重要事項】
本授業担当者は、歴史学を専門としつつ、国立公文書館の認証アーキビストとしてアーカイブズ機関での実務経験を有しており、アーカイブズ機関における資料の評価選別、整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして、アーカイブズ機関の観点からの情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近世史、アーカイブズ学
〈研究テーマ〉幕藩関係論、幕府制度論等
〈研究業績〉『譜代大名の創出と幕藩体制』（吉川弘文館、2015 年）、「江戸幕府の行政運用における申合の機能」(幕藩研究会編『論集 近世国家と幕府・藩』、岩田書院、 2019 年)「農林水産省の文書管理と移管文書の特徴」(『北の丸』44 号、2012 年) 、アーカイブズ学用語研究会編『アーカイブズ用語辞典』（2024年、柏書房、項目執筆）等

【Outline (in English)】
This course deals with the basic concepts and principles of investigation such as early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.
The goals of this course are to understand more deeply about the preservation, investigation, and management of documents from the Edo period.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process report (50%) and in-class contribution(50%).

CUM500B4（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

記録史料学研究 II

淺井　良亮

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近現代の記録史料（公文書・私文書）を構造的に理解するための理論と方法を学ぶ。

【到達目標】
近現代の記録史料に関する論文講読を通じて、史料情報を体系的に把握し、記録史料を構造的に理解するための基本的な知識の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、前半を講義形式、後半を演習形式で実施する。演習では担当受講生による発表と質疑応答・ディスカッションを行う。
初回授業はハイフレックス方式で実施する。以後の授業形態については、初回授業において受講生と相談し、必要に応じて適宜オンライン方式等への切替を検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本授業の概要
第2回	講義(1)	近現代公文書の構造と特質(1)
第3回	講義(2)	近現代公文書の構造と特質(2)
第4回	講義(3)	近現代私文書の構造と特質(1)
第5回	講義(4)	近現代私文書の構造と特質(2)
第6回	論文講読(1)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(1)
第7回	論文講読(2)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(2)
第8回	論文講読(3)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(3)
第9回	論文講読(4)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(4)
第10回	論文講読(5)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(5)
第11回	論文講読(6)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(6)
第12回	論文講読(7)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(7)
第13回	論文講読(8)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(8)
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・準備（2時間を標準）：関連文献を適宜紹介するので、事前にそれらを読んで授業に臨むこと。
・復習（2時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理・確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】
論文講読のテキストは、授業内で適宜指示する。

【参考書】
・中野目徹『近代史料学の射程』弘文堂、2000年
・熊本史雄『近代日本の外交史料を読む』ミネルヴァ書房、2020年
・中野目徹ほか『テクスト構築の史料学』吉川弘文館、2025年

【成績評価の方法と基準】
平常点50％・発表50％

【学生の意見等からの気づき】
アナウンスや事後質問などを行うにあたって、学習支援システムの活用を進める。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン受講に対応できる情報機器を各自準備すること。

【その他の重要事項】
本授業は、人文科学研究科史学専攻が開設する、アーキビスト養成プログラムの選択必修科目に指定されている。
授業担当者は、学芸員・認証アーキビスト・登録アーキビストとして、アーカイブズ機関等での実務経験を有しており、実践例を取り交ぜた授業内容とする。

【担当教員の専門分野等】
◇専門領域
・日本近世近代史
・歴史資料論
◇関連業績
・「内務省文書の構造的理解のための基礎的研究」（共著、『北の丸』58号、2026年）
・「石阪清右衛門家文書の来歴と構造」（『自由民権』35号、2022年）
・「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）

【Outline (in English)】
This course aims to develop a systematic understanding of archival information through reading of scholarly articles on modern archival records.
Classes are divided into two parts: the first half is conducted in a lecture format, and the second half in a seminar format. In the seminar sessions, a designated student will present on the assigned article, followed by questions and discussion.
Assessment is based on class participation (50%) and presentations (50%).

CUM500B4（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

記録史料学演習 II

淺井　良亮

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近現代の記録史料（公文書・私文書）を構造的に理解するための実践的な手法を学ぶ。

【到達目標】
近現代の記録史料の分析を通じて、その作成意図や伝来経緯を把握するとともに、記録史料を構造的に理解するための実践的な技能の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は、前半を講義形式、後半を演習形式で実施する。演習では担当受講生による発表と質疑応答・ディスカッションを行う。
初回授業はハイフレックス方式で実施する。以後の授業形態については、初回授業において受講生と相談し、必要に応じて適宜オンライン方式等への切替を検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本授業の概要
第2回	講義(1)	記録史料の作成・伝来・構造(1)
第3回	講義(2)	記録史料の作成・伝来・構造(2)
第4回	講義(3)	デジタルアーカイブと史料情報の操作(1)
第5回	講義(4)	デジタルアーカイブと史料情報の操作(2)
第6回	史料分析(1)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(1)
第7回	史料分析(2)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(2)
第8回	史料分析(3)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(3)
第9回	史料分析(4)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(4)
第10回	史料分析(5)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(5)
第11回	史料分析(6)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(6)
第12回	史料分析(7)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(7)
第13回	史料分析(8)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(8)
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備（２時間を標準）：関連文献を適宜紹介するので、事前にそれらを読解・理解して授業に臨むこと。
復習（２時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理しておくこと。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用しない。

【参考書】
・中野目徹『近代史料学の射程』弘文堂、2000年
・熊本史雄『近代日本の外交史料を読む』ミネルヴァ書房、2020年
・中野目徹ほか『テクスト構築の史料学』吉川弘文館、2025年

【成績評価の方法と基準】
平常点50％・発表50％

【学生の意見等からの気づき】
アナウンスや事後質問などを行うにあたって、学習支援システムの活用を進める。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン受講に対応できる情報機器を各自準備すること。

【その他の重要事項】
記録史料学研究Ⅱで学んだ知識を基礎として授業を進めるため、同科目と合わせて受講することを推奨する。
本授業は、人文科学研究科史学専攻が開設する、アーキビスト養成プログラムの選択必修科目に指定されている。
授業担当者は、学芸員・認証アーキビスト・登録アーキビストとして、アーカイブズ機関等での実務経験を有しており、実践例を取り交ぜた授業内容とする。

【担当教員の専門分野等】
◇専門領域
・日本近世近代史
・歴史資料論
◇関連業績
・「内務省文書の構造的理解のための基礎的研究」（共著、『北の丸』58号、2026年）
・「石阪清右衛門家文書の来歴と構造」（『自由民権』35号、2022年）
・「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）

【Outline (in English)】
This course aims to develop a systematic understanding of archival information through the analysis of modern archival records.
Classes are divided into two parts: the first half is conducted in a lecture format, and the second half in a seminar format. In the seminar sessions, a designated student will present on the assigned archival records, followed by questions and discussion.
Assessment is based on class participation (50%) and presentations (50%).

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

地形学研究 I

前杢　英明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地形・地質学的な方法による活動的な地殻変動の解明

【到達目標】
地震、火山噴火、曲隆・曲降など活動的な地球変動のメカニズムについて、地形・地質学的な方法によりアプローチした研究論文を読解できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とする。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	地球規模からみた世界の変動帯
第2回	活動的な地殻変動（1）	アメリカ西海岸の活構造
第3回	活動的な地殻変動（2）	造陸運動とプレート内部の活動
第4回	活動的な地殻変動（3）	活断層評価と災害
第5回	活動的な地殻変動（4）	褶曲に関連する活断層
第6回	活動的な地殻変動（5）	活構造と河川の沖積作用
第7回	活動的な地殻変動（6）	海岸の変動地形
第8回	活動的な地殻変動（7）	山麓での変動地形
第9回	活動的な地殻変動（8）	活構造の研究法と地球表層プロセス
第10回	活動的な地殻変動（9）	古地震研究と活構造
第11回	活動的な地殻変動（10）	活構造プロセスの測地学的研究
第12回	活動的な地殻変動（11）	年代測定法
第13回	活動的な地殻変動（12）	地震災害に関する地質学的研究
第14回	活動的な地殻変動（13）	火山災害とアセスメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
プレゼンテーション準備、レジュメ作成を行う際に、参考書やネットで公開されている情報を幅広く検索し、担当するテーマそのものだけでなく、関連する分野の知識も同時に身に付けることが望ましい。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。

【参考書】
Active Tectonics, National Academy Press,1986
Tsunamiites,Elsevier,2008
The Geology of Earthquakes, Oxford University Press,1997

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーション50％、討論40％、態度・意欲10％

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象科目ではないため該当しない。

【学生が準備すべき機器他】
プロジェクター、パソコン、スクリーン

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学、（変動）地形学、第四紀学
＜研究テーマ＞
プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究
＜主要研究業績＞
前杢英明ほか（2005）：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究．地理科学, vol.60-3, pp.136-142.
Maemoku, H. et.al.（1997）：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.
Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 – 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】
This course introduces Tectonic geomorphology, Tectonic geology and Tectonic movements to students taking this course. At the end of the course, students are expected to understand academic papers on Earthquakes, Volcanoes, Tectonic movements approaching from geomorphology or geology.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Presentation: 50%、Discussion : 40%、in class contribution: 10%

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

地形学研究 II

前杢　英明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地形・地質学的な方法による活動的な地殻変動の解明

【到達目標】
地震、火山噴火、曲隆・曲降、活断層など活動的な地球変動のメカニズムについて、地形・地質学的な方法による新たな研究テーマを設定できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とする。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	変動地形および地殻変動研究の動向
第2回	活断層研究（1）	日本の活断層研究（1）
第3回	活断層研究（2）	日本の活断層研究（2）
第4回	活断層研究（3）	世界の活断層研究（1）
第5回	活断層研究（4）	世界の活断層研究（2）
第6回	活断層研究（5）	世界の活断層研究（3）
第7回	津波研究（1）	津波の海洋学的研究
第8回	津波研究（2）	津波堆積物研究（1）
第9回	津波研究（3）	津波堆積物研究（2）
第10回	津波研究（4）	津波巨礫研究
第11回	広域的地殻変動研究（1）	日本の海成段丘研究
第12回	広域的地殻変動研究（2）	世界の海成段丘研究
第13回	広域的地殻変動研究（3）	造山運動研究
第14回	広域的地殻変動研究（4）	造盆地運動研究

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
プレゼンテーション準備、レジュメ作成を行う際に、参考書やネットで公開されている情報を幅広く検索し、担当するテーマそのものだけでなく、関連する分野の知識も同時に身に付けることが望ましい。

【テキスト（教科書）】
学術雑誌または論文集の研究論文を使用する

【参考書】
Active Tectonics, National Academy Press,1986
Tsunamiites,Elsevier,2008
The Geology of Earthquakes, Oxford University Press,1997

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーション50％、討論40％、態度・意欲10％

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象科目ではないため該当しない。

【学生が準備すべき機器他】
プロジェクター、パソコン、スクリーン

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学、（変動）地形学、第四紀学
＜研究テーマ＞
プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究
＜主要研究業績＞
前杢英明ほか（2005）：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究．地理科学, vol.60-3，pp.136-142.
Maemoku, H. et.al.（1997）：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.
Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 – 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】
This course introduces Tectonic geomorphology, Tectonic geology and Tectonic movements to students taking this course. At the end of the course, students are expected to understand academic papers on Earthquakes, Volcanoes, Tectonic movements approaching from geomorphology or geology.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Presentation: 50%、Discussion : 40%、in class contribution: 10%

GEO600B5（地理学 / Geography 600）

地形学演習 I

前杢　英明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地形学や第四紀学に関わる修士論文作成のための研究指導

【到達目標】
修士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を熟成させることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	研究テーマの設定１	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換１
第3回	研究テーマの設定２	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換２
第4回	研究内容の紹介１	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション１
第5回	研究内容の紹介２	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション２
第6回	研究内容の紹介３	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション３
第7回	研究内容の紹介４	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション４
第8回	受講生の研究内容１	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論１
第9回	受講生の研究内容２	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論２
第10回	受講生の研究内容３	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論３
第11回	受講生の研究内容４	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論４
第12回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導１	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１
第13回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導２	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導２
第14回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導３	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導３

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】
とくに指定しない。自然地理学に関連ある内外の文献を使用する。

【参考書】
「日本の地形１-７」東京大学出版会
「建設技術者のための地形読図入門１-４」古今書院

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
PowerPoint

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学、（変動）地形学、第四紀学
＜研究テーマ＞
プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究
＜主要研究業績＞
前杢英明ほか（2005）：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究．地理科学, vol.60-3，pp.136-142.
Maemoku, H. et.al.（1997）：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.
Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 – 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】
Research instruction for master thesis on Geomorphology or Quaternary Science
At the end of the course, students are expected to understand academic papers on Tectonic geomorphology or geology and complete master thesis on the discipline.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Presentation: 50%、in class contribution: 50%

GEO600B5（地理学 / Geography 600）

地形学演習 II

前杢　英明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地形学や第四紀学に関わる修士論文作成のための研究指導

【到達目標】
修士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を熟成・完成させることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	受講生の研究内容１	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論１
第3回	受講生の研究内容２	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論２
第4回	受講生の研究内容３	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論３
第5回	受講生の研究内容４	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論４
第6回	受講生の研究内容５	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論５
第7回	受講生の研究内容６	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論６
第8回	受講生の研究内容７	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論７
第9回	受講生の研究内容８	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論８
第10回	受講生の研究内容９	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論９
第11回	受講生の研究内容１０	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論１０
第12回	受講生の研究内容１１	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１１
第13回	受講生の研究内容１２	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１２
第14回	受講生の研究内容１３	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１３

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】
とくに指定しない。自然地理学に関連ある内外の文献を使用する。

【参考書】
「日本の地形１-７」東京大学出版会
「建設技術者のための地形読図入門１-４」古今書院

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
PowerPoint

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学、（変動）地形学、第四紀学
＜研究テーマ＞
プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究
＜主要研究業績＞
前杢英明ほか（2005）：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究．地理科学, vol.60-3，pp.136-142.
Maemoku, H. et.al.（1997）：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.
Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 – 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】
Research instruction for master thesis on Geomorphology or Quaternary Science
At the end of the course, students are expected to understand academic papers on Tectonic geomorphology or geology and complete master thesis on the discipline.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Presentation: 50%、in class contribution: 50%

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

気候学研究 I

山口　隆子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
気候学・生気象学を研究していくうえで基本となる生き物と温度との関係について学ぶ。

【到達目標】
生き物と温度に関する研究の最先端を理解できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
教科書に沿って、受講者全員で輪読し、関連文献の紹介も併せて行っていく。発表に対するフィードバックは、講義内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生との講義内容に関する意見交換
第2回	温度と生命の基礎（1）	温度計の発明・歴史
第3回	温度と生命の基礎（2）	物質の三態と温度
第4回	温度と生命の基礎（3）	太陽系の温度
第5回	温度と生命の基礎（4）	地球温暖化
第6回	温度と生命の基礎（5）	温度生物学
第7回	温度と生命の基礎（6）	温度感知
第8回	ヒト・医学（1）	ヒトの体温
第9回	ヒト・医学（2）	体温調節
第10回	ヒト・医学（3）	温熱的快適性
第11回	ヒト・医学（4）	温度による障害
第12回	ヒト・医学（5）	気象病
第13回	ヒト・医学（6）	建築と温熱環境
第14回	ヒト・医学（7）	衣服と体温

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
プレゼンテーション準備、レジュメ作成に際し、周辺分野についても幅広く取り扱うようにすること。

【テキスト（教科書）】
富永真琴ほか（2025）：『生き物と温度の事典』．朝倉書店，360p.

【参考書】
講義内でその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】
到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。
発表：50％、討論：50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン

【その他の重要事項】
地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、気候変動等の取組について講義していきます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学・気候学・生気象学
＜研究テーマ＞
ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響
＜主要研究業績＞
山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1－128.
山口隆子（2013）：ヒートアイランド対策．日本生気象学会雑誌，Vol.50,71-75.
山口隆子（2018）：日本における気象観測―東京都檜原村を事例として．日本生気象学会雑誌，Vol.54, 101－109.
山口隆子（2022）：芝棟の現存状況と芝棟植物の分布特性について．日本生気象学会雑誌，Vol.58,75-86.

【Outline (in English)】
Learn about the relationship between living things and temperature, which is fundamental to the study of climatology and biometeorology. You will be able to understand the cutting edge of research on living organisms and temperature. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each. When preparing presentations and resumes, be sure to cover a wide range of peripheral fields. Final grade will be calculated according to the following process presentation(50%), and discussion(50%).

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

気候学研究 II

山口　隆子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
気候学・生気象学を研究していくうえで基本となる生き物と温度との関係について学ぶ。

【到達目標】
生き物と温度に関する研究の最先端を理解できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
教科書に沿って、受講者全員で輪読し、関連文献の紹介も併せて行っていく。発表内容に対してのフィードバックは、講義内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義内容に関する意見交換
第2回	動物（1）	動物の体温維持
第3回	動物（2）	昆虫の温度受容
第4回	動物（3）	温度適応
第5回	動物（4）	魚類、爬虫類の温度適応
第6回	動物（5）	哺乳類の温度適応
第7回	動物（6）	哺乳類の冬眠
第8回	動物（7）	気候変動と生態系
第9回	植物（1）	植物の生育適温
第10回	植物（2）	季節変化と開花
第11回	植物（3）	温度と光合成
第12回	植物（4）	地球温暖化による影響
第13回	植物（5）	地球温暖化への適応策
第14回	植物（6）	植物工場

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
プレゼンテーション準備、レジュメ作成に際し、周辺分野についても幅広く取り扱うようにすること。

【テキスト（教科書）】
富永真琴ほか（2025）：『生き物と温度の事典』．朝倉書店，360p.

【参考書】
講義内でその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】
到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。
発表：50％、討論：50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン

【その他の重要事項】
地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、気候変動等の取組について講義していきます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学・気候学・生気象学
＜研究テーマ＞
ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響
＜主要研究業績＞
山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 – 128.
山口隆子（2013）：ヒートアイランド対策．日本生気象学会雑誌，Vol.50,71-75.
山口隆子（2018）：日本における気象観測―東京都檜原村を事例として．日本生気象学会雑誌，Vol.54, 101 – 109.
山口隆子（2022）：芝棟の現存状況と芝棟植物の分布特性について．日本生気象学会雑誌，Vol.58,75-86.

【Outline (in English)】
Learn about the relationship between living things and temperature, which is fundamental to the study of climatology and biometeorology. You will be able to understand the cutting edge of research on living organisms and temperature. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each. When preparing presentations and resumes, be sure to cover a wide range of peripheral fields. Final grade will be calculated according to the following process presentation(50%), and discussion(50%).

GEO600B5（地理学 / Geography 600）

気候学演習 I

山口　隆子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
気候学に関わる修士論文作成のための研究指導。

【到達目標】
研究テーマ設定、既存研究論文紹介、研究手法について発表し、議論を重ねることによって、修士論文を仕上げていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
各自の研究テーマに関する手法・解析結果について発表し、参加者全体で議論を行います。提出されたレジュメに対し、授業内に講評、フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本演習の進め方について
第2回	研究テーマの設定（1）	研究テーマに関する意見交換（1）研究目的
第3回	研究テーマの設定（2）	研究テーマに関する意見交換（2）研究計画
第4回	研究内容の紹介（1）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（1）気候学（国内）
第5回	研究内容の紹介（2）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（2）気象学（国内）
第6回	研究内容の紹介（3）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（3）気候学（海外）
第7回	研究内容の紹介（4）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（4）気象学（海外）
第8回	研究手法の検討（1）	研究手法の報告、議論（1）対象地域
第9回	研究手法の検討（2）	研究手法の報告、議論（2）対象期間
第10回	研究手法の検討（3）	研究手法の報告、議論（3）対象データ
第11回	研究手法の検討（4）	研究手法の報告、議論（4）解析手法
第12回	研究の方向性（1）	研究の方向性に関する議論
第13回	研究の方向性（2）	研究の方向性に関する指導
第14回	まとめ	修士論文の中間発表及び今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
研究テーマに関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。

【参考書】
泉岳樹・松山洋（2017）：『卒論・修論のための自然地理学フィールド調査』．古今書院，120 p．

【成績評価の方法と基準】
到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。発表：50％、討論：50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン

【その他の重要事項】
地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、自然環境全般の実践的な課題への取り組み方を指導していきます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学・気候学・生気象学
＜研究テーマ＞
ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響
＜主要研究業績＞
山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp．1－128.
山口隆子（2013）：ヒートアイランド対策．日本生気象学会雑誌，Vol.50,71-75.
山口隆子（2018）：日本における気象観測―東京都檜原村を事例として．日本生気象学会雑誌，Vol.54, 101－109.
山口隆子（2022）：芝棟の現存状況と芝棟植物の分布特性について．日本生気象学会雑誌，Vol.58,75-86.

【Outline (in English)】
Research guidance for preparing master's thesis related to climatology.　Students will complete their master's thesis by setting a research theme, introducing existing research papers, presenting and discussing their research methods. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.　Students are expected to read through domestic and foreign literature related to their research topics.　Final grade will be calculated according to the following process presentation(50%), and discussion(50%).

GEO600B5（地理学 / Geography 600）

気候学演習 II

山口　隆子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
気候学に関わる修士論文作成のための研究指導。

【到達目標】
観測・解析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を仕上げていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
各自の研究テーマに関する手法・解析結果について発表し、参加者全体で議論を行います。提出されたレジュメに対し、講義内で講評、フィードバックを行います。対面での講義が実施できない場合、ZOOMによるオンライン授業になります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本演習の進め方
第2回	研究内容の報告（1）	研究の進捗状況報告（研究目的）
第3回	研究内容の報告（2）	研究の進捗状況議論（研究目的）
第4回	研究内容の報告（3）	研究の進捗状況報告（研究手法）
第5回	研究内容の報告（4）	研究の進捗状況議論（研究手法）
第6回	研究内容の報告（5）	研究の進捗状況報告（対象地域）
第7回	研究内容の報告（6）	研究の進捗状況議論（対象地域）
第8回	研究内容の報告（7）	研究の進捗状況報告（対象期間）
第9回	研究内容の報告（8）	研究の進捗状況議論（対象期間）
第10回	研究内容の報告（9）	研究の進捗状況報告（対象データ）
第11回	研究内容の報告（10）	研究の進捗状況議論（対象データ）
第12回	研究内容の報告（11）	研究の進捗状況報告（解析結果）
第13回	研究内容の報告（12）	研究の進捗状況議論（解析結果）
第14回	まとめ	修士論文の最終発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
研究テーマに関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。

【参考書】
泉岳樹・松山洋（2017）：『卒論・修論のための自然地理学フィールド調査』．古今書院，120 p．

【成績評価の方法と基準】
到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。発表：50％、討論：50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン

【その他の重要事項】
地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、自然環境全般の実践的な課題への取り組み方を指導していきます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学・気候学・生気象学
＜研究テーマ＞
ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響
＜主要研究業績＞
山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 – 128.
山口隆子（2013）：ヒートアイランド対策．日本生気象学会雑誌，Vol.50,71-75.
山口隆子（2018）：日本における気象観測―東京都檜原村を事例として．日本生気象学会雑誌，Vol.54, 101 – 109.
山口隆子（2022）：芝棟の現存状況と芝棟植物の分布特性について．日本生気象学会雑誌，Vol.58,75-86.

【Outline (in English)】
Research guidance for preparing master's thesis related to climatology. Students will complete their master's thesis by setting a research theme, introducing existing research papers, presenting and discussing their research methods. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each. Students are expected to read through domestic and foreign literature related to their research topics. Final grade will be calculated according to the following process presentation(50%), and discussion(50%).

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

水文学研究 I

小寺　浩二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・授業概要：水循環の定量的評価と水資源の持続可能な利用
・授業の目的・意義：水文学の根幹を成す水循環を定量的に評価する手法について理解し，水資源の持続可能な利用への応用を学ぶ。

【到達目標】
　環境および資源として人間生活と密接な関わりを持つ陸水について，存在量と循環速度を評価することができるようにする。
　異なる時空間尺度における水温・水質の分布特性について，水循環の過程におけるあり方を理解することができるようにする。
　水文学・陸水学分野において修士論文を書く学生に対しては、テーマ設定から研究・調査方法・分析手法・解析手法・論文執筆について基本的な能力を養成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　受講生の研究課題に結びつくテーマを中心に，論文講読，受講生による発表，討議を中心に進めることにより，受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。
　毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。
　また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	地球上の水の量と循環	資源としての水の再検証
第2回	水収支要素の算出手法	水の地域配分の決定事項
第3回	水収支の変化と要因	降水量と蒸発散量の評価
第4回	降雨－流出過程	降雨に伴う河川の応答
第5回	直接流出と基底流出	ハイドログラフの解析
第6回	地下水と河川水の交流	流域における水の挙動
第7回	閉塞湖の地下水漏出	湧水涵養源としての湖水
第8回	課題発表と討論	プレゼンテーション実施
第9回	陸水の水温特性	水の熱的特性と水温構造
第10回	水質形成の自然的要因	溶存成分の起源・由来
第11回	水質形成の人為的要因	水質と人間活動
第12回	水質の変動機構	水域の富栄養化
第13回	水質汚染の解明手法	水質の時系列変化
第14回	水循環の定量的評価	滞留時間の算定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
　各回のテーマと内容に則した論文を事前に検索し，研究対象地域の水文特性，調査研究手法，および結果と考察に関する要約を簡潔に文書化する。論文講読による準備学習の成果を授業中の質疑応答と討議の際の重要な素材とするので，事前の学習活動と主体的に取り組むこと。

【テキスト（教科書）】
　テキストは使用せず，関連する文献を教材として授業中に配布する。

【参考書】
小寺浩二・三井嘉都夫（2019）：自然地理学（海洋・陸水学）,法政大学通信教育部,294pp.
小寺浩二（2020）：自然地理学概論,法政大学通信教育部,346pp.
森　和紀・佐藤芳徳（2015）：「図説　日本の湖」，朝倉書店.
市川正巳［編］（1990）：「水文学－総観地理学講座8－」，朝倉書店.

【成績評価の方法と基準】
発表30％，討議参加20％，レポート50％。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の研究分野、興味の対象に応じ、毎回の質疑応答の結果を見ながら、適宜講義内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】
基本的に、GISを用いた解析が前提になっているので、必要なハードウエアとソフトウエアの準備が必要。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞自然地理学・水文学・陸水学・GISを用いた地域解析
＜研究テーマ＞
1）水循環に伴う物質循環
2）人間活動に伴う水環境変化と保全
3）GISを用いた流域水・物質循環解析と環境マネージメント

【Outline (in English)】
　The basic ability is trained about a research work, investigation method, an analytical method, an analysis method and thesis writing from theme setting to the student who writes a master thesis in hydrology and the land water science field.
The case which is the hydrology field to the student who makes the other fields the center, too, and, I plan for upbringing of basic research capability.
　In addition, students who specialize in fields other than hydrology will learn the basics of regional spatial analysis using GIS.
To be able to evaluate the abundance and circulation speed of inland water, which is closely related to human life as an environment and resources.
To be able to understand the process of water circulation regarding the distribution characteristics of water temperature and water quality on different spatiotemporal scales.
For students who write master's thesis in the fields of hydrology and limnology, we will develop basic abilities in research, research method, analysis method, analysis method, and dissertation writing from theme setting.
For students mainly in other fields, we will develop basic research ability after performing regional spatial information analysis using GIS.
We will try to contribute to the improvement of the students' own research by focusing on the themes related to the students' research themes, reading the dissertation, making presentations by the students, and discussing.
In each lesson, write a summary of the lesson, questions, etc. in the attendance book and submit it, and comment on the contents in the next lesson.
In addition, we will ask you to submit a small report and a final report, evaluate each, and explain the ideal report based on the model answer.
More than 2 hours are required for preparation and review of each class
Grading will be 30% for presentation, 20% for participation in discussion, and 50% for report.

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

水文学研究 II

小寺　浩二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・授業概要：水環境の保全と水資源の統合管理
・授業の目的・意義：水環境保全の解決手法を理解し，今日的課題としての水資源の統合管理について学ぶ。

【到達目標】
・陸水の理化学的特性とその変動機構，水文環境と気候変動との因果関係について評価することができる。
・水圏・大気圏・岩石圏の複合領域において存在する地球上の水のあり方，流域単位の水管理について理解することができる。
・様々な地域空間情報に関して、GISを用いた解析とその結果を用いた主題図などの作成ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　受講生の研究課題に結びつくテーマを可能な限り取り上げることにより，水をキーワードとする自然地理学の研究法を議論し，受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。論文講読，受講生による発表，および全員での討議を中心に進める。水文学以外を主専攻とする学生に関しても、専門に応じて同様に授業を進める。
　毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。
　また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	水温による水の追跡	温度が語る水の履歴
第2回	放射性同位体の応用	トリチウム
第3回	安定同位体の応用	酸素18，デューテリウム
第4回	気候変動と水賦存量	水温上昇が与える影響
第5回	地球温暖化と水文環境	貧酸素層の形成
第6回	都市の水文環境	地下水環境の変化
第7回	水資源の持続可能性	水資源の開発と適正利用
第8回	課題発表と討論	プレゼンテーション実施
第9回	親水環境の創造	親水環境の創造
第10回	総合治水と流域管理	治水と治山
第11回	日本の水利用と課題	地下水の人工涵養
第12回	国際社会の水資源問題	途上国の水資源と水環境
第13回	水文環境の保全	「名水」の提唱と保存
第14回	風土としての水	自然地理学からみた水

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
　各回のテーマと内容に則した論文を事前に検索し，研究対象地域の水文特性，調査研究手法，および結果と考察に関する要約を簡潔に文書化する。論文講読による準備学習の成果を授業中の質疑応答と討議の際の重要な素材とするので，事前の学習活動と主体的に取り組むこと。

【テキスト（教科書）】
　テキストは使用せず，関連する文献を教材として授業中に配布する。

【参考書】
小寺浩二・三井嘉都夫（2019）：『自然地理学（海洋・陸水）』.法政大学通信教育部,296pp.
小寺浩二（2020）：『自然地理学概論』.法政大学通信教育部,346pp.
新井　正（2004）：「地域分析のための熱・水収支水文学」，古今書院.
山本荘毅・高橋　裕（1988）：「図説　水文学－水文学講座2－」，共立出版.

【成績評価の方法と基準】
総合的に判断する。
発表30％，討議参加20％，レポート50％。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の研究分野、興味の対象に応じ、毎回の講義に対する学生の反応を基に、修正を加えながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】
基本的に、GISを用いた地域空間情報解析を中心とするので、ハードウエアとソフトウエアの事前準備が必要である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞自然地理学・水文学・陸水学・GISを用いた地域解析
＜研究テーマ＞
1）水循環に伴う物質循環
2）人間活動に伴う水環境変化と保全
3）GISを用いた流域水・物質循環解析と環境マネージメント

【Outline (in English)】
　The basic ability is trained about a research work, investigation method, an analytical method, an analysis method and thesis writing from theme setting to the student who writes a master thesis in hydrology and the land water science field.
　The case which is the hydrology field to the student who makes the other fields the center, too, and, I plan for upbringing of basic research capability.
　Students who do not major in hydrology mainly learn about the application of regional spatial information analysis using GIS.
・ It is possible to evaluate the physicochemical characteristics of inland water and its fluctuation mechanism, and the causal relationship between the hydrological environment and climate change.
・ Understand the nature of water on the earth that exists in the complex area of the hydrosphere, atmosphere, and lithosphere, and water management in each basin.
・For various regional spatial information, it is possible to analyze using GIS and create thematic maps using the results.
By picking up themes related to the students' research themes as much as possible, we will discuss the research methods of physical geography with water as the keyword and try to contribute to the improvement of the students' own research. Focus on reading thesis, making presentations by students, and discussing with all. For students whose majors are other than hydrology, classes will be conducted in the same way according to their specialty.
In each lesson, write a summary of the lesson, questions, etc. in the attendance book and submit it, and comment on the contents in the next lesson.
In addition, we will ask you to submit a small report and a final report, evaluate each, and explain the ideal report based on the model answer.
More than 2 hours are required for preparation and review of each class
Grading will be 30% for presentation, 20% for participation in discussion, and 50% for report.

GEO600B5（地理学 / Geography 600）

水文学演習 I

小寺　浩二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　水文学の根幹を成す水循環を定量的に評価する手法について理解し、水資源の持続可能な利用への応用を学ぶ。
　環境および資源として人間生活と密接な関わりを持つ陸水について、存在量と循環速度を評価することができるようにする。　異なる時空間尺度における水温・水質の分布特性について、水循環の過程におけるあり方を理解することができるようにする。
　水文学・陸水学分野において修士論文を書く学生に対しては、テーマ設定から研究・調査方法・分析手法・解析手法・論文執筆について基本的な能力を養成する。他の分野を主とする学生に対しても、水文学分野の事例をもとに、基本的な研究能力の育成を図る。

【到達目標】
　受講生は、研究課題に結びつくテーマを中心に、現地調査方法、調査結果の分析・解析方法、まとめ方などについて、発表、討議を中心に進め、研究結果を論文としてまとめる基礎的能力の育成を図る。
　同時に、GISを用いて時空間解析を行い、様々な主題図として提示する能力も身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　初年時の学生は、卒論について発表し、受講生全員で議論しながら、修論への展開について指針を示す。２年次以降の学生は修論に関わる調査結果を発表し、主にデータ解析について受講生全員で議論する。
　毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。
　また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	卒論結果・修論構想発表①	テーマ・キーワード・研究目的について
第2回	卒論結果・修論構想発表②	研究方法・地域概略について
第3回	卒論結果・修論構想発表③	結果・考察について
第4回	卒論結果・修論構想発表④	まとめ・文献・要旨について
第5回	文献検索法	国内外の文献について
第6回	研究法・調査法	研究理論と現地調査方法
第7回	水質分析法①	一般水質
第8回	水質分析法②	安定同位体・環境同位体
第9回	データ解析法①	一般解析（相関・重回帰など）
第10回	データ解析法②	GIS解析（小流域原単位法・SWATモデルなど）
第11回	データ解析法③	様々な解析法（クラスター・主成分など）
第12回	主題図作成法①	水文誌
第13回	主題図作成法②	統計地図・水質分布図
第14回	まとめ	総合的な考察

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
　各回のテーマと内容に則し、ほぼ毎回、受講生の研究テーマに沿った発表を求めるので、事前に準備して望むこと。

【テキスト（教科書）】
　テキストは使用せず、関連する文献を指示する。

【参考書】
小寺浩二・三井嘉都夫（2019）：『自然地理学（海洋・陸水）』.法政大学通信教育部,296pp.
小寺浩二（2020）：『自然地理学概論』.法政大学通信教育部,346pp.
森　和紀・佐藤芳徳（2015）：「図説　日本の湖」，朝倉書店.
市川正巳［編］（1990）：「水文学－総観地理学講座８－」，朝倉書店.

【成績評価の方法と基準】
　授業内での発表、討議を踏まえて、提出論文をもとに、総合的に評価する。
　発表30％，討議参加20％，レポート50％。

【学生の意見等からの気づき】
毎回の講義に対する学生の反応をもとに適宜修正しながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】
毎回、プレゼンテーションが必要であるため、必ずノートパソコンを用意すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞自然地理学・水文学・陸水学・GISを用いた地域解析
＜研究テーマ＞
１）水循環に伴う物質循環
２）人間活動に伴う水環境変化と保全
３）GISを用いた流域水・物質循環解析と環境マネージメント

【Outline (in English)】
A member of a class plans for upbringing of the basic ability to gather a research result as a thesis by an analysis of field survey method and survey result and the thing from which an announcement by a member of a class and discussion are advanced to the center about an analysis method and how to gather focusing on the theme related to a research task of a member of a class.
Students will focus on presentations and discussions on field survey methods, analysis / analysis methods of survey results, and summarization methods, focusing on themes related to research themes, and develop basic abilities to summarize research results as a dissertation. Plan.
At the same time, acquire the ability to perform spatio-temporal analysis using GIS and present it as various thematic maps.
Students in the first year will present their graduation thesis, and while discussing with all the students, give guidelines on the development of the master's thesis. Students from the second year onward will announce the survey results related to the master's thesis, and all the students will mainly discuss data analysis.
In each lesson, write a summary of the lesson, questions, etc. in the attendance book and submit it, and comment on the contents in the next lesson.
In addition, we will ask you to submit a small report and a final report, evaluate each, and explain the ideal report based on the model answer.
More than 2 hours are required for preparation and review of each class
Grading will be 30% for presentation, 20% for participation in discussion, and 50% for report.

GEO600B5（地理学 / Geography 600）

水文学演習 II

小寺　浩二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　水環境保全の解決手法を理解し、今日的課題としての水資源の統合管理について学ぶ。
　陸水の理化学的特性とその変動機構、水文環境と気候変動との因果関係について評価することができるようにする。水圏・大気圏・岩石圏の複合領域において存在する地球上の水のあり方、流域単位の水管理についても理解することができるようにする。
　受講生が、それぞれのテーマにしたがって、実際に論文が執筆できる能力の育成を図る。

【到達目標】
　受講生は、研究課題に結びつくテーマを可能な限り取り上げることにより、水をキーワードとする自然地理学の研究法を議論し、受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。
　また、GISを用いて時空間解析を行い、様々な主題図として示す能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　初年次の学生は、「水文学演習Ⅰ」の結果をもとに修論の構想を発表し、予備調査の結果について報告する。２年次以降の学生は、仮の論文を提出し発表して、受講生全員で内容の吟味を行う。
　毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。
　また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	研究の構成	先行研究・目的・研究法など
第2回	調査計画	対象地域選定・観測頻度など
第3回	現地調査法①	利用機材・設置方法など
第4回	現地調査法②	現地との連携・許可申請など
第5回	論文の構成①	形式について
第6回	論文の構成②	図表の配置について
第7回	論文の構成③	文献・要旨など
第8回	論文の推敲①	文章の長さ
第9回	論文の推敲②	文章表現
第10回	論文の推敲③	文章のバランス
第11回	投稿先選定	学会誌毎の特徴
第12回	編集委員とのやりとり	投稿規定など
第13回	査読者とのやりとり	修正要求への返答法
第14回	まとめ	実際に論文を完成させ、投稿

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
　各自の具体的なテーマに応じて、実際に論文を作成し、学会誌に投稿する段階まで指導するので、事前に調査結果などを精査し、解析しておくこと。

【テキスト（教科書）】
　テキストは使用せず、関連する文献を教材として利用する。

【参考書】
小寺浩二・三井嘉都夫（2019）：『自然地理学（海洋・陸水）』.法政大学通信教育部,296pp.
小寺浩二（2020）：『自然地理学概論』.法政大学通信教育部,346pp.
新井　正（2004）：「地域分析のための熱・水収支水文学」，古今書院.
山本荘毅・高橋　裕（1988）：「図説　水文学－水文学講座2－」，共立出版.

【成績評価の方法と基準】
総合的に判断する。
発表30％、討議参加20％、レポート50％。

【学生の意見等からの気づき】
毎回の講義に対する学生の反応を基に、修正を加えながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】
毎回、必ずプレゼンテーションが必要なので、ノートパソコンを持参すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞自然地理学・水文学・陸水学・GISを用いた地域解析
＜研究テーマ＞
１）水循環に伴う物質循環
２）人間活動に伴う水環境変化と保全
３）GISを用いた流域水・物質循環解析と環境マネージメント

【Outline (in English)】
　Solution methodology of water environment protection is understood and it's learned about integrated management of water resources as a present-day problem.
　I make sure that it'll be possible to estimate about the physics and chemistry-like special quality of the land water, the fluctuation organization and causality with hydrological environment and variation in climate.　I make sure that it'll be also possible to understand about water management of the state of the water and the basin unit on the earth which exists in compound territory in hydrosphere, atmosphere and a lithosphere.
A member of a class plans for upbringing of the ability with which a thesis can be written actually with the respective themes.
Students will discuss the research methods of physical geography with water as the keyword and try to contribute to the improvement of their own research by picking up themes related to the research subject as much as possible.
Also, acquire the ability to perform spatio-temporal analysis using GIS and show it as various thematic maps.
　Students in the first year will present their master's thesis concept based on the results of "Hydrology Exercise I" and report on the results of the preliminary survey.　Students in the second year and beyond will submit and publish a tentative dissertation, and all students will examine the content.
In each lesson, write a summary of the lesson, questions, etc. in the attendance book and submit it, and comment on the contents in the next lesson.
In addition, we will ask you to submit a small report and a final report, evaluate each, and explain the ideal report based on the model answer.
More than 2 hours are required for preparation and review of each class
Grading will be 30% for presentation, 20% for participation in discussion, and 50% for report.

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

自然地理学文献講読Ⅰ

山口　隆子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自然地理学関連の欧文の文献を精読し、当該研究分野の国際的動向を探るとともに、専門分野の欧文文献を読みこなす語学力を養成する。

【到達目標】
自然地理学のうち、年度によって地形・気候分野の文献を講読し、外国語（英語）の読解力を高め、国際的に評価が高い外国文献から広く情報収集できる能力を身に付けることを目標とする。
また、外国語（英語）による論文執筆の基礎についても学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
自然地理関係の欧文文献の内容を正確に読み取れるように、受講者が精読した上で内容に関する討議を踏まえて講義を進める。受講者の研究内容に関連した研究論文を各自検索し、その論文の内容を、他の受講者へ紹介し、質疑応答を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	導入・授業概略	本講義の扱う内容や進め方に関して説明し、質疑応答を行う。
第2回	欧文図書輪読（1） 文献検索法（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 J-Stageを用いた検索法について学ぶ。
第3回	欧文図書輪読（2） 文献検索法（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 CiNiiを用いた検索法について学ぶ。
第4回	欧文図書輪読（3） 文献検索法（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 その他の検索法について学ぶ。
第5回	欧文図書輪読（4） 文献講読法（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「タイトル」を中心に質疑応答。
第6回	欧文図書輪読（5） 文献講読法（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 キーワード」を中心に質疑応答。
第7回	欧文図書輪読（6） 文献講読法（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「要旨」を中心に質疑応答。
第8回	欧文図書輪読（7） 文献講読法（4）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「文献リスト」を中心に質疑応答。
第9回	欧文図書輪読（8） 文献講読法（5）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「文献引用法」を中心に質疑応答。
第10回	欧文図書輪読（9） 英文論文執筆の基礎（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のレビューを行う。
第11回	欧文図書輪読（10） 英文論文執筆の基礎（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のタイトルとキーワードについて議論する。
第12回	欧文図書輪読（11） 英文論文執筆の基礎（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のAbstractについて議論する。
第13回	欧文図書輪読（12） 英文論文執筆の基礎（4）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のIntroductionについて議論する。
第14回	欧文図書輪読（13） 英文論文執筆の基礎（5）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のConclusionについて議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
適宜、図書館に配架している洋雑誌を閲覧して、欧文の文献に関心を払って欲しい。予習復習に各2時間を要する。

【テキスト（教科書）】
自然地理分野の欧文論文を扱う予定。その分野とは主に、気候・地形の各分野である。詳細は第一回目の導入時に受講者と相談のうえで決定したい。

【参考書】
その他適宜授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
発表：50％、討論：50％
発表担当以外も、必ず事前に読み込んでくること。

【学生の意見等からの気づき】
毎回、受講生の状況を見て判断し、次回以降の内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】
PC

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学、気候学、生気象学
＜研究テーマ＞
ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響
＜主要研究業績＞
山口隆子（2013）：ヒートアイランド対策．日本生気象学会雑誌, Vol.50,71-75.
山口隆子（2018）：日本における気象観測―東京都檜原村を事例として．日本生気象学会雑誌，Vol.54, 101 – 109.
山口隆子（2022）：芝棟の現存状況と芝棟植物の分布特性について．日本生気象学会雑誌，Vol.58,75-86.

【Outline (in English)】
This course aims to brush up for reading skill of text book or journal written in English.
At the end of the course, students are expected to understand academic papers written in English on Physical Geography.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Presentation: 50%、in class contribution: 50%

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

自然地理学文献講読 II

山口　隆子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自然地理学関連の欧文の文献を精読し、当該研究分野の国際的動向を探るとともに、専門分野の欧文文献を読みこなす語学力を養成する。

【到達目標】
自然地理学のうち、受講者それぞれの研究対象分野に応じた文献を精読し、外国語（英語）の読解力を高め、国際的に評価が高い外国文献から広く情報収集できる能力を身に付けることを目標とする。また、外国語（英語）による論文の執筆法についても学び、具体的な論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　自然地理関係の欧文文献の内容を正確に読み取れるように、受講者が精読した上で内容に関する討議を踏まえて講義を進める。年度によって、地形・気候学の一般論を扱った洋書を精読する一方、受講者が関心に応じた文献を選定し、レビューし発表する中で、内容について討議する。
　また、各自の卒論・修論等を英訳した上で、英語論文として仕上げる方法についても学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	導入・授業概略	レビューの方法、授業の進め方について説明する。
第2回	文献検索法（1）	文献目録集や国内の検索サイトを用いた検索について
第3回	文献検索法（2）	文献目録集や海外の検索サイトを用いた検索について
第4回	文献講読法（1）	タイトル・キーワードを中心に
第5回	文献購読法（2）	Abstractを中心に
第6回	文献購読法（3）	文献引用法を中心に
第7回	英語論文執筆法（1）	邦文の英訳
第8回	英語論文執筆法（2）	対訳による検証
第9回	英語論文執筆法（3）	英語論文としての修正
第10回	英語論文執筆（1）	レビュー
第11回	英語論文執筆（2）	タイトルとキーワード
第12回	英語論文執筆（3）	Abstract
第13回	英語論文執筆（4）	Introduction
第14回	英語論文執筆（5）	Conclusion

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
適宜、図書館に配架している洋雑誌を閲覧して、欧文の文献に関心を払って欲しい。予習復習に各2時間を要する。

【テキスト（教科書）】
自然地理分野の欧文図書・論文を扱う予定。その分野とは主に、気候・地形の各分野である。ただし、詳細は第一回目の導入時に受講者と相談のうえで決定したい。

【参考書】
その他適宜授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
発表：50％、討論：50％
発表担当以外も、必ず事前に読み込んでくること。

【学生の意見等からの気づき】
毎回、学生の状況を見て次回以降の内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】
PC

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学、気候学、生気象学
＜研究テーマ＞
ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響
＜主要研究業績＞
山口隆子（2013）：ヒートアイランド対策．日本生気象学会雑誌，Vol.50,71-75.
山口隆子（2018）：日本における気象観測―東京都檜原村を事例として．日本生気象学会雑誌，Vol.54, 101 – 109.
山口隆子（2022）：芝棟の現存状況と芝棟植物の分布特性について．日本生気象学会雑誌，Vol.58,75-86.

【Outline (in English)】
This course aims to brush up for reading skill of text book or journal written in English.
At the end of the course, students are expected to understand academic papers written in English on Physical Geography.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Presentation: 50%、in class contribution: 50%

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

自然地理学特殊講義Ⅰ

三坂　育正

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
環境配慮型の都市やまちを推進する上で重要となる都市環境問題を取り上げ、問題の現状や要因、影響、対策に関する知識・スキルを修得し、都市環境の改善に向けた専門知識や対策実践による問題解決能力を養成する。

【到達目標】
気候変動やヒートアイランドなど、都市に関係する環境変化に伴い発生する自然災害やエネルギーなどの新たな都市環境問題に対して、広い視野と俯瞰的な視点をもって発見し、対応を考えることができるようになる 。
環境共生都市、環境配慮型都市等に関して、評価手法や適用技術などを用いて、環境性や自らの考えを明確かつ論理的に組み立て、具体的に説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
講義を中心に進める。また、環境調査の実習や環境配慮空間の調査等のフィールドワークも併せて実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス、環境配慮型都市	都市や建築と環境の関係 環境配慮型・環境共生の都市・建築
第2回	都市の風環境	ビル風と都市の通風
第3回	都市の水環境	都市型洪水と親水空間
第4回	都市の熱環境(1)	ヒートアイランド現象の現状・要因・影響
第5回	都市の熱環境(2)	ヒートアイランド対策（緩和策）
第6回	都市の熱環境(3)	ヒートアイランド対策（適応策と実践）
第7回	都市の緑と生物多様性	建物・都市の緑化技術 生物多様性と生態系配慮
第8回	温熱快適性の基礎	体感指標・温熱快適性指標
第9回	環境配慮技術の実践	大丸有地区におけるヒートアイランド対策
第10回	温熱快適性の測定(1)	温熱4要素（気温・湿度・風速・放射）の測定
第11回	温熱快適性の測定(2)	温熱快適性指標(WBGT・SET)の算出
第12回	温熱快適性の測定(3)	データ分析・考察
第13回	環境配慮技術の調査(1)	ヒートアイランド対策技術の実施例
第14回	環境配慮技術の調査(2)	ヒートアイランド対策技術の実施例

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備学修として、学部レベルの気候（都市気候関連）に関する本や講義ノートを読むようにしてください。また、環境配慮された都市空間と評される空間について調べておいてください。
復習として、講義中に課すレポートに取り組んでください。

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しません。
講義では、教員のオリジナル講義資料を配布します。

【参考書】
日本建築学会編：「都市の環境設備計画」, 森北出版, ISDN：978-4-627-55351-4
森山正和編著：「ヒートアイランドの対策と技術」, 学芸出版社, ISDN：978-4761523459

【成績評価の方法と基準】
講義時の小テスト（第1〜7回講義）：50％
レポート（2回：温熱快適性の測定、環境配慮空間等の調査）：50％

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません

【学生が準備すべき機器他】
パソコンを持参することが望ましい。
（第8回、第10〜12回は必須）

【その他の重要事項】
【演習】
第10〜12回、第13〜14回は、それぞれ集中として土曜日（仮）に実施する予定です。
実施日については、第1回で調整して決めます。その関係で、講義の順序が変更となる可能性があります。
【実務経験】
担当教員は、株式会社竹中工務店技術研究所で、建築空間における環境評価・制御、省エネルギー、ヒートアイランド対策を中心とした研究開発に関する実務経験があり、設計支援等の実績もある。地球環境や都市環境に配慮して建築・都市を考えるうえで必要な考え方や解析手法などについて、実務経験の立場から事例を通して伝えることで、より高度な知識やスキル修得するための指導を行う。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞環境気象学、建築・都市環境
＜研究テーマ＞都市熱環境、暑熱環境対策
＜主要研究業績＞学術論文40編超、特許17件（共願含）、環境省・東京都等の委員を歴任、講演多数

【Outline (in English)】
・Course outline
The aim of this course is to help students acquire knowledge and skills for solving urban environmental problems.
・Learning Objective
At the end of the course, students are expected to consider responses to issues such as natural disasters and energy issues that arise from changes in the urban environment with a broad and holistic perspective.
Learning activities outside of classroom
・Two-credit course
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content
・Grading Criteria /Policies
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Lecture test: 50%、Reports(2 times : Thermal comfort experiments, Environmental friendly spaces survey) : 50%

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

自然地理学特殊講義 II

澤柿　教伸

備考（履修条件等）：8/4～6（1日につき4時限分）、8/7（AM 2時限分）を予定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
氷河・永久凍土・周氷河など，寒冷地域・雪氷圏に特有な地形とその形成プロセスを理解するとともに，それらが，第四紀という時間スケールの中で変遷してきた過程および現代の人類社会に及ぼしている影響について理解することが本授業の第一の目的である．それにより，物質・エネルギー循環の時空間的な理解にもとづき，過去から未来にわたる気候変動の復元・予測ができるようになることを目指す．

【到達目標】
・地形形成プロセスや氷期・間氷期サイクルの気候変動の知識に基づいて，氷河とその周辺に見られる地形，および永久凍土の発達・盛衰過程を解釈・説明できるようになる．
・人類の進化と文明の成り立ちや将来予測についても合理的に思考できるようになる．
・寒冷雪氷圏環境の知見に基づき，グローバルな環境問題に対して専門的な解説や提言ができるようになる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
夏期集中（4時限X3日 + 最終日2時限　=14時限）で実施します。通常の座学（LC）に加えて，グループワークやディベート（GW）を適宜とりいれます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	自己紹介，趣旨説明（LC,GW）
第2回	氷河学と氷河地質学/地形学	氷河の定義と氷河地質学/地形学の関連領域について（LC,GW）
第3回	寒冷地域・雪氷圏の自然環境	氷河・永久凍土の実態とそれらの分布を規定する環境要因（LC,GW）
第4回	氷河・永久凍土の気候学的性質	氷河と永久凍土のなりたち（LC,GW）
第5回	氷河・永久凍土の物理特性	氷河の運動様式と周氷河プロセス（LC,GW）
第6回	氷河・岩石氷河の形態	氷河や岩石氷河の形態分類と特徴（LC,GW）
第7回	氷河の表面と底面	氷河表面岩屑と氷河底定積物，および底面での諸過程（LC,GW）
第8回	氷河作用による地形	氷河浸食地形・氷河堆積物の地形（LC,GW）
第9回	氷河周辺の環境	氷河下流域の堆積環境と氷河湖（LC,GW）
第10回	氷河変動の時間的枠組と復元方法	氷期・間氷期サイクル，更新世後期の環境変動（LC,GW）
第11回	氷河地形編年	氷河地形編年研究の実例と残された課題（LC,GW）
第12回	地球温暖化と氷河変動	地球温暖化問題と氷河変動（LC,GW）
第13回	雪氷圏の環境変動と地球温暖化	IPCC報告書にみる雪氷圏の位置づけと意義（LC,GW）
第14回	まとめと試験	全体のまとめと評価のために授業内試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業支援システムを通じて配布されるレジュメを毎回持参してください。
・問題発掘課題を事前に実施して授業内のディスカッションに備えてください。.
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・氷河地形学（岩田修二著，東京大学出版会，2011年）

【参考書】
・Glaciers and Glaciation 2nd Edition (Benn, D. and Evans D.J.A., Hodder Arnold Publication, 2010)
・Glacial Geology 2nd edition: Ice Sheets and Landforms (Ed;Bennett, M.M. and Glasser, N.F., Wiley-Blackwell, 2009)
・The Physics of Glaciers 4th Edition (Cuffey, K.M., Paterson, W.S.B., 2010)

【成績評価の方法と基準】
・集中実施日ごとにリアクションペーパーを提出し，その記述内容によって授業への参加度や理解度を評価 (50%)
・集中最終日に実施する授業内試験による評価 (50%)

【学生の意見等からの気づき】
・前例がないため特にありません。

【学生が準備すべき機器他】
・授業資料配付および課題提出等のために授業支援システム等を利用する．

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
・氷河地形/地質学
・第四紀学
・極域科学
＜研究テーマ＞
・氷河学と地質学の境界領域で，氷河や氷床とその周辺環境を時空間的に記述・復元する研究
＜主要研究業績＞
・日高山脈の第四紀後期氷河作用の復元
・南極氷床縁辺域の氷床変動
・氷河底プロセスにおける水流プロセスの影響評価
・氷河湖決壊のリスクアセスメント
・数値モデルによる氷河平衡線高度の復元

【Outline (in English)】
The primary goal of this course is to understand the unique landforms and formation processes found in cold regions and cryosphare, such as glaciers, permafrost, and periglacial environments. Additionally, the course aims to comprehend the processes by which these features have evolved over the Quaternary period and the impacts they have on contemporary human societies. Through this understanding, the course aims to enable the restoration and prediction of climate change from the past to the future, based on spatiotemporal comprehension of material and energy cycles.

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

自然地理学特殊講義III

藁谷　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現在の自然環境は，人類が第四紀に進化，拡散しながら自然改変を進めてきた結果といえる。このため授業では，基本的に自然環境とそれに与える人為的影響を講義する。はじめに，第四紀における人類の進化と拡散を俯瞰し，さらに気候環境とその変化の仕組み，熱帯や乾燥帯など日本とは異なる自然地域の特徴，および雪氷圏についてそれらの重層的関係を学ぶ。学生は，自然環境のうち熱帯，乾燥帯，冷帯・寒帯の気候環境，地形・地質環境，雪氷環境などの知識を修得することができる。そして，自然環境の構成要素が相互に関連しあっていることを認識し，地学現象の解明には統合的視点が重要であることを理解する。

【到達目標】
学生は，自然環境のうち熱帯，乾燥帯，冷帯・寒帯の気候環境，地形・地質環境，雪氷環境などの知識を修得する。そして気候変化，氷河の発達，および近年の気候危機に伴う自然災害などに関する知識を獲得し，自らこれらを説明することができる。学生は，自然をシステムという観点からとらえ，統合的な見方・考え方を獲得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は大学が定義する対面授業により，講義形式で実施する。すなわち，授業計画のテーマに従って対面による教材解説，既往文献・資料のレビュー，学生による発表・討論，およびそれらのフィードバックなどの授業を基本とするが，インターネットを活用した授業も併用する。授業に関わる連絡や予習，復習に関連する参考資料・ウェブサイト等については，学習支援システムを利用する。なお，地形の形成と変化に最適な場所で日帰りのフィールドワークを実施することを考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	講義概要と地球システム的見方・考え方	講義の概要を説明するとともに，地球をシステムとして捉えて自然環境を観察することの重要性を講義する。
2	第四紀の定義と環境	第四紀の定義および地形・地質環境に関する基本的な事項を講義する。
3	気候変動の仕組み	ミランコビッチサイクルなど，気候変動の原因について講義する。
4	第四紀の気候と海水準の変動	氷期サイクルとそれが地形形成に与える効果について講義する。また，学生自身の研究テーマと環境変化とのかかわりに関するプレゼンテーションと討論を行う。
5	第四紀の自然環境に関するプレゼンテーションとディベート	これまでの学習内容の定着をプレゼンテーションで確認し，その内容について討議する。
6	岩石の風化速度	岩石の風化およびその速度について，オンデマンドでカンボジア・アンコール遺跡の石材や風化速度を事例に講義する。
7	岩石の物理的，化学的風化	風化プロセスの種類と風化形態の事例について講義する。また，岩石の化学的風化とインドシナ半島の三角州における酸性硫酸塩土壌の形成について講義する。
8	乾燥大陸の自然環境	乾燥大陸の事例として，オーストラリア大陸の多様な自然環境について講義する。
9	乾燥地域に発達する地形	オーストラリア大陸の乾燥地域に発達するおもな地形と先住民の痕跡について講義する。
10	オーストラリア大陸の河川	オーストラリア大陸の乾燥地域に発達する河川と自然改変について講義する。
11	氷河の作用と氷河地形	氷河の作用と氷河地形地についてオンデマンドで講義する。
12	氷河湖の形成と決壊洪水並びに周氷河プロセスと周氷河地形	カラコラム山地の氷河，巨大崩壊を事例に，堰止湖の形成について講義する。
13	気候環境の異なる地域における地形とその変化に関する反転授業とプレゼンテーション	さまざまな気候環境の下で発達する地形と地形変化について反転授業，プレゼンテーションを行い，これまでの学習内容の定着をはかる。
14	総括	レポート課題をもとに受講生の学修到達度をはかり，講義内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、１回につきそれぞれ２時間以上を標準とします。
参考書にあげた専門書や担当教員の論文等を事前に読み，関連知識を深めてください。また，講義後には関連研究やインターネットなどを通じて理解しにくかった基礎的部分を解消するように努めてください。

【テキスト（教科書）】
テキストは使用しないが，担当教員が作成した資料を配布。

【参考書】
岩田修二『氷河地形学』東京大学出版会，2011年
岩田修二『統合自然地理学』東京大学出版会，2018年
遠藤邦彦・山川修治・藁谷哲也編著『極圏・雪氷圏と地球環境』二宮書店，2010年
大塚友美編著，藁谷哲也 [ほか] 著『人類の歩み（21世紀の分岐点）』文眞堂，2017年
貝塚爽平『発達史地形学』東京大学出版会，1998年
鈴木隆介『建設技術者のための地形図読図入門－第１～４巻－』古今書院,1997年
松倉公憲『地形学』二宮書店，2021年
藁谷哲也編『カンボジア研究』文眞堂，2019年
久保純子『東京の自然史を歩く』創元社，2026年
その他，講義の際に紹介する．

【成績評価の方法と基準】
レポートに加え，意見や質問などの授業参画度，理解度を考慮し総合的に評価する：討論参加20%，プレゼンテーション30%，レポート課題50%

【学生の意見等からの気づき】
大学院は，学問のすそ野や視野を広げるところでもあります。自分の専門にこだわらず，様々な知識を獲得して自身の研究に活かすようにしてください。

【学生が準備すべき機器他】
予習・復習に関わる参考ウェブサイトの提示や，課題提出等のために学習支援システム等を利用する。
対面授業では，プロジェクターを利用するため，貸与パソコンを教室に準備する。

【その他の重要事項】
質疑応答は教室で行います。また，学習支援システムの掲示板やメールも利用しますが，すぐに返事ができない場合もありますのでご了承ください。

【担当教員の専門領域】
地形学，岩石風化

【研究テーマ】
1. 岩石の風化と風化プロセスに関する研究
2. カンボジア・アンコール遺跡を構成する石材の風化特性に関する研究
3. パキスタン・カラコラム山脈に発達する氷河の変動に関する研究
4. オーストラリア大陸の地形と風化プロセス研究

【主要研究業績】
1. 衛星画像及びDEMを用いたカラコラム山脈フンザ川流域の氷河台帳と氷河分布図. 地図，V51(3), 1－ 16 (2013)
2.「極圏・雪氷圏と地球環境」朝倉書店（2010）
3. 2010年1月にパキスタン北部・アタバードで発生した巨大崩壊と堰止湖の拡大. 地学雑誌，V120, 993-1002（2011）
4. Influence of thermal cycling in the mild temperature range on the physical properties of cultural stones. Journal of Cultural Heritage, V59, 171－ 180 (2023)
5. ピルバラ紀行. E-journal GEO, V18(1), 82-91(2023)
6. Impact of tree canopy cover on the local thermal environments at the Angkor temples of Cambodia，Scientific Reports，doi.org/10.1038/s41598-025-07695-y. (2025)

【Outline (in English)】
Course outline: This course introduces the Quaternary environment and its changes that are extremely relevant to human evolution and the formation of natural environment. Students recognize that the components of the natural environment are interconnected, and understand that an integrated perspective is important for understanding geological phenomena.
Learning Objectives: By the end of the course, students should be able to gain knowledge of the natural environment, such as climate change, landforms, geology, and glaciers.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy: Final grade will be calculated according to the following process; presentations of the research project (30 %), a term-end report(50 %), and in-class contribution (20 %).

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

人文地理学研究 I

甲斐　智大

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会経済地理学のテキストを輪読しながら、社会経済地理学ならではのものの見方や考え方を身につけることを目指します。そのうえで、地方創生に関わるさまざまな施策や既存研究を、複数の視点から理解できるようになることを目的とします。

【到達目標】
社会経済地理学の基本的な概念を理解することができる。
地方創生に関わるさまざまな施策や既存研究について批判的に評価できる。
学術的な概念を、現実の社会や地域の事例と結びつけて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。前半はテキストの輪読を行い、後半は関連する研究をもとに、地方創生施策に関するデスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	社会経済地理学に関する基本的な概念を紹介する。
第2回	テキスト第１章	戦後日本の地域構造・都市構造と再生産についての報告とディスカッション
第3回	テキスト第２章	ポスト拡大・成長社会における労働市場の地理的多様性についての報告とディスカッション
第4回	テキスト第３章	若者のライフコースからみた大都市圏と地方圏をめぐる地域格差についての報告とディスカッション
第5回	テキスト第４章	「地方創生」の目的論についての報告とディスカッション
第6回	テキスト第５章	政治経済学的人口地理学の可能性についての報告とディスカッション
第7回	テキスト第６章	融けない氷河：「就職氷河期世代」についての報告とディスカッション
第8回	テキスト第７章	再生産の困難性，再生産と主体性についての報告とディスカッション
第9回	テキスト終章	資本主義の危機としての少子化についての報告とディスカッション
第10回	文献の探し方	地理学に関する論文の種類について解説する
第11回	関連する論文の報告	地方創生施策に関する論文についての報告とディスカッション
第12回	関連する論文の報告	地方創生施策に関する論文についての報告とディスカッション
第13回	関連する論文の報告	地方創生施策に関する論文についての報告とディスカッション
第14回	最終報告	本講義での活用した概念と受講生の研究の結びつきについての報告とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業前、テキストの該当箇所を読んでいることを前提とします。
初出の概念などについては、事前に関連研究などに基づいて自分なりに理解していることを求めます。

【テキスト（教科書）】
「ポスト拡大・成長の 経済地理学へー地方創生・少子化・地域構造」、中澤高志、旬報社、2024年、2640円

【参考書】
各授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
発表：50％、討論：50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞社会経済地理学
＜研究テーマ＞地域労働市場と地域政策に関する地理学的研究
＜主要研究業績＞
・特定地域づくり事業協同組合による労働力確保のメカニズム 地理学評論 98(6) 339-362 2025年
・東京都における保育所の経営主体からみた保育労働市場の特性-新卒保育士の採用を中心に-
地理学評論 93(2) 2020年
・「ヤンキー」であること／「ヤンキー」を制御すること――福岡県筑後地区における不良文化と地方都市 2024年日本地理学会秋季学術大会 「都市地理学研究グループ」報告（甲斐智大 林凌）

【Outline (in English)】
Through reading and discussion of socio-economic geography texts, this course helps students develop ways of thinking specific to socio-economic geography.　It also aims to enable students to examine local revitalization policies and related research from a variety of perspectives.The standard preparation and review time for this course is 2 hours each.
Students are expected to have read the relevant sections of the textbook before each class.For concepts appearing for the first time, students are required to develop their own understanding in advance based on related research and literature.Grading will be based on the following criteria: presentation: 50%, discussion: 50%.

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

人文地理学研究 II

甲斐　智大

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会経済地理学のテキストを輪読しながら、社会経済地理学ならではのものの見方や考え方を身につけることを目指します。そのうえで、国土政策・地域政策に関する既存研究を、複数の視点から理解できるようになることを目的とします。

【到達目標】
社会経済地理学の基本的な概念を理解することができる。
国土政策・地域政策に関する既存研究について批判的に検討できる。
学術的な概念を、現実の社会や地域の事例と結びつけて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。
前半はテキストの輪読を行い、後半は関連する研究をもとに、国土政策・地域政策に関するデスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	社会経済地理学に関する基本的な概念を紹介する。
第2回	テキスト第１章	新産業都市・大分の60年間 ― 経済・社会・土地利用についての報告とディスカッション
第3回	テキスト第２章	郊外団地の広がりと高齢化についての報告とディスカッション
第4回	テキスト第３章	商業集積の変動と駅周辺再開発のゆくえについての報告とディスカッション
第5回	テキスト第４章	郊外農村における安定兼業の広がりと変容についての報告とディスカッション
第6回	テキスト第５章	女性の働き方と保育の変動　についての報告とディスカッション
第7回	テキスト第６章	福祉雇用の役割とその拡大についての報告とディスカッション
第8回	テキスト第７章	中等教育改革と地理的影響についての報告とディスカッション
第9回	テキスト第８章	生活インフラとしての水道事業の展開と更新についての報告とディスカッション
第10回	テキスト第９章	スタジアム開発とプロスポーツクラブ経営についての報告とディスカッション
第11回	テキスト第１０章	大学の地域的役割とその変質についての報告とディスカッション
第12回	関連する論文の報告	国土政策・地域政策に関する文献についての報告とディスカッション
第13回	関連する論文の報告	国土政策・地域政策に関する文献についての報告についての報告とディスカッション
第14回	最終報告	本講義での活用した概念と受講生の研究の結びつきについての報告とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業前、テキストの該当箇所を読んでいることを前提とします。
初出の概念などについては、事前に関連研究などに基づいて自分なりに理解していることを求めます。

【テキスト（教科書）】
地方都市を読む――「新産業都市」大分の60年　2026年8月刊行予定

【参考書】
各授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
発表：50％、討論：50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞社会経済地理学
＜研究テーマ＞地域労働市場と地域政策に関する地理学的研究
＜主要研究業績＞
・特定地域づくり事業協同組合による労働力確保のメカニズム 地理学評論 98(6) 339-362 2025年
・東京都における保育所の経営主体からみた保育労働市場の特性-新卒保育士の採用を中心に-
地理学評論 93(2) 2020年
・「ヤンキー」であること／「ヤンキー」を制御すること――福岡県筑後地区における不良文化と地方都市 2024年日本地理学会秋季学術大会 「都市地理学研究グループ」報告（甲斐智大 林凌）

【Outline (in English)】
Through reading and discussion of socio-economic geography texts, this course helps students develop socio-economic geographical perspectives. It also aims to enable students to examine existing studies on regional and national spatial policies from a variety of perspectives.
The standard preparation and review time for this course is 2 hours each. Students are expected to have read the relevant sections of the textbook before each class. For concepts appearing for the first time, students are required to develop their own understanding in advance based on related research and literature. Grading will be based on the following criteria: presentation: 50%, discussion: 50%.

HUG600B5（人文地理学 / Human geography 600）

人文地理学演習 I

甲斐　智大

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
修士論文の執筆に向けて社会経済地理学の論文執筆方法を学びます。

【到達目標】
社会経済地理学の論文構成を理解する
社会経済地理学の研究計画を作成し、調査計画を検討する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
テキストとその元となった論文を輪読し、当該論文の調査計画書を再現する。
そのうえで、自身の研究計画書を作成し、調査計画について検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	地理学の論文の読み方
第2回	第１章	都市の地域調査についての報告とディスカッション
第3回	第２章	農業の地域調査についての報告とディスカッション
第4回	第３章	漁業の地域調査についての報告とディスカッション
第5回	第４章	工業の地域調査についての報告とディスカッション
第6回	第５章	観光の地域調査についての報告とディスカッション
第7回	第６章	労働の地域調査についての報告とディスカッション
第8回	第７章	文化・社会の地域調査についての報告とディスカッション
第9回	第８章	コミュニティの地域調査についての報告とディスカッション
第10回	第９章	ジェンダーをめぐる地域調査についての報告とディスカッション
第11回	第１０章	エスニシティをめぐる地域調査についての報告とディスカッション
第12回	問と研究目的の作成	受講生の研究テーマに合わせて問と研究目的についてディスカッションを行う
第13回	調査結果と考察	受講生の研究テーマに合わせて予想される調査結果と考察の視点についてディスカッションを行う
第14回	研究計画・調査計画の報告	受講生の研究計画についてディスカッションを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『地域調査のはじめかた 分野編』 2026年　3月出版予定

【参考書】
特に指定しない

【成績評価の方法と基準】
報告・ディスカッション　50％
研究計画　50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【その他の重要事項】
受講生の学年や修論の進捗状況によって授業内容を変更する場合がある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞社会経済地理学
＜研究テーマ＞地域労働市場と地域政策に関する地理学的研究
＜主要研究業績＞
・特定地域づくり事業協同組合による労働力確保のメカニズム 地理学評論 98(6) 339-362 2025年
・東京都における保育所の経営主体からみた保育労働市場の特性-新卒保育士の採用を中心に-
地理学評論 93(2) 2020年
・「ヤンキー」であること／「ヤンキー」を制御すること――福岡県筑後地区における不良文化と地方都市 2024年日本地理学会秋季学術大会 「都市地理学研究グループ」報告（甲斐智大 林凌）

【Outline (in English)】
This course teaches methods of academic writing in socio-economic geography in preparation for writing a master's thesis.
The standard preparation and review time for this course is 4 hours each. Grading will be based on the following criteria: report and discussion: 50%, research proposal: 50%.

HUG600B5（人文地理学 / Human geography 600）

人文地理学演習 II

甲斐　智大

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
修士論文の執筆に向けて社会経済地理学の論文執筆方法を学びます。

【到達目標】
既存研究を整理し、研究の位置付けを明確にする。
調査結果と既存研究をもとに、研究結果の考察を試みる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生自身の研究に関する文献をもとに、研究目的の位置付けについての報告とディスカッションを行う。さらに、既存研究を参考にしながら、受講生の調査結果をもとにした考察を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	査読論文における序章の意味
第2回	序章の作成	関連研究の報告
第3回	序章の作成	関連研究の課題の検討
第4回	序章の作成	受講生の研究の社会的意義の導出
第5回	調査結果の整理	夏までに実施した調査結果の報告
第6回	考察の方向性についての検討	既存研究を参照し考察の方向性を報告する
第7回	実施した考察結果についての検討	自身の調査結果に基づく考察の結果を報告する
第8回	考察から導出される結論についての検討	導出された結論について報告する
第9回	アカデミックライティングについて	提出された原稿についての検討を行う（1章）
第10回	アカデミックライティングについて	提出された原稿についての再検討を行う（2章）
第11回	アカデミックライティングについて	提出された原稿についての再検討を行う（3章）
第12回	アカデミックライティングについて	提出された原稿についての再検討を行う（4章）
第13回	アカデミックライティングについて	提出された原稿についての再検討を行う（5章）
第14回	次年度の研究計画の報告	作成された原稿を踏まえて、次年度の研究計画について検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない

【参考書】
特に指定しない

【成績評価の方法と基準】
報告・ディスカッション　50％
研究論文の完成度　50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【その他の重要事項】
受講生の学年や修論の進捗状況によって授業内容を変更する場合がある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞社会経済地理学
＜研究テーマ＞地域労働市場と地域政策に関する地理学的研究
＜主要研究業績＞
・特定地域づくり事業協同組合による労働力確保のメカニズム 地理学評論 98(6) 339-362 2025年
・東京都における保育所の経営主体からみた保育労働市場の特性-新卒保育士の採用を中心に-
地理学評論 93(2) 2020年
・「ヤンキー」であること／「ヤンキー」を制御すること――福岡県筑後地区における不良文化と地方都市 2024年日本地理学会秋季学術大会 「都市地理学研究グループ」報告（甲斐智大 林凌）

【Outline (in English)】
This course teaches methods of academic writing in socio-economic geography in preparation for writing a master's thesis.
The standard preparation and review time for this course is 4 hours each. Grading will be based on the following criteria: report and discussion: 50%, quality of research paper: 50%.

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

社会経済地理学研究Ⅰ

伊藤　達也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　経済地理学の基本的な方法論、研究分野の書かれたテキストを読み、発表することによって、経済地理学的な方法についての深い理解を目指します。具体的には経済地理学の目標、理論、方法論、研究アプローチを取得し、自らの研究遂行時にそれらを使うことができるようにします。

【到達目標】
　経済地理学に関する知識の蓄積、思考力、解決能力のアップを目指します。具体的にはテキストの内容を適切に理解すること、テキストの内容を適切にまとめること、テキストの内容を適切に発表すること、その上でテキストを通じてより広く経済地理学の専門内容を理解すること、そして、自らの研究テーマに関わらせて、それをより深めることをテーマとします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。さらに受講生の関心領域、研究テーマと関係した論文や著書の紹介等を通じて、授業内容の深化に努めます。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	授業方針の決定
第2回	テキスト「序章」	「序章　環境・空間と経済社会」の報告と討論
第3回	テキスト「第１章」	「第１章　経済立地の理論」の報告と討論
第4回	テキスト「第２章」	「第２章　地域経済の発展のメカニズム」の報告と討論
第5回	テキスト「第３章」	「第３章　サービス経済化と広がる地域間格差」の報告と討論
第6回	テキスト「第４章」	「第４章　人々のキャリアと経済空間」の報告と討論
第7回	テキスト「第５章」	「第５章　経済のグローバル化と産業立地・地域経済」の報告と討論
第8回	テキスト「第６章」	「第６章　サプライチェーンと南北問題」の報告と討論
第9回	テキスト「第７章」	「第７章　経済を左右する地域の制度と文化」の報告と討論
第10回	テキスト「第８章」	「第８章　都市の発展が生むインナーシティ問題」の報告と討論
第11回	テキスト「第９章」	「第９章　グローバル化時代の都市と都市ネットワーク」の報告と討論
第12回	テキスト「第10章」	「第10章　地域のなかでのものづくり」の報告と討論
第13回	テキスト「第11章」	「第11章　工業で変わる新興国」の報告と討論
第14回	まとめ	まとめ　授業において得たもの、得られなかったものの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
　授業前、テキストの該当箇所を読んでくることはもちろん、該当箇所のテーマに沿った論文や本を読み、理解をより深める努力をします。
　授業後、関連文献を読むことによって、自らの知識を高めます。

【テキスト（教科書）】
　伊藤・小田・加藤編著（2020）『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房

【参考書】
　山崎　朗ほか著（2022）『地域政策第2版』中央経済社

【成績評価の方法と基準】
　発表：50％、討論：50％
　十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】
　丁寧な議論に努めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　経済地理学、水資源研究
＜研究テーマ＞　水資源問題、河童による地域振興
＜主要研究業績＞
1．伊藤達也「ダム建設が止まらない－石木ダム計画のウソと詐欺－」法政大学文学部紀要　92　2026
2．伊藤達也「遠野市観光におけるカッパの果たす役割（1）（2）」法政大学文学部紀要　90、91　2025
3．蔵治光一郎編『長良川のアユと河口堰　気候危機時代の川と人間』農山漁村文化協会　2024
4．伊藤達也・梶原健嗣『長良川河口堰と八ッ場ダムを歩く』成文堂　2023
5．伊藤達也『水資源問題の地理学』原書房　2023

【Outline (in English)】
（Course outline）　I aim at deep understanding about economic geography by reading and releasing the text on which basic methodology and research field of economic geography are written.
（Learning Objectives）A target, theory, methodology and research approach of economic geography are acquired and makes sure that it'll be possible to use those at the time of the study execution.
（Learning activities outside of classroom）Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each.In addition to reading the relevant parts of the text before class, we will make efforts to deepen our understanding by reading papers and books according to the theme of the relevant part.After class, students improve their knowledge by reading related literature.
（Grading Criteria /Policy）Presentation: 50%, Debate: 50%
　Sufficient preparation is a major prerequisite. The question and the clarification of the issues are highly evaluated, and it is desirable to carefully separate simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

社会経済地理学研究 II

伊藤　達也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　経済地理学の水資源問題について書かれたテキストを読み、発表することによって、経済地理学の資源論分野についての深い理解を目指します。

【到達目標】
　水資源論に関する知識の蓄積、思考力のアップを目指します。具体的にはテキストの内容を適切に理解すること、テキストの内容を適切にまとめること、テキストの内容を適切に発表すること、その上でテキストを通じてより広く水資源論の専門内容を理解し、より深めることをテーマとします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。さらにテキストと関係した論文や著書の紹介等を通じて、授業内容の深化に努めます。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	授業方針の決定
第2回	テキスト「第１章」	「第1章　環境問題の捉え方」の報告と討論
第3回	テキスト「第２章」	「第２章　環境の中の水資源」の報告と討論
第4回	テキスト「第３章」	「第３章　水資源利用の変遷」の報告と討論
第5回	テキスト「第４章」	「第４章　水資源開発の論理と環境問題の発生」の報告と討論
第6回	テキスト「第５章」	「第５章　ダム・河口堰をめぐる全国の動き」の報告と討論
第7回	テキスト「第６章」	「第６章　公共事業をめぐる状況と住民運動」の報告と討論
第8回	テキスト「第７章」	「第７章　利根川の利水問題」の報告と討論
第9回	テキスト「第８章」	「第８章　長良川河口堰の開門を目指す動き」の報告と討論
第10回	テキスト「第12、13章」	「第12章　ダムと山村、第13章　山村地域への還元策」の報告と討論
第11回	テキスト「第14、15章」	「第14章　脱ダム下における五木村の地域再生、第15章　脱ダムにかけた五木村村民の意識」の報告と討論
第12回	テキスト「第16章」	「第16章　ダムと環境保全について考える」の報告と討論
第13回	テキスト「終章」	「終章　水資源政策を展望する」の報告と討論
第14回	まとめ	まとめ　授業において得たもの、得られなかったものの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
　授業前、テキストの該当箇所を読んでくることはもちろん、該当箇所のテーマに沿った論文や本を読み、理解をより深める努力をします。
　授業後、関連文献を読むことによって、自らの知識を高めます。

【テキスト（教科書）】
　伊藤達也『水資源問題の地理学』原書房　2023年

【参考書】
伊藤達也・梶原健嗣『長良川河口堰と八ッ場ダムを歩く』成文堂　2023年
蔵治光一郎編『長良川のアユと河口堰』農文協　2024年

【成績評価の方法と基準】
　発表：50％、討論：50％
　十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】
　丁寧な議論に努めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　経済地理学、水資源研究
＜研究テーマ＞　水資源問題、河童による地域振興
＜主要研究業績＞
1．伊藤達也「ダム建設が止まらない－石木ダム計画のウソと詐欺－」法政大学文学部紀要　92　2026
2．伊藤達也「遠野市観光におけるカッパの果たす役割（1）（2）」法政大学文学部紀要　90、91　2025
3．蔵治光一郎編『長良川のアユと河口堰　気候危機時代の川と人間』農山漁村文化協会　2024
4．伊藤達也・梶原健嗣『長良川河口堰と八ッ場ダムを歩く』成文堂　2023
5．伊藤達也『水資源問題の地理学』原書房　2023

【Outline (in English)】
（Course outline）　I aim at deep understanding about water resource problems in Japan by reading and releasing the text.
（Learning Objectives）A target, theory, methodology and research approach of water resource problems in Japan are acquired.
（Learning activities outside of classroom）Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each.In addition to reading the relevant parts of the text before class, we will make efforts to deepen our understanding by reading papers and books according to the theme of the relevant part.After class, students improve their knowledge by reading related literature.
（Grading Criteria /Policy）Presentation: 50%, Debate: 50%
　Sufficient preparation is a major prerequisite. The question and the clarification of the issues are highly evaluated, and it is desirable to carefully separate simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

HUG600B5（人文地理学 / Human geography 600）

社会経済地理学演習Ⅰ

小原　丈明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では，受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し，それら報告に基づいて討論をすることで，各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また，受講生自身の研究を進めるだけでなく，他者の報告を聞き，討論を行うことを通じて，社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】
本授業を通じて，受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに，社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また，適宜，各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し，その課題について検討を行います。
また，本授業は演習（ゼミナール）形式ですので，課題等のフィードバックは適宜行います。
なお，今年度，本授業は対面形式で行いますが，場合によってはZoomによるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミガイダンス	ゼミ概要の説明／方針の決定
第2回	研究テーマの発表	全受講生による発表
第3回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第7回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第11回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第14回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は，各回4時間を標準とします。
しかし，自らの研究課題に対しての発表準備をしっかり行うことが求められ，また，適宜，授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので，授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】
テキストは使用しません。

【参考書】
各担当者の発表や討論に関連する文献については，適宜，授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
発表内容：50％，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり，問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また，討論については，疑問点・問題点を整理しつつ，論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】
討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】
秋学期開講の「社会経済地理学演習Ⅱ」／「国際日本学演習Ⅱ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞
都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline (in English)】
The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make a presentation and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.
Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 4 hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50％).

HUG600B5（人文地理学 / Human geography 600）

社会経済地理学演習 II

小原　丈明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では，受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し，それら報告に基づいて討論をすることで，各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また，受講生自身の研究を進めるだけでなく，他者の報告を聞き，討論を行うことを通じて，社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】
本授業を通じて，受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに，社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また，適宜，各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し，その課題について検討を行います。
また，本授業は演習（ゼミナール）形式ですので，課題等のフィードバックは適宜行います。
なお，今年度，本授業は基本的には対面形式で行いますが，場合によっては，Zoomによるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの発表	全受講生による研究の進捗状況の報告
第2回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第3回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第7回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第11回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答
第14回	総合討論	まとめ／包括的な討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は，各回4時間を標準とします。
しかし，自らの研究課題に対しての発表準備をしっかり行うことが求められ，また，適宜，授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので，授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】
テキストは使用しません。

【参考書】
各担当者の発表や討論に関連する文献については，適宜，授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
発表内容：50％，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり，問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また，討論については，疑問点・問題点を整理しつつ，論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】
討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】
春学期開講の「社会経済地理学演習Ⅰ」／「国際日本学演習Ⅰ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞
都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline (in English)】
The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make a presentation and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.
Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 4 hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50％).

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

文化地理学研究 I

村田　陽平

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代の文化地理学の概要について学ぶ。基本的には、指示するテキストの講読という形で、1980年代以降大きな変貌を遂げた「新しい」文化地理学の内容を知り、その批判的受容につとめることを目的とする。

【到達目標】
古典的なイメージをもたれがちな文化地理学が、近年どのように装いを新たにしてきているかを概観し、そこから自分なりの問題意識をもってテーマを立てられるようになることを目指したい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み、授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。課題等の提出・フィードバックは対面で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキストの各章をみて、あらましを把握する
第2回	テキスト第1章を読む①	文化地理学と建築①
第3回	テキスト第1章を読む②	文化地理学と建築②
第4回	テキスト第2章を読む①	文化地理学とジェンダー①
第5回	テキスト第2章を読む②	文化地理学とジェンダー②
第6回	テキスト第3章を読む	文化地理学とシングル
第7回	テキスト第4章を読む①	文化地理学とポリティクス①
第8回	テキスト第4章を読む①	文化地理学とポリティクス②
第9回	テキスト第5章を読む②	文化地理学とLGBTQ①
第10回	テキスト第5章を読む①	文化地理学とLGBTQ②
第11回	テキスト第6章を読む①	文化地理学とタバコ広告①
第12回	テキスト第6章を読む②	文化地理学とタバコ広告②
第13回	テキスト第7章を読む①	文化地理学と現象学①
第14回	テキスト第7章を読む②	文化地理学と現象学②

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前にテキストの担当部分を詳しく読んで、自分の疑問点や問題点を析出しておくこと。

【テキスト（教科書）】
村田陽平(2009)：『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』（京都大学学術出版会）を用いる。

【参考書】
上記テキスト各章末にあげられている参考文献を適宜利用する。

【成績評価の方法と基準】
口頭の発表時の準備状況と問題設定(50%)、授業時の議論の内容(50%)を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化地理学
＜研究テーマ＞健康の地理学、感情の地理学、空間の男性学
＜主要研究業績＞
村田陽平（2009）『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会
村田陽平（2012）『受動喫煙の環境学：健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社

【Outline (in English)】
This seminar is on Human Geography, especially on Social and Cultural Geography. The aims and goals of this seminar are to comprehend and present and discuss about contents of selected texts . In addition, for students who must write a graduation thesis can get some practical supports. Grading will be decided based on in-class contribution.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Judgment and evaluation will be made by taking into consideration the state of preparation and problem setting at the time of oral presentation (50%), and the content of discussion during class (50%).

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

文化地理学研究 II

村田　陽平

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代の文化地理学の概要について学ぶ。基本的には、指示するテキストの講読という形で、1980年代以降大きな変貌を遂げた「新しい」文化地理学の内容を知り、その批判的受容につとめることを目的とする。

【到達目標】
新しい文化地理学についての知識を得るとともに、それを基軸にして地球大の人間の生活空間を認識する視点を獲得することを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み,授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。課題等の提出・フィードバックは対面で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の目的の確認
第2回	序章	読解と発表,議論①
第3回	テキスト第1章	読解と発表,議論②
第4回	テキスト第2章①	読解と発表,議論③
第5回	テキスト第2章②	読解と発表,議論④
第6回	テキスト第3章	読解と発表,議論⑤
第7回	テキスト第4章①	読解と発表,議論⑥
第8回	テキスト第4章②	読解と発表,議論⑦
第9回	テキスト第5章①	読解と発表,議論⑧
第10回	テキスト第5章②	読解と発表,議論⑨
第11回	テキスト第6章	読解と発表,議論⑩
第12回	テキスト第7章①	読解と発表,議論⑪
第13回	テキスト第7章②	読解と発表,議論⑫
第14回	テキスト終章	読解と発表,議論⑬

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前の文献読み込みが必須である。それをもとに授業で不明な個所などを読み解き理解してゆく。

【テキスト（教科書）】
村田陽平（2012）『受動喫煙の環境学：健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社

【参考書】
特に指定はしない。

【成績評価の方法と基準】
口頭の発表時の準備状況と問題設定(50%)、授業時の議論の内容(50%)を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化地理学
＜研究テーマ＞健康の地理学、感情の地理学、空間の男性学
＜主要研究業績＞
村田陽平（2009）『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会
村田陽平（2012）『受動喫煙の環境学：健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社

【Outline (in English)】
This seminar is on Human Geography, especially on Social and Cultural Geography. The aims and goals of this seminar are to comprehend and present and discuss about contents of selected texts . In addition, for students who must write a graduation thesis can get some practical supports. Grading will be decided based on in-class contribution.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Judgment and evaluation will be made by taking into consideration the state of preparation and problem setting at the time of oral presentation (50%), and the content of discussion during class (50%).

HUG600B5（人文地理学 / Human geography 600）

文化地理学演習 I

村田　陽平

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、文化地理学に包含される論題を用意した受講生が、修士論文を完成させるための、①テーマの設定とそれを練り上げる作業、②練り上げたテーマに沿った調査研究の実施状況を報告し、他の受講生と議論を交わす中間発表、③最終的な論文完成に向かっての論点の整理、といった過程を進めるためのものである。

【到達目標】
春学期に行なわれるこの授業では、上記概要の①および②を中心に進め、執筆する修士論文の概略を固めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
論題を抱えた受講生の発表と、それに対する討論を中心にして、授業を進めてゆく。課題等の提出・フィードバックは対面で行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業方針の説明と各受講生の修士論文作成スケジュールの確認
第2回	論題の表明	全受講生による方針の発表
第3回	論題の確立	受講生相互で議論し、論題を確定させる
第4回	研究内容の報告①	各受講生の発表と質疑応答①
第5回	研究内容の報告②	各受講生の発表と質疑応②
第6回	研究内容の報告③	各受講生の発表と質疑応③
第7回	研究内容の報告④	各受講生の発表と質疑応④
第8回	研究内容の報告⑤	各受講生の発表と質疑応⑤
第9回	研究内容の報告⑥	各受講生の発表と質疑応⑥
第10回	研究内容の報告⑦	各受講生の発表と質疑応⑦
第11回	研究内容の報告⑧	各受講生の発表と質疑応⑧
第12回	研究内容の報告⑨	各受講生の発表と質疑応⑨
第13回	研究内容の報告⑩	各受講生の発表と質疑応⑩
第14回	全体的整理	全体的整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
各自の発表時に与えられた指摘やコメントに対して、誠実かつ主体的に対処し、次回の発表に備えること。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
さまざまな「論文の書き方」についてのマニュアルなどを適宜活用してほしい。

【成績評価の方法と基準】
口頭の発表時の準備状況と問題設定(50%)、授業時の議論の内容(50%)を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化地理学
＜研究テーマ＞健康の地理学、感情の地理学、空間の男性学
＜主要研究業績＞
村田陽平（2009）『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会
村田陽平（2012）『受動喫煙の環境学：健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社

【Outline (in English)】
This seminar is on Human Geography, especially on Social and Cultural Geography. The aims and goals of this seminar are to comprehend and present and discuss about contents of selected texts . In addition, for students who must write a graduation thesis can get some practical supports. Grading will be decided based on in-class contribution.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Judgment and evaluation will be made by taking into consideration the state of preparation and problem setting at the time of oral presentation (50%), and the content of discussion during class (50%).

HUG600B5（人文地理学 / Human geography 600）

文化地理学演習 II

村田　陽平

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、文化地理学に包含される論題を用意した受講生が、修士論文を完成させるための、①テーマの設定とそれを練り上げる作業、②練り上げたテーマに沿った調査研究の実施状況を報告し、他の受講生と議論を交わす中間発表、③最終的な論文完成に向かっての論点の整理、といった過程を進めるためのものである。

【到達目標】
秋学期に行なわれるこの授業では、上記概要の②および③を中心に進め、執筆する修士論文の概略を固めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
論題を抱えた受講生の発表と、それに対する討論を中心にして、授業を進めてゆく。課題等の提出・フィードバックは対面で行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の説明と各受講生の論文作成スケジュールの確認
第2回	研究内容の報告①	受講生の発表と質疑①
第3回	研究内容の報告②	受講生の発表と質疑②
第4回	研究内容の報告③	受講生の発表と質疑③
第5回	研究内容の報告④	受講生の発表と質疑④
第6回	研究内容の報告⑤	受講生の発表と質疑⑤
第7回	研究内容の報告⑥	受講生の発表と質疑⑥
第8回	研究内容の報告⑦	受講生の発表と質疑⑦
第9回	研究内容の報告⑧	受講生の発表と質疑⑧
第10回	研究内容の報告⑨	受講生の発表と質疑⑨
第11回	研究内容の報告⑩	受講生の発表と質疑⑩
第12回	研究内容の報告⑪	受講生の発表と質疑⑪
第13回	最終執筆指導①	論文内容の相互チェックと形式的整理ー全体的検討
第14回	最終執筆指導②	論文内容の相互チェックと形式的整理ー最終的整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
各自の発表時に与えられた指摘やコメントに対して、誠実かつ主体的に対処し、次回の発表に備えること。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
さまざまな「論文作成のためのマニュアル」類を適宜活用してほしい。ただし、マニュアルはそれをなぞるためにあるのではなく、精神をくみ取ることが大切である。

【成績評価の方法と基準】
発表のしかたとその内容(50%)および質疑応答への内容(50%)とを評価対象とする。自分の関心を他者に的確に説明し、その学問的意義を主張できることが重要である。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化地理学
＜研究テーマ＞健康の地理学、感情の地理学、空間の男性学
＜主要研究業績＞
村田陽平（2009）『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会
村田陽平（2012）『受動喫煙の環境学：健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社

【Outline (in English)】
This seminar is on Human Geography, especially on Social and Cultural Geography. The aims and goals of this seminar are to comprehend and present and discuss about contents of selected texts . In addition, for students who must write a graduation thesis can get some practical supports. Grading will be decided based on in-class contribution.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Judgment and evaluation will be made by taking into consideration the state of preparation and problem setting at the time of oral presentation (50%), and the content of discussion during class (50%).

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

地域社会論研究Ⅰ

佐々木　達

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本農業の構造問題を，多面的に学習します。農産物市場，労働市場，農地市場の3つの枠組みから農業地域を分析するフレームワークを学習します。

【到達目標】
日本農業をめぐる現状は，農産物純輸入額世界第1位，労働力不足と高齢化，農地面積の絶対的減少と課題が山積しています。さらに，これらの現象が一律一様に進んでいるのではなく，複雑な地域性を伴っています。この授業では，最新のテキストを取り上げて，日本農業が抱えている構造的問題を把握するとともに，各自の研究課題を設定できるように学習していきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
テキストを読み，それを踏まえて受講生による報告と討議を中心にして授業を進めていきます。また，授業開始時には，「週刊経済報告」と題して，一週間の新聞記事から議論したい記事をピックアップして報告します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介，文献紹介，担当者の決定
第2回	日本農業の構造問題①	食料自給率について
第3回	日本農業の構造問題②	主産地形成論について
第4回	日本農業の構造問題③	農産物市場論について
第5回	日本農業の構造問題④	フードシステム論について
第6回	日本農業の構造問題⑤	アグリビジネスについて
第7回	各自の研究テーマの報告	自分が取り上げたい農業・農村問題のテーマ報告
第8回	日本農業の構造問題⑥	地域労働市場論について
第9回	日本農業の構造問題⑦	兼業農家について
第10回	日本農業の構造問題⑧	労働力の過剰と不足
第11回	日本農業の構造問題⑨	地代論について
第12回	日本農業の構造問題⑩	農地の所有と利用について
第13回	各自の研究テーマの報告	修士論文の構想発表
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。読むべき文献を事前に配布もしくは指示します。それを各自が読むことを前提にして発表、討論していきます。授業の冒頭10分間を利用した「週刊経済報告」のために，日本経済新聞を毎日読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】
取り上げるテキストを事前に指示します。

【参考書】
伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編著（2020）『経済地理学への招待』，ミネルヴァ書房

【成績評価の方法と基準】
発表50％，討論50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
特にありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
経済地理学，農業地理学
＜研究テーマ＞
日本経済と農業問題の地理学
＜主要研究業績＞
佐々木達ほか（2020）「生産調整以降における稲作農業の地域性」
佐々木達ほか（2021）「東北地方における農家の世代交代と労働力利用の再編成」

【Outline (in English)】
【Course outline】 In this lecture, we will study the structural problems of Japanese agriculture from multiple perspectives.
【Learning Objectives】 Understand the structural problems of Japanese agriculture, and learn so that you can set your own research themes.
【Learning activities outside of classroom】
Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy)】: Your overall grade in the class will be decided based on the following Presentation and Discussion: 50%, in class contribution: 50%

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

地域社会論研究 II

佐々木　達

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　日本経済が変化する中で，農業・農村はどのような変貌を遂げてきたのかを振り返りながら，現代的課題について取り上げることで，批判的思考を獲得することを狙いとします。

【到達目標】
①日本農業・農村が日本経済の展開において果たし役割を捉えることができる
②農業・農村の現代的課題について取り上げることができる
③世界経済の中で日本農業が進む方向性を見通すことができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
テキストを読み、それを踏まえて受講生による報告と討議を中心にして授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	テキスト紹介，自己紹介，報告者の決定
第2回	戦前期の日本経済	米と繭の経済構造
第3回	戦後復興期の日本経済	農地改革
第4回	高度経済成長期①	農業基本法農政
第5回	高度経済成長期②	農業構造の変貌
第6回	高度経済成長期③	減反政策とその影響
第7回	高度経済成長期④	農村社会・生活の変貌
第8回	安定成長期	兼業農家と出稼ぎ
第9回	低成長期①	コメ流通の多様化
第10回	低成長期②	食料消費構造の多様化
第11回	低成長期③	農家の世代交代と労働力利用
第12回	国際化と日本経済	地方消滅論
第13回	国際化と日本経済	食料供給体制の見直し
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業の冒頭10分間を利用した「週刊経済報告」のために，日本経済新聞を毎日読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】
テキストは決まり次第，事前に指示します。

【参考書】
授業中に適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
発表50％，討論50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
特にありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムを利用する予定です。

【その他の重要事項】
授業は対面での実施を予定していますが，状況によってはオンラインに変更する場合があります。その際には，事前に連絡します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
経済地理学，農業地理学
＜研究テーマ＞
東北農業論，日本経済の地域構造
＜主要研究業績＞
佐々木達ほか（2020）「生産調整以降における稲作農業の地域性」
佐々木達ほか（2021）「東北地方における農家の世代交代と労働力利用の再編成」

【Outline (in English)】
【Course outline 】In this lecture, we will learn about the impact of structural changes in the Japanese economy on agriculture and rural areas.
【Learning Objectives】 The aim is to acquire critical thinking while analyzing how agriculture and rural areas have undergone changes as the Japanese economy changes.
【Learning activities outside of classroom】　Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy)】Your overall grade in the class will be decided based on the following Presentation and discussion: 50%、in class contribution: 50%

HUG600B5（人文地理学 / Human geography 600）

地域社会論演習Ⅰ

佐々木　達

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
修士論文の作成をめざします。

【到達目標】
修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	修士論文のテーマ(1)	テーマの検討と参考文献の紹介
第3回	修士論文のテーマ(2)	テーマの設定と研究の位置づけ
第4回	研究目的	修士論文研究目的の検討
第5回	修士論文章構成(1)	章構成と関連文献の提示
第6回	修士論文章構成(2)	章・節・項の設定
第7回	実態調査(1)	調査内容の検討
第8回	実態調査(2)	調査計画の検討
第9回	統計資料(1)	統計資料の分析
第10回	統計資料(2)	統計資料の整理
第11回	図表の作成	図表の作成計画
第12回	研究構想の再検討	研究構想の再検討、修正
第13回	中間報告	中間報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　テーマの設定や問題意識に醸成は，広く深く文献を読むことから始まります。その研究は社会にとってどんな役に立つのか？ という問いかけを持ってください。そして，統計や資料の整理は，コツコツとやることが肝心です。少なくとも準備・復習時間は演習（2単位）では1回につき4時間以上が必要となります。

【テキスト（教科書）】
特になし

【参考書】
荒木一視ほか編(2021)『食と農のフィールドワーク入門』，昭和堂

【成績評価の方法と基準】
発表・討論50％，修正論文の完成50％で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】
特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
経済地理学，農業地理学，地域経済論
＜研究テーマ＞
東北地方における水田農業の構造再編
日本経済の再生産構造と地域問題

【Outline (in English)】
【Course outline】 We aim to create a master's thesis based on your research interests.
【Learning Objectives】 Completion and submission of master's thesis
【Learning activities outside of classroom】 Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy)】 : Final grade will be calculated according to the following process Report and Discussion (50%), submission of master's thesis(50%)

HUG600B5（人文地理学 / Human geography 600）

地域社会論演習 II

佐々木　達

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
修士論文の執筆・完成を目指すために，研究内容を徹底的に鍛え上げます。

【到達目標】
　修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	調査結果報告	夏季休暇時の調査結果報告
第3回	調査結果の吟味	調査結果から論点を洗い出す
第4回	研究目的	研究目的の再確認
第5回	章構成の再検討	章構成から論理展開を考える
第6回	統計資料	統計分析の結果報告
第7回	補足調査	補足調査の必要性の再確認
第8回	章構成の最終決定	章構成の確定
第9回	図表の完成	完成図表の確認
第10回	参考・引用文献	参考・引用文献の最終確認
第11回	完成原稿の予定枚数	完成原稿予定枚数の確認
第12回	結論と要約	論文の結論の発表
第13回	最終報告	最終報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分の論文は何を明らかにするのか，どのような順序だてや組み立てから説明するのか，結論として何を主張できるのかを意識して作成にあたってください。

【テキスト（教科書）】
　特になし

【参考書】
荒木一視ほか編著（2021）『食と農のフィールドワーク入門』，昭和堂

【成績評価の方法と基準】
発表と議論(50％)、修士論文の提出(50％)で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】
　特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
経済地理学
＜研究テーマ＞
日本農業の地域構造
東北地方における水田農業の構造再編

【Outline (in English)】
【Course outline】 The goals of this seminar is completion of master's thesis
【Learning Objectives】Completing a high-level master's thesis
【Learning activities outside of classroom】 Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】 Final grade will be calculated according to the following process Report and Discussion (50%), submission of master's thesis(50%)

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

空間構成論研究Ⅰ

小田　宏信

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　地理学で生み出された知識というのは、個々の研究テーマ毎に断片化しがちです。多くの研究者が生み出した知的資産をどのように総合していったらよいのでしょうか。
　経済地理学に立脚した統合的世界地誌の一アプローチとして、経済発展という縦糸を軸に据えて、**経済発展と地理空間**をテーマに講述します。

【到達目標】
・経済発展を分析する際の経済地理学の重要性を理解できる。
・経済地理学の主要概念を説明しそれを応用することができる。
・経済活動の決定要因として，歴史・環境・文化といった要因の役割を説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
配布資料をもとに講述し、意見・感想を求めます。学期の最後の方では、受講者から話題提供を求めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	はじめに：経済発展と地理空間	本科目の方向性と視点を提示します。
2	地域が育んだ産業社会	アルフレッド・マーシャルが描いた19世紀欧州の産業世界について考えます。
3	ヘンリー・フォードが作った社会と国土	アメリカン・システムからフォード・システムへの合衆国の工業の展開。それが、地理学的にどのような含意を持ったのか考えます。
4	消費の場としての大都市郊外	大都市郊外というのは20世紀における歴史的産物です。快適な郊外を手に入れるための思想がどのように生まれ、どのように実践されたのか考えます。そして、サバービア（郊外居住者）の存在は大量生産大量消費の社会に不可分に結びついたものでした。
5	スノーベルトとサンベルト：合衆国の空間構造	経済的中軸地帯がいかに生み出され、そして、その後の周辺地帯の発展がいかになされたのか、合衆国の経済的空間構造の形成過程を概観します。
6	ブルーバナナとユーロ・サンベルト：欧州の空間構造	欧州の経済的空間構造の形成過程を概観します。
7	経済のグローバル化と多国籍企業	国境を越えた直接投資の活発化という意味で、「グローバル化」がいかに進行したのか、そのプロセスを検討します。
8	中国・ASEANの工業化	1990年代に工業化が急進した時の状況を振り返ります。
9	ブロック経済の形成と地域経済の適応	北米自由貿易協定やマーストリヒト条約の発効にともなって、北米やEUの地域経済はどのような再編の途上にあるだろうか。仏独国境地域や米墨国境地域を事例に考えてみます。
10	グローバルvsローカル：世界都市と新しい産業空間	グローバライゼーションは人・モノ・資金の空間的流動性の拡大の一方で、新たな局地集中化＝ローカライゼーションの動きを伴っているのも事実です。こうした論調と実態分析を概観します。
11	世界都市の諸相：東京とパリ	多国籍企業の中枢管理機能の集積地としての世界都市の諸問題について、事例をもとに考えます。
12	履修者Aからの報告	授業で扱ったTopicに関連した研究報告を求めます。
13	履修者Bからの報告	授業で扱ったTopicに関連した研究報告を求めます
14	履修者Cからの報告	授業で扱ったTopicに関連した研究報告を求めます

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各４時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しません。

【参考書】
伊藤喜栄（2006）：『教養としての地歴学―歴史のなかの地域』日本評論社.
上野　登（1967）：『経済地理学への道標』大明堂.
貝沼恵美ほか（2009）：『変動するフィリピン』二宮書店.
熊谷圭知・西川大二郎編（2000）：『第三世界を描く地誌―ローカルからグローバルへ』古今書院.
経済地理学会編（2010）：『経済地理学の成果と課題・第７集』日本経済評論社.
小林浩二・呉羽正昭編（2007）：『EU拡大と新しいヨーロッパ』原書房.
手塚　章・呉羽正昭編（2008）：『ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ』二宮書店.
生田真人（2011）：『東南アジアの大都市圏：拡大する地域統合』古今書院.
松原　宏編（2003）：『先進国経済の地域構造』東京大学出版会.
Knox,P., Agnew, J. and McCarthy, L.(2014): “The Geography of the World Economy < 6th Edition> ”, Routledge.
その他、別途指示します。

【成績評価の方法と基準】
「配分（%）」：平常点（出席状況を含む）60%，最終課題40%.

【学生の意見等からの気づき】
履修者の皆様のご経験を踏まえて，機会あれば現地研究を実施したいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
プロジェクター使用。

【その他の重要事項】
履修人数等により，本シラバスの内容は大幅に変更になる可能性がありますが，あらかじめご了承下さい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞産業経済地理学
＜研究テーマ＞日本、欧州、東南アジアなどを対象にした産業集積システムの動態的研究、経済地誌、地域政策論
＜主要研究業績＞
『現代日本の機械工業集積』古今書院
『変動するフィリピン』二宮書店（共著）
『日本経済地理読本（第10版）』東洋経済新報社（編著）
『経済地理学への招待』（共編著）
『世界地誌シリーズ　東南アジア・オセアニア』朝倉書店（共編著）
『経済地理学キーコンセプト』古今書院（共訳）
『キーワードで読む経済地理学』原書房（分担執筆）

『空間の経済地理』朝倉書店（分担執筆）
『ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ』二宮書店（分担執筆）
『ヨーロッパ』朝倉書店（分担執筆）
『グローバリゼーション』朝倉書店（分担執筆）

【Outline (in English)】
This course provides basic concepts to economic and industrial geography. Topic areas include economic globalization, multinational corporations, regional economic development.
By the end of the course, students should be able to do the followings:
- Evaluate the applicability and importance of economic geography in analyzing economic development;
- Explain, synthesize, and apply key concepts in economic geography;
- Explain the role of historical, environmental, cultural, and other factors in determining economic activities.
After each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading will be decided based on term-end presentation (40%), and in-class contribution (60%).

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

空間構成論研究 II

小田　宏信

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
空間構成論研究 I の問題意識を引き継ぎ、秋学期はその日本篇としての位置付けです。日本の経済発展と地理空間をテーマに開講します。

1980年代までの日本の経済発展を可能にしたのはいかなる地理的条件か，日本の国土運営にとっての「20世紀システム」とは何であったのか――，一国の経済発展の歩みとその国の経済地理的な状況（すなわち，産業活動や人口の地域的配置，地域的分業体系）とは分かち難く結び付いています。経済発展の結果が地理的状況を生み出す場合もありますし，逆に特定の地理的状況が経済発展の基礎になる場合もあります。両者の関係を理論・実証の両面から解明していくのが経済地理学の課題です。

そして，経済のグローバル化に直面した今日，いかに地域の競争力を育んでいくべきか――，今日，地域経済の活性化策をめぐってさまざま議論がなされていますが，ある地域の活性化を論じる際にも、その地域がマクロな地理空間のなかで置かれた状況，また，その時々の置かれた経済的状況を考慮にいれなければ議論ができません。

本科目では，1930年代以降の日本経済の歩みを縦糸にして，各時代にいかなる地理的状況があったのか，また，いかなる産業立地政策や地域政策が講じられたかを考えていきます。また，各トピックに関連した経済地理学の主要なフレームワークを紹介していきます。

【到達目標】
・経済発展を分析する際の経済地理学の重要性を理解できる。
・経済地理学の主要概念を説明しそれを応用することができる。
・経済活動の決定要因として,歴史・環境・文化といった要因の役割を説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
配布資料をもとに講述し、意見・感想を求めます。学期の最後の方では、受講者から話題提供を求めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	はじめに：日本の経済発展と地理空間	本科目の方向性と視点を提示します。
2	戦前期までの国土形成と国土計画の始動	日本の国土運営にとっての「1940年体制」とはいかなるものであったのか、考えます。ドイツおよびアメリカからの影響を強く受けて、日本の国土計画の基点が形成されました。【キー概念】ニューディールとTVA
3	太平洋ベルト構想と一全総	高度経済成長期の産業立地政策の論理について考えます。「国民経済の均衡ある発展」が唄われながらも、太平洋ベルトが形成されたのはなぜでしょうか。【分析枠組み】成長の極理論
4	列島改造論と新全総・工配法	田中角栄が目指した経済社会とは、フォーディズムの日本的具現にほかならなかったのではないかという問題意識から、当時の立地政策・国土政策について検討します。【分析枠組み】フォーディズム論
5	大都市郊外と日本の高度経済成長	日本におけるフォーディズムの形成を需要サイドから支えたのは、大都市の郊外居住者達です。東京圏を取り上げて、郊外の形成について考えます。【分析枠組み】田園都市論と近隣住区論、バージェスモデル
6	日本の都市群システムと支所配置	内需を中心とした経済発展のなかで、財やサービスをいかに効率よく国土の隅々まで分配し、各地の支店・代理店網をいかに統括するかということは重要な課題でありました。とくに、製造業の販売網の形成に考えます。【分析枠組み】都市システム論と地域構造論
7	日本の経済発展と地域産業集積(1)	日本の経済発展を供給サイドから成功に導いたのは、中小企業がおりなす産業集積地の存在です。まず、大都市圏の産業集積について考えます。【分析枠組み】産業の局地化と外部経済、連関費用と産業集積
8	日本の経済発展と地域産業集積(2)	続いて、地方圏の産業集積に目を向けます。【分析枠組み】産業地域社会と基盤的産業技術
9	工業の地方分散と企業内地域間分業	1980年代までの日本の製造業の地方分散の論理について考えます。【分析枠組み】プロダクトサイクル論
10	バブル経済期の国土政策と東京問題	四全総の取り組みと、その下での東京問題について考えます。【分析枠組み】世界都市論
11	グローバル化と立地調整、地域経済	グローバル経済下における日本企業の立地調整と日本の地域経済の状況について、実証研究例を紹介しつつ、概説します。【分析枠組み】立地調整の諸モデル
12	履修者Aのプレゼンテーション	授業で扱った Topic に関連した研究報告を求めます。
13	履修者Bのプレゼンテーション	授業で扱った Topic に関連した研究報告を求めます。
14	履修者Cのプレゼンテーション	授業で扱った Topic に関連した研究報告を求めます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各４時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しません。

【参考書】
別途提示します。

【成績評価の方法と基準】
「配分（%）」：平常点（出席状況を含む）60%，課題40%
「評価基準」：平常点，課題とも，意欲的な取り組みと，理解度・論理性を評価基準にします。

【学生の意見等からの気づき】
履修者の皆様のご経験を踏まえて，現地研究等の機会も取り入れたいと考えております。

【学生が準備すべき機器他】
プロジェクター使用。

【その他の重要事項】
履修人数等により,本シラバスの内容は大幅に変更になる可能性がありますが,あらかじめご了承下さい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞産業経済地理学
＜研究テーマ＞日本、欧州、東南アジアなどを対象にした産業集積システムの動態的研究、経済地誌、地域政策論
＜主要研究業績＞
『現代日本の機械工業集積』古今書院
『変動するフィリピン』二宮書店（共著）
『日本経済地理読本（第10版）』東洋経済新報社（編著）
『経済地理学への招待』（共編著）
『世界地誌シリーズ　東南アジア・オセアニア』朝倉書店（共編著）
『経済地理学キーコンセプト』古今書院（共訳）
『キーワードで読む経済地理学』原書房（分担執筆）
『空間の経済地理』朝倉書店（分担執筆）
『ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ』二宮書店（分担執筆）
『ヨーロッパ』朝倉書店（分担執筆）
『グローバリゼーション』朝倉書店（分担執筆）

【Outline (in English)】
This course provides basic concepts to economic and industrial geography. Topic areas include locational and regional policy, spatial structure and national economic development in Japan.
By the end of the course, students should be able to do the followings:
- Evaluate the applicability and importance of economic geography in analyzing economic development;
- Explain, synthesize, and apply key concepts in economic geography;
- Explain the role of historical, environmental, cultural, and other factors in determining economic activities.
After each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading will be decided based on term-end presentation (40%), and in-class contribution (60%).

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

歴史地理学研究Ⅰ

米家　志乃布

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸東京の地図や名所絵などの画像資料を通して、江戸東京の歴史・文化遺産や地域を考える

【到達目標】
春学期のⅠの授業では、江戸東京を歴史地理学的に考えるための基礎的なことを学ぶことを目標とします。具体的には、以下の点です。
・江戸東京で作製された様々な地図を閲覧し、人々が江戸東京の空間をどのように認識していたのか、理解することができます。
・江戸東京の名所を描いた様々な浮世絵、絵画、地誌の挿絵などを通して、人々が名所をどのように考えていたのかを学ぶことができます。
・江戸東京の名所を地図上にマッピングし、その地域的な分布状況を把握します。それにより、実際に地図上で作業し、簡単な分布図を作成することを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
大学の方針により、本年は対面授業を基本としますが、必要に応じてオンライン授業も取り入れます。授業の内容は受講学生と相談しながら進めます。Googleドライブ上でデータを共有し、そこで発表や作業をします。紙の配布・紙での作業は極力控えます。Googleドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業内容の説明、Googleデータの管理と注意事項、研究発表の方法、履修者・出席者の確認。
2	江戸の地図（１）	江戸時代に出版された様々な地図を学びます
3	江戸の地図（２）	国絵図、遠近道印、伊能忠敬の地図を学びます
4	東京の地図（１）	明治時代以降に出版された様々な地図を学びます
5	東京の地図（２）	陸地測量部、水路部などが作製した測量図を学びます
6	江戸東京の地図データの収集①	地図化するために、どのようなデータがあるのか、東京都全体および地域別に検討します
7	江戸東京の地図データの収集②	地図を大型のスキャナーでスキャンし、作業用の地図を収集します
8	江戸の名所絵（１）	江戸時代に葛飾北斎、歌川広重などによって描かれた名所絵を学びます
9	江戸の名所絵（２）	江戸名所図会などの名所本の挿絵の特徴を学びます
10	東京の名所絵（１）	明治時代以降に描かれた小林清親などの名所絵を学びます
11	東京の名所絵（２）	新版画、創作版画などの名所絵を学びます
12	東京の地図上に名所をマッピングする	東京の名所の分布傾向を分析します
13	江戸東京における名所の分布を考察する	それぞれの分布について、その特徴を分析・考察し、議論します
14	まとめ	作成した地図をもとに、江戸東京の空間的な多様性および歴史的な地域性についてまとめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
東京都内の博物館・資料館の常設展および様々な企画展をこまめにチェックし、機会をつくって足を運んでいただくことをおすすめします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
米家志乃布・福田珠己・関戸明子・荒又美陽『アートの地理学』古今書院、2025年
法政大学江戸東京研究センターWebサイト「所蔵資料」https://edotokyo3.ws.hosei.ac.jp/books.html
国際日本文化研究センターWebサイト・データベース「地図」https://www.nichibun.ac.jp/ja/db/#maps
国立国会図書館デジタルコレクションhttps://dl.ndl.go.jp/
東京都立図書館　TOKYOアーカイブ https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/top

【成績評価の方法と基準】
「配分（%）」：参加50％、発表・作業50%
「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】
機会あれば、博物館・美術館の企画展を見学したり、フィールドワークもします。受講生に好評です。地理学専攻以外の大学院生、留学生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】
地図上の位置を探すためにGoogleマップが必要です。スマートフォンやPC、iPadなどの機器類を持参してください。

【その他の重要事項】
春学期・秋学期合わせての受講を推奨いたします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞歴史地理学
＜研究テーマ＞日本の歴史地理学、地図史研究、江戸東京研究、アートと地理学研究
＜主要研究業績＞
『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史研究』法政大学出版局、2021年
『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023年
『アートの地理学』古今書院、2025年など

【Outline (in English)】
（Course outline）This course deals with mapping and studying historical geography of Edo-Tokyo.
（Learning Objectives） The goals of this course is to enable students to understand Edo-Tokyo historically and spatially, and to be able to think and discuss its historical and regional characteristics.
（Learning activities outside of classroom）Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policy） Grading will be decided based on lab reports(
50%), and the quality of the students experimental performance in the lab(50%).

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

歴史地理学研究 II

米家　志乃布

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸東京のアトラスを作成し、江戸東京の歴史・文化遺産と地域史を考える

【到達目標】
秋学期の授業では、春学期で学んだことを踏まえ、様々な文献を読み、データを収集し、自ら地図作成（マッピング）することから、江戸東京を歴史的・空間的に把握し、その時代性・地域性を自分の頭で考え、論じることができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
大学の方針により、本年は対面授業を基本としますが、必要に応じて、オンライン授業も行います。授業内容は受講生と相談しながら進めます。Google ドライブ上で発表や作業をし、紙の配布・紙での作業は極力控えます。Google ドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の説明、データの管理と注意事項、研究発表の方法、履修者・出席者の確認。
第2回	春学期授業の振り返り	春学期授業Ｉの内容を振り返り、さらにどの点を進めていくのか、議論します。
第3回	史料のデータ整理①	補足の地図や絵画資料を収集し、分析します
第4回	史料のデータ整理②	研究発表できそうな論点を整理します
第5回	今年度の成果を考える①	研究発表の内容を決定します
第6回	今年度の成果を考える②	先行研究を探し、論文発表の担当を決めます
第7回	論文の発表①	論文の発表をしてお互いに議論します
第8回	論文の発表②	論文の発表を通して、今後の課題を議論します
第9回	地図のブラッシュアップ作業にむけて	補足データを収集します
第10回	地図上にマッピングする①	収集したデータを重ね合わせて、地図にのせます
第11回	地図上にマッピングする②	収集したデータを地図上に表現して考察します
第12回	地図上にマッピングする③	各要素の分布の意味を分析します
第13回	地図上にマッピングする④	分布を考察し、江戸東京の地域的特徴を考察します
第14回	まとめ	地図から見える江戸東京の歴史地理的特性を考察し、まとめます

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
現代の東京に残る江戸東京の歴史を把握するために、各自でフィールドにでて、実際に歩いてみることをおすすめします。

【テキスト（教科書）】
テキストは特に使用しません。Google ドライブに適宜、関連文献を紹介します。

【参考書】
法政大学江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023年
陣内秀信『東京の空間人類学』筑摩書房、1992
ジョルダン・サンド『東京ヴァナキュラー：モニュメントなき都市の歴史と記憶』新曜社、2021年
歴史地理学会編『歴史地理学事典』丸善出版、2025年

【成績評価の方法と基準】
「配分（%）」：参加50％、発表・作業50％
「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】
実際に東京を歩いてみたいという意見もいただきました。秋～冬は気候も温暖で歩きやすいので、ぜひ外にでてみたいと思います。史料からデータを収集して地図を作成する作業、それに基づいて議論し発表することは、とても面白い！ と受講生の皆さんから感想をいただきました。江戸東京の歴史と地理に詳しくなります。地理学専攻以外の大学院生、留学生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】
地図上の位置を探すためにGoogleマップが必要です。スマートフォンやPC、iPadなどの機器類を持参してください。

【その他の重要事項】
春学期・秋学期を通して作業を行います。年間の履修を推奨いたします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞歴史地理学
＜研究テーマ＞日本の歴史地理学、地図史研究、江戸東京研究、アートと地理学研究
＜主要研究業績＞
『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史研究』法政大学出版局、2021年
『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023年
『アートの地理学』古今書院、2025年など

【Outline (in English)】
（Course outline）This course deals with mapping and studying historical geography of Edo Tokyo.
（Learning Objectives） The goals of this course is to enable students to understand Edo-Tokyo historically and spatially, and to be able to think and discuss its historical and regional characteristics.
（Learning activities outside of classroom）Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policy） Grading will be decided based on lab reports(
50%), and the quality of the students experimental performance in the lab(50%).

HUG600B5（人文地理学 / Human geography 600）

歴史地理学演習Ⅰ

米家　志乃布

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
歴史地理学の論文の作成方法を学ぶ（1）

【到達目標】
歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法・分析方法について把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
1．歴史地理学の論文を読み、筆者の主張や学史における位置づけを読みとる訓練を行う。
2．歴史地理学的研究を行ううえでの史料収集の方法や史料読解の技術を身につけるため、実際の史料を読む練習を行い、該当分野のテキストを読んで学習する。
3．歴史地理学の論文内でのデータの利用方法や処理の仕方を学習する。
4．具体的な史料やデータを用いて、歴史地理学的な論理構成を考える訓練を行う。
大学の方針により、本年は対面授業を基本とします。発表レジュメやPPTなどの資料類はすべてGoogleクラスルームにアップするようにします。紙での配布は行いません。提出されたレジュメにコメントをつけて返送し、疑問点などをやりとりします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	出席者の確認、授業の概要について説明する。発表の順番を決める。
2	歴史地理学の論文の収集方法	テキストを読みながら、歴史地理学的テーマとは何かを把握し、それらに関連する論文の収集方法について学ぶ。
3	歴史地理学の論文の読み方①	論文の著者の主張について十分に理解する。
4	歴史地理学の論文の読み方②	論文中での図表の効果的な扱い方について、先行研究をもとに学ぶ。
5	歴史地理学の論文の読み方③	統計資料や行政の報告書類を用いた研究方法について、先行研究をもとに議論する。
6	史料の収集方法①	図書館における史料収集の方法を学ぶ。
7	史料の収集方法②	地方の文書館や博物館における史料収集の方法を学ぶ。
8	史料の読解練習①	古地図の読解方法について学ぶ。
9	史料の読解練習②	文書史料の読解方法について学ぶ。
10	データの処理方法①	史料をもとに、どのようなデータが論文作成に必要か学ぶ。
11	データの処理方法②	歴史地理学的な研究テーマに即した効果的なグラフや表を作成する。
12	データの処理と論文構成①	先行研究をもとに、収集・処理したデータと論文構成の関係について分析する。
13	データの処理と論文構成②	先行研究をもとに、データと論旨の関係について把握する。
14	データの処理と論文構成③	自分の研究テーマに即したデータの処理方法と構成について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。自分の発表前には、図書館における事前の文献調査は十分に行うようにしてください。また、テキストなどのわからない（読めない）専門用語などは事前に各自で調べてから授業に参加してください。

【テキスト（教科書）】
特にありません。適宜授業内で指示します。

【参考書】
授業内において適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
発表50％、平常点50%

【学生の意見等からの気づき】
オリジナリティの高い論文が作成できるように、一人ずつ丁寧に指導するようにします。

【その他の重要事項】
歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向きの演習です。大学院および学部の人文地理学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞歴史地理学
＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学、地図史研究、江戸東京研究、アートと地理学研究
＜主要研究業績＞
『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史研究』法政大学出版局、2021年
『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023年
『アートの地理学』古今書院、2025年など

【Outline (in English)】
（Course outline）　This course is to learn how write a paper on historical geography
（Learning Objectives）The course aims to give students an understanding of how to read previous research and how to collect and analyse data in order to prepare a paper on historical geography
（Learning activities outside of classroom）Your study time will be 4 hours for a class
（Grading Criteria /Policy）　Grading will be decided based on lab reports(50%), and the quality of the students experimental performance in the lab (50%)

HUG600B5（人文地理学 / Human geography 600）

歴史地理学演習 II

米家　志乃布

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
歴史地理学の論文の作成方法を学ぶ（２）

【到達目標】
歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法、分析方法について、自分の関心あるテーマを選んで、発表し、論文作成の手順について学ぶことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
１．春学期の歴史地理学演習Ｉの授業内容を踏まえ、各自の関心にもとづいて、歴史地理学的研究テーマを選ぶ。
２．受講者が先行研究の紹介、史料収集、データ処理と分析を行い、それを発表し、授業内で議論する。
大学の方針に従って、本年は対面授業を基本とします。資料はすべてGoogleクラスルームにアップするようにします。紙での配布はいたしません。提出されたレジュメにコメントをつけて返送し、疑問点などをやりとりします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	受講者を確認し、発表の順番を決める。
2	先行研究の紹介①	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ①）。
3	先行研究の紹介②	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ②）。
4	先行研究の紹介③	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ③）。
5	先行研究の紹介④	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ④）。
6	史料紹介①	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ①）。
7	史料紹介②	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ②）。
8	史料紹介③	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（は発表グループ③）。
9	史料紹介④	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ④）。
10	研究報告①	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ①）。
11	研究報告②	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ②）。
12	研究報告③	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ③）。
13	研究報告④	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ④）。
14	まとめ	受講者による研究報告を踏まえて、歴史地理学的研究の今後の展開について議論を行う（受講者全員）。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。各自の発表の前には、その内容を十分に準備してください。

【テキスト（教科書）】
特にありません。適宜授業内で指示します。

【参考書】
各自のテーマに即して、適宜、授業内で紹介します。

【成績評価の方法と基準】
発表50％、平常点50％
評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】
先行研究の読み込みや論文の書き方など、一人ずつ丁寧に指導いたします。

【その他の重要事項】
歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向きの演習です。大学院および学部の人文地理学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞歴史地理学
＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学、地図史研究、江戸東京研究、アートと地理学研究
＜主要研究業績＞
『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史研究』法政大学出版局、2021年
『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023年
『アートの地理学』古今書院、2025年など

【Outline (in English)】
（Course outline）　This course is to learn how write a paper on historical geography
（Learning Objectives）The course aims to give students an understanding of how to read previous research and how to collect and analyse data in order to prepare a paper on historical geography
（Learning activities outside of classroom）Your study time will be 4 hours for a class
（Grading Criteria /Policy）　Grading will be decided based on lab reports(50%), and the quality of the students experimental performance in the lab (50%)

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

人文地理学文献講読Ⅰ

甲斐　智大

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、人文地理学に関連する英語文献を精読することを通じて、人文地理学分野の英語文献を理解するための基礎的な能力の育成を目指します。

【到達目標】
人文地理学分野の英語文献を理解するための基礎的な能力を習得する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
各回の担当者がその文献に関するプレゼンテーションを行い，その内容についてディスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	文献および各回の担当者の決定
第2回	文献の読解と検討（1）	Chapter1：担当者による発表とそれに基づく討論
第3回	文献の読解と検討（2）	Chapter2：担当者による発表とそれに基づく討論
第4回	文献の読解と検討（3）	Capter3：担当者による発表とそれに基づく討論
第5回	文献の読解と検討（4）	Chapter4：担当者による発表とそれに基づく討論
第6回	文献の読解と検討（5）	Chapter5：担当者による発表とそれに基づく討論
第7回	文献の読解と検討（6）	Chapter6：担当者による発表とそれに基づく討論
第8回	文献の読解と検討（7）	Chapter7：担当者による発表とそれに基づく討論
第9回	文献の読解と検討（8）	Chapter8：担当者による発表とそれに基づく討論
第10回	文献の読解と検討（9）	Chapter9:担当者による発表とそれに基づく討論
第11回	文献の読解と検討（10）	Chapter10：担当者による発表とそれに基づく討論
第12回	文献の読解と検討（11）	Chapter11：担当者による発表とそれに基づく討論
第13回	文献の読解と検討（12）	Chapter12：担当者による発表とそれに基づく討論
第14回	まとめ	全体の総括ならびに補足

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
各回の発表者だけでなく，受講者全員が文献を精読しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】
テキストは受講生の関心に応じて、以下の文献の中から決定します。初回時に決定する予定です。
・Ishikawa, Yoshitaka（2023）,Japanese Population Geographies I : Migration, Urban Areas, and a New Concept .
・Ishikawa, Yoshitaka（2023）,Population Geographies II: Minority Populations and Future Prospects .
・oshio Kikuchi, Hiroshi Matsuyama, Lidia Sasaki, Eranga Ranaweerage(eds)（2020）, Geography of Tokyo.
・Andrew Herod(2025),Handbook of Labour Geography.

【参考書】
各回の発表に関連する文献については，適宜，授業の中で紹介します。

【成績評価の方法と基準】
報告50％ ディスカッション50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞社会経済地理学
＜研究テーマ＞地域労働市場と地域政策に関する地理学的研究
＜主要研究業績＞
・特定地域づくり事業協同組合による労働力確保のメカニズム 地理学評論 98(6) 339-362 2025年
・東京都における保育所の経営主体からみた保育労働市場の特性-新卒保育士の採用を中心に-
地理学評論 93(2) 2020年
・「ヤンキー」であること／「ヤンキー」を制御すること――福岡県筑後地区における不良文化と地方都市 2024年日本地理学会秋季学術大会 「都市地理学研究グループ」報告（甲斐智大 林凌）

【Outline (in English)】
This course helps students build basic skills for understanding English-language literature in human geography through careful reading of academic texts.
The standard preparation and review time for this course is 2 hours each. Not only the presenters but all students are required to have thoroughly read the assigned literature before each class. Grading will be based on the following criteria: presentation: 50%, discussion: 50%.

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

人文地理学文献講読 II

甲斐　智大

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、人文地理学に関連する英語文献を精読することを通じて、人文地理学分野の英語文献を理解するための基礎的な能力の育成を目指します。

【到達目標】
人文地理学分野の英語文献を理解するための基礎的な能力を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
各回の担当者がその文献に関するプレゼンテーションを行い，その内容についてディスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	文献および各回の担当者の決定
第2回	文献の読解と検討（1）	Chapter1：担当者による発表とそれに基づく討論
第3回	文献の読解と検討（2）	Chapter2：担当者による発表とそれに基づく討論
第4回	文献の読解と検討（3）	Capter3：担当者による発表とそれに基づく討論
第5回	文献の読解と検討（4）	Chapter4：担当者による発表とそれに基づく討論
第6回	文献の読解と検討（5）	Chapter5：担当者による発表とそれに基づく討論
第7回	文献の読解と検討（6）	Chapter6：担当者による発表とそれに基づく討論
第8回	文献の読解と検討（7）	Chapter7：担当者による発表とそれに基づく討論
第9回	文献の読解と検討（8）	Chapter8：担当者による発表とそれに基づく討論
第10回	文献の読解と検討（9）	Chapter9:担当者による発表とそれに基づく討論
第11回	文献の読解と検討（10）	Chapter10：担当者による発表とそれに基づく討論
第12回	文献の読解と検討（11）	Chapter11：担当者による発表とそれに基づく討論
第13回	文献の読解と検討（12）	Chapter12：担当者による発表とそれに基づく討論
第14回	まとめ	全体の総括ならびに補足

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
各回の発表者だけでなく，受講者全員が文献を精読しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】
テキストは受講生の関心に応じて、以下の文献の中から決定します。初回時に決定する予定です。
・Ishikawa, Yoshitaka（2023）,Japanese Population Geographies I : Migration, Urban Areas, and a New Concept .
・Ishikawa, Yoshitaka（2023）,Population Geographies II: Minority Populations and Future Prospects .
・oshio Kikuchi, Hiroshi Matsuyama, Lidia Sasaki, Eranga Ranaweerage(eds)（2020）, Geography of Tokyo.
・Andrew Herod(2025),Handbook of Labour Geography.

【参考書】
各回の発表に関連する文献については，適宜，授業の中で紹介します。

【成績評価の方法と基準】
報告50％ ディスカッション50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞社会経済地理学
＜研究テーマ＞地域労働市場と地域政策に関する地理学的研究
＜主要研究業績＞
・特定地域づくり事業協同組合による労働力確保のメカニズム 地理学評論 98(6) 339-362 2025年
・東京都における保育所の経営主体からみた保育労働市場の特性-新卒保育士の採用を中心に-
地理学評論 93(2) 2020年
・「ヤンキー」であること／「ヤンキー」を制御すること――福岡県筑後地区における不良文化と地方都市 2024年日本地理学会秋季学術大会 「都市地理学研究グループ」報告（甲斐智大 林凌）

【Outline (in English)】
This course helps students build basic skills for understanding English-language literature in human geography through careful reading of academic texts.
The standard preparation and review time for this course is 2 hours each. Not only the presenters but all students are required to have thoroughly read the assigned literature before each class. Grading will be based on the following criteria: presentation: 50%, discussion: 50%.

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

人文地理学特殊講義 I

川添　航

備考（履修条件等）：8/1（土）3〜6時限
8/2（日）1〜5時限
8/7（金）3〜6時限
上記に加えて1時限分をオンデマンドで実施

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この講義では，人文地理学のなかでも宗教や国際移住，観光などを対象とした研究の進め方について具体的な研究事例を踏まえて解説する．また，調査・分析の手順や学会発表のスキル，論文執筆の流れについても紹介する．

【到達目標】
具体例を通じて，身の回りの現象をどのように地理学の研究対象とするのかについて考えることができるようになる．また，講義で扱った事例を通じて，宗教や観光を含むさまざまなテーマの研究計画・研究方法を構想し，修士論文を執筆できる能力を習得する．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義と演習を組み合わせながら講義を進める．講義末課題としてコメントシートを提出し，次回の授業でフィードバックを行う．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	人文地理学の基本的な見方・考え方について解説する．
第2回	人文地理学の研究・調査方法：研究・調査計画の立案	人文地理学における研究・調査計画の立案について解説する．
第3回	人文地理学の研究・調査方法：調査の実践と分析	人文地理学における調査の実践と分析，研究成果のアウトプットについて解説する．
第4回	「宗教の地理学」の研究視点（前半）	宗教現象を対象とした地理学的研究（宗教の地理学）の研究視点について，2010年代までの研究動向をもとに解説する．
第5回	「宗教の地理学」の研究視点（後半）	宗教現象を対象とした地理学的研究（宗教の地理学）の研究視点について，2010年代以降の研究動向をもとに解説する．
第6回	研究事例紹介①：国際移住と宗教（前半）	日本における国際移住と宗教の結びつきを対象とした研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第7回	研究事例紹介②：国際移住と宗教（後半）	韓国における国際移住と宗教の結びつきを対象とした研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第8回	研究事例紹介③：地域社会の変化と宗教（前半）	少子高齢化と宗教の結びつきを対象とした研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第9回	研究事例紹介④：地域社会の変化と宗教（後半）	都市中心市街地の変容と祭礼の結びつきを対象とした研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第10回	研究事例紹介⑤：ツーリズムと宗教（前半）	巡礼について扱った研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第11回	研究事例紹介⑤：ツーリズムと宗教（後半）	新たな形態の宗教ツーリズムについて扱った研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第12回	受講生による研究事例紹介（前半）	受講生による研究事例紹介を通じて，人文地理学における研究方法や調査・分析手法について検討する（前半）．
第13回	受講生による研究事例紹介（後半）	受講生による研究事例紹介を通じて，人文地理学における研究方法や調査・分析手法について検討する（後半）．
第14回	講義のまとめ	講義のまとめと期末課題の説明を行う．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講義中に紹介した参考文献や論文については各自で講読しておくこと．第12回，第13回の講義では受講生による研究事例の紹介を行うため，余裕を持って準備を行うこと（詳細は講義中に説明する）．本授業の準備学習・復習時間は，各2時間を標準とする．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
参考資料や論文については講義中で紹介する．

【成績評価の方法と基準】
平常点（講義末課題）30％と講義内での発表30％，期末課題40％で評価を行う．

【学生の意見等からの気づき】
講義末課題としてコメントシートを提出し，次回の授業でフィードバックを行う．

【学生が準備すべき機器他】
講義用ノートを持参すること．

【その他の重要事項】
特になし．

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
宗教の地理学，観光地理学
＜研究テーマ＞
①東アジアの社会変動と宗教現象，②観光と地域社会
＜主要研究業績＞
川添 航 2023. 国際移住者の宗教活動に関する地理学的研究の展開―1990隼年代以降の英語圏における研究動向を中心に―. 地理空間学会「地理空間」第16巻, pp.1-19.
川添 航 2020. 在留外国人の社会関係形成・維持における宗教施設の役割―茨城県南部におけるフィリピン人を事例に―. 日本地理学会「地理学評論」第93巻, pp.221-238.

【Outline (in English)】
This course provides an overview of research approaches in human geography, focusing particularly on studies of religious and tourism phenomena through specific case examples. It also introduces procedures for field investigation and data analysis, as well as skills for academic presentations and the process of writing research papers.
Through concrete examples, students will learn how everyday phenomena can be approached as subjects of geographical study. By examining the case studies introduced in class, they will also develop the ability to design research plans and methodologies on a variety of topics — including religion and tourism — and acquire the skills necessary to write a master's thesis.

Students are expected to independently read and review the reference materials and academic papers introduced during the lectures. In Weeks 12 and 13, students will give presentations on their own research projects; therefore, sufficient preparation in advance is required (details will be explained in class). The standard preparation and review time for each class is two hours. Evaluation will be based on class participation and assignments (30%), in-class presentations (30%), and a final project (40%).

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

人文地理学特殊講義 II

山本　匡毅

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本講義では、産業地理学の理論と実際について解説し、理解を深めます。産業の地理学は1980年代までは活発でしたが、近年は停滞傾向となっています。この講義を通じて、産業の空間的展開について、地理学の観点から把握し、分析できるようになることを目的とします。

【到達目標】
・産業活動の空間的展開に関して、産業地理学の意義を理解できる。
・産業地理学の主な理論や方法を説明し、かつそれを応用することができる。
・現実における産業活動の空間的展開に関する背景や要因を説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義前に該当する教科書の章を予習して頂きます。講義では教科書をもとに解説し、適宜、学生に意見や感想を求めます。第13回、第14回の講義では、受講者から産業地理に関連した報告をして頂きます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに：産業活動と地理空間	本講義の概要を説明するとともに、産業が地理空間とどのように関わっているのか、その視点を提示します。
第2回	産業地理とは何か	産業地理と都市・地域の関係について考えます。
第3回	産業立地論	農業、工業、小売業の立地理論を考えます。その上で理論と現実の相違点を検討します。
第4回	産業集積	産業には集積する傾向があります。この集積が起こる要因を考えます。
第5回	産業と地域経済	産業は地域経済に影響を与える存在です。そこで、産業は実際に地域経済へどのように関係しているのかを考えます。
第6回	加工型産業（製造業）と地理空間	製造業は20世紀に地理空間へ多大な影響を与えてきました。ここでは製造業と地理空間の関係を考えます。
第7回	サービス産業と地理空間	現代はサービス経済化しており、サービス経済を無視できません。そこでサービス産業と地理空間の関係を考えます。
第8回	ルーラル地域の産業と地理空間	農山漁村（ルーラル地域）では多様な産業が立地しています。そこでこのルーラル地域の産業と地理空間の関係を考えます。
第9回	都市地域の産業と地理空間	都市には都市型産業が集積しています。そこで都市地域の産業と地理空間の関係を考えます。
第10回	観光産業と地理空間	インバウンド観光に代表されるように、観光産業は地域経済において基盤産業の一つになっています。そこで観光産業と地理空間の関係を考えます。
第11回	グローバリゼーションと産業地理	1990年代以降のグローバリゼーションは、地域の産業構造を大きく変えました。そこでグローバリゼーションと産業地理の関係を考えます。
第12回	創造産業と地理空間	2000年代以降、創造産業が台頭し、都市や地域に影響を与えるようになりました。そこで創造産業と地理空間の関係を考えます。
第13回	受講生による研究報告と議論１	受講生が産業地理に関するトッピクについて調査し、報告します。その上で教員、受講生の間で議論を行います。
第14回	受講生による研究報告と議論２	受講生が産業地理に関するトッピクについて調査し、報告します。その上で教員、受講生の間で議論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
藤塚吉浩・立見淳哉・山本匡毅編（2025）『図説日本の産業地理』古今書院、2,860円。

【参考書】
小田宏信編（2024）『日本経済地理読本(第10版)』東洋経済新報社。
鈴木洋太郎（2018）『国際産業立地論への招待―アジアにおける経済のグローバル化―』新評論。
竹内淳彦（2005）『経済のグローバル化と産業地域』原書房。
富田和暁（1991）『経済立地の理論と実際』大明堂。
松原宏（2012）『産業立地と地域経済』NHK出版。
山﨑朗（2025）『地域創生の新しいデザイン―地域の潜在力を付加価値に―』中央経済社。
渡辺幸男（2011）『現代日本の産業集積研究―実態調査研究と論理的含意―』慶應義塾大学出版会。

【成績評価の方法と基準】
平常点（出席状況を含む）60%、課題40%。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
履修人数、進捗状況により、シラバスの内容を変更することがあります。その際には講義内でご案内します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞経済地理学、産業地理学
＜研究テーマ＞航空宇宙産業の立地・集積、地方圏の地域経済社会、人口減少下における地域政策
＜主要研究業績＞
『脱炭素社会の地域イノベーション―地産地消型再エネ機器による地域再生―』同友館（共著）
『日本経済地理読本（第10版）』東洋経済新報社（共著）
『地域政策〈第2版〉』中央経済社（共著）
『地域産業のイノベーションシステム―集積と連携が生む都市の経済―』学芸出版社（共著）
『図説日本の都市問題』古今書院（共著）
『地域創生のデザイン―多様な地域のポテンシャルを最大限引き出す―』中央経済社（共著）
『都市空間と産業集積の経済地理分析』日本評論社（共著）

【Outline (in English)】
This course introduces industrial geography and industrial location to students taking this course. At the end of the course, students are expected to be able to explain a part of industrial geography. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Final grade will be calculated according to the following process term-end presentation(40%) and in-class contribution(60%).

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

地理情報システム研究 I

中山　大地

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
数値標高モデルの処理方法について述べられた英語文献を輪読しながら，内容に基づいてPythonによるプログラミングを行う．その結果に機械学習の一種である決定木を適用して土砂災害判別モデルならびに土砂災害予測モデルを作成し，ハザードマップを作成する．

【到達目標】
(1) ラスタ型の代表的なデータである数値地形モデルの処理方法について，原理を理解するとともに原理に基づいた数値計算ができる．
(2) 判別モデルの性能について定量的に評価できる．
(3) 土砂災害判別モデルに基づいたハザードマップが作成できる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義ならびに実習型式とする．授業内での発表を含む．分析結果についてのグループディスカッションを行う．
提出されたリアクションペーパーや課題については授業内で解説を行う．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	空間データの取得	数値標高モデルのダウンロードとモザイク，投影変換
第2回	文献輪読と数値計算（その1）	Pythonによる傾斜量の計算
第3回	文献輪読と数値計算（その2）	Pythonによる曲率の計算
第4回	文献輪読と数値計算（その3）	Pythonによる接峰面の計算
第5回	文献輪読と数値計算（その4）	Pythonによる流路網処理
第6回	文献輪読と数値計算（その5）	PythonによるSediment Transport IndexとWetness Indexの計算
第7回	ラスタ型データの集計処理	第2回から第6回で計算した地形量と土砂災害の有無をポリゴンごとに集計する．
第8回	機械学習を用いた土砂災害判別モデルの作成	第7回で集計した地形量を説明変数，土砂災害の有無を目的変数として，決定木を用いた判別モデルを作成する．
第9回	土砂災害判別モデルの評価	第8回で作成した判別モデルについて，判定効率表・正解率・カッパ係数・ROC曲線に基づいた評価を行う．
第10回	土砂災害判別モデルの地図化	第9回で作成した判別モデルを，GISを用いて地図化する．
第11回	土砂災害予測モデルの作成	第8回から第10回にかけて作成した土砂災害判別モデルをトレーニングデータとした土砂災害予測モデルを作成する．
第12回	土砂災害予測モデルの評価	第11回で作成した予測モデルの性能評価を行う．
第13回	土砂災害予測モデルの地図化	土砂災害予測モデルを図化し，ハザードマップを作成する．
第14回	修士論文研究に関するプレゼンテーション	修士論文研究でのGIS応用に関するプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
週あたりおよそ2時間の事前学習（特に文献講読・プログラミングなど）が必要となる．
前後期ともにGISを用いた実習を含む．実習は授業内では終わらないので，授業外での復習（目安として週あたり2時間以上）が必要になる．

【テキスト（教科書）】
Burrough, P. A. and McDonnell, Rachael (1998) Principles of Geographical Information Systems (Spatial Information Systems), Oxford Univ. Press, pp. 333, ISBN-10: 9780198233657.（受講生に貸与する）

【参考書】
特に指定しない

【成績評価の方法と基準】
（1）成績評価方法
平常点およびプレゼンテーション
（2）成績評価基準・評価の配分等
平常点として授業への貢献度（20％）ならびに講義内容の理解度（40％）とする．これに加えてプレゼンテーション（40％）で総合的に評価する．

【学生の意見等からの気づき】
特になし．

【学生が準備すべき機器他】
ノートPCを持参すること．フリーのデスクトップGISであるQGISをインストールしておくこと．Googleのアカウントを作成しておくこと．

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学，地理情報科学，災害シミュレーション
＜研究テーマ＞
自然災害のシミュレーション，避難行動シミュレーション，地形の定量的分析
＜主要研究業績＞
https://researchmap.jp/read0196218

【Outline (in English)】
Course outline;
We will read the textbook in English that describes how to process digital elevation models. Programming in Python will be conducted based on the content of the textbook. Then, we apply decision trees, a type of machine learning, to the results to create a landslide discrimination model and a landslide prediction model, and produce a hazard map.
Learning objectives;
(1) Understand the principles of processing digital elevation models, which are representative of raster-type data, and be able to perform numerical calculations based on the principles.
(2) To be able to quantitatively evaluate the performance of discriminant models.
(3) To be able to create a hazard map based on a landslide discrimination model.
Learning activities outside of classroom;
Approximately 2 hours of prior study per week is required, especially for literature reading and programming.
Both the first and second semesters include practical training using GIS. Reviewing outside the class (at least 2 hours per week) is necessary because the practical training is not completed in the class.
Grading criteria/policy
(1) Grading method
Ordinary points and presentations
(2) Grading criteria

Students will be evaluated based on their contribution to the class (20%) and their understanding of the lecture (40%). In addition to this, presentations (40%) will be used for overall evaluation.

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

地理情報システム研究 II

中山　大地

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
道路データを用いたネットワーク分析を行う．ネットワーク分析には到達圏解析，最近隣施設探索，ODコストマトリクスの計算など含まれるが，これらの機能の基本的な考え方を理解した上で，実社会への応用として避難所の到達圏解析を行い，ハザードマップを作成する．

【到達目標】
(1) ベクタ型の代表的なデータである道路データを用いてネットワーク分析を行い，施設の到達圏に基づいた人口集計ができる．
(2) 避難行動シミュレーションに基づいたハザードマップが作成できる．
(3) 自身の修士論文研究にGISを応用する具体的な方策を立てることができる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義ならびに実習型式とする．授業内での発表を含む．分析結果についてのグループディスカッションを行う．
提出されたリアクションペーパーや課題については授業内で解説を行う．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	空間データの取得	基盤地図情報ベクタデータならびに国土数値情報の入手と投影変換を行う．
第2回	面積按分による人口推定（その1）	建物データと小地域データを用いて建物ごとの人口推定を行う．
第3回	空間結合による人口推定（その2）	第2回の結果を用いて土砂災害危険地域の人口推定を行う．
第4回	ネットワーク分析の基礎	ネットワーク分析に関する基本的な考え方，応用例などを理解し，必要なデータについての検討を行う．
第5回	道路ネットワークセットの作成	国土基本情報を用いて道路ネットワークデータセットを作成する．
第6回	避難所データの作成	避難所のポイントデータを作成する．
第7回	避難所における到達圏解析	ネットワーク解析に基づいて避難所ごとの到達圏（時間距離）を計算する．
第8回	避難所到達圏内の人口推定	第2回・第7回の結果を用いて避難所からの到達圏内の人口を推定する．
第9回	避難所到達圏の地図化	第6回から第8回の結果を用いて避難所到達圏の地図を作成する．
第10回	通行不可領域がある場合の避難シミュレーション（その1）	通行不可能領域（バリア）を設定して避難所の到達圏解析を行う．
第11回	通行不可領域がある場合の避難シミュレーション（その2）	第10回の結果を用いて地図を作成し検討する．
第12回	立ち寄り地がある場合の避難シミュレーション（その1）	立ち寄り地がある場合（二段階避難）の避難シミュレーションとして，OD行列を用いた最短経路検索を行う．
第13回	立ち寄り地がある場合の避難シミュレーション（その2）	第12回の結果を用いて地図を作成し検討する．
第14回	修士論文研究に関するプレゼンテーション	修士論文研究でのGIS応用に関するプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
前後期ともにGISを用いた実習を含む．実習は週あたりおよそ2時間の事前学習と，授業外での復習（目安として週あたり2時間以上）が必要になる．

【テキスト（教科書）】
特に指定しない．必要なプリント類を配付する．

【参考書】
特に指定しない．

【成績評価の方法と基準】
(1) 成績評価方法
平常点およびプレゼンテーション
(2) 成績評価基準・評価の配分等
平常点として授業への貢献度（20％）ならびに講義内容の理解度（40％）とする．これに加えてプレゼンテーション（40％）で総合的に評価する．

【学生の意見等からの気づき】
特になし．

【学生が準備すべき機器他】
ノートPCを持参すること．フリーのデスクトップGISであるQGISをインストールしておくこと．

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学，地理情報科学，災害シミュレーション
＜研究テーマ＞
自然災害のシミュレーション，避難行動シミュレーション，地形の定量的分析
＜主要研究業績＞
https://researchmap.jp/read0196218

【Outline (in English)】
Course outline;
Perform network analysis using road data. Network analysis includes service area analysis, nearest facility search, OD cost matrix calculation, etc. After understanding the basic concept of these functions, we perform service area analysis of evacuation centers as an application to the real world. Create a hazard map.
Learning objectives;
(1) To be able to perform network analysis using road data, which is typical data of vector type, and to aggregate population based on the reach of facilities.
(2) To be able to create hazard maps based on evacuation behavior simulation.
(3) To be able to formulate concrete measures to apply GIS to one's own master's thesis research.
Learning activities outside of classroom;
Both the first and second semesters include practical training using GIS. The practical training requires about 2 hours of prior study per week and review outside the class (at least 2 hours per week as a rule).
Grading criteria/Ppolicy
(1) Grading method
Ordinary points and presentations
(2) Grading criteria
Students will be evaluated based on their contribution to the class (20%) and their understanding of the lecture (40%). In addition to this, presentations (40%) will be used for overall evaluation.

GEO600B5（地理学 / Geography 600）

地理情報システム演習

小寺　浩二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・授業概要：GISを用いた地域空間情報解析の活用法について学ぶ
・授業の目的・意義：地理学の様々な分野におけるGISを用いた地域空間解析の手法の基礎・活用・応用について学ぶ。

【到達目標】
　地理学分野の様々なテーマに対して、様々な地域空難情報を検索し入手して、GISソフトで活用できるように加工し、GISソフトを用いて様々な空難解析を行い、必要に応じて様々な主題図を作成できる能力の育成を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　地理学のそれぞれの分野に応じたテーマを設定し、必要な地域空間情報を検索し入力して、GISソフトで活用できるように活用し、空間情報解析を行い、主題図を作成した上で小論文を作成し、結果を発表して成果について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	地域空間情報解析とは？	地域空間情報解析の基礎概念の理解
第2回	様々な地域君間情報について	地域空間情報にどのようなものがあるか理解する
第3回	ラスターデータとベクタデータについて	様々なタイプのデータについて理解する
第4回	国土数値情報について	様々な国土数値情報の特性と活用法について理解する
第5回	統計GISについて	統計GISのデータの特性と活用法について理解する
第6回	一般図について	一般図として活用できる電子地図について理解する
第7回	主題図について	主題図の基本と活用について理解する
第8回	ジオリファレンスについて	ジオリファレンスの基礎について学ぶ
第9回	土地利用変化解析について	土地利用変化解析の基礎と応用について学ぶ
第10回	国勢調査データについて	国勢調査データ解析の基礎を学ぶ
第11回	バッファリングについて	バッファリングの基礎について学ぶ
第12回	ネットワーク解析について	ネットワーク解析の基礎と応用について学ぶ
第13回	総合実習①	個別テーマでの総合実習①
第14回	総合実習②	個別テーマでの総合実習②

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業開始時に指示します。

【参考書】
授業開始時に指示します。

【成績評価の方法と基準】
毎授業での課題（30%）、総合実習の最終レポート（40%)、最終発表(30%)を総合して評価。

【学生の意見等からの気づき】
毎回の授業による学生の反応により、修正などを行う。

【学生が準備すべき機器他】
MANDARA,Q-GIS,ArcGISが利用できる環境を事前に準備しておくこと。

【その他の重要事項】
毎回の授業で示される課題について、毎週取り組んで結果を報告する必要がある。
オフィスアワーについては、毎回の講義後に30分程度とする。

【担当教員の専門領域】
＜専門領域＞自然地理学・水文学・陸水学・GISを用いた地域解析

【研究テーマ】
１）水循環に伴う物質循環
２）人間活動に伴う水環境変化と保全
３）GISを用いた流域水・物質循環解析と環境マネージメント

【主要研究業績】
小寺浩二（2021）：「身近な水環境の全国一斉調査」の結果からみた日本の河川の水質特性（１）など

【Outline (in English)】
(Course outline) Learn how to utilize regional spatial information analysis using GIS
(Learning Objectives) Learn the basics, use and application of regional spatial analysis techniques using GIS in various fields of geography.
(Learning activities outside the classroom) You will be required to work on the assignments presented in each class and report your results each week. Two hours each is required for preparation and review.
(Scoring Criteria/Policy) Comprehensive evaluation of assignments for each class (30%), final report of integrated exercises (40%), final presentation (30%).

GEO600B5（地理学 / Geography 600）

地理学現地研究Ⅰ

専任教員が担当

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
教室内での講義内容を踏まえた上で、実際に現地に赴いて多くの地理学的事象を直接、観察・観測し、適切に理解することを目標にする。

【到達目標】
現地に赴いて、地理学的事象を目にした際、的確に自分の「眼（マナコ）」で理解可能な力の養成をすることに、この科目の主目標を据えている。本科目の履修を通して、地域における地理学的事象を客観的に把握できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
地理学専攻修士課程においては必修科目であり、修了までに地理学現地研究Ⅰ（1単位＝2泊3日以上）、および地理学現地研究Ⅱ（1単位＝2泊3日以上）の合計2単位の取得が必要です。履修する場合は、各年次の初めに必ず履修登録して下さい。個々の現地研究の実施などに関しては実施の都度、実施教員を通じて伝達する予定です。なお、現地研究を実施する担当教員やそのテーマによっては、海外で行う場合もあるので、その点に関して予め断っておきます。
基本的に地理学現地研究Ⅰは修士1年次に、地理学現地研究Ⅱは修士2年次に履修するのが望ましいでしょう。
なお、課題等に関してはオフィス・アワーでフィードバックする予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	本科目の概要説明	年度はじめに実施予定の担当教員とテーマを公表する予定である。
2以降	集中的に実施する	現地での調査研究手法を学び、修士論文につなげる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、あわせて1時間を標準とします。ただし、集中講義形式であるので、その限りではありません。現地（フィールド）での学びだけでなく、事前学習や事後学習も十分に行う必要があります。
日頃から、年度の実施予定内容を念頭に置き、その事象が現場ではどのような状況にあるのかを考慮しながら、関連文献に目を通してください。

【テキスト（教科書）】
個々の教員が、その都度、適切な文献の紹介や地理学的事象への補足的な説明をする。

【参考書】
各実施教員が、その都度、適切な文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】
各教員が個々に実施した現地研究への参加学生に対して、その理解度などを中心に評価を行う。目安として参加に伴う平常点60％、レポート40％。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞＜研究テーマ＞＜主要研究業績＞

【Outline (in English)】
The aim of this course (fieldwork ,excursion) is to enable each student to conduct field survey independently by training in survey technics. By taking this course, students will be able to objectively understand geographic events in the region. The standard preparation and review time for this class is one hour in total. However, this is not limited to the intensive lecture format. Students who participate in the field research conducted by each teacher will be evaluated based on their understanding of the field research. As a rule of thumb, 60% of the evaluation will be based on normal points and 40% on reports.

GEO600B5（地理学 / Geography 600）

地理学現地研究 II

専任教員が担当

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
教室内での講義内容を踏まえた上で、実際に現地に赴いて多くの地理学的事象を直接、観察・観測し、適切に理解することを目標にする。

【到達目標】
現地に赴いて、地理学的事象を目にした際、的確に自分の「眼（マナコ）」で理解可能な力の養成をすることに、この科目の主目標を据えている。本科目の履修を通して、地域における地理学的事象を客観的に把握できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
地理学専攻修士課程においては必修科目であり、修了までに地理学現地研究Ⅰ（1単位＝2泊3日以上）、および地理学現地研究Ⅱ（1単位＝2泊3日以上）の合計2単位の取得が必要です。履修する場合は、各年次の初めに必ず履修登録して下さい。個々の現地研究の実施などに関しては実施の都度、実施教員を通じて伝達する予定です。なお、現地研究を実施する担当教員やそのテーマによっては、海外で行う場合もあるので、その点に関して予め断っておきます。
基本的に地理学現地研究Ⅰは修士1年次に、地理学現地研究Ⅱは修士2年次に履修するのが望ましいでしょう。
なお、課題等に関してはオフィス・アワーでフィードバックする予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	本科目の概要説明	年度はじめに実施予定の担当教員とテーマを公表する予定である。
2以降	集中的に実施する	現地での調査研究手法を学び、修士論文につなげる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、あわせて1時間を標準とします。ただし、集中講義形式であるので、その限りではありません。現地（フィールド）での学びだけでなく、事前学習や事後学習も十分に行う必要があります。
日頃から、年度の実施予定内容を念頭に置き、その事象が現場ではどのような状況にあるのかを考慮しながら、関連文献に目を通してください。

【テキスト（教科書）】
個々の教員が、その都度、適切な文献の紹介や地理学的事象への補足的な説明をする。

【参考書】
各実施教員が、その都度、適切な文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】
各教員が個々に実施した現地研究への参加学生に対して、その理解度などを中心に評価を行う。目安として参加に伴う平常点60％、レポート40％。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞＜研究テーマ＞＜主要研究業績＞

【Outline (in English)】
The aim of this course (fieldwork ,excursion) is to enable each student to conduct field survey independently by training in survey technics. By taking this course, students will be able to objectively understand geographic events in the region. The standard preparation and review time for this class is one hour in total. However, this is not limited to the intensive lecture format. Students who participate in the field research conducted by each teacher will be evaluated based on their understanding of the field research. As a rule of thumb, 60% of the evaluation will be based on normal points and 40% on reports.

GEO700B5（地理学 / Geography 700）

地理学特別演習Ⅰ

前杢　英明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地形学や第四紀学に関わる博士論文作成のための研究指導

【到達目標】
博士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、博士論文を熟成させることを目標とする。またその過程おいて、まとまった研究課題ごとに、学術雑誌等に投稿する準備をすることも本授業の目標の一つとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	研究テーマの設定１	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換１
第3回	研究テーマの設定２	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換２
第4回	研究内容の紹介１	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション１
第5回	研究内容の紹介２	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション２
第6回	研究内容の紹介３	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション３
第7回	研究内容の紹介４	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション４
第8回	受講生の研究内容１	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論１
第9回	受講生の研究内容２	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論２
第10回	受講生の研究内容３	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論３
第11回	受講生の研究内容４	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論４
第12回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導１	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１
第13回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導２	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導２
第14回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導３	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導３

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。準備・復習時間は1回につきそれぞれ２時間以上とする。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。自然地理学に関連する内外の文献。

【参考書】
「日本の地形１-７」東京大学出版会
「建設技術者のための地形読図入門１-４」古今書院

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
PowerPoint

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学、（変動）地形学、第四紀学
＜研究テーマ＞
プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究
＜主要研究業績＞
前杢英明ほか（2005）：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究．地理科学, vol.60-3，pp.136-142.
Maemoku, H. et.al.（1997）：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.
Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 – 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】
This course deals with the research instruction to complete doctor thesis on Geomorphology and Quaternary sciences.
The goal of this course is to complete doctor thesis.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Your overall grade in this class will be decided based on the following; Presentation 50%,in course contribution 50%.

GEO700B5（地理学 / Geography 700）

地理学特別演習 II

前杢　英明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
地形学や第四紀学に関わる博士論文作成のための研究指導

【到達目標】
博士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、博士論文を熟成・完成させることを目標とする。またその過程おいて、まとまった研究課題ごとに、学術雑誌等に投稿する準備をすることも本授業の目標の一つとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	受講生の研究内容１	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論１
第3回	受講生の研究内容２	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論２
第4回	受講生の研究内容３	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論３
第5回	受講生の研究内容４	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論４
第6回	受講生の研究内容５	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論５
第7回	受講生の研究内容６	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論６
第8回	受講生の研究内容７	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論７
第9回	受講生の研究内容８	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論８
第10回	受講生の研究内容９	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論９
第11回	受講生の研究内容１０	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論１０
第12回	受講生の研究内容１１	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１１
第13回	受講生の研究内容１２	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１２
第14回	受講生の研究内容１３	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１３

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。予習復習に２時間以上かけること。準備・復習時間は1回につきそれぞれ２時間以上とする。

【テキスト（教科書）】
とくに指定しない。自然地理学に関連ある内外の文献。

【参考書】
「日本の地形１-７」東京大学出版会
「建設技術者のための地形読図入門１-４」古今書院

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
PowerPoint

【その他の重要事項】
今年度は特殊事情のため、専攻生以外の受講はできないこととする。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学、（変動）地形学、第四紀学
＜研究テーマ＞
プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究
＜主要研究業績＞
前杢英明ほか（2005）：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究．地理科学, vol.60-3，pp.136-142.
Maemoku, H. et.al.（1997）：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.
Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 – 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】
This course deals with the research instruction to complete doctor thesis on Geomorphology and Quaternary sciences.
The goal of this course is to complete doctor thesis.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Your overall grade in this class will be decided based on the following; Presentation 50%,in course contribution 50%.

GEO700B5（地理学 / Geography 700）

地理学特別演習Ⅰ

小原　丈明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本科目は，受講生が博士論文を執筆することを念頭に置いた授業です。具体的には，受講生が自らの研究内容に関する報告を行い，それに対する議論を通じて研究の進捗状況を確認するとともに，受講生の博士論文の研究に関連する研究動向や研究手法を広げ，高めることを目的とします。

【到達目標】
本授業を通じて，受講生が自らの研究を進展させることを目標とします。具体的には，研究内容のプレゼンテーションおよびディスカッションを通じて受講生が各自の研究を向上させ，そして，自らの研究の成果を学会発表や学術誌への投稿という形で公表できるようにすることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は演習科目であることから，主として，受講生による研究内容のプレゼンテーションと，それに関するディスカッションによって授業を展開します。
また，本授業は演習（ゼミナール）形式ですので，課題等のフィードバックは適宜行います。
なお，今年度，本授業は基本的には対面形式で行いますが，場合によっては，オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・進め方・目標についての説明・確認／具体的な授業計画の調整・確認
第2回	研究内容および研究計画の紹介①	受講生による研究内容の概要および研究計画の紹介と意見交換①
第3回	研究内容および研究計画の紹介②	受講生による研究内容の概要および研究計画の紹介と意見交換②
第4回	研究内容の報告①	受講生による研究の中間報告および議論①
第5回	研究内容の報告②	受講生による研究の中間報告および議論②
第6回	研究分野のレビュー①	受講生の研究関連分野の動向に関する整理および議論①
第7回	研究分野のレビュー②	受講生の研究関連分野の動向に関する整理および議論②
第8回	研究内容の報告③	受講生による研究の中間報告および議論③
第9回	研究内容の報告④	受講生による研究の中間報告および議論④
第10回	研究手法の確認・検討①	受講生の研究に関わる研究手法（調査方法，分析方法など）の確認および議論①
第11回	研究手法の確認・検討②	受講生の研究に関わる研究手法（調査方法，分析方法など）の確認および議論②
第12回	研究内容の報告⑤	受講生による研究の中間報告および議論⑤
第13回	研究内容の報告⑥	受講生による研究の中間報告および議論⑥
第14回	課題の提示および方向性の確認	春学期を通じての受講生の研究の取り組みに対する課題の提示／今後の方向性の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は各回4時間を標準とするが，研究を進め，論文を作成するには多くの時間が必要であるため，その限りではありません。
また，受講生が自らの研究を進展させておくことと共に，常に関連分野の研究動向を把握するよう努めることが求められます。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用しません。

【参考書】
特定の参考書は設定しませんが，受講生の研究内容に関わる文献すべてが参考書との扱いになります。

【成績評価の方法と基準】
受講生による各種プレゼンテーション：50％，ディスカッション：50％で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】
基本的には受講生の研究を進捗させることを第一の目的とする授業ですが，視野を広げ，関連分野の知識・方法論を修得することも視野に入れて授業を行います。

【その他の重要事項】
秋学期開講の「地理学特別演習Ⅱ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞
都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline (in English)】
The aims of this course are to help students make progress each doctoral dissertation and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.
Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 4 hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50％).

GEO700B5（地理学 / Geography 700）

地理学特別演習 II

小原　丈明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本科目は，受講生が博士論文を執筆することを念頭に置いた授業です。具体的には，受講生が自らの研究内容に関する報告を行い，それに対する議論を通じて研究の進捗状況を確認するとともに，受講生の博士論文の研究に関連する研究動向や研究手法を広げ，高めることを目的とします。

【到達目標】
本授業を通じて，受講生が自らの研究を進展させることを目標とします。具体的には，研究内容のプレゼンテーションおよびディスカッションを通じて受講生が各自の研究を向上させ，そして，自らの研究の成果を学会発表や学術誌への投稿という形で公表できるようにすることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は演習科目であることから，主として，受講生による研究内容のプレゼンテーションと，それに関するディスカッションによって授業を展開します。
また，本授業は演習（ゼミナール）形式ですので，課題等のフィードバックは適宜行います。
なお，今年度，本授業は基本的には対面形式で行いますが，場合によっては，オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・進め方・目標についての説明・確認／具体的な授業計画の調整・確認
第2回	研究内容の報告①	受講生による研究の中間報告および議論①
第3回	研究内容の報告②	受講生による研究の中間報告および議論②
第4回	研究内容の報告③	受講生による研究の中間報告および議論③
第5回	研究内容の報告④	受講生による研究の中間報告および議論④
第6回	研究内容の報告⑤	受講生による研究の中間報告および議論⑤
第7回	研究内容の報告⑥	受講生による研究の中間報告および議論⑥
第8回	研究内容の報告⑦	受講生による研究の中間報告および議論⑦
第9回	研究内容の報告⑧	受講生による研究の中間報告および議論⑧
第10回	研究内容の報告⑨	受講生による研究の中間報告および議論⑨
第11回	研究内容の報告⑩	受講生による研究の中間報告および議論⑩
第12回	研究内容の報告⑪	受講生による研究の中間報告および議論⑪
第13回	研究内容の報告⑫	受講生による研究の中間報告および議論⑫
第14回	課題の提示および方向性の確認	秋学期を通じての受講生の研究の取り組みに対する課題の提示／今後の方向性の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は各回4時間を標準とするが，研究を進め，論文を作成するには多くの時間が必要であるため，その限りではありません。
また，受講生が自らの研究を進展させておくことと共に，常に関連分野の研究動向を把握するよう努めることが求められます。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用しません。

【参考書】
特定の参考書は設定しませんが，受講生の研究内容に関わる文献すべてが参考書との扱いになります。

【成績評価の方法と基準】
受講生による各種プレゼンテーション：50％，ディスカッション：50％で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】
基本的には受講生の研究を進捗させることを第一の目的とする授業ですが，視野を広げ，関連分野の知識・方法論を修得することも視野に入れて授業を行います。

【その他の重要事項】
春学期開講の「地理学特別演習Ⅰ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞
都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline (in English)】
The aims of this course are to help students make progress each doctoral dissertation and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.
Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 4 hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50％).

GEO700B5（地理学 / Geography 700）

地理学特別演習Ⅰ

佐々木　達

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習は，博士論文を作成するための構想と準備をするためのものである。受講生は，①自分の研究に関するフレームワークを構築するために文献・論文を講読し，②統計資料を検討することで進捗状況を報告し，③博士論文の構想について議論をする。それらを通じて，博士論文の研究に関連する研究動向や研究手法を広げ，研究水準を高めることを目的とします。

【到達目標】
到達目標は，博士論文の作成に必要な研究論文の発表，研究内容の進展である。受講生は，自身の研究内容を紹介し，議論することを通じて，研究の成果を学会発表や学術誌への投稿という形で公表できるようにすることを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の進め方は，受講生による研究内容のプレゼンテーションと，それに関するディスカッションである。研究内容の報告としては，文献紹介，統計資料の検討，学会発表の準備，作成した論文の検討などである。これらの課題等のフィードバックは適宜行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・進め方・目標についての説明・確認
第2回	研究計画の紹介①	受講生による研究計画の紹介とディスカッション①
第3回	研究計画の紹介②	受講生による研究計画の紹介とディスカッション②
第4回	研究計画の紹介③	受講生による研究計画の紹介とディスカッション③
第5回	研究内容の報告①	受講生による研究の中間報告と批判的検討①
第6回	研究内容の報告②	受講生による研究の中間報告と批判的検討②
第7回	研究内容の報告③	受講生による研究の中間報告と批判的検討③
第8回	研究方法と調査計画①	研究動向，分析方法，調査方法の確認①
第9回	研究方法と調査計画②	研究動向，分析方法，調査方法の確認②
第10回	研究方法と調査計画③	研究動向，分析方法，調査方法の確認③
第11回	調査結果の論点整理①	調査結果のオリジナリティの検討①
第12回	調査結果の論点整理②	調査結果のオリジナリティの検討②
第13回	調査結果の論点整理③	調査結果のオリジナリティの検討③
第14回	課題の提示とまとめ	春学期を通じての受講生の研究の取り組みに対する課題の提示

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とするが，論文を作成するには多くの時間が必要であるので，時間を惜しみなく研究に注いでください。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用しない。

【参考書】
特定の参考書は設定しませんが，受講生の研究内容に関わる文献や資料を適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
受講生による各種プレゼンテーション：50％，ディスカッション：50％で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
基本的には受講生の研究を進捗させることを第一の目的とする授業であるが，関連分野の知識・方法論を修得することも視野に入れて授業を実施する。

【その他の重要事項】
秋学期開講の「地理学特別演習Ⅱ」（佐々木担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
経済地理学・農業地理学
＜研究テーマ＞
日本農業，大規模経営，食料供給，産地形成

【Outline (in English)】
The aims of this course are to help students make progress each doctoral dissertation. Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50％).

GEO700B5（地理学 / Geography 700）

地理学特別演習 II

佐々木　達

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本演習は，博士論文を作成するための構想と準備をするためのものである。受講生は，①自分の研究に関するフレームワークを構築するために文献・論文を講読し，②統計資料を検討することで進捗状況を報告し，③博士論文の構想について議論をする。それらを通じて，博士論文の研究に関連する研究動向や研究手法を広げ，研究水準を高めることを目的とします。

【到達目標】
到達目標は，博士論文の作成に必要な研究論文の発表，研究内容の進展である。受講生は，自身の研究内容を紹介し，議論することを通じて，研究の成果を学会発表や学術誌への投稿という形で公表できるようにすることを目指します。また，博士論文の作成を念頭に置いた共同調査を実施し，受講生の研究を深めることにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の進め方は，受講生による研究内容のプレゼンテーションと，それに関するディスカッションである。研究内容の報告としては，文献紹介，統計資料の検討，学会発表の準備，作成した論文の検討などである。これらの課題等のフィードバックは適宜行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・進め方・目標についての説明・確認
第2回	研究の進捗状況報告①	受講生による研究内容の紹介とディスカッション①
第3回	研究の進捗状況報告②	受講生による研究計画の紹介とディスカッション②
第4回	研究の進捗状況報告③	受講生による研究計画の紹介とディスカッション③
第5回	研究論文の内容検討①	受講生による研究論文の構想発表と中間報告①
第6回	研究論文の内容検討②	受講生による研究論文の構想発表と中間報告②
第7回	研究論文の内容検討③	受講生による研究論文の構想発表と中間報告③
第8回	共同調査の計画①	調査計画の作成と研究方法の設定①
第9回	共同調査の計画②	調査計画の作成と研究方法の設定②
第10回	共同調査の計画③	調査計画の作成と研究方法の設定③
第11回	博士論文作成の論点整理①	研究成果のオリジナリティの検討①
第12回	博士論文作成の論点整理②	研究成果のオリジナリティの検討②
第13回	博士論文作成の論点整理③	研究成果のオリジナリティの検討③
第14回	課題の提示とまとめ	秋学期を通じての受講生の研究の評価と課題の提示

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とするが，論文を作成するには多くの時間が必要であるので，時間を惜しみなく研究に注いでください。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用しない。

【参考書】
特定の参考書は設定しませんが，受講生の研究内容に関わる文献や資料を適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
受講生による各種プレゼンテーション：50％，ディスカッション：50％で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
基本的には受講生の研究を進捗させることを第一の目的とする授業であるが，関連分野の知識・方法論を修得することも視野に入れて授業を実施する。

【その他の重要事項】
春学期開講の「地理学特別演習Ⅰ」（佐々木担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
経済地理学・農業地理学
＜研究テーマ＞
日本農業，大規模経営，食料供給，産地形成

【Outline (in English)】
The aims of this course are to help students make progress each doctoral dissertation. Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50％).

GEO700B5（地理学 / Geography 700）

地理学特別演習Ⅰ

米家　志乃布

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、受講生が博士論文を執筆するための準備を行います。授業内では,受講生が自らの研究の進捗状況に関する報告を行い，それに対する議論を通して,受講生の博士論文作成に関連する学術研究の動向や研究手法を確認し，学術研究として高めることを目的とします。

【到達目標】
本授業では，受講生が自らの研究を進展させることを目標とします。具体的には，研究のプレゼンテーション、議論を通じて受講生が研究を向上させ、研究成果を学会発表や学術誌への投稿という形で公表できるようにすることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は演習科目であることから，主として，受講生による研究内容のプレゼンテーションと，それについての議論によって授業を進行します。
また，本授業は演習（ゼミナール）形式ですので，課題等のフィードバックは適宜行います。
なお，本授業は基本的には対面形式で行いますが，場合によっては，オンライン形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・進め方・目標についての説明・確認／具体的な授業計画の調整・確認
第2回	研究内容および研究計画の紹介①	受講生による研究内容の概要および研究計画の紹介と意見交換①
第3回	研究内容および研究計画の紹介②	受講生による研究内容の概要および研究計画の紹介と意見交換②
第4回	研究内容の報告①	受講生による研究の中間報告および議論①
第5回	研究内容の報告②	受講生による研究の中間報告および議論②
第6回	研究分野のレビュー①	受講生の研究関連分野の動向に関する整理および議論①
第7回	研究分野のレビュー②	受講生の研究関連分野の動向に関する整理および議論②
第8回	研究内容の報告③	受講生による研究の中間報告および議論③
第9回	研究内容の報告④	受講生による研究の中間報告および議論④
第10回	研究手法の確認・検討①	受講生の研究に関わる研究手法（調査方法，分析方法など）の確認および議論①
第11回	研究手法の確認・検討②	受講生の研究に関わる研究手法（調査方法，分析方法など）の確認および議論②
第12回	研究内容の報告⑤	受講生による研究の中間報告および議論⑤
第13回	研究内容の報告⑥	受講生による研究の中間報告および議論⑥
第14回	課題の提示および方向性の確認	春学期を通じての受講生の研究の取り組みに対する課題の提示／今後の方向性の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とするが，研究を進め，論文を作成するには多くの時間が必要であるため，その限りではありません。
また，受講生が自らの研究を進展させておくことと共に，常に関連分野の研究動向を把握するよう努めることが求められます。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は使用しません。

【参考書】
特定の参考書は指定しません。受講生の博士論文の内容に関わる文献すべてが参考文献となります。

【成績評価の方法と基準】
受講生による各種プレゼンテーション：50％，ディスカッション：50％で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
Googleドライブやクラスルームなどを授業時に利用します。PCやタブレットなどを準備してください。

【その他の重要事項】
秋学期開講の「地理学特別演習Ⅱ」（米家担当）も必ず受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞歴史地理学
＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学、地図史研究、江戸東京研究、アートと地理学研究
＜主要研究業績＞
『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史研究』法政大学出版局、2021年
『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023年
『アートの地理学』古今書院、2025年など

【Outline (in English)】
The aims of this course are to help students make progress each doctoral dissertation and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.
Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50％).

GEO700B5（地理学 / Geography 700）

地理学特別演習 II

米家　志乃布

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、受講生が博士論文を執筆するための準備を行います。授業内では,受講生が自らの研究の進捗状況に関する報告を行い，それに対する議論を通して,受講生の博士論文作成に関連する学術研究の動向や研究手法を確認し，学術研究として高めることを目的とします。

【到達目標】
本授業では，受講生が自らの研究を進展させることを目標とします。具体的には，研究のプレゼンテーション、議論を通じて受講生が研究を向上させ、研究成果を学会発表や学術誌への投稿という形で公表できるようにすることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は演習科目であることから，主として，受講生による研究内容のプレゼンテーションと，それに関する議論によって授業を進行します。
また，本授業は演習形式ですので，課題等のフィードバックは授業内に行います。
なお，今年度，本授業は基本的には対面形式で行います。場合によっては，オンライン形式で行う可能性もあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・進め方・目標についての説明・確認／具体的な授業計画の調整・確認
第2回	研究内容の報告①	受講生による研究の中間報告および議論①
第3回	研究内容の報告②	受講生による研究の中間報告および議論②
第4回	研究内容の報告③	受講生による研究の中間報告および議論③
第5回	研究内容の報告④	受講生による研究の中間報告および議論④
第6回	研究内容の報告⑤	受講生による研究の中間報告および議論⑤
第7回	研究内容の報告⑥	受講生による研究の中間報告および議論⑥
第8回	研究内容の報告⑦	受講生による研究の中間報告および議論⑦
第9回	研究内容の報告⑧	受講生による研究の中間報告および議論⑧
第10回	研究内容の報告⑨	受講生による研究の中間報告および議論⑨
第11回	研究内容の報告⑩	受講生による研究の中間報告および議論⑩
第12回	研究内容の報告⑪	受講生による研究の中間報告および議論⑪
第13回	研究内容の報告⑫	受講生による研究の中間報告および議論⑫
第14回	課題の提示および方向性の確認	秋学期を通じての受講生の研究の取り組みに対する課題の提示／今後の方向性の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とするが，研究を進め，論文を作成するには多くの時間が必要であるため，その限りではありません。
また，受講生が自らの研究を進展させておくことと共に，常に関連分野の研究動向を把握するよう努めることが求められます。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは指定しません。

【参考書】
特定の参考書は指定しませんが，受講生の博士論文の内容に関わる文献すべてが参考文献の扱いになります。

【成績評価の方法と基準】
受講生による各種プレゼンテーション：50％，ディスカッション：50％で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
Googleドライブやクラスルームなどを授業時に利用します。PCやタブレットなどを準備してください。

【その他の重要事項】
春学期開講の「地理学特別演習Ⅰ」（米家担当）も必ず受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞歴史地理学
＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学、地図史研究、江戸東京研究、アートと地理学研究
＜主要研究業績＞
『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史研究』法政大学出版局、2021年
『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023年
『アートの地理学』古今書院、2025年など

【Outline (in English)】
The aims of this course are to help students make progress each doctoral dissertation and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.
Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50％).

GEO700B5（地理学 / Geography 700）

地理学特別演習 I

山口　隆子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
気候学に関わる博士論文作成のための研究指導

【到達目標】
研究テーマ設定、既存研究論文紹介、研究手法について発表し、議論を重ねることによって、博士論文を仕上げていく。またその過程において、学会発表や学術誌への投稿の準備をすることも目標の一つとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
各自の研究テーマに関する既存研究論文紹介・手法・解析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。作成したレジュメに対してのフィードバックは、講義内で行います。
基本的には対面形式で行いますが、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本演習の趣旨の説明
第2回	研究テーマの設定１	受講生の研究テーマの意見交換１
第3回	研究テーマの設定２	受講生の研究テーマの意見交換２
第4回	研究内容の紹介１	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション１
第5回	研究内容の紹介２	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション２
第6回	研究内容の紹介３	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション３
第7回	研究内容の紹介４	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション４
第8回	受講生の研究内容１	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論１
第9回	受講生の研究内容２	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論２
第10回	受講生の研究内容３	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論３
第11回	受講生の研究内容４	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論４
第12回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導１	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１
第13回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導２	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導２
第14回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導３	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導３

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備・復習時間は、各2時間以上とします。研究テーマに関連する動向を常に把握しておくこと。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。

【参考書】
特定の参考書は指定しませんが、研究内容に関連する文献や資料を適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン

【その他の重要事項】
地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、自然環境全般の実践的な課題への取り組み方を指導していきます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学、気候学、生気象学
＜研究テーマ＞
ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響
＜主要研究業績＞
山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 – 128.
山口隆子（2022）：芝棟の現存状況と芝棟植物の分布特性について．日本生気象学会雑誌，Vol.58,75-86.

【Outline (in English)】
This course deals with the research instruction to complete doctor thesis on climatology.
The goal of this course is to complete doctor thesis.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Your overall grade in this class will be decided based on the following; Presentation 50%,in course contribution 50%.

GEO700B5（地理学 / Geography 700）

地理学特別演習 II

山口　隆子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
気候学に関わる博士論文作成のための研究指導

【到達目標】
既存研究論文紹介、研究手法について発表し、議論を重ねることによって、博士論文を仕上げていく。またその過程において、学会発表や学術誌への投稿の準備をすることも目標の一つとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
各自の研究テーマに関する既存研究論文紹介・手法・解析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。作成したレジュメに対してのフィードバックは、講義内で行います。
基本的には対面形式で行いますが、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本演習の趣旨の説明
第2回	受講生の研究内容１	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論１
第3回	受講生の研究内容２	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論２
第4回	受講生の研究内容３	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論３
第5回	受講生の研究内容４	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論４
第6回	受講生の研究内容５	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論５
第7回	受講生の研究内容６	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論６
第8回	受講生の研究内容７	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論７
第9回	受講生の研究内容８	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論８
第10回	受講生の研究内容９	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論９
第11回	受講生の研究内容１０	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論１０
第12回	受講生の研究内容１１	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１１
第13回	受講生の研究内容１２	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１２
第14回	受講生の研究内容１３	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導１３

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。研究テーマに関連する動向を常に把握しておくこと。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。

【参考書】
特に指定しないが、研究内容に関する文献や資料を適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン

【その他の重要事項】
地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、自然環境全般の実践的な課題への取り組み方を指導していきます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
自然地理学、気候学、生気象学
＜研究テーマ＞
ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響
＜主要研究業績＞
山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1－128.
山口隆子（2022）：芝棟の現存状況と芝棟植物の分布特性について．日本生気象学会雑誌，Vol.58,75-86.

【Outline (in English)】
This course deals with the research instruction to complete doctor thesis on climatology.
The goal of this course is to complete doctor thesis.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Your overall grade in this class will be decided based on the following; Presentation 50%,in course contribution 50%.

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

自然地理学特別講義Ⅰ

三坂　育正

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
環境配慮型の都市やまちを推進する上で重要となる都市環境問題を取り上げ、問題の現状や要因、影響、対策に関する知識・スキルを修得し、都市環境の改善に向けた専門知識や対策実践による問題解決能力を養成する。

【到達目標】
気候変動やヒートアイランドなど、都市に関係する環境変化に伴い発生する自然災害やエネルギーなどの新たな都市環境問題に対して、広い視野と俯瞰的な視点をもって発見し、対応を考えることができるようになる 。
環境共生都市、環境配慮型都市等に関して、評価手法や適用技術などを用いて、環境性や自らの考えを明確かつ論理的に組み立て、具体的に説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
講義を中心に進める。また、環境調査の実習や環境配慮空間の調査等のフィールドワークも併せて実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス、環境配慮型都市	都市や建築と環境の関係 環境配慮型・環境共生の都市・建築
第2回	都市の風環境	ビル風と都市の通風
第3回	都市の水環境	都市型洪水と親水空間
第4回	都市の熱環境(1)	ヒートアイランド現象の現状・要因・影響
第5回	都市の熱環境(2)	ヒートアイランド対策（緩和策）
第6回	都市の熱環境(3)	ヒートアイランド対策（適応策と実践）
第7回	都市の緑と生物多様性	建物・都市の緑化技術 生物多様性と生態系配慮
第8回	温熱快適性の基礎	体感指標・温熱快適性指標
第9回	環境配慮技術の実践	大丸有地区におけるヒートアイランド対策
第10回	温熱快適性の測定(1)	温熱4要素（気温・湿度・風速・放射）の測定
第11回	温熱快適性の測定(2)	温熱快適性指標(WBGT・SET)の算出
第12回	温熱快適性の測定(3)	データ分析・考察
第13回	環境配慮技術の調査(1)	ヒートアイランド対策技術の実施例
第14回	環境配慮技術の調査(2)	ヒートアイランド対策技術の実施例

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備学修として、学部レベルの気候（都市気候関連）に関する本や講義ノートを読むようにしてください。また、環境配慮された都市空間と評される空間について調べておいてください。
復習として、講義中に課すレポートに取り組んでください。

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しません。
講義では、教員のオリジナル講義資料を配布します。

【参考書】
日本建築学会編：「都市の環境設備計画」, 森北出版, ISDN：978-4-627-55351-4
森山正和編著：「ヒートアイランドの対策と技術」, 学芸出版社, ISDN：978-4761523459

【成績評価の方法と基準】
講義時の小テスト（第1〜7回講義）：50％
レポート（2回：温熱快適性の測定、環境配慮空間等の調査）：50％

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません

【学生が準備すべき機器他】
パソコンを持参することが望ましい。
（第8回、第10〜12回は必須）

【その他の重要事項】
【演習】
第10〜12回、第13〜14回は、それぞれ集中として土曜日（仮）に実施する予定です。
実施日については、第1回で調整して決めます。その関係で、講義の順序が変更となる可能性があります。
【実務経験】
担当教員は、株式会社竹中工務店技術研究所で、建築空間における環境評価・制御、省エネルギー、ヒートアイランド対策を中心とした研究開発に関する実務経験があり、設計支援等の実績もある。地球環境や都市環境に配慮して建築・都市を考えるうえで必要な考え方や解析手法などについて、実務経験の立場から事例を通して伝えることで、より高度な知識やスキル修得するための指導を行う。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞環境気象学、建築・都市環境
＜研究テーマ＞都市熱環境、暑熱環境対策
＜主要研究業績＞学術論文40編超、特許17件（共願含）、環境省・東京都等の委員を歴任、講演多数

【Outline (in English)】
・Course outline
The aim of this course is to help students acquire knowledge and skills for solving urban environmental problems.
・Learning Objective
At the end of the course, students are expected to consider responses to issues such as natural disasters and energy issues that arise from changes in the urban environment with a broad and holistic perspective.
Learning activities outside of classroom
・Two-credit course
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content
・Grading Criteria /Policies
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Lecture test: 50%、Reports(2 times : Thermal comfort experiments, Environmental friendly spaces survey) : 50%

GEO500B5（地理学 / Geography 500）

自然地理学特別講義 II

澤柿　教伸

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
氷河・永久凍土・周氷河など，寒冷地域・雪氷圏に特有な地形とその形成プロセスを理解するとともに，それらが，第四紀という時間スケールの中で変遷してきた過程および現代の人類社会に及ぼしている影響について理解することが本授業の第一の目的である．それにより，物質・エネルギー循環の時空間的な理解にもとづき，過去から未来にわたる気候変動の復元・予測ができるようになることを目指す．

【到達目標】
・地形形成プロセスや氷期・間氷期サイクルの気候変動の知識に基づいて，氷河とその周辺に見られる地形，および永久凍土の発達・盛衰過程を解釈・説明できるようになる．
・人類の進化と文明の成り立ちや将来予測についても合理的に思考できるようになる．
・寒冷雪氷圏環境の知見に基づき，グローバルな環境問題に対して専門的な解説や提言ができるようになる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
夏期集中（4時限X3日 + 最終日2時限　=14時限）で実施します。通常の座学（LC）に加えて，グループワークやディベート（GW）を適宜とりいれます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	自己紹介，趣旨説明（LC,GW）
第2回	氷河学と氷河地質学/地形学	氷河の定義と氷河地質学/地形学の関連領域について（LC,GW）
第3回	寒冷地域・雪氷圏の自然環境	氷河・永久凍土の実態とそれらの分布を規定する環境要因（LC,GW）
第4回	氷河・永久凍土の気候学的性質	氷河と永久凍土のなりたち（LC,GW）
第5回	氷河・永久凍土の物理特性	氷河の運動様式と周氷河プロセス（LC,GW）
第6回	氷河・岩石氷河の形態	氷河や岩石氷河の形態分類と特徴（LC,GW）
第7回	氷河の表面と底面	氷河表面岩屑と氷河底定積物，および底面での諸過程（LC,GW）
第8回	氷河作用による地形	氷河浸食地形・氷河堆積物の地形（LC,GW）
第9回	氷河周辺の環境	氷河下流域の堆積環境と氷河湖（LC,GW）
第10回	氷河変動の時間的枠組と復元方法	氷期・間氷期サイクル，更新世後期の環境変動（LC,GW）
第11回	氷河地形編年	氷河地形編年研究の実例と残された課題（LC,GW）
第12回	地球温暖化と氷河変動	地球温暖化問題と氷河変動（LC,GW）
第13回	雪氷圏の環境変動と地球温暖化	IPCC報告書にみる雪氷圏の位置づけと意義（LC,GW）
第14回	まとめと試験	全体のまとめと評価のために授業内試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業支援システムを通じて配布されるレジュメを毎回持参してください。
・問題発掘課題を事前に実施して授業内のディスカッションに備えてください。.
・本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・氷河地形学（岩田修二著，東京大学出版会，2011年）

【参考書】
・Glaciers and Glaciation 2nd Edition (Benn, D. and Evans D.J.A., Hodder Arnold Publication, 2010)
・Glacial Geology 2nd edition: Ice Sheets and Landforms (Ed;Bennett, M.M. and Glasser, N.F., Wiley-Blackwell, 2009)
・The Physics of Glaciers 4th Edition (Cuffey, K.M., Paterson, W.S.B., 2010)

【成績評価の方法と基準】
・集中実施日ごとにリアクションペーパーを提出し，その記述内容によって授業への参加度や理解度を評価 (50%)
・集中最終日に実施する授業内試験による評価 (50%)

【学生の意見等からの気づき】
・前例がないため特にありません。

【学生が準備すべき機器他】
・授業資料配付および課題提出等のために授業支援システム等を利用する．

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
・氷河地形/地質学
・第四紀学
・極域科学
＜研究テーマ＞
・氷河学と地質学の境界領域で，氷河や氷床とその周辺環境を時空間的に記述・復元する研究
＜主要研究業績＞
・日高山脈の第四紀後期氷河作用の復元
・南極氷床縁辺域の氷床変動
・氷河底プロセスにおける水流プロセスの影響評価
・氷河湖決壊のリスクアセスメント
・数値モデルによる氷河平衡線高度の復元

【Outline (in English)】
The primary goal of this course is to understand the unique landforms and formation processes found in cold regions and cryosphare, such as glaciers, permafrost, and periglacial environments. Additionally, the course aims to comprehend the processes by which these features have evolved over the Quaternary period and the impacts they have on contemporary human societies. Through this understanding, the course aims to enable the restoration and prediction of climate change from the past to the future, based on spatiotemporal comprehension of material and energy cycles.

HUG500B5（人文地理学 / Human geography 500）

人文地理学特別講義 I

川添　航

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この講義では，人文地理学のなかでも宗教や国際移住，観光などを対象とした研究の進め方について具体的な研究事例を踏まえて解説する．また，調査・分析の手順や学会発表のスキル，論文執筆の流れについても紹介する．

【到達目標】
具体例を通じて，身の回りの現象をどのように地理学の研究対象とするのかについて考えることができるようになる．また，講義で扱った事例を通じて，宗教や観光を含むさまざまなテーマの研究計画・研究方法を構想し，修士論文を執筆できる能力を習得する．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義と演習を組み合わせながら講義を進める．講義末課題としてコメントシートを提出し，次回の授業でフィードバックを行う．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	人文地理学の基本的な見方・考え方について解説する．
第2回	人文地理学の研究・調査方法：研究・調査計画の立案	人文地理学における研究・調査計画の立案について解説する．
第3回	人文地理学の研究・調査方法：調査の実践と分析	人文地理学における調査の実践と分析，研究成果のアウトプットについて解説する．
第4回	「宗教の地理学」の研究視点（前半）	宗教現象を対象とした地理学的研究（宗教の地理学）の研究視点について，2010年代までの研究動向をもとに解説する．
第5回	「宗教の地理学」の研究視点（後半）	宗教現象を対象とした地理学的研究（宗教の地理学）の研究視点について，2010年代以降の研究動向をもとに解説する．
第6回	研究事例紹介①：国際移住と宗教（前半）	日本における国際移住と宗教の結びつきを対象とした研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第7回	研究事例紹介②：国際移住と宗教（後半）	韓国における国際移住と宗教の結びつきを対象とした研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第8回	研究事例紹介③：地域社会の変化と宗教（前半）	少子高齢化と宗教の結びつきを対象とした研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第9回	研究事例紹介④：地域社会の変化と宗教（後半）	都市中心市街地の変容と祭礼の結びつきを対象とした研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第10回	研究事例紹介⑤：ツーリズムと宗教（前半）	巡礼について扱った研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第11回	研究事例紹介⑤：ツーリズムと宗教（後半）	新たな形態の宗教ツーリズムについて扱った研究事例を通じて，「宗教の地理学」の研究方法や調査・分析手法について検討する．
第12回	受講生による研究事例紹介（前半）	受講生による研究事例紹介を通じて，人文地理学における研究方法や調査・分析手法について検討する（前半）．
第13回	受講生による研究事例紹介（後半）	受講生による研究事例紹介を通じて，人文地理学における研究方法や調査・分析手法について検討する（後半）．
第14回	講義のまとめ	講義のまとめと期末課題の説明を行う．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講義中に紹介した参考文献や論文については各自で講読しておくこと．第12回，第13回の講義では受講生による研究事例の紹介を行うため，余裕を持って準備を行うこと（詳細は講義中に説明する）．本授業の準備学習・復習時間は，各2時間を標準とする．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
参考資料や論文については講義中で紹介する．

【成績評価の方法と基準】
平常点（講義末課題）30％と講義内での発表30％，期末課題40％で評価を行う．

【学生の意見等からの気づき】
講義末課題としてコメントシートを提出し，次回の授業でフィードバックを行う．

【学生が準備すべき機器他】
講義用ノートを持参すること．

【その他の重要事項】
特になし．

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
宗教の地理学，観光地理学
＜研究テーマ＞
①東アジアの社会変動と宗教現象，②観光と地域社会
＜主要研究業績＞
川添 航 2023. 国際移住者の宗教活動に関する地理学的研究の展開―1990隼年代以降の英語圏における研究動向を中心に―. 地理空間学会「地理空間」第16巻, pp.1-19.
川添 航 2020. 在留外国人の社会関係形成・維持における宗教施設の役割―茨城県南部におけるフィリピン人を事例に―. 日本地理学会「地理学評論」第93巻, pp.221-238.

【Outline (in English)】
This course provides an overview of research approaches in human geography, focusing particularly on studies of religious and tourism phenomena through specific case examples. It also introduces procedures for field investigation and data analysis, as well as skills for academic presentations and the process of writing research papers.
Through concrete examples, students will learn how everyday phenomena can be approached as subjects of geographical study. By examining the case studies introduced in class, they will also develop the ability to design research plans and methodologies on a variety of topics — including religion and tourism — and acquire the skills necessary to write a master's thesis.

Students are expected to independently read and review the reference materials and academic papers introduced during the lectures. In Weeks 12 and 13, students will give presentations on their own research projects; therefore, sufficient preparation in advance is required (details will be explained in class). The standard preparation and review time for each class is two hours. Evaluation will be based on class participation and assignments (30%), in-class presentations (30%), and a final project (40%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 I

竹島　康博

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
知覚心理学および認知心理学領域での研究テーマを自身の興味に基づいて決定し，必要な研究方法を学びます。先行研究の精読を通して当該分野の研究についての知識を深め，自身の研究計画の立案のトレーニングを行います。立案した計画で実験データを取得し，分析・報告を行うことで研究活動に必要な要素を学ぶことが本講義の目的です。

【到達目標】
先行研究のレビュー，実験計画の立案，データの取得と分析，そして分析結果の解釈を通じて必要なスキルを取得し，受講者自身の研究テーマに関する研究を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式で行い，前半は書籍の指定した節の内容について受講者が発表，教員および受講者同士で議論を行います。後半は，当該書籍で未輪読の節について，受講者が興味を持った説の内容を発表，全員で議論を行います。
毎週の課題の提出およびフィードバックは，授業中ないしDiscordを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方の説明 興味のあるテーマについて発表
第2回	先行研究の精査(1)	自身の研究テーマの関連論文を読んで報告
第3回	先行研究の精査(2)	自身の研究テーマの関連論文を読んで報告
第4回	先行研究の精査(3)	研究テーマに関連した研究手法を学ぶ
第5回	先行研究の精査(4)	研究テーマに関連した研究手法を学ぶ
第6回	研究計画の立案(1)	先行研究を基に研究計画を考える
第7回	研究計画の立案(2)	実験計画や解析方法について検討する
第8回	研究計画の立案(3)	実験として取得するべきデータを検討する
第9回	実験の準備（1）	研究倫理申請書や募集チラシなど実験に必要なものを作成する
第10回	実験の準備(2)	実験に必要な実験プログラム等を作成する
第11回	実験の準備(3)	実験に必要な実験プログラム等を作成する
第12回	実験の報告(1)	実験データに対して計画していた解析を実施した結果を報告
第13回	実験の報告(2)	実験データに対して探索的に行った実験結果について報告
第14回	まとめと今後の展望	実験結果の報告に対する議論をもとに，次の実験の方針を確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献の読み込みや発表資料の作成といった授業準備は，事前に授業時間外に行います。また，各回の内容は目安ですので，学生の研究の進捗にあわせて進めていきます。授業内で指示された活動を復習として行ってください。授業の準備・復習の時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
必要に応じて教員が研究テーマに関連した文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】
授業への参加態度を含めた平常点40%と，研究遂行の進捗度の評価60%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は未開講でした。

【学生が準備すべき機器他】
必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。

【その他の重要事項】
重複履修が可能です。
授業内容は通年で2つの実験を行う計画にしていますが，研究内容に応じて実験の数は変えてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
知覚心理学，認知心理学
＜研究テーマ＞
異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究，視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究
＜主要研究業績＞
竹島 康博 (2024).　視聴覚刺激の提示タイミングに対する同時性知覚の柔軟性　VISION, 36(4), 150-155.
Takeshima, Y. (2024).　The influence of spatial frequency information on temporal synchrony perception on audiovisual stimuli. Perception, 53(11-12), 803-811.
Takeshima, Y. (2023). Change of rapid temporal recalibratgion magnitude for audiovisual asynchrony with modulation of temporal binding window width: A preliminaryh investigation. i-Perception, 14(4), 1-10.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course enables students to determine a research topic in the fields of perceptual psychology and cognitive psychology based on their own interests and to learn the necessary research methods.　Through close reading of prior research, students will deepen their knowledge of research in these fields and develop skills in designing their own research plans.　By collecting experimental data based on their proposed plans and conducting analysis and reporting, students will learn the essential components required for research activities.
[Learning activities]
The goals for students are to acquire the necessary skills through reviewing prior research, designing experimental plans, collecting and analyzing data, and interpreting the results, enabling them to conduct research on their own research topics.
[Learning activities outside of classroom]
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting.
[Grading Criteria /Policy]
Grading will be decided based on class contribution (40%) and assessing the research progress (60%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

竹島　康博

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
知覚心理学および認知心理学領域での研究テーマを自身の興味に基づいて決定し，必要な研究方法を学びます。春学期に実施した実験の結果から，研究課題の遂行のために必要な追加実験について計画・実施し，研究論文という形でアウトプットするための技能を学ぶ。

【到達目標】
受講者の研究課題の解決のために，先行して実施した実験の結果を受けてどのような追加実験を行うべきかを検討し，実験計画の立案，データ収集と解析，結果の解釈をした上で，研究成果の適切なアウトプットができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者が計画した実証的研究を実施する工程を，本授業を通して支援します。受講者が進捗について報告をし，教員および受講者同士で議論しながら，次回までの課題を確認していきます。
毎週の課題の提出およびフィードバックは，授業中ないしDiscordを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	春学期の研究成果の振り返り	春学期に立案した研究計画や実施した実験の結果について確認する
第2回	追加実験実施の準備(1)	研究倫理申請書や募集チラシ等を作成する
第3回	追加実験実施の準備(2)	実験プログラム等を作成する
第4回	追加実験実施の準備(3)	実験プログラムの動作を確認して実験の準備を完了する
第5回	データ分析の準備(1)	解析コードを事前に作成する
第6回	データ分析の準備(2)	動作確認した際の自身のデータを使って，解析コードの挙動を確認する
第7回	データ分析(1)	収集したデータについてメインの解析を行う
第8回	データ分析(2)	収集したデータを確認した上で，副次的な解析を行う
第9回	追加実験結果の解釈(1)	追加実験の結果を確認し，関連する文献を検索しながら解釈する
第10回	追加実験結果の解釈(2)	追加実験の結果を確認し，関連する文献を検索しながら解釈する
第11回	論文の執筆	一連の実験結果のまとめ方の方針を確認する
第12回	研究成果のまとめ(1)	得られた研究の成果から次の研究に繋がる点を議論しつつ確認
第13回	研究成果のまとめ(2)	得られた研究の成果から次の研究に繋がる点を議論しつつ確認
第14回	論文の推敲	まとめの議論内容を踏まえて論文の内容を推敲する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究テーマの設定や文献収集および読み込み，実験プログラムの作成など研究実施に向けての各工程は，基本的に授業時間外に進めます。授業時間内では，これらの作業を進める上で検討が必要なポイントについての議論し，方向性を決めることを中心に活動します。授業内で指示された活動を復習として行ってください。授業の準備・復習の時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
必要に応じて教員が研究テーマに関連した文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】
授業への参加態度を含めた平常点40%と，研究遂行の進捗度の評価60%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は未開講でした。

【学生が準備すべき機器他】
必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。

【その他の重要事項】
重複履修が可能です。
授業内容は通年で2つの実験を行う計画にしていますが，研究内容に応じて実験の数は変えてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
知覚心理学，認知心理学
＜研究テーマ＞
異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究，視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究
＜主要研究業績＞
竹島 康博 (2024).　視聴覚刺激の提示タイミングに対する同時性知覚の柔軟性　VISION, 36(4), 150-155.
Takeshima, Y. (2024).　The influence of spatial frequency information on temporal synchrony perception on audiovisual stimuli. Perception, 53(11-12), 803-811.
Takeshima, Y. (2023). Change of rapid temporal recalibratgion magnitude for audiovisual asynchrony with modulation of temporal binding window width: A preliminaryh investigation. i-Perception, 14(4), 1-10.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course enables students to determine a research topic in the fields of perceptual psychology and cognitive psychology based on their own interests and to learn the necessary research methods.　Based on the results of experiments conducted in the spring semester, students will plan and conduct additional experiments required to carry out their research projects and will acquire the skills necessary to produce their work in the form of a research thesis.
[Learning objectives]
The goals for students are to determine what additional experiments should be conducted based on the results of previously conducted experiments in order to address their research questions, and to appropriately present their research outcomes after planning, collecting data, analyzing results, and interpreting the findings.
[Learning activities outside of classroom]
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting.
[Grading Criteria /Policy]
Grading will be decided based on class contribution (40%) and assessing the research progress (60%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習Ⅰ

木村　健太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自身の関心のある心理学の研究テーマについて、先行研究の調査と既存の研究手法を整理し、適切な研究計画を立案する能力をゼミ形式の授業の中で身につけます。

【到達目標】
自身の関心のある研究テーマについて、適切な先行研究の調査を実施、先行研究の課題を抽出することで研究課題を設定し、研究計画を立案するスキルの獲得を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・授業は演習方式で進めます。受講生による自分の研究の発表とそれにもとづく議論が中心となります。
・授業内で取り扱う関連論文は、受講生と教員で相談して適切な論文を選択します。
・論文及び受講生の研究に関連する生理心理学の実験手法（脳波、心電図など）について実習形式で学ぶこともあります。
・授業時間内に質疑応答の時間を設け、疑問や問題について議論します。
・授業中に出される課題への回答や授業に関する疑問・感想を記載したリアクションペーパーを提出してもらい、次の授業でリアクションペーパーへのフィードバックを含めた授業を実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方、興味のあるテーマの確認
第2回	先行研究の調査（1）	研究テーマに関連する論文の検索方法の解説
第3回	先行研究の調査（2）	研究テーマに関連する論文の検索の実施
第4回	先行研究の調査（3）	研究テーマに関連する論文の検索から主要論文を選択、発表
第5回	先行研究の方法論の検討（1）	研究テーマに深く関連する論文の研究手法の解説
第6回	先行研究の方法論の検討（2）	研究テーマに深く関連する論文の研究手法の発表
第7回	問題の設定	先行研究の課題の抽出
第8回	研究課題の設定	研究課題の明確化、研究目的の設定
第9回	仮説の設定	研究計画の策定、研究仮説の設定
第10回	研究計画の立案	研究計画書の作成、倫理申請書の作成
第11回	研究計画書の発表（1）	研究計画の発表、議論
第12回	研究計画書の修正	フィードバックにもとづく研究計画の修正
第13回	研究計画書の発表（2）	修正した研究計画書の発表
第14回	まとめ	春学期の授業の振り返り、夏季休暇中の作業の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業時間内は、発表にもとづく議論や解説を中心に行うため、論文などの情報収集、実験準備、資料作成などの作業は授業時間外に行います。
・特に、実験に用いるプログラムの作成、データ取得、データの分析などは授業時間外に実施することになるため、授業時間を有意義に活用するためにも事前準備が重要になります。
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間合計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特に指定しません。

【参考書】
適宜必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
成績は、平常点50%（授業への積極的な関与等）、発表・レポート50%として総合点により評価します。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度は未開講でした。

【学生が準備すべき機器他】
・必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。
・脳波室で実験機器を用いた授業を行うことがあります。

【その他の重要事項】
・授業の進め方や授業計画、授業目標の説明をしますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。
・オフィスアワー：春・秋学期ともに木曜日3限（BT1109研究室）。訪問希望者は、メール（k.kimura[at]hosei.ac.jp）等で前日までに連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
生理心理学、認知神経科学、感情科学
＜研究テーマ＞
感情が認知機能や意思決定に作用する認知神経学的機序の研究、内受容感覚と脳ー身体の相互作用機序についての研究
＜主要研究業績＞
Kimura, K, Kanayama, N., &Katahira, K. (2023). Cardiac cycle affects risky decision-making.Biological psychology, 176, 108471
Kimura, K., Sawada, H., &Katayama, J. (2018). Outcome evaluations in group decision-making using authority rule: An electrophysiological study.
Neuropsychologia, 119, 271-279.
Kimura, K., Kimura, M., &Iwaki, S. (2016). Temporal prediction modulates the evaluative processing of “good” action feedback: An electrophysiological study.
Psychophysiology, 53 (10), 1552– 1559.

【Outline (in English)】
(Course outline)
In this class, we will discuss the knowledge and skills necessary for master thesis preparation in seminar form.
(Learning Objectives)
The goals of this course are to design own psychophysiological research plan, to carry out the plan, and to analyze and appropriately interpret psychophysiological data for understanding research methodology in psychophysiology.
(Learning activities outside of classroom)
Before/after each class, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria / Policy)
Final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution(50 %) and presentation and reports (50%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

木村　健太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自身の関心のある心理学の研究テーマについて、研究計画にもとづいて研究を実施し、取得したデータの分析と考察を行い、研究成果を論文や口頭で発表します。

【到達目標】
自身の関心のある研究テーマについて、研究計画にもとづいて研究を実施し、取得したデータの分析と考察を行い、研究成果を論文や口頭で発表するスキルの獲得を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・授業は演習方式で進めます。受講生による自分の研究の発表とそれにもとづく議論が中心となります。
・必要に応じて、取得したデータの分析手法（統計、生体データ分析）について実習形式で学ぶこともあります。
・授業時間内に質疑応答の時間を設け、疑問や問題について議論します。
・授業中に出される課題への回答や授業に関する疑問・感想を記載したリアクションペーパーを提出してもらい、次の授業でリアクションペーパーへのフィードバックを含めた授業を実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究計画の確認	夏季休暇中の進捗確認、春学期に立案した計画の確認
第2回	実験実施の準備（1）	倫理申請書の作成、実験参加者募集方法の検討
第3回	実験実施の準備（2）	刺激、プログラムの作成、測定機器の準備
第4回	実験実施の準備（3）	刺激、プログラムの作成、測定機器の準備を完了
第5回	実験実施の準備（4）	データ分析に用いるプログラム作成
第6回	データ分析（1）	取得したデータの分析、統計量の整理
第7回	データ分析（2）	取得したデータの分析結果を整理、図表作成
第8回	中間報告	研究結果の中間報告、フィードバック
第9回	研究結果の考察	研究結果を先行研究の知見を踏まえて検討
第10回	論文作成（1）	研究結果の方法、結果の執筆方法
第11回	論文作成（2）	研究結果の序論、考察の執筆方法
第12回	論文作成（3）	論文の体裁、論文の投稿先の雑誌種別、査読プロセス
第13回	研究成果の発表（1）	口頭発表の仕方、伝わる発表資料の作成方法
第14回	研究成果の発表（2）	質疑への対応、秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・授業時間内は、発表にもとづく議論や解説を中心に行うため、論文などの情報収集、実験準備、資料作成などの作業は授業時間外に行います。
・特に、実験に用いるプログラムの作成、データ取得、データの分析などは授業時間外に実施することになるため、授業時間を有意義に活用するためにも事前準備が重要になります。
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間合計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特に指定しません。

【参考書】
適宜必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
成績は、平常点50%（授業への積極的な関与等）、発表・レポート50%として総合点により評価します。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度は未開講でした。

【学生が準備すべき機器他】
・必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。
・脳波室で実験機器を用いた授業を行うことがあります。

【その他の重要事項】
・授業の進め方や授業計画、授業目標の説明をしますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。
・オフィスアワー：春・秋学期ともに木曜日3限（BT1109研究室）。訪問希望者は、メール（k.kimura[at]hosei.ac.jp）等で前日までに連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
生理心理学、認知神経科学、感情科学
＜研究テーマ＞
感情が認知機能や意思決定に作用する認知神経学的機序の研究、内受容感覚と脳ー身体の相互作用機序についての研究
＜主要研究業績＞
Kimura, K, Kanayama, N., &Katahira, K. (2023). Cardiac cycle affects risky decision-making.Biological psychology, 176, 108471
Kimura, K., Sawada, H., &Katayama, J. (2018). Outcome evaluations in group decision-making using authority rule: An electrophysiological study.
Neuropsychologia, 119, 271-279.
Kimura, K., Kimura, M., &Iwaki, S. (2016). Temporal prediction modulates the evaluative processing of “good” action feedback: An electrophysiological study.
Psychophysiology, 53 (10), 1552– 1559.

【Outline (in English)】
(Course outline)
In this class, we will discuss the knowledge and skills necessary for master thesis preparation in seminar form.
(Learning Objectives)
The goals of this course are to design own psychophysiological research plan, to carry out the plan, and to analyze and appropriately interpret psychophysiological data for understanding research methodology in psychophysiology.
(Learning activities outside of classroom)
Before/after each class, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria / Policy)
Final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution(50 %) and presentation and reports (50%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習Ⅰ

渡辺　弥生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
発達心理学研究に関連した課題をもとに、実践につながる演習を行う。乳児期から高齢期までを含めて生涯発達の視点に立って、これまでの研究の流れを理解するとともに、まだ明らかにされていないリサーチクエスチョンを各自追求していく。先行研究で明らかにされていることから応用できることや、フィールドで求められている専門性など双方向からの研究態度を身につけ、社会に貢献できることをめざす。その上で、自らの関心に基づいて研究テーマを設定し、適切な研究方法を選択してデータを収集・分析し、得られた結果を先行研究と関連づけて考察する力を身につける。

【到達目標】
自らの関心に基づいて研究テーマを設定し、適切な研究方法を選択してデータを収集・分析し、得られた結果を先行研究と関連づけて考察する力を身につける。
（1）発達心理学研究におけるテーマと研究の特徴及び背景について理解する。
（2）発達心理学研究の研究論文を批判的に読む力を養う。
（3）先行研究を批判し改善策を練った具体的な研究計画を行い実行できる力を育む。
（4）研究計画、研究内容、その成果を発表する技術を習得する。
（5）社会に貢献できる展望をもつ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
発達心理学領域における理論や特徴を体系的に理解したうえで、具体的な研究論文を読み、理解し、自身で研究を計画できるスキルを獲得する。具体的な方法としては、そのトピックの流れを支えてきた主要な研究をリストアップする。その際、批判に値する点を考え、改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考える。そのうえで、発達研究の方法論を駆使して具体的に実行する計画を立てる。可能であれば並行して実践する。課題などの提出についてのフィードバックは、学習支援システムやGoogle Classroomを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	研究の体系（マクロ）と各研究論文（ミクロ）を考える	適当なトピックをもとに、各研究者の論文と各トピックの研究の体系との関係について考える。
3	展望論文をもとに読む（和文）（1）	読解の力を養う。発達研究を展望する。
4	展望論文をもとに読む（和文）（2）	読解の力を養う。発達研究を展望する。
5	論文をもとに発表と討議	先行研究の流れを理解し、さらにどのような研究が積み重ねられるべきかを考える。
6	共通論文をもとに発表と討議 問題意識に焦点を当てる	レビュー論文の書き方や、留意点について学ぶ。
7	自分の興味のある領域の文献リストをつくる（1）	各院生が興味のある領域について、文献のリストをつくり、研究の流れをまとめる。
8	自分の興味のある領域の文献リストをつくる（2）	文献リストをつくるとともに、年代別、あるいは内容別の観点から、研究の流れをつかみ、批判する。
9	論文をもとに発表と討議 理解（1）	各院生が自分の研究につながる論文を選び、研究の内容を理解する。
10	論文をもとに発表と討議 理解（2） 優れたところに言及するとともに批判する	選んできた論文の優れたところと批判点を明らかにし、レジュメをつくり、発表する。
11	研究計画を立てる（1）	選んできた論文の批判点をもとに、改善点を考え、新しい研究を考える。
12	研究計画を立てる（2）	考えた研究が実行可能であるか目的や方法論の視点から再考する。
13	研究計画を立てる（3）	結果が得られた場合の、分析方法について予測する。
14	研究計画を立てる（4）	結果が得られた場合の分析方法を予測し、その方法論を習得しているか確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
演習であることから、目的をよく理解し、文献研究の収集の大切さを学ぶ。論文を読み、理解し、まとめることの積み重ねを求める。各研究の問題と目的、方法、分析結果、考察を自身で追試できるレベルでの理解が求められる。そのうえで、批判できるところ、それを改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考え、プレゼンを実施するための準備をする。後半は、特に、発達心理学領域における方法論についての理解が深まるように、研究目的を検討するためにどのようなスキルが必要かについて考える。和文および英文の最先端の研究にチャレンジする。最終的に、各自研究計画を立てるスキルを獲得する。予習復習にはそれぞれ2時間はとるようにする。

【テキスト（教科書）】
こちらで準備する。授業時に紹介。
査読付き雑誌のレビュー論文を用いる。

【参考書】
発達の研究領域についておおざっぱに理解しておくため、渡辺弥生編著『発達心理学』（北大路書房）『子どもの「10歳の壁」とは何か？』（光文社）『感情の正体』（Zoom）といった基礎的な発達心理学や教育心理学、発達臨床心理学系の本を読んでおくことを求める。

【成績評価の方法と基準】
毎回課されている課題をこなすことを前提として、報告書の提出(100%)とする。

【学生の意見等からの気づき】
活発な演習ができているが、そこで得た課題や気づきをもとに、実行していくことがさらに求められる。具体的に各自の作業が進行しているかをDropboxやペーパーの形で確認し、実行力の強化につとめる。

【学生が準備すべき機器他】
パワーポイントとDVDを用いることもある。授業支援システムを用いることもあるので、随時チェックすることを習慣づけてほしい。パソコンを用いることが多くなる。

【その他の重要事項】
文献検索などは自身で活発に行うことが前提。課題提出の時間厳守。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
＜研究テーマ＞　社会情緒的コンピテンスの発達といじめなどの予防教育の展開、ソーシャルエモーショナルラーニング
＜主要研究業績＞
HP参照
https://sites.google.com/site/emywata/

(1)感情の正体　2019筑摩書房
（2）世界の学校予防教育　２０１３　金子書房
（3）子どもの１０歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学　２０１１　光文社
（4）子どもの感情表現ワークブック　２０１１　明石書店など多数
（4）１０代を育てるソーシャルスキル教育　２００９ 北樹出版

【Outline (in English)】
【Course Outline】Based on issues related to developmental psychological research, we will conduct a practicum connected with actual practice.
【Learning Objectives】From the viewpoint of lifelong development, including from infancy to elderly, the aims of this course are to understand the flow of research to date and purse research questions that have not been previously clarified, and to contribute to society by acquiring bidirectional research attitudes from both what can be applied from what has been clarified in the previous research and expertise required in the field.
【Learning activities outside of classroom】Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.
【Grading Criteria】Students will be required to submit a report (100%) based on the assumption that they will complete the assignments in each class.

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

渡辺　弥生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
発達心理学研究に関連する課題をもとに、教育・臨床などの実践につながる演習を行い、理論と実践を結びつけて理解する力を養う。乳児期から高齢期までを含む生涯発達の視点に立ち、発達心理学における主要な研究の流れや知見を理解するとともに、未解明の課題やリサーチクエスチョンを自ら見いだし、探究する力を身につける。さらに、こうした問題意識をもとに研究計画を立案・実行し、得られた成果を学術論文としてまとめ、投稿に向けて執筆するための基礎的能力の獲得を目標とする。

【到達目標】
乳児期から高齢期までを含む生涯発達の視点に立ち、発達心理学研究における主要な研究テーマや理論的背景、方法論的特徴を理解し、それぞれの研究がどのような学術的・社会的文脈の中で行われてきたのかを説明できるようになる。
・発達心理学研究における主要な研究テーマ、理論的背景、方法論の特徴を理解する。
・先行研究を踏まえ、指導のもとで研究課題を整理し、具体的な研究計画を立案・実行する力を身につける。
・学術論文の基本構成や執筆要項を理解し、投稿を見据えた論文原稿を作成する力を養う。指導を受けながら論文投稿の一連のプロセスを経験し、学術的発信の基礎を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
発達心理学領域における理論や特徴を体系的に理解したうえで、具体的な研究論文を読み、理解し、自身で研究を計画できるスキルを獲得する。具体的な方法としては、そのトピックの流れを支えてきた主要な研究をリストアップする。その際、批判に値する点を考え、改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考える。そのうえで、発達研究の方法論を駆使して具体的に実行する計画を立てる。可能であれば並行して実践する。さらに、それを投稿できるような論文を書くことにチャレンジする。課題などの提出のフィードバックは、学習支援システムやGoogle classroomなどを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	研究の体系（マクロ）と各研究論文（ミクロ）をメタ的に考え、実行する研究の意義を考える	適当なトピックをもとに、各研究者の論文と各トピックの研究の体系との関係について考える。
3	問題と目的を書く(1) 構造を考えるa	パラグラフの構造を考え、プランニングする。
4	問題と目的を書く(2) 構造を考えるb	パラグラフの構造を考え、プランニングする。
5	問題と目的を書く(1) 肉付けをするa	引用文献の必要性を意識し、フルに書いていく。
6	問題と目的を書く(2) 肉付けをするb	引用文献の必要性を意識し、フルに書いていく。
7	グループワーク(1) 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあうa	グループワーク 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう。
8	グループワーク(2) 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあうb	グループワーク 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう。
9	適切な方法論を考え、書く(1)	具体的な方法についての書き方を修得し、実際に書く。
10	適切な方法論を考え、書く(2)	具体的な方法についての書き方を修得し、実際に書く。
11	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ(1)	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ。
12	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ(2)	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ。
13	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ(1)	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ。投稿論文の形式を各自調べ、発表する。
14	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ(2)	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ。投稿論文の形式を各自調べ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
演習であることから、目的をよく理解し、文献研究の大切さを学ぶ。論文を読み、理解し、まとめることの積み重ねを求める。各研究の問題と目的、方法、分析結果、考察を自身で追試できるレベルでの理解が求められる。そのうえで、批判できるところ、それを改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考え、準備をする。後半は和文および英文の最先端の研究をモデルに、「書く」イメージをもち、実際にチャレンジする。予習復習には各２時間はかける。

【テキスト（教科書）】
こちらで準備する。授業時に紹介。

【参考書】
日本発達心理学会 編岩立志津夫・西野泰広 責任編集『発達科学ハンドブック2　研究法と尺度』など。発達科学ハンドブック、児童心理学の進歩などレビュー雑誌を読んでおく。英語によるメールの書き方などの本を読んでおく。

【成績評価の方法と基準】
毎回の課題を基にした最終レポート（100%)をもって評価する。

【学生の意見等からの気づき】
時間を引き延ばすエクスキューズがないように、立てた計画をつねに実行していくようにする。

【学生が準備すべき機器他】
パソコンを使用することが多い。授業支援システムに入る。

【その他の重要事項】
文献検索などは自身で活発に行うことが前提。学会に参加したり、研究者にメールを出したり、実際の研究活動を体験していく。新型コロナウイルス感染状況によってオンラインに変更する可能性あり。

【担当教員の専門分野等】
HP参照
https://sites.google.com/site/emywata/
＜専門領域＞　発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
＜研究テーマ＞　社会情緒的能力の発達といじめなどの予防教育の展開、ソーシャルエモーショナルラーニング
＜主要研究業績＞
(1)感情の正体　2019 筑摩書房
（2）世界の学校予防教育　２０１３　金子書房
（3）子どもの１０歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学　２０１１　光文社
（4）子どもの感情表現ワークブック　２０１１　明石書店
（5）１０代を育てるソーシャルスキル教育　２００９ 北樹出版

【Outline (in English)】
【Course Outline】We will conduct a practicum connected with actual practice, based on issues related to developmental psychological research.

【Learning Objectives 】From the viewpoint of lifelong development, including from infancy to elderly, the aims of this course are to understand the flow of research to date and purse research questions that have not been previously clarified, and to contribute to society by acquiring bidirectional research attitudes from both what can be applied from what has been clarified in the previous research and expertise required in the field.
【Learning activities outside of classroom】Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.
【Grading Criteria】Students will be required to submit a report (100%) based on the assumption that they will complete the assignments in each class.

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習Ⅰ

福田　由紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　自分の研究テーマに関して，その先行研究群を批判的に概観して，展望論文の骨子を作成する。

【到達目標】
①自分の興味にあったテーマに関連する先行研究群を柔軟に検索できる。
②当該の先行研究群を批判的に読み，問題点や改善点を指摘できる。
③②を受けて，新しい提案ができる。
④当該のテーマに関連した展望論文の骨子を作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　授業の最初に展望論文の作成の仕方について，討議を行う。それを受けて，前半の授業では，自分の興味に合ったテーマに関連する先行論文群を精読し，発表する。そして，論文を作成し，ピアレビューを通して完成度の高い展望論文を完成させる。また，提出された課題のフィードバックは，授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第2回	展望論文の概説	展望論文の特性について理解を深める。
第3回	種論文の発表１	自分のテーマにあった，核となる論文を各自発表する。
第4回	種論文の発表２	自分のテーマにあった，核となる論文を各自発表する。
第5回	種論文から派生した論文の発表１	種論文から派生した論文の発表をする。
第6回	種論文から派生した論文の発表２	種論文から派生した論文の発表をする。
第7回	種論文から派生した論文の発表３	種論文から派生した論文の発表をする。
第8回	種論文から派生した論文の発表４	種論文から派生した論文の発表をする。
第9回	先行研究群の問題点・改善点の発表１	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第10回	先行研究群の問題点・改善点の発表２	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第11回	先行研究群の問題点・改善点の発表３	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第12回	展望論文の骨子に関する発表１	展望論文の骨子に関する発表する。
第13回	展望論文の骨子に関する発表２	展望論文の骨子に関する発表する。
第14回	修正された展望論文の骨子の講評	修正された展望論文の骨子を講評し，全体で討議する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　モデルとなる展望論文を精読し，その特性に関してレジュメを作成する。
第2・3回　自分にあったテーマの種論文を精読し，発表の準備を行う。
第4～7回　種論文から検索できる先行研究群を精読し，発表の準備を行う。
第8～10回　先行研究群の問題点・改善点についてレジュメにまとめ，発表の準備を行う。
第11・12回　展望論文作成のための骨子をレジュメにまとめ，発表の準備を行う。
第13回　展望論文の骨子を修正する。
本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特になし。適宜，紹介する。

【参考書】
福田由紀（編）(2012). 言語心理学入門　培風館
日本読書学会（編）(2019). 読書教育の未来　ひつじ書房
石黒圭　(2020). 段落論　光文社新書

【成績評価の方法と基準】
発表20%，発表への質問・コメント20%，討論への積極的な参加20%，展望論文の骨子の提出40%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
　2025年度は授業を担当しませんでした。そのため、2022年度の気づきを以下に再掲します。
　水曜日朝一の授業ですが，とても楽しいですね。研究の醍醐味が味わえたようで，やりがいがあります。

【その他の重要事項】
受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語心理学
＜研究テーマ＞読みと感情，コミュニケーションにおける言語活動の役割
＜主要研究業績＞
1. 常深 浩平・望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅰ）―努力の最小限化とその対策例―』（読書科学，66,1-10. 2024）
2. 福田 由紀・井関 龍太・望月 正哉・常深 浩平『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅱ）－ Instructional Question Check 通過に影響する要因の検討－』（読書科学，66,11-25. 2024）
3. 井関 龍太・望月 正哉・菊池 理紗・福田 由紀『現代語小説の品詞構成に基づく文体印象の分析－イメージ性と展開の早さの主観的印象を説明する試み－』（計量国語学，34，158-173. 2023年）
4. 井関 龍太・菊池 理紗・望月 正哉・福田 由紀・石黒 圭『品詞構成に基づく文体指標は読者の印象とどのように関わるか－ MVR と品詞構成率の心理学的検討－』（計量国語学，33，493-509. 2022年
　この論文は計量国語学会の論文賞を拝受しました）
5. 望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀・長田 友紀・常深 浩平・石黒 圭『読者がもつ物語の認知的ジャンルの測定』（読書科学，63,160-174. 2021）
＜ＨＰ＞
「ことばのこころ研究室」http://www.zc.em-net.ne.jp/ psy-language/

【Outline (in English)】
Course outline：The purpose of this course is to learn how to write a review paper.
Learning Objectives：By the end of the course, students should be able to do the following:
－ A. search for information on previous studies interested to oneself
－ B. read them critically and point out problems and a refinement
－ C. propose new suggestion
－ D. draft an outline for a perspective paper
Learning activities outside of classroom：Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.

Grading Criteria ： Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 20%, comment for the presentation of other people: 20%, outline for the perspective paper: 40%, in-class contribution: 20%.

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

福田　由紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　自分の興味にあった心理学的なテーマに関して，実験・調査の計画・実施・発表・論文の作成を通して，心理学の研究のプロセスを実践的に学ぶ。

【到達目標】
①自分の興味にあったテーマに関して，適切な実験・調査計画を立てることができる。
②自分の計画を実際に行うことができる。
③実験・調査結果を適切に分析・考察できる。
④分析・考察したことを的確に他者に伝達できる。
⑤実証的な研究レポートを作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　自分の興味にあったテーマに関して研究計画を立て，授業で発表をする。ピアレビューを通して，仮説の設定，変数の決定，統制の仕方，材料の収集，分析手法を洗練していく。その研究計画にそった実験・調査を実施する。その結果を発表し，高い実証的な研究レポートを完成させる。提出された課題のフィードバックは，授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第2回	研究テーマの設定	研究テーマを発表する。
第3回	実験・調査立案における注意１	仮説，変数，統制の仕方，材料の収集の仕方を発表し，全員で討議する。
第4回	実験・調査立案における注意２	具体的な分析方法を発表し，全員で討議する。
第5回	研究計画申請書の発表	法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会宛の書式にそった研究計画申請書を発表し，全員で討議する。
第6回	実験・調査の実施１	実験・調査を遂行し，その進捗状況を発表し，全員で討議する。
第7回	実験・調査の実施２	実験・調査を遂行し，その進捗状況を発表し，全員で討議する。
第8回	データの分析	分析結果を発表し，全員で討議する。
第9回	考察	結果と先行研究の知見を利用して論理的に考えられる考察を発表し，全員で討議する。
第10回	要旨の作成	学会発表で求められる要旨を作成し，ピアレビューをする。
第11回	レポートの作成	実証的な研究レポートの書き方について確認する。
第12回	成果発表１	与えられた時間内に効果的に発表し，全員で討議する。
第13回	成果発表２	与えられた時間内に効果的に発表し，全員で討議する。
第14回	レポートの提出と総括	実証的な方法を使って研究レポートを作成し，提出し，そのプロセスに関して振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　自らの研究テーマの発表の準備を行う。
第2・3回　自分の目的にあった実験・調査計画を立て，発表の準備を行う。
第4回　研究計画申請書を作成し，発表の準備を行う。
第5〜6回　実験・調査を実施する。
第7回　データを分析し，発表の準備を行う。
第8回　分析結果をもとに考察行い，発表の準備を行う。
第9回　要旨を作成し，発表の準備を行う。
第10回　論文を作成する。
第11・12回　成果発表の準備を行う。
第13回　提出する論文の作成・見直しをする。
本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特になし。適宜，紹介する。

【参考書】
福田由紀（編）(2012). 言語心理学入門　培風館
日本読書学会（編）(2019). 読書教育の未来　ひつじ書房
石黒圭 (2020). 段落論　光文社新書

【成績評価の方法と基準】
発表20%，発表への質問・コメント20%，討論への積極的な参加20%，研究レポートの提出40%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
　2025年度は授業を担当しませんでした。そのため、2022年度の気づきを以下に再掲します。
　ディスカッションを通じて，他者視点と取り入れることにより，より良い論文ができそうですね。

【その他の重要事項】
受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語心理学
＜研究テーマ＞読みと感情，コミュニケーションにおける言語活動の役割
＜主要研究業績＞
1.常深 浩平・望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅰ）―努力の最小限化とその対策例―』（読書科学，66,1-10. 2024）
2.福田 由紀・井関 龍太・望月 正哉・常深 浩平『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅱ）－ Instructional Question Check 通過に影響する要因の検討－』（読書科学，66,11-25. 2024）
3. 井関 龍太・望月 正哉・菊池 理紗・福田 由紀『現代語小説の品詞構成に基づく文体印象の分析－イメージ性と展開の早さの主観的印象を説明する試み－』（計量国語学，34，158-173. 2023年）
4. 井関 龍太・菊池 理紗・望月 正哉・福田 由紀・石黒 圭『品詞構成に基づく文体指標は読者の印象とどのように関わるか－ MVR と品詞構成率の心理学的検討－』（計量国語学，33，493-509. 2022年
　この論文は計量国語学会の論文賞を拝受しました）
5. 望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀・長田 友紀・常深 浩平・石黒 圭『読者がもつ物語の認知的ジャンルの測定』（読書科学，63,160-174. 2021）
＜ＨＰ＞
「ことばのこころ研究室」http://www.zc.em-net.ne.jp/ psy-language/

【Outline (in English)】
Course outline：The purpose of this course is to learn how to conduct psychological research.
Learning Objectives：By the end of the course, students should be able to do the following:
－A. make one's experiment/survey plan
－B. carry it out
－C. analyze it appropriately
－D. present it effectively
－E. make a report of one's research

Learning activities outside of classroom ： Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.
Grading Criteria ： Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 20%, comment for the presentation of other people: 20%, report: 40%, in-class contribution: 20%.

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 I

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。受講生は、それぞれ自分の問題意識から研究テーマを選び、標的となる行動を決め、その制御変数を実験によって見つけながら、この方法論を習得します。修士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、修了後、就職する人も博士課程に進学する人も、それぞれ仕事に役立つ技術を習得することを目指します。

【到達目標】
この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です：標的行動を具体化し、測定方法を決めること、標的行動の制御変数に関する先行研究を調べること、制御変数の候補を複数推定し、その中から実験で検討する変数を選び、実験計画を立案すること、実験計画書を作成し、発表すること、実験装置や測定システムなどを準備し、予備実験からそれを改善すること、本実験を実施し、データを分析し、まとめて図表や文章、口頭発表などでコミュニケーションすること。
これらはすべて研究にとって必要な技能や知識ですが、修了後に就職してからも皆さんの職場で必ず役に立つものです。修論のためだけの研究法ではなく、この機会に、一生使える心理学の専門性を習得してください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式で課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。M1次には修論の準備として予備的な研究に取組みます。M2次には修論の本実験を題材に課題を進めます。ゼミの時間の大半を発表や討論の練習に使いますので積極的に参加して下さい。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	全員： 授業内容と方法、約束事を説明します。実験計画のプレゼン方法、注意すべきこと、研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。
第2回	実験計画の発表1	全員： 独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などを学びます。 M1次生： 自分の研究テーマについて討論し、予備実験の準備を進めます。 M2次生： 各自、実験計画を発表し、討論します。GOサインがでたら予備実験に移れるように、実験計画は「概要」ではなく、刺激や記録用紙なども用意してプレゼンして下さい。
第3回	実験計画の発表2	同上
第4回	実験計画の発表3	同上
第5回	予備実験の報告1	全員： データの分析、視覚化、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（本実験の計画）などを学びます。 M1次生もM2次生も、予備実験の結果を分析し、発表して、討論します。データの分析から「わかったこと」「わからなかったこと」をまとめて、伝えて、話し合う練習をします。
第6回	予備実験の報告2	同上
第7回	予備実験の報告3	同上
第8回	先行研究をまとめる1	全員： 先行研究や参考書、統計資料などを読み、現在の研究の流れや社会のニーズの中に自分の実験を位置づけます。研究のストーリーをまとめあげる方法について解説します。
第9回	先行研究をまとめる2	同上
第10回	先行研究をまとめる3	同上
第11回	本実験の報告1	全員： データの分析、視覚化、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（継続実験の計画）などをさらに学びます。 M1次生もM2次生も、本実験の結果を分析し、発表して、討論します。データの分析から「わかったこと」「わからなかったこと」をまとめて、伝えて、話し合う練習をします。
第12回	本実験の報告2	同上
第13回	本実験の報告3	同上
第14回	まとめ	全員： 全課題を振り返り、討論します。 各自、自分の研究のセールスポイントを抜き出し、これを伝える題目を考えて発表します。修論のストーリーを端的に伝える練習をします。 M1次生は予備実験、M2次生は本実験のレポートを提出します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学期を通じて取り組める課題を用意してありますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。
○興味がある実験について標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の3つを考え、提案するための資料を作成する。
○実験計画について予測する結果を作図する。

○5つ以上の先行研究を表にまとめる。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
島宗 理 (2019). ワードマップ　応用行動分析学　新曜社

【参考書】
研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】
○授業参加（40%）および授業課題の遂行度（60％）から成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
授業はゼミ形式で課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。

【その他の重要事項】
　この科目はM1次生とM2次生の合同授業となります。重複履修を原則としていますので、M1次とM2次には同じ教員の授業を受講してください。
☆研究テーマは受講生の興味を最優先して決めます。行動分析学は研究対象を限定しません。基本的に何でも研究できると考えて下さい。ただし、大学院生活のほとんどをかけて取り組む研究ですから、自分の得意なこと、興味があること、これだけは人に負けないぞと自信があること、そういう自信をつけたいことなどを選んで下さい。こんなことでも実験できるのだろうか？ と思いとどまらず、ぜひ一度相談して下さい。修論ですから、大がかりな実験はできませんが、世界に二つとない実験を共につくりましょう。
○オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の3限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including functional analyses of behavior, systematic observation and recording procedures, single-case designs, and visual inspection of time series data to evaluate effectiveness of an intervention. Students will select their own research topic, conduct a literature review, develop a research proposal, and run experiments.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students should be able to do the followings:
1) identify behavioral objectives, 2) design and conduct experiments, 3) analyze data, and 4) present research outcomes.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。この授業では、M1次生は予備実験の報告書と修士論文の実験計画書、M2次生は修士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、論理的な文章作成や根拠に基づいた提案、プレゼン、討論の練習をしていきます。

【到達目標】
この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です：自分の実験を社会的、学術的な文脈に位置づけること、実験から得られたデータを分析し、わかったこと、わからなかったことを整理し、わからなかったことはどうすればわかるようになるかを提案すること。わかったことを数量化し、図表にまとめ、読み手や聞き手にわかりやすいように発表すること、論理的に一貫した、読みやすい文章を書くこと。詳細な規定にきめ細かく対応した校正を行うこと。締切から逆算して計画をたて、遂行すること。自分では解決できない問題について仲間や指導教員から助言をもらうこと、助言すること。
これらはすべて研究にとって必要な技能や知識ですが、修了後に就職してからも皆さんの職場で必ず役に立つものです。修論のためだけの研究法ではなく、この機会に、一生使える心理学の専門性を習得してください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式で課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。M1次には心理学研究法演習Iで行った予備実験と次年度に行う修論実験を題材に課題に取り組みます。M2次には各自の修論研究を題材に課題を進めます。ゼミの時間の大半を発表や討論の練習に使いますので積極的に参加して下さい。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	全員： 授業内容と方法、約束事を説明します。 M1次生は予備実験、M2次生は修論実験の内容を１分間でプレゼンする練習をします。
第2回	論文を書く： アウトラインを書く	全員： アウトラインを書いてから本文を書く方法を解説します。「方法」の章を使って練習をします。日本心理学会「執筆・投稿の手引き」の参照方法も解説します。 M1次生は予備実験のレポートを執筆します。M2次生は修論実験を論文にしていきます。
第3回	論文を書く： データの視覚的な提示	全員： 実験の中心的なデータを選び、それを視覚的に伝える図を描きます。独立変数と従属変数の関係性がわかりやすく提示できているかどうか、「手引き」やゼミの「チェックリスト」にそっているかどうかを確認します。
第4回	論文を書く： 推敲する (1)	全員： 方法の章の完成版を提出し、チェックリストに基づいて推敲します。方法の章で最も重要なのは読み手がその実験を追試できるように書かれているかどうかです。読み手の立場から自分の論文を読み直して推敲する練習をします。
第5回	論文を書く： 事実を書く	全員： アウトラインから書く方法を結果の章を使って練習します。読み手に自分の研究のセールスポイントをわかりやすく伝えるために、順序や論理展開を工夫する練習です。
第6回	論文を書く： 先行研究をまとめる	全員： 先行研究をまとめて表にし、「手引き」に即した作表方法を学びます。先行研究を紹介する段落を書き、文献引用の作法を練習します。
第7回	論文を書く： 研究を位置づけるアウトラインを書く	全員： 第6回でまとめた先行研究の展望を活かし、また前期に作成したストーリーを振り返り、序論のアウトラインを作成します。パラグラフ・ライティング法（段落をトピック文とサポート文で構成する手法）を解説し、練習します。
第8回	論文を書く： 推敲する (2)	全員： 第5回で作成したアウトラインに肉付けをして結果の章をまとめます。データの分析や統計が適切に、かつ充分に行われているかどうかを確認します。
第9回	論文を書く： 推敲する (3)	全員： パラグラフ・ライティング法を使って序論を完成させます。日本語の作文技術について確認し、推敲の練習をします。さらに、チェックリストを使って、「執筆・投稿の手引き」にそうように推敲します。
第10回	論文を書く： 執筆ルールに基づいて校正する	全員： 引用文献一覧を作成します。「執筆・投稿の手引き」にそうように推敲します。また、本文と見合わせて、引用の方法が適切かどうかを確認します。
第11回	論文を書く： 推敲する (4)	全員： 小実験レポート、修論のゼミ内提出の前の最終確認とチェックリストを使った推敲の練習をします。また、自分で書いた文章を自分で推敲するのは困難であることを自覚するために、他の受講生の修論を校正する練習もします。校正に使う一般的な記号を習得しましょう。

第12回　研究計画(1)　M1次生：
　次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。
M2次生：
　修論を推敲し、提出します。
第13回　研究計画(2)　M1次生：
　次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。
M2次生：
修論の要旨を作成して提出します。要旨は修論のストーリーをわかりやすく伝える文章です。セールスポイントの抽出と伝達、文字数が限られている場合の推敲方法について解説し、練習します。
第14回　まとめと研究計画(3)　全員：
　授業全体を振り返り、討論します。
M1次生：
　次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。
M2次生：
修論発表会に備え、修論研究の発表練習をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　学期を通じて取り組める課題を用意してありますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。
○春学期に実施した実験の発表資料を作成し、練習をする。
○自分の研究の社会的意義を示す資料を収集し、発表資料としてまとめる。
○日本心理学会の「執筆・投稿の手びき」およびゼミの論文推敲チェックリストを用いて、「結果」の章を推敲し、提出する。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
○島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 ―ヒューマンサービスを改善する行動科学― 新曜社

【参考書】
倉島保美（2012）論理が伝わる世界標準の「書く技術」 講談社

【成績評価の方法と基準】
○授業への参加（40％）、課題遂行（60％）から成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
毎週課題へ自主的に取り組み、研究を進めることができました。面白い、独創的な研究に取り組めているので、成果に期待しています。

【その他の重要事項】
　この科目はM1次生とM2次生の合同授業となります。重複履修を原則としていますので、M1次とM2次には同じ教員の授業を受講してください。
○ オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の2限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
　The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including evaluation of single-case design data with visual inspection, and interpretation of functional relationship between dependent and independent variables.　Student will also aim to master how to write a research paper, by learning about paragraph writing, Japanese Psychological Association's publication manual, and other miscellaneous rules in academic writing.

【Learning Objectives】
At the end of the course, students should be able to do the followings:
1) prepare figures and tables, 2) cite research papers, and 3) write logical sentences, and 4) complete their own research paper.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習Ⅰ

越智　啓太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業概要
主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】
自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。
リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	春学期の研究計画について具体化する。
第2回	研究報告と討論（おもに文献収集）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第3回	研究報告と討論（おもに文献の読解１）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第4回	研究報告と討論（おもに文献の読解２）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第5回	研究報告と討論（おもに文献文の読解３）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究報告と討論（おもに文献の読解４）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究報告と討論（おもに文献の読解のまとめと整理統合１）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第8回	研究報告と討論（主に文献の読解のまとめと整理統合２）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第9回	研究報告と討論（おもに先行研究のメタ分析）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第10回	研究報告と討論（主に研究計画の立案１）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第11回	研究報告と討論（おもに研究計画の立案２）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第12回	研究報告と討論（おもに研究計画のプレゼンテーション）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第13回	研究報告と討論（おもに研究計画の評価と討論１）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第14回	研究報告と討論（おもに研究計画の評価と討論２）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。毎回4時間程度の予習と1時間程度の復習が必要である。

【テキスト（教科書）】
使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】
使用しない。

【成績評価の方法と基準】
自分の研究計画に沿って研究を進行できたか（４０%）。
他人の研究について適切なコメントができたか（６０%）。
授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】
学会発表のためのサポートを充実させるとともに統計手法についてのコメントをより詳細なものにします。

【学生が準備すべき機器他】
各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】
毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業をとるものは、この授業の参加をほかのすべての行事よりも優先すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞犯罪心理学
＜研究テーマ＞犯罪捜査への心理学の応用
＜主要研究業績＞「犯罪捜査の心理学」（新曜社）、「ケースで学ぶ犯罪心理学」（北大路書房）

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class, empirical experimental research on forensic and criminal psychology and presentation training will be conducted.
【Learning Objectives】
You will be able to study psychology yourself. Specifically, the following points.
Research theme selection
Searching and organizing prior literature
Design of experiments
Analysis of experimental results
Creating reports and dissertations
Oral and poster presentation
【Learning activities outside of classroom】
Each lesson requires 4 hours of preparation and 1 hour of review.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Report on research progress(40%) + class contribution (60%)

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

越智　啓太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業概要
主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】
自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。
リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	秋学期の研究計画について具体化する。
第2回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第3回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告のプレゼンテーション）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第4回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告の図表表示）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第5回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告の論文記述）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究報告と討論（おもに結果の分析手法）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究報告と討論（おもに結果の分析の問題点）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第8回	研究報告と討論（主に結果の分析の論文記載）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第9回	研究報告と討論（おもに理論的な問題点の吟味）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第10回	研究報告と討論（おもに考察）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第11回	研究報告と討論（おもに研究のリミテーションとその記述）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第12回	研究報告と討論（おもに投稿準備）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第13回	研究報告と討論（おもに論文のフォーマット）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第14回	研究報告と討論（まとめ３）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。特に毎回のテーマ（おもに～と記載されている部分）について重点的に準備してくること。
毎回4時間程度の予習と1時間程度の復習が必要である。

【テキスト（教科書）】
使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】
使用しない。

【成績評価の方法と基準】
自分の研究計画に沿って研究を進行できたか（４０%）。
他人の研究について適切なコメントができたか（６０%）。
授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】
修士論文指導に関しては、論文の読み合わせ、口頭発表のシミュレーションなどを充実させます。

【学生が準備すべき機器他】
各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】
毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業受講者は他のすべての行事よりもこの授業への参加を優先すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞犯罪心理学
＜研究テーマ＞犯罪捜査への心理学の応用
＜主要研究業績＞「犯罪捜査の心理学」（化学同人）

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class, empirical experimental research on forensic and criminal psychology and presentation training will be conducted.
【Learning Objectives】
You will be able to study psychology yourself. Specifically, the following points.
Research theme selection
Searching and organizing prior literature
Design of experiments
Analysis of experimental results
Creating reports and dissertations
Oral and poster presentation
【Learning activities outside of classroom】
Each lesson requires 4 hours of preparation and 1 hour of review.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Report on research progress(40%) + class contribution (60%)

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 I

藤田　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
記憶を中心とした認知心理学および，主に学習過程に焦点を当てた教育心理学に関連する先行研究を批判的に読み，研究目的とそれを達成する方法論および分析法について議論をすることを通じて，自分の研究計画の基礎とする。さらに博士後期課程の院生は，各自で研究を遂行できるようになるために必要な諸々の力を向上させることが授業の目的である。そのために必要な研究活動を自分自身で計画し，実行し，成果を自己評価して，次の計画に活かすというPDCAサイクルを体得する。

【到達目標】
＜修士課程の受講生向け＞
半期の授業が終了した時点で，以下の各要素を身につけていることが，授業の具体的な到達目標となる。
１．個々の先行研究の方法上の問題点・改善点もしくは優れている点を挙げることができる。
２．個々の先行研究の分析および結果の解釈に関する問題点・改善点もしくは優れている点を挙げることができる。
３．上記１，２の内容をふまえて，より適切な研究計画を提案することができる。
４．上記１，２，３の内容を，適切でわかりやすい方法で他者に伝達できる。
５．他者の発表に対して，的確なコメントをすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
修士・博士の受講生ともに，先行研究について正確に理解した上で，その研究方法・分析方法・論理の首尾一貫性について口頭で説明することを具体的な作業課題として設定する。
研究論文の構成について教員が解説した上で，受講生自身が実際に発表し，全員で討論を行う。
具体的な授業の進め方は次の通りである。一人の受講生が自分の興味ある研究領域の論文を読んでレジュメを作成し，毎回の授業の前半で，その内容を説明する。その際には単に論文に沿って紹介するだけでなく，批判的な目を持って，問題点や改善点を指摘することに重点を置く。もし問題点・改善点に気づかない場合には，その研究方法の優れている点を指摘することとする。毎回の授業の後半では，発表された内容について受講生全員で討論を行い，その議論を踏まえて，発表した研究と同じテーマで，より適切な研究を行うための研究計画を各自が提案する。
それに加えて，博士後期課程の受講生は，博士後期課程を通じての自分自身の目標を，複数の観点から立てる。次に，その全体目標を達成するための中目標として，当該学年での目標を立てる。さらに，小目標として当該学期（セメスター）での目標を立てる。何をどのようにすれば各レベルの目標が達成できるのかを考えること自体が課題である。
発表は3種類の趣旨のものになる。1.現状分析と目標設定，2,目標を達成するために各自が設定した課題（複数回），3.目標達成度に対する自己評価と今後の改善策。
授業ではそれぞれの発表に対して全員で意見交換をして，自己評価基準の適正化を図る。
修士・博士とも，それぞれの発表課題の評価基準はルーブリックによって事前に公表する。ルーブリックに沿って行われる質疑応答が，実質的なフィードバックの機会となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業の概要と到達目標，評価方法の説明
第2回	論文の構成とは	論文を読む際に留意すべきポイントを担当教員が説明する
第3回	議論の進め方	担当教員が発表の例示をし，議論の進め方について説明する
第4回	目標設定の発表（博士）	学位論文作成に向け，現状分析を踏まえた春学期の各自の目標
第5回	論文発表１	発表者（一人目）が論文の内容を紹介し，全員で討論
第6回	論文発表２	発表者（二人目）が論文の内容を紹介し，全員で討論
第7回	論文発表３	発表者（一人目の２回目）論文の内容を紹介し，全員で討論
第8回	論文発表４	発表者（二人目の２回目）が論文の内容を紹介し，全員で討論
第9回	各自課題１（博士）	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の１回目
第10回	研究相談	修論・博論の研究実施に向けた相談の回
第11回	論文発表５	発表者（一人目の３回目）が論文の内容を紹介し，全員で討論
第12回	論文発表６	発表者（二人目の３回目）が論文の内容を紹介し，全員で討論
第13回	各自課題２（博士）	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の２回目
第14回	目標達成度の自己評価（博士）および総括	博士の受講生は達成指標に基づいた目標達成度の自己評価と海瀬何の発表。修士の受講生は授業の到達目標の確認，授業で修得できたことの振り返り。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・学習時間は，各回4時間を標準とする。詳細は下記の通り。
第１回 自分の興味ある研究テーマを明確にして，文献検索のためのキーワードを準備する
第２回 自分の興味ある研究テーマの文献を収集する
第３回 先行研究の熟読，レジュメによる発表の準備
第４回～第13回 各回の発表に対して，受講生全員が，よりよい研究計画や改善案を考案して，学習支援システムの掲示板に掲載する
第14回 この授業で学んだことを振り返り，目標到達度に応じて研究計画を修正する

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】
藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　　北大路書房
そのほか，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
＜修士課程の受講生向け＞
平常点50％…授業へ参加し，他者の発表へコメントすることを評価対象とする。
論文発表30％…発表の内容，発表資料の質，問題点・改善点等の指摘を評価対象とする。
改善計画の提案20％…毎回の発表に関連した，改善された研究計画案を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度は開講せず。

【その他の重要事項】
　授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず事前に相談すること。
　この授業は，修士課程と博士後期課程の合同科目である。また，複数年度にわたって重複履修することが可能である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　認知心理学，教育心理学
＜研究テーマ＞
　単なる経験則に終わらない，研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。
＜主要研究業績＞
藤田哲也（編）（2006）．大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　北大路書房
藤田哲也（2006）．心理学を活かした教育実践のために　井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法ver.2　認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために　8章　北大路書房，pp.135-155.
藤田哲也（編）（2021）．絶対役立つ教育心理学［第2版］－実践の理論，理論を実践－　ミネルヴァ書房

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this class, students critically read papers of cognitive psychology focusing on memory and papers of educational psychology focusing on learning process. Through discussing the research goal, the methodology, and analytical method, students acquire the fundamental skills to develop their research plans.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the following:
1.Students can list problems / improvements or advantages in the method of individual previous research.
2.Students can list problems / improvements or advantages regarding the analysis of individual previous studies and the interpretation of results.
3.Students can propose a more appropriate research plan based on the contents of 1 and 2 above.
4.Students can present the contents of 1, 2 and 3 above to others in an appropriate and easy-to-understand manner.
5.Students can make accurate comments on the presentations of others.
[Learning activities outside of classroom]
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
[Grading Criteria /Policy]
The overall grade of the class is determined based on the following.
In-class contribution 50%, presentation about the paper 30%, proposal for improvement plan 20%.

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

藤田　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
記憶を中心とした認知心理学および，主に学習過程に焦点を当てた教育心理学に関連する特定分野の複数の先行研究を批判的に読み，オリジナリティのある研究目的を達成するための適切な研究計画を考案する。自分の研究領域の先行研究と自分自身の研究の関係性を明確にするために，レビューを行うことを全員の課題に含める。
修士課程2年生は計画に沿って研究を実施した上で，結果を分析し考察する。
博士後期課程の院生は，各自で研究を遂行できるようになるために必要な諸々の力を向上させることを授業の目的とする。年度当初（春学期）に立てた各年度の中期目標を達成するために，秋学期の小目標を立て，具体的な研究活動を計画，実行し，成果を自己評価して，次の年度の計画に活かすというPDCAサイクルを体得する。

【到達目標】
半期の授業が終了した時点で，以下の各要素を身につけていることが，授業の具体的な到達目標となる。
＜修士課程＞
a. 自分の関心ある研究領域について，方法上の問題点・改善点もしくは優れている点を挙げることが
できる。
b. 自分の関心ある研究領域について，蓄積された知見や提唱された理論に関する問題点・改善点
もしくは優れている点を挙げることができる。
c. 上記a，bの内容をふまえて，独自性のある新たな研究計画を提案することができる。
d. 上記a，b，cの内容を，適切でわかりやすい方法で他者に伝達できる。
e. 他者の発表に対して，的確なコメントをすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
心理学の特定の領域に関連した一連の先行研究を概観した上で，一般的に用いられているパラダイムを吟味し，自分自身の研究計画に反映させることを具体的な作業課題として設定した演習である。
具体的な授業の進め方は次の通りである。毎回の授業の前半で，一人の受講生が自分の興味ある研究領域の複数の論文をレビューし，新たな問題提起を行い，自分自身の研究計画を2回発表する。毎回の授業の後半では，発表された研究計画について受講生全員で討論を行い，より適切な研究を行うための方法論上のアドバイスを各自が行う。それに加えて，修士課程2年生は，修論研究の中間発表と最終発表の2回を通して，研究計画から結果の分析及び解釈まで，自分自身の研究について論旨の一貫性を向上させる。修士課程1年生は，1回の修論計画発表を通して，自分自身の研究を行う意義・目的と対応した方法論について理解を深める。
博士後期課程の在籍者は，春学期の「心理学特殊研究I」において，博士後期課程を全体での自分自身の目標を，複数の観点から立てた。次にその全体目標を達成するための中目標として，当該学年での目標を立てた。春学期の成果をふまえて，新たな小目標として当該学期（セメスター）での目標を立てる。何をどのようにすれば各レベルの目標が達成できるのかを考えること自体が課題である。
発表は4種類の趣旨のものになる。1. 現状分析と目標設定，2, 目標を達成するために各自が設定した課題，3. 自分の研究領域における先行研究の概観（レビュー），4. 目標達成度に対する自己評価と今後の改善策。
修士・博士とも，それぞれの発表課題の評価基準はルーブリックによって事前に公表する。ルーブリックに沿って行われる質疑応答が，実質的なフィードバックの機会となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション＋研究計画上の留意点	この授業の概要と到達目標，評価方法の説明＋研究計画を立てる上で留意すべきポイントを担当教員が説明する
第2回	聴き手が行うこと＋発表準備	各発表回に聴き手が行うべき具体的な活動とその意義の説明
第3回	秋学期の目標設定の発表（博士）	博士学位論文作成に向け，現状分析を踏まえた秋学期の各自の目標
第4回	研究計画発表1	修士の発表者（一人目の1回目）の研究計画に対して，全員で討論
第5回	研究計画発表2	修士の発表者（二人目の1回目）の研究計画に対して，全員で討論
第6回	研究計画発表3	修士の発表者（三人目の1回目）の研究計画に対して，全員で討論
第7回	各自課題1（博士）	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表
第8回	レビュー発表1	修士の発表者（一人目の2回目）のレビュー発表に対して，全員で討論
第9回	レビュー発表2	修士の発表者（二人目の2回目）のレビュー発表に対して，全員で討論
第10回	レビュー発表3	修士の発表者（三人目の2回目）のレビュー発表に対して，全員で討論
第11回	各自課題2（博士，レビュー発表とする）	博論の第1章に相当するレビュー発表に対して，全員で討論
第12回	修論最終発表	M2の受講生が研究全体の構成を発表し，全員で討論
第13回	修論計画発表	M1の受講生が修論研究計画を発表し，全員で討論
第14回	目標達成度の自己評価（博士）および総括	達成指標に基づいた目標達成度の自己評価と改善案の発表（博士）と，授業の到達目標の確認，授業で修得できたことの振り返り（修士）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は，各2時間を標準とする。授業前の準備学習の詳細は下記の通り。
第1回 自分の興味ある研究領域の複数の論文をレビューする
第2回 複数の論文をレビューし，新たな問題設定を行う
第3回～第13回 レジュメおよびパワーポイントのスライド作成
授業後に行う学習として，第4回以降の各発表内容に対して，研究計画等を改善するためのアドバイスを学習支援システムの掲示板に記載する。また，第14回にはこの授業で学んだことを振り返り，研究実施の際の留意点を集約する。

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】
藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　　北大路書房
そのほか，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
＜修士課程＞
　平常点50％…授業へ参加し，他者の発表へコメントすることを評価対象とする。
　研究計画発表30％…研究目的の設定，研究方法・分析方法の適切さ，発表資料およびスライドの質を評価対象とする。
　研究計画改善の提案20％…毎回の計画発表に対して行われた，改善のためのアドバイスを評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度は開講せず。

【その他の重要事項】
　授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず事前に相談すること。
　この授業は，博士後期課程の「心理学特殊研究II」との合同科目。複数年度にわたって重複履修することが可能である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　認知心理学，教育心理学
＜研究テーマ＞
　単なる経験則に終わらない，研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。
＜主要研究業績＞
藤田哲也（編）（2006）．大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　北大路書房
藤田哲也（2006）．心理学を活かした教育実践のために　井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法ver.2　認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために　8章　北大路書房，pp.135-155.
藤田哲也（編）（2021）．絶対役立つ教育心理学［第2版］－実践の理論，理論を実践－　ミネルヴァ書房

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this class, students will critically read several prior studies in the fields of cognitive psychology focusing on memory and educational psychology focusing on learning process. Reflecting that, students will propose appropriate research plans to achieve original research objectives. The master's course second grader conducts research according to the plan and analyzes and discusses the results.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the following:
1.Students can list method problems / improvements or advantages in the research area of their interest.
2.Students can list problems / improvements or advantages regarding the accumulated knowledge and proposed theories regarding the research area of their interest.
3.Students can propose a new research plan with their own uniqueness based on the contents of 1 and 2 above.
4.Students can present the contents of 1, 2 and 3 above to others in an appropriate and easy-to-understand manner.
5.Students can make accurate comments on the presentations of others.
[Learning activities outside of classroom]
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
[Grading Criteria /Policy]
The overall grade of the class is determined based on the following.
In-class contribution 50%, presentation of research plan 30%, proposal for improvement of research plan 20%.

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 I

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
関心のある心理学研究分野の研究史を作成し，研究計画を立案する。

【到達目標】
自分が関心のある研究テーマについて先行研究を調査し，研究史をまとめ，未解決の問題を追究するための研究計画を立てることを春学期の目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
心理学に関わる問題を自ら設定し，研究を実施し，論文やプレゼンとしてまとめ上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで，研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。春学期は，研究テーマに関する先行研究の知識を深めるための研究史（レビュー）を執筆したり，独自の研究の内容を記述した研究計画書を作成したりする。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式のため，学生による活動報告やディスカッションが中心となる。授業および学習支援システムを通して，課題や発表に対するフィードバックを個別または全員に向けて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	シラバスの説明，達成目標の設定
第2回	研究テーマの設定（1）	キーワードの選定，先行研究の検索・講読
第3回	研究テーマの設定（2）	キーワードの選定，先行研究の検索・講読
第4回	文献の検索・講読（1）	先行研究の検索・講読，研究史の作成
第5回	文献の検索・講読（2）	先行研究の検索・講読，研究史の作成
第6回	研究史としての文献の発表	研究史の発表
第7回	研究史の見直し	他者からのフィードバックの検討
第8回	修正研究史発表	修正版の研究史の発表
第9回	問題の設定	問題意識と研究目的の設定
第10回	変数の整理，仮説の設定	従属変数・独立変数の整理，目的に沿った研究仮説の設定
第11回	研究計画の立案	研究の目的・方法・予想される結果の検討，研究計画書の書き方，倫理審査のための準備
第12回	研究計画書の発表	研究計画の発表
第13回	研究計画書の見直し	他者からのフィードバックの検討
第14回	修正研究計画書発表，総括	修正版の研究計画書の発表，春学期のまとめ，今後の展望

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究の流れに沿って，ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し，次の回までに研究を進展させる。進捗状況を授業にて報告するための資料を準備する。本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキストは特にない。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】
南風原 朝和・市川 伸一・下山晴彦（編）(2001)．心理学研究法入門　―調査・実験から実践まで―　東京大学出版会.
高野 陽太郎・岡 隆（編）(2004)．心理学研究法　―心を見つめる科学のまなざし―　有斐閣アルマ.
松井 豊（2006)．心理学論文の書き方―卒業論文や修士論文を書くために―　河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】
平常点25%，進捗状況報告25%，発表（研究史・研究計画書）50%の割合で評価する。原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または無断で発表を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
2024年度春学期について記述します。正規の受講者が1名のみだったので一般化はできませんが，回答者からは「履修してよかった」「理解できた」「工夫されていた」という評価をいただきました。「分析や実験の方針などのアドバイスをたくさんいただけて助かりました」という感想をいただきました。他の学生との議論の場を授業では提供できませんでしたが，授業外でそのような機会があることを規定しています。

【その他の重要事項】
授業計画や運営方針の説明などをしますので，受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳 (2017). 『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010). 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
To help students develop a high-quality research program in psychology, students in this course will conduct a thorough survey of the research literature and construct a research agenda in their field of interest.
[Learning objectives]
The goal of the spring semester is for students to survey previous research on a topic of the their own interest, summarize the research history, and formulate a research plan aimed at addressing unresolved issues in the field.
[Learning activities outside of classroom]
Students will set appropriate goals and strive to achieve those goals by the next class meeting. Presentation materials should be prepared as needed. The standard amount of time for preparation and review of this course is two hours each.
[Grading criteria/policy]
Your overall grade will be determined based on the following: in-class contribution 25%, progress report 25%, presentation 50%. As a rule, if you are absent for more than 4 classes without a legitimate reason or fail to present in class, course credit will not be granted

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自分で設定した研究計画に沿った研究を実施し，研究成果の発表および研究論文の執筆を行う。

【到達目標】
春学期に立てた研究計画に従って研究を実施し，論文やプレゼンとしてまとめることを秋学期の目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
心理学に関わる問題を自ら設定し，研究を実施し，論文としてまとめ上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで，研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。秋学期は，研究計画書に沿って研究を実施し，必要なデータを収集・分析・解釈した上で，研究論文の執筆や効果的なプレゼンといった形で成果をまとめることを目指す。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式のため，学生による活動報告やディスカッションが中心となる。授業および学習支援システムを通して，課題や発表に対するフィードバックを個別または全員に向けて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	研究計画の確認，進捗状況報告
第2回	研究の実施（1）	研究の実施，経過報告
第3回	研究の実施（2）	研究の実施，経過報告
第4回	研究の実施（3）	研究の実施，経過報告
第5回	データの整理・分析（1）	データの入力・整理
第6回	データの整理・分析（2）	データの入力・整理
第7回	記述統計量の計算	記述統計量の算出，効果的な図表の作り方
第8回	中間報告	研究結果に関する中間報告・討論
第9回	推測統計の適用	適切な検定の適用，検定結果の解釈
第10回	論文の執筆（1）	研究論文の書き方，「方法」「結果」の書き方
第11回	論文の執筆（2）	「導入」「考察」の書き方
第12回	論文の執筆（3）	タイトルのつけ方，参考文献の書き方，原稿の推敲
第13回	口頭発表の仕方（1）	口頭発表の心得，効果的な発表資料の作り方
第14回	口頭発表の仕方（2），総括	論文提出，最終成果発表の準備，質疑への準備，秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究の流れに沿って，ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し，次の回までに研究を進展させる。進捗状況を授業で報告するための資料を準備する。本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキストは特にない。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】
南風原 朝和・市川 伸一・下山晴彦（編）(2001)．心理学研究法入門　—調査・実験から実践まで—　東京大学出版会.
高野 陽太郎・岡 隆（編）(2004)．心理学研究法　—心を見つめる科学のまなざし—　有斐閣アルマ.
松井 豊（2006）．心理学論文の書き方—卒業論文や修士論文を書くために—　河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】
平常点25%，進捗状況報告25%，発表50%の割合で評価する。原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または無断で発表を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
2024年秋学期について記述します。回答者は1名でしたが，「履修してよかった」「理解できた」「工夫されていた」と回答してくれました。授業外学習時間は「3時間以上」という回答だったので，研究を進展させたり資料を準備したりするのにたくさんの時間を費やしたことがうかがえます。「研究の進捗報告や相談ばかりでなく，時々まとめのプレゼンを求められたのがよかったです。プレゼン後に，研究についてだけではなくプレゼンの仕方やスライドのつくり方についてもコメントをいただけたので，頭の整理にも役立ちました。」といったコメントをいただきました。今後も学術研究に特化した知識や技能に加えて企業などでも利用できるスキルの修得にも貢献できる場を提供できればと思います。

【その他の重要事項】
授業計画や運営方針の説明などをしますので，受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳 (2017). 『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010). 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
To help students develop a high-quality research program in psychology, students in this course will carry out a research study according to their plan, and present their findings through oral presentations and a research paper.
[Learning objectives]
In the fall semester, students will conduct research based on the research plan developed in the spring semester, and present the results in the form of a paper and a presentation.
[Learning activities outside of classroom]
Students will set appropriate goals and strive to achieve those goals by the next class meeting. Presentation materials should be prepared as needed. The standard amount of time for preparation and review of this course is two hours each.
[Grading criteria/policy]
Your overall grade will be determined based on the following: in-class contribution 25%, progress report 25%, presentation 50%. As a rule, if you are absent for more than 4 classes without a legitimate reason or fail to present in class, course credit will not be granted

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 I

林　容市

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
健康心理学，生理心理学に関連した事項を中心に，実践に繋がる課題の解決を通じて研究の実践方法を学ぶ。

【到達目標】
1. 先行研究の知見の集積から，健康心理学，生理心理学に関する検討課題を指摘できる。
2. 上記1の検討課題を解決するための様々な指標について，その測定方法を理解し，結果を適切に解釈できる。
3. 上記１の検討課題について，具体的な手法を踏まえて研究計画（解決方法）を設定できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業の到達目標を踏まえて，受講生が興味を有する健康心理，生理心理をテーマとする研究を調べ，現在までの研究の状況を確認して課題を明らかにし，プレゼンテーションを行う。次に特に代謝，骨格筋活動に関する測定機器を実際に使用してデータを測定し，その結果について論議した上で判読・解釈法について学ぶ。また，これらの生理的指標の変化と心理的状態（感覚，努力度など）との関係を学ぶ。
また，前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては，授業内で全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	健康心理学，生理心理学の概要の理解
第2回	研究例の紹介	身体活動に関連した健康心理学，生理心理学の研究事例の紹介
第3回	文献研究およびプレゼンテーションの方法	文献レビューとプレゼンテーション方法の理解
第4回	文献研究結果の発表1	受講者選定のテーマに関する文献研究の結果発表
第5回	文献研究結果の発表2	受講者選定のテーマに関する文献研究に基づく討論
第6回	エネルギー代謝測定の実際1	代謝量測定に関する基本的理論の学習および健康心理学，生理心理学の研究における具体的な使用法の理解
第7回	エネルギー代謝測定の実際2	呼気ガス分析器の使用法の学習および様々な身体状態・活動状況における代謝量（kcal）の実測
第8回	エネルギー代謝測定の実際3	3軸加速度センサによる活動量計の使用法の学習および活動量と心理指標（主観的努力感など）の実測
第9回	エネルギー代謝測定の実際4	複数の方法で測定されたエネルギー代謝量の解釈・理解
第10回	骨格筋活動測定の実際1	骨格筋活動測定に関する基本的理論の学習および健康心理学，生理心理学の研究における具体的な使用法の理解
第11回	骨格筋活動測定の実際2	筋電図の測定機器の使用法の学習および様々な身体活動時における筋電図と心理指標（主観的努力感など）の実測
第12回	骨格筋活動測定の実際3	簡便な手法を用いた筋力の調整力と心理指標（主観的努力感など）の実測
第13回	生理的指標と生理指標との対応	各生理指標の測定結果と心理指標との対応関係の理解
第14回	研究計画の検討	様々な指標を用いた研究計画の発表と実現可能性についての討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1回：本授業において主として習得を希望する手法についてレポートの作成。2-5回：個人で設定したテーマに関連した文献を検索，精読し，発表準備を行う。6-13回：事前に配布された資料を精読し，機器の操作法，測定方法，分析方法について予習する。14回：研究計画を立案し，プレゼンテーションの準備を行う。
これらの授業時間外の学習時間は，各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特に指定しません。必要に応じて授業中に資料を配布します。

【参考書】
田中喜代次，大蔵 倫博 (編)．健康運動の支援と実践．金芳堂．

【成績評価の方法と基準】
授業への参画（出席ではない）状況：50 %，プレゼンテーションおよびディスカッション内容：30 %，研究計画内容：20 %

【学生の意見等からの気づき】
前年度休講のため，特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　生理心理学，応用健康科学，健康心理学
＜研究テーマ＞　運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し、健康維持、減量などに効果的な身体活動を検討する
＜主要研究業績＞　林容市 他．就学段階ごとの運動経験が大学生における把握の調整力に及ぼす影響．体育測定評価研究：18, 35-46, 2019；林容市 他．個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係．体力科学57：197-206, 2008　ほか

【Outline (in English)】
【Course outline】The purpose of this class is to learn and master research methods through the resolution of practice tasks related to Health Psychology and Physiological Psychology.
【Learning Objectives】By the end of the course, students should be able to:
1. Point out issues to be considered in health psychology and physiological psychology based on the accumulation of findings from previous studies.
2. Understand the measurement methods of various indices to solve the issues and interpret the results appropriately.
3. Set up a research plan and solution method based on specific methods for the issues discussed.
【Learning activities outside of the classroom】In the first session, students will write a report on the methods they wish to learn in this class. Students will search for and carefully read literature related to the themes they have set and prepare for presentations in the second to fifth sessions. In the sixth to thirteenth sessions, students read the materials distributed by the instructor in advance and prepare for the operation of equipment, measurement methods, and analysis methods. In the 14th lecture, students will plan their research plan and prepare for the presentation. Students are expected to have 2 hours of study time outside of class time in this course.

【Grading Criteria/Policy】Grading will be decided based on the class participation (not attendance) (50%), the presentation and discussion(30%), and the research proposal(20%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

林　容市

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
健康心理学，生理心理学に関連した事項を中心に，現在の研究の進展状況を確認し，新たな課題を設定した上で，それを解決しうる研究計画を立案する。

【到達目標】
1. 先行研究の知見の集積から，健康心理学，生理心理学に関する具体的な検討課題を選定できる。
2. 上記1の検討課題について，具体的な手法を踏まえて研究計画（解決方法）を立案できる。
3. 必要な指標を用いて研究を実践し，適切にデータを分析した上で，ミニ論文を作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生が興味を有する健康心理，生理心理をテーマとする先行研究を調べ，検討課題を明らかにした上で，プレゼンテーションを行う。その内容について論議を進め，具体的な研究計画を立案し，生理指標と心理状態（感覚，努力度など）を用いた実験・測定を通じてミニ論文を作成する。
また，前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては，授業内で全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業概要と到達目標の説明
第2回	研究テーマの検討1	研究テーマの発表と実現可能性を考慮した論議
第3回	研究テーマの検討2	研究テーマの確定と具体的な手続きの検討
第4回	関連研究のまとめ1	テーマに関連した先行研究のまとめと発表
第5回	関連研究のまとめ2	テーマに関連した先行研究のまとめと課題の決定
第6回	研究計画の立案1	具体的な研究計画の発表
第7回	研究計画の立案2	発表された研究計画に対する受講者内での論議
第8回	研究計画の実践1	研究の実践に向けた研究計画の確定
第9回	研究計画の実践2	研究計画に沿った実験の実践：心理・生理指標の測定
第10回	研究計画の実践3	研究計画に沿った実験の実践：心理・生理指標の結果の解釈
第11回	測定データの検討1	測定されたデータの整理と分析
第12回	測定データの検討2	整理・分析したデータを発表と受講者内での論議
第13回	研究結果の報告1	ミニ論文の作成
第14回	研究結果の報告2	ミニ論文の作成と発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
1回：本授業において主として習得を希望する手法についてレポートの作成。2，3回：個人で設定したテーマに関連した文献を検索，精読し，発表準備を行う。4，5回：関連する複数の先行研究を読んでまとめ，発表準備を行う。6，7回：研究計画を立案し，発表準備を行う。8-10回：研究計画に沿ったデータ測定に向け，事前に配布された資料を精読して機器の操作法，測定方法，分析方法について予習する。11，12回：測定したデータを分析し，発表準備を行う。13，14回：ミニ論文を作成し，資料を作成する。
これらの授業時間外の学習時間は，各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特に指定しません。必要に応じて授業中に資料を配布します。

【参考書】
田中喜代次，大蔵 倫博 (編)．健康運動の支援と実践．金芳堂．

【成績評価の方法と基準】
授業への参画（出席ではない）状況：50 %，プレゼンテーションおよびディスカッションの内容：30 %，ミニ論文の内容：20 %

【学生の意見等からの気づき】
前年度休講のため，特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　生理心理学，応用健康科学，健康心理学
＜研究テーマ＞　運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し、健康維持、減量などに効果的な身体活動を検討する
＜主要研究業績＞　林容市 他．就学段階ごとの運動経験が大学生における把握の調整力に及ぼす影響．体育測定評価研究：18, 35-46, 2019；林容市 他．個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係．体力科学57：197-206，2008　ほか

【Outline (in English)】
【Course outline】The purpose of this class is to examine the progress of current research on health psychology and physiological psychology and to be able to formulate research proposals to solve problems after setting up a new research problem independently.
【Learning Objectives】By the end of the course, students should be able to:
1. Select specific issues to be studied in health psychology and physiological psychology based on the accumulation of findings from previous studies.
2. Formulate a research plan (solution method) based on specific methods for the research question.
3. Conduct research using the necessary indicators, analyze data appropriately, and write a mini-thesis.
【Learning activities outside of the classroom】In the first session, students will write a report on the methods they wish to learn in this class, search for and carefully read literature related to their set theme, and prepare for presentations in the second and third sessions. Students will read and summarize several related previous studies in the fourth and fifth sessions and prepare for the presentation, develop a research plan and prepare for the presentation in the 6th and seventh sessions. In the 8th to 10th sessions, students read the materials distributed in advance and learn how to operate the instruments, measurement methods, and analysis methods for data measurement according to the research plan. Students will analyze the measured data in the 11th and 12th sessions and prepare for the presentation, and in the 13th and 14th sessions, students will write a mini paper and prepare materials. The standard study time outside of these class hours is 2 hours each.
【Grading Criteria/Policy】Grading will be decided based on the class participation (not attendance) (50%), the presentation and discussion(30%), and the research proposal(20%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

学習心理学特論

藤田　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人間の学習活動を支えている「記憶」について，主に記憶の測定法という観点から捉える。これまでの記憶研究の主要な成果を，単なる知識として獲得するだけでなく，それぞれの知見が導かれた研究の過程についても理解し，自分自身の研究計画をより洗練させるのに役立たせる。

【到達目標】
半期の授業が終了した時点で，以下の各要素を身につけていることが，授業の具体的な到達目標となる。
１．人間の記憶を測定する方法（実験のパラダイム）について，説明ができる程度に理解する。
２．その測定法上の工夫や留意点を，記憶以外の心理学領域に一般化できる。
３．上記１，２をふまえて，自分自身の興味・関心のある領域で，実験・調査・観察等の研究計画を立てることができる。
４．研究計画を，第三者にも正確に伝えることができるような，客観的で適切な文章で記述できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
短期記憶および作動記憶の性質を検討する上での二重課題法，意味記憶の構造を明らかにするための間接プライミング，エピソード記憶の伝統的な測度である再生・再認について，理論的な背景と実験手続との関連から，実際に使用する際の注意点を説明する。さらに，無意識的であるが故に測定が困難であった潜在記憶の測度である直接プライミングをはじめとした，近年の記憶研究の動向にも触れる予定である。測定法が妥当であるかどうかについて判断を下すためには，理論との整合性が重要であることから，様々な種類の記憶のモデルについても理解を深めることになる。とりわけ長期記憶においては，符号化と検索の過程の一致度が重要であることを強調する。
半期の前半の授業では，主に講義形式によって，上記の内容について解説を行う。後半の授業では，授業で得た知識を活用して，各自が研究計画を立て，それを発表し，教員と受講生全員で討論を行うという形式をとる。
最終的には，学術論文執筆を念頭に置き，研究方法を適切な文章で記述したものをレポートとして作成し，提出することになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	この授業の概要と到達目標，評価方法を担当者が説明する
2	記憶の分類	短期記憶vs.長期記憶，手続記憶vs.宣言記憶，意味記憶vs.エピソード記憶について担当者が説明する
3	作動記憶の測定法	作動記憶のモデルおよび，そのモデルの根拠となっている研究の詳細を担当者が説明する
4	反応時間からわかること	反応時間とモデルによる解釈，意味記憶研究における間接プライミング効果を担当者が説明する
5	再生と再認	再生と再認の実施法，再生と再認の違いを担当者が説明する
6	再生と再認の理論	自由再生の二段階説，符号化特定性原理，再認の二過程説を担当者が説明する
7	潜在記憶の定義・測定法	潜在記憶とは何か，潜在記憶が我々の認知に及ぼす影響を担当者が説明する
8	記憶法則の一般性	記銘材料と記憶法則の関係，記憶テストと記憶法則の関係，実験手続きの違いと記憶成績の関係を担当者が説明する
9	この授業での課題	「模擬実験計画」のポイント，レポートのポイントを担当者が説明する
10	模擬実験計画：発表１	受講生が発表を行い，その内容に，これまでの授業内容が反映されているか全員で討論する
11	模擬実験計画：発表２	受講生が発表し，発表された実験計画の内容を，より適切なものにするように全員で討論する
12	模擬実験計画：発表３	受講生が発表し，その研究方法が，研究目的から見て妥当かどうかを全員で討論する
13	総括＋レポート作成	記憶分野の知識の復習と整理を行い，研究法として学んだことの復習と確認，発表の総括をする
14	レポート提出	成績評価基準の説明を担当者が行い，各自で確認し，授業内容の応用に向けてのアドバイスを担当者が行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とする。詳細は下記の通り。
第１回 以前に学んだことのある「記憶」研究について復習
第２回 それぞれの記憶が，日常生活のどのような場面で活用されているのかを考え，理解を深める
第３回 作動記憶の測定法を，自分の研究分野や自分自身の認知活動・学習活動に当てはめて考える
第４回 反応時間を指標にする際の注意点をまとめ，具体的な研究計画に活かす
第５回 自分の研究で再生あるいは再認を用いる場合の，得られる結果の違いについて考える
第６回 自分の研究に，再生と再認のいずれを用いるべきかを理論的に説明できるよう考える
第７回 潜在記憶が自分の日常生活のどのような現象に関わっているのかを考える
第８回 これまでの授業内容を総括的に復習し，疑問点を整理する
第９回 自分なりの問題設定と発表準備
第10回 自分の発表の振り返り，他者の発表に対するコメント整理，発表の準備
第11回 自分の発表の振り返り，他者の発表に対するコメント整理，発表の準備
第12回 自分の発表の振り返り，他者の発表に対するコメント整理，発表の準備
第13回 レポート作成
第14回 レポートの見直しと修正

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】
藤田哲也（1999）．潜在記憶の測定法　心理学評論, 42, 107-125.
藤田哲也（2001）．潜在記憶と行為の記憶に関する研究　風間書房
藤田哲也（2006）．「無意識」に踊らされるあなた－日常記憶としての潜在記憶研究　太田信夫（編）記憶の心理学と現代社会　有斐閣
その他，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点40％…授業へ参加し，他者の発表へコメントすることを評価対象とする。
授業内での発表30％…発表の内容，発表資料における記述のしかた，発表のしかたを評価対象とする。
レポート30％…レポートの内容，学術論文としての体裁（書式）を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度の授業改善アンケートから：2人のうち回答者が1名なので，ここに書きにくいこともありますね。「履修してよかった」「理解度」とも5をつけてくれたのでよかったです。今年度は受講生が少なく，やや授業の進め方は例年と異なりましたが，修得すべきことは身につけてくれたのだと思います。授業は終わりましたが，この授業で学んだことを，自主的に自分の研究に反映させてくださいね。

【その他の重要事項】
博士後期課程の「学習心理学特殊講義」との合同科目。授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず初回授業よりも前に相談すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
記憶
＜研究テーマ＞
様々な記憶の測定法と，その理論
＜主要研究業績＞
藤田哲也（1999）．潜在記憶の測定法　心理学評論, **42**, 107-125.
藤田哲也（2001）．潜在記憶と行為の記憶に関する研究　風間書房
藤田哲也（2006）．「無意識」に踊らされるあなた－日常記憶としての潜在記憶研究　太田信夫（編）　記憶の心理学と現代社会　有斐閣

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this class, students understand "memory" that supports human learning activities mainly from the viewpoint of measurement method of memory.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the following:
1.Students will understand how to measure human memory (experimental paradigm) to the extent that they can explain it.
2.Students can generalize their measurement method ideas and precautions to psychological fields other than memory.
3.Based on the above 1 and 2, students can make research plans such as experiments, surveys, and observations in their own areas of interest.
4.Students can describe their research plans in objective and appropriate sentences that can be accurately communicated to others.
[Learning activities outside of classroom]
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
[Grading Criteria /Policy]
The overall grade of the class is determined based on the following.
In-class contribution 40%, presentation 30%, report 30%.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

音声言語科学特論

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人間に特有の能力とされる言語がどのような原理によって成立しているのかを科学的に追究する言語学の基礎を概観する。

【到達目標】
言語の音（音声学，音韻論），語彙（形態論），文の作り方（統語論），語句の意味や対話の中での役割（意味論，語用論）など，言語学の諸分野について，基礎概念を学び，問題を解く能力を身に付けることを本授業の目標とする。授業では言語学を初めて学ぶ学生を想定しているが，受講生の既有知識に応じて進度を適宜調整する。授業終了時には，言語に関する様々な現象や疑問について吟味し解決できるようになることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
言語学の諸分野の中から適宜重要なトピックを取り上げる予定である。扱う内容については受講者と相談のうえ重み付けを調整する可能性がある。日本語や英語などの諸言語から様々な具体例を検討し，問題を実際に解く作業を通して，言語学の基礎概念や分析方法を身に付ける。また，音声学分野で広く利用されているフリーソフトPraatの実習も取り入れる予定である。授業は，教員による講義，課題に関するディスカッション，教員から全員に向けてのその場でのフィードバックなどを織り交ぜながら進める予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入，言語と言語学	シラバスの説明，言語と言語学，話し言葉と書き言葉，「真の言語」
第2回	音声学・音韻論：母音と子音	発話のメカニズム，母音と子音
第3回	音声学・音韻論：音素	音素，音素分析，日本語の音韻変化
第4回	音響音声学：基礎	音の種類，音を可視化する方法，フィルタ，アナログ信号とデジタル信号
第5回	音響音声学：音源フィルタ理論	音声産出の音源フィルタ理論，基本周波数，フォルマント周波数
第6回	実験音声学：音声分析	Praatを使った音声の録音・可視化・編集・分析・ラベリング
第7回	実験音声学：音声合成	Praatを使った音声の再合成
第8回	実験音声学：音声知覚	Praatを使った音声知覚実験
第9回	形態論：形態素，語形成	心内辞書と一般辞書，形態論と形態素，形態素の種類，偶発的な語形成，少し規則的な語形成，規則性の高い語形成，複合
第10回	形態論：複合，派生	主要部，複合語の種類，複合語の意味，派生語の樹形図
第11回	形態論：屈折，形態素解析	屈折と活用，形態素解析の方法
第12回	統語論：導入，カテゴリー，意味役割，マージ	格，言語の階層構造，項と意味役割，マージ，樹形図（ツリー）
第13回	統語論：文の組み立て	句の主要部と補部，文の樹形図
第14回	総括，振り返り	文の樹形図，期末レポート

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回，テキストの指定範囲を読み，課題に取り組み，次回の授業で解答を発表したり議論したりするための準備をすること。本授業の準備学習・復習時間は，計4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
以下の文献の一部を授業で使用する予定。
西光 義弘（編集）(1999). 日英語対照による英語学概論：増補版 くろしお出版.
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳 (2017). 音声学を学ぶ人のためのPraat入門　ひつじ書房.

【参考書】
参考書は適宜授業内にて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点・課題60%，期末レポート40%の割合で評価する。言語学は知識の段階的な学習とともに，問題を解く能力の習得が求められるので，授業参加と課題を重視する。原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または無断で発表を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
6名の回答者全員が「履修してよかった」「理解できた」「工夫されていた」と回答してくれました。授業外学習時間については「3時間以上」が2名，「2〜3時間」が4名でした。「毎週課題があるおかげで理解している範囲・理解しきれていない範囲が自覚出来てとてもよかった」「答え合わせの時間でわからないことを気軽に共有・質問できて深い理解につながった」「クラスの皆が積極的に授業に参加しており、活発な雰囲気だった」といったコメントをいただきました。今後も事前課題＋授業での答え合わせとディスカッションという形式を継続したいと思います。

【その他の重要事項】
授業計画や運営方針の説明などをしますので，受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一 (2011). 音声分析ソフトウェアPraatを用いた聴取実験：F0再合成による刺激作成と実験の制御　日本音響学会誌, 67, 345-350.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して　法政大学文学部紀要, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course introduces students to the fundamentals of linguistics, the scientific study of language.
[Learning objectives]
Students should develop an understanding of the basic principles and terminology in subareas of linguistics such as phonetics, phonology, morphology, syntax, semantics, and pragmatics, and be able to solve various problems in these areas. By the end of the course, students should be able to identify and attempt to solve practical problems related to language.
[Learning activities outside of classroom]

(1) For each class period, students should do the assigned reading, work on homework assignments, and prepare for presentation and discussion for the next class. (2) Toward the end of the course, students should select and read an academic paper pertaining to language, and present its contents to the class. The standard study time required before and after each class is 4 hours total.
[Grading criteria/policy]
Grades will be determined based on class participation and homework (60%), and final exam (40%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

社会心理学特論

越智　啓太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業概要：
テーマ　社会問題とその解決について：心理学の観点から
　心理学の専門家として、社会問題についての従来の研究とエビデンスを効果的に収集し、決められた時間内に効果的にプレゼンテーションを行う演習を行う。
具体的には、(1) 妊娠中絶、(2) 暴力コンテンツ、ポルノコンテンツの規制、(3) 少年法の厳罰化問題などについて扱う。
授業の意義：
　この講義を受講することによって以下のことを達成できるようにする。
①社会問題について心理学の専門家の立場から適切に分析できる
②社会問題について心理学の専門家の立場から適切にコメントできる
③社会問題について心理学の専門家の立場から議論できる
④社会問題について心理学の専門家の立場から自分の主張をプレゼンテーションできる

【到達目標】
（1）主張したい問題についての分析
（2）エビデンスの収集
（3）エビデンスの比較と分析
（4）自分の意見の構成
（5）自分の意見の主張の構成
（6）効果的なプレゼンテーション
（7）他人のプレゼンテーションへの批判・質問スキル
（8）他人のプレゼンテーションの評価
ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は各自があらかじめ、選択したテーマについて６０分間でプレゼンテーションを行い、それについて受講者全員でディスカッションする形式で行う。発表内容についての知識を深めるだけでなく、プレゼンテーションの方法や、質問に対する答え方、プレゼン時の動作などについても訓練を行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業についての説明
第2回	発表と討論（１）発表形式に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第3回	発表と討論（２）発表時の振る舞いに重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第4回	発表と討論（３）パワーポイントの内容に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第5回	発表と討論（４）議論の進め方に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第6回	発表と討論（５）質問に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第7回	発表と討論（６）質問対応に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第8回	発表と討論（７）反論に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第9回	発表と討論（８）反論のエビデンス提示に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第10回	発表と討論（９）反論対応に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第11回	発表と討論（１０）まとめに重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第12回	発表と討論（１１）発表の進め方に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第13回	発表と討論（１２）　総合評価（１）	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第14回	発表と討論（１３）総合評価（２）	受講生の発表と討論、それについてのコメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
自分の発表に際しては、事前調査と発表の準備（50時間程度）
他人の発表に際してはその予習（数時間程度）が必要。

【テキスト（教科書）】
使用しない

【参考書】
発表者が指定する

【成績評価の方法と基準】
評価基準 授業におけるプレゼンテーション　50％、授業における討論の質と量　50％
自分の発表時でなくても積極的に発言しないと、後者の50％の加点は得られない。たとえば、自分の発表がパーフェクトでも授業中の自発的な発言があり、かつそれが有益なものでない限り単位は得られない。すべての回に出席しても貢献度が少ないと単位は得られない。

【学生の意見等からの気づき】
例年、プレゼン能力や質問能力がついたというポジティブな評価をいただいています。

【学生が準備すべき機器他】
各自、自分が使用しているパソコンを授業時に持参すること。
授業中にインターネットなどを参照しながら授業に参加すること

【担当教員の専門分野等】
専門領域 犯罪心理学、社会心理学
研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用
主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ　犯罪捜査の心理学；越智啓太 2015 恋愛の科学　実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで学ぶ犯罪心理学　北大路書房；越智啓太　2008　犯罪捜査の心理学　化学同人；越智啓太ほか　2008　自伝的記憶の心理学　北大路書房

【Outline (in English)】
【Course outline】
Theme: Social problems and their solutions from a psychological point of view.
As a psychology expert, effectively collect previous research and evidence on social issues and make effective presentations.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
(1) Analysis of the problem you want to assert
(2) Collection of evidence
(3) Evidence comparison and analysis
(4) Composition of one's opinion
(5) Composition of assertions of one's opinion
(6) Effective presentation
(7) Critique / question skills for other people's presentations
(8) Evaluation of presentations by others
【Learning activities outside of classroom】

Each lesson requires 2 hours of preparation and 2 hours of review.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Oral presentation (50%) + Quality and quantity of comments, questions in class (50%)

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

読書心理学特論

平山　祐一郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本という媒体を使って行われる心理的活動が「読書」である。その行為はどのような心理的過程を通じて行われるのか、そしてその行為の結果、人間の心理的活動がどのような影響を受けるのかについて考察する。教育現場では「読書離れ」が問題視され対応がなされている。「読書離れ」とはどのような現象なのか、そして、その対応策にはどのようなものが考えられるのかについて議論する。さらに、電子書籍が登場し、従来の「読書」という心理的活動が変貌することが予想されている。電子書籍がどのような影響を与えるのか、その長所・短所について予測する。受講者は以上の課題に対し、議論や考察、予測ができるようになることを目的とする。

【到達目標】
この授業では心理学的観点から「読書」について理解を深める。授業に積極的に参加することにより、受講者には以下の力がつく可能性が高まる①読書という活動やその作用について心理学的に説明できる。②読書離れの原因と対策について心理学的観点から言及できる。③電子書籍の影響について心理学的に予測できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
予定された発表者の発表後、全員で議論。【到達目標】の達成を目指す。【成績評価の方法と基準】を参照。オンライン授業。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的・方法・成績評価・注意事項等を説明する。
第2回	「ネット時代の読書論」第1回～第12回	発表後、全員で議論。
第3回	「ネット時代の読書論」第13回～第24回	発表後、全員で議論。
第4回	「ネット時代の読書論」全体	総合して、全員で議論。
第5回	教科書Part 1	発表後、全員で議論。
第6回	教科書Part 2	発表後、全員で議論。
第7回	教科書Part 3	発表後、全員で議論。
第8回	教科書Part 4	発表後、全員で議論。
第9回	教科書Part 5	発表後、全員で議論。
第10回	教科書Part 6	発表後、全員で議論。
第11回	教科書全体	総合して、全員で議論。
第12回	「読書離れ」について	全員の発表と議論
第13回	「電子書籍」について	全員の発表と議論
第14回	授業のまとめ	今までの議論の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備・復習時間は各2時間。準備学習は文献の読み込みを毎回指示（所要時間２時間）。復習は①授業内容の要約、②授業内の問いへ解答、を毎回提出する（所要時間２時間）。

【テキスト（教科書）】
①平山祐一郎（著）連載「ネット時代の読書論」※「指導と評価」誌（日本図書文化協会・日本教育評価研究会） 2008年4月号～2010年3月号　②猪原敬介（著）「科学的根拠が教える子どもの『すごい読書』」（日経BP）,2026年（1,800円＋税）《注意》①は平山が提供する。②は法政大学図書館に所蔵予定である。☆教科書を変更する可能性もあるので、指示があるまで購入しない。

【参考書】
必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
【到達目標】達成の観点から、以下の要素（観点）と配分（%）により評価する。[1]発表50％①質の高いプレゼンをしたか。②議論を刺激する発表をしたか。[2]議論30％　①議論に参加したか。②質問をしたか。③問いを立てられたか。④建設的に意見表明したか。⑤発見的考察ができたか。[3]提出物20％①要約。②問いへの回答。

【学生の意見等からの気づき】
議論のある授業が好評のようだ。発見がある授業にしたい。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業の準備をしておいてください。

【その他の重要事項】
シラバスは状況に応じ変更。メールにて連絡します。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉教育心理学〈研究テーマ〉読書心理、作文・表現の心理、学習指導と評価〈主要研究業績〉①平山祐一郎 2008 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察 野間教育研究所 ②平山祐一郎 2015 大学生の読書の変化-2006年調査と2012年調査の比較より- 読書科学,56,55-64.③平山祐一郎 2020 大学生の読書をどうするか IDE現代の高等教育,621,26-30.

【Outline (in English)】
［Course Outline］
The purpose of this course is to provide participants with some points of view about effects or impacts of reading books in the psychological context. Main topics are as follows: what kind of psychological process is necessary for reading books or what kind of effect happens by electronic books. In addition to these, we will consider the cause of increase in the number of non-readers.
［Learning Objectives］
At the end of the course, participants are expected
1.to explain the significanse of book reading psychologically.
2.to point out the causes of phenomenon of decreasing book readers and to take measures to it psychologically
3.to anticipate the influences of digital books psychologically.
［Learning activities outside of classroom］
After each class meeting, participants will be expected:
To read some papers related to the theme of the next class.
To make a summary of the contents of the class.
Students are expected to spend four hours on these tasks.
［Grading Criteria /Poclicy］
Grading will be decided based on research presentation（50%）、academic discussion（30%）、submission of assignments（20%）.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

教育心理学特論

平山　祐一郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
①教育という活動に心理学の光を当て、深く理解すること。
②心理学の知見を教育活動に反映させ、質の向上をはかること。

【到達目標】
①国内外の教育課題を多面的に把握し、心理学的に説明できる。
②教育課題に関して、証拠に基づいて原因を分析をしたり、対応を考えたりすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
予定された発表者の発表後、全員で議論。【到達目標】の達成を目指す。【成績評価の方法と基準】を参照。オンライン授業。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的・方法・成績評価・注意事項等の説明。
第2回	今、「学級崩壊」について考える	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第3回	「心理的安全性」とは	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第4回	「動機づけ」と指導	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第5回	待つ・見守る・かかわる	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第6回	「構成的グループエンカウンター」とは	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第7回	「非認知的能力」について考える	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第8回	デジタル社会と生成AIと教育	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第9回	学校はどこまでやるか①児童期	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第10回	学校はどこまでやるか②思春期	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第11回	日本の教育の特徴を考える①海外からの評価	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第12回	日本の教育の特徴を考える②批判的検討	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第13回	再び「学級崩壊」について考える	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第14回	振り返りとまとめ	扱ったトピックを振り返り、まとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備・復習時間は各2時間。準備学習は文献の読み込みを毎回指示（所要時間２時間）。復習は①授業内容の要約、②授業内の問いへ解答、を毎回提出する（所要時間２時間）。

【テキスト（教科書）】
教科書を用いる可能性もある。その際には受講生と相談する。

【参考書】
必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
【到達目標】達成の観点から、以下の要素（観点）と配分（%）により評価する。
[1]発表50％
①質の高いプレゼンをしたか。
②議論を刺激する発表をしたか。
[2]議論30％
①積極的に議論に参加したか。
②適切な質問をしたか。
③ユニークな問いを立てられたか。
④建設的に意見表明したか。
⑤発見的考察ができたか。
[3]提出物20％
①要約。
②問いへの回答。

【学生の意見等からの気づき】
議論のある授業が好評のようだ。発見がある授業にしたい。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業の準備をしておいてください。

【その他の重要事項】
シラバスは状況に応じて変更。メールにて連絡します。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉教育心理学
〈研究テーマ〉
①読書の心理
②作文・表現の心理
③学習指導と評価
〈主要研究業績〉
①平山祐一郎 2008 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察 野間教育研究所
②平山祐一郎 大学生の読書の変化-2006年調査と2012年調査の比較より- 読書科学,56,55-64.
③平山祐一郎 2020 大学生の読書をどうするか IDE現代の高等教育,621,26-30.

【Outline (in English)】
［Course Outline］
The goal of this course is to give participants the foundational knowledge and the practical skills of educational psychology. It is especially important to develop psychological approaches to address matters concerning education and to understand the application of psychological findings to educational activities to enhance educational outcomes.
［Learning Objectives］
At the end of the course, participants are expected
1.to explain educational issues at home and abroad psychologically.
2.to point out the causes of educational issues and to take measures to them based on evidences.
［Learning activities outside of classroom］
After each class meeting, participants will be expected:
To read some papers related to the theme of the next class.
To make a summary of the contents of the class.
Students are expected to spend four hours on these tasks.
［Grading Criteria /Poclicy］
Grading will be decided based on research presentation（50%）、academic discussion（30%）、submission of assignments（20%）.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

司法犯罪心理学特論

越智　啓太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業の目的：
　この授業では、犯行現場から犯人の動機や行動、その属性を予測するプロファイリング技術について、講義と論文読解、実際のケース分析によって、学んでいく。本年は、とくに連続殺人事件、大量殺人事件とテロリズムについて扱う。
授業の概要：
　連続殺人のタイプと犯人の動機と行動、大量殺人と犯人の動機と行動、テロリストの動機と行動について、学び、具体的なケースについて各自検討して、発表する。
心理学以外の専攻の方の受講もその専攻が許せば可能であるが、とくに他専攻であることは考慮しないで授業を進行するので、実質的に単位取得は極めて困難であることを了解して受講されたし。

【到達目標】
（1）連続殺人、大量殺人、テロリズムについてのプロファイリング技術の最先端について理解し、説明できるようにする。
（2）上記の事件について、基本的なプロファイリング（犯人属性の推定）ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
はじめに連続殺人、大量殺人、テロリスムに関する基本的な文献や知識をレビューし、その上で、計量的な方法によるプロファイリングとFBI方式のプロファイリングについての基礎について学習する。それが終了した時点で、具体的な事件資料を基に犯人の行動や属性を推定する実習を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション、犯罪捜査への心理学の応用	オリエンテーション、プロファイリング研究の現状についての講義
2	連続殺人：連続殺人研究についてのレビュー１	論文の読解と議論
3	連続殺人：連続殺人研究についてのレビュー２	論文の読解と議論
4	大量殺人：大量殺人研究についてのレビュー１	論文の読解と議論
5	大量殺人：大量殺人研究についてのレビュー２	論文の読解と議論
6	テロリズム：テロリズム研究についてのレビュー１	論文の読解と議論
7	テロリズム：テロリズム研究についてのレビュー３	論文の読解と議論
8	犯罪捜査１	捜査手法の概要についての講義と議論
9	犯罪捜査２	鑑識、科学捜査の概要についての講義と議論
10	事例研究１	連続殺人の事例研究
11	事例研究２	大量殺人の事例研究
12	事例研究３	テロの事例研究
13	事例研究４	応用問題についての事例研究とディスカッション
14	事例研究５	応用問題についての個人での問題解決とプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎週２～５本の英語論文を読んでいく。受講者の人数によるが、基本的に毎週1本程度の論文を読解し、レジュメを作成することが必要となる。毎週、上記のテーマにしたがった論文を探して準備し、十分に精読してレジュメを作成してくること。

【テキスト（教科書）】
犯罪心理学の基盤ジャーナルを中心として論文を紹介し、それを元に授業を進める。具体的には授業時に指定する。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
（1）殺人とテロリズムのプロファイリングについての授業内でのプレゼンテーションと質疑応答（５０%）
（2）各自が選択した、殺人事件についての調査と分析レポート（５０%）

【学生の意見等からの気づき】
プロファイリングについての最新の知識を習得できるのは日本の大学ではこの授業が唯一であり、受講者の意欲と満足度は非常に高い。

【その他の重要事項】
警視庁科学捜査研究所等における実務経験があるので、その経験なども含めて指導する。司法関係に就職を希望する人（警察官、家裁調査官、法務技官など）を歓迎する。

【担当教員の専門分野等】
専門領域 犯罪心理学、社会心理学
研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用
主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ　犯罪捜査の心理学；越智啓太 2015 恋愛の科学　実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで学ぶ犯罪心理学　北大路書房；越智啓太　2008　犯罪捜査の心理学　化学同人；越智啓太ほか　2008　自伝的記憶の心理学　北大路書房

【Outline (in English)】
【Course outline】
Theme: offender profiling of mass murderers, serial murderers, and terrorist using psychological and mathematical methods.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to explain the current level of research achievements in serial, mass murderer and terrorist.
【Learning activities outside of classroom】
Each lesson requires 2 hours of preparation and 2 hours of review.
【Grading Criteria /Policy】
(1) In-class presentation and Q&A on profiling homicide and terrorism (50%)
(2) Research and analytical report on a homicide case of each student's choice (50%)

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

知覚認知心理学特論

竹島　康博

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究法を中心に解説を行います。フリーのソフトウェアを使い，これらの研究法を使った実験についても作成してもらいながら授業を進めます。その他，再現可能な実験を進めていく方法についても説明していきます。

【到達目標】
知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究法を，実際に実験課題を作成しながら学ぶことにより，自身の研究の幅を柔軟に広げられる思考力，応用力を身に付けることを到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究方法や，再現可能性を高める研究の進め方について，教員が解説を行います。加えて，ソフトウェアを使ってこれらの研究法を使った実験課題の作成や，解析コードの書き方の実習を行います。最終回には，受講者が興味を持った研究について，研究法を中心に自身が興味深いと感じた点や今後の課題についても含めて発表をしてもらいます。
課題については次週の授業内で確認し，そこでコメントやアドバイス等のフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	授業全体の概要説明 知覚研究の基礎知識について学ぶ
第2回	知覚研究の機器紹介	知覚研究でよく用いられる実験機器，測定機器について解説する
第3回	知覚研究の外観	他の心理学分野の研究法と比較した上での知覚研究の手法の特徴を学ぶ
第4回	知覚実験の紹介（1）	主観的等価点を測定している知覚実験の論文を取り上げて紹介する
第5回	知覚実験の紹介（2）	刺激のパラメーターを参加者ごとに事前測定して決定している知覚実験の論文を取り上げて紹介する
第6回	ポズナー課題	ポズナー課題についての解説，実験課題の作成を行う
第7回	強制二肢選択課題	強制二肢選択課題についての解説，実験課題の作成を行う
第8回	オリジナルの課題（1）	受講者自身が作成する課題を自由に決めて，実験課題の作成を行う
第9回	オリジナルの課題（2）	受講者自身が作成する課題を自由に決めて，実験課題の作成を行う
第10回	再現可能な研究の進め方(1)	再現可能な研究を進めるための解析コードの作成について実習する
第11回	再現可能な研究の進め方(2)	再現可能な研究を進めるための解析コードの作成について実習する
第12回	再現可能な研究の進め方(3)	再現可能な研究を進めるための技能をデータの視覚化の観点から実習する
第13回	再現可能な研究の進め方(4)	再現可能な研究を進めるためのマテリアルの共有や事前登録の在り方について議論する
第14回	まとめ	総括として，授業内で学んだ内容を自身の今後の研究にどのように活かせるかについて発表し，議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
各回で作成した実験課題について，自分が使うことを想定して受講者自身でアレンジしてみてください。また，14回目に行う発表に向け，授業で取り上げた実験課題を自らが活用できる可能性について検討する作業を毎回の授業時間外学習とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
村上郁也（編著）『心理学研究法1 感覚・知覚』 2011　誠信書房
十河宏行『PsychoPy/Pavloviaによるオンライン実験』 2022　朝倉書店
高橋康介『再現可能性のすゝめ Rstudioによるデータ解析とレポート作成』 2018　共立出版

【成績評価の方法と基準】
平常点50%，提出課題の評価50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
PsychoPyを使った実験課題の作成実習ではこれまで教員側で用意したものを作成してもらっていましたが，自分の研究分野やテーマに近い課題を作成する方が受講生の学びとして有益なようです。今年度も，PsychoPy実習の後半は受講生自身が選んだ課題を作成してもらうことにします。

【学生が準備すべき機器他】
実験課題の作成を行いますので，可能であれば自分のノートPCをご持参ください。

【その他の重要事項】
授業で募集する知覚心理学・認知心理学に関わる実験や調査などへの参加による学習についても評価に加味する場合があります。

【【担当教員の専門分野等】】
＜専門領域＞
知覚心理学，認知心理学
＜研究テーマ＞
異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究，視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究
＜主要研究業績＞
竹島 康博 (2024).　視聴覚刺激の提示タイミングに対する同時性知覚の柔軟性　VISION, 36(4), 150-155.
Takeshima, Y. (2024).　The influence of spatial frequency information on temporal synchrony perception on audiovisual stimuli. Perception, 53(11-12), 803-811.
Takeshima, Y. (2023). Change of rapid temporal recalibratgion magnitude for audiovisual asynchrony with modulation of temporal binding window width: A preliminaryh investigation. i-Perception, 14(4), 1-10.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course deals with perceptual and cognitive studies and the aim of this course is to help students perform their own study.
[Learning objectives]
The goals for students are to acquire flexible thinking skills and the ability to apply knowledge in order to broaden the scope of their own research, by learning research methods commonly used in the fields of perceptual psychology and cognitive psychology through actually creating experimental tasks.

[Learning activities outside of classroom]
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
[Grading Criteria /Policy]
Grading will be decided based on in-class contribution (50%) and the quality of the submitted assignment (50%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

音声言語科学演習

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人間にとって最も自然なコミュニケーション手段といえる音声言語（話し言葉）について，その仕組みや認知処理過程について体系的に学ぶ。

【到達目標】
音声言語が話し手にどのように産出され，音としてどのような特徴を持ち，聞き手にどのように知覚されるのかについて，説明できるようになることが目標である。また，音声分析ソフトを使って音声言語の特徴を分析できるようになることも目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
音声言語の発話と知覚の仕組み，音声の物理的な特徴，乳幼児による母国語の知覚能力の発達，成人による外国語音声の学習などについて，言語心理学や音声科学の知見を学ぶ。授業は講義，課題に関するディスカッション，教員による解説やフィードバックを中心に進める予定である。また，音声分析ソフトPraatを使った課題や演習も盛り込む予定である。授業の内容や進め方については受講生の人数や理解度・要望に応じて変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	シラバスの説明，音声言語と文字言語，「言葉の鎖」
第2回	音声とは	音声の確実性と速さ，音声産出のメカニズム，母音と子音
第3回	音響音声学の基礎（1）	音の正体，音の種類，音を可視化する方法，音声のデジタル化
第4回	音声の音響分析	Praatを使った音声の録音・可視化・編集・分析
第5回	音響音声学の基礎（2）	フィルタ，音声産出の音源フィルタ理論，基本周波数，フォルマント周波数
第6回	母音の知覚	聴覚器官，母音の特徴と知覚，母音の正規化
第7回	子音の知覚（1）	音響的不変性の欠如，ローカス理論，音声の符号化
第8回	音声の再合成	Praatを使った音声の録音・分析・再合成
第9回	子音の知覚（2），カテゴリー知覚	調音点の知覚，声の有無の知覚，分節音と韻律，カテゴリー知覚とは，同定と弁別
第10回	音声知覚の実験	同定課題と弁別課題の演習
第11回	音声知覚の発達	生得と学習，乳児の音声知覚，満1歳までに起こる変化
第12回	外国語の音声知覚	成人による外国語音の学習，知覚と産出の関係，外国語音の知覚的同化
第13回	文脈の影響	トップダウン処理とボトムアップ処理，音声知覚と単語認知のモデル
第14回	音声知覚言語と社会的認知，総括	話し方と対人認知の関係，授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
（1）毎回，授業にて指示された範囲を読み，課題に取り組み，次回の授業で議論をするための準備をすること。（2）音声分析用ソフトを使った課題に取り組み，成果を提出すること。本授業の準備学習・復習時間は，計4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特になし。

【参考書】
ジャック・ライアルズ（著），今富 摂子他（訳）（2003）.『音声知覚の基礎』海文堂.
石川 圭一（2005）.『ことばと心理』くろしお出版.
川崎 恵里子（編著）（2005）.『ことばの実験室』ブレーン出版.
重野 純（2003）『音の世界の心理学』ナカニシヤ出版.
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳（2017）.『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房.

【成績評価の方法と基準】
平常点・課題60%，発表・レポート40%の割合で評価する予定。
原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または発表・レポート提出を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
2024年秋学期は，授業開始時に受講者と相談した結果，2名ずつのグループを作り，各グループで音声言語に関わる独自のミニ研究プロジェクトを立案し，実行し，発表するという内容の授業を行いました。その結果，3名の回答者全員が「工夫していた」「理解できた」「履修してよかった」と回答してくれました。「毎回授業外で行った活動について授業内で報告や説明を行い，先生からさまざまなコメントをいただくことで，自分の不足している点をすぐに理解できるようになりました。また，ミニプロジェクトを最後まで完了させたことで，実際の研究において何をすべきかを一つ一つ学ぶことができました。この経験は，自分の修論研究に向けて非常に役立つものでした。」といったコメントをいただきました。今後も学生にとって有益となる知識やスキルの修得に貢献できる授業を受講生の皆さんと協議しながら提供できればと思います。

【その他の重要事項】
授業の内容や運営方法の詳細について説明しますので，受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一 (2011). 音声分析ソフトウェアPraatを用いた聴取実験：F0再合成による刺激作成と実験の制御　日本音響学会誌, 67, 345-350.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して　法政大学文学部紀要, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this course, students will learn about the fundamental principles and cognitive mechanisms that underlie the processing of spoken language.
[Learning objectives]
By the end of the course, students should be able to describe the physical properties of spoken language and the mechanisms underlying how it is produced and perceived by humans. Students should also be able to analyze speech using appropriate software.
[Learning activities outside of classroom]

(1) For each class period, students should do the assigned reading, work on homework assignments, and prepare for presentation and discussion for the next class. (2) Students should also spend time using speech analysis software and present its output in class. The standard study time required before and after each class is 4 hours total.
[Grading criteria/policy]
Grades will be determined based on class participation and homework (60%), and final presentation and paper (40%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

生理心理学特論

木村　健太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、生理心理学の基礎と研究論文作成過程で用いられるさまざまな生理指標について講義と実習形式で学びます。

【到達目標】
各生理指標が反映する心理状態についての知識を身につけ、生理指標を心理学で用いることの長所と短所を理解した上で、自身の研究テーマに関わる生理指標を適切に測定する能力を獲得します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
・生理心理学の基本的なアプローチである電気生理機器の仕組みと測定の方法を学びます。
・実際に機器を使用して、心理状態と生理指標の変化の関連性を体験・確認します。
・実習で対象とする課題等は、受講者の希望に配慮してテーマを決めていきます。
・講義では、生理指標の実社会への活用事例も説明します。
・授業時間内に質疑応答の時間を設け、疑問点の解消や課題へのフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	生理心理学の基礎と授業の概要についての説明
第2回	機器説明	生理心理学で用いられる生理指標と計測機器の説明
第3回	生理指標の測定法	アーチファクトなど生理指標測定時の注意点
第4回	脳波（1）	脳波の発生機序、脳波の測定法
第5回	脳波（2）	脳波の測定実習
第6回	脳波（3）	脳波の分析実習
第7回	心電図（1）	心電図の機序、心電図の測定法、分析方法
第8回	心電図（2）	心電図の測定、分析実習
第9回	心電図（3）	心電図のR-R間隔から自律神経系活動を推定
第10回	循環器活動	血圧の機序、血圧の測定法、分析方法
第11回	ウェアラブルデバイス	日常生活中の生理指標の測定、生理指標の活用事例
第12回	感情の評価（1）	生理指標を用いた感情の評価方法
第13回	感情の評価（2）	感情の評価・分析の実習
第14回	まとめ	授業の振り返り、レポートの説明

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
・授業で取り上げる生理指標に関するレポートを課します。
・各回の授業後には、配布した資料に再度眼を通すとともに、紹介した文献を参考にして各指標に関する理解を深めて下さい。

【テキスト（教科書）】
特に指定しません。

【参考書】
適宜必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
成績は、平常点50%（授業への積極的な関与等）、発表・レポート50%として総合点により評価します。

【学生の意見等からの気づき】
2026年度から開講の授業です。

【学生が準備すべき機器他】
・必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。
・脳波室で実験機器を用いた授業を行うことがあります。

【その他の重要事項】
・授業の進め方や授業計画、授業目標の説明をしますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。
・オフィスアワー：春・秋学期ともに木曜日3限（BT1109研究室）。訪問希望者は、メール（k.kimura[at]hosei.ac.jp）等で前日までに連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
生理心理学、認知神経科学、感情科学
＜研究テーマ＞
感情が認知機能や意思決定に作用する認知神経学的機序の研究、内受容感覚と脳ー身体の相互作用機序についての研究
＜主要研究業績＞
Kimura, K, Kanayama, N., &Katahira, K. (2023). Cardiac cycle affects risky decision-making.Biological psychology, 176, 108471
Kimura, K., Sawada, H., &Katayama, J. (2018). Outcome evaluations in group decision-making using authority rule: An electrophysiological study.
Neuropsychologia, 119, 271-279.
Kimura, K., Kimura, M., &Iwaki, S. (2016). Temporal prediction modulates the evaluative processing of “good” action feedback: An electrophysiological study.
Psychophysiology, 53 (10), 1552– 1559.

【Outline (in English)】
(Course outline)
In this class, we will learn about the fundamentals of psychophysiological research and various physiological indices with practical training.
(Learning Objectives)
The goals of this course are to understand the relationship between psychological state and physiological indices.
(Learning activities outside of classroom)
Before/after each class, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria / Policy)
Final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution (50 %), presentation and reports (50%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

プレゼンテーション演習

藤田　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　記憶を中心とした認知心理学および，主に学習過程に焦点を当てた教育心理学の知見を活かして，的確な先行研究の概観と批判的な読み方を学び，効果的にプレゼンテーションを行う。

【到達目標】
　半期の授業が終了した時点で，以下の各要素を身につけていることが，授業の具体的な到達目標となる。
１．多数の先行研究を読んだ上で，その分野における研究課題を明確に指摘できる。
２．個々の先行研究を批判的に読むことで，問題点・改善点を挙げることができる。
３．上記１，２の内容を，適切でわかりやすいプレゼンテーション技法を用いて他者に伝達できる。
４．他者の発表に対して，即応的に的確な評価を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　自分自身および先行研究における研究成果を，学術論文として発表することと，口頭でプレゼンテーションすることを具体的な作業課題として設定した演習である。
　質の高い研究を行うために必要な，先行研究の批判的な読み方，研究課題の設定のしかたについて教員が解説した上で，受講生自身が実際に発表し，全員で討論を行う。
　具体的な授業の進め方は次の通りである。まず最初の５回の授業で，文献の探し方や発表のしかたについて教員が説明を行う。次に，受講生各自が興味を持っている研究領域の論文を複数読んだ上で，その領域のレビューを行い，発表を行う。その際には単に論文紹介するだけでなく，批判的な目を持って，自分自身の視点でレビューすることが求められる。発表後の質疑応答の時間に，論文の読み方，レビューを行う上での注意点，発表のしかたなどの技能的な面についても教員から随時アドバイスを兼ねてフィードバックを行うが，受講生相互で活発にコメントし合うことも期待している。最終的に，各自がレビュー発表によって明確になった研究課題を修士論文の構想として発展させ，それを発表する。修論構想発表後も，受講生全員でコメントをしあうとともに，今後の要改善点についてフィードバックを行う。
　評価対象となっている発表については評価基準表（ルーブリック）を公表するとともに，授業支援システムにて評価結果をフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	この授業の概要と到達目標，評価方法の説明
2	文献の探し方（図書館ガイダンス）	法政大学図書館における蔵書検索と，書庫の活用方法について
3	発表のしかた：レジュメ篇	認知心理学の知見をふまえたレジュメの作り方について
4	発表のしかた：プレゼン篇	発表のしかた，パワーポイントの使い方，発表に対する自己評価，現時点での構想発表
5	レビュー発表に求めること	レビュー発表のポイント，批判的思考，発表の準備
6	発表準備	評価用紙を用いた評価の方法，発表の準備
7	レビュー発表１	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
8	レビュー発表２	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
9	レビュー発表３	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
10	レビュー発表４	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
11	修論構想発表１	修論構想発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
12	修論構想発表２	修論構想発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
13	修論構想発表３	修論構想発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
14	総括	授業の到達目標の確認，授業で修得できたことの振り返り，成績評価について，今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　自分の研究および発表のために準備を行うことはもちろんだが，他の受講生の発表に対して，学習支援システムの掲示板上で質問やアドバイスなどのコメントを書き込むこと。また，発表者は自分の発表に対して書き込まれたコメントに対して返信を行うこと。以上のことから，本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。準備学習の詳細は下記の通り。
第１回 自分の興味ある研究テーマを明確にして，文献検索のためのキーワードを準備する
第２回 自分の興味ある研究テーマの文献を収集する
第３回 先行研究の熟読，レジュメの構想を練る
第４回 先行研究の熟読，レジュメとパワーポイントによる発表の準備
第５回 発表の構想の見直し・確認，発表準備
第６回 自分の発表に対する事前の自己評価，発表準備
第７回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備，未発表者はレビュー発表の準備
第８回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備，未発表者はレビュー発表の準備
第９回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備，未発表者はレビュー発表の準備
第10回 レビュー発表の振り返り，修論構想発表の準備
第11回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正，未発表者は修論構想発表の準備
第12回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正，未発表者は修論構想発表の準備
第13回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正，未発表者は修論構想発表の準備
第14回 発表全体の振り返りと修論構想の修正

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】
藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　　北大路書房
そのほか，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点50％…授業に参加した上で，他者の発表にコメントしたり，掲示板に書き込むことを評価対象とする。
レビュー発表と修論構想発表30％…発表の内容，発表資料の質，発表のしかた，発表後の質疑応答を評価対象とする。
他者の発表への評価20％…他者の発表に対して批判的に・的確に評価できているかどうかを評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度の授業改善アンケートから：例年通り「履修してよかった」「授業の工夫」「理解度」ともに5.00満点でしたが，「理解度」は1人だけ4点の人がいたのが気になります。授業外学習時間が2人とも「2-3時間」確保できていたからかと思います。授業では研究計画だけでなく，発表スキルの改善方針も身につけてくれたと思います。今後の様々な発表も成長の機会と思って自分なりに工夫を重ね，納得のいく成功体験になるよう取り組んでください。

【その他の重要事項】
授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず初回授業より前に相談すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　認知心理学，教育心理学
＜研究テーマ＞
　単なる経験則に終わらない，研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。
＜主要研究業績＞
藤田哲也（編）（2006）．大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　北大路書房
藤田哲也（2006）．心理学を活かした教育実践のために　井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法ver.2　認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために　8章　北大路書房，pp.135-155.
藤田哲也（2010）．記憶過程と学習　三宮真智子（編）教育心理学　2章　学文社，pp.22-37.

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this class, students critically review and review prior research by applying cognitive psychology focusing on memory and knowledge of educational psychology focusing mainly on learning process.　Also, students will learn how to make effective presentations.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the following:
1.Students can clearly point out research issues in the field after reading a large number of previous studies.
2.Students can point out problems and improvements by critically reading each previous study.
3.Students can present the contents of 1 and 2 above to others in an appropriate and easy-to-understand manner.
4.Students can promptly and accurately evaluate the presentations of others.
[Learning activities outside of classroom]
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
[Grading Criteria /Policy]
The overall grade of the class is determined based on the following.
In-class contribution 50%, review presentation and master's thesis concept presentation 30%, evaluation of others' presentation 20%

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

臨床心理学特論

中村　玲子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
概要：主な臨床心理学のアプローチについて、報告・質疑応答形式で講義を行う。また具体的な事例を通して、心理・教育的支援について検討を行う。さらに学校との協働や他機関との連携をふまえ、校内支援チームの構築やケアマネジメントについても理解を深める。
目的：臨床心理学の知識や技術を用いた児童・生徒に対する支援について、具体的な事例をもとに検討することにより、学校現場における心理・教育的支援の方法を習得する。

【到達目標】
目標：臨床心理学を用いた児童生徒・保護者の支援、教員や専門機関との連携について学習する。
①臨床心理学の知識や技術を活用した児童生徒・保護者の支援について考えることができる。
②臨床心理学の知識や技術を活用し、支援に必要な教員との協働について考えることができる。
③上記２点について、考察したことを表現し、記述することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
講義及び授業内の発表を通して学習する。理解を深めるための演習も適宜とりいれていく。演習後にはリアクションペーパーの記述を求める。提出課題のフィードバックは，翌週の授業の冒頭で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション　臨床心理学とは	臨床心理学の定義、必要性について学ぶ。
第2回	臨床心理学の倫理・学校現場における臨床心理学	臨床心理学の実践における倫理について学ぶ。
第3回	学童期・思春期の心と行動	児童・生徒が抱えやすい学童期・思春期の問題とについて学ぶ。
第4回	精神分析的アプローチ	精神力動的アプローチについて報告・質疑応答形式で理解を深める。また、事例を提示し、その適用法についても考察する。
第5回	ロジャーズ学派	来談者中心的アプローチについて報告・質疑応答形式で理解を深める。傾聴技法について学ぶ。
第6回	行動理論	行動理論について報告・質疑応答形式や事例を通して理解を深める。
第7回	認知行動療法	認知行動療法について報告・質疑応答形式で理解を深める。また、認知的再体制化のプロセスについて事例を通して学ぶ。
第8回	交流分析理論	交流分析理論について報告・質疑応答形式で理解を深める。
第9回	アセスメントの方法	アセスメントの目的・内容・方法と検査倫理について学ぶ。
第10回	ケアマネジメントと校内チーム支援	学校現場におけるチームアプローチについて，事例を通して理解する。
第11回	児童生徒に対する支援―発達障害，不登校の事例	学校現場における支援の実際について、事例を通して学ぶ。
第12回	他機関との連携―児童虐待の事例	学校と他機関との連携の必要性について、事例を通して学ぶ。
第13回	コミュニケーション・スキルの習得・いじめの防止－心理教育的プログラムの実践	学校現場で有用な心理教育的アプローチについて、実例を通して学ぶ。
第14回	まとめ	授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
〇配布された資料を事前に読む
〇発表担当の際は，文献を読み発表資料を作成する。
〇演習を行った際はミニレポートを提出する。
本授業の準備・復習時間は、各4時間(発表担当の際はそれ以上）を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教場で資料を配布する。

【参考書】
氏原寛・成田善弘（1999）．　臨床心理学①カウンセリングと精神療法　培風館
乾吉佑・亀口憲治・東山紘久,・氏原寛 (編)　(2005)．　心理療法ハンドブック　創元社
鑪幹八郎・名島潤慈（2010）．　心理臨床家の手引き　誠信書房

【成績評価の方法と基準】
①臨床心理学の知識や技術を活用した児童生徒・保護者の支援について考えることができる
②臨床心理学の知識や技術を活用し、支援に必要な教員との協働について考えることができる。
③上記２点について、考察したことを表現し、記述することができる。
3つの到達目標に対する成績評価は主に以下とする。
①②平常点・グループ討議への参加態度（４０%），文献報告の内容と作成資料（３０%）
③ミニレポート課題（３０%）

【学生の意見等からの気づき】
事例や自己理解を通し、できるだけわかりやすい授業を心がけたい。また積極的な質問や疑問の提示を期待する。

【学生が準備すべき機器他】
PC

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞教育心理学
＜研究テーマ＞中学校における心理教育的プログラムの開発・実施
＜主要研究業績＞
〇中学校におけるいじめ抑止を目的とした心理教育的プログラムの開発とその効果の検討/教育心理学研究62 － 2／日本教育心理学会/共著/ 2014
〇「傍観」に着目したいじめ介入プログラムの開発とその効果の検討 /早稲田大学/単著/2017.01

【Outline (in English)】
< Course outline>
The aim of this course is to help students acquire an understanding of the clinical psychology. Students should be able to recognize and recall major terms and concepts in clinical psychology.
< Learning Objectives>
Students learn about support for children and parents using clinical psychology, and collaboration with teachers and specialized institutions.
< Learning activities outside of classroom>
Students read the literature and prepare presentation materials.
< Grading Criteria>
Attitude to participate in group discussions (40%)
Contents of prepared materials (30%)
Short report (30%)

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

発達心理学特論

渡辺　弥生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
心理学研究において発達的な視点をもつことにどのような意義があるかについて理解する。そのために、これまでの発達心理学研究の体系的な流れを捉える。特に、乳幼児期、児童期、青年期に焦点を当てるとともに、学校心理士の資格に必要な基盤としての発達心理学および、認知・思考、自己意識、社会性の発達を重点的に理解する。その上で、各自の今後の研究へのリサーチクエスチョンを考える。

【到達目標】
上記の授業テーマの枠組を意識した上で、
①発達心理学研究史に残る著名な理論を理解し説明することができる。
②身につけた知識をもとに発展的な課題について討議することができる。
③知識や理解をもとに自分の研究に応用できるよう計画することができる。
を到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
従来の先行研究で取り上げられてきた主要テーマのもとに、著名な理論を理解していく。さまざまな理論がどのような研究者によって、どういった方法で提唱されるに至ったのかを詳しく理解することが求められる。本講義では、発達心理学の中でも特に人間の行動の発達に関する理論と研究に焦点を当てる。毎回、ある研究者に焦点を当て、研究の経緯、方法など背景となる点を紹介する。発表担当者は、参考文献や自身で調べた内容を取り入れ、その研究者の研究を他の受講者に説明する。全受講者が自身の研究や経験を重ねながらいくつかのトピックで討論する。これにより、各自が研究知識を広げ、研究態度を学び具体的な研究計画が立てられる力を獲得する。課題などのフィードバックは、学習支援システムで回答したりアドバイスする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。 自己や対人関係のあり方については、各時間で言及する。
2	認知の発達 Cognitive Facets	Piaget &Inhelder(1969)：Crain(2011) の６章をもとに認知発達的な理論を理解し、討論する。
3	初期の対人関係 Early Relationships	Bowlby(1982) ：Crain(2011)の３章をもとに、乳幼児期の愛着理論を理解し、討論する。
4	成熟に関する理論 Maturation	Gesell(1952)：Crain(2011)の２章をもとに、子どもを育てることと成熟の関係を理解し、討論する。
5	発達と教育との関係 Early Education in the Home	Montessori(1949):Crain(2011)の４章をもとに、モンテッソリー教育をもとに教育との関係を考える。
6	学習理論 Learning Theory	Pavlov(1928), Watson(1936), Skinner(1953) Crain(2011)の８章をもとに人間の行動のメカニズムを考える。
7	道徳性の発達 Moral Development	Kohlberg(1958): Crain(2011)の７章をもとに、道徳性の判断や行動の発達について討論する。
8	社会的学習理論の理解 Social Learning Theory	Bandura(1962):Crain(2011)の９章をもとに、どのように攻撃性や向社会的行動が獲得されるか理解する。
9	記憶、言語、遊びの発達 Social-Historical Theory	Vygotsky(1930): Crain(2011)の１０章をもとに、心理学的な道具と行動の関係について学ぶ。言語の役割について考える。
10	精神分析理論と発達 Psychoanalytic Theory	Freud(1910):Crain(2011)の１１章をもとに、精神分析理論における発達理論を学ぶ。
11	ライフサイクル The Eight Stage of Life	Erikson(1968):Crain(2011)の１２章をもとに、生涯発達の視点から人間の一生を考える。
12	分離と固体化 Separation / Individuation	Mahler(1968) :Crain(2011)の１３章をもとに、母親からの分離について考え、討論する。
13	友だち関係と友情 Friendships and Peers	Hartup(1998): プリントをもとに、友情の発達や友だち関係の形成について考える。
14	親密な関係の形成 Close Relationship	Collins &Sroufe(1999):プリントをもとに、人間の性の発達や親密な関係について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
1.プレゼンテーションの準備：必ず上記理論提唱者についてプレゼンができるよう準備する。必要な内容は、a.理論やアイデア、b.個人の生き方と研究の関係、c.各理論が反映された最近の研究紹介、d.学問の応用について、e.発達についての個人の考え（キーとなるポイント）。事前に、担当教員にメールで提出しておく。当日の発表の要約（Ａ４２枚以内）。ただし、昨年と同じ発表方法にせず、今年は新しいスタイルを考える。
2.担当していない週では、その週のトピックに関する討論に参加できるようテキストや論文を読んでおく。また、最終的に提出するレポート課題を適宜準備しておく。

【テキスト（教科書）】
Crain,W. (2011). Theories of Development: Concepts and Applications およびプリント。受講者の人数や専門によって選ばれる発達理論は異なる。他の研究者の自伝を活用する可能性はある。

【参考書】
渡辺弥生監修(2019).『まんがでわかる発達心理学』　講談社
二宮克美・渡辺弥生（編）(2017)『発達心理学』 北大路書房
渡辺弥生(2019)　『感情の正体』筑摩書房

【成績評価の方法と基準】
担当した部分の発表を基に提出された課題(100%)で評価する。受講人数によっては、多少内容や順番を変更し、受講者のニーズを取り入れたいと考える。

【学生の意見等からの気づき】
評価も高く時間外の勉強を動機づけることができたと考えられるが、発表内容の厚みについて個人差が見られた。また、発表者が集団で討論できるようなリサーチクエスチョンを見つけられていない場合があることから、単に調べたことを発表するというのではなく、批判的な視点や発展的な意識をもち、討論できるような水準で発表できるよう支援していきたい。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。毎回機器を授業に間に合うよう準備することを徹底したい。

【その他の重要事項】
シラバスを変更することもあると理解してください。新型コロナウイルス感染状況によってオンラインに変更する可能性あり。

【担当教員の専門分野等】
HPを参考https://sites.google.com/site/emywata/
＜専門領域＞　発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
＜研究テーマ＞　社会情緒的スキルの発達といじめなどの予防教育の展開、ソーシャルエモーショナルラーニング
＜主要研究業績＞
(1)感情の正体 2019 筑摩書房
（2）世界の学校予防教育　２０１３　金子書房
（3）子どもの１０歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学　２０１１　光文社
（4）子どもの感情表現ワークブック　２０１１　明石書店
（4）１０代を育てるソーシャルスキル教育　２００９ 北樹出版
（5）幼児・児童における分配の公正さに関する研究　１９９２　風間書房、など。

【Outline (in English)】
＜ Course Outline＞ The aim of this course is to understand the significance of having a developmental perspective in psychological research.　Therefore, we will attempt to understand the systematic flow of developmental psychology research to date.
＜ Learning Objectives) In particular, we will focus on infancy, childhood and adolescence, and emphasize developmental psychology and development of cognition/thinking, self-consciousness, and social competence as the basis necessary for the qualification of school psychologist.　Based on this, students will consider research questions related to their future research.
＜ Learning activities outside of classroom＞ Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.
＜Grading of classroom＞The final report (100%) based on each assignment will be used for evaluation.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

発達臨床心理学特論

奥田　健次

備考（履修条件等）：9/14 2〜6限、9/15 2〜6限、9/16 2〜5限を予定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人間は、対人的なかかわりを通して、人間らしい社会的関係を生み出し、社会でよりよく生きるために調整する力が育てられる。しかし、自閉症スペクトラムなどの障害のある子どもは、適切な対人関係をもつことに大きな問題をかかえることが多い。障害のある子どもをもつ家族に対する支援や指導、学校に対する支援やコンサルテーションなど、当事者と当事者を取り巻く人々に対する包括的な支援について考える。

【到達目標】
障害のある子どもの知的発達、社会性の発達、行動情緒の問題について、実践的な視点から具体的に論じることができる。
アセスメントの方法、実際の支援の方法について、具体的事例を通じて実践的な方法を討議し、いくつかのケース課題のワークショップを通して心理学的援助の方法を検討し、発表する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
「障害がある」とはどういうことか。逆に「障害がない」とはどういう状態のことをいうのか。これだけでも、大きなテーマであるといえる。しかし、哲学的な考察を深めるような授業ではなく、現実的な課題となっている「専門的支援」について、実践的に役立つ知識と技能を具体的な事例を通して学ぶ。そのために、基本的には講義形式で進められるが、グループワークや発表、討論の機会を設けて、受講者に能動的な学習ができるようはたらきかける。グループワークや発表へのフィードバックは授業中に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	障害の概念と特別な教育ニーズおよび合理的配慮	「障害」とは何か、国際障害分類の定義について説明する。また、特別な教育ニーズについて具体例を挙げながら説明する。「合理的配慮」について具体事例を挙げて検討する。
第2回	知的障害児の発達と心理	知能の定義、知的障害について説明し、教育や発達の支援について説明する。また、支援方法についてのワークを行う。
第3回	視覚障害・聴覚障害児の発達と心理	視覚障害および聴覚障害について、発達的な特徴と教育方法を説明する。支援の具体的な方法や課題についてのワークを行う。
第4回	肢体不自由・病虚弱児の発達と心理	肢体不自由・病虚弱について、発達的な特徴と教育方法を説明する。また、特別支援や家族支援上の課題について説明する。
第5回	自閉症児の発達と心理	自閉症について、発達的な特徴と教育方法の変遷について説明する。支援の具体的な方法や課題についてのワークを行う。
第6回	発達障害者の青年期・成人期での支援	発達障害者の青年期問題や成人期の課題、就業支援、余暇支援について説明する。
第7回	LD・ADHD児の発達と心理	ＬＤ・ＡＤＨＤについて、発達的な特徴と教育方法を説明する。学校教育上の教育支援や家族支援上の課題について説明する。
第8回	特別支援教育とは	特別支援教育について、従来の特殊教育からの変遷や目的・特徴の差違について説明する。また、ガイドラインのねらいについて説明する。
第9回	実態把握と相談支援	特別支援教育において行われる実態把握と相談支援の具体的方法について説明する。支援システムの構築の実例について発表する。
第10回	個別の指導計画と個別の教育支援計画	個別の指導計画と個別の教育支援計画について実際の計画案から説明する。また、問題のある計画の改善についてのワークを行う。
第11回	校内委員会と支援体制	校内委員会と支援体制について、機能的な組織の在り方について説明する。また、学校と家庭の連携・協働における課題について説明する。
第12回	特別支援教育（児童期の支援事例）	小学校における特別支援教育の支援事例を説明し、仮想事例から支援計画を検討して発表する。
第13回	特別支援教育（青年期の支援事例）	中学校における特別支援教育の支援事例を説明する。また、高等学校における特別な教育ニーズのある生徒への支援課題について説明する。
第14回	学校コンサルテーション、まとめ	特別支援教育で専門的な支援者に求められる学校コンサルテーションについて説明する。また、これまでの講義のまとめと講評を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
日常生活上の「障害」について、具体的な実例を考えておく。知的障害、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由・病虚弱の教育支援方法について調べておく。自閉症についての発達的な特徴について調べておく。学校で求められる合理的配慮の実例を考えておく。文部科学省「特別支援教育」ガイドラインの目次部分を、各自で準備し、調べておく。個別の指導計画と個別の教育支援計画の見本を、教科書や専門サイトなどから、各自で準備し、調べておく。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。

【参考書】
奥田健次（編著）教師と学校が変わる学校コンサルテーション．金子書房．2018年．

【成績評価の方法と基準】
集中講義であるため出席基準（4/5以上の出席）を満たしていることを前提に、授業参加40％、グループ発表30％、テーマ毎に実施するミニクイズ30％

【学生の意見等からの気づき】
授業改善のための意見を聞かせて下さい。

【学生が準備すべき機器他】
該当なし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　応用行動分析学、特別支援教育、行動療法
＜研究テーマ＞

自閉症児への応用行動分析学による指導、自閉症児の「心の理論」、特別支援教育と学校コンサルテーション、家族支援とペアレントトレーニング、行動コーチング

＜主要研究業績＞

奥田健次編著（2018）教師と学校が変わる学校コンサルテーション.金子書房.

仁藤二郎・奥田健次（2016）痙攣性発声障害と診断された男性の日常生活における行動アセスメント.行動分析学研究, 31(1), 40-47.

仁藤二郎・奥田健次（2013）嘔吐不安を訴えるひきこもり男性の食事行動への介入：エクスポージャーにおける行動アセスメントと介入の評価. 行動分析学研究, 27(2), 80-91.

奥田健次（2012）メリットの法則- 行動分析学・実践編. 集英社.

奥田健次・小林重雄（2009）自閉症児のための明るい療育相談室－親と教師のための楽しいＡＢＡ 講座. 学苑社.

奥田健次（2006）症例研究の方法. 河合伊六（監修), 辻下守弘・小林和彦（編), リハビリテーションのための行動分析学入門（pp.37-49）. 医歯薬出版株式会社.

奥田健次（2005）不登校を示した高機能広汎性発達障害児への登校支援のための行動コンサルテーションの効果－トークン・エコノミー法と強化基準変更法を使った登校支援プログラム－. 行動分析学研究, 20(1), 2-12.

奥田健次（2001）認知発達と言語行動：「心の理論」研究から. 日本行動分析学会(編), 浅野俊夫・山本淳一(編), ことばと行動：言語の基礎から臨床まで(pp. 189-210). ブレーン出版.

【Outline (in English)】

Children with disabilities such as Autism Spectrum Disorder (ASD) often have serious problems in human interpersonal relationships. Think about support for people surrounding the parties, such as support for families with children with disabilities, support and consultation to schools, and so on.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

パーソナリティ心理学特論

大森　美香

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
パーソナリティは、行動にみられる個人差を説明する概念であり、パーソナリティ理解は、教育・産業・臨床など生活のあらゆる場面での個人理解に必要不可欠である。本授業の目的は、以下の２点にある。１）人間の心理・行動の個人差およびそのメカニズムに関するアプローチを理解する、２）パーソナリティ特性と個人の行動、自己形成、また精神的健康の関連について最新の知見に触れ考察する。この目的に到達するため、古典的なパーソナリティ理論に加え、パーソナリティに関する最新の人間科学、社会科学、自然科学のアプローチについても学習する。授業は、学生によるプレゼンテーションの形式を中心に講義および討論を行いながら進める予定である。パーソナリティについてさまざまな角度からアプローチしながら、人間行動に関する関心、個人の尊厳、現代において個人がよりよく生きるとはどのようなことかについての考察を深めていただきたい。

【到達目標】
授業の主要な到達目標は、以下の２点である。１）代表的なパーソナリティ理論およびアプローチを理解すること、２）パーソナリティや人間行動に関する広い視野を獲得し考察すること、３）授業を通して、プレゼンテーションや討論において、自分の考えをわかりやすく伝える技術を獲得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は、オンラインを活用し、学生による発表と討論を中心に、講義を交えながら、授業を進める。発表の課題、期末レポートのフィードバックは、授業中ないし授業支援システムを通して行います。
授業計画は予定であり、受講者数や受講者のバックグラウンド、理解度によって調整いたします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス パーソナリティ理論の概観	授業概要説明；パーソナリティとは何か；パーソナリティの主要理論の概観
第2回	パーソナリティ心理学：人間科学、自然科学、社会科学的アプローチ	パーソナリティについての、心理生物社会的アプローチについて理解する
第3回	パーソナリティ理論(1)：心理療法への応用	パーソナリティの３大理論の心理療法にどのように応用されているのかレビューする。
第4回	パーソナリティ理論(2)：類型論と特性論	類型論と特性論の差異；パーソナリティ理論の歴史的展開
第5回	パーソナリティを「測る」	心理学的測定法、心理検査法（質問紙法、投影法）
第6回	パーソナリティの物語的把握	ナラティブアプローチによるパーソナリティ理解
第7回	生命現象としてのパーソナリティ	パーソナリティに関する生物学的規定因
第8回	パーソナリティの発達的変化	パーソナリティの発達的変化に関する最新の知見をレビューする
第9回	パーソナリティの相互作用論	パーソナリティに関する遺伝と環境の要因の相互作用
第10回	認知・感情・動機とパーソナリティ(1)：認知・感情とパーソナリティ	感情および認知的特徴に及ぼすパーソナリティの影響
第11回	認知・感情・動機とパーソナリティ(2)：動機とパーソナリティ	動機づけに及ぼすパーソナリティの影響
第12回	文化・社会とパーソナリティ	社会文化的要因がパーソナリティに及ぼす影響
第13回	さまざまな生活領域（家庭、学校、職場）や健康とパーソナリティ	各受講生の研究関心領域とパーソナリティの関連についての学生の発表
第14回	まとめ	進度調整および統括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業該当箇所のテキストの講読、課題への対応、発表準備。
The estimated time for preparation and review of the course is 2 hours for each. The task include reading course materials, working on assignments, and preparation for the presentation.

【テキスト（教科書）】
『パーソナリティ心理学』 榎本博明・安藤寿康・堀毛一也［著］有斐閣

【参考書】
『ヒルガードの心理学』（金剛出版（16版が最新ですが、図書館などで入手可能な版で結構です）

【成績評価の方法と基準】
平常点30%、発表40%、期末レポート30%
the participation in in-class activities 30%
presentation(s) 40%
final reflection paper 30%

【学生の意見等からの気づき】
これまでの授業で、毎回の授業で扱う範囲が多いとの意見がありました。大学院では、既存の知識や理論のインプットにとどまらず、批評的にとらえ考察を深化することが求められ、そのため授業の事前準備は必須と考えています。大学院での少人数での演習形式の授業では、知識理解はもちろんのこと、討論や発表スキルを確実に高めることが期待できます。

【学生が準備すべき機器他】
発表時の配布資料

【その他の重要事項】
＊受講においては、学部の概論レベルの心理学の授業を受講済みであることを前提としています。
＊授業計画は、受講者数、バックグラウンド、理解度により調整します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞健康心理学
＜研究テーマ＞健康行動、ボディイメージ、食行動
＜主要研究業績＞
Rodgers, R. F., Lombardo, C., Cerolini, S., Franko, D. L., Omori, M., Fuller- Tyszkiewicz, M., Linardon, J., Courtet, P., &Guillaume, S. (2020 jun). The Impact of the COVID-19 Pandemic on Eating Disorder Risk and Symptoms. International Journal of Eating Disorders. https://doi.org/10.1002/eat.23318
Takamura, A., Yamazaki, Y., &Omori, M. (2019). Developmental changes in fat talk to avoid peer rejection in Japanese girls and young women. Health Psychology Open. https://doi.org/10.1177/2055102919854170
Omori, M., Yamazaki, Y., Aizawa, N., de Zoysa, P. (2016). Thin-ideal internalization and body dissatisfaction in Sri Lankan adolescents. Journal of Health Psychology. Online First.

Omori, M., Yamawaki, N., &McKyer, E.L. (2015). A Comparative study of smoking in American and Japanese adolescents: Self, social influences, and health beliefs. International Journal of Adolescent Mental Health and Addiction.13, 345-360.

【Outline (in English)】

Personality pertains to individual difference in human behaviors. In order to understand individuals in academic, industrial, and clinical setting, it is inevitable to understand personality. Objectives of this course are twofold: 1) to understand fundamental theories on individual differences underlying psychological processes and behaviors; 2) to learn and discuss most updated findings on associations between personality and self perception, behaviors, and mental health. In order to accomplish these objectives, this course covers recent theories and findings of personality from biopsychosocial perspectives as well as traditional theories. Classroom activities involves both students' presentations and lectures.

The estimated time for preparation and review of the course is 2 hours for each. The task include reading course materials, working on assignments, and preparation for the presentation.

Grading is based on the following:

- the participation in in-class activities 30%
- presentation(s) 40%
- final reflection paper 30%

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

言語心理学特論

福田　由紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　読解力とは何か？ それを伸ばすために何をしたらよいか？ について，心理学的な観点から検討することが本授業のテーマである。具体的には，まず，日本やそれ以外の国で行われている指導法について，模擬授業を通して体感する。次に，文章読解のプロセスやそれに影響する要因について学習をする。それらをもとに読解力を高めるためのアイディアを考える。

【到達目標】
①日本とそれ以外の国で行われている読解力向上の指導法を理解し，説明できる。
②文章読解に影響する要因に関する文献を探すことができる。
③文章読解に影響する要因とプロセスについて理解し，説明できる。
④読解力向上のための指導法のアイディアを提案する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業の前半は日本とUKで使用されている学習指導方法にそって，模擬授業を行う。その後，読解のプロセスや読解力の定義，読解力に影響を与える要因に関する文献を講読し，発表を行う。授業の最終段階では，各自が考える読解力の定義とそれを向上させるための指導方法のアイディアを発表する。また，提出された課題のフィードバックは，授業中ないしは授業支援システムを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。グループ分け。
第2回	日本式模擬授業１	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第3回	日本式模擬授業２	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第4回	UK式模擬授業１	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第5回	UK式模擬授業２	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第6回	読解力を伸ばすための指導法の日英比較の発表	模擬授業を通して実感したUKと日本の目指している読解力の相違点と共通点を比較検討した結果を発表する。
第7回	読解力に影響する要因に関して考える１：読解力の発達の様相	読み書きの発達の様相に関する論文を全員が読み，担当者が説明する。
第8回	読解力に影響する要因に関して考える２：語彙量，ワーキングメモリ	読解力に影響を与える要因として語彙量とワーキングメモリを取り上げる。具体的には，それらの要因がどのように読解力に影響を与えるかの概略を担当者が説明する。
第9回	読解力に影響する要因に関して考える３：認知・思考の発達	読解力に影響を与える要因として認知・思考力を取り上げる。具体的には，文章理解時にどのような推論をしているのか，発達的な観点に関して概略を担当者が説明する。
第10回	読解力に影響する要因に関して考える４：文書の理解	読解力に影響を与える要因として非連続型テキストである文書の理解を取り上げる。具体的には，文書の理解と文章の理解の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第11回	読解力に影響する要因に関して考える５：PISAの読解力	PISAが提案している読解力と，日本の教育で目指している読解力の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第12回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方のアイディアについての発表１	読解力の定義を明確にし，それを伸ばすための方法を発表する。その際，対象はだれか，具体的な方法のアイディアを発表する。
第13回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方のアイディアについての発表２	読解力の定義を明確にし，それを伸ばすための方法を発表する。その際，対象はだれか，具体的な方法のアイディアを発表する。
第14回	講評会	12回と13回で行った発表に関して全員で講評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
第1回～第4回　模擬授業を行うための準備を行う。
第5回　指導法の日英比較発表の準備を行う。
第6回～第10回　発表者は論文の発表準備を行う。それ以外の院生は，発表予定の論文を読み込んでくる。
第11回・第12回　次週の発表の準備を行う。
第13回　授業での発表や議論を振り返り，講評を作成する。

【テキスト（教科書）】
　教科書は特に指定しない。毎授業時にプリントを配付する。また，課題に必要な文献はその都度伝える。

【参考書】
福田由紀（編）(2012). 言語心理学入門　培風館
大村彰道（監修）(2001). 文章理解の心理学　北大路書房

【成績評価の方法と基準】
　発表40%，発表への質問・コメント30%，討論への参加30%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
　2025年度は担当しませんでした。よって，2024年度の分を以下に再掲します。
　日本の国語教科書「おにたのぼうし」とUKのそれ「Not Now Bernard」を使って模擬授業をしてもらいました。その活動を通して，読解力の捉え方の両国の相違，そして，自分が考える読解力とその伸ばし方を最後に発表しました。発表が多かったことやそのフィードバックの豊かさ，アジェンダの存在がよかったようです。続けていきますね。
　・発表ひとつひとつについて，議論の時間を多くとれたのが良かったです。普段接しない分野でしたが，分からないことを質問したりできて助かりました。発表回数も多かったので，毎回楽しく授業に参加できました。

・講義の初めに，Excel ファイルで，学期を通した到達目標，スケジュール，課題内容などを細かに説明してくださったので，到達目標に向けて明確な見通しをもって学習を進めることができました。結果として，最終的な目標である「読解力の伸ばし方」について自分なりによく考察を深めて計画を練ることができたので，習得できたものが多かったように感じます。また，これまで触れることがなかった言語心理学という分野の研究を精読したことで，自分の専門分野と少なからず共通点を見つけることができ，自身の研究に役立つような知見が得られたことも大きな収穫でした。総じて，非常に有意義な授業だったと思います。

【その他の重要事項】
　グループ分けや発表論文の割り当てをするので，受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語心理学
＜研究テーマ＞読みと感情，コミュニケーションにおける言語活動の役割
＜主要研究業績＞
1.常深 浩平・望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅰ）―努力の最小限化とその対策例―』（読書科学，66,1-10. 2024）
2.福田 由紀・井関 龍太・望月 正哉・常深 浩平『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅱ）－ Instructional Question Check 通過に影響する要因の検討－』（読書科学，66,11-25. 2024）
3. 井関 龍太・望月 正哉・菊池 理紗・福田 由紀『現代語小説の品詞構成に基づく文体印象の分析－イメージ性と展開の早さの主観的印象を説明する試み－』（計量国語学，34，158-173. 2023年）
4. 井関 龍太・菊池 理紗・望月 正哉・福田 由紀・石黒 圭『品詞構成に基づく文体指標は読者の印象とどのように関わるか－ MVR と品詞構成率の心理学的検討－』（計量国語学，33，493-509. 2022年
　この論文は計量国語学会の論文賞を拝受しました）
5. 望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀・長田 友紀・常深 浩平・石黒 圭『読者がもつ物語の認知的ジャンルの測定』（読書科学，63,160-174. 2021）
＜ＨＰ＞
「ことばのこころ研究室」http://www.zc.em-net.ne.jp/ psy-language/

【Outline (in English)】
Course outline：The purpose of this course is to learn the text comprehension from a psychological point of view.
Learning Objectives：By the end of the course, students should be able to do the following:
－ A. understand teaching method for text comprehension at Japan and UK
－ B. search for information on previous studies about text comprehension
－ C. understand factors about text comprehension and its process
－ D. propose a more efficient teaching method for text comprehension
Learning activities outside of classroom ： Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.
Grading Criteria ： Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 40%, comment for the presentation of other people: 30%, in-class contribution: 30%.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

対人発達の心理学

渡辺　弥生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、生涯発達の視点に立ち、発達心理学および発達臨床心理学の観点から、対人関係の発達過程を体系的に理解することを目標とする。乳幼児期の愛着形成から、児童期・青年期の友人関係、成人期の親密な関係、老年期の社会的つながりまでを取り上げ、個人内の発達と対人環境との相互作用を含めて理解していく。さらに、虐待、いじめ、不登校など対人関係のつまずきや困難が生じる背景と支援のあり方についても考察し、対人発達を実践に活かす視点を養う。

【到達目標】
本授業の到達目標は、①生涯発達の視点から対人関係の発達過程を理解する、②発達心理学および発達臨床心理学の知見を用いて説明できるようになることである。③乳幼児期の愛着形成から、児童期・青年期の友人関係、成人期の親密な関係、老年期の社会的つながりに至るまで、発達段階ごとの特徴と連続性を捉える力を身につける。また、④虐待、いじめ、不登校など対人関係に関わる困難を発達的観点から理解し、支援や予防につなげて考察できることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は、講義と演習を組み合わせて進める。発達心理学および発達臨床心理学の理論や研究知見について講義を行い、時々に事例検討やグループ討議を通して理解を深める。授業内では、指定テーマに基づくミニ発表や意見交換を行い、対人関係の発達を多面的に捉える力を養う。また、対人関係上の課題を題材とした課題解決型学習やソーシャルスキルトレーニングなどを取り入れ、発達段階に応じた支援のあり方を検討する。各回のリアクションペーパーや課題に対しては、次回授業内での講評やコメントを通じてフィードバックを行い、学びの深化を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	対人発達を学ぶ視点	生涯発達の考え方、対人発達とは何か。発達心理学と発達臨床心理学の違いと接点をもとに全体的な流れを学ぶ。
第2回	発達の理論的基盤	愛着理論、社会的学習理論、エコロジカルモデルなど、対人発達を説明する主要理論について理解する。
第3回	乳幼児期の愛着形成	愛着の形成過程、内的作業モデル、養育環境との関連と危機についてを知る。
第4回	情動調整と共感の芽生え	自他の認識、コミュニケーションの始まり、他者理解の始まりなど、感情リテラシーの視点から対人関係の発達について考える。
第5回	友人関係と社会的スキル	仲間関係の発達、協力・葛藤解決、社会的能力の発達を学ぶ。
第6回	対人関係における発達の様相	対人関係の発達的理解、集団力学について理論を習得する。
第7回	いじめなどの学校危機予防	いじめ、不登校などを学校危機として捉え予防のあり方について気づく。
第8回	自己理解と友人関係について	アイデンティティ形成と対人関係、親からの心理的自立について理論を学習する。
第9回	親密さと葛藤について	親密な関係の発達、恋愛関係、対人葛藤への対処について具体的に考える。
第10回	親密な関係と家族について	パートナー関係、親になること、役割変化と対人関係について理論。重要な他者という概念の理解する。
第11回	仕事と社会的関係について	キャリア、職場の人間関係、ワーク・ライフ・バランス、社会的支援について理解する。
第12回	虐待・不適切養育などの予防と対応について	発達への影響、リスク要因、支援と回復の視点を考え、予防のためにできることを具体策を考える。
第13回	不登校・孤立の理解と対応について	対人関係の困難や学校適応に困難を考えている人（さまざまな障害も含む）への予防的支援策を具体的に考える。
第14回	まとめと解説	生涯発達の視点からの統合的理解。教育・臨床・支援への応用について総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の準備学習・復習時間は、各2時間を標準として求める。具体的には、テキストや演習問題の予習・復習、授業内で示される課題（レポート、演習問題）対応などを行う。授業外においては、学んだことを整理し、次の回に求められることをノートに整理する。論文に限らず。一般書籍でも事例でも良いので、何が課題であるかを理解し、対人関係の発達、予防、介入に関することについて自分なりの意見をまとめる。エビデンスをもとに、日常生活の自分を関連づけながら何が課題であり改善できることにどのようなコトがあるのかを考え、それを深く理解する。

【テキスト（教科書）】
渡辺弥生監修・藤枝静暁・藤原健志編著　「対人援助職のための発達心理学」改訂版
北樹出版

【参考書】
渡辺弥生著　「怒っている子どもはほんとうは悲しい」：「感情リテラシー」をはぐくむ　光文社新書

【成績評価の方法と基準】
授業への出席は単位取得の前提条件であり、成績評価の対象としては、ポートフォリオを活用する。各回のリアクションペーパーの提出（70%）と、最終的に対人発達の問題を予防する具体的対策のアイデア（ポスター、Youtube動画、スライドなど）の成果物（30％）として、その２つを合計して評価する。

【学生の意見等からの気づき】
新らしい授業なので、前年度のアンケート結果はない。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞

【Outline (in English)】
Course Outline
This course explores the development of interpersonal relationships across the lifespan from the perspectives of developmental psychology and developmental clinical psychology.
Learning Objectives
By the end of the course, students will be able to:
Understand interpersonal development from infancy to old age.
Explain the interaction between individual development and social environments.
Examine interpersonal difficulties such as maltreatment, bullying, and school refusal, and consider appropriate support.

Learning Activities Outside of the Classroom
Students will complete assigned readings, prepare for discussions, and work on short written assignments and reflections.
Grading Criteria / Policy
Grades are based on participation, assignments, and exams or final papers, with emphasis on understanding and application of course content.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

行動分析学特論

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会の問題や個人の悩みは、よくよく考えてみると何らかの行動の問題であることが多いものです。心理学は行動の科学として“行動の予測と制御”に関わる法則を見いだしてきました。こうした法則をうまく適用すれば、社会の問題を解決し、個人の悩みを解消することも可能です。この授業では、社会的・個人的に重要な課題を行動問題としてとらえ、個人攻撃の罠に陥らず、環境を整備しながら問題を解決していく行動分析学の考え方を学びます。

【到達目標】
行動分析学の基礎的な概念を理解し、人や動物の発達や認知に関する様々な現象を、強化や弱化の随伴性を分析することで解釈できるように学びます。基礎的な概念を説明できるようになり、それらの概念を応用して、社会や学校、家庭における行動問題の解決方法を立案できるようになること、そうした解決方法を基礎的な概念を使ったコミュニケーションを介して討議し、協調すること、さらに、課題分析やABC分析、行動の観察・記録法を実施できるようになることを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
毎週、教科書の指定された章を読んで、関連する課題を行い、それについて授業中に討論したり、演習します。課題へのフィードバックは授業中の討論を介して行います。
学習目標や参考図書などの教材は下記のURLを参照してください。
https://docs.google.com/document/d/1XqZ7yScRRs24S2HJX8g1DLKW7CDnLTwm6FvUotXHZT8/edit?usp=sharing

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	行動分析学の概説、教科書の紹介、プロジェクトについての話し合いなど。
2	好子、嫌子とは	好子、嫌子、行動随伴性の定義や具体例について学ぶ（教科書、第1-2章）：行動の定義、死人テスト、医学モデル、説明のレベル、循環論。
3	強化と弱化	基本的な４つの随伴性について学ぶ（教科書3-5章）：PTSDや汚言症の治療における強化、社会的悪循環、科学における節約性、自閉症の療育における代替行動の分化強化、社会的妥当性、学級経営のための集団随伴性、反応コストとタイムアウト。
4	消去と復帰、分化強化 と分化弱化	消去と復帰、分化強化と分化弱化について学ぶ（教科書6-7章）：精神科病棟での問題行動修正、夜泣きの消去、バーストと自発的回復、自閉症児の自己刺激行動、消去と忘却の区別、スポーツのコーチング、課題分析、カウンセラーによる無意識の条件づけ、創造性。
5	シェイピング、強化スケジュール	シェイピングと強化スケジュールについて学ぶ（教科書8-9章）：失語症の行動療法、部分強化と連続強化、累積記録、FI、FR、VI、VR、消去抵抗、強化スケジュールよって生じる反応パターン。
6	生得性好子、生得性嫌子、特殊な確立操作、習得性好子、習得性嫌子	行動分析学における「動機づけ」について学ぶ（教科書10-12章）：遮断化と飽和化、確立操作、行動内在的随伴性と付加的随伴性、プリマックの原理、多飲症、攻撃行動と攻撃性好子、依存性好子、妄想を減らす行動療法、価値変容の原理、トークンエコノミーシステム。
7	刺激弁別、刺激般化、概念形成、模倣	弁別学習や概念学習、模倣による学習について学ぶ（教科書13-15章）：弁別刺激、概念の行動的定義、読字指導、刺激性制御、学習障害、機械利用型指導法、直感、プロンプトとフェイディング、遅延誘導手続き、リダクション、模倣と般化模倣。
8	阻止による強化、阻止による弱化、並立随伴性	回避行動、選択行動について学ぶ（教科書16-18章）：姿勢の矯正プログラム、自閉症における視線合わせ、警告刺激、ADHD、非両立行動の分化強化、対応法則。
9	刺激反応連鎖と反応率随伴性、レスポンデント条件づけ	複雑な行動の学習、レスポンデント条件づけについて学ぶ（教科書19-20章）：逆行連鎖化、順行連鎖化、総課題提示法、トイレットトレーニング、自立訓練、早食いの抑制、恐怖症とその治療、高次条件づけ、系統的脱感作法。
10	言語行動	言語行動論について学ぶ（教科書21章）：マンド、タクト、イントラバーバル、エコーイック、テクスチャル、書き取り、聞き取り、書き写し、オートクリティック、私的刺激。
11	強化モドキ、ルール支配行動	直接効果的随伴性、間接効果的随伴性について学ぶ（教科書22-23章）：拒食症の治療、随伴性形成行動、ルール支配行動、コミュニティ心理学、イメージトレーニング、パフォーマンス・マネジメント、自己管理。
12	ペイ・フォー・パフォーマンス、道徳と法による行動の制御	ルール支配行動によるマネジメントについて学ぶ（教科書24-25章）：作文指導、就労支援プログラム、銀行におけるペイ・フォー・パフォーマンス、法律と道徳（倫理）、宗教、性同一性障害。
13	行動の維持、行動の転移	学習した行動を維持させ、転移させる要因について学ぶ（教科書26-27章）：行動の罠、般化を促進させる要因、自己教示。

14	研究法	行動分析学における研究法、特にシングルケースデザインについて学ぶ（教科書28章）：社会的妥当性、観察法、観察の信頼性、反転法、多層ベースライン法、基準変化法、条件交替法、内的妥当性、外的妥当性。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
○毎回、次の週の授業で討論する具体的なテーマに関する予習課題を提示するので、受講生は関連する教科書の章を読み、予習課題に取り組み、討論の準備をすること。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『行動分析学入門(第2版)』（杉山・島宗・佐藤・マロット・マロット，産業図書，2023） *第2版を使います。ご注意ください。

【参考書】
適宜、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
○授業参加点 40%、課題点 60%で成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度はサバティカルで授業を担当しませんでした。

【その他の重要事項】
○ オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の2限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
The purpose of this course is to master basic principles, procedures, and research methods pertaining to applying behavior analysis in schools or in other educational or therapeutic settings. Focus will be placed on knowledge and skills in applying basic concepts of learning to interpret behavioral phenomena in real-world educational or societal settings.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students should be able to do the followings:
1) focus on behaviors, 2) conduct ABC/AB analyses, and 3) measure target behaviors, and 4) explain about single-case research design.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

コミュニケーション心理学

福田　由紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　本年度は，音声言語を用いた「やりとり」といった言語行動に焦点をあてる。円滑な「やりとり」とは何か，どのような方法が考えられるのかについて検討する。

【到達目標】
本授業の到達目標は，以下の通りである。
①音声言語を用いた「やりとり」に関する今までの知見を学ぶ。
②知見に基づき，円滑な「やりとり」の特性を学ぶ。
③学んだ内容について，実践可能で具体的な提言を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　最初に，現在の自分の音声言語を用いた「やりとり」の技術を確認する。その後，効果的な「やりとり」に関する文献を購読し，発表を行う。授業の最終段階では，学んだことを自ら実践できるかについて確認を行う。最終的に，効果的な「やりとり」の特性や実践方法について発表し，全員で討論を行う。また，提出された課題のフィードバックは，授業中ないしはWeb Classを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション，音声言語による「やりとり」の多様性	「やりとり」が行われる場の多様性についての確認
第2回	自分の「やりとり」力の確認1	合意形成の場
第3回	「やりとり」の特性に関する発表1	「やりとり」の特性に関する発表と討論1
第4回	「やりとり」の特性に関する発表2	「やりとり」の特性に関する発表と討論2
第5回	自分の「やりとり」力の確認2	プレゼンテーションの場
第6回	効果的な「やりとり」に関する発表1	効果的な「やりとり」に関する発表と討論1
第7回	効果的な「やりとり」に関する発表2	効果的な「やりとり」に関する発表と討論2
第8回	効果的な「やりとり」の実現可能性に関する発表1	効果的な「やりとり」の実現可能性に関する発表と討論1
第9回	効果的な「やりとり」の実現可能性に関する発表2	効果的な「やりとり」の実現可能性に関する発表と討論2
第10回	自分の「やりとり」力の向上の確認1	合意形成の場
第11回	効果的な「やりとり」とその実践についての発表1	効果的な「やりとり」とその実践についての発表と討論1
第12回	効果的な「やりとり」とその実践についての発表2	効果的な「やりとり」とその実践についての発表と討論2
第13回	自分の「やりとり」力の向上の確認2	プレゼンテーションの場
第14回	講評会	発表に対する全員で講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業計画の内容に沿った次週の発表の準備を行います。

【テキスト（教科書）】
特になし。適時，周知する。

【参考書】
福田由紀(2012). 言語心理学入門　培風館
郡司隆男・坂本勉(1999). 言語学の方法　岩波書店

【成績評価の方法と基準】
　発表40%，発表への質問・コメント30%，討論への参加30%などを総合的に評価する。特に，討論への積極な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】
　新規科目のため，アンケートは実施されませんでした。

【その他の重要事項】
受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語心理学
＜研究テーマ＞読みと感情，コミュニケーションにおける言語活動の役割
＜主要研究業績＞
1. 常深 浩平・望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅰ）―努力の最小限化とその対策例―』（読書科学，66,1-10. 2024）
2. 福田 由紀・井関 龍太・望月 正哉・常深 浩平『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅱ）－ Instructional Question Check 通過に影響する要因の検討－』（読書科学，66,11-25. 2024）
3. 井関 龍太・望月 正哉・菊池 理紗・福田 由紀『現代語小説の品詞構成に基づく文体印象の分析－イメージ性と展開の早さの主観的印象を説明する試み－』（計量国語学，34，158-173. 2023年）
4. 井関 龍太・菊池 理紗・望月 正哉・福田 由紀・石黒 圭『品詞構成に基づく文体指標は読者の印象とどのように関わるか－ MVR と品詞構成率の心理学的検討－』（計量国語学，33，493-509. 2022年
　この論文は計量国語学会の論文賞を拝受しました）
5. 望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀・長田 友紀・常深 浩平・石黒 圭『読者がもつ物語の認知的ジャンルの測定』（読書科学，63,160-174. 2021）
＜ＨＰ＞
「ことばのこころ研究室」http://www.zc.em-net.ne.jp/ psy-language/

【Outline (in English)】
Course outline ： The purpose of this course is to examine the characteristics of effective communication and methods for putting them into practice
Learning Objectives：By the end of the course, students should be able to do the following:
－ A. learn about existing knowledge concerning “interaction” using spoken language
－ B. based on insights, learn the characteristics of smooth “interaction”
－ C. Make practical and concrete proposals regarding the learned content
Learning activities outside of classroom ： Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.
Grading Criteria ： Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 40%, comment for the presentation of other people: 30%, in-class contribution: 30%.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

シングルケースデザイン法演習

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業ではシングルケースデザイン法について実践的に学びます。シングルケースデザイン法は行動分析学の研究でよく使われる実験計画法で、少数の参加者を対象に、行動の制御変数を探索したり、効果を検証するために用いられています。授業では独立変数と従属変数の関係を実証するためのロジックについて学びます。そして参加者が興味関心のあるテーマで簡易的な実験を行い、データの分析や作図による目視分析の演習を行います。

【到達目標】
　この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です。
○従属変数とする行動を焦点化し、定義する。
○焦点化した行動を測定する。
○独立変数とする操作や条件を定義し、実験として実装する方法を考案する。
○記録方法を考え、ベースラインを測定する。
○目視分析のためにデータを作図する。
○各種シングルケースデザイン法のロジックを理解し、実験の目的にあわせた方法を選択する。
○実験結果を評価するための目視分析を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。受講生の興味関心にあわせて実験計画を立案し、実際に簡単な実験に取り組むことを優先して進めます。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	全員： 授業内容と方法、約束事を説明します。演習として行う実験計画や研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。
第2回	シングルケースデザイン法の概要1	AB法、反転法について学びます。
第3回	シングルケースデザイン法の概要2	多層ベースライン法、基準変化法について学びます。
第4回	実験計画1	演習として取り組む実験計画について話し合います。
第5回	実験計画2	演習として取り組む実験計画を立案します。独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などを学びます。
第6回	実験準備1	実験に使う材料やプログラムなどを準備します。
第7回	実験準備2	実験に使う材料やプログラムなどを準備します。
第8回	実験実施1	実験を実施します。
第9回	実験実施2	同上。
第10回	目視分析1	目視分析のための作図法を学びます。
第11回	目視分析2	同上。
第12回	研究成果のまとめ	目視分析をもとに実験結果を考察し、討論します。
第13回	研究成果の発表準備	研究成果をまとめて発表する方法を学びます。
第14回	研究成果の発表	研究成果をまとめて発表します。全課題を振り返り、討論します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。
○興味関心があるテーマについて標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の3つを考え、提案するための資料を作成する。
○実験計画について予測する結果を作図する。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
島宗 理 (2019). ワードマップ　応用行動分析学　新曜社

【参考書】
研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】
○授業参加（40%）および課題の遂行度（60％）から成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
この授業は今年度から新しく開講されました。

【その他の重要事項】
○オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の3限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course provides practical training in single-case research design methodology. Single-case design is an experimental method commonly used in behavior analysis research to explore controlling variables of behavior and evaluate intervention effects with a small number of participants. Students will learn the logic for demonstrating the relationship between independent and dependent variables. Participants will then conduct simple experiments on topics of their own interest and practice data analysis and visual analysis through graphing. Assignments will be given weekly. The course is conducted in a seminar format, centered on presenting assignments and engaging in discussions. Priority is given to developing experimental designs based on students' interests and conducting simple experiments. Feedback on assignments will be provided during class sessions and via Slack.
【Learning Objectives】
The primary goals of this course are to acquire the following knowledge and skills:
○ Identify and define the target behavior as the dependent variable.
○Measure the identified behavior.
○ Define the manipulation or conditions as the independent variable and devise methods for implementing them as an experiment.
○Develop recording methods and measure baseline.
○Graph data for visual analysis.

○Understand the logic of various single-case design methods and select an appropriate method based on the purpose of the experiment.
○Conduct visual analysis to evaluate experimental results.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

心理教育アセスメント演習

熊　仁美

備考（履修条件等）：7/28（火）2-5限、7/29（水）1-5限、7/30（木）1-5限を予定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
検査を通じて対象児の特性を的確に把握し、支援計画の策定に役立つよう解釈しまとめる知識と技術の習得を目的とする。心理検査の概要や発達障害の基礎知識を学んだあと、療育支援の現場に校外学習にでむき、個別心理検査の実習を行う。検査を実施し、結果を解釈し、結果に基づいて指導案を作成する。今年度は、ウェクスラー式知能検査WISC-Vを使用する予定である。

【到達目標】
（1）ＷＩＳＣ-Vを実施できるようになる
（2）ＷＩＳＣ-Vの検査結果を解釈できるようになる
（3）ＷＩＳＣ-Vの検査結果に基づいて、指導案を作成できるようになる。
（4）発達に遅れや偏りのある児童に分かりやすい関わり方の基礎を習得する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・前半は、大学にて検査の概要に関する講義とロールプレイによる実技演習を行います。発達障害や応用行動分析学に基づくかかわり方の基礎も学んでいただきます。後半は、福祉施設に校外実習に出向き、小学校低学年のお子さんにご協力を頂いて実際に検査をとる練習をします。
・課題等については、発表や提出後に、口頭や文書でフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	事前演習	検査の実施に関する説明と諸注意。発達障害支援における活用の概要なども解説する。
第2回	事前演習	教室内で受講者同士がペアとなり、模擬的に検査を実施する（2回に渡る授業の1回目）。
第3回	事前演習	教室内で受講者同士がペアとなり、模擬的に検査を実施する（2回に渡る授業の2回目）。
第4回	事前演習２	模擬検査について結果を算出し、検査のプロフィールを合わせて解釈し、それに対するフィードバックを受ける（3回に渡る授業の1回目）。
第5回	事前演習２	模擬検査について結果を算出し、検査のプロフィールを合わせて解釈し、それに対するフィードバックを受ける（3回に渡る授業の2回目）。
第6回	事前演習2	模擬検査について結果を算出し、検査のプロフィールを合わせて解釈し、それに対するフィードバックを受ける（3回に渡る授業の3回目）。
第7回	事前演習3	模擬検査に基づき、個別の指導計画などに組み込める具体的な指導案を作成し、フィードバックを受ける（2回に渡る授業の1回目）。
第8回	事前演習３	模擬検査に基づき、個別の指導計画などに組み込める具体的な指導案を作成し、フィードバックを受ける（2回に渡る授業の2回目）。
第9回	実習	校外にて発達支援の現場見学を行い、検査に必要なラポール形成のスキルを学ぶ(2回に渡る授業の1回目)。
第10回	実習	校外にて発達支援の現場見学を行い、検査に必要なラポール形成のスキルを学ぶ(2回に渡る授業の2回目)。
第11回	実習	校外にて子どもを対象に検査を実施しその結果を解釈する(3回に渡る授業の1回目)。
第12回	実習	校外にて子どもを対象に検査を実施しその結果を解釈する(3回に渡る授業の2回目)。
第13回	実習	校外にて子どもを対象に検査を実施しその結果を解釈する(3回に渡る授業の3回目)。
第14回	総括	上記の検査で得られた結果を解釈し、指導案を作成してレポートとして提出する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
・集中講義開始前までにテキストを読んでおくこと（心理学準備室に用意してあります）。
・履修者が決定したら、授業支援システムを使ってレポートの分担を送ります。割り振られた分担箇所について、各自レポートにまとめてもらい、授業当日に発表をして頂きます。

【テキスト（教科書）】
日本版 WISC-V 刊行委員会　訳編著　2021 年　日本文化科学社
実施・採点マニュアル 1冊
理論・解釈マニュアル 1冊

【参考書】
日本版 WISC-IV による発達障害のアセスメント - 代表的な指標パターンの解釈と事例紹介- 上野一彦　松田 修　小林 玄　木下智子 著　2015 年 日本文化科学社
https://www.amazon.co.jp/dp/4821063719/ref=cm_sw_r_li_dp_U_a8GrEb322RD5E

【成績評価の方法と基準】
・実習のため、全セッションへの出席と参加が評価の前提となる。
・成績はレポートを 100 点満点で採点し、評価する。

【学生の意見等からの気づき】
・実習前に対象児童のプロフィールや生活の見通しをより詳しく伝達することで、検査実施の意味や結果の活用についての考察を深めることができる。
・学生間のディスカッションや協働を積極的にもうけることで、自発的・自律的な学びを重視する。

【学生が準備すべき機器他】
・プロジェクタ・スクリーンが使える状態にしておくこと。
・検査器具を部屋に運んでおくこと。

【その他の重要事項】
・動きやすい服装で参加してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞発達心理学・応用行動分析学＜研究テーマ＞大学における研究やＮＰＯ法人における臨床活動を通して、自閉スペクトラム症のある幼児に対する早期療育支援やペアレントトレーニング、セラピスト養成や共同注意などの前言語コミュニケーションに関する研修に取り組んできた。
＜主要研究業績＞
熊仁美・竹内弓乃・原由子・直井望・山本淳一・高橋甲介・飯島啓太・齊藤宇開・渡邊倫・服巻繁・ボンディ アンディ (2010). 自閉症とコミュニケーション（公開講座
：わが国における最新の研究と
実践), 行動分析学研究, 24(1), 85-105.
熊仁美・直井望・山本淳一（2010). 自閉症児の共同注意とコミュニケーション：発達初期コミュニケーション尺度を用いた分析 ― 人間と社会の探求：慶應義塾大学大
学院社会学研究科紀要,69, 131-144.
熊仁美・山本淳一（2014). 自閉症児の要求音声言語の獲得と拡張に及ぼす PECS の効果, 特殊教育学研究, 51(5), 407-419.
熊仁美（2016）自閉症スペクトラム障害における共同注意と社会的参照行動. 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士論文（未公刊）
■取得研究費
・熊仁美（2016）「エビデンスに基づいて保護者とともに取り組む発達障害児の早期療育モデルの実装」 国立研究開発法人科学技術振興機構 28 年度戦略的創造研究推進事業研究
開発成果実装支援プログラム
・熊仁美（2019）「市民科学とパーソナルデータを基盤とした発達障害支援の臨床の知の共財化」国立研究開発法人科学技術振興機構31年度戦略的創造研究推進事業 RISTEX 科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム

【Outline (in English)】
The purpose of the "Psychoeducation Assessment Exercise" is to interpret the test results and accurately grasp the characteristics of the target child, and to acquire the skills to formulate
a support plan based on the test results. After learning the outline of psychological tests and basic knowledge of developmental disabilities, they will go to a developmental support facility
and practice the tests with the cooperation of their children.
Interpret the results and create a teaching plan that suits the child. We plan to use WISC-V this year.
Learning Objectives
(1) To be able to administer the WISC-V
(2) To be able to interpret WISC-V test results
(3) To be able to prepare instructional plans based on WISC-V test results
(4) To acquire the basics of how to relate to children with developmental delays and biases in a way that is easy to understand.
(4) Acquire the basics of how to relate to children with developmental delays and biases in an understandable manner
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each. Students are expected to read the textbook (available in the Psychology Preparation Room) before the start of the intensive course. (The textbook is available in the Psychology Preparation Room). Once you are enrolled in the course, you will be assigned a report using the class support system. After the students have been selected, the assignment for the report will be sent to you via the class support system. Please write your own report on the assigned sections and submit it to the class. The students will be asked to write their own reports on the assigned sections and present them on the day of the class.
Grading Methods
Attendance and participation in all sessions are prerequisites for evaluation.
The grade will be based on the report, which will be graded on a 100-point scale.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

健康心理学特論

林　容市

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
様々な事象，対象について，健康心理的視点から捉え，該当分野における研究の現状を理解する。

【到達目標】
個人の健康観に関する諸要因について理解する。
特に身体活動と関連する心理的要因，および生理的要因と感覚との関係を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業では，個人や社会における健康に関する基礎的理論・概念を理解した上で，最新の研究結果を踏まえて健康に関する心理的要因を論議する。毎回，主たるテーマを設け，基礎的な情報の提供を受け，それらを踏まえて参考文献を読み，受講者全体で討論した上で，複数回の発表を行う。これらを通じ，研究の視点および方法について視野を広げ，研究活動に資する知識・技術を獲得する。
また，前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては，授業内で全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	オリエンテーション，健康に関する研究の現状の紹介
第2回	健康に対する意識と主観(1)	健康度評価に関する研究の展開
第3回	健康に対する意識と主観(2)	クオリティ・オブ・ライフの意味するもの
第4回	健康に対する意識と主観(3)	健康観や健康行動におけるパラダイムシフト
第5回	様々な対象における健康と心理(1)	生活習慣病や障害と満足度研究と実際的応用
第6回	様々な対象における健康と心理(2)	高齢者のサクセスフルエイジングと健康
第7回	様々な対象における健康と心理(3)	医療者・患者間コミュニケーション，インフォームドコンセント
第8回	様々な対象における健康と心理(4)	女性における健康と心理
第9回	社会環境的側面からの健康(1)	地域・ネットワーキングと保健・医療の新しい展開
第10回	社会環境的側面からの健康(2)	コミュニティにおけるヘルスプロモーションの展開
第11回	健康行動としての身体活動と心理的背景(1)	心理行動的要因と様々な行動変容モデル
第12回	健康行動としての身体活動と心理的背景(2)	身体活動時の感覚と生理的状態
第13回	健康行動としての身体活動と心理的背景(3)	主観的努力観と身体活動・スポーツ
第14回	健康行動としての身体活動と心理的背景(4)	運動習慣・健康行動と自己効力感

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業ごとに指示された調査および論文を事前に読む予習を行う。また，プレゼンテーションの担当となった場合には，スライドや発表資料の作成も求める。さらに，毎回の授業内容についてとりまとめ，次回以降の授業内でのディスカッションに備えること。なお，これらの各回の授業に対する準備および復習等の時間は，それぞれ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
学術雑誌に掲載されている論文を使用し，必要に応じて指示する。その他の資料は適宜授業中に配布する。

【参考書】
田中喜代次，大蔵 倫博 (編)．健康運動の支援と実践．金芳堂．

【成績評価の方法と基準】
授業への参画（出席ではない）状況：50%，プレゼンテーション（資料等の評価も含む）：50%

【学生の意見等からの気づき】
前年度休講のため授業改善アンケートは実施しておらず，フィードバックはありません。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　生理心理学，応用健康科学，健康心理学
＜研究テーマ＞　運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し、健康維持、減量などに効果的な身体活動を検討する
＜主要研究業績＞　林容市 他．個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係．体力科学57：197-206，2008　ほか

【Outline (in English)】
【Course outline】The purpose of this class is to understand the current state of research into account various events and subjects concerned from a health-psychological perspective.
【Learning Objectives】By the end of the course, students should understand various factors related to the individual's view of health. In particular, students will understand the relationship between psychological and physiological factors related to physical activity.
【Learning activities outside of the classroom】Students are required to read the research and papers assigned for each class in advance. Those in charge of presentations must also prepare slides and presentation materials. In addition, students expect to summarize the contents of each class and prepare for discussions in the subsequent classes. The standard time for preparation and review for each of these classes is two hours each.
【Grading Criteria/Policy】Grading will be decided based on the class participation (not attendance) (50%) and the Presentation, including evaluation of materials (50%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

基礎心理学実験法演習

竹島　康博

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
基礎心理学の研究の中で用いられる実験法について，受講者同士で発表し合うことで学びます。自身の研究分野に縛られず幅広い研究法を学ぶことにより，研究の発想の幅を広げることを目的とします。

【到達目標】
基礎心理学の研究領域でよく用いられる実験法について，受講者自身の研究分野に縛られず幅広く学び直すことにより，自身の研究の幅を柔軟に広げられる思考力，応用力を身に付けることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎週，受講者が教科書に掲載されている実験法から1つを選び，その手法を使った研究論文の内容を発表し，それについて全員で議論します。なお，受講人数等によって授業の内容を一部変更する場合があります。
毎週の課題の提出およびフィードバックは，授業中ないし授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業全体の概要説明 受講者の研究テーマや主要な研究法についての発表
第2回	研究紹介(1)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（1人目：1巡目）
第3回	研究紹介(2)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（2人目：1巡目）
第4回	研究紹介(3)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（3人目：1巡目）
第5回	研究紹介(4)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（1人目：2巡目）
第6回	研究紹介(5)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（2人目：2巡目）
第7回	研究紹介(6)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（3人目：2巡目）
第8回	研究紹介(7)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（1人目：3巡目）
第9回	研究紹介(8)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（2人目：3巡目）
第10回	研究紹介(9)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（3人目：3巡目）
第11回	研究紹介(10)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（1人目：4巡目）
第12回	研究紹介(11)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（2人目：4巡目）
第13回	研究紹介(12)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（3人目：4巡目）
第14回	まとめ	授業の総括と実験法の復習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。教科書と発表論文の読み込みや資料の作成といった発表の準備を行います。また，授業後は取り上げた実験法について，受講者自身の研究に活用できる可能性を検討する作業を行います。

【テキスト（教科書）】
日本基礎心理学会（監）『基礎心理学実験法ハンドブック』 2018 朝倉書店

【参考書】
三浦麻子（監著）『なるほど！ 心理学研究法』 2017　北大路書房
佐藤暢哉・小川洋和『なるほど！ 心理学実験法』2017　北大路書房
大竹恵子（編著）『なるほど！ 心理学調査法』 2017　北大路書房
佐藤寛（編著）『なるほど！ 心理学観察法』 2018　北大路書房
米山直樹・佐藤寛（編著）『なるほど！ 心理学面接法』 2018　北大路書房

【成績評価の方法と基準】
平常点50%と，「受講者による発表」の内容50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【その他の重要事項】
教科書を指定していますが，専攻で貸し出し用に2冊用意しています。受講者同士で上手くシェアして使ってください。
授業で募集する様々な研究への参加による学習についても評価に加味する場合があります。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
知覚心理学，認知心理学
＜研究テーマ＞
異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究，視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究
＜主要研究業績＞
竹島 康博 (2024).　視聴覚刺激の提示タイミングに対する同時性知覚の柔軟性　VISION, 36(4), 150-155.
Takeshima, Y. (2024).　The influence of spatial frequency information on temporal synchrony perception on audiovisual stimuli. Perception, 53(11-12), 803-811.
Takeshima, Y. (2023). Change of rapid temporal recalibratgion magnitude for audiovisual asynchrony with modulation of temporal binding window width: A preliminaryh investigation. i-Perception, 14(4), 1-10.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course deals with some topics using various kinds of psychological methods that the instructor use so far.
[Learning objectives]
The goals of this course are to enable students to develop flexible thinking and applied skills that allow them to broaden the scope of their own research by broadly revisiting experimental methods commonly used in basic psychological research, without being limited to their own research fields.
[Learning activities outside of classroom]
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
[Grading Criteria /Policy]
Grading will be decided based on class contribution (50%) and class presentation (50%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

応用心理統計 I

山口　剛

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が心理学領域の研究論文を読み、自身の研究計画の立案やデータの分析が適切にできるようになるために、基礎的な統計モデルについて学ぶことを目的とする。春学期「応用心理統計I」は、平均値の比較や変数間の関連から拡張子、一般線形モデルと潜在変数を導入したモデルの理解と解釈・報告の仕方の習熟を目指す。また、実践面として、RとRStudioを用いたデータの可視化を重視しながら、再現可能な手順で分析・図表作成・報告を行う力を養う。

【到達目標】
履修後、学生は次のことができる。
・分散分析や回帰分析を一般線形モデルから統合的に捉え、結果を解釈・可視化できる。
・研究仮説や研究計画に沿って、比較（多重比較・計画対比）やモデル拡張（2次項・交互作用）を適切に実施することができる。
・潜在変数や潜在構造、測定方程式と構造方程式を導入した考え方や分析を適切に実施することができる。
・R/RStudioを用いて、データ処理。データ可視化、分析、図表作成を一連で行い、再現可能な形で提出できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
教材の閲覧や課題の作成はRStudioを想定しています。教材は授業回ごとに配布する予定で、課題も同じく授業回ごとに出題する予定です。心理統計の基礎的な内容の理解を目的としていますが、授業中は受講生が実際にRプログラミングに触れて、実際に分析をして結果を出したり、データや分析結果を可視化したりして、体験的に理解できる機会となるように計画されています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	半期の目標と成績評価の確認、R/RStudio導入、パッケージ管理、Git/GitHubの設定
第2回	記述統計・平均値差1（1要因の分散分析）	記述統計の算出、可視化、多重比較
第3回	平均値差2（2要因の分散分析）	交互作用、単純主効果
第4回	平均値差3（3要因の分散分析）	単純交互作用、単純・単純主効果
第5回	平均値差4（様々な比較）	多重比較の手法の整理、計画対比
第6回	相関関係1（相関と回帰）	単相関と単回帰分析、偏相関と重回帰分析、多重共線性
第7回	相関関係2（重回帰モデルの比較）	階層的重回帰モデル、モデル比較、残差
第8回	相関関係3（交互作用項のある重回帰モデル）	中心化、標準化、多項式、調整変数
第9回	一般線形モデルによる拡張	ダミー変数、共分散分析、エフェクトコーディング、媒介変数
第10回	潜在変数と潜在構造1（因子分析など）	探索的因子分析、主成分分析、クラスタリング
第11回	潜在変数と潜在構造2（構造方程式モデリング）	測定方程式、確認的因子分析、パス解析
第12回	統計的仮説検定の考え方	帰無仮説と対立仮設、p値、信頼区間、統計的仮説検定とは何か
第13回	頻度論とベイズ論	ベイズ統計の基本的な考え方、結果の見方、頻度論（推定と検定）とベイズ論の比較
第14回	まとめ	半期の振り返りとレポートの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備学習：授業回ごとに内容をお伝えします（1, 2時間程度）。
復習や宿題：授業中に出された課題の修正・完了を求めます（1, 2時間程度）。

【テキスト（教科書）】
指定しない（必要に応じて文献を紹介します）

【参考書】
心理統計の基礎的な理解を目的として、以下の文献の内容を中心に授業を展開します。
・南風原 朝和 (2002). 心理統計学の基礎：統合的理解のために 有斐閣アルマ [4641121605]
・南風原 朝和 (2014). 続・心理統計学の基礎　統合的理解を広げ深める 有斐閣アルマ [978-4641220416]
また、Rプログラミングによる統計解析の導入として、以下の文献も参考とします。
・山田 剛史・杉澤 武俊・村井 潤一郎 (2008). Rによるやさしい統計学 オーム社 [978-4274067105]

【成績評価の方法と基準】
・授業内課題（50%）：毎回の授業中，あるいは授業中に終えられなかった場合は指定の期間までに提出を求める。どのような課題かは，各授業で伝えられる。
・セメスター課題（50%）：本科目で学んだことを総合して用いる課題となる。
・注意：「授業内課題」は課題の総数に対して20%以上の未提出が確認された場合、また、「セメスター課題」が未提出の場合，成績評価の対象外となります（つまりE判定です）。

【学生の意見等からの気づき】
2026年度から始めて担当します。そのため、授業回ごとに受講生の皆さんの反応から柔軟に対応したいと考えています。

【学生が準備すべき機器他】
RとRStudioをインストールしたPCを用意しておいてください。また、授業資料配布や課題提出にGitHubを利用するかもしれません。いずれも、初回に皆さんの学習状況を確認して、アナウンスします。

【その他の重要事項】
「これまでに心理統計を学修したことがない」あるいは「あまり自信がない／忘れてしまった」という方は、以下の文献を本科目の導入としておすすめします。
・山田 剛史・村井 潤一郎 (2004). よくわかる心理統計 ミネルヴァ書房 [978-4623039999]
・吉田 寿夫 (1998). 本当にわかりやすいすごく大切なことが書いてあるごく初歩の統計の本 北大路書房 [978-4762830297]
本科目はRプログラミングを含むため、生成AIの適切な使用を推奨したいところですが、心理統計の基礎知識やRプログラミングの基礎知識および経験がないと「生成物が妥当か判断できない」ですし、そもそも「生成AIに適切な指示が出すことができない」といった事態が危惧されます。こういったことから、本科目は生成AIに頼らない、心理統計およびRプログラミングの一次的体験として位置付けます。受講生の皆さんに、いきなりゼロからRスクリプトを作ることは求めず、配布資料等で解説しながら進めるので、授業中だけでなく事前・事後の学習で知識とスキルの定着を志してもらえればと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞ 認知心理学・教育心理学
＜研究テーマ＞ ヒトの学習過程と記憶の定着および利用
＜主要研究業績＞
・Yamaguchi, T. (2022). A paradigm shift in learning strategy research: Illustration and example of a within-person examination. PLOS ONE, 17(9), e0274548. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0274548
・山口 剛 (2020). 知識の獲得 榎本 淳子・藤澤 文 (編著) エビデンスベースの教育心理学：心身の発達と学習の過程 (pp. 131– 149). ナカニシヤ出版.

【Outline (in English)】
（Course outline） Advanced Statistics in Psychology I equips students with the statistical foundations needed to critically read empirical articles in psychology and to plan and analyze their own research. The course develops a unified understanding of mean comparisons and relationships among variables through the general linear model framework. It also introduces core ideas behind latent-variable approaches (e.g., measurement and structural modeling) at an entry level.
Hands-on work in R and RStudio is integrated throughout the course, with a strong emphasis on data visualization and reproducible analysis workflows for producing figures/tables and writing up results.
（Learning Objectives） By the end of the course, students will be able to:
1. Analyze, interpret, and visualize results from ANOVA and regression as applications of the general linear model.
2. Choose and implement appropriate comparisons and model extensions—such as multiple comparisons, planned contrasts, quadratic terms, and interactions—based on research questions and study design.
3. Explain and carry out introductory analyses involving latent constructs, including the basic logic of measurement models and structural equation modeling.
4. Use R/RStudio to complete an end-to-end, reproducible workflow (data cleaning, visualization, modeling, and reporting) and submit analyses in a well-documented format.
（Learning activities outside of classroom）
Preparation: Required preparation will be announced for each class session. Students should expect about 1– 2 hours of preparatory work.
Homework: Students will revise and complete in-class work as needed and submit it by the stated deadline. Students should expect about 1–2 hours per session.
（Grading Criteria /Policy）
In-class assignments (50%): Short assignments will be completed during class or submitted by the specified deadline if not finished in class. Assignment requirements will be explained each session.
Semester project (50%): A cumulative project that integrates the methods and skills covered in the course.

Policy: A failing grade (E) will be assigned if (a) more than 20% of in-class assignments are not submitted, or (b) the semester project is not submitted.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

応用心理統計 II

山口　剛

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が心理学領域の研究論文を読み、自身の研究計画の立案やデータの分析が適切にできるようになるために、基礎的な統計モデルについて学ぶことを目的とする。秋学期「応用心理統計II」は、確率分布とデータ生成の観点から統計モデルを体系的に学ぶ。一般化線形モデル（GLM）と一般化線形混合モデル（GLMM）を中心に、反復測定や階層構造を含むデータの扱い、欠測の基本、効果量と検定力（研究設計）を扱う。R/RStudioによる可視化と再現可能な分析手順を通じて、解釈・報告まで一貫して行う力を養う。

【到達目標】
履修後、学生は次のことができる。
・確率分布とデータ生成過程にもとづいて、データの性質やモデルの前提（欠測を含む）を説明し、分析方針を立てることができる。
・一般化線形モデル（GLM）および一般化線形混合モデル（GLMM）を用いて、正規分布以外のデータや反復測定あるいは階層データを分析し、結果を解釈・可視化して報告できる。
・効果量と検定力の考え方を理解し、研究計画（サンプルサイズ設計、分析デザイン）に反映できる。
・R/RStudioを用いて、データ処理。データ可視化、分析、図表作成を一連で行い、再現可能な形で提出できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
教材の閲覧や課題の作成はRStudioを想定しています。教材は授業回ごとに配布する予定で、課題も同じく授業回ごとに出題する予定です。心理統計の基礎的な内容の理解を目的としていますが、授業中は受講生が実際にRプログラミングに触れて、実際に分析をして結果を出したり、データや分析結果を可視化したりして、体験的に理解できる機会となるように計画されています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	半期の目標と成績評価の確認、春学期の内容の振り返り
第2回	データ生成という考え方	母集団と標本、無作為抽出と研究デザイン、標本分布、様々な欠測値
第3回	様々な確率分布	正規分布、二項分布、ポアソン分布、尤度
第4回	一般化線形モデル1（ロジスティック回帰）	2値データ、リンク関数、係数の解釈（確率、オッズ）
第5回	一般化線形モデル2（ポアソン回帰など）	カウントデータ、モデル比較
第6回	混合モデルの考え方	固定効果とランダム効果、反復測定、実験デザイン
第7回	一般線形混合モデル	正規分布、ネストデータ、クロスデータ、ランダム切片、ランダム傾斜
第8回	一般化線形混合モデル2（2値データ）	ロジスティック回帰、解釈の仕方、実施に当たっての注意
第9回	一般化線形混合モデル3（カウントデータなど）	ポアソン回帰、確率分布の復習、実務上の注意点など
第10回	様々な効果量とその解釈	平均値差、相関・回帰係数、オッズ比、区間推定、検定力分析
第11回	調査や実験の前に行う分析（検定力分析とメタ分析）	研究設計、効果量、サンプルサイズ、シミュレーション
第12回	階層ベイズモデルの考え方	事前分布、尤度、事後分布、確率分布、マルコフ連鎖モンテカルロ法
第13回	統計的因果推論の考え方	相関と因果、交絡と調整、有向非巡回グラフ、構造方程式モデリング
第14回	まとめ	半期の振り返り、成績評価の確認、1年間の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備学習：授業回ごとに内容をお伝えします（1, 2時間程度）。
復習や宿題：授業中に出された課題の修正・完了を求めます（1, 2時間程度）。

【テキスト（教科書）】
指定しない（必要に応じて文献を紹介します）

【参考書】
心理統計の基礎的な理解を目的として、以下の文献の内容を中心に授業を展開します。
・南風原 朝和 (2002). 心理統計学の基礎：統合的理解のために 有斐閣アルマ [4641121605]
・南風原 朝和 (2014). 続・心理統計学の基礎　統合的理解を広げ深める 有斐閣アルマ [978-4641220416]
・久保 拓弥 (2012). データ解析のための統計モデリング入門：一般化線形モデル・階層ベイズモデル・MCMC 岩波書店 [978-4000069731]
また、Rプログラミングによる統計解析の導入として、以下の文献も参考とします。
・山田 剛史・杉澤 武俊・村井 潤一郎 (2008). Rによるやさしい統計学 オーム社 [978-4274067105]

【成績評価の方法と基準】
・授業内課題（50%）：毎回の授業中，あるいは授業中に終えられなかった場合は指定の期間までに提出を求める。どのような課題かは，各授業で伝えられる。
・セメスター課題（50%）：本科目で学んだことを総合して用いる課題となる。
・注意：「授業内課題」は課題の総数に対して20%以上の未提出が確認された場合、また、「セメスター課題」が未提出の場合，成績評価の対象外となります（つまりE判定です）。

【学生の意見等からの気づき】
2026年度から始めて担当します。そのため、春学期の様子や、授業回ごとに受講生の皆さんの反応から柔軟に対応したいと考えています。

【学生が準備すべき機器他】
RとRStudioをインストールしたPCを用意しておいてください。

【その他の重要事項】
春学期「応用心理統計I」を受講し、夏季休暇中に復習していることが望ましいです。
本科目はRプログラミングを含むため、生成AIの適切な使用を推奨したいところですが、心理統計の基礎知識やRプログラミングの基礎知識および経験がないと「生成物が妥当か判断できない」ですし、そもそも「生成AIに適切な指示が出すことができない」といった事態が危惧されます。こういったことから、本科目は生成AIに頼らない、心理統計およびRプログラミングの一次的体験として位置付けます。受講生の皆さんに、いきなりゼロからRスクリプトを作ることは求めず、配布資料等で解説しながら進めるので、授業中だけでなく事前・事後の学習で知識とスキルの定着を志してもらえればと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞ 認知心理学・教育心理学
＜研究テーマ＞ ヒトの学習過程と記憶の定着および利用
＜主要研究業績＞

・Yamaguchi, T. (2022). A paradigm shift in learning strategy research: Illustration and example of a within-person examination. PLOS ONE, 17(9), e0274548. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0274548
・山口 剛 (2018). 混合効果モデルの利用：刺激の変量効果への対処. バイオフィードバック研究, 45(2), 93－ 98. https://doi.org/10.20595/jjbf.45.2_93

【Outline (in English)】
（Course outline）Advanced Statistics in Psychology II provides students with a systematic understanding of statistical modeling from the perspective of probability distributions and data-generating processes, so that they can critically read empirical articles in psychology and conduct appropriate research planning and data analysis. The course focuses on generalized linear models (GLMs) and generalized linear mixed models (GLMMs), covering the analysis of non-normal outcomes as well as repeated-measures and hierarchical data structures. It also addresses the fundamentals of missing data, and connects inference to research design through effect sizes and power analysis. Throughout the course, students work in R and RStudio, emphasizing data visualization and reproducible workflows from analysis to reporting.
（Learning Objectives） By the end of the course, students will be able to:
1. Explain key assumptions behind statistical models — including basic missing-data mechanisms — based on probability distributions and data-generating processes, and develop an appropriate analysis plan.
2. Use GLMs and GLMMs to analyze non-normal outcomes and repeated-measures or hierarchical data, and interpret, visualize, and report the results.
3. Apply the concepts of effect size and statistical power to research planning, including sample-size considerations and analytic design choices.
4. Use R/RStudio to complete an end-to-end, reproducible workflow (data processing, visualization, modeling, and figure/table creation) and submit analyses in a well-documented format.
（Learning activities outside of classroom）
Preparation: Required preparation will be announced for each class session. Students should expect about 1－ 2 hours of preparatory work.
Homework: Students will revise and complete in-class work as needed and submit it by the stated deadline. Students should expect about 1－ 2 hours per session.
（Grading Criteria /Policy）
In-class assignments (50%): Short assignments will be completed during class or submitted by the specified deadline if not finished in class. Assignment requirements will be explained each session.
Semester project (50%): A cumulative project that integrates the methods and skills covered in the course.
Policy: A failing grade (E) will be assigned if (a) more than 20% of in-class assignments are not submitted, or (b) the semester project is not submitted.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

心理統計法実習Ⅰ

伊藤　尚枝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
心理学研究に必要な推測統計学の基礎知識を学び、統計的仮説検定の考え方を身につける。
・質的データの度数の差の検定方法を身につける。
・量的データの平均値の差の検定方法と、その結果の整理を学ぶ。
・統計ソフトJASPの基本操作法を習得する。

【到達目標】
到達目標は、以下の４点です。
（1）質的データおよび量的データについて、度数や平均値の違いを調べる検定方法を理解し、結果を正しく読み取ることができる。
（2）研究の目的や実験計画に適した統計分析手法を選択し、検定の前提条件や効果量を考慮した結果の整理・解釈を行うことができる。
（3）選択した統計分析手法を、統計ソフト JASP を用いて適切に実行し、その出力結果を心理学研究の報告形式に沿って記述することができる。
（4）心理学の学術論文に記載されている統計分析の結果を読み取り、その内容を理解・評価することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
各回の授業は、以下の①～③の流れで行います。ただし、進捗状況に応じて、順序を変更する場合があります。
①毎回1つの分析方法を取り上げて、その理法と技法を講義します。
・統計量を手計算してもらうことがあります。
・手計算をするときは、電卓、または、エクセルを使用する予定です。
・講義内容を理解したかを確認するために、小テストを行うことがあります。
②①で学んだ分析方法を、統計ソフトJASPを用いて演習形式で学びます。
・グループワークを取り入れて、JASPの基本操作への理解を深めます。
・JASPの分析結果を心理学研究の形式で記述する方法を学びます。
③①で学習した内容に関する課題を出し、JASPで分析してもらいます。
・②で学んだ操作内容を、実践してもらいます。
・課題の分析結果を、心理学論文に記載する形式でレポートにまとめ、提出してもらいます。
④次回の授業で、提出された課題について、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	データの要約	JASPの基本操作、分布の特性を表す統計量
第2回	度数の集計	度数分布表（1変数）とクロス集計表（2変数）
第3回	度数のカイ二乗検定1	適合度の検定（1変数）
第4回	度数のカイ二乗検定2	独立性の検定（2変数）
第5回	度数のカイ二乗検定3	カイ二乗検定のまとめ
第6回	統計的仮説検定	統計的仮説と判定、片側検定と両側検定
第7回	対応のないｔ検定１	対応のないｔ検定の考え方と手順、等分散性の検定
第8回	対応のないｔ検定２	結果の整理
第9回	対応のあるｔ検定１	対応のあるｔ検定の考え方と手順
第10回	対応のあるｔ検定２	結果の整理
第11回	一元配置の分散分析1	対応のない一元配置分散分析の考え方と手順
第12回	一元配置の分散分析2	対応のある一元配置分散分析の考え方と手順
第13回	単回帰分析	相関係数の算出、単回帰分析の考え方と手順
第14回	最終試験	試験・まとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で説明した統計用語やJASPの操作に関して、常に復習を行ってください（1時間）。
授業内で課題が終わらなかった場合は、次回授業までの宿題となります（2時間）。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。
授業中に適宜プリントを配布します。

【参考書】
伊藤尚枝　2014　Q＆Aで理解する統計学の基礎　北大路書房
清水優菜・山本光　2022　JASPで今すぐはじめる統計解析入門　心理・教育・看護・社会系のために　講談社
清水優菜・山本光　2020　研究に役立つ　JASPによるデータ分析－頻度論的統計とベイズ統計を用いて－　コロナ社

【成績評価の方法と基準】
課題の提出（40％）、最終テスト（40％）、授業への取り組み・小テスト（20％）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
大学院科目としては新設のため、前年度の学生からの意見はありません。

【学生が準備すべき機器他】
・授業では、情報実習室に備え付けのPCにインストールされている統計ソフトJASPを使用して実習を行います。
・JASPは各自のパソコンにもインストールできるため、個人のPCを持参して受講してもかまいません。

【その他の重要事項】
・質問等は、授業中に教室にて受け付けます。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course introduces statistical analyses of psychological research needed for inferential statistics and the basics of hypothetical testing.
During this course, students will
・learn how to test the difference in frequency of qualitative data,
・learn how to test the difference between the average values of quantitative data and how to organize the results.
・learn basic operation methods of the statistical software, JASP.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to:
(1) choose a method of the statistical analysis suitable for the scale level of data,
(2) execute the chosen method using the statistical software, JASP,
(3) describe the output results of JASP according to the format of psychological research, and
(4) read the analysis results written in psychology papers.
【Learning activities outside of classroom】
You will be expected to review statistical terms and JASP operations (1 hour per class). If you do not complete the assignment in class, you will have to do your homework until the next class (2 hours per class).

【Grading Criteria】
Grades are based on (1) a term paper (40%), (2) assignments (40%), and (3) class activities and quizzes (20%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

心理統計法実習 II

伊藤　尚枝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
心理学研究でよく用いられる統計解析の理法と技法を習得する。
・二元配置の実験計画に準拠して収集された量的データの検定方法と、その結果の整理を学ぶ。
・多変数の量的データを分類・圧縮する諸技法（多変量解析）を学ぶ。

【到達目標】
到達目標は以下の４点です。
（1）実験計画法および多変量解析の考え方に基づき、研究目的に適した統計分析手法を選択できる。
（2）選択した統計分析手法を、統計ソフトJASPを用いて適切に実行できる。
（3）JASP による分析結果を、心理学研究の報告形式に準拠して記述できる。
（4）心理学分野の学術論文に記載されている統計分析の結果を読み取り、その内容を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
各回の授業は、以下の①～③の流れで行います。ただし、進捗状況に応じて、順序を変更する場合があります。
①毎回1つの分析方法を取り上げて、その理法と技法を講義します。
・講義内容を理解したかを確認するために、小テストを行うことがあります。
②①で学んだ分析方法を、統計ソフトJASPを用いて演習形式で学びます。
・グループワークを取り入れて、JASPの基本操作への理解を深めます。
・JASPの分析結果を心理学研究の形式で記述する方法を学びます。
③①で学習した内容に関する課題を出します。
・②で学んだ操作内容を、実践してもらいます。
・課題の分析結果を、心理学論文に記載する形式でレポートにまとめ、提出してもらいます。
・次回の授業内で、課題の解説をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	一元配置分散分析の復習
第2回	二元配置の分散分析 1	2要因とも対応がない場合
第3回	二元配置の分散分析 2	2要因とも対応がある場合
第4回	二元配置の分散分析 3	1要因に対応がなく、1要因に対応がある場合
第5回	二元配置の分散分析 4	二元配置の分散分析のまとめ
第6回	因子分析１	探索的因子分析の考え方と手順
第7回	因子分析２	因子の抽出と因子負荷量の解釈
第8回	因子分析３	結果の整理
第9回	重回帰分析１	重回帰分析の考え方と手順
第10回	重回帰分析２	変数の選択と多重共線性の問題
第11回	重回帰分析３	階層的重回帰分析の考え方と手順
第12回	重回帰分析４	交互作用と単純傾斜分析
第13回	構造方程式モデリング	構造方程式モデリングの考え方と手順
第14回	最終試験	試験・まとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で説明した統計用語やJASPの操作に関して、常に復習を行ってください（1時間）。
授業内で課題が終わらなかった場合は、次回授業までの宿題となります（2時間）。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。
授業中に、適宜プリントを配布します。

【参考書】
清水優菜・山本光　2022　JASPで今すぐはじめる統計解析入門　心理・教育・看護・社会系のために　講談社
清水優菜・山本光　2021　研究に役立つ　JASPによる多変量解析－因子分析から構造方程式モデリングまで－　コロナ社

【成績評価の方法と基準】
課題の提出（40％）、最終テスト（40％）、授業への取り組み・小テスト（20％）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
大学院科目としては新設のため、前年度の学生からの意見はありません。

【学生が準備すべき機器他】
・授業では、情報実習室に備え付けのPCにインストールされている統計ソフトJASPを使用して実習を行います。
・JASPは各自のパソコンにもインストールできるため、個人のPCを持参して受講してもかまいません。

【その他の重要事項】
・心理統計法実習Ｉの内容を含めて授業を進めていきますので、心理統計法実習Ｉをあらかじめ履修しておいてください。
・質問等については、授業中に受け付けます。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course is designed to help students acquire the principles and techniques of statistical analysis often used in psychological research. During this course, students will
・learn how to test the quantitative data collected according to the dual-placement experimental plan and how to organize the results and
・learn various techniques (multivariate analysis) for classifying and compressing quantitative data of multiple variables.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to:
(1) choose analysis methods suitable for experimental designs and research purposes,
(2) execute the chosen method using the statistical software, JASP,
(3) describe the output results of JASP according to the format of psychological research, and
(4) read the analysis results written in psychology papers.
【Learning activities outside of classroom】
You will be expected to review statistical terms and JASP operations (1 hour per class). If you do not complete the assignment in class, you will have to do your homework until the next class (2 hours per class).
【Grading Criteria】
Grades are based on (1) a term paper (40%), (2) assignments (40%), and (3) class activities and quizzes (20%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

生理心理学実習

木村　健太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
生理心理学は、ヒトの心の働きや行動を脳や身体などの生物学的な観点から理解する心理学のアプローチです。中枢や末梢の生理活動を反映する指標についての基礎的な知識をもとに、生理指標の活用方法を実際のデータの取得体験を通して実践的に学びます。また、生理指標を用いる研究計画の立案、データの取得から分析、考察、報告まで、生理心理学の研究の一連のプロセスを経験することで実践力を身につけます。

【到達目標】
・心理学研究でよく用いられる生理指標を正しく測定できるようになる。
・心理状態と生理反応との関係を理解できるようになる。
・心理状態を測るのに適切な実験手続き・生理指標を選択できるようになる。
・国際的な研究知見にもとづき、生理心理学の研究データを正しく解釈できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
・グループまたは個別で生理心理学の実験を行う実習形式で行います。
・授業に関する疑問・感想を記載したリアクションペーパーを提出してもらい、次の授業ではそれへのコメントも含めて授業をおこないます。
・授業内で提出を求めるレポートには、コメントをつけて返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方、授業目標の確認
第2回	心拍を用いた実験：計画の立案	心拍を用いた実験計画の立案、刺激や教示など実験に必要な資料の作成
第3回	心拍を用いた実験：データ取得	心拍を用いた実験計画にもとづく生理データの取得
第4回	心拍を用いた実験：データ分析	取得した心拍データの分析
第5回	心拍を用いた実験：レポート作成	分析した心拍データをもとにしたレポートの作成
第6回	皮膚電気活動を用いた実験：計画の立案	皮膚電気活動を用いた実験計画の立案、刺激や教示など実験に必要な資料の作成
第7回	皮膚電気活動を用いた実験：データ取得	実験計画にもとづく皮膚電気活動データの取得
第8回	皮膚電気活動を用いた実験：データ分析	取得した皮膚電気活動データの分析
第9回	皮膚電気活動を用いた実験：レポート作成	分析した皮膚電気活動データをもとにしたレポートの作成
第10回	脳波を用いた実験：計画の立案	脳波の実験計画の立案、刺激や教示など実験に必要な資料の作成
第11回	脳波を用いた実験：データ取得	実験計画にもとづく脳波データの取得
第12回	脳波を用いた実験：データ分析	取得した脳波データの分析
第13回	脳波を用いた実験：レポート作成	分析した脳波データをもとにしたレポートの作成
第14回	まとめ	実習内容の復習、生理データを論文により報告する際の注意事項

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間合計4時間を標準とします。
・事前に測定対象とする生理指標の概要や測定方法などを予習しておくことが望ましいです。
・授業時間は主に実習と解説に使うため、データの分析やレポートの作成などは授業時間外に実施することがあります。

【テキスト（教科書）】
担当教員が作成した資料を配布します。

【参考書】
生理心理学と精神生理学 第Ⅰ・Ⅱ巻　堀忠雄・尾崎久記（監修）
北大路書房

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な参加（平常点40%）とレポートの内容（60%）から総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度の授業への感想として、「実際に実験を実施し、生理指標の分析を行うことで生理心理学の理解が促進した」「山手線ゲームや早口言葉中の生理指標をいかに適切に測定するかを学ぶことで、生理指標を測定する実験の組み立て方のコツが分かった」といったコメントがありました。一方、レポート作成など研究報告についての説明が不足していると感じました。2026年度は授業の構成や説明をさらに工夫することで、研究結果の報告方法についてもしっかり説明します。

【学生が準備すべき機器他】
実験で取得するデータの分析、レポートの作成などのため、授業中にパソコンを利用することがあります。

【その他の重要事項】
・授業の進め方や授業計画、授業目標の説明をしますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。
・演習という形式上、受講希望者が許容範囲を超える場合は抽選を行うことがあります。
・オフィスアワー：春・秋学期ともに木曜日3限（BT1109研究室）。訪問希望者は、メール（k.kimura[at]hosei.ac.jp）等で前日までに連絡してください。

【Outline (in English)】
(Course outline)
Based on fundamental knowledge of central and peripheral nervous system activity, this course will provide hands-on learning experiences in the application of psychophysiological indices through conducting psychophysiological experiments.
(Learning Objectives)
To develop practical skills by designing research plans, collecting actual data, and analyzing and summarizing the results.
(Learning activities outside of classroom)
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading criteria/Policy)
The final grade will be calculated according to the following process: in-class contribution (40%) and reports (60%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

君嶋　泰明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』（1927年）を読みます。同書でハイデガーは、「存在」という概念がその意味をつねに「時間」から得ている／同概念がつねに「時間」を地平として理解されていると考え、そのことを論証しようとしました。同書をドイツ語原文で精読することを通じて、これがいかなる企図かを理解することを目指します。ドイツ語が読めない受講生は英訳での参加も可です。ドイツ語初学者や学部生の参加も歓迎します。

【到達目標】
①『存在と時間』のドイツ語原文（ないし英訳）の正確な訳読ができる。
②同書の思想を理解し、自分の理解したことを噛み砕いて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示します。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深めます。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行います。なお、以下の授業計画のページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	『存在と時間』の概要の説明
第2回	『存在と時間』の読解①	報告と討議（1-3頁）
第3回	『存在と時間』の読解②	報告と討議（4-6頁）
第4回	『存在と時間』の読解③	報告と討議（7-9頁）
第5回	『存在と時間』の読解④	報告と討議（10-13頁）
第6回	『存在と時間』の読解⑤	報告と討議（14-16頁）
第7回	『存在と時間』の読解⑥	報告と討議（17-19頁）
第8回	『存在と時間』の読解⑦	報告と討議（20-22頁）
第9回	『存在と時間』の読解⑧	報告と討議（23-25頁）
第10回	『存在と時間』の読解⑨	報告と討議（26-28頁）
第11回	『存在と時間』の読解⑩	報告と討議（29-31頁）
第12回	『存在と時間』の読解⑪	報告と討議（32-34頁）
第13回	『存在と時間』の読解⑫	報告と討議（35-36頁）
第14回	『存在と時間』の読解⑬	報告と討議（37-39頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨みます。参加者は該当箇所を熟読してきます。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer.
希望者には該当箇所のコピーを配布します。

【参考書】
適宜授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
担当者としての評価が80%、議論への参加度の評価が20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
現象学、技術の哲学
＜研究テーマ＞
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討、技術と人間の関係の研究
＜主要研究業績＞
・「ハイデガーの存在概念を再構成する」（『哲学研究』613号、2025年）
・「初期ハイデガーの実存思想――キルケゴール受容の観点から」（『法政哲学』20号、2024年）
・「存在要求の要求とそれへの応答――ハイデガー技術論の理解のために」（『Heidegger-Forum』17号、2023年）
・「ボルグマンからハイデガーへ――ハイデガー技術論再考」（『法政哲学』18号、2022年）
・「「存在忘却」とは何か」（『法政大学文学部紀要』82号、2021年）
・「信仰と哲学――ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」（『アルケー』26号、2018年）

【Outline (in English)】
(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's *Sein und Zeit*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand the thought in *Sein und Zeit*.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

君嶋　泰明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
春学期に引き続き、マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』（1927年）を読みます。同書でハイデガーは、「存在」という概念がその意味をつねに「時間」から得ている／同概念がつねに「時間」を地平として理解されていると考え、そのことを論証しようとしました。同書をドイツ語原文で精読することを通じて、これがいかなる企図かを理解することを目指します。ドイツ語が読めない受講生は英訳での参加も可です。ドイツ語初学者や学部生の参加も歓迎します。

【到達目標】
①『存在と時間』のドイツ語原文（ないし英訳）の正確な訳読ができる。
②同書の思想を理解し、自分の理解したことを噛み砕いて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示します。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深めます。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行います。なお、以下の授業計画のページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	『存在と時間』の概要の説明
第2回	『存在と時間』の読解①	報告と討議（40-42頁）
第3回	『存在と時間』の読解②	報告と討議（43-46頁）
第4回	『存在と時間』の読解③	報告と討議（47-49頁）
第5回	『存在と時間』の読解④	報告と討議（50-53頁）
第6回	『存在と時間』の読解⑤	報告と討議（54-56頁）
第7回	『存在と時間』の読解⑥	報告と討議（57-59頁）
第8回	『存在と時間』の読解⑦	報告と討議（60-62頁）
第9回	『存在と時間』の読解⑧	報告と討議（63-65頁）
第10回	『存在と時間』の読解⑨	報告と討議（66-68頁）
第11回	『存在と時間』の読解⑩	報告と討議（69-71頁）
第12回	『存在と時間』の読解⑪	報告と討議（72-74頁）
第13回	『存在と時間』の読解⑫	報告と討議（75-76頁）
第14回	『存在と時間』の読解⑬	報告と討議（77-79頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨みます。参加者は該当箇所を熟読してきます。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer.
希望者には該当箇所のコピーを配布します。

【参考書】
適宜授業で指示します

【成績評価の方法と基準】
担当者としての評価が80%、議論への参加度の評価が20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
現象学、技術の哲学
＜研究テーマ＞
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討、技術と人間の関係の研究
＜主要研究業績＞
・「ハイデガーの存在概念を再構成する」（『哲学研究』613号、2025年）
・「初期ハイデガーの実存思想――キルケゴール受容の観点から」（『法政哲学』20号、2024年）
・「存在要求の要求とそれへの応答――ハイデガー技術論の理解のために」（『Heidegger-Forum』17号、2023年）
・「ボルグマンからハイデガーへ――ハイデガー技術論再考」（『法政哲学』18号、2022年）
・「「存在忘却」とは何か」（『法政大学文学部紀要』82号、2021年）
・「信仰と哲学――ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」（『アルケー』26号、2018年）

【Outline (in English)】
(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's *Sein und Zeit*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand the thought in *Sein und Zeit*.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

伊海　孝充

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本講義では、世阿弥伝書のうち、『花伝』第二物学条々を読む。世阿弥伝書の概略と『花伝』研究の現状を確認した上で、物学条々の諸本比較・校訂本文作成を行ない、作品研究に結びつける問題点を探る。

【到達目標】
本講義では、『花伝』第二物学条々の精読を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法の習得を目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点の見つけ、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
演習形式によって進める。参加者で当該資料を分担し、諸本比較・注釈等を行なう。また、その資料の解釈をもとに、自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談
第2回	世阿弥伝書概略（1）	世阿弥伝書の種類
第3回	世阿弥伝書概略（2）	先行研究
第4回	『花伝』概略（1）	構成と諸本
第5回	『花伝』概略（2）	先行研究
第6回	物学条々「女」	校異と校訂本文の作成
第7回	物学条々「老人」	校異と校訂本文の作成
第8回	物学条々「直面」「法師」	校異と校訂本文の作成
第9回	物学条々「物狂」	校異と校訂本文の作成
第10回	物学条々「修羅」	校異と校訂本文の作成
第11回	物学条々「神」	校異と校訂本文の作成
第12回	物学条々「鬼」	校異と校訂本文の作成
第13回	物学条々「唐事」	校異と校訂本文の作成
第14回	まとめ	本講義内容の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業内に指示する。

【参考書】
授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】
講義での発表　７０％
講義での発言　３０％

【学生の意見等からの気づき】
専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞能楽
＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011年）「「江戸時代初期観世流整版謡本群の研究（三）」（『能楽研究』49号、2025年3月）

【Outline (in English)】
Course Outline: In this lecture we will study the theory of Noh mimicry as described in “Kaden”. In the process, we learn about the outline of the scrolls written by Zeami.
Learning Objectives: The goals of this course are to learn how to treat classical literature and how to read variant kana through exposure to a large number of sources.
Learning Activities Outside of the Classroom: Your study time will be more than four hours for a class.
Grading Criteria/Policy: Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

伊海　孝充

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この講義では、春学期から引き続き、世阿弥伝書を通して、能の物真似理論を研究する。具体的には、以下の２点。
①　世阿弥の物真似理論の展開を考察する。
②　具体的な作品を用いて、世阿弥の物真似理論を考察する。

【到達目標】
本講義では、世阿弥伝書と作品の分析を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法の習得を目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、世阿弥伝書と作品を関係づけて分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
演習形式によって進める。参加者で当該資料を分担し、伝書・作品を分析する。また、発表者には「結論」がある考察を示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談
第2回	『花伝』第二物学条々の概略	春学期の復習
第3回	世阿弥伝書概略	春学期の復習
第4回	「先能其物成」	『花鏡』を中心に
第5回	「似せぬ位」	『花伝第七別紙口伝』を中心に
第6回	「似得る位」	『拾玉得花』を中心に
第7回	「無主風」「有主風」	『至花道』以降の伝書
第8回	「女」の物真似	受講者による作品分析
第9回	「老人」の物真似	受講者による作品分析
第10回	「修羅」の物真似	受講者による作品分析
第11回	「物狂」の物真似	受講者による作品分析
第12回	「神」の物真似	受講者による作品分析
第13回	「鬼」の物真似	受講者による作品分析
第14回	まとめ	本講義内容の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内に指示する。

【参考書】
授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】
講義での発表　７０％
講義での発言　３０％

【学生の意見等からの気づき】
専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞能楽
＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011年）「「江戸時代初期観世流整版謡本群の研究（三）」（『能楽研究』49号、2025年3月）

【Outline (in English)】
Course Outline: This lecture examines the theory of mimicry in Noh based on the treatise written by Zeami. It also applies this theory to the analysis of specific works.
Learning Objectives: The goals of this course are to learn how to treat classical literature and how to analyze Noh plays on my own.
Learning Activities Outside of the Classroom: Your study time will be more than four hours for a class.
Grading Criteria/Policy: Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

遠藤　星希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
司馬遷の『史記』を精読する。『史記』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、『源氏物語』にもその影響が色濃く見えるのみならず、その後の日本文学にも影響力を持ち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（三家注や瀧川資言『史記會注考證』等）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ、『史記』巻八十六「刺客列伝」を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深め、そこに描かれた人々の英知を吸収すると同時に、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】
１．『史記』についての基礎的な知識を習得する。
２．漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に頻出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
３．漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『史記』本文を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『史記』の本文を数行ずつ区切ってそれぞれ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。質問は授業中に随時受け付け、その場で返答できない場合は、次週の授業の冒頭に口頭で返答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（１）	『史記』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（２）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	『史記』精読（１）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第１段落）
第4回	『史記』精読（２）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第２段落）
第5回	『史記』精読（３）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第３段落）
第6回	『史記』精読（４）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第４段落）
第7回	『史記』精読（５）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第５段落）
第8回	『史記』精読（６）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第６段落）
第9回	『史記』精読（７）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第７段落）
第10回	『史記』精読（８）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第８段落）
第11回	『史記』精読（９）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第９段落）
第12回	『史記』精読（１０）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第１０段落）
第13回	『史記』精読（１１）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第１１段落）
第14回	『史記』精読（１２）	担当者による発表と討論（「刺客列伝」第１２段落）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当部分について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】
・点校本二十四史修訂本『史記』（中華書局、2014）
・瀧川資言『史記會注考證』（上海古籍出版社、2015）
・吉田賢抗〔ほか〕著『史記』1-15（明治書院、1973-2014）
・小川環樹〔ほか〕訳『史記列伝』（岩波文庫、1975）
・小竹文夫, 小竹武夫訳『列伝』1-4（ちくま学芸文庫、1995）
・武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（講談社文芸文庫、1997）
・宮崎市定『史記を語る』（岩波文庫、1996）
その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
担当者としての発表内容（７０％）、討論への参加度・貢献度・積極性（３０％）。

【学生の意見等からの気づき】
授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】
授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
中国古典文学
＜研究テーマ＞
時間意識・空間意識という側面からの分析を通した、中国文学・思想史上における李賀の定位の再検討
＜主要研究業績＞
「唐代伝奇「定婚店」をめぐる一考察」（『青山語文』46号、2016・3）
「遺臣のゆれる心――杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12）
「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中國學會報』65集、2013・10）など

【Outline (in English)】
Course Outline: In this course, we will closely read Sima Qian's *Shiji* (The Records of the Grand Historian). *Shiji* is one of the most familiar Chinese classics that not only exerted strong influence on the Tale of Genji but also had enduring effects on the subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in literary Chinese (So-called Sanjia Zhu — three standard commentaries — and *Shiki kaichu kosho* by Sukenobu Takigawa). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and absorb wisdom of people described therein through close reading of Chapter 86, Biographies of Assassins, of *Shiji*, and develop basic skills for close reading of Chinese classic writings.
Learning Objectives: By the end of the course, students should be able to do the followings:
– A. Acquire basic knowledge of *Shiji*.
– B. Acquire the basic skills necessary to read and comprehend Chinese materials.
– C. Critically examine existing translations with reference to notes written in Chinese, and acquire the ability to interpret the text of *Shiji* in an original way.

Learning Activities Outside of the Classroom: Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.
Grading Criteria/Policy: 70% for preparation of materials used in class: 30% for active participation in class discussion.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

遠藤　星希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
梁の昭明太子が編纂した『文選』所収の詩を精読する。『文選』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、その後も日本文学に影響力を持ち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（李善注や五臣注など）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ『文選』所収の詩を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深めつつ、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】
１．『文選』についての基礎的な知識を習得する。
２．漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に頻出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
３．漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『文選』所収の詩を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『文選』所収の詩の中から比較的有名なものを精選し、一首ずつ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。質問は授業中に随時受け付け、その場で返答できない場合は、次週の授業の冒頭に口頭で返答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（１）	『文選』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（２）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	『文選』精読（１）	「古詩十九首・其九」前半部分
第4回	『文選』精読（２）	「古詩十九首・其九」後半部分
第5回	『文選』精読（３）	曹植「公讌詩」前半部分
第6回	『文選』精読（４）	曹植「公讌詩」後半部分
第7回	『文選』精読（５）	王粲「七哀詩二首・其一」前半部分
第8回	『文選』精読（６）	王粲「七哀詩二首・其一」後半部分
第9回	『文選』精読（７）	潘岳「悼亡詩三首・其一」前半部分
第10回	『文選』精読（８）	潘岳「悼亡詩三首・其一」後半部分
第11回	『文選』精読（９）	謝霊運「登石門最高頂」前半部分
第12回	『文選』精読（１０）	謝霊運「登石門最高頂」後半部分
第13回	『文選』精読（１１）	謝朓「晩登三山還望京邑」前半部分
第14回	『文選』精読（１２）	謝朓「晩登三山還望京邑」後半部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当する詩について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】
・『文選』（上海古籍出版社、1986）
・『文選』（中華書局、1977）
・『六臣注文選』（浙江古籍出版社、1999）
・『唐鈔文選集註彙存』（上海古籍出版社、2011）
・小尾郊一・花房英樹『文選』（集英社、1974-1976）
・内田泉之助・網祐次〔ほか〕『文選』（明治書院、1963-2001）
・斯波六郎・花房英樹『文選』（筑摩書房、1963）
・興膳宏・川合康三『文選』（角川書店、1988）
・高橋忠彦・神塚淑子『文選』（学習研究社、1985）
その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
担当者としての発表内容（７０%）、討論への参加度・貢献度・積極性（３０%）。

【学生の意見等からの気づき】
授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】
授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
中国古典文学
＜研究テーマ＞
時間意識・空間意識という側面からの分析を通した、中国文学・思想史上における李賀の定位の再検討
＜主要研究業績＞
「唐代伝奇「定婚店」をめぐる一考察」（『青山語文』46号、2016・3）
「遺臣のゆれる心――杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12)
「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中國學會報』65集、2013・10）など

【Outline (in English)】
Course Outline: In this course, we will closely read poetry contained in the anthology *Wen Xuan*, which was compiled by Xiao Tong, a Crown Prince of the Chinese Liang Dynasty. *Wen Xuan* was one of the most familiar Chinese classics for aristocrats in the Heian period and has been influential in subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in Literary Chinese (Li Shan and Commentaries by Five Officials). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and while developing basic skills for reading Chinese classical writings through close reading of poetry contained in *Wen Xuan*.
Learning Objectives: By the end of the course, students should be able to do the followings:
– A. Acquire basic knowledge of *Wen Xuan*.
– B. Acquire the basic skills necessary to read and comprehend Chinese materials.
– C. Critically examine existing translations with reference to notes written in Chinese, and acquire the ability to interpret the text of *Wen Xuan* in an original way.
Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to read the presentation material prior to each class. Study time will be a minimum of 4 hours per class.

Grading Criteria/Policy: 70% for preparation of materials used in class: 30% for active participation in class discussion.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

王　安

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日中対照研究に関する重要なトピックを中心に，重要文献・論文を精読し，日中両言語の類似性及び相違点への理解を深め、対照研究の方法を学ぶ。

【到達目標】
１、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
２、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象や問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
３、対照研究の研究方法を用いて自分の興味ある言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文１本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ(A4サイズ３～４枚／一人で担当する場合は6枚)を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく(例えば質問リストを作成するなど)。
授業形式について、基本的に対面形式で行う予定。授業計画について変更がある場合、学習支援システムでまたは前回の授業で知らせる。授業のフィードバックは随時授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第2回	対照研究の研究方法	教員が講義を行う
第3回	ミニ研究発表	ミニ研究発表
第4回	論文解説(１)	日中感情形容詞について
第5回	論文解説（２）	日中動詞について
第6回	discussion	以上の論文につして議論を行う
第7回	論文解説（３）	日中動詞について（その２）
第8回	論文解説（４）	意味分析について
第9回	論文解説（５）	意味分析について（その２）
第10回	論文解説（６）	日中同形語について
第11回	フォローアップ	全体議論
第12回	論文解説（７）	その他
第13回	ミニ発表	各自の研究についてミニ発表を行う
第14回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ(最終レポートにするテーマ)について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
１、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。
２、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する(論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たりA4サイズ3～4枚、一人で発表する場合は6枚以内)
３、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく(課題として論文の要約と質問を作成して提出してもらう)
本授業の準備学習・復習時間は、各１０～１２ 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】
＜中国語学＞
○『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕　監訳　2004　三省堂
○『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編　2003　商務印書館
『現代中国語文法総覧』劉月華他1996　くおしお出版
『現代漢語専題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編　2003　北京大学出版社
『語法講義』朱徳熙1982　商務印書館
『語法問答』朱徳熙1986
『現代漢語語法研究教程』陸倹明　2005　北京大学
『現代中国語用法辞典』呂叔湘　1983　現代出版
『現代漢語八百詞』呂叔湘　2008　商務印書館（虚詞が中心）
『漢語基本知識(語法篇)』施春宏　2011　北京語言大学出版社
『中国語学概論』王占華他　2004　駿河台出版社
＜対照言語学関係参考文献＞
井上優(2002)『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究X,国立国語研究所
石綿敏雄　高田誠（1990)『対照言語学』桜楓社
生越直樹（2002)『シリーズ言語科学４対照言語学』東京大学出版会
大河内康内編（1997）『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
寺村秀夫(1982)「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学10 外国語との対照』 明治書院
中川正之(1997)「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
張　黎（2012）『漢語意合語法研究』白帝社
張麟声（2007）「言語研究のための対照研究について―日本国内の事例を中心に―」『言語文化学研究―言語情報編2』1-14. 大阪府立大学.
＜中国語教育参考書＞
『中国語文法教室』杉村博文　1994　大修館書店
『中国語の文法書』相原茂　他　1996　同学社
『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他　高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】
論文要約レポート(30%) + 論文内容発表(30％)＋質問・発言(40％)で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
対照言語学、現代中国語文法、認知言語学
＜研究テーマ＞
形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究
＜主要研究業績＞
「中国語の＜主観性 ＞の再考察―使役表出文を例として―」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編. pp.35-50. 2018. 開拓社
「感情の普遍性とその言語化―感情表現の類型論的研究に向けて―」『ことばのパースペク ティヴ』 (中村芳久教授退職記念論文集刊行会編. pp.71-84. 2018. 開拓社
第8章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版

「感情表現における日中対照研究―感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して―」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline (in English)】
The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.
（Learning Objectives）
1.To capture the differences and similarities between Chinese and Japanese languages, and study the research methods of comparative study theoretically and systematically.
2. Cultivate the ability to read papers critically, and develop the problem awareness and analytical ability to discover language phenomena and problem points.
3. Improve research ability, and be able to explain language phenomena.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class, students will be expected to spend 10 hours reviewing the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Overall grade in the class will be decided based on the following parts:
- presentation: 40%
- discussion:20%
- final report:40%

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

王　安

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
引き続き日中対照研究に関する重要なトピックを中心に，重要文献・論文を精読し，日中両言語の類似性及び相違点への理解を深める。また、学期後半の授業では各自の研究について発表をしてもらい、議論を行う。

【到達目標】
１、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
２、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象、問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
３、対照研究の研究方法を用いて自分の興味持つ言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文１本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ(A4サイズ３～４枚／一人で担当する場合は6枚)を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく。
授業は対面形式で行う予定ですが、変更があった場合学習支援システムにてお知らせします。また、授業のフィードバックは随時授業内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第2回	論文解説(その１）	形容詞関係
第3回	論文解説(その２）	感情表現関係
第4回	論文解説(その３）	ヴォイス関係
第5回	論文解説（その４）	指示詞関係
第6回	研究報告（１）	研究発表１
第7回	研究報告（２）	研究発表２
第8回	研究報告（３）	研究発表３
第9回	これまでのまとめ	全体議論
第10回	論文解説（その５）	コロケーション関係
第11回	論文解説（その６）	形容詞関係
第12回	論文解説（その７）	メタファー関係
第13回	論文解説（その８）	多義性研究
第14回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ(最終レポートにするテーマ)について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
１、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。
２、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する(論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たりA4サイズ3～4枚、一人で発表する場合は6枚以内)
３、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく(課題として論文の要約と質問を作成して提出してもらう）
本授業の準備学習・復習時間は、各１０～１２ 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】
＜中国語学＞
○『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕　監訳　2004　三省堂
○『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編　2003　商務印書館
『現代中国語文法総覧』劉月華他1996　くおしお出版
『現代漢語専題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編　2003　北京大学出版社
『語法講義』朱徳熙1982　商務印書館
『語法問答』朱徳熙1986
『現代漢語語法研究教程』陸倹明　2005　北京大学
『現代中国語用法辞典』呂叔湘　1983　現代出版
『現代漢語八百詞』呂叔湘　2008　商務印書館（虚詞が中心）
『漢語基本知識(語法篇)』施春宏　2011　北京語言大学出版社
『中国語学概論』王占華他　2004　駿河台出版社
＜対照言語学関係参考文献＞
井上優(2002)『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究X,国立国語研究所
石綿敏雄　高田誠（1990)『対照言語学』桜楓社
生越直樹（2002)『シリーズ言語科学４対照言語学』東京大学出版会
大河内康内編（1997）『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
寺村秀夫(1982)「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学10 外国語との対照』 明治書院
中川正之(1997)「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
張　黎（2012）『漢語意合語法研究』白帝社
張麟声（2007）「言語研究のための対照研究について―日本国内の事例を中心に―」『言語文化学研究―言語情報編2』1-14. 大阪府立大学.
＜中国語教育参考書＞
『中国語文法教室』杉村博文　1994　大修館書店
『中国語の文法書』相原茂　他　1996　同学社
『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他　高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】
論文要約レポート(30%) + 論文内容発表(30％)＋質問・発言(40％)で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
対照言語学、現代中国語文法、認知言語学
＜研究テーマ＞
形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究
＜主要研究業績＞
「中国語の＜主観性 ＞の再考察―使役表出文を例として―」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編. pp.35-50. 2018. 開拓社
「感情の普遍性とその言語化―感情表現の類型論的研究に向けて―」『ことばのパースペク ティヴ』(中村芳久教授退職記念論文集刊行会編. pp.71-84. 2018. 開拓社
第8章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版
「感情表現における日中対照研究―感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して―」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline (in English)】
The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.
（Learning Objectives）
1.To capture the differences and similarities between Chinese and Japanese languages, and study the research methods of comparative study theoretically and systematically.
2. Cultivate the ability to read papers critically, and develop the problem awareness and analytical ability to discover language phenomena and problem points.
3. Improve research ability, and be able to explain language phenomena.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class, students will be expected to spend 10 hours reviewing the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Overall grade in the class will be decided based on the following parts:
– presentation: 40%
– discussion:20%
– final report:40%

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

尾谷　昌則

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、前半の４週間で認知言語学（認知意味論）の基本的な考え方を学ぶためにテキストを１冊を読み終える。後半で１０週間は、その考え方を応用して日本語の意味分析をしている研究論文を取り上げて、それぞれに関する質疑応答・討論をする。受講生は、要約レポート（もしくは論文レビュー）を毎週作成し、授業開始時に提出する。毎回の授業は、テキストを読むのではなく、テキストの内容に関する質疑応答、疑問点・批判点の提示をしてもらいながら進めるため、なるべく多くの疑問点・批判点を考えてくることが毎週の課題である。ただ座って話を聴いているだけでの授業ではないので、留学生が「日本語について勉強したい」という程度の動機で受講することは勧めない。

【到達目標】
テキストに出てくる認知言語学および言語学一般の基礎概念・用語を理解するとともに、具体例を挙げながら他者にそれらの概念を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
▼指定したテキストや論文について毎回質疑応答・討論を繰り返す。当日の授業開始時までにクリティカル・レポートをHoppiiへ提出することが求められる。
▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行うことがある。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。
▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ		内容
第1回	学習の仕方、要約の書き方、各種参考資料について		要約レポートの書き方などをレクチャーする
第2回	テキスト１	第１、２章	認知言語学について、受講生による発表・討論
第3回	テキスト１	第３、４章	カテゴリー化について、受講生による発表・討論
第4回	テキスト１	第５章	メタファーについて、受講生による発表・討論
第5回	テキスト１	第６章	次章構造について、受講生による発表・討論
第6回	テキスト１	第７、８章	構文について、受講生による発表・討論
第7回	テキスト１	第９章	文法化について、受講生による発表・討論
第8回	テキスト２	第１章	伝統文法から構文文法への史的展開について、受講生による発表・討論
第9回	テキスト２	第２章の前半	認知文法について、受講生による発表・討論
第10回	テキスト２	第２章の後半	構文拡張と類推について、受講生による発表・討論
第11回	テキスト２	第５章第１～３節	グローバル構文について、受講生による発表・討論
第12回	テキスト２	第５章第４節	構文拡張と語用論的意味について、受講生による発表・討論
第13回	テキスト２	第５章第５節	構文拡張と再分析について、受講生による発表・討論
第14回	まとめ		本授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
【宿題】
(1) テキストの該当箇所もしくは課題論文のクリティカル・レポート（A4用紙一枚）。毎週、授業開始時までに提出する。（２時間程度）
(2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。（１時間程度）
(3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく。（１時間程度）

【テキスト（教科書）】
テキスト１『認知言語学』（大堀壽夫、2002年、東京大学出版会、3000円＋税）
テキスト２『構文ネットワークと文法』（尾谷昌則・二枝美津子、2011年、研究社、3200円＋税）

【参考書】
『認知言語学大事典』（朝倉書店）★重要
『意味論キーターム事典』（開拓社）
『新編　認知言語学キーワード事典』（研究社）
『ことばの認知科学事典』（大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（明治書院）
『日本語学研究事典』（明治書院）
『語用論キーターム事典』　（開拓者）
『日本語研究のための認知言語学』（籾山洋介著、研究社）
『認知意味論のしくみ』（籾山洋介著、研究社）
『認知意味論の新展開―メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）
『認知言語学　基礎から最前線へ』（森雄一・高橋英光編著、くろしお出版）
『認知言語学のはなし』（高橋英光著、2010年、北海道大学出版会、1760円）

【成績評価の方法と基準】
宿題(1)「クリティカル・レポート」（50 %）
宿題(2)(3) 質疑応答・ディスカッションへの参加態度（50 %）

【学生の意見等からの気づき】
言語を分析する際の知識（＝道具）が不足しているとの声があったので、春学期は敢えて論文を読まずに、分析の道具に関する知識を集中的に扱う構成にした。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
＜研究テーマ＞
　認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
＜主要研究業績＞
　「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）
　「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第7号, pp.17-30. 2005年）
　『構文ネットワークと文法　―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline (in English)】
Course Outline:
To understand the basic concepts of cognitive linguistics, we read the textbook for cognitive linguistics(semantics) and academic papers on (cognitive) semantics. Students are supposed to submit a summary of the chapter(or a paper) that we are to read on the day.
Learning Objectives:
The objectives of this course are (1)to learn the basic (Cognitive) linguistic terms, (2)to aquire the ability to explain them with a lot of examples to other people.
Learning Activities Outside of the Classroom:
Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policy:
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
asignments (50%), discussions (50%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

尾谷　昌則

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、(認知) 言語学的な研究手法を学ぶことができる雑誌記事・学術論文を読む。論文ごとに担当者を決め、担当者には、論文の要旨を分かりやすくレジュメにまとめたものを授業で配付し、口頭でリポートしてもらう。その後、質疑応答・ディスカッションを行い、論文の分析手法について批判的に検討する。

【到達目標】
(1) 論文における主張と根拠を的確に理解し、分かりやすく要約してリポートができるようになる。
(2)言語学の諸概念が言語分析においてどのように応用されているのかを理解し、具体例を挙げながら、それらについて説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
演習形式で行う。発表者はレジュメを作って、論文の内容を分かりやすく他の受講者に伝える。知らない概念などは事前にすべて調べておき、それらについても補足的に説明できるるよう準備しておく。受講者は、事前に論文の不明点や欠点について容赦なく質問し、発表者とひたすらディベートを行う。最後に皆でその論文の欠点と改善点について考える。
▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。
▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業の進め方、課題リポートの方法について	論文の要約の仕方を学ぶ
第2回	論文リポート(1)　スキーマとプロトタイプ	論文に関する質疑応答
第3回	論文リポート(2)　意味拡張と意味ネットワーク	論文に関する質疑応答
第4回	論文リポート(3)　形容詞の意味分析	論文に関する質疑応答
第5回	論文リポート(4)　名詞の意味分析	論文に関する質疑応答
第6回	論文リポート(5)　動詞の意味分析	論文に関する質疑応答
第7回	論文リポート(6)　構文の拡張と文法化	論文に関する質疑応答
第8回	論文リポート(7)　構文の拡張と類推	論文に関する質疑応答
第9回	論文リポート(8)　構文の拡張と再分析	論文に関する質疑応答
第10回	論文リポート(9)　主観化	論文に関する質疑応答
第11回	論文リポート(１０)　主体化	論文に関する質疑応答
第12回	論文リポート(１１)　若者ことば	論文に関する質疑応答
第13回	論文リポート(１２)　若者ことば	論文に関する質疑応答
第14回	まとめ	総括をする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
【宿題】
(1) 教科書／課題論文の要約レポート（A4用紙一枚）。毎週、授業開始時に提出する。(１時間程度)
(2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。(２時間程度)
(3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめる（１時間程度)。

【テキスト（教科書)】
なし。適宜プリントを配布する。

【参考書】
『認知言語学大事典』(朝倉書店)
『意味論キーターム事典』(開拓社)
『新編　認知言語学キーワード事典』(研究社)
『ことばの認知科学事典』(大修館書店)
『日本語学キーワード事典』(朝倉書店)
『言語学大辞典』(三省堂)
『日本語文法大辞典』(明治書院)
『日本語学研究事典』(明治書院)
『語用論キーターム事典』　(開拓者)
『日本語研究のための認知言語学』(籾山洋介著、研究社)
『認知意味論: 言語から見た人間の心』(ジョージレイコフ著、紀伊国屋書店)
『認知意味論のしくみ』(籾山洋介著、研究社)
『認知意味論の新展開―メタファーとメトニミー』(谷口一美著、研究社)
『概念化と意味の世界　認知意味論のアプローチ』(深田智・仲本康一郎著、研究社)
『認知言語学　基礎から最前線へ』(森雄一・高橋英光編著、くろしお出版)

【成績評価の方法と基準】
宿題(1)(2)(3)　50％
授業中の議論　　50％

【学生の意見等からの気づき】
論文の書き方が具体的に理解できた、というコメントが多かったので、今年度の実際に多くの論文を取り上げる予定である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
＜研究テーマ＞
　認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
＜主要研究業績＞
　「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」(『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年)
　「構文文法の歴史的背景と今後の展望」(『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年)
　「接続詞ケドの手続き的意味」(『語用論研究』第7号, pp.17-30. 2005年)
　『構文ネットワークと文法　―認知文法論のアプローチ』(共著、研究社、2011年)

【Outline (in English)】
Course Outline: We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.
Learning Objectives:The objectives of this class are as follows. (1)To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.
Learning Activities Outside of the Classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policy:
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
asignments (50%), discussions (50%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

小秋元　段

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では大学院生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期は古活字本『承久記』を扱う。

【到達目標】
古活字本『承久記』を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は、古活字本『承久記』をテキストとして、履修者が各種の工具書、資史料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』より適宜の分量を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	作品解説１（概要）	『承久記』の概要について講義する。
第2回	作品解説２（研究方法）	『承久記』の研究法について講義する。
第3回	作品講読『承久記』1	p.371～p.372の講読。
第4回	作品講読『承久記』2	p.373～p.374の講読。
第5回	作品講読『承久記』3	p.375～p.376の講読。
第6回	作品講読『承久記』4	p.377～p.378の講読。
第7回	作品講読『承久記』5	p.379～p.380の講読。
第8回	作品講読『承久記』6	p.381～p.382の講読。
第9回	作品講読『承久記』7	p.383～p.384の講読。
第10回	作品講読『承久記』8	p.385～p.386の講読。
第11回	作品講読『承久記』9	p.387～p.388の講読。
第12回	作品講読『承久記』10	p.389～p.390の講読。
第13回	作品講読『承久記』11	p.391～p.392の講読。
第14回	作品講読『承久記12	p.393～p.394の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
分担箇所の語釈・口語訳の作成。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
久保田淳ほか校注『保元物語 平治物語 承久記』（岩波書店・新日本古典文学大系、1992年）

【参考書】
長谷川端ほか編『承久記・後期軍記の世界』（汲古書院、1999年）
大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編『平家物語大事典』（東京書籍、2010年）

【成績評価の方法と基準】
発表の完成度（70％）、討論への貢献（30％）

【学生の意見等からの気づき】
初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学、書誌学
＜研究テーマ＞軍記物語、古活字版
＜主要研究業績＞『太平記新考』（汲古書院、2024年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）、『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）

【Outline (in English)】
(Course outline) In this course, we will read *Kokatsuji-bon Jokyūki*.
(Learning Objectives) The goals of this course are to Learn the skills to read classical literature.
(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report (70%) and in-class contribution（30％）.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

小秋元　段

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では大学院生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期はお伽草子を扱う。

【到達目標】
お伽草子を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は、お伽草子の複数作品をテキストとして、履修者が各種の工具書、資史料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は岩波書店・日本古典文学大系本より適宜の分量を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	作品解説１（概要）	お伽草子の概要について講義する。
第2回	作品解説２（研究方法）	お伽草子の研究法について講義する。
第3回	作品講読「熊野の御本字のさうし」1	p.411～p.413の講読。
第4回	作品講読「熊野の御本字のさうし」2	p.414～p.416の講読。
第5回	作品講読「熊野の御本字のさうし」3	p.417～p.419の講読。
第6回	作品講読「熊野の御本字のさうし」4	p.420～p.422の講読。
第7回	作品講読「熊野の御本字のさうし」5	p.423～p.425の講読。
第8回	作品講読「熊野の御本字のさうし」6	p.426～p.428の講読。
第9回	作品講読「熊野の御本字のさうし」7	p.429～p.431の講読。
第10回	作品講読「熊野の御本字のさうし」8	p.432～p.433の講読。
第11回	作品講読「御曹子島渡」1	p.102～p.104の講読。
第12回	作品講読「御曹子島渡」2	p.105～p.107の講読。
第13回	作品講読「御曹子島渡」3	p.108～p.110の講読。
第14回	作品講読「御曹子島渡」4	p.111～p.113の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
分担箇所の語釈・口語訳の作成。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
市古貞次校注『御伽草子』（岩波書店・日本古典文学大系、1958年）

【参考書】
徳田和夫編『お伽草子事典』（東京堂出版、2002年）
神田龍身・西沢正史編『中世王朝物語・御伽草子事典』（勉誠出版、2002年）

【成績評価の方法と基準】
発表の完成度（70％）、討論への貢献（30％）

【学生の意見等からの気づき】
初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学、書誌学
＜研究テーマ＞軍記物語、古活字版
＜主要研究業績＞『太平記新考』（汲古書院、2024年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）、『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）

【Outline (in English)】
(Course outline) In this course, we will read Otogi-zoshi.
(Learning Objectives) The goals of this course are to Learn the skills to read classical literature.
(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report (70%) and in-class contribution（30％）.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

小林　ふみ子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では研究文献を読むことを通じて通じて日本文学とその周辺各分野の研究法を学び、その要件を考える。江戸時代をおもな対象とし、日本近世文学や絵本・浮世絵を中心に文学、美術史、およびその関連分野の論考を取りあげる。あわせてM2の指導生を中心に、修士論文に向けた研究発表をしてもらい、具体的に研究をいかに進めるかをともに考える。

【到達目標】
（1）各分野の研究アプローチの方法や要件を知り、またそれらに共通する点について説明できるようになる。
（2）文献から論点を探し、研究を発展させる視点を自分なりに獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生の研究テーマを勘案して毎回、前の週に論文を配付する。各回の担当者は、その論文のテーマとその背景、内容、課題・問題をまとめて発表し、全員で議論する。そのなかでよい論文に求められるものについての理解を深める。
発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究とは	日本近世文学・浮世絵研究の課題・視点
第2回	授業の進め方	一文献を例に本授業の発表方法についての理解を共有する。
第3回	文献講読1	（出版についての論文1）
第4回	文献講読2	（出版についての論文2）
第5回	文献講読3	（文芸についての論文1）
第6回	文献講読4	（文芸についての論文2）
第7回	文献講読5	（浮世絵についての論文1）
第8回	文献講読6	（浮世絵についての論文2）
第9回	文献講読7	（その他1）
第10回	文献講読8	（その他2）
第11回	文献講読9	（その他3）
第12回	修論研究報告1	学生による発表＋質疑1
第13回	修論研究報告2	学生による発表＋質疑2
第14回	まとめ	今学期に学んだことをふりかえる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
前の週に配られた文献を読んでくること。

【テキスト（教科書）】
コピーを配布する。

【参考書】
適宜、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
毎回の出席は当然の前提とした上で、報告50％、授業中の質疑などの参加態度50％によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の関心に即して文献を選択するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化
＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌を中心とする近世中期文学・文化の研究
＜近年の主要著書＞
『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル［インターナショナル新書］ 2019）
『大田南畝　江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店　2014→角川ソフィア文庫　2024）
〈共編著〉
『水都としての東京とヴェネツィア』（法政大学出版局　2022）
『墨水四時雑詠』（太平書屋　2021）
『最後の文人石川淳の世界』（集英社［集英社新書］2021）
『好古趣味の歴史　江戸東京からたどる』（文学通信　2020）
『北斎　視覚のマジック　小布施・北斎館名品集』（平凡社　2019）
『奇と妙の江戸文学史』（文学通信　2019）
『別冊太陽　歌麿決定版』（平凡社　2016）
『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編　笠間書院　2015）
『化物で楽しむ江戸狂歌』（江戸狂歌研究会編　共著　笠間書院　2014）

【Outline (in English)】
(Course outline) Learing diffrence of disciplines to approach Tokugawa period cultures by reading essays from the fields of art history and those related to them.
(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read designated papers. Your required study time is four hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

小林　ふみ子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、受講生相互の研究分野についての発表を通じて、研究をいかに意義づけるかについて、多様な視点から考える。

【到達目標】
（1）日本近世文化研究がどのような学問領域にまたがっているかを認識する。
（2）日本文化史研究という広い視野で自らの研究の位置づけを説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
前半は受講生が自らの研究において最重要と考える文献を紹介することを通じて、事例に則して「いい論文」とは何かを考える。後半は受講生相互の研究発表とする。発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	研究をどう意義づけるか（講義）
第2回	文献講読 先行研究Aに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（1）
第3回	文献講読 先行研究Bに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（2）
第4回	文献講読 先行研究Cに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（3）
第5回	文献講読 先行研究Dに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（4）
第6回	文献講読 先行研究Eに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（5）
第7回	文献講読 先行研究Fに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（6）
第8回	中間まとめ 討論	「いい論文」「いい研究」とは？
第9回	研究発表　学生A	受講生相互の研究発表と討論1
第10回	研究発表　学生B	受講生相互の研究発表と討論2
第11回	研究発表　学生C	受講生相互の研究発表と討論3
第12回	研究発表　学生D	受講生相互の研究発表と討論4
第13回	研究発表　学生E	受講生相互の研究発表と討論5
第14回	まとめ	全体をふり返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
事前に配付された文献を読んでくるようにしましょう。

【テキスト（教科書）】
適宜配付します。

【参考書】
随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】
毎回の出席は当然の前提とした上で、報告50％、授業中の質疑などの参加態度50％によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の積極的な討論を期待します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世文芸・文化
＜研究テーマ＞近世中期文学・文化の研究
＜近年の論文＞
「大田南畝：遊女の声を伝える」『日本歴史』932号　2026
「栃木の門人と大田南畝―狂歌の添削から― 」『喜多川歌麿と栃木の狂歌』栃木市美術館2025
「近世随筆における考証の意義　大田南畝から考える「考証随筆」」『国語と国文学』102巻2号2025
「狂歌連中、摺物をつくる」『レスコビッチコレクションの摺物―パリから来た北斎・広重・北渓・岳亭―』大和文華館2024
「懐古趣味流行のなかの鍬形蕙斎」『國華』1542号 2024
「大田南畝の狂詩と明詩」『明清文学論集　その楽しさ その広がり』東方書店2024
'Generative Interactions:The Osmotic Boundaries Between Kusazōshi and Ukiyo-e',Graphic Narratives from Early Modern Japan :The world of Kusazoshi, Brill,2024
「作者の虚構性と実体性：大田南畝周辺から 」『國文論叢別冊』1号 2023

【Outline (in English)】
(Outline) Thinking how to attach significance to your interdisciplinary study/dissertation in a field of Japanese Studies.
（Learning activities outside of classroom） Before each class meeting, students will be expected to have read designated papers. Your required study time is four hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

スティーヴン・ネルソン

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本などを用いて、『古今著聞集』巻第五 和歌第六、巻第六 管絃歌舞第七の説話を講読する（2026年度）。

【到達目標】
国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程1年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程2年次生は中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 講読序説 ①	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明 『古今著聞集』巻第五 和歌第六、巻第六 管絃歌舞第七 について
第2回	研究課題の紹介（2年次生）① 購読序説 ②	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 『古今著聞集』諸本について
第3回	研究課題の紹介（2年次生）② 講読 ①	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話142
第4回	研究課題の紹介（2年次生）③ 講読 ②	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話230
第5回	関心対象の紹介（1年次生）① 講読 ③	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話143
第6回	関心対象の紹介（1年次生）② 講読 ④	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話231
第7回	修士課程の中間報告（2年次生）① 講読 ⑤	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話144
第8回	修士課程の中間報告（2年次生）② 講読 ⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話232
第9回	研究動向の確認（1年次生） 講読 ⑦	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討 説話145
第10回	先行研究の論旨の整理（2年次生）① 講読 ⑧	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話233
第11回	先行研究の論旨の整理（2年次生）② 講読 ⑨	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話146
第12回	先行研究の論旨の整理（1年次生）① 講読 ⑩	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話234
第13回	先行研究の論旨の整理（1年次生）② 講読 ⑪	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話147
第14回	夏期休暇中の作業計画立案 講読 まとめ	各自が行うべき作業の検討 春学期総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後　各自の研究、講読の準備を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書を使用しない。

【参考書】
副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今著聞集』を用いるが、入手方法については第1回講義の際に案内する。その他、必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表・各種作成資料の内容50％、討論への参加等の平常点50％。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　日本音楽史学
＜研究テーマ＞　日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
＜主要研究業績＞
①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現　資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）
②「「秘曲尽くし」再現―『文机談』に見える秘曲を聴く―」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013年）◇ 付録CD「「秘曲尽くし」再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：篳篥《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》
③「工尺譜の起源をめぐって　―唐代の文字譜との関係―」（磯水絵編『論集 文学と音楽史　―詩歌管絃の世界―』、和泉書院、2013年）

【Outline (in English)】
Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic year 2026, we will also read sections from the '*Waka*' ('Japanese poetry') and '*Kangen-kabu*' ('Music, song and dance') chapters of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their theses in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.
Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their theses, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.
Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class: 50% for active participation in class discussion.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

スティーヴン・ネルソン

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本などを用いて、『古今著聞集』巻第五 和歌第六、巻第六 管絃歌舞第七の説話を講読する（2026年度）。

【到達目標】
国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程1年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程2年次生は中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第2回	修士論文構想の報告（2年次生）① 講読 ①	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話235
第3回	修士論文構想の報告（2年次生）② 講読 ②	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話148
第4回	先行研究の紹介と整理（1年次生）① 講読 ③	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話236
第5回	先行研究の紹介と整理（1年次生）② 講読 ④	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話149
第6回	修士課程の中間報告（1年次生）① 講読 ⑤	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話237
第7回	修士課程の中間報告（1年次生）② 講読 ⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話150
第8回	修士論文の中間報告（2年次生）① 講読 ⑦	修士論文執筆の進捗状況に関する報告 説話238
第9回	修士論文の中間報告（2年次生）② 講読 ⑧	修士論文執筆の進捗状況に関する報告 説話151
第10回	修士論文の構想発表（1年次生）① 講読 ⑨	学術的な論理展開に基づき、修士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す 説話239
第11回	修士論文の構想発表（1年次生）② 講読 ⑩	学術的な論理展開に基づき、修士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す 説話152
第12回	修士論文提出前の総点検（2年次生） 講読 ⑪	論文構成、要旨、英文要旨、参考文献などについて点検を行う 説話240
第13回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義
第14回	まとめ 講読 まとめ	1年次生は春季休暇中の作業課題に関する計画を示し、2年次生は提出論文について報告し、講評を受ける

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。
以後　各自の研究を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書を使用しない。

【参考書】
副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今著聞集』を用いる。その他、必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表・各種作成資料の内容50％、討論への参加等の平常点50％。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　日本音楽史学
＜研究テーマ＞　日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
＜主要研究業績＞
①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現　資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）
②「「秘曲尽くし」再現―『文机談』に見える秘曲を聴く―」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013年）◇ 付録CD「「秘曲尽くし」再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：篳篥《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》
③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆フローラ、2009年）

【Outline (in English)】
Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic year 2026, we will also read sections from the '*Waka*' ('Japanese poetry'), and '*Kangen-kabu*' ('Music, song and dance') chapters of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their theses in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.
Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their theses, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.
Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class: 50% for active participation in class discussion.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 I

間宮　厚司

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語学の研究方法について学びます。この授業では、上代・中古・中世における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】
日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	上代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	上代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	上代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	上代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	中古文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	中古文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	中古文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	中古文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	中世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	中世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	中世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	中世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究テーマや課題について、先ずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】
『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】
春学期における発表とレポートを各50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
留学生の受講生が、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】
日本古典語学・日本語史
＜研究テーマ＞
『万葉集』や『おもろさうし』等の言語研究
＜主要研究業績＞
『おもろさうしの言語』（笠間書院、2005年）
『沖縄古語の深層[増補版]』（森話社、2014年）
『万葉異説[増補版]』（森話社、2021年）

【Outline (in English)】
This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.
Learning objectives of this class:
Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.
Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.
Acquire the necessary skill and knowledge for writing master's thesis.
Learning activities outside of classroom:
Students need to research about their study theme and subject via website such as CiNii and make sure if there is still room for research.
Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation before or after the class if needed.
As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.
Grading Criteria/Policies:
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Presentation (50%), Report (50%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

間宮　厚司

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語学の研究方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】
日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究テーマや課題について、先ずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】
『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】
秋学期における発表とレポートを各50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
留学生の受講生が、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】
日本古典語学・日本語史
＜研究テーマ＞
『万葉集』や『おもろさうし』等の言語研究
＜主要研究業績＞
『おもろさうしの言語』（笠間書院、2005年）
『沖縄古語の深層[増補版]』（森話社、2014年）
『万葉異説[増補版]』（森話社、2021年）

【Outline (in English)】
This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.
Learning objectives of this class:
Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.
Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.
Acquire the necessary skill and knowledge for writing master's thesis.
Learning activities outside of classroom:
Students need to research about their study theme and subject via website such as CiNii and make sure if there is still room for research.
Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation before or after the class if needed.
As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.
Grading Criteria/Policies:
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Presentation (50%), Report (50%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

川﨑　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
音声/音韻に関する論文・本を読み、発表することにより、理論についての理解を深め、問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる力を身につけることを目的とする。

【到達目標】
本授業では、特に音韻分野の第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
論文を読み、毎回全員で発表・議論する演習方式で行う。主に音声・音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。
授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	リサーチメソッド・授業プランの作成	課題論文リストの提示と概要の説明
3	音声言語習得研究	音声の第一言語習得と第二言語習得
4	第二言語習得の理論	音韻習得理論を取り上げ、概要を紹介する
5	SLA Phonology 論文発表（1）	SLA Phonology 論文発表と分析手法について
6	SLA Phonology 論文発表（2）	分析手法について・演習
7	研究計画発表1	修士2年生による研究テーマ発表
8	研究計画発表2	修士1年生による研究テーマ発表
9	エラーに関する研究	エラーのタイプについての分析
10	処理可能性理論（1）	処理可能性理論についての概要、理論の説明
11	処理可能性理論（2）	処理可能性理論に関する論文発表
12	履修者等による発表（1）	レビュー論文
13	履修者等による発表（2）	履修者等による論文のポスター発表（1）
14	履修者等による発表（3）	履修者等による論文のポスター発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で必要に応じて論文を指定する。

【参考書】
授業内でその都度、指定する。

【成績評価の方法と基準】
＜修士課程学生＞
授業での議論への参加：40%
授業内発表：40%
研究計画書：20%

【学生の意見等からの気づき】
学生の研究発表の時間を多くとりたいと考えている。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　音韻論、第二言語習得
＜研究テーマ＞　音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など
＜主要研究業績＞
川﨑貴子・田中邦佳「L 2英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)
川﨑貴子 「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)
Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Through reading Phonetics/Phonology papers, students will learn how to set their research theme and test their hypotheses.
Learning Objectives: This course aims to deepen the student's understanding of theories of SLA and research methodologies in the field and help them to find their research topics.
Learning activities outside the classroom: Students must read the assigned papers before class. Students are required to study for about 4 hours outside of the classroom.
Grading Criteria:
In-class participation: 40%
In-class presentation：40%
Research abstract：20%

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

川﨑　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の、特に音韻・音声習得の研究論文を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる理論、研究法を学ぶ。

【到達目標】
ー音韻論、及びSLAの音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法についての知識を身に付ける。
ー自らの研究計画を策定、研究を遂行し、論文の執筆に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などを学ぶ。
授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容の説明
2	修士２年生の研究発表（１）	研究の進捗状況発表（修士２年生）（１）
3	修士２年生の研究発表（２）	研究の進捗状況発表（修士２年生）（２）
4	修士１年生の研究発表（１）	研究の進捗状況の発表（修士１年生、および研修生）（１）
5	修士１年生の研究発表（２）	研究の進捗状況の発表（修士１年生、および研修生）（２）
6	論文購読ー母語音声の影響に関する論文	母語の目録のL2への影響（解説）
7	論文購読ー母語音声の影響(研究方法)	母語の目録のL2への影響（履修者等による発表）(1)
8	論文購読ー母語音声の影響（分析方法・結果記述）	母語の目録のL2への影響（履修者等による発表）(2)
9	論文購読ー音韻・語彙習得	語彙の特定と音韻処理ー（履修者等による発表）(1)
10	論文購読ー音韻・語彙習得（研究手法）	語彙の特定と音韻処理ー（履修者等による発表）(2)
11	論文購読ー音韻・語彙習得（分析）	語彙の特定と音韻処理ーデータ分析演習
12	修士１年生による修論計画発表	修士１年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表
13	修士２年生による修論発表	修士２年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】
必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
＜修士課程＞
授業発表....40%
授業内での発言・議論への貢献....40%
学期末論文・研究計画書....20%

【学生の意見等からの気づき】
引き続き理解を確認しつつ、授業を進めてまいりたいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　音韻論、第二言語習得
＜研究テーマ＞　音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など
＜主要研究業績＞
川﨑貴子・田中邦佳「L２英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)
川﨑貴子 「カタカナ代用による第２言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)
Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Through reading papers on phonological and phonetic acquisition, students will learn theories and research methods that will form the basis of their own papers.
Learning Objectives:
-To acquire knowledge of research methods in the field of second language acquisition and teaching, while reading basic literature in the field of phonology and SLA phonology and vocabulary.
-Students will be able to formulate their own research plan, conduct research, and produce a thesis.
Learning activities outside of classroom ： Students are required to read assigned papers and prepare for their presentations. Students are expected to study at least 4 hours outside of classroom.
Grading Criteria:
In-Class presentations....40%
In-Class participation....40%
Term paper....20%

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

福元　広二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
英語がどのようにして世界中で使用されるようになり、世界共通語となってきたかを解説します。また、語用論的な視点から英語史を学ぶことで、現代の英語に対してさらに理解を深めることを主な目的としています。

【到達目標】
英語史における語用論的分析について説明できるようになります。語用論について書かれた文献をきちんと正確に読めるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に関心のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。
　リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業内容の紹介
第2回	教科書　Chapter 1 歴史語用論の概要	pp.1-7
第3回	教科書　Chapter 1 歴史語用論の範囲	pp.8-12
第4回	教科書　Chapter 2 歴史語用論のデータ	pp.13-18
第5回	教科書　Chapter 2 歴史語用論の最近の傾向	pp.19-30
第6回	教科書　Chapter 3 歴史語用論の方法論	pp.31-43
第7回	教科書　Chapter 3 歴史語用論の応用	pp.44-52
第8回	教科書　Chapter 4 談話標識の分析	pp.54-63
第9回	教科書　Chapter 4 間投詞の分析	pp.64-72
第10回	教科書　Chapter 5 中英語の呼びかけ語	pp.73-79
第11回	教科書　Chapter 5 近代英語の呼びかけ語	pp.80-91
第12回	プレゼンテーション(1)	論文紹介（1）
第13回	プレゼンテーション(2)	論文紹介（2）
第14回	春学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に教科書を読んで、予習をしてください。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
（英文学専攻）Jucker Andreas and Irma Taavitainen (2013) English Historical Pragmatics. (Edinburgh University Press)

【参考書】
適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
平常点とレポートで総合的に評価します。（平常点60点、レポート40点）

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
英語学・英語史
＜研究テーマ＞
初期近代英語期の文法
＜主要研究業績＞
「第6章　Shakespeareの英語」
『英語教師のための英語史』
開拓社 (2018)

【Outline (in English)】
The purpose of this course is to introduce the major changes in English grammar from Old English to Present-day English. The goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand the history of the English language. Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
Final grades will be calculated according to the following process:
Mid-term report (40%) and in-class contribution (60%)

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
三条西実隆（1455～1537）の日記『実隆公記』の講読を中心とし、担当者の読解・考察についての報告を基に全員で議論する。中世史料の日本漢文を訓読する基礎的な能力を持つことを前提とし、中世後期の日記の内容を深く理解する力を養成する。それにより、当時の国家・社会・文化等について批判的に研究する方法を習得することを目的とする。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】
中世史料の日本漢文を正しく訓読した上で、語句を調べ、内容を正確に理解し、現代語訳することができる。所定の事項を満たしたレジュメを作成し、発表することができる。関連史料や先行研究を収集・読解・整理し、自分なりの論点を提示することができる。室町時代を中心に、日本中世史に関する事柄について、自身の見解を提示あるいは発言することができる。所定の条件を満たしたレポートを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『実隆公記』とは	履修のガイダンス
第2回	『実隆公記』講読（1）	読解・考察の報告と議論
第3回	『実隆公記』講読（2）	読解・考察の報告と議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『実隆公記』講読（3）	読解・考察の報告と議論
第6回	『実隆公記』講読（4）	読解・考察の報告と議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『実隆公記』講読（5）	読解・考察の報告と議論
第9回	『実隆公記』講読（6）	読解・考察の報告と議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『実隆公記』講読（7）	読解・考察の報告と議論
第12回	『実隆公記』講読（8）	読解・考察の報告と議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	戦国時代の貴族と京都	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
全員が事前に講読する部分の訓読文を作成する。担当者は担当部分を読解し、関係する論文や史料を収集・読解・整理し、発表レジュメを用意し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員に配布する。発表後、レジュメを修正し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員に配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『実隆公記』（史料纂集）
「学習支援システム」の「教材」から、講読する部分のコピー（ＰＤＦファイル）を配布する。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点５０%、学期末レポート点５０%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
議論が活発になるように努める。

【学生が準備すべき機器他】
「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードすること。また、「掲示場」に発表レジュメ等を掲示したり、ダウンロードしたりすること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞日中国際交流史・日本仏教史
＜主要研究業績＞『中世禅律仏教論』（山川出版社、2009年）・『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
三条西実隆（1455～1537）の日記『実隆公記』の講読を中心とし、担当者の読解・考察についての報告を基に全員で議論する。中世史料の日本漢文を訓読する基礎的な能力を持つことを前提とし、中世後期の日記の内容を深く理解する力を養成する。それにより、当時の国家・社会・文化等について批判的に研究する方法を習得することを目的とする。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】
中世史料の日本漢文を正しく訓読した上で、語句を調べ、内容を正確に理解し、現代語訳することができる。所定の事項を満たしたレジュメを作成し、発表することができる。関連史料や先行研究を収集・読解・整理し、自分なりの論点を提示することができる。室町時代を中心に、日本中世史に関する事柄について、自身の見解を提示あるいは発言することができる。所定の条件を満たしたレポートを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『実隆公記』とは	履修のガイダンス
第2回	『実隆公記』講読（1）	読解・考察の報告と議論
第3回	『実隆公記』講読（2）	読解・考察の報告と議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『実隆公記』講読（3）	読解・考察の報告と議論
第6回	『実隆公記』講読（4）	読解・考察の報告と議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『実隆公記』講読（5）	読解・考察の報告と議論
第9回	『実隆公記』講読（6）	読解・考察の報告と議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『実隆公記』講読（7）	読解・考察の報告と議論
第12回	『実隆公記』講読（8）	読解・考察の報告と議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	戦国時代の貴族と京都	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
全員が事前に講読する部分の訓読文を作成する。担当者は担当部分を読解し、関係する論文や史料を収集・読解・整理し、発表レジュメを用意し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員に配布する。発表後、レジュメを修正し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員に配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『実隆公記』（史料纂集）
「学習支援システム」の「教材」から、講読する部分のコピー（ＰＤＦファイル）を配布する。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点５０%、学期末レポート点５０%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
議論が活発になるように努める。

【学生が準備すべき機器他】
「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードすること。また、「掲示場」に発表レジュメ等を掲示したり、ダウンロードしたりすること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞日中国際交流史・日本仏教史
＜主要研究業績＞『中世禅律仏教論』（山川出版社、2009年）・『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
①研究論文の位置を理解することができる。
②史料から議論を立ち上げることができる。
③学会発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定、清水幾太郎『論文の書き方』について
第2回	研究発表（１）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（２）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（３）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（４）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（５）	学会発表をめざして
第7回	論文講読（１）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（２）	論文構成の方法
第9回	論文講読（３）	史料批判
第10回	論文講読（４）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（５）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（１）	今後の方針
第13回	研究計画発表（２）	史料採訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞都市論、記憶論
＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】
This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
論文を執筆することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックとする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（１）	研究史との格闘
第3回	研究発表（２）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（３）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（４）	表の効果的使用
第6回	研究発表（５）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（１）	分野の選定
第8回	論文講読（２）	表現力の問題
第9回	論文講読（３）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（４）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（５）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（１）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（２）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００％で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞都市論、記憶論
＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】
This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 I

甲斐　智大

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
修士論文の執筆に向けて社会経済地理学の論文執筆方法を学びます。

【到達目標】
社会経済地理学の論文構成を理解する
社会経済地理学の研究計画を作成し、調査計画を検討する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
テキストとその元となった論文を輪読し、当該論文の調査計画書を再現する。
そのうえで、自身の研究計画書を作成し、調査計画について検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	地理学の論文の読み方
第2回	第１章	都市の地域調査についての報告とディスカッション
第3回	第２章	農業の地域調査についての報告とディスカッション
第4回	第３章	漁業の地域調査についての報告とディスカッション
第5回	第４章	工業の地域調査についての報告とディスカッション
第6回	第５章	観光の地域調査についての報告とディスカッション
第7回	第６章	労働の地域調査についての報告とディスカッション
第8回	第７章	文化・社会の地域調査についての報告とディスカッション
第9回	第８章	コミュニティの地域調査についての報告とディスカッション
第10回	第９章	ジェンダーをめぐる地域調査についての報告とディスカッション
第11回	第１０章	エスニシティをめぐる地域調査についての報告とディスカッション
第12回	問と研究目的の作成	受講生の研究テーマに合わせて問と研究目的についてディスカッションを行う
第13回	調査結果と考察	受講生の研究テーマに合わせて予想される調査結果と考察の視点についてディスカッションを行う
第14回	研究計画・調査計画の報告	受講生の研究計画についてディスカッションを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『地域調査のはじめかた 分野編』 2026年　3月出版予定

【参考書】
特に指定しない

【成績評価の方法と基準】
報告・ディスカッション　50％
研究計画　50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【その他の重要事項】
受講生の学年や修論の進捗状況によって授業内容を変更する場合がある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞社会経済地理学
＜研究テーマ＞地域労働市場と地域政策に関する地理学的研究
＜主要研究業績＞
・特定地域づくり事業協同組合による労働力確保のメカニズム 地理学評論 98(6) 339-362 2025年
・東京都における保育所の経営主体からみた保育労働市場の特性-新卒保育士の採用を中心に-
地理学評論 93(2) 2020年
・「ヤンキー」であること／「ヤンキー」を制御すること――福岡県筑後地区における不良文化と地方都市 2024年日本地理学会秋季学術大会 「都市地理学研究グループ」報告（甲斐智大 林凌）

【Outline (in English)】
This course teaches methods of academic writing in socio-economic geography in preparation for writing a master's thesis.
The standard preparation and review time for this course is 4 hours each. Grading will be based on the following criteria: report and discussion: 50%, research proposal: 50%.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

甲斐　智大

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
修士論文の執筆に向けて社会経済地理学の論文執筆方法を学びます。

【到達目標】
既存研究を整理し、研究の位置付けを明確にする。
調査結果と既存研究をもとに、研究結果の考察を試みる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生自身の研究に関する文献をもとに、研究目的の位置付けについての報告とディスカッションを行う。さらに、既存研究を参考にしながら、受講生の調査結果をもとにした考察を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	査読論文における序章の意味
第2回	序章の作成	関連研究の報告
第3回	序章の作成	関連研究の課題の検討
第4回	序章の作成	受講生の研究の社会的意義の導出
第5回	調査結果の整理	夏までに実施した調査結果の報告
第6回	考察の方向性についての検討	既存研究を参照し考察の方向性を報告する
第7回	実施した考察結果についての検討	自身の調査結果に基づく考察の結果を報告する
第8回	考察から導出される結論についての検討	導出された結論について報告する
第9回	アカデミックライティングについて	提出された原稿についての検討を行う（1章）
第10回	アカデミックライティングについて	提出された原稿についての再検討を行う（2章）
第11回	アカデミックライティングについて	提出された原稿についての再検討を行う（3章）
第12回	アカデミックライティングについて	提出された原稿についての再検討を行う（4章）
第13回	アカデミックライティングについて	提出された原稿についての再検討を行う（5章）
第14回	次年度の研究計画の報告	作成された原稿を踏まえて、次年度の研究計画について検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない

【参考書】
特に指定しない

【成績評価の方法と基準】
報告・ディスカッション　50％
研究論文の完成度　50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【その他の重要事項】
受講生の学年や修論の進捗状況によって授業内容を変更する場合がある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞社会経済地理学
＜研究テーマ＞地域労働市場と地域政策に関する地理学的研究
＜主要研究業績＞
・特定地域づくり事業協同組合による労働力確保のメカニズム 地理学評論 98(6) 339-362 2025年
・東京都における保育所の経営主体からみた保育労働市場の特性-新卒保育士の採用を中心に-
地理学評論 93(2) 2020年
・「ヤンキー」であること／「ヤンキー」を制御すること――福岡県筑後地区における不良文化と地方都市 2024年日本地理学会秋季学術大会 「都市地理学研究グループ」報告（甲斐智大 林凌）

【Outline (in English)】
This course teaches methods of academic writing in socio-economic geography in preparation for writing a master's thesis.
The standard preparation and review time for this course is 4 hours each. Grading will be based on the following criteria: report and discussion: 50%, quality of research paper: 50%.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

小原　丈明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では，受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し，それら報告に基づいて討論をすることで，各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また，受講生自身の研究を進めるだけでなく，他者の報告を聞き，討論を行うことを通じて，社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】
本授業を通じて，受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに，社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また，適宜，各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し，その課題について検討を行います。
また，本授業は演習（ゼミナール）形式ですので，課題等のフィードバックは適宜行います。
なお，今年度，本授業は対面形式で行いますが，場合によってはZoomによるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミガイダンス	ゼミ概要の説明／方針の決定
第2回	研究テーマの発表	全受講生による発表
第3回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第7回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第11回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第14回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は，各回4時間を標準とします。
しかし，自らの研究課題に対しての発表準備をしっかり行うことが求められ，また，適宜，授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので，授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】
テキストは使用しません。

【参考書】
各担当者の発表や討論に関連する文献については，適宜，授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
発表内容：50％，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり，問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また，討論については，疑問点・問題点を整理しつつ，論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】
討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】
秋学期開講の「社会経済地理学演習Ⅱ」／「国際日本学演習Ⅱ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞
都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline (in English)】
The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make a presentation and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.
Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 4 hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50％).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

小原　丈明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では，受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し，それら報告に基づいて討論をすることで，各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また，受講生自身の研究を進めるだけでなく，他者の報告を聞き，討論を行うことを通じて，社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】
本授業を通じて，受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに，社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また，適宜，各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し，その課題について検討を行います。
また，本授業は演習（ゼミナール）形式ですので，課題等のフィードバックは適宜行います。
なお，今年度，本授業は基本的には対面形式で行いますが，場合によっては，Zoomによるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの発表	全受講生による研究の進捗状況の報告
第2回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第3回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第7回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第11回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答
第14回	総合討論	まとめ／包括的な討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は，各回4時間を標準とします。
しかし，自らの研究課題に対しての発表準備をしっかり行うことが求められ，また，適宜，授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので，授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】
テキストは使用しません。

【参考書】
各担当者の発表や討論に関連する文献については，適宜，授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】
発表内容：50％，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり，問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また，討論については，疑問点・問題点を整理しつつ，論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】
討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】
春学期開講の「社会経済地理学演習Ⅰ」／「国際日本学演習Ⅰ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞
都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline (in English)】
The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make a presentation and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.
Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 4 hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50％).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

佐々木　達

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
修士論文の作成をめざします。

【到達目標】
修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	修士論文のテーマ(1)	テーマの検討と参考文献の紹介
第3回	修士論文のテーマ(2)	テーマの設定と研究の位置づけ
第4回	研究目的	修士論文研究目的の検討
第5回	修士論文章構成(1)	章構成と関連文献の提示
第6回	修士論文章構成(2)	章・節・項の設定
第7回	実態調査(1)	調査内容の検討
第8回	実態調査(2)	調査計画の検討
第9回	統計資料(1)	統計資料の分析
第10回	統計資料(2)	統計資料の整理
第11回	図表の作成	図表の作成計画
第12回	研究構想の再検討	研究構想の再検討、修正
第13回	中間報告	中間報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　テーマの設定や問題意識に醸成は，広く深く文献を読むことから始まります。その研究は社会にとってどんな役に立つのか？ という問いかけを持ってください。そして，統計や資料の整理は，コツコツとやることが肝心です。少なくとも準備・復習時間は演習（2単位）では1回につき4時間以上が必要となります。

【テキスト（教科書）】
特になし

【参考書】
荒木一視ほか編(2021)『食と農のフィールドワーク入門』，昭和堂

【成績評価の方法と基準】
発表・討論50％，修正論文の完成50％で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】
特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
経済地理学，農業地理学，地域経済論
＜研究テーマ＞
東北地方における水田農業の構造再編
日本経済の再生産構造と地域問題

【Outline (in English)】
【Course outline】 We aim to create a master's thesis based on your research interests.
【Learning Objectives】 Completion and submission of master's thesis
【Learning activities outside of classroom】 Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy)】 : Final grade will be calculated according to the following process Report and Discussion (50%), submission of master's thesis(50%)

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

佐々木　達

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
修士論文の執筆・完成を目指すために，研究内容を徹底的に鍛え上げます。

【到達目標】
　修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	調査結果報告	夏季休暇時の調査結果報告
第3回	調査結果の吟味	調査結果から論点を洗い出す
第4回	研究目的	研究目的の再確認
第5回	章構成の再検討	章構成から論理展開を考える
第6回	統計資料	統計分析の結果報告
第7回	補足調査	補足調査の必要性の再確認
第8回	章構成の最終決定	章構成の確定
第9回	図表の完成	完成図表の確認
第10回	参考・引用文献	参考・引用文献の最終確認
第11回	完成原稿の予定枚数	完成原稿予定枚数の確認
第12回	結論と要約	論文の結論の発表
第13回	最終報告	最終報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分の論文は何を明らかにするのか，どのような順序だてや組み立てから説明するのか，結論として何を主張できるのかを意識して作成にあたってください。

【テキスト（教科書）】
　特になし

【参考書】
荒木一視ほか編著（2021）『食と農のフィールドワーク入門』，昭和堂

【成績評価の方法と基準】
発表と議論(50％)、修士論文の提出(50％)で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】
　特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
経済地理学
＜研究テーマ＞
日本農業の地域構造
東北地方における水田農業の構造再編

【Outline (in English)】
【Course outline】 The goals of this seminar is completion of master's thesis
【Learning Objectives】Completing a high-level master's thesis
【Learning activities outside of classroom】 Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】 Final grade will be calculated according to the following process Report and Discussion (50%), submission of master's thesis(50%)

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習Ⅰ

村田　陽平

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、文化地理学に包含される論題を用意した受講生が、修士論文を完成させるための、①テーマの設定とそれを練り上げる作業、②練り上げたテーマに沿った調査研究の実施状況を報告し、他の受講生と議論を交わす中間発表、③最終的な論文完成に向かっての論点の整理、といった過程を進めるためのものである。

【到達目標】
春学期に行なわれるこの授業では、上記概要の①および②を中心に進め、執筆する修士論文の概略を固めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
論題を抱えた受講生の発表と、それに対する討論を中心にして、授業を進めてゆく。課題等の提出・フィードバックは対面で行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業方針の説明と各受講生の修士論文作成スケジュールの確認
第2回	論題の表明	全受講生による方針の発表
第3回	論題の確立	受講生相互で議論し、論題を確定させる
第4回	研究内容の報告①	各受講生の発表と質疑応答①
第5回	研究内容の報告②	各受講生の発表と質疑応②
第6回	研究内容の報告③	各受講生の発表と質疑応③
第7回	研究内容の報告④	各受講生の発表と質疑応④
第8回	研究内容の報告⑤	各受講生の発表と質疑応⑤
第9回	研究内容の報告⑥	各受講生の発表と質疑応⑥
第10回	研究内容の報告⑦	各受講生の発表と質疑応⑦
第11回	研究内容の報告⑧	各受講生の発表と質疑応⑧
第12回	研究内容の報告⑨	各受講生の発表と質疑応⑨
第13回	研究内容の報告⑩	各受講生の発表と質疑応⑩
第14回	全体的整理	全体的整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
各自の発表時に与えられた指摘やコメントに対して、誠実かつ主体的に対処し、次回の発表に備えること。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
さまざまな「論文の書き方」についてのマニュアルなどを適宜活用してほしい。

【成績評価の方法と基準】
口頭の発表時の準備状況と問題設定(50%)、授業時の議論の内容(50%)を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化地理学
＜研究テーマ＞健康の地理学、感情の地理学、空間の男性学
＜主要研究業績＞
村田陽平（2009）『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会
村田陽平（2012）『受動喫煙の環境学：健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社

【Outline (in English)】
This seminar is on Human Geography, especially on Social and Cultural Geography. The aims and goals of this seminar are to comprehend and present and discuss about contents of selected texts . In addition, for students who must write a graduation thesis can get some practical supports. Grading will be decided based on in-class contribution.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Judgment and evaluation will be made by taking into consideration the state of preparation and problem setting at the time of oral presentation (50%), and the content of discussion during class (50%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

村田　陽平

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、文化地理学に包含される論題を用意した受講生が、修士論文を完成させるための、①テーマの設定とそれを練り上げる作業、②練り上げたテーマに沿った調査研究の実施状況を報告し、他の受講生と議論を交わす中間発表、③最終的な論文完成に向かっての論点の整理、といった過程を進めるためのものである。

【到達目標】
秋学期に行なわれるこの授業では、上記概要の②および③を中心に進め、執筆する修士論文の概略を固めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
論題を抱えた受講生の発表と、それに対する討論を中心にして、授業を進めてゆく。課題等の提出・フィードバックは対面で行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の説明と各受講生の論文作成スケジュールの確認
第2回	研究内容の報告①	受講生の発表と質疑①
第3回	研究内容の報告②	受講生の発表と質疑②
第4回	研究内容の報告③	受講生の発表と質疑③
第5回	研究内容の報告④	受講生の発表と質疑④
第6回	研究内容の報告⑤	受講生の発表と質疑⑤
第7回	研究内容の報告⑥	受講生の発表と質疑⑥
第8回	研究内容の報告⑦	受講生の発表と質疑⑦
第9回	研究内容の報告⑧	受講生の発表と質疑⑧
第10回	研究内容の報告⑨	受講生の発表と質疑⑨
第11回	研究内容の報告⑩	受講生の発表と質疑⑩
第12回	研究内容の報告⑪	受講生の発表と質疑⑪
第13回	最終執筆指導①	論文内容の相互チェックと形式的整理ー全体的検討
第14回	最終執筆指導②	論文内容の相互チェックと形式的整理ー最終的整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
各自の発表時に与えられた指摘やコメントに対して、誠実かつ主体的に対処し、次回の発表に備えること。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
さまざまな「論文作成のためのマニュアル」類を適宜活用してほしい。ただし、マニュアルはそれをなぞるためにあるのではなく、精神をくみ取ることが大切である。

【成績評価の方法と基準】
発表のしかたとその内容(50%)および質疑応答への内容(50%)とを評価対象とする。自分の関心を他者に的確に説明し、その学問的意義を主張できることが重要である。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化地理学
＜研究テーマ＞健康の地理学、感情の地理学、空間の男性学
＜主要研究業績＞
村田陽平（2009）『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会
村田陽平（2012）『受動喫煙の環境学：健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社

【Outline (in English)】
This seminar is on Human Geography, especially on Social and Cultural Geography. The aims and goals of this seminar are to comprehend and present and discuss about contents of selected texts . In addition, for students who must write a graduation thesis can get some practical supports. Grading will be decided based on in-class contribution.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Judgment and evaluation will be made by taking into consideration the state of preparation and problem setting at the time of oral presentation (50%), and the content of discussion during class (50%).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 I

髙田　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業で゛は、グローバルな視点から、日本社会の「成り立ち」や、現在の「変化」をとらえる視座をやしない、それらを研究をしていくためのアプ゜ローチや方法論についてセミナー形式で学ぶ゛。グローバ゛ルな視点とは、他国・他地域との「比較」、あるいは他国との「トランスナショナるなつなが゛り」から日本社会を調査、分析するもので゛ある。こうした視点を念頭に置きなが゛ら、本授業て゛は、特に以下の課題をカバ゛ーする: ①テーマ と問いの設定、②先行研究調査、③研究計画、④理論とデ゛ータの関係。また、広く質的調査の方法を習得し、受講者の学位論文のテーマを明確化、発展させていく。

【到達目標】
受講者は、以下の知識の習得を通し゛てオリジ゛ナルな研究を計画し、学位論文を執筆で゛きるようになる。
- 日本の戦後・現代の社会と思想を調査、研究するための視座と方法を養う。
-「比較」と「トランスナショナル」のアプローチを学ぶ。
- 日本社会の諸問題についての理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、T 卒業論文/卒業研究/卒業制作 /Thesis

【授業の進め方と方法】
本授業は、セミナー形式で゛実施する。講義、文献講読、研究報告をベ゛ースに討論をおこなう。参加者自身の経験、文化的な背景を織り交ぜ゛なが゛ら日本の社会や思想について論じ゛、受講者たちか゛互いに学び゛合う場を形成する。従って、報告発表へのフィート゛バ゛ックについても、主にデ゛ィスカッションの場において実施する。その他、個別にフィート゛バ゛ックが゛必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダ゛クション	授業の進め方、研究について
第2回	研究計画 I：問題意識	なぜ研究するのか？
第3回	研究計画 II：問いの設定	良い問い、悪い問い
第4回	研究計画 III：先行研究整理	先行研究レビューの方法と必要性
第5回	研究計画 IV：理論	理論とは何か？ 理論と実証の関係性
第6回	研究計画 V：方法論	比較の方法・トランスナショナルな方法
第7回	質的調査を学ぶ I：質的調査とは何か？	質的調査の特徴と量的調査との違い
第8回	質的調査を学ぶ II：エスノグラフィー	参与観察の基礎を学ぶ
第9回	質的調査を学ぶ III：インタビュー	誰にどのように話を聞くか
第10回	質的調査を学ぶ IV：文献調査	理論・思想研究の調査方法
第11回	質的調査を学ぶ V：資料調査	歴史（社会学）の調査方法
第12回	論文指導 I：進展	研究の進展を報告
第13回	論文指導 II：中間報告	直面する課題の相談
第14回	論文指導 III：最終	研究計画書の仕上げを相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポ゜イントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 受講者は、自身の関心テーマを探し、掘り下げ゛、それについてまとめ、報告する準備をおこなう。
- 本授業の準備(予習)および゛復習時間は、各 2 時間を標準とするが゛、文献および゛研究報告をする週には、さらに 2 時間程度の準備の時間が゛必要な場合が゛ある。

【テキスト（教科書）】
上野千鶴子、2018年『情報生産者になる』筑摩書房
質的データ分析のテキストについては授業初回に指定する。

【参考書】
- Robert, Alford, 1998. The Craft of Inquiry: Theories, Methods, Evidence, Oxford University Press.
- Ragin, Charles. 2010. Constructing Social Research: The Unity and Diversity of Method. Sage.

【成績評価の方法と基準】
- 授業参加・発言: 20%
- 文献・個人研究プ゜レセ゛ンテーション: 40%
- 最終レポ゜ート: 40%

【学生の意見等からの気づき】
各々の研究へのフィードバックの機会を十分に設ける。

【学生が準備すべき機器他】
パーソナル・コンピューター

【その他の重要事項】
授業計画についての詳細は初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】
< 専門領域>
政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学
< 研究テーマ>
- 日本の市民社会と社会運動
- トランスナショナリズムと日本の社会変容
< 近年の主要著書>
-「「第一世界」と「第三世界」のはざまで ―日本の60 年代における「第三世界論」との出会いと戸惑い―」『国際日本学』第21号、2024年、27-58頁。
-「トランスナショナルな日本研究に向けて」『国際日本学』第20号、2023年、21-45頁。
-「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 ―誰に向けて、どのように日本を語るか ―」『国際日本学』第 19 号、2022年、27-60 頁。
-「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法 ―」『国際日本学』第 18 号、2021 年、3-36 頁。
- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarno□ci, 2020, pp. 137 - 155.
- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.
- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture , 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor &Francis.

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【Outline (in English)】
[Learning Objectives]
In this course, we will learn various approaches and methods for understanding the development and changes in Japanese society from a global perspective. A global perspective means researching and analyzing Japanese society through comparison with other countries and regions, and exploring transnational connections and linkages between Japan and foreign countries. The course will particularly discuss the following topics for social research - finding a research topic, literature reviews, planning research, and the relationship between theory and data. Also, we will learn different methods for qualitative research and explore and deepen students' dissertation topics.
[Learning activities outside of the classroom]
Students are required to read assinged text in advance and prepare for discussion.
The presenter needs to carefully read the texts and prepare slides that include the main argument of each text and questions to discuss during class.
Students are required to develop their research topic and prepare to present their progress to the class.
Generally, students need about two hours of advance study to prepare for the class. However, you will need at least two more hours when you are assigned to present.
[Grading Criteria /Policy]
Class Participation and Discussion: 20%
Presentation: 30%
Final Report: 50%

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

髙田　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業で゛は、グ゛ローバ゛ルな視点から、日本社会の「成り立ち」や、現在の「変化」をとらえる視座をやしない、それらを研究をしていくためのアプ゜ローチや方法論について学ぶ゛。グ゛ローバ゛ルな視点とは、他国・他地域との「比較」、あるいは「トランスナショナルなつなが゛り」 から日本社会を調査、分析するもので゛ある。こうした視点を念頭に置きなが゛ら、本授業で゛は、特に以下の課題をカバ゛ーする: 1デ゛ータ収集、2質的デ゛ータ分析、3アウトプ゜ット。また、質的データ分析の方法を広く学び、各人の学位論文プロジェクトの進展を図る。

【到達目標】
受講者は、以下の知識の習得を通じ゛てオリジ゛ナルな研究を計画し、学位論文を執筆で゛きるようになる。
- 日本の戦後・現代の社会と思想を調査、研究するための質的データ分析について学ぶ。
-「比較」と「トランスナショナル」のアプローチを学ぶ゛。
- 日本社会の諸問題についての理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、T 卒業論文/卒業研究/卒業制作 /Thesis

【授業の進め方と方法】
本授業は、セミナー形式で゛実施する。講義、文献講読、研究報告をベ゛ースに討論をおこなう。参加者自身の経験、文化的な背景を織り交ぜ゛なが゛ら日本の社会や思想について論じ゛、受講者たちか゛互いに学び゛合う場を形成する。従って、報告発表へのフィート゛バ゛ックについても、主にデ゛ィスカッションの場において実施する。その他、個別にフィート゛バ゛ックが゛必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方
第2回	研究実践 I：データ分析	「何を調べたのか」についての報告
第3回	研究実践 II：構成	論文の構成をどのように組み立てるか
第4回	研究実践 III：書き方	論文の執筆実践
第5回	研究実践 IV：校正と修正	論文の仕上げ方
第6回	研究実践 IV：アウトプット	プレゼンテーション技法
第7回	データ分析 I：会話分析	インタビュー調査の分析
第8回	データ分析 II：言説分析	ディスコースの分析方法
第9回	データ分析 III：ドキュメント分析	資料分析
第10回	データ分析 IV：比較分析	比較を通じて明らかにする
第11回	データ分析 V：データと理論	理論とデータの再統合
第12回	論文指導 I：進展	研究の進展を報告
第13回	論文指導 II：中間報告	直面する課題の相談
第14回	論文指導 III：最終	論文の仕上げを相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポ゛イントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 受講者は、自身の関心テーマを探し、掘り下げ゛、それについてまとめ、報告する準備をおこなう。
- 本授業の準備(予習)および゛復習時間は、各 2 時間を標準とするが゛、文献および゛研究報告をする週には、さらに 2 時間程度の準備の時間が゛必要な場合が゛ある。

【テキスト（教科書）】
- 上野千鶴子、2018年『情報生産者になる』筑摩書房
質的データ分析のテキストについては授業初回に指定する。

【参考書】
- Robert, Alford, 1998. The Craft of Inquiry: Theories, Methods, Evidence, Oxford University Press.
- Ragin, Charles. 2010. Constructing Social Research: The Unity and Diversity of Method. Sage.

【成績評価の方法と基準】
- 授業参加・発言: 20%
- 文献・個人研究プ゜レゼ゛ンテーション: 40%
- 最終レポ゜ート: 40%

【学生の意見等からの気づき】
各々の研究へのフィードバックの機会を十分に設ける。

【学生が準備すべき機器他】
パーソナル・コンピュータ

【その他の重要事項】
授業計画についての詳細は初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】
< 専門領域>
政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学
< 研究テーマ>
- 日本の市民社会と社会運動
- トランスナショナリズムと日本の社会変容
< 近年の主要著書>
-「「第一世界」と「第三世界」のはざまで ―日本の60 年代における「第三世界論」との出会いと戸惑い―」『国際日本学』第21号、2024年、27-58頁。
-「トランスナショナルな日本研究に向けて」『国際日本学』第20号、2023年、21-45頁。
-「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 ―誰に向けて、どのように日本を語るか ―」『国際日本学』第 19 号、2022年、27-60 頁。
-「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法 ―」『国際日本学』第 18 号、2021 年、3-36 頁。
- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarno☒ci, 2020, pp. 137 - 155.
- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.
- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture , 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor &Francis.

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【Outline (in English)】
[Learning Objectives]
In this course, we will learn various approaches and methods for understanding the development and changes in Japanese society from a global perspective. A global perspective means researching and analyzing Japanese society through comparison with other countries and regions, and exploring transnational connections and linkages between Japan and foreign countries. The course will particularly discuss the following topics for social research - finding a research topic, literature reviews, planning research, and the relationship between theory and data. Also, we will learn different methods for qualitative research and explore and deepen students' dissertation topics.
[Learning activities outside of the classroom]
Students are required to read assinged text in advance and prepare for discussion.
The presenter needs to carefully read the texts and prepare slides that include the main argument of each text and questions to discuss during class.
Students are required to develop their research topic and prepare to present their progress to the class.
Generally, students need about two hours of advance study to prepare for the class. However, you will need at least two more hours when you are assigned to present.
[Grading Criteria /Policy]
Class Participation and Discussion: 20%
Presentation: 30%
Final Report: 50%

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 I

波戸岡　景太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、日本文化の多様な表象を批判的に理解することを目指します。メディア・コンテンツやテクストを精査し、批評的なエッセイを読み、さらにはクラスでのディスカッションを実施することによって、国際的な文脈における現代日本文化の姿を理解していきます。

【到達目標】
・現代日本のさまざまなコンテンツの世界的受容について深く学ぶ。
・現代日本のコンテンツを、批評理論を用いて解釈できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式です。履修者は各自の担当章の要約と、関連する文学作品の分析を行います。参加者と教員による各発表へのフィードバックの後、クラス全体でディスカッションを実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講者の自己紹介、使用する教材の説明、授業の進行方法の確認など。
第2回	アニメーション前史	教科書序章の内容についての分析・報告
第3回	1910-30年代のアニメーション	教科書第1章の内容についての分析・報告
第4回	1940年代のアニメーション	教科書第2章の内容についての分析・報告
第5回	1950年代のアニメーション	教科書第3章の内容についての分析・報告
第6回	1960年代のアニメーション	教科書第4章の内容についての分析・報告
第7回	1970年代のアニメーション	教科書第5章の内容についての分析・報告
第8回	1970-80年代のアニメーション	教科書第6章の内容についての分析・報告
第9回	1980年代のアニメーション	教科書第7章の内容についての分析・報告
第10回	1990年代のアニメーション	教科書第8章の内容についての分析・報告
第11回	2000年代のアニメーション	教科書第9章の内容についての分析・報告
第12回	2010年代のアニメーション	教科書第10章の内容についての分析・報告
第13回	2020年代のアニメーション	教科書終章の内容についての分析・報告
第14回	まとめ／期末試験	コンテンツ分析から明らかになった現代日本の意識史について筆記試験を実施する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。授業内で示される課題対応（特に自分の担当回の前にはしっかりとしたプレゼンテーション計画を立てること）を実施してください。

【テキスト（教科書）】
津堅信之『日本アニメ史：手塚治虫、宮崎駿、庵野秀明、新海誠らの100年』（中公新書、2022年）

【参考書】
波戸岡景太『コンテンツ批評に未来はあるか』（水声社、2011年）
―『ラノベのなかの現代日本：ポップ／ぼっち／ノスタルジア』（講談社新書、2013年）

【成績評価の方法と基準】
・平常点（担当章のプレゼンテーション、他の履修者とのディスカッションへの参加度合いなど）：70％
・期末試験：30％
以上を合計し60％以上を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
サブカルチャーを批評的に論じる方法を修得したいという希望にこたえられるような書籍を教科書に選定しました。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
アメリカ文学、ポピュラーカルチャー、日米比較文化
＜研究テーマ＞
現代アメリカ文学・文化における動物表象、アダプテーション理論を応用したポピュラーカルチャーの分析
＜主要研究業績＞
『スーザン・ソンタグ：「脆さ」にあらがう思想』（集英社新書、2023年）
Thomas Pynchon's Animal Tales: Fables for Ecocriticism（Lexington Books、2022）

【Outline (in English)】
This course aims to understand the diversity of representations of Japanese culture critically. Learning how to do this requires that you examine media content and texts closely and read critical essays on them with the guidance of the lecturer, as well as through discussions with your classmates.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.
Grading shall be as follows:
1) Class presentation (70%)
2) Final exam (30%)

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

波戸岡　景太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、日本文化の多様な表象を批判的に理解することを目指します。メディア・コンテンツやテクストを精査し、批評的なエッセイを読み、さらにはクラスでのディスカッションを実施することによって、国際的な文脈における現代日本文化の姿を理解していきます。

【到達目標】
・現代日本のさまざまなコンテンツの世界的受容について深く学ぶ。
・現代日本のコンテンツを、批評理論を用いて解釈できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式です。履修者は各自の担当章の要約と、関連する文学作品の分析を行います。参加者と教員による各発表へのフィードバックの後、クラス全体でディスカッションを実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講者の自己紹介、使用する教材の説明、授業の進行方法の確認など。
第2回	「セカイ系論の前提を振り返る」	教科書第1部（1-1）の内容についての分析・報告
第3回	「セカイ系定義の再検討」「セカイ系と〈セカイ系〉」	教科書第1部（1-2,3）の内容についての分析・報告
第4回	「文芸運動としての初期セカイ系」	教科書第1部（2-1）の内容についての分析・報告
第5回	「セカイ系をめぐる論争」「セカイ系ブームの終息」	教科書第1部（2-2,3）の内容についての分析・報告
第6回	「ゼロ年代セカイ系ブームの総括」	教科書第1部（3-1）の内容についての分析・報告
第7回	「ポスト3.11と（しての）セカイ系」「社会化と音楽化」	教科書第1部（3-2,3）の内容についての分析・報告
第8回	「セカイ系とゼロ年代の文学」	教科書第2部（4-1）の内容についての分析・報告
第9回	「日本近代文学の成立とセカイ系」「戦後文学とセカイ系」	教科書第2部（4-2,3）の内容についての分析・報告
第10回	「セカイ系と現代日本映画」	教科書第2部（5-1）の内容についての分析・報告
第11回	「風景の系譜」	教科書第2部（5-2）の内容についての分析・報告
第12回	「内在化するセカイ系」	教科書第2部（6-1）の内容についての分析・報告
第13回	「推しと（しての）ポスト・セカイ系」	教科書第2部（6-2）の内容についての分析・報告
第14回	まとめ／期末試験	コンテンツ分析から明らかになった現代日本の意識史について筆記試験を実施する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。授業内で示される課題対応（特に自分の担当回の前にはしっかりとしたプレゼンテーション計画を立てること）を実施してください。

【テキスト（教科書）】
渡邉大輔『セカイ系入門』（星海社新書、2025年）

【参考書】
波戸岡景太『コンテンツ批評に未来はあるか』（水声社、2011年）
―『ラノベのなかの現代日本：ポップ／ぼっち／ノスタルジア』（講談社新書、2013年）

【成績評価の方法と基準】
・平常点（担当章のプレゼンテーション、他の履修者とのディスカッションへの参加度合いなど）：70％
・期末試験：30％
以上を合計し60％以上を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
サブカルチャーを批評的に論じる方法を修得したいという希望にこたえられるような書籍を教科書に選定しました。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
アメリカ文学、ポピュラーカルチャー、日米比較文化
＜研究テーマ＞
現代アメリカ文学・文化における動物表象、アダプテーション理論を応用したポピュラーカルチャーの分析
＜主要研究業績＞
『スーザン・ソンタグ：「脆さ」にあらがう思想』（集英社新書、2023年）
Thomas Pynchon's Animal Tales: Fables for Ecocriticism（Lexington Books、2022）

【Outline (in English)】
This course aims to understand the diversity of representations of Japanese culture critically. Learning how to do this requires that you examine media content and texts closely and read critical essays on them with the guidance of the lecturer, as well as through discussions with your classmates.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.
Grading shall be as follows:
1) Class presentation (70%)
2) Final exam (30%)

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 I

石川　潔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アスペクトに関する第２言語習得研究
＜講義題目＞アスペクトに関する第２言語習得研究

【到達目標】
実験研究の技法と報告の仕方、およびアスペクトの諸理論とその習得の先行研究の入門的知識を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
文献の輪読と講義を組み合わせる予定です。
発表に対してコメントを返します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業内容とやり方の説明
第2回	multidimensional scaling	基本的な考え方および問題点
第3回	アスペクトの実時間処理の文献１	問いの設定
第4回	アスペクトの実時間処理の文献２	実験１など
第5回	アスペクトの実時間処理の文献３	全体の考察
第6回	英語の完了形と日本語の「ている」	テンスなのか、アスペクトなのか（特に perfective vs. imperfective や Reichenbach 理論との関連において）
第7回	習得についてのアスペクト仮説１	アスペクト仮説の文献輪読１
第8回	習得についてのアスペクト仮説２	アスペクト仮説の文献輪読２
第9回	習得についてのアスペクト仮説３	アスペクト仮説の文献輪読３
第10回	Vendler 分類についての再考	Whether the classification should be seen in terms of lexical items or in terms of compositional phrasal semantics
第11回	日本語のアスペクトの分析１	先行研究のまとめの文献の輪読１
第12回	日本語のアスペクトの分析２	先行研究のまとめの文献の輪読２
第13回	日本語のアスペクトの分析３	先行研究のまとめの文献の輪読３
第14回	まとめ	今後の研究に向けての指針の議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
指定された文献を読んで発表の準備をしてください。
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で適宜、指示します。

【参考書】
授業にて適宜、指示。

【成績評価の方法と基準】
授業での議論への参加：50％
授業内発表：50％

【学生の意見等からの気づき】
N/A。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）
＜研究テーマ＞音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係
＜主要研究業績＞http://www.i.hosei.ac.jp/ kiyoshi/research.html を参照。

【Outline (in English)】
（Course outline）Introduction to L2 research on aspect
（Learning Objectives）To gain (1) very introductory skills for designing and reporting an experimental study, and (2)introductory knowledge of theories of aspect as well as past research on its acqusition.
（Learning activities outside of classroom）Preparation for presentations in class by working through assigned readingss.
（Grading Criteria /Policy）Participation (50%), presentations (50 %).

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学演習 II

石川　潔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
外国語教育や音声学は昔から実験科学分野だが、近年は統語論研究においても実験研究への志向が見られる。しかし、実験計画法や（実験データの処理のための）統計学は、日本の言語学教育の一部になっているとは言いがたい。よって、教育・音声・統語解析・理論言語学を専門とする皆様のために、実験データ分析の中級レベルの導入を行いたい。
＜講義題目＞心理言語学データの分析法（中級編）

【到達目標】
本来このような大学院科目は、履修者のニーズに応じて内容自体を変えるべきであり、具体的に何を目指すかは履修者の希望と照らし合わせて決定する。しかし今回は、履修者ニーズがある読めているため、混合効果一般化線形モデルの入門とする。到達目標は以下の通り：
・正規分布しないデータ（特定の選択肢の「選択率」やコーパスでのカウント数など）を一般化混合モデルで分析できるようになること。
・伝統的な分散分析では扱えない、実験参加者に加えて言語刺激についても一般化が必要になる通常の心理言語学実験のデータを、混合効果モデルで分析できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
以下の授業計画は例示に過ぎない。履修者の理解度などに応じて変更があり得る。
試験（練習問題を含む）に際しては、模範解答、講評などのフィードバックを与える予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	環境整備	統計環境 R の導入
2	モデルの構築という考え方	線形回帰、およびその統計量の意味
3	線形回帰モデルの構築法	最小二乗法、最尤法
4	重回帰分析の基礎１	複数の変数による予測
5	重回帰分析の基礎２	モデル全体としての予測と、個々の予測変数の寄与度との、違い
6	重回帰分析の基礎３	モデル間の比較による、個々の予測変数の寄与度の評価
7	重回帰分析の基礎４	分布に関する前提
8	線形モデル	伝統的な分散分析や *t* 検定の、線形回帰モデルとしての表現
9	選択率データの分布	２項分布、arcsine square-root transformation、logit transformation
10	ロジスティック回帰１	ロジット及びロジスティック関数、線形予測子、リンク関数、separation
11	混合効果モデル１	固定因子および変量因子の概念
12	混合効果モデル２	subject analysis と item analysis
13	混合効果モデル３	変量因子にもとづく傾き・切片
14	この先の勉強に向けて	分布のシミュレーション、ベイズ統計学に向けて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい（わからない箇所は教員または周囲に尋ねること）。
また、
・実験技法を学んだら、同じ（または似た）技法を使った他の論文を自分で読んでみる。
・統計技法を学んだら、同じ（または似た）技法を使った他の論文を自分で読んでみたり、自分の手持ち（または架空）のデータを分析してみる。
といった作業を行うと良いでしょう。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.
久保拓弥 (2012).『データ解析のための統計モデリング入門―一般化線形モデル・階層ベイズモデル・MCMC』東京：岩波書店.
Sonderegger, M. 2023. *Regression Modeling for Linguistic Data*. MIT Press.
Windter, B. 2019. *Statistics for Linguists: An Introduction Using R*. Routledge
その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】
平常点 50 %、学期末試験 50 %

【学生の意見等からの気づき】
N/A.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）
＜研究テーマ＞　音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係
＜主要研究業績＞
http://www.i.hosei.ac.jp/ kiyoshi/research.html を参照。

【Outline (in English)】
(Course outline)
An intermediate-level course on statistical analysis of experimental data.
(Learning objectives)
Generalized liner mixed-effects model building for data not normally distributed on the one hand, and for linguistics data that need generalizations not only over participants but also stimuli.
(**Learning activities outside of classroom**)
Read papers employed those techniques taught, and try analyzing (possibly fake) data using them.
(**Grading Criteria /Policy**)
In-class participations 50 %, final exam 50%

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学合同演習Ⅰ

川﨑　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
それぞれのゼミに属する学生が一堂に会して、ともに日本学について知見を広め、担当教員が各回の授業で話題とテーマを共有します。

【到達目標】
国際日本学インスティテュートに在籍する修士課程学生（および博士後期課程学生で希望する者）が、国際日本学に関する共通の知識を得、互いの研究を知り、それを土台として、多角的な視点から日本について語ることが出来るようになる。
The goal of this class is to learn about Japan through lectures by professionals inside and outside the university and also by presentation by the students.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
国際日本学インスティテュート修士課程に在籍する学生は2年間にわたって国際日本学合同演習を受講し、合計4単位を取得しなければなりません。この授業は3種の企画から構成されます。すなわち、
① 国際日本学入門：国際日本学研究に必要な「姿勢」とは何か、国際日本学研究の「論文」とはどういうものか、共同研修を行います。4月に実施します。
② 講師による日本文化に関する講演（あるいは実演）：原則としてセメスターに1回ずつ実施します（5月、10月予定）。講演の細目については開講時に発表します。
③ 修士論文・博士論文中間発表会：国際日本学インスティテュートに在籍するすべての修士課程および博士後期課程の学生が、自己の研究活動の状況について報告し、他の学生からの質問と教授たちからレビューを受け、それを修士・博士論文に生かします。実施時期は博士後期3年が6月、修士2年が7月（2回）、修士1年が11月（2回）、博士後期1・2年が12月（2回）。
　国際日本学合同演習は、土曜日5時限および6時限を利用し、2時限単位で実施されます。
　国際日本学合同演習は修士の学位を取得するために必要不可欠な授業である。2年間にわたって、必ず履修登録し、単位を取得する必要があります。この授業の実施にかかわる細目は国際日本学インスティテュートの掲示板（大学院棟3階）、および国際日本学インスティテュート専攻室入り口に公示するので注意すること。
▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行います。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡します。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。
▼第1回目の授業についてはHoppiiでお知らせしますので、必ず確認しておくこと。
▼リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	国際日本学入門	共同研修：教員による講和 4月11日（土）5、6時限に実施
第2回	講演① 未定	国際日本学に関わるテーマに関する講演。5月末ー6月初頭ごろ開催予定。
第3回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会①	博士後期3年 6月20日（土）5、6時限に実施
第4回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会②	修士2年 7月11日（土）5、6時限に実施
第5回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会③	修士2年 7月18日（土）5、6時限に実施

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
講演者によって参考文献が提示された場合はそれを読んできてください。
中間発表会における発表資料を準備してください。

【テキスト（教科書）】
・国際日本学入門および講演については、講師が準備したものを授業時に配付します。
・中間発表会に際しては、修士の学生はA4、2ページ、博士の学生はA4、4ページの資料を作成し、事前にHOPPIIの課題にアップしていただきます。

【参考書】
国際日本学入門および講演については、講師が事前に参考文献を指示することがあります。

【成績評価の方法と基準】
▼出席とリアクションペーパーの内容（100%）
リアクションペーパーは毎回20点満点で採点し、全5回分の合計で成績をつけます。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし。

【Outline (in English)】
In this class, students belonging to different seminars come together to broaden their knowledge of Japanese Studies, and the instructor shares topics and themes in each session.
Every student is expected to give a presentation on their research and discuss issues in Japanese Studies. The objective of this class is to share a variety of perspectives and issues in Japanese Studies.
The standard preparation time for this course is 2 hours per session.
If reference materials are provided by the instructor, please read them before class.
Prepare presentation materials for your assigned presentation.
Grading: Attendance and Reaction Papers (100%)
Each reaction paper will be graded out of 20 points.
Your final grade will be based on the total points from all 5 papers.

OTR600B7（その他 / Others 600）

国際日本学合同演習 II

川﨑　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
それぞれのゼミに属する学生が一堂に会して、ともに日本学について知見を広め、担当教員が各回の授業で話題とテーマを共有します。

【到達目標】
国際日本学インスティテュートに在籍する修士課程学生（および博士後期課程学生で希望する者）が、国際日本学に関する共通の知識を得、互いの研究を知り、それを土台として、多角的な視点から日本について語ることが出来るようになる。
The goal of this class is to learn about Japan through lectures by professionals inside and outside the university and also by presentation by the students.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　国際日本学インスティテュート修士課程に在籍する学生は2年間にわたって国際日本学合同演習を受講し、合計4単位を取得しなければならない。この授業は、以下に示す3種の企画から構成されます。
① 国際日本学入門：国際日本学研究に必要な「姿勢」とは何か、国際日本学研究の「論文」とはどういうものか、共同研修を行う。
② 講師による日本文化に関する講演（あるいは実演）：原則として2回実施します（5月、10月予定）。講演の細目については開講時に発表します。
③ 修士論文・博士論文中間発表会：国際日本学インスティテュートに在籍するすべての修士課程および博士後期課程の学生が、自己の研究活動の状況について報告し、他の学生からの質問と教授たちからレビューを受け、それを修士・博士論文に生かします。実施時期は博士後期3年が6月、修士2年が7月（2回）、修士1年が11月（2回）、博士後期1・2年が12月（2回）。
　国際日本学合同演習は、土曜日5時限および6時限を利用し、2時限単位で実施されます。
　国際日本学合同演習は修士の学位を取得するために必要不可欠な授業です。2年間にわたって、必ず履修登録し、単位を取得する必要があります。この授業の実施にかかわる細目は国際日本学インスティテュートの掲示板（大学院棟3階）、および国際日本学インスティテュート専攻室入り口に公示するので注意すること。
▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行います。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡します。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。
▼第1回目の授業は、所定の時間通り行います。日程はHOPPIIでお知らせしますので、必ず確認しておくこと。
▼リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講演② 未定	10月の土曜日5，6限目に実施
第2回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会④	修士1年 11月7日（土）5、6時限に実施
第3回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会⑤	修士1年 11月14日（土）5、6時限に実施
第4回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会⑥	博士後期1・2年 12日5日（土）5、6時限に実施
第5回	講演③ 未定	12月の土曜日に実施

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
講演者によって参考文献が提示された場合はそれを読んでくる。
中間発表会における発表資料を準備する。

【テキスト（教科書）】
・講演については、講師が準備したものを授業時に配付します。
・中間発表会に際しては、修士の学生はA4、2ページ、博士の学生はA4、4ページの資料を作成し、事前にHOPPIIの課題にアップすること。

【参考書】
国際日本学入門および講演については、講師が事前に参考文献を指示することがある。

【成績評価の方法と基準】
▼出席とリアクションペーパーの内容（100%）
リアクションペーパーは毎回20点満点で採点し、全5回分の合計を成績の80％に換算する。白紙で提出した場合は0点となる。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし。

【Outline (in English)】
In this class, students belonging to different seminars come together to broaden their knowledge of Japanese Studies, and the instructor shares topics and themes in each session.
Every student is expected to give a presentation on their research and discuss issues in Japanese Studies. The objective of this class is to share a variety of perspectives and issues in Japanese Studies.
The standard preparation time for this course is 2 hours per session.
If reference materials are provided by the instructor, please read them before class.
Prepare presentation materials for your assigned presentation.
Grading: Attendance and Reaction Papers (100%)
Each reaction paper will be graded out of 20 points.
Your final grade will be based on the total points from all 5 papers.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

世界の日本論と日本学 I

アンドレ・リネペ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業で゛は１９世紀半ば以降、日本人と外国人によって書かれた著作を精読しなが゛ら、「日本」はど゛のように構想され、その日本像は歴史的な文脈においてど゛のような意味が゛あったのかという問題を考えます。前期の授業では明治維新の前後から明治20年頃にかけての著名な文献資料を検討します。「文明」や「武士道」などのキーワードがある明治時代の日本論は後の時代にも大きな影響をおよぼ゛すこととなります。その日本論の系譜を検討しなが゛ら、現代の日本学の可能性を探ります。

【到達目標】
・世界の日本論の言説史を説明できる
・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・授業内の購読(クロース・リーディングの方法による)
・授業内の発表(ショートプレゼンテーション、文献資料の紹介)
・ディスカッション(グループワーク、ペアワーク)
・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本授業の問題関心と授業の進め方の説明、文献資料の紹介
第2回	イントロダクション	日本論の前史と先行研究の説明
第3回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（福沢諭吉『西洋事情』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第4回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（中江兆民『三酔人経綸問答』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第5回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（エリザベス・バード『日本奥地紀行』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第6回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（ラフカディオ・ハーン『知られぬ日本の面影』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第7回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（バジル・ホール・チェンバレン『日本事物誌』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第8回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（雑誌「日本及日本人」）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第9回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（徳富蘇峰『将来之日本』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第10回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（新渡戸稲造『武士道』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第11回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（内村鑑三『代表的日本人』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第12回	明治期の日本論を読む	文献資料の精読（岡倉天心『茶の本』）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第13回	明治期の日本論を読む	資料の精読（夏目漱石「私の個人主義」）、学生のショートプレゼンテーション、討論
第14回	総括：現代の日本論と日本学の可能性を考える	学生からの感想文、総括ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
・本授業で指示した文献を読み、歴史的・思想的背景について調べる
・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、文献資料の解説）

【テキスト（教科書）】
教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配布する予定。
また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】
・大久保橋樹（2003）『日本文化論の系譜:『武士道』から『「甘え」の構造』まで』中公新書
・佐伯彰一・葉が徹編（2001）『外国人による日本論の系譜』中公新書
・船曳健夫（2010）『「日本人論」再考』講談社学術文庫
・南博（1994）『日本人論:明治から今日まで』岩波書店
・山口輝臣編（2018）『はじめての明 治史 東大駒場 連続講義』ちくまプリマー新書

【成績評価の方法と基準】
・平常点（30％）：授業への参加、発言、提出課題などを総合的に評価する
・発表（40％）：数回のショートプレゼンテーションを総合的に評価する
・期末課題の提出（30％）

【学生の意見等からの気づき】
なし。

【学生が準備すべき機器他】
なし。

【その他の重要事項】
なし。

【日本思想史】
＜専門領域＞近世日本政治思想史
＜研究テーマ＞知識論、服制論論、時間論
＜主要研究業績＞『山鹿素行の政治思想における「知」と「行」という概念』（独、2023年）

【Outline (in English)】
This course introduces students to major discourses on Japanese culture, offering an overview of key texts and concepts from the Meiji period to the present within an international perspective. By engaging with a range of representative writings, students will develop the ability to participate in informed discussions on interpretations of Japanese culture and to reflect on current challenges and future directions in Japanese Studies. In the spring term, the course will focus on key texts from the Meiji period (1867-1912). Grading Criteria: (1) Attendance and in-class participation: 30% (2) Short presentations: 40% (3) End-of-term assignment: 30%

LIT500B7（文学 / Literature 500）

世界の日本論と日本学 II

アンドレ・リネペ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業で゛は１９世紀半ば以降、日本人と外国人によって書かれた著作を精読しなが゛ら、「日本」はど゛のように構想され、その日本像は歴史的な文脈においてど゛のような意味が゛あったのかという問題を考えます。後期の授業では20世紀前期から戦後期にかけての著名な文献資料を検討します。「禅」や「美」などのキーワードがある昭和前期の日本論は後の時代にも大きな影響をおよぼ゛すこととなります。その日本論の系譜を検討しなが゛ら、現代の日本学の可能性を探ります。

【到達目標】
・世界の日本論の言説史を説明できる
・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・授業内の購読(クロース・リーディングの方法による)
・授業内の発表(ショートプレゼンテーション、資料の紹介)
・ディスカッション(グループワーク、ペアワーク)
・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本授業の問題関心と授業の進め方の説明、文献資料の紹介
第2回	イントロダクション	日本文論の前史と日本論の先行研究の紹介
第3回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（柳田國男『山の人生』）、学生のショートプレゼントです、討論
第4回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（折口信夫『古代研究』）、学生のショートプレゼントです、討論
第5回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（九鬼周造『「いき」の構造』）、学生のショートプレゼントです、討論
第6回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（和辻哲郎『風土』）、学生のショートプレゼントです、討論
第7回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（鈴木大拙『禅と日本文化』）、学生のショートプレゼントです、討論
第8回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（ブルーノ・タウト『日本美の再発見』）、学生のショートプレゼントです、討論
第9回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（オイゲン・ヘリゲル『日本の弓術』）、学生のショートプレゼントです、討論
第10回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（西田幾多郎『日本文化の問題』）、学生のショートプレゼントです、討論
第11回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（ルース・ベネディクト『菊と刀』）、学生のショートプレゼントです、討論
第12回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（三島由紀夫「文化防衛論」）、学生のショートプレゼントです、討論
第13回	昭和前期の日本論を読む	文献資料の精読（丸山眞男『日本の思想』）、学生のショートプレゼントです、討論
第14回	総括	学生からの感想文、総括ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
・本授業で指示した文献を読み、歴史的・思想的背景について調べる
・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、文献資料の解説）

【テキスト（教科書）】
教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配
布する予定。
また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】
・大久保橋樹（2003）『日本文化論の系譜:『武士道』から『「甘え」の構造』まで』中公新書
・佐伯彰一・葉が徹編（2001）『外国人による日本論の系譜』中公新書
・藤田正勝（2024）『日本哲学入門』講談社現代新書
・船曳健夫（2010）『「日本人論」再考』講談社学術文庫
・南博（1994）『日本人論：明治から今日まで』岩波書店

【成績評価の方法と基準】
・平常点（30％）：授業への参加、発言、提出課題などを総合的に評価する
・発表（40％）：数回のショートプレゼンテーションを総合的に評価する
・期末課題の提出（30％）

【学生の意見等からの気づき】
なし。

【学生が準備すべき機器他】
なし。

【その他の重要事項】
なし。

【日本思想史】
＜専門領域＞近世日本政治思想史
＜研究テーマ＞知識論、服制論、時間論
＜主要研究業績＞『山鹿素行の政治思想における「知」と「行」という概念』（独、2023年）

【Outline (in English)】
This course introduces students to major discourses on Japanese culture, offering an overview of key texts and concepts from the Meiji period to the present within an international perspective. By engaging with a range of representative writings, students will develop the ability to participate in informed discussions on interpretations of Japanese culture and to reflect on current challenges and future directions in Japanese Studies. In the autumn term, the course will focus on key texts from the Taisho period (1912-26) to the early Showa period (1926-89).
Grading Criteria: (1) Attendance and in-class participation: 30% (2) Short presentations: 40% (3) End-of-term assignment: 30%

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

国際日本学論文作成実習（英語）Ⅰ

スティーヴン・ネルソン

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

【到達目標】
人文科学系の英文文献を正確に読み、誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3回目以降、苦手意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第2回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第3回	**文法**：基本動詞の用法 **英文要旨作成**：論旨の整理	**文法**：伝達の表現 **作文**：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第4回	**文法**：基本動詞の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・英語の論理構造	**文法**：感覚と認識の表現 **作文**：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第5回	**文法**：基本動詞の用法 **自由英作文**：段落構成	**文法**：使役・被害等の表現 **作文**：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1段落）
第6回	**文法**：基本動詞の用法 **自由英作文**：文章構成（複数段落）	**文法**：存在の表現 **作文**：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3段落）
第7回	**文法**：基本動詞の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成	**文法**：時の表現① **作文**：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第8回	**文法**：基本動詞の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成	**文法**：変化の表現 **作文**：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第9回	**文法**：基本動詞の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成	**文法**：時の表現② **作文**：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第10回	**文法**：分詞形容詞と形容詞構文の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成	**文法**：叙述の表現 **作文**：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第11回	**文法**：名詞相当語句の用法 **英文要旨作成**：論旨整理	**文法**：「もの・こと」の表現 **作文**：各自の研究テーマに関する要旨作成
第12回	**文法**：比較の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成（1段落）	**文法**：比較の表現① **作文**：各自の研究テーマに関する要旨作成
第13回	**文法**：比較の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成（複数段落）	**文法**：比較の表現② **作文**：各自の研究テーマに関する要旨作成
第14回	**文法**：数量表現の用法 **英文要旨作成**：文章構成（仕上げ）	**文法**：数量の表現 **作文**：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　英語による簡単な自己紹介を用意
第2回　各自の研究テーマに関する紹介文（英文100語前後）及びキーワードのリストを事前提出
第3～14回　文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出
本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
担当教員作成のテキストとプリントを配付する。

【参考書】
小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】
平常点30％、課題70％。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

【学生の意見等からの気づき】
受講した学生は満足しているようであり、大きな変更の必要はないと考えている。
なお、担当教員は2026年度をもって退職しますので、本年度がこの授業の最後となります。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　日本音楽史学
＜研究テーマ＞　日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
＜主要研究業績＞【英語関連】
① “Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (*pipa* / *biwa*) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries.”（『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012）
② “Pitch, scale and mode in early *gagaku* and *shōmyō*.”（『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012）
③ “Court and Buddhist music (1): history of *gagaku* and *shōmyō*” / “Court and Buddhist music (2): music of *gagaku* and *shōmyō*.” (Tokita, Alison, and David Hughes, ed., *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Hants [U.K.]: Ashgate Publishing Ltd, 2008.)

【Outline (in English)】
Course Outline: This class in academic writing in English takes two approaches. The first half of each class comprises remedial treatment of English grammar and sentence structure, focussing on a different aspect of English grammar each week. There is a textbook edited by the instructor, distributed in class free of charge. In the second half of each class, students are divided into groups and asked to examine texts of between one and three paragraphs in length that they have drafted and submitted in advance. The instructor distributes versions of these texts with indications of parts that need to be corrected. He then lets the students discuss the problems and possible solutions, before assisting the students in getting the texts into their final form. Each student then submits a final, revised version of their own text.
Learning Objectives: Very simply, to increase the students' writing skill by means of these two approaches.
Learning Activities Outside of Classroom: Preparing answers for the first and second half of each class; submitting those for the second half in advance; and submitting the final, revised version of this after the class.
Grading Criteria/Policy: Grading is based on each student's portfolio of revised versions.

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

国際日本学論文作成実習（英語）II

スティーヴン・ネルソン

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

【到達目標】
人文科学系の英文文献を正確に読み、および誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3回目以降、苦手意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第2回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第3回	**文法**：基本動詞の用法 **英文要旨作成**：論旨の整理	**文法**：感情の表現 **作文**：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第4回	**文法**：基本動詞の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・英語の論理構造	**文法**：感覚・認識・判断の表現 **作文**：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第5回	**文法**：接続の用法 **自由英作文**：段落構成	**文法**：原因・理由の表現 **作文**：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1段落）
第6回	**文法**：接続の用法 **自由英作文**：文章構成（複数段落）	**文法**：目的・程度・様態の表現 **作文**：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3段落）
第7回	**文法**：基本動詞の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成	**文法**：譲歩・仮定・条件の表現 **作文**：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第8回	**文法**：基本動詞の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成	**文法**：許可・勧誘・提案の表現 **作文**：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第9回	**文法**：名詞修飾の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成	**文法**：詞修飾の表現 **作文**：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第10回	**文法**：品詞転換の技法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成	**文法**：品詞転換の表現 **作文**：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第11回	**文法**：強調の用法 **英文要旨作成**：論旨整理	**文法**：強調の表現 **作文**：各自の研究テーマに関する要旨作成
第12回	**文法**：否定の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成（1段落）	**文法**：否定の表現 **作文**：各自の研究テーマに関する要旨作成
第13回	**文法**：比較の用法 **英文要旨作成**：論旨整理・文章構成（複数段落）	**文法**：比較の表現 **作文**：各自の研究テーマに関する要旨作成
第14回	**文法**：時・態の用法 **英文要旨作成**：文章構成（仕上げ）	**文法**：時と受身の表現 **作文**：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　英語による簡単な自己紹介を用意
第2回　各自の研究テーマに関する紹介文（英文100語前後）及びキーワードのリストを事前提出
第3～14回　文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出
本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
担当教員作成のテキストとプリントを配付する。

【参考書】
小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】
平常点30％、課題70％。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

【学生の意見等からの気づき】
受講した学生は満足しているようであり、大きな変更の必要はないと考えている。
なお、担当教員は2026年度をもって退職しますので、本年度がこの授業の最後となります。

【その他の重要事項】
科目名でわかる通り、これは国際日本学論文作成実習（英語）Ⅰの続きとして作成された内容であり、Ⅰの単位をとってからの履修を勧める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　日本音楽史学
＜研究テーマ＞　日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
＜主要研究業績＞【英語関連】
① “Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (*pipa* / *biwa*) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries.”（『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012）
② “Pitch, scale and mode in early *gagaku* and *shōmyō*.”（『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012）
③ “Court and Buddhist music (1): history of *gagaku* and *shōmyō*” / “Court and Buddhist music (2): music of *gagaku* and *shōmyō*.” (Tokita, Alison, and David Hughes, ed., *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Hants [U.K.]: Ashgate Publishing Ltd, 2008.)

【Outline (in English)】
Course Outline: This class in academic writing in English takes two approaches. The first half of each class comprises remedial treatment of English grammar and sentence structure, focussing on a different aspect of English grammar each week. There is a textbook edited by the instructor, distributed in class free of charge. In the second half of each class, students are divided into groups and asked to examine texts of between one and three paragraphs in length that they have drafted and submitted in advance. The instructor distributes versions of these texts with indications of parts that need to be corrected. He then lets the students discuss the problems and possible solutions, before assisting the students in getting the texts into their final form. Each student then submits a final, revised version of their own text.
Learning Objectives: Very simply, to increase the students' writing skill by means of these two approaches.
Learning Activities Outside of the Classroom: Preparing answers for the first and second half of each class; submitting those for the second half in advance; and submitting the final, revised version of this after the class.
Grading Criteria/Policy: Grading is based on each student's portfolio of revised versions.

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本語論文作成実習Ⅰ

山中　玲子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では日本語の文章を多く読み、受講生には多くの作文を書いてもらい、添削していきます。専門分野の論文を書くための日本語表現や、明確な文章を書くための論理構造を身につけることが目的です。

【到達目標】
①助詞や自動詞・他動詞等、基礎的な文法のミスを減らす。
②論文にふさわしい文体を維持する。
③論理展開の明確な文章が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
作文をメール（添付ファイル）で提出してもらい、添削してそれぞれに返すとともに、授業ではみなさんの文章から「よくある間違い」をピックアップして説明します。作文の準備として授業中にディスカッションをおこなうこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方や参考書の紹介。受講者の専門分野の確認。
第2回	論文の文体	論文にふさわしい文体を学ぶ。
第3回	ねじれのない文	主部と述部が論理的に対応している文を書く。
第4回	間違いやすい文法事項のチェック①　短文作り	留学生が間違えやすい助詞や自動詞他動詞、受け身の言い方などを確認しながら短文を作る。
第5回	間違いやすい文法事項のチェック②　添削とフィードバック	前回の続き。受講者が書いて教員に送った例文を材料にして間違いやすい箇所を確認。
第6回	文章の要約①　短めの文章の要約	短い文章を読み、表現を学ぶ。要約を宿題にして次回までに提出。
第7回	文章の要約②　添削とフィードバック	受講者の要約例を材料に、文法的な間違いのチェックやより良い要約の仕方を学習。
第8回	文章の要約③　長めの文章の要約	第6回より長めの文章を読み、理解したうえで、要約を宿題にし、次回までに提出。
第9回	文章の要約④　添削とフィードバック	受講者の要約例を材料に、文法的な間違いのチェックやより良い要約の仕方を学習。
第10回	条件を比べる①	いくつかの条件を比べて優劣や差異を述べる文を書くため、材料となる文章を読んで理解する。
第11回	条件を比べる②	学生が自宅学習で書いて提出した文章を材料に、文法的な間違いや表現の不十分な部分等を集めて検討する。
第12回	要約とコメント①	授業では第８回よりもさらに長い文章を読んで表現を学び、各自がその要約と自分のコメントを書いて提出する。
第13回	要約とコメント②	提出された要約とコメントの例を材料に、文法的な誤りをチェックし、よりよい表現の仕方を学ぶ。
第14回	まとめ	学習した事項の復習とまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
授業で学んだ表現や語彙を辞書等で調べ直し、理解を確実にする。
宿題の作文を毎回書き、期限内に提出する。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使いません。資料は授業中に配布します。

【参考書】
授業中に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
作文の提出率（60％）とその成績（40％）によって総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
教材の読解や語彙の学習などは教室でおこないます。実際の文章作成は各自でおこない、その添削も個別に返しますが、教室で互いの文章を読み合い、問題点や、より良い書き方の検討をすることも、有益だという感想が多かったので、本年度もその形式でおこないます。その際、添削結果を確実にフィードバックできるよう、各自が教室内でZoomにつなぎ、同じ画面を見ながら授業を進めることにしました。
また、作文の際にAIを使うことは禁止していませんが、どのように使ったのか、自分の文章をどう直したのかは、正直に申告してもらい、AIを最も有効に使う方法を全員で考えます。

【その他の重要事項】
自分のレベルにあったクラスで学べるよう、授業開始前のレベルチェックは必ず受けてください。
原則として、テキストを読んで理解する授業、添削例を挙げて問題点を整理する授業は対面でおこない、各自の文章作成はホームワークでやってもらいます。宿題をきちんと出すことが基本となります。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　能楽研究
＜研究テーマ＞　能の作品研究・演出研究
＜主要研究業績＞
★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」軍記物語講座第二巻『無常の鐘声　平家物語』（松尾葦江編　花鳥社　2020年）
★「〈二人静〉―音阿弥の演出・元章の解釈」、『観世』　85巻3号、檜書店、2018.3、pp.28-35
★「源氏物語と能楽研究」、『能と狂言』　15、能楽学会、2017.7、pp.36-46

【Outline (in English)】
The aim of this class is to acquire the knowledge and skills necessary to write a dissertation in Japanese.
Students will practice reducing grammatical errors and writing logically in a style appropriate to the paper. Writing essays is a study outside of class time.
《Learning activities outside of classroom》
＊Preparation and revision for this course should each take approximately two hours.
＊Review expressions and vocabulary learned in class using dictionaries to ensure understanding.
＊Complete the assigned writing tasks each week and submit them by the deadline.
《Grading criteria》
The overall grade will be determined by the submission rate of writing assignments (60%) and their marks (40%).

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本語論文作成実習 II

山中　玲子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では日本語の文章を多く読み、受講生には多くの作文を書いてもらい、添削していきます。自分の研究内容について論文を書く力を身につけることが目的です。

【到達目標】
①論文にふさわしい語彙や文体を身につけ、②各自の論文作成に必要な表現を数多く知り、③わかりやすい論理展開ができるよう、接続詞の使い方や段落等も学んで、自分の研究内容を日本語で的確に述べることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
作文をメール（添付ファイル）で提出してもらい、添削してそれぞれに返すとともに、授業ではみなさんの文章から「よくある間違い」をピックアップして説明します。作文の準備として授業中にディスカッションをおこなうこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	論文にふさわしい表現を確認する	春学期の復習も兼ねて、論文にふさわしい表現を確認。宿題は、学習した表現を使った短文作り。
第2回	論文にふさわしい表現―短文の添削とフィードバック	提出された短文を材料に、文法的な誤りや、使えるケース・使えないケースを確認。
第3回	文章の論理構造①　接続語の整理	論理的な文章を書くために、文と文を適切な接続語でつなぐ練習をする。
第4回	文章の論理構造②　練習問題	前回の続き。練習問題を用いて、文章の論理構造を確認する作業も行う。
第5回	文章の要約とコメント	前期よりも長い文章を読み、内容を要約したうえでコメントを付ける。
第6回	文章の要約とコメント―要約例の添削とフィードバック	受講者の要約例とコメント例を材料に、間違えやすい表現のチェックをし、要約文やコメントのブラッシュアップをめざす。
第7回	統計資料を見て書く	表やグラフに基づいてことがらを述べる際の表現を学ぶ。
第8回	絵や写真を見て書く	目の前にある絵や写真から見て取れることを書く際の表現（特に文末表現）を学ぶ。
第9回	比較して書く①　ディスカッション	複数の事象を比べてその内容を叙述し、優劣や順位を述べる文を書くため、材料となる資料を用いて討議し、意見の相違を確認する。
第10回	比較して書く②　添削とフィードバック	学生が自宅で書いて提出した文章を材料に、文法的な間違いや表現の不十分な部分を集めて検討。
第11回	比較して書く③　予想される反論	優劣・順位について他のメンバーの異なる意見を踏まえたうえでそれに再反論する文章を書く
第12回	意見を述べる①　材料となる文章の読解	授業では論文作成に有益な表現や文体を学ぶ。読んだ文章について、３～４段落程度の意見を説得力のある形で書く（宿題）。
第13回	意見を述べる②　添削とフィードバック	提出された文章を材料に、間違えやすい表現や論理展開を確認する。
第14回	まとめ	全体に間違えやすい文法事項の確認と復習。各学生のウィークポイントの確認。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
書く練習自体は教室ではあまりできませんから、宿題をきちんとやって期限内に提出してください。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使いません。資料は授業中に配布します。

【参考書】
授業中に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
作文の提出率（60％）とその成績（40％）によって総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
教材の読解や語彙の学習などは教室でおこないます。実際の文章作成は各自でおこない、その添削も個別に返しますが、教室で互いの文章を読み合い、問題点や、より良い書き方の検討をすることも、有益だという感想が多かったので、本年度もその形式でおこないます。その際、添削結果を確実にフィードバックできるよう、各自が教室内でZoomにつなぎ、同じ画面を見ながら授業を進めることにしました。
また、作文の際にAIを使うことは禁止していませんが、どのように使ったのか、自分の文章をどう直したのかは、正直に申告してもらい、AIを最も有効に使う方法を全員で考えます。

【その他の重要事項】
自分のレベルにあったクラスで学べるよう、授業開始前のレベルチェックは必ず受けてください。原則として、各自の文章作成はホームワークとなります。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　　能楽研究
＜研究テーマ＞　　能の作品研究・演出研究
＜主要研究業績＞
★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」軍記物語講座第二巻『無常の鐘声　平家物語』（松尾葦江編　花鳥社　2020年）
★「〈二人静〉―音阿弥の演出・元章の解釈」、『観世』　85巻3号、檜書店、2018.3、pp.28-35
★「源氏物語と能楽研究」、『能と狂言』　15、能楽学会、2017.7、pp.36-46

【Outline (in English)】
The aim of this class is to acquire the knowledge and skills necessary to write a dissertation in Japanese.
Students will learn vocabulary and expressions appropriate for academic writing, and how to use conjunctions and paragraphs correctly to clarify logical development. Writing essays is a study outside of class time.
《Learning activities outside of classroom》
＊Preparation and revision for this course should each take approximately two hours.
＊Review expressions and vocabulary learned in class using dictionaries to ensure understanding.
＊Complete the assigned writing tasks each week and submit them by the deadline.
《Grading criteria》
The overall grade will be determined by the submission rate of writing assignments (60%) and their marks (40%).

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本語論文作成基礎ＡⅠ

幸田　佳子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
必要な論文の書き方を学ぶことを目的とする。作文などの主観的な文章から客観的な文章への表現を習得することとする。レポートや論文が書けるようになるためである。

【到達目標】
論文に必要な書き言葉のルールを学び、書けるようになる。
段落構成を習得できるようになる。
文章全体の章立て構成を習得できるようになる。
参考資料の引用の仕方を学び、引用方法ができるようになる。
本論で使う文章展開の方法ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
対面授業とする。
授業の進め方について
授業の初めに、前回の授業の課題文章の添削を見せ、フィードバックを行う。
講義形式で各々項目のレジメを見ていく。練習問題や書き方を説明する。
調べたことや自分の文は発表してもらうこともある。またテーマについてディスカッションすることもある。
最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った試験や小レポート等、課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業説明 自己の研究テーマ紹介	授業の目的、学び方を説明をする クラス内で研究テーマを話す。対面で顔合わせをする
第2回	書き言葉のルール① 文体	話し言葉と書き言葉 丁寧体と普通体 文体について調べる
第3回	書き言葉のルール② 語彙と文法	物事視点にして、主語が変わること。名詞句の使い方を見る。 文章を書いてみる。
第4回	書き言葉のルール③ 段落と構成	段落内の構成をみる。一文ずつの流れを注意して、一段落の文を書く。
第5回	二段落の構成の展開	論の展開　逆接と添加 構成を考えながら、文を書く。
第6回	文のモード（調子）の種類①ナラティブ	ナラティブの例文をみていく。時系列の出来事の文章作成練習
第7回	モード②描写	現前の出来事の説明練習
第8回	モード③描写	グラフの説明 グラフの種類　説明の仕方
第9回	引用の方法	直接引用と間接引用の練習
第10回	参考文献の書き方	書籍、雑誌、新聞、ネット情報などの載せ方
第11回	現象説明の表現方法①定義	定義の表現を練習 現代用語で定義付けする
第12回	自分の専門分野の定義 パワーポイントのスライドの作り方	定義をパワーポイントで作成する
第13回	パワーポイントの確認と発表	各自の定義付け、パワーポイントで発表1回目
第14回	パワーポイントの確認と発表	発表Ⅱ回目 発表後の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
授業中に書き終えなかったものは、締め切り期日までに提出。書き直しは、PCでメール提出する。授業の終わりに必要な資料の検索を指示するので、調べておくこと。30分からⅠ時間ぐらいである。
課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は使用しない。コピーとレジメを配布する。

【参考書】
『留学生のためのここが大切文章表現のルール』石黒圭　スリーエーネットワーク
『新訂版留学生のための論理的な文章の書き方』二通信子　スリーエーネットワーク
『Good Writingへのパスポート』田中真理　くろしお出版
『改訂版　大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著

【成績評価の方法と基準】
毎回の提出物50%（遅れた場合は8割となる）　学期末のパワーポイントスライドと発表30%（既習の到達度から見る）　平常点20%（授業参加、発表への質問など）

【学生の意見等からの気づき】
早口で、先生の出した指示がわからないという指摘を受けたので、意識してゆっくり話すようにする。質問時間を設け､遠慮なく質問してもらうようにする。板書の字がわかりづらいと言われ、丁寧に書くようにする。

【学生が準備すべき機器他】
必要時にパソコン持参などの指示

【その他の重要事項】
提出遅れは80%になる。期限に遅れないこと。
欠席した場合は、クラスメートに聞いて補っておくこと。特に提出物は注意してください。
出席は全出席が前提。5回以上の欠席は不可とする。
連絡事項はHoppiiを見てください。
授業は基本対面授業としていますが、海外からの受講がある場合は、オンラインと対面の授業します。

【日本語学】
＜専門領域＞日本語学
＜研究テーマ＞文法と日本語教育
＜主要研究業績＞
①1994「『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』について」『語学教育研究論叢』11号　大東文化大学
②1995『日本語の研究と教育　窪田富男教授退官記念論文集』「専門教育へつながる日本語教育の一試み」　専門教育出版
③2002「副詞『一応』について」『語学教育研究論叢』19号　大東文化大学
④2011「接尾辞『がち』『ぎみ』ついて」『語学教育研究論叢』28号　大東文化大学
⑤2012『教師主導型から活動型授業への改善の考察―脱タスクを目指して―』2012年度web版実践研修フォーラム報告
⑥2014「活動型授業への展開」『教育推進開発機構紀要』5号　國學院大學
⑦2016「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題点」『語学教育研究論叢』34号　大東文化大学
⑧2020「日本語教育に日本語文法を活かしていくにはー「として」を例に考えた試みー」『語学教育研究論叢』第37号　大東文化大学

【日本語学】
学会発表

①2012.7「教師主導型から活動型のはざまでー脱タスクをめざしてー」日本語教育学会2012年度研究集会ー第5回ー【実践研究フォーラム】対話型セッション
②2013.7「活動型授業の展開と課題」第14回國學院日本語教育研究会
③2014.7「中上級レベルのレポート作成のための授業実践と課題―論理的な文構成の出来ない要因を考える―」日本語教育学会2014年度研究集会ー第7回ー【実践研究フォーラム】ポスターセッション
④2015.8「中・上級の作文の授業における問題点―教師のフィードバックとレポートの論理的な構成の立て方について―」日本語教育学会　2015年度研究集会ー第8回ー【実践研究フォーラム】対話型セッション

【Outline (in English)】
This class learns how to write necessary report,article at a university.
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than an hour for a class.
：Your overall grade in the class will be decided based on the following assingments: 50%、Short reports : 30%、in class contribution: 20%

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本語論文作成基礎ＡⅡ

中島　久朱

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】
日本語によるアカデミックな文章の作成において求められる語彙や適切な文体、文章構成のルールを身につけ、論理的な文章を作成できるようになる。
資料の要点を的確に読み取る力をつけ、適切な引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。
フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レヴューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業概要の説明
第2回	書き言葉の文体	日本語の表記 書き言葉にふさわしい文体
第3回	書き言葉と語彙	書き言葉にふさわしい語と表現
第4回	文章構成	文章の構成
第5回	パラグラフ・ライティング	パラグラフ・ライティングの基本
第6回	課題の提示	課題の提示の展開とパターン
第7回	研究行動の提示	研究行動の提示のための文型と表現
第8回	研究設問	研究テーマと問題の提示の展開とパターン
第9回	先行研究の紹介	先行研究の紹介、研究の目的を示すための文型と表現
第10回	研究方法の提示	研究方法の説明、定義と分類のための文型と表現
第11回	用語の定義と考察対象の提示	用語の定義と考察の対象の選択の練習
第12回	図表の提示	図表の提示のための文型と表現 図表を使った説明の練習
第13回	引用の仕方	適切な引用の仕方 参考文献の引用の練習 期末レポートのテーマの選定とアウトラインの作成
第14回	レポート作成	レポート作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。
授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。
授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。予習課題が出された場合は、授業までに各自で取り組み、指示のある場合には事前に提出することとする。

【テキスト（教科書）】
毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】
鎌田美千子・仁科浩美『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』スリーエーネットワーク
小森万里・三井久美子『レポート・論文を書くための日本語文法』くろしお出版
二通信子・佐藤不二子『留学生のための論理的な文章の書き方』

【成績評価の方法と基準】
提出課題：30％、期末レポート：30%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】
本授業は文章作成能力を高めることを目的とするため、授業時間内での作文時間を可能な限りとるようにしています。

【学生が準備すべき機器他】
自習の際に使用するPC
作成したデータを保存するUSBメモリ等

【その他の重要事項】
教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。
欠席する場合は、各自で欠席回の内容を確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本語教育学、比較教育学
＜研究テーマ＞マイノリティ教育、教育政策
＜主要研究業績＞
中島久朱（2008）「グローバル化と公教育ー教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性ー」、『多言語多文化ー実践と研究』vol.1
中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第14号
中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会20周年記念年報　国際教育学の展開と多文化共生』 、学文社
中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合 ―公教育における多様性の容認と平等の問題―」、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline (in English)】
This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.
At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.
Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments.Your study time will be at least two hours for each class meeting.
Final grade will be calculated according to the following process In class contribution:40%, the performance of the assignments:40%, term-end report:20%

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本語論文作成基礎ＡIII

幸田　佳子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
必要な論文の書き方を学ぶことを目的とする。作文などの主観的な文章から客観的な文章への表現を習得することとする。

【到達目標】
論文に必要な書き言葉のルールを習得する。
段落構成を習得する。
文章全体の章立てをつけた構成方法を習得する。
参考資料の引用を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業形態は、対面授業とする。
レジメプリント導入後、調べたことやよくできた作文等は発表してもらう。課題提出後、添削した作文の書き直しを行う。共通の間違いや表現を取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業説明 春学期の復習	秋学期の授業の取り組み方を説明する。 春学期に習得したことの復習をする。
第2回	現象説明の表現方法②比較	比較の意味、表現などを学ぶ。簡単な文を書く。
第3回	現象説明の表現方法③分類	分類の意味、表現などを学ぶ。簡単な文を書く。
第4回	現象説明の表現方法③	分類の文章を練習する。分類文章の構成を学ぶ。
第5回	現象説明の表現方法④原因・理由	因果関係の意味、表現を学ぶ。つながりの練習。 原因・理由の意味、表現等を学ぶ。簡単な文を書く。
第6回	現象説明の表現方法④結果	結果の意味、表現等を学ぶ。簡単な文を書く。 引用、データ、例などの種類をみていく
第7回	論証方法　反対意見の提示	反対の意見を考慮した反駁の仕方を学ぶ
第8回	論証の種類、どんな場合に論証するのか	論証、グラフなどのデータ利用、引用、具体例など。現象説明や意見に根拠をつける
第9回	現象の論証	現象に根拠をつける。序・本・結の形式を練習する。 何を問題にするか考える。
第10回	意見の論証アウトラインの作成	考え、理由、根拠の構成で文章作成をする。
第11回	論文作成の過程 形式 テーマから主題を考える	作成の流れを説明する。序・本・結の構成
第12回	問題提起とアウトライン	疑問と答えを書く。ネット検索をして、　全体のアウトライン作成する
第13回	序論と結論、参考文献の書き方　進行させる表現	アウトラインから文章化
第14回	文章の推敲	文章の確認と書き直し

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
授業中書き終えなかった物は次週までに提出。書き直しはメール提出すること

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は使用しない。

【参考書】
『留学生のためのここが大切文章表現』　石黒圭　スリーエーネットワーク
『新訂版留学生のための論理的な文章書き方』　二通信子　スリーエーネットワーク
『Good Writingへのパスポート』田中真理　くろしお出版
『改訂版　大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著

【成績評価の方法と基準】
毎回の提出物50% 学期の末のレポート30%　平常点20%

【学生の意見等からの気づき】
知識を深めるために、話し合いも行うようにする。添削の字がわかりづらいとの指摘があったので、丁寧に書くようにする。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン持参については事前に指示する。

【その他の重要事項】
提出遅れは80%になる。期限に遅れないこと。
欠席した場合は、クラスメートに聞いて補っておくこと。特に提出物は注意してください。
出席は全出席が前提。5回以上の欠席は不可とする。
連絡事項はHoppiiを見てください。

【日本語学】
＜専門領域＞日本語学
＜研究テーマ＞文法と日本語教育
＜主要研究業績＞
①1994「『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』について」『語学教育研究論叢』11号　大東文化大学
②1995『日本語の研究と教育　窪田富男教授退官記念論文集』「専門教育へつながる日本語教育の一試み」　専門教育出版
③2002「副詞『一応』について」『語学教育研究論叢』19号　大東文化大学
④2011「接尾辞『がち』『ぎみ』ついて」『語学教育研究論叢』28号　大東文化大学
⑤2012『教師主導型から活動型授業への改善の考察―脱タスクを目指して―』2012年度web版実践研修フォーラム報告
⑥2014「活動型授業への展開」『教育推進開発機構紀要』5号　國學院大學
⑦2016「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題点」『語学教育研究論叢』34号　大東文化大学
⑧2020「日本語教育に日本語文法を活かしていくにはー「として」を例に考えた試みー」『語学教育研究論叢』第37号　大東文化大学

【日本語学】
①2012.7「教師主導型から活動型のはざまでー脱タスクをめざしてー」日本語教育学会2012年度研究集会ー第5回ー【実践研究フォーラム】対話型セッション
②2013.7「活動型授業の展開と課題」第14回國學院日本語教育研究会
③2014.7「中上級レベルのレポート作成のための授業実践と課題―論理的な文構成の出来ない要因を考える―」日本語教育学会2014年度研究集会ー第7回ー【実践研究フォーラム】ポスターセッション
④2015.8「中・上級の作文の授業における問題点―教師のフィードバックとレポートの論理的な構成の立て方について―」日本語教育学会　2015年度研究集会ー第8回ー【実践研究フォーラム】対話型セッション

【Outline (in English)】
This class learns how to write necessary report, article at a university.
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than an hour for a class.
：Your overall grade in the class will be decided based on the following assingments: 50%、Short reports : 30%、in class contribution: 20%

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本語論文作成基礎ＡⅣ

中島　久朱

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】
日本語によるアカデミックな文章の作成において求められる語彙や適切な文体、文章構成のルールを身につけ、論理的な文章を作成できるようになる。
資料の要点を的確に読み取る力をつけ、適切な引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。
フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レヴューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	変化の形容	変化を表す図表の提示のための文型と表現
第2回	データの説明と分析	データの説明と分析の練習
第3回	数値データの対比と比較	数値データの対比と比較のための文型と表現
第4回	事実の対比と比較	データからわかる事実の対比と比較の練習
第5回	事実関係の考察	データが表す事実の考察と予測のための文型と表現
第6回	原因の考察	データを使用した原因の考察の練習
第7回	列挙	要点の列挙のための表現
第8回	引用	論述文の引用の仕方
第9回	同意と反論	引用に対する同意と反論の仕方
第10回	意見の提示	筆者自身の見解を表す表現
第11回	意見の断定の度合い	様々な表現による断定の度合いと使い分け
第12回	結論の提示	文章全体の結論を述べるための文型と表現
第13回	期末レポート作成準備	期末レポートのテーマの選定とアウトラインの作成
第14回	期末レポート発表	期末レポートの発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。
授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。
授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。予習課題が出された場合は、授業までに各自で取り組み、指示のある場合には事前に提出することとする。

【テキスト（教科書）】
毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】
アカデミック・ジャパニーズ研究会『留学生の日本語④論文作成編』アルク
二通信子・佐藤不二子『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
井上千以子『思考を鍛える レポート・論文作成方』慶應義塾大学出版会

【成績評価の方法と基準】
提出課題：30％、期末レポート：30%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】
本授業は文章作成能力を高めることを目的とするため、授業時間内でも可能な限り作文作業の時間をとるようにしています。

【学生が準備すべき機器他】
自習の際に使用するPC
作成したデータを保存するUSBメモリ等

【その他の重要事項】
教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。
欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本語教育学、比較教育学
＜研究テーマ＞マイノリティ教育、教育政策
＜主要研究業績＞
中島久朱（2008）「グローバル化と公教育ー教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性ー」、『多言語多文化ー実践と研究』vol.1
中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第14号
中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会20周年記念年報　国際教育学の展開と多文化共生』 、学文社
中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合 ―公教育における多様性の容認と平等の問題―」、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline (in English)】
This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.
At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.
Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments.Your study time will be at least two hours for each class meeting.
Final grade will be calculated according to the following process In class contribution:40%, the performance of the assignments:40%, term-end report:20%

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本語論文作成基礎ＢⅠ

幸田　佳子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
必要な論文の書き方を学ぶことを目的とする。作文などの主観的な文章から客観的な文章への表現を習得することとする。

【到達目標】
論文に必要な書き言葉のルールを学び、書けるようになる。
段落構成を習得できるようになる。
文章全体の章立て構成をできるようになる。
参考資料の引用の仕方を学び、引用方法ができるようになる。
本論で使う文章展開の方法ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
対面授業とする。
授業の進め方
授業の初めに前回の授業で提出された課題のフィードバックを行う。講義形式で各々の項目のレジメを見ていく。練習問題や書き方を説明する。
調べたことや自分の文章を発表してもらうこともある。またテーマについて話し合いをすることもある。
最終授業で13回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、課題に対する講評や解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業説明 自己の研究テーマ紹介	授業の目的、学び方を説明する クラス内で研究テーマを話す。 対面で顔合わせをする。
第2回	書き言葉のルール① 文体	話し言葉と書き言葉 丁寧体と普通体 文体について調べる
第3回	書き言葉のルール② 文法と語彙	物事視点にして、主語が変わること、述語の選択 書き言葉の語彙の練習
第4回	書き言葉のルール③ 名詞句	名詞句に直して、文に組み込む練習をする 助詞の注意
第5回	書き言葉のルール④ 一段落内の構成	一段落の文章の構成をみていく 一段落の文章を書く
第6回	一段落の文章の構成確認 レポート全体の構成	一段落の文章の見直し 序・本・結、注、参考文献リストの書き方
第7回	文のモード（調子）の種類①ナラティブ	ナラティブの例文をみる。時系列の文章作成
第8回	文のモード②描写	現前の出来事の説明練習
第9回	文のモード③描写	グラフ説明 グラフの種類　説明の仕方
第10回	引用の方法	直接引用と間接引用の練習
第11回	現象説明の方法①定義	定義の表現を練習 現代用語で定義付けする
第12回	パワーポイントスライドの作り方と発表の仕方	各自研究テーマのキーワードをパワーポイントで作る
第13回	パワーポイントを使って発表練習	スライド、発表の仕方の確認
第14回	発表とその振り返り	各自の発表をしてから振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、1時間を標準とする。
授業の中に書き終えなかったものは、hoppiiに提出。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は使用しない。コピーとレジメを配布する

【参考書】
『新訂版留学生のための論理的な文章の書き方』二通信子他　スリーエーネットワーク
『改訂版大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』アカデミック・ジャパニーズ研究会　アルク
『レポート・論文を書くための日本語文法』小森真理他　くろしお出版

【成績評価の方法と基準】
毎回の提出物50％（遅れた場合は8割となる）学期末のパワーポイントスライドと発表30% 平常点20% {授業参加、発表への質問等}

【学生の意見等からの気づき】
早口で、指示がわからないという指摘を受けたので、意識してゆっくり話すようにする。板書して明確にしておく。　質問時間を設け、どんなことでも質問を出してもらうようにする。

【学生が準備すべき機器他】
パソコンやタブレット端末

【その他の重要事項】
提出遅れは80%になるので、期限におくれないこと
欠席した場合は、クラスメートに聞いて補っておくこと
出席は全出席が前提。5回以上の欠席は不可とする
連絡事項はHoppiiをみてください

【日本語学】
＜専門領域＞日本語学
＜研究テーマ＞文法と日本語教育
＜主要研究業績＞
①1994「『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』について」『語学教育研究論叢』11号　大東文化大学
②1995『日本語の研究と教育　窪田富男教授退官記念論文集』「専門教育へつながる日本語教育の一試み」 専門教育出版
③2002「副詞『一応』について」『語学教育研究論叢』19号　大東文化大学
④2011「接尾辞『がち』『ぎみ』ついて」『語学教育研究論叢』28号　大東文化大学
⑤2012『教師主導型から活動型授業への改善の考察―脱タスクを目指して―』2012年度web版実践研修フォーラム報告
⑥2014「活動型授業への展開」『教育推進開発機構紀要』5号　國學院大學
⑦2016「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題点」『語学教育研究論叢』34号　大東文化大学
⑧2020「日本語教育に日本語文法を活かしていくにはー「として」を例に考えた試みー」『語学教育研究論叢』第37号　大東文化大学

【日本語学】
学会発表
①2012.7「教師主導型から活動型のはざまでー脱タスクをめざしてー」日本語教育学会2012年度研究集会ー第5回ー【実践研究フォーラム】対話型セッション
②2013.7「活動型授業の展開と課題」第14回國學院日本語教育研究会
③2014.7「中上級レベルのレポート作成のための授業実践と課題―論理的な文構成の出来ない要因を考える―」日本語教育学会2014年度研究集会ー第7回ー【実践研究フォーラム】ポスターセッション
④2015.8「中・上級の作文の授業における問題点―教師のフィードバックとレポートの論理的な構成の立て方について―」日本語教育学会　2015年度研究集会ー第8回ー【実践研究フォーラム】対話型セッション

【Outline (in English)】
This class learns how to write necessary report,article at a university.

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than an hour for a class.
：Your overall grade in the class will be decided based on the following assingments: 50%、Short reports : 30%、in class contribution: 20%

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本語論文作成基礎ＢⅡ

中島　久朱

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】
書き言葉のルールを学び、レポート、論文に必要な文章表現を身につける。
アカデミックな文章の構成力を身につけ、日本語で論理的な文章が書けるようになる。
適切な参考資料の引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。
フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レヴューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業内容の説明
第2回	文法・文型　助詞の使い方① 目的格、主格など	「で」と「を」、「を」と「に」、「を」と「が」の使い分け
第3回	文法・文法　助詞の使い方②　複合助詞、「は」と「が」	複合助詞、「は」と「が」の使い分け
第4回	言葉の形の使い分け① 適切な形	適切な形の選択
第5回	言葉の形の使い分け② 時間表現	適切な時間表現の使い分け
第6回	自動詞・他動詞	自動詞と他動詞の形のルール 自動詞と他動詞の使い分けのルール
第7回	受身	受け身表現の使い方のルール
第8回	呼応	呼応表現の使い方
第9回	文末表現	文末表現の調整
第10回	文字・表記① ひらがな・カタカナ・漢字	ひらがなと漢字の使い分け カタカナ表記のルール
第11回	文字・表記② 漢字の選択、句読点	漢字の選択と誤変換 句読点の打ち方
第12回	書き言葉	書き言葉らしさ 表現のかたさ
第13回	文体と語彙	意味の似ている表現 名詞化、する動詞化 専門用語の選び方
第14回	ミニ・レポート作成	ミニ・レポート作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。
授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。
授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。予習課題が出された場合は、授業までに各自で取り組み、指示のある場合には事前に提出することとする。

【テキスト（教科書）】
毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】
石黒圭・筒井千絵 『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク
鎌田美千子・仁科浩美『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』スリーエーネットワーク
佐々木瑞江、細井和代、藤尾喜代子『大学で学ぶための日本語ライティング　短文作成からレポート作成まで』The Japan Times

【成績評価の方法と基準】
提出課題：30％、期末レポート：30%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】
文章作成のための授業ですので、実際に文章を書いて表現力を身につけるため、授業内でも作文の時間を多めに設けています。
文法については、要望により適宜説明の時間を増やしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
自習の際に使用するPC
作成したデータを保存するUSBメモリ等

【その他の重要事項】
教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。
欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本語教育学、比較教育学
＜研究テーマ＞マイノリティ教育、教育政策
＜主要研究業績＞
中島久朱（2008）「グローバル化と公教育ー教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性ー」、『多言語多文化ー実践と研究』vol.1
中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第14号
中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会20周年記念年報　国際教育学の展開と多文化共生』 、学文社
中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合 ―公教育における多様性の容認と平等の問題―」、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline (in English)】
This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.
At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.
Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments.Your study time will be at least two hours for each class meeting.
Final grade will be calculated according to the following process In class contribution:40%, the performance of the assignments:40%, term-end report:20%

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本語論文作成基礎ＢIII

幸田　佳子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
必要な論文の書き方を学ぶことを目的とする。作文などの主観的な文章から客観的な文章への表現を習得することとする。

【到達目標】
論文に必要な書き言葉のルールを学び、書けるようになる。
段落構成を習得できるようになる。
文章全体の章立て構成をできるようになる。
参考資料の引用の仕方を学び、引用方法ができるようになる。
本論で使う文章展開の方法ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
基本対面授業とする。
授業の進め方
授業の初めに前回の授業で提出された課題のフィードバックを行う。講義形式で各々の項目のレジメを見ていく。練習問題や書き方を説明する。
調べたことや自分の文章を発表してもらうこともある。またテーマについて話し合いをすることもある。
最終授業で13回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、課題に対する講評や解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	春学期の復習	秋学期の授業の取り組み方を説明する 春学期の復習をする
第2回	事実説明　比較表現	事柄を比較する。表現と構成を見ていく。
第3回	事実説明　分類表現	物事を分類する。分類基準と構成を見ていく。
第4回	事実説明　原因・理由の表現	物事の原因・理由の表現と構成を見ていく。
第5回	事実説明　結果の表現	物事の結果の表現と構成を見ていく。
第6回	意見文と理由 反対意見に対する表現	意見文と根拠の構成、 また反駁の仕方も見ていく。
第7回	論証の仕方　論証の種類	データ　引用　ケースなどの種類を見ていく
第8回	論文作成の流れ	レポートの過程プロセスの説明と問題の焦点を考える方法を見ていく
第9回	序論で何を書くか。 問題提起	序論復習をしながら、自分の問題設定を明らかにする
第10回	本論のためのアウトライン	全体のアウトライン作成の方法を見る
第11回	結論の書き方	結論　注　参考文献の書き方を見る
第12回	レポート作成① 各自の問題点と構成の確認	実践　アウトライン作成からの文章化
第13回	レポート作成②各自のレポートの確認	全員の文章の公表と添削
第14回	レポート作成③書き直しの確認	文章推敲をして、書き直していく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、1時間を標準とする。
授業の中に書き終えなかったものは、hoppiiに提出。

【テキスト（教科書）】
特定の教科書は使用しない。コピーとレジメを配布する。

【参考書】
『新訂版留学生のための論理的な文章の書き方』二通信子他　スリーエーネットワーク
『改訂版大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』アカデミック・ジャパニーズ研究会　アルク
『レポート・論文を書くための日本語文法』小森真理他　くろしお出版

【成績評価の方法と基準】
毎回の提出物50％（遅れた場合は8割となる） レポートまとめ30%
平常点20% {授業参加、出席、質問等}

【学生の意見等からの気づき】
板書の字が読みにくいと言われ、丁寧に書くようにしている。わからないことは遠慮なく質問してもらうようにする。

【学生が準備すべき機器他】
必要時にパソコン持参などの指示

【その他の重要事項】
提出遅れは80%になるので、期限におくれないこと
欠席した場合は、クラスメートに聞いて補っておくこと
出席は全出席が前提。5回以上の欠席は不可とする
連絡事項はHoppiiをみてください
授業は基本対面授業とします

【日本語学】
＜専門領域＞日本語学
＜研究テーマ＞文法と日本語教育
＜主要研究業績＞
①1994「『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』について」『語学教育研究論叢』11号　大東文化大学
②1995『日本語の研究と教育　窪田富男教授退官記念論文集』「専門教育へつながる日本語教育の一試み」 専門教育出版
③2002「副詞『一応』について」『語学教育研究論叢』19号　大東文化大学
④2011「接尾辞『がち』『ぎみ』ついて」『語学教育研究論叢』28号　大東文化大学
⑤2012『教師主導型から活動型授業への改善の考察ー脱タスクを目指してー』2012年度web版実践研修フォーラム報告
⑥2014「活動型授業への展開」『教育推進開発機構紀要』5号　國學院大學
⑦2016「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題点」『語学教育研究論叢』34号　大東文化大学
⑧2020「日本語教育に日本語文法を活かしていくにはー「として」を例に考えた試みー」『語学教育研究論叢』第37号　大東文化大学

【日本語学】
学会発表
①2012.7「教師主導型から活動型のはざまでー脱タスクをめざしてー」日本語教育学会2012年度研究集会ー第5回ー【実践研究フォーラム】対話型セッション
②2013.7「活動型授業の展開と課題」第14回國學院日本語教育研究会
③2014.7「中上級レベルのレポート作成のための授業実践と課題ー論理的な文構成の出来ない要因を考えるー」日本語教育学会2014年度研究集会ー第7回ー【実践研究フォーラム】ポスターセッション
④2015.8「中・上級の作文の授業における問題点ー教師のフィードバックとレポートの論理的な構成の立て方について一」日本語教育学会　2015年度研究集会ー第8回ー【実践研究フォーラム】対話型セッション

【Outline (in English)】
This class learns how to write necessary report,article at a university.

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than an hour for a class.
：Your overall grade in the class will be decided based on the following assingments: 50%、Short reports : 30%、in class contribution: 20%

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本語論文作成基礎ＢⅣ

中島　久朱

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】
書き言葉のルールを学び、レポート、論文に必要な文章表現を身につける。
アカデミックな文章の構成力を身につけ、日本語で論理的な文章が書けるようになる。
適切な参考資料の引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。
フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レヴューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	文書・談話① 文の長さ	文の長さと読みやすさ
第2回	文書・談話② 読み手への配慮	読み手に配慮した文の書き方
第3回	指示詞による文の接続	文脈指示と接続
第4回	接続詞と文章の構成	接続詞による文章の接続と構成
第5回	意見と事実の提示	自身の意見を表す表現 他者の意見や事実を表す表現
第6回	レポート・論文の作成① アカデミックな文章の構成	複雑な内容を説明する場合の内容の整理 段落構成
第7回	レポート・論文の作成② 導入部の書き方	導入部の構成 定義と例示
第8回	レポート・論文の作成③ データの提示	データの提示と整理
第9回	レポート・論文の作成④ 引用	引用の方法と引用文の作成
第10回	レポート・論文の作成⑤ 対比と比較	対比と比較の方法
第11回	レポート・論文の作成⑥ 同意と反論	同意と反論の述べ方
第12回	レポート・論文の作成⑦ 考察と結論	考察と結論の述べ方 期末レポートのテーマの検討
第13回	期末レポート準備	期末レポートのアウトラインの作成と資料の整理
第14回	期末レポート発表	期末レポートの発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。
授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。
授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。予習課題が出された場合は、授業までに各自で取り組み、指示のある場合には事前に提出することとする。

【テキスト（教科書）】
毎回ハンドアウトを配布する。
作成したデータを保存するUSBメモリ等

【参考書】
アカデミック・ジャパニーズ研究会『留学生の日本語④論文作成編』アルク
石黒圭・筒井千絵 『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク
二通信子・佐藤不二子『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

【成績評価の方法と基準】
提出課題：30％、期末レポート：30%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】
文章作成のための授業ですので、実際に文章を書いて表現力を身につけるため、授業内でも作文の時間を多めに設けています。
文法については、要望により適宜説明の時間を増やしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
自習の際に使用するPC

【その他の重要事項】
教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。
欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本語教育学、比較教育学
＜研究テーマ＞マイノリティ教育、教育政策
＜主要研究業績＞
中島久朱（2008）「グローバル化と公教育－教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性－」、『多言語多文化－実践と研究』vol.1
中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第14号
中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会20周年記念年報　国際教育学の展開と多文化共生』 、学文社
中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合 －公教育における多様性の容認と平等の問題－」、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline (in English)】
This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.
At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.
Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments.Your study time will be at least two hours for each class meeting.
Final grade will be calculated according to the following process In class contribution:40%, the performance of the assignments:40%, term-end report:20%

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

日本語の性格 I

滝浦　真人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、それのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。春学期は、文字、音、語、文といった言語学的単位に沿いながら、ひと味違った角度からトピックを眺めていく。

【到達目標】
(1)日本語が漢字をどのように取り入れたかを理解し説明できるようになる。
(2)日本語の音声をコミュニケーションの観点で理解し説明できるようになる。
(3)言語の変化というものの正しい捉え方を理解し説明できるようになる。
(4)「ハ」と「ガ」を語り方の構えの相違として理解し説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、チャットやGoogleフォームなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	日本語の「性格」とはどういうことかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第2回	漢字と日本語	日本語が漢字をどのように取り入れたかを見て、そこから漢字使用の日本語らしさを見出す。
第3回	日本語の表記	漢字・ひらがな・カタカナを併用することの意味を、それぞれの経緯に遡って考える。
第4回	日本語の語種	日本語の語彙を構成する和語・漢語・外来語という語種のもつ機能的相違を探る。
第5回	日本語の音とリズム	モーラと音節の相違を理解した上で、日本語のリズムがどう構成されるか考察する。
第6回	音象徴と日本語	日本語で好まれる擬音・擬態語を支える音象徴を普遍と特殊の側面から考察する。
第7回	日本語のオノマトペ	擬音・擬態語の日本語的な特徴を検討しつつ、それが活用されてきた様を概観する。
第8回	連濁と日本語①	連濁が音声現象に見えてそうではないことを、生起／不生起環境の考察から見出す。
第9回	連濁と日本語②	連濁の機能を理解した上で、アクセントなどによる類似の機能についても検討する。
第10回	ラ抜き言葉	「日本語の乱れ」と言われたラ抜き言葉が、長い言語変化の一局面だったことを理解する。
第11回	指示詞コソア	指示詞コソアの３系列は“近中遠”ではないことを押さえた上で、その使われ方を理解する。
第12回	終助詞	なぜ現代日本語で終助詞が欠かせないのかを明らかにし、その語用論的機能を理解する。
第13回	「ハ」と「ガ」の語り	日本語の特徴である助詞「ハ」と「ガ」を対比的に取り上げ、語り方の構えとして考察する。
第14回	日本語でもの言うこと	まとめを兼ねて、もの言うことの“日本語らしさ”がどこにあるかを検討していく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】
教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】
滝浦真人編（2020）『日本語学入門』放送大学教育振興会
ほか授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業内での課題やディスカッション等）　60％
期末レポート　40％

【学生の意見等からの気づき】
学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】
昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語学・語用論・コミュニケーション論
＜研究テーマ＞ポライトネス、日本語語用論
＜主要研究業績＞（参考書に挙げたもの以外で）
滝浦真人（2016）『日本語リテラシー』放送大学教育振興会
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

【Outline (in English)】
・Class Title
Characteristics of the Japanese Language I
・Outline and Objectives
Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by its native speakers. In the spring semester, we will examine linguistic functional aspects, focusing on writing systems, phonetics and phonemics, vocabulary, and grammar from unique and alternative viewpoints.
・Goals
(1) Understand and explain how the Japanese language adopted Chinese characters.
(2) Comprehend and describe Japanese phonetics and phonemics from a communicative perspective.
(3) Develop a proper understanding of linguistic change and describe it adequately.
(4) Understand and explain differences between "wa" and "ga" as distinct discourse strategies.
・Work to Be Done Outside of Class (Preparation, etc.)
Students are expected to spend approximately two hours on preparation and review for each class session.

Preferably, they should review the reference books in advance and reinforce their understanding by reading relevant sections before and after class.
Additionally, students should revisit the handouts distributed in class as starting points for further consideration and discussion.
・Grading Criteria
Class participation (assignments, discussions, etc.): 60%
Final report: 40%

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

日本語の性格 II

滝浦　真人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、それのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。秋学期は、日本語に特徴的な対人関係表現をはじめ「語用論的」な面に着目して、“人が言葉で何をなすか？ ”について、中国語などとも比較しながら考えていく。

【到達目標】
(1)日本語を語用論的に見るための基礎知識を理解する。
(2)ポライトネスの考え方を理解し説明することができる。
(3)対人関係の表現に関わる諸現象を考察することができる。
(4)現代日本語の成立事情を理解し他言語と比較考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、チャットやGoogleフォームなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	日本語の「性格」とはどういうことかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第2回	語用論の基本	グライスの協調の原理と会話の原則をはじめ、語用論の基礎知識を再確認する。
第3回	効率と配慮	伝達効率と対人配慮が反比例の関係にあることを確認し、具体的に考察する。
第4回	ポライトネス	ポライトネスの理論的枠組みを理解し、日本語のポライトネス的性格を考察する。
第5回	呼称	対人関係専用の手段として呼称をとらえ、理論的と具体的の両面から考察する。
第6回	あいさつ	あいさつという行為の意味に立ち返り、あいさつの意味論と語用論を考察する。
第7回	感謝・謝罪	非常に基本的な言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第8回	依頼・勧誘と応諾・断り	典型的な言語行為の１つを取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第9回	褒め／褒められ・フェイスワーク	フェイスに直接関わる言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第10回	敬語（意味論）	対人関係専用手段としての敬語を取り上げ、それが対人的な〈距離〉の表現として機能していることを理解する。
第11回	敬語（語用論）	敬語は人間関係の像を表現するとの考えに立った上で、敬語の語用論を考察する。
第12回	授受表現	授受動詞を3系列有する日本語話者が、それによって何をやりとりしているのか考察する。
第13回	標準語と日本語	近代日本語の成立事情による影響を確認し、日本語のありかたについて考える。
第14回	日本語はどこへ向かっているか？	“気になる日本語”がいつも取り沙汰され、敬語などの“馬鹿丁寧化”が感じられる日本語の行く末を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】
教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
椎名美智・滝浦真人編（2022）『「させていただく」大研究』くろしお出版

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業内での課題やディスカッション等）　60％
期末レポート　40％

【学生の意見等からの気づき】
学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】
昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語学・語用論・コミュニケーション論
＜研究テーマ＞ポライトネス、日本語語用論
＜主要研究業績＞（参考書に挙げたもの以外で）
滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
滝浦真人（2005）『日本の敬語論　ポライトネス理論からの再検討』大修館書店
加藤重広・滝浦真人編（2016）『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房

【Outline (in English)】
・Class Title
Characteristics of the Japanese Language II
・Outline and Objectives
Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by its native speakers. In the fall semester, we will examine pragmatic aspects such as politeness and honorifics, focusing on interpersonal expressions unique to Japanese. We will also make comparative considerations with other languages such as Chinese.
・Goals
(1) Acquire foundational knowledge for analyzing Japanese from a pragmatic perspective.
(2) Understand and explain the concept of politeness.

(3) Examine various phenomena related to interpersonal expressions.
(4) Understand the historical development of modern Japanese and conduct comparative analysis with other languages.
・Work to Be Done Outside of Class (Preparation, etc.)
Students are expected to spend approximately two hours on preparation and review for each class session.
Preferably, they should review the reference books in advance and reinforce their understanding by reading relevant sections before and after class.
Additionally, students should revisit the handouts distributed in class as starting points for further consideration and discussion.
・Grading Criteria
Class participation (assignments, discussions, etc.): 60%
Final report: 40%

CUA500B7（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500）

伝統文化と民衆世界Ⅰ

ヤナ・ウルバノヴァー

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の古典文学と和歌、沖縄の琉歌から読み取れる日本の伝統文化について考えていきます。日本の文学と沖縄の文学の比較だけでなく、東洋と西洋の文学、文化、考え方も紹介し、それぞれの特徴について学んでいきます。グローバル世界に置かれている日本の伝統文化の位置付けに関する意識を深め、考察力を促します。受講生には、授業内に行われる発表や最後に提出して頂くことになるエッセイを書くために、授業で取り上げたテーマに関する資料を十分に復習し、考察を深めることが求められる。授業内のディスカッションへの積極的な参加および発表、期末のエッセイの提出がこのコースの評価基準となります。

【到達目標】
この授業を通じて次のスキルが獲得できます
1. 代表的な文学作品、表現、修辞法について学ぶことで、その文化や歴史的な背景に関する理解が深まります
2. 日本と沖縄、また東洋と西洋の文化、文学、世界観の特徴に関する知見を養うことができます
3. 学んだことや気付いたことについて各自が意見交換、議論、プレゼンテーションすることによって幅広い考察力を身に付けることができます
Through this course you will acquire the following skills:
1. You will deepen your understanding of Japanese culture, history and literature by studying classical Japanese literary works together with literary devices and expressions
2. You will further enhance your understanding of culture and literature by comparing literary works and cultures of Japan and Okinawa as well as comparing them with Western philosophical and literary approaches
3. You will learn how to express your ideas in speaking and writing by engaging in discussions and presentations and submitting a final essay on a designated topic

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
プリントや映像資料を使用した講義形式での授業を基本としますが、コースの後半において、受講生には、各自が学んだ知識を最大限に活用し、関心のある関連分野について考察した成果を発表してもらう機会を設けます。また、最終回には授業で取り上げたテーマに関してのエッセイを提出して頂きます。
課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行います。そこでは受講生からの質問も受け付けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、受講の心構え、成績評価の方法、発表の日程についての説明
第2回	日本文学の概要	奈良時代と平安時代を中心とした日本古典文学の代表的な作品やその時代背景の紹介
第3回	日本人の自然観	自然を愛する日本人、四季の意味、陰陽思想。自然に見る日本および西洋の文化・考え方の違い
第4回	日本美意識における主要な概念	兼好法師による『徒然草』から読み取れる日本文化や文学における美意識の四つの主要な概念
第5回	日本の神話世界	『古事記』に見られる古代日本の世界観
第6回	西洋の神話世界	ギリシャ神話、聖書から伝わるそれぞれの世界観
第7回	日本と西洋の神話世界の比較	日本の神話、ギリシャ神話、聖書から伝わるそれぞれの世界観をめぐるディスカッション
第8回	沖縄の歴史と文化	琉球列島における歴史と、文化の発達について（琉球王国から沖縄県へ）
第9回	沖縄の言葉①	琉球語の中にある沖縄語
第10回	沖縄の言葉②	琉歌に代表される言葉と表記法
第11回	学生の発表	本コースに関連するテーマについての学生の発表
第12回	琉歌の世界	琉歌の特徴（言葉、形式、作者、伴奏など）、古典音楽と民謡
第13回	恩納なべと吉屋つる	琉歌の伝説的な女流歌人二人の生涯と代表的な琉歌の紹介
第14回	まとめ	これまでの授業で取り上げたテーマを振り返る。エッセイの提出。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
前回の授業で学んだことを復習し、授業内に行われる発表および最後に提出するエッセイを書くための十分な考察を進めて頂きたい。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
Please revise all the materials distributed in class, as they will form the basis for the discussions and final essay. In addition, each student will be asked to deliver an oral presentation on a designated topic and to submit a final essay at the end of the semester.
Preparatory study and review time for this class are 2 hours each.

【テキスト（教科書）】
テキストは指定せず、プリントを使用します。

【参考書】
他の参考書については授業の進行にそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への参加、毎時提出するリアクションペーパー、ディスカッションへの参加等、約30%）、発表（40%）、エッセイ（30%）により評価します。
Grading criteria:
- Active participation in class (expressing opinions, engaging in discussions): 30%
- Oral presentation: 40%
- Final essay: 30%

【学生の意見等からの気づき】
国際的な視点で、伝統文化の重要性および異文化の存在について考察し、意見の交換ができる環境作りに努めます。受講生からのコメントを歓迎します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞

【＜専門領域＞】
日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【＜研究テーマ＞】
琉歌の表現研究―和歌やオモロとの比較

【＜主要研究業績＞】
●Portrayal of the Spiritual Otherworld in Okinawan Poetry in Light of the Transition from Epic to Lyric （沖縄の歌謡（琉歌、オモロ）における スピリチュアルな他界の描写―叙事から抒情への変移に関する考察―）（『言語と文化』21号、言語・文化センター、2024年1月）
●「琉歌における「天」について」（『日本文學誌要』107号、法政大学国文学会、2023年3月）
●「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123号（第52巻1号）、沖縄文化協会、2019年6月）
●「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122号（第51巻2号）、沖縄文化協会、2018年3月）
●「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121号（第51巻1号）、沖縄文化協会、2017年8月）
●The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs.（「沖縄の歌である琉歌における四季について－古典の和歌と沖縄のオモロとの比較－」）（『Studia Orientalia Slovaca (SOS)（スロバキアの東洋研究)』第15巻1号、Comenius University, Department of East Asian Studies（コメニウス大学東アジア研究学科)、2016年）
●『琉歌の表現研究―和歌・オモロとの比較から―』（森話社、2015年）
●「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015年）

【Outline (in English)】
This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.
Please revise all the materials distributed in class, as they will form the basis for the discussions and final essay. In addition, each student will be asked to deliver an oral presentation on a designated topic and to submit a final essay at the end of the semester.
Preparatory study and review time for this class are 2 hours each.
Grading criteria:
- Active participation in class (expressing opinions, engaging in discussions): 30%
- Oral presentation: 40%
- Final essay: 30%

CUA500B7（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500）

伝統文化と民衆世界 II

ヤナ・ウルバノヴァー

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の古典文学と和歌、沖縄の琉歌から読み取れる日本の伝統文化について考えていきます。日本の文学と沖縄の文学の比較だけでなく、東洋と西洋の文学、文化、考え方も紹介し、それぞれの特徴について学んでいきます。グローバル世界に置かれている日本の伝統文化の位置付けに関する意識を深め、考察力を促します。受講生には、授業内に行われる発表や最後に提出して頂くことになるエッセイを書くために、授業で取り上げたテーマに関する資料を十分に復習し、考察を深めることが求められる。授業内のディスカッションへの積極的な参加および発表、期末のエッセイの提出がこのコースの評価基準となります。

【到達目標】
この授業を通じて次のスキルが獲得できます
1. 代表的な文学作品、表現、修辞法について学ぶことで、その文化や歴史的な背景に関する理解が深まります
2. 日本と沖縄、また東洋と西洋の文化、文学、世界観の特徴に関する知見を養うことができます
3. 学んだことや気付いたことについて各自が意見交換、議論、プレゼンテーションすることによって幅広い考察力を身に付けることができます
Through this course you will acquire the following skills:
1. You will deepen your understanding of Japanese culture, history and literature by studying classical Japanese literary works together with literary devices and expressions
2. You will further enhance your understanding of culture and literature by comparing literary works and cultures of Japan and Okinawa as well as comparing them with Western philosophical and literary approaches
3. You will learn how to express your ideas in speaking and writing by engaging in discussions and presentations and submitting a final essay on a designated topic

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
プリントや映像資料を使用した講義形式での授業を基本としますが、コースの後半において、受講生には、各自が学んだ知識を最大限に活用し、関心のある関連分野について考察した成果を発表してもらう機会を設けます。また、最終回には授業で取り上げたテーマに関してのエッセイを提出して頂きます。
課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行います。そこでは受講生からの質問も受け付けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、受講の心構え、成績評価の方法、発表の日程についての説明
第2回	和歌の修辞法	和歌の序詞、枕詞、掛詞の役割
第3回	やまとうたと西洋の詩	和歌と西洋の詩における伝統的な技法と発想の比較
第4回	物語の世界	作り物語（『竹取物語』）と歌物語（『伊勢物語』）を中心に物語というジャンルの紹介
第5回	琉歌と和歌の表現－「面影」をめぐって	和歌における「面影」の琉歌への影響と琉歌が持つ独自性
第6回	琉歌と和歌の表現－「影」をめぐって	「影」を扱った和歌と琉歌の類似性と特徴
第7回	琉歌と和歌の表現－四季をめぐって	季節にまつわる和歌と琉歌の表現の比較
第8回	琉歌と和歌の表現－「冬」をめぐって	「冬」を詠んだ琉歌の独自性と和歌からの影響
第9回	琉歌と和歌の表現－「雪」をめぐって	和歌、琉歌、オモロに見られる「雪」に対する発想
第10回	学生の発表	本コースに関連するテーマについての学生の発表
第11回	琉歌とオモロにおける大和のイメージ	琉歌とオモロから窺える大和の姿
第12回	琉歌における他界観	琉歌における「天」の特徴
第13回	琉歌の構造に関する特徴	琉歌における句切れや体言止めなどの特徴
第14回	まとめ	これまでの授業で取り上げたテーマを振り返る。エッセイの提出。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
前回の授業で学んだことを復習し、授業内に行われる発表および最後に提出するエッセイを書くための十分な考察を進めて頂きたい。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
Please revise all the materials distributed in class, as they will form the basis for the discussions and final essay. In addition, each student will be asked to deliver an oral presentation on a designated topic and to submit a final essay at the end of the semester.
Preparatory study and review time for this class are 2 hours each.

【テキスト（教科書）】
テキストは指定せず、プリントを使用します。

【参考書】
他の参考書については授業の進行にそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への参加、毎時提出するリアクションペーパー、ディスカッションへの参加等、約30%）、発表（40%）、エッセイ（30%）により評価します。
Grading criteria:
- Active participation in class (expressing opinions, engaging in discussions): 30%
- Oral presentation: 40%
- Final essay: 30%

【学生の意見等からの気づき】
国際的な視点で、伝統文化の重要性および異文化の存在について考察し、意見の交換ができる環境作りに努めます。受講生からのコメントを歓迎します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞

【＜専門領域＞】
日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【＜研究テーマ＞】
琉歌の表現研究―和歌やオモロとの比較

【＜主要研究業績＞】
●Portrayal of the Spiritual Otherworld in Okinawan Poetry in Light of the Transition from Epic to Lyric （沖縄の歌謡（琉歌、オモロ）における スピリチュアルな他界の描写―叙事から抒情への変移に関する考察―）（『言語と文化』21号、言語・文化センター、2024年1月）
●「琉歌における「天」について」（『日本文學誌要』107号、法政大学国文学会、2023年3月）
●「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123号（第52巻1号）、沖縄文化協会、2019年6月）
●「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122号（第51巻2号）、沖縄文化協会、2018年3月）

●「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121号（第51巻1号）、沖縄文化協会、2017年8月）
●The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs.（「沖縄の歌である琉歌における四季について－古典の和歌と沖縄のオモロとの比較－」）（『Studia Orientalia Slovaca (SOS)（スロバキアの東洋研究)』第15巻1号、Comenius University, Department of East Asian Studies（コメニウス大学東アジア研究学科)、2016年）
●『琉歌の表現研究―和歌・オモロとの比較から―』（森話社、2015年）
●「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015年）

【Outline (in English)】
This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.
Please revise all the materials distributed in class, as they will form the basis for the discussions and final essay. In addition, each student will be asked to deliver an oral presentation on a designated topic and to submit a final essay at the end of the semester.
Preparatory study and review time for this class are 2 hours each.
Grading criteria:
- Active participation in class (expressing opinions, engaging in discussions): 30%
- Oral presentation: 40%
- Final essay: 30%

PHL500B7（哲学 / Philosophy 500）

日本の思想・西欧の思想 I

髙田　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業で゛は、「日本を超えて日本を捉える思考と手法」の習得を目指し、欧米の社会理論・社会思想の重要文献とそれに関連する日本の思想・理論、そして日本社会について学ぶ゛。欧米社会の現実から生まれた理論と日本をベ゛ースとした理論の差異を捉えつつ、欧米理論の日本やその他非西洋圏への 応用 (不) 可能性を考察する。春学期のテーマは、「文化・文明・近代化」である。前半は、ノルベルト・エリアスによる西洋をモデルとした文明化概念を検討する。後半は、S.N.アイゼンシュタットによる歴史社会学の分析を通じて日本の文明化・近代化を考察する。日本・西洋を比較しつつ、現在の社会学的到達点から見て、文明・近代概念がどこまで有効かを検証していく。

【到達目標】
-文化社会学・近代化の理論を学ぶ。
-西洋の文明化・近代化、日本の文明化・近代化のプロセスを学ぶ。
-西洋と日本の違いについて考えを深める。
-西洋理論の日本への応用(不)可能性を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は、セミナー形式で゛実施する。講義、文献講読、プレゼンテーションをベ゛ースに討論をおこなう。学際的、国際的な視点から、互いに学び合う空間を形成する。報告発表へのフィード゛バ゛ックについても、主にデ゛ィスカッションの場において実施する。その他、個別にフィード゛バ゛ックが゛必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業概要説明
第2回	『文明化の過程・上』序論・序言	西洋的文明化
第3回	『文明化の過程・上』第１部・第１章	ドイツの文化・文明
第4回	『文明化の過程・上』第１部・第２章	フランスの文化・文明
第5回	『文明化の過程・上』第２部・第１章～３章	「礼儀」の変遷
第6回	『文明化の過程・上』第２部・第５章～７章	生理的欲求と文明化
第7回	Multiple Modernities	複数の近代化論
第8回	『日本文明論的考察 1』序文・第１章	日本の謎
第9回	『日本文明論的考察 1』第２章	明治国家と近代日本社会
第10回	『日本文明論的考察 1』第３章	近現代日本
第11回	『日本文明論的考察 1』第４章	近代日本社会の試練
第12回	『日本文明論的考察 1』第５章	「不調和」、紛争、抗議とそれらの影響
第13回	『日本文明論的考察 1』第６章	近現代日本の政治・社会システム
第14回	『日本文明論的考察 3』第１６章	文明間比較

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポ゜イントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 本授業の準備(予習)および゛復習時間は、各 2 時間を標準とするか゛、文献および゛研究報告をする週には、さらに 2 時間程度の準備の時間が゛必要な場合が゛ある。

【テキスト（教科書）】
ノルベルト・エリアス『文明化の過程・上』法政大学出版局
S.N.アイゼンシュタット『日本比較文明論的考察 1』岩波書店
その他の使用テキストは授業内に提示する。

【参考書】
適宜授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】
- 授業参加・発言: 20%
- プレゼンテーション: 30%
- 最終レポ゜ート: 50%

【学生の意見等からの気づき】
報告へのフィードバックを適宜行なう。

【学生が準備すべき機器他】
パーソナルコンピューター

【その他の重要事項】
授業の詳細については初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】
< 専門領域>
政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学
< 研究テーマ>
- 日本の市民社会と社会運動
- グローバル化と日本の社会変動
< 近年の主要著書>
-「「第一世界」と「第三世界」のはざまで ―日本の60 年代における「第三世界論」との出会いと戸惑い―」『国際日本学』第21号、2024年、27-58頁。
-「トランスナショナルな日本研究に向けて」『国際日本学』第20号、2023年、21-45頁。
-「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 ―誰に向けて、どのように日本を語るか ―」『国際日本学』第 19 号、2022年、27-60 頁。
-「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法 ―」『国際日本学』第 18 号、2021 年、3-36 頁。
- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarno☒ci, 2020, pp. 137 - 155.
- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.
- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture , 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor &Francis.

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【Outline (in English)】
This course explores modern Western and Japanese social and political theories. We will learn the differences between theories that emerged from Western realities and theories that were generated in Japan or by Japanese scholars. The course also intends to learn the (in)applicability of Western theories to Japanese or other non-Western societies. The spring semester theme is “Culture, Civilization, and Modernization.” The first half of the semester examines Norbert Elias’s concept of civilization, modeled based on the West. The second half explores Japan’s civilization and modernization through S.N. Eisenstadt’s historical sociology. While comparing Japan and the West, we will also consider the extent to which concepts of civilization and modernity remain valid from the perspective of current sociological achievements.
[Learning activities outside of classroom]
Students are required to read assinged text in advance and prepare for discussion.
The presenter needs to carefully read the texts and prepare slides that include the main argument of
each text and questions to discuss during class.
Generally, students need about two hours of advance study to prepare for the class. However, you will need at least two more hours when you are assigned to present.
[Grading Criteria /Policy]
Class Participation and Discussion: 20%
Presentation: 30%
Final Report: 50%

PHL500B7（哲学 / Philosophy 500）

日本の思想・西欧の思想 II

髙田　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、「日本を超えて日本を捉える思考と手法」の習得を目指し、欧米の社会理論、社会思想の重要文献とそれに関連する日本の理論・思想を学ぶ。欧米社会の現実から生まれた理論と日本をベースとした理論の差異を考察しつつ、欧米理論の日本やその他非西洋圏への応用（不）可能性を考察する。秋学期は、人種（race）をテーマに、この分野の古典であるフランツ・ファノンの思想を学ぶ。後半では、ファノンの思想をもとに日本の人種主義の特徴について考察する。ディスカッションを通じて欧米の人種主義と日本のそれとを対比的に論じながら、人種がもたらす差別の政治について理解を深める。

【到達目標】
-ファノンの人種論を学ぶ。
-日本の人種主義の特徴を捉える。
-西洋と日本の人種概念の差異を考察する。
-西洋理論の日本への応用(不)可能性を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は、セミナー形式で゛実施する。講義、文献講読、プレゼンテーションをベ゛ースに討論をおこなう。学際的、国際的な視点から、互いに学び合う空間を形成する。報告発表へのフィード゛バ゛ックについても、主にデ゛ィスカッションの場において実施する。その他、個別にフィード゛バ゛ックが゛必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業テーマと授業計画
第2回	『黒い皮膚・白い仮面』序文・はじめに・第１章	黒人と言語
第3回	『黒い皮膚・白い仮面』第２章・第３章	黒い皮膚
第4回	『黒い皮膚・白い仮面』第４章・第５章	依存コンプレックス
第5回	『黒い皮膚・白い仮面』第６章・第７章	精神病理学
第6回	『黒い皮膚・白い仮面』結論	ファノンの認知
第7回	『日本の人種主義』はじめに・第１章	欧米の人種概念
第8回	『日本の人種主義』第２章	日本の人種概念
第9回	『日本の人種主義』第３章	人種混淆
第10回	『日本の人種主義』第４章	多様な人種主義
第11回	『日本の人種主義』第５章	差別
第12回	『日本の人種主義』第６章	偏見とステレオタイプ
第13回	『日本の人種主義』第７章	アイデンティティ
第14回	まとめ	総括ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポ゛イントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 本授業の準備(予習)および゛復習時間は、各 2 時間を標準とするが゛、文献および゛研究報告をする週には、さらに 2 時間程度の準備の時間が゛必要な場合が゛ある。

【テキスト（教科書）】
フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』（みすず書房、2021年）
河合優子『日本の人種主義ートランスナショナルな視点からの入門書』（青弓社、2024年）
その他の参考テキストは適宜授業内で提示する。

【参考書】
小野正嗣 、NHK「100分de名著」2月はファノン『黒い皮膚・白い仮面』（NHK出版、2021年）
その他の参考テキストは適宜授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】
- 授業参加・発言: 20%
- プレゼンテーション: 30%
- 最終レポ゛ート: 50%

【学生の意見等からの気づき】
適宜報告についてのフィードバックを行なう。

【学生が準備すべき機器他】
パーソナル・コンピューター

【その他の重要事項】
授業の詳細については初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】
< 専門領域>
政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学
< 研究テーマ>
- 日本の市民社会と社会運動
- トランスナショナリズムと日本の社会変容 < 近年の主要著書> -「「第一世界」と「第三世界」のはざまで ―日本の60 年代における「第三世界論」との出会いと戸惑い―」『国際日本学』第21号、2024年、27-58頁。 -「トランスナショナルな日本研究に向けて」『国際日本学』第20号、2023年、21-45頁。 -「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 ―誰に向けて、どのように日本を語るか ―」『国際日本学』第 19 号、2022年、27-60 頁。 -「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本を とらえる、思考と手法 ―」『国際日本学』第 18 号、2021 年、3-36 頁。
- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarno☒ci, 2020, pp. 137 - 155.
- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.
- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture , 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor &Francis.

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【Outline (in English)】
This course examines Western and Japanese modern sociological and political theories. We will compare theories that arose from Western realities and theories that were generated in Japan or by Japanese scholars. The course also aims to evaluate the (in)applicability of Western theories to Japanese and other non-Western societies. In the fall semester, the focus will be on race and racism, with an analysis of Franz Fanon's work, a foundational figure in this field. The second half of the semester will investigate the features of Japanese racism. Through discussions, we will compare Western racism with Japanese racism, enhancing our understanding of the politics of discrimination based on race.
[Learning activities outside of classroom]
Students are required to read assinged text in advance and prepare for discussion.
The presenter needs to carefully read the texts and prepare slides that include the main argument of
each text and questions to discuss during class.
Generally, students need about two hours of advance study to prepare for the class. However, you will need at least two more hours when you are assigned to present.
[Grading Criteria /Policy]
Class Participation and Discussion: 20%
Presentation: 30%
Final Report: 50%

HIS500B7（史学 / History 500）

史料から読む琉球とアジアⅠ

得能　壽美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
琉球からみた東アジアとの関係史を、琉球史料の講読をしつつ考察する。前近代琉球を考えるためには、その歴史的環境から、中国・日本の史料、当然ながら琉球の史料にあたらなくてはならない。史料講読は琉球史料を中心に進め、一定程度の理解と読解能力を身に着け、琉球史を考える眼を養う

【到達目標】
琉球史料を中心に史料講読を進め、一定程度の理解と読解能力を身に着け、歴史学の方法により総合的・実証的に考える眼を養う.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
前半は琉球史の概括的な理解と、史料の全体的な把握にあたる。後半は、琉球史料から、その解読方法を学びつつ、東アジアにおける関係史をみる。基本的には講義だが、史料講読に際しては、習熟度によっては担当部分を決めて報告を求めることも考えたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の紹介と、琉球・中国・日本の関係史を概括的にみる。
2	日本史と琉球史の史料論	日本史研究と琉球史研究における史料論と、その相違。
3	古琉球期史料にみる対外関係（中国・日本古代史料）	古代の琉球をめぐる中国と日本の史料について
4	古琉球史料にみる対外関係（歴代宝案・朝鮮王朝実録・琉球史料）	中世の琉球をめぐる中国・朝鮮・琉球の史料について
5	近世琉球史料にみる対外関係（島津関係史料）	1609年以降の島津による琉球統治関係史料について
6	近世琉球史料にみる対外関係（琉球史料）	いわゆる日中両属に関する琉球史料について
7	史料講読　中山世譜・中山世鑑	史料講読。首里王府編纂史料にみる近世琉球のありかた。
8	史料講読　羽地仕置	史料講読。羽地朝秀の施策にみる琉球の立場と政治的転換
9	史料講読　羽地仕置	史料講読。近世琉球の成立
10	史料講読　御教条	史料講読。蔡温の琉球史の認識と立場
11	史料講読　御教条	史料講読。近世琉球に生きた人々
12	史料講読　御教条	史料講読。琉球における儒教的支配の成立
13	史料講読　伊江親方日々記	史料講読。対島津関係
14	史料講読　伊江親方日々記	史料講読。琉球内政関係

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
全体的に下記で示す参考書を読む。史料講読については、事前に複写を配布するので、予習をする。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。史料等を配布する。

【参考書】
『沖縄からアジアが見える』比嘉政夫　岩波ジュニア新書
『アジアのなかの琉球王国』高良倉吉　吉川弘文館（歴史文化ライブラリー47）
『琉球王国』高良倉吉　岩波新書
『沖縄入門－アジアをつなぐ海域構想』浜下武志　ちくま新書

【成績評価の方法と基準】
平常点70％　レポート30％
毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極的にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認し、さらに史料による考察を加えてほしい。

【学生の意見等からの気づき】
多様な研究、あるいは新しい研究分野の創出につながるよう、最新の研究成果をとりこむ。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　琉球史　近世史
＜研究テーマ＞　八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論
＜主要研究業績＞
『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク－』単著（榕樹書林　2007年　316頁）
「中山政権と宮古・八重山」（財団法人沖縄県文化振興会史料編集室『沖縄県史　各論編第三巻　古琉球』沖縄県教育委員会　2010年240～259頁）
「移動するナマコと変化するその役割－近世八重山ナマコの行方－」『琉球・沖縄研究』3（早稲田大学琉球・沖縄研究所　2010年115～140頁

【Outline (in English)】
The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.
Learning activities outside of classroom
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Your required study time is at least one hour for each class meeting.
Grading Criteria /Policies
Final grade will be calculated according to the following process term-end examination(30%) , and in-class contribution（70%）.

HIS500B7（史学 / History 500）

史料から読む琉球とアジアII

得能　壽美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
琉球からみた東アジアとの関係史を、具体的な論考で使用した史料を確認しつつ考察を進める。論文作成のための課題設定、史料調査の方法、史料の所在なども、具体的事例をもとに講義する。史料について理解と読解能力を身に着けられるようにする。日本史とは異なる琉球史の方法と史料によって、新たな研究テーマの創成を考える。

【到達目標】
史料について理解を身に着ける。日本史とは異なる琉球史の方法と史料によって、学生自身の研究テーマにもそくして、新たな研究テーマの創成を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
「史料から読む琉球とアジアⅠ」を受けて、具体的な論考に使用した史料を講読しつつ、歴史的状況を解説する。史料講読から新たな研究テーマを創成し、その報告を求めることも考えたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の概要と、琉球・中国・日本の関係史を概説する。
2	日本史と琉球史の史料論	日本史と琉球史の史料と、史料論の相違について
3	近世史料にみる琉・中・日の関係史　序論	近世の八重山産ナマコを事例に、琉球・中国・日本の関係史を考えるための基本的な認識について
4	琉球関係史料（近世八重山ナマコと上納）	史料講読。近世八重山の産物と上納についての基本的史料の講読
5	琉球関係史料（王府役人らの所望）	史料講読。首里王府役人関係史料。
6	琉球関係史料（人頭税のなかの八重山ナマコ）	史料講読。人頭税の理解と、ナマコ上納のありかた
7	琉球関係史料（食に関する情報）	史料講読。八重山・沖縄本島などの食に関する史料にみられるナマコ
8	日本関係史料（薩摩・江戸へ行くナマコ）	史料講読。薩摩・幕府関係史料。
9	日本関係史料（ヤマトのナマコ事情と南の産物）	史料講読。統制や食に関する史料。
10	中国関係史料（冠船で供されるナマコ）	史料講読。琉球国王の死去と即位に関する冠船の解説と、冠船料理
11	中国関係史料（冠船貿易のナマコ）	史料講読。冠船貿易のあり方と、ナマコなどの売買。
12	中国関係史料（進貢貿易のナマコ）	史料講読。進貢貿易のあり方と、ナマコなどの売買。
13	近代史料（ヤマトによる開発）	史料講読。琉球処分後のヤマトによる海産物資源の開発。
14	近代史料（統計・新聞資料）	史料講読。統計・新聞にみる近代のナマコ産業。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
全体的に下記で示す参考書を読む。史料講読については、事前に複写を配布するので、予習をする。

【テキスト（教科書）】
「移動するナマコと変化するその役割」（得能、『琉球・沖縄研究』第３号）。コピーを配布する。

【参考書】
『琉球王国』高良倉吉　岩波新書
『琉球・沖縄史の世界』豊見山和行（編）　吉川弘文館（日本の同時代史18）
『近世八重山の民衆生活史』得能壽美　榕樹書林

【成績評価の方法と基準】
平常点70％　レポート30％
毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認するとともに、新たな研究テーマについて提案してほしい。

【学生の意見等からの気づき】
毎回、時間の許す限り、史料の読み方を解説する。多様な研究、新しい研究分野を考えるために、最新の研究成果をみる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　琉球史　近世史
＜研究テーマ＞　八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論
＜主要研究業績＞
『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク－』単著（榕樹書林　2007年　316頁）
「中山政権と宮古・八重山」（財団法人沖縄県文化振興会史料編集室『沖縄県史　各論編第三巻　古琉球』沖縄県教育委員会　2010年240～259頁）
「移動するナマコと変化するその役割－近世八重山ナマコの行方－」『琉球・沖縄研究』３（早稲田大学琉球・沖縄研究所　2010年115～140頁

【Outline (in English)】
The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.
Learning activities outside of classroom
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Your required study time is at least one hour for each class meeting.
Grading Criteria /Policies
Final grade will be calculated according to the following process term-end examination(30%), and in-class contribution(70%）.

HIS500B7（史学 / History 500）

戦後沖縄と対外関係Ⅰ

明田川　融

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
沖縄戦（1945年）から80年が、そして沖縄の「本土復帰」（1972年）からも半世紀以上がたつ。いわゆる本土の、沖縄に対する米国の軍事植民地意識、そして「構造的差別」は消え去っていない。むしろ、そうした意識や差別は、より執拗になってさえいるように思われる。本授業では、沖縄・日本本土・米国の、ときに引き合い、ときに反撥し合う力学が、戦後沖縄の形成にどのような影響を及ぼしたかを解き明かす糸口を学生とともに探りたい。

【到達目標】
学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
以下に列挙するトピックを道標として、2022年に刊行された『沖縄県史　各論編　第七巻　現代』（以下『沖縄県史』と略記する。書誌データの詳細は「テキスト（教科書）」欄を参照のこと）を精読したい。
第2回以降、授業のはじめに、前回授業で教員が提起した課題等に対する個々の受講生の応答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	沖縄戦中～沖縄戦後	『沖縄県史』第1部概説および第1章を精読する（以下、精読する箇所のみを記す）。
2	「自治」のはじまり	第1部第2章
3	混乱期の暮らし	第1部第3章
4	占領初期の教育・文化政策	第1部第4章
5	恒久基地化の決定	第1部第5章およびコラム
6	琉球政府	第2部概説および第1章
7	海兵隊の沖縄移駐	第2部第2章
8	島ぐるみ闘争	第2部第3章およびコラム
9	「自立経済」をめざして	第2部第4章
10	沖縄統治のアメとムチ	第2部第5章およびコラム
11	統治手法の転換と宣撫政策	第3部概説および第1章
12	日本政府の援助と施政権返還問題	第3部第2章
13	自治・人権と復帰運動	第3部第3章およびコラム
14	ベトナム戦争と〝基地沖縄〟	第3部第4章および第5章

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参考までに、本学学則に鑑みた場合、この授業の準備学習・復習時間は4時間以上が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かずで、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じることが望ましい。
「戦後沖縄と対外関係Ⅱ」をも履修することが望ましい。

【テキスト（教科書）】
沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史　各論編　第七巻　現代』（沖縄県教育委員会、2022年）。
くわえて、古典のなかの古典といえますが、さしあたり手ごろな通史として中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』（岩波書店、1976年）、および宮里政玄ほか編著『戦後沖縄の政治と法―1945-72年』（東京大学出版会、1975年）を、また、沖縄をめぐる日米関係史について書かれた研究として、河野康子『沖縄返還をめぐる政治と外交―日米関係史の文脈』（東京大学出版会、1994年）、宮里『日米関係と沖縄―1945-1972』（岩波書店、2000年）、沖縄国際大学公開講座委員会編集・発行『基地をめぐる法と政治』（2006年）、我部政明『戦後日米関係と安全保障』（吉川弘文館、2007年）、平良好利『戦後沖縄と米軍基地　「受容」と「拒絶」のはざまで　1945-1972年』（法政大学出版局、2012年）を挙げておきます。近年の示唆にとむ研究成果として、鳥山淳『沖縄基地社会の起源と相克　1945-1956』（勁草書房、2013年）および櫻澤　誠『沖縄現代史―米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』（中央公論新社、2015年）、さらに野添文彬『沖縄返還後の日米安保―米軍基地をめぐる相克』（吉川弘文館、2016年）もぜひ一読されたい。
ここ2、3年の研究成果として、野添文彬『沖縄米軍基地全史』（吉川弘文館、2020年）、前田勇樹・古波藏契・秋山道宏編『つながる沖縄近現代史―沖縄のいまを考えるための十五章と二十のコラム』（ボーダーインク、2021年）、平良好利・高江洲昌哉編『戦後沖縄の政治と社会　「保守」と「革新」の歴史的位相』吉田書店、2022年、宮城 修『ドキュメント　〈アメリカ世〉の沖縄』岩波書店、2022年をも参照されたい。

【参考書】
拙著『沖縄基地問題の歴史―非武の島、戦の島』（みすず書房、2008年）。

【成績評価の方法と基準】
出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100％）

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムにアクセスできるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】
受講生は学習支援システムを小マメにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　日米関係史、日本政治外交史
＜研究テーマ＞　日米地位協定の成立過程
沖縄と日米安保体制の歴史
日本と核兵器との関係史
＜主要研究業績および刊行物＞
・『日米行政協定の政治史―日米地位協定研究序説―』法政大学出版局、1999年。
・『沖縄基地問題の歴史―非武の島、戦の島―』みすず書房、2008年（第30回沖縄協会・沖縄研究奨励賞[社会科学部門]受賞）。
・『日米地位協定―その歴史と現在―』みすず書房、2017年。
・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第1回配本分、全7巻）現代史料出版、2017年。
・「核兵器と『国民の特殊な感情』」1～6（雑誌『みすず』に2013年6月号より2015年8月まで不定期連載）。
・ジョン・ハーシー『ヒロシマ　増補版』法政大学出版局、2003年（共訳）。
・ジョン・W. ダワー著『昭和　戦争と平和の日本』みすず書房、2010年（監訳）。
・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ　「パックス・アメリカーナ」か「パックス・アジア」か』NHK出版、2014年（共訳）。
・『占領期年表 1945-1952年　沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015年（監修）。
近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する〝国民感情〟と政府の安全保障政策との連関について研究をまとまるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。
また、1950年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしえたことと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。
現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授および河野康子・法政大学名誉教授ならびに平良好利・中京大学准教授らによる監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集成の編集補佐がおもな仕事となっている。この仕事においては、第1回配本（全7巻）および第5回配本（全6巻）の解説を執筆した。

【Outline (in English)】
【Course outline】
Eighty years have passed from the battle in Okinawa, and fifty years from the reversion of Okinawa. Okinawa still seems to be under U.S. military colonialism. It suffers structural discrimination by the people of Japan proper as well. In post-war Okinawa and foreign relations 1, we consider and discuss the dynamism that formed post-war Okinawa. In this class, post-war means the period from the battle in Okinawa to the end of the cold war.
【Learning objectives】
The goal of this course is to understand Ryukyu/Okinawa and its foreign relations after World War II.
【Learning activities outside of classroom】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading criteria/policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
In class contribution:100%

HIS500B7（史学 / History 500）

戦後沖縄と対外関係 II

明田川　融

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　これまで沖縄には在日米軍専用基地が著しく偏在してきた。その基地には米軍が排他的管理権を行使し、さらに、基地の外の軍用機事故等に対する捜査・検証から日本側が排除されるということも少なくない。また、1972年の施政権返還まで、米軍構成員・軍属・それらの家族に琉球民裁判所の裁判権は及ばず、施政権返還後も日本側の裁判権行使はままならない。本授業で学生は、これらの事柄に象徴される「戦後」沖縄が負わされた――おもに施政権返還後の――歴史を考察することになる。

【到達目標】
　学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　以下に列挙するテーマを道標として、『沖縄県史　各論編　第七巻　現代』（以下『沖縄県史』と略記する。書誌データの詳細は「テキスト（教科書）」欄を参照のこと）を読み進めて行きたい。
　第2回以降、授業のはじめに、前回授業で教員が提起した課題等に対する個々の受講生の応答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	施政権返還へ向けた動き	『沖縄県史』第4部概説および第1章を精読する（以下、精読する箇所のみ記す）。
第2回	米軍基地と返還	第4部第2章およびコラム
第3回	復帰対策要綱・特別措置・振興法	第4部第3章およびコラム
第4回	開発と住民運動	第4部第4章
第5回	米軍基地存置と自衛隊の配備	第4部第5章
第6回	沖縄振興と観光業	第5部第1章およびコラム
第7回	返還後の基地問題	第5部第2章
第8回	沖縄戦の記録と記憶	第5部第3章
第9回	基地・開発・環境	第5部第4章
第10回	島嶼と離島の歴史・現状・課題	第5部第5章およびコラムならびに第6部第5章
第11回	沖縄戦の影	第6部第1章
第12回	異文化と伝統、県民意識の移り変わり	第6部第2章およびコラムならびに第3章
第13回	基地の島の教育と労働	第6部第4章
第14回	移民と世界の「ウチナーンチュ」	第6部第6章

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　参考までに、本学学則に鑑みた場合、この授業の準備学習・復習時間は4時間以上が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設を〝粛々と〟強行している名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じることが望ましい。
　「戦後沖縄と対外関係Ⅰ」をも履修することが望ましい。

【テキスト（教科書）】
　沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史　各論編　第七巻　現代』（沖縄県教育委員会、2022年）。

【参考書】
　「戦後沖縄と対外関係Ⅰ」の参考書として挙げたものの他に、近年に刊行された以下の文献を挙げておく。
　拙著『日米地位協定　その歴史と現在』（みすず書房、2017年）。
　山本章子『日米地位協定　在日米軍と「同盟」の70年』（中央公論新社、2019年）。
　信夫隆司『米軍基地権と日米密約　奄美・小笠原・沖縄返還を通して』（岩波書店、2019年）。
　信夫隆司『米兵はなぜ裁かれないのか』（みすず書房、2021年）。

【成績評価の方法と基準】
　出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100％）

【学生の意見等からの気づき】
　アンケート対象外につき該当なし。

【学生が準備すべき機器他】
　学習支援システムにアクセスできるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】
　受講生は学習支援システムを小マメにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　日米関係史、日本政治外交史
＜研究テーマ＞　日米地位協定の成立過程
　沖縄と日米安保体制の歴史
　日本と核兵器との関係史
＜主要研究業績および刊行物＞
・『日米行政協定の政治史―日米地位協定研究序説―』法政大学出版局、1999年。
・『沖縄基地問題の歴史―非武の島、戦の島―』みすず書房、2008年（第30回沖縄協会・沖縄研究奨励賞[社会科学部門]受賞）。
・『日米地位協定―その歴史と現在―』みすず書房、2017年。
・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第1回配本分、全7巻）現代史料出版、2017年。
・「核兵器と『国民の特殊な感情』」1～6（雑誌『みすず』に2013年6月号より2015年8月まで不定期連載）。
・ジョン・ハーシー『ヒロシマ　増補版』法政大学出版局、2003年（共訳）。
・ジョン・W. ダワー著『昭和　戦争と平和の日本』みすず書房、2010年（監訳）。
・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ　「パックス・アメリカーナ」か「パックス・アジア」か』NHK出版、2014年（共訳）。
・『占領期年表 1945-1952年　沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015年（監修）。
　近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する〝国民感情〟と政府の安全保障政策との連関について研究をまとまるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。
　また、1950年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしえたことと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。
　現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授および河野康子・法政大学名誉教授ならびに平良好利・中京大学准教授らによる監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集成の編集補佐がおもな仕事となっている。この仕事においては、第1回配本（全7巻）および第5回配本（全6巻）の解説を執筆した。

【Outline (in English)】
【Course outline】
　United States military bases in Japan unevenly exist in Okinawa prefecture. U.S. armed forces exercise exclusive rights over them. And the Japanese authorities often can not exercise the right of search or inspection with respect to the accidents of U.S. military aircraft. Before the reversion of Okinawa, Okinawan court could not have criminal jurisdiction over the members of U. S. armed forces, civilian component and their dependents. Even after the reversion, Japanese court often cannot exercise the criminal jurisdiction over them. In post-war Okinawa and foreign relations 2, we consider the U.S.-Japan Status of Forces Agreement (SOFA or Chii-Kyotei) providing the conditions of the stationing of the U.S. military forces. And focusing SOFA problems, we discuss the history of the U.S.-Japan-Ryukyu/Okinawa relations.
【Learning objectives】
　The goal of this course is to understand Ryukyu/Okinawa and its foreign relations after reversion of Okinawa.
【Learning activities outside of classroom】
　Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading criteria/policy】
　Your overall grade in the class will be decided based on the following
　In class contribution:100%

ART500B7（芸術学 / Art studies 500）

仏教思想と仏教美術Ⅰ

高橋　悠介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の中世には、聖徳太子関連寺院を中心に、太子の伝記が連綿として編まれた。こうした太子伝には、聖徳太子をめぐる伝承のみならず、仏教教説や寺院における注釈学、太子関連の諸寺院の動向など、様々な背景がうかがえる。また、聖徳太子の伝記は絵画化されて絵解きが行われ、特徴的な太子像も造像された。ここでは、後世への影響力の大きかった『聖徳太子伝暦』と、鎌倉後期の『正法輪蔵（聖法輪蔵）』という二つの太子伝から、特徴的な場面を取り上げて、読み比べつつ、これらと関連の深い太子絵伝や太子像などの造形作品について検討したい。なお、『正法輪蔵（聖法輪蔵）』の記事が欠けている部分は、他の文保本系太子伝を参照する。

【到達目標】
・図像資料とその背景にある文献資料を、複合的に読解する技術を身につける。
・寺院圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
・日本の寺院における学問についての基礎知識を身に付け、中世の聖徳太子信仰をはじめ、日本の仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
最初は、聖徳太子伝の展開に関する概要と太子関連の造形作品、講読にあたっての基本的な知識について、講義形式で授業を進める。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。また、広く仏教美術に関わる展覧会の見学を、校外学習として予定している。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要・進め方について説明。
第2回	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本・太子絵伝の展開	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本、聖徳太子の伝記の造形化（彫刻・絵画）について講義。
第3回	仏教美術に関する校外学習	都内の美術館・博物館見学を予定。
第4回	太子三十三歳条（一）	山城楓野関係の記事を講読し、その造形を比較。
第5回	太子三十三歳条（二）	太子未来記について検討。
第6回	太子三十三歳条（三）	太子未来記と中世の未来記の検討。
第7回	仏教美術に関する校外学習	都内の美術館・博物館見学を予定。
第8回	太子三十四歳条	鞍部鳥の造像記事を講読し、その造形を比較。
第9回	太子三十五歳条（一）	勝鬘経講讃の記事を講読。
第10回	太子三十五歳条（二）	勝鬘経講讃の記事を検討し、その造形を比較。
第11回	太子三十六歳条（一）	衡山持経の記事を講読。
第12回	太子三十六歳条（二）	衡山持経の記事を検討し、その造形を比較。
第13回	太子三十六歳条（三）	衡山関係説話の講読。
第14回	太子三十六歳条（四）	衡山関係説話を検討し、その造形を比較。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。指定した講読文献の当該記事をよく読んで利解すると共に、関連する複数の造形を比較検討すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。

【参考書】
・『東大寺図書館蔵文明十六年書写『聖徳太子伝暦』影印と研究』（桜楓社、1985年）
・『日本庶民文化史料集成』第二巻（三一書房、1974年）
・慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『中世聖徳太子伝集成』（勉誠出版、2005年）
・『日本の美術442 中世の童子形』（至文堂2003年）
・図録『聖徳太子展』（NHK・NHK プロモーション、2001年）
・図録『聖徳太子ー日出づる処の天子』（日本経済新聞社、2021年）
その他、授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表５０%、平常点５０%。

【学生の意見等からの気づき】
該当なし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学
＜研究テーマ＞ 中世仏教文学・芸能・寺院資料論
＜主要研究業績＞
・『禅竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014 年）
・「荒神の図像について―如来荒神を中心に―」（仏教美術論集第二巻『図像学Ⅰ―イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、2012年5 月）
・「律院称名寺と聖徳太子伝―釋了敏の写本を中心に」（『説話文学研究』52 号、2017 年9 月）
・「湛睿説草と『発心集』『唐物語』」(『古典文学研究の対象と方法』花鳥社、2024年3月）

【Outline (in English)】
This course deals with the biography and image of Prince Shotoku.
At the end of the course, students are expected to become able to read and understand ancient Buddhist documents.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Grading will be decided based on lab reports (50%), and in-class contribution (50%).

ART500B7（芸術学 / Art studies 500）

仏教思想と仏教美術 II

高橋　悠介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
仏教図像集として知られる『覚禅抄』のうち、「造塔」の巻の記事を講読しつつ検討する。『覚禅抄』は、金胎房覚禅（1143-?）が編纂した図像集で、『百巻鈔』とも呼ばれ、先行する『図像抄』『別尊雑記』等もふまえた、真言密教の事相や図像に関する重要資料となっている。経典や儀軌、古記録からの引用や先例・故実などが記されており、それぞれの本文を丁寧に読み、関連する図像や先行する図像集も比較しながら、検討したい。

【到達目標】
・『覚禅抄』の講読を通して、日本中世の仏教文献を読解する技術を習得する。
・文献と図像資料を複合的に読解する技術を身につける。
・『覚禅抄』を通して、日本の仏教文化や図像に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
最初は、『覚禅抄』や仏教図像についての基本的な知識について、講義形式で授業を行う。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。授業内で議論できなかったことも、リアクションペーパー等の方法により意見を集め、次回に取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義の概要・進め方について説明。
第2回	『覚禅抄』の概要と仏教図像	『覚禅抄』を講読する上での基礎知識について講義。
第3回	仏教美術に関する校外学習	都内の美術館・博物館等の見学を予定。
第4回	『覚禅抄』「造塔」造塔法具書～塔与率都婆差別事	造塔法具書～塔与率都婆差別事の記事等の講読・検討。
第5回	『覚禅抄』「造塔」塔荘厳～小塔事	塔荘厳～小塔事の記事等の講読・検討。
第6回	仏教美術に関する校外学習	都内の美術館・博物館等の見学を予定。
第7回	『覚禅抄』「造塔」芥子計塔事～薄福人可造塔事	芥子計塔事～薄福人可造塔事の記事等の講読・検討。
第8回	『覚禅抄』「造塔」以七宝可造塔事～安住長者栴檀塔事	以七宝可造塔事～安住長者栴檀塔事の記事等の講読・検討。
第9回	『覚禅抄』「造塔」八萬四千里水精塔事～塔安置法花経事	八萬四千里水精塔事～塔安置法花経事の記事等の講読・検討。
第10回	仏教美術に関する校外学習	都内の美術館・博物館等の見学を予定。
第11回	『覚禅抄』「造塔」塔安尊勝陀羅尼事～雁落所立率都婆事	塔安尊勝陀羅尼事～雁落所立率都婆事の記事等の講読・検討。
第12回	『覚禅抄』「造塔」得名～五輪塔	得名～五輪塔の記事等の講読・検討。
第13回	『覚禅抄』「造塔」身体塔同事～表白・同釈	身体塔同事～表白・同釈の記事等の講読・検討。
第14回	『覚禅抄』「造塔」開眼～波斯匿王延寿事	開眼～波斯匿王延寿事の記事等の講読・検討、及び最後のまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。『覚禅抄』の当該記事をよく読み、関連図像を含めて理解すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。

【参考書】
『大日本仏教全書』第51巻 覚禅抄 第7（大法輪閣、2007年）
『大正新脩大蔵経 図像部』第四巻・第五巻（大蔵出版、1975・1976年）
覚禅鈔研究会編『覚禅鈔』1-14（親王院堯榮文庫、2000年-）
覚禅鈔研究会編『覚禅鈔の研究』（親王院堯榮文庫、2004年）

【成績評価の方法と基準】
発表５０%、平常点（出席状況等）５０%

【学生の意見等からの気づき】
該当なし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学
＜研究テーマ＞ 中世仏教文学・芸能・寺院資料論
＜主要研究業績＞
・「称名寺聖教中の春日関係資料と『春日権現験記絵』」（『説話文学研究』46、2011年7月）
・「貞慶をめぐる説話と律院ー「異砂記」・狛行光春日霊験譚」（『説話文学研究』55、2020年9月）
・「正楽寺蔵・荒神曼荼羅について―蔵王権現と習合した忿怒相の荒神像と諸尊」（『寺院文献資料学の新展開 第五巻 中四国諸寺院Ⅰ』臨川書店、2020年3月）

【Outline (in English)】
This course deals with the "Kakuzen-Sho" (A book compiling Buddhist iconography and the historical precedents of Buddhist rituals, while quoting sutras).
At the end of the course, students are expected to become able to research Buddhist iconography and rituals independently.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Grading will be decided based on lab reports (50%), and in-class contribution (50%).

PRI500B7（情報学基礎 / Principles of informatics 500）

データ分析法 I

田中　邦佳

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて統計学的分析を行う必要がある。本授業では演習を通じ、いくつかのデータ分析の方法を知り、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か学ぶ。

【到達目標】
(1) データ分析の手法について理解する。
(2) 統計的な数値の意味を理解する。
(3) テーマに応じて適切なデータ分析ができるようになる。
(4) 上記の3つの項目を踏まえて、参加者各自の研究計画でどのような手法を用いるのが適切か提案できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と演習形式で行う。
参加者は、Excel と R を用いたデータ処理や統計に関する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	授業の進め方の説明
第2回	記述統計と推測統計	記述統計と推測統計の違い
第3回	記述統計で用いた数値	平均・標準偏差
第4回	データのバラツキ	正規分布・標準偏差
第5回	Excelでのデータの集計(1)	Excelを用いたデータの集計
第6回	Excelでのデータの集計(2)	Excelを用いたデータの集計
第7回	Excelでのデータの集計(3)	Excelを用いたデータの集計
第8回	R でのデータの集計(1)	R を用いたデータの集計
第9回	R でのデータの集計(2)	R を用いたデータの集計
第10回	R でのデータの集計(3)	R を用いたデータの集計
第11回	Excelでの論文用の表の作成	Excelを用いた表の作成
第12回	Rでの論文用の表の作成	Rを用いた表の作成
第13回	言葉での報告	集計結果の文章での報告
第14回	総合演習	データの統計的分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参加者は、各種データの分析を行う。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
山田剛史, &村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】
60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）
40%: 期末課題
欠席回数が通算4回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】
分析課題を行う時間をより多く設定します。

【学生が準備すべき機器他】
Microsoft Excel （PC版）が使える環境。

【【担当教員の専門分野等】】
＜専門領域＞
第二言語習得
＜研究テーマ＞
第二言語の音韻習得やリーディングについて
＜主要研究業績＞
北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房(2017)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Course outline: In this course, students will learn the basic statistical methods.
Learning Objectives: At the end of the course, students are expected to do the followings:
(1) Reading various types of graphs.
(2) Making graph data according to specific cases.
(3) Reporting data objectively in writing.
(4) Summarizing some data in a poster
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy: Final Assignment 40%, Class Assignment 60%

PRI500B7（情報学基礎 / Principles of informatics 500）

データ分析法 II

田中　邦佳

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて分析し、その結果を可視化（グラフ化）して示す必要がある。本授業では演習を通じ、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か、データ化や可視化における注意点について学ぶ。

【到達目標】
(1) ExcelやRを使用して基本的なデータの処理ができるようになる。
(2) Excel や R を使用してデータの適切なグラフ化ができるようになる。
(3) データの種類に応じた適切な分析・可視化ができるようになる。
(4) 上記の3つの項目を踏まえて、参加者各自が関心を持つ研究テーマで用いられている手法の利点を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と演習形式で行う。
参加者は、Excelを用いたデータ処理や作図する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	授業の進め方の説明
第2回	データの入力	Excelを使いデータの入力、注意点について
第3回	データの代表値の提示	平均値
第4回	平均値以外のデータの代表値の提示	中央値・最頻値
第5回	データのバラツキの提示	標準偏差
第6回	データの集計	集計結果のまとめ方
第7回	グラフを用いたデータの可視化	棒グラフ・折れ線グラフ
第8回	データの頻度の可視化	ヒストグラム
第9回	複数のタイプのデータの可視化	複数の要素が含まれたグラフ
第10回	複数のデータを扱うタイプのデータの可視化	散布図
第11回	データの量が多い場合の分析	大きなデータの分析
第12回	データ分析の結果の言葉での説明	データ分析の結果の文章化
第13回	研究テーマに合った分析と可視化	適切な分析手法の選択
第14回	総合演習	データ分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参加者は、各種データを読み取って文にまとめたり、数値データをまとめてグラフなどの形に作図し準備しておく必要があります。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
山田剛史, &村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】
60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）
40%: 期末課題
欠席回数が通算4回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】
具体的なデータを用いた分析演習の時間をより長く設定します。

【学生が準備すべき機器他】
Microsoft Excel （PC版）が使える環境。

【【担当教員の専門分野等】】
＜専門領域＞
第二言語習得
＜研究テーマ＞
第二言語の音韻習得やリーディングについて
＜主要研究業績＞
北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房(2017)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Course outline: In this course, students will learn the basic approach to summarizing data and methods for visualizing data.
Learning Objectives: At the end of the course, students are expected to do the followings:
(1) Reading various types of graphs.
(2) Making graph data according to specific cases.
(3) Reporting data objectively in writing.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy: Final Report 40%, Class Assignment 60%

LIT500B7（文学 / Literature 500）

サブカルチャー論Ⅰ

倉本　さおり

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代のポップカルチャーはインターネットやSNSをはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。この授業では漫画やアニメ、ライトノベル、映画、ドラマ、2.5次元舞台、アイドルなどのポップカルチャーを中心に、具体的な作品やコンテンツを取りあげ批評的に鑑賞するスタイルを採用します。さまざまな角度から積極的に楽しみつつ、ときに批判を交えた分析を行うことで、思考停止に陥らず、流動的な現実や個々の社会そのものの在り方を主体的に捉えるための視点や方法を学んでいきます。

【到達目標】
・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる
・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら建設的な意見を述べることができるようになる
・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる。
・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
履修生の人数と各自の状況を考慮したうえで、対面での授業を基本としつつオンラインを併用した講義を行う予定です。
講義では画像や映像サンプルを用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したのち、各自「サブカル歴」をまじえつつ自己紹介をしてもらいます。これまで自分がどんな文化の中で育ってきたのか、どんなジャンルやコンテンツに興味があるのか改めて意識することで、サブカルチャーないしポップカルチャーというものの存在がどのような手続きを経て人びとの自己形成に関わっていくのか主体的に確認していきます。
第2回	メディアとポップカルチャーの現況	アニメ『違国日記（2026年、原作・ヤマシタトモコ）をイントロダクションに、OP曲や劇伴（BGM）の効果に注目しつつ、複数のメディアと連動して発展していくサブカルチャーないし現代のポップカルチャーの特徴について概説します。
第3回	大衆とカルチャーと「物語」	フランスの民話「美女と野獣」と、その受容の歴史、そして現代の広告表現などに見られるイメージの変容を検証しながら、「物語」というものがポップカルチャーにおいてどのように援用／転用されてきたか考えていきます。
第4回	ポップカルチャーの諸相①（物語と声）	アニメ映画史上初めてアカデミー賞作品賞にノミネートされたディズニー制作の『美女と野獣』（1991年）を鑑賞し、現在流通している「美女と野獣」の物語の特徴を確認しながら、当時評価された本作の革新性について検証していきます。
第5回	ポップカルチャーの諸相②（時代という装置）	1740年に発表された『美女と野獣』（ヴィルヌーヴ夫人版）と1756年に発表された『美女と野獣』（ボーモン夫人版）を比較しながら、第3回の授業で検証した「物語」の継承と変容について考察を深めていきます。
第6回	ポップカルチャーの諸相③（社会の要請）	2017年にエマ・ワトソン主演で制作された実写映画『美女と野獣』を鑑賞し、これまで複数回にわたって映像化されてきた「美女と野獣」というモチーフをめぐる作品群の解釈や演出の違いに着目しつつ、ディスカッションを通じて立体的に検分していきます。
第7回	ポップカルチャーの諸相④（枠組みとイメージの転用）	2021年に公開された細田守監督のアニメーション映画『竜とそばかすの姫』を鑑賞しながら、「美女と野獣」のモチーフが日本の社会の中でどんなイメージを担ってきたのか検証します。その後、前回の授業を踏まえ、「枠組み」や「イメージ」の転用がポップカルチャーの中で果たす意味について考えます。
第8回	中間発表会	これまでの授業を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。その後クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第9回	解釈とアダプテーション①（アダプテーションの考え方）	田辺聖子の短篇小説「ジョゼと虎と魚たち」（1985年）を読んだうえで、犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』（2003年）を鑑賞し、原作となったテクストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されたのか分析していきます。
第10回	解釈とアダプテーション②（時代背景の変化から考える）	前回の授業を踏まえ、タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』（2020年）を鑑賞し、どのようなプロセスを経て翻案に至ったのか、特に時代背景や社会環境の変化に着目しディスカッションしながら考察していきます。
第11回	解釈とアダプテーション③（社会環境の差異から考える）	キム・ジョングァン監督によるリメイク版『ジョゼと虎と魚たち』（2020）を鑑賞し、第９回で検討した要素を念頭に入れたうえで、アダプテーションの様相についてディスカッションします。
第12回	解釈とアダプテーション④（アイコンと文脈と社会の変容）	新海誠監督の『すずめの戸締まり』を鑑賞し、『君の名は。』『天気の子』から続く「災害と犠牲」というモチーフの変容と共通点を洗い出しながら、日本のポップカルチャーの論点について語り合います。
第13回	ミニレポート発表会	これまでの授業（物語、文脈、表象）を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。その後クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第14回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて資料を配布します。

【参考書】
※そろえる必要はありません
・橋本陽介『ナラトロジー入門――プロップからジュネットまでの物語論』（水声社）
・東浩紀『動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
・三原芳秋、渡邊英理、鵜戸聡＝編著『クリティカル・ワード 文学理論 読み方を学び文学と出会いなおす』（フィルムアート社）
・河野真太郎『戦う姫、働く少女』（POSSE 叢書）、『新しい声を聞くぼくたち』（講談社）
・堀あきこ、守如子＝編『BLの教科書』（有斐閣）
・永田大輔、松永伸太朗 ＝編『アニメの社会学―アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』（ナカニシヤ出版）

・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く――「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
・一柳廣孝 『怪異の表象空間　メディア・オカルト・サブカルチャー』（国書刊行会）
他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】
授業への参加態度20％、授業内で執筆・提出する課題30％、期末レポート50％

【学生の意見等からの気づき】
特に対面とオンラインを併用する場合は、個々の学生の発言が建設的な意見交換へとつながるよう、適宜調整を行いながら活発な議論の場を用意する。また授業ごとに論点の整理を行い、議論の足場をわかりやすく設定していく。

【学生が準備すべき機器他】
パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【その他の重要事項】
本科目は他専攻学生の履修も受け入れます。

【担当教員の専門領域等】
国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。小説トリッパー「カルチャー放談」連載中。文學界「新人小説月評」(2018)、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」(2019)、共同通信文芸時評「デザインする文学」(2020～2023)、TBSラジオ「文化系トークラジオLife」サブパーソナリティ。

【Outline (in English)】
【Course outline】
Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you will critically appreciate and discuss pop culture content such as manga, animation, light novels, movies, TV dramas, 2.5dimentional musicals, and idols. By identifying and analyzing problems from various angles, you will learn perspectives and methods for actively grasping dynamic reality and social situations without stopping thinking.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to apply the perspectives learned in class to discover problems on their own, and to think about pop culture from multiple perspectives using information formed by a variety of media, and identify research problems based on the differences and commonalities among different cultures.
【Learning activities outside of classroom】
In addition to researching literature and viewing art related to each theme, students will be expected to take notes on pop culture-related news and other topics of interest and use them in class discussions.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
The overall grade for the class will be determined based on the following Attitude toward class participation: 20%, assignments to be written and submitted in class: 30%, final report: 50%.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

サブカルチャー論 II

倉本　さおり

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代のポップカルチャーはインターネットやSNSをはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。後期の授業では「ジェンダー化されたマンガ・コンテンツ」としての側面を持つ『週刊少年ジャンプ』に注目し、現代社会の論点をあぶりだすと共に、ポップカルチャー批評が豊饒な未来へとつながるような提言を模索していきます。

【到達目標】
・授業中に学んだジェンダーに関わる視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる）
・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら建設的な意見を述べることができるようになる
・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる。
・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
履修生の人数と各自の状況を考慮したうえで、対面での授業を基本としつつオンラインを併用した講義を行う予定です。
講義では画像や映像サンプルをふんだんに用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえてポップカルチャーとジェンダーをめぐる諸問題について学んでいきます。
授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介と授業の進め方についての説明。また、ジェンダーをめぐるいくつかの論題を紹介し、サブカルNチャーないしポップカルチャーと呼ばれているものから社会規範や人びとの自己認識をかたちづくるプロセスを読み解くための有効な視点や手法について考えていきます。
第2回	マンガ雑誌とジェンダー、メディア文化と再帰性	今なお日本で最も発行部数の多い雑誌メディアであり、かつ「(区分上)ジェンダー化されたコミック雑誌」という複合的な性格を有する『週刊少年ジャンプ』の今日に至るまでの位置づけと変化について、国内外のメディアにおける言及のされ方を参照しつつ社会的な文脈から検証します。また、読者アンケートが作品の掲載順や内容にまで影響を及ぼしていた同メディアの特徴を取り上げ、メディアとコンテンツとコミュニティの流動的な関係性に焦点を当てていきます。
第3回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ①（バトル形式と物語の展開）	近年の世界的人気アニメ『ダンダダン』や『チェンソーマン』をイントロダクションに、週間発行部数653万部を記録し黄金期と呼ばれていた1990年代の『週刊少年ジャンプ』掲載作品（鳥山明『ドラゴンボール』、冨樫義博『幽遊白書』、井上雄彦『SLUM DUNK』等）を取り上げ、その展開と結末の様相をめぐって噴出した言説から、当時の日本の「少年マンガ」の像がどのような論点を社会に提示したのか考えていきます。
第4回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ②（ヒーローの相対化）	堀越耕平『僕のヒーローアカデミア』におけるヒーローとヴィラン（≒敵役）の描き方に着目し、いくつかの論文を参照しながら、近年の「少年マンガ」がどのような文脈で社会に受容されているか検討していきます。
第5回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ③（チーム化とロジック化）	葦原大介『ワールドトリガー』の構造に着目し、近年の「少年マンガ」が90年代に提示された〈バトル〉をめぐる論点をどのような形で更新しようと試みてきたか考えてみます。
第6回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ④（勝者と敗者の解体）	2.5次元ミュージカルという分野でも大きな注目を浴びている古舘春一の『ハイキュー!!』368話「なにもの」にスポットを当て、群像劇としてのスポーツマンガの影響と可能性について多角的に検証していきます。
第7回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツの主人公／主要キャラクターを取り上げ、その動機付けと物語の展開について、オリエンテーションで紹介した有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈成長〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第8回	中間発表会	自分が興味のあるコンテンツや派生したメディアのトピックから期末レポートに向けた論点を見つけ出し、簡単な発表を行ってもらいます。
第9回	「少年マンガ」とジェンダーロール①（テクストとしてのキャラクター）	戸塚慶文『アンデッドアンラック』における主人公像／ヒロイン像の変化に着目し、テクストとしてのキャラクターが形成されるプロセスについて検証していきます。
第10回	「少年マンガ」とジェンダーロール②（「少年マンガ」における女性性）	前回の授業の踏まえつつ、芥見下々『呪術廻戦』における女性キャラクターの様相に着目し、彼女たちがどのようなジェンダーロールを内面化し、あるいはそれを乗り越えようとしているか考察していきます。
第11回	「少年マンガ」とジェンダーロール③（少年マンガにおける「母」）	90年代に連載されていた井上雄彦『SLAM DUNK』の父子像と2022年公開の映画『THE FIRST SLAM DUNK』に登場する母親の造型を参照することで、従来の少年マンガにおいて「母」がどんな磁場のもとに存在していたか検証していきます。
第12回	「少年マンガ」とジェンダーロール④（ラブコメの類型と逸脱）	過去に掲載されてきた作品のうち「ラブコメ」と呼ばれるジャンルを中心に、読者の反応を参照しつつ、これまで「少年マンガ」の磁場においてジェンダー規範とロマンチック・ラブがどのように受容され、変化してきたか考えていきます。
第13回	「少年マンガ」とジェンダーロール⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツを取り上げ、そのキャラクター造型や物語の構造について有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈ジェンダー〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第14回	まとめとフィードバック	期末レポートに向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定・発表し、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて資料を配布します。

【参考書】
※無理にそろえる必要はありません
・東浩紀『動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
・足立加勇『日本のマンガ・アニメにおける「戦い」の表象』（現代書館）
・金水聡『役割語研究の展開』（くろしお出版）
・河野真太郎『戦う姫、働く少女』（POSSE 叢書）、『新しい声を聞くぼくたち』（講談社）
・押山美知子『少女マンガ ジェンダー表象論　〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』（アルファベータブックス）

・堀あきこ、守如子＝編『BLの教科書』（有斐閣）
・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く――「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】
授業への参加態度30％、授業内で執筆・提出する課題30％、期末レポート40％

【学生の意見等からの気づき】
特に対面とオンラインを併用する場合は、個々の学生の発言が建設的な意見交換へとつながるよう、適宜調整を行いながら活発な議論の場を用意する。また授業ごとに論点の整理を行い、議論の足場をわかりやすく設定していく。

【学生が準備すべき機器他】
パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【その他の重要事項】
本科目は他専攻学生の履修も受け入れます。

【担当教員の専門領域等】
国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。小説トリッパー「カルチャー放談」連載中。文學界「新人小説月評」(2018)、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」(2019)、共同通信文芸時評「デザインする文学」(2020～2023)。TBSラジオ「文化系トークラジオLife」サブパーソナリティ。

【Outline (in English)】
【Course outline】
Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you focus on "Weekly Shonen Jump" one of the magazine media that has been characterized from the perspective of gender, and learn about issues facing modern society and suggestions for leading criticism of pop culture to a prosperous future.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to think about pop culture from a variety of perspectives by applying the gender-related perspectives learned in class to discover issues on their own, and by using information formed by various media., and identify research problems based on the differences and commonalities among different cultures.
【Learning activities outside of classroom】
In addition to researching literature and viewing art related to each theme, students will be expected to take notes on pop culture-related news and other topics of interest and use them in class discussions.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
The overall grade for the class will be determined based on the following Attitude toward class participation: 30%, assignments to be written and submitted in class: 30%, final report: 40%.

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本文学・国際日本学基礎演習

本塚　亘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この科目は修士進学前の外国人留学生（なかでも中国５大学入試により入学した特別研修生）を対象としています。日本に関する各種の文献を読み、その内容を要約し、それに対する自分自身の見解を小論文形式の文章にまとめることで、日本研究に求められる基礎的能力を養います。またアウトリーチ（非専門家に向けた発信）用の解説文を作成することで、各自の研究内容・論理展開を客観的にとらえ直しつつ、非専門家の疑問に段階的に応えながら論点を焦点化し、議論の流れを設計して自身の研究課題へ導くことを目標とします。これらの実践を通じて、研究倫理（適切な引用・参照、剽窃の防止、生成AIの適切な利用）についても学習していきます。

【到達目標】
１、日本の言語・文学・歴史・文化・社会等に関する論文を読み、要約する作業を通して、読解力と文章力を高める。
２、自分自身の見解を小論文形式でまとめ、学術論文に相応しい文章を書けるようにする。
３、非専門家の疑問に段階的に応えつつ論点を焦点化し、議論の流れを設計して自身の研究課題へ導く解説文を作成する。
４、研究倫理を理解し、適切な引用・参照を行い剽窃を防ぎ、生成AIを用いる場合も自己の思考と責任のもとで課題に取り組む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　原則として、対面形式での授業を行います。カリキュラムは大きく二つに分かれます。
① 各回の課題を通じて、日本語の文章力を高めます。日本の各分野（言語・文学・歴史・文化・社会等）に関する論文を読み、その内容を300字程度の文章で要約し、自分自身の見解を小論文にまとめます。さらに、履修者同士で小論文を読み合い、論文の内容について討論を行います。
② おおむね月ごとに、各自の研究内容に関する非専門家向けの解説文を段階的に作成していきます（Q&A→ 資料準備 → 草稿 → 最終提出）。各自が専門とする研究内容を客観的にとらえ直し、非専門家の関心や疑問の流れに沿って応えつつ、論点を焦点化して自身の研究課題へ導く解説文を取りまとめます。
　履修者が執筆した要約・小論文・解説文については、すべて担当教員が添削を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 国際日本学とは何か	国際日本学とは何かを解説し、大学院修士課程での研究の進め方について説明する。
第2回	課題文Ａ（研究倫理） 内容確認 ／ Q&A作成指示	課題文Ａを読む。剽窃をはじめとする研究不正およびAI活用のあり方について考える。／自身の研究対象に関する一般向けのQ&Aを作成し、次週以降順次発表する。
第3回	要　約 ／ Q&A発表①	課題文Ａを読み、要約する。
第4回	意見文 ／ Q&A発表②	課題文Ａに関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第5回	討　論 ／ Q&A発表③	課題文Ａに関して、他の履修者と討論する。
第6回	課題文Ｂ（日本語） 内容確認 ／ 資料の準備指示	課題文Ｂを読む。日本語表現に関する知識共有を行う。／自身の研究対象について解説するための具体的な資料を準備し、次週以降順次発表する。
第7回	要　約 ／ 資料の準備発表①	課題文Ｂを読み、要約する。
第8回	意見文 ／ 資料の準備発表②	課題文Ｂに関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第9回	討論 ／ 資料の準備発表③	課題文Ｂに関して、他の履修者と討論する。
第10回	課題文Ｃ（政治経済） 内容確認 ／ 解説文作成指示	課題文Ｃを読む。日本における環境政策についての知識共有を行う。／自身の研究対象について解説文を作成し、次週以降順次発表する。
第11回	要　約 ／ 解説文発表①	課題文Ｃを読み、要約する。
第12回	意見文 ／ 解説文発表②	課題文Ｃに関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第13回	討　論 ／ 解説文発表③	課題文Ｃに関して、他の履修者と討論する。
第14回	意見交換	履修者全員でそれぞれの解説文に関する意見交換を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
　毎時の宿題として作文等を課します。また、各自の発表日程にあわせて、発表資料（A4用紙2枚）を準備していただきます。期末には最終提出物として解説文の完成稿を提出していただきます。
　課題に取り組むにあたって生成AIを利用した場合は、合わせて、利用の詳細を示すもの（チャットログ等）を提出しなければいけません。もし履修者の不適切な生成AI利用が発覚した場合、適宜【注意】、【警告】、【大学院課への通報】などの対応をとります。

【テキスト（教科書）】
　なし。プリント等を適宜配付します。

【参考書】
　授業時に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
・毎回の提出物：60％
・最終提出物（解説文）：40％

【学生の意見等からの気づき】
　個々の学生の専門になるべく関連のある内容を取り扱えるよう善処します。また学生同士の議論が活発になるような環境の醸成に努めます。

【その他の重要事項】
１．この科目は修士進学前の外国人留学生（なかでも中国5大学入試により入学した特別研修生）を対象とします。
２．新型コロナウイルスに関する大学の方針変更等の事由により、上記の授業内容を変更する可能性があります。変更があった場合は、学習支援システムにて連絡いたします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本古代歌謡 日本音楽史
＜研究テーマ＞催馬楽
＜主要研究業績＞「催馬楽の成立に関する研究 」（博士論文、2017）、「催馬楽「同音グループ」における「替え歌」生成の原理について：歌の詞章と旋律の関係を中心に 」（『日本歌謡研究』59号、2019年）、「古楽譜解読プロセスの可視化：琵琶譜 『三五要録』 による催馬楽旋律分析を例に」（『じんもんこん2025論文集』、2025）

【Outline (in English)】
Outline: The course aims to develop the basic skills required for Japanese studies, including reading various texts on Japan, summarizing their contents, and producing essay-style writing to express their own opinions. Additionally, the course aims to develop students' ability to write an outreach-oriented explanatory text for non-specialist readers and to apply basic research ethics to all written work, including appropriate citation, preventing plagiarism, and the responsible use of generative AI.
Goal: By the end of the course, students should be able to do the following:
- Read various articles on Japanese language, literature, history, culture, and society and summarize their contents to improve reading and writing skills.
- Compose one's own opinions into essay-style writing and write academic papers in an appropriate format.
- Write an outreach-oriented explanatory text that answers non-specialists' questions step by step, sharpens the focus of the discussion, designs the flow of the argument, and leads to one's own research question.
- Understand research ethics, practice appropriate citation and referencing, prevent plagiarism, and, when using generative AI, work on assignments with one's own thinking and responsibility.
Learning activities outside of classroom: Students are expected to spend about four hours before and after each class period on assignments and independent study.
Grading Criteria / Policies: In accordance with the above Goals, the following two will be assessed.
- Assignments 60%.
- Outreach-oriented explanatory writing 40%.

BSP500B7（初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育 / Basic study practice 500）

日本文学・国際日本学論文作成基礎実習

金子　広幸

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
先行研究の閲覧から自らの研究課題の明確化を行い、
研究活動における手法・手順・発表などを学ぶことができる。
あわせてその過程から自らの日本語の問題点についての解決策を導くことができる。

【到達目標】
1.研究の方向性を明確化することができる。具体的には、その研究課題について、何を明らかにするかを表明できるようになる。
2.研究の手法・手順を学び、日本語の能力向上と併せて、進めることができるようになる。
3.自らの研究課題などを研究言語である日本語で他者に明確に伝えることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
このクラスは【秋学期だけ】に開講される
教育支援システム（グーグルクラスルームやズームなど）を使用する。
1.研究課題・計画を精緻化し明文化する作業を共同で行う。
2.先行研究の文献・研究手法についての模擬的な発表をする。
3.学期中に「ミニ調査（パイロット調査）」を行い、研究の方向性を探る材料とする。
4.後半日程には、研究の進度について成果の発表を行う。
5.図表やグラフ・データなどを示しながら発表する方策を考える
6.完成した論文がどのようなものになるのか想定する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	参加者の研究の課題を確認、学期全体の進め方とスケジュールを決める。
第2回	私の研究課題	これまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する
第3回	私の研究課題（先行研究の模索）	これまでに構築した研究課題をもとに、先行研究を新たに探す【自らの日本語の問題点を探る】
第4回	私の研究課題（参考文献の引用と発表の方法）	先行研究の引用について学ぶ【発表時に必要な日本語について模索する】【参考文献の引用などの扱い方、スライドの作り方、発表レジュメの書式などを学ぶ】
第5回	先行研究発表（先行研究の要旨を作成）	各自が探した先行研究について発表する。【要旨をまとめる時の日本語の使い方を学ぶ】
第6回	先行研究発表（先行研究の参考をもとに調査の概要決定）	各自が探した先行研究について発表する。【ミニ調査の概要提示】
第7回	先行研究発表（調査のテーマを確定）	各自が探した先行研究について発表する。【ミニ調査のテーマを確認する】
第8回	研究手法発表（先行研究の研究手法）	研究の過程で必要な手法について学ぶ。【研究・調査・発表時に必要な日本語について学ぶ。待遇表現の基礎や、調査依頼など】
第9回	研究手法発表（図表・グラフ・データの提示）	得られた結果をもとに作成された図表・グラフ・データの提示の方法を学ぶ
第10回	研究手法発表（調査の方法を発表）	ミニ調査の方法を共有する
第11回	調査発表（要旨の表現を学ぶ）【ミニ調査研究の発表①】	調査の結果を通して　要旨に含められる表現を学び、最終提出物を作成する
第12回	調査発表（研究手法の表現を学ぶ）【ミニ調査研究の発表②】	調査の結果を通して、研究手法の表現を学び、最終提出物を作成する
第13回	調査発表（目次の作り方を学ぶ）【ミニ調査研究の発表③】	調査の結果を通して、研究論文全体を概観し、目次を作成、最終提出物を作成する
第14回	成果発表 今後の課題を明確化する	要旨・研究方法・目次の提示をしながら今後の研究の展開を模索する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、1回の講義に対して、以下のことを行うにあたって、各3時間を標準とします。
1.研究の方向性を明確にするために、常に文献を探し、クラスで簡単に発表できるよう要点をまとめておくこと。
2.クラスでは問題を共有し、積極的に発言し、手法等について工夫を重ねること。
3.日本語能力については、とくにスタイルや表現の選択を中心とした、「研究時に必要な日本語」を究明すること。
4.発表がある場合には必ず「スライド」と「レジュメ」をその都度提出・配付すること。
5.日本語使用者としての自覚に基づいて、クラスでの課題を作成・提出すること。
6.発表や課題提出の時などは、必要ならクラスメート同士相互にチェックすること。

【テキスト（教科書）】
研究課題明確化が主目的なので教科書は使用しません。

【参考書】
金子広幸（2014）『初級が終わったら始めよう　新・にほんご敬語トレーング』
https://www.ask-books.com/978-4-87217-856-2/
研究活動を行うにあたってはメールで依頼する、調査時の使用言語など、敬語が必要です。敬語に関する知識・練習が足りない人は自主学習として使用してください。
日本版以外に中国版・台湾版・韓国版と　KINDLE版があります。最新版であることを確認してください。
この参考資料はクラス活動としては使いませんが、学期の後半に敬語の能力チェックをする予定です。各自準備しておいてください。

【成績評価の方法と基準】
・提出物の完成度（研究計画書　発表時のスライド・レジュメ　日本語に関する宿題、「今週の学び」　最終提出物（要旨と目次）など）15％
・提出物の期限厳守の提出15％
・発表参加20％
・発表・スライド・資料などの完成度20％
・日本語能力振り返り・小試験（2回程度実施予定）10％
・クラスでの参加態度（積極的な発言、オンラインでも顔を出しての参加など）20％
成績評価は100点満点で採点。60点以上が合格。

【学生の意見等からの気づき】
参加者の皆さんへ。（修了生からのコメントを参考に活動を再考しています）

●毎回参加者の発表があり、それについての教師のコメントや参加者の参加討議でクラスが進みます。外国語である日本語でチャレンジすることを忘れないでください。
●参加人数にもよりますが、１学期あたり、４回程度の発表があります。他にもスライドやレジュメの作成、先行研究を探すことなど、様々な課題があります。積極的に参加してください。
●準備してきた資料を読むだけでは、いい発表にはなりません。準備をさらに充実させて、視覚資料を使ったり、わかりやすく研究テーマを説明できるよう、教師といっしょに方法を探してください。もちろん自宅で発表の練習を「十分に」してください。
●「今週の学び」を初めとして、 毎回の講義には課題が出ます。時間厳守で提出してください。
●これからの学術の世界を考える時、国際学術会議などでのオンライン発表は重要な鍵となります。対面クラスになっても、このオンライン発表などにぜひチャレンジしてください。
●大学院生には「時間厳守提出」が大切です。提出物を時間厳守で提出してください。遅れると減点対象になります。
●クラスには「ミニ調査研究」が準備されています。小規模な調査を行い、研究の手順や、結果の分析の方法についてシミュレーションを行います。歴代の卒業生からもとても信頼された活動です。積極的に参加してください。

【学生が準備すべき機器他】
●　ZOOM・グーグルクラスルームなどが使える機器・ネット環境の準備をお願いします。
クラスでのお知らせ・課題の提示・提出・連絡などは全てグーグルクラスルームで行います。
● クラスにアクセスする場合は法政大学のGoogleアカウントが必要です。

【その他の重要事項】
●クラスのスケジュールが決まった後、第３回目以降はクラスに新しく参加できなくなります。
第１回と第２回に必ず出席してください。
●日本語能力が不十分であることを恥じることはありませんが、しっかりと挑戦してください。
●オフィスワークの時間は設定しませんが、オンラインで相談に乗ることはできます。メールをしてください。
hiroyuki.kaneko.75@hosei.ac.jp

【担当者の研究背景】
＜専門領域＞日本語教育学　社会言語学　地理学　歴史学　日本文化
＜研究テーマ＞敬語など待遇表現　日本語クラス活動　地域日本語支援　留学生相談業務　日中言語比較
＜主要研究業績＞
①『初級が終わったら始めよう　にほんご敬語トレーニング』（アスク　2006年）
②『初級が終わったら始めよう　新・にほんご敬語トレーニング』（アスク2014年）
③『人と人とをつなぐ日本語クラスアクティビティ50』（アスク　2005年）
④「日中漢字音対照研究の成果と今後の教学応用への可能性の模索」基礎研究その１　（『日中学院紀要教学』　2008年）
⑤「初級日本語クラスで使用する絵の要素の分析」（桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修士論文　2012年）
⑥河内 彩香, 米谷 章子, 村田 道明, 山本 そのこ, 金子 広幸（2022）「初級日本語のオンライン試験における不正行為対策」『多文化社会と言語教育』

【担当者の出演番組】
日本語教育関係のNHKの番組の出演・監修しています。
NHK国際放送で放送された番組はこちらです。
https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/easyjapaneseforwork/ja/

【担当者の社会への発信】
①地域日本語支援の支援者への支援を目指した記事の連載
東京日本語、ボランティアネットワークニュースレター　https://www.tnvn.jp/
②同ネットワークの講演担当

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course outline）】
The students of this class can clarify their own research issues by browsing previous research, and learn methods, procedures, and presentation methods in their research activities.　At the same time, they can draw solutions for their Japanese language usage problems from the process.
【到達目標（Learning Objectives）】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1. To clarify the direction of research. Specifically, to be able to state what they will clarify about the research subject.
2.　To be able to learn research methods and procedures and proceed with improving their Japanese proficiency.
3.　To be able to clearly convey research topics to others in Japanese, which is the research language.
【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】
The standard preparation and review time for this class is 3 hours each for doing the following for each lecture.
1.　In order to clarify the direction of your research, always search the literature and summarize the points so that you can easily present it in the class.
2. In the class, share the problem, speak positively, and devise methods.
3.　Regarding Japanese proficiency, investigate "Japanese necessary for research", especially focusing on the selection of styles and expressions in formal situations.
4.　Whenever there is a presentation, submit and distribute "slides" and "resumes" each time.
5. Create and submit assignments in the class based on your awareness as a Japanese language “user” not as a “learner”.
6.　When presenting or submitting assignments, check with each other in class if necessary.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
・ Completion of submissions (slides and resumes at the time of presentation of the research plan, homework related to Japanese, "learning of the week", final submissions (summary and table of contents), etc.) 15%
・Submissions that adhere to the deadline for submissions 15%
・ Participation in the presentation 20%
・ Completion of presentation 20%
・ Review of Japanese proficiency
・ Small exam (scheduled to be held about twice) 10%
・ Participation attitude in class (active remarks, face-to-face participation(even if it was online session), etc.) 20%
Grades are evaluated on a scale of 100 points. Passed 60 points or more.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

近代の文芸批評 I

田中　和生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】
〈修士課程〉
　まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。
〈博士課程〉
　近代文学における批評の役割を理解し、日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れていることを前提とし、自分の研究テーマに基づいた注釈や解説が的確にできることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　講義と発表を組みあわせて進めます。
　まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。
　また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。
　授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第2回	森鷗外と北村透谷	森鷗外「早稲田文学の没理想」と北村透谷「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を読み、その意義を理解します。
第3回	正岡子規と作家夏目漱石の誕生	正岡子規「歌よみに与ふる書」を読み、写生文の意義と夏目漱石の文学について解説します。
第4回	坪内逍遙『小説神髄』を読む	日本の近代文学の出発点として、坪内逍遙『小説神髄』について発表してもらいます。
第5回	自然主義と1910年	田山花袋「露骨なる描写」を読み、日本の近代文学史における自然主義の隆盛と1910年の状況を理解します。
第6回	正宗白鳥の評論文を読む	印象批評の例として、正宗白鳥の評論文について発表してもらいます。
第7回	佐藤春夫と永井荷風	佐藤春夫「創作月旦」と永井荷風「花火」を読み、その意義を理解します。
第8回	小林秀雄の登場	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第9回	私小説から心境小説へ	広津和郎「散文芸術の位置」と久米正雄「『私』小説と『心境』小説」を読み、その意義を理解します。
第10回	保田與重郎の批評	戦前における文芸評論の到達点の一つである、保田與重郎の評論文について発表してもらいます。
第11回	プロレタリア文学と芥川龍之介の死	蔵原惟人「プロレタリア・レアリズムへの道」と宮本顕治「『敗北』の文学」を読み、その意義を理解します。
第12回	中村光夫の再出発	戦後文学の空間をかたちづくる、中村光夫の評論文について発表してもらいます。
第13回	河上徹太郎と平野謙	河上徹太郎「配給された『自由』」と平野謙「ひとつの反措定」を読み、その意義を理解します。
第14回	江藤淳の登場	戦後文学を問い直す視点を提示しつづけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』［明治・大正篇］および［昭和篇］（岩波文庫）

【参考書】
　必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
　成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。
　まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。
　また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】
　発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【その他の重要事項】
　文芸評論家として創作を批評する経験をもつ者が、その知見を生かして講義します。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉
　現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることです。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口などを準備しています。
〈主要研究業績〉
　1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
　2、『あの戦場を越えて――日本現代文学論』（講談社）2005年
　3、『新約太宰治』（講談社）2006年
　4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
　5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年
　6、『なぜ文芸時評は終わるのか』（アーツアンドクラフツ）2024年

【Outline (in English)】
< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.
< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in modern literature, and the second is to gain a relative perspective on the history of modern Japanese literature. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.
< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of modern Japanese literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.
< Grading Criteria/Policy> Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports.In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class.In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

近代の文芸批評 II

田中　和生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　日本の現代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】
〈修士課程〉
　まず現代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の現代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。
〈博士課程〉
　現代文学における批評の役割を理解し、日本の現代文学史を相対化する視点を手に入れていることを前提とし、自分の研究テーマに基づいた注釈や解説が的確にできることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　講義と発表を組みあわせて進めます。
　まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。
　また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。
　授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	日本の現代文学について	現代ヨーロッパと現代日本を比較して、現代文学全体について概説します。
第2回	中野重治と高見順	中野重治「閏二月二九日」と高見順「描写のうしろに寝てゐられない」を読み、その意義を理解します。
第3回	1945年と無頼派の誕生	日本の敗戦の年である1945年前後の文学における変化に注意しながら、坂口安吾「堕落論」を読みます。
第4回	吉本隆明の出発	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第5回	戦前批判と戦後文学のはじまり	宮本百合子「歌声よ　おこれ」と小野十三郎「詩論」を読み、その意義を理解します。
第6回	奥野健男の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、奥野健男の評論文について発表してもらいます。
第7回	武田泰淳と竹内好	武田泰淳「滅亡について」と竹内好「近代主義と民族の問題」を読み、その意義を理解します。
第8回	磯田光一の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、磯田光一の評論文について発表してもらいます。
第9回	福田恒存と国語の問題	福田恒存「私の国語教室」を読み、その意義を理解するとともに大岡昇平の新字新かなに対する態度について考察します。
第10回	蓮実重彦の登場	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、蓮実重彦の評論文について発表してもらいます。
第11回	言語論と吉本隆明	20世紀以降の言語論の意義について考察した上で吉本隆明の評論文を読み、その意義を理解します。
第12回	加藤典洋の出発	ポストモダン派と戦後文学を架橋する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第13回	ポストモダン文学論	1970年代以降の日本のポストモダン派の評論文について考察を加え、その意義を理解します。
第14回	斉藤美奈子の批評	フェミニズム批評の代表的な評論家である、斉藤美奈子の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　日本の現代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】
　必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
　成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。
　まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。
　また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】
　発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【その他の重要事項】
　文芸評論家として創作を批評する経験をもつ者が、その知見を生かして講義します。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉
　現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることです。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口などを準備しています。
〈主要研究業績〉
　1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
　2、『あの戦場を越えて――日本現代文学論』（講談社）2005年
　3、『新約太宰治』（講談社）2006年
　4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
　5、『敗戦後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年
　6、『なぜ文芸時評は終わるのか』（アーツアンドクラフツ）2024年

【Outline (in English)】
< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese contemporary literature through the writings of each critic and the stream of criticism.
< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in contemporary literature, and the second is to obtain a perspective that relativizes the history of contemporary literature in Japan. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.
< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of Japanese contemporary literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics to be discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.
< Grading Criteria/Policy> Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports.In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class.In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

神話と歌Ⅰ

森　陽香

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
主な上代文学作品（『万葉集』『古事記』『日本書紀』『風土記』）を通して、日本の古代および古代性について研究します。春学期は、任意の作品を一つ研究対象として取り上げ、その作品を見つめ、疑問に気づき、その疑問を解き明かしてゆくための研究方法を、履修者各自が模索します。

【到達目標】
（1）修士課程の人は、研究するための具体的な手段を体験し、自分が知りたいと思うことに対して適切な研究方法をとることができるようになることが目標です。
（2）博士課程の人は、自由で創造性の高い研究活動を行い、自分が設定した問いに対して、はっきりとした成果・結論を出すことを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
はじめは、教員の側から研究方法の例をいくつか講義形式で示し、その後、履修者各自の演習形式で進めます。授業内で発表された内容に対してはその場でフィードバックを行うほか、授業時間外にも学生からの求めがあれば個別指導を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	履修者の興味関心を確認するとともに、授業全体の進め方を説明します。
第2回	研究方法の例１	『万葉集』を研究するための方法の一例を、教員側から提示します。
第3回	研究方法の例２	『風土記』を研究するための方法の一例を、教員側から提示します。
第4回	予行演習１	履修者各自が、自分で選択した作品について、疑問点などを発表します。
第5回	予行演習２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第6回	予行演習３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第7回	演習１	履修者各自が、予行演習として発表した疑問点について、具体的に調査してきた成果を発表します。
第8回	演習２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第9回	演習３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第10回	演習４	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第11回	演習５	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第12回	研究発表１	履修者各自が、半年間の研究成果をまとめて、発表します。
第13回	研究発表２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第14回	研究発表３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
演習形式のため、授業内における発表の準備（調査研究・発表資料作成など）が必要です。少なくとも、授業の準備・復習それぞれ、各2時間程度を要します。

【テキスト（教科書）】
教員主導で行う最初の数回は、プリントを配布します。履修者の発表では、発表者が自分で資料を作成します。よって、履修者全員が共通で購入すべきテキストはありません。

【参考書】
授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
予行演習（１０%）・演習（２０%）・研究発表（４０%）と、最低３回は発表が回ってくる予定ですので、それぞれの発表内容、および、他の履修者の発表に対する質疑応答の積極性（３０%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】
履修者によって、上代文学に対する基礎知識に差があるので、上代文学専門の学生にとっても、それ以外の学生にとっても有意義な研究の場になるよう、特に学期の最初の数回の授業でよく相談を重ねてから進めたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
どのような方法で発表資料の授受を行うか、初回授業時に相談します。

【その他の重要事項】
特にありません。

【Outline (in English)】
We study ancient Japan and its antiquity through major works of ancient literature (Man'yoshu, Kojiki, Nihon Shoki, and Fudoki).
By the end of the course, students should be able to do the followings:
For　master's program ： The goal is to be able to use appropriate research methods for what you want to know.
For　doctoral course ： We aim to carry out free and highly creative research activities and produce clear results and conclusions.
Your study time will be more than four hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Research presentation: 70%、question and answer session:30%.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

神話と歌 II

森　陽香

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
主な上代文学作品（『万葉集』『古事記』『日本書紀』『風土記』）を通して、日本の古代および古代性について研究します。秋学期は、一つの「素材」を決めて、上代文学作品を横断しながら、その素材について、あるいは、その素材をとおして疑問点を見出し、その疑問を解き明かしてゆくための研究方法を、履修者各自が模索します。

【到達目標】
（1）修士課程の人は、研究するための具体的な手段を体験し、自分が知りたいと思うことに対して適切な研究方法をとることができるようになることが目標です。
（2）博士課程の人は、自由で創造性の高い研究活動を行い、自分が設定した問いに対して、はっきりとした成果・結論を出すことを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
はじめは、教員の側から研究方法の例をいくつか講義形式で示し、その後、履修者各自の演習形式で進めます。授業内で発表された内容に対してはその場でフィードバックを行うほか、授業時間外にも学生からの求めがあれば個別指導を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	履修者の興味関心を確認するとともに、授業全体の進め方を説明します。
第2回	研究方法の例 1	「素材」を研究するための方法の一例を、教員側から提示します。
第3回	研究方法の例 2	前回とはまた別の「素材」を選び、その研究方法の一例を、教員側から提示します。
第4回	予行演習 1	履修者各自が、自分で選択した素材について、疑問点などを発表します。
第5回	予行演習 2	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第6回	予行演習 3	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第7回	演習 1	履修者各自が、予行演習として発表した疑問点について、具体的に調査してきた成果を発表します。
第8回	演習 2	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第9回	演習 3	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第10回	演習 4	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第11回	演習 5	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第12回	研究発表 1	履修者各自が、半年間の研究成果をまとめて、発表します。
第13回	研究発表 2	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第14回	研究発表 3	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
演習形式のため、授業内における発表の準備（調査研究・発表資料作成など）が必要です。少なくとも、授業の準備・復習それぞれ、各2時間程度を要します。

【テキスト（教科書）】
教員主導で行う最初の数回は、プリントを配布します。履修者の発表では、発表者が自分で資料を作成します。よって、履修者全員が共通で購入すべきテキストはありません。

【参考書】
授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
予行演習（１０%）・演習（２０%）・研究発表（４０%）と、最低３回は発表が回ってくる予定ですので、それぞれの発表内容、および、他の履修者の発表に対する質疑応答の積極性（３０%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】
履修者によって、上代文学に対する基礎知識に差があるので、上代文学専門の学生にとっても、それ以外の学生にとっても有意義な研究の場になるよう、特に学期の最初の数回の授業でよく相談を重ねてから進めたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
どのような方法で発表資料の授受を行うか、初回授業時に相談します。

【その他の重要事項】
特にありません。

【Outline (in English)】
We study ancient Japan and its antiquity through major works of ancient literature (Man'yoshu, Kojiki, Nihon Shoki, and Fudoki).
By the end of the course, students should be able to do the followings:
For master's program ： The goal is to be able to use appropriate research methods for what you want to know.
For doctoral course ： We aim to carry out free and highly creative research activities and produce clear results and conclusions.
Your study time will be more than four hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Research presentation: 70%、question and answer session:30%.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

平安時代の物語Ⅰ

加藤　昌嘉

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
◆『源氏物語』を、写本の原文に基づいて、正確に解読してゆきます。注釈書・現代語訳は多く存在しますが、『源氏物語』の文章・場面は、まだ、きちんと、読み解かれていないからです。
◆本年度は、河内本の「花宴」巻の後半と、「葵」巻の前半を解読してゆきます。

【到達目標】
以下の３点を身に付けることが目標です。
●古文を正確に訳す能力
●文法・語法を調べる能力
●先行の注釈書を比較する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
発表者は、河内本『源氏物語』の影印を元に、整定本文と、現代語訳と、注釈を、作成し、プレゼンテーションを行います。それを元に、参加者全員でディスカッションをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「花宴」	左大臣邸で楽器演奏
3	「花宴」	右大臣邸の藤の花の宴
4	「花宴」	右大臣邸の藤の花の宴
5	「花宴」	朧月夜の女君と再会
6	「花宴」	朧月夜の女君と再会
7	「葵」	桐壺帝、譲位
8	「葵」	六条御息所の娘
9	「葵」	六条御息所の娘
10	「葵」	六条御息所と朝顔の姫君
11	「葵」	葵上、懐妊
12	「葵」	新しい斎院、着任
13	論文合評	先行論文を検証する
14	まとめ	半年間の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
市販の『源氏物語』テキストで、「若紫」巻、「紅葉賀」巻、「花宴」巻を読むこと。
予習復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『尾州家河内本源氏物語』（八木書店）を使用しますが、この影印については、授業時に詳しく説明します。

【参考書】
▼『源氏物語』のテキスト（原文＋注釈）として、以下のいずれかを、座右に置いて、読み進めてください。
◎柳井滋ほか『源氏物語』１，２（岩波文庫）
◎玉上琢弥『源氏物語　現代語訳付き』１，２（角川ソフィア文庫）
◎石田穣二ほか『新潮日本古典集成　源氏物語』１，２（新潮社）
◎鈴木一雄ほか『源氏物語の鑑賞と基礎知識　紅葉賀・花宴』（至文堂）
◎鈴木一雄ほか『源氏物語の鑑賞と基礎知識　葵』（至文堂）
◎阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集　源氏物語』１，２（小学館）→法政大学図書館オンラインデータベース、ジャパンナレッジLibで、閲読可能
▼『源氏物語』の現代語訳として、以下の物も参考になります。
◎林望『謹訳源氏物語　改訂新修』１，２（祥伝社文庫）
◎大塚ひかり『源氏物語』１（ちくま文庫）
◎今泉忠義『源氏物語　新装版』１（講談社学術文庫）
◎角田光代『源氏物語』１，２（河出文庫）

【成績評価の方法と基準】
以下の２点を重視して評価します。
●発表プリントとプレゼンテーションの質、５０％
●ディスカッション参加度、５０％。

【学生の意見等からの気づき】
議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】
◆専門領域：日本古典文学
◆研究テーマ：平安時代の物語
◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版、2011年）、『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版、2014年）ほか

【Outline (in English)】
Outline and objectives:
We will accurately decipher *The Tale of Genji* based on the original manuscript.
This year, we will decipher the latter half of the “Hana-no-en” chapter and the first half of the “Aoi” chapter of the Kawachi-bon.
Goal:
The goal is to master the following three skills:
● The ability to accurately translate classical Japanese texts
● The ability to research grammar and usage
● The ability to compare existing commentaries
Work to be done outside of class:
Before each class meeting,students will be expected to have read "Wakamurasaki", "Momiji-no-ga" and "Hana-no-en" chapter.
Preparation and review time shall be two hours each as standard.
Grading criteria:
The following two points will be emphasized in the evaluation:
● Quality of presentation handouts and presentation, 50%
● Participation in discussions, 50%

LIT500B7（文学 / Literature 500）

平安時代の物語 II

加藤　昌嘉

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
◆『源氏物語』を、写本の原文に基づいて、正確に解読してゆきます。注釈書・現代語訳は多く存在しますが、『源氏物語』の文章・場面は、まだ、きちんと、読み解かれていないからです。
◆秋学期は、河内本の「葵」巻を解読してゆきます。

【到達目標】
以下の３点を身に付けることが目標です。
●古文を正確に訳す能力
●文法・語法を調べる能力
●先行の注釈書を比較する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
発表者は、河内本『源氏物語』の影印を元に、整定本文と、現代語訳と、注釈を、作成し、プレゼンテーションを行います。それを元に、参加者全員でディスカッションをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「葵」	葵祭（賀茂祭）
3	「葵」	葵上の車と六条御息所の車
4	「葵」	葵上の車と六条御息所の車
5	「葵」	六条御息所の屈辱
6	「葵」	六条御息所の屈辱
7	「葵」	光源氏の勇姿
8	「葵」	朝顔の姫君の思い
9	「葵」	事件を知る光源氏
10	「葵」	光源氏と紫上
11	「葵」	光源氏と紫上
12	「葵」	源典侍登場
13	論文合評	先行論文を検証する
14	まとめ	半年間の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
市販の『源氏物語』テキストで、「若紫」巻、「紅葉賀」巻、「花宴」巻を読むこと。
予習復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『尾州家河内本源氏物語』（八木書店）を使用しますが、この影印については、授業時に詳しく説明します。

【参考書】
▼『源氏物語』のテキスト（原文＋注釈）として、以下のいずれかを、座右に置いて、読み進めてください。
◎柳井滋ほか『源氏物語』１，２（岩波文庫）
◎玉上琢弥『源氏物語　現代語訳付き』１，２（角川ソフィア文庫）
◎石田穣二ほか『新潮日本古典集成　源氏物語』１，２（新潮社）
◎鈴木一雄ほか『源氏物語の鑑賞と基礎知識　葵』（至文堂）
◎阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集　源氏物語』１，２（小学館）→法政大学図書館オンラインデータベース、ジャパンナレッジLibで、閲読可能
▼『源氏物語』の現代語訳として、以下の物も参考になります。
◎林望『謹訳源氏物語　改訂新修』１，２（祥伝社文庫）
◎大塚ひかり『源氏物語』１（ちくま文庫）
◎今泉忠義『源氏物語　新装版』１（講談社学術文庫）
◎角田光代『源氏物語』１，２（河出文庫）

【成績評価の方法と基準】
以下の２点を重視して評価します。
●発表プリントとプレゼンテーションの質、５０％
●ディスカッション参加度、５０％。

【学生の意見等からの気づき】
議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】
◆専門領域：日本古典文学
◆研究テーマ：平安時代の物語
◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版、2011年）、『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版、2014年）ほか

【Outline (in English)】
Outline and objectives:
We will accurately decipher *The Tale of Genji* based on the original manuscript.
This year, we will decipher the first half of the “Aoi” chapter of the Kawachi-bon.
Goal:
The goal is to master the following three skills:
● The ability to accurately translate classical Japanese texts
● The ability to research grammar and usage
● The ability to compare existing commentaries
Work to be done outside of class:
Before each class meeting,students will be expected to have read "Wakamurasaki", "Momiji-no-ga" and "Hana-no-en" chapter.
Preparation and review time shall be two hours each as standard.
Grading criteria:
The following two points will be emphasized in the evaluation:
● Quality of presentation handouts and presentation, 50%
● Participation in discussions, 50%

LIT500B7（文学 / Literature 500）

書誌学と文献学Ⅰ

阿部　真弓

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。
　今年度は、鴨長明の歌論書『無名抄』を取り上げます。随筆『方丈記』の作者として有名な鴨長明ですが、長明は六条源家の俊恵から和歌を学び、後鳥羽院にその才を認められた歌人で、『無名抄』はそうした立場から著された作品です。ただ、歌論書に分類されてはいますが、和歌理論だけでなく、歌人の逸話や自身の回想等も多く含んでおり、説話集的でもあり、随筆的でもある作品です。
　春学期の授業では、歌論や実作上の注意に関わる内容等を中心に、適切かつ詳細に注釈を施して現代語に訳し、鴨長明の和歌観について考察します。

【到達目標】
①適切に文献を調査し、和歌を読み解く能力を身につける。
②くずし字を読むことができる。
③プレゼンテーション能力を身につける。
④ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
影印本をテキストとします。教員の講義、くずし字を読む練習、受講生の発表・討論を取り混ぜながら、『無名抄』を精読します。なお、受講生からの質問や意見を随時受け付け、討論へ進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要の説明
2	『無名抄』概説	『無名抄』に関する問題を整理し、説明する。
3	鴨長明について	鴨長明の事績等の説明
4	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する。
5	変体仮名について	変体仮名の解説・解読練習
6	くずし字について	漢字のくずし字に関する説明、解読練習
7	『無名抄』読解	受講生Aによる発表、受講生による討論
8	『無名抄』読解	受講生Bによる発表、受講生による討論
9	『無名抄』読解	受講生Cによる発表、受講生による討論
10	『無名抄』読解	受講生Dによる発表、受講生による討論
11	『無名抄』読解	受講生Eによる発表、受講生による討論
12	『無名抄』読解	受講生Fによる発表、受講生による討論
13	『無名抄』読解	受講生Gによる発表、受講生による討論
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　授業前には参考書等を読み、『無名抄』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。
　発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者は参考書等を確認し、どのような問題点のある章段なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。
　本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
『無名抄 現代語訳付き (角川ソフィア文庫)』(KADOKAWA、2013年)
『鴨長明と寂蓮 (コレクション日本歌人選 49)』(小林一彦、笠間書院、2012年)

【成績評価の方法と基準】
【授業の到達目標】①～④に照らし、発表内容またはレポート70％（①～④）、討論への参加度30％（④）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の関心に応じた教材を適宜配布します。また、随時、くずし字を読む練習も行います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞日記文学、和歌
＜主要研究業績＞「『とはずがたり』の恋一物語る二条」(『文学』8巻5号、2007年9月)、「『弁内侍日記』論一糾える言葉の連鎖一」(『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院)、「『嵯峨のかよひぢ』考一藤原為家の涙一」(『日本文学誌要』89号、2014年3月)

【Outline (in English)】
Course outline:
This course deals with *Mumyō shō* (a poetic treatise by Kamo no Chōmei) .
Learning Objectives:
The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy:
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

書誌学と文献学 II

阿部　真弓

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。
　今年度は、鴨長明の歌論書『無名抄』を取り上げます。随筆『方丈記』の作者として有名な鴨長明ですが、長明は六条源家の俊恵から和歌を学び、後鳥羽院にその才を認められた歌人で、『無名抄』はそうした立場から著された作品です。ただ、歌論書に分類されてはいますが、和歌理論だけでなく、歌人の逸話や自身の回想等も多く含んでおり、説話集的でもあり、随筆的でもある作品です。
　秋学期の授業では、歌人の伝記や逸話に関わる内容等を中心に、適切かつ詳細に注釈を施して現代語に訳し、鴨長明の和歌観について考察します。

【到達目標】
①適切に文献を調査し、和歌を読み解く能力を身につける。
②くずし字を読むことができる。
③プレゼンテーション能力を身につける。
④ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
影印本をテキストとします。教員の講義、くずし字を読む練習、受講生の発表・討論を取り混ぜながら、『無名抄』を精読します。なお、受講生からの質問や意見を随時受け付け、討論へ進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概要の説明
第2回	『無名抄』概説	『無名抄』に関する問題を整理し、説明する。
第3回	院政期から鎌倉時代の歌壇	歌道家（六条源家、六条藤家、御子左家）の動向に関する説明
第4回	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する。
第5回	くずし字について	変体仮名の解説・解読練習
第6回	『無名抄』読解	受講生Aによる発表、受講生による討論
第7回	『無名抄』読解	受講生Bによる発表、受講生による討論
第8回	『無名抄』読解	受講生Cによる発表、受講生による討論
第9回	『無名抄』読解	受講生Dによる発表、受講生による討論
第10回	『無名抄』読解	受講生Eによる発表、受講生による討論
第11回	『無名抄』読解	受講生Fによる発表、受講生による討論
第12回	『無名抄』読解	受講生Gによる発表、受講生による討論
第13回	『無名抄』読解	受講生Hによる発表、受講生による討論
第14回	まとめ	秋学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　授業前には参考書等を読み、『無名抄』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。
　発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者は参考書等を確認し、どのような問題点のある章段なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。
　本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
『無名抄 現代語訳付き (角川ソフィア文庫)』（KADOKAWA、2013年）
『鴨長明と寂蓮 (コレクション日本歌人選 49)』（小林一彦、笠間書院、2012年）

【成績評価の方法と基準】
【授業の到達目標】①～④に照らし、発表内容またはレポート70％（①～④）、討論への参加度30％（④）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の関心に応じた教材を適宜配布します。また、随時、くずし字を読む練習も行います。

【その他の重要事項】
秋学期科目のみの履修も可能ですが、理解を深めるために春学期科目Aの受講をおすすめします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞日記文学、和歌
＜主要研究業績＞「『とはずがたり』の恋―物語る二条」（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論―糾える言葉の連鎖―」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひぢ』考―藤原為家の涙―」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline (in English)】
Course outline:
This course deals with *Mumyō shō* (a poetic treatise by Kamo no Chōmei) .
Learning Objectives:
The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy:
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

能と楽劇Ⅰ

佐藤　和道

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
室町時代に書かれた金春禅鳳の謡本を用いて、能楽の作品を研究するための基本的な方法を学ぶ。春学期では、作品研究を行う前提となる校訂本文を作成する。金春禅鳳の謡本は、崩し字で書かれている。崩し字を読んだ経験がなくても受講できるが、既修者以上に準備の時間が必要である。

【到達目標】
1) 翻刻、校合を経て校訂本文を作成することができる。
2) 室町時代から現代に至る謡本の変遷について基礎知識を得る。
3) 謡本の詞章、演出注記の読み方に関する基礎知識を得る。
4) 能の小段構造、各小段の特徴に関する基礎知識を得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
20曲ほどある金春禅鳳自筆謡本から1曲を選び、担当曲の翻刻、校合、校訂本文作成を行う。シラバスには11曲を載せているが、受講者の人数や希望によって曲数や曲目は変更される可能性がある。授業内で1〜2回の口頭発表、授業の最後に作成した校訂本文を提出する必要がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス・概説１	世阿弥自筆本から現代の謡本に至る歴史的な変遷の解説。担当曲目の決定。
第2回	概説２	校訂本文を作成するための基本的な資料、謡本に記されている注記の意味、小段理論などの説明。
第3回	金春禅鳳謡本の読解（１）	〈自然居士〉の翻刻と校合。観阿弥の能についての解説。
第4回	金春禅鳳謡本の読解（２）	〈百万〉の翻刻と校合。世阿弥の能についての解説。
第5回	金春禅鳳謡本の読解（３）	〈実盛〉の翻刻と校合。修羅能についての解説。
第6回	金春禅鳳謡本の読解（４）	〈隅田川〉の翻刻と校合。観世元雅の能についての解説。
第7回	金春禅鳳謡本の読解（５）	〈三輪〉の翻刻と校合。神能についての解説。
第8回	金春禅鳳謡本の読解（６）	〈定家〉の翻刻と校合。金春禅竹の能についての解説。
第9回	金春禅鳳謡本の読解（７）	〈碇潜〉の翻刻と校合。平家物語を題材とする能についての解説。
第10回	金春禅鳳謡本の読解（８）	〈邯鄲〉の翻刻と校合。唐物の能についての解説。
第11回	金春禅鳳謡本の読解（９）	〈東方朔〉の翻刻と校合。金春禅鳳の能についての解説。
第12回	金春禅鳳謡本の読解（１０）	〈道成寺〉の翻刻と校合。室町後期の能についての解説。
第13回	金春禅鳳謡本の読解（１１）	〈放下僧〉の翻刻と校合。仇討ち物の能についての解説。
第14回	総括	各自作成した校訂本文を提出し、その概要を発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当回までに謡本を翻刻、校合し、発表資料を作成する。最終回までに発表資料を踏まえて校訂本文を作成する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。ただし、受講者の崩し字の習熟度によって作業時間は異なる。

【テキスト（教科書）】
野上記念法政大学能楽研究所「能楽資料総合デジタルアーカイブ」所載の金春禅鳳謡本
https://nohken-digitalarchives.hosei.ac.jp/

【参考書】
児玉幸多 編『くずし字用例辞典』東京堂出版、1993年
横道萬里雄・表章 校注『日本古典文学大系40・41　謡曲集　上・下』岩波書店、1960・1963年
伊藤正義 校注『新潮日本古典集成　謡曲集　上・中・下』新潮社、1983〜1988年
竹本幹夫・橋本朝生 校注・訳『日本の文学　古典編36　能　能楽論　狂言』ほるぷ出版、1987年

【成績評価の方法と基準】
口頭発表（70％）、提出された校訂本文（30％）

【学生の意見等からの気づき】
本年度より授業担当者変更のためフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン・タブレットなどの情報端末。

【その他の重要事項】
能楽作品研究Bと通年で受講することが望ましい。
しっかり準備をして授業に臨んでください。準備しても分からない点は、フォローしますが、準備不足は厳しい評価となります。崩し字は、学習すればだれでも読めるようになります。新しい言語を学ぶつもりで、意欲をもって取り組んでください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞能楽
＜研究テーマ＞近代以降の能楽の歴史
＜主要研究業績＞
「中世宗像の能―宗像大社文書「古能台本」をめぐって―」『中世文学』70号、2025年6月
「近代日本人移民と能楽―1930年代ハワイ・ブラジルの事例を中心に―」『演劇学論集』80号、2025年6月
「太平洋戦争下の日系人収容所発行新聞に見る能楽」『能と狂言』22号、2024年12月

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course introduces methods for researching Noh plays through the study of utaibon written by Komparu Zenpō. Students will read a base text written in kuzushiji, collate it with other versions, and produce a critical text that forms the foundation of scholarly research on Noh plays.
（Learning Objectives）
By the end of this course, students will be able to:
1.Acquire a fundamental method for producing critical texts for Noh play research.
2.Understand the historical development of utaibon from the Muromachi period to the present.
3.Develop basic skills in reading and interpreting lyrics and performance annotations in utaibon.
4.Understand the basic structure (shōdan) of Noh plays.
（Learning activities outside of classroom）
Students are required to decipher the base text, collate it with other versions, and produce a critical text.
（Grading Criteria /Policy）
Oral presentations:70%, Final report:30%

LIT500B7（文学 / Literature 500）

能と楽劇 II

佐藤　和道

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
室町時代に書かれた金春禅鳳の謡本を用いて能楽の作品を研究するための基本的な方法を学ぶ。秋学期では、春学期で作成した校訂本文を用いて作品研究を行う。まず正確な現代語訳を作成した後、先行研究を踏まえて各自の論題を設定し、論を展開する。研究手法は必ずしも文学的なアプローチである必要はないが、テキストの正確な理解が研究の前提となる。

【到達目標】
1）詞章を正確に現代語訳することができる。
2）作品が成立した背景や享受の様相についての基礎知識を得る。
3）演出資料を通じて作品を演劇として理解することができる。
4）論拠を明示し、説得力ある主張を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
金春禅鳳自筆謡本から1曲を選び、担当曲の解釈及び作品研究を行う。参加者は2度の発表を通じて自身の作品理解を深め、その結果をレポートとしてまとめる。シラバスには便宜上6曲を載せているが、参加者の人数、希望によって、曲数や曲目は変更の可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	作品解釈の方法と必要な資料の紹介。担当曲目の決定。
第2回	金春禅鳳謡本の読解（1）	〈百万〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第3回	金春禅鳳謡本の読解（2）	〈実盛〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第4回	金春禅鳳謡本の読解（3）	〈定家〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第5回	金春禅鳳謡本の読解（4）	〈三輪〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第6回	金春禅鳳謡本の読解（5）	〈道成寺〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第7回	金春禅鳳謡本の読解（6）	〈邯鄲〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第8回	中間的な総括とフォローアップ	論題の発表。問題点の整理とアドバイス。
第9回	研究発表（1）	〈百万〉の作品研究。質疑応答。講評。
第10回	研究発表（2）	〈実盛〉の作品研究。質疑応答。講評。
第11回	研究発表（3）	〈定家〉の作品研究。質疑応答。講評。
第12回	研究発表（4）	〈三輪〉の作品研究。質疑応答。講評。
第13回	研究発表（5）	〈道成寺〉の作品研究。質疑応答。講評。
第14回	研究発表（6）・総括	〈邯鄲〉の作品研究。質疑応答。講評。レポートの提出。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自の設定した論題に従って、資料を調査し、発表資料をまとめる作業が必要である。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない

【参考書】
横道萬里雄・表章 校注『日本古典文学大系40・41　謡曲集　上・下』岩波書店、1960・1963年
伊藤正義 校注『新潮日本古典集成　謡曲集　上・中・下』新潮社、1983～1988年
小山弘志・佐藤健一郎 校注・訳『新編日本古典文学全集58・59　謡曲集1・2』小学館、1997・1998年
佐成謙太郎『謡曲大観』（首巻・第1～5巻・別巻）明治書院、1930・1931年

【成績評価の方法と基準】
口頭発表2回（70％）、レポート（30％）

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン・タブレットなどの情報端末。

【その他の重要事項】
能楽作品研究Aと通年で受講することが望ましい。そうでない場合、各自で校訂本文を作成して授業に臨むこと。
独創的な論が展開できれば、学会発表等につなげることができます。発表担当以外の受講者も、作品に関する基本的な情報を把握し、議論に積極的に参加してください。意欲的な参加を期待します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞能楽
＜研究テーマ＞近代以降の能楽の歴史
＜主要研究業績＞
「中世宗像の能―宗像大社文書「古能台本」をめぐって―」『中世文学』70号、2025年6月
「近代日本人移民と能楽―1930年代ハワイ・ブラジルの事例を中心に―」『演劇学論集』80号、2025年6月
「太平洋戦争下の日系人収容所発行新聞に見る能楽」『能と狂言』22号、2024年12月

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course introduces a fundamental method for researching Noh plays through the study of utaibon written by Komparu Zenpō. In the fall semester, students will conduct research on individual works based on the critical texts produced in the spring semester. Students will first prepare accurate modern Japanese translations, review previous researches, and then develop their own arguments.
（Learning Objectives）
By the end of this course, students will be able to:
1.Produce accurate modern Japanese translations of Noh texts.
2.Acquire basic knowledge of the historical background of Noh plays.
3.Acquire fundamental knowledge for understanding Noh plays as theatrical works.
4.Present persuasive arguments supported by appropriate evidence.
（Learning activities outside of classroom）
Students are required to conduct research according to their individual research topics.
（Grading Criteria /Policy）
Oral presentations:70%, Final report:30%

LIT500B7（文学 / Literature 500）

江戸の文芸と文化 I

小林　ふみ子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
18世紀後半～19世紀前半おける江戸狂歌の流行を背景として制作された狂歌摺物（私家版の浮世絵）のうち、和漢の古典籍をテーマとして制作された作品を読解する。現段階では四方連制作、北斎画「馬尽」をとりあげる予定。当時の和漢の学芸の流行をふまえて設定されたテーマを題として詠まれた狂歌と、それに取り合わされた北斎の挿絵は、どのような関係にあるのか。いまだ定説をみないこの謎に挑んでみましょう！

【到達目標】
（1）作品を翻刻し、みずから注釈を施ししながら読む力をつける。
（2）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
背景についての概説のあと、まずは作品を割り当ててテキストを翻刻し、相互に確認しましょう。
その後、それぞれの図像の分析とテキストとの関係について発表してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講義1	江戸狂歌の流行と摺物制作について
第2回	講義2	浮世絵の歴史のなかの摺物 受講生の発表作品選定
第3回	講義3	絵師北斎について
第4回	翻刻をしてみよう1	くずし字の基本
第5回	翻刻をしてみよう2	各自の担当作品の翻刻確認
第6回	学生の発表1	作品1　馬貝（例）
第7回	学生の発表2	作品2　駒形堂（例）
第8回	学生の発表3	作品3　駒止石（例）
第9回	学生の発表4	作品4　馬蹄石（例）
第10回	学生の発表5	作品5　駒鳥（例）
第11回	学生の発表6	作品6　初午詣（例）
第12回	学生の発表7	作品7　木馬（例）
第13回	学生の発表8	作品8　有馬産（例）
第14回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎週、次回の場面を確認してきましょう。
発表担当者は作品解釈の発表を用意してください。

【テキスト（教科書）】
とくになし。

【参考書】
江戸狂歌の基本については江戸狂歌研究会編『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院　2014）参照。

【成績評価の方法と基準】
毎回の出席は当然の前提とした上で、報告70％、授業中の質疑などの参加態度30％によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。
各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【その他の重要事項】
授業の実施形態は受講生の様子を見てみんなで相談して決めましょう。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化
＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作
＜著書＞
【単著】
『へんちくりん江戸挿絵本』インターナショナル新書（集英社インターナショナル、2019）
『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店　2014→角川ソフィア文庫2024）
『天明狂歌研究』（汲古書院　2009）
【共編著】
『水都としての東京とヴェネツィア』（法政大学出版局　2022）
『最後の文人　石川淳の世界』集英社新書（集英社　2021）
『東アジア文化講座3東アジアに共有される文学圏』（文学通信　2021）
『好古趣味の歴史　江戸東京からたどる』（文学通信　2020）
『北斎　視覚のマジック　小布施・北斎館名品集』（平凡社　2019）
『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史』（文学通信　2019）
『別冊太陽　歌麿決定版』（平凡社　2016）
『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院　2015）
『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院　2014）
『別冊太陽　北斎決定版』（平凡社　2010）

【Outline (in English)】
(Outline) Reading surimono, or privately published prints with verses produced in 18-19th century Edo to analyze relationship between texts and images.
(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(70%) and in-class contribution(30%).

LIT500B7（文学 / Literature 500）

江戸の文芸と文化 II

小林　ふみ子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸時代の絵入の作品を、挿絵と合わせて読解する。秋学期は、春学期の受講生と相談して作品を決定する。今のところの提案予定は黄表紙の名手芝全交作に北尾政美（のちの鍬形蕙斎）が挿絵を担当して縦横に妖怪を活躍させた『俵藤太振出薬』（寛政2年鶴屋喜右衛門版）https://kokusho.nijl.ac.jp/work/366018?ln=ja。

【到達目標】
【修士課程】
（1）作品を翻刻し、みずから注釈を施ししながら読む基礎的な力をつける。
（2）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献を知る。
【博士後期課程】
（1）作品を翻刻し、みずから注釈を施ししながら読む力を確実にする。
（2）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	概説	作者と画工、時代状況についての概説
第2回	学生の発表	上巻1
第3回	学生の発表	上巻2
第4回	学生の発表	上巻3
第5回	学生の発表	上巻4
第6回	学生の発表	中巻1
第7回	学生の発表	中巻2
第8回	学生の発表	中巻3
第9回	学生の発表	中巻4
第10回	学生の発表	下巻1
第11回	学生の発表	下巻2
第12回	学生の発表	下巻3
第13回	学生の発表	下巻4
第14回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎週、次回のテキストを読んでくる。
発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】
なし

【参考書】
長島弘明編『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典』（文学通信　2019）・小林ふみ子『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル・インターナショナル新書　2019）その他、適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
毎回の出席は当然の前提とした上で、報告70％、授業中の質疑などの参加態度30％によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
翻刻を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。
各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化
＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作
＜近年の論文・その他書き物＞
【論文】
「大田南畝　遊女の声を伝える」『日本歴史』932号　2026年
「近世随筆における考証の意義　大田南畝から考える「考証随筆」」『国語と国文学』102巻2号2025
「狂歌連中、摺物をつくる」『レスコビッチコレクションの摺物―パリから来た北斎・広重・北渓・岳亭―』大和文華館2024
「懐古趣味流行のなかの鍬形蕙斎」『國華』1542号 2024
「大田南畝の狂詩と明詩」『明清文学論集　その楽しさ その広がり』東方書店2024
'Generative Interactions:The Osmotic Boundaries Between Kusazōshi and Ukiyo-e',Graphic Narratives from Early Modern Japan :The world of Kusazoshi, Brill,2024
「作者の虚構性と実体性：大田南畝周辺から 」『國文論叢別冊』1号 2023
「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113号　2021（査読付）
「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印―浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号　2020（査読付）
「書籍を模擬する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から―」『京都語文』26号　2018
「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

【Outline (in English)】
(Outline)Reading illustrated works to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.
（Learning activities outside of classroom） Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(70%) and in-class contribution(30%).

LIT500B7（文学 / Literature 500）

江戸の思想史Ⅰ

丸井　貴史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近世小説の研究方法を学ぶ。工具書の利用法や先行研究の整理のしかたなど、基礎的な事柄を確認したうえで、作品本文に注釈をつけ、読解する。また、自らの解釈が研究史的にいかに位置づけられるかを的確に把握できるようにする。

【到達目標】
（1）作品と作家に関する知識を身につけることができる。
（2）作品の本文に対して適切な注釈を施すことができる。
（3）作品について自ら問いを立て、分析することができる。
（4）自らの意見や解釈を論理的に説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式とし、受講者による発表とディスカッションを中心とする（対象とする作品については、履修者と相談のうえ決定する）。なお、課題等の提出・フィードバックはWebClassを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要の把握	ガイダンス
第2回	作品概要の把握	作品についての概説
第3回	作品精読	受講者による発表1
第4回	作品精読	受講者による発表2
第5回	作品精読	受講者による発表3
第6回	作品精読	受講者による発表4
第7回	作品精読	受講者による発表5
第8回	作品精読	受講者による発表6
第9回	作品精読	受講者による発表7
第10回	作品精読	受講者による発表8
第11回	作品精読	受講者による発表9
第12回	作品精読	受講者による発表10
第13回	作品精読	受講者による発表11
第14回	今学期のふりかえり	総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しない。作品のコピーを配布する。

【参考書】
指定しない。

【成績評価の方法と基準】
発表（80％）・授業への貢献度（20％）を成績評価の対象とする。
発表は、内容の充実度・レジュメの作り方・発表態度などを総合的に評価する。
授業への貢献度は、ディスカッションの際の積極性を特に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
発表を踏まえたディスカッションの時間を十分に確保することと、発表に対するフィードバックを充実させることに留意したい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近世文学
＜研究テーマ＞
読本を中心とする近世小説の研究、近世日本における白話文学受容の研究
＜主要研究業績＞
『白話小説の時代―日本近世中期文学の研究―』（汲古書院、2019年）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course introduces the methods for researching early modern novels to students taking this course.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
(1) Be able to acquire knowledge about works and artists.
(2) Appropriate annotations can be made to the text of the work.
(3) Be able to ask and analyze questions about the work.
(4) Be able to logically explain one's own opinions and interpretations.
（Learning activities outside of classroom）
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be based on in-class presentations (80%), and attendance (20%).

LIT500B7（文学 / Literature 500）

江戸の思想史 II

丸井　貴史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近世小説の研究方法を学ぶ。工具書の利用法や先行研究の整理のしかたなど、基礎的な事柄を確認したうえで、作品本文に注釈をつけ、読解する。また、自らの解釈が研究史的にいかに位置づけられるかを的確に把握できるようにする。

【到達目標】
（1）作品と作家に関する知識を身につけることができる。
（2）作品の本文に対して適切な注釈を施すことができる。
（3）作品について自ら問いを立て、分析することができる。
（4）自らの意見や解釈を論理的に説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式とし、受講者による発表とディスカッションを中心とする（対象とする作品については、履修者と相談のうえ決定する）。なお、課題等の提出・フィードバックはWebClassを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要の把握	ガイダンス
第2回	作品概要の把握	作品についての概説
第3回	作品精読	受講者による発表1
第4回	作品精読	受講者による発表2
第5回	作品精読	受講者による発表3
第6回	作品精読	受講者による発表4
第7回	作品精読	受講者による発表5
第8回	作品精読	受講者による発表6
第9回	作品精読	受講者による発表7
第10回	作品精読	受講者による発表8
第11回	作品精読	受講者による発表9
第12回	作品精読	受講者による発表10
第13回	作品精読	受講者による発表11
第14回	今学期のふりかえり	総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しない。作品のコピーを配布する。

【参考書】
指定しない。

【成績評価の方法と基準】
発表（80％）・授業への貢献度（20％）を成績評価の対象とする。
発表は、内容の充実度・レジュメの作り方・発表態度などを総合的に評価する。
授業への貢献度は、ディスカッションの際の積極性を特に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
発表を踏まえたディスカッションの時間を十分に確保することと、発表に対するフィードバックを充実させることに留意したい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近世文学
＜研究テーマ＞
読本を中心とする近世小説の研究、近世日本における白話文学受容の研究
＜主要研究業績＞
『白話小説の時代―日本近世中期文学の研究―』（汲古書院、2019年）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course introduces the methods for researching early modern novels to students taking this course.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
(1) Be able to acquire knowledge about works and artists.
(2) Appropriate annotations can be made to the text of the work.
(3) Be able to ask and analyze questions about the work.
(4) Be able to logically explain one's own opinions and interpretations.
（Learning activities outside of classroom）
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be based on in-class presentations (80%), and attendance (20%).

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

日本語の歴史と現在 I

竹林　一志

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本古典文学の言語表現は如何なるものか、それをどのように解析すればよいのか、ということを学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。一字一句をゆるがせにせず、古典本文を丁寧に読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】
１．日本古典文学の言語表現の特徴について、特定の作品の具体例を挙げつつ説明することができる。
２．日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
いわゆる「古典文法」の基礎知識を確認した後、古代・中世・近世の文学作品を対象として表現解析を行う。授業は、テキストと配付プリントを用い、おもに講義形式で進める。提出物（授業内容に関するワークシート）に対するフィードバックは次の授業回において口頭で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の全体像を伝える。
第2回	古典文法	助詞・助動詞を中心に古典文法の基礎知識を確認する。
第3回	表現解析の方法	日本古典文学の表現解析法について概説する。
第4回	『古今和歌集』所収歌の読解（先行研究についての検討）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に16番歌）について先行研究の論を検討する。
第5回	『古今和歌集』所収歌の読解（新たな解釈の提示）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に16番歌）の表現を解析する。
第6回	『枕草子』冒頭部の読解（先行研究についての検討）	『枕草子』冒頭部について先行研究の論を検討する。
第7回	『枕草子』冒頭部の読解（新たな解釈の提示）	『枕草子』冒頭部の表現を解析する。
第8回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（先行研究についての検討）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現について先行研究の論を検討する。
第9回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（新たな解釈の提示）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現を解析する。
第10回	『徒然草』第89段の読解（先行研究についての検討）	『徒然草』第89段について先行研究の論を検討する。
第11回	『徒然草』第89段の読解（新たな解釈の提示）	『徒然草』第89段の表現を解析する。
第12回	松尾芭蕉の俳句の読解（先行研究についての検討）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」について先行研究の論を検討する。
第13回	松尾芭蕉の俳句の読解（新たな解釈の提示）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」の表現を解析する。
第14回	総括	本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間（計４時間）を標準とする。
各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。
授業後は、ノート、テキストや配付物を見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】
『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院、2009年、2,200円（税別）

【参考書】
『徒然草抜書』小松英雄、講談社
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】
学期末レポート（上記の到達目標に関連する課題を出す）：60％
提出物：30％
受講姿勢：10％

【学生の意見等からの気づき】
専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学
＜研究テーマ＞
文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など
＜主要研究業績＞
単著：
『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年
『三浦綾子文学の本質と諸相』新典社、2022年

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class we study about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to improve the skills for reading Japanese classical literature. We try not to neglect any word or phrase in the texts. This class is mainly intended for overseas students.
【Learning Objectives】
The goals of this course are as follows:
1. Students can explain the characteristics found in the expressions of Japanese classical literature, drawing instances from works.
2. Students acquire the methods and attitudes for analyzing the expressions of Japanese classical literature.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class meeting, you will be expected to have read the relevant chapter from the text. And after each class meeting, you will be expected to reread your notes, text and handouts. Your study time will be about four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Term-end report: 60%, Works to be submitted: 30%, in-class contribution 10%

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

日本語の歴史と現在 II

竹林　一志

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
『伊勢物語』第１段～第15段を丁寧に読み解きながら、日本古典文学の言語表現と、その解析法について学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。仮名文の性質を理解し、ディスコースの中で表現を読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】
１．『伊勢物語』の言語表現の特徴について、具体例を挙げつつ説明することができる。
２．日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
テキストと配付プリントを用い、担当教員の講義と演習形式（受講者の分担発表と出席者全員による討議）で進める。提出物（授業内容に関するワークシート）に対するフィードバックは次の授業回において口頭で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」の読解	本授業の全体像を伝えた後、テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」を一緒に読む。発表の分担も行う。
第2回	テキスト「イントロダクション」の読解	担当教員作成のワークシートをもとに、テキスト「イントロダクション」を読み解く。
第3回	第１段「昔、をとこ」～「心地まどひにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第１段「昔、をとこ」～「心地まどひにけり」の表現を解析する。
第4回	第１段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第１段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の表現を解析する。
第5回	第２段・第３段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第２段・第３段の表現を解析する。
第6回	第４段・第５段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第４段・第５段の表現を解析する。
第7回	第６段～第８段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第６段～第８段の表現を解析する。
第8回	第９段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第９段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の表現を解析する。
第9回	第９段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第９段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の表現を解析する
第10回	第９段「なほ行き行きて」～「こぞりて泣きにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第９段「なほ行き行きて」～「こぞりて泣きにけり」の表現を解析する。
第11回	第10段～第12段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第10段～第12段の表現を解析する。
第12回	第13段・第14段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第13段・第14段の表現を解析する。
第13回	第15段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第15段の表現を解析する。
第14回	総括	本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間（計４時間）を標準とする。
各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。
授業後は、ノートやテキスト、配付物を見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】
『伊勢物語の表現を掘り起こす』小松英雄、笠間書院、2010年、1,900円（税別）

【参考書】
『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】
発表：60％
提出物：30％
受講姿勢：10％

【学生の意見等からの気づき】
専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
春学期科目「日本語・日本文学の基礎A」（「日本語の歴史と現在Ⅰ」）を受講していることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学
＜研究テーマ＞
文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など
＜主要研究業績＞
単著：
『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年
『三浦綾子文学の本質と諸相』新典社、2022年

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class we carefully read ‘The tales of Ise’ (from chapter 1 through 15) for studying about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to understand the characteristics of classical texts written in *kana* and interpret the linguistic expressions precisely in the context. This class is mainly intended for overseas students.
【Learning Objectives】
The goals of this course are as follows:
1. Students can explain the characteristics found in the expressions of ‘The tale of Ise’, drawing instances from the work.
2. Students acquire the methods and attitudes for analyzing the expressions of Japanese classical literature.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class meeting, you will be expected to have read the relevant chapter from the text. And after each class meeting, you will be expected to reread your notes, text and handouts. Your study time will be about four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Presentation: 60%, Works to be submitted: 30%, in-class contribution 10%

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

現代日本語のしくみⅠ

古牧　久典

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
認知言語学（主に認知意味論）とレトリック研究が交差する領域の基本的な見解を理解し、現代日本語の分析技法を学ぶ。指定教科書を通じて、シミリーとメタファーの概要をとらえ、実例分析・考察を行う。認知意味論を踏まえた現代日本語についての論文の読解や執筆につながる能力を身につける。

【到達目標】
・日本語学の見地から、現代日本語を観察することができる。
・レトリック研究の基本的な考え方を理解することができる。
・認知言語学の基盤に沿って、現代日本語を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は、演習形式を基本とする。テキストに沿って理解し、内容に応じて、関連の重要文献や最新文献にも触れる。事前に担当が割り当てられるので、担当学生は文献の内容を発表する。内容に基づき、要点整理、疑問点、理解確認、発展可能性に関するディスカッションを実施する。内容によっては講義形式での解説からも学習する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス／認知意味論の概要	授業概要・形式と進め方・導入／認知意味論の基本理解
第2回	認知意味論とレトリック研究	認知意味論とレトリック研究の関係の理解
第3回	認知意味論と日本語	認知意味論から日本語の分析・考察・検討
第4回	シミリー	テキスト 1章導入節（日本語の分析・考察・討論）
第5回	シミリーとメタファー	テキスト 1章1節（日本語の分析・考察・討論）
第6回	シミリー標識	テキスト 1章2節（日本語の分析・考察・討論）
第7回	典型的なシミリー	テキスト 1章3節（日本語の分析・考察・討論）
第8回	周辺的なシミリー	テキスト 1章4節（日本語の分析・考察・討論）
第9回	シミリーからメタファーへ	テキスト 1章5-6節（日本語の分析・考察・討論）
第10回	メタファー	テキスト 2章導入節（日本語の分析・考察・討論）
第11回	メタファーの種類	テキスト 2章1節（日本語の分析・考察・討論）
第12回	根源的メタファー	テキスト 2章2節（日本語の分析・考察・討論）
第13回	概念メタファー	テキスト 2章3節（日本語の分析・考察・討論）
第14回	メタファー研究／授業全体総括	テキスト 2章4-5節（日本語の分析・考察・討論）／授業全体の総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
・日本語学や言語学の最低限の基礎知識を事前に準備学習として各自習得しておくこと。（授業と並行して学習を進めることも可。）
・受講学生は指定概説文献を事前に読み、疑問点などを挙げて整理しておく。
・発表担当回の学生は発表資料を準備し、項目内容を授業内で説明できるようにしておく。

【テキスト（教科書）】
瀬戸賢一 (2024)『レトリック探究（レトリックの世界１）』, ひつじ書房.

【参考書】
池上嘉彦 (2006)『英語の感覚・日本語の感覚』, ＮＨＫブックス.
池上嘉彦・山梨正明 編 (2020)『認知言語学Ⅰ（講座 言語研究と革新と継承４）』, ひつじ書房.
池上嘉彦・山梨正明 編 (2020)『認知言語学Ⅱ（講座 言語研究と革新と継承５）』, ひつじ書房.
大堀壽夫 (2002)『認知言語学』, 東京大学出版会.
児玉一宏・谷口一美・深田智 編著 (2020)『はじめて学ぶ認知言語学』, ミネルヴァ書房.
高橋英光・野村益寛・森雄一 編 (2018)『認知言語学とは何か－あの先生に聞いてみよう』, くろしお出版.
谷口一美 (2006)『学びのエクササイズ　認知言語学』, ひつじ書房.
辻幸夫 編 (2013)『新編　認知言語学キーワード事典』, 研究社.
辻幸夫 編集主幹 (2019)『認知言語学大事典』, 朝倉書店.
西村義樹・野矢茂樹 (2013)『言語学の教室－哲学者と学ぶ認知言語学』, 中公新書.
野村益寛 (2014)『ファンダメンタル認知言語学』, ひつじ書房.
籾山洋介 (2010)『認知言語学入門』, 研究社.
籾山洋介 (2014)『日本語研究のための認知言語学』, 研究社.
籾山洋介 (2020)『実例で学ぶ認知意味論』, 研究社.
森雄一 (2012)『学びのエクササイズ　レトリック』, ひつじ書房.
山梨正明 (2000)『認知言語学原理』, くろしお出版.
吉村公宏 (2004)『はじめての認知言語学』, 研究社.
（上記以外は授業時に提示。）

【成績評価の方法と基準】
テキスト内容紹介とディスカッションへの参加度（紹介方法を含む）（50 %）
小レポート（レジュメ・リアクションペーパー等含む）（25 %）
期末レポート（25 %）

【学生の意見等からの気づき】
受講者同士のディスカッションからの学びを大事にします。

【その他の重要事項】
日本語学・英語学・中国語学などの言語学関連の学部教養科目程度の知識を必須とする。
秋学期開講の同科目Ｂも合わせての履修することを推奨する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　認知言語学、意味論、語用論、コーパス言語学
＜研究テーマ＞　認知意味論と（認知）語用論の接点
＜主要研究業績＞
「＜重複＞表現とメトニミ」（坂原茂編 『日仏名詞限定表現の対照研究』 平成18～20年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究成果報告書 2009年）
「トートロジー構文から迫る認知語用論」（山梨正明他編 『認知言語学論考No.10』 ひつじ書房 2012年）
『語用論キーターム事典』（共訳 開拓社 2014年）
「語彙語用論と認知意味論」（辻幸夫 編集主幹 『認知言語学大事典』 朝倉書店 2019年）

【Outline (in English)】
Course outline: This course gives an overview of basic theories with special reference to modern Japanese language, within the cross fields of Cognitive Semantics and Rhetoric studies, such as simile, metaphor, and polysemy. The aim of this class is to help students learn cognitive-semantic analysis to linguistic meaning in Japanese.
Learning Objectives: The goals of this course are to understand modern Japanese language from the linguistic perspectives; to understand basic cognitive-semantic concepts; and to apply them to Japanese language.
Learning activities outside of classroom: Students will be expected to spend four hours each class on out-of-class preparation by reading the required papers and giving brief and/or detailed presentations on it, to understand the course content.
Grading Criteria /Policy: Your overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution (50%); short reports (25%); term-end report (25%).

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

現代日本語のしくみII

古牧　久典

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
認知言語学（主に認知意味論）とレトリック研究が交差する領域の基本的な見解を理解し、現代日本語の分析技法を学ぶ。指定教科書を通じて、シネクドキとメトニミーの概要をとらえ、実例分析・考察を行う。認知意味論を踏まえた現代日本語についての論文の読解や執筆につながる能力を身につける。

【到達目標】
・日本語学の見地から、現代日本語を観察することができる。
・レトリック研究の基本的な考え方を理解することができる。
・認知言語学の基盤に沿って、現代日本語を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は、演習形式を基本とする。テキストに沿って理解し、内容に応じて、関連の重要文献や最新文献にも触れる。事前に担当が割り当てられるので、担当学生は文献の内容を発表する。内容に基づき、要点整理、疑問点、理解確認、発展可能性に関するディスカッションを実施する。内容によっては講義形式での解説からも学習する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス／認知意味論からみた日本語レトリック研究	授業概要・形式と進め方・導入
第2回	シネクドキ	テキスト 3章導入節（日本語の分析・考察・討論）
第3回	シネクドキの定義	テキスト 3章1節（日本語の分析・考察・討論）
第4回	分節分類と包摂分類	テキスト 3章2節（日本語の分析・考察・討論）
第5回	シネクドキの類と種	テキスト 3章3節（日本語の分析・考察・討論）
第6回	シネクドキの認識	テキスト 3章4節（日本語の分析・考察・討論）
第7回	シネクドキの周辺	テキスト 3章5-6節（日本語の分析・考察・討論）
第8回	メトニミー	テキスト 4章導入節（日本語の分析・考察・討論）
第9回	メトニミーの定義	テキスト 4章1節（日本語の分析・考察・討論）
第10回	空間のメトニミー	テキスト 4章2節（日本語の分析・考察・討論）
第11回	時間のメトニミー	テキスト 4章3節（日本語の分析・考察・討論）
第12回	特性のメトニミー	テキスト 4章4-5節（日本語の分析・考察・討論）
第13回	認識の三角形	テキスト 補章1-2節（日本語の分析・考察・討論）
第14回	多義構造／授業全体総括	テキスト 補章3節（日本語の分析・考察・討論）／授業全体の総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・準備学習・復習・宿題等の時間は、授業の前と後で、それぞれ２時間を標準とする。
・日本語学や言語学の最低限の基礎知識を事前に準備学習として各自習得しておくこと。（授業と並行して学習を進めることも可。）
・受講学生は指定概説文献を事前に読み、疑問点などを挙げて整理しておく。
・発表担当回の学生は発表資料を準備し、項目内容を授業内で説明できるようにしておく。

【テキスト（教科書）】
瀬戸賢一 (2024)『レトリック探究（レトリックの世界１）』, ひつじ書房.

【参考書】
池上嘉彦 (2006)『英語の感覚・日本語の感覚』, ＮＨＫブックス.
池上嘉彦・山梨正明 編 (2020)『認知言語学Ｉ（講座 言語研究と革新と継承４）』, ひつじ書房.
池上嘉彦・山梨正明 編 (2020)『認知言語学II（講座 言語研究と革新と継承５）』, ひつじ書房.
大堀壽夫 (2002)『認知言語学』, 東京大学出版会.
児玉一宏・谷口一美・深田智 編著 (2020)『はじめて学ぶ認知言語学』, ミネルヴァ書房.
高橋英光・野村益寛・森雄一 編 (2018)『認知言語学とは何か－あの先生に聞いてみよう』, くろしお出版.
谷口一美 (2006)『学びのエクササイズ　認知言語学』, ひつじ書房.
辻幸夫 編 (2013)『新編　認知言語学キーワード事典』, 研究社.
辻幸夫 編集主幹 (2019)『認知言語学大事典』, 朝倉書店.
西村義樹・野矢茂樹 (2013)『言語学の教室－哲学者と学ぶ認知言語学』, 中公新書.
野村益寛 (2014)『ファンダメンタル認知言語学』, ひつじ書房.
籾山洋介 (2010)『認知言語学入門』, 研究社.
籾山洋介 (2014)『日本語研究のための認知言語学』, 研究社.
籾山洋介 (2020)『実例で学ぶ認知意味論』, 研究社.
森雄一 (2012)『学びのエクササイズ　レトリック』, ひつじ書房.
山梨正明 (2000)『認知言語学原理』, くろしお出版.
吉村公宏 (2004)『はじめての認知言語学』, 研究社.
（上記以外は授業時に提示。）

【成績評価の方法と基準】
テキスト内容紹介とディスカッションへの参加度（紹介方法を含む）（50 %）
小レポート（レジュメ・リアクションペーパー等含む）（25 %）
期末レポート（25 %）

【学生の意見等からの気づき】
受講者同士のディスカッションからの学びを大事にします。

【その他の重要事項】
日本語学・英語学・中国語学などの言語学関連の学部教養科目程度の知識を必須とする。
春学期開講の同科目Ａも合わせての履修することを推奨する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　認知言語学、意味論、語用論、コーパス言語学
＜研究テーマ＞　認知意味論と（認知）語用論の接点
＜主要研究業績＞
「＜重複＞表現とメトニミ」（坂原茂編 『日仏名詞限定表現の対照研究』 平成18～20年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究成果報告書 2009年）
「トートロジー構文から迫る認知語用論」（山梨正明他編 『認知言語学論考No.10』 ひつじ書房 2012年）
『語用論キーターム事典』（共訳 開拓社 2014年）
「語彙語用論と認知意味論」（辻幸夫 編集主幹 『認知言語学大事典』 朝倉書店 2019年）

【Outline (in English)】
Course outline: This course gives an overview of basic theories with special reference to modern Japanese language, within the cross fields of Cognitive Semantics and Rhetoric studies, such as synecdoche, metonymy, and polysemy. The aim of this class is to help students learn cognitive-semantic analysis to linguistic meaning in Japanese.
Learning Objectives: The goals of this course are to understand modern Japanese language from the linguistic perspectives; to understand basic cognitive-semantic concepts; and to apply them to Japanese language.
Learning activities outside of classroom: Students will be expected to spend four hours each class on out-of-class preparation by reading the required papers and giving brief and/or detailed presentations on it, to understand the course content.
Grading Criteria /Policy: Your overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution (50%); short reports (25%); term-end report (25%).

LIT500B7（文学 / Literature 500）

沖縄文芸史Ⅰ

福　寛美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・琉球王国初の文字資料『おもろさうし』に親しむ。
・琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝（いろうせつでん）』の説話を読む。
・また簡単な発表を通し、神歌や口頭伝承への理解を深める。
・琉球文学の古典に親しむ。

【到達目標】
・『おもろさうし』はおもろと称する神歌を集成した冊子である。おもろは日本本土のどのような歌謡とも似ていない。その世界観、そして神霊観を知ることを目的とする。
・また琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝（いろうせつでん）』の説話を読み、その説話に影響を与えたと考えられる事象の考察も目的とする。
・琉球文学の古典に親しむことを目的とする。
・琉球文学を深く理解することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・講義形式と演習形式をまぜて行う。
・講義をした後、講義の内容にかかわる事象を学生が調べ発表する、という形をとる。
・調べものは琉球・沖縄に関する基本的な文献（辞典など）を使う程度とする。
・対面形式の授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷲の用例を読む1	おもろの読み方を知り、おもろ世界の鷲の用例を読む。
第2回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷲の用例を読む2	おもろ世界の鷲の用例を読んでいく。
第3回	第1回、第2回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球・沖縄の文学や民俗に関する辞典の記述を読み、簡単に発表する。
第4回	おもろ世界の鷲の霊能、鷲のつく地名を考察する	おもろ世界の鷲は霊能ある存在とされている。そのことを考察していく。
第5回	鷲、そして鷲羽には戦勝の霊力があるとされた。そのことを考察する	おもろ世界の鷲、そして鷲羽の用例のうち、戦勝と関わる用例をみていく。
第6回	第4回、第5回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	『おもろさうし』の研究書で鷲の用例を考察したものを読み、簡単に発表する。
第7回	おもろ世界の船と猛禽類のダブルイメージのおもろを読む	おもろ世界では船が猛禽類とダブルイメージされることがある。その用例を読んでいく。
第8回	琉球船は実際に猛禽類と重ね合わされていた。そのことを考察する	琉球船には猛禽類の目玉模様が付けられていた。その意味を考察していく。
第9回	第7回、第8回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球船の絵図は残っており、インターネットでも検索できる。その絵図、またおもろについて調べ、簡単に発表する。
第10回	『遺老説伝』を知る	琉球の口頭伝承を集成した『遺老説伝』について学び、鷲羽の説話を読む。
第11回	鷲のイメージを考察する	おもろ世界の鷲のイメージ形成に関与した、と思われる神話を読む。また矢羽根として珍重された鷲の尾羽について学ぶ。
第12回	第10回、第11回の講義ををふまえ、学生が調べたことを発表する	『遺老説伝』の現代語訳を読む、またインターネットで読める文献を読み、簡単に発表する。
第13回	鳥の墓の伝承、現代の八重山諸島で愛される「鷲之鳥節」について考察する	多良間（たらま）島の鳥の墓の伝承、現代も愛される「鷲之鳥節」とおもろ世界の鷲を比較する。
第14回	春学期の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	主に第13回の講義に関わる事象を簡単に調べ、発表し、春学期をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・『火山と竹の女神』（教科書）の「おもろ世界の鷲」の部分を読む。
・授業支援システムにおもろの読み方、「おもろ世界の鷲」に関わる事柄を記したプリントをアップするので、あわせて読む。
・大学の沖縄文化研究所にはおもろ、ほか琉球文学に必要な文献が揃っているので、発表する時はそこで辞書を引いたり、参考文献を読んだりする。
・学習時間は各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】
・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021年）本体2500円＋税

【参考書】
・『喜界島・鬼の海域』（福寛美、新典社、2008年）
・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（福寛美、森話社、2013年）
・『ぐすく造営のおもろ』（福寛美、新典社、2015年）
・『奄美群島おもろの世界』（福寛美、南方新社、2018年）

【成績評価の方法と基準】
・期末試験は、問題を複数提示し、2問を選んでそれぞれ400字以上記述することとする。
・平常点に含まれる、出席回数、発表への積極性も評価基準とする。
・期末試験70%、平常点30%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
担当者は琉球文学のほか、民俗学、神話学も専攻している。
そのため、『おもろさうし』以外の学生の関心に応えることも可能である。
学生からの申し出があった場合、『おもろさうし』のほか、シャーマン、神話なども積極的に授業で対応していきたい。
過去の授業では、学生からの申し出によってシャーマンについて述べた。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
春学期、秋学期ともに同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
琉球文学（『おもろさうし』）
民俗学（南西諸島のシャーマン）
神話学（日本神話、琉球神話）

【＜研究テーマ＞】
現在の研究テーマの中心は南西諸島の神霊観である。また『おもろさうし』の言語の中に奈良時代の東国方言と同じものがあることに注目し、研究を進めている。

【＜主要研究業績＞】
『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015年）
『うたの神話学』（森話社、2014年）
『ユタ神誕生』（南方新社、2013年）

『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013年）
『夜の海、永劫の海』（新典社、2011年）

【主要研究業績】
『琉球の恋歌』（新典社、2010年）
『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008年）
その他
『奄美三少年　ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017年）の監修

【Outline (in English)】
The Omoro Soshi is the first written compilation of sacred songs and poems collected by Ryukyu kingdom. The Ryukyuan folklores in the Irousetsuden and the Okinawan cultural background may have affected the development of its oral traditions. In this course, you will learn the Ryukuan sacred songs and literature are related to the cultures of surrounding areas and developed their own unique styles. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings.The goal is to have a deep understanding of Ryukyuan literature. For learning outside of class hours, read textbooks and references carefully. The method and criteria for grade evaluation are to attend at least 6 times and take a test.The test is 70% and the normal score is 30%.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

沖縄文芸史 II

福　寛美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・琉球文学・民俗を考察する際には南九州（薩摩）や薩南の島々についてよく知ることが必要である。・古代日本の神話において、南九州を重視する箇所がある。
・そのことを考察し、沖縄島を中心とする南西諸島への理解を深めるようつとめる。
・日本神話における隼人の重要性を理解することを到達目標とする。

【到達目標】
・日本神話の従来の研究とは別の視点で神話を考察することにより、見えてくるものは多い。そのことを学ぶ。
・日本神話を火山や噴火という視点で考察する研究はあまり見られなかった。しかし、火山列島の日本で古代の噴火は神の仕業とされていた。そのことに注目し、新たな知見を得る。
・神話のコノハナノサクヤビメと『竹取物語』のカグヤヒメを比較検討する。
・日本語のヨ（世・代・節）は南西諸島の祭祀においても重要な存在である。またヨは世界観や時間意識を表現する語でもあるので、そのことを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
・講義を数回した後、学生が講義に関わる事象について簡単な発表をする、という形をとる。
・講義と演習の混合形式で授業を進める。
・対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	噴火・火山の女神	古代における火山の噴火と、火山の女神とされるコノハナノサクヤビメについて考察する。
第2回	コノハナノサクヤビメの行動	コノハナノサクヤビメが天上のアマテラス同様の行動をとったり、隼人の女神らしく振舞ったりすることを考察する。
第3回	ヨ（節）	ヨが竹の節を意味する事例を考察し、『竹取物語』のカグヤヒメがそこにいた意義を考察する。
第4回	学生の発表	第1〜3回の講義の中で関心のある箇所を調べ、簡単に発表する。辞書を引く、参考文献の粗筋を紹介する、などの発表をする。
第5回	ヨと輝き・カグヤヒメのカグ	カグヤヒメは竹の節の間におり、ヨ（節）は輝いていた。カグヤヒメと香具山、火の神カグツチを比較検討する。
第6回	影（カゲ）	カグと関わるカゲ（影）は霊力や魂、そして光とも結びつく語である。そのことを考察する。
第7回	隼人と畿内	隼人は畿内に移住し、その痕跡は考古学的事象、地名などに残っている。そのことを考察する。
第8回	学生の発表	第4〜7回の講義の中で、学生が興味を持った箇所について発表する。
第9回	コノハナノサクヤビメ・ナヨタケノカグヤヒメ	コノハナノサクヤビメとカグヤヒメが神話的に極めて興味深い対応をしていることを考察する。
第10回	富士山	コノハナノサクヤビメは富士山の女神とされている。その意義を考察する。
第11回	隼人と水の献上	隼人は朝廷で水を献上する役割を担っていた。そのことの意義を考察する。
第12回	日向出身の皇妃	日本古代、日向（現在の宮崎県）出身、つまり隼人の女性が皇妃になったことが語られる。そのことの意義を考察する。
第13回	隼人と狗吠え（いぬぼえ）	隼人は魔を祓うため狗吠えという特殊な声を出す役割を担っていた。そのことを考察する。
第14回	学生の発表	第9〜13回の講義で学生が興味を持った箇所を調べ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・『火山と竹の女神』の「火山と竹の女神」をよく読むこと。
・教科書の理解を助けるため、学習支援システムにプリントをアップするので、プリントもあわせて読むこと。
・参考文献、インターネットで読める参考文献を指示するので、それも読むこと。
・学習時間については、各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】
・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021年）本体2500円＋税

【参考書】
・『夜の海、永劫の海』（福寛美、新典社、2011年）
・『うたの神話学』（福寛美、森話社、2014年）
・『新うたの神話学』（福寛美、新典社、2020年）

【成績評価の方法と基準】
・学期末に期末試験を行う。問題を複数提示し、2問選んでそれぞれ400字以上記述する、という形をとる。
・平常点も評価に加える。最低6回は出席すること。
・期末試験を70%、平常点を30%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
・筆者は琉球文学のほかに、南西諸島のシャーマン（ユタガミ・ユタ）の研究もしている。
・学生の関心が琉球文学や神話学よりもシャーマンの場合、シャーマンについても講じることは可能である。
・シラバスに沿った授業のほかに関心がある、という申し出が過去にあり、その対応をしたこともある。そのような場合、授業の時に申し出てほしい。
・また授業の内容があまり馴染みのないものであると、難解すぎる、という声が聞かれる。なるべくわかりやすく解説するようにつとめる。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
・春学期、秋学期は共に同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
・琉球文学（『おもろさうし』）
・神話学
・民俗学（シャーマン研究）

【＜研究テーマ＞】
・『おもろさうし』の文学研究
・日本神話・琉球神話研究
・奄美のシャーマン研究

【＜主要研究業績＞】
・『新うたの神話学』（新典社、2020年）
・『奄美群島おもろの世界』（南方新社、2018年）
・『歌とシャーマン』（南方新社、2015年）

【＜主要研究業績＞】
・『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015年）
・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013年）
・『ユタ神誕生』（南方新社、2013年）
・『夜の海、永劫の海』（新典社、2011年）

【＜主要研究業績＞】
・『うたの神話学』（森話社、2010年）
・『琉球の恋歌』（新典社、2010年）
・『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008年）
その他
『奄美三少年　ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017年）の監修

【Outline (in English)】
The myth and folklore of Nansei Islands are closely related to Southern Kyushu. The Hayato were the people who sailed across the Southern Kyushu and Southern Satsuma islands. In this course, the myth of the Hayato and the people of the sea who sailed across the Nansei areas will be learned. The relationship between the Hayato from the Southern Kyushu and Japanese myths reveals the presence of Hayato people in Japanese myths. The culture of ancient Kyushu will be deeply learned. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings.The goal is to understand the importance of Hayato in Japanese mythology. For learning outside of class hours, read textbooks and references carefully. The method and criteria for grade evaluation are to attend at least 6 times and take a test.The test is 70% and the normal score is 30%.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

女性文学 I

藤木　直実

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】
この授業においては、現代の女性作家による文学テクストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説　ガイドブック』（ひつじ書房、2023年）の内容に基づき、演習形式で進める。担当者はあらかじめ対象のセクションや作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス①	授業の目的、計画、方法についての概説
第2回	ガイダンス②	発表分担の決定
第3回	文学史・文学場	担当者による報告と受講生による討議
第4回	ジェンダーカテゴリー	担当者による報告と受講生による討議
第5回	女性作家・ガイノクリティシズム	担当者による報告と受講生による討議
第6回	ライトノベルとジェンダー	担当者による報告と受講生による討議
第7回	脱構築・クィア批評	担当者による報告と受講生による討議
第8回	メディア論	担当者による報告と受講生による討議
第9回	恋愛	担当者による報告と受講生による討議
第10回	セクシュアリティ	担当者による報告と受講生による討議
第11回	少女マンガとジェンダー	担当者による報告と受講生による討議
第12回	結婚・家族	担当者による報告と受講生による討議
第13回	母性・生殖	担当者による報告と受講生による討議
第14回	まとめ	春学期の学修内容と各自の課題の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する（20時間）。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく（4時間）。
【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める（2時間）。

【テキスト（教科書）】
飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説　ガイドブック』（ひつじ書房、2023年）。その他開講時に指示する。

【参考書】
岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』（晶文社、2014）、その他、授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
期末レポート（50％）に加えて、報告の内容と水準（30％）、授業中の貢献度（20％）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評
＜研究テーマ＞森鷗外と女性、女性文学
＜主要研究業績＞『子どもの本でジェンダーレッスン』(編著)、『〈妊婦〉アート論』(共編著)、『現代女性文学論』(共著)

【Outline (in English)】
We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay. between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

女性文学 II

藤木　直実

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】
この授業においては、現代の女性作家による文学テクストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説　ガイドブック』（ひつじ書房、2023年）の内容に基づき、演習形式で進める。担当者はあらかじめ対象のセクションや作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス①	授業の目的、計画、方法についての概説
第2回	ガイダンス②	担当作品の決定
第3回	少女・学校・友情	担当者による報告と受講生による討議
第4回	ケア	担当者による報告と受講生による討議
第5回	アニメーションとジェンダー	担当者による報告と受講生による討議
第6回	暴力	担当者による報告と受講生による討議
第7回	消費文化・装い	担当者による報告と受講生による討議
第8回	労働・資本主義・社会運動	担当者による報告と受講生による討議
第9回	災害・エコロジー	担当者による報告と受講生による討議
第10回	映画とジェンダー	担当者による報告と受講生による討議
第11回	戦争・帝国主義・植民地	担当者による報告と受講生による討議
第12回	越境・日本語文学	担当者による報告と受講生による討議
第13回	今期のまとめ	今期の学修内容の振り返り
第14回	今年度のまとめ	今年度の学修内容のふりかえり・レポート作成上の注意など

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する（20時間）。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく（4時間）。
【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める（2時間）。

【テキスト（教科書）】
開講時に指示する

【参考書】
岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』（晶文社、2014）、飯田祐子・小平麻衣子編『ジェンダー×小説　ガイドブック』（ひつじ書房、2023）、その他授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
期末レポート（50％）に加えて、報告の内容と水準（30％）、授業中の貢献度（20％）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評
＜研究テーマ＞森鷗外と女性、女性文学
＜主要研究業績＞『子どもの本でジェンダーレッスン』（編著）、『〈妊婦〉アート論』(共編著)、『現代女性文学論』（共著）

【Outline (in English)】
We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay. between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

ART500B7（芸術学 / Art studies 500）

文学と映画 I

越川　道夫

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通して、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。

【到達目標】
担当講師の作品だけでなく、参考作品を鑑賞し、または関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
担当講師の講義、場合よっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。またオンラインの授業になった場合も各回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に応答する形で授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の概説
第2回	講義１／現場からの報告①	毎年のことながら、映画の原理を知ることから授業を始めます。
第3回	講義２／現場からの報告②	講師の映画制作現場での経験に則しながら、できるだけ具体的に映画の原理と身体との関係を学びます。
第4回	講義３／現場からの報告③	実際の映画制作者が映画の現場において何を考えているかということを伝えていきます。
第5回	講義４／現場からの報告④	必要に応じて文献を読んだり、作品を見ることを指示します。
第6回	講義５／現場からの報告⑤	随時質問や学生の考えを吸い上げ、それに応える形で有機的に授業を進めていく予定です。
第7回	参考作品①／鑑賞	鑑賞する作品は、学生の感心の持ち方を掬い上げながら可能なものの中から適宜指示します。
第8回	参考作品①／ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第9回	参考作品①／ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第10回	講義６／現場からの報告⑥	前回までのディスカッションを受けての講義
第11回	参考作品②／鑑賞	参考作品②の鑑賞
第12回	参考作品②／ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第13回	参考作品②／ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第14回	講義７／現場からの報告⑦	講師による講義 春期授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。
またオンライン授業の場合はYouTubeに授業動画をアップするので、視聴後感想、質問等のメールを必ず講師に送ること。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』(岩波現代文庫)
前田英樹『小津安二郎の家―持続と浸透』(書肆山田)
この2冊には通年必ず言及します。またその他の文献に関しては適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
研究発表、レポート(50％)、授業参加度等(50％)によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
授業で作品を見るだけでなく、各自で作品を見てもらうことがあります。その場合は、その都度視聴方法を指示します。視聴した作品を受けての授業を行いますので、授業に参加できなかった場合は、何を視聴したかを掲示板にあげますので、必ず見るようにしてください。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞映画
＜研究テーマ＞映画
＜主要研究業績＞『アレノ』（監督・脚本／2015）
『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）
『月子』（監督・脚本／2017）
『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）
『夕陽のあと』（監督／2019）
『水いらずの星』（監督／2023）など
またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline (in English)】
Through discussion and research, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, and the relationship between the body and the foundation of each.

ART500B7（芸術学 / Art studies 500）

文学と映画II

越川　道夫

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通じて、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。また秋期は特に映画表現の多様性に触れることも目的とする。

【到達目標】
主に参考映画作品を鑑賞し、その作品に関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
担当講師の講義、場合よっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。オンラインの授業になった場合も各回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に応答する形で授業を進めていく。秋期はできるだけ多くの映画を鑑賞し考察することによって、映画表現の多様性に触れていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講義１／現場からの報告①	秋期の授業についてのガイダンス
第2回	参考作品①／鑑賞	参考作品①を鑑賞する
第3回	参考作品①／ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第4回	参考作品①／ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第5回	参考作品②／鑑賞	参考作品②を鑑賞する
第6回	参考作品②／ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第7回	参考作品②／ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第8回	講義２／現場からの報告②	秋期はできるだけ多様な映画表現に触れることを目標とします。
第9回	参考作品③鑑賞	参考作品③を鑑賞する
第10回	参考作品③／ディスカッション①	参考作品③についてのディスカッション
第11回	参考作品③／ディスカッション②	参考作品③についてのディスカッション
第12回	参考作品④鑑賞	参考作品④を鑑賞する
第13回	参考作品④／ディスカッション①	参考作品④についてのディスカッション
第14回	秋学期のまとめ	秋学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』(岩波現代文庫)
前田英樹『小津安二郎の家ー持続と浸透』（書肆山田）
この2冊には通年必ず言及します。またその他の文献に関しては適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
研究発表、レポート(50％)、授業参加度等(50％)によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
授業で作品を見るだけでなく、各自で作品を見てもらうことがあります。その場合は、その都度視聴方法を指示します。視聴した作品を受けての授業を行いますので、授業に参加できなかった場合は、何を視聴したかを掲示板にあげますので、必ず見るようにしてください。
また講師のメールにて随時質問などを受け付けます。その回答に関しては個別、または授業内で行います。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞映画
＜研究テーマ＞映画
＜主要研究業績＞『アレノ』（監督・脚本／2015）
『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）
『月子』（監督・脚本／2017）
『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）
『夕陽のあと』（監督／2019）
『水いらずの星』（監督／2023）『Uquwa ことばと音の間』（監督／2024）など。またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline (in English)】
Through discussions and research presentations of their works, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, the relationship between the body and the foundation of each, and the diversity of film expression.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

文学と風土 I

多田　蔵人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代文学の優れた作品を読み、オーソドックスな調査と分析の経験を培う。
直筆資料以来の改稿過程、文体的特徴、他作品・他ジャンルとの関連、作品が発表されたメディアを含む環境、後代への影響といった諸点を探求するなかで、論文執筆に必要なスキルを身につけ、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】
資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、自らの発表や論文で充分に活用できる。
To become familiar with the basic procedures for reading materials and acquire basic skills for reading and understanding them. By doing so, students will be able to extract rich information from each material and fully utilize it in their own presentations and papers.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。最初の時間に要領を説明する。
The seminar will consist of a presentation by the instructor and discussion by all students. The first hour of the seminar will be devoted to explaining the procedure.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する書簡資料についての説明と担当する書簡資料の決定。
第2回	担当教員による報告1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス1
第3回	担当教員による報告1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス1
第4回	受講者による報告1	担当する資料体についての報告
第5回	受講者による報告2	担当する資料体についての報告
第6回	受講者による報告3	担当する資料体についての報告
第7回	受講者による報告4	担当する資料体についての報告
第8回	受講者による報告5	担当する資料体についての報告
第9回	受講者による報告6	担当する資料体についての報告
第10回	受講者による報告7	担当する資料体についての報告
第11回	受講者による報告8	担当する資料体についての報告
第12回	受講者による報告9	担当する資料体についての報告
第13回	受講者による報告10	担当する資料体についての報告
第14回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Students are expected to obtain basic information about the materials each time.

【テキスト（教科書）】
教員により、提供される。

【参考書】
特に指定しない。適宜指示。

【成績評価の方法と基準】
講義中のコメント（20％）、発表（40％）、レポート等の提出物（40％）による総合評価。
Overall evaluation based on comments during lectures (20%), presentations (40%), and reports and other submissions (40%).

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
受講生から希望が出れば、学外授業としての文学館見学を実施する。
Depending on the student's preference, a field trip to the Museum of Literature may be arranged as an off-campus class.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代文学
＜研究テーマ＞永井荷風、幕末～戦後文学における文体史

【Outline (in English)】
【Course outline】With reading works of Modern Japanese Literature, this course aims each participants acquire the skills of research and analysis.
Ability of reading autographs, stylistics, intertextuality, mediology, historical approach, will be required.
【Learning Objectives】Through the exploration of what it means to read autographs, the program aims to cultivate the ability to face materials without preconceptions and to extract rich information from them, as well as to apply the results to literary research.
【Learning activities outside of classroom】The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Students are expected to obtain basic information about the materials each time.
【Grading Criteria /Policy】Overall evaluation based on comments during lectures (20%), presentations (40%), and reports and other submissions (40%).

LIT500B7（文学 / Literature 500）

文学と風土 II

多田　蔵人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代文学の優れた作品を読み、オーソドックスな調査と分析の経験を培う。
直筆資料以来の改稿過程、文体的特徴、他作品・他ジャンルとの関連、作品が発表されたメディアを含む環境、後代への影響といった諸点を探求するなかで、論文執筆に必要なスキルを身につけ、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】
資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、自らの発表や論文で充分に活用できる。
Become familiar with the basic procedures for reading materials and acquire basic skills for reading and understanding them. As a practice of these skills, students will be able to extract rich information from each material and fully utilize it in their own presentations and papers.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。最初の時間に要領を説明する。
The format is an exercise with a presentation by the person in charge and discussion by all participants. The outline will be explained at the beginning of the session.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する原稿（草稿）資料についての説明と担当する原稿（草稿）資料の決定。
第2回	担当教員による報告1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス1
第3回	担当教員による報告1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス1
第4回	受講者による報告1	担当する資料体についての報告
第5回	受講者による報告2	担当する資料体についての報告
第6回	受講者による報告3	担当する資料体についての報告
第7回	受講者による報告4	担当する資料体についての報告
第8回	受講者による報告5	担当する資料体についての報告
第9回	受講者による報告6	担当する資料体についての報告
第10回	受講者による報告7	担当する資料体についての報告
第11回	受講者による報告8	担当する資料体についての報告
第12回	受講者による報告9	担当する資料体についての報告
第13回	受講者による報告10	担当する資料体についての報告
第14回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Students are expected to obtain basic information about the material each session.

【テキスト（教科書）】
教員により、提供される。
The faculty will provide.

【参考書】
特に指定しない。適宜指示。
Not specified.

【成績評価の方法と基準】
講義中のコメント（20％）、発表（40％）、レポート等の提出物（40％）による総合評価。
Overall evaluation based on comments during lectures (20%), presentations (40%), and reports and other submissions (40%).

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
受講生の希望によっては、学外授業としての文学館見学を実施する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代文学
＜研究テーマ＞永井荷風、幕末～戦後文学における文体史

【Outline (in English)】
【Course outline】With reading works of Modern Japanese Literature, this course aims each participants acquire the skills of research and analysis.
Ability of reading autographs, stylistics, intertextuality, mediology, historical approach, will be required.
【Learning Objectives】Become familiar with the basic procedures for reading materials and acquire basic skills for reading and understanding them. As a practice of these skills, students will be able to extract rich information from each material and fully utilize it in their own presentations and papers.
【Learning activities outside of classroom】The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Students are expected to obtain basic information about the material each session.
【Grading Criteria /Policy】Overall evaluation based on comments during lectures (20%), presentations (40%), and reports and other submissions (40%).

LIT500B7（文学 / Literature 500）

表現と社会

平井　彰司

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
条文や判例、学説を追いながら著作権法の基礎を学習し、著作権思想の全体像をつかむ。また著作権と社会との関係、制度構築の実際、ビジネスやテクノロジーとの相克についても考察を広げる。

【到達目標】
著作権の歴史と権利の淵源を概観するとともに、著作権法の主要な規定について、その内容と効用を理解することを目指す。併せて社会全体の視座から著作権が創作・媒介・受容の営みに果たす役割について考察し、現代に必要な著作権リテラシーを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義を中心としつつ、要所々々で各人の意見、解釈などを求める他、討議の機会を設ける。なお受講者の人数や関心の所在に応じたフレキシブルに展開を心掛ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	著作権とは	著作権に対する一般的なイメージを解きほぐし、法的権利の一態様としての性格を概観する。
第2回	創作の系譜と近代著作権思	創作行為と受容の類型を理解し、著作権誕生の背景とそれを支える思想・概念の変遷をたどる。
第3回	法体系における著作権法	我が国の法秩序における来歴と位置づけを確認し、法律全体の基本的な構成を概観する。
第4回	著作物とは何か　著作者とは誰か	著作物の要件としての著作性について考え、著作者と著作権者との違いとは何かを整理する。
第5回	保護の対象・期間と権利の種類・内容	法律で保護される種類と範囲を確認し、専有する権利（支分権）の詳細を理解する。
第6回	権利の制限	例外的に権利者の許諾なしに利用可能な場合と要件を整理し、私権と公益の関係について考察する
第7回	討議Ⅰ	これまでの講義を基に著作物の適切な利用等についてケーススタディを行う。
第8回	著作者人格権・著作隣接権	著作者の財産権以外で法律に規定されている権利の実際を知る。
第9回	許諾・契約、登録・裁定	著作物の利用許諾や利用契約の実際に触れる。併せて制度の運用に関する行政の役割を紹介する。
第10回	紛争処理・罰則、制度改正	民事解決と刑事罰水準について裁判例を見ていくとともに、法律改正のプロセスを理解する。
第11回	印刷物の歴史と複製・伝達技術の展開	グーテンベルク以前から現代まで、ジャンルを超えた創作と伝達を支える技術の歴史をたどる。
第12回	デジタルテクノロジーと出版物の電子化	デジタルアーカイブやフリーテキストの動向と印刷媒体デジタルシフトがもたらす影響を探る。
第13回	討議Ⅱ	ＡＩ・メタバース時代における著作権の役割を総合的見地から探る。
第14回	再び、著作権とは	現在の著作権システムの考察を通じて、創作・媒介・受容の未来を展望する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で紹介した参考文献・資料等には極力目を通しておくこと。折に触れて、世界史や国際関係、ビジネスに関する知識が求められる。各受講者の必要に応じた予備学習を心掛けること。
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
最新の著作権法をネットや図書館等を通じて準備すること。

【参考書】
随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
授業への参加態度等の平常点40％、期末レポートの内容60％を評価の目安とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
日本文藝家協会事務局長。筑摩書房にて知的財産の保護・活用、デジタルビジネスの企画・開発、表現の自由と人権問題等の編集コンプライアンスを掌管。著作権領域に関する出版界全体の調整、著作者団体・各種利用者・関係省庁等へのロビイングに従事。2021年より現職。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞出版分野を中心とした著作権実務全般
＜研究テーマ＞著作権制度、メディア論、出版論
＜主要研究業績＞特になし

【Outline (in English)】
This course aims to provide an overview of the history of copyright and the origins of rights, as well as to understand the content and effectiveness of the main provisions of copyright law. At the same time, students will consider the role that copyright plays in creation, mediation, and reception from the perspective of society as a whole, and acquire the copyright literacy necessary in modern times.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

編集理論

仲俣　暁生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「編集」（エディターシップ）がもつ本質的な機能と意味を理解する

【到達目標】
書物や雑誌、ウェブといったさまざまなメディアを「編集」という観点から理解し、あわせてこれらのメディアの現代史についての基礎的な知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義を中心としつつも、各自が課題を設定しての研究レポートや討論をおりまぜる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	「編集」（エディターシップ）とは何か	この講義において取り扱う「編集」の範囲について確定し、全体のオリエンテーションとする。
第2回	編集されたメディアとしての「雑誌」	「雑誌」というメディアを編集という観点から概観する。
第3回	雑誌における「編集者」とはなにか	雑誌において「編集者（editor）」が担うさまざまな機能を理解する。
第4回	「雑誌」のケーススタディ①〜文芸誌／論壇誌の場合	おもに文芸、論説などをあつかう雑誌を「編集」という観点から分析する。
第5回	「雑誌」のケーススタディ②〜ビジュアル雑誌の場合	グラフィカルな要素をもつ雑誌を「編集」という観点から分析する。
第6回	「雑誌」のケーススタディ③〜ジャンル雑誌の場合	特定のジャンルに根ざした雑誌を「編集」という観点から分析する。
第7回	「雑誌」のケーススタディ④〜ミニコミ、ジンの場合	ミニコミやジンと呼ばれる「小さなメディア」を「編集」という観点から分析する。
第8回	「雑誌」における編集についての中間まとめ	ケーススタディ①から③までを受けて学生をまじえてディスカッションを行う。
第9回	「編集」の拡散	出版以外の世界に「編集」という行為が広がっていることを理解する。
第10回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ①〜ワールドワイドウェブの登場	インターネット上における「編集」行為の場としてのWWWのもつ意義を理解する。
第11回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ②〜ウェブ2.0以後	「ウェブ2.0」以後に起きたWWWの変質について「編集」という観点から理解する。
第12回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ③〜ソーシャルメディア	ソーシャルメディア勃興による「編集」の危機について理解する。
第13回	あらたな「編集」に向けての討議	これまでの講義を受けて、現在のメディア環境のなかでどのような「編集」が可能かを討議する。
第14回	総まとめ	講義全体のまとめとレポートについてのガイダンスを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講義内で培った「編集」への問題意識をもとに、身のまわりの出版物やメディア環境をとらえかえすこと。具体的な出版物（雑誌や書物、ウェブサイト）およびそれを編集している人物（編集者）や出版主体について、つねに関心を抱くことが望まれる。

【テキスト（教科書）】
必要な教材は講義の際に配布する。とくに教科書は指定しないが、参考図書には自発的に目を通すことを推奨する。

【参考書】
・外山滋比古『新・エディターシップ』（みすず書房、2009）
・佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代――若者はなぜそれを読んでいたのか』（岩波書店、2015）
・野中モモ、ばるぼら『日本のZINEについて知ってることすべて: 同人誌、ミニコミ、リトルプレス―自主制作出版史1960〜2010年代』（誠文堂新光社、2017）
・赤田祐一、ばるぼら『20世紀エディトリアル・オデッセイ: 時代を創った雑誌たち』（誠文堂新光社、2014）
・仲俣暁生『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）
・岡本真、仲俣暁生編『ブックビジネス2.0〜ウェブ時代の新しい本の生態系』（実業之日本社、2010）

【成績評価の方法と基準】
講義に対する姿勢＝３０％、自主課題への取り組み＝３０％、最終レポート＝４０％

【学生の意見等からの気づき】
今季からの講義のため現時点ではなし。

【学生が準備すべき機器他】
とくになし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞出版論、メディア論
＜研究テーマ＞雑誌研究、メディア環境論、現代日本文学論
＜主要研究業績＞
①『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）
②編著『「電子社会」誕生〜日本語ワープロからインターネットまで』（晶文社、1998）
③『極西文学論』（晶文社、2004年）

【Outline (in English)】
To understand how editorship worked on remarkable modern Japanese magazines.

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

英語発音法 I

髙橋　豊美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。
＜講義題目＞
英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】
　分節音の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。
(A) 分節音の体系、分布、音声変化について、理論的に説明できる。
(B) 発話を聞いて、分節音を発音記号で正確に書き取ることができる。
(C) 発音記号を適切な発音で読むことができる。
(D) 与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業では、英国標準英語を主な対象とし、個々の分節音の調音的・音響的特徴、分節音の体系について学んだ上で、授業計画に示すように分節音がかかわるさまざまな音声現象の仕組みを理解する。【到達目標(A)】
　配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取り、発音記号による発話モデルの作成などの練習などを行う。【到達目標(B)(C)】
　課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。この課題については、返却時にコメントを付し、また、返却後の授業で全体的なフィードバックを行う。【到達目標(D)】
　リアクションペーパーは学習支援システムで回収し、個別のフィードバックは同システムで、全体に共通するフィードバックは授業で行う。
　授業は対面で実施する予定であるが、台風等の影響がある場合や感染症が拡大している場合は、ビデオ会議システム（Zoom）と学習支援システム（Hoppii）を併用したオンライン授業に切り替えて実施するので、授業前に学習支援システムのお知らせを確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第01回	授業案内	授業の概要／参考文献／分節音の関わる現象について／課題1
第02回	音声の基礎、母音	発声の仕組み／英語音声の調音的特徴／課題2
第03回	子音、音素論	音声の分類／分節音と超分節音／リズムの基本単位／課題3
第04回	音節の機能、構造	音節現象／音節構造と音声分布／課題4
第05回	音節現象	音節区分／音節子音／中和／音節圧縮／課題5
第06回	音節とリズム	語の分類と強勢／引用形と弱形
第07回	母音の変化	機能語の弱形／課題6
第08回	弱形	音声変化の概要／子音の分布／語境界の音の連結／課題7
第09回	分節音現象	子音現象（脱落・同化・挿入）／課題8
第10回	連結、脱落	母音現象（接続）／諸アクセントにおける r の分布／課題9
第11回	交替、挿入、短縮	歯茎破裂音の挿入／硬音前母音短縮／課題10
第12回	地域的な音声変化	諸アクセントにおける母音体系／声門音化
第13回	総括	歯茎破裂音の挿入・脱落／阻害音の無声化／まとめと考察
第14回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を目安とする。
　資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。また、授業を受けた後で学習内容を振り返り、知識の定着を図ること。【到達目標(A)】
　授業では、学んだ知識を実践に活かすための発音・聴き取りの練習を行う。授業を受けた後で、要点を確認しながら練習を重ねて技術の向上を目指すこと。【到達目標(B)(C)】
　この授業では、10回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をとおして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上でコメントと共に返却される。また、返却後の授業では全体的な解説が行われる。チェックを受けた部分及び解説の要点をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。【到達目標(D)】
　授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】
　教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】
・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.
・BBC Learning English: Pronunciation Tips < http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/grammar/pron/>

【成績評価の方法と基準】
　平常点(35％)、課題(35％)、試験(30％)に基づき成績を評価する。
・平常点【到達目標(B)(C)】
　音声のしくみの知識と技術は体得する要素が多いので、平常点として、授業における発音・聴き取り練習への取り組み、授業中の発言・質問の頻度と内容を評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備、授業内容の振り返り）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。
・課題【到達目標(A)(D)】
　課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。課題ごとに示す評価のポイントをよく確認した上で、授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。
・試験【到達目標(A)(B)(C)(D)】
　試験（実技を含む）では、各到達目標に対応した設問により、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
毎回の授業のリフレクションでは、総じて否定的な評価はなく、授業の難易度や進度については概ね適切であったと思われる。ただし、特に言語学系以外の専攻の学生にとっては前提となる文法知識等が難しいところもあり、円滑な授業運営のためにそのような知識等を補完するよう心がけている。毎回の授業の要点を掲示板に記録しているほか、課題のフィードバックの際に個別に誤りのポイントを示し確認を促すようにしている。

【学生が準備すべき機器他】
資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システムHoppiiを使用する。

【その他の重要事項】
英文学専攻では「英語発音法Ｂ」、日本国際学専攻では「英語発音法Ⅱ」とあわせて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
音声学、音韻論
＜研究テーマ＞
音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育
＜主要研究業績＞
・Toyomi Takahashi (2014). Identity avoidance in the onset. Nasukawa, Kuniya &Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.
Unique Path. 『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.
・Toyomi Takahashi (2008). Unique Path.『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.
・高橋豊美（2005）.『弁別素性理論』. 西原哲雄・那須川訓也（編著）『音韻理論ハンドブック』. 英宝社. 131-142.
・Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. &Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline (in English)】
[Course outline]
The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.
This course aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.
This course discusses segmental aspects of English pronunciation. Its topics include the articulatory features of individual sounds, their accentual variations, the syllable structure, the distribution of sounds, and connected speech phenomena (lenition, alteration and insertion). These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.
This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.
[Learning Objectives]
Students are expected to understand the segmental features and to be able to apply that knowledge to their performance. The specific objectives are as follows:
(A) to describe the theory of English phonemic inventory, distribution and alteration,
(B) to dictate spoken words and phrases in phonemic transcription,
(C) to read out given phonemic transcriptions with appropriate pronunciation,
(D) and to provide a transcription of a model pronunciation including possible alterations for a given passage.
[Learning activities outside of classroom]
Students should spare sufficient time for the following activities before/after each class (roughly four hours or more per week):
- Look over handouts provided beforehand in preparation, and go through them more carefully after class to check their understanding. [Objective (A)]
- Go over pronunciation/dictation exercises practised in class, checking their focus, and try to improve skills in question. [Objective (B)(C)]
- Complete assignments in which students are required to demonstrate their knowledge of segmental features and skills of applying that knowledge to practice through the production of model pronunciation. Students are advised to work on the assignments all by themselves first, and then to make corrections in red referring to handouts and dictionaries; this way they should learn where they tend to make mistakes. Submitted assignments are returned with marks and comments and are also discussed in class in order to help students enhance their knowledge and skills. [Objective (D)]
[Grading Criteria /Policy]
The course final grade will be calculated according to the following components and weights: in-class activities (35%), assignments (35%), and the course-final exam (30%).
- In-class activities are mostly related to skill-oriented Objectives (B) and (C). Pronunciation/dictation skills are sometimes hard to acquire through just four-month practices, depending on whether one is a quick learner or not, so this course attach importance to the effort students make in in-class activities that, if continued, will in due course help improve their skills. Students are advised to engage in in-class activities without worrying about making mistakes, not to hesitate making questions and/or comments.
- Assignments are related to Objectives (A) and (D). Students are expected to demonstrate not only the knowledge they have learnt through this course but also the ability to make use of that knowledge when planning model pronunciation.
- The exam comprises components corresponding to each Objective, and is intended to evaluate the overall learning outcomes of the course.

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

英語発音法 II

髙橋　豊美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。
＜講義題目＞
英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】
　韻律の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。
(A) 音節の強さと発音の特徴、強勢の配置と役割、イントネーションのパターンと機能について、理論的に説明できる。
(B) 発話を聞いて、強勢とイントネーションを含めて発音記号で正確に書き取ることができる。
(C) 発音記号を適切な発音で読むことができる。
(D) 与えられた英文について、基本的なリズムとイントネーションのパターンを予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業では、英国標準英語（Received Pronunciation）を主な対象とし、日本語との比較を適宜行いながら、リズムが形成される仕組みと、イントネーションの形式と機能を学び、韻律を含めた基本的な発話モデルの組み立てや、談話分析の方法を理解する。【到達目標(A)】
　配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取りの練習、発音記号で発話モデルを提示したり発話を書き取ったりする練習などを行う。【到達目標(B)(C)】
　課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。この課題については、返却時にコメントを付し、また、返却後の授業で全体的なフィードバックを行う。【到達目標(D)】
　リアクションペーパーは学習支援システムで回収し、個別のフィードバックは同システムで、全体に共通するフィードバックは授業で行う。
　授業は対面で実施する予定であるが、台風等の影響がある場合や感染症が拡大している場合は、ビデオ会議システム（Zoom）と学習支援システム（Hoppii）を併用したオンライン授業に切り替えて実施するので、授業前に学習支援システムのお知らせを確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業案内／語の強勢	授業概要／参考文献／強勢の音声的特徴／語強勢／課題1
第2回	強勢現象	複合語と句の強勢／強勢移動／課題2
第3回	文強勢とリズム	文強勢／韻脚／課題3
第4回	イントネーションの形式と機能	イントネーション句／音調アクセント／課題4
第5回	イントネーションの構造	イントネーション句の構成／イントネーション核の声調／課題5
第6回	イントネーション核	核の配置と焦点領域
第7回	イントネーション節	頭部と前頭部の声調／イントネーション節の種類／課題6
第8回	イントネーションの概形と意味	イントネーション節の基本的な意味／声域と意味／課題7
第9回	イントネーションの用法(1)：下降声調	下降声調の表す意味と用法／課題8
第10回	イントネーションの用法(2)：非下降声調	非下降声調の表す意味と用法／課題9
第11回	イントネーションの定型(1)	修飾語句／複文と重文／同格と呼格／課題10
第12回	イントネーションの定型(2)	限定的・非限定的修飾／比較・対照
第13回	イントネーションの定型(3)	慣習的表現
第14回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を目安とする。
　資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。また、授業を受けた後で学習内容を振り返り、知識の定着を図ること。【到達目標(A)】
　授業では、学んだ知識を実践に活かすための発音・聴き取りの練習を行う。授業を受けた後で、要点を確認しながら練習を重ねて技術の向上を目指すこと。【到達目標(B)(C)】
　この授業では、10回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をとおして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上でコメントと共に返却される。また、返却後の授業では全体的な解説が行われる。チェックを受けた部分及び解説の要点をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。【到達目標(D)】
　授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】
　教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】
・Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.

【成績評価の方法と基準】
　平常点(35％)、課題(35％)、試験(30％)に基づき成績を評価する。
・平常点【到達目標(B)(C)】
　音声のしくみの知識と技術は体得する要素が多いので、平常点として、授業における発音・聴き取り練習への取り組み、授業中の発言・質問の頻度と内容を評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備、授業内容の振り返り）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。
・課題【到達目標(A)(D)】
　課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。課題ごとに示す評価のポイントをよく確認した上で、授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。
・試験【到達目標(A)(B)(C)(D)】
　試験（実技を含む）では、各到達目標に対応した設問により、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
毎回の授業のリフレクションでは、総じて否定的な評価はなく、授業の難易度や進度については概ね適切であったと思われる。ただし、特に言語学系以外の専攻の学生にとっては前提となる文法知識等が難しいところもあり、円滑な授業運営のためにそのような知識等を補完するよう心がけている。毎回の授業の要点を掲示板に記録しているほか、課題のフィードバックの際に個別に誤りのポイントを示し確認を促すようにしている。

【学生が準備すべき機器他】
資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システムHoppiを使用する。

【その他の重要事項】
この授業は英文学専攻では「英語発音法A」、日本国際学専攻では「英語発音法Ⅰ」の内容を前提としている。「英語発音法A」・「英語発音法Ⅰ」を履修していない場合は、できるだけ履修登録の前に担当教員まで連絡すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
音声学、音韻論
＜研究テーマ＞
音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育
＜主要研究業績＞
・Toyomi Takahashi (2014). *Identity avoidance in the onset*. Nasukawa, Kuniya &Henk van Riemsdijk (eds.) Identity Relations in Grammar. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton.101-120.
・Toyomi Takahashi (2008). *Unique Path*.『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.
・高橋豊美（2005）. 弁別素性理論. 西原哲雄・那須川訓也（編著）音韻理論ハンドブック. 英宝社. 131-142.
・Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. &Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline (in English)】
[Course outline]
The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.
This course aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.
This course discusses prosodic aspects of English pronunciation. Its topics include the location and interpretation of stress in different domains (word/phrase/sentence), the components of intonational phrase and their pitch patterns, the location of nuclear accents and their focusing function, and the types and usage/meaning of tunes. These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.
This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.
[Learning Objectives]
Students are expected to understand the prosodic features and to be able to apply that knowledge to their performance. The specific objectives are as follows:
(A) to describe the theory of English syllable structure and prominence, stress system, and the inventory of intonational contours and their functions,
(B) to dictate spoken words and phrases in phonemic transcription including prosodic features,
(C) to read out given phonemic transcriptions with appropriate pronunciation, rhythm and intonation,
(D) and to provide a transcription of a model pronunciation including relevant rhythmic stress and intonation for a given passage.
[Learning activities outside of classroom]
Students should spare sufficient time for the following activities before/after each class (roughly four hours or more per week):
- Look over handouts provided beforehand in preparation, and go through them more carefully after class to check their understanding. [Objective (A)]
- Go over pronunciation/dictation exercises practised in class, checking their focus, and try to improve skills in question. [Objective (B)(C)]
- Complete assignments in which students are required to demonstrate their knowledge of segmental features and skills of applying that knowledge to practice through the production of model pronunciation. Students are advised to work on the assignments all by themselves first, and then to make corrections in red referring to handouts and dictionaries; this way they should learn where they tend to make mistakes. Submitted assignments are returned with marks and comments and are also discussed in class in order to help students enhance their knowledge and skills. [Objective (D)]
[Grading Criteria /Policy]
The course final grade will be calculated according to the following components and weights: in-class activities (35%), assignments (35%), and the course-final exam (30%).
- In-class activities are mostly related to skill-oriented Objectives (B) and (C). Pronunciation/dictation skills are sometimes hard to acquire through just four-month practices, depending on whether one is a quick learner or not, so this course attach importance to the effort students make in in-class activities that, if continued, will in due course help improve their skills. Students are advised to engage in in-class activities without worrying about making mistakes, not to hesitate making questions and/or comments.
- Assignments are related to Objectives (A) and (D). Students are expected to demonstrate not only the knowledge they have learnt through this course but also the ability to make use of that knowledge when planning model pronunciation.
- The exam comprises components corresponding to each Objective, and is intended to evaluate the overall learning outcomes of the course.

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

行動科学方法論 I

石川　潔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
言語研究の方法論としての以下の２つの入門的な把握を目指す。
・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法
・実験設計およびデータの統計処理
＜講義題目＞言語科学の研究に必要な方法論の修得

【到達目標】
自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定で比較できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義およびパソコン実習。
試験には採点コメントを返す予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること、注目していない要因の効果の除去
第4回	論文執筆の基本	構成、引用の方法
第5回	統計学的検定の基本 1	帰無仮説および対立仮説、有意性
第6回	統計ツール	Excel、ANOVA4、SPSS、R、JASP、etc.
第7回	統計学的検定の基本 2	帰無仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	*t* 検定（その１）	被験者間要因の場合
第11回	*t* 検定（その２）	１サンプルの *t* 検定
第12回	*t* 検定（その３）	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。
パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。
わからない箇所は教員や周囲に質問すること。
また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおしてみること。

【テキスト（教科書）】
学習支援システムでハンドアウトおよびデータ・セットを配布。

【参考書】
A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.
大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし．日科技連.
Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology.* (6th ed.) Wadsworth.
Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS.* Sage.
Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data.* Cambridge University Press.
その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】
学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】
「全員、期末試験は満点！」という結果を目指したい。

【その他の重要事項】
この授業は原則、英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）
＜研究テーマ＞
音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係
＜主要研究業績＞
http://www.i.hosei.ac.jp/ kiyoshi/research.html などを参照。

【Outline (in English)】
[Course outline]
An introduction to research methodology in linguistic sciences
[Learning Objectives]
- Scientific construction and evaluation of theories
- Experimental design and statistical data analysis
- Realization of the (in)validities of the above
[Learning activities outside of classroom]
Practice of PC skills, applications of the methods to various issues encountered outside of the classroom
[Grading Criteria/Policy]
Final 100%

PHL500B7（哲学 / Philosophy 500）

西欧の思想 I

関口 貴太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　本講義の目的は、哲学の基本的なテーマの学習を通して、哲学の基本的な知識を身に着けるとともに、その知識に内在する「哲学的に考える」能力を養うことにあります。哲学的な思考は、「私たちの心を超えた世界は存在するか」、「他人の心を知ることはできるか」、「私たちには自由意志はあるのか」、「人生に意味はあるのか」など、哲学的な問題に対して、自身の知識を動員しながら、自分自身で考える能力です。
　本講義では、このような能力を養うために、基本的な哲学の問いに取り組むことになります。それと並行して、過去の主要な哲学者たちが、哲学の基本的な問題をどのように考察していたかを学びます。
　本講義は、これらの学びを通して、哲学の知識に基づいた哲学的思考の習得を目指します。

【到達目標】
本講義の到達目標は、以下の三点です。
・現代の問題や自身の専門研究などについて、自分自身で問いを立て、哲学的に考える能力を身に着ける。
・西洋哲学史の基本的な概念の知識を学ぶ。
・過去の哲学者たちの思考方法を学び、それを自身の研究に活用する能力を身に着ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　本講義の進め方は、教員が用意した資料を配布して、解説を行います。必要に応じて哲学的テキストの読解を行います。また、哲学的テキストの内容について、受講者に発表してもらったり、テキストの読解について討議したりします。
　なお、受講生の理解度や興味関心に応じて授業内容を調整します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	・授業概要の説明 ・レジュメやレポート等の書き方の説明 ・参考文献紹介
第2回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』①「どうやって私たちは何かを知るのだろうか」	・二元論 ・独我論 ・懐疑論
第3回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』②「他人の心」	・知ることについて ・心について ・他者の心を知ることはできるのか？
第4回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』③「心－身問題」	・物心二元論 ・身体論
第5回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』④「ことばの意味」	・ことばとはどのようなものか ・意味論
第6回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑤「自由意志」	・決定論と自由意志 ・自由と責任
第7回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑥「正しいことと不正なこと」	・道徳について ・功利主義 ・義務論
第8回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑦「正義」	・正義について ・平等について
第9回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑧「死」	・私たちは「死」についてどのように考えるのか？ ・時間について
第10回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑨「人生の意味」	・目的論 ・本質と実存
第11回	トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？』⑩まとめ	・これまでの議論のまとめ ・全員でのディスカッション
第12回	20世紀の哲学①	・フロイト ・解釈学 ・現象学前史
第13回	20世紀の哲学②	・現象学の展開 ・言語哲学 ・実存主義 ・ポストモダン
第14回	講義全体のまとめ	・21世紀の哲学に向けて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
受講者は、配布した資料や参考文献に挙げたテキストなどを事前に精読してください。
必要に応じて、配布された資料を基にレジュメを作成してもらうことがあります。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
担当教員が作成した資料を授業内で配布します。

【参考書】
・トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？ ――とっても短い哲学入門』、岡本裕一朗・若松良樹訳、昭和堂、1993年
・Thomas Nagel, What does it all mean? : a very short introduction to philosophy, Oxford University Press, 1987.
・バートランド・ラッセル『哲学入門』、高村夏輝訳、ちくま学芸文庫、2005年
・カール・ヤスパース『哲学入門』、草薙正夫訳、新潮文庫、1954年
・新田義弘『哲学の歴史――哲学は何を問題にしてきたか』、講談社、1989年
・内山勝利編『哲学の歴史1』、中央公論新社、2008年（『哲学の歴史』シリーズ）など
・そのほか、適宜授業で紹介します。

【成績評価の方法と基準】
リアクションペーパーやレジュメ、授業への取り組みなどの平常点50％と学期末の課題レポート（50％）。この評価方法を基に上記三点の「到達目標」について、60%以上の目標達成をした者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
・リアクションペーパーなどを使用して受講生の疑問・質問等へのフィードバックを行います。
・課題提出等に授業支援システムを利用することがあります。授業前後に確認してください

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
西洋哲学、現象学
＜研究テーマ＞
フッサールを中心とした現象学の研究。現代の現象学
＜主要研究業績＞
博士論文「フッサール現象学における「あいだ」の研究――原創設と追創設の反復運動を手掛かりに」、法政大学、2025年
論文「現象学における「あいだ」の究明― E・フッサールの「危機」概念を手掛かりに」、法政大学大学院編『法政大学大学院紀要』第89号、2022年
論文「世代発生的現象学における「現象学的出生」の内実――フッサールの「伝統」概念を手掛かりに」、実存思想協会編『実存思想論集　XXXV　実存とケア』、知泉書館、2020年

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course aims to provide students with a basic understanding of philosophical topics, while fostering the ability to engage in "philosophical thinking" based on that understanding.
（Learning Objectives）
（１）Develop the ability to formulate original questions regarding contemporary issues and one's own field of research, and to address them through philosophical thinking.
（２）Acquire a basic knowledge of the key concepts within the history of Western philosophy.
（３）Study the methodologies of past philosophers and develop the capacity to apply these modes of thought to one's own research.
（Learning activities outside of classroom）
Students are expected to thoroughly read the distributed materials and the texts listed in the bibliography prior to each class.
（Grading Criteria /Policy）
The grade consists of 50% for class participation (including reaction papers, handouts, and class engagement) and 50% for the final term paper.

PHL500B7（哲学 / Philosophy 500）

西欧の思想II

澤田　直

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
概要
この授業では、学生はフランスの実存主義哲学について学びます。より具体的には、、ジャン=ポール・サルトルとシモーヌ・ド・ボーヴォワールの思想を中心に、二人の著作のみならず、その実践活動などについても学びます。
目的・意義
フランス20世紀の重要な思想である実存主義を学ぶことは、哲学一般を理解するのに有意義であるだけでなく、世界や現実を理解することを助けます。

【到達目標】
学生は、サルトルとボーヴォワールの思想を、その著作と実践の両面から学ぶことで、20世紀フランス哲学に関する理解を深めることを目指します。主要なテクストを実際に読むことで、正確な理解ができるとともに、多くの思索的刺激を受けることができます。
課題の文章だけでなく、参考文献などにも目を通すことで、新たな知見を得られるとともに、これまで学んだ思想についても深まります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、講師による概説のあとに、具体的な著作を読解する機会も設けて授業を進めます。
また受講者による発表なども随時行う予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	フランス実存主義が誕生した背景
第2回	サルトルとボーヴォワール紹介	二人の生涯および活動の概観
第3回	サルトル（1）	小説『嘔吐』とその問題系
第4回	サルトル（2）	イメージ論
第5回	サルトル（3）	『存在と無』1
第6回	サルトル（4）	『存在と無』2
第7回	ボーヴォワール（1）	両義性のモラル
第8回	サルトル（5）	モラル論
第9回	サルトル（6）	戯曲の世界
第10回	サルトル（7）	植民地問題
第11回	サルトル（8）	評伝の問題
第12回	サルトル（9）	『弁証法的理性批判』
第13回	ボーヴォワール（2）	老いの問題
第14回	総括	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読むことが必要です。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
資料を配付する。

【参考書】
澤田直『新・サルトル講義』平凡社新書、2002年
澤田直　『サルトルのプリズム　二十世紀フランス文学・思想論』法政大学出版局、2019年

【成績評価の方法と基準】
到達目標の達成度合いに応じて以下の配分で成績評価する。
平常点60%、レポート40%

【学生の意見等からの気づき】
「特になし」

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
哲学
＜研究テーマ＞
２０世紀フランス思想
＜主要研究業績＞
『〈呼びかけ〉の経験　サルトルのモラル論』人文書院、2002年
『ジャン＝リュック・ナンシー　分有のためのエチュード』白水社、2013年
『サルトルのプリズム　二十世紀フランス文学・思想論』法政大学出版局、2019年

【Outline (in English)】
（Course outline）
In this course, students will study French existentialist philosophy. More specifically, they will focus on the thought of Jean-Paul Sartre and Simone de Beauvoir, examining not only their writings but also their practical activities.
（Learning Objectives）
Studying existentialism, a major intellectual movement of 20th-century France, is not only valuable for understanding philosophy in general but also aids in comprehending the world and reality.
（Learning activities outside of classroom）
Students will be expected to read reference books
（Grading Criteria /Policy）
Short reports : 40%、in class contribution: 60%

HIS500B7（史学 / History 500）

東北アジアの文化伝播Ⅰ－１

高橋　健

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学者V.G.チャイルドの著作『考古学の方法』（日本語訳）をテキストとして、文献講読と議論を行う。
この授業の目的は、考古資料から人間の過去に迫るための方法論を学ぶことである。

【到達目標】
考古資料から過去の人間に迫るための方法と、そうした方法をめぐって展開されてきた考古学上の議論について理解する。自らの研究対象に対してどのようなアプローチが適切なのかを検討する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式とし、担当部分について発表した上で、議論しながら内容の理解を深める。受講者数によって進め方は変更するが、常時質問を受け付け、オープンに議論を行う。発表に対してのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の方針と内容の説明
第2回	V.G.チャイルドの考古学	講義
第3回	コッシナの文化論	講義
第4回	日本考古学における受容	講義
第5回	考古学とは何か	文献の講読と検討
第6回	考古学の起源と発達	文献の講読と検討
第7回	考古学的資料の本体	文献の講読と検討
第8回	機能の判定	文献の講読と検討
第9回	編年ー文化連続の設定	文献の講読と検討
第10回	時代と時期と年代	文献の講読と検討
第11回	分布区分の設定	文献の講読と検討
第12回	文化の変化	文献の講読と検討
第13回	考古学の本領	文献の講読と検討
第14回	まとめ	現代考古学における位置づけ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
テキストを熟読するとともに、関連する論文の検討が必要になる。

【テキスト（教科書）】
V.G.チャイルド（近藤義郎訳）1964『考古学の方法』（原著：V.G.Child 1983 Piecing together the past. Routledge &Kegan Paul, London.）

【参考書】
授業内で適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表（50％）とレポート（50％）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】
少人数の場合、教員による講義形式の割合を増やす。

【その他の重要事項】
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、実物資料の解釈を意識した授業を行う。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　考古学
＜専門領域＞
考古学
＜研究テーマ＞
北方考古学、骨角器・狩猟漁労具
＜主要研究業績＞
『日本列島における銛猟の考古学的研究』北海道出版企画センター　2008年
「オクヴィク遺跡における銛頭の再加工について」『比較考古学の新地平』同成社　2010年
「石倉貝塚における釣針の製作技法」『動物考古学』30　2013年
「アイヌ文化の骨角製品」『季刊考古学』133　2015年
「オホーツク文化の牙製婦人像」『横浜ユーラシア文化館紀要』9　2021年
「骨角器研究の進展」『季刊考古学』別冊42　2023年
「骨角製漁具の伝播と受容」『考古学研究』70(2)　2023年

【Outline (in English)】
（Course outline）
We will read and discuss "Piecing together the past" (Japanese translation) by V. Gordon Child.
（Learning Objectives）
The purpose of this class is to learn the methodology for approaching the human past from archaeological remains.
（Learning activities outside of classroom）
The standard time for preparation and review for this class is two hours each. Students are asked to read the text carefully and consider related papers.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on in-class presentation (50%) and. term-end report (50%).

HIS500B7（史学 / History 500）

東北アジアの文化伝播Ⅰ－２

高橋　健

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
受講者それぞれの問題関心に沿った海外・国内の論文を講読し、議論する。
さまざまな分野の考古学研究において、どのような研究方法が採用されているのかを学ぶ。

【到達目標】
考古学の先行研究においてどのような研究方法が採られているのか、それにはどのような背景があるのかを理解する。さらに、各自のテーマについてどのような方法が適切なのかを検討し、適用する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　対面授業の演習形式とするが、必要に応じて講義時間を設ける。各自の関心のあるテーマに沿った形でいくつかの論文を選び、講読・検討を行う。それを踏まえて、各自のテーマに対してどのような方法が適切であるのか、議論を通じて考察する。順番や内容は、受講者に応じて入れ替える場合がある。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の方法と内容
第2回	研究の実例1	講義とそれにもとづく討論
第3回	研究の実例2	講義とそれにもとづく討論
第4回	海外論文の検討1	発表とそれにもとづく討論
第5回	海外論文の検討2	発表とそれにもとづく討論
第6回	海外論文の検討3	発表とそれにもとづく討論
第7回	縄文時代の論文の検討1	発表とそれにもとづく討論
第8回	縄文時代の論文の検討2	発表とそれにもとづく討論
第9回	弥生時代の論文の検討1	発表とそれにもとづく討論
第10回	弥生時代の論文の検討2	発表とそれにもとづく討論
第11回	各自のテーマの検討1	発表とそれにもとづく討論
第12回	各自のテーマの検討2	発表とそれにもとづく討論
第13回	各自のテーマの検討3	発表とそれにもとづく討論
第14回	総括	振り返りと討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
担当する文献の事前の読み込みと資料作成が必要となる。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。

【参考書】
必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表・討論（50％）とレポート（50％）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【その他の重要事項】
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、考古資料を分析することを念頭において授業を実施する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
考古学
＜研究テーマ＞
北方考古学、骨角器・狩猟漁労具
＜主要研究業績＞
『日本列島における銛猟の考古学的研究』北海道出版企画センター　2008年
「オクヴィク遺跡における銛頭の再加工について」『比較考古学の新地平』同成社　2010年
「石倉貝塚における釣針の製作技法」『動物考古学』30　2013年
「アイヌ文化の骨角製品」『季刊考古学』133　2015年
「オホーツク文化の牙製婦人像」『横浜ユーラシア文化館紀要』9　2021年
「骨角器研究の進展」『季刊考古学』別冊42　2023年
「骨角製漁具の伝播と受容」『考古学研究』70(2)　2023年

【Outline (in English)】
（Course outline）
Students will read and discuss international and domestic papers that are relevant to their own issues and interests.
（Learning Objectives）
Students will learn what methods are used in archaeological research in various fields.
（Learning activities outside of classroom）
The standard time for preparation and review for this class is two hours each. It is necessary to read the relevant literature in advance and create handout materials.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based in-class presentation and discussion (50%) and term-end report (50%).

HIS500B7（史学 / History 500）

東北アジアの文化伝播 II － 1

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】
物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。
実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術を高める必要がある。本講義では考古学資料から情報を引き出すための方法論について、資料調査（整理・修復）・講読と発表を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。
１）考古学資料の整理・修復等の方法に関する実践・検討
２）考古学の方法論に関する論文・書籍の講読
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	実習資料の概要把握	対象資料の選定と資料整理に関わる予備調査
第3回	資料整理の実践（１）	土器の拓本
第4回	資料整理の実践（２）	土器の断面実測
第5回	資料整理の実践（３）	写真撮影
第6回	資料整理の実践（４）	事実記載
第7回	考古学方法論に関する文献講読（１）	『考古学の方法』（第１章）講読（１）
第8回	考古学方法論に関する文献講読（２）	『考古学の方法』（第１章）講読（２）
第9回	考古学方法論に関する文献講読（３）	『考古学の方法』（第２章）講読（１）
第10回	考古学方法論に関する文献講読（４）	『考古学の方法』（第２章）講読（２）
第11回	考古学方法論に関する文献講読（５）	『考古学の方法』（第３章）講読（１）
第12回	考古学方法論に関する文献講読（６）	『考古学の方法』（第３章）講読（２）
第13回	考古学資料の見学	博物館等での考古学資料の見学と解説
第14回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
第1回　自己の実習計画の立案
第2回　選定した考古学資料に関する学習と整理方針のまとめ
第3回～第6回　実習内容の復習　用具・用材の特性の理解
第7回～第12回　テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
第13回　見学対象資料についての事前学習
第14回　成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】
V.G.チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】
コリン・レンフルー，ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学　理論・方法・実践』東洋書林
ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な貢献20％（実習・講読への積極的な参加・平常点）
個別発表の水準30％（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）
討論の成果20％（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末リポート（成果報告）30％（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】
前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】
※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社　2011年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷―壺形土器を中心として―」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会　2014年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集　環濠集落の諸問題2015』（環濠（壕）論集刊行会　2015年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会　2017年）
「早渕川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期―権田原遺跡の検討を中心として―」『法政考古学』第45集（法政考古学会　2019年）
「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会　2019年）
「権田原遺跡の環濠―大塚遺跡との比較を通じて―」『法政考古学』第47集（法政考古学会　2021年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.
Students will be able to examine and explain archaeological materials from multiple perspectives. Students will be able to write papers based on archaeological materials to the required standard.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS500B7（史学 / History 500）

東北アジアの文化伝播 II － 2

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】
物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。
実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためは、資料を表現する技術も高める必要がある。本講義では考古学資料から得られる情報を表現するための方法について、資料実測・文献講読と発表等を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。
１）考古学資料の整理・作図の方法に関する実践・検討
２）考古学の方法論に関する論文・書籍の講読
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	実習資料の検討	対象資料の概要把握と整理方法の検討
第3回	資料整理の実践（１）	土器の実測
第4回	資料整理の実践（２）	石器の実測
第5回	資料整理の実践（３）	資料のトレース
第6回	資料整理の実践（４）	デジタルトレースの概要と実技
第7回	資料整理の実践（５）	挿図・図版の構成
第8回	考古学方法論に関する文献講読（１）	『考古学の方法』（第４章）講読（１）
第9回	考古学方法論に関する文献講読（２）	『考古学の方法』（第４章）講読（２）
第10回	考古学方法論に関する文献講読（３）	『考古学の方法』（第５章）講読（１）
第11回	考古学方法論に関する文献講読（４）	『考古学の方法』（第５章）講読（２）
第12回	考古学方法論に関する文献講読（５）	『考古学の方法』（第６章）講読（１）
第13回	考古学方法論に関する文献講読（６）	『考古学の方法』（第６章）講読（２）
第14回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
第1回　自己の実習計画の立案
第2回　発掘調査報告書等からみる報告計画のまとめ
第3回～第4回　実習内容の復習
第5回～第7回　トレースの復習と図化の完了
第8回～第13回　テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
第14回　成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】
V.G.チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】
コリン・レンフルー，ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学　理論・方法・実践』東洋書林
ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な貢献20％（実習・講読への積極的な参加・平常点）
個別発表の水準30％（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）
討論の成果20％（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末リポート（成果報告）30％（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】
前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】
※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社　2011年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷―壺形土器を中心として―」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会　2014年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集　環濠集落の諸問題2015』（環濠（壕）論集刊行会　2015年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会　2017年）
「早渕川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期―権田原遺跡の検討を中心として―」『法政考古学』第45集（法政考古学会　2019年）
「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会　2019年）
「権田原遺跡の環濠―大塚遺跡との比較を通じて―」『法政考古学』第47集（法政考古学会　2021年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.
Students will be able to examine and explain archaeological materials from multiple perspectives. Students will be able to write papers based on archaeological materials to the required standard.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS600B7（史学 / History 600）

東北アジアの文化伝播III－１

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。
考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】
受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。
先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
考古学資料を用いた実践研究の成果を受講者各々が発表し、内容について検討する。受講者は研究論文の体裁と形式をふまえたうえで、具体的な考古学資料を提示するとともに考古学の方法にもとづいて発表内容を作成する。実際の発表においてはレジュメをまとめ、研究の詳細を報告するものとする。次いで全員での討論に移り、発表者の研究目的と問題の所在がいかなるところにあり、設定された問題が適切であるかどうかを検討し、さらに取り扱う資料群の全体が議論にふさわしいものであるのか、提示された方法が適切であるか、考察および結論が正しいか等についても検討する。
また、本授業では各自の研究に関連する課題論文の講読も合わせて行うこととする。受講者は研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。
これらの後に、自らの論文の構想発表指導を行う。
上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	研究実践発表（１）	受講者による実践研究の発表と討議（１）
第3回	研究実践発表（２）	受講者による実践研究の発表と討議（２）
第4回	研究実践発表（３）	受講者による実践研究の発表と討議（３）
第5回	研究実践発表（４）	受講者による実践研究の発表と討議（４）
第6回	論文講読発表（１）	受講者による論文講読の成果発表と討議（１）
第7回	論文講読発表（２）	受講者による論文講読の成果発表と討議（２）
第8回	論文講読発表（３）	受講者による論文講読の成果発表と討議（３）
第9回	論文講読発表（４）	受講者による論文講読の成果発表と討議（４）
第10回	論文構想発表（１）	受講者による論文構想の発表と討議（１）
第11回	論文構想発表（２）	受講者による論文構想の発表と討議（２）
第12回	論文構想発表（３）	受講者による論文構想の発表と討議（３）
第13回	論文構想発表（４）	受講者による論文構想の発表と討議（４）
第14回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
第1回　自己の学習計画の立案
第2回～第5回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第6回～第9回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習
第10回～第13回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第14回　成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】
発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】
コリン・レンフルー，ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学　理論・方法・実践』東洋書林
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な貢献20％（平常点）
個別発表の水準30％（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果20％（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末リポート（成果報告）30％（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】
前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】
※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社　2011年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷―壺形土器を中心として―」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会　2014年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集　環濠集落の諸問題2015』（環濠（壕）論集刊行会　2015年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会　2017年）
「早渕川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期―権田原遺跡の検討を中心として―」『法政考古学』第45集（法政考古学会　2019年）
「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会　2019年）
「権田原遺跡の環濠―大塚遺跡との比較を通じて―」『法政考古学』第47集（法政考古学会　2021年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.
Students will understand the academic standards of a master's thesis and cultivate their competence.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS600B7（史学 / History 600）

東北アジアの文化伝播III－２

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。
考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】
受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。
先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
考古学の分野で自らの論文を執筆する受講者に対して、論文構想の提示、研究上の最重要文献の講読、実践研究の報告などを行う。まず、自らの論文構想を提示し、具体的な資料検討状況についても報告し、それにもとづいた討議を行う。
次いで、今後の研究の核となる先行研究の成果について論文をもとに報告し、研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。
さらに、受講者それぞれの研究状況を具体的に報告し、討議を行う。
上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	論文構想発表（１）	受講者による論文構想の発表と討議（１）
第3回	論文構想発表（２）	受講者による論文構想の発表と討議（２）
第4回	論文構想発表（３）	受講者による論文構想の発表と討議（３）
第5回	論文構想発表（４）	受講者による論文構想の発表と討議（４）
第6回	論文講読発表（１）	受講者による論文講読の成果発表と討議（１）
第7回	論文講読発表（２）	受講者による論文講読の成果発表と討議（２）
第8回	論文講読発表（３）	受講者による論文講読の成果発表と討議（３）
第9回	論文講読発表（４）	受講者による論文講読の成果発表と討議（４）
第10回	研究実践発表（１）	受講者による実践研究の発表と討議（１）
第11回	研究実践発表（２）	受講者による実践研究の発表と討議（２）
第12回	研究実践発表（３）	受講者による実践研究の発表と討議（３）
第13回	研究実践発表（４）	受講者による実践研究の発表と討議（４）
第14回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
第1回　自己の学習計画の立案
第2回～第5回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第6回～第9回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習
第10回～第13回　発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第14回　成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】
発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】
コリン・レンフルー，ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学　理論・方法・実践』東洋書林
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的な貢献20％（平常点）
個別発表の水準30％（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果20％（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末リポート（成果報告）30％（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】
前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】
※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社　2011年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷―壺形土器を中心として―」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会　2014年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集　環濠集落の諸問題2015』（環濠（壕）論集刊行会　2015年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会　2017年）
「早渕川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期―権田原遺跡の検討を中心として―」『法政考古学』第45集（法政考古学会　2019年）
「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会　2019年）
「権田原遺跡の環濠―大塚遺跡との比較を通じて―」『法政考古学』第47集（法政考古学会　2021年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

Students will understand the academic standards of a master's thesis and cultivate their competence.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS600B7（史学 / History 600）

東アジアの律令文化Ⅰ－１

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である「田令集解」があるが、実態との比較も大切である。今年度は「尾張国郡司百姓等解文」を素材に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書なども参照しながら古代の実態に迫っていきたい。

【到達目標】
日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、「尾張国郡司百姓等解文」のような実態を示し史料と比較して史実を導き出す方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業形式は対面授業を原則とする。春学期は第１条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。
発表へのフィードバックについては、次回の授業の初めに、前回の授業での提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	「尾張国郡司百姓等解文」第27条講読(1)	元命の子弟郎等とは何か
第3回	「尾張国郡司百姓等解文」第27条講読（2）	乞い取る「雑物」とは何か
第4回	「尾張国郡司百姓等解文」第27条講読（3）	元命の京洛の邸宅の実態について
第5回	「尾張国郡司百姓等解文」第27条講読（4）	元命息男頼方について
第6回	「尾張国郡司百姓等解文」第27条講読（5）	部内郡司の実態について
第7回	「尾張国郡司百姓等解文」第28条講読(1)	夫駄の賦課とは似か
第8回	「尾張国郡司百姓等解文」第28条講読(2)	絹色の実態について
第9回	「尾張国郡司百姓等解文」第28条講読(3)	「五家の財」とは何か
第10回	「尾張国郡司百姓等解文」第28条講読(4)	旧領田地の実態について
第11回	「尾張国郡司百姓等解文」第29条講読(1)	佃数料の実態について
第12回	「尾張国郡司百姓等解文」第29条講読(2)	国司交替の日について
第13回	「尾張国郡司百姓等解文」第29条講読(3)	官物の実態について
第14回	元命の着服の実態	半年間の講読を踏まえて10世紀の諸税の着服が可能になった背景について検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に２時間程度、聴講者の準備学習は標準的に１時間程度を要する。復習はそれぞれ１時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途１時間程度。

【テキスト（教科書）】
『新修稲沢市史』資料編三尾張国解文

【参考書】
条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表が中心となるが、難解な「尾張国郡司百姓等解文」に描かれた実態と批判の論理を構成する記述を正しく理解できたか、諸説の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて出挙の実態についての論理を正しく構築できたかを重視する（75％相当）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（25％相当）。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【その他の重要事項】
ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.
Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.
Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.
Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %). code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B7（史学 / History 600）

東アジアの律令文化Ⅰ－２

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である「田令集解」があるが、実態との比較も大切である。今年度は「尾張国郡司百姓等解文」を素材に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書なども参照しながら古代の実態に迫っていきたい。

【到達目標】
日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、「尾張国郡司百姓等解文」のような実態を示し史料と比較して史実を導き出す方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業形式は対面授業を原則とする。秋学期は第５条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。
発表へのフィードバックについては、次回の授業の初めに、前回の授業での提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読 (1)	有官散位の正体について
第3回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読 (2)	天文博士・内舎人について
第4回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読 (3)	元命にしたがった五位以下諸官人について
第5回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読 (4)	検田使をめぐって
第6回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読（5）	垸飯の実態について
第7回	「尾張国郡司百姓等解文」第30条講読（6）	借家鋪設とは何か
第8回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読 (1)	諸国頒下の官符の内容について
第9回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読 (2)	兵仗を帯すること
第10回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読 (3)	前司填納分について
第11回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読 (4)	王臣家の封戸について
第12回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読（5）	税の銭納の実態について
第13回	「尾張国郡司百姓等解文」第31条講読 (6)	家薗とは何か
第14回	律令的国司給与の変貌について	半年間の講読を踏まえて律令的給与制が10世紀にはどのように変質していたのかについて意見交換を行う。修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に２時間程度、聴講者の準備学習は標準的に１時間程度を要する。復習はそれぞれ１時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途１時間程度。

【テキスト（教科書）】
『新修稲沢市史』資料編三尾張国解文

【参考書】
条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表が中心となるが、難解な「尾張国郡司百姓等解文」に描かれた実態と批判の論理を構成する記述を正しく理解できたか、諸説の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて出挙の実態についての論理を正しく構築できたかを重視する（75 %相当）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（25 %相当）。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【その他の重要事項】
ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.
Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.
Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.
Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS600B7（史学 / History 600）

東アジアの律令文化 II － 1

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度と土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、今年度は、日本の税制を定めた養老賦役令と、その直接の母法となった唐賦役令とを比較研究しながら、日唐の違いを析出し、そこから日本古代の特性を描き出すことを目的とする。

【到達目標】
日本の賦役令は中国の賦役令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的な改編なのかを、両者を比較しながら識別する能力を身につける。
単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。また海外史料を自力で読み解く技術も身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業形式は対面授業を原則とする。本年度は賦役令集解第１条から開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
発表へのフィードバックについては、次回の授業の初めに、前回の授業での提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	賦役令集解第10条講読（1）	辺縁国とは
第3回	賦役令集解第10条講読（2）	夷人とは
第4回	賦役令集解第10条講読（3）	雑類とは
第5回	賦役令集解第10条講読（4）	律令法における身分秩序について（倭類を中心に）
第6回	賦役令集解第10条講読（5）	律令法における身分秩序について（外蕃を中心に）
第7回	賦役令集解第10条講読（6）	中華世界と小中華
第8回	賦役令集解第11条講読（1）	免課役の手法
第9回	賦役令集解第11条講読（2）	位記の処理法
第10回	賦役令集解第11条講読（3）	雑任について
第11回	賦役令集解第11条講読（4）	免課役の手法
第12回	賦役令集解第11条講読（5）	蠲符とは
第13回	賦役令集解第11条講読（6）	大宝令との異同について
第14回	春学期の総括	免税措置を中心に日唐比較を整理し、日本古代の特徴を浮かび上がらせる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に2時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に1時間以上を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途１時間程度。

【テキスト（教科書）】
『新訂増補国史大系令集解』

【参考書】
唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表が中心となるが、海外史料である唐令拾遺の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて税制についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表70％）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加30％）。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.
Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".
Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.
Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS600B7（史学 / History 600）

東アジアの律令文化 II － 2

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度と土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、今年度は、日本の税制を定めた養老賦役令と、その直接の母法となった唐賦役令とを比較研究しながら、日唐の違いを析出し、そこから日本古代の特性を描き出すことを目的とする。

【到達目標】
日本の賦役令は中国の賦役令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的な改編なのかを、両者を比較しながら識別する能力を身につける。
単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。また海外史料を自力で読み解く技術も身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業形式は対面授業を原則とする。本年度は賦役令集解第１条から開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
発表へのフィードバックについては、次回の授業の初めに、前回の授業での提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	賦役令集解第12条講読（1）	春季課税について
第3回	賦役令集解第12条講読（2）	詐冒の手法
第4回	賦役令集解第12条講読（3）	課役忌避の手法
第5回	賦役令集解第12条講読（4）	逃亡の実態
第6回	賦役令集解第12条講読（5）	夏季課税について
第7回	賦役令集解第12条講読（6）	本司之役割は何か
第8回	賦役令集解第13条講読（1）	課口とは
第9回	賦役令集解第13条講読（2）	篤疾の場合
第10回	賦役令集解第13条講読（3）	侍丁について
第11回	賦役令集解第13条講読（4）	高齢者の処遇法の実態
第12回	賦役令集解第13条講読（5）	課役徴収者死亡の場合
第13回	賦役令集解第13条講読（6）	印記とは何か
第14回	秋学期の総括	日唐の課税方法の違いについて比較史的に総括する。祥瑞についても比較検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に2時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に1時間以上を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途１時間程度。

【テキスト（教科書）】
『新訂増補国史大系令集解』

【参考書】
唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表が中心となるが、海外史料である唐令拾遺の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて税制についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表70％）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加30％）。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.
Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".
Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.
Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS500B7（史学 / History 500）

王権の政治文化 I

春名　宏昭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「平安時代と貴族社会」と題して講義します。平安前期の改革の時代の国家・政治のあり方、貴族たちのあり方を理解するようつとめます。

【到達目標】
平安時代の貴族社会のあり方の把握を目指します。基礎的な知識を得て、その上でそれぞれの事象に興味を持ってアプローチし、国家・政治の本質を理解できる能力を身につけましょう。平安時代の官僚のあり方は現代の日本にも通じるオンタイムの問題ですから、現代の政治が抱える問題点も理解できるようになるでしょう。そのような視点から課題レポートにも取り組んで下さい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
平安前期の改革によって国家・政治のあり方がどのように変わっていったのか、この変化が平安中期の王朝貴族の時代に帰結していったのかを検証していきます。この授業では、一般啓蒙書に書かれることのない天皇や貴族たちのあり方を見ていきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組むことが必要です。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。質問がある場合は、授業後に対応します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の内容の説明
第2回	〈時代〉の変化	ワンランク上の国家を目指して
第3回	官人たちの変化	良吏政治のスタート＝大同元年勅
第4回	天皇の性格変化	桓武天皇と平城天皇
第5回	良吏政治の展開	嵯峨朝への政策継承
第6回	良吏政治の実践	弘仁三年勅から天長元年官符へ
第7回	承和の変の前奏（1）	嵯峨朝の政治状況
第8回	承和の変の前奏（2）	淳和朝の政治状況
第9回	承和の変の前奏（3）	仁明朝の政治状況
第10回	承和の変	母橘嘉智子と娘正子内親王
第11回	貴族の時代へ	文徳朝・清和朝の様相
第12回	応天門の変	安定の時代、摂関政治へ
第13回	藤原基経の国政運営	清和天皇の悲嘆と陽成天皇の廃位
第14回	平安前期という時代	平安時代史概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
平安時代に関して問題意識を持つには、その前提として平安前期・中期の知識が必要ですし、奈良時代から平安時代への推移についても概括的な理解は必要です。それらを得るために、どれでも参考書（該当巻）を読んでみて下さい。ただし、著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。
この講義では、通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということを述べます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。また、平城天皇の事績をより詳しく知るには私の『平城天皇』（吉川弘文館人物叢書）を、延喜年間以降については『岩波講座日本歴史』第５巻の「摂関時代と政治構造」を読んで下さい。
また、講義内容が分かりにくかった時には、私の（春名宏昭）『〈謀反〉の古代史　平安朝の政治改革』(吉川弘文館)を読んで下さい。
この講義の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】
中央公論社(文庫)・小学館(文庫)・集英社・講談社(文庫)から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波書店の『シリーズ日本の古代史』(新書)、『岩波講座日本歴史』の該当巻。

【成績評価の方法と基準】
平常点とレポートで評価します。基準は平常点30％、レポート70％です。レポートで取り上げる範囲は平安時代に限りますが、テーマは学生各人で選んでよいことにしています。ただ、どのようなテーマを選んでも、授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】
板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につきません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作って下さい。

【Outline (in English)】
This lecture is attended under the heading of “The Heian period and the aristocracy". This course introduces how should be the nation and aristocrats in the former term of the Heian period to students taking this course. By the end of the course, students should be able to understand the essence of the nation and politics. Before/after each class meetings, students will be expected to spend four hours to read the textbook and one of reference books introduced. Grading will be decided based on term-end report(70%) and usual contribution(30%).

HIS500B7（史学 / History 500）

王権の政治文化 II

春名　宏昭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「続日本紀の史料学」と題して講義を行ないます。八世紀の日本は、当時先進の文化を誇った中国のような国家建設を目標に掲げて邁進していました。『続日本紀』を題材に史料への取り組み方を学び、日本古代史における歴史の流れ、あり方の把握を目指します。

【到達目標】
続日本紀の記事を数点取り上げ、史料へのアプローチの仕方を習得することができる。この授業を通して、奈良時代の基礎的な理解を身につけ、他の史料に対してもつねに興味を持って臨めるようになり、それを論理的に解析し正しい理解に到達できる技能を身につけられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
取り上げた記事を糸口に、その背後にある問題点を探り出し検証していきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組むことが必要です。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。質問がある場合は、授業後に対応します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	続日本紀とはどのような史料か？
第2回	ガイダンス（2）	続日本紀のテキスト
第3回	オオキミへの疑念（1）	続日本紀の宣命と稲荷山古墳鉄剣銘
第4回	オオキミへの疑念（2）	天皇と親王・諸王
第5回	天平二年の太政官奏（1）	天平二年六月甲寅朔条の紹介
第6回	天平二年の太政官奏（2）	続日本紀の３つのテキスト
第7回	天平二年の太政官奏（3）	わずか31文字の史料の“奥行”
第8回	慶雲元年の公廨銀（1）	慶雲元年七月庚子条の紹介
第9回	慶雲元年の公廨銀（2）	公廨銀から見えてくるもの
第10回	左右京尹の設置（1）	天平宝字五年二月丙辰朔条の紹介
第11回	左右京尹の設置（2）	左右京尹に対する理解
第12回	左右京尹の設置（3）	左右京尹の新たなる性格分析
第13回	税司主鎰（1）	大宝二年二月乙丑条の紹介
第14回	税司主鎰（2）	大宝令施行直後の地方政治

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
取り上げた記事が含む意味を理解するためには、それぞれの記事に現れた事象の時代背景を知る必要があります。そのためには、どれでもいいですから参考書（奈良時代該当巻）を読んでみて下さい。著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。
この講義では、現在の通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということを述べていきます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。
この講義の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特に定めません。授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】
岩波書店・新日本古典文学大系『続日本紀』が基本です。他に平凡社『続日本紀』、現代思潮社『続日本紀』があります。一般啓蒙書として、中央公論社(文庫)・小学館(文庫)・集英社・講談社(文庫)から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波新書『シリーズ日本の古代史』、『岩波講座日本歴史』の該当巻があります。

【成績評価の方法と基準】
平常点とレポートで評価します。基準は平常点30％、レポート70％です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】
板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につきません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作って下さい。　”自分で考える”がキーポイントです。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本古代政治史
〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制
〈主要研究業績〉
『律令国家官制の研究』(吉川弘文館)
『平城天皇』(吉川弘文館)
『皇位継承　歴史をふりかえり変化を見定める』（共著、山川出版社）
『〈謀反〉の古代史　平安朝の政治改革』(吉川弘文館)

【Outline (in English)】
This lecture is offered under the title of “The world of Shokunihongi”. It deals with key aspects of ancient Japanese history, particularly referring to “shokunihongi”. By the end of the course, students will be able to understand how to make a new approach to historical sources. Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the Term-end examination (70%) and usual contribution (30%).

HIS500B7（史学 / History 500）

天皇制と政務・儀礼Ⅰ

山口　英男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】
平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第3回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第4回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第5回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第6回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第7回	行政実務関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第8回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第9回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第10回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第11回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第12回	武芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	武芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します
第13回	武芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第14回	武芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】
事前に印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】
『大日本史料』第１・２・３編
『訳注延喜式』上・中・下
『読み解き古代史料』（山川出版社　2024年）
「駒牽関係史料」（『山梨県史　資料編３』山梨県、2001年、山口英男編纂担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史　通史編１』2004年、山口英男執筆担当）
「編年史料編纂支援資源化データベースMIDOH」（東京大学史料編纂所）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w28/search
「大日本史料総合データベース」（同上）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w61/search

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】
授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『読み解き古代史料』山川出版社　2024年（共著）
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年
「畿内近傍の牧と馬寮の馬」（広瀬和雄・山中章・吉川真司編『講座畿内の古代学』Ⅳ軍事と対外交渉　雄山閣　2022年）
「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店　2021年）
「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社　2021）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）

【Outline (in English)】
Course outline
To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.
Learning Objectives
Be able to read and understand historical materials related to government affairs and ceremonies in the Heian period
Learning activities outside of classroom
Read through the historical materials to be covered in class in advance. The standard time for preparation and review for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
The grade will be assessed comprehensively based on active participation in class, the content of the report, the materials prepared, participation in discussions, and the content of the report.

HIS500B7（史学 / History 500）

天皇制と政務・儀礼 II

山口　英男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】
平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	仏事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	仏事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第3回	仏事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第4回	仏事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第5回	仏事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第6回	神事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	神事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します
第7回	神事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第8回	神事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第9回	神事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第10回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式書・法制史料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第11回	朝廷儀礼関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第12回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第13回	朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第14回	平安時代の政務・儀式の展開と特質	平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】
担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】
『読み解き古代史料』山川出版社、2024年
『大日本史料』第１・２・３編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史　資料編３』山梨県、2001年、山口英男編纂担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史　通史編１』2004年、山口英男執筆担当）
「編年史料編纂支援資源化データベースMIDOH」（東京大学史料編纂所）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w28/search
「大日本史料総合データベース」（同上）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w61/search

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】
授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『読み解き古代史料』山川出版社　2024年（共著）
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年
「畿内近傍の牧と馬寮の馬」（広瀬和雄・山中章・吉川真司編『講座畿内の古代学』Ⅳ軍事と対外交渉　雄山閣　2022年）
「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店　2021年）
「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社　2021）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）

【Outline (in English)】
Course outline
To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.
Learning Objectives
Be able to read and understand historical materials related to government affairs and ceremonies in the Heian period
Learning activities outside of classroom
Read through the historical materials to be covered in class in advance. The standard time for preparation and review for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
The grade will be assessed comprehensively based on active participation in class, the content of the report, the materials prepared, participation in discussions, and the content of the report.

HIS500B7（史学 / History 500）

日本の歴史と宗教

及川　亘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の16世紀末～17世紀初頭は城郭建設の時代である。天下人徳川家康の城郭建設に関する諸大名の間もしくは大名と家臣の間で取り交わされた書状を中心に読解し、当時の政治・社会の在り方について考える。

【到達目標】
16～17世紀の日本史を研究するうえで、書状の読解は重要な要素であるが、難しい点の一つは、書状には基本的に日付のみで年次が記されないことにある。書状の年次を確定することは、その内容を正確に把握するうえで必要不可欠であり、一方で書状の年次を確定するためには、その内容を正確に把握しなければならない。本授業では城郭建設に関する書状の読解を通じて、16～17世紀史料の取り扱いの基礎的技術を獲得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
細川家（豊前小倉・肥後熊本）、鍋島家（肥前佐賀）、毛利家（長門萩）、浅野家（安芸広島）など、主に西国大名の史料を史料写真を用いて読解する。
最初の数回は教員側で史料読解の方法を例示する。その後は担当者を決めて、担当史料の内容解釈・解説をしてもらい、参加者全員で討論する。教員側からは参加者の読みを訂正し、関連史料などを提示して解説するという形でフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業方法と使用テキストに関する説明。
第2回	徳川家康による築城に関する史料を読む	教員による史料読解の例示
第3回	徳川家康による築城に関する史料を読む	教員による史料読解の例示
第4回	徳川家康による築城に関する史料を読む―伏見城①	担当者による報告と討論
第5回	徳川家康による築城に関する史料を読む―伏見城②	担当者による報告と討論
第6回	徳川家康による築城に関する史料を読む―江戸城①	担当者による報告と討論
第7回	徳川家康による築城に関する史料を読む―江戸城②	担当者による報告と討論
第8回	徳川家康による築城に関する史料を読む―江戸城③	担当者による報告と討論
第9回	徳川家康による築城に関する史料を読む―駿府城	担当者による報告と討論
第10回	徳川家康による築城に関する史料を読む―名古屋城①	担当者による報告と討論
第11回	徳川家康による築城に関する史料を読む―名古屋城②	担当者による報告と討論
第12回	徳川家康による築城に関する史料を読む―その他①	担当者による報告と討論
第13回	徳川家康による築城に関する史料を読む―その他②	担当者による報告と討論
第14回	まとめ―書状から読み解く時代性	第13回までの全体の内容について討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間（合計4時間）を標準とする。
報告担当者は、担当史料を読解し、その年次・内容について十分に調査検討することが求められる。もちろん担当者以外も予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】
教科書は用いず、テキストはプリントを配布する。

【参考書】
『大日本史料』第十二編之一～六十三
『大日本古文書』「毛利家文書」「吉川家文書」「浅野家文書」
『佐賀県史料集成』一～三〇
『佐賀県近世史料』第一編・第二編
『大日本近世史料』細川家史料
『松井家文庫所蔵古文書調査報告書』一～二十
『出水叢書　綿考輯録』一～四
『萩藩閥閲録』一～五
『山口県史』史料編近世二
など

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業内での担当箇所の報告と授業への参加度）により評価する。（100%）

【学生の意見等からの気づき】
関連史料なども使いながら、中近世の政治・社会が具体的にイメージできるようにしたい。また実践を通じて史料読解の方法が身に着くようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
基本的に対面で授業を進める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本中・近世史
＜研究テーマ＞
中近世移行期の政治・社会・経済の研究
公儀普請の研究
＜主要研究業績＞
論文「「公儀御普請」―現場監督する大名―」（『城郭史研究』41号、2022年）
論文「「名古屋御城石垣絵図」を読む」（名古屋城調査研究センター編『史料が語る　名古屋城石垣普請の現場』名古屋城調査研究報告3　資料調査研究報告書1、2022年）
編著『近世統一政権の成立と天下普請の展開』（東京大学史料編纂所研究成果報告2021-18、2022年
論文「現場監督する大名―多久家文書にみる公儀普請―」小宮木代良編『近世前期の公儀軍役負担と大名家―佐賀藩多久家文書を読みなおす―』（岩田書院、2019年）
論文「旅行者と通行証―関所通過のメカニズム―」高橋慎一朗・千葉敏之編『移動者の中世―史料の機能、日本とヨーロッパ―』（東京大学出版会、2017年）
編著『薬師寺の中世文書』東京大学史料編纂所研究成果報告2015-3、2016年
論文「中世の戦争と商人」（高橋典幸編『生活と文化の歴史学5　戦争と平和』竹林舎、2014年）
論文「町の経済―算用帳にみる京都の人的結合―」（高橋慎一朗・千葉敏之編『中世の都市―史料の魅力、日本とヨーロッパ―』東京大学出版会、2009年）

論文「戦国期の薬師寺と唐招提寺」（勝俣鎮夫編『寺院・検断・徳政―戦国時代の寺院史料を読む―』山川出版社、2004年）

【Outline (in English)】
【Course outline】
From the end of the 16th century to the beginning of the 17th century, Japan entered the era of castle construction. Read mainly the letters regarding the construction of the castle during by Tokugawa Ieyasu, and think about the state of politics and society at that time.
【Learing Objectives】
Reading comprehension of letters is an important factor in studying Japanese history in the 16th and 17th centuries, but one of the difficulties is that the letters are basically dated only and do not include the year. Determining the year of a letter is indispensable for accurately grasping its contents, while in order to determine the year of a letter, it is necessary to accurately grasp its contents. The goal of this class is to acquire the basic skills of handling historical materials from the 16th to 17th centuries through reading comprehension of letters on castle construction.
【Work to be done outside of class (preparation, etc.) 】
The standard preparatory study / review time for this class is 2 hours each.
The reporter is required to read the historical materials in charge and thoroughly investigate and examine the year and contents. Of course, it is required to prepare for others.
【Grading Criteria】
Evaluate based on normal points (report of the part in charge in the class and degree of participation in the class). (100%)

HIS500B7（史学 / History 500）

古文書から読む江戸社会・入門編 I

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近世史研究において、くずし字の解読能力を身につけていることは、研究の幅を大きく広げると同時に、学問をより深めるものとなる。本授業は、基礎的な読解能力を養成することを目的とする。あわせて基本的な近世文書の種類を覚えていってもらいたい。※学部設置科目である。

【到達目標】
①くずし字の読解能力を身につける。
②基本的な近世文書の種類を覚える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
講義と演習を併用するかたちをとる。古文書のコピーをHoppiiにアップするので、まずは自力で解読に取り組む（教室でプリントは配布しない）。授業時に割り当てるので、学生はこれを板書し、答え合わせをする。教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。なお受講希望多数の場合、抽選とする。その際、近世史ゼミ生を優先する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	くずし字の辞典について
第2回	古文書解読入門	近世史料学講義
第3回	検地帳読解（1）	数字を覚えよう
第4回	検地帳読解（2）	単位を覚えよう
第5回	武家屋敷組合名簿読解（1）	名前を覚えよう
第6回	武家屋敷組合名簿読解（2）	通称を覚えよう
第7回	領知宛行状読解	大名家領の安堵
第8回	年貢割付状読解	年貢請求書
第9回	年貢皆済目録読解	年貢領収書
第10回	宗門人別改帳読解	江戸時代の家族
第11回	五人組帳前書読解	百姓への規制
第12回	変体仮名読解	俳句をよむ
第13回	金子借用証文読解	年貢滞納
第14回	試験とまとめ	解説とも

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に、配布された古文書のコピーを辞書を引きながら予習すること。事後には、読めなかった字を必ず復習すること。とにかく古文書をながめる時間をたくさんとること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『新編古文書解読字典』（柏書房、1993年）￥3,107
辞書は必須。毎回持参のこと。

【参考書】
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）など

【成績評価の方法と基準】
期末試験（90％）、平常点（10％）

【学生の意見等からの気づき】
まずは自分で辞書をひきながら読むことが大事です。

【その他の重要事項】
本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline (in English)】
This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following Term-end examination: 90%, in class contribution: 10%.

HIS500B7（史学 / History 500）

古文書から読む江戸社会・入門編 II

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
多様な近世史料の読解能力を養うことを目的とする。さまざまなくずし字を解読すると同時に、読解した史料の意味を理解することが重要となる。※学部設置科目である。

【到達目標】
①くずし字を解読することができる。
②読解した史料の意味を理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
本授業は日本近世史料学 I を履修済みであることを前提として授業を進める。Hoppii に古文書のコピーをアップするので、これにまずは自力で解読に取り組む。授業時に答え合わせし、教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。古文書解読の中級編として、近世の行政文書のほか、書状や発句など書体の異なる史料も対象とする。なお、近世ゼミの夏合宿で撮影した古文書をテキストとすることがある。また、現物古文書の整理作業を体験することもある。なお受講希望者が多数の場合、抽選とし、その際近世史ゼミ生を優先する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	発句読解	変体仮名
第2回	離縁状読解	三行半
第3回	触書読解（1）	ペリー来航
第4回	触書読解（2）	株仲間再興
第5回	武家文書読解（1）	御堀の管理
第6回	武家文書読解（2）	橋梁の管理
第7回	武家文書読解（3）	三方領地替（前半）
第8回	武家文書読解（4）	三方領知替（後半）
第9回	漢詩読解	七言絶句
第10回	書状読解（1）	松平容保書簡（前半）
第11回	書状読解（2）	松平容保書簡（後半）
第12回	日記読解（1）	自家年譜（前半）
第13回	日記読解（2）	自家年譜（後半）
第14回	試験とまとめ	解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に配布された古文書のコピーを、辞書を使って自力で読むこと。事後には、必ず復習すること。多くの古文書に触れることが重要である。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『新編古文書解読字典』（柏書房、1993年）￥3,107
辞書は必須。毎回持参のこと。

【参考書】
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）ほか

【成績評価の方法と基準】
期末試験（90％）、平常点（10％）

【学生の意見等からの気づき】
筆の動きをみることが、古文書読解能力向上のためのポイントです。

【その他の重要事項】
本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline (in English)】
This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following Term-end examination: 90%, in class contribution: 10%.

HIS500B7（史学 / History 500）

江戸の地方文化Ⅰ

西沢　淳男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一国（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物価・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】
日本近世社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていくことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がりは、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配付し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、 授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第2回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義
第3回	「豊田友直日記」(1)	日記の講読と質疑・応答
第4回	「豊田友直日記」(2)	日記の講読と質疑・応答
第5回	「豊田友直日記」(3)	日記の講読と質疑・応答
第6回	「豊田友直日記」(4)	日記の講読と質疑・応答
第7回	「豊田友直日記」(5)	日記の講読と質疑・応答
第8回	「豊田友直日記」(6)	日記の講読と質疑・応答
第9回	「豊田友直日記」(7)	日記の講読と質疑・応答
第10回	「豊田友直日記」(8)	日記の講読と質疑・応答
第11回	「豊田友直日記」(9)	日記の講読と質疑・応答
第12回	「豊田友直日記」(10)	日記の講読と質疑・応答
第13回	「豊田友直日記」(11)	日記の講読と質疑・応答
第14回	「豊田友直日記」(12)	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】
西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1 (岩田書院、2019年)7,000円＋税。必要に応じて教員がコピーを配付します。購入希望の場合は、教員より半額で購入できます。

【参考書】
西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015年)920円＋税。その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】
各自の発表と討論参加(70％)、平常点(30％)

【学生の意見等からの気づき】
より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【学生が準備すべき機器他】
資料の閲覧等もあるためパソコン・タブレット等の持参が望ましい。

【その他の重要事項】
原則教室における対面で行いますが、受講生の都合・状況に応じてオンラインにも対応します。

【担当教員の専門分野等】
https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline (in English)】
(Course outline)
This class, you will read the diary of a local official of the Edo Shogunate.
(Learning Objectives)
The goals of this course are to understand the local life and culture of the Edo period.
(Learning activities outside of classroom)
Students will be expected to read and review the historical materials thoroughly. Your study time will be more than four hours for a class.
(Grading Criteria /Policies)
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Presentation and discussion participation : 70%, normal score:30%

HIS500B7（史学 / History 500）

江戸の地方文化 II

西沢　淳男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一国（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物価・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】
日本近世社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていくことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がりは、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。フィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配付し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、 授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第2回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義 新規受講者がいない場合は講読とします。
第3回	「豊田友直日記」1	日記の講読と質疑・応答
第4回	「豊田友直日記」2	日記の講読と質疑・応答
第5回	「豊田友直日記」3	日記の講読と質疑・応答
第6回	「豊田友直日記」4	日記の講読と質疑・応答
第7回	「豊田友直日記」5	日記の講読と質疑・応答
第8回	「豊田友直日記」6	日記の講読と質疑・応答
第9回	「豊田友直日記」7	日記の講読と質疑・応答
第10回	「豊田友直日記」8	日記の講読と質疑・応答
第11回	「豊田友直日記」9	日記の講読と質疑・応答
第12回	「豊田友直日記」10	日記の講読と質疑・応答
第13回	「豊田友直日記」11	日記の講読と質疑・応答
第14回	「豊田友直日記」12	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】
西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1 (岩田書院、2019年)7,000円＋税。必要に応じて教員がコピーを配付します。購入希望の場合は、教員より半額で購入できます。

【参考書】
西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015年)920円＋税。その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】
各自の発表と討論参加(70％)、平常点(30％)

【学生の意見等からの気づき】
より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【学生が準備すべき機器他】
資料の閲覧等もあるためパソコン・タブレット等の持参が望ましい。

【その他の重要事項】
原則教室における対面で行いますが、受講生の都合・状況に応じてオンラインにも対応します。

【担当教員の専門分野等】
https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline (in English)】
（Course outline）
This class, you will read the diary of a local official of the Edo Shogunate.
（Learning Objectives）
The goals of this course are to understand the local life and culture of the Edo period.
（Learning activities outside of classroom）
Students will be expected to read and review the historical materials thoroughly. Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policies）
Your overall grade in the class will be decided based on the following.
Presentation and discussion participation : 70%, normal score:30%

HIS500B7（史学 / History 500）

日本文化と西洋文化Ⅰ

森田　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　渋沢栄一は、９１年の生涯に約５００の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。
　近代日本の社会構造について、渋沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】
　近代日本の社会構造について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　テーマと史料は、第１回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。
　受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。
　発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	渋沢栄一	渋沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（１）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（２）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（１）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（２）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（１）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（２）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（１）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（２）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（１）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（２）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（１）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（２）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。
本授業の準備・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
適宜、レジュメ・資料を配布する。

【参考書】
適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
報告内容（70％）、コメント等の授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】
２０２５年度とテーマを継続しています。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・Zoom接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近現代史
＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史
＜主要研究業績＞
森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）
森田貴子『三野村利左衛門と益田孝――三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）
森田貴子「華族資本の形成と家政改革――岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済――資本主義への道』日本経済評論社、2004年）
森田貴子「不動産――岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市３　インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline (in English)】
This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business. The goals of this course are to acquire the technique of criticizing historical materials and the ability to compose issues. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B7（史学 / History 500）

日本文化と西洋文化 II

森田　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
渋沢栄一は、９１年の生涯に約５００の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。
近代日本の社会構造について、渋沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】
近代日本の社会構造について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
テーマと史料は、第１回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。
受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。
発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	渋沢栄一	渋沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（１）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（２）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（１）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（２）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（１）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（２）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（１）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（２）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（１）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（２）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（１）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（２）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。
本授業の準備・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
適宜レジュメ・資料を配布する。

【参考書】
適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
報告内容（70％）、コメント等の授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】
２０２５年度とテーマを継続しています。
対面授業を予定していますが、事情によりオンライン（リアルタイム）での実施へ変更することがあります。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・Zoom接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近現代史
＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史
＜主要研究業績＞
森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）
森田貴子『三野村利左衛門と益田孝――三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）
森田貴子「華族資本の形成と家政改革――岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済――資本主義への道』日本経済評論社、2004年）
森田貴子「不動産――岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市３　インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline (in English)】
This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business. The goals of this course are to acquire the technique of criticizing historical materials and the ability to compose issues. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B7（史学 / History 500）

日本の近代と国際社会 I

内藤　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近代史を、立憲政治の観点から、立法府を中心に読み解いていく。帝国議会は貴族院と衆議院により構成されるが、本講義では、特に貴族院に注目して考察をはかる。授業を通じて、実証研究の蓄積が学問領域に新たな地平を開くことを明らかにしていく。

【到達目標】
①日本近代史を立憲政治の観点から理解する。②帝国議会を構成する貴族院・衆議院について、特に前者の役割について理解を深める。③歴史の連続性について考える手がかりを得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義形式とし、板書とパワーポイントを併用させる。適宜史料のコピー等を配布し、史料を音読したり、内容を検討することもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	日本における議会制の導入	欧米の議会制度と日本での導入をめぐる議論について論じる
第3回	憲法の制定と帝国議会の発足	大日本帝国憲法の制定と帝国議会について考察する
第4回	初期議会	初期議会の政府と帝国議会について考察する
第5回	藩閥と政党	藩閥政府と議会の関係を考察する
第6回	桂園時代	桂園時代の歴代政権と帝国議会の関係について考察する
第7回	転換期としての大正	大正政変とその後の政治の推移について帝国議会の見地から考察する
第8回	大正デモクラシー	原敬内閣の誕生を機に起きた帝国議会の変化を考察する
第9回	政党内閣期	第二次護憲運動後に到来した政党内閣期における帝国議会について考察する
第10回	昭和初期の政治	昭和初期、政党政治が揺らぐなかでの帝国議会のあり方を考察する
第11回	軍部の台頭と帝国議会	軍部が台頭するなか、帝国議会のあり方を考察する
第12回	大戦下の議会	第二次世界大戦下における帝国議会について考察する
第13回	帝国議会から国会へ	第二次世界大戦後、帝国議会から国会への変遷を考察する
第14回	まとめ　総括と質疑応答	講義全体のまとめ、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に配布する資料には必ず目を通しておく。授業後には内容をよく確認し、指示のあった文献や資料に目を通しておく。平素より参考文献を読んでおくことが望ましい。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは用いない。参照が必要な文献等がある場合には、講義の際、指示する。

【参考書】
『議会制度百年史』全12巻、『貴族院』（同成社）

【成績評価の方法と基準】
平常点（40％）、期末試験（60％）をもとに総合的に評価する。期末試験はノート持ち込み可。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受けない場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】
クエスチョンタイムに相当する時間を適宜設けるなどして、授業理解が得られるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムの利用が可能なIT機器

【その他の重要事項】
・「日本近代史料学」（秋学期・学部合同科目・大学院科目「日本近代史研究」Ⅱ）との継続履修を推奨する。
・学部合同科目（「日本近代史」）である。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course examines the modern era of Japan with a focus on the Imperial Diet.In particular, I will focus on the character of the House of Peers and the role it played in history.　What is particularly important in this course is the correct and historical understanding of the development of modern Japanese history and constitutional politics.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
－ A.Understanding modern Japanese history through the development of constitutional politics.
－ B.Deepening understanding of the role of the Imperial Diet centered on the House of Peers.
－ C.Get clues to think about the continuity of history.
（Learning activities outside of classroom）
Students should read the materials distributed in advance.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Term-end examination: 60%, in class contribution: 40%

HIS500B7（史学 / History 500）

日本の近代と国際社会 II

内藤　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近代史研究では、数多くの、かつさまざまな史（資）料を駆使して議論を組み立てることが珍しくない。本授業では各種の史（資）料を取り上げ、それぞれの特色や限界を明らかにしていく。さらに自ら史料発掘やオーラルヒストリーに取り組むときの手順についても学ぶことで、実践的なスキルを磨くことができるようにする。

【到達目標】
①一次・二次史料の違いと、それぞれの特色を理解する。②公文書・私文書の違いとそれぞれの特色を理解する。③文字・非文字資料の違いと、それぞれの特色を理解する。①～③を総合し、近代史（資）料について基礎的な理解をはかる。また独自に史（資）料調査を行う際に必要となる知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義形式をとる。板書とパワーポイントを併用する。授業で使用する史（資）料は、学習支援システムを利用して配布する。史（資）料は授業時に音読したり、内容の検証を行う。状況が許せば学外で行う講義もある。
また講義時には、質疑応答の時間を設けるほか、学習支援システムに課題の回答を掲示するなどフィードバックに関しても適宜対応していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	書簡研究（1）	近代の書簡の形態・書式等について
第3回	書簡研究（2）	近代の書簡の内容について（政治家の書簡を読む）
第4回	書簡研究（3）	近代の書簡の内容について（文化人の書簡を読む）
第5回	日記研究（1）	近代の日記の形態・書式等について
第6回	日記研究（2）	近代の日記の内容について（政治家の日記を読む）
第7回	日記研究（3）	近代の日記の内容について（文化人の日記を読む）
第8回	公文書研究	さまざまな公文書の特色について
第9回	新聞、雑誌、書籍の世界	新聞、雑誌や各種書籍といった活字資料の特色と歴史研究での活用法について学ぶ
第10回	史料調査の世界	史料調査の手順や注意点について学ぶ
第11回	オーラルヒストリーの世界	オーラルヒストリーとは何か、調査の手順、注意点について学ぶ
第12回	金石文の世界	金石文の特色について、フィールドワークとともに学ぶ
第13回	編纂史料の世界	翻刻された史料や伝記などの編纂物の特色について
第14回	まとめ　総括と質疑応答	講義全体のまとめ、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に配布する史（資）料には必ず目を通しておく。その際、読みや意味のわからない文字を調べ、さらに記された内容や、作成した人物についても予習しておく。授業後には内容を再確認することで、知識の定着をはかる。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキストに使用する史（資）料は、学習支援システムにより事前に配布する。

【参考書】
五味文彦・杉森哲也編『日本史史料論』（放送大学教育振興会）、中村隆英・伊藤隆編『近代日本研究入門［増補版］』（東京大学出版会）、佐々木隆「近代文書と政治史研究」（『日本の時代史30　歴史と素材』吉川弘文館）、御厨貴編著『近現代日本を史料で読む』（中公新書）、『日記に読む近代日本』全5巻（吉川弘文館）、御厨貴編『オーラル・ヒストリーに何ができるか』（岩波書店）

【成績評価の方法と基準】
平常点（40％）、期末試験（60％）をもとに総合的に評価する。期末試験はノート持ち込み可。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受けない場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】
クエスチョンタイムに相当する時間を適宜設けるなどして、授業理解が得られるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムの利用が可能なIT機器

【その他の重要事項】
・大学院における学部合同科目（学部講義名は「日本近代史料学」）である。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムのお知らせ機能や、授業内掲示板機能を利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
In this course, I will explain the characteristics and limitations of each of the various modern Japanese historical materials while analyzing them in detail. I will also teach you the steps to discover historical sources and conduct oral history research yourself. Through the lessons, you will gain basic knowledge and understanding of historical materials.
（Learning Objectives）
The goal of this course is to recognize the characteristics of various historical materials and to acquire the professional abilities necessary for documentary research.
（Learning activities outside of classroom）
Students should read the materials distributed in advance.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Term-end examination: 60%, in class contribution: 40%

HIS500B7（史学 / History 500）

沖縄学入門 I

大里　知子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。
「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】
琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけたうえで、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第2回	琉球・沖縄史概説	時代区分論、基礎資料・文献、研究動向など
第3回	欧米船の来航	19世紀以降の欧米のアジア進出と琉球への欧米船来航
第4回	「琉球処分」琉球国併合	琉球藩設置以降の琉球国併合過程、「分島・改約」交渉
第5回	初期県政	沖縄県設置後の初期県政における「旧慣温存」政策と県内の状況
第6回	沖縄における民権運動	宮古島における人頭税廃止運動、謝花昇と沖縄倶楽部
第7回	「旧慣」の改革	土地整理事業、沖縄県及島嶼町村制、徴兵制の実施
第8回	日清戦争後の文化、教育	沖縄学と日琉同祖論、尋常中学校ストライキ事件、河上肇舌禍事件
第9回	「ソテツ地獄」と沖縄振興計画	沖縄における恐慌、救済論と振興計画
第10回	海外移民と出稼ぎ	海外への移民、本土への出稼ぎ、大東島の開拓
第11回	沖縄における労働問題	西表炭鉱、沖縄青年同盟と労働運動
第12回	近代沖縄の文化	新聞の発刊、文学、美術、音楽、近代演劇
第13回	第1次世界大戦前後の沖縄	台湾における霧社事件と沖縄出身者、満州開拓移民
第14回	戦時下の沖縄	標準語の励行、改姓改名運動と日本民芸協会・柳宗悦らとの「方言論争」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】
①沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編『概説沖縄の歴史と文化』（2000）
②沖縄県教育委員会編『沖縄の歴史と文化』（2000）沖縄県HPに掲載
①については、適宜資料を配布するので自分で用意する必要はありません。
②は補助テキストとして使用します。

【参考書】
・沖縄歴史教育研究会『琉球・沖縄史探究―探究心を育てるためのもう一つの眼差し』（2024）東洋企画
・『大学で学ぶ　沖縄の歴史』（2023）吉川弘文館
・前田勇樹・古波蔵契・秋山道宏編『つながる沖縄近現代史』（2021）ボーダーインク
・新城俊昭『教養講座　琉球・沖縄史』（2014）東洋企画
・沖縄県教育委員会編『沖縄県史　各論編第5巻　近代』（2011）東洋企画

【成績評価の方法と基準】
平常点70％、レポート30％　毎回の授業への参加態度に、授業に取り組む姿勢や意欲があらわれるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】
「入門」という科目のため、基本的な内容をベースにしているが、より専門的なディスカッションを求める学生に対して個別に対応する工夫が必要となる。

【その他の重要事項】
当科目を履修する場合は、春学期、秋学期合わせての履修を望みます。

【Outline (in English)】
In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.
It also another purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.
Before and after each class meeting, students will be expected to spend one hours to understand the course content.
Your overall grade in the class will be decided on the following Term-end report:(50％), and in-class contribution:(50%).

HIS500B7（史学 / History 500）

沖縄学入門II

大里　知子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。
「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】
琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけたうえで、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第2回	伊波普猷と「沖縄学」	伊波普猷と沖縄学
第3回	伊波普猷と「日琉同祖論」	伊波普猷の歴史思想
第4回	沖縄戦の実相	学童疎開と空襲、地上戦「鉄の暴風」、集団死、宮古・八重山での戦争マラリア
第5回	収容所からはじまった戦後	米軍支配の始まりと住民の暮らし
第6回	土地の強制収用と基地の成り立ち	米軍による接収だけではない基地の成り立ち
第7回	沖縄戦体験の語りと記録	語りなおされる沖縄戦、沖縄戦像と記憶、記述
第8回	アメリカ世の沖縄	アメリカのアジア戦略と核兵器配備
第9回	島ぐるみ闘争	基地の拡大と「島ぐるみ闘争」、「命どう宝」の訴え
第10回	日本への「復帰運動」	「復帰運動」が生んだ亀裂
第11回	戦後移民	移民政策と沖縄経済、「世界のウチナーンチュ」
第12回	「復帰」後の沖縄	「日本復帰」と「沖縄イメージ」
第13回	沖縄ブームと基地問題	終わらない基地問題、共同体の解体
第14回	近現代沖縄の歴史	これまでのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】
①沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編『概説沖縄の歴史と文化』（2000）
②沖縄県教育委員会編『沖縄の歴史と文化』（2000）沖縄県HPに掲載
①については、適宜資料を配布するので自分で用意する必要はありません。
②は補助テキストとして使用します。

【参考書】
・沖縄歴史教育研究会『琉球・沖縄史探究―探究心を育てるためのもう一つの眼差し』（2024）東洋企画
・『大学で学ぶ　沖縄の歴史』（2023）吉川弘文館
・前田勇樹・古波蔵契・秋山道宏編『つながる沖縄近現代史』（2021）ボーダーインク
・新城俊昭『教養講座　琉球・沖縄史』（2014）東洋企画
・沖縄県教育委員会編『沖縄県史　各論編第5巻　近代』（2011）東洋企画
・金城正篤・高良倉吉『「沖縄学」の父　伊波普猷［新訂版］』（2017）清水書院

【成績評価の方法と基準】
平常点70％、レポート30％　毎回の授業への参加態度に、授業に取り組む姿勢や意欲が顕れるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】
「入門」という科目のため、基本的な内容をベースにしているが、より専門的なディスカッションを求める学生に対して個別に対応する工夫が必要となる。

【その他の重要事項】
当科目を履修する場合は、春学期・秋学期合わせての履修を望みます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞
http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/105/0010447/profile.html

【Outline (in English)】
In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.
It also another purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.
Before and after each class meeting, students will be expected to spend one hours to understand the course content.
Your overall grade in the class will be decided on the following Term-end report:(50％), and in-class contribution:(50%).

CUM500B7（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

アーカイブズ学Ⅰ

宮間　純一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アーカイブズ学の概要と基本理念を理解する。また、記録管理のあり方をその背景にある人間社会の営みと関連付けて考える思考力を身につける。
アーカイブズとは、①組織や個人の活動のなかで蓄積された記録（とくに、永久保存される文書）、②記録を管理・公開する組織や施設のことを意味する用語であり、アーカイブズ学とはアーカイブズを支える学問分野である。

【到達目標】
アーカイブズ学の諸分野について具体的に探求するとともに、自己の研究領域とアーカイブズの関係を認識し、具体的な研究課題を発見・設定することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義を中心とするが一部演習形式で実施する。第１回から１０回は講義とし、第１１回から１３回は演習形式で論文講読を行う。論文講読は、受講生が分担して担当・発表したのち、教員が解説を加え、ディベートを実施する。第１４回は、総括討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の概要と学ぶ意義に関する講義
第2回	アーカイブズ学総論	アーカイブズの歴史と基本理念に関する講義
第3回	アーカイブズと周縁の学問領域	アーカイブズと歴史学・博物館学・図書館学などに関する講義
第4回	前近代のアーカイブズ	前近代のアーカイブズに関する講義
第5回	近代日本の官僚組織と記録管理	近代日本の官僚組織と記録管理に関する講義
第6回	戦争と記録	戦争と記録に関する講義
第7回	アーカイブズと現代社会	アーカイブズと現代社会に関する講義
第8回	オーラル・ヒストリー	オーラル・ヒストリーに関する講義
第9回	近世「家」文書の構造	近世日本の文書群の構造分析に関する講義
第10回	近現代行政文書の構造	近現代の行政組織と公文書の構造に関する講義
第11回	近現代の企業記録	近代の企業記録に関する文献を講読する
第12回	評価選別論	アーカイブズの評価選別論に関する文献を講読する
第13回	アーカイブズの編成と記述	アーカイブズの編成と記述に関する論文を講読する
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回に指示する論文および関連する文献を各自が事前に目を通してくる。
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003年）

【参考書】
安澤秀一『史料館・文書館学への道-記録・文書をどう残すか-』（吉川弘文館、1985年）
大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986年）
鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002年）
下重直樹・湯上良編『アーキビストとしてはたらく』（山川出版社、2022年）
他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】
平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う
2016年4月 - 2018年3月国文学研究資料館研究部　准教授
2011年4月 - 2016年3月宮内庁書陵部宮内公文書館　内閣府事務官
2007年4月 - 2011年3月千葉県文書館県史・古文書課　嘱託職員

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史・近代史およびアーカイブズ学
＜研究テーマ＞政治史、地域史、記録管理
＜主要研究業績＞
『明治維新という物語』（中央公論新社、2025年）／『公文書管理法後の自治体と文書管理』（編著、勉誠出版、2022年）／『天皇陵と近代－地域の中の大友皇子伝説－』（平凡社、2018年）／『国葬の成立－明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015年）／『戊辰内乱期の社会－佐幕と勤王のあいだ－』（思文閣出版、2015年）

【Outline (in English)】
（Course outline）This course introduces overview and philosophy of archival science to students taking this course.
（Learning Objectives）The goals of this course are to master the basics of archival science.
（Learning activities outside of classroom）Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policy）Your overall grade in the class will be decided based on the following
in class contribution: 100%

CUM500B7（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

アーカイブズ学Ⅱ

宮間　純一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アーカイブズ学におけるアーカイブズ資源研究の基本的な理念・手法を理解し、具体的な文書群の構造分析を行うことができるようになる。
アーカイブズ資源研究とは、記録管理に関わる研究、記録の伝来をめぐる研究、アーカイブズの構造分析などからなる分野である。

【到達目標】
アーカイブズ学資源研究の理念・手法を踏まえて、自己の研究において利活用している（あるいはこれから利活用することが予定されている）文書群を対象としたアーカイブズ学的分析を具体的に行い、その成果・課題を適切に示すことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義および演習。第１回から１０回は講義とし、第１１回から１３回は演習形式で、受講生が具体的な文書群に関わる研究発表を行う（文書群や研究テーマは各自が設定する、授業計画に示したのは例）。発表ののちディベートを実施する。第１４回は、 総括討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の理念・概要に関する講義
第2回	アーカイブズ資源研究の方法論	アーカイブズ資源研究の研究史・方法論に関する講義
第3回	古代朝廷の文書管理	古代朝廷の文書管理に関する講義
第4回	戦国大名の文書管理	戦国大名の文書管理に関する講義
第5回	徳川幕府の文書管理	徳川幕府の官僚組織と文書管理に関する講義
第6回	前近代の「家」と文書管理	前近代の「家」における文書管理に関する講義
第7回	近代官僚組織と文書管理	近代官僚組織の成立・展開と文書管理に関する講義
第8回	軍隊と文書管理	軍隊と文書管理に関する講義
第9回	政治家と文書管理	政治家と文書管理に関する講義
第10回	企業と文書管理	企業と文書管理に関する講義
第11回	寺院と文書管理	寺院と文書管理に関する研究報告
第12回	神社と文書管理	神社と文書管理に関する研究報告
第13回	天皇と文書管理	天皇と文書管理に関する研究報告
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の発表担当者は関連する史料・文献を熟読し、報告の準備をする。それ以外の受講生は、発表担当者から事前に紹介された参考文献に目を通してくる。
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003 年）

【参考書】
安澤秀一『史料館・文書館学への道－記録・文書をどう残すか－』（吉川弘文館、1985 年）
大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986 年）
鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002年）
国文学研究資料館編『近世大名のアーカイブズ資源研究』（思文閣出版、2016年）
他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】
平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う
2016年4月-2018年3月国文学研究資料館　研究部准教授
2011年4月-2016年3月宮内庁書陵部宮内公文書館　内閣府事務官
2007年4月-2011年3月千葉県文書館県史・古文書課　嘱託職員

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代史およびアーカイブズ学
＜研究テーマ＞政治史、地域史、記録管理
＜主要研究業績＞
『明治維新という物語』（中央公論新社、2025年）／『公文書管理法時代の自治体と文書管理』（勉誠社、2022年）／『天皇陵と近代－地域の中の大友皇子伝説－』（平凡社、2018 年）／『国葬の成立－明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015年）

【Outline (in English)】
（Course outline）This course introduces the archival study of resources to students taking this course.
（Learning Objectives）The goals of this course are to master the basics of archival study of resources.
（Learning activities outside of classroom）Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policy）Your overall grade in the class will be decided based on the following
in class contribution: 100%

CUM500B7（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

文書館管理研究Ⅰ

鈴木宏宗・大塩勇生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業の概要：収集アーカイブズにおける個人文書の特性や取扱いについて、アーキビストの実務を通して学ぶ。
目的：アーキビストとして個人文書に対応するための識見・能力を高め、その基本的な考え方及び技能を身につける。

【到達目標】
到達目標：１）個人文書を対象とするアーカイブズについて深く理解し、その意義を自覚すると共に他者に説明することができる。２）アーキビストとしての技能を身に着け、実践するための方法を考え、論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の進め方：授業は講義形式で行う。
方法：対面授業とする。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答およびフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的・発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義概要（鈴木）
第2回	個人文書とは	個人文書と所蔵について概略（鈴木）
第3回	個人文書の所蔵機関	憲政資料室など具体例（大塩）
第4回	個人文書をめぐる法と制度	情報公開法関連法規等（鈴木）
第5回	個人文書の収集	収集方針、方法（大塩）
第6回	個人文書についての情報収集	関連機関との連携など（鈴木）
第7回	個人文書の整理(総論)	一般論と構造化（大塩）
第8回	個人文書整理の実際	具体例を検討（大塩）
第9回	個人文書の利用環境	閲覧、複写など（鈴木）
第10回	個人文書の保存対策	保存資材、書庫など（大塩）
第11回	個人文書のデジタル化	デジタル化　（媒体変換の意義、方針と実際（鈴木）
第12回	個人文書の情報提供	レファレンス、広報の面（鈴木）
第13回	個人文書の展示	実物展示、電子展示など（大塩）
第14回	試験・まとめ	講義の総括（鈴木）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備学習・復習：参考書や各回で言及した文献をひもとき、準備・復習し、理解を深めること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する予定。

【参考書】
国文学研究資料館編『アーカイブズ学入門』（勉誠社、2024年）
知的資源イニシアティブ 編『これからのアーキビスト』（勉誠出版、2014）
青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』（岩田書院、2004年）
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房、2003年）

【成績評価の方法と基準】
平常点50％、期末試験50％。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】
受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【その他の重要事項】
担当教員は、国立国会図書館憲政資料室に勤務しており、同室での政治家をはじめとる個人文書を取り扱った実践及び知見、研究を踏まえて授業を行う。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
・アーカイブズ学（鈴木）
・図書館史（鈴木）
＜研究テーマ＞
・近代日本の図書館史（鈴木）
＜主要研究業績＞
・鈴木宏宗「明治10年代「図書館」は「書籍館」に何故取って代ったか―「図書」の語誌に見る意味変化と「東京図書館における「館種」概念の芽生え―」『近代出版研究』1巻、2022年
・鈴木宏宗「日本近現代政治史料とアーキビスト」的資源イニシアティブ 編『これからのアーキビスト』（勉誠出版、2014）

【Outline (in English)】
(Course outline) Course Overview: Learn about the characteristics and handling of personal papers in collection archives through the practical work of an archivist.
Objective: To enhance the knowledge and ability to deal with personal papers as an archivist and acquire the basic concepts and skills required.
(Learning Objectives) Students will gain a deep understanding of archives that target personal papers, become aware of their significance, and be able to explain them to others.
(Learning activities outside of classroom) Consult reference books and literature mentioned in each session, prepare and review, and deepen your understanding.
(Grading Criteria /Policy) 50% regular grades and 50% final exam.

CUM500B7（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

文書館管理研究 II

芳澤　直之

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業の概要と目的：アーカイブズ（記録と文書館）とアーキビストの歴史と現在について、また、その実務について学ぶ。
目的：アーキビストとしての識見・能力を高め、その基本技能を身につける。
なお、この授業は、文書館管理研究 I（春学期）と連続して受講することを必須とする。

【到達目標】
(1)アーカイブズ（記録と文書館）について深く理解し、その意義を自覚すると共に説明することができる。(2) アーキビストとしての技能を身に付け、実践することができる。(3) アーカイブズ及びアーキビストについてグローバルな視点から考え、論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
対面授業とする。その具体的方法については、学習支援システムで通知する。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答及びフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的、発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業全体の概要説明と受講上の注意
第2回	国立博物館とアーカイブズ 1	アーカイブズ機関としての国立博物館の特徴
第3回	国立博物館とアーカイブズ 2	国立博物館が保有する記録資料の法的位置づけ－公文書管理法と文化財保護法に注目して－
第4回	国立博物館とアーカイブズ 3	国立博物館における記録資料管理の理論と方法
第5回	国立博物館における記録資料活用の前提 1	多量で多様な形態の記録資料群と目録編成
第6回	国立博物館における記録資料活用の前提 2	写真資料の技法に基いた目録編成
第7回	国立博物館における記録資料活用の前提 3	記録資料の情報化・デジタル化等に関する理念及び方法論
第8回	国立博物館における記録資料活用の前提 4	収蔵品公開システムと記録資料の公開
第9回	国立博物館と組織文書 1	国立博物館における電子文書の運用
第10回	国立博物館と組織文書 2	国立博物館における情報システム構築
第11回	国立博物館と組織文書 3	国立博物館と情報公開法等関係法令
第12回	国立博物館における記録資料の保存 1	記録資料の保存に関する基本的な理念と方法論
第13回	国立博物館における記録資料の保存 2	記録資料の保存・修復及び保存科学
第14回	海外博物館の事例	英国ロイヤルコレクション・トラストが所蔵する記録資料の特徴

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する。

【参考書】
国文学研究資料館・史料館編『史料の整理と管理』(岩波書店、1988年)
新井浩文『文書館の仕事：アーキビストと史料保存』(吉川弘文館、2024年)
福島幸宏責任編集『ひらかれる公共資料』(勉誠社、2023年)
宇賀克也『情報公開と公文書管理』(有斐閣、2010年)
宇賀克也『新・情報公開法の逐条解説〔第8版〕』(有斐閣、2018年)
大林賢太郎『写真保存の実務』(岩田書院、2010年)

【成績評価の方法と基準】
平常点50％、期末試験（リポート形式）50％。なお特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】
受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【その他の重要事項】
履修済（合格）の再履修は認めない。
スケジュール等の急な変更は学習支援システムのお知らせで通知するため、授業前に必ず確認すること。お知らせに記載がない場合は、予定通り対面授業を行う。
以下のアーカイブズ機関・博物館での実践・研究をふまえた授業を行う。
2024年10月 - 現在（独）国立文化財機構　皇居三の丸尚蔵館　研究員
2021年4月 - 2024年9月　宮内庁三の丸尚蔵館　内閣府事務官（研究職）
2016年4月 - 2021年3月　外務省外交史料館　期間業務職員（『日本外交文書』編纂補助）

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近代史、アーカイブズ学
＜研究テーマ＞近代日本の宮中外交
＜主要研究業績＞
芳澤直之「昭和戦前期における宮内省御用掛と外交官」(外務省外交史料館編『外交史料館報』第30号、2017年3月)
芳澤直之「昭和戦前期の宮内官吏と非官吏」(『学習院史学』59、2021年3月)
芳澤直之「土方久元宛て伊藤博文書簡について－『芳蘭帖」を中心に」(皇居三の丸尚蔵館編『尚蔵』2号、2026年3月)

【Outline (in English)】
Course outline: Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below.(1)What's an archives? (2)What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4)What's the skills of an archivist working for an archives? Student's questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed.
Learning Objectives: The goal of this course is to understand practical and basic knowledge and skills as an archivist.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on assignments at each class meeting (50%) and term-end Examination (50%)

CUM500B7（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

記録史料学研究Ⅰ

小宮山　敏和

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
前近代の記録史料(古文書・古記録)についての理解を深めるため、アーカイブズ学等の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】
前近代の幕府や朝廷等の政治組織、村・町・寺社等の組織構造をまず理解することが求められる。その上で、前近代の組織にとって、記録を作成し残すことの意味や記録管理システム等の特質を探求するとともに、アーカイブズ学と前近代の記録史料の関係等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
論文講読等の演習形式と講義で授業を進める。各テーマに沿った講義も想定しているが、参加者が順番に関連論文について報告し討論を行うことを重視する。よって、参加人数や専門分野等の状況によっては講義内容の組み替え等を行う場合がある。担当論文、順番等については参加者の人数や属性(専門分野等)を考慮しガイダンスの際に決定するが、その後も調整等行う。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。対面での授業を想定している。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	目的　計画　報告者の調整　etc
第2回	記録史料とアーカイブズ学	古文書学、記録史料学、アーカイブズ学などの整理、日本の前近代文書の特徴等
第3回	前近代の組織とアーカイブズ	前近代の組織の構造や特質等
第4回	記録史料の特性(1)	中世の武家における記録・文書の管理
第5回	記録史料の特性(2)	江戸幕府における記録・文書の管理 Ⅰ
第6回	記録史料の特性(3)	江戸幕府における記録・文書の管理 Ⅱ
第7回	記録史料の特性(4)	藩における記録・文書の管理
第8回	記録史料の特性(5)	中世の朝廷・公家における記録・文書の管理
第9回	記録史料の特性(6)	朝廷における記録・文書の管理
第10回	記録史料の特性(7)	公家における記録・文書の管理
第11回	記録史料の特性(8)	村方における記録・文書の管理
第12回	記録史料の特性(9)	町方における記録・文書の管理
第13回	記録史料の特性(10)	寺社その他における記録・文書の管理
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。報告担当者は報告準備を行う。報告担当者以外も報告対象となる論文を精読して不明な点などをまとめておく。
安藤正人『記録史料学と現代――アーカイブズの科学をめざして―』(吉川弘文館,1998年)は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用しない。

【参考書】
安藤正人『記録史料学と現代』(吉川弘文館)
日本歴史学会編『概説古文書学』近世編(吉川弘文館)
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）
アーカイブズ学用語研究会編『アーカイブズ用語辞典』（柏書房）

【成績評価の方法と基準】
平常点50％／研究発表50％

【学生の意見等からの気づき】
参加者の専門分野が多様になること、逆に特定の時代・地域に限定される場合も想定されるため、その点も踏まえた授業構成等とする予定です。

【その他の重要事項】
本授業担当者は、歴史学を専門にしつつ、国立公文書館の認証アーキビストとしてアーカイブズ機関での実務経験を有しており、アーカイブズ機関における資料の評価選別、整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして、アーカイブズ機関の観点からの情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近世史、アーカイブズ学
〈研究テーマ〉幕藩関係論、幕府制度論等
〈研究業績〉『譜代大名の創出と幕藩体制』（吉川弘文館、2015年）、「江戸幕府の行政運用における申合の機能」(幕藩研究会編『論集 近世国家と幕府・藩』、岩田書院、 2019年)「農林水産省の文書管理と移管文書の特徴」(『北の丸』44号、2012年)、
アーカイブズ学用語研究会編『アーカイブズ用語辞典』(柏書房、2024年、項目執筆)等

【Outline (in English)】
This course deals with the basic concepts and principles of premodern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.
The goals of this course are to understand the premodern organizational structure of shogunate and the imperial court, villages and towns.In addition, we will explore the characteristics of record management systems for pre-modern organizations.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process report (50%) and in-class contribution(50%).

CUM500B7（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

記録史料学演習Ⅰ

小宮山　敏和

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸時代の記録史料(古文書・古記録)調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】
記録史料学研究Ⅰの内容を踏まえ、より深く江戸時代の文書の保存・調査(整理)・管理について実践的に習得することを到達目標とする。実際の記録史料群をいかに構造的に理解し、有効な検索システムを構築するか。そのためには個々の史料を理解し、それを史料群全体に位置づけるという作業が必要となる。このとき史料群を生み出した人ないし組織への理解が必要不可欠となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
実際の史料群の整理作業、参加者による史料内容および史料整理・目録編成等に関する論文等の報告、報告をもとにしたディスカッション等を行う。参加者の人数や属性(専門分野や調査経験、くずし字読解能力等)を考慮し、授業内容は調整等することがある(例えば未経験者が含まれれば活字史料の活用や報告の比重を増やす、近世史専門の参加者のみであれば、未整理の古文書の整理を行うなど)。課題等に対するフィードバックは授業の中でおこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	目的　計画　報告者の調整　etc
第2回	記録史料の調査（1）	史料調査論 史料1
第3回	記録史料の調査（2）	史料2
第4回	記録史料の調査（3）	史料3
第5回	記録史料の調査（4）	史料4
第6回	史料群構造の理解（1）	目録論等 史料群1
第7回	史料群構造の理解（2）	史料群2
第8回	史料群構造の理解（3）	史料群3
第9回	記録史料の取扱い（1）	様式論、料紙その他 古文書1
第10回	記録史料の取扱い（2）	古文書2
第11回	記録史料の取扱い（3）	古文書3
第12回	記録史料の取扱い（4）	古文書4
第13回	利用提供	利用閲覧、展示論
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。報告担当者は報告準備を行う。報告担当者以外も報告対象となる論文を精読して不明な点などをまとめておく。
安藤正人『記録史料学と現代――アーカイブズの科学をめざして―』(吉川弘文館,1998年)は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】
翻刻された近世文書または文学部史学科所蔵の古文書原本等。

【参考書】
安藤正人『記録史料学と現代』(吉川弘文館)
日本歴史学会編『概説古文書学』近世編(吉川弘文館)
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）
児玉幸多編『くずし字解読辞典』(東京堂出版)
児玉幸多編『くずし字用例辞典』(東京堂出版)
アーカイブズ学用語研究会編『アーカイブズ用語辞典』（柏書房）

【成績評価の方法と基準】
平常点50％／発表50％

【学生の意見等からの気づき】
参加者の専門分野が多様になること、逆に特定の時代・地域に限定される場合も想定されるため、その点も踏まえた授業構成等とする予定です。

【その他の重要事項】
本授業担当者は、歴史学を専門としつつ、国立公文書館の認証アーキビストとしてアーカイブズ機関での実務経験を有しており、アーカイブズ機関における資料の評価選別、整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして、アーカイブズ機関の観点からの情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近世史、アーカイブズ学
〈研究テーマ〉幕藩関係論、幕府制度論等
〈研究業績〉『譜代大名の創出と幕藩体制』（吉川弘文館、2015 年）、「江戸幕府の行政運用における申合の機能」(幕藩研究会編『論集 近世国家と幕府・藩』、岩田書院、 2019 年)「農林水産省の文書管理と移管文書の特徴」(『北の丸』44 号、2012 年) 、アーカイブズ学用語研究会編『アーカイブズ用語辞典』（2024年、柏書房、項目執筆）等

【Outline (in English)】
This course deals with the basic concepts and principles of investigation such as early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.
The goals of this course are to understand more deeply about the preservation, investigation, and management of documents from the Edo period.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Final grade will be calculated according to the following process report (50%) and in-class contribution(50%).

CUM500B7（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

記録史料学研究 II

淺井　良亮

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近現代の記録史料（公文書・私文書）を構造的に理解するための理論と方法を学ぶ。

【到達目標】
近現代の記録史料に関する論文講読を通じて、史料情報を体系的に把握し、記録史料を構造的に理解するための基本的な知識の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は、前半を講義形式、後半を演習形式で実施する。演習では担当受講生による発表と質疑応答・ディスカッションを行う。
初回授業はハイフレックス方式で実施する。以後の授業形態については、初回授業において受講生と相談し、必要に応じて適宜オンライン方式等への切替を検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本授業の概要
第2回	講義(1)	近現代公文書の構造と特質(1)
第3回	講義(2)	近現代公文書の構造と特質(2)
第4回	講義(3)	近現代私文書の構造と特質(1)
第5回	講義(4)	近現代私文書の構造と特質(2)
第6回	論文講読(1)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(1)
第7回	論文講読(2)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(2)
第8回	論文講読(3)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(3)
第9回	論文講読(4)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(4)
第10回	論文講読(5)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(5)
第11回	論文講読(6)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(6)
第12回	論文講読(7)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(7)
第13回	論文講読(8)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(8)
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・準備（2時間を標準）：関連文献を適宜紹介するので、事前にそれらを読んで授業に臨むこと。
・復習（2時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理・確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】
論文講読のテキストは、授業内で適宜指示する。

【参考書】
・中野目徹『近代史料学の射程』弘文堂、2000年
・熊本史雄『近代日本の外交史料を読む』ミネルヴァ書房、2020年
・中野目徹ほか『テクスト構築の史料学』吉川弘文館、2025年

【成績評価の方法と基準】
平常点50％・発表50％

【学生の意見等からの気づき】
アナウンスや事後質問などを行うにあたって、学習支援システムの活用を進める。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン受講に対応できる情報機器を各自準備すること。

【その他の重要事項】
本授業は、人文科学研究科史学専攻が開設する、アーキビスト養成プログラムの選択必修科目に指定されている。
授業担当者は、学芸員・認証アーキビスト・登録アーキビストとして、アーカイブズ機関等での実務経験を有しており、実践例を取り交ぜた授業内容とする。

【担当教員の専門分野等】
◇専門領域
・日本近世近代史
・歴史資料論
◇関連業績
・「内務省文書の構造的理解のための基礎的研究」（共著、『北の丸』58号、2026年）
・「石阪清右衛門家文書の来歴と構造」（『自由民権』35号、2022年）
・「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）

【Outline (in English)】
This course aims to develop a systematic understanding of archival information through reading of scholarly articles on modern archival records.
Classes are divided into two parts: the first half is conducted in a lecture format, and the second half in a seminar format. In the seminar sessions, a designated student will present on the assigned article, followed by questions and discussion.
Assessment is based on class participation (50%) and presentations (50%).

CUM500B7（文化財科学・博物館学 / Cultural assets study and museology 500）

記録史料学演習 II

淺井　良亮

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近現代の記録史料（公文書・私文書）を構造的に理解するための実践的な手法を学ぶ。

【到達目標】
近現代の記録史料の分析を通じて、その作成意図や伝来経緯を把握するとともに、記録史料を構造的に理解するための実践的な技能の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は、前半を講義形式、後半を演習形式で実施する。演習では担当受講生による発表と質疑応答・ディスカッションを行う。
初回授業はハイフレックス方式で実施する。以後の授業形態については、初回授業において受講生と相談し、必要に応じて適宜オンライン方式等への切替を検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本授業の概要
第2回	講義(1)	記録史料の作成・伝来・構造(1)
第3回	講義(2)	記録史料の作成・伝来・構造(2)
第4回	講義(3)	デジタルアーカイブと史料情報の操作(1)
第5回	講義(4)	デジタルアーカイブと史料情報の操作(2)
第6回	史料分析(1)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(1)
第7回	史料分析(2)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(2)
第8回	史料分析(3)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(3)
第9回	史料分析(4)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(4)
第10回	史料分析(5)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(5)
第11回	史料分析(6)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(6)
第12回	史料分析(7)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(7)
第13回	史料分析(8)	担当受講生による発表・質疑応答・ディスカッション(8)
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備（２時間を標準）：関連文献を適宜紹介するので、事前にそれらを読解・理解して授業に臨むこと。
復習（２時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理しておくこと。

【テキスト（教科書）】
特定のテキストは使用しない。

【参考書】
・中野目徹『近代史料学の射程』弘文堂、2000年
・熊本史雄『近代日本の外交史料を読む』ミネルヴァ書房、2020年
・中野目徹ほか『テクスト構築の史料学』吉川弘文館、2025年

【成績評価の方法と基準】
平常点50％・発表50％

【学生の意見等からの気づき】
アナウンスや事後質問などを行うにあたって、学習支援システムの活用を進める。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン受講に対応できる情報機器を各自準備すること。

【その他の重要事項】
記録史料学研究Ⅱで学んだ知識を基礎として授業を進めるため、同科目と合わせて受講することを推奨する。
本授業は、人文科学研究科史学専攻が開設する、アーキビスト養成プログラムの選択必修科目に指定されている。
授業担当者は、学芸員・認証アーキビスト・登録アーキビストとして、アーカイブズ機関等での実務経験を有しており、実践例を取り交ぜた授業内容とする。

【担当教員の専門分野等】
◇専門領域
・日本近世近代史
・歴史資料論
◇関連業績
・「内務省文書の構造的理解のための基礎的研究」（共著、『北の丸』58号、2026年）
・「石阪清右衛門家文書の来歴と構造」（『自由民権』35号、2022年）
・「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）

【Outline (in English)】
This course aims to develop a systematic understanding of archival information through the analysis of modern archival records.
Classes are divided into two parts: the first half is conducted in a lecture format, and the second half in a seminar format. In the seminar sessions, a designated student will present on the assigned archival records, followed by questions and discussion.
Assessment is based on class participation (50%) and presentations (50%).

HUG500B7（人文地理学 / Human geography 500）

日本の環境論 I

甲斐　智大

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会経済地理学のテキストを輪読しながら、社会経済地理学ならではのものの見方や考え方を身につけることを目指します。そのうえで、地方創生に関わるさまざまな施策や既存研究を、複数の視点から理解できるようになることを目的とします。

【到達目標】
社会経済地理学の基本的な概念を理解することができる。
地方創生に関わるさまざまな施策や既存研究について批判的に評価できる。
学術的な概念を、現実の社会や地域の事例と結びつけて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。前半はテキストの輪読を行い、後半は関連する研究をもとに、地方創生施策に関するデスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	社会経済地理学に関する基本的な概念を紹介する。
第2回	テキスト第１章	戦後日本の地域構造・都市構造と再生産についての報告とディスカッション
第3回	テキスト第２章	ポスト拡大・成長社会における労働市場の地理的多様性についての報告とディスカッション
第4回	テキスト第３章	若者のライフコースからみた大都市圏と地方圏をめぐる地域格差についての報告とディスカッション
第5回	テキスト第４章	「地方創生」の目的論についての報告とディスカッション
第6回	テキスト第５章	政治経済学的人口地理学の可能性についての報告とディスカッション
第7回	テキスト第６章	融けない氷河：「就職氷河期世代」についての報告とディスカッション
第8回	テキスト第７章	再生産の困難性，再生産と主体性についての報告とディスカッション
第9回	テキスト終章	資本主義の危機としての少子化についての報告とディスカッション
第10回	文献の探し方	地理学に関する論文の種類について解説する
第11回	関連する論文の報告	地方創生施策に関する論文についての報告とディスカッション
第12回	関連する論文の報告	地方創生施策に関する論文についての報告とディスカッション
第13回	関連する論文の報告	地方創生施策に関する論文についての報告とディスカッション
第14回	最終報告	本講義での活用した概念と受講生の研究の結びつきについての報告とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業前、テキストの該当箇所を読んでいることを前提とします。
初出の概念などについては、事前に関連研究などに基づいて自分なりに理解していることを求めます。

【テキスト（教科書）】
「ポスト拡大・成長の 経済地理学へー地方創生・少子化・地域構造」、中澤高志、旬報社、2024年、2640円

【参考書】
各授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
発表：50％、討論：50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞社会経済地理学
＜研究テーマ＞地域労働市場と地域政策に関する地理学的研究
＜主要研究業績＞
・特定地域づくり事業協同組合による労働力確保のメカニズム 地理学評論 98(6) 339-362 2025年
・東京都における保育所の経営主体からみた保育労働市場の特性-新卒保育士の採用を中心に-
地理学評論 93(2) 2020年
・「ヤンキー」であること／「ヤンキー」を制御すること――福岡県筑後地区における不良文化と地方都市 2024年日本地理学会秋季学術大会 「都市地理学研究グループ」報告（甲斐智大 林凌）

【Outline (in English)】
Through reading and discussion of socio-economic geography texts, this course helps students develop ways of thinking specific to socio-economic geography.　It also aims to enable students to examine local revitalization policies and related research from a variety of perspectives.The standard preparation and review time for this course is 2 hours each.
Students are expected to have read the relevant sections of the textbook before each class.For concepts appearing for the first time, students are required to develop their own understanding in advance based on related research and literature.Grading will be based on the following criteria: presentation: 50%, discussion: 50%.

HUG500B7（人文地理学 / Human geography 500）

日本の環境論 II

甲斐　智大

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会経済地理学のテキストを輪読しながら、社会経済地理学ならではのものの見方や考え方を身につけることを目指します。そのうえで、国土政策・地域政策に関する既存研究を、複数の視点から理解できるようになることを目的とします。

【到達目標】
社会経済地理学の基本的な概念を理解することができる。
国土政策・地域政策に関する既存研究について批判的に検討できる。
学術的な概念を、現実の社会や地域の事例と結びつけて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。
前半はテキストの輪読を行い、後半は関連する研究をもとに、国土政策・地域政策に関するデスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	社会経済地理学に関する基本的な概念を紹介する。
第2回	テキスト第１章	新産業都市・大分の60年間 ― 経済・社会・土地利用についての報告とディスカッション
第3回	テキスト第２章	郊外団地の広がりと高齢化についての報告とディスカッション
第4回	テキスト第３章	商業集積の変動と駅周辺再開発のゆくえについての報告とディスカッション
第5回	テキスト第４章	郊外農村における安定兼業の広がりと変容についての報告とディスカッション
第6回	テキスト第５章	女性の働き方と保育の変動　についての報告とディスカッション
第7回	テキスト第６章	福祉雇用の役割とその拡大についての報告とディスカッション
第8回	テキスト第７章	中等教育改革と地理的影響についての報告とディスカッション
第9回	テキスト第８章	生活インフラとしての水道事業の展開と更新についての報告とディスカッション
第10回	テキスト第９章	スタジアム開発とプロスポーツクラブ経営についての報告とディスカッション
第11回	テキスト第１０章	大学の地域的役割とその変質についての報告とディスカッション
第12回	関連する論文の報告	国土政策・地域政策に関する文献についての報告とディスカッション
第13回	関連する論文の報告	国土政策・地域政策に関する文献についての報告についての報告とディスカッション
第14回	最終報告	本講義での活用した概念と受講生の研究の結びつきについての報告とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業前、テキストの該当箇所を読んでいることを前提とします。
初出の概念などについては、事前に関連研究などに基づいて自分なりに理解していることを求めます。

【テキスト（教科書）】
地方都市を読む――「新産業都市」大分の60年　2026年8月刊行予定

【参考書】
各授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
発表：50％、討論：50％

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞社会経済地理学
＜研究テーマ＞地域労働市場と地域政策に関する地理学的研究
＜主要研究業績＞
・特定地域づくり事業協同組合による労働力確保のメカニズム 地理学評論 98(6) 339-362 2025年
・東京都における保育所の経営主体からみた保育労働市場の特性-新卒保育士の採用を中心に-
地理学評論 93(2) 2020年
・「ヤンキー」であること／「ヤンキー」を制御すること――福岡県筑後地区における不良文化と地方都市 2024年日本地理学会秋季学術大会 「都市地理学研究グループ」報告（甲斐智大 林凌）

【Outline (in English)】
Through reading and discussion of socio-economic geography texts, this course helps students develop socio-economic geographical perspectives. It also aims to enable students to examine existing studies on regional and national spatial policies from a variety of perspectives.
The standard preparation and review time for this course is 2 hours each. Students are expected to have read the relevant sections of the textbook before each class. For concepts appearing for the first time, students are required to develop their own understanding in advance based on related research and literature. Grading will be based on the following criteria: presentation: 50%, discussion: 50%.

HUG500B7（人文地理学 / Human geography 500）

日本の都市と産業Ⅰ

伊藤　達也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　経済地理学の基本的な方法論、研究分野の書かれたテキストを読み、発表することによって、経済地理学的な方法についての深い理解を目指します。具体的には経済地理学の目標、理論、方法論、研究アプローチを取得し、自らの研究遂行時にそれらを使うことができるようにします。

【到達目標】
　経済地理学に関する知識の蓄積、思考力、解決能力のアップを目指します。具体的にはテキストの内容を適切に理解すること、テキストの内容を適切にまとめること、テキストの内容を適切に発表すること、その上でテキストを通じてより広く経済地理学の専門内容を理解すること、そして、自らの研究テーマに関わらせて、それをより深めることをテーマとします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。さらに受講生の関心領域、研究テーマと関係した論文や著書の紹介等を通じて、授業内容の深化に努めます。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	授業方針の決定
第2回	テキスト「序章」	「序章　環境・空間と経済社会」の報告と討論
第3回	テキスト「第１章」	「第１章　経済立地の理論」の報告と討論
第4回	テキスト「第２章」	「第２章　地域経済の発展のメカニズム」の報告と討論
第5回	テキスト「第３章」	「第３章　サービス経済化と広がる地域間格差」の報告と討論
第6回	テキスト「第４章」	「第４章　人々のキャリアと経済空間」の報告と討論
第7回	テキスト「第５章」	「第５章　経済のグローバル化と産業立地・地域経済」の報告と討論
第8回	テキスト「第６章」	「第６章　サプライチェーンと南北問題」の報告と討論
第9回	テキスト「第７章」	「第７章　経済を左右する地域の制度と文化」の報告と討論
第10回	テキスト「第８章」	「第８章　都市の発展が生むインナーシティ問題」の報告と討論
第11回	テキスト「第９章」	「第９章　グローバル化時代の都市と都市ネットワーク」の報告と討論
第12回	テキスト「第10章」	「第10章　地域のなかでのものづくり」の報告と討論
第13回	テキスト「第11章」	「第11章　工業で変わる新興国」の報告と討論
第14回	まとめ	まとめ　授業において得たもの、得られなかったものの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
　授業前、テキストの該当箇所を読んでくることはもちろん、該当箇所のテーマに沿った論文や本を読み、理解をより深める努力をします。
　授業後、関連文献を読むことによって、自らの知識を高めます。

【テキスト（教科書）】
　伊藤・小田・加藤編著（2020）『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房

【参考書】
　山崎　朗ほか著（2022）『地域政策第2版』中央経済社

【成績評価の方法と基準】
　発表：50％、討論：50％
　十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】
　丁寧な議論に努めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　経済地理学、水資源研究
＜研究テーマ＞　水資源問題、河童による地域振興
＜主要研究業績＞
1．伊藤達也「ダム建設が止まらない－石木ダム計画のウソと詐欺－」法政大学文学部紀要　92　2026
2．伊藤達也「遠野市観光におけるカッパの果たす役割（1）（2）」法政大学文学部紀要　90、91　2025
3．蔵治光一郎編『長良川のアユと河口堰　気候危機時代の川と人間』農山漁村文化協会　2024
4．伊藤達也・梶原健嗣『長良川河口堰と八ッ場ダムを歩く』成文堂　2023
5．伊藤達也『水資源問題の地理学』原書房　2023

【Outline (in English)】
（Course outline）　I aim at deep understanding about economic geography by reading and releasing the text on which basic methodology and research field of economic geography are written.
（Learning Objectives）A target, theory, methodology and research approach of economic geography are acquired and makes sure that it'll be possible to use those at the time of the study execution.
（Learning activities outside of classroom）Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each.In addition to reading the relevant parts of the text before class, we will make efforts to deepen our understanding by reading papers and books according to the theme of the relevant part.After class, students improve their knowledge by reading related literature.
（Grading Criteria /Policy）Presentation: 50%, Debate: 50%
　Sufficient preparation is a major prerequisite. The question and the clarification of the issues are highly evaluated, and it is desirable to carefully separate simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

HUG500B7（人文地理学 / Human geography 500）

日本の都市と産業 II

伊藤　達也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　経済地理学の水資源問題について書かれたテキストを読み、発表することによって、経済地理学の資源論分野についての深い理解を目指します。

【到達目標】
　水資源論に関する知識の蓄積、思考力のアップを目指します。具体的にはテキストの内容を適切に理解すること、テキストの内容を適切にまとめること、テキストの内容を適切に発表すること、その上でテキストを通じてより広く水資源論の専門内容を理解し、より深めることをテーマとします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。さらにテキストと関係した論文や著書の紹介等を通じて、授業内容の深化に努めます。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	授業方針の決定
第2回	テキスト「第１章」	「第1章　環境問題の捉え方」の報告と討論
第3回	テキスト「第２章」	「第２章　環境の中の水資源」の報告と討論
第4回	テキスト「第３章」	「第３章　水資源利用の変遷」の報告と討論
第5回	テキスト「第４章」	「第４章　水資源開発の論理と環境問題の発生」の報告と討論
第6回	テキスト「第５章」	「第５章　ダム・河口堰をめぐる全国の動き」の報告と討論
第7回	テキスト「第６章」	「第６章　公共事業をめぐる状況と住民運動」の報告と討論
第8回	テキスト「第７章」	「第７章　利根川の利水問題」の報告と討論
第9回	テキスト「第８章」	「第８章　長良川河口堰の開門を目指す動き」の報告と討論
第10回	テキスト「第12、13章」	「第12章　ダムと山村、第13章　山村地域への還元策」の報告と討論
第11回	テキスト「第14、15章」	「第14章　脱ダム下における五木村の地域再生、第15章　脱ダムにかけた五木村村民の意識」の報告と討論
第12回	テキスト「第16章」	「第16章　ダムと環境保全について考える」の報告と討論
第13回	テキスト「終章」	「終章　水資源政策を展望する」の報告と討論
第14回	まとめ	まとめ　授業において得たもの、得られなかったものの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
　授業前、テキストの該当箇所を読んでくることはもちろん、該当箇所のテーマに沿った論文や本を読み、理解をより深める努力をします。
　授業後、関連文献を読むことによって、自らの知識を高めます。

【テキスト（教科書）】
　伊藤達也『水資源問題の地理学』原書房　2023年

【参考書】
伊藤達也・梶原健嗣『長良川河口堰と八ッ場ダムを歩く』成文堂　2023年
蔵治光一郎編『長良川のアユと河口堰』農文協　2024年

【成績評価の方法と基準】
　発表：50％、討論：50％
　十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】
　丁寧な議論に努めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　経済地理学、水資源研究
＜研究テーマ＞　水資源問題、河童による地域振興
＜主要研究業績＞
1．伊藤達也「ダム建設が止まらない－石木ダム計画のウソと詐欺－」法政大学文学部紀要　92　2026
2．伊藤達也「遠野市観光におけるカッパの果たす役割（1）（2）」法政大学文学部紀要　90、91　2025
3．蔵治光一郎編『長良川のアユと河口堰　気候危機時代の川と人間』農山漁村文化協会　2024
4．伊藤達也・梶原健嗣『長良川河口堰と八ッ場ダムを歩く』成文堂　2023
5．伊藤達也『水資源問題の地理学』原書房　2023

【Outline (in English)】
（Course outline）　I aim at deep understanding about water resource problems in Japan by reading and releasing the text.
（Learning Objectives）A target, theory, methodology and research approach of water resource problems in Japan are acquired.
（Learning activities outside of classroom）Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each.In addition to reading the relevant parts of the text before class, we will make efforts to deepen our understanding by reading papers and books according to the theme of the relevant part.After class, students improve their knowledge by reading related literature.
（Grading Criteria /Policy）Presentation: 50%, Debate: 50%
　Sufficient preparation is a major prerequisite. The question and the clarification of the issues are highly evaluated, and it is desirable to carefully separate simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

HUG500B7（人文地理学 / Human geography 500）

日本の農業と農村 I

佐々木　達

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本農業の構造問題を，多面的に学習します。農産物市場，労働市場，農地市場の3つの枠組みから農業地域を分析するフレームワークを学習します。

【到達目標】
日本農業をめぐる現状は，農産物純輸入額世界第1位，労働力不足と高齢化，農地面積の絶対的減少と課題が山積しています。さらに，これらの現象が一律一様に進んでいるのではなく，複雑な地域性を伴っています。この授業では，最新のテキストを取り上げて，日本農業が抱えている構造的問題を把握するとともに，各自の研究課題を設定できるように学習していきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
テキストを読み，それを踏まえて受講生による報告と討議を中心にして授業を進めていきます。また，授業開始時には，「週刊経済報告」と題して，一週間の新聞記事から議論したい記事をピックアップして報告します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介，文献紹介，担当者の決定
第2回	日本農業の構造問題①	食料自給率について
第3回	日本農業の構造問題②	主産地形成論について
第4回	日本農業の構造問題③	農産物市場論について
第5回	日本農業の構造問題④	フードシステム論について
第6回	日本農業の構造問題⑤	アグリビジネスについて
第7回	各自の研究テーマの報告	自分が取り上げたい農業・農村問題のテーマ報告
第8回	日本農業の構造問題⑥	地域労働市場論について
第9回	日本農業の構造問題⑦	兼業農家について
第10回	日本農業の構造問題⑧	労働力の過剰と不足
第11回	日本農業の構造問題⑨	地代論について
第12回	日本農業の構造問題⑩	農地の所有と利用について
第13回	各自の研究テーマの報告	修士論文の構想発表
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。読むべき文献を事前に配布もしくは指示します。それを各自が読むことを前提にして発表、討論していきます。授業の冒頭10分間を利用した「週刊経済報告」のために，日本経済新聞を毎日読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】
取り上げるテキストを事前に指示します。

【参考書】
伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編著（2020）『経済地理学への招待』，ミネルヴァ書房

【成績評価の方法と基準】
発表50％，討論50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
特にありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】
特にありません.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
経済地理学，農業地理学
＜研究テーマ＞
日本経済と農業問題の地理学
＜主要研究業績＞
佐々木達ほか（2020）「生産調整以降における稲作農業の地域性」
佐々木達ほか（2021）「東北地方における農家の世代交代と労働力利用の再編成」

【Outline (in English)】
【Course outline】 In this lecture, we will study the structural problems of Japanese agriculture from multiple perspectives.
【Learning Objectives】 Understand the structural problems of Japanese agriculture, and learn so that you can set your own research themes.
【Learning activities outside of classroom】
Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy)】: Your overall grade in the class will be decided based on the following Presentation and Discussion: 50%, in class contribution: 50%

HUG500B7（人文地理学 / Human geography 500）

日本の農業と農村 II

佐々木　達

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　日本経済が変化する中で，農業・農村はどのような変貌を遂げてきたのかを振り返りながら，現代的課題について取り上げることで，批判的思考を獲得することを狙いとします。

【到達目標】
①日本農業・農村が日本経済の展開において果たし役割を捉えることができる
②農業・農村の現代的課題について取り上げることができる
③世界経済の中で日本農業が進む方向性を見通すことができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
テキストを読み、それを踏まえて受講生による報告と討議を中心にして授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	テキスト紹介，自己紹介，報告者の決定
第2回	戦前期の日本経済	米と繭の経済構造
第3回	戦後復興期の日本経済	農地改革
第4回	高度経済成長期①	農業基本法農政
第5回	高度経済成長期②	農業構造の変貌
第6回	高度経済成長期③	減反政策とその影響
第7回	高度経済成長期④	農村社会・生活の変貌
第8回	安定成長期	兼業農家と出稼ぎ
第9回	低成長期①	コメ流通の多様化
第10回	低成長期②	食料消費構造の多様化
第11回	低成長期③	農家の世代交代と労働力利用
第12回	国際化と日本経済	地方消滅論
第13回	国際化と日本経済	食料供給体制の見直し
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業の冒頭10分間を利用した「週刊経済報告」のために，日本経済新聞を毎日読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】
テキストは決まり次第，事前に指示します。

【参考書】
授業中に適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
発表50％，討論50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
特にありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムを利用する予定です。

【その他の重要事項】
授業は対面での実施を予定していますが，状況によってはオンラインに変更する場合があります。その際には，事前に連絡します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
経済地理学，農業地理学
＜研究テーマ＞
東北農業論，日本経済の地域構造
＜主要研究業績＞
佐々木達ほか（2020）「生産調整以降における稲作農業の地域性」
佐々木達ほか（2021）「東北地方における農家の世代交代と労働力利用の再編成」

【Outline (in English)】
【Course outline 】In this lecture, we will learn about the impact of structural changes in the Japanese economy on agriculture and rural areas.
【Learning Objectives】 The aim is to acquire critical thinking while analyzing how agriculture and rural areas have undergone changes as the Japanese economy changes.
【Learning activities outside of classroom】　Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy)】Your overall grade in the class will be decided based on the following Presentation and discussion: 50%、in class contribution: 50%

HUG500B7（人文地理学 / Human geography 500）

地図の文化誌 I

米家　志乃布

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸東京の地図や名所絵などの画像資料を通して、江戸東京の歴史・文化遺産や地域を考える

【到達目標】
春学期のＩの授業では、江戸東京を歴史地理学的に考えるための基礎的なことを学ぶことを目標とします。具体的には、以下の点です。
・江戸東京で作製された様々な地図を閲覧し、人々が江戸東京の空間をどのように認識していたのか、理解することができます。
・江戸東京の名所を描いた様々な浮世絵、絵画、地誌の挿絵などを通して、人々が名所をどのように考えていたのかを学ぶことができます。
・江戸東京の名所を地図上にマッピングし、その地域的な分布状況を把握します。それにより、実際に地図上で作業し、簡単な分布図を作成することを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
大学の方針により、本年は対面授業を基本としますが、必要に応じてオンライン授業も取り入れます。授業の内容は受講学生と相談しながら進めます。Googleドライブ上でデータを共有し、そこで発表や作業をします。紙の配布・紙での作業は極力控えます。Googleドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業内容の説明、Googleデータの管理と注意事項、研究発表の方法、履修者・出席者の確認。
2	江戸の地図（１）	江戸時代に出版された様々な地図を学びます
3	江戸の地図（２）	国絵図、遠近道印、伊能忠敬の地図を学びます
4	東京の地図（１）	明治時代以降に出版された様々な地図を学びます
5	東京の地図（２）	陸地測量部、水路部などが作製した測量図を学びます
6	江戸東京の地図データの収集①	地図化するために、どのようなデータがあるのか、東京都全体および地域別に検討します
7	江戸東京の地図データの収集②	地図を大型のスキャナーでスキャンし、作業用の地図を収集します
8	江戸の名所絵（１）	江戸時代に葛飾北斎、歌川広重などによって描かれた名所絵を学びます
9	江戸の名所絵（２）	江戸名所図会などの名所本の挿絵の特徴を学びます
10	東京の名所絵（１）	明治時代以降に描かれた小林清親などの名所絵を学びます
11	東京の名所絵（２）	新版画、創作版画などの名所絵を学びます
12	東京の地図上に名所をマッピングする	東京の名所の分布傾向を分析します
13	江戸東京における名所の分布を考察する	それぞれの分布について、その特徴を分析・考察し、議論します
14	まとめ	作成した地図をもとに、江戸東京の空間的な多様性および歴史的な地域性についてまとめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
東京都内の博物館・資料館の常設展および様々な企画展をこまめにチェックし、機会をつくって足を運んでいただくことをおすすめします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
米家志乃布・福田珠己・関戸明子・荒又美陽『アートの地理学』古今書院、2025年
法政大学江戸東京研究センターWebサイト「所蔵資料」https://edotokyo3.ws.hosei.ac.jp/books.html
国際日本文化研究センターWebサイト・データベース「地図」https://www.nichibun.ac.jp/ja/db/#maps
国立国会図書館デジタルコレクションhttps://dl.ndl.go.jp/
東京都立図書館　TOKYOアーカイブ https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/top

【成績評価の方法と基準】
「配分（%）」：参加50％、発表・作業50%
「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】
機会あれば、博物館・美術館の企画展を見学したり、フィールドワークもします。受講生に好評です。地理学専攻以外の大学院生、留学生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】
地図上の位置を探すためにGoogleマップが必要です。スマートフォンやPC、iPadなどの機器類を持参してください。

【その他の重要事項】
春学期・秋学期合わせての受講を推奨いたします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞歴史地理学
＜研究テーマ＞日本の歴史地理学、地図史研究、江戸東京研究、アートと地理学研究
＜主要研究業績＞
『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史研究』法政大学出版局、2021年
『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023年
『アートの地理学』古今書院、2025年など

【Outline (in English)】
（Course outline）This course deals with mapping and studying historical geography of Edo-Tokyo.
（Learning Objectives） The goals of this course is to enable students to understand Edo-Tokyo historically and spatially, and to be able to think and discuss its historical and regional characteristics.
（Learning activities outside of classroom）Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policy） Grading will be decided based on lab reports(
50%), and the quality of the students experimental performance in the lab(50%).

HUG500B7（人文地理学 / Human geography 500）

地図の文化誌 II

米家　志乃布

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸東京のアトラスを作成し、江戸東京の歴史・文化遺産と地域史を考える

【到達目標】
秋学期の授業では、春学期で学んだことを踏まえ、様々な文献を読み、データを収集し、自ら地図作成（マッピング）することから、江戸東京を歴史的・空間的に把握し、その時代性・地域性を自分の頭で考え、論じることができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
大学の方針により、本年は対面授業を基本としますが、必要に応じて、オンライン授業も行います。授業内容は受講生と相談しながら進めます。Google ドライブ上で発表や作業をし、紙の配布・紙での作業は極力控えます。Google ドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の説明、データの管理と注意事項、研究発表の方法、履修者・出席者の確認。
第2回	春学期授業の振り返り	春学期授業Ｉの内容を振り返り、さらにどの点を進めていくのか、議論します。
第3回	史料のデータ整理①	補足の地図や絵画資料を収集し、分析します
第4回	史料のデータ整理②	研究発表できそうな論点を整理します
第5回	今年度の成果を考える①	研究発表の内容を決定します
第6回	今年度の成果を考える②	先行研究を探し、論文発表の担当を決めます
第7回	論文の発表①	論文の発表をしてお互いに議論します
第8回	論文の発表②	論文の発表を通して、今後の課題を議論します
第9回	地図のブラッシュアップ作業にむけて	補足データを収集します
第10回	地図上にマッピングする①	収集したデータを重ね合わせて、地図にのせます
第11回	地図上にマッピングする②	収集したデータを地図上に表現して考察します
第12回	地図上にマッピングする③	各要素の分布の意味を分析します
第13回	地図上にマッピングする④	分布を考察し、江戸東京の地域的特徴を考察します
第14回	まとめ	地図から見える江戸東京の歴史地理的特性を考察し、まとめます

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
現代の東京に残る江戸東京の歴史を把握するために、各自でフィールドにでて、実際に歩いてみることをおすすめします。

【テキスト（教科書）】
テキストは特に使用しません。Google ドライブに適宜、関連文献を紹介します。

【参考書】
法政大学江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023年
陣内秀信『東京の空間人類学』筑摩書房、1992
ジョルダン・サンド『東京ヴァナキュラー：モニュメントなき都市の歴史と記憶』新曜社、2021年
歴史地理学会編『歴史地理学事典』丸善出版、2025年

【成績評価の方法と基準】
「配分（%）」：参加50％、発表・作業50％
「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】
実際に東京を歩いてみたいという意見もいただきました。秋～冬は気候も温暖で歩きやすいので、ぜひ外にでてみたいと思います。史料からデータを収集して地図を作成する作業、それに基づいて議論し発表することは、とても面白い！ と受講生の皆さんから感想をいただきました。江戸東京の歴史と地理に詳しくなります。地理学専攻以外の大学院生、留学生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】
地図上の位置を探すためにGoogleマップが必要です。スマートフォンやPC、iPadなどの機器類を持参してください。

【その他の重要事項】
春学期・秋学期を通して作業を行います。年間の履修を推奨いたします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞歴史地理学
＜研究テーマ＞日本の歴史地理学、地図史研究、江戸東京研究、アートと地理学研究
＜主要研究業績＞
『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史研究』法政大学出版局、2021年
『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023年
『アートの地理学』古今書院、2025年など

【Outline (in English)】
（Course outline）This course deals with mapping and studying historical geography of Edo Tokyo.
（Learning Objectives） The goals of this course is to enable students to understand Edo-Tokyo historically and spatially, and to be able to think and discuss its historical and regional characteristics.
（Learning activities outside of classroom）Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policy） Grading will be decided based on lab reports(
50%), and the quality of the students experimental performance in the lab(50%).

HUG500B7（人文地理学 / Human geography 500）

感情と健康の空間論 I

村田　陽平

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代の文化地理学の概要について学ぶ。基本的には、指示するテキストの講読という形で、1980年代以降大きな変貌を遂げた「新しい」文化地理学の内容を知り、その批判的受容につとめることを目的とする。

【到達目標】
古典的なイメージをもたれがちな文化地理学が、近年どのように装いを新たにしてきているかを概観し、そこから自分なりの問題意識をもってテーマを立てられるようになることを目指したい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み、授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。課題等の提出・フィードバックは対面で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキストの各章をみて、あらましを把握する
第2回	テキスト第1章を読む①	文化地理学と建築①
第3回	テキスト第1章を読む②	文化地理学と建築②
第4回	テキスト第2章を読む①	文化地理学とジェンダー①
第5回	テキスト第2章を読む②	文化地理学とジェンダー②
第6回	テキスト第3章を読む	文化地理学とシングル
第7回	テキスト第4章を読む①	文化地理学とポリティクス①
第8回	テキスト第4章を読む①	文化地理学とポリティクス②
第9回	テキスト第5章を読む②	文化地理学とLGBTQ①
第10回	テキスト第5章を読む①	文化地理学とLGBTQ②
第11回	テキスト第6章を読む①	文化地理学とタバコ広告①
第12回	テキスト第6章を読む②	文化地理学とタバコ広告②
第13回	テキスト第7章を読む①	文化地理学と現象学①
第14回	テキスト第7章を読む②	文化地理学と現象学②

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前にテキストの担当部分を詳しく読んで、自分の疑問点や問題点を析出しておくこと。

【テキスト（教科書）】
村田陽平(2009)：『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』（京都大学学術出版会）を用いる。

【参考書】
上記テキスト各章末にあげられている参考文献を適宜利用する。

【成績評価の方法と基準】
口頭の発表時の準備状況と問題設定(50%)、授業時の議論の内容(50%)を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化地理学
＜研究テーマ＞健康の地理学、感情の地理学、空間の男性学
＜主要研究業績＞
村田陽平（2009）『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会
村田陽平（2012）『受動喫煙の環境学：健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社

【Outline (in English)】
This seminar is on Human Geography, especially on Social and Cultural Geography. The aims and goals of this seminar are to comprehend and present and discuss about contents of selected texts . In addition, for students who must write a graduation thesis can get some practical supports. Grading will be decided based on in-class contribution.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Judgment and evaluation will be made by taking into consideration the state of preparation and problem setting at the time of oral presentation (50%), and the content of discussion during class (50%).

HUG500B7（人文地理学 / Human geography 500）

感情と健康の空間論 II

村田　陽平

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代の文化地理学の概要について学ぶ。基本的には、指示するテキストの講読という形で、1980年代以降大きな変貌を遂げた「新しい」文化地理学の内容を知り、その批判的受容につとめることを目的とする。

【到達目標】
新しい文化地理学についての知識を得るとともに、それを基軸にして地球大の人間の生活空間を認識する視点を獲得することを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み,授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。課題等の提出・フィードバックは対面で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の目的の確認
第2回	序章	読解と発表,議論①
第3回	テキスト第1章	読解と発表,議論②
第4回	テキスト第2章①	読解と発表,議論③
第5回	テキスト第2章②	読解と発表,議論④
第6回	テキスト第3章	読解と発表,議論⑤
第7回	テキスト第4章①	読解と発表,議論⑥
第8回	テキスト第4章②	読解と発表,議論⑦
第9回	テキスト第5章①	読解と発表,議論⑧
第10回	テキスト第5章②	読解と発表,議論⑨
第11回	テキスト第6章	読解と発表,議論⑩
第12回	テキスト第7章①	読解と発表,議論⑪
第13回	テキスト第7章②	読解と発表,議論⑫
第14回	テキスト終章	読解と発表,議論⑬

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前の文献読み込みが必須である。それをもとに授業で不明な個所などを読み解き理解してゆく。

【テキスト（教科書）】
村田陽平（2012）『受動喫煙の環境学：健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社

【参考書】
特に指定はしない。

【成績評価の方法と基準】
口頭の発表時の準備状況と問題設定(50%)、授業時の議論の内容(50%)を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化地理学
＜研究テーマ＞健康の地理学、感情の地理学、空間の男性学
＜主要研究業績＞
村田陽平（2009）『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会
村田陽平（2012）『受動喫煙の環境学：健康とタバコ社会のゆくえ』世界思想社

【Outline (in English)】
This seminar is on Human Geography, especially on Social and Cultural Geography. The aims and goals of this seminar are to comprehend and present and discuss about contents of selected texts . In addition, for students who must write a graduation thesis can get some practical supports. Grading will be decided based on in-class contribution.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Judgment and evaluation will be made by taking into consideration the state of preparation and problem setting at the time of oral presentation (50%), and the content of discussion during class (50%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 I

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。受講生は、それぞれ自分の問題意識から研究テーマを選び、標的となる行動を決め、その制御変数を実験によって見つけながら、この方法論を習得します。修士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、修了後、就職する人も博士課程に進学する人も、それぞれ仕事に役立つ技術を習得することを目指します。

【到達目標】
この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です：標的行動を具体化し、測定方法を決めること、標的行動の制御変数に関する先行研究を調べること、制御変数の候補を複数推定し、その中から実験で検討する変数を選び、実験計画を立案すること、実験計画書を作成し、発表すること、実験装置や測定システムなどを準備し、予備実験からそれを改善すること、本実験を実施し、データを分析し、まとめて図表や文章、口頭発表などでコミュニケーションすること。
これらはすべて研究にとって必要な技能や知識ですが、修了後に就職してからも皆さんの職場で必ず役に立つものです。修論のためだけの研究法ではなく、この機会に、一生使える心理学の専門性を習得してください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式で課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。M1次には修論の準備として予備的な研究に取組みます。M2次には修論の本実験を題材に課題を進めます。ゼミの時間の大半を発表や討論の練習に使いますので積極的に参加して下さい。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	全員： 授業内容と方法、約束事を説明します。実験計画のプレゼン方法、注意すべきこと、研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。
第2回	実験計画の発表1	全員： 独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などを学びます。 M1次生： 自分の研究テーマについて討論し、予備実験の準備を進めます。 M2次生： 各自、実験計画を発表し、討論します。GOサインがでたら予備実験に移れるように、実験計画は「概要」ではなく、刺激や記録用紙なども用意してプレゼンして下さい。
第3回	実験計画の発表2	同上
第4回	実験計画の発表3	同上
第5回	予備実験の報告1	全員： データの分析、視覚化、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（本実験の計画）などを学びます。 M1次生もM2次生も、予備実験の結果を分析し、発表して、討論します。データの分析から「わかったこと」「わからなかったこと」をまとめて、伝えて、話し合う練習をします。
第6回	予備実験の報告2	同上
第7回	予備実験の報告3	同上
第8回	先行研究をまとめる1	全員： 先行研究や参考書、統計資料などを読み、現在の研究の流れや社会のニーズの中に自分の実験を位置づけます。研究のストーリーをまとめあげる方法について解説します。
第9回	先行研究をまとめる2	同上
第10回	先行研究をまとめる3	同上
第11回	本実験の報告1	全員： データの分析、視覚化、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（継続実験の計画）などをさらに学びます。 M1次生もM2次生も、本実験の結果を分析し、発表して、討論します。データの分析から「わかったこと」「わからなかったこと」をまとめて、伝えて、話し合う練習をします。
第12回	本実験の報告2	同上
第13回	本実験の報告3	同上
第14回	まとめ	全員： 全課題を振り返り、討論します。 各自、自分の研究のセールスポイントを抜き出し、これを伝える題目を考えて発表します。修論のストーリーを端的に伝える練習をします。 M1次生は予備実験、M2次生は本実験のレポートを提出します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
学期を通じて取り組める課題を用意してありますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。
○興味がある実験について標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の3つを考え、提案するための資料を作成する。
○実験計画について予測する結果を作図する。

○5つ以上の先行研究を表にまとめる。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
島宗 理 (2019). ワードマップ　応用行動分析学　新曜社

【参考書】
研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】
○授業参加（40%）および授業課題の遂行度（60％）から成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
授業はゼミ形式で課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。

【その他の重要事項】
　この科目はM1次生とM2次生の合同授業となります。重複履修を原則としていますので、M1次とM2次には同じ教員の授業を受講してください。
☆研究テーマは受講生の興味を最優先して決めます。行動分析学は研究対象を限定しません。基本的に何でも研究できると考えて下さい。ただし、大学院生活のほとんどをかけて取り組む研究ですから、自分の得意なこと、興味があること、これだけは人に負けないぞと自信があること、そういう自信をつけたいことなどを選んで下さい。こんなことでも実験できるのだろうか？ と思いとどまらず、ぜひ一度相談して下さい。修論ですから、大がかりな実験はできませんが、世界に二つとない実験を共につくりましょう。
○ オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の2限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including functional analyses of behavior, systematic observation and recording procedures, single-case designs, and visual inspection of time series data to evaluate effectiveness of an intervention. Students will select their own research topic, conduct a literature review, develop a research proposal, and run experiments.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students should be able to do the followings:
1) identify behavioral objectives, 2) design and conduct experiments, 3) analyze data, and 4) present research outcomes.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。この授業では、M1次生は予備実験の報告書と修士論文の実験計画書、M2次生は修士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、論理的な文章作成や根拠に基づいた提案、プレゼン、討論の練習をしていきます。

【到達目標】
　この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です：自分の実験を社会的、学術的な文脈に位置づけること、実験から得られたデータを分析し、わかったこと、わからなかったことを整理し、わからなかったことはどうすればわかるようになるかを提案すること。わかったことを数量化し、図表にまとめ、読み手や聞き手にわかりやすいように発表すること、論理的に一貫した、読みやすい文章を書くこと。詳細な規定にきめ細かく対応した校正を行うこと。締切から逆算して計画をたて、遂行すること。自分では解決できない問題について仲間や指導教員から助言をもらうこと、助言すること。
　これらはすべて研究にとって必要な技能や知識ですが、修了後に就職してからも皆さんの職場で必ず役に立つものです。修論のためだけの研究法ではなく、この機会に、一生使える心理学の専門性を習得してください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　授業はゼミ形式で課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。M1次には心理学研究法演習Iで行った予備実験と次年度に行う修論実験を題材に課題に取り組みます。M2次には各自の修論研究を題材に課題を進めます。ゼミの時間の大半を発表や討論の練習に使いますので積極的に参加して下さい。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	全員： 　授業内容と方法、約束事を説明します。 　M1次生は予備実験、M2次生は修論実験の内容を１分間でプレゼンする練習をします。
第2回	論文を書く： 　アウトラインを書く	全員： 　アウトラインを書いてから本文を書く方法を解説します。「方法」の章を使って練習をします。日本心理学会「執筆・投稿の手引き」の参照方法も解説します。 　M1次生は予備実験のレポートを執筆します。M2次生は修論実験を論文にしていきます。
第3回	論文を書く： 　データの視覚的な提示	全員： 　実験の中心的なデータを選び、それを視覚的に伝える図を描きます。独立変数と従属変数の関係性がわかりやすく提示できているかどうか、「手引き」やゼミの「チェックリスト」にそっているかどうかを確認します。
第4回	論文を書く： 　推敲する (1)	全員： 　方法の章の完成版を提出し、チェックリストに基づいて推敲します。方法の章で最も重要なのは読み手がその実験を追試できるように書かれているかどうかです。読み手の立場から自分の論文を読み直して推敲する練習をします。
第5回	論文を書く： 　事実を書く	全員： 　アウトラインから書く方法を結果の章を使って練習します。読み手に自分の研究のセールスポイントをわかりやすく伝えるために、順序や論理展開を工夫する練習です。
第6回	論文を書く： 　先行研究をまとめる	全員： 　先行研究をまとめて表にし、「手引き」に即した作表方法を学びます。先行研究を紹介する段落を書き、文献引用の作法を練習します。
第7回	論文を書く： 　研究を位置づけるアウトラインを書く	全員： 　第6回でまとめた先行研究の展望を活かし、また前期に作成したストーリーを振り返り、序論のアウトラインを作成します。パラグラフ・ライティング法（段落をトピック文とサポート文で構成する手法）を解説し、練習します。
第8回	論文を書く： 　推敲する (2)	全員： 　第5回で作成したアウトラインに肉付けをして結果の章をまとめます。データの分析や統計が適切に、かつ充分に行われているかどうかを確認します。
第9回	論文を書く： 　推敲する (3)	全員： 　パラグラフ・ライティング法を使って序論を完成させます。日本語の作文技術について確認し、推敲の練習をします。さらに、チェックリストを使って、「執筆・投稿の手引き」にそうように推敲します。
第10回	論文を書く： 　執筆ルールに基づいて校正する	全員： 　引用文献一覧を作成します。「執筆・投稿の手引き」にそうように推敲します。また、本文と見合わせて、引用の方法が適切かどうかを確認します。
第11回	論文を書く： 　推敲する (4)	全員： 　小実験レポート、修論のゼミ内提出の前の最終確認とチェックリストを使った推敲の練習をします。また、自分で書いた文章を自分で推敲するのは困難であることを自覚するために、他の受講生の修論を校正する練習もします。校正に使う一般的な記号を習得しましょう。

第12回　研究計画(1)　M1次生：
　次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。
M2次生：
　修論を推敲し、提出します。
第13回　研究計画(2)　M1次生：
　次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。
M2次生：
修論の要旨を作成して提出します。要旨は修論のストーリーをわかりやすく伝える文章です。セールスポイントの抽出と伝達、文字数が限られている場合の推敲方法について解説し、練習します。
第14回　まとめと研究計画(3)　全員：
　授業全体を振り返り、討論します。
M1次生：
　次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。
M2次生：
修論発表会に備え、修論研究の発表練習をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　学期を通じて取り組める課題を用意してありますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。
○春学期に実施した実験の発表資料を作成し、練習をする。
○自分の研究の社会的意義を示す資料を収集し、発表資料としてまとめる。
○日本心理学会の「執筆・投稿の手びき」およびゼミの論文推敲チェックリストを用いて、「結果」の章を推敲し、提出する。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
○島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 ―ヒューマンサービスを改善する行動科学― 新曜社

【参考書】
倉島保美（2012）論理が伝わる世界標準の「書く技術」 講談社

【成績評価の方法と基準】
○授業への参加（40％）、課題遂行（60％）から成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
毎週課題へ自主的に取り組み、研究を進めることができました。面白い、独創的な研究に取り組めているので、成果に期待しています。

【その他の重要事項】
　この科目はM1次生とM2次生の合同授業となります。重複履修を原則としていますので、M1次とM2次には同じ教員の授業を受講してください。
○オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の3限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
　The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including evaluation of single-case design data with visual inspection, and interpretation of functional relationship between dependent and independent variables.　Student will also aim to master how to write a research paper, by learning about paragraph writing, Japanese Psychological Association's publication manual, and other miscellaneous rules in academic writing.

【Learning Objectives】
At the end of the course, students should be able to do the followings:
1) prepare figures and tables, 2) cite research papers, and 3) write logical sentences, and 4) complete their own research paper.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 I

荒井　弘和

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
スポーツ心理学、または、スポーツ心理学と他の心理学分野との関連性に焦点を当てます。そして、研究課題を明確にして、研究計画を立てることをテーマとします。

【到達目標】
授業の到達目標は、以下の3点です。(1) 先行研究を概観して、研究の課題を整理することができる。(2) 研究の課題を解決するための研究計画を立てることができる。(3) 以上2点について、他の受講生と論理的な意見交換を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
(1) 研究論文を読んで発表したり、(2) 意見交換をしたりして、研究課題や研究計画を具体化できるようになることを目指します。授業中に行うことは、(1) 発表と意見交換、(2) グループワークです。
課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	自分の関心を洗い出す (1)	関心のあるテーマを出し合う。 その内容について、意見交換を行う。
第2回	自分の関心を洗い出す (2)	関心のあるテーマを出し合う。 その内容について、意見交換を行う。
第3回	先行研究を読み、内容をまとめる (1)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。 その内容について、意見交換を行う。
第4回	先行研究を読み、内容をまとめる (2)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。 その内容について、意見交換を行う。
第5回	先行研究を読み、内容をまとめる (3)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。 その内容について、意見交換を行う。
第6回	先行研究を読み、内容をまとめる (4)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。 その内容について、意見交換を行う。
第7回	先行研究を読み、内容をまとめる (5)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。 その内容について、意見交換を行う。
第8回	先行研究を読み、内容をまとめる (6)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。 その内容について、意見交換を行う。
第9回	先行研究を読み、内容をまとめる (7)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。 その内容について、意見交換を行う。
第10回	先行研究を読み、内容をまとめる (8)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。 その内容について、意見交換を行う。
第11回	研究計画を立てる (1)	研究計画を作成し、発表する。 その内容について、意見交換を行う。 研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第12回	研究計画を立てる (2)	研究計画を作成し、発表する。 その内容について、意見交換を行う。 研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第13回	研究計画を立てる (3)	研究計画を作成し、発表する。 その内容について、意見交換を行う。 研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第14回	研究計画を立てる (4)	研究計画を作成し、発表する。 その内容について、意見交換を行う。 研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回、(1) 文献検索、(2) 授業中に提示された課題、(3) 発表資料の作成に取り組みます。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】
必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
(1) 作成したレポートや発表の内容が60%、(2) 意見交換やグループワークへの参加状況が40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の意見に鑑みて、スポーツ心理学だけに特化することなく、受講生の関心に沿って授業を展開します。

【その他の重要事項】
今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
スポーツ心理学
＜研究テーマ＞
アスリート・コーチのメンタルサポート
＜主要研究業績＞
荒井弘和 (編著) (2020). アスリートのメンタルは強いのか？ ―スポーツ心理学の最先端から考える―　晶文社

Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. European Journal of Physical Education and Sport Science, 3(7), 38-50.
Arai, H., Suzuki, F., &Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. Journal of Physical Education Research, 3(4), 12-24.
Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. Journal of Physical Education and Sport, 15, 64-69.

【Outline (in English)】
（Course outline）
The theme of this class is to focus on sport psychology or the relationship between sport psychology and other psychology fields. Students will then identify a research question and develop a research plan.
（Learning Objectives）
The following are the three objectives of the class. (1) To be able to review previous research and organize research issues. (2) To be able to formulate a research plan to solve the research problem. (3) To be able to logically discuss with other students on the above two points.
（Learning activities outside of classroom）
In each class, students will work on (1) literature search, (2) assignments given in class, and (3) preparation of presentation materials.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
（Grading Criteria /Policy）
(1) 60% of the grade will be based on the content of the reports and presentations you make, and (2) 40% of the grade will be based on your participation in opinion exchange and group work. If you are absent or late, your evaluation will be lowered.

PSY600B6（心理学 / Psychology 600）

心理学研究法演習 II

荒井　弘和

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
スポーツ心理学、または、スポーツ心理学と他の心理学分野との関連性に焦点を当てます。そして、研究を実践し、その結果を研究論文として執筆することをテーマとします。

【到達目標】
授業の到達目標は、以下の3点です。(1) 研究計画に沿って研究を実践することができる。(2) その結果を研究論文として執筆することができる。(3) 以上2点について、他の受講生と論理的な意見交換を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
(1) データ分析の結果を報告したり、(2) その解釈について意見交換をしたりして、論文を執筆することができるようになることを目指します。授業中に行うことは、(1) 発表と意見交換、(2) グループワークです。
課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究計画の実施経過を報告する	実施経過を報告し、その内容について、意見交換を行う。
第2回	データを分析する (1)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第3回	データを分析する (2)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第4回	データを分析する (3)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第5回	データを分析する (4)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第6回	データを分析する (5)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第7回	研究論文を完成させる (1)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第8回	研究論文を完成させる (2)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第9回	研究論文を完成させる (3)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第10回	研究論文を完成させる (4)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第11回	研究論文を完成させる (5)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第12回	研究論文を完成させる (6)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第13回	研究論文を完成させる (7)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第14回	研究内容を口頭発表する	研究論文を元に発表資料を作成し、口頭発表を行う。 その後、質疑応答を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回、(1) 研究の実施 (データ収集やデータの分析も含む)、(2) 授業中に提示された課題、(3) 発表資料の作成に取り組みます。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】
必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
(1) 作成したレポートや発表の内容が60%、(2) 意見交換やグループワークへの参加状況が40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の意見に鑑みて、スポーツ心理学だけに特化することなく、受講生の関心に沿って授業を展開します。

【その他の重要事項】
今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
スポーツ心理学
＜研究テーマ＞
アスリート・コーチのメンタルサポート
＜主要研究業績＞
荒井弘和 (編著) (2020). アスリートのメンタルは強いのか？ ―スポーツ心理学の最先端から考える―　晶文社
Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. European Journal of Physical Education and Sport Science, 3(7), 38-50.
Arai, H., Suzuki, F., &Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. Journal of Physical Education Research, 3(4), 12-24.
Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. Journal of Physical Education and Sport, 15, 64-69.

【Outline (in English)】
（Course outline）
The theme of this class is to focus on sport psychology or the relationship between sport psychology and other psychology fields. The students will then practice their research and write a research paper on their findings.
（Learning Objectives）
The following are the three objectives of the class. (1) To be able to carry out research according to the research plan. (2) To be able to write a research paper on the results. (3) To be able to logically discuss with other students on the above two points.
（Learning activities outside of classroom）
In each class, students will work on (1) conducting research (including data collection and data analysis), (2) assignments presented in class, and (3) preparing presentation materials.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
（Grading Criteria /Policy）
(1) 60% of the grade will be based on the content of the reports and presentations you make, and (2) 40% of the grade will be based on your participation in opinion exchange and group work. If you are absent or late, your evaluation will be lowered.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

学習心理特論

藤田　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　人間の学習活動を支えている「記憶」について，主に記憶の測定法という観点から捉える。これまでの記憶研究の主要な成果を，単なる知識として獲得するだけでなく，それぞれの知見が導かれた研究の過程についても理解し，自分自身の研究計画をより洗練させるのに役立たせる。

【到達目標】
　半期の授業が終了した時点で，以下の各要素を身につけていることが，授業の具体的な到達目標となる。
１．人間の記憶を測定する方法（実験のパラダイム）について，説明ができる程度に理解する。
２．その測定法上の工夫や留意点を，記憶以外の心理学領域に一般化できる。
３．上記１，２をふまえて，自分自身の興味・関心のある領域で，実験・調査・観察等の研究計画を立てることができる。
４．研究計画を，第三者にも正確に伝えることができるような，客観的で適切な文章で記述できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　短期記憶および作動記憶の性質を検討する上での二重課題法，意味記憶の構造を明らかにするための間接プライミング，エピソード記憶の伝統的な測度である再生・再認について，理論的な背景と実験手続との関連から，実際に使用する際の注意点を説明する。さらに，無意識的であるが故に測定が困難であった潜在記憶の測度である直接プライミングをはじめとした，近年の記憶研究の動向にも触れる予定である。測定法が妥当であるかどうかについて判断を下すためには，理論との整合性が重要であることから，様々な種類の記憶のモデルについても理解を深めることになる。とりわけ長期記憶においては，符号化と検索の過程の一致度が重要であることを強調する。
　半期の前半の授業では，主に講義形式によって，上記の内容について解説を行う。後半の授業では，授業で得た知識を活用して，各自が研究計画を立て，それを発表し，教員と受講生全員で討論を行うという形式をとる。
　最終的には，学術論文執筆を念頭に置き，研究方法を適切な文章で記述したものをレポートとして作成し，提出することになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	この授業の概要と到達目標，評価方法を担当者が説明する
2	記憶の分類	短期記憶vs.長期記憶，手続記憶vs.宣言記憶，意味記憶vs.エピソード記憶について担当者が説明する
3	作動記憶の測定法	作動記憶のモデルおよび，そのモデルの根拠となっている研究の詳細を担当者が説明する
4	反応時間からわかること	反応時間とモデルによる解釈，意味記憶研究における間接プライミング効果を担当者が説明する
5	再生と再認	再生と再認の実施法，再生と再認の違いを担当者が説明する
6	再生と再認の理論	自由再生の二段階説，符号化特定性原理，再認の二過程説を担当者が説明する
7	潜在記憶の定義・測定法	潜在記憶とは何か，潜在記憶が我々の認知に及ぼす影響を担当者が説明する
8	記憶法則の一般性	記銘材料と記憶法則の関係，記憶テストと記憶法則の関係，実験手続きの違いと記憶成績の関係を担当者が説明する
9	この授業での課題	「模擬実験計画」のポイント，レポートのポイントを担当者が説明する
10	模擬実験計画：発表１	受講生が発表を行い，その内容に，これまでの授業内容が反映されているか全員で討論する
11	模擬実験計画：発表２	受講生が発表し，発表された実験計画の内容を，より適切なものにするように全員で討論する
12	模擬実験計画：発表３	受講生が発表し，その研究方法が，研究目的から見て妥当かどうかを全員で討論する
13	総括＋レポート作成	記憶分野の知識の復習と整理を行い，研究法として学んだことの復習と確認，発表の総括をする
14	レポート提出	成績評価基準の説明を担当者が行い，各自で確認し，授業内容の応用に向けてのアドバイスを担当者が行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とする。詳細は下記の通り。
第１回 以前に学んだことのある「記憶」研究について復習
第２回 それぞれの記憶が，日常生活のどのような場面で活用されているのかを考え，理解を深める
第３回 作動記憶の測定法を，自分の研究分野や自分自身の認知活動・学習活動に当てはめて考える
第４回 反応時間を指標にする際の注意点をまとめ，具体的な研究計画に活かす
第５回 自分の研究で再生あるいは再認を用いる場合の，得られる結果の違いについて考える
第６回 自分の研究に，再生と再認のいずれを用いるべきかを理論的に説明できるよう考える
第７回 潜在記憶が自分の日常生活のどのような現象に関わっているのかを考える
第８回 これまでの授業内容を総括的に復習し，疑問点を整理する
第９回 自分なりの問題設定と発表準備
第10回 自分の発表の振り返り，他者の発表に対するコメント整理，発表の準備
第11回 自分の発表の振り返り，他者の発表に対するコメント整理，発表の準備
第12回 自分の発表の振り返り，他者の発表に対するコメント整理，発表の準備
第13回 レポート作成
第14回 レポートの見直しと修正

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】
藤田哲也（1999）．潜在記憶の測定法　心理学評論, 42, 107-125.
藤田哲也（2001）．潜在記憶と行為の記憶に関する研究　風間書房
藤田哲也（2006）．「無意識」に踊らされるあなた－日常記憶としての潜在記憶研究　太田信夫（編）記憶の心理学と現代社会　有斐閣
その他，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点40％…授業へ参加し，他者の発表へコメントすることを評価対象とする。
授業内での発表30％…発表の内容，発表資料における記述のしかた，発表のしかたを評価対象とする。
レポート30％…レポートの内容，学術論文としての体裁（書式）を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度の授業改善アンケートから：2人のうち回答者が1名なので，ここに書きにくいこともありますね。「履修してよかった」「理解度」とも5をつけてくれたのでよかったです。今年度は受講生が少なく，やや授業の進め方は例年と異なりましたが，修得すべきことは身につけてくれたのだと思います。授業は終わりましたが，この授業で学んだことを，自主的に自分の研究に反映させてくださいね。

【その他の重要事項】
博士後期課程の「学習心理学特殊講義」との合同科目。授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず初回授業よりも前に相談すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
記憶
＜研究テーマ＞
様々な記憶の測定法と，その理論
＜主要研究業績＞
藤田哲也（1999）．潜在記憶の測定法　心理学評論, **42**, 107-125.
藤田哲也（2001）．潜在記憶と行為の記憶に関する研究　風間書房
藤田哲也（2006）．「無意識」に踊らされるあなた－日常記憶としての潜在記憶研究　太田信夫（編）　記憶の心理学と現代社会　有斐閣

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this class, students understand "memory" that supports human learning activities mainly from the viewpoint of measurement method of memory.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the following:
1.Students will understand how to measure human memory (experimental paradigm) to the extent that they can explain it.
2.Students can generalize their measurement method ideas and precautions to psychological fields other than memory.
3.Based on the above 1 and 2, students can make research plans such as experiments, surveys, and observations in their own areas of interest.
4.Students can describe their research plans in objective and appropriate sentences that can be accurately communicated to others.
[Learning activities outside of classroom]
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
[Grading Criteria /Policy]
The overall grade of the class is determined based on the following.
In-class contribution 40%, presentation 30%, report 30%.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

社会心理特論

越智　啓太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業概要：
テーマ　社会問題とその解決について：心理学の観点から
　心理学の専門家として、社会問題についての従来の研究とエビデンスを効果的に収集し、決められた時間内に効果的にプレゼンテーションを行う演習を行う。
具体的には、(1) 妊娠中絶、(2) 暴力コンテンツ、ポルノコンテンツの規制、(3) 少年法の厳罰化問題などについて扱う。
授業の意義：
　この講義を受講することによって以下のことを達成できるようにする。
①社会問題について心理学の専門家の立場から適切に分析できる
②社会問題について心理学の専門家の立場から適切にコメントできる
③社会問題について心理学の専門家の立場から議論できる
④社会問題について心理学の専門家の立場から自分の主張をプレゼンテーションできる

【到達目標】
（1）主張したい問題についての分析
（2）エビデンスの収集
（3）エビデンスの比較と分析
（4）自分の意見の構成
（5）自分の意見の主張の構成
（6）効果的なプレゼンテーション
（7）他人のプレゼンテーションへの批判・質問スキル
（8）他人のプレゼンテーションの評価
ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は各自があらかじめ、選択したテーマについて６０分間でプレゼンテーションを行い、それについて受講者全員でディスカッションする形式で行う。発表内容についての知識を深めるだけでなく、プレゼンテーションの方法や、質問に対する答え方、プレゼン時の動作などについても訓練を行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業についての説明
第2回	発表と討論（１）発表形式に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第3回	発表と討論（２）発表時の振る舞いに重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第4回	発表と討論（３）パワーポイントの内容に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第5回	発表と討論（４）議論の進め方に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第6回	発表と討論（５）質問に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第7回	発表と討論（６）質問対応に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第8回	発表と討論（７）反論に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第9回	発表と討論（８）反論のエビデンス提示に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第10回	発表と討論（９）反論対応に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第11回	発表と討論（１０）まとめに重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第12回	発表と討論（１１）発表の進め方に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第13回	発表と討論（１２）　総合評価（１）	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第14回	発表と討論（１３）総合評価（２）	受講生の発表と討論、それについてのコメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
自分の発表に際しては、事前調査と発表の準備（50時間程度）
他人の発表に際してはその予習（数時間程度）が必要。

【テキスト（教科書）】
使用しない

【参考書】
発表者が指定する

【成績評価の方法と基準】
評価基準 授業におけるプレゼンテーション　50％、授業における討論の質と量　50％
自分の発表時でなくても積極的に発言しないと、後者の50％の加点は得られない。たとえば、自分の発表がパーフェクトでも授業中の自発的な発言があり、かつそれが有益なものでない限り単位は得られない。すべての回に出席しても貢献度が少ないと単位は得られない。

【学生の意見等からの気づき】
例年、プレゼン能力や質問能力がついたというポジティブな評価をいただいています。

【学生が準備すべき機器他】
各自、自分が使用しているパソコンを授業時に持参すること。
授業中にインターネットなどを参照しながら授業に参加すること

【担当教員の専門分野等】
専門領域 犯罪心理学、社会心理学
研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用
主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ　犯罪捜査の心理学；越智啓太 2015 恋愛の科学　実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで学ぶ犯罪心理学　北大路書房；越智啓太　2008　犯罪捜査の心理学　化学同人；越智啓太ほか　2008　自伝的記憶の心理学　北大路書房

【Outline (in English)】
【Course outline】
Theme: Social problems and their solutions from a psychological point of view.
As a psychology expert, effectively collect previous research and evidence on social issues and make effective presentations.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
(1) Analysis of the problem you want to assert
(2) Collection of evidence
(3) Evidence comparison and analysis
(4) Composition of one's opinion
(5) Composition of assertions of one's opinion
(6) Effective presentation
(7) Critique / question skills for other people's presentations
(8) Evaluation of presentations by others
【Learning activities outside of classroom】

Each lesson requires 2 hours of preparation and 2 hours of review.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Oral presentation (50%) + Quality and quantity of comments, questions in class (50%)

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

読書心理特論

平山　祐一郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本という媒体を使って行われる心理的活動が「読書」である。その行為はどのような心理的過程を通じて行われるのか、そしてその行為の結果、人間の心理的活動がどのような影響を受けるのかについて考察する。教育現場では「読書離れ」が問題視され対応がなされている。「読書離れ」とはどのような現象なのか、そして、その対応策にはどのようなものが考えられるのかについて議論する。さらに、電子書籍が登場し、従来の「読書」という心理的活動が変貌することが予想されている。電子書籍がどのような影響を与えるのか、その長所・短所について予測する。受講者は以上の課題に対し、議論や考察、予測ができるようになることを目的とする。

【到達目標】
この授業では心理学的観点から「読書」について理解を深める。授業に積極的に参加することにより、受講者には以下の力がつく可能性が高まる①読書という活動やその作用について心理学的に説明できる。②読書離れの原因と対策について心理学的観点から言及できる。③電子書籍の影響について心理学的に予測できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
予定された発表者の発表後、全員で議論。【到達目標】の達成を目指す。【成績評価の方法と基準】を参照。オンライン授業。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的・方法・成績評価・注意事項等を説明する。
第2回	「ネット時代の読書論」第1回～第12回	発表後、全員で議論。
第3回	「ネット時代の読書論」第13回～第24回	発表後、全員で議論。
第4回	「ネット時代の読書論」全体	総合して、全員で議論。
第5回	教科書Part 1	発表後、全員で議論。
第6回	教科書Part 2	発表後、全員で議論。
第7回	教科書Part 3	発表後、全員で議論。
第8回	教科書Part 4	発表後、全員で議論。
第9回	教科書Part 5	発表後、全員で議論。
第10回	教科書Part 6	発表後、全員で議論。
第11回	教科書全体	総合して、全員で議論。
第12回	「読書離れ」について	全員の発表と議論
第13回	「電子書籍」について	全員の発表と議論
第14回	授業のまとめ	今までの議論の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備・復習時間は各2時間。準備学習は文献の読み込みを毎回指示（所要時間２時間）。復習は①授業内容の要約、②授業内の問いへ解答、を毎回提出する（所要時間２時間）。

【テキスト（教科書）】
①平山祐一郎（著）連載「ネット時代の読書論」※「指導と評価」誌（日本図書文化協会・日本教育評価研究会） 2008年4月号～2010年3月号　②猪原敬介（著）「科学的根拠が教える子どもの『すごい読書』」（日経BP）,2026年（1,800円＋税）《注意》①は平山が提供する。②は法政大学図書館に所蔵予定である。☆教科書を変更する可能性もあるので、指示があるまで購入しない。

【参考書】
必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
【到達目標】達成の観点から、以下の要素（観点）と配分（%）により評価する。[1]発表50％①質の高いプレゼンをしたか。②議論を刺激する発表をしたか。[2]議論30％　①議論に参加したか。②質問をしたか。③問いを立てられたか。④建設的に意見表明したか。⑤発見的考察ができたか。[3]提出物20％①要約。②問いへの回答。

【学生の意見等からの気づき】
議論のある授業が好評のようだ。発見がある授業にしたい。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業の準備をしておいてください。

【その他の重要事項】
シラバスは状況に応じ変更。メールにて連絡します。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉教育心理学〈研究テーマ〉読書心理、作文・表現の心理、学習指導と評価〈主要研究業績〉①平山祐一郎 2008 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察 野間教育研究所 ②平山祐一郎 2015 大学生の読書の変化-2006年調査と2012年調査の比較より- 読書科学,56,55-64.③平山祐一郎 2020 大学生の読書をどうするか IDE現代の高等教育,621,26-30.

【Outline (in English)】
［Course Outline］
The purpose of this course is to provide participants with some points of view about effects or impacts of reading books in the psychological context. Main topics are as follows: what kind of psychological process is necessary for reading books or what kind of effect happens by electronic books. In addition to these, we will consider the cause of increase in the number of non-readers.
［Learning Objectives］
At the end of the course, participants are expected
1.to explain the significanse of book reading psychologically.
2.to point out the causes of phenomenon of decreasing book readers and to take measures to it psychologically
3.to anticipate the influences of digital books psychologically.
［Learning activities outside of classroom］
After each class meeting, participants will be expected:
To read some papers related to the theme of the next class.
To make a summary of the contents of the class.
Students are expected to spend four hours on these tasks.
［Grading Criteria /Poclicy］
Grading will be decided based on research presentation（50%）、academic discussion（30%）、submission of assignments（20%）.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

教育心理特論

平山　祐一郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
①教育という活動に心理学の光を当て、深く理解すること。
②心理学の知見を教育活動に反映させ、質の向上をはかること。

【到達目標】
①国内外の教育課題を多面的に把握し、心理学的に説明できる。
②教育課題に関して、証拠に基づいて原因を分析をしたり、対応を考えたりすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
予定された発表者の発表後、全員で議論。【到達目標】の達成を目指す。【成績評価の方法と基準】を参照。オンライン授業。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的・方法・成績評価・注意事項等の説明。
第2回	今、「学級崩壊」について考える	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第3回	「心理的安全性」とは	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第4回	「動機づけ」と指導	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第5回	待つ・見守る・かかわる	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第6回	「構成的グループエンカウンター」とは	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第7回	「非認知的能力」について考える	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第8回	デジタル社会と生成AIと教育	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第9回	学校はどこまでやるか①児童期	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第10回	学校はどこまでやるか②思春期	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第11回	日本の教育の特徴を考える①海外からの評価	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第12回	日本の教育の特徴を考える②批判的検討	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第13回	再び「学級崩壊」について考える	発表後、資料映像の分析を加えて、全員で議論する。
第14回	振り返りとまとめ	扱ったトピックを振り返り、まとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
準備・復習時間は各2時間。準備学習は文献の読み込みを毎回指示（所要時間２時間）。復習は①授業内容の要約、②授業内の問いへ解答、を毎回提出する（所要時間２時間）。

【テキスト（教科書）】
教科書を用いる可能性もある。その際には受講生と相談する。

【参考書】
必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
【到達目標】達成の観点から、以下の要素（観点）と配分（%）により評価する。
[1]発表50％
①質の高いプレゼンをしたか。
②議論を刺激する発表をしたか。
[2]議論30％
①積極的に議論に参加したか。
②適切な質問をしたか。
③ユニークな問いを立てられたか。
④建設的に意見表明したか。
⑤発見的考察ができたか。
[3]提出物20％
①要約。
②問いへの回答。

【学生の意見等からの気づき】
議論のある授業が好評のようだ。発見がある授業にしたい。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業の準備をしておいてください。

【その他の重要事項】
シラバスは状況に応じて変更。メールにて連絡します。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉教育心理学
〈研究テーマ〉
①読書の心理
②作文・表現の心理
③学習指導と評価
〈主要研究業績〉
①平山祐一郎 2008 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察 野間教育研究所
②平山祐一郎 大学生の読書の変化-2006年調査と2012年調査の比較より- 読書科学,56,55-64.
③平山祐一郎 2020 大学生の読書をどうするか IDE現代の高等教育,621,26-30.

【Outline (in English)】
［Course Outline］
The goal of this course is to give participants the foundational knowledge and the practical skills of educational psychology. It is especially important to develop psychological approaches to address matters concerning education and to understand the application of psychological findings to educational activities to enhance educational outcomes.
［Learning Objectives］
At the end of the course, participants are expected
1.to explain educational issues at home and abroad psychologically.
2.to point out the causes of educational issues and to take measures to them based on evidences.
［Learning activities outside of classroom］
After each class meeting, participants will be expected:
To read some papers related to the theme of the next class.
To make a summary of the contents of the class.
Students are expected to spend four hours on these tasks.
［Grading Criteria /Poclicy］
Grading will be decided based on research presentation（50%）、academic discussion（30%）、submission of assignments（20%）.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

犯罪心理特論

越智　啓太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業の目的：
　この授業では、犯行現場から犯人の動機や行動、その属性を予測するプロファイリング技術について、講義と論文読解、実際のケース分析によって、学んでいく。本年は、とくに連続殺人事件、大量殺人事件とテロリズムについて扱う。
授業の概要：
　連続殺人のタイプと犯人の動機と行動、大量殺人と犯人の動機と行動、テロリストの動機と行動について、学び、具体的なケースについて各自検討して、発表する。
心理学以外の専攻の方の受講もその専攻が許せば可能であるが、とくに他専攻であることは考慮しないで授業を進行するので、実質的に単位取得は極めて困難であることを了解して受講されたし。

【到達目標】
（1）連続殺人、大量殺人、テロリズムについてのプロファイリング技術の最先端について理解し、説明できるようにする。
（2）上記の事件について、基本的なプロファイリング（犯人属性の推定）ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
はじめに連続殺人、大量殺人、テロリスムに関する基本的な文献や知識をレビューし、その上で、計量的な方法によるプロファイリングとFBI方式のプロファイリングについての基礎について学習する。それが終了した時点で、具体的な事件資料を基に犯人の行動や属性を推定する実習を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション、犯罪捜査への心理学の応用	オリエンテーション、プロファイリング研究の現状についての講義
2	連続殺人：連続殺人研究についてのレビュー１	論文の読解と議論
3	連続殺人：連続殺人研究についてのレビュー２	論文の読解と議論
4	大量殺人：大量殺人研究についてのレビュー１	論文の読解と議論
5	大量殺人：大量殺人研究についてのレビュー２	論文の読解と議論
6	テロリズム：テロリズム研究についてのレビュー１	論文の読解と議論
7	テロリズム：テロリズム研究についてのレビュー３	論文の読解と議論
8	犯罪捜査１	捜査手法の概要についての講義と議論
9	犯罪捜査２	鑑識、科学捜査の概要についての講義と議論
10	事例研究１	連続殺人の事例研究
11	事例研究２	大量殺人の事例研究
12	事例研究３	テロの事例研究
13	事例研究４	応用問題についての事例研究とディスカッション
14	事例研究５	応用問題についての個人での問題解決とプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎週２～５本の英語論文を読んでいく。受講者の人数によるが、基本的に毎週1本程度の論文を読解し、レジュメを作成することが必要となる。毎週、上記のテーマにしたがった論文を探して準備し、十分に精読してレジュメを作成してくること。

【テキスト（教科書）】
犯罪心理学の基盤ジャーナルを中心として論文を紹介し、それを元に授業を進める。具体的には授業時に指定する。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
（1）殺人とテロリズムのプロファイリングについての授業内でのプレゼンテーションと質疑応答（５０%）
（2）各自が選択した、殺人事件についての調査と分析レポート（５０%）

【学生の意見等からの気づき】
プロファイリングについての最新の知識を習得できるのは日本の大学ではこの授業が唯一であり、受講者の意欲と満足度は非常に高い。

【その他の重要事項】
警視庁科学捜査研究所等における実務経験があるので、その経験なども含めて指導する。司法関係に就職を希望する人（警察官、家裁調査官、法務技官など）を歓迎する。

【担当教員の専門分野等】
専門領域 犯罪心理学、社会心理学
研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用
主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ　犯罪捜査の心理学；越智啓太 2015 恋愛の科学　実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで学ぶ犯罪心理学　北大路書房；越智啓太　2008　犯罪捜査の心理学　化学同人；越智啓太ほか　2008　自伝的記憶の心理学　北大路書房

【Outline (in English)】
【Course outline】
Theme: offender profiling of mass murderers, serial murderers, and terrorist using psychological and mathematical methods.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to explain the current level of research achievements in serial, mass murderer and terrorist.
【Learning activities outside of classroom】
Each lesson requires 2 hours of preparation and 2 hours of review.
【Grading Criteria /Policy】
(1) In-class presentation and Q&A on profiling homicide and terrorism (50%)
(2) Research and analytical report on a homicide case of each student's choice (50%)

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

知覚研究論演習

竹島　康博

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究法を中心に解説を行います。フリーのソフトウェアを使い，これらの研究法を使った実験についても作成してもらいながら授業を進めます。その他，再現可能な実験を進めていく方法についても説明していきます。

【到達目標】
知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究法を，実際に実験課題を作成しながら学ぶことにより，自身の研究の幅を柔軟に広げられる思考力，応用力を身に付けることを到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究方法や，再現可能性を高める研究の進め方について，教員が解説を行います。加えて，ソフトウェアを使ってこれらの研究法を使った実験課題の作成や，解析コードの書き方の実習を行います。最終回には，受講者が興味を持った研究について，研究法を中心に自身が興味深いと感じた点や今後の課題についても含めて発表をしてもらいます。
課題については次週の授業内で確認し，そこでコメントやアドバイス等のフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	授業全体の概要説明 知覚研究の基礎知識について学ぶ
第2回	知覚研究の機器紹介	知覚研究でよく用いられる実験機器，測定機器について解説する
第3回	知覚研究の外観	他の心理学分野の研究法と比較した上での知覚研究の手法の特徴を学ぶ
第4回	知覚実験の紹介（1）	主観的等価点を測定している知覚実験の論文を取り上げて紹介する
第5回	知覚実験の紹介（2）	刺激のパラメーターを参加者ごとに事前測定して決定している知覚実験の論文を取り上げて紹介する
第6回	ポズナー課題	ポズナー課題についての解説，実験課題の作成を行う
第7回	強制二肢選択課題	強制二肢選択課題についての解説，実験課題の作成を行う
第8回	オリジナルの課題（1）	受講者自身が作成する課題を自由に決めて，実験課題の作成を行う
第9回	オリジナルの課題（2）	受講者自身が作成する課題を自由に決めて，実験課題の作成を行う
第10回	再現可能な研究の進め方(1)	再現可能な研究を進めるための解析コードの作成について実習する
第11回	再現可能な研究の進め方(2)	再現可能な研究を進めるための解析コードの作成について実習する
第12回	再現可能な研究の進め方(3)	再現可能な研究を進めるための技能をデータの視覚化の観点から実習する
第13回	再現可能な研究の進め方(4)	再現可能な研究を進めるためのマテリアルの共有や事前登録の在り方について議論する
第14回	まとめ	総括として，授業内で学んだ内容を自身の今後の研究にどのように活かせるかについて発表し，議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
各回で作成した実験課題について，自分が使うことを想定して受講者自身でアレンジしてみてください。また，14回目に行う発表に向け，授業で取り上げた実験課題を自らが活用できる可能性について検討する作業を毎回の授業時間外学習とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
村上郁也（編著）『心理学研究法1 感覚・知覚』 2011　誠信書房
十河宏行『PsychoPy/Pavloviaによるオンライン実験』 2022　朝倉書店
高橋康介『再現可能性のすゝめ Rstudioによるデータ解析とレポート作成』 2018　共立出版

【成績評価の方法と基準】
平常点50%，提出課題の評価50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
PsychoPyを使った実験課題の作成実習ではこれまで教員側で用意したものを作成してもらっていましたが，自分の研究分野やテーマに近い課題を作成する方が受講生の学びとして有益なようです。今年度も，PsychoPy実習の後半は受講生自身が選んだ課題を作成してもらうことにします。

【学生が準備すべき機器他】
実験課題の作成を行いますので，可能であれば自分のノートPCをご持参ください。

【その他の重要事項】
授業で募集する知覚心理学・認知心理学に関わる実験や調査などへの参加による学習についても評価に加味する場合があります。

【【担当教員の専門分野等】】
＜専門領域＞
知覚心理学，認知心理学
＜研究テーマ＞
異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究，視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究
＜主要研究業績＞
竹島 康博 (2024).　視聴覚刺激の提示タイミングに対する同時性知覚の柔軟性　VISION, 36(4), 150-155.
Takeshima, Y. (2024).　The influence of spatial frequency information on temporal synchrony perception on audiovisual stimuli. Perception, 53(11-12), 803-811.
Takeshima, Y. (2023). Change of rapid temporal recalibratgion magnitude for audiovisual asynchrony with modulation of temporal binding window width: A preliminaryh investigation. i-Perception, 14(4), 1-10.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course deals with perceptual and cognitive studies and the aim of this course is to help students perform their own study.
[Learning objectives]
The goals for students are to acquire flexible thinking skills and the ability to apply knowledge in order to broaden the scope of their own research, by learning research methods commonly used in the fields of perceptual psychology and cognitive psychology through actually creating experimental tasks.

[Learning activities outside of classroom]
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
[Grading Criteria /Policy]
Grading will be decided based on in-class contribution (50%) and the quality of the submitted assignment (50%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

精神生理特論

木村　健太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、生理心理学の基礎と研究論文作成過程で用いられるさまざまな生理指標について講義と実習形式で学びます。

【到達目標】
各生理指標が反映する心理状態についての知識を身につけ、生理指標を心理学で用いることの長所と短所を理解した上で、自身の研究テーマに関わる生理指標を適切に測定する能力を獲得します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
・生理心理学の基本的なアプローチである電気生理機器の仕組みと測定の方法を学びます。
・実際に機器を使用して、心理状態と生理指標の変化の関連性を体験・確認します。
・実習で対象とする課題等は、受講者の希望に配慮してテーマを決めていきます。
・講義では、生理指標の実社会への活用事例も説明します。
・授業時間内に質疑応答の時間を設け、疑問点の解消や課題へのフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	生理心理学の基礎と授業の概要についての説明
第2回	機器説明	生理心理学で用いられる生理指標と計測機器の説明
第3回	生理指標の測定法	アーチファクトなど生理指標測定時の注意点
第4回	脳波（1）	脳波の発生機序、脳波の測定法
第5回	脳波（2）	脳波の測定実習
第6回	脳波（3）	脳波の分析実習
第7回	心電図（1）	心電図の機序、心電図の測定法、分析方法
第8回	心電図（2）	心電図の測定、分析実習
第9回	心電図（3）	心電図のR-R間隔から自律神経系活動を推定
第10回	循環器活動	血圧の機序、血圧の測定法、分析方法
第11回	ウェアラブルデバイス	日常生活中の生理指標の測定、生理指標の活用事例
第12回	感情の評価（1）	生理指標を用いた感情の評価方法
第13回	感情の評価（2）	感情の評価・分析の実習
第14回	まとめ	授業の振り返り、レポートの説明

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
・授業で取り上げる生理指標に関するレポートを課します。
・各回の授業後には、配布した資料に再度眼を通すとともに、紹介した文献を参考にして各指標に関する理解を深めて下さい。

【テキスト（教科書）】
特に指定しません。

【参考書】
適宜必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
成績は、平常点50%（授業への積極的な関与等）、発表・レポート50%として総合点により評価します。

【学生の意見等からの気づき】
2026年度から開講の授業です。

【学生が準備すべき機器他】
・必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。
・脳波室で実験機器を用いた授業を行うことがあります。

【その他の重要事項】
・授業の進め方や授業計画、授業目標の説明をしますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。
・オフィスアワー：春・秋学期ともに木曜日3限（BT1109研究室）。訪問希望者は、メール（k.kimura[at]hosei.ac.jp）等で前日までに連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
生理心理学、認知神経科学、感情科学
＜研究テーマ＞
感情が認知機能や意思決定に作用する認知神経学的機序の研究、内受容感覚と脳ー身体の相互作用機序についての研究
＜主要研究業績＞
Kimura, K, Kanayama, N., &Katahira, K. (2023). Cardiac cycle affects risky decision-making.Biological psychology, 176, 108471
Kimura, K., Sawada, H., &Katayama, J. (2018). Outcome evaluations in group decision-making using authority rule: An electrophysiological study.
Neuropsychologia, 119, 271-279.
Kimura, K., Kimura, M., &Iwaki, S. (2016). Temporal prediction modulates the evaluative processing of “good” action feedback: An electrophysiological study.
Psychophysiology, 53 (10), 1552– 1559.

【Outline (in English)】
(Course outline)
In this class, we will learn about the fundamentals of psychophysiological research and various physiological indices with practical training.
(Learning Objectives)
The goals of this course are to understand the relationship between psychological state and physiological indices.
(Learning activities outside of classroom)
Before/after each class, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria / Policy)
Final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution (50 %), presentation and reports (50%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

認知学習過程演習

藤田　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
記憶を中心とした認知心理学および，主に学習過程に焦点を当てた教育心理学の知見を活かして，的確な先行研究の概観と批判的な読み方を学び，効果的にプレゼンテーションを行う。

【到達目標】
半期の授業が終了した時点で，以下の各要素を身につけていることが，授業の具体的な到達目標となる。
１．多数の先行研究を読んだ上で，その分野における研究課題を明確に指摘できる。
２．個々の先行研究を批判的に読むことで，問題点・改善点を挙げることができる。
３．上記１，２の内容を，適切でわかりやすいプレゼンテーション技法を用いて他者に伝達できる。
４．他者の発表に対して，即応的に的確な評価を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
自分自身および先行研究における研究成果を，学術論文として発表することと，口頭でプレゼンテーションすることを具体的な作業課題として設定した演習である。
質の高い研究を行うために必要な，先行研究の批判的な読み方，研究課題の設定のしかたについて教員が解説した上で，受講生自身が実際に発表し，全員で討論を行う。
具体的な授業の進め方は次の通りである。まず最初の５回の授業で，文献の探し方や発表のしかたについて教員が説明を行う。次に，受講生各自が興味を持っている研究領域の論文を複数読んだ上で，その領域のレビューを行い，発表を行う。その際には単に論文紹介するだけでなく，批判的な目を持って，自分自身の視点でレビューすることが求められる。発表後の質疑応答の時間に，論文の読み方，レビューを行う上での注意点，発表のしかたなどの技能的な面についても教員から随時アドバイスを兼ねてフィードバックを行うが，受講生相互で活発にコメントし合うことも期待している。最終的に，各自がレビュー発表によって明確になった研究課題を修士論文の構想として発展させ，それを発表する。修論構想発表後も，受講生全員でコメントをしあうとともに，今後の要改善点についてフィードバックを行う。
評価対象となっている発表については評価基準表（ルーブリック）を公表するとともに，授業支援システムにて評価結果をフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	この授業の概要と到達目標，評価方法の説明
2	文献の探し方（図書館ガイダンス）	法政大学図書館における蔵書検索と，書庫の活用方法について
3	発表のしかた：レジュメ篇	認知心理学の知見をふまえたレジュメの作り方について
4	発表のしかた：プレゼン篇	発表のしかた，パワーポイントの使い方，発表に対する自己評価，現時点での構想発表
5	レビュー発表に求めること	レビュー発表のポイント，批判的思考，発表の準備
6	発表準備	評価用紙を用いた評価の方法，発表の準備
7	レビュー発表１	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
8	レビュー発表２	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
9	レビュー発表３	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
10	レビュー発表４	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
11	修論構想発表１	修論構想発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
12	修論構想発表２	修論構想発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
13	修論構想発表３	修論構想発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
14	総括	授業の到達目標の確認，授業で修得できたことの振り返り，成績評価について，今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分の研究および発表のために準備を行うことはもちろんだが，他の受講生の発表に対して，学習支援システムの掲示板上で質問やアドバイスなどのコメントを書き込むこと。また，発表者は自分の発表に対して書き込まれたコメントに対して返信を行うこと。以上のことから，本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。準備学習の詳細は下記の通り。
第１回 自分の興味ある研究テーマを明確にして，文献検索のためのキーワードを準備する
第２回 自分の興味ある研究テーマの文献を収集する
第３回 先行研究の熟読，レジュメの構想を練る
第４回 先行研究の熟読，レジュメとパワーポイントによる発表の準備
第５回 発表の構想の見直し・確認，発表準備
第６回 自分の発表に対する事前の自己評価，発表準備
第７回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備，未発表者はレビュー発表の準備
第８回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備，未発表者はレビュー発表の準備
第９回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備，未発表者はレビュー発表の準備
第10回 レビュー発表の振り返り，修論構想発表の準備
第11回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正，未発表者は修論構想発表の準備
第12回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正，未発表者は修論構想発表の準備
第13回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正，未発表者は修論構想発表の準備
第14回 発表全体の振り返りと修論構想の修正

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】
藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　　北大路書房
そのほか，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点50％…授業に参加した上で，他者の発表にコメントしたり，掲示板に書き込むことを評価対象とする。
レビュー発表と修論構想発表30％…発表の内容，発表資料の質，発表のしかた，発表後の質疑応答を評価対象とする。

他者の発表への評価20％…他者の発表に対して批判的に・的確に評価できているかどうかを評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度の授業改善アンケートから：例年通り「履修してよかった」「授業の工夫」「理解度」ともに5.00満点でしたが，「理解度」は1人だけ4点の人がいたのが気になります。授業外学習時間が2人とも「2-3時間」確保できていたからかと思います。授業では研究計画だけでなく，発表スキルの改善方針も身につけてくれたと思います。今後の様々な発表も成長の機会と思って自分なりに工夫を重ね，納得のいく成功体験になるよう取り組んでください。

【その他の重要事項】
授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず初回授業より前に相談すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　認知心理学，教育心理学
＜研究テーマ＞
　単なる経験則に終わらない，研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。
＜主要研究業績＞
藤田哲也（編）（2006）．大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　北大路書房
藤田哲也（2006）．心理学を活かした教育実践のために　井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法ver.2　認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために　8章　北大路書房，pp.135-155.
藤田哲也（2010）．記憶過程と学習　三宮真智子（編）教育心理学　2章　学文社，pp.22-37.

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this class, students critically review and review prior research by applying cognitive psychology focusing on memory and knowledge of educational psychology focusing mainly on learning process.　Also, students will learn how to make effective presentations.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the following:
1.Students can clearly point out research issues in the field after reading a large number of previous studies.
2.Students can point out problems and improvements by critically reading each previous study.
3.Students can present the contents of 1 and 2 above to others in an appropriate and easy-to-understand manner.
4.Students can promptly and accurately evaluate the presentations of others.
[Learning activities outside of classroom]
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
[Grading Criteria /Policy]
The overall grade of the class is determined based on the following.
In-class contribution 50%, review presentation and master's thesis concept presentation 30%, evaluation of others' presentation 20%

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

臨床心理特論

中村　玲子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
概要：主な臨床心理学のアプローチについて、報告・質疑応答形式で講義を行う。また具体的な事例を通して、心理・教育的支援について検討を行う。さらに学校との協働や他機関との連携をふまえ、校内支援チームの構築やケアマネジメントについても理解を深める。
目的：臨床心理学の知識や技術を用いた児童・生徒に対する支援について、具体的な事例をもとに検討することにより、学校現場における心理・教育的支援の方法を習得する。

【到達目標】
目標：臨床心理学を用いた児童生徒・保護者の支援、教員や専門機関との連携について学習する。
①臨床心理学の知識や技術を活用した児童生徒・保護者の支援について考えることができる。
②臨床心理学の知識や技術を活用し、支援に必要な教員との協働について考えることができる。
③上記２点について、考察したことを表現し、記述することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、Z その他 /Other

【授業の進め方と方法】
講義及び授業内の発表を通して学習する。理解を深めるための演習も適宜とりいれていく。演習後にはリアクションペーパーの記述を求める。提出課題のフィードバックは，翌週の授業の冒頭で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション　臨床心理学とは	臨床心理学の定義、必要性について学ぶ。
第2回	臨床心理学の倫理・学校現場における臨床心理学	臨床心理学の実践における倫理について学ぶ。
第3回	学童期・思春期の心と行動	児童・生徒が抱えやすい学童期・思春期の問題とについて学ぶ。
第4回	精神分析的アプローチ	精神力動的アプローチについて報告・質疑応答形式で理解を深める。また、事例を提示し、その適用法についても考察する。
第5回	ロジャーズ学派	来談者中心的アプローチについて報告・質疑応答形式で理解を深める。傾聴技法について学ぶ。
第6回	行動理論	行動理論について報告・質疑応答形式や事例を通して理解を深める。
第7回	認知行動療法	認知行動療法について報告・質疑応答形式で理解を深める。また、認知的再体制化のプロセスについて事例を通して学ぶ。
第8回	交流分析理論	交流分析理論について報告・質疑応答形式で理解を深める。
第9回	アセスメントの方法	アセスメントの目的・内容・方法と検査倫理について学ぶ。
第10回	ケアマネジメントと校内チーム支援	学校現場におけるチームアプローチについて，事例を通して理解する。
第11回	児童生徒に対する支援―発達障害，不登校の事例	学校現場における支援の実際について、事例を通して学ぶ。
第12回	他機関との連携―児童虐待の事例	学校と他機関との連携の必要性について、事例を通して学ぶ。
第13回	コミュニケーション・スキルの習得・いじめの防止－心理教育的プログラムの実践	学校現場で有用な心理教育的アプローチについて、実例を通して学ぶ。
第14回	まとめ	授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
○配布された資料を事前に読む
○発表担当の際は，文献を読み発表資料を作成する。
○演習を行った際はミニレポートを提出する。
本授業の準備・復習時間は、各4時間(発表担当の際はそれ以上）を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教場で資料を配布する。

【参考書】
氏原寛・成田善弘（1999）．　臨床心理学①カウンセリングと精神療法　培風館
乾吉佑・亀口憲治・東山紘久,・氏原寛 (編)　(2005)．　心理療法ハンドブック　創元社
鑪幹八郎・名島潤慈（2010）．　心理臨床家の手引き　誠信書房

【成績評価の方法と基準】
①臨床心理学の知識や技術を活用した児童生徒・保護者の支援について考えることができる
②臨床心理学の知識や技術を活用し、支援に必要な教員との協働について考えることができる。
③上記２点について、考察したことを表現し、記述することができる。
3つの到達目標に対する成績評価は主に以下とする。
①②平常点・グループ討議への参加態度（４０%），文献報告の内容と作成資料（３０%）
③ミニレポート課題（３０%）

【学生の意見等からの気づき】
事例や自己理解を通し、できるだけわかりやすい授業を心がけたい。また積極的な質問や疑問の提示を期待する。

【学生が準備すべき機器他】
PC

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞教育心理学
＜研究テーマ＞中学校における心理教育的プログラムの開発・実施
＜主要研究業績＞
○中学校におけるいじめ抑止を目的とした心理教育的プログラムの開発とその効果の検討/教育心理学研究62 － 2／日本教育心理学会/共著/ 2014
○「傍観」に着目したいじめ介入プログラムの開発とその効果の検討 /早稲田大学/単著/2017.01

【Outline (in English)】
< Course outline>
The aim of this course is to help students acquire an understanding of the clinical psychology. Students should be able to recognize and recall major terms and concepts in clinical psychology.
< Learning Objectives>
Students learn about support for children and parents using clinical psychology, and collaboration with teachers and specialized institutions.
< Learning activities outside of classroom>
Students read the literature and prepare presentation materials.
< Grading Criteria>
Attitude to participate in group discussions (40%)
Contents of prepared materials (30%)
Short report (30%)

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

発達心理特論

渡辺　弥生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
心理学研究において発達的な視点をもつことにどのような意義があるかについて理解する。そのために、これまでの発達心理学研究の体系的な流れを捉える。特に、乳幼児期、児童期、青年期に焦点を当てるとともに、学校心理士の資格に必要な基盤としての発達心理学および、認知・思考、自己意識、社会性の発達を重点的に理解する。その上で、各自の今後の研究へのリサーチクエスチョンを考える。

【到達目標】
上記の授業テーマの枠組を意識した上で、
①発達心理学研究史に残る著名な理論を理解し説明することができる。
②身につけた知識をもとに発展的な課題について討議することができる。
③知識や理解をもとに自分の研究に応用できるよう計画することができる。
を到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
従来の先行研究で取り上げられてきた主要テーマのもとに、著名な理論を理解していく。さまざまな理論がどのような研究者によって、どういった方法で提唱されるに至ったのかを詳しく理解することが求められる。本講義では、発達心理学の中でも特に人間の行動の発達に関する理論と研究に焦点を当てる。毎回、ある研究者に焦点を当て、研究の経緯、方法など背景となる点を紹介する。発表担当者は、参考文献や自身で調べた内容を取り入れ、その研究者の研究を他の受講者に説明する。全受講者が自身の研究や経験を重ねながらいくつかのトピックで討論する。これにより、各自が研究知識を広げ、研究態度を学び具体的な研究計画が立てられる力を獲得する。課題などのフィードバックは、学習支援システムで回答したりアドバイスする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。 自己や対人関係のあり方については、各時間で言及する。
2	認知の発達 Cognitive Facets	Piaget &Inhelder(1969)：Crain(2011) の６章をもとに認知発達的な理論を理解し、討論する。
3	初期の対人関係 Early Relationships	Bowlby(1982) ：Crain(2011) の３章をもとに、乳幼児期の愛着理論を理解し、討論する。
4	成熟に関する理論 Maturation	Gesell(1952)：Crain(2011)の２章をもとに、子どもを育てることと成熟の関係を理解し、討論する。
5	発達と教育との関係 Early Education in the Home	Montessori(1949):Crain(2011)の４章をもとに、モンテッソリー教育をもとに教育との関係を考える。
6	学習理論 Learning Theory	Pavlov(1928), Watson(1936), Skinner(1953) Crain(2011)の８章をもとに人間の行動のメカニズムを考える。
7	道徳性の発達 Moral Development	Kohlberg(1958): Crain(2011)の７章をもとに、道徳性の判断や行動の発達について討論する。
8	社会的学習理論の理解 Social Learning Theory	Bandura(1962):Crain(2011)の９章をもとに、どのように攻撃性や向社会的行動が獲得されるか理解する。
9	記憶、言語、遊びの発達 Social-Historical Theory	Vygotsky(1930): Crain(2011)の１０章をもとに、心理学的な道具と行動の関係について学ぶ。言語の役割について考える。
10	精神分析理論と発達 Psychoanalytic Theory	Freud(1910):Crain(2011)の１１章をもとに、精神分析理論における発達理論を学ぶ。
11	ライフサイクル The Eight Stage of Life	Erikson(1968):Crain(2011)の１２章をもとに、生涯発達の視点から人間の一生を考える。
12	分離と固体化 Separation / Individuation	Mahler(1968) :Crain(2011)の１３章をもとに、母親からの分離について考え、討論する。
13	友だち関係と友情 Friendships and Peers	Hartup(1998): プリントをもとに、友情の発達や友だち関係の形成について考える。
14	親密な関係の形成 Close Relationship	Collins &Sroufe(1999):プリントをもとに、人間の性の発達や親密な関係について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
1.プレゼンテーションの準備：必ず上記理論提唱者についてプレゼンができるよう準備する。必要な内容は、a.理論やアイデア、b.個人の生き方と研究の関係、c.各理論が反映された最近の研究紹介、d.学問の応用について、e.発達についての個人の考え（キーとなるポイント）。事前に、担当教員にメールで提出しておく。当日の発表の要約（Ａ４２枚以内）。ただし、昨年と同じ発表方法にせず、今年は新しいスタイルを考える。
2.担当していない週では、その週のトピックに関する討論に参加できるようテキストや論文を読んでおく。また、最終的に提出するレポート課題を適宜準備しておく。

【テキスト（教科書）】
Crain,W. (2011). Theories of Development: Concepts and Applications およびプリント。受講者の人数や専門によって選ばれる発達理論は異なる。他の研究者の自伝を活用する可能性はある。

【参考書】
渡辺弥生監修(2019).『まんがでわかる発達心理学』　講談社
二宮克美・渡辺弥生（編）(2017)『発達心理学』 北大路書房
渡辺弥生(2019)　『感情の正体』筑摩書房

【成績評価の方法と基準】
担当した部分の発表を基に提出された課題(100%)で評価する。受講人数によっては、多少内容や順番を変更し、受講者のニーズを取り入れたいと考える。

【学生の意見等からの気づき】
評価も高く時間外の勉強を動機づけることができたと考えられるが、発表内容の厚みについて個人差が見られた。また、発表者が集団で討論できるようなリサーチクエスチョンを見つけられていない場合があることから、単に調べたことを発表するというのではなく、批判的な視点や発展的な意識をもち、討論できるような水準で発表できるよう支援していきたい。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。毎回機器を授業に間に合うよう準備することを徹底したい。

【その他の重要事項】
シラバスを変更することもあると理解してください。新型コロナウイルス感染状況によってオンラインに変更する可能性あり。

【担当教員の専門分野等】
HPを参考https://sites.google.com/site/emywata/
＜専門領域＞　発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
＜研究テーマ＞　社会情緒的スキルの発達といじめなどの予防教育の展開、ソーシャルエモーショナルラーニング
＜主要研究業績＞
(1)感情の正体 2019 筑摩書房
（2）世界の学校予防教育　２０１３　金子書房
（3）子どもの１０歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学　２０１１　光文社
（4）子どもの感情表現ワークブック　２０１１　明石書店
（4）１０代を育てるソーシャルスキル教育　２００９ 北樹出版
（5）幼児・児童における分配の公正さに関する研究　１９９２　風間書房、など。

【Outline (in English)】
＜ Course Outline＞ The aim of this course is to understand the significance of having a developmental perspective in psychological research.　Therefore, we will attempt to understand the systematic flow of developmental psychology research to date.
＜ Learning Objectives) In particular, we will focus on infancy, childhood and adolescence, and emphasize developmental psychology and development of cognition/thinking, self-consciousness, and social competence as the basis necessary for the qualification of school psychologist.　Based on this, students will consider research questions related to their future research.
＜ Learning activities outside of classroom＞ Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.
＜Grading of classroom＞The final report (100%) based on each assignment will be used for evaluation.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

障害児心理特論

奥田　健次

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人間は、対人的なかかわりを通して、人間らしい社会的関係を生み出し、社会でよりよく生きるために調整する力が育てられる。しかし、自閉症スペクトラムなどの障害のある子どもは、適切な対人関係をもつことに大きな問題をかかえることが多い。障害のある子どもをもつ家族に対する支援や指導、学校に対する支援やコンサルテーションなど、当事者と当事者を取り巻く人々に対する包括的な支援について考える。

【到達目標】
障害のある子どもの知的発達、社会性の発達、行動情緒の問題について、実践的な視点から具体的に論じることができる。
アセスメントの方法、実際の支援の方法について、具体的事例を通じて実践的な方法を検討し、いくつかのケース課題のワークショップを通して心理学的援助の方法を検討し、発表する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
「障害がある」とはどういうことか。逆に「障害がない」とはどういう状態のことをいうのか。これだけでも、大きなテーマであるといえる。しかし、哲学的な考察を深めるような授業ではなく、現実的な課題となっている「専門的支援」について、実践的に役立つ知識と技能を具体的な事例を通して学ぶ。そのために、基本的には講義形式で進められるが、グループワークや発表、討論の機会を設けて、受講者に能動的な学習ができるようはたらきかける。グループワークや発表へのフィードバックは授業中に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	障害の概念と特別な教育ニーズおよび合理的配慮	「障害」とは何か、国際障害分類の定義について説明する。また、特別な教育ニーズについて具体例を挙げながら説明する。「合理的配慮」について具体事例を挙げて検討する。
第2回	知的障害児の発達と心理	知能の定義、知的障害について説明し、教育や発達の支援について説明する。また、支援方法についてのワークを行う。
第3回	視覚障害・聴覚障害児の発達と心理	視覚障害および聴覚障害について、発達的な特徴と教育方法を説明する。支援の具体的な方法や課題についてのワークを行う。
第4回	肢体不自由・病虚弱児の発達と心理	肢体不自由・病虚弱について、発達的な特徴と教育方法を説明する。また、特別支援や家族支援上の課題について説明する。
第5回	自閉症児の発達と心理	自閉症について、発達的な特徴と教育方法の変遷について説明する。支援の具体的な方法や課題についてのワークを行う。
第6回	発達障害者の青年期・成人期での支援	発達障害者の青年期問題や成人期の課題、就業支援、余暇支援について説明する。
第7回	LD・ADHD児の発達と心理	ＬＤ・ＡＤＨＤについて、発達的な特徴と教育方法を説明する。学校教育上の教育支援や家族支援上の課題について説明する。
第8回	特別支援教育とは	特別支援教育について、従来の特殊教育からの変遷や目的・特徴の差違について説明する。また、ガイドラインのねらいについて説明する。
第9回	実態把握と相談支援	特別支援教育において行われる実態把握と相談支援の具体的方法について説明する。支援システムの構築の実例について発表する。
第10回	個別の指導計画と個別の教育支援計画	個別の指導計画と個別の教育支援計画について実際の計画案から説明する。また、問題のある計画の改善についてのワークを行う。
第11回	校内委員会と支援体制	校内委員会と支援体制について、機能的な組織の在り方について説明する。また、学校と家庭の連携・協働における課題について説明する。
第12回	特別支援教育（児童期の支援事例）	小学校における特別支援教育の支援事例を説明し、仮想事例から支援計画を検討して発表する。
第13回	特別支援教育（青年期の支援事例）	中学校における特別支援教育の支援事例を説明する。また、高等学校における特別な教育ニーズのある生徒への支援課題について説明する。
第14回	学校コンサルテーション、まとめ	特別支援教育で専門的な支援者に求められる学校コンサルテーションについて説明する。また、これまでの講義のまとめと講評を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
日常生活上の「障害」について、具体的な実例を考えておく。知的障害、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由・病虚弱の教育支援方法について調べておく。自閉症についての発達的な特徴について調べておく。学校で求められる合理的配慮の実例を考えておく。文部科学省「特別支援教育」ガイドラインの目次部分を、各自で準備し、調べておく。個別の指導計画と個別の教育支援計画の見本を、教科書や専門サイトなどから、各自で準備し、調べておく。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。

【参考書】
奥田健次（編著）教師と学校が変わる学校コンサルテーション．金子書房．2018年．

【成績評価の方法と基準】
集中講義であるため出席基準（4/5以上の出席）を満たしていることを前提に、授業参加40％、グループ発表30％、テーマ毎に実施するミニクイズ30％

【学生の意見等からの気づき】
授業改善のための意見を聞かせて下さい。

【学生が準備すべき機器他】
該当なし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　応用行動分析学、特別支援教育、行動療法
＜研究テーマ＞
　自閉症児への応用行動分析学による指導、自閉症児の「心の理論」、特別支援教育と学校コンサルテーション、家族支援とペアレントトレーニング、行動コーチング
＜主要研究業績＞

奥田健次編著（2018）教師と学校が変わる学校コンサルテーション.金子書房.
仁藤二郎・奥田健次（2016）痙攣性発声障害と診断された男性の日常生活における行動アセスメント.行動分析学研究, 31(1), 40-47.
仁藤二郎・奥田健次（2013）嘔吐不安を訴えるひきこもり男性の食事行動への介入：エクスポージャーにおける行動アセスメントと介入の評価. 行動分析学研究, 27(2), 80-91.
奥田健次（2012）メリットの法則- 行動分析学・実践編. 集英社.
奥田健次・小林重雄（2009）自閉症児のための明るい療育相談室－親と教師のための楽しいＡＢＡ講座. 学苑社.
奥田健次（2006）症例研究の方法. 河合伊六（監修), 辻下守弘・小林和彦（編), リハビリテーションのための行動分析学入門（pp.37-49）. 医歯薬出版株式会社.
奥田健次（2005）不登校を示した高機能広汎性発達障害児への登校支援のための行動コンサルテーションの効果－トークン・エコノミー法と強化基準変更法を使った登校支援プログラム－. 行動分析学研究, 20(1), 2-12.
奥田健次（2001）認知発達と言語行動：「心の理論」研究から. 日本行動分析学会(編), 浅野俊夫・山本淳一(編), ことばと行動：言語の基礎から臨床まで(pp. 189-210). ブレーン出版.

【Outline (in English)】

Children with disabilities such as Autism Spectrum Disorder (ASD) often have serious problems in human interpersonal relationships. Think about support for people surrounding the parties, such as support for families with children with disabilities, support and consultation to schools, and so on.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

人格心理特論

大森　美香

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
パーソナリティは、行動にみられる個人差を説明する概念であり、パーソナリティ理解は、教育・産業・臨床など生活のあらゆる場面での個人理解に必要不可欠である。本授業の目的は、以下の２点にある。１）人間の心理・行動の個人差およびそのメカニズムに関するアプローチを理解する、２）パーソナリティ特性と個人の行動、自己形成、また精神的健康の関連について最新の知見に触れ考察する。この目的に到達するため、古典的なパーソナリティ理論に加え、パーソナリティに関する最新の人間科学、社会科学、自然科学のアプローチについても学習する。授業は、学生によるプレゼンテーションの形式を中心に講義および討論を行いながら進める予定である。パーソナリティについてさまざまな角度からアプローチしながら、人間行動に関する関心、個人の尊厳、現代において個人がよりよく生きるとはどのようなことかについての考察を深めていただきたい。

【到達目標】
授業の主要な到達目標は、以下の２点である。１）代表的なパーソナリティ理論およびアプローチを理解すること、２）パーソナリティや人間行動に関する広い視野を獲得し考察すること、３）授業を通して、プレゼンテーションや討論において、自分の考えをわかりやすく伝える技術を獲得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は、オンラインを活用し、学生による発表と討論を中心に、講義を交えながら、授業を進める。発表の課題、期末レポートのフィードバックは、授業中ないし授業支援システムを通して行います。
授業計画は予定であり、受講者数や受講者のバックグラウンド、理解度によって調整いたします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス パーソナリティ理論の概観	授業概要説明；パーソナリティとは何か；パーソナリティの主要理論の概観
第2回	パーソナリティ心理学：人間科学、自然科学、社会科学的アプローチ	パーソナリティについての、心理生物社会的アプローチについて理解する
第3回	パーソナリティ理論(1)：心理療法への応用	パーソナリティの３大理論の心理療法にどのように応用されているのかレビューする。
第4回	パーソナリティ理論(2)：類型論と特性論	類型論と特性論の差異；パーソナリティ理論の歴史的展開
第5回	パーソナリティを「測る」	心理学的測定法、心理検査法（質問紙法、投影法）
第6回	パーソナリティの物語的把握	ナラティブアプローチによるパーソナリティ理解
第7回	生命現象としてのパーソナリティ	パーソナリティに関する生物学的規定因
第8回	パーソナリティの発達的変化	パーソナリティの発達的変化に関する最新の知見をレビューする
第9回	パーソナリティの相互作用論	パーソナリティに関する遺伝と環境の要因の相互作用
第10回	認知・感情・動機とパーソナリティ(1)：認知・感情とパーソナリティ	感情および認知的特徴に及ぼすパーソナリティの影響
第11回	認知・感情・動機とパーソナリティ(2)：動機とパーソナリティ	動機づけに及ぼすパーソナリティの影響
第12回	文化・社会とパーソナリティ	社会文化的要因がパーソナリティに及ぼす影響
第13回	さまざまな生活領域（家庭、学校、職場）や健康とパーソナリティ	各受講生の研究関心領域とパーソナリティの関連についての学生の発表
第14回	まとめ	進度調整および統括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業該当箇所のテキストの講読、課題への対応、発表準備。
The estimated time for preparation and review of the course is 2 hours for each. The task include reading course materials, working on assignments, and preparation for the presentation.

【テキスト（教科書）】
『パーソナリティ心理学』 榎本博明・安藤寿康・堀毛一也［著］有斐閣

【参考書】
『ヒルガードの心理学』（金剛出版（16版が最新ですが、図書館などで入手可能な版で結構です）

【成績評価の方法と基準】
平常点30%、発表40%、期末レポート30%
the participation in in-class activities 30%
presentation(s) 40%
final reflection paper 30%

【学生の意見等からの気づき】
これまでの授業で、毎回の授業で扱う範囲が多いとの意見がありました。大学院では、既存の知識や理論のインプットにとどまらず、批評的にとらえ考察を深化することが求められ、そのため授業の事前準備は必須と考えています。大学院での少人数での演習形式の授業では、知識理解はもちろんのこと、討論や発表スキルを確実に高めることが期待できます。

【学生が準備すべき機器他】
発表時の配布資料

【その他の重要事項】
＊受講においては、学部の概論レベルの心理学の授業を受講済みであることを前提としています。
＊授業計画は、受講者数、バックグラウンド、理解度により調整します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞健康心理学
＜研究テーマ＞健康行動、ボディイメージ、食行動
＜主要研究業績＞
Rodgers, R. F., Lombardo, C., Cerolini, S., Franko, D. L., Omori, M., Fuller- Tyszkiewicz, M., Linardon, J., Courtet, P., &Guillaume, S. (2020 jun). The Impact of the COVID-19 Pandemic on Eating Disorder Risk and Symptoms. International Journal of Eating Disorders. https://doi.org/10.1002/eat.23318
Takamura, A., Yamazaki, Y., &Omori, M. (2019). Developmental changes in fat talk to avoid peer rejection in Japanese girls and young women. Health Psychology Open. https://doi.org/10.1177/2055102919854170
Omori, M., Yamazaki, Y., Aizawa, N., de Zoysa, P. (2016). Thin-ideal internalization and body dissatisfaction in Sri Lankan adolescents. Journal of Health Psychology. Online First.

Omori, M., Yamawaki, N., &McKyer, E.L. (2015). A Comparative study of smoking in American and Japanese adolescents: Self, social influences, and health beliefs. International Journal of Adolescent Mental Health and Addiction.13, 345-360.

【Outline (in English)】

Personality pertains to individual difference in human behaviors. In order to understand individuals in academic, industrial, and clinical setting, it is inevitable to understand personality. Objectives of this course are twofold: 1) to understand fundamental theories on individual differences underlying psychological processes and behaviors; 2) to learn and discuss most updated findings on associations between personality and self perception, behaviors, and mental health. In order to accomplish these objectives, this course covers recent theories and findings of personality from biopsychosocial perspectives as well as traditional theories. Classroom activities involves both students' presentations and lectures.
The estimated time for preparation and review of the course is 2 hours for each. The task include reading course materials, working on assignments, and preparation for the presentation.
Grading is based on the following:
- the participation in in-class activities 30%
- presentation(s) 40%
- final reflection paper 30%

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

言語心理特論

福田　由紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　読解力とは何か？ それを伸ばすために何をしたらよいか？ について，心理学的な観点から検討することが本授業のテーマである。具体的には，まず，日本やそれ以外の国で行われている指導法について，模擬授業を通して体感する。次に，文章読解のプロセスやそれに影響する要因について学習をする。それらをもとに読解力を高めるためのアイディアを考える。

【到達目標】
①日本とそれ以外の国で行われている読解力向上の指導法を理解し，説明できる。
②文章読解に影響する要因に関する文献を探すことができる。
③文章読解に影響する要因とプロセスについて理解し，説明できる。
④読解力向上のための指導法のアイディアを提案する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業の前半は日本とUKで使用されている学習指導方法にそって，模擬授業を行う。その後，読解のプロセスや読解力の定義，読解力に影響を与える要因に関する文献を講読し，発表を行う。授業の最終段階では，各自が考える読解力の定義とそれを向上させるための指導方法のアイディアを発表する。また，提出された課題のフィードバックは，授業中ないしは授業支援システムを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。グループ分け。
第2回	日本式模擬授業１	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第3回	日本式模擬授業２	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第4回	UK式模擬授業１	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第5回	UK式模擬授業２	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第6回	読解力を伸ばすための指導法の日英比較の発表	模擬授業を通して実感したUKと日本の目指している読解力の相違点と共通点を比較検討した結果を発表する。
第7回	読解力に影響する要因に関して考える１：読解力の発達の様相	読み書きの発達の様相に関する論文を全員が読み，担当者が説明する。
第8回	読解力に影響する要因に関して考える２：語彙量，ワーキングメモリ	読解力に影響を与える要因として語彙量とワーキングメモリを取り上げる。具体的には，それらの要因がどのように読解力に影響を与えるかの概略を担当者が説明する。
第9回	読解力に影響する要因に関して考える３：認知・思考の発達	読解力に影響を与える要因として認知・思考力を取り上げる。具体的には，文章理解時にどのような推論をしているのか，発達的な観点に関して概略を担当者が説明する。
第10回	読解力に影響する要因に関して考える４：文書の理解	読解力に影響を与える要因として非連続型テキストである文書の理解を取り上げる。具体的には，文書の理解と文章の理解の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第11回	読解力に影響する要因に関して考える５：PISAの読解力	PISAが提案している読解力と，日本の教育で目指している読解力の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第12回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方のアイディアについての発表１	読解力の定義を明確にし，それを伸ばすための方法を発表する。その際，対象はだれか，具体的な方法のアイディアを発表する。
第13回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方のアイディアについての発表２	読解力の定義を明確にし，それを伸ばすための方法を発表する。その際，対象はだれか，具体的な方法のアイディアを発表する。
第14回	講評会	12回と13回で行った発表に関して全員で講評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
第1回～第4回　模擬授業を行うための準備を行う。
第5回　指導法の日英比較発表の準備を行う。
第6回～第10回　発表者は論文の発表準備を行う。それ以外の院生は，発表予定の論文を読み込んでくる。
第11回・第12回　次週の発表の準備を行う。
第13回　授業での発表や議論を振り返り，講評を作成する。

【テキスト（教科書）】
　教科書は特に指定しない。毎授業時にプリントを配付する。また，課題に必要な文献はその都度伝える。

【参考書】
福田由紀（編）(2012). 言語心理学入門　培風館
大村彰道（監修）(2001). 文章理解の心理学　北大路書房

【成績評価の方法と基準】
　発表40%，発表への質問・コメント30%，討論への参加30%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
　2025年度は担当しませんでした。よって，2024年度の分を以下に再掲します。
　日本の国語教科書「おにたのぼうし」とUKのそれ「Not Now Bernard」を使って模擬授業をしてもらいました。その活動を通して，読解力の捉え方の両国の相違，そして，自分が考える読解力とその伸ばし方を最後に発表しました。発表が多かったことやそのフィードバックの豊かさ，アジェンダの存在がよかったようです。続けていきますね。
　・発表ひとつひとつについて，議論の時間を多くとれたのが良かったです。普段接しない分野でしたが，分からないことを質問したりできて助かりました。発表回数も多かったので，毎回楽しく授業に参加できました。

・講義の初めに，Excel ファイルで，学期を通した到達目標，スケジュール，課題内容などを細かに説明してくださったので，到達目標に向けて明確な見通しをもって学習を進めることができました。結果として，最終的な目標である「読解力の伸ばし方」について自分なりによく考察を深めて計画を練ることができたので，習得できたものが多かったように感じます。また，これまで触れることがなかった言語心理学という分野の研究を精読したことで，自分の専門分野と少なからず共通点を見つけることができ，自身の研究に役立つような知見が得られたことも大きな収穫でした。総じて，非常に有意義な授業だったと思います。

【その他の重要事項】
　グループ分けや発表論文の割り当てをするので，受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語心理学
＜研究テーマ＞読みと感情，コミュニケーションにおける言語活動の役割
＜主要研究業績＞
1.常深 浩平・望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅰ）―努力の最小限化とその対策例―』（読書科学，66,1-10. 2024）
2.福田 由紀・井関 龍太・望月 正哉・常深 浩平『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅱ）－ Instructional Question Check 通過に影響する要因の検討－』（読書科学，66,11-25. 2024）
3. 井関 龍太・望月 正哉・菊池 理紗・福田 由紀『現代語小説の品詞構成に基づく文体印象の分析－イメージ性と展開の早さの主観的印象を説明する試み－』（計量国語学，34，158-173. 2023年）
4. 井関 龍太・菊池 理紗・望月 正哉・福田 由紀・石黒 圭『品詞構成に基づく文体指標は読者の印象とどのように関わるか－ MVR と品詞構成率の心理学的検討－』（計量国語学，33，493-509. 2022年
　この論文は計量国語学会の論文賞を拝受しました）
5. 望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀・長田 友紀・常深 浩平・石黒 圭『読者がもつ物語の認知的ジャンルの測定』（読書科学，63,160-174. 2021）
＜ＨＰ＞
「ことばのこころ研究室」http://www.zc.em-net.ne.jp/ psy-language/

【Outline (in English)】
Course outline：The purpose of this course is to learn the text comprehension from a psychological point of view.
Learning Objectives：By the end of the course, students should be able to do the following:
－ A. understand teaching method for text comprehension at Japan and UK
－ B. search for information on previous studies about text comprehension
－ C. understand factors about text comprehension and its process
－ D. propose a more efficient teaching method for text comprehension
Learning activities outside of classroom ： Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.
Grading Criteria ： Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 40%, comment for the presentation of other people: 30%, in-class contribution: 30%.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

学校カウンセリング演習

渡辺　弥生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、生涯発達の視点に立ち、発達心理学および発達臨床心理学の観点から、対人関係の発達過程を体系的に理解することを目標とする。乳幼児期の愛着形成から、児童期・青年期の友人関係、成人期の親密な関係、老年期の社会的つながりまでを取り上げ、個人内の発達と対人環境との相互作用を含めて理解していく。さらに、虐待、いじめ、不登校など対人関係のつまずきや困難が生じる背景と支援のあり方についても考察し、対人発達を実践に活かす視点を養う。

【到達目標】
本授業の到達目標は、①生涯発達の視点から対人関係の発達過程を理解する、②発達心理学および発達臨床心理学の知見を用いて説明できるようになることである。③乳幼児期の愛着形成から、児童期・青年期の友人関係、成人期の親密な関係、老年期の社会的つながりに至るまで、発達段階ごとの特徴と連続性を捉える力を身につける。また、④虐待、いじめ、不登校など対人関係に関わる困難を発達的観点から理解し、支援や予防につなげて考察できることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業は、講義と演習を組み合わせて進める。発達心理学および発達臨床心理学の理論や研究知見について講義を行い、時々に事例検討やグループ討議を通して理解を深める。授業内では、指定テーマに基づくミニ発表や意見交換を行い、対人関係の発達を多面的に捉える力を養う。また、対人関係上の課題を題材とした課題解決型学習やソーシャルスキルトレーニングなどを取り入れ、発達段階に応じた支援のあり方を検討する。各回のリアクションペーパーや課題に対しては、次回授業内での講評やコメントを通じてフィードバックを行い、学びの深化を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	対人発達を学ぶ視点	生涯発達の考え方、対人発達とは何か。発達心理学と発達臨床心理学の違いと接点をもとに全体的な流れを学ぶ。
第2回	発達の理論的基盤	愛着理論、社会的学習理論、エコロジカルモデルなど、対人発達を説明する主要理論について理解する。
第3回	乳幼児期の愛着形成	愛着の形成過程、内的作業モデル、養育環境との関連と危機についてを知る。
第4回	情動調整と共感の芽生え	自他の認識、コミュニケーションの始まり、他者理解の始まりなど、感情リテラシーの視点から対人関係の発達について考える。
第5回	友人関係と社会的スキル	仲間関係の発達、協力・葛藤解決、社会的能力の発達を学ぶ。
第6回	対人関係における発達の様相	対人関係の発達的理解、集団力学について理論を習得する。
第7回	いじめなどの学校危機予防	いじめ、不登校などを学校危機として捉え予防のあり方について気づく。
第8回	自己理解と友人関係について	アイデンティティ形成と対人関係、親からの心理的自立について理論を学習する。
第9回	親密さと葛藤について	親密な関係の発達、恋愛関係、対人葛藤への対処について具体的に考える。
第10回	親密な関係と家族について	パートナー関係、親になること、役割変化と対人関係について理論。重要な他者という概念の理解する。
第11回	仕事と社会的関係について	キャリア、職場の人間関係、ワーク・ライフ・バランス、社会的支援について理解する。
第12回	虐待・不適切養育などの予防と対応について	発達への影響、リスク要因、支援と回復の視点を考え、予防のためにできることを具体策を考える。
第13回	不登校・孤立の理解と対応について	対人関係の困難や学校適応に困難を考えている人（さまざまな障害も含む）への予防的支援策を具体的に考える。
第14回	まとめと解説	生涯発達の視点からの統合的理解。教育・臨床・支援への応用について総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の準備学習・復習時間は、各2時間を標準として求める。具体的には、テキストや演習問題の予習・復習、授業内で示される課題（レポート、演習問題）対応などを行う。授業外においては、学んだことを整理し、次の回に求められることをノートに整理する。論文に限らず。一般書籍でも事例でも良いので、何が課題であるかを理解し、対人関係の発達、予防、介入に関することについて自分なりの意見をまとめる。エビデンスをもとに、日常生活の自分を関連づけながら何が課題であり改善できることにどのようなコトがあるのかを考え、それを深く理解する。

【テキスト（教科書）】
渡辺弥生監修・藤枝静暁・藤原健志編著　「対人援助職のための発達心理学」改訂版
北樹出版

【参考書】
渡辺弥生著　「怒っている子どもはほんとうは悲しい」：「感情リテラシー」をはぐくむ　光文社新書

【成績評価の方法と基準】
授業への出席は単位取得の前提条件であり、成績評価の対象としては、ポートフォリオを活用する。各回のリアクションペーパーの提出（70%）と、最終的に対人発達の問題を予防する具体的対策のアイデア（ポスター、Youtube動画、スライドなど）の成果物（30％）として、その２つを合計して評価する。

【学生の意見等からの気づき】
新らしい授業なので、前年度のアンケート結果はない。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞

【Outline (in English)】
Course Outline
This course explores the development of interpersonal relationships across the lifespan from the perspectives of developmental psychology and developmental clinical psychology.
Learning Objectives
By the end of the course, students will be able to:
Understand interpersonal development from infancy to old age.
Explain the interaction between individual development and social environments.
Examine interpersonal difficulties such as maltreatment, bullying, and school refusal, and consider appropriate support.

Learning Activities Outside of the Classroom
Students will complete assigned readings, prepare for discussions, and work on short written assignments and reflections.
Grading Criteria / Policy
Grades are based on participation, assignments, and exams or final papers, with emphasis on understanding and application of course content.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

発達行動特論

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会の問題や個人の悩みは、よくよく考えてみると何らかの行動の問題であることが多いものです。心理学は行動の科学として“行動の予測と制御”に関わる法則を見いだしてきました。こうした法則をうまく適用すれば、社会の問題を解決し、個人の悩みを解消することも可能です。この授業では、社会的・個人的に重要な課題を行動問題としてとらえ、個人攻撃の罠に陥らず、環境を整備しながら問題を解決していく行動分析学の考え方を学びます。

【到達目標】
行動分析学の基礎的な概念を理解し、人や動物の発達や認知に関する様々な現象を、強化や弱化の随伴性を分析することで解釈できるように学びます。基礎的な概念を説明できるようになり、それらの概念を応用して、社会や学校、家庭における行動問題の解決方法を立案できるようになること、そうした解決方法を基礎的な概念を使ったコミュニケーションを介して討議し、協調すること、さらに、課題分析やABC分析、行動の観察・記録法を実施できるようになることを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
毎週、教科書の指定された章を読んで、関連する課題を行い、それについて授業中に討論したり、演習します。課題へのフィードバックは授業中の討論を介して行います。
学習目標や参考図書などの教材は下記のURLを参照してください。
https://docs.google.com/document/d/1XqZ7yScRRs24S2HJX8g1DLKW7CDnLTwm6FvUotXHZT8/edit?usp=sharing

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	行動分析学の概説、教科書の紹介、プロジェクトについての話し合いなど。
2	好子、嫌子とは	好子、嫌子、行動随伴性の定義や具体例について学ぶ（教科書、第1-2章）：行動の定義、死人テスト、医学モデル、説明のレベル、循環論。
3	強化と弱化	基本的な４つの随伴性について学ぶ（教科書3-5章）：PTSDや汚言症の治療における強化、社会的悪循環、科学における節約性、自閉症の療育における代替行動の分化強化、社会的妥当性、学級経営のための集団随伴性、反応コストとタイムアウト。
4	消去と復帰、分化強化 と分化弱化	消去と復帰、分化強化と分化弱化について学ぶ（教科書6-7章）：精神科病棟での問題行動修正、夜泣きの消去、バーストと自発的回復、自閉症児の自己刺激行動、消去と忘却の区別、スポーツのコーチング、課題分析、カウンセラーによる無意識の条件づけ、創造性。
5	シェイピング、強化スケジュール	シェイピングと強化スケジュールについて学ぶ（教科書8-9章）：失語症の行動療法、部分強化と連続強化、累積記録、FI、FR、VI、VR、消去抵抗、強化スケジュールよって生じる反応パターン。
6	生得性好子、生得性嫌子、特殊な確立操作、習得性好子、習得性嫌子	行動分析学における「動機づけ」について学ぶ（教科書10-12章）：遮断化と飽和化、確立操作、行動内在的随伴性と付加的随伴性、プリマックの原理、多飲症、攻撃行動と攻撃性好子、依存性好子、妄想を減らす行動療法、価値変容の原理、トークンエコノミーシステム。
7	刺激弁別、刺激般化、概念形成、模倣	弁別学習や概念学習、模倣による学習について学ぶ（教科書13-15章）：弁別刺激、概念の行動的定義、読字指導、刺激性制御、学習障害、機械利用型指導法、直感、プロンプトとフェイディング、遅延誘導手続き、リダクション、模倣と般化模倣。
8	阻止による強化、阻止による弱化、並立随伴性	回避行動、選択行動について学ぶ（教科書16-18章）：姿勢の矯正プログラム、自閉症における視線合わせ、警告刺激、ADHD、非両立行動の分化強化、対応法則。
9	刺激反応連鎖と反応率随伴性、レスポンデント条件づけ	複雑な行動の学習、レスポンデント条件づけについて学ぶ（教科書19-20章）：逆行連鎖化、順行連鎖化、総課題提示法、トイレットトレーニング、自立訓練、早食いの抑制、恐怖症とその治療、高次条件づけ、系統的脱感作法。
10	言語行動	言語行動論について学ぶ（教科書21章）：マンド、タクト、イントラバーバル、エコーイック、テクスチャル、書き取り、聞き取り、書き写し、オートクリティック、私的刺激。
11	強化モドキ、ルール支配行動	直接効果的随伴性、間接効果的随伴性について学ぶ（教科書22-23章）：拒食症の治療、随伴性形成行動、ルール支配行動、コミュニティ心理学、イメージトレーニング、パフォーマンス・マネジメント、自己管理。
12	ペイ・フォー・パフォーマンス、道徳と法による行動の制御	ルール支配行動によるマネジメントについて学ぶ（教科書24-25章）：作文指導、就労支援プログラム、銀行におけるペイ・フォー・パフォーマンス、法律と道徳（倫理）、宗教、性同一性障害。
13	行動の維持、行動の転移	学習した行動を維持させ、転移させる要因について学ぶ（教科書26-27章）：行動の罠、般化を促進させる要因、自己教示。

14	研究法	行動分析学における研究法、特にシングルケースデザインについて学ぶ（教科書28章）：社会的妥当性、観察法、観察の信頼性、反転法、多層ベースライン法、基準変化法、条件交替法、内的妥当性、外的妥当性。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
○毎回、次の週の授業で討論する具体的なテーマに関する予習課題を提示するので、受講生は関連する教科書の章を読み、予習課題に取り組み、討論の準備をすること。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『行動分析学入門(第2版)』（杉山・島宗・佐藤・マロット・マロット，産業図書，2023） *第2版を使います。ご注意ください。

【参考書】
適宜、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
○授業参加点 40%、課題点 60%で成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度はサバティカルで授業を担当しませんでした。

【その他の重要事項】
○ オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の2限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
The purpose of this course is to master basic principles, procedures, and research methods pertaining to applying behavior analysis in schools or in other educational or therapeutic settings. Focus will be placed on knowledge and skills in applying basic concepts of learning to interpret behavioral phenomena in real-world educational or societal settings.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students should be able to do the followings:
1) focus on behaviors, 2) conduct ABC/AB analyses, and 3) measure target behaviors, and 4) explain about single-case research design.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

言語心理演習

福田　由紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本年度は，音声言語を用いた「やりとり」といった言語行動に焦点をあてる。円滑な「やりとり」とは何か，どのような方法が考えられるのかについて検討する。

【到達目標】
本授業の到達目標は，以下の通りである。
①音声言語を用いた「やりとり」に関する今までの知見を学ぶ。
②知見に基づき，円滑な「やりとり」の特性を学ぶ。
③学んだ内容について，実践可能で具体的な提言を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
最初に，現在の自分の音声言語を用いた「やりとり」の技術を確認する。その後，効果的な「やりとり」に関する文献を購読し，発表を行う。授業の最終段階では，学んだことを自ら実践できるかについて確認を行う。最終的に，効果的な「やりとり」の特性や実践方法について発表し，全員で討論を行う。また，提出された課題のフィードバックは，授業中ないしはWeb Classを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション，音声言語による「やりとり」の多様性	「やりとり」が行われる場の多様性についての確認
第2回	自分の「やりとり」力の確認1	合意形成の場
第3回	「やりとり」の特性に関する発表1	「やりとり」の特性に関する発表と討論1
第4回	「やりとり」の特性に関する発表2	「やりとり」の特性に関する発表と討論2
第5回	自分の「やりとり」力の確認2	プレゼンテーションの場
第6回	効果的な「やりとり」に関する発表1	効果的な「やりとり」に関する発表と討論1
第7回	効果的な「やりとり」に関する発表2	効果的な「やりとり」に関する発表と討論2
第8回	効果的な「やりとり」の実現可能性に関する発表1	効果的な「やりとり」の実現可能性に関する発表と討論1
第9回	効果的な「やりとり」の実現可能性に関する発表2	効果的な「やりとり」の実現可能性に関する発表と討論2
第10回	自分の「やりとり」力の向上の確認1	合意形成の場
第11回	効果的な「やりとり」とその実践についての発表1	効果的な「やりとり」とその実践についての発表と討論1
第12回	効果的な「やりとり」とその実践についての発表2	効果的な「やりとり」とその実践についての発表と討論2
第13回	自分の「やりとり」力の向上の確認2	プレゼンテーションの場
第14回	講評会	発表に対する全員で講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業計画の内容に沿った次週の発表の準備を行います。

【テキスト（教科書）】
特になし。適時，周知する。

【参考書】
福田由紀(2012). 言語心理学入門　培風館
郡司隆男・坂本勉(1999). 言語学の方法　岩波書店

【成績評価の方法と基準】
発表40%，発表への質問・コメント30%，討論への参加30%などを総合的に評価する。特に，討論への積極な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】
新規科目のため，アンケートは実施されませんでした。

【その他の重要事項】
受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語心理学
＜研究テーマ＞読みと感情，コミュニケーションにおける言語活動の役割
＜主要研究業績＞
1. 常深 浩平・望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅰ）―努力の最小限化とその対策例―』（読書科学，66,1-10. 2024）
2. 福田 由紀・井関 龍太・望月 正哉・常深 浩平『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅱ）－ Instructional Question Check 通過に影響する要因の検討－』（読書科学，66,11-25. 2024）
3. 井関 龍太・望月 正哉・菊池 理紗・福田 由紀『現代語小説の品詞構成に基づく文体印象の分析－イメージ性と展開の早さの主観的印象を説明する試み－』（計量国語学，34，158-173. 2023年）
4. 井関 龍太・菊池 理紗・望月 正哉・福田 由紀・石黒 圭『品詞構成に基づく文体指標は読者の印象とどのように関わるか－ MVR と品詞構成率の心理学的検討－』（計量国語学，33，493-509. 2022年
この論文は計量国語学会の論文賞を拝受しました）
5. 望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀・長田 友紀・常深 浩平・石黒 圭『読者がもつ物語の認知的ジャンルの測定』（読書科学，63,160-174. 2021）
＜ＨＰ＞
「ことばのこころ研究室」http://www.zc.em-net.ne.jp/ psy-language/

【Outline (in English)】
Course outline ： The purpose of this course is to examine the characteristics of effective communication and methods for putting them into practice
Learning Objectives：By the end of the course, students should be able to do the following:
－ A. learn about existing knowledge concerning “interaction” using spoken language
－ B. based on insights, learn the characteristics of smooth “interaction”
－ C. Make practical and concrete proposals regarding the learned content
Learning activities outside of classroom ： Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.
Grading Criteria ： Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 40%, comment for the presentation of other people: 30%, in-class contribution: 30%.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

学校コンサルテーション特論

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業ではシングルケースデザイン法について実践的に学びます。シングルケースデザイン法は行動分析学の研究でよく使われる実験計画法で、少数の参加者を対象に、行動の制御変数を探索したり、効果を検証するために用いられています。授業では独立変数と従属変数の関係を実証するためのロジックについて学びます。そして参加者が興味関心のあるテーマで簡易的な実験を行い、データの分析や作図による目視分析の演習を行います。

【到達目標】
　この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です。
○従属変数とする行動を焦点化し、定義する。
○焦点化した行動を測定する。
○独立変数とする操作や条件を定義し、実験として実装する方法を考案する。
○記録方法を考え、ベースラインを測定する。
○目視分析のためにデータを作図する。
○各種シングルケースデザイン法のロジックを理解し、実験の目的にあわせた方法を選択する。
○実験結果を評価するための目視分析を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。受講生の興味関心にあわせて実験計画を立案し、実際に簡単な実験に取り組むことを優先して進めます。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	全員： 授業内容と方法、約束事を説明します。演習として行う実験計画や研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。
第2回	シングルケースデザイン法の概要1	AB法、反転法について学びます。
第3回	シングルケースデザイン法の概要2	多層ベースライン法、基準変化法について学びます。
第4回	実験計画1	演習として取り組む実験計画について話し合います。
第5回	実験計画2	演習として取り組む実験計画を立案します。独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などを学びます。
第6回	実験準備1	実験に使う材料やプログラムなどを準備します。
第7回	実験準備2	実験に使う材料やプログラムなどを準備します。
第8回	実験実施1	実験を実施します。
第9回	実験実施2	同上。
第10回	目視分析1	目視分析のための作図法を学びます。
第11回	目視分析2	同上。
第12回	研究成果のまとめ	目視分析をもとに実験結果を考察し、討論します。
第13回	研究成果の発表準備	研究成果をまとめて発表する方法を学びます。
第14回	研究成果の発表	研究成果をまとめて発表します。全課題を振り返り、討論します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。
○興味関心があるテーマについて標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の3つを考え、提案するための資料を作成する。
○実験計画について予測する結果を作図する。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
島宗 理 (2019). ワードマップ　応用行動分析学　新曜社

【参考書】
研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】
○授業参加（40%）および課題の遂行度（60％）から成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
この授業は今年度から新しく開講されました。

【その他の重要事項】
○オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の3限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course provides practical training in single-case research design methodology. Single-case design is an experimental method commonly used in behavior analysis research to explore controlling variables of behavior and evaluate intervention effects with a small number of participants. Students will learn the logic for demonstrating the relationship between independent and dependent variables. Participants will then conduct simple experiments on topics of their own interest and practice data analysis and visual analysis through graphing. Assignments will be given weekly. The course is conducted in a seminar format, centered on presenting assignments and engaging in discussions. Priority is given to developing experimental designs based on students' interests and conducting simple experiments. Feedback on assignments will be provided during class sessions and via Slack.
【Learning Objectives】
The primary goals of this course are to acquire the following knowledge and skills:
○ Identify and define the target behavior as the dependent variable.
○Measure the identified behavior.
○ Define the manipulation or conditions as the independent variable and devise methods for implementing them as an experiment.
○Develop recording methods and measure baseline.
○Graph data for visual analysis.

○Understand the logic of various single-case design methods and select an appropriate method based on the purpose of the experiment.
○Conduct visual analysis to evaluate experimental results.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

健康心理特論

林　容市

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
様々な事象，対象について，健康心理的視点から捉え，該当分野における研究の現状を理解する。

【到達目標】
個人の健康観に関する諸要因について理解する。
特に身体活動と関連する心理的要因，および生理的要因と感覚との関係を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業では，個人や社会における健康に関する基礎的理論・概念を理解した上で，最新の研究結果を踏まえて健康に関する心理的要因を論議する。毎回，主たるテーマを設け，基礎的な情報の提供を受け，それらを踏まえて参考文献を読み，受講者全体で討論した上で，複数回の発表を行う。これらを通じ，研究の視点および方法について視野を広げ，研究活動に資する知識・技術を獲得する。
また，前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては，授業内で全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	オリエンテーション，健康に関する研究の現状の紹介
第2回	健康に対する意識と主観(1)	健康度評価に関する研究の展開
第3回	健康に対する意識と主観(2)	クオリティ・オブ・ライフの意味するもの
第4回	健康に対する意識と主観(3)	健康観や健康行動におけるパラダイムシフト
第5回	様々な対象における健康と心理(1)	生活習慣病や障害と満足度研究と実際的応用
第6回	様々な対象における健康と心理(2)	高齢者のサクセスフルエイジングと健康
第7回	様々な対象における健康と心理(3)	医療者・患者間コミュニケーション，インフォームドコンセント
第8回	様々な対象における健康と心理(4)	女性における健康と心理
第9回	社会環境的側面からの健康(1)	地域・ネットワーキングと保健・医療の新しい展開
第10回	社会環境的側面からの健康(2)	コミュニティにおけるヘルスプロモーションの展開
第11回	健康行動としての身体活動と心理的背景(1)	心理行動的要因と様々な行動変容モデル
第12回	健康行動としての身体活動と心理的背景(2)	身体活動時の感覚と生理的状態
第13回	健康行動としての身体活動と心理的背景(3)	主観的努力観と身体活動・スポーツ
第14回	健康行動としての身体活動と心理的背景(4)	運動習慣・健康行動と自己効力感

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業ごとに指示された調査および論文を事前に読む予習を行う。また，プレゼンテーションの担当となった場合には，スライドや発表資料の作成も求める。さらに，毎回の授業内容についてとりまとめ，次回以降の授業内でのディスカッションに備えること。なお，これらの各回の授業に対する準備および復習等の時間は，それぞれ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
学術雑誌に掲載されている論文を使用し，必要に応じて指示する。その他の資料は適宜授業中に配布する。

【参考書】
田中喜代次，大蔵 倫博 (編)．健康運動の支援と実践．金芳堂．

【成績評価の方法と基準】
授業への参画（出席ではない）状況：50%，プレゼンテーション（資料等の評価も含む）：50%

【学生の意見等からの気づき】
前年度休講のため授業改善アンケートは実施しておらず，フィードバックはありません。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　生理心理学，応用健康科学，健康心理学
＜研究テーマ＞　運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し、健康維持、減量などに効果的な身体活動を検討する
＜主要研究業績＞　林容市 他．個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係．体力科学57：197-206，2008　ほか

【Outline (in English)】
【Course outline】The purpose of this class is to understand the current state of research into account various events and subjects concerned from a health-psychological perspective.
【Learning Objectives】By the end of the course, students should understand various factors related to the individual's view of health. In particular, students will understand the relationship between psychological and physiological factors related to physical activity.
【Learning activities outside of the classroom】Students are required to read the research and papers assigned for each class in advance. Those in charge of presentations must also prepare slides and presentation materials. In addition, students expect to summarize the contents of each class and prepare for discussions in the subsequent classes. The standard time for preparation and review for each of these classes is two hours each.
【Grading Criteria/Policy】Grading will be decided based on the class participation (not attendance) (50%) and the Presentation, including evaluation of materials (50%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

心理研究法特論

竹島　康博

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
基礎心理学の研究の中で用いられる実験法について，受講者同士で発表し合うことで学びます。自身の研究分野に縛られず幅広い研究法を学ぶことにより，研究の発想の幅を広げることを目的とします。

【到達目標】
基礎心理学の研究領域でよく用いられる実験法について，受講者自身の研究分野に縛られず幅広く学び直すことにより，自身の研究の幅を柔軟に広げられる思考力，応用力を身に付けることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎週，受講者が教科書に掲載されている実験法から1つを選び，その手法を使った研究論文の内容を発表し，それについて全員で議論します。なお，受講人数等によって授業の内容を一部変更する場合があります。
毎週の課題の提出およびフィードバックは，授業中ないし授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業全体の概要説明 受講者の研究テーマや主要な研究法についての発表
第2回	研究紹介(1)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（1人目：1巡目）
第3回	研究紹介(2)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（2人目：1巡目）
第4回	研究紹介(3)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（3人目：1巡目）
第5回	研究紹介(4)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（1人目：2巡目）
第6回	研究紹介(5)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（2人目：2巡目）
第7回	研究紹介(6)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（3人目：2巡目）
第8回	研究紹介(7)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（1人目：3巡目）
第9回	研究紹介(8)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（2人目：3巡目）
第10回	研究紹介(9)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（3人目：3巡目）
第11回	研究紹介(10)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（1人目：4巡目）
第12回	研究紹介(11)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（2人目：4巡目）
第13回	研究紹介(12)	教科書から1つ実験法を選び，その手法を使った研究を紹介（3人目：4巡目）
第14回	まとめ	授業の総括と実験法の復習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。教科書と発表論文の読み込みや資料の作成といった発表の準備を行います。また，授業後は取り上げた実験法について，受講者自身の研究に活用できる可能性を検討する作業を行います。

【テキスト（教科書）】
日本基礎心理学会（監）『基礎心理学実験法ハンドブック』 2018 朝倉書店

【参考書】
三浦麻子（監著）『なるほど！ 心理学研究法』 2017　北大路書房
佐藤暢哉・小川洋和『なるほど！ 心理学実験法』2017　北大路書房
大竹恵子（編著）『なるほど！ 心理学調査法』 2017　北大路書房
佐藤寛（編著）『なるほど！ 心理学観察法』 2018　北大路書房
米山直樹・佐藤寛（編著）『なるほど！ 心理学面接法』2018　北大路書房

【成績評価の方法と基準】
平常点50%と，「受講者による発表」の内容50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【その他の重要事項】
教科書を指定していますが，専攻で貸し出し用に2冊用意しています。受講者同士で上手くシェアして使ってください。
授業で募集する様々な研究への参加による学習についても評価に加味する場合があります。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
知覚心理学，認知心理学
＜研究テーマ＞
異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究，視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究
＜主要研究業績＞
竹島 康博 (2024).　視聴覚刺激の提示タイミングに対する同時性知覚の柔軟性　VISION, 36(4), 150-155.
Takeshima, Y. (2024).　The influence of spatial frequency information on temporal synchrony perception on audiovisual stimuli. Perception, 53(11-12), 803-811.
Takeshima, Y. (2023). Change of rapid temporal recalibratgion magnitude for audiovisual asynchrony with modulation of temporal binding window width: A preliminaryh investigation. i-Perception, 14(4), 1-10.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course deals with some topics using various kinds of psychological methods that the instructor use so far.
[Learning objectives]
The goals of this course are to enable students to develop flexible thinking and applied skills that allow them to broaden the scope of their own research by broadly revisiting experimental methods commonly used in basic psychological research, without being limited to their own research fields.
[Learning activities outside of classroom]
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
[Grading Criteria /Policy]
Grading will be decided based on class contribution (50%) and class presentation (50%).

PHL700B1（哲学 / Philosophy 700）

哲学特殊研究１

中釜　浩一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
博士課程の学生向けに、博士論文の執筆や学会発表のための能力のための訓練をする。

【到達目標】
博士論文執筆のための技能を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学生の発表と、それに関するディスカッションで授業を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業の方針	授業の目的・方法に関する教員の説明
第2回	学生の発表（１）	発表とディスカッション
第3回	学生の発表（２）	発表とディスカッション
第4回	学生の発表（３）	発表とディスカッション
第5回	学生の発表（４）	発表とディスカッション
第6回	学生の発表（５）	発表とディスカッション
第7回	中間総括	教員からのコメント
第8回	学生の発表（６）	発表とディスカッション
第9回	学生の発表（７）	発表とディスカッション
第10回	学生の発表（８）	発表とディスカッション
第11回	学生の発表（９）	発表とディスカッション
第12回	学生の発表（１０）	発表とディスカッション
第13回	学生の発表（１１）	発表とディスカッション
第14回	総括	教員による全体的コメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分の研究テーマに従って文献講読を進める。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない

【参考書】
アリストテレス、ジェームズ、ローティなどの諸著作

【成績評価の方法と基準】
発表８０%。期末レポート２０%

【学生の意見等からの気づき】
従来のやり方が適正である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
＜研究テーマ＞
パースペクティヴィズムと現代形而上学
＜主要研究業績＞
著訳書　「できごとと対象―ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、II」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージェスク・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】
Course outline: Doctoral Students are to be trained to give presentations at academic meetings and to write doctoral dissertations.
Learning Objectives: To get enough skills for writing papers on various philosophical topics.
Learning activities outside of classroom: Students are expected to spend four hours to prepare their presentations at each class.
Grading Criteria /Policy: in class contribution 80%, term-end report 20%

PHL700B1（哲学 / Philosophy 700）

哲学特殊研究２

中釜　浩一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
春学期に続き、博士課程の学生向けに、博士論文の執筆や学会発表のための能力のための訓練をする。

【到達目標】
博士論文執筆のための技能を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学生の発表と、それに関するディスカッションで授業を進める。適宜学生の発表の長所・欠点・改善点等を指摘する

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業の方針	教員による説明
第2回	学生による発表A（1）	発表とディスカッション
第3回	学生による発表A（2）	発表とディスカッション
第4回	学生による発表A（3）	発表とディスカッション
第5回	学生による発表A（4）	発表とディスカッション
第6回	学生による発表B（1）	発表とディスカッション
第7回	学生による発表B（2）	発表とディスカッション
第8回	学生による発表B（3）	発表とディスカッション
第9回	学生による発表B（4）	発表とディスカッション
第10回	学生による発表C（1）	発表とディスカッション
第11回	学生による発表C（2）	発表とディスカッション
第12回	学生による発表C（3）	発表とディスカッション
第13回	学生による発表C（4）	発表とディスカッション
第14回	最終的総括	教員による整理とコメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自分の研究テーマに従って研究を進める。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
アリストテレス、ジェームズ、ローティなどに関する諸文献

【成績評価の方法と基準】
各自の発表内容（８０%）と期末レポート（２０%）によって、博士論文執筆に向けた学生の研究能力、論文の構成能力、プレゼンテーション能力を評価する。

【学生の意見等からの気づき】
精読とディスカッションの方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
＜研究テーマ＞
パースペクティヴィズムと現代形而上学
＜主要研究業績＞
著訳書　「できごとと対象―ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、II」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージェスク・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】
Course outline: Doctoral Students are to be trained to give presentations at academic meetings and to write doctoral dissertations.
Learning Objectives: To get enough skills for writing papers on various philosophical topics.
Learning activities outside of classroom: Students are expected to spend four hours to prepare their presentations at each class.
Grading Criteria /Policy: in class contribution 80%, term-end report 20%

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

言語分析哲学特殊講義１

中釜　浩一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
プラグマティズムという哲学的立場は、現代の言語哲学・認識論・倫理学等々に深い影響を与えている。この授業では、Brandomの著作Perspectives on Pragmatismを精読することで、プラグマティズムとその帰結を検討する。特に、分析哲学とプラグマティズムとの関連に留意する。

【到達目標】
現代プラグマティズムの特徴とそのインパクトをを正しく理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
R. Brandom　'Perspectives on Pragmatism'関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。解釈上の問題点・注意点等については、教員が適宜フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	教員による一般的解説
第2回	Introduction secs.1-3	pp.1-13
第3回	Introduction sec.4	pp.13-21
第4回	Introduction sec.5	pp.21-26
第5回	Introduction secs.6-7	pp.26-34
第6回	Chap.1 Classical American Pragmatism secs.1-3	pp.35-42.
第7回	Chap.1 Classical American Pragmatism secs.4-5	ppp.43-48
第8回	Chap.1 Classical American Pragmatism secs. 6-7	pp.48-55
第9回	Chap.2 Analyzing Pragmatism secs.1-4	pp.56-63
第10回	Chap.2 Analyzing Pragmatism secs.5-7	pp.63-70
第11回	Chap.2 Analyzing Pragmatism secs.8-9	pp.70-77
第12回	Chap.2 Analyzing Pragmatism secs.10-11	pp.77-82
第13回	Chap.3 A Kantian Rationalist Pragmatism sects. 1-2	pp.83-89
第14回	Chap.2 Analyzing Pragmatism secs.3	pp.89-94

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】
Robert B. Brandom, Perspectives on Pragmatism, Harverd University Press, 2011

【参考書】
Peice, James, Rorty,Putnamらの諸著作。

【成績評価の方法と基準】
Pragmatismの理解度に関して、レジュメの作成　６０％
ディスカッションでの貢献　４０％で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
＜研究テーマ＞
パースペクティヴィズムと現代形而上学
＜主要研究業績＞
著訳書　「できごとと対象―ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、II」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージェスク・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】
Course outline: This course deals with Pragmatism and its impacts on philosophies of language, epistemology, and ethics.
Learning Objectives: To acquire a deeper understanding of today's pragmatism by carefully reading R. Brandom's 'Perspectives on Pragmatism'.
Learning activities outside of classroom: After each class meeting,
students are expected to spend four hours to understand the content of the day's discussion and to prepare for the next class meeting.
Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

言語分析哲学特殊講義２

中釜　浩一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
1-1に続いて、Brandomの著作Perspectives on Pragmatismを精読することで、プラグマティズムとその帰結を検討する。特に分析哲学とプラグマティズムとの関連に留意する。

【到達目標】
現代プラグマティズムの特徴とそのインパクトを正しく理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
R. Brandom　'Perspectives on Pragmatism'関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。解釈上の問題点・注意点等については、教員が適宜フィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Chap.3 Kantian Rationalist Pragmatism sec.4	pp.94-102
第2回	Chap.3 Kantian Rationalist Pragmatism secs.5-6	pp.102-106
第3回	Chap.4 Linguistic Pragmatism and Pragmatism about Norms Secs.1-3	pp.107-112
第4回	Chap.4 Linguistic Pragmatism and Pragmatism about Norms Secs. 4-5	pp. 112-115
第5回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Secs. 1-3	pp.116-122
第6回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Secs. 4-5	pp.122-126
第7回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Secs. 6-6	pp.126-133
第8回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Secs. 8-9	pp.133-141
第9回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Sec. 10	pp.141-146
第10回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Sec. 11	pp.146-153
第11回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Sec. 12	pp.153-157
第12回	Chap. 6, Toward an analytical Pragmatism Sec1-2	pp.158-164
第13回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Secs. 3-4	pp.164-176
第14回	Chap. 5, Vocabularies of Pragmatism Sec.5	pp. 176-189

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】
Robert B. Brandom, Perspectives on Pragmatism, Harverd University Press, 2011

【参考書】
Peice, James, Rorty,Putnamらの諸著作。

【成績評価の方法と基準】
ウPragmatismの理解度に関して、レジュメの作成　６０％
ディスカッションでの貢献　４０％で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
＜研究テーマ＞
パースペクティヴィズムと現代形而上学
＜主要研究業績＞
著訳書　「できごとと対象―ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、II」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージェスク・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】
Course outline: This course deals with Pragmatism and its impacts on philosophies of language, epistemology, and ethics.
Learning Objectives: To acquire a deeper understanding of today's pragmatism by carefully reading R. Brandom's 'Perspectives on Pragmatism'.
Learning activities outside of classroom: After each class meeting,
students are expected to spend four hours to understand the content of the day's discussion and to prepare for the next class meeting.
Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

古代哲学史特殊講義１

文 景楠

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アリストテレス『自然学』第3巻を読む。本巻は彼の自然学における重要概念である「運動変化」と「無限」を扱う巻であり、様々な解釈的論点を含む。この授業では、最新の研究状況を参照しながらこれらを読み解くことを目指す。

【到達目標】
アリストテレス『自然学』第3巻の構造の詳細を熟知し、特に「運動変化」と「無限」に関する現在の研究を活用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者が事前にテクストを読みレジュメを準備する演習形式で進める。学期末には4000字程度のレポートを課す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容と評価基準の紹介
2	ギリシア哲学を研究する	現代的な研究方法の概観
3	背景の確認1	アリストテレス『自然学』の基礎知識
4	背景の確認2	アリストテレス『自然学』第3巻の概観
5	『自然学』第3巻第1章：200b12-25	探究対象の設定
6	『自然学』第3巻第1章：200b26-1a9	運動変化の種類
7	『自然学』第3巻第1章：201a9-b15	運動変化の定義1
8	議論1	論点の確認と討論
9	『自然学』第3巻第2章：201b16-2a3	運動変化の定義2
10	『自然学』第3巻第2章：202a3-12	運動変化するものとさせるもの
11	『自然学』第3巻第3章：202a13-b5	運動変化の所在1
12	『自然学』第3巻第3章：202b5-29	運動変化の所在2
13	議論2	論点の確認と討論
14	まとめ	授業内容の振り返りとレポート構想の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回全員がテクストと注釈を事前に読み、担当になった回ではレジュメを用意すること。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
ギリシア語のテクストは次のものを用いるが、教員が配布する。
- W. D. Ross. 1936. Aristotle's Physics. Oxford: Clarendon Press.
日本語訳は次のものを用いる。
- 内山勝利（2017）『自然学』新版アリストテレス全集、岩波書店.
- 出隆（1968）『自然学』アリストテレス全集、岩波書店.
ギリシア語未修者の参加も可能だが、その場合は英語または仏独語などで書かれた注釈を担当してもらう。以下はその一例である。
- Hussey, Edward. 1983. Physics: Books III and IV. Oxford: Oxford University Press.

【参考書】
講義中に随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
「到達目標」に記した内容の到達度に照らして、① 平常時の参加度（60%）② 期末レポート（40%）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】
今年度は該当なし

【その他の重要事項】
古代哲学史特殊講義2と合わせて受講することを勧める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
古代ギリシア哲学
＜研究テーマ＞
特に心の哲学と形而上学を中心に、アリストテレス哲学全般に関心がある。
＜主要研究業績＞
（2023）「Λ前半部の展開」『ギリシャ哲学セミナー論集』19、1－14頁.
（2022）「アイティアーのもつれ」『哲學』第73号、363－374頁.
2021. Aristotle's disturbing relatives. Apeiron 54, no.4: 451－472.

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course focuses on Book III of Aristotle's Physics. Book III addresses the concepts of "change" and "the infinite," which are central to Aristotle's natural philosophy, and raises a range of interpretive issues. In this course, we aim to read and interpret these topics in light of recent scholarship.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students will have a thorough knowledge of the detailed structure of Book III of Aristotle's Physics and will be able to critically engage with recent scholarship, particularly concerning "change" and "the infinite."
（Learning activities outside of classroom）
For each class meeting, all students must complete the assigned readings in advance, and those assigned as presenters are required to prepare a written summary. Before and after each class meeting, students are expected to spend approximately four hours preparing for and reviewing the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following: 1. Class participation: 60%, 2. Term-end paper: 40%.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

古代哲学史特殊講義２

文 景楠

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アリストテレス『自然学』第3巻を読む。本巻は彼の自然学における重要概念である「運動変化」と「無限」を扱う巻であり、様々な解釈的論点を含む。この授業では、最新の研究状況を参照しながらこれらを読み解くことを目指す。

【到達目標】
アリストテレス『自然学』第3巻の構造の詳細を熟知し、特に「運動変化」と「無限」に関する現在の研究を活用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者が事前にテクストを読みレジュメを準備する演習形式で進める。学期末には4000字程度のレポートを課す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	先学期の内容の振り返り
2	レポートの検討	先学期のレポート内容の発表
3	『自然学』第3巻第4章：202b30-3b2	無限に関する先人の説の紹介
4	『自然学』第3巻第4章：203b3-4a7	無限の基礎的考察
5	『自然学』第3巻第5章：204a8-5a7	先人の批判1
6	『自然学』第3巻第5章：205a8-6a8	先人の批判2
7	議論1	論点の確認と討論
8	『自然学』第3巻第6章：206a9-b3	可能的な無限
9	『自然学』第3巻第6章：206b3-7a32	付加による無限と分割による無限
10	『自然学』第3巻第7章：207a33-b27	様々な無限
11	『自然学』第3巻第7章：207b27-8a4	数学者の実践、質料としての無限
12	『自然学』第3巻第8章	諸見解の批判的検討
13	議論2	論点の確認と討論
14	まとめ	授業内容の振り返りとレポート構想の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回全員がテクストと注釈を事前に読み、担当になった回ではレジュメを用意すること。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
ギリシア語のテクストは次のものを用いるが、教員が配布する。
- W. D. Ross. 1936. Aristotle's Physics. Oxford: Clarendon Press.
日本語訳は次のものを用いる。
- 内山勝利（2017）『自然学』新版アリストテレス全集、岩波書店.
- 出隆（1968）『自然学』アリストテレス全集、岩波書店.
ギリシア語未修者の参加も可能だが、その場合は英語または仏独語などで書かれた注釈を担当してもらう。以下はその一例である。
- Hussey, Edward. 1983. Physics: Books III and IV. Oxford: Oxford University Press.

【参考書】
講義中に随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
「到達目標」に記した内容の到達度に照らして、① 平常時の参加度（60%）② 期末レポート（40%）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】
今年度は該当なし

【その他の重要事項】
古代哲学史特殊講義1と合わせて受講することを勧める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
古代ギリシア哲学
＜研究テーマ＞
特に心の哲学と形而上学を中心に、アリストテレス哲学全般に関心がある。
＜主要研究業績＞
（2023）「Λ前半部の展開」『ギリシャ哲学セミナー論集』19、1–14頁.
（2022）「アイティアーのもつれ」『哲學』第73号、363– 374頁.
2021. Aristotle's disturbing relatives. Apeiron 54, no.4: 451–472.

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course focuses on Book III of Aristotle's Physics. Book III addresses the concepts of "change" and "the infinite," which are central to Aristotle's natural philosophy, and raises a range of interpretive issues. In this course, we aim to read and interpret these topics in light of recent scholarship.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students will have a thorough knowledge of the detailed structure of Book III of Aristotle's Physics and will be able to critically engage with recent scholarship, particularly concerning "change" and "the infinite."
（Learning activities outside of classroom）
For each class meeting, all students must complete the assigned readings in advance, and those assigned as presenters are required to prepare a written summary. Before and after each class meeting, students are expected to spend approximately four hours preparing for and reviewing the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following: 1. Class participation: 60%, 2. Term-end paper: 40%.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

論理学特殊講義１

安東　祐希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ゲンツェンの基本定理の証明を学ぶ。

【到達目標】
関連分野への影響も踏まえながら、基本定理の証明を細部にわたり理解し、自ら証明を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	証明の方針	論文(III:3.1前文)部分
第2回	自由変数の付け替え	論文(III:3.10)部分
第3回	左上式が公理	論文(III:3.111-112)部分
第4回	左上式が右弱化	論文(III:3.113.1-2)部分
第5回	上式が左右連言等	論文(III:3.113.31-32)部分
第6回	上式が左右全称等	論文(III:3.113.33-36)部分
第7回	右階数が1より大	論文(III:3.121前文)部分
第8回	Ｉが左構造規則	論文(III:3.121.21)部分
第9回	Ｉの上式が一つ	論文(III:3.121.22)部分
第10回	Ｉの上式が二つ	論文(III:3.121.23)部分
第11回	右階数が1	論文(III:3.122)部分
第12回	NJにおける切断	論文(III:3.21)部分
第13回	階数が2	論文(III:3.231)部分
第14回	階数が2より大	論文(III:3.232)部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。なお、予復習時間の標準は4時間である。

【テキスト（教科書）】
G. Gentzen, Untersuchungen über das logische Schließen, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szaboによる英訳、Investigations into logical deduction, in *The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】
・Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
・A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】
到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容（50%）において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答（50%）において評価する。

【学生の意見等からの気づき】
具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
数理論理学（証明論）
〈研究テーマ〉
証明図の正規化手続きに関する諸性質
〈主要研究業績〉
・Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.
・A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.
・Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline (in English)】

[Course outline]
This course deals with the proof of Gentzen's Hauptsatz.

[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the followings:
-To comprehend the logical sysmtems where Hauptsatz is expressed.
-To prove Hauptsatz in detail.

[Learning activities outside of classroom]
Students will be expected to do exercises with many sheets of paper. Your study time will be more than four hours for a class.

[Grading Criteria/Policies]
Final grade will be calculated according to the following process:
Presentation as the person in charge for a part of the text (50%) and contribution in question-and-answer sections (50%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

論理学特殊講義２

安東　祐希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ゲンツェンの基本定理の応用例を学ぶ。合わせて、複数の体系に関する同等性を学ぶ。

【到達目標】
関連分野への影響も踏まえながら、直観主義命題論理の決定問題などに対して基本定理を応用できて、基本定理で使用される体系と他の体系との同等性を証明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	命題論理の無矛盾性	論文(IV:1.1)部分
第2回	直観主義の決定問題	論文(IV:1.2)部分
第3回	排中律	論文(IV:1.3)部分
第4回	強い形の基本定理	論文(IV:2.1)部分
第5回	強い定理の証明	論文(IV:2.2)部分
第6回	定理の他の強め方	論文(IV:2.3)部分
第7回	算術の体系	論文(IV:3.1)部分
第8回	帰納法無しの算術	論文(IV:3.2)部分
第9回	体系の拡張	論文(IV:3.3)部分
第10回	同等性と既存体系	論文(V:§1-2)部分
第11回	LHJからNJ	論文(V:§3)部分
第12回	NJからLJ	論文(V:§4)部分
第13回	LJからLHJ	論文(V:§5)部分
第14回	LHK、NKとLK	論文(V:§6)部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。なお、予復習時間の標準は4時間である。

【テキスト（教科書）】
G. Gentzen, Untersuchungen über das logische Schließen, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szaboによる英訳、Investigations into logical deduction, in *The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】
・Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
・A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】
到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容（50%）において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答（50%）において評価する。

【学生の意見等からの気づき】
具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉
数理論理学（証明論）
〈研究テーマ〉
証明図の正規化手続きに関する諸性質
〈主要研究業績〉
・Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.
・A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.
・Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline (in English)】

[Course outline]
This course deals with some applications of Gentzen's Hauptsatz and with the equivalence of related logical systems.

[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the followings:
-To apply Hauptsatz to other theorems.
-To prove that the logical system LK and LJ are equivalent to other known systems respectively.

[Learning activities outside of classroom]
Students will be expected to do exercises with many sheets of paper. Your study time will be more than four hours for a class.

[Grading Criteria/Policies]
Final grade will be calculated according to the following process:
Presentation as the person in charge for a part of the text (50%) and contribution in question-and-answer sections (50%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

近代倫理学史特殊講義１

菅沢　龍文

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「有（存在）への問い」はハイデッガー哲学の根本問題である。この問題を『有に関するカントのテーゼ』でハイデッガーは、カントの陳述を追思索するなかで深めていく。ゼミでは、そのハイデッガーの歩みをドイツ語原典テキストに沿って読み取りつつ、ハイデッガーと共に思索する。これにより、「有（存在）」の意味についての考えを深める。（昨年度の続きを読み進めて、春学期に読み終えます。秋学期にはハイデッガーの『カントと形而上学の問題』を読み進める予定です。）

【到達目標】
原典テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。
（1）原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
（2）対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
（3）他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
（4）テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
（5）レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
（6）ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
（7）日本語、英語その他の翻訳書を主に用いる参加者は、訳文や専門語の意味を正確に読みとれる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
事前に訳読担当者は訳読文をPDFでゼミ内に配布する。そしてプロトコル（前回のまとめ）担当者は前回の復習用レジュメをゼミ内に配布する。その後にゼミ本番では次のように進行する。
（1）最初に前回ゼミのプロトコル担当者の発表があり、これについての質疑応答をする。
（2）テキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
（3）テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
（4）ドイツ語の初学者も、プロトコルやレポート発表などで積極的に参加する。
（5）英訳書による参加者は、英語テキストの訳読をして、ゼミではドイツ語原文を参照しつつ、テキストの意味を考える。
（6）初めてカントのテキストに挑戦する人も、初歩的な質問をして基本理解をゼミ内で共有する。
（7）必要に応じて、オンラインでの参加も可能である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	・オリエンテーション	・ゼミの進め方 ・テキストに関して ・『有に関するカントのテーゼ』(『テーゼ』と略記）の昨年度ゼミの内容について
第2回	・可能的／現実的／必然的に有る	『テーゼ』467-468ページ
第3回	・「有と思惟」	同上468-469ページ
第4回	・「感覚を通しての触発」	同上470ページ
第5回	・「客観的レアリテート」	同上470-471ページ
第6回	・カント対ライプニッツ	同上471-472ページ
第7回	・「超越論的反省」	同上472-473ページ
第8回	・「反省に関する反省」	同上473-474ページ
第9回	・「実質と形式」	同上474-475ページ
第10回	・「存在< existentia > 」	同上475-476ページ
第11回	・「命題－主語」と「我－主語」	同上476-477ページ
第12回	・「有と思惟」における「と」	同上477-478ページ
第13回	・「各自の時に－住するもの< das Je-Weilige> 」	同上478-479ページ
第14回	・「非覆蔵性」	同上479-480ページ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備学習（2時間）：訳読担当者は翻訳文およびコメントを作成して共有する。各人は予め当該テキストを読んで内容を把握しておく。
復習・宿題（2時間）：プロトコル担当者は復習用レジュメを作成する。各人は事前に共有された復習用レジュメおよびコメントを読んで、自分の理解を確認する。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Wegmarken*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1976, pp. 445-480.

【参考書】
M・ハイデッガー『道標』（ハイデッガー全集 第９巻）辻村公一／ハルトムート・ブフナー訳、創文社、1985年、555-595頁
英訳書その他については、ゼミでお伝えします。

【成績評価の方法と基準】
（1）プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度
（2）レポート課題で確認される到達目標達成度
（1）を70 %、（2）を30 %で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
言葉を明瞭に発音するように心がける。
定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
西洋近代の哲学・倫理学
＜研究テーマ＞
カント哲学
＜主要研究業績＞
・「カントの永遠平和論――― 政治と宗教の観点から」『カントと二一世紀の平和論』日本カント協会編、人文書院、2025年。
・「カントとケーニヒスベルク大学――アリストテレス主義の観点で――」『日本カント研究　23』、2022年。
・「カントにおける「人間性の権利」概念について――カントの『法論』は批判哲学に基づくのか――」『法政大学文学部紀要』第80号、2020年。
＜その他＞
▶《三木清研究》「三木清の思想形成とハイデッガーの1924年夏学期講義――― 「ロゴスとパトスの弁証法的統一」への道――― 」『法政大学文学部紀要』第92号、2026年。
▶《翻訳：共訳》マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017年。
▶《欧文》Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.

【Outline (in English)】
(**Course outline**)

The question of being is a fundamental problem in Heidegger's philosophy. In "Kant's Thesis about Being", Heidegger deepens this question through his contemplation of Kant's statements. In this seminar, we will read Heidegger's progress by reading the original German texts and engage in reflection alongside him. In this way, we will deepen our understanding of the meaning of'Being (Sein)'.

(**Learning Objectives**)

Develop the following attitudes, skills and knowledge in relation to the source texts

(1) Return to the original texts to discover the thinkers' ideas themselves.

(2) Deepen our understanding of the subject by discovering, investigating and considering questions.

(3) Form more convincing opinions by considering the opinions of others.

(4) Compare and contrast ideas uncovered from the text with other ideas.

(5) Convey content clearly and accurately in reports.

(6) Participants who translate German texts will be able to read and understand the original German texts accurately.

(7) Participants who mainly use Japanese, English or other translations will be able to realize the meaning of translated sentences and technical terms accurately.

(**Learning activities outside of classroom**)

Preparatory study (2 hours): The translators will prepare and share their translated text and comments. Each person reads the assigned text beforehand to grasp its content.

Review and homework (2 hours): Protocol staff will prepare a summary for review and comments shared in advance of the seminar to check understanding. Each person reads the shared summary and comments beforehand to confirm their understanding.

(**Grading Criteria /Policy**)

(1) Achievement of learning objectives observed through protocol presentations (previous session summary), text comprehension, and Q&A

(2) Achievement of learning objectives assessed through report assignments

(1) accounts for 70% of the grade, and (2) accounts for 30% of the grade.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

近代倫理学史特殊講義２

菅沢　龍文

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「形而上学の根拠づけ」をカント『純粋理性批判』に探る、これをハイデッガーは『カントと形而上学の問題』の課題とする。この根拠づけは、カントの「構想力」概念を通じて遂行される。この試みは「『有と時』の問題提起の視野」の下での『純粋理性批判』解釈である（第四版への前書き）。ゼミでは、この解釈をドイツ語原典テキストに沿って読み取りつつ、追思索する。これにより、形而上学の根拠づけについての考えを深める。春学期は、序論と第一章「発端における形而上学の根拠づけ」を読み切る。

【到達目標】
原典テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。
（1）原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
（2）対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
（3）他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
（4）テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
（5）レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
（6）ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
（7）日本語、英語その他の翻訳書を主に用いる参加者は、訳文や専門語の意味を正確に読みとれる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
事前に訳読担当者は訳読文をPDFでゼミ内に配布する。そしてプロトコル（前回のまとめ）担当者は前回の復習用レジュメをゼミ内に配布する。その後にゼミ本番では次のように進行する。
（1）最初に前回ゼミのプロトコル担当者の発表があり、これについての質疑応答をする。
（2）テキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
（3）テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
（4）ドイツ語の初学者も、プロトコルやレポート発表などで積極的に参加する。
（5）英訳書による参加者は、英語テキストの訳読をして、ゼミではドイツ語原文を参照しつつ、テキストの意味を考える。
（6）初めてカントのテキストに挑戦する人も、初歩的な質問をして基本理解をゼミ内で共有する。
（7）必要に応じて、オンラインでの参加も可能である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	・オリエンテーション ・「基礎的オントロギー」	・ゼミの進め方 ・テキストについて ・テキスト：1頁
第2回	・「形而上学の根拠づけ」	・テキスト：1-3頁
第3回	・形而上学	・テキスト：5 – 6頁
第4回	・アリストテレスの形而上学	・テキスト：6 – 7頁
第5回	・「第一哲学」	・テキスト：7 – 8頁
第6回	・「特殊形而上学」と「一般形而上学」	・テキスト：8 – 9頁
第7回	・「超感性的に有るもの」	・テキスト：9 – 10頁
第8回	・「オンティッシュな認識」と「オントローギッシュな認識」	・テキスト：10 – 11頁
第9回	・「オントロギー」	・テキスト：11 – 12頁
第10回	・「オントローギッシュな真理」	・テキスト：12 – 13頁
第11回	・「アプリオリな綜合的判断」	・テキスト：13 – 14頁
第12回	・「純粋理性批判」	・テキスト：14 – 15頁
第13回	・「超越論的哲学」	・テキスト：15 – 16頁
第14回	・「超越論的真理」	・テキスト：16 – 18頁

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備学習（2時間）：訳読担当者は翻訳文を作成する。事前にゼミ内で共有された翻訳文およびコメントを読んで内容を把握する。
復習・宿題（2時間）：プロトコル担当者は復習用レジュメを作成する。事前に共有された復習用レジュメおよびコメントを読んで、理解を確認する。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, Gesamtausgabe Band 3, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1991.

【参考書】
M・ハイデッガー『カントと形而上学の問題』（ハイデッガー全集 第３巻）門脇卓爾／ハルトムート・ブフナー訳、創文社、2003年
英訳書その他については、ゼミでお伝えします。

【成績評価の方法と基準】
（1）プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度
（2）レポート課題で確認される到達目標達成度
（1）を70 %、（2）を30 %で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
言葉を明瞭に発音するように心がける。
定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
西洋近代の哲学・倫理学
＜研究テーマ＞
カント哲学
＜主要研究業績＞
・「カントの永遠平和論――― 政治と宗教の観点から」『カントと二一世紀の平和論』日本カント協会編、人文書院、2025年。
・「カントとケーニヒスベルク大学――アリストテレス主義の観点で――」『日本カント研究　23』、2022年。
・「カントにおける「人間性の権利」概念について――カントの『法論』は批判哲学に基づくのか――」『法政大学文学部紀要』第80号、2020年。
＜その他＞
▶《三木清研究》「三木清の思想形成とハイデッガーの1924年夏学期講義――― 「ロゴスとパトスの弁証法的統一」への道――― 」『法政大学文学部紀要』第92号、2026年。
▶《翻訳：共訳》マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017年。
▶《欧文》Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.

【Outline (in English)】
（**Course outline**）

Exploring the “grounding of metaphysics” in Kant’s *Critique of Pure Reason*: this is the task Heidegger sets in his *Kant and the Problem of Metaphysics*. This grounding is accomplished through Kant’s concept of “imagination.” This endeavor constitutes an interpretation of the *Critique of Pure Reason* “under the perspective of the problem of *Being and Time*” (Preface to the Fourth Edition). In this seminar, we will read and reflect on Heidegger’s interpretation alongside the original German texts. This will deepen our understanding of the grounding of metaphysics. During the spring semester, we will complete the Introduction and Chapter 1: “The Justification of Metaphysics in the Beginning.”

（**Learning Objectives**）

Develop the following attitudes, skills and knowledge in relation to the source texts

(1) Return to the original texts to discover the thinkers’ ideas themselves.

(2) Deepen our understanding of the subject by discovering, investigating and considering questions.

(3) Form more convincing opinions by considering the opinions of others.

(4) Compare and contrast ideas uncovered from the text with other ideas.

(5) Communicate content clearly and accurately in reports.

(6) Participants who translate German texts will be able to read and understand the German original accurately.

(7) Participants who mainly use Japanese, English or other translations will be able to realize the meaning of translated sentences and technical terms accurately.

（**Learning activities outside of classroom**）

Preparatory study (2 hrs): The translators will prepare their translations. Read the translations and comments shared in the seminar in advance to understand the content.

Review and homework (2 hours): Protocol staff will prepare resumes for review. Protocol officers will prepare review resumes and comments shared in advance of the seminar to check understanding.

（**Grading Criteria /Policy**）

(1) Achievement of learning objectives observed through protocol presentations (previous session summary), text comprehension, and Q&A

(2) Achievement of learning objectives assessed through report assignments

(1) accounts for 70% of the grade, and (2) accounts for 30% of the grade.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

中世哲学特殊講義１

内山　真莉子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
春学期はトマス・アクィナスの『神学大全』の中から、前年度に引き続き〈法〉について扱っている箇所を抜粋し精読する。トマスにおいて〈法〉は、「永遠法」・「自然法」・「人定法」・「神法（旧法・新法）」と区分けされているが、その中でも特に今学期は「自然法」に焦点を当てる。我々人間の理性は、世界の秩序を構成する神の理念とどのように関わり、断絶しているのかについて考察を深めたい。ラテン語原典または英語訳を使用する。

【到達目標】
・『神学大全』の正確な訳読・読解ができる。
・中世哲学の文脈・用語について理解を深め、自分なりの考察を構築できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
①全受講者にそれぞれ担当箇所を割り当て、その箇所について担当者は事前に日本語訳を作成する。
②担当箇所を音読し、日本語訳を述べ、内容について説明する。
③各箇所について全員で質疑、議論を行い、内容についての理解を深める。
④教員が質疑、議論の内容について適宜フィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキストの説明と今後の進め方について
第2回	第2-1部第94問題第1項①	「自然法は習慣か」序文・異論・反対異論
第3回	第2-1部第94問題第1項②	「自然法は習慣か」主文
第4回	第2-1部第94問題第1項③	「自然法は習慣か」異論回答
第5回	第2-1部第94問題第2項①	「自然法は多数の規定を含むか」異論・反対異論
第6回	第2-1部第94問題第2項②	「自然法は多数の規定を含むか」主文
第7回	第2-1部第94問題第2項③	「自然法は多数の規定を含むか」異論回答
第8回	第2-1部第94問題第3項①	「徳は全て自然法に属するか」異論・反対異論
第9回	第2-1部第94問題第3項②	「徳は全て自然法に属するか」主文
第10回	第2-1部第94問題第3項③	「徳は全て自然法に属するか」異論回答
第11回	第2-1部第94問題第4項①	「自然法は万人において一つか」異論・反対異論
第12回	第2-1部第94問題第4項②	「自然法は万人において一つか」主文
第13回	第2-1部第94問題第4項③	「自然法は万人において一つか」異論回答
第14回	研究進捗報告	研究の進捗報告を受けて、内容について議論・検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に各授業回の該当箇所を熟読し、内容理解に努める。
訳読担当者は該当箇所の日本語訳を作成し、内容について説明できるようにする。
本授業の準備学習・復習は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
Thomas Aquinas, Summa Theologiae, ed. Commissio Leonina, Opera Omnia, vol. IV-XII, Rome, 1888-1906.
※授業内での使用箇所についてコピーを配布する予定。

【参考書】
〈英語訳〉
Summa Theologiae: Latin text and English translation, introductions, notes, appendices, and glossaries St Thomas Aquinas, trans.by Timothy McDermott O.P., Cambridge University Press; Reissue, 2008.
〈邦訳〉
トマス・アクィナス『神学大全』高田三郎・日下昭夫・大鹿一正ほか訳、創文社、1960年。
その他、授業内で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
上記の到達目標に即して、平常点にて評価する。
①訳読担当者としての発表内容：70％
②質疑応答・議論への参加：30％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞西洋中世哲学（特にトマス・アクィナス）
＜研究テーマ＞トマス・アクィナスにおける類比思想と存在について
＜主要研究業績＞「〈シンポジウム提題〉トマス・アクィナス『形而上学注解』とアナロギア」（中世哲学会『中世思想研究』第65号、2023）、「キリストとソクラテスは一義的に「人間」と言われるか」（京大中世哲学研究会『中世哲学研究』第40号、2021）、「類概念の名称は類比的に用いられ得るのか ―トマス・アクィナスにおける「物体」という名称に関する考察―」（日本哲学会『哲學』第72号、2021）など。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In the spring semester, we will read excerpts from Thomas Aquinas's "Summa Theologiae" in detail, focusing on his discussions of law, continuing from the previous year. For Aquinas, law is divided into "eternal law," "natural law," "human law," and "divine law (old law and new law)," and this semester we will focus in particular on "natural law." We would like to consider in depth how our human reason is related to and disconnected from the divine ideal that constitutes the order of the world.
【Learning Objectives】
This course aims to develop translation and reading accuracy, logical reconstruction of arguments, and self-awareness through discussions. Doctoral students aim to gain a deeper understanding of medieval philosophy, develop their own views, and master the relevant terminology. Students may use either the Latin original or the English translation for their studies.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to read the relevant chapter from the textbook before each class meeting. The person in charge will provide a Japanese translation and explain the content. You are required to dedicate at least four hours to studying for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Contents of presentation as person in charge: 70%, in-class contribution: 30%

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

中世哲学特殊講義２

内山　真莉子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
秋学期はトマス・アクィナスの『神学大全』の中から、自然法に関する箇所を抜粋し精読する。自然法は人間理性にとって理解可能なものであり、それゆえ全ての人が遵守できる法なのだが、それは「どこから」、「どのように」下されるのかが問題となる。この箇所の精読を通じて、「人定法」についての考察を深めることも目指す。ラテン語原典または英語訳を使用する。

【到達目標】
・『神学大全』の正確な訳読・読解ができる。
・中世哲学の文脈・用語について理解を深め、自分なりの考察を構築できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
①全受講者にそれぞれ担当箇所を割り当て、その箇所について担当者は事前に日本語訳を作成する。
②担当箇所を音読し、日本語訳を述べ、内容について説明する。
③各箇所について全員で質疑、議論を行い、内容についての理解を深める。
④教員が質疑、議論の内容について適宜フィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキストの説明と今後の進め方について
第2回	第2-1部第94問題第5項①	「自然法は改変可能か」異論・反対異論
第3回	第2-1部第94問題第5項②	「自然法は改変可能か」主文
第4回	第2-1部第94問題第5項③	「自然法は改変可能か」異論回答
第5回	第2-1部第94問題第6項①	「自然法は人の心から消えるか」異論・反対異論
第6回	第2-1部第94問題第6項②	「自然法は人の心から消えるか」主文
第7回	第2-1部第94問題第6項③	「自然法は人の心から消えるか」異論回答
第8回	第2-1部第95問題第1項①	「人定法は有益か」異論・反対異論
第9回	第2-1部第95問題第1項②	「人定法は有益か」主文
第10回	第2-1部第95問題第1項③	「人定法は有益か」異論回答
第11回	第2-1部第95問題第2項①	「人定法は全て自然法に由来するか」異論と反対異論
第12回	第2-1部第95問題第2項②	「人定法は全て自然法に由来するか」主文
第13回	第2-1部第95問題第2項③	「人定法は全て自然法に由来するか」異論回答
第14回	研究進捗報告	研究の進捗報告を受けて、内容について議論・検討する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に各授業回の該当箇所を熟読し、内容理解に努める。
訳読担当者は該当箇所の日本語訳を作成し、内容について説明できるようにする。
本授業の準備学習・復習は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
Thomas Aquinas, Summa Theologiae, ed. Commissio Leonina, Opera Omnia, vol. IV-XII, Rome, 1888-1906.
※授業内での使用箇所についてコピーを配布する予定。

【参考書】
〈英語訳〉
Summa Theologiae: Latin text and English translation, introductions, notes, appendices, and glossaries St Thomas Aquinas, trans.by Timothy McDermott O.P., Cambridge University Press; Reissue, 2008.
〈邦訳〉
トマス・アクィナス『神学大全』高田三郎・日下昭夫・大鹿一正ほか訳、創文社、1960年。
その他、授業内で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
上記の到達目標に即して、平常点にて評価する。
①訳読担当者としての発表内容：70％
②質疑応答・議論への参加：30％

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞西洋中世哲学（特にトマス・アクィナス）
＜研究テーマ＞トマス・アクィナスにおける類比思想と存在について
＜主要研究業績＞「〈シンポジウム提題〉トマス・アクィナス『形而上学注解』とアナロギア」（中世哲学会『中世思想研究』第65号、2023）、「キリストとソクラテスは一義的に「人間」と言われるか」（京大中世哲学研究会『中世哲学研究』第40号、2021）、「類概念の名称は類比的に用いられ得るのか ―トマス・アクィナスにおける「物体」という名称に関する考察―」（日本哲学会『哲學』第72号、2021）など。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In the fall semester, students will continue to examine passages on "natural law" taken from Thomas Aquinas's “Summa Theologiae.” Natural law is understandable to human reason, and therefore a law that everyone can abide by, but the question is "where does it come from" and "how" it is decreed. By studying these passages, students will also enhance their understanding of the "human law."
【Learning Objectives】
This course aims to develop translation and reading accuracy, logical reconstruction of arguments, and self-awareness through discussions. Doctoral students aim to gain a deeper understanding of medieval philosophy, develop their own views, and master the relevant terminology. Students may use either the Latin original or the English translation for their studies.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to read the relevant chapter from the textbook before each class meeting. The person in charge will provide a Japanese translation and explain the content. You are required to dedicate at least four hours to studying for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Contents of presentation as person in charge: 70%, in-class contribution: 30%

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

近代ドイツ哲学史特殊講義１

吉田　敬介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業では、テオドール・W・アドルノ『否定弁証法』における「形而上学についての省察」を講読します。
　哲学的主著『否定弁証法』（*Negative Dialektik*, 1966）の最終部におかれた「形而上学についての省察」（"Meditationen zur Metaphysik"）において、アドルノは、「アウシュヴィッツ以後」という具体的状況に定位しながら、形而上学をめぐる哲学的思考を展開しています。その際にアドルノは、カント、ヘーゲル、ショーペンハウアー、キルケゴール、ニーチェ、ベンヤミン、ハイデッガーらの思想と対峙しながら、「形而上学的経験」の概念とともに、世俗化した世界においてなおも既存の現実からの超越に参与する可能性について、考察しています。
　授業では、上記テクストの精読を通して、「形而上学的経験」をめぐるアドルノの思想を正確に理解するとともに、その思想史・哲学史上の意義を考察することを試みます。さらに、そこから読み取れる思想モチーフについて、現代のコンテクストを見据えつつ、批判的に議論することも目指されます。春学期には、上記テクストの前半から中盤にかけてのドイツ語原文を講読し、議論をする予定です（英語訳での参加も可能です）。

【到達目標】
（A）『否定弁証法』の「形而上学についての省察」におけるアドルノの思想を、原文の含意や翻訳上の困難さを踏まえつつ、テクストに即して精確に理解できる。
（B）アドルノの思想の思想史・哲学史的意義を、専門的な研究成果に基づいた多角的な視点から、考察できる。
（C）理解・考察したことを、最新の研究状況を考慮した上で、現代のコンテクストから批判的に再検討できる。
※修士課程と博士後期課程では、それぞれ相応の学修と成果が求められます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　はじめにアドルノの生涯や思想、著作について導入をした後、『否定弁証法』における「形而上学についての省察」のドイツ語原文を輪読形式で講読します（英語訳での参加も可能です）。
　講読に際しては、受講者全員が事前にテクストを十分に予習していることを前提とします。予習した内容に基づき、テクストを精確に訳読し、意味内容を厳密に確認した上で、疑問点や議論したい点を発言してもらいます。また各回に記録担当者を設定します。該当者には、担当する回の講読内容やなされた議論を記録し、レジュメにまとめて次回の冒頭に発表してもらいます。その他、進捗や要望に応じて、受講者による研究発表を行ってもらう可能性があります。発言や発表に対するフィードバックは、授業の中で適宜行うようにします。受講者には、積極的な参加が望まれます。
　なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、学習支援システムを確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション アドルノ「形而上学についての省察」の導入	授業の進め方の確認 アドルノの生涯や思想、講読テクストの背景や主要論点の導入
第2回	「形而上学についての省察」講読（1）	354-355頁の精読、検討
第3回	「形而上学についての省察」講読（2）	355-356頁の精読、検討
第4回	「形而上学についての省察」講読（3）	356-357頁の精読、検討
第5回	「形而上学についての省察」講読（4）	357-358頁の精読、検討
第6回	「形而上学についての省察」講読（5）	358-359頁の精読、検討
第7回	「形而上学についての省察」講読（6）	359-361頁の精読、検討
第8回	「形而上学についての省察」講読（7）	361-363頁の精読、検討
第9回	「形而上学についての省察」講読（8）	363-366頁の精読、検討
第10回	「形而上学についての省察」講読（9）	366-368頁の精読、検討
第11回	「形而上学についての省察」講読（10）	369-371頁の精読、検討
第12回	「形而上学についての省察」講読（11）	371-372頁の精読、検討
第13回	「形而上学についての省察」講読（12）	372-374頁の精読、検討
第14回	春学期のまとめ	春学期の講読内容の整理・検討 議論と展望

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備としては、訳読ができるよう、わからない単語・熟語に関して辞書を丁寧に引き、欧文テクストを予習しておく必要があります。また復習としては、辞書や専門の事典を参照しつつ、訳読内容や授業で議論された内容を整理しておくことが望まれます。

【テキスト（教科書）】
・Th. W. Adorno, *Negative Dialektik*, in: *Gesammelte Schriften*, Suhrkamp, Bd. 6, S. 7-412（ドイツ語原文）
※テクストの詳細や入手方法に関しては、第1回の授業で説明をするので、準備はそれからで構いません。
※英語訳（*Negative Dialectics*）についての詳細も、第1回の授業時にお知らせします。

【参考書】
・テオドール・W・アドルノ『否定弁証法』木田元／徳永恂／渡辺祐邦／三島憲一／須田朗／宮武昭（訳）、作品社
・アドルノ『否定弁証法講義』細見和之／河原理／高安啓介（訳）、作品社
・麻生博之「アドルノ」（『哲学の歴史 第10巻 危機の時代の哲学【20世紀I】』中央公論新社、588-620頁所収）
その他の参考文献は、授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
成績配分は、平常点（講読時のテクスト理解、議論への参加、その他の授業への取り組みなどの総合評価）60％、発表への取り組み40％です。成績評価に際しては、【到達目標】（A）～（C）を基準とし、その達成度合いを考慮します。

【学生の意見等からの気づき】
・読解のスピードや方法について、受講者の人数やテクスト理解の度合に応じて、柔軟に無理なく進めるよう努めます。
・わかりにくい概念や思想内容、歴史的・思想的背景について、丁寧に説明するよう努めます。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業の場合に必要となるため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】
春学期と秋学期、合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
社会哲学、宗教哲学、美学
＜研究テーマ＞
キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想

＜主要研究業績＞
・「美的経験における「神学の刺」の救出―― 宗教的なものの世俗化としてのアドルノのキルケゴール受容」（論文、『マテリエ』第2号、2025年）〔ドイツ語版："Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen", *Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie*, 2018〕
・「「自然の追想」としての美学―― アドルノとメンケの主体性論からみる批判理論と美学」（論文、『思想』No.1208、2024年）
・「主体性を問うことのアクチュアリティ―― アドルノの批判的キルケゴール受容からの一試論」（論文、『法政哲学』第20号、2024年）
・クリストフ・メンケ『力――美的人間学の根本概念』（共訳、人文書院、2022年）
・「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール」（論文、『社会思想史研究』第45号、2021年）
・「隠された内面性から、外的世界との衝突へ――キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文、『哲学』第72号、2021年）
・「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文、『学習院大学人文科学論集』第22号、2013年）〔ドイツ語版："Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance", *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2015〕

【Outline (in English)】
Course outline: This course deals with Adorno's philosophy on metaphysics in his "Meditations on Metaphysics" from *Negative Dialectics* (1966).
Learning Objectives: The goals of this course are to (A) understand Adorno's philosophy on metaphysics, (B) discuss its significance in the history of philosophy, and (C) examine it in the contemporary context.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (60%), and in-class presentations (40%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

近代ドイツ哲学史特殊講義２

吉田　敬介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業では、テオドール・W・アドルノ『否定弁証法』における「形而上学についての省察」を講読します。
　哲学的主著『否定弁証法』（*Negative Dialektik*, 1966）の最終部におかれた「形而上学についての省察」（"Meditationen zur Metaphysik"）において、アドルノは、「アウシュヴィッツ以後」という具体的状況に定位しながら、形而上学をめぐる哲学的思考を展開しています。その際にアドルノは、カント、ヘーゲル、ショーペンハウアー、キルケゴール、ニーチェ、ベンヤミン、ハイデッガーらの思想と対峙しながら、「形而上学的経験」の概念とともに、世俗化した世界においてなおも既存の現実からの超越に参与する可能性について、考察しています。
　授業では、上記テクストの精読を通して、「形而上学的経験」をめぐるアドルノの思想を正確に理解するとともに、その思想史・哲学史上の意義を考察することを試みます。さらに、そこから読み取れる思想モチーフについて、現代のコンテクストを見据えつつ、批判的に議論することも目指されます。秋学期には、春学期に引き続き、上記テクストの中盤から後半にかけてのドイツ語原文を講読し、議論をする予定です（英語訳での参加も可能です）。

【到達目標】
（A）『否定弁証法』の「形而上学についての省察」におけるアドルノの思想を、原文の含意や翻訳上の困難さを踏まえつつ、テクストに即して精確に理解できる。
（B）アドルノの思想の思想史・哲学史的意義を、専門的な研究成果に基づいた多角的な視点から、考察できる。
（C）理解・考察したことを、最新の研究状況を考慮した上で、現代のコンテクストから批判的に再検討できる。
※修士課程と博士後期課程では、それぞれ相応の学修と成果が求められます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　はじめに春学期の講読内容を確認した後、引き続き、『否定弁証法』における「形而上学についての省察」のドイツ語原文を輪読形式で講読します（英語訳での参加も可能です）。
　講読に際しては、受講者全員が事前にテクストを十分に予習していることを前提とします。予習した内容に基づき、テクストを精確に訳読し、意味内容を厳密に確認した上で、疑問点や議論したい点を発言してもらいます。また各回に記録担当者を設定します。該当者には、担当する回の講読内容やなされた議論を記録し、レジュメにまとめて次回の冒頭に発表してもらいます。その他、進捗や要望に応じて、受講者による研究発表を行ってもらう可能性があります。発言や発表に対するフィードバックは、授業の中で適宜行うようにします。受講者には、積極的な参加が望まれます。
　なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、学習支援システムを確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション 春学期の振り返り	授業の進め方の確認 「形而上学についての省察」 354-374頁の内容・論点の確認
第2回	「形而上学についての省察」講読（1）	374-376頁の精読、検討
第3回	「形而上学についての省察」講読（2）	376-377頁の精読、検討
第4回	「形而上学についての省察」講読（3）	377-379頁の精読、検討
第5回	「形而上学についての省察」講読（4）	379-381頁の精読、検討
第6回	「形而上学についての省察」講読（5）	381-382頁の精読、検討
第7回	「形而上学についての省察」講読（6）	382-384頁の精読、検討
第8回	「形而上学についての省察」講読（7）	384-386頁の精読、検討
第9回	「形而上学についての省察」講読（8）	386-388頁の精読、検討
第10回	「形而上学についての省察」講読（9）	388-391頁の精読、検討
第11回	「形而上学についての省察」講読（10）	391-394頁の精読、検討
第12回	「形而上学についての省察」講読（11）	394-397頁の精読、検討
第13回	「形而上学についての省察」講読（12）	397-400頁の精読、検討
第14回	秋学期のまとめ	秋学期の講読内容の整理・検討 議論と展望

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
準備としては、訳読ができるよう、わからない単語・熟語に関して辞書を丁寧に引き、欧文テクストを予習しておく必要があります。また復習としては、辞書や専門の事典を参照しつつ、訳読内容や授業で議論された内容を整理しておくことが望まれます。

【テキスト（教科書）】
・Th. W. Adorno, *Negative Dialektik*, in: *Gesammelte Schriften*, Suhrkamp, Bd. 6, S. 7-412（ドイツ語原文）
※テクストの詳細や入手方法に関しては、第1回の授業で説明をするので、準備はそれからで構いません。
※英語訳（*Negative Dialectics*）についての詳細も、第1回の授業時にお知らせします。

【参考書】
・テオドール・W・アドルノ『否定弁証法』木田元／徳永恂／渡辺祐邦／三島憲一／須田朗／宮武昭（訳）、作品社
・アドルノ『否定弁証法講義』細見和之／河原理／高安啓介（訳）、作品社
・麻生博之「アドルノ」（『哲学の歴史 第10巻 危機の時代の哲学【20世紀I】』中央公論新社、588-620頁所収）
その他の参考文献は、授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
成績配分は、平常点（講読時のテクスト理解、議論への参加、その他の授業への取り組みなどの総合評価）60％、発表への取り組み40％です。成績評価に際しては、【到達目標】（A）～（C）を基準とし、その達成度合いを考慮します。

【学生の意見等からの気づき】
・読解のスピードや方法について、受講者の人数やテクスト理解の度合に応じて、柔軟に無理なく進めるよう努めます。
・わかりにくい概念や思想内容、歴史的・思想的背景について、丁寧に説明するよう努めます。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業の場合に必要となるため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】
春学期と秋学期、合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
社会哲学、宗教哲学、美学
＜研究テーマ＞
キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想

＜主要研究業績＞
・「美的経験における「神学の刺」の救出―― 宗教的なものの世俗化としてのアドルノのキルケゴール受容」（論文、『マテリエ』第2号、2025年）〔ドイツ語版："Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen", *Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie*, 2018〕
・「「自然の追想」としての美学―― アドルノとメンケの主体性論からみる批判理論と美学」（論文、『思想』No.1208、2024年）
・「主体性を問うことのアクチュアリティ―― アドルノの批判的キルケゴール受容からの一試論」（論文、『法政哲学』第20号、2024年）
・クリストフ・メンケ『力――美的人間学の根本概念』（共訳、人文書院、2022年）
・「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール」（論文、『社会思想史研究』第45号、2021年）
・「隠された内面性から、外的世界との衝突へ――キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文、『哲学』第72号、2021年）
・「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文、『学習院大学人文科学論集』第22号、2013年）〔ドイツ語版："Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance", *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2015〕

【Outline (in English)】
Course outline: This course deals with Adorno's philosophy on metaphysics in his "Meditations on Metaphysics" from *Negative Dialectics* (1966).
Learning Objectives: The goals of this course are to (A) understand Adorno's philosophy on metaphysics, (B) discuss its significance in the history of philosophy, and (C) examine it in the contemporary context.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (60%), and in-class presentations (40%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

近世西洋哲学特殊講義１

佐藤　真人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
講読書は以下の候補から受講者と話し合って決めたいと考えています。
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*（ライプニッツ『形而上学叙説』。前年度からの継続ですが、今年度からの参加ももちろん可）。
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*（ライプニッツ『実体の自然本性と連結についての新しい体系』とその他の前期の著述）。
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*（ライプニッツ『人間知性新論』）。
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*（ソルボンヌ大学名誉教授でライプニッツ研究者のミッシェル・フィシャンによる1のGallimard版の序文で、非常に明晰なライプニッツ哲学の解説）。
ライプニッツの壮大な哲学の考察をいずれかの著述の読解によって行います（仏語原典・英訳のいずれで参加しても可）。
ライプニッツのいずれの著述にも表れているのは、デカルト、スピノザやロックら先行の哲学者たちの思想を批判的に超克し、新たな独自の哲学体系を示そうという壮大な意図です。そしていずれの著作にも、ライプニッツが考案した様々な概念や用語によって、数多の思想が不可分に連関しつつ多様な形をとって現れます。いずれかの著述の精読を通じ、ライプニッツ哲学の内実と達成の考察をめざします。

【到達目標】
① ライプニッツ哲学（または研究書）の精確な訳読と読解ができる。
② 内容を精確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
③ テーマや問題点を自ら探し、必要な文献を読んで考察を深め、文章で表すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
以下の手順で進めます。
① 担当者による訳読と、内容の意味、意義や背景等の説明
② 質疑応答や全体での議論（フランス語や和訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	テクストの決定と今後の進め方
第2回	（以下は講読書によって変わります）『形而上学叙説』の場合は第十七項	自然法則について①
第3回	第一七項	自然法則について②
第4回	第一八項	運動量と力の区別について
第5回	第一九項	自然学における目的因について
第6回	第二〇項	自然界における善と美について
第7回	第二一項	自然界における形而上学について
第8回	第二二項	自然界における目的因と作用因の和解について
第9回	第二三項	観念における可能性と必然性について
第10回	第二四項	認識の種類について
第11回	第二五項	明晰な認識と直観について
第12回	第二六項	観念の潜勢と想起について
第13回	第二七項	観念ないし概念の起源について
第14回	第二八項	知覚における神の働きについて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
訳読担当者は、担当箇所についての説明（解釈）を準備する。和訳は予め書いてくるのではなく、原文をその場で読みながら訳すこと。その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。
本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
下記のいずれかを受講者と話し合って決定。
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*, Gallimard, 2004.
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*, GF-Flammarion, 1994.
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, GF-Flammarion, 1993.
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*（上記1の序文）.
和訳はG. W. ライプニッツ『形而上学叙説　他五篇』（佐々木能章訳）、岩波文庫、2025年。
『ライプニッツ著作集８　前期哲学』、工作舎、1990年；2018年。

【参考書】
まずは参考書に頼らず、原典の熟読から始め、内容の精確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書を各自で探すこと（授業内でも参考書については適宜言及します）。
ネット上の哲学辞典としては、「スタンフォード哲学百科事典」を勧めます。
https://plato.stanford.edu/index.html

【成績評価の方法と基準】
発表者としての内容（訳読と説明）25%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート50%（またはレポートを課さない場合、発表内容45%、参加内容55%）の割合で、【到達目標】欄に記載した①〜③の達成度合いに応じて評価します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度に応じて、内容の難易度と進展の速さ、読解の内容等を勘案します。

【その他の重要事項】
受講者の関心や講義の進展等により、他の著述を読む可能性もあります。

【担当教員の専門分野等】
デカルトの哲学、フランスと西洋近世の哲学

【研究テーマ】
主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】
「哲学史を知らねばなぜ哲学できないのか ―ジャン＝リュック・マリオンによる『形而上学の終わり』と哲学の革新について」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第30号、2025年）
「神学と人間学の交錯 ―デカルトの愛について 」（法政哲学会、『法政哲学』、第19号、2023年）
「信仰を支える人間的な論拠―デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）
「デカルト形而上学の論証の方法―類比の考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）
「デカルトの『自然の教え』とは何か―ストア派の自然本性概念との対比で―」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）
「無限か広大無辺か―デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）
「デカルトはラムス主義者か―初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）
「『規則論』は断絶した著作か―自然学と神の問題における『規則論』の方法―」（『理想』、第699号、2017年）

« La métaphysique de la « nature » dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第21号、2016年）等。

【Outline (in English)】

The primary reading for the seminar will be decided in consultation with the participants, selected from the following candidates:

1] Leibniz, *Discours de métaphysique*, Gallimard, 2004.

2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*, GF-Flammarion, 1994.

3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, GF-Flammarion, 1993.

4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*.

Participants may engage with the texts either in French or in English translation. Through close textual analysis, the seminar will examine, either Leibniz's philosophy especially in its contrast with Cartesian philosophy, or Fichant's interpretations on Leibniz's philosophy.

Students are expected by the end of the course (i) to be able to read accurately Leibniz's or Fichant's text, (ii) to understand the content and innovations of Leibniz's philosophy with precision and to be able to explain and discuss them logically, and (iii) to be able to search for problems on one's own, to deepen one's understanding and reflection by referring to the necessary literature, and to formulate arguments.

Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of the presentation of the day are to prepare translations and arguments in question. Required study time is two hours each before and after the class.

The grade will be decided on the following proportion. Presentation: 25%, In-class contribution: 25%, Term-end paper: 50% (if no paper is assigned, Presentation: 45% & In-class contribution: 55%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

近世西洋哲学特殊講義２

佐藤　真人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
以下の候補のうち、春学期に定めたものを講読します。
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*（ライプニッツ『形而上学叙説』。前年度からの継続ですが、今年度からの参加ももちろん可）。
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*（ライプニッツ『実体の自然本性と連結についての新しい体系』とその他の前期の著述）。
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*（ライプニッツ『人間知性新論』）。
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*（ソルボンヌ大学名誉教授でライプニッツ研究者のミッシェル・フィシャンによる1のGallimard版の序文で、非常に明晰なライプニッツ哲学の解説）。
ライプニッツの壮大な哲学の考察をいずれかの著述の読解によって行います（仏語原典・英訳のいずれで参加しても可）。
ライプニッツのいずれの著述にも表れているのは、デカルト、スピノザやロックら先行の哲学者たちの思想を批判的に超克し、新たな独自の哲学体系を示そうという壮大な意図です。そしていずれの著作にも、ライプニッツが考案した様々な概念や用語によって、数多の思想が不可分に連関しつつ多様な形をとって現れます。いずれかの著述の精読を通じ、ライプニッツ哲学の内実と達成の考察をめざします。

【到達目標】
① ライプニッツ哲学（または研究書）の精確な訳読と読解ができる。
② 内容を精確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
③ テーマや問題点を自ら探し、必要な文献を読んで考察を深め、文章で表すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
以下の手順で進めます。
① 担当者による訳読と、内容の意味、意義や背景等の説明
② 質疑応答や全体での議論（フランス語や和訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	第二九項	知覚における観念の役割について
第2回	第三〇項①	われわれの魂における神の作用について
第3回	第三〇項②	われわれの魂の原初的な不完全性と恩寵について①
第4回	第三〇項③	われわれの魂の原初的な不完全性と恩寵について②
第5回	第三一項①	神の選択、信仰、中間的学知について
第6回	第三一項②	神の恩寵と絶対的な決定について
第7回	第三二項	宗教における諸原理の有効性
第8回	第三三項	心身の結合について
第9回	第三四項	精神とそれ以外の諸実体の相違について
第10回	第三五項①	精神の優越性について
第11回	第三五項②	精神の表出と神について
第12回	第三六項①	神の統治と精神について①
第13回	第三六項②	神に統治と精神について②
第14回	第三七項	キリストによる至福について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
訳読担当者は、担当箇所についての説明（解釈）を準備する。和訳は予め書いてくるのではなく、原文をその場で読みながら訳すこと。その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。
本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
下記のいずれかを受講者と話し合って決定。
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*, Gallimard, 2004.
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*, GF-Flammarion, 1994.
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, GF-Flammarion, 1993.
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*（上記1の序文）.
和訳はG. W. ライプニッツ『形而上学叙説　他五篇』（佐々木能章訳）、岩波文庫、2025年。
『ライプニッツ著作集８　前期哲学』、工作舎、1990年；2018年。

【参考書】
まずは参考書に頼らず、原典の熟読から始め、内容の精確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書を各自で探すこと（授業内でも参考書については適宜言及します）。
ネット上の哲学辞典としては、「スタンフォード哲学百科事典」を勧めます。
https://plato.stanford.edu/index.html

【成績評価の方法と基準】
発表者としての内容（訳読と説明）25%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート50%（またはレポートを課さない場合、発表内容45%、参加内容55%）の割合で、【到達目標】欄に記載した①～③の達成度合いに応じて評価します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度に応じて、内容の難易度と進展の速さ、読解の内容等を勘案します。

【その他の重要事項】
受講者の関心や講義の進展等により、他の著述を読む可能性もあります。

【担当教員の専門分野等】
デカルトの哲学、フランスと西洋近世の哲学

【研究テーマ】
主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】
「哲学史を知らねばなぜ哲学できないのか ―ジャン＝リュック・マリオンによる『形而上学の終わり』と哲学の革新について」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第30号、2025年）
「神学と人間学の交錯 ―デカルトの愛について 」（法政哲学会、『法政哲学』、第19号、2023年）
「信仰を支える人間的な論拠―デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）
「デカルト形而上学の論証の方法―類比の考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）
「デカルトの『自然の教え』とは何か―ストア派の自然本性概念との対比で―」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）
「無限か広大無辺か―デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）
「デカルトはラムス主義者か―初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）
「『規則論』は断絶した著作か―自然学と神の問題における『規則論』の方法―」（『理想』、第699号、2017年）

« La métaphysique de la « nature » dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第21号、2016年）等。

【Outline (in English)】
The primary reading for the seminar will be decided in consultation with the participants, selected from the following candidates:
1] Leibniz, *Discours de métaphysique*, Gallimard, 2004.
2] Leibniz, *Système nouveau de la nature et de la communication des substances*, GF-Flammarion, 1994.
3] Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, GF-Flammarion, 1993.
4] Michel Fichant, *L'invention métaphysique*.
Participants may engage with the texts either in French or in English translation. Through close textual analysis, the seminar will examine, either Leibniz's philosophy especially in its contrast with Cartesian philosophy, or Fichant's interpretations on Leibniz's philosophy.
Students are expected by the end of the course (i) to be able to read accurately Leibniz's or Fichant's text, (ii) to understand the content and innovations of Leibniz's philosophy with precision and to be able to explain and discuss them logically, and (iii) to be able to search for problems on one's own, to deepen one's understanding and reflection by referring to the necessary literature, and to formulate arguments.
Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of the presentation of the day are to prepare translations and arguments in question. Required study time is two hours each before and after the class.
The grade will be decided on the following proportion. Presentation: 25%, In-class contribution: 25%, Term-end paper: 50% (if no paper is assigned, Presentation: 45% & In-class contribution: 55%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

近代フランス哲学史特殊講義１

大池　惣太郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ミシェル・ド・セルトーのLe lieu de l'autre（Seuil, 2005）を通読する。フランス現代思想におけるセルトーの特異な立ち位置を理解するとともに、現代において「神」についての言説がどのような制約と批評的位置に置かれているかを考察する。

【到達目標】
⑴ ミシェル・ド・セルトーの思想と議論を一定程度の水準で理解し、批評できるようになる。
⑵ フランス現代思想における「神」に関するディスクールの問題を批評的に考察できるようになる。
⑶ 原典の精読を通じて、フランス語による高水準の哲学的言説を読解する言語力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・毎回課題範囲を全員が読んで授業にのぞむ。
・授業内でディスカッションしながら、正確な訳読と内容理解を試みる。
・場合によっては、関連する別のテクストやテーマについて、参加者が発表を行う場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方とあつかうテクストの紹介
第2回	『他者の場所』講読1	p.11～p.23の検討
第3回	『他者の場所』講読2	p.24～p.36の検討
第4回	『他者の場所』講読3	p.37～p.49の検討
第5回	『他者の場所』講読4	p.50～p.62の検討
第6回	『他者の場所』講読5	p.63～p.75の検討
第7回	『他者の場所』講読6	p.76～p.88の検討
第8回	『他者の場所』講読7	p.89～p.101の検討
第9回	『他者の場所』講読8	p.102～p.114の検討
第10回	『他者の場所』講読9	p.115～p.127の検討
第11回	『他者の場所』講読10	p.128～p.140の検討
第12回	『他者の場所』講読11	p.141～p.153の検討
第13回	『他者の場所』講読12	p.154～p.166の検討
第14回	『他者の場所』講読13	p.167～p.179の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・毎回課題範囲を各自が読み、不明点を明確にしてからゼミに臨む。
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Michel de Certeau, Le lieu de l'autre. Histoire religieuse et mystique, Seuil, 2005.

【参考書】
『思想』2025年第12号「ミシェル・ド・セルトー―― 生誕一〇〇年」no.1220（岩波書店、2025年）
ジャン=リュック・ナンシー『神的な様々の場』（松籟社、2001年）

【成績評価の方法と基準】
到達目標３項目の達成度合いに応じて、平常点（訳出への貢献30％、内容理解への貢献30％、ディスカッションへの貢献40％）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
とくになし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
フランス現代哲学、表象文化論
＜研究テーマ＞
バタイユ思想研究、東西神秘主義比較研究、20・21世紀フランス思想・文学、言語と経験の哲学
＜主要研究業績＞
・「生成AIとの対話―バタイユの「接地」不安について」（『明學佛文論叢』58号、2025年）
・「バタイユと虫たち―動物性をめぐるバタイユ的想像力について」（『明學佛文論叢』56号、2023年）
・「供犠の思考、内在性の思考―ジョルジュ・バタイユ『無神学大全』三部作の通時的読解」（『フランス語フランス文学研究』117巻、2021年）

【Outline (in English)】
This course offers a complete reading of Michel de Certeau's Le lieu de l'autre (2005). Students will examine Certeau's unique position in modern French thought and consider how discourse on "God" is shaped by intellectual limits and critical perspectives in contemporary contexts.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Evaluation:Translation work: 30% + Contribution to content understanding: 30% + Participation in discussion: 40%

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

近代フランス哲学史特殊講義２

大池　惣太郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ミシェル・ド・セルトーのLe lieu de l'autre（Seuil, 2005）を通読する。フランス現代思想におけるセルトーの特異な立ち位置を理解するとともに、現代において「神」についての言説がどのような制約と批評的位置に置かれているかを考察する。

【到達目標】
⑴ ミシェル・ド・セルトーの思想と議論を一定程度の水準で理解し、批評できるようになる。
⑵ フランス現代思想における「神」に関するディスクールの問題を批評的に考察できるようになる。
⑶ 原典の精読を通じて、フランス語による高水準の哲学的言説を読解する言語力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・毎回課題範囲を全員が読んで授業にのぞむ。
・授業内でディスカッションしながら、正確な訳読と内容理解を試みる。
・場合によっては、関連する別のテクストやテーマについて、参加者が発表を行う場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	前期のふりかえり	前期のふりかえりとディスカッション
第2回	『他者の場所』講読14	p.180～p.192の検討
第3回	『他者の場所』講読15	p.193～p.205の検討
第4回	『他者の場所』講読16	p.206～p.218の検討
第5回	『他者の場所』講読17	p.219～p.231の検討
第6回	『他者の場所』講読18	p.232～p.244の検討
第7回	『他者の場所』講読19	p.245～p.257の検討
第8回	『他者の場所』講読20	p.258～p.270の検討
第9回	『他者の場所』講読21	p.271～p.283の検討
第10回	『他者の場所』講読22	p.284～p.296の検討
第11回	『他者の場所』講読23	p.297～p.309の検討
第12回	『他者の場所』講読24	p.310～p.322の検討
第13回	『他者の場所』講読25	p.323～p.331の検討
第14回	総括 現代と神学	まとめと全体をふまえたディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・毎回課題範囲を各自が読み、不明点を明確にしてからゼミに臨む。
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Michel de Certeau, Le lieu de l'autre. Histoire religieuse et mystique, Seuil, 2005.

【参考書】
『思想』2025年第12号「ミシェル・ド・セルトー―― 生誕一〇〇年」no.1220（岩波書店、2025年）
ジャン=リュック・ナンシー『神的な様々の場』（松籟社、2001年）

【成績評価の方法と基準】
到達目標３項目の達成度合いに応じて、平常点（訳出への貢献30％、内容理解への貢献30％、ディスカッションへの貢献40％）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
とくになし

【学生が準備すべき機器他】
とくになし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
フランス現代哲学、表象文化論
＜研究テーマ＞
バタイユ思想研究、東西神秘主義比較研究、20・21世紀フランス思想・文学、言語と経験の哲学
＜主要研究業績＞
・「生成AIとの対話―バタイユの「接地」不安について」（『明學佛文論叢』58号、2025年）
・「バタイユと虫たち―動物性をめぐるバタイユ的想像力について」（『明學佛文論叢』56号、2023年）
・「供犠の思考、内在性の思考―ジョルジュ・バタイユ『無神学大全』三部作の通時的読解」（『フランス語フランス文学研究』117巻、2021年）

【Outline (in English)】
This course offers a complete reading of Michel de Certeau's Le lieu de l'autre (2005). Students will examine Certeau's unique position in modern French thought and consider how discourse on "God" is shaped by intellectual limits and critical perspectives in contemporary contexts.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Evaluation:Translation work: 30% + Contribution to content understanding: 30% + Participation in discussion: 40%

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

法哲学特殊講義１

内藤　淳

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業のテーマは「道徳の動機」である。「人はなぜ道徳的に行動するのか？」は倫理学の基本的な問いのひとつだが、その動機について心理学的に分析したベイトソンの論文を精読することにより、道徳の意義を突き詰めて考えるのがこの授業の目的になる。西洋の倫理学では「道徳に従おうとする意志」などにその動機を見出す考え方が知られているが、そうではなくて「道徳的に見られようとする意識」すなわち「道徳的偽善」に根本的な動機を見出すのがベイトソンの主張で、従来の倫理学の考え方と対比しつつこの主張の中身を多角的に吟味するのが授業の内容である。

【到達目標】
①道徳を進化的な視点で分析する視点を理解する。
②道徳行動に伴う人間の内面作用を心理学的・実証的に分析する視点を理解し、倫理学・哲学的な分析との違いが分かるようになる。
③人間にとっての道徳行動の意義について自分の考えを持ち、その内容を論理的に説明できるようになる。
④その説明を文章で書く際に、正確な日本語で論理的な組み立てができるようになる。
⑤英語の専門文献を精密に読解し、それについての正確な日本語訳が作れるようになる。
＊学部生が受講する場合は、このうち①〜④が主な到達目標になる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
対面授業を行う。毎回担当者を決め、テキスト担当箇所の日本語訳の作成を課題として課す。個々の授業においてその訳文の吟味・検討を行い、問題個所を修正する。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討、受講者からの質問や意見へのフィードバックを行う。具体的な題材や内容は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第2回	「道徳の動機」の分析について	道徳行動とそれを生み出す内面作用の関連についての解説
第3回	テキスト論文の全体像について	テキスト論文51頁の訳と解釈
第4回	道徳原理と動機の関係について	テキスト論文51-52頁の訳と解釈
第5回	道徳の偽善的側面について	テキスト論文52-53頁の訳と解釈
第6回	道徳の統合的側面について	テキスト論文53頁の訳と解釈
第7回	道徳の動機の調査方法について	テキスト論文53-54頁の訳と解釈
第8回	道徳の動機に関する調査実験内容について	テキスト論文54-55頁の訳と解釈
第9回	道徳の動機に関する調査結果の分析	テキスト論文55-56頁の訳と解釈
第10回	調査実験についての考察と評価	受講者による報告とディスカッション
第11回	心理学と倫理学の関係について	参考論文3-9頁の検討
第12回	道徳判断を生み出す内面過程について	参考論文9-17頁の検討
第13回	道徳意識の発達について	参考論文18-23頁の検討
第14回	道徳の動機の実証的研究手法について	テキスト論文前半の総合的検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文や報告の担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日本語訳やレジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】
C. Daniel Batson, Moral Masquerades: Experimenatal Exploration of the Nature of Moral Motivation, Phenom Cogn Sci(2008)7:51-66.
［参考論文］
太田紘史「モラル・サイコロジーの展開」太田紘史編著『モラル・サイコロジー：心と行動から探る倫理学』春秋社、2016年、所収

【参考書】
太田紘史編著『モラル・サイコロジー：心と行動から探る倫理学』春秋社、2016年
ロバート・クルツバン『だれもが偽善者になる本当の理由』柏書房、2014年
クリストファー・ボーム『モラルの起源：道徳、良心、利他行動はどのように進化したのか』白揚社、2014年
リチャード・ランガム『善と悪のパラドックス：ヒトの進化と〈自己家畜化〉の歴史』NTT出版、2020年
スティーブン・ピンカー『人間の本性を考える』（上）〜（下）日本放送出版協会、2004年
スティーブン・ピンカー『心の仕組み』（上）〜（下）日本放送出版協会、2003年
その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
担当箇所の訳文・発表内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①〜⑤の達成度（学部生の場合は「到達目標」①〜④）を評価する。担当箇所の訳文・発表内容の評価：80％。それ以外での授業での議論内容：20％。

【学生の意見等からの気づき】
訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。文法など、基礎的な要素の理解の徹底にも努めたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞法哲学
＜研究テーマ＞進化心理学に基づく人間本性と道徳の基礎の研究
＜主要研究業績＞
「進化的暴露論証の基底の批判的検証：道徳性と利他性の関連について」(1)(2・完)法政大学文学部紀要87・88号、2023-24年
「功利原理と人間本性：ミルを進化心理学で批判する」法政大学文学部紀要78号、2018年
「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要75号、2017年
「平和は『絶対に』求めるべきか？　：ホッブズを進化心理学で修正する」（1）（2・完）法政大学文学部紀要71号・72号、2015年
「憲法学は立憲的憲法を正当化できるか？」(1)(2・完)一橋法学12巻2号・3号、2013年
「一夫一婦制と『憲法の目的』」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012年
「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座　人権論の再定位５）』法律文化社、2010年
「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容をも持ちうるか」『新世代法政策学研究』第８号、2010年

【Outline (in English)】
（Course outline）
The theme of this class is “Moral Motivation.” While Western ethics often locates motivation in concepts like “the will to follow morality,” we will examine a paper that instead identifies the fundamental motivation as “the desire to be seen as moral” — that is, “moral hypocrisy.” The class will involve comparing this argument with traditional ethical perspectives and critically analyzing its substance from multiple angles.
（Learning Objectives）
The goals of this course is to help students form their own opinions about the foundations and significance of morality, based on an understanding of the motivation behind human moral behavior.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expedted to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on the score of translations or presentations of assigned sections of the text(80%), plus in-class contribution(20%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

法哲学特殊講義２

内藤　淳

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
春学期に続いて「道徳の動機」を授業テーマとしてベイトソンの論文精読を中心にその検討を行う。「人はなぜ道徳的に行動するのか？」は倫理学の基本的な問いのひとつだが、その動機について心理学的に分析したベイトソンの論文の内容分析を通して、道徳の意義を突き詰めて考えるのがこの授業の目的になる。西洋の倫理学では「道徳に従おうとする意志」などにその動機を見出す考え方が知られているが、そうではなくて「道徳的に見られようとする意識」すなわち「道徳的偽善」に根本的な動機を見出すのがベイトソンの主張で、従来の倫理学の考え方と対比しつつこの主張の中身を多角的に吟味するのが授業の内容である。

【到達目標】
①道徳を進化的な視点で分析する視点を理解する。
②道徳行動に伴う人間の内面作用を心理学的・実証的に分析する視点を理解し、倫理学・哲学的な分析との違いが分かるようになる。
③人間にとっての道徳行動の意義について自分の考えを持ち、その内容を論理的に説明できるようになる。
④その説明を文章で書く際に、正確な日本語で論理的な組み立てができるようになる。
⑤英語の専門文献を精密に読解し、それについての正確な日本語訳が作れるようになる。
＊学部生が受講する場合は、このうち①～④が主な到達目標になる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
対面授業を行う。毎回担当者を決め、テキスト担当箇所の日本語訳の作成を課題として課す。個々の授業においてその訳文の吟味・検討を行い、問題個所を修正する。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討、受講者からの質問や意見へのフィードバックを行う。具体的な題材や内容は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第2回	「道徳の動機」の心理学的分析の概要について	春学期の内容のポイント確認
第3回	道徳の動機に関する第二実験の方法について	テキスト論文56-57頁の訳と解釈
第4回	道徳の動機に関する第二実験の内容について	テキスト論文57頁の訳と解釈
第5回	実験結果を通じた道徳判断過程の分析について	テキスト論文57-58頁の訳と解釈
第6回	実験結果を通じた道徳認識過程の分析について	テキスト論文58-59頁の訳と解釈
第7回	道徳の動機に関する第三実験の方法について	テキスト論文59-60頁の訳と解釈
第8回	道徳の動機に関する第三実験の内容について	テキスト論文60-61頁の訳と解釈
第9回	道徳的偽善と道徳的統合性の関係について	テキスト論文61-62頁の訳と解釈
第10回	道徳的偽善を生み出す内面作用について	テキスト論文62-63頁の訳と解釈
第11回	道徳的偽善の適応的機能について	テキスト論文63-64頁の訳と解釈
第12回	道徳的偽善の効果について	テキスト論文64頁の訳と解釈
第13回	本研究の課題について	テキスト論文全体に関する批判的検討
第14回	心理学的道徳研究の展開可能性について	参加者によるディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文や報告の担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日本語訳やレジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】
C. Daniel Batson, Moral Masquerades: Experimenatal Exploration of the Nature of Moral Motivation, Phenom Cogn Sci(2008)7:51-66.

【参考書】
太田紘史編著『モラル・サイコロジー：心と行動から探る倫理学』春秋社、2016年
ロバート・クルツバン『だれもが偽善者になる本当の理由』柏書房、2014年
クリストファー・ボーム『モラルの起源：道徳、良心、利他行動はどのように進化したのか』白揚社、2014年
リチャード・ランガム『善と悪のパラドックス：ヒトの進化と〈自己家畜化〉の歴史』NTT出版、2020年
スティーブン・ピンカー『人間の本性を考える』（上）～（下）日本放送出版協会、2004年
スティーブン・ピンカー『心の仕組み』（上）～（下）日本放送出版協会、2003年
その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】
担当箇所の訳文・発表内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①～⑤の達成度（学部生の場合は「到達目標」①～④）を評価する。担当箇所の訳文・発表内容の評価：80％。それ以外での授業での議論内容：20％。

【学生の意見等からの気づき】
訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。文法など、基礎的な要素の理解の徹底にも努めたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞法哲学
＜研究テーマ＞進化心理学に基づく人間本性と道徳の基礎の研究
＜主要研究業績＞
「進化的暴露論証の基底の批判的検証：道徳性と利他性の関連について」(1)(2・完)法政大学文学部紀要87・88号、2023-24年
「功利原理と人間本性：ミルを進化心理学で批判する」法政大学文学部紀要78号、2018年
「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要75号、2017年
「平和は『絶対に』求めるべきか？　：ホッブズを進化心理学で修正する」（1）（2・完）法政大学文学部紀要71号・72号、2015年
「憲法学は立憲的憲法を正当化できるか？」(1)(2・完)一橋法学12巻2号・3号、2013年
「一夫一婦制と『憲法の目的』」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012年

「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座　人権論の再定位５）』法律文化社、2010年
「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容をも持ちうるか」『新世代法政策学研究』第８号、2010年

【Outline (in English)】
（Course outline）
The theme of this class is “Moral Motivation.” While Western ethics often locates motivation in concepts like “the will to follow morality,” we will examine a paper that instead identifies the fundamental motivation as “the desire to be seen as moral” — that is, “moral hypocrisy.” The class will involve comparing this argument with traditional ethical perspectives and critically analyzing its substance from multiple angles.
（Learning Objectives）
The goals of this course is to help students form their own opinions about the foundations and significance of morality, based on an understanding of the ｍotivation ｂehind human moral behavior.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expedted to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on the score of translations or presentations of assigned sections of the text(80%), plus in-class contribution(20%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

現象学特殊講義１

君嶋　泰明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』（1927年）を読みます。同書でハイデガーは、「存在」という概念がその意味をつねに「時間」から得ている／同概念がつねに「時間」を地平として理解されていると考え、そのことを論証しようとしました。同書をドイツ語原文で精読することを通じて、これがいかなる企図かを理解することを目指します。ドイツ語が読めない受講生は英訳での参加も可です。ドイツ語初学者や学部生の参加も歓迎します。
博士後期課程に所属する学生を対象に、上記に加え、博士論文執筆のための研究指導を行います。

【到達目標】
①『存在と時間』のドイツ語原文（ないし英訳）の正確な訳読ができる。
②同書の思想を理解し、自分の理解したことを噛み砕いて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示します。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深めます。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行います。
なお、以下の授業計画のページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	『存在と時間』の概要の説明
第2回	『存在と時間』の読解①	報告と討議（1-3頁）
第3回	『存在と時間』の読解②	報告と討議（4-6頁）
第4回	『存在と時間』の読解③	報告と討議（7-9頁）
第5回	『存在と時間』の読解④	報告と討議（10-13頁）
第6回	『存在と時間』の読解⑤	報告と討議（14-16頁）
第7回	『存在と時間』の読解⑥	報告と討議（17-19頁）
第8回	『存在と時間』の読解⑦	報告と討議（20-22頁）
第9回	『存在と時間』の読解⑧	報告と討議（23-25頁）
第10回	『存在と時間』の読解⑨	報告と討議（26-28頁）
第11回	『存在と時間』の読解⑩	報告と討議（29-31頁）
第12回	『存在と時間』の読解⑪	報告と討議（32-34頁）
第13回	『存在と時間』の読解⑫	報告と討議（35-36頁）
第14回	『存在と時間』の読解⑬	報告と討議（37-39頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨みます。参加者は該当箇所を熟読してきます。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer.
希望者には該当箇所のコピーを配布します。

【参考書】
適宜授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
担当者としての評価が80%、議論への参加度の評価が20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
現象学、技術の哲学
＜研究テーマ＞
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討、技術と人間の関係の研究
＜主要研究業績＞
・「ハイデガーの存在概念を再構成する」（『哲学研究』613号、2025年）
・「初期ハイデガーの実存思想――キルケゴール受容の観点から」（『法政哲学』20号、2024年）
・「存在要求の要求とそれへの応答――ハイデガー技術論の理解のために」（『Heidegger-Forum』17号、2023年）
・「ボルグマンからハイデガーへ――ハイデガー技術論再考」（『法政哲学』18号、2022年）
・「「存在忘却」とは何か」（『法政大学文学部紀要』82号、2021年）
・「信仰と哲学――ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」（『アルケー』26号、2018年）

【Outline (in English)】
(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's *Sein und Zeit*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand the thought in *Sein und Zeit*.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

現象学特殊講義２

君嶋　泰明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
春学期に引き続き、マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』（1927年）を読みます。同書でハイデガーは、「存在」という概念がその意味をつねに「時間」から得ている／同概念がつねに「時間」を地平として理解されていると考え、そのことを論証しようとしました。同書をドイツ語原文で精読することを通じて、これがいかなる企図かを理解することを目指します。ドイツ語が読めない受講生は英訳での参加も可です。ドイツ語初学者や学部生の参加も歓迎します。
博士後期課程に所属する学生を対象に、上記に加え、博士論文執筆のための研究指導を行います。

【到達目標】
①『存在と時間』のドイツ語原文（ないし英訳）の正確な訳読ができる。
②同書の思想を理解し、自分の理解したことを噛み砕いて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示します。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深めます。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行います。
なお、以下の授業計画のページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	『存在と時間』の概要の説明
第2回	『存在と時間』の読解 ①	報告と討議（40-42頁）
第3回	『存在と時間』の読解 ②	報告と討議（43-46頁）
第4回	『存在と時間』の読解 ③	報告と討議（47-49頁）
第5回	『存在と時間』の読解 ④	報告と討議（50-53頁）
第6回	『存在と時間』の読解 ⑤	報告と討議（54-56頁）
第7回	『存在と時間』の読解 ⑥	報告と討議（57-59頁）
第8回	『存在と時間』の読解 ⑦	報告と討議（60-62頁）
第9回	『存在と時間』の読解 ⑧	報告と討議（63-65頁）
第10回	『存在と時間』の読解 ⑨	報告と討議（66-68頁）
第11回	『存在と時間』の読解 ⑩	報告と討議（69-71頁）
第12回	『存在と時間』の読解 ⑪	報告と討議（72-74頁）
第13回	『存在と時間』の読解 ⑫	報告と討議（75-76頁）
第14回	『存在と時間』の読解 ⑬	報告と討議（77-79頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨みます。参加者は該当箇所を熟読してきます。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer.
希望者には該当箇所のコピーを配布します。

【参考書】
適宜授業で指示します

【成績評価の方法と基準】
担当者としての評価が80%、議論への参加度の評価が20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
現象学、技術の哲学
＜研究テーマ＞
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討、技術と人間の関係の研究
＜主要研究業績＞
・「ハイデガーの存在概念を再構成する」（『哲学研究』613号、2025年）
・「初期ハイデガーの実存思想――キルケゴール受容の観点から」（『法政哲学』20号、2024年）
・「存在要求の要求とそれへの応答――ハイデガー技術論の理解のために」（『Heidegger-Forum』17号、2023年）
・「ボルグマンからハイデガーへ――ハイデガー技術論再考」（『法政哲学』18号、2022年）
・「「存在忘却」とは何か」（『法政大学文学部紀要』82号、2021年）
・「信仰と哲学――ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」（『アルケー』26号、2018年）

【Outline (in English)】
(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's *Sein und Zeit*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand the thought in *Sein und Zeit*.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

日本思想史特殊講義１

頼住　光子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、道元の主著である『正法眼蔵』の主要巻について、その思想構造や思想史的意義を中心に検討する。
また、大学院の授業でもある本授業では、修士論文、博士論文、学会誌投稿論文などの論文を執筆するための指導も行う。卒業論文の指導もあわせて行う。参加者が、自分自身の研究テーマに基づいて発表を行い、それに基づいて議論を行ってテーマに対する理解を深める。
授業は、演習形式と講義で行う。演習としては、当番が発表を行い、それに基づいて参加者と議論を行う。
なお、必要に応じて講義を行い、教員から授業に関して必要事項を補足する。

【到達目標】
本講義を受講することによって、道元の思想構造についての基本知識を得ることができる。特に、『正法眼蔵』の主要な巻を読解することを通じて、禅仏教の専門用語に熟達し、仏教思想をより深く幅広く正確に理解することが可能となる。
あわせて修士論文、博士論文、学会誌投稿論文をはじめとする各種論文を執筆するための準備を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
当番の学生が発表し、それに基づいて議論を行う。必要事項について教員の方から補足説明を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入と授業方法についての説明、打ち合わせ	この授業の意図と授業方法等について説明する。
第2回	『正法眼蔵』とは何か	『正法眼蔵』についてその概要を講義形式で説明する。
第3回	『正法眼蔵』巻講読（１）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第4回	『正法眼蔵』講読（２）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第5回	『正法眼蔵』講読（３）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第6回	論文構想発表（１）	論文についての構想を各自発表する。発表内容について議論やアドヴァイスを行う。
第7回	論文構想発表（２）	論文についての構想を各自発表する。発表内容について議論やアドヴァイスを行う。
第8回	論文構想発表（３）	論文についての構想を各自発表する。発表内容について議論やアドヴァイスを行う。
第9回	『正法眼蔵』講読（４）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第10回	『正法眼蔵』「現成公案」巻講読（５）	『正法眼蔵』「現成公案」巻について当番が発表し議論を行う。
第11回	『正法眼蔵』講読（６）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第12回	論文構想発表（４）	論文についての構想を各自発表する。発表内容について議論やアドヴァイスを行う。
第13回	論文構想発表（５）	論文についての構想を各自発表する。発表内容について議論やアドヴァイスを行う。
第14回	総括	『正法眼蔵』の思想構造について総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
水野弥穂子校注『正法眼蔵』（１）岩波文庫

【参考書】
授業中に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
「到達目標」の達成度合いに応じて以下の配分で評価する。
発表４０％
平常点６０％

【学生の意見等からの気づき】
仏教用語については思想的意味を丁寧に説明する。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
質問は随時受け付けます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
倫理学・日本倫理思想史
＜研究テーマ＞
日本中世仏教
＜主要研究業績＞
『日本倫理思想の考え方』山川出版社、2025
『原文で読む日本の思想』放送大学教育振興会、2024
『正法眼蔵入門』角川ソフィア文庫、2014など

【Outline (in English)】
In this class, we will examine the major volumes of Dogen's main work, the Shobogenzo, focusing on the structure of his thought and its significance in the history of thought.
This class will also provide guidance for writing master's theses, doctoral dissertations, and papers for academic journals. Participants will give presentations based on their own research themes and engage in discussions based on their presentations to deepen their understanding of the themes.
Classes will be conducted in the form of exercises and lectures. As for exercises, the person in charge will give a presentation and discuss with participants based on the presentation.
Lectures will be given as necessary, and the instructor will supplement the class with necessary information.
Grading will be decided based on presentation for 40% and in-class contribution for 60%.

PHL500B1（哲学 / Philosophy 500）

日本思想史特殊講義2

頼住　光子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、道元の主著である『正法眼蔵』の主要巻について、その思想構造や思想史的意義を中心に検討する。
また、大学院の授業でもある本授業では、修士論文、博士論文、学会誌投稿論文などの論文を執筆するための指導も行う。卒業論文の指導も併せて行う。参加者が、自分自身の研究テーマに基づいて発表を行い、それに基づいて議論を行ってテーマに対する理解を深める。
授業は、演習形式と講義で行う。演習としては、当番が発表を行い、それに基づいて参加者と議論を行う。
なお、必要に応じて講義を行い、教員から授業に関して必要事項を補足する。

【到達目標】
・『正法眼蔵』の記述を読解することを通じて、仏教の基礎概念を習得し、道元の思惟方法についての理解を深める。
・道元の思想の表現方法の特性を理解し、それを応用して道元の他の文章も理解できるようになる。
・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
（1）受講者全員に『正法眼蔵』の担当箇所を割り当てる。
（2）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、演習で発表をする。
（3）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
（4）討論の中で見出された重要な論点については、次回以降の演習でも継続的に議論していく。
（5）講師から『正法眼蔵』を読解するために不可欠な仏教思想の基本知識に関する知識について、適宜、補足説明する。
（6）理解の到達度を計るために適宜リアクションペーパーを提出してもらい、次回の授業においてフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	『正法眼蔵』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	『正法眼蔵』講読（1）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第3回	『正法眼蔵』講読（2）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第4回	『正法眼蔵』講読（3）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第5回	『正法眼蔵』講読（4）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第6回	『正法眼蔵』講読（5）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第7回	『正法眼蔵』講読（6）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第8回	『正法眼蔵』講読（7）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第9回	『正法眼蔵』講読（8）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第10回	『正法眼蔵』講読（9）	『正法眼蔵』「仏性」巻について当番が発表し議論を行う。
第11回	『正法眼蔵』講読（10）	『正法眼蔵』について当番が発表し議論を行う。
第12回	論文指導（1）	各自の書くべき論文について中間報告、構想発表を行う。
第13回	論文指導（2）	各自の書くべき論文について中間報告、構想発表を行う。
第14回	総括	『正法眼蔵』から道元の思想構造の概略を理解し、議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の該当箇所を熟読した上で演習に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。
本授業の準備・復習時間は、計6時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
『正法眼蔵』（一）（岩波文庫）
参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】
まずは『正法眼蔵』の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。
参考文献は演習の際に適宜、示す。

【成績評価の方法と基準】
【到達目標】欄に記載した4点の達成度を基準としながら、発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（40％）と、演習内での発言や演習への参加姿勢（60％）によって評価する。
演習においては毎回の発言・質問を「必須」とするので、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で演習に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】
『正法眼蔵』の用語や語法について、できる限り丁寧に説明する。

【学生が準備すべき機器他】
発表担当の際には必ず紙媒体のレジュメを作成し配布すること。

【その他の重要事項】
質問は随時受け付ける。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
倫理学・日本倫理思想史
＜研究テーマ＞
日本中世仏教
＜主要研究業績＞
『日本倫理思想の考え方』山川出版社、2025
『原文で読む日本の思想』放送大学教育振興会、2024
『正法眼蔵入門』角川ソフィア文庫、2014など

【Outline (in English)】
In this class, we will examine the major volumes of Dogen's main work, the Shobogenzo, focusing on the structure of his thought and its significance in the history of thought.
This class will also provide guidance for writing master's theses, doctoral dissertations, and papers for academic journals. Participants will give presentations based on their own research themes and engage in discussions based on their presentations to deepen their understanding of the themes.
Classes will be conducted in the form of exercises and lectures. As for exercises, the person in charge will give a presentation and discuss with participants based on the presentation.
Lectures will be given as necessary, and the instructor will supplement the class with necessary information.
Grading will be decided based on the quality of the students' experimental performance in the lab 40%, in-class contribution 60%.

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ａ

加藤　昌嘉

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
◆『源氏物語』を、写本の原文に基づいて、正確に解読してゆきます。注釈書・現代語訳は多く存在しますが、『源氏物語』の文章・場面は、まだ、きちんと、読み解かれていないからです。
◆本年度は、河内本の「花宴」巻の後半と、「葵」巻の前半を解読してゆきます。

【到達目標】
以下の３点を身に付けることが目標です。
●古文を正確に訳す能力
●文法・語法を調べる能力
●先行の注釈書を比較する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
発表者は、河内本『源氏物語』の影印を元に、整定本文と、現代語訳と、注釈を、作成し、プレゼンテーションを行います。それを元に、参加者全員でディスカッションをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「花宴」	左大臣邸で楽器演奏
3	「花宴」	右大臣邸の藤の花の宴
4	「花宴」	右大臣邸の藤の花の宴
5	「花宴」	朧月夜の女君と再会
6	「花宴」	朧月夜の女君と再会
7	「葵」	桐壺帝、譲位
8	「葵」	六条御息所の娘
9	「葵」	六条御息所の娘
10	「葵」	六条御息所と朝顔の姫君
11	「葵」	葵上、懐妊
12	「葵」	新しい斎院、着任
13	論文合評	先行論文を検証する
14	まとめ	半年間の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
市販の『源氏物語』テキストで、「若紫」巻、「紅葉賀」巻、「花宴」巻を読むこと。
予習復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『尾州家河内本源氏物語』（八木書店）を使用しますが、この影印については、授業時に詳しく説明します。

【参考書】
▼『源氏物語』のテキスト（原文＋注釈）として、以下のいずれかを、座右に置いて、読み進めてください。
◎柳井滋ほか『源氏物語』１，２（岩波文庫）
◎玉上琢弥『源氏物語　現代語訳付き』１，２（角川ソフィア文庫）
◎石田穣二ほか『新潮日本古典集成　源氏物語』１，２（新潮社）
◎鈴木一雄ほか『源氏物語の鑑賞と基礎知識　紅葉賀・花宴』（至文堂）
◎鈴木一雄ほか『源氏物語の鑑賞と基礎知識　葵』（至文堂）
◎阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集　源氏物語』１，２（小学館）→法政大学図書館オンラインデータベース、ジャパンナレッジLibで、閲読可能
▼『源氏物語』の現代語訳として、以下の物も参考になります。
◎林望『謹訳源氏物語　改訂新修』１，２（祥伝社文庫）
◎大塚ひかり『源氏物語』１（ちくま文庫）
◎今泉忠義『源氏物語　新装版』１（講談社学術文庫）
◎角田光代『源氏物語』１，２（河出文庫）

【成績評価の方法と基準】
以下の２点を重視して評価します。
●発表プリントとプレゼンテーションの質、５０％
●ディスカッション参加度、５０％。

【学生の意見等からの気づき】
議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】
◆専門領域：日本古典文学
◆研究テーマ：平安時代の物語
◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版、2011年）、『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版、2014年）ほか

【Outline (in English)】
Outline and objectives:
We will accurately decipher *The Tale of Genji* based on the original manuscript.
This year, we will decipher the latter half of the “Hana-no-en” chapter and the first half of the “Aoi” chapter of the Kawachi-bon.
Goal:
The goal is to master the following three skills:
● The ability to accurately translate classical Japanese texts
● The ability to research grammar and usage
● The ability to compare existing commentaries
Work to be done outside of class:
Before each class meeting,students will be expected to have read "Wakamurasaki", "Momiji-no-ga" and "Hana-no-en" chapter.
Preparation and review time shall be two hours each as standard.
Grading criteria:
The following two points will be emphasized in the evaluation:
● Quality of presentation handouts and presentation, 50%
● Participation in discussions, 50%

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ｂ

加藤　昌嘉

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
◆『源氏物語』を、写本の原文に基づいて、正確に解読してゆきます。注釈書・現代語訳は多く存在しますが、『源氏物語』の文章・場面は、まだ、きちんと、読み解かれていないからです。
◆秋学期は、河内本の「葵」巻を解読してゆきます。

【到達目標】
以下の３点を身に付けることが目標です。
●古文を正確に訳す能力
●文法・語法を調べる能力
●先行の注釈書を比較する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
発表者は、河内本『源氏物語』の影印を元に、整定本文と、現代語訳と、注釈を、作成し、プレゼンテーションを行います。それを元に、参加者全員でディスカッションをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「葵」	葵祭（賀茂祭）
3	「葵」	葵上の車と六条御息所の車
4	「葵」	葵上の車と六条御息所の車
5	「葵」	六条御息所の屈辱
6	「葵」	六条御息所の屈辱
7	「葵」	光源氏の勇姿
8	「葵」	朝顔の姫君の思い
9	「葵」	事件を知る光源氏
10	「葵」	光源氏と紫上
11	「葵」	光源氏と紫上
12	「葵」	源典侍登場
13	論文合評	先行論文を検証する
14	まとめ	半年間の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
市販の『源氏物語』テキストで、「若紫」巻、「紅葉賀」巻、「花宴」巻を読むこと。
予習復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『尾州家河内本源氏物語』（八木書店）を使用しますが、この影印については、授業時に詳しく説明します。

【参考書】
▼『源氏物語』のテキスト（原文＋注釈）として、以下のいずれかを、座右に置いて、読み進めてください。
◎柳井滋ほか『源氏物語』１，２（岩波文庫）
◎玉上琢弥『源氏物語　現代語訳付き』１，２（角川ソフィア文庫）
◎石田穣二ほか『新潮日本古典集成　源氏物語』１，２（新潮社）
◎鈴木一雄ほか『源氏物語の鑑賞と基礎知識　葵』（至文堂）
◎阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集　源氏物語』１，２（小学館）→法政大学図書館オンラインデータベース、ジャパンナレッジLibで、閲読可能
▼『源氏物語』の現代語訳として、以下の物も参考になります。
◎林望『謹訳源氏物語　改訂新修』１，２（祥伝社文庫）
◎大塚ひかり『源氏物語』１（ちくま文庫）
◎今泉忠義『源氏物語　新装版』１（講談社学術文庫）
◎角田光代『源氏物語』１，２（河出文庫）

【成績評価の方法と基準】
以下の２点を重視して評価します。
●発表プリントとプレゼンテーションの質、５０％
●ディスカッション参加度、５０％。

【学生の意見等からの気づき】
議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】
◆専門領域：日本古典文学
◆研究テーマ：平安時代の物語
◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版、2011年）、『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版、2014年）ほか

【Outline (in English)】
Outline and objectives:
We will accurately decipher *The Tale of Genji* based on the original manuscript.
This year, we will decipher the first half of the “Aoi” chapter of the Kawachi-bon.
Goal:
The goal is to master the following three skills:
● The ability to accurately translate classical Japanese texts
● The ability to research grammar and usage
● The ability to compare existing commentaries
Work to be done outside of class:
Before each class meeting,students will be expected to have read "Wakamurasaki", "Momiji-no-ga" and "Hana-no-en" chapter.
Preparation and review time shall be two hours each as standard.
Grading criteria:
The following two points will be emphasized in the evaluation:
● Quality of presentation handouts and presentation, 50%
● Participation in discussions, 50%

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ａ

遠藤　星希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　中国の古典について、専門的な知見を駆使して精読を行い、博士論文を書くために必要となる能力を身につける。

【到達目標】
　受講者が選択したテーマ、文献、作品について、先行する研究成果を踏まえてオリジナリティのある問題意識から、博士論文の一部となりうる内容について発表し、批判的検討を加えて論文執筆に結びつける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　受講者自身の発表を中心とし、参加者全員で討議を行う。フィードバックは発表ごとに口頭で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（１）	中国古典文学研究の方法論について概説する。また、発表担当者とそれぞれが使用するテキストを決定する。
第2回	ガイダンス（２）	中国古典文学に関連する資料・論文・用例等の調べ方やデータベースの使い方について概説する
第3回	受講者１による発表Ａ	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行う。
第4回	受講者１による発表Ｂ	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深める。
第5回	受講者１による発表Ｃ	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示する。
第6回	受講者２による発表Ａ	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行う。
第7回	受講者２による発表Ｂ	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深める。
第8回	受講者２による発表Ｃ	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示する。
第9回	受講者３による発表Ａ	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行う。
第10回	受講者３による発表Ｂ	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深める。
第11回	受講者３による発表Ｃ	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示する。
第12回	受講者４による発表Ａ	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行う。
第13回	受講者４による発表Ｂ	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深める。
第14回	受講者４による発表Ｃ	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当する資料について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討議で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。
　なお、本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
　テキスト（教科書）は使用しない。受講者の研究テーマに応じて、適宜プリントを配布する。

【参考書】
　適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
　担当者としての発表内容（７０%）、討議への参加度・貢献度・積極性（３０%）。

【学生の意見等からの気づき】
　授業時間を延長することが多かったのを改め、できるだけ授業の終了時間を遵守するように心がけたい。

【その他の重要事項】
　授業の進み具合によって、事前に受講者に説明をした上で、授業の内容や予定を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
中国古典文学・日本漢文学
＜研究テーマ＞
時間意識・空間意識という側面からの分析を通した、中国文学・思想史上における李賀の詩の定位の再検討
＜主要研究業績＞
「杜甫の詩における「山河」の在り方とその変質について」（『杜甫研究年報』第6号、2023年）
『とびらをあける中国文学』（新典社、2021年）※共著
『茶をうたう――朝鮮半島のお茶文化千年』（クオン、2021年）※共著
「月の「徘徊」が意味するもの」（『菊を採る東籬の下　石川忠久先生星寿記念論文集』汲古書院、2021年）
「召使いをうたう詩」（『青山語文』第47号、2017年）
『杜甫全詩訳注（一）』（講談社、2016年）※共著
「唐代伝奇「定婚店」をめぐる一考察」（『青山語文』第46号、2016年）
「遺臣のゆれる心――杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』 25号、2014年）
「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中國學會報』65集、2013年）など。

【Outline (in English)】
Course Outline: Obtain the necessary skills to write a doctoral thesis through reading of classical Chinese literature, using specialized knowledges.
Learning Objectives: Students will make a presentation on a theme, literature, or work of their choice, based on their original awareness of the issues based on previous research results, which could be part of their doctoral dissertation, and critically examine it to write their dissertation.
Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to read the presentation material prior to each class. Study time will be a minimum of 2 hours per class.
Grading Criteria/Policy: 70% for preparation of materials used in class: 30% for active participation in class discussion.

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ｂ

遠藤　星希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　中国の古典について、専門的な知見を駆使して精読を行い、博士論文を書くために必要となる能力を身につける。

【到達目標】
　受講者が選択したテーマ、文献、作品について、先行する研究成果を踏まえてオリジナリティのある問題意識から、博士論文の一部となりうる内容について発表し、批判的検討を加えて論文執筆に結びつける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　受講者自身の発表を中心とし、参加者全員で討議を行う。フィードバックは発表ごとに口頭で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（１）	中国古典文学研究の方法論について概説する。また、発表担当者とそれぞれが使用するテキストを決定する。
第2回	ガイダンス（２）	中国古典文学に関連する資料・論文・用例等の調べ方やデータベースの使い方について概説する
第3回	受講者１による発表A	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行う。
第4回	受講者１による発表B	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深める。
第5回	受講者１による発表C	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示する。
第6回	受講者２による発表A	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行う。
第7回	受講者２による発表B	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深める。
第8回	受講者２による発表C	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示する。
第9回	受講者３による発表A	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行う。
第10回	受講者３による発表B	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深める。
第11回	受講者３による発表C	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示する。
第12回	受講者４による発表A	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行う。
第13回	受講者４による発表B	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深める。
第14回	受講者４による発表C	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当する資料について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討議で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。
　なお、本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
　テキスト（教科書）は使用しない。受講者の研究テーマに応じて、適宜プリントを配布する。

【参考書】
　適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
　担当者としての発表内容（７０%）、討議への参加度・貢献度・積極性（３０%）。

【学生の意見等からの気づき】
　授業時間を延長することが多かったのを改め、できるだけ授業の終了時間を遵守するように心がけたい。

【その他の重要事項】
　授業の進み具合によって、事前に受講者に説明をした上で、授業の内容や予定を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
中国古典文学・日本漢文学
＜研究テーマ＞
時間意識・空間意識という側面からの分析を通した、中国文学・思想史上における李賀の詩の定位の再検討
＜主要研究業績＞
「杜甫の詩における「山河」の在り方とその変質について」（『杜甫研究年報』第6号、2023年）
『とびらをあける中国文学』（新典社、2021年）※共著
『茶をうたう――朝鮮半島のお茶文化千年』（クオン、2021年）※共著
「月の「徘徊」が意味するもの」（『菊を採る東籬の下　石川忠久先生星寿記念論文集』汲古書院、2021年）
「召使いをうたう詩」（『青山語文』第47号、2017年）
『杜甫全詩訳注（一）』（講談社、2016年）※共著
「唐代伝奇「定婚店」をめぐる一考察」（『青山語文』第46号、2016年）
「遺臣のゆれる心――杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』 25号、2014年）
「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中國學會報』65集、2013年）など。

【Outline (in English)】
Course Outline: Obtain the necessary skills to write a doctoral thesis through reading of classical Chinese literature, using specialized knowledges.
Learning Objectives: Students will make a presentation on a theme, literature, or work of their choice, based on their original awareness of the issues based on previous research results, which could be part of their doctoral dissertation, and critically examine it to write their dissertation.
Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to read the presentation material prior to each class. Study time will be a minimum of 2 hours per class.
Grading Criteria/Policy: 70% for preparation of materials used in class: 30% for active participation in class discussion.

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ａ

藤村　耕治

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
１．日本近・現代文学の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現在に至るまでの作家・作品を中心に扱う。
２．受講者は自身の研究テーマに即して、研究報告を発表用資料として論文形式で作成し、それを基に発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く厳密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。
３．博士論文執筆のための高度な文章力・論理構成力を身につける。

【到達目標】
１．受講者が選択した作家・作品について、従来の研究成果を十分に踏まえつつ、新しい、独自な観点から分析・検討を行い、博士論文の一部を構成する論文を執筆すること。
２．発表用資料の作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、学会発表などに耐えうる客観的で高度な研究の力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　各回の発表担当者が、自身のテーマとする作家・作品について論文形式の発表用資料を作成して発表し、他の受講者を交えて討議する形で行う。発表者は討議内容を踏まえて、自身の発表における不備や再考を要する点などを十分に検討し、精度を高めていき、最終的には学会誌等に投稿可能な論文に練り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマと現時点での展望について聞く。
第2回	担当者1による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第3回	担当者1による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第4回	担当者1による発表・報告③	結論と今後の課題についての報告。
第5回	担当者2による発表・報告①	第2回に同じ。
第6回	担当者2による発表・報告②	第3回に同じ。
第7回	担当者2による発表・報告③	第4回に同じ。
第8回	担当者3による発表・報告①	第2回に同じ。
第9回	担当者3による発表・報告②	第3回に同じ。
第10回	担当者3による発表・報告③	第4回に同じ。
第11回	担当者4による発表・報告①	第2回に同じ。
第12回	担当者4による発表・報告②	第3回に同じ。
第13回	担当者4による発表・報告③	第4回に同じ。
第14回	総括①	各自の発表・討議に基づいた研究の総括的報告。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　発表担当者は、選択した作家・作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、毎回2000字から4000字程度の発表用資料を作成する。したがって、発表担当者は準備に5～10時間程度を要することになります。
　担当者以外の受講者も、当該作家・作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってくること。担当者と互角に討議し、的確な批評が可能となるように十分な準備をしてくる必要がある。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】
　必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
１．発表・報告時におけるレジュメ（論文形式）とプレゼンテーションの内容（80％）
２．討議の場における積極的な参加態度及び発言（20％）

【学生の意見等からの気づき】
　各人の博士論文の一部を構成しうるような論文を年間に少なくとも一本は完成させることを目指して指導に当たる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近・現代文学
＜研究テーマ＞特に第二次大戦後の戦後派文学およびその継承者たちの作品。
＜近年の主要研究業績＞
①「高橋和巳　未完の可能性」(『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018)
②『高橋和巳と三島由紀夫覚書)(『新世紀人文学論究』第6号、2022)
③「コンビニ人間－変容の可能性としての物語－」(鼎書房、2024)

【Outline (in English)】
Outline
1.The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.
2.Students present their research results according to their own themes.
Through discussions with other leaners, you will acquire deeper and more rigorous analysis, interpretation and evaluation skills.
3.To acquire advanced writing and logical composition skills for writing doctoral dissertations.
Learning Objectives
1.Learners will acquire a broad literary perspective and knowledge through the presentation of the person in charge.
2.Learners will acquire the ability finish academic papers based on the resumes they have created.
Learning activities outside of classroom
Presenters spend 5 to 10 hours preparing resumes, and other students spend 2 hours preparing to participate in the discussion.
Grading Criteria/policy
Evaluate by 40% of the presentation, 30% of the content of the report, 10% of the content of the sub-report, and 20% attendance attitude.

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ｂ

藤村　耕治

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
１．日本近・現代文学の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現在に至るまでの作家・作品を中心に扱う。
２．受講者は自身の研究テーマに即して、研究報告を発表用資料として論文形式で作成し、それを基に発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く厳密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。
３．博士論文執筆のための高度な文章力・論理構成力を身につける。

【到達目標】
１．受講者が選択した作家・作品について、従来の研究成果を十分に踏まえつつ、新しい、独自な観点から分析・検討を行い、博士論文の一部を構成する論文を執筆すること。
２．発表用資料の作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、学会発表などに耐えうる客観的で高度な研究の力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　各回の発表担当者が、自身のテーマとする作家・作品について論文形式の発表用資料を作成して発表し、他の受講者を交えて討議する形で行う。発表者は討議内容を踏まえて、自身の発表における不備や再考を要する点などを十分に検討し、精度を高めていき、最終的には学会誌等に投稿可能な論文に練り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマと現時点での展望について聞く。
第2回	担当者1による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第3回	担当者1による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第4回	担当者1による発表・報告③	結論と今後の課題についての報告。
第5回	担当者2による発表・報告①	第2回に同じ。
第6回	担当者2による発表・報告②	第3回に同じ。
第7回	担当者2による発表・報告③	第4回に同じ。
第8回	担当者3による発表・報告①	第2回に同じ。
第9回	担当者3による発表・報告②	第3回に同じ。
第10回	担当者3による発表・報告③	第4回に同じ。
第11回	担当者4による発表・報告①	第2回に同じ。
第12回	担当者4による発表・報告②	第3回に同じ。
第13回	担当者4による発表・報告③	第4回に同じ。
第14回	総括①	各自の発表・討議に基づいた研究の総括的報告。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　発表担当者は、選択した作家・作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、毎回2000字から4000字程度の発表用資料を作成する。したがって、発表担当者は準備に5～10時間程度を要することになります。
　担当者以外の受講者も、当該作家・作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってくること。担当者と互角に討議し、的確な批評が可能となるように十分な準備をしてくる必要がある。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】
　必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
１．発表・報告時におけるレジュメ（論文形式）とプレゼンテーションの内容（80％）
２．討議の場における積極的な参加態度及び発言（20％）

【学生の意見等からの気づき】
　各人の博士論文の一部を構成しうるような論文を年間に少なくとも一本は完成させることを目指して指導に当たる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近・現代文学
＜研究テーマ＞特に第二次大戦後の戦後派文学およびその継承者たちの作品。
〈近年の主要研究業績〉
①「高橋和巳　未完の可能性」（『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018）
②「高橋和巳と三島由紀夫覚書」（「新世紀人文学論集」第六号、2022）
③「コンビニ人間－変容の可能性としての物語－」（鼎書房、2024）

【Outline (in English)】
1.The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.
2.Students present their research results according to their own themes. Through discussions with other learners, you will acquire deeper and more rigorous analysis, interpretation and evaluation skills.
3.To acquire advanced writing and logical composition skills for writing a doctoral dissertation.
Learning Objectives
1.Learners will acquire a broad literary perspective and knowledge through the presentation of the person in charge.
2.Learners will acquire the ability finish academic papers based on the resumes they have created.
Learning activities outside of classroom
Presenters spend 5 to 10 hours preparing resumes, and other students spend 2 hours preparing to participate in the discussion.
Grading Criteria/policy
Evaluate by 40% of the presentation, 30% of the content of the report, 10% of the content of the sub-report, and 20% attendance attitude.

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ａ

田中　和生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　日本の近代以降の文学作品について、専門的な知見を駆使して精読を行い、博士論文を書くために必要となる能力を身につけます。

【到達目標】
　受講者が選択したテーマ、作家、作品について、先行する研究成果を踏まえてオリジナリティのある問題意識から、博士論文の一部となりうる内容について発表し、批判的検討を加えて論文執筆に結びつけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　受講者自身の発表を中心とし、参加者全員で討議を行います。フィードバックは発表ごとに口頭で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	文学研究の方法（1）	文学研究の方法について概説し、受講者が採用する方法を検討します。
第2回	受講者1による発表a	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行います。
第3回	受講者1による発表b	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深めます
第4回	受講者1による発表c	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示します
第5回	受講者2による発表a	第2回と同じ
第6回	受講者2による発表b	第3回と同じ
第7回	受講者2による発表c	第4回と同じ
第8回	文学研究の方法（2）	受講者の発表を踏まえ、文学研究の方法について考察します
第9回	受講者3による発表a	第2回と同じ
第10回	受講者3による発表b	第3回と同じ
第11回	受講者3による発表c	第4回と同じ
第12回	受講者4による発表a	第2回と同じ
第13回	受講者4による発表b	第3回と同じ
第14回	受講者4による発表c	第4回と同じ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
　受講者は、自らが選択したテーマ、作家、作品について、発表が可能となるような研究を行います。また他の受講者のテーマ、作家、作品についても理解を深めることで、文学研究者としての専門的な知見を身につけます。

【テキスト（教科書）】
　受講者のテーマに応じた文学作品を選びます。

【参考書】
　必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
　成績は平常点4割、発表6割で総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】
　発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近・現代文学、文芸評論
＜研究テーマ＞
　現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることです。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口などを準備しています。
＜主要研究業績＞
　1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
　2、『あの戦場を越えてーー日本現代文学論』（講談社）2005年
　3、『新約太宰治』（講談社）2006年
　4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
　5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年
　6、『なぜ文芸時評は終わるのか』（アーツアンドクラフツ）2024年

【Outline (in English)】
< Course outline > Obtain the necessary skills to write a doctoral thesis through reading of Japanese modern literature, using specialized knowledges.
< Learning Objectives> Students will make a presentation on a theme, author, or work of their choice, based on their original awareness of the issues based on previous research results, which could be part of their doctoral dissertation, and critically examine it to write their dissertation.
< Learning activities outside of classroom > The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
　Students will conduct research on a theme, author, or work of their own choosing that will enable them to present their work. Students will also deepen their understanding of other students' themes, authors, and works, and acquire specialized knowledge as literary researchers.
< Grading Criteria/Policy> Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations.

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ｂ

田中　和生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　日本の近代以降の文学作品について、専門的な知見を駆使して精読を行い、博士論文を書くために必要となる能力を身につけます。

【到達目標】
　受講者が選択したテーマ、作家、作品について、先行する研究成果を踏まえてオリジナリティのある問題意識から、博士論文の一部となりうる内容について発表し、批判的検討を加えて論文執筆に結びつけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　受講者自身の発表を中心とし、参加者全員で討議を行います。フィードバックは発表ごとに口頭で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	文学研究の方法（1）	文学研究の方法について概説し、受講者が採用する方法を検討します。
第2回	受講者1による発表a	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行います。
第3回	受講者1による発表b	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深めます
第4回	受講者1による発表c	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示します
第5回	受講者2による発表a	第2回と同じ
第6回	受講者2による発表b	第3回と同じ
第7回	受講者2による発表c	第4回と同じ
第8回	文学研究の方法（2）	受講者の発表を踏まえ、文学研究の方法について考察します
第9回	受講者3による発表a	第2回と同じ
第10回	受講者3による発表b	第3回と同じ
第11回	受講者3による発表c	第4回と同じ
第12回	受講者4による発表a	第2回と同じ
第13回	受講者4による発表b	第3回と同じ
第14回	受講者4による発表c	第4回と同じ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
　受講者は、自らが選択したテーマ、作家、作品について、発表が可能となるような研究を行います。また他の受講者のテーマ、作家、作品についても理解を深めることで、文学研究者としての専門的な知見を身につけます。

【テキスト（教科書）】
　受講者のテーマに応じた文学作品を選びます。

【参考書】
　必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
　成績は平常点4割、発表6割で総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】
　発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近・現代文学、文芸評論
＜研究テーマ＞
　現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることです。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口などを準備しています。
＜主要研究業績＞
　1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
　2、『あの戦場を越えてーー日本現代文学論』（講談社）2005年
　3、『新約太宰治』（講談社）2006年
　4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
　5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年
　6、『なぜ文芸時評は終わるのか』（アーツアンドクラフツ）2024年

【Outline (in English)】
< Course outline > Obtain the necessary skills to write a doctoral thesis through reading of Japanese modern literature, using specialized knowledges.
< Learning Objectives> Students will make a presentation on a theme, author, or work of their choice, based on their original awareness of the issues based on previous research results, which could be part of their doctoral dissertation, and critically examine it to write their dissertation.
< Learning activities outside of classroom > The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
　Students will conduct research on a theme, author, or work of their own choosing that will enable them to present their work. Students will also deepen their understanding of other students' themes, authors, and works, and acquire specialized knowledge as literary researchers.
< Grading Criteria/Policy> Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations.

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ａ

尾谷　昌則

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代日本語研究で博士論文を書くための知識および研究方法を学ぶ

【到達目標】
(1)意味論・語用論・統語論の基礎概念を理解し、適切な具体例を用いて説明できるようになる。(2)それらの分野における様々な研究・分析・論証の方法を理解し、自身でも実践できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学会誌などに掲載された学術論文を精読し、言語学における基礎概念や分析方法について学ぶ。
▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。
▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	論文について	論文の構成について
第2回	論文リポート１　名詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第3回	論文リポート２　動詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第4回	論文リポート３　形容詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第5回	論文リポート４　接続詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第6回	論文リポート５　語用論と意味論	受講生による発表・討論
第7回	論文リポート６　語用論推論	受講生による発表・討論
第8回	論文リポート７　ポライトネス	受講生による発表・討論
第9回	論文リポート８　インポライトネス	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート９　対人的モダリティ	受講生による発表・討論
第11回	論文リポート１０　対事的モダリティ	受講生による発表・討論
第12回	論文レポート１１　若者ことば	受講生による発表・討論
第13回	論文レポート１２　文末表現	受講生による発表・討論
第14回	論文レポート１３　ネットスラング	受講生による発表・討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（２時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと（１時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（１時間程度）。

【テキスト（教科書）】
読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】
『新編　認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キーターム事典』　（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】
宿題40％　発言等受講態度30％　期末レポート30％

【学生の意見等からの気づき】
博士論文のテーマだけに絞らず、言語学全般についての理解・知識が深められるコースワークになるよう、幅広い内容の研究論文を取り上げるよう心がけている。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
＜研究テーマ＞
　認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
＜主要研究業績＞
　「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）
　「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）
　「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第7号, pp.17-30. 2005年）
　『構文ネットワークと文法　―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline (in English)】
We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.
The objectives of this class are as follows. (1)To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.
Students will be expected to have completed the required assignments before each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
Grading will be decided based on asignments (40%), the quality of the students' experimental performance in the lab (30%), and the final report (30%).

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ｂ

尾谷　昌則

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代日本語の意味を分析するための手法を学ぶ

【到達目標】
(1)意味論の専門用語・諸概念について理解し、説明できる。(2)意味を研究するための様々な分析手法を理解し、実践できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学会誌などに掲載された学術論文を精読し、意味研究における基礎概念や分析方法について学ぶ。
▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。
▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	意味を分析する上での諸注意
第2回	論文リポート１　多義	受講生による発表・討論
第3回	論文リポート２　メタファー	受講生による発表・討論
第4回	論文リポート３　メトニミー	受講生による発表・討論
第5回	論文リポート４　スキーマとプロトタイプ	受講生による発表・討論
第6回	論文リポート５　意味ネットワーク	受講生による発表・討論
第7回	論文リポート６　拡張と動的用法基盤モデル	受講生による発表・討論
第8回	論文リポート７　文法化と意味変化	受講生による発表・討論
第9回	論文リポート８　主体化と文法化	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート９　語用論的強化と文法化	受講生による発表・討論
第11回	論文リポート１０　接続詞と文法化	受講生による発表・討論
第12回	論文レポート１１　接尾辞と文法化	受講生による発表・討論
第13回	論文レポート１２　否定表現の拡張	受講生による発表・討論
第14回	論文レポート１３　コーパスと定量的分析	受講生による発表・討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（２時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと（１時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（１時間程度）。

【テキスト（教科書）】
読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】
『認知言語学研究の方法 ― 内省・コーパス・実験』（辻幸夫監修、ひつじ書房）
『日本語教育のためのコーパス調査入門』（李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子著、くろしお出版）
『新編　認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キーターム事典』　（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】
宿題40％　発言等受講態度30％　期末レポート30％

【学生の意見等からの気づき】
論文の具体的な書き方が理解できるよう、また博士課程らしい専門性が身につけられるよう、言語（意味）変化について深く理解するための研究論文を取り上げるよう心がけた。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
＜研究テーマ＞
　認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
＜主要研究業績＞
　「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）
　「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）
　「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第7号, pp.17-30. 2005年）
　『構文ネットワークと文法　―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline (in English)】
We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.
The objectives of this class are as follows. (1)To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.
Students will be expected to have completed the required assignments before each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
Grading will be decided based on asignments (40%), the quality of the students' experimental performance in the lab (30%), and the final report (30%).

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ａ

宮本　圭造

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
博士論文の作成に向けて、近代の能の文化的背景について学ぶ。

【到達目標】
博士論文の作成をめざし、資料の収集、読解、および問題を設定して、それにふさわしい構成と文体の論文を執筆できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は主に受講生の発表によって行われる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	近代の能楽史の概要	近代の能楽史の全体像をつかむ。
第2回	近代の能の文化的状況	近代の能を取り巻く文化的状況を概観する。
第3回	近代の能の国際化	近代の能がどのように国際化の道を進んだかを検討する。
第4回	近代国家と能楽	近代の能楽に見られる国家意識とその政治的背景について学ぶ。
第5回	近代の新作能	近代の新作能がどのような場で上演されたのかを学ぶ。
第6回	近代の新作能の受容	近代の新作能が当時の人々にどのように受容されていたのかを学ぶ。
第7回	近代の能と文学者との関わり	近代の能と文学者との関わりについて概観する。
第8回	俳人が作った新作能	俳人がどのような新作能を作ったのかを学ぶ。
第9回	能が近代文学に与えた影響	能が近代文学に与えた影響について学ぶ。
第10回	能と他ジャンルの演劇	能が他ジャンルの演劇に与えた影響について学ぶ。
第11回	三島由紀夫と能	三島由紀夫と能との関わりについて学ぶ。
第12回	能の戯曲化の系譜	能にインスパイアされた劇作家による戯曲について検討する。
第13回	能とオペラ	能の台本に基づく新作オペラについて検討する。
第14回	近代の能の文化的背景の総括	近代の能の文化的背景について総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業のテーマに沿った関連の参考文献を読むことが望ましい。

【テキスト（教科書）】
教科書は特に使用しない。

【参考書】
岩波講座『能・狂言』第一巻能楽の歴史

【成績評価の方法と基準】
平常点３０パーセント、発表・レポート７０点。

【学生の意見等からの気づき】
授業内容については受講生の関心希望を踏まえて柔軟に対応するよう心掛けている。

【その他の重要事項】
本授業は能楽に関する博士論文を執筆する学生を対象とするものであり、それ以外の学生は原則として履修が出来ないので注意すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中世文学・芸能史
＜研究テーマ＞能楽
＜主要研究業績＞『上方能楽史の研究』(2005年、和泉書院)

【Outline (in English)】
This course deals with the　nō from Meiji-period onwards. By the end of the course, students should be able to deeply research documentary materials of Noh.　Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books.　Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

LIT700B2（文学 / Literature 700）

日本文学特殊演習Ｂ

宮本　圭造

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代の能の文化史的意義について学ぶ。

【到達目標】
博士論文の作成をめざし、資料の収集、読解、および問題を設定して、それにふさわしい構成と文体の論文を執筆できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は受講生の発表によって進められる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	近代以前の能の国際的環境(中世)	近代以前の能の国際的環境、特に中世の状況について検討する。
第2回	近代以前の能の国際的環境(近世)	近代以前の能の国際的環境、特に江戸期の状況について検討する。
第3回	近代の能の国際的環境	近代の能の国際的環境について検討する。
第4回	能とジャポニスム	能とジャポニスムの関係について学ぶ。
第5回	ヨーロッパに渡った能道具(イギリス)	ヨーロッパに渡った能道具のうち、特にイギリスの状況について学ぶ。
第6回	ヨーロッパに渡った能道具(フランス)	ヨーロッパに渡った能道具のうち、特にフランスの状況について学ぶ。
第7回	ヨーロッパに渡った能道具(ドイツ)	ヨーロッパに渡った能道具のうち、特にドイツの状況について学ぶ。
第8回	能の英訳の系譜	初期の能の英訳の状況について学ぶ。
第9回	能の英訳の依拠テクスト	能の英訳かどのようなテクストに依拠しているかを検討する。
第10回	能の英訳の諸問題	能の英訳における問題点について考察する。
第11回	能の英訳の文化的影響	能の英訳がどのような文化的影響をもたらしたかを考察する。
第12回	能の英訳とブレヒトの戯曲	能にインスパイアされたブレヒトの戯曲について検討する。
第13回	能の英訳とカイア・サーリアホのオペラ	能にインスパイアされたサーリアホ作曲のオペラについて検討する。
第14回	ブリテンと能	イギリスの作曲家ブリテンと能との関わりについて検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参考文献を事前・事後に読むことが望ましい。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。

【参考書】
岩波講座『能・狂言』

【成績評価の方法と基準】
平常点３０％、発表・レポート７０％

【学生の意見等からの気づき】
授業内容については受講生の関心希望を踏まえて柔軟に対応するよう心掛けている。

【その他の重要事項】
本授業は能楽に関する博士論文を執筆する学生を対象とするものであり、それ以外の学生は原則として履修が出来ないので注意すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞能楽研究
＜研究テーマ＞能楽史
＜主要研究業績＞『上方能楽史の研究』

【Outline (in English)】
This course deals with the　nō from Meiji-period onwards. By the end of the course, students should be able to deeply research documentary materials of Noh.　Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books.　Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本文芸学特殊研究Ａ

庄司　達也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
受講生は、講師の所蔵する近現代の作家や詩人、歌人、評論家らの直筆資料を対象として、翻刻、調査、分析を行い、報告をする。
受講生は、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げる事の出来る力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】
これまでの学習によって得た、研究活動を行うためのスキルや知見を、発表や論文の執筆という実践的な形で応用し自ら研究活動をより高度のものへと引き上げる。
Solidify the skills and knowledge gained through previous learning that are essential for conducting research activities. Apply them in practical ways through reporting, presentations, and writing papers and reports, thereby elevating your own research activities to a higher level.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
毎回の講義では必ず報告者を立て、その報告を巡って意見を交わし、互いの読みを深める。
なお、発表者は発表の前日15時までに配付資料（レジュメ）をPDFの形でLMSにアップロードし、他の受講者は授業までにあらかじめ目を通しておく。
In each lecture, there will always be a presenter, and students will exchange opinions and deepen each other's readings of the reports.
The presenter must upload his/her resume in PDF format to the LMS by 3:00 p.m. on the day before the presentation, so that other students can read it before class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する資料についての説明。
第2回	担当教員による報告１	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス１
第3回	担当教員による報告２	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス２
第4回	受講者による報告１	発表と質疑応答
第5回	受講者による報告２	発表と質疑応答
第6回	受講者による報告３	発表と質疑応答
第7回	受講者による報告４	発表と質疑応答
第8回	受講者による報告５	発表と質疑応答
第9回	受講者による報告６	発表と質疑応答
第10回	受講者による報告７	発表と質疑応答
第11回	受講者による報告８	発表と質疑応答
第12回	受講者による報告９	発表と質疑応答
第13回	受講者による報告10	発表と質疑応答
第14回	総括	振り返り。課題についての説明。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料や作品に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.Students are expected to obtain basic information about the materials each time.

【テキスト（教科書）】
庄司達也、篠崎美生子編『日本文学コレクション　芥川龍之介』翰林書房、ISBN978-4-87737-189-0
庄司達也編『芥川龍之介ハンドブック』鼎書房、ISBN978-4-907282-13-4

【参考書】
関口安義、庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版、ISBN4-585-06015-4
関口安義編『芥川龍之介新辞典』翰林書房、ISBN4-87737-179-6

【成績評価の方法と基準】
講義中での報告とコメント（50％）、レポート等の提出物（50％）による総合評価。
Overall evaluation based on in-class presentations and comments (50%) and submitted assignments such as reports (50%).

【学生の意見等からの気づき】
受講生らの気付きを大切にする講義を行う。
Conduct lectures that value the insights of the students.

【学生が準備すべき機器他】
特に無し

【その他の重要事項】
受講生と相談の上、学外授業としての文学館見学を実施することもある。
Depending on the student's preference, a field trip to the Museum of Literature may be arranged as an off-campus class.

【担当教員の専門分野等】
専門領域＞日本近代文学
＜研究テーマ＞芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容
＜主要研究業績＞
編著『芥川龍之介ハンドブック』〈2015　鼎書房〉・共編『改造社のメディア戦略』〈2013　双文社出版〉

【Outline (in English)】
Students will transcribe, investigate, analyze, and report on original manuscripts and materials from modern and contemporary writers, poets, songwriters, and critics held in the instructor's collection.
Students will cultivate the ability to engage with materials without preconceptions, extracting their rich information, while also aiming to apply these findings to literary research.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本文芸学特殊研究Ｂ

庄司　達也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
前期開講科目「日本文芸学Ａ」に引き続き、受講生は講師の所蔵する近現代の作家や詩人、歌人、評論家らの直筆資料を取り上げ、翻刻、調査、分析を行い、報告をする。
　受講生は、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げる事の出来る力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】
これまでの学習によって得た、研究活動を行うためのスキルや知見を、発表や論文の執筆という実践的な形で応用し自ら研究活動をより高度のものへと引き上げる。
Solidify the skills and knowledge gained through previous learning that are essential for conducting research activities. Apply them in practical ways through reporting, presentations, and writing papers and reports, thereby elevating your own research activities to a higher level.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　毎回の講義では必ず報告者を立て、その報告を巡って意見を交わし、互いの読みを深める。
　なお、発表者は発表の前日15時までに配付資料（レジュメ）をPDFの形でLMSにアップロードし、他の受講者は授業までにあらかじめ目を通しておく。
In each lecture, there will always be a presenter, and students will exchange opinions and deepen each other's readings of the reports.
　The presenter must upload his/her resume in PDF format to the LMS by 3:00 p.m. on the day before the presentation, so that other students can read it before class.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する資料についての説明。
第2回	担当教員による報告１	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス１
第3回	担当教員による報告２	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス２
第4回	受講者による報告１	発表と質疑応答
第5回	受講者による報告２	発表と質疑応答
第6回	受講者による報告３	発表と質疑応答
第7回	受講者による報告４	発表と質疑応答
第8回	受講者による報告５	発表と質疑応答
第9回	受講者による報告６	発表と質疑応答
第10回	受講者による報告７	発表と質疑応答
第11回	受講者による報告８	発表と質疑応答
第12回	受講者による報告９	発表と質疑応答
第13回	受講者による報告10	発表と質疑応答
第14回	総括	振り返り。 課題についての説明。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料や作品に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。
　The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.Students are expected to obtain basic information about the materials each time.

【テキスト（教科書）】
庄司達也、篠崎美生子編『日本文学コレクション　芥川龍之介』翰林書房、ISBN978-4-87737-189-0
庄司達也編『芥川龍之介ハンドブック』鼎書房、ISBN978-4-907282-13-4

【参考書】
関口安義、庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版、ISBN4-585-06015-4
関口安義編『芥川龍之介新辞典』翰林書房、ISBN4-87737-179-6

【成績評価の方法と基準】
講義中での報告とコメント（50％）、レポート等の提出物（50％）による総合評価。
Overall evaluation based on in-class presentations and comments (50%) and submitted assignments such as reports (50%).

【学生の意見等からの気づき】
受講生らの気付きを大切にする講義を行う。
Conduct lectures that value the insights of the students.

【学生が準備すべき機器他】
特に無し

【その他の重要事項】
受講生と相談の上、学外授業としての文学館見学を実施することもある。
　Depending on the student's preference, a field trip to the Museum of Literature may be arranged as an off-campus class.

【担当教員の専門分野等】
専門領域＞日本近代文学
＜研究テーマ＞芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容
＜主要研究業績＞
編著『芥川龍之介ハンドブック』〈2015　鼎書房〉・共編『改造社のメディア戦略』〈2013　双文社出版〉

【Outline (in English)】
Following the first-semester course "Japanese Literary Studies A," students will examine original manuscripts from modern and contemporary writers, poets, songwriters, and critics held in the instructor's collection. They will transcribe, research, analyze, and report on these materials.
Students will cultivate the ability to engage with the materials without preconceptions, extracting their rich information, while also aiming to apply these findings to literary research.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本文芸批評史特殊研究Ａ

田中　和生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】
〈修士課程〉
　まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。
〈博士課程〉
　近代文学における批評の役割を理解し、日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れていることを前提とし、自分の研究テーマに基づいた注釈や解説が的確にできることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　講義と発表を組みあわせて進めます。
　まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。
　また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。
　授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第2回	森鷗外と北村透谷	森鷗外「早稲田文学の没理想」と北村透谷「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を読み、その意義を理解します。
第3回	正岡子規と作家夏目漱石の誕生	正岡子規「歌よみに与ふる書」を読み、写生文の意義と夏目漱石の文学について解説します。
第4回	坪内逍遙『小説神髄』を読む	日本の近代文学の出発点として、坪内逍遙『小説神髄』について発表してもらいます。
第5回	自然主義と1910年	田山花袋「露骨なる描写」を読み、日本の近代文学史における自然主義の隆盛と1910年の状況を理解します。
第6回	正宗白鳥の評論文を読む	印象批評の例として、正宗白鳥の評論文について発表してもらいます。
第7回	佐藤春夫と永井荷風	佐藤春夫「創作月旦」と永井荷風「花火」を読み、その意義を理解します。
第8回	小林秀雄の登場	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第9回	私小説から心境小説へ	広津和郎「散文芸術の位置」と久米正雄「『私』小説と『心境』小説」を読み、その意義を理解します。
第10回	保田與重郎の批評	戦前における文芸評論の到達点の一つである、保田與重郎の評論文について発表してもらいます。
第11回	プロレタリア文学と芥川龍之介の死	蔵原惟人「プロレタリア・レアリズムへの道」と宮本顕治「『敗北』の文学」を読み、その意義を理解します。
第12回	中村光夫の再出発	戦後文学の空間をかたちづくる、中村光夫の評論文について発表してもらいます。
第13回	河上徹太郎と平野謙	河上徹太郎「配給された『自由』」と平野謙「ひとつの反措定」を読み、その意義を理解します。
第14回	江藤淳の登場	戦後文学を問い直す視点を提示しつづけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』［明治・大正篇］および［昭和篇］（岩波文庫）

【参考書】
　必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
　成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。
　まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。
　また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】
　発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【その他の重要事項】
　文芸評論家として創作を批評する経験をもつ者が、その知見を生かして講義します。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉
　現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることです。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口などを準備しています。
〈主要研究業績〉
　1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
　2、『あの戦場を越えて――日本現代文学論』（講談社）2005年
　3、『新約太宰治』（講談社）2006年
　4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
　5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年
　6、『なぜ文芸時評は終わるのか』（アーツアンドクラフツ）2024年

【Outline (in English)】
< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.
< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in modern literature, and the second is to gain a relative perspective on the history of modern Japanese literature. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.
< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of modern Japanese literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.
< Grading Criteria/Policy> Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports.In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class.In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本文芸批評史特殊研究Ｂ

田中　和生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　日本の現代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】
〈修士課程〉
　まず現代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の現代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。
〈博士課程〉
　現代文学における批評の役割を理解し、日本の現代文学史を相対化する視点を手に入れていることを前提とし、自分の研究テーマに基づいた注釈や解説が的確にできることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　講義と発表を組みあわせて進めます。
　まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。
　また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。
　授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	日本の現代文学について	現代ヨーロッパと現代日本を比較して、現代文学全体について概説します。
第2回	中野重治と高見順	中野重治「閏二月二九日」と高見順「描写のうしろに寝てゐられない」を読み、その意義を理解します。
第3回	1945年と無頼派の誕生	日本の敗戦の年である1945年前後の文学における変化に注意しながら、坂口安吾「堕落論」を読みます。
第4回	吉本隆明の出発	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第5回	戦前批判と戦後文学のはじまり	宮本百合子「歌声よ　おこれ」と小野十三郎「詩論」を読み、その意義を理解します。
第6回	奥野健男の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、奥野健男の評論文について発表してもらいます。
第7回	武田泰淳と竹内好	武田泰淳「滅亡について」と竹内好「近代主義と民族の問題」を読み、その意義を理解します。
第8回	磯田光一の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、磯田光一の評論文について発表してもらいます。
第9回	福田恒存と国語の問題	福田恒存「私の国語教室」を読み、その意義を理解するとともに大岡昇平の新字新かなに対する態度について考察します。
第10回	蓮実重彦の登場	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、蓮実重彦の評論文について発表してもらいます。
第11回	言語論と吉本隆明	20世紀以降の言語論の意義について考察した上で吉本隆明の評論文を読み、その意義を理解します。
第12回	加藤典洋の出発	ポストモダン派と戦後文学を架橋する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第13回	ポストモダン文学論	1970年代以降の日本のポストモダン派の評論文について考察を加え、その意義を理解します。
第14回	斉藤美奈子の批評	フェミニズム批評の代表的な評論家である、斉藤美奈子の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　日本の現代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】
　必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
　成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。
　まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。
　また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】
　発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【その他の重要事項】
　文芸評論家として創作を批評する経験をもつ者が、その知見を生かして講義します。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉
　現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることです。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口などを準備しています。
〈主要研究業績〉
　1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
　2、『あの戦場を越えて――日本現代文学論』（講談社）2005年
　3、『新約太宰治』（講談社）2006年
　4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
　5、『敗戦後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年
　6、『なぜ文芸時評は終わるのか』（アーツアンドクラフツ）2024年

【Outline (in English)】
< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese contemporary literature through the writings of each critic and the stream of criticism.
< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in contemporary literature, and the second is to obtain a perspective that relativizes the history of contemporary literature in Japan. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.
< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of Japanese contemporary literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics to be discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.
< Grading Criteria/Policy> Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports.In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class.In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本古代文芸特殊研究Ａ

森　陽香

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
主な上代文学作品（『万葉集』『古事記』『日本書紀』『風土記』）を通して、日本の古代および古代性について研究します。春学期は、任意の作品を一つ研究対象として取り上げ、その作品を見つめ、疑問に気づき、その疑問を解き明かしてゆくための研究方法を、履修者各自が模索します。

【到達目標】
（１）修士課程の人は、研究するための具体的な手段を体験し、自分が知りたいと思うことに対して適切な研究方法をとることができるようになることが目標です。
（２）博士課程の人は、自由で創造性の高い研究活動を行い、自分が設定した問いに対して、はっきりとした成果・結論を出すことを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
はじめは、教員の側から研究方法の例をいくつか講義形式で示し、その後、履修者各自の演習形式で進めます。授業内で発表された内容に対してはその場でフィードバックを行うほか、授業時間外にも学生からの求めがあれば個別指導を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	履修者の興味関心を確認するとともに、授業全体の進め方を説明します。
第2回	研究方法の例１	『万葉集』を研究するための方法の一例を、教員側から提示します。
第3回	研究方法の例２	『風土記』を研究するための方法の一例を、教員側から提示します。
第4回	予行演習１	履修者各自が、自分で選択した作品について、疑問点などを発表します。
第5回	予行演習２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第6回	予行演習３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第7回	演習１	履修者各自が、予行演習として発表した疑問点について、具体的に調査してきた成果を発表します。
第8回	演習２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第9回	演習３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第10回	演習４	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第11回	演習５	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第12回	研究発表１	履修者各自が、半年間の研究成果をまとめて、発表します。
第13回	研究発表２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第14回	研究発表３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
演習形式のため、授業内における発表の準備（調査研究・発表資料作成など）が必要です。少なくとも、授業の準備・復習それぞれ、各2時間程度を要します。

【テキスト（教科書）】
教員主導で行う最初の数回は、プリントを配布します。履修者の発表では、発表者が自分で資料を作成します。よって、履修者全員が共通で購入すべきテキストはありません。

【参考書】
授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
予行演習（１０%）・演習（２０%）・研究発表（４０%）と、最低３回は発表が回ってくる予定ですので、それぞれの発表内容、および、他の履修者の発表に対する質疑応答の積極性（３０%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】
履修者によって、上代文学に対する基礎知識に差があるので、上代文学専門の学生にとっても、それ以外の学生にとっても有意義な研究の場になるよう、特に学期の最初の数回の授業でよく相談を重ねてから進めたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
どのような方法で発表資料の授受を行うか、初回授業時に相談します。

【その他の重要事項】
特にありません。

【Outline (in English)】
We study ancient Japan and its antiquity through major works of ancient literature (Man'yoshu, Kojiki, Nihon Shoki, and Fudoki).
By the end of the course, students should be able to do the followings:
For　master's program ： The goal is to be able to use appropriate research methods for what you want to know.
For　doctoral course ： We aim to carry out free and highly creative research activities and produce clear results and conclusions.
Your study time will be more than four hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Research presentation: 70%、question and answer session:30%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本古代文芸特殊研究Ｂ

森　陽香

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
主な上代文学作品（『万葉集』『古事記』『日本書紀』『風土記』）を通して、日本の古代および古代性について研究します。秋学期は、一つの「素材」を決めて、上代文学作品を横断しながら、その素材について、あるいは、その素材をとおして疑問点を見出し、その疑問を解き明かしてゆくための研究方法を、履修者各自が模索します。

【到達目標】
（１）修士課程の人は、研究するための具体的な手段を体験し、自分が知りたいと思うことに対して適切な研究方法をとることができるようになることが目標です。
（２）博士課程の人は、自由で創造性の高い研究活動を行い、自分が設定した問いに対して、はっきりとした成果・結論を出すことを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
はじめは、教員の側から研究方法の例をいくつか講義形式で示し、その後、履修者各自の演習形式で進めます。授業内で発表された内容に対してはその場でフィードバックを行うほか、授業時間外にも学生からの求めがあれば個別指導を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	履修者の興味関心を確認するとともに、授業全体の進め方を説明します。
第2回	研究方法の例１	「素材」を研究するための方法の一例を、教員側から提示します。
第3回	研究方法の例２	前回とはまた別の「素材」を選び、その研究方法の一例を、教員側から提示します。
第4回	予行演習１	履修者各自が、自分で選択した素材について、疑問点などを発表します。
第5回	予行演習２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第6回	予行演習３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第7回	演習１	履修者各自が、予行演習として発表した疑問点について、具体的に調査してきた成果を発表します。
第8回	演習２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第9回	演習３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第10回	演習４	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第11回	演習５	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第12回	研究発表１	履修者各自が、半年間の研究成果をまとめて、発表します。
第13回	研究発表２	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。
第14回	研究発表３	履修者の人数に応じて、前回の続きを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
演習形式のため、授業内における発表の準備（調査研究・発表資料作成など）が必要です。少なくとも、授業の準備・復習それぞれ、各2時間程度を要します。

【テキスト（教科書）】
教員主導で行う最初の数回は、プリントを配布します。履修者の発表では、発表者が自分で資料を作成します。よって、履修者全員が共通で購入すべきテキストはありません。

【参考書】
授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】
予行演習（１０％）・演習（２０％）・研究発表（４０％）と、最低３回は発表が回ってくる予定ですので、それぞれの発表内容、および、他の履修者の発表に対する質疑応答の積極性（３０％）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】
履修者によって、上代文学に対する基礎知識に差があるので、上代文学専門の学生にとっても、それ以外の学生にとっても有意義な研究の場になるよう、特に学期の最初の数回の授業でよく相談を重ねてから進めたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
どのような方法で発表資料の授受を行うか、初回授業時に相談します。

【その他の重要事項】
特にありません。

【Outline (in English)】
We study ancient Japan and its antiquity through major works of ancient literature (Man'yoshu, Kojiki, Nihon Shoki, and Fudoki).
By the end of the course, students should be able to do the followings:
For master's program ： The goal is to be able to use appropriate research methods for what you want to know.
For doctoral course ： We aim to carry out free and highly creative research activities and produce clear results and conclusions.
Your study time will be more than four hours for a class.
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Research presentation: 70%、question and answer session:30%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本中世文芸特殊研究Ａ

阿部　真弓

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。
　今年度は、鴨長明の歌論書『無名抄』を取り上げます。随筆『方丈記』の作者として有名な鴨長明ですが、長明は六条源家の俊恵から和歌を学び、後鳥羽院にその才を認められた歌人で、『無名抄』はそうした立場から著された作品です。ただ、歌論書に分類されてはいますが、和歌理論だけでなく、歌人の逸話や自身の回想等も多く含んでおり、説話集的でもあり、随筆的でもある作品です。
　春学期の授業では、歌論や実作上の注意に関わる内容等を中心に、適切かつ詳細に注釈を施して現代語に訳し、鴨長明の和歌観について考察します。

【到達目標】
①適切に文献を調査し、歌語や修辞等の和歌表現について的確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
②歌学用語に関する知識を身につける。
③歌壇の動向を踏まえて、歌論書を読み解き、考察する力をつける。
④プレゼンテーション能力を身につける。
⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
影印本をテキストとします。教員の講義、くずし字を読む練習、受講生の発表・討論を取り混ぜながら、『無名抄』を精読します。なお、受講生からの質問や意見を随時受け付け、討論へ進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要の説明
2	『無名抄』概説	『無名抄』に関する問題を整理し、説明する。
3	鴨長明について	鴨長明の事績等の説明。
4	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する。
5	変体仮名について	変体仮名の解説・解読練習。
6	くずし字について	漢字のくずし字に関する説明、解読練習
7	『無名抄』読解	受講生Ａによる発表、受講生による討論
8	『無名抄』読解	受講生Ｂによる発表、受講生による討論
9	『無名抄』読解	受講生Ｃによる発表、受講生による討論
10	『無名抄』読解	受講生Ｄによる発表、受講生による討論
11	『無名抄』読解	受講生Ｅによる発表、受講生による討論
12	『無名抄』読解	受講生Ｆによる発表、受講生による討論
13	『無名抄』読解	受講生Ｇによる発表、受講生による討論
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　授業前には参考書等を読み、『無名抄』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。
　発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者は参考書等を確認し、どのような問題点のある章段なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。
　本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
『無名抄 現代語訳付き (角川ソフィア文庫)』（KADOKAWA、2013年）
『鴨長明と寂蓮 (コレクション日本歌人選 49)』（小林一彦、笠間書院、2012年）

【成績評価の方法と基準】
【授業の到達目標】①～⑤に照らし、発表内容またはレポート70％（①～⑤）、討論への参加度30％（⑤）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の関心に応じた教材を適宜配布します。また、随時、くずし字を読む練習も行います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞日記文学、和歌
＜主要研究業績＞「『とはずがたり』の恋―物語る二条」（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論―糾える言葉の連鎖―」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひぢ』考―藤原為家の涙―」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline (in English)】
Course outline:
This course deals with *Mumyō shō* (a poetic treatise by Kamo no Chōmei) .
Learning Objectives:
The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy:
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本中世文芸特殊研究Ｂ

阿部　真弓

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。
　今年度は、鴨長明の歌論書『無名抄』を取り上げます。随筆『方丈記』の作者として有名な鴨長明ですが、長明は六条源家の俊恵から和歌を学び、後鳥羽院にその才を認められた歌人で、『無名抄』はそうした立場から著された作品です。ただ、歌論書に分類されてはいますが、和歌理論だけでなく、歌人の逸話や自身の回想等も多く含んでおり、説話集的でもあり、随筆的でもある作品です。
　秋学期の授業では、歌人の伝記や逸話に関わる内容等を中心に、適切かつ詳細に注釈を施して現代語に訳し、鴨長明の和歌観について考察します。

【到達目標】
①適切に文献を調査し、歌語や修辞等の和歌表現について的確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
②歌学用語に関する知識を身につける。
③歌壇の動向を踏まえて、歌論書を読み解き、考察する力をつける。
④プレゼンテーション能力を身につける。
⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
影印本をテキストとします。教員の講義、くずし字を読む練習、受講生の発表・討論を取り混ぜながら、『無名抄』を精読します。なお、受講生からの質問や意見を随時受け付け、討論へ進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要の説明
2	『無名抄』概説	『無名抄』に関する問題を整理し、説明する。
3	院政期から鎌倉時代の歌壇	歌道家（六条源家、六条藤家、御子左家）の動向に関する説明
4	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する。
5	くずし字について	変体仮名の解説・解読練習
6	『無名抄』読解	受講生Ａによる発表、受講生による討論
7	『無名抄』読解	受講生Ｂによる発表、受講生による討論
8	『無名抄』読解	受講生Ｃによる発表、受講生による討論
9	『無名抄』読解	受講生Ｄによる発表、受講生による討論
10	『無名抄』読解	受講生Ｅによる発表、受講生による討論
11	『無名抄』読解	受講生Ｆによる発表、受講生による討論
12	『無名抄』読解	受講生Ｇによる発表、受講生による討論
13	『無名抄』読解	受講生Ｈによる発表、受講生による討論
14	まとめ	秋学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　授業前には参考書等を読み、『無名抄』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。
　発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者は参考書等を確認し、どのような問題点のある章段なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。
　本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
『無名抄 現代語訳付き (角川ソフィア文庫)』（KADOKAWA、2013年）
『鴨長明と寂蓮 (コレクション日本歌人選 49)』（小林一彦、笠間書院、2012年）

【成績評価の方法と基準】
【授業の到達目標】①～⑤に照らし、発表内容またはレポート70％（①～⑤）、討論への参加度30％（⑤）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の関心に応じた教材を適宜配布します。また、随時、くずし字を読む練習も行います。

【その他の重要事項】
秋学期科目のみの履修も可能ですが、理解を深めるために春学期科目Ａの受講をおすすめします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞日記文学、和歌
＜主要研究業績＞「『とはずがたり』の恋―物語る二条」（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論―糾える言葉の連鎖―」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひぢ』考－藤原為家の涙―」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline (in English)】
Course outline:
This course deals with *Mumyō shō* (a poetic treatise by Kamo no Chōmei) .
Learning Objectives:
The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy:
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本近世文芸特殊研究Ａ

小林　ふみ子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
18世紀後半～19世紀前半おける江戸狂歌の流行を背景として制作された狂歌摺物（私家版の浮世絵）のうち、和漢の古典籍をテーマとして制作された作品を読解する。現段階では四方連制作、北斎画「馬尽」をとりあげる予定。当時の和漢の学芸の流行をふまえて設定されたテーマを題として詠まれた狂歌と、それに取り合わされた北斎の挿絵は、どのような関係にあるのか。いまだ定説をみないこの謎に挑んでみましょう！

【到達目標】
（１）作品を翻刻し、みずから注釈を施ししながら読む力をつける。
（２）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
背景についての概説のあと、まずは作品を割り当ててテキストを翻刻し、相互に確認しましょう。
その後、それぞれの図像の分析とテキストとの関係について発表してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講義1	江戸狂歌の流行と摺物制作について
第2回	講義2	浮世絵の歴史のなかの摺物 受講生の発表作品選定
第3回	講義3	絵師北斎について
第4回	翻刻をしてみよう1	くずし字の基本
第5回	翻刻をしてみよう2	各自の担当作品の翻刻確認
第6回	学生の発表1	作品1　馬貝（例）
第7回	学生の発表2	作品2　駒形堂（例）
第8回	学生の発表3	作品3　駒止石（例）
第9回	学生の発表4	作品4　馬蹄石（例）
第10回	学生の発表5	作品5　駒鳥（例）
第11回	学生の発表6	作品6　初午詣（例）
第12回	学生の発表7	作品7　木馬（例）
第13回	学生の発表8	作品8　有馬産（例）
第14回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎週、次回の場面を確認してきましょう。
発表担当者は作品解釈の発表を用意してください。

【テキスト（教科書）】
とくになし。

【参考書】
江戸狂歌の基本については江戸狂歌研究会編『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院　2014）参照。

【成績評価の方法と基準】
毎回の出席は当然の前提とした上で、報告70％、授業中の質疑などの参加態度30％によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。
各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【その他の重要事項】
授業の実施形態は受講生の様子を見てみんなで相談して決めましょう。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化
＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作
＜著書＞
【単著】
『へんちくりん江戸挿絵本』インターナショナル新書（集英社インターナショナル、2019）
『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店　2014→角川ソフィア文庫2024）
『天明狂歌研究』（汲古書院　2009）
【共編著】
『水都としての東京とヴェネツィア』（法政大学出版局　2022）
『最後の文人　石川淳の世界』集英社新書（集英社　2021）
『東アジア文化講座3東アジアに共有される文学圏』（文学通信　2021）
『好古趣味の歴史　江戸東京からたどる』（文学通信　2020）
『北斎　視覚のマジック　小布施・北斎館名品集』（平凡社　2019）
『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史』（文学通信　2019）
『別冊太陽　歌麿決定版』（平凡社　2016）
『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院　2015）
『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院　2014）
『別冊太陽　北斎決定版』（平凡社　2010）

【Outline (in English)】
(Outline) Reading surimono, or privately published prints with verses produced in 18-19th century Edo to analyze relationship between texts and images.
(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(70%) and in-class contribution(30%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

日本近世文芸特殊研究Ｂ

小林　ふみ子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
江戸時代の絵入の作品を、挿絵と合わせて読解する。秋学期は、春学期の受講生と相談して作品を決定する。今のところの提案予定は黄表紙の名手芝全交作に北尾政美（のちの鍬形蕙斎）が挿絵を担当して縦横に妖怪を活躍させた『俵藤太振出薬』（寛政2年鶴屋喜右衛門版）https://kokusho.nijl.ac.jp/work/366018?ln=ja。

【到達目標】
【修士課程】
（1）作品を翻刻し、みずから注釈を施ししながら読む基礎的な力をつける。
（2）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献を知る。
【博士後期課程】
（1）作品を翻刻し、みずから注釈を施ししながら読む力を確実にする。
（2）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	概説	作者と画工、時代状況についての概説
第2回	学生の発表	上巻1
第3回	学生の発表	上巻2
第4回	学生の発表	上巻3
第5回	学生の発表	上巻4
第6回	学生の発表	中巻1
第7回	学生の発表	中巻2
第8回	学生の発表	中巻3
第9回	学生の発表	中巻4
第10回	学生の発表	下巻1
第11回	学生の発表	下巻2
第12回	学生の発表	下巻3
第13回	学生の発表	下巻4
第14回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎週、次回のテキストを読んでくる。
発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】
なし

【参考書】
長島弘明編『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典』（文学通信　2019）・小林ふみ子『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル・インターナショナル新書　2019）その他、適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】
毎回の出席は当然の前提とした上で、報告70％、授業中の質疑などの参加態度30％によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
翻刻を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。
各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化
＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作
＜近年の論文・その他書き物＞
【論文】
「大田南畝　遊女の声を伝える」『日本歴史』932号　2026年
「近世随筆における考証の意義　大田南畝から考える「考証随筆」」『国語と国文学』102巻2号2025
「狂歌連中、摺物をつくる」『レスコビッチコレクションの摺物―パリから来た北斎・広重・北渓・岳亭―』大和文華館2024
「懐古趣味流行のなかの鍬形蕙斎」『國華』1542号 2024
「大田南畝の狂詩と明詩」『明清文学論集　その楽しさ その広がり』東方書店2024
'Generative Interactions:The Osmotic Boundaries Between Kusazōshi and Ukiyo-e',Graphic Narratives from Early Modern Japan :The world of Kusazoshi, Brill,2024
「作者の虚構性と実体性：大田南畝周辺から 」『國文論叢別冊』1号 2023
「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113号　2021（査読付）
「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印―浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号　2020（査読付）
「書籍を模擬する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から―」『京都語文』26号　2018
「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

【Outline (in English)】
(Outline)Reading illustrated works to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.
（Learning activities outside of classroom） Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(70%) and in-class contribution(30%).

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本言語学特殊研究A

間宮　厚司

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語学の研究方法について学びます。この授業では、上代・中古・中世における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】
日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	上代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	上代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	上代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	上代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	中古文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	中古文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	中古文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	中古文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	中世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	中世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	中世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	中世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究テーマや課題について、先ずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】
『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】
春学期における発表とレポートを各50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
留学生の受講生が、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】
日本古典語学・日本語史
＜研究テーマ＞
『万葉集』や『おもろさうし』等の言語研究
＜主要研究業績＞
『おもろさうしの言語』（笠間書院、2005年）
『沖縄古語の深層[増補版]』（森話社、2014年）
『万葉異説[増補版]』（森話社、2021年）

【Outline (in English)】
This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.
Learning objectives of this class:
Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.
Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.
Acquire the necessary skill and knowledge for writing master's thesis.
Learning activities outside of classroom:
Students need to research about their study theme and subject via website such as CiNii and make sure if there is still room for research.
Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation before or after the class if needed.
As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.
Grading Criteria/Policies:
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Presentation (50%), Report (50%).

LIN500B2（言語学 / Linguistics 500）

日本言語学特殊研究Ｂ

間宮　厚司

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語学の研究方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】
日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究テーマや課題について、先ずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】
『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】
秋学期における発表とレポートを各50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
留学生の受講生が、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】
日本古典語学・日本語史
＜研究テーマ＞
『万葉集』や『おもろさうし』等の言語研究
＜主要研究業績＞
『おもろさうしの言語』（笠間書院、2005年）
『沖縄古語の深層[増補版]』（森話社、2014年）
『万葉異説[増補版]』（森話社、2021年）

【Outline (in English)】
This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.
Learning objectives of this class:
Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.
Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.
Acquire the necessary skill and knowledge for writing master's thesis.
Learning activities outside of classroom:
Students need to research about their study theme and subject via website such as CiNii and make sure if there is still room for research.
Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation before or after the class if needed.
As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.
Grading Criteria/Policies:
Your overall grade in the class will be decided based on the following:
Presentation (50%), Report (50%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

能楽作品特殊研究Ａ

佐藤　和道

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
室町時代に書かれた金春禅鳳の謡本を用いて、能楽の作品を研究するための基本的な方法を学ぶ。春学期では、作品研究を行う前提となる校訂本文を作成する。金春禅鳳の謡本は、崩し字で書かれている。崩し字を読んだ経験がなくても受講できるが、既修者以上に準備の時間が必要である。

【到達目標】
1) 複数の謡本を校合し、校訂本文を作成することができる。
2) 謡本の歴史における金春禅鳳自筆謡本の意義、特徴が理解できる。
3) 上掛り・下掛りなど、謡本ごとの詞章、演出の相違が理解できる。
4) 演出資料を活用し、謡本の内容を演劇的に理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
20曲ほどある金春禅鳳自筆謡本から1曲を選び、担当曲の翻刻、校合、校訂本文作成を行う。シラバスには11曲を載せているが、受講者の人数や希望によって曲数や曲目は変更される可能性がある。授業内で1〜2回の口頭発表、授業の最後に作成した校訂本文を提出する必要がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス・概説１	世阿弥自筆本から現代の謡本に至る歴史的な変遷の解説。担当曲目の決定。
第2回	概説２	校訂本文を作成するための基本的な資料、謡本に記されている注記の意味、小段理論などの説明。
第3回	金春禅鳳謡本の読解（１）。	〈自然居士〉の翻刻と校合。観阿弥の能についての解説
第4回	金春禅鳳謡本の読解（２）	〈百万〉の翻刻と校合。世阿弥の能についての解説。
第5回	金春禅鳳謡本の読解（３）	〈実盛〉の翻刻と校合。修羅能についての解説。
第6回	金春禅鳳謡本の読解（４）	〈隅田川〉の翻刻と校合。観世元雅の能についての解説。
第7回	金春禅鳳謡本の読解（５）	〈三輪〉の翻刻と校合。神能についての解説。
第8回	金春禅鳳謡本の読解（６）	〈定家〉の翻刻と校合。金春禅竹の能についての解説。
第9回	金春禅鳳謡本の読解（７）	〈碇潜〉の翻刻と校合。平家物語を題材とする能についての解説。
第10回	金春禅鳳謡本の読解（８）	〈邯鄲〉の翻刻と校合。唐物の能についての解説。
第11回	金春禅鳳謡本の読解（９）	〈東方朔〉の翻刻と校合。金春禅鳳の能についての解説。
第12回	金春禅鳳謡本の読解（１０）	〈道成寺〉の翻刻と校合。室町後期の能についての解説。
第13回	金春禅鳳謡本の読解（１１）	〈放下僧〉の翻刻と校合。仇討ち物の能についての解説。
第14回	総括	各自作成した校訂本文を提出し、その概要を発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表担当回までに謡本を翻刻、校合し、発表資料を作成する。最終回までに発表資料を踏まえて校訂本文を作成する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。ただし、受講者の崩し字の習熟度によって作業時間は異なる。

【テキスト（教科書）】
野上記念法政大学能楽研究所「能楽資料総合デジタルアーカイブ」所載の金春禅鳳謡本
https://nohken-digitalarchives.hosei.ac.jp/

【参考書】
児玉幸多 編『くずし字用例辞典』東京堂出版、1993年
横道萬里雄・表章 校注『日本古典文学大系40・41　謡曲集　上・下』岩波書店、1960・1963年
伊藤正義 校注『新潮日本古典集成　謡曲集　上・中・下』新潮社、1983〜1988年
竹本幹夫・橋本朝生 校注・訳『日本の文学　古典編36　能　能楽論　狂言』ほるぷ出版、1987年

【成績評価の方法と基準】
口頭発表（70％）、提出された校訂本文（30％）

【学生の意見等からの気づき】
本年度より授業担当者変更のためフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン・タブレットなどの情報端末。

【その他の重要事項】
能楽作品特殊研究Ｂと通年で受講することが望ましい。
しっかり準備をして授業に臨んでください。準備しても分からない点は、フォローしますが、準備不足は厳しい評価となります。崩し字は、学習すればだれでも読めるようになります。新しい言語を学ぶつもりで、意欲をもって取り組んでください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞能楽
＜研究テーマ＞近代以降の能楽の歴史
＜主要研究業績＞
「中世宗像の能―宗像大社文書「古能台本」をめぐって―」『中世文学』70号、2025年6月
「近代日本人移民と能楽―1930年代ハワイ・ブラジルの事例を中心に―」『演劇学論集』80号、2025年6月
「太平洋戦争下の日系人収容所発行新聞に見る能楽」『能と狂言』22号、2024年12月

【Outline (in English)】
This course introduces methods for researching Noh plays through the study of utaibon written by Konparu Zempō. Students will read a base text written in kuzushiji, collate it with other versions, and produce a critical text that forms the foundation of scholarly research on Noh plays.
（Learning Objectives）
By the end of this course, students will be able to:
1.Collate multiple utaibon and produce a critical text.
2.Understand the characteristics of utaibon written by Komparu Zempō within the historical development of utaibon.
3.Understand distinctions among multiple utaibon, including differences between Kamigakari and Shimogakari.
4.Understand the content of utaibon from a theatrical perspective.
（Learning activities outside of classroom）
Students are required to decipher the base text, collate it with other versions, and produce a critical text.
（Grading Criteria /Policy）
Oral presentations:70%, Final report:30%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

能楽作品特殊研究Ｂ

佐藤　和道

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
室町時代に書かれた金春禅鳳の謡本を用いて能楽の作品を研究するための基本的な方法を学ぶ。秋学期では、春学期で作成した校訂本文を用いて作品研究を行う。まず正確な現代語訳を作成した後、先行研究を踏まえて各自の論題を設定し、論を展開する。研究手法は必ずしも文学的なアプローチである必要はないが、テキストの正確な理解が研究の前提となる。

【到達目標】
1) 詞章の典拠を明らかにし、正確に解釈することができる。
2) 作品の歴史的背景、作者などについて理解することができる。
3) 演出の歴史的な変遷を理解することができる。
4) 先行研究を批判的に読み、独自の見解で論を組み立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
金春禅鳳自筆謡本から1曲を選び、担当曲の解釈及び作品研究を行う。参加者は2度の発表を通じて自身の作品理解を深め、その結果をレポートとしてまとめる。シラバスには便宜上6曲を載せているが、参加者の人数、希望によって、曲数や曲目は変更の可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	作品解釈の方法と必要な資料の紹介。担当曲目の決定。
第2回	金春禅鳳謡本の読解（1）	〈百万〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第3回	金春禅鳳謡本の読解（2）	〈実盛〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第4回	金春禅鳳謡本の読解（3）	〈定家〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第5回	金春禅鳳謡本の読解（4）	〈三輪〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第6回	金春禅鳳謡本の読解（5）	〈道成寺〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第7回	金春禅鳳謡本の読解（6）	〈邯鄲〉の現代語訳作成。問題点の整理。
第8回	中間的な総括とフォローアップ	論題の発表。問題点の整理とアドバイス。
第9回	研究発表（1）	〈百万〉の作品研究。質疑応答。講評。
第10回	研究発表（2）	〈実盛〉の作品研究。質疑応答。講評。
第11回	研究発表（3）	〈定家〉の作品研究。質疑応答。講評。
第12回	研究発表（4）	〈三輪〉の作品研究。質疑応答。講評。
第13回	研究発表（5）	〈道成寺〉の作品研究。質疑応答。講評。
第14回	研究発表（6）・総括	〈邯鄲〉の作品研究。質疑応答。講評。レポートの提出。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各自の設定した論題に従って、資料を調査し、発表資料をまとめる作業が必要である。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
横道萬里雄・表章 校注『日本古典文学大系40・41　謡曲集　上・下』岩波書店、1960・1963年
伊藤正義 校注『新潮日本古典集成　謡曲集　上・中・下』新潮社、1983～1988年
小山弘志・佐藤健一郎 校注・訳『新編日本古典文学全集58・59　謡曲集1・2』小学館、1997・1998年
佐成謙太郎『謡曲大観』（首巻・第１～５巻・別巻）明治書院、1930・1931年

【成績評価の方法と基準】
口頭発表２回（70％）、レポート（30％）

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
パソコン・タブレットなどの情報端末。

【その他の重要事項】
能楽作品特殊研究Aと通年で受講することが望ましい。そうでない場合、各自で校訂本文を作成して授業に臨むこと。
独創的な論が展開できれば、学会発表等につなげることができます。発表担当以外の受講者も、作品に関する基本的な情報を把握し、議論に積極的に参加してください。意欲的な参加を期待します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞能楽
＜研究テーマ＞近代以降の能楽の歴史
＜主要研究業績＞
「中世宗像の能―宗像大社文書「古能台本」をめぐって―」『中世文学』70号、2025年6月
「近代日本人移民と能楽―1930年代ハワイ・ブラジルの事例を中心に―」『演劇学論集』80号、2025年6月
「太平洋戦争下の日系人収容所発行新聞に見る能楽」『能と狂言』22号、2024年12月

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course introduces a fundamental method for researching Noh plays through the study of utaibon written by Komparu Zenpō. In the fall semester, students will conduct research on individual works based on the critical texts produced in the spring semester. Students will first prepare accurate modern Japanese translations, review previous researches, and then develop their own arguments.
（Learning Objectives）
By the end of this course, students will be able to:
1.Identify sources of the lyrics and interpret them accurately.
2.Understand the historical background of individual works, including their authorship.
3.Understand the historical development of theatrical elements.
4.Critically read previous studies and develop original arguments.
（Learning activities outside of classroom）
Students are required to conduct research according to their individual research topics.
（Grading Criteria /Policy）
Oral presentations:70%, Final report:30%

LIT500B2（文学 / Literature 500）

能楽資料特殊研究Ａ

宮本　圭造

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
能楽資料を用いた基礎的研究の方法を学ぶ。
能楽研究の基礎となる資料にはどのようなものがあるか。その概説からはじめ、主に能及び狂言の実際の上演に関わる台本・演出資料の紹介、それらの資料に基づく能楽研究の方法と課題について考察する。

【到達目標】
能楽研究を進める上で最低限必要な文献学的な知識を身に着けるとともに、資料を読解する力、そこから問題点と解決を自ら導き出す力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
研究の基礎となるのは資料であり、資料をいかに集め、それをいかに読解・解釈して真実に近づくかが、研究者の腕の見せ所です。それは、能楽研究においても例外ではありません。戦後、能楽研究を大きく推進する原動力となったのは、新しい資料の発掘と、その精緻な解読作業の積み重ねでした。この授業では、能楽研究を進めていく上で必要となる、能楽資料に関する基本的な知識を身に着けることと、資料に基づいて研究を構築する方法をそれぞれが見出すことを目的とするものです。法政大学能楽研究所は、日本でも有数の能楽資料のコレクションを所蔵することで知られています。その中には、能に関するありとあらゆる種類の資料が含まれていますが、今年度は特に「世阿弥時代の能の改作」に焦点を当てて、世阿弥時代の能の作品成立をめぐる問題につて考えていきたいと思います。授業は前半を講義主体で進める予定ですが、後半では学生による発表の場を持ちたいと考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	能楽資料の概要	能楽資料にはどのようなものがあるのか。その概要を紹介する。
第2回	能の作品が生まれた環境	能の作品がどのような環境で生み出されたのかを考察します。
第3回	世阿弥以前の古作能	世阿弥以前の古作能にはどのような特徴があっかのかを紹介します。
第4回	古作能の改作	世阿弥以前の古作能が、どのような改作を経て現在にいたるのかを考察します。
第5回	自然居士の改作	古作能の一つである自然居士の改作過程について考察する。
第6回	卒都婆小町の改作	古作能の一つである卒都婆小町の改作過程について考察する。
第7回	汐汲の改作	古作能の一つである汐汲の改作について考察する。
第8回	求塚の改作	世阿弥による改作の可能性が想定される求塚の改作過程について考察する。
第9回	柏崎の改作	世阿弥が改作を施した柏崎の改作過程について考察する。
第10回	養老の改作	脇能の古態を留める養老の改作の有無について考察する。
第11回	江口の改作	世阿弥が改作を施した江口の制作過程について考察する。
第12回	鵜飼の改作	世阿弥が改作を施した鵜飼の制作過程について考察する。
第13回	通盛の改作	世阿弥が改作を施した通盛の制作過程について考察する。
第14回	総括	これまでの授業を踏まえ、能楽資料を用いた作品研究の可能性を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
能楽に関する基本的な著書（岩波講座『能・狂言』など）を読んでおくことが望ましい。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しないが、毎回プリントを参考資料として配布する。

【参考書】
岩波講座『能・狂言』
平凡社『別冊太陽　能』

【成績評価の方法と基準】
出席平常点３０パーセント、発表・レポート課題７０パーセント
資料を分析し、自ら問題点を見出すことができているか、それを論理的に説明・文章化することができているかを評価のポイントとする。

【学生の意見等からの気づき】
授業の進め方・内容については学生の要望に応じて変更するなど、柔軟な対応をとる予定である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　能楽研究　芸能史
＜研究テーマ＞　能楽史、能面史など
＜主要研究業績＞
①『上方能楽史の研究』（和泉書院、2005年）
②『近代日本と能楽』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）
③『金春家文書の世界』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）

【Outline (in English)】
This course deals with the Noh-related materials dating from the Muromachi period to the Meiji period.Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books.Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

LIT500B2（文学 / Literature 500）

能楽資料特殊研究Ｂ

宮本　圭造

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
能楽資料を用いた基礎的研究の方法を学ぶ。
能楽研究の基礎となる資料にはどのようなものがあるか。その概説からはじめ、主に能及び狂言の実際の上演に関わる台本・演出資料の紹介、それらの資料に基づく能楽研究の方法と課題について考察する。

【到達目標】
能楽研究を進める上で最低限必要な文献学的な知識を身に着けるとともに、資料を読解する力、そこから問題点と解決を自ら導き出す力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
研究の基礎となるのは資料であり、資料をいかに集め、それをいかに読解・解釈して真実に近づくかが、研究者の腕の見せ所です。それは、能楽研究においても例外ではありません。戦後、能楽研究を大きく推進する原動力となったのは、新しい資料の発掘と、その精緻な解読作業の積み重ねでした。この授業では、能楽研究を進めていく上で必要となる、能楽資料に関する基本的な知識を身に着けることと、資料に基づいて研究を構築する方法をそれぞれが見出すことを目的とするものです。法政大学能楽研究所は、日本でも有数の能楽資料のコレクションを所蔵することで知られています。その中には、能に関するありとあらゆる種類の資料が含まれていますが、今年度は特に「室町中期以後の能の改作」「狂言の改作」に焦点を当てて、室注記町以後から近代にかけての能の作品成立をめぐる問題、狂言の改作をめぐる問題につて考えていきたいと思います。授業は前半を講義主体で進める予定ですが、後半では学生による発表の場を持ちたいと考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	室町中期以後の能楽	室町中期以後の能楽がどのような状況にあったかを紹介する。
第二回	室町中期以後の能の作品の特徴	室町中期以後の能の作品にはどのような特徴があったかを解説する。
第三回	鐘巻から道成寺へ	鐘巻から道成寺への改作がどのように行われたかを考察する。
第四回	浦嶋の改作	脇能である浦嶋の改作過程について考察する。
第五回	賀茂の改作	脇能である賀茂の改作過程について考察する。
第六回	初雪の改作	室町後期の作品である初雪の改作過程について考察する。
第七回	弱法師の演出改訂	弱法師の演出改訂の様相について考察する。
第八回	雷電と来殿	雷電に基づき江戸後期に改作された来殿の改作過程について考察する。
第九回	要石の改作	幕末に制作された要石と喜多流における改作上演について考察する。
第十回	狂言の流儀と改作	狂言の改作がどのように行われたか、流儀と改作との関係をめぐって考察する。
第十一回	狂言の趣向と改作	狂言の改作とは何か。趣向取りとの関係から、狂言の改作の意味を考察する。
第十二回	狂言の作者と改作	狂言の改作の意味について、作者との関係から考察する。
第十三回	天正狂言本に見える原曲	狂言の改作過程が窺える事例として、天正狂言本に見える原曲の作品のいくつかを取り上げて考察する。
第十四回	総括	これまでの授業を踏まえ、能楽資料を用いた能・狂言研究の可能性を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
能楽に関する基本的な著書（岩波講座『能・狂言』など）を読んでおくことが望ましい。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しないが、毎回プリントを参考資料として配布する。

【参考書】
岩波講座『能・狂言』
平凡社『別冊太陽　能』

【成績評価の方法と基準】
出席平常点３０パーセント、発表・レポート課題７０パーセント
資料を分析し、自ら問題点を見出すことができているか、それを論理的に説明・文章化することができているかを評価のポイントとする。

【学生の意見等からの気づき】
授業の進め方・内容については学生の要望に応じて変更するなど、柔軟な対応をとる予定である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　能楽研究　芸能史
＜研究テーマ＞　能楽史、能面史など
＜主要研究業績＞
①『上方能楽史の研究』（和泉書院、2005年）
②『近代日本と能楽』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）
③『金春家文書の世界』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）

【Outline (in English)】
This course deals with the Noh-related materials dating from the Muromachi period to the Meiji period.Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books.Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

LIT700B3（文学 / Literature 700）

英米文学特殊演習Ⅰ B

小澤　央

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この授業では、個別指導のもと、研究テーマに沿ってテクストを分析し、先行研究を押さえ、博士論文を構想し執筆していく。
　博士論文のための専門的知識・技術を獲得することが目的である。

【到達目標】
・博士論文の主題を明確化し、実際に書き進める
・先行研究を踏まえたうえで、独創的な解釈を論理的に主張する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　博士論文の主題に関する文献（作品、先行研究など）を読み、さまざまな解釈や論点を確認しながら進める。実際に論文を書き進める。
　発表や論文に対しては口頭または書面でフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	夏期休暇中の進捗状況の確認、今学期の執筆計画の決定
第2回	論文執筆のための作品読解(1)	第1部の発表と議論
第3回	論文執筆のための作品読解(2)	第2部の発表と議論
第4回	論文執筆のための作品読解(3)	第3部の発表と議論
第5回	論文執筆のための作品読解(4)	第4部の発表と議論
第6回	論文執筆のための作品読解(5)	第5部の発表と議論
第7回	論文執筆のための調査(1)	先行研究（作家）についての発表と議論
第8回	論文執筆のための調査(2)	先行研究（歴史）についての発表と議論
第9回	論文執筆のための調査(3)	先行研究（作品）についての発表と議論
第10回	論文執筆のための調査(4)	先行研究（思想）についての発表と議論
第11回	論文執筆(1)	第1稿の講評
第12回	論文執筆(2)	第2稿の講評
第13回	論文執筆(3)	第3稿の講評
第14回	まとめ	今学期の総括、今後の研究についての示唆

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　予め指示された文献を読み、自分の意見や疑問をまとめてくること、論文を実際に書き進めることが求められる。
　予習・復習は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
なし

【参考書】
授業中に紹介する先行研究などの文献

【成績評価の方法と基準】
発表と議論： 50 %
期末レポート： 50 %

【学生の意見等からの気づき】
引き続き丁寧な論文指導を試みる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　イギリス文学、ユートピア文学
＜研究テーマ＞
　イギリス小説、ユートピア／ディストピア、帝国主義、ジェンダー
＜主要研究業績＞
・*Wastelands and Wonderlands: Utopias and Dystopias in Film and Literature* (共著, SUNY Press, 2026)
・*Huxley, ce méconnu*（共著, Edizioni Effigi, 2025）
・*Critical Insights: Frankenstein; or, the Modern Prometheus* (共著, Salem Press, 2024)
・*Orientalism and Reverse Orientalism in Literature and Film: Beyond East and West* (共著, Routledge, 2021)
・サンダー・L・ギルマン著『肥満男子の身体表象――アウグスティヌスからベーブ・ルースまで』（共訳, 法政大学出版局, 2020）
・フレドリック・ジェイムソン他著『アメリカのユートピア――二重権力と国民皆兵制』（共訳, 書肆心水, 2018）

【Outline (in English)】
The aim of this class is to acquire various knowledge and skills necessary to write a dissertation. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. The final grade will be calculated according to the following process: performance in class activities (50%) and term-end essay (50%).

LIN700B3（言語学 / Linguistics 700）

言語学特殊演習 Ⅰ A

ブライアン ウィスナー

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course examines advanced concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and summarize L2-related research findings and consider principled approaches to L2 pedagogy.
＜講義題目＞
第二言語習得 Second Language Acquisition

【到達目標】
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:
1. Conduct literature searches on L2-related topics
2. Summarize research findings on L2-related topics
3. Present summaries and proposals for L2-related research projects

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students then apply this knowledge by conducting research, presenting findings, and discussing these topics. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Introduction to the course	Presentation of core and advanced concepts in second language acquisition and teaching
第2回	Literature searches	Conducting a literature search
第3回	Summarizing studies	Outlining and summarizing previous studies
第4回	Declarative and procedural knowledge	Examining types of L2 knowledge
第5回	Measuring declarative and procedural knowledge	How can L2 knowledge be assessed?
第6回	Acquisition of L2 grammar	How is L2 grammar acquired?
第7回	Acquisition of L2 vocabulary	Issues related to L2 vocabulary acquisition
第8回	Individual differences	To what extent do individual differences affect L2 learning?
第9回	Contexts of instructed second language acquisition	In what ways does the linguistic environment influence L2 acquisition?
第10回	Focus on form	Attending to meaning and form in L2 learning
第11回	Feedback	What is the role of feedback in L2 learning?
第12回	Developing language courses	Core components of L2 programs and courses
第13回	Research presentations	Research project presentations
第14回	Feedback on research presentations	Discussion of and feedback on students' presentations

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class.

【テキスト（教科書）】
There is no required textbook for this course.

【参考書】
Shawn Loewen. (2015). *Introduction to instructed second language acquisition*. Routledge.
Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition*. Hodder Education.
Rod Ellis. (2008). *The study of second language acquisition* (2nd edition). Oxford University Press.
H. Douglas Brown. (2007). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy* (3rd edition). Longman.
H. Douglas Brown. (2006). *Principles of language learning and teaching* (5th edition). Longman.
Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】
Presentations: 50%
Written report: 50%
Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content with outside information and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】
Not applicable.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　第二言語習得・英語教育学
＜研究テーマ＞　第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性
＜主要研究業績＞
・『MY WAY: English Communication I』 共著　2013年3月　三省堂
・『MY WAY: English Expression I』　共著　2013年3月　三省堂
・『英語教育学の実証的研究法入門』　共著　2012年8月　研究社

【Outline (in English)】
This course examines advanced concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy.
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:
1. Conduct literature searches on L2-related topics
2. Summarize research findings on L2-related topics
3. Present summaries and proposals for L2-related research projects
Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class.
Final grades will be calculated based on the following: Presentations: 50%; Written report: 50%.

LIN700B3（言語学 / Linguistics 700）

言語学特殊演習 Ⅰ B

ブライアン ウィスナー

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course examines the role of advanced research methods and statistics in applied linguistics.
＜講義題目＞
Research Methods in Applied Linguistics

【到達目標】
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in applied linguistics; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, R, Winsteps, and Facets; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses in the computer lab. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Research methods in applied linguistics	Introduction to research methods and the concepts covered in this course
第2回	Fundamental measurement	Principles of measuring constructs
第3回	Construct modeling	Construct definition and instrument development
第4回	Data screening	Screening data prior to conducting analyses
第5回	Rasch analyses	Analyzing dichotomous data
第6回	Rasch rating scale analyses	Analyzing rating scale data
第7回	Multifaceted Rasch measurement	Conducting and interpreting multifaceted Rasch analyses
第8回	Correlation and univariate analyses	Conducting and interpreting correlation and univariate analyses
第9回	Multiple regression	Conducting and interpreting multiple regression
第10回	Multivariate analysis of variance and covariance	Conducting and interpreting multivariate analyses
第11回	Principal components and factor analysis	Background of principal components and factor analysis
第12回	Applying factor analysis	Factor analyzing data
第13回	Structural equation modeling and presentations	Background of structural equation modeling
第14回	Applying structural equation modeling	Conducting and interpreting structural equation modeling

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】
There is no required textbook for this course.

【参考書】
Jenifer Larson-Hall. (2016). *A guide to doing statistics in second language research using SPSS and R* (2nd ed.). Routledge.
Andy Field. (2013). *Discovering statistics using SPSS* (4th ed.). Sage.
Andy Field et al. (2012). *Discovering statistics using R*. Sage.
Tabachnick, B. G., &Fidell, L. S. (2013). *Using multivariate statistics* (6th edition). Pearson.
Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】
Presentations: 50%
Data Analysis Assignment: 50%
Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】
Not applicable.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　第二言語習得・英語教育学
＜研究テーマ＞　第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性
＜主要研究業績＞
・『MY WAY: English Communication I』 共著　2013年3月　三省堂
・『MY WAY: English Expression I』　共著　2013年3月　三省堂
・『英語教育学の実証的研究法入門』　共著　2012年8月　研究社

【Outline (in English)】
This course examines the role of advanced research methods and statistics in applied linguistics.
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in applied linguistics; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, R, Winsteps, and Facets; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.
Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.
Final grades will be calculated based on the following:
Presentations: 50%
Data Analysis Assignment: 50%

LIT500B3（文学 / Literature 500）

文学方法論特講 A

宮川　雅

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テクストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。

【到達目標】
英文学テクストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みられる。他者の研究を理解し、適切なコメントを考えられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　プリントを使用して批評理論について学ぶ。３ないし４つの異なるジャンルの英米文学作品の原文テクストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。
　中心的な「教科書」として、W・L・ゲーリン 『文学批評入門』. 青木健・日下洋右 訳. 彩流社, 1986 を原書と比べながら読む。参考にその後の原書の改訂版も眺める（いずれも教員が準備する）。
　上記の研究書（訳書）は、それなりに評価のあったものだが（原著は版を改訂して――― 6th ed., 2010――映像を含む古典テクスト以外への目配りを見せた）、半世紀近く前の批評の状況を、その後の「ポストモダン」な批評意識と比べるべく、ピーター・バリー『文学理論講義――新しいスタンダード』. 高橋和久監訳, ミネルヴァ書房, 2014 や日本人による最近の研究書などを時々参照する。翻訳を吟味することで、日本人がどのように文学理論を受容してきたかも考える（たとえばディコンストラクションの長引く受容の問題）。
　授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション：“Armed Vision” (S. Hyman)「はじめに――文学理論は死んだ、文学理論せよ」（大橋洋一）	いかにテクストにむかうか
第2回	テクストとは何か	テクスト概念の変容
第3回	テクスチュアル・クリティシズム	本文校訂または批評以前の批評
第4回	印象批評とは何か	作家・作品・読者の三角形
第5回	印象批評の実践	レポーターによる発表と討論
第6回	フォルマリズム	形式主義的批評とテクスト分析
第7回	フォルマリズム批評の実践	レポーターによる発表と討論
第8回	文化人類学と文学	神話批評
第9回	神話批評の実践	レポーターによる発表と討論
第10回	文学と心理分析	フロイト、ユング、その後
第11回	精神分析批評の実践	レポーターによる発表と討論
第12回	注釈	釈義学から解釈学へ
第13回	その実践	レポーターによる発表と討論
第14回	ディコンストラクションからニューヒストリシズムへ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
批評の対象となる作品テクストを読み進めること。自身の研究を進めて、批評理論の応用を考えること（秋の中間報告にむけて資料収集をしたり bibliography をつくったりする）。予習・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”
Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*
Shakespeare, *Hamlet*
Andrew Marvell, "To His Coy Mistress"
W・L・ゲーリン 『文学批評入門』. 青木健・日下洋右 訳. 彩流社, 1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント
David Lodge, *The Art of Fiction* , rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】
テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か――現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）
筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）
大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）
小倉孝誠編『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社、2023）
大橋洋一・三原芳秋編『文学理論の名著50』（平凡社、2025）

【成績評価の方法と基準】
授業への参加度70パーセント、レポート30パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
学習支援システムの「教材」に（あとからも）参照可能なかたちで資料ファイルを整理して蓄積する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　　近代アメリカ文学
＜研究テーマ＞　　アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
＜主要研究業績＞　「*Ormond* におけるピクチャレスクな意匠をめぐって」『英文學誌』47号（2005年3月）: 27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十） 第五章　ポーと現代――ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）: 91-110、「Re: Ripの妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51号（2005年9月）: 1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』(研究社、2009) 251-67.

【Outline (in English)】
【Learning Objectives】
Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read various critical approaches applied to them.
[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend two hours respectively to understand the course content.
[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%),final report [paper] (30%).

LIT500B3（文学 / Literature 500）

文学方法論特講 B

宮川　雅

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テクストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。Bの過半は学生自身の実践的発表と質疑が主となる予定だが、春学期からの「教科書」として、W・L・ゲーリン『文学批評入門』.青木健・日下洋右 訳.彩流社, 1986 を参照・検討する。また、ピーター・バリー『文学理論講義』. 高橋和久監訳, ミネルヴァ書房, 2014 で、1980年代には見られなかった理論について学ぶ。考えを補うべく、近年の参考書として、小倉孝誠編『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社、2023）
大橋洋一・三原芳秋編『文学理論の名著50』（平凡社、2025）などを参照する。（今年度は特に、日本で「審級」と訳されてきた Instanz [独],instance/ agency [英], instance [仏]という、精神分析と物語論に曖昧なままにまたがる概念を、「主体」の問題があらわれたものとして、あるしゅ中心に置いて考えてみたい）

【到達目標】
英文学テクストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みる。
中間報告をおこない、その反省のもとに自分の研究内容の修正作業をする。批評理論と現代思想の関係について問題意識と共に理解できる。他者の研究を理解し、適切なコメントを与えられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　プリントを使用して批評理論を学ぶ。作品の原文テクストを読むとともに、批評理論を作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。
　授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。
　後期秋学期は10月までは大学院中間報告会に向けてリハーサルと配布資料のチェックなどを相互におこない、その後は Barry の本を章分担でレポートしてもらい、議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	分析と解釈の実践（1）	イメジ、シンボル、アレゴリー
第2回	分析と解釈の実践（2）	比喩と脱比喩
第3回	分析と解釈の実践（3）	プロットの構築
第4回	分析と解釈の実践（4）	キャラクター分析
第5回	中間まとめ	中間報告の反省
第6回	ニューヒストリシズムからカルチュラル・スタディーズへ	1980年代からの流れ
第7回	精神分析批評	プリント講読
第8回	フェミニズム批評	プリント講読
第9回	ジェンダー理論	プリント講読
第10回	ナラトロジー理論	プリント講読
第11回	分析と解釈の実践（5）	視点と声
第12回	分析と解釈の実践（6）	ナラトロジー
第13回	分析と解釈の実践（7）	ソース・スタディー
第14回	総まとめ	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
テクストの下調べ。自身の研究テーマの探求。

【テキスト（教科書）】
Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”
Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*
Shakespeare, *Hamlet*
W・L・ゲーリン 『文学批評入門』.青木健・日下洋右 訳.彩流社, 1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント
David Lodge, *The Art of Fiction* , rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】
ウェイン・ブース、米本弘一ほか訳『フィクションの修辞学』（水声社、1991）
デイヴィッド・ロッジ、柴田元幸・斎藤兆史訳『小説の技巧』（白水社、1997）
テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か――現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）
筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）
大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）
小倉孝誠編『批評理論を学ぶ人のために』（世界思想社、2023）
大橋洋一・三原芳秋編『文学理論の名著50』（平凡社、2025）

【成績評価の方法と基準】
授業への参加度70パーセント、レポート30パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
学生の積極的な参加を促せるようにつとめたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　近代アメリカ文学
＜研究テーマ＞　アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
＜主要研究業績＞　「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』(研究社、2009) 251-67.「Cacotype――言葉の影、または引用について」（『英文學誌』58、2016）35-60.「Wot’s the hodds so long as you’re ’appy――いいじゃないの幸せならば、またはWebの効用について」（『英文學誌』59, 2017）33-48.「狂気と理性の問題、そしてゴシック――リチャード・ウィルバーのポー論から考える」（『英文學誌』66, 2024）42-66.

【Outline (in English)】
【Learning Objectives】
Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read various critical approaches applied to them.
[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.
[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%),final report [paper] (30%).

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学方法論特講 A

石川　潔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
言語研究の方法論としての以下の２つの入門的な把握を目指す。
・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法
・実験設計およびデータの統計処理
＜講義題目＞言語科学の研究に必要な方法論の修得

【到達目標】
自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定で比較できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義およびパソコン実習。
試験には採点コメントを返す予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること、注目していない要因の効果の除去
第4回	論文執筆の基本	構成、引用の方法
第5回	統計学的検定の基本 1	帰無仮説および対立仮説、有意性
第6回	統計ツール	Excel、ANOVA4、SPSS、R、JASP、etc.
第7回	統計学的検定の基本 2	帰無仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	*t* 検定（その１）	被験者間要因の場合
第11回	*t* 検定（その２）	１サンプルの *t* 検定
第12回	*t* 検定（その３）	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とする。
パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。
わからない箇所は教員や周囲に質問すること。
また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおしてみること。

【テキスト（教科書）】
学習支援システムでハンドアウトおよびデータ・セットを配布。

【参考書】
A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.
大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし．日科技連.
Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology.* (6th ed.) Wadsworth.
Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS.* Sage.
Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data.* Cambridge University Press.
その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】
学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】
「全員、期末試験は満点！」という結果を目指したい。

【その他の重要事項】
この授業は原則、英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）
＜研究テーマ＞
音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係
＜主要研究業績＞
http://www.i.hosei.ac.jp/ kiyoshi/research.html などを参照。

【Outline (in English)】
[Course outline]
An introduction to research methodology in linguistic sciences
[Learning Objectives]
- Scientific construction and evaluation of theories
- Experimental design and statistical data analysis
- Realization of the (in)validities of the above
[Learning activities outside of classroom]
Practice of PC skills, applications of the methods to various issues encountered outside of the classroom
[Grading Criteria/Policy]
Final 100%

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学方法論特講 B

ブライアン ウィスナー

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.
＜講義題目＞
Research Methods in the Linguistic Sciences

【到達目標】
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. This course is conducted in English. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	Research methods in the linguistic sciences	Introduction to why research is conducted and the concepts covered in this course
第2回	Variables &levels of measurement	Classification and measurement of variables
第3回	Visual descriptive statistics	Creating graphs and plots
第4回	Statistical assumptions	Methods of addressing statistical assumptions
第5回	Correlation	Background and calculation of Pearson's correlation coefficient
第6回	Other methods of correlation	Calculation of Spearman's correlation coefficient
第7回	T-tests and research design	Background of t-tests and calculation of a paired-samples t-test
第8回	Between-group designs	Calculation of an independent samples t-test
第9回	Linear regression	Background and calculation of linear regression
第10回	ANOVA, planned comparisons, and post-hoc tests	Background and calculation of ANOVA
第11回	Factorial ANOVA	Background and calculation of factorial ANOVA
第12回	Repeated-measures ANOVA	Background and calculation of repeated-measures ANOVA
第13回	Individual presentations	Research article presentation and discussion
第14回	Review of the course content and final assignment	Review the concepts covered in the course and complete the final data analysis assignment

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】
There is no required textbook for this course.

【参考書】
Jenifer Larson-Hall. (2016). *A guide to doing statistics in second language research using SPSS and R* (2nd ed.). Routledge.
Andy Field. (2013). *Discovering statistics using SPSS* (4th ed.). Sage.
Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】
Presentations: 50%; Final Data Analysis Assignment: 50%
Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】
Not applicable.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　第二言語習得・英語教育学
＜研究テーマ＞　第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性
＜主要研究業績＞
・『MY WAY: English Communication I』 共著　2013年3月　三省堂
・『MY WAY: English Expression I』　共著　2013年3月　三省堂
・『英語教育学の実証的研究法入門』　共著　2012年8月　研究社

【Outline (in English)】
This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.
Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.
Final grades will be calculated based on the following:
Presentations: 50%; Final Data Analysis Assignment: 50%

LIT500B3（文学 / Literature 500）

英米文学特講 II B

小澤　央

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
＜講義題目＞Mary Shelley, *Frankenstein* 精読
　この授業では、Mary Shelleyの*Frankenstein* (1818, rev. 1831)を原文で精読し、書かれている内容や扱われているテーマや問題についてみなで議論する。映画や先行研究も参考にする。
　文学を解釈するための専門的技術を身につけ、自分の解釈を説得力をもって主張することが目的である。

【到達目標】
この授業を履修することで、学生は
・*Frankenstein*を読了し、その背景事情を含めて説明できる
・歴史的文脈や自身の専門との関係でテクストの意義を論じられる
・先行研究を踏まえて、自分の解釈を明確に表現できる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　原則的に毎回レジュメ担当者を決め、その発表に基づいてみなで議論する。学期末にはレポートを書く。
　発表に対してはその場で、レポートに対しては返却時にフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方の確認、作品の背景の説明
第2回	Shelleyの生涯についての映画(1)	前半の鑑賞と議論
第3回	Shelleyの生涯についての映画(2)	後半の鑑賞と議論
第4回	テクスト精読(1)	作品を8等分した場合の第1部の発表と議論
第5回	テクスト精読(2)	第2部の発表と議論
第6回	テクスト精読(3)	第3部の発表と議論
第7回	テクスト精読(4)	第4部の発表と議論
第8回	テクスト精読(5)	第5部の発表と議論
第9回	テクスト精読(6)	第6部の発表と議論
第10回	テクスト精読(7)	第7部の発表と議論
第11回	テクスト精読(8)	第8部の発表と議論
第12回	先行研究のレビュー(1)	伝統的批評に関する発表と議論
第13回	先行研究のレビュー(2)	最近の批評に関する発表と議論
第14回	まとめ	作品と批評の総括、期末レポートのテーマについての話し合い

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　発表者はレジュメを必ず用意すること。レジュメには、要約のみならず論点や意見などの提示が必要である。発表にあたっていなくても、テクストをしっかりと読み、自身の考えをまとめてゼミに参加すること。
　予習・復習は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
Mary Shelley, *Frankenstein*, ed. Maurice Hindle, Penguin Classics, 2003.

【参考書】
・シェリー著、『フランケンシュタイン』、小林章夫訳、光文社新訳文庫、2010年
・廣野由美子著、『批評理論入門――『フランケンシュタイン』解剖講義』、中公新書、2005年
・Laura Nicosia and James F Nicosia, eds., *Critical Insights: Frankenstein; or, the Modern Prometheus*, Salem Press, 2024.

【成績評価の方法と基準】
・議論への貢献度：30%
・発表：30%
・期末レポート：40%

【学生の意見等からの気づき】
学生のレジュメをもとにした議論をさらに充実させる。

【その他の重要事項】
　基本的に全回に出席することが望ましい。この場合の「出席」とは、該当範囲を予習してきて、積極的にゼミに参加することを意味する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　イギリス文学、ユートピア文学
＜研究テーマ＞
　イギリス小説、ユートピア／ディストピア、帝国主義、ジェンダー
＜主要研究業績＞
・*Wastelands and Wonderlands: Utopias and Dystopias in Film and Literature* (共著, SUNY Press, 2026)
・*Huxley, ce méconnu*（共著, Edizioni Effigi, 2025）
・*Critical Insights: Frankenstein; or, the Modern Prometheus* (共著, Salem Press, 2024)
・*Orientalism and Reverse Orientalism in Literature and Film: Beyond East and West* (共著, Routledge, 2021)
・サンダー・L・ギルマン著『肥満男子の身体表象――アウグスティヌスからベーブ・ルースまで』（共訳, 法政大学出版局, 2020）
・フレドリック・ジェイムソン他著『アメリカのユートピア――二重権力と国民皆兵制』（共訳, 書肆心水, 2018）

【Outline (in English)】
In this course, students are expected to carefully read Mary Shelley's *Frankenstein* (1818, rev. 1831) and discuss the text and its relevant themes and issues. The course also refers to films and studies on the author and her work. The goals of this course are to acquire the technique of interpreting literature and present a new interpretation convincingly. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. The final grade will be calculated according to the following process: participation in discussion (30%), presentation (30%) and term-end essay (40%).

LIT500B3（文学 / Literature 500）

英米文学特講IV A

波戸岡　景太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、米文学を研究する際に避けて通れない「文学理論」について、ジョナサン・カラーの著作を中心に概観します。履修者は、20世紀の終わりから現在にかけて世界規模で整備されてきた「セオリー」の有効性を再検証することで、さまざまな米文学作品を理論的に読解できるようになることを目指します。
〈講義題目〉
文学理論を再考する

【到達目標】
(1) 現代アメリカ文学研究における「理論」の役割を理解する。
(2) ジョナサン・カラーの仕事について、その歴史的な意義を説明できるようになる。
(3) 文体やメッセージといったものを、多角的な視点で捉えられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式です。履修者は各自の担当章についてプレゼンテーションを行い、それへのフィードバックを、教員と他の履修者が行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	教科書・序章
第2回	理論の中の文学	教科書・第1章前半
第3回	ジュディス・バトラー	教科書・第1章後半
第4回	小説と国民国家	教科書・第2章前半
第5回	ベネディクト・アンダーソン	教科書・第2章後半
第6回	理論への抵抗	教科書・第3章前半
第7回	ポール・ド・マン	教科書・第3章後半
第8回	テクスト、その運命の転変	教科書・第4章前半
第9回	ジャック・デリダ	教科書・第4章後半
第10回	記号について	教科書・第5章前半
第11回	ソシュールとデリダ、恣意性について	教科書・第5章後半
第12回	行為遂行的なもの	教科書・第6章前半
第13回	クィアについて	教科書・第6章後半
第14回	まとめ／期末試験	小論文形式で試験を実施

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。配布資料の予習・復習、および授業内で示される課題対応を実施してください。

【テキスト（教科書）】
カラー、ジョナサン『文学と文学理論』（折島正司訳、岩波書店、2011年）

【参考書】
Culler, Jonathan. *The Literary in Theory*. Stanford UP, 2007.
カラー、ジョナサン『文学理論〈1冊でわかる〉シリーズ』（荒木映子、富山太佳夫訳、岩波書店、2003年）

【成績評価の方法と基準】
・授業内プレゼンテーション：70％
・期末試験（小論文）：30％
以上を合計し60％以上を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本授業での学びを直接・間接に自身の修論作成に取り入れた履修者が多かったため、今年度も引き続き、批評の「読み方」と「書き方」の両方の指導に力を入れたいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
アメリカ文学、ポピュラーカルチャー
＜研究テーマ＞
現代アメリカ文学・文化における動物表象、アダプテーション理論を応用したポピュラーカルチャーの分析
＜主要研究業績＞
『スーザン・ソンタグ：「脆さ」にあらがう思想』（集英社新書、2023年）
Thomas Pynchon's Animal Tales: Fables for Ecocriticism（Lexington Books、2022）

【Outline (in English)】
This course gives you a thorough overview of literary theory by reading Jonathan Culler's *The Literature in Theory*. Eventually, students will be able to understand different American literary works by thinking about what they mean in theory.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.
Grading shall be as follows:
1) Class presentation (70%)
2) Essay exam (30%)

LIT500B3（文学 / Literature 500）

英米文学特講IV B

波戸岡　景太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、米文学を研究する際に避けて通れない「文学理論」について、秋学期も引き続き、ジョナサン・カラーの著作を中心に概観します。履修者は、20世紀の終わりから現在にかけて世界規模で整備されてきた「セオリー」の有効性を再検証することで、さまざまな米文学作品を理論的に読解できるようになることを目指します。
〈講義題目〉
文学理論を再考する

【到達目標】
(1) 現代アメリカ文学研究における「理論」の役割を理解する。
(2) ジョナサン・カラーの仕事について、その歴史的な意義を説明できるようになる。
(3) 文体やメッセージといったものを、多角的な視点で捉えられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式です。履修者は各自の担当章についてプレゼンテーションを行い、それへのフィードバックを、教員と他の履修者が行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	理論、国民国家、行為遂行的なもの
第2回	解釈について	教科書・第7章前半
第3回	トニ・モリスン	教科書・第7章後半
第4回	全知について	教科書・第8章前半
第5回	一九世紀小説と二〇世紀小説	教科書・第8章後半
第6回	悪い文章と良い哲学	教科書・第9章前半
第7回	ウィトゲンシュタイン	教科書・第9章後半
第8回	批評的著述	教科書・第10章前半
第9回	バーバラ・ジョンソン	教科書・第10章後半
第10回	カルチュラル・スタディーズ	教科書・第11章前半
第11回	ミーケ・バル	教科書・第11章後半
第12回	比較文学について	教科書・第12章前半
第13回	インター・テクスチュアリティ	教科書・第12章後半
第14回	まとめ／期末試験	小論文形式で試験を実施

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
カラー、ジョナサン『文学と文学理論』（折島正司訳、岩波書店、2011 年）

【参考書】
Culler, Jonathan. *The Literary in Theory*. Stanford UP, 2007.
カラー、ジョナサン『文学理論〈1 冊でわかる〉シリーズ』（荒木映子、富山太佳夫訳、岩波書店、2003 年）

【成績評価の方法と基準】
・授業内プレゼンテーション：70 %
・期末試験（小論文）：30 %
以上を合計し60 %以上を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本授業での学びを直接・間接に自身の修論作成に取り入れた履修者が多かったため、今年度も引き続き、批評の「読み方」と「書き方」の両方の指導に力を入れたいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
アメリカ文学、ポピュラーカルチャー
＜研究テーマ＞
現代アメリカ文学・文化における動物表象、アダプテーション理論を応用したポピュラーカルチャーの分析
＜主要研究業績＞
『スーザン・ソンタグ：「脆さ」にあらがう思想』（集英社新書、2023 年）
Thomas Pynchon's Animal Tales: Fables for Ecocriticism (Lexington Books、2022)

【Outline (in English)】
This course gives you a thorough overview of literary theory by reading Jonathan Culler's *The Literature in Theory*. Eventually, students will be able to understand different American literary works by thinking about what they mean in theory.
Learning activities outside of classroom:
Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.
Grading shall be as follows:
1) Class presentation (70%)
2) Essay exam (30%)

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学特講 II A

福元　広二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
英語がどのようにして世界中で使用されるようになり、世界共通語となってきたかを解説します。また、語用論的な視点から英語史を学ぶことで、現代の英語に対してさらに理解を深めることを主な目的としています。

【到達目標】
英語史における語用論的分析について説明できるようになります。語用論について書かれた文献をきちんと正確に読めるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に関心のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。
　リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業内容の紹介
第2回	教科書　Chapter 1 歴史語用論の概要	pp.1-7
第3回	教科書　Chapter 1 歴史語用論の範囲	pp.8-12
第4回	教科書　Chapter 2 歴史語用論のデータ	pp.13-18
第5回	教科書　Chapter 2 歴史語用論の最近の傾向	pp.19-30
第6回	教科書　Chapter 3 歴史語用論の方法論	pp.31-43
第7回	教科書　Chapter 3 歴史語用論の応用	pp.44-52
第8回	教科書　Chapter 4 談話標識の分析	pp.54-63
第9回	教科書　Chapter 4 間投詞の分析	pp.64-72
第10回	教科書　Chapter 5 中英語の呼びかけ語	pp.73-79
第11回	教科書　Chapter 5 初期近代英語の呼びかけ語	pp.80-91
第12回	プレゼンテーション(1)	論文紹介（1）
第13回	プレゼンテーション(2)	論文紹介（2）
第14回	春学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に教科書を読んで、予習をしてください。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
（英文学専攻）Jucker Andreas and Irma Taavitainen (2013) English Historical Pragmatics. (Edinburgh University Press)

【参考書】
適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
平常点とレポートで総合的に評価します。（平常点60点、レポート40点）

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
英語学・英語史
＜研究テーマ＞
初期近代英語期の文法
＜主要研究業績＞
「第6章　Shakespeareの英語」
『英語教師のための英語史』
開拓社 (2018)

【Outline (in English)】
The purpose of this course is to introduce the major changes in English grammar from Old English to Present-day English.
The goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand the history of the English language.
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
Final grades will be calculated according to the following process:
Mid-term report (40%) and in-class contribution (60%)

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学特講II B

片見　彰夫

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、語用論（pragmatics）を中心とする英語学演習科目です。語用論は、発話が置かれる文脈、話し手の意図、聞き手との関係、社会的・文化的規範などを考慮しながら、言語の意味と機能を分析する言語学分野です。本授業では、発話行為理論、含意、前提、指示表現、ポライトネス、ディスコースといった語用論の主要概念を体系的に学びます。教科書『はじめての語用論』を基礎として、関連の英語論文を読み、発表を行います。英語の具体的な使用例を分析する演習を行い、受講生が「文の意味」と「発話の意味」の違いを理論的に理解し、説明できるようになることを目的としています。英語を実際に使われる言語として捉える視点を養うことが、本授業の意義となります。

【到達目標】
語用論の主要概念（発話行為、含意、前提、ポライトネス等）を説明できるようになります。
文脈を考慮して英語の発話の意味を分析できるようになります。
英語の具体的使用例を理論に基づいて解釈できるようになります。
語用論的分析結果を論理的に説明できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
講義と演習を組み合わせて授業を進めます。各回、教科書の該当章に基づく理論解説の後、英語の会話例や文章例を用いた分析演習を行います。また関連する英語論文を読解し、担当者はレポートを行います。受講者は発表やグループディスカッションを通じて語用論的解釈を検討し、教員から随時フィードバックを受けることになります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション 教科書　第1章　語用論とは何か	コンテクスト、言語学における語用論の勃興と発展等pp.1-23
第2回	教科書　第2章　グライス語用論	言われた事柄と推意された事柄、会話的推移等　pp.24-40
第3回	教科書　第3章　情報語用論	2種の情報構造、語用論的機能等　pp.41-56
第4回	教科書　第4章　対人語用論	なぜポライトネスか？、コミュニケーション、言語ゲームへのアプローチ等pp.57-76
第5回	教科書　第5章　指示語用論	ダイクシス表現、人称ダイクシス等　pp.77-92
第6回	教科書　第6章　言語行為論	言語行為論の成立、言語行為論の現在等　pp.93-108
第7回	教科書　第7章　関連性理論	関連性と発話解釈、アドホック形成概念等　pp.109-124
第8回	教科書　第8章　認知言語学と語用論	認知言語学の考え方、カテゴリー化とプロトタイプ等　pp.125-140
第9回	教科書　第9章　文法研究と語用論	語用論的な文法研究の歴史、文法の中に潜む語用論等　pp.141-157
第10回	教科書　第10,11章　会話分析、メタ語用論	会話分析の方法論、談話標識等　pp.158-193
第11回	教科書　第12章　歴史語用論	歴史語用論の方向性、マクロの視点とミクロの視点等　pp.194-210
第12回	プレゼンテーション	受講生自らが、指定された論文の紹介と解説を行う（1）
第13回	プレゼンテーション	受講生自らが、指定された論文の紹介と解説を行う（2）
第14回	秋学期のまとめ	1．既習事項の補足とまとめを行う。 2．受講生が自ら取り組んでいる関連研究を紹介する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
加藤重弘・澤田淳 (2020)『はじめての語用論』研究社

【参考書】
適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】
レポート課題：40％
発表：30％
平常点（討論・演習への参加）：30％

【学生の意見等からの気づき】
初年度のため、記入不可。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【その他の重要事項】
英語学基礎科目の履修が望ましいです。
生成AIは、構想や分析補助に限り使用可とし、提出物では必ず明示すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞英語史・英語学・文体論
＜研究テーマ＞中英語から、近代英語における文体と文法
＜主要研究業績＞第1章『近代英語における文法的・構文的変化』開拓社(2023)
編著『英語教師のための英語史』開拓社（2018)

【Outline (in English)】
(Course outline) This seminar introduces core concepts of pragmatics, focusing on how meaning is constructed through context, speaker intention, and interaction. Students analyze English data based on fundamental pragmatic theories.
(Learning Objectives) By the end of the course, students should be able to:
explain key concepts and theories in pragmatics,
analyze English utterances in relation to context and interaction,
apply pragmatic concepts to real examples of language use.
(Learning activities outside of classroom) Students are expected to read assigned chapters from the textbook and complete preparatory and review tasks. Required study time is more than four hours per class meeting (two-credit course).
(Grading Criteria /Policy) Final grades will be based on written assignments, presentations, participation in discussion, and a final report.

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学特講III A

石川　潔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
アスペクトに関する第２言語習得研究
＜講義題目＞アスペクトに関する第２言語習得研究

【到達目標】
実験研究の技法と報告の仕方、およびアスペクトの諸理論とその習得の先行研究の入門的知識を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
文献の輪読と講義を組み合わせる予定です。
発表に対してコメントを返します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業内容とやり方の説明
第2回	multidimensional scaling	基本的な考え方および問題点
第3回	アスペクトの実時間処理の文献１	問いの設定
第4回	アスペクトの実時間処理の文献２	実験１など
第5回	アスペクトの実時間処理の文献３	全体の考察：Guarding against a Type ii error?
第6回	英語の完了形と日本語の「ている」	テンスなのか、アスペクトなのか（特 perfective vs. imperfective の区別や Reichenbach 理論との関連において）
第7回	習得についてのアスペクト仮説１	アスペクト仮説の文献輪読１
第8回	習得についてのアスペクト仮説２	アスペクト仮説の文献輪読２
第9回	習得についてのアスペクト仮説３	アスペクト仮説の文献輪読３
第10回	Vendler 分類についての再考	Whether the classification should be seen in terms of lexical items or in terms of compositional phrasalsemantics
第11回	日本語のアスペクトの分析１	先行研究のまとめの文献の輪読１
第12回	日本語のアスペクトの分析２	先行研究のまとめの文献の輪読２
第13回	日本語のアスペクトの分析３	先行研究のまとめの文献の輪読３
第14回	まとめ	今後の研究に向けての指針の議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
指定された文献を読んで発表の準備をしてください。
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で適宜、指示します。

【参考書】
適宜、指示。

【成績評価の方法と基準】
授業での議論への参加：50％
授業内発表：50％

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）
＜研究テーマ＞
音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係
＜主要研究業績＞
http://www.i.hosei.ac.jp/ kiyoshi/research.html などを参照。

【Outline (in English)】
（Course outline）Introduction to L2 research on aspect
（Learning Objectives）To gain (1) very introductory skills for designing and reporting an experimental study, and (2)introductory knowledge of theories of aspect as well as past research on its acqusition.
（Learning activities outside of classroom）Preparation for presentations in class by working through assigned readingss.
（Grading Criteria /Policy）Participation (50%), presentations (50 %).

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学特講III B

石川　潔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
外国語教育や音声学は昔から実験科学分野だが、近年は統語論研究においても実験研究への志向が見られる。しかし、実験計画法や（実験データの処理のための）統計学は、日本の言語学教育の一部になっているとは言いがたい。よって、教育・音声・統語解析・理論言語学を専門とする皆様のために、実験データ分析の中級レベルの導入を行いたい。
＜講義題目＞心理言語学データの分析法（中級編）

【到達目標】
本来このような大学院科目は、履修者のニーズに応じて内容自体を変えるべきであり、具体的に何を目指すかは履修者の希望と照らし合わせて決定する。。しかし今回は、履修者ニーズがある読めているため、混合効果一般化線形モデルの入門とする。到達目標は以下の通り：
・正規分布しないデータ（特定の選択肢の「選択率」やコーパスでのカウント数など）を一般化混合モデルで分析できるようになること。
・伝統的な分散分析では扱えない、実験参加者に加えて言語刺激についても一般化が必要になる通常の心理言語学実験のデータを、混合効果モデルで分析できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
以下の授業計画は例示に過ぎない。履修者の理解度などに応じて変更があり得る。
試験（練習問題を含む）に際しては、模範解答、講評などのフィードバックを与える予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	環境整備	統計環境 R の導入
2	モデルの構築という考え方	線形回帰、およびその統計量の意味
3	線形回帰モデルの構築法	最小二乗法、最尤法
4	重回帰分析の基礎１	複数の変数による予測
5	重回帰分析の基礎２	モデル全体としての予測と、個々の予測変数の寄与度との、違い
6	重回帰分析の基礎３	モデル間の比較による、個々の予測変数の寄与度の評価
7	重回帰分析の基礎４	分布に関する前提
8	線形モデル	伝統的な分散分析や *t* 検定の、線形回帰モデルとしての表現
9	選択率データの分布	２項分布、arcsine square-root transformation、logit transformation
10	ロジスティック回帰１	ロジット及びロジスティック関数、線形予測子、リンク関数、separation
11	混合効果モデル１	固定因子および変量因子の概念
12	混合効果モデル２	subject analysis と item analysis
13	混合効果モデル３	変量因子にもとづく傾き・切片
14	この先の勉強に向けて	分布のシミュレーション、ベイズ統計学に向けて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい（わからない箇所は教員または周囲に尋ねること）。
また、上記の授業計画の場合は、
・実験技法を学んだら、同じ（または似た）技法を使った他の論文を自分で読んでみる。
・統計技法を学んだら、同じ（または似た）技法を使った他の論文を自分で読んでみたり、自分の手持ち（または架空）のデータを分析してみる。
といった作業を行うと良いでしょう。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.
久保拓弥 (2012).『データ解析のための統計モデリング入門—一般化線形モデル・階層ベイズモデル・MCMC』東京：岩波書店.
Sonderegger, M. 2023. *Regression Modeling for Linguistic Data*. MIT Press.
Windter, B. 2019. *Statistics for Linguists: An Introduction Using R*. Routledge
その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】
平常点 50 %、学期末試験 50 %

【学生の意見等からの気づき】
N/A.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）
＜研究テーマ＞　音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係
＜主要研究業績＞
http://www.i.hosei.ac.jp/ kiyoshi/research.html を参照。

【Outline (in English)】
(Course outline)
An intermediate-level course on statistical analysis of experimental data.
(Learning objectives)
Generalized liner mixed-effects model building for data not normally distributed on the one hand, and for linguistics data that need generalizations not only over participants but also stimuli.
(**Learning activities outside of classroom**)
Read papers employed those techniques taught, and try analyzing (possibly fake) data using them.
(**Grading Criteria /Policy**)
In-class participations 50 %, final exam 50%

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学特講IV A

川﨑　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
音声/音韻に関する論文・本を読み、発表することにより、理論についての理解を深め、問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる力を身につけることを目的とする。

【到達目標】
本授業では、特に音韻分野の第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
論文を読み、毎回全員で発表・議論する演習方式で行う。主に音声・音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。
授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	リサーチメソッド・授業プランの作成	課題論文リストの提示と概要の説明
3	音声言語習得研究	音声の第一言語習得と第二言語習得
4	第二言語習得の理論	音韻習得理論を取り上げ、概要を紹介する
5	SLA Phonology 論文発表（1）	SLA Phonology 論文発表と分析手法について
6	SLA Phonology 論文発表（2）	分析手法について・演習
7	研究計画発表1	修士2年生による研究テーマ発表
8	研究計画発表2	修士1年生による研究テーマ発表
9	エラーに関する研究	エラーのタイプについての分析
10	処理可能性理論（1）	処理可能性理論についての概要、理論の説明
11	処理可能性理論（2）	処理可能性理論に関する論文発表
12	履修者等による発表（1）	レビュー論文
13	履修者等による発表（2）	履修者等による論文のポスター発表（1）
14	履修者等による発表（3）	履修者等による論文のポスター発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で必要に応じて論文を指定する。

【参考書】
授業内でその都度、指定する。

【成績評価の方法と基準】
＜修士課程学生＞
授業での議論への参加：40%
授業内発表：40%
研究計画書：20%

【学生の意見等からの気づき】
学生の研究発表の時間を多くとりたいと考えている。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　音韻論、第二言語習得
＜研究テーマ＞　音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など
＜主要研究業績＞
川﨑貴子・田中邦佳「L 2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)
川﨑貴子 「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)
Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Through reading Phonetics/Phonology papers, students will learn how to set their research theme and test their hypotheses.
Learning Objectives: This course aims to deepen the student's understanding of theories of SLA and research methodologies in the field and help them to find their research topics.
Learning activities outside the classroom: Students must read the assigned papers before class. Students are required to study for about 4 hours outside of the classroom.
Grading Criteria:
In-class participation: 40%
In-class presentation：40%
Research abstract：20%

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学特講IV B

川﨑　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の、特に音韻・音声習得の研究論文を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる理論、研究法を学ぶ。

【到達目標】
―音韻論、及びSLAの音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法についての知識を身に付ける。
―自らの研究計画を策定、研究を遂行し、論文の執筆に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などを学ぶ。
授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容の説明
2	修士２年生の研究発表（１）	研究の進捗状況発表（修士２年生）（１）
3	修士２年生の研究発表（２）	研究の進捗状況発表（修士２年生）（２）
4	修士１年生の研究発表（１）	研究の進捗状況の発表（修士１年生、および研修生）（１）
5	修士１年生の研究発表（２）	研究の進捗状況の発表（修士１年生、および研修生）（２）
6	論文購読ー母語音声の影響に関する論文	母語の目録のL2への影響（解説）
7	論文購読ー母語音声の影響(研究方法)	母語の目録のL2への影響（履修者等による発表）(1)
8	論文購読ー母語音声の影響（分析方法・結果記述）	母語の目録のL2への影響（履修者等による発表）(2)
9	論文購読ー音韻・語彙習得	語彙の特定と音韻処理ー（履修者等による発表）(1)
10	論文購読ー音韻・語彙習得（研究手法）	語彙の特定と音韻処理ー（履修者等による発表）(2)
11	論文購読ー音韻・語彙習得（分析）	語彙の特定と音韻処理ーデータ分析演習
12	修士１年生による修論計画発表	修士１年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表
13	修士２年生による修論発表	修士２年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】
必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
＜修士課程＞
授業発表....40%
授業内での発言・議論への貢献....40%
学期末論文・研究計画書....20%

【学生の意見等からの気づき】
引き続き理解を確認しつつ、授業を進めてまいりたいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　音韻論、第二言語習得
＜研究テーマ＞　音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など
＜主要研究業績＞
川﨑貴子・田中邦佳「Ｌ２英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)
川﨑貴子 「カタカナ代用による第２言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)
Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Through reading papers on phonological and phonetic acquisition, students will learn theories and research methods that will form the basis of their own papers.
Learning Objectives:
-To acquire knowledge of research methods in the field of second language acquisition and teaching, while reading basic literature in the field of phonology and SLA phonology and vocabulary.
-Students will be able to formulate their own research plan, conduct research, and produce a thesis.
Learning activities outside of classroom ： Students are required to read assigned papers and prepare for their presentations. Students are expected to study at least 4 hours outside of classroom.
Grading Criteria:
In-Class presentations....40%
In-Class participation....40%
Term paper....20%

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学特講Ⅴ A

常本　亜希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theories, research, and pedagogy. Students critically engage with key concepts and research methodologies, develop insights into second language acquisition (SLA), and apply theoretical knowledge to practical language teaching and learning contexts.
< 講義題目>
第二言語習得　Second Language Acquisition

【到達目標】
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:
1. Explain the core issues in L2 acquisition research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy
3. Develop individual research question(s) within SLA and propose research investigating the question(s)

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students will engage with research articles pertinent to each week's theme, deepening their understanding of the subject matter. Students are encouraged to select a question of personal interest within the field, synthesize existing research related to this question, and report their findings through presentations. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	Introduction to the course	Presentation of key concepts in second language acquisition and teaching
第2回	First language acquisition	Examine how children acquire their first language (L1), including stages and theories of L1 acquisition, to understand the basis of language learning
第3回	Second language acquisition	Delve into key theories of second language (L2) acquisition, highlighting differences in learning processes between L1 and L2
第4回	Cognitive approaches to SLA	Focus on how cognitive processes such as memory, attention, and perception affect the learning of a second language
第5回	Cognitive-Interactionist Perspectives	Explore the role of interaction in SLA from a cognitive-interactionist viewpoint, including input, output, and feedback mechanisms
第6回	Analysing Learner Language	Study the evolution of learner language, focusing on error analysis and the concept of interlanguage
第7回	Age Effects in SLA	Investigate how age impacts language learning capabilities, including critical period hypotheses and age-related differences in acquisition
第8回	Crosslinguistic Influences	Examine how learners' L1 can influence the acquisition of an L2, including transfer, interference, and facilitation effects
第9回	Individual Differences in SLA (1)	Focus on the cognitive and affective dimensions of individual differences, including how personal beliefs, aptitudes, and emotional states shape the language learning process
第10回	Individual Differences in SLA (2)	Examines the strategic and psychological aspects of individual differences such as learning strategies, self-regulation, anxiety, and enjoyment
第11回	Motivation in SLA	Delve into various types of motivation and their impact on L2 learning
第12回	Social Approaches to SLA	Examine the influence of sociocultural contexts on language acquisition, focusing on key concepts and methodologies that explore the role of social interaction in L2 learning
第13回	Research presentations	Research project presentations
第14回	Feedback on research presentations and review	Discussion of and feedback on students' research projects and course review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class-- this entails meeting and coordinating with your group members.

【テキスト（教科書）】
Patsy M. Lightbown, and Nina Spada. (2021). *How languages are learned (5th edition).* Oxford University Press.

【参考書】
Zoltán Dörnyei and Ema Ushioda. (2021). *Teaching and researching motivation (3rd edition).* Routledge.
Susan M. Gass, Jennifer Behney, and Luke Plonsky. (2020). *Second language acquisition: An introductory course (5th edition).* Routledge.
Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition.* Hodder Education.
Rod Ellis. (2015). *Understanding second language acquisition (2nd edition).* Oxford University Press.
大関浩美（2010）『日本語を教えるための第二言語習得入門』くろしお出版
新多了, 馬場今日子（2016）『はじめての第二言語習得論講義: 英語学習への複眼的アプローチ』大修館書店

【成績評価の方法と基準】
In-class presentations: 50%
Written report: 25%
Research proposal: 25%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class. Students are expected to attend every class. A grade of "E" will be given for being absent from four or more classes.

【学生の意見等からの気づき】
Not applicable.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
applied linguistics, foreign language education, second language speech production and perception
＜研究テーマ＞
Linguistic and non-linguistic features relevant to second language speech perception
Second language speakers' self- and other-assessments of pronunciation
Teachers' cognition of second language pronunciation teaching
＜主要研究業績＞
Tsunemoto, A., &Trofimovich, P. (2024). Coherence and comprehensibility in second language speakers' academic speaking performance. *Studies in Second Language Acquisition, 46*, 795－817.
Tsunemoto, A., &Trofimovich, P. (2023). Pre- and in-service teachers' beliefs about second language pronunciation teaching, their experience, and speech assessments. *System, 118*, 103125
Tsunemoto, A., Lindberg, R., Trofimovich, P., &McDonough, K. (2022). Visual cues and rater perceptions of second language comprehensibility, accentedness, and fluency. *Studies in Second Language Acquisition, 44,* 659－ 684.

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theories, research, and pedagogy.
（Learning Objectives）
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:
1. Explain the core issues in L2 acquisition research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy
3. Develop individual research question(s) within SLA and propose research investigating the question(s)
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following
In-class presentations: 50%
Written report: 25%
Research proposal: 25%

LIN500B3（言語学 / Linguistics 500）

言語科学特講Ⅴ B

常本　亜希

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
This course offers an in-depth exploration of second language acquisition (SLA), enabling students to critically engage with contemporary research articles and apply findings to both teaching practices and personal research interests. Students enhance their teaching methods or research projects, bridging theoretical knowledge with practical application.
< 講義題目>
第二言語習得　Second Language Acquisition

【到達目標】
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:
1. Critically analyze and synthesize SLA research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy
3. Propose research on instructed L2 learning in the context of Japan

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students will engage with research articles pertinent to each week's theme, deepening their understanding of the subject matter. Students are encouraged to select a question of personal interest within the field, synthesize existing research related to this question, and report their findings through presentations. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	Introduction to the course	An introduction or refresher on how first and second language acquisition differ and key concepts in SLA and teaching
第2回	Acquisition of grammar	Investigating how learners acquire and process grammar, the role of explicit instruction, and the timing of grammar teaching in SLA
第3回	Acquisition of vocabulary	Investigating the process of lexical development and processing, and effective strategies for teaching vocabulary
第4回	Acquisition of pronunciation	Examining the acquisition of pronunciation and methods for teaching pronunciation skills effectively
第5回	Interaction and collaborative learning	Exploring the role of interaction in SLA from cognitive and sociocultural perspectives and how collaboration enhances learning
第6回	Corrective feedback	Examining the types and effectiveness of oral and written corrective feedback, with a focus on learner-centered approaches
第7回	Cognitive individual differences and technology	Investigating the role of cognitive abilities in SLA and how AI and technology can personalize language learning
第8回	Affective individual differences	Analyzing motivation, emotions, and engagement in SLA, with insights from dynamic and psychological frameworks
第9回	Learning through practice	Understanding the role of structured practice, including PPP, shadowing, and skill acquisition, in language learning.
第10回	Learning through task	Examining Task-Based Language Teaching (TBLT), the role of task complexity, and hybrid curriculum approaches
第11回	Age and curriculum	Evaluating the impact of learning onset age, curriculum design constraints, and innovations in early and intensive programs
第12回	Gesture and Multimodality	Investigating the role of gesture and multimodal resources in language learning and teaching
第13回	Research presentations	Research project presentations
第14回	Feedback on research presentations and review	Discussion of and feedback on students' research projects and course review

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class—— this entails meeting and coordinating with your group members.

【テキスト（教科書）】
鈴木祐一. (2024).『あたらしい第二言語習得論』. 研究社. ISBN: 9784327411114

【参考書】
Susan M. Gass, Jennifer Behney, and Luke Plonsky. (2020). *Second language acquisition: An introductory course (5th edition).* Routledge.
Patsy M. Lightbown, and Nina Spada. (2021). *How languages are learned (5th edition).* Oxford University Press.
Shawn Loewen. (2020). *Introduction to instructed second language acquisition (2nd edition).* Routledge.
Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition.* Hodder Education.
Rod Ellis. (2015). *Understanding second language acquisition (2nd edition).* Oxford University Press.
大関浩美（2010）『日本語を教えるための第二言語習得入門』くろしお出版
新多了, 馬場今日子（2016）『はじめての第二言語習得論講義: 英語学習への複眼的アプローチ』大修館書店

【成績評価の方法と基準】
In-class presentations: 50%
Written report: 25%
Research proposal: 25%
Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class. Students are expected to attend every class. A grade of "E" will be given for being absent from four or more classes.

【学生の意見等からの気づき】
Not applicable.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
applied linguistics, foreign language education, second language speech production and perception
＜研究テーマ＞
Linguistic and non-linguistic features relevant to second language speech perception
Second language speakers' self- and other-assessments of pronunciation
Teachers' cognition of second language pronunciation teaching
＜主要研究業績＞
Tsunemoto, A., &Trofimovich, P. (2024). Coherence and comprehensibility in second language speakers' academic speaking performance. *Studies in Second Language Acquisition, 46*, 795－817.
Tsunemoto, A., &Trofimovich, P. (2023). Pre- and in-service teachers' beliefs about second language pronunciation teaching, their experience, and speech assessments. *System, 118*, 103125
Tsunemoto, A., Lindberg, R., Trofimovich, P., &McDonough, K. (2022). Visual cues and rater perceptions of second language comprehensibility, accentedness, and fluency. *Studies in Second Language Acquisition, 44,* 659－ 684.

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course aims to help students critically engage with contemporary research articles in second language acquisition (SLA) and apply findings to teaching practices and personal research interests.
（Learning Objectives）
Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:
1. Critically analyze and synthesize SLA research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy
3. Propose research on instructed L2 learning in the context of Japan
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following
In-class presentations: 50%
Written report: 25%
Research proposal: 25%

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅠ

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて１つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】
最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも２本程度（できれば３本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者をまねき、論文構想・執筆過程についても紹介してもらう。
発表へのフィードバックについては、次回の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整。
第2回	博士課程院生執筆の論文検討(1)	賜姓源氏をめぐって1
第3回	博士課程院生執筆の論文検討(2)	賜姓源氏をめぐって2
第4回	博士課程院生執筆の論文検討(3)	賜姓源氏をめぐって3
第5回	博士課程院生執筆の論文検討(4)	賜姓源氏をめぐって4
第6回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(2)	日渤交渉の歴史定義
第8回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(3)	日渤交渉の変質
第9回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(4)	外交儀礼の特徴
第10回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(6)	日本古代駅制の特質
第12回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(7)	駅伝制の検討
第13回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(8)	中国と日本の古代交通制度の比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。
発表者の事前準備は標準的に2時間。受講生の事前準備は標準的に1時間を要する。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】
最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90％）。
演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10％）。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本古代史
＜研究テーマ＞
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
＜主要研究業績＞
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
To finish the research as a doctorate in the course, Profeesor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅡ

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて１つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】
最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも２本程度（できれば３本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生執筆論文の検討(1)	聖徳太子信仰の形成再考
第3回	博士課程院生執筆論文の検討(2)	聖徳太子信仰の展開再考
第4回	博士課程院生執筆論文の検討(3)	聖徳太子信仰の史料論再考
第5回	博士課程院生執筆論文の検討(4)	聖徳太子信仰の歴史的意義再考
第6回	博士課程在籍者の執筆論文検討(1)	人姓とは何か再考
第7回	博士課程在籍者の執筆論文検討(2)	複姓氏族の検討
第8回	博士課程在籍者の執筆論文検討(3)	舎人の語原再考
第9回	博士課程在籍者の執筆論文検討(4)	舎人氏族の実態
第10回	博士課程在籍者の執筆論文検討(5)	関東の国造の特質
第11回	基本論文の輪読（１）	石母田正『日本の古代国家』第１章
第12回	基本論文の輪読（２）	石母田正『日本の古代国家』第２章
第13回	基本論文の輪読（３）	石母田正『日本の古代国家』第３章
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】
最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する。
演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本古代史
＜研究テーマ＞
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
＜主要研究業績＞
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
To finish the research as a doctorate in the course, Profeesor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅠ

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本中世史に関係する論文の構成や内容について個別に相談する。また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】
日本中世史に関係する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表（1）	研究報告と議論
第6回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表（2）	研究報告と議論
第10回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表（3）	研究報告と議論
第14回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点５０%、学期末レポート点５０%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞日中国際交流史・日本仏教史
＜主要研究業績＞『中世禅律仏教論』（山川出版社、2009年）・『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅡ

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本中世史に関係する論文の構成や内容について個別に相談する。また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】
日本中世史に関係する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表（1）	研究報告と議論
第6回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表（2）	研究報告と議論
第10回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表（3）	研究報告と議論
第14回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点５０%、学期末レポート点５０%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞日中国際交流史・日本仏教史
＜主要研究業績＞『中世禅律仏教論』（山川出版社、2009年）・『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅠ

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
①査読付学術雑誌に論文を掲載する。
②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（5）	学術雑誌への投稿をめざして
第7回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（2）	論文構成の方法
第9回	論文講読（3）	史料批判
第10回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（1）	今後の方針
第13回	研究計画発表（2）	史料採訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞都市論、記憶論
＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】
This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅡ

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
①査読付学術雑誌に論文を複数掲載する。
②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（１）	研究史との格闘
第3回	研究発表（２）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（３）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（４）	表の効果的使用
第6回	研究発表（５）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（１）	分野の選定
第8回	論文講読（２）	表現力の問題
第9回	論文講読（３）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（４）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（５）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（１）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（２）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００％で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞都市論、記憶論
＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】
This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅠ

内藤　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近現代史に関する発表や専門書・論文の検討などを行い、博士論文を完成させるために必要な能力を養う。

【到達目標】
本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向の把握、②独創的な研究テーマの確立、③高い水準の論文の作成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で行う。具体的には、受講生による、①論文の構想発表、執筆中の論文の中間発表と質疑応答、②関心をもった専門書・論文の合評会、③最新の研究や史料の紹介、などを中心とする。課題等の提出やフィードバックなどは主に「学習支援システム」を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	研究発表1	明治史研究（1）
第3回	研究発表2	明治史研究（2）
第4回	研究発表3	明治史研究（3）
第5回	研究発表4	明治史研究（4）
第6回	研究発表5	大正史研究（1）
第7回	研究発表6	大正史研究（2）
第8回	中間総括	中間総括と質疑応答
第9回	研究発表7	昭和戦前史研究（1）
第10回	研究発表8	昭和戦前史研究（2）
第11回	研究発表9	昭和戦前史研究（3）
第12回	研究発表10	昭和戦後史研究（1）
第13回	研究発表11	昭和戦後史研究（2）
第14回	全体総括	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。論文評に際しては、事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に用いない。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100％）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムが利用可能なIT機器

【その他の重要事項】
・「史学特殊演習」AⅡ（秋学期）との継続履修を推奨する。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course mainly reports on the modern history of Japan, criticizes academic books and dissertations, and discusses them. Through these processes, you will acquire the abilities necessary to complete your doctoral dissertation.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
－ A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.
－ B.Create an original research theme.
－ C.Complete a high-level dissertation.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and the quality of the dissertation.Combine all elements to make 100%

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅡ

内藤　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近現代史に関する発表や専門書・論文の検討などを行い、博士論文を完成させるために必要な能力を養う。

【到達目標】
本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向の把握、②独創的な研究テーマの確立、③高い水準の論文の作成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で行う。具体的には、受講生による、①論文の構想発表、執筆中の論文の中間発表と質疑応答、②関心をもった専門書・論文の合評会、③最新の研究や史料の紹介、などを中心とする。課題等の提出やフィードバックなどは主に「学習支援システム」を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	研究発表1	論文構想発表（1）
第3回	研究発表2	論文構想発表（2）
第4回	研究発表3	論文構想発表（3）
第5回	研究発表4	論文構想発表（4）
第6回	研究発表5	論文合評（1）
第7回	研究発表6	史料紹介（1）
第8回	中間総括	中間総括と質疑応答
第9回	研究発表7	論文構想発表（5）
第10回	研究発表8	論文構想発表（6）
第11回	研究発表9	論文構想発表（7）
第12回	研究発表10	論文合評（2）
第13回	研究発表11	史料紹介（2）
第14回	全体総括	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。論文評に際しては、事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に用いない。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100％）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムが利用可能なIT機器

【その他の重要事項】
・「史学特殊演習」ＡⅠ（春学期）との継続履修を推奨する。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course mainly reports on the modern history of Japan, criticizes academic books and dissertations, and discusses them. Through these processes, you will acquire the abilities necessary to complete your doctoral dissertation.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
－ A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.
－ B.Create an original research theme.
－ C.Complete a high-level dissertation.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and the quality of the dissertation.Combine all elements to make 100%

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅠ

内田　康太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
西洋前近代史の博士論文執筆に必要な専門的技術・知識を習得するとともに、研究者・教育者として自立するための基盤を形成する。

【到達目標】
この授業の到達目標は以下のとおり。
・西洋前近代史の研究に必須となるラテン語史料を正確かつ批判的に読解できること。
・自らの研究を学会で発表するための準備、論文のかたちで投稿するための準備ができること。
・これまでに習得した専門的技術・知識に基づき、修士課程在籍生の学習をサポートできること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は、受講生による研究の現状報告、博士論文完成に向けた原稿作成とそれらに対する指導を中心とする。第10回～第13回は修士課程科目「西洋史学演習Ⅰ」との合同授業とし、修士課程在籍生によるラテン語史料読解および修士論文中間報告などについて、教員と共に指導してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	受講生の研究テーマと研究状況の確認
第2回	博士論文報告（1）	受講生による博士論文中間報告と質疑応答・討議
第3回	博士論文報告（2）	受講生による博士論文中間報告と質疑応答・討議
第4回	研究の活字化にむけて（1）	受講者がまとめた論文原稿について検討
第5回	研究の活字化にむけて（2）	受講者がまとめた論文原稿について検討
第6回	史料講読（1）	受講者が論文で使用する史料の読解
第7回	史料講読（2）	受講者が論文で使用する史料の読解
第8回	論文の投稿にむけて（1）	受講者がまとめた論文の修正原稿について検討
第9回	論文の投稿にむけて（2）	受講者がまとめた論文の修正原稿について検討
第10回	教育・指導（1）	「西洋史学演習Ⅰ」受講生によるラテン語史料講読を補助
第11回	教育・指導（2）	「西洋史学演習Ⅰ」受講生によるラテン語史料講読を補助
第12回	教育・指導（3）	「西洋史学演習Ⅰ」受講生による修士論文報告に対するコメント
第13回	教育・指導（4）	「西洋史学演習Ⅰ」受講生による修士論文報告に対するコメント
第14回	まとめ	到達度と今後のスケジュールの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の授業外学習時間は４時間をはるかに上回る。博士論文の完成に向けて自身の研究を進めることはもとより、修士課程在籍生の学習をサポートするための準備を行うことが求められる。

【テキスト（教科書）】
（第10回・第11回）
J. M. Carter, *Julius Caesar, the Civii War*. Books I and II, Warminster, 1991.

【参考書】
（第10回・第11回）
カエサル『内乱記』（國原吉之助訳），講談社学術文庫，1994年.
カエサル『カエサル戦記集　内乱記』(高橋宏幸訳), 岩波書店, 2015年.
C. Damon, *Caesar, Civil War*, Cambridge / Massachusetts / London, 2016.
P. Fabre, *César, Guerre civile, Livres I et II*, Paris, 2019.

【成績評価の方法と基準】
博士論文完成に向けた研究への取り組み（70％）
修士課程在学生に対する学習サポートの準備度（30％）

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は開講されなかったためフィードバックできない。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞古代ローマ史
＜研究テーマ＞共和政末期から帝政初期の政治史・法制史
＜主要研究業績＞
・『元老院と民会　共和政末期ローマにおける立法』，山川出版社，2023年.
・「共和政期ローマの執政官選挙と優先投票ケントゥリア（Centuria Praerogativa）」『西洋古典学研究』第61号，2013年.
・（共著）『名著で読む世界史120』，山川出版社，2016年.

【Outline (in English)】
(Course outline) This course helps students acquire the professional skills and knowledge to write their doctoral dissertation in pre-modern western history. It also lays the foundation for their becoming an independent researcher and educator.
(Learning Objectives) The followings are the goals of this course.
- Students are able to read accurately and critically historical sources written in Latin.
- Students are able to prepare to make presenations at academic conferences and to submit papers for journals.
- Students are able to help students in the master's course based on the skills and knowledge acquired throughout their career.
(Learning activities outside of classroom) Students' study time will be far more than four hours for a class. They are expected to progress their own research in order to accomplish their dissertation, and prepare to help students in the master's course.
(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on students' effort to accomplish their own dissertation (70%), and their preparation to help students in the master's course (30%).

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅡ

内田　康太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
西洋前近代史の博士論文執筆に必要な専門的技術・知識を習得するとともに、研究者・教育者として自立するための基盤を形成する。

【到達目標】
この授業の到達目標は以下のとおり。
・西洋前近代史の研究に必須となるラテン語史料を正確かつ批判的に読解できること。
・自らの研究を学会で発表するための準備、論文のかたちで投稿するための準備ができること。
・これまでに習得した専門的技術・知識に基づき、修士課程在籍生の学習をサポートできること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は、受講生による研究の現状報告、博士論文完成に向けた原稿作成とそれらに対する指導を中心とする。第10回～第13回は修士課程科目「西洋史学演習II」との合同授業とし、修士課程在籍生によるラテン語史料読解および修士論文中間報告などについて、教員と共に指導してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	受講生の研究状況確認
第2回	博士論文報告（1）	受講生による博士論文中間報告と質疑応答・討議
第3回	博士論文報告（2）	受講生による博士論文中間報告と質疑応答・討議
第4回	博士論文の完成にむけて（1）	受講者がまとめた博士論文原稿について検討
第5回	博士論文の完成にむけて（2）	受講者がまとめた博士論文原稿について検討
第6回	史料講読（1）	受講者が博士論文で使用する史料の読解
第7回	史料講読（2）	受講者が博士論文で使用する史料の読解
第8回	博士論文の仕上げにむけて（1）	受講者がまとめた博士論文の修正原稿について検討
第9回	博士論文の仕上げにむけて（2）	受講者がまとめた博士論文の修正原稿について検討
第10回	教育・指導（1）	「西洋史学演習II」受講生によるラテン語史料講読を補助
第11回	教育・指導（2）	「西洋史学演習II」受講生によるラテン語史料講読を補助
第12回	教育・指導（3）	「西洋史学演習II」受講生による修士論文報告に対するコメント
第13回	教育・指導（4）	「西洋史学演習II」受講生による修士論文報告に対するコメント
第14回	まとめ	到達度と今後のスケジュールの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の授業外学習時間は４時間をはるかに上回る。博士論文の完成に向けて自身の研究を進めることはもとより、修士課程在籍生の学習をサポートするための準備を行うことが求められる。

【テキスト（教科書）】
（第10回・第11回）
J. M. Carter, *Julius Caesar, the Civii War. Books I and II*, Warminster, 1991.

【参考書】
（第10回・第11回）
カエサル『内乱記』（國原吉之助訳），講談社学術文庫，1994年.
カエサル『カエサル戦記集　内乱記』(高橋宏幸訳), 岩波書店, 2015年.
C. Damon, *Caesar, Civil War*, Cambridge / Massachusetts / London, 2016.
P. Fabre, *César, Guerre civile, Livres I et II*, Paris, 2019.

【成績評価の方法と基準】
博士論文完成に向けた研究への取り組み（70％）
修士課程在学生に対する学習サポートの準備度（30％）

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は開講されなかったためフィードバックできない。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞古代ローマ史
＜研究テーマ＞共和政末期から帝政初期の政治史・法制史
＜主要研究業績＞
・『元老院と民会　共和政末期ローマにおける立法』，山川出版社，2023年.
・「共和政期ローマの執政官選挙と優先投票ケントゥリア（Centuria Praerogativa）」『西洋古典学研究』第61号，2013年.
・（共著）『名著で読む世界史120』，山川出版社，2016年.

【Outline (in English)】
(Course outline) This course helps students acquire the professional skills and knowledge to write their doctoral dissertation in pre-modern western history. It also lays the foundation for their becoming an independent researcher and educator.
(Learning Objectives) The followings are the goals of this course.
- Students are able to read accurately and critically historical sources written in Latin.
- Students are able to prepare to make presenations at academic conferences and to submit papers for journals.
- Students are able to help students in the master's course based on the skills and knowledge acquired throughout their career.
(Learning activities outside of classroom) Students' study time will be far more than four hours for a class. They are expected to progress their own research in order to accomplish their dissertations, and prepare to help students in the master's course.
(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on students' effort to accomplish their own dissertation (70%), and their preparation to help students in the master's course (30%).

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅠ

齋藤　勝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国古代史研究の展開
自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】
中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。課題に対してのフィードバックは、講読、整理発表の中で適宜行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	概論	授業の趣旨と進め方
第2回	漢文史料を読む	講読 『三国志』
第3回	前回の史料についての検討	『三国志』の成書と内容についての検討
第4回	漢文史料を読む	講読 『晋書』
第5回	前回の史料についての検討	『晋書』の成書と内容についての検討
第6回	漢文史料を読む	講読 『世説新語』
第7回	前回の史料についての検討	『世説新語』の成書と内容について
第8回	歴史評論を読む	講読 『日知録』
第9回	『日知録』を理解するために	顧炎武とその時代について
第10回	『日知録』を読むために	典故について
第11回	『日知録』を考える	講読 『日知録』についての諸研究
第12回	これまでの整理	これまで読んできたものについての比較検討
第13回	参加者各自の問題意識と先行研究	講読 参加者任意の文献
第14回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】
授業計画参照。適宜、配布します。
扱う内容は受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】
随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点100％
課題の達成度よって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　中国古代史
＜研究テーマ＞　唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容
＜主要研究業績＞
「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年
「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年
「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline (in English)】
Course outline: The aim of this course is to help students improve skills and critical minds to study the history of ancient China.
Learning objectives: At the end of the course, students are expected to promote their understanding of the way to describe the history in ancient China.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅡ

齋藤　勝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国古代史研究の展開
自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】
中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。課題に対してのフィードバックは、講読、整理発表の中で適宜行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	概論	授業の趣旨と進め方
第2回	漢文史料を読む	講読 『資治通鑑』
第3回	前回の史料についての検討	『資治通鑑』の成書と内容について
第4回	研究文献を読む	講読 陳垣『通鑑胡注表微』
第5回	前回の文献についての検討	陳垣とその時代について
第6回	前回の文献に関する補足	胡三省とその時代について
第7回	研究文献を読む	講読 桑原隲蔵の諸論文
第8回	前回の文献についての検討	桑原隲蔵とその時代について
第9回	研究文献を読む	講読 陳垣の諸論文
第10回	研究の比較	桑原隲蔵と陳垣の比較検討
第11回	研究文献を読む	講読 陳寅恪の諸論文
第12回	研究の比較	陳寅恪と陳垣の比較検討
第13回	参加者各自の問題意識の提示	講読 参加者任意の文献
第14回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】
授業計画参照。適宜、配布します。
扱う内容は受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】
随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点100％
発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　中国古代史
＜研究テーマ＞　唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容
＜主要研究業績＞
「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年
「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年
「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline (in English)】
Course outline: The aim of this course is to help students improve skills and critical minds to study the history of ancient China.
Learning objectives: At the end of the course, students are expected to promote their understanding of the way to describe the history in ancient China.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅠ

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。それをもとに博士論文作成を進めるための力量を培い、独自の研究の確立につなげていく。

【到達目標】
・先史社会の内実を物質資料の分析に基づいて検討し、批判を加えつつ建設的な展望を提示することができる。
・先史社会に関する特定のテーマをもとにした論文を多面的に構成するための能力が高まる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者が関心を寄せる先史時代の社会に関する先行研究を講読し、受講者の研究テーマを設定するために検討と討論を重ねる。関連する諸研究を横断しながら、研究の現状と課題を明らかにし、受講者の問題意識の形成につなげ、資料の分析方法を見通していく。
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	先史社会研究の意義
第2回	構想発表（１）	受講者の目指す論文構想
第3回	構想発表（２）	現状の論文構想の課題と問題の検討
第4回	学史的研究論文の検討（１）	主に1990年代までの研究分野をリードしてきた先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第5回	学史的研究論文の検討（２）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第6回	学史的研究論文の検討（３）	上記論文の考察と展望に関する検討
第7回	近年の研究論文の検討（１）	2000年代以降の研究分野を形成した先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第8回	近年の研究論文の検討（２）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第9回	近年の研究論文の検討（３）	上記論文の考察と展望に関する検討
第10回	最新の研究論文の検討（１）	当該分野における最新研究のテーマと目的に関する検討
第11回	最新の研究論文の検討（２）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第12回	最新の研究論文の検討（３）	上記論文の考察と展望に関する検討
第13回	先史社会研究の発達過程と多面的な方向性	受講者の掲げたテーマの有効性と問題点の摘出
第14回	総括	研究テーマと方針の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。当該分野の諸研究に関する論文集成および研究史の概要把握。

【テキスト（教科書）】
用いない。

【参考書】
授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】
授業内の発表・討論（70％・必須）、レポート（30％・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline (in English)】
The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.
Students will be able to examine the image of prehistoric societies based on the analysis of material sources and present a constructive perspective.
Students will develop the ability to construct a multi-faceted thesis based on a specific theme related to prehistoric societies.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: results of the research presentation and participation in the discussion (70%), and the final report (30%).

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅡ

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。この授業では受講者の研究テーマを先行研究の中に確実に位置づけたうえで、資料の実践的な検討と考察を行い、博士論文作成に資することとする。

【到達目標】
・諸研究を総合的に検討することで受講者自身が新たな研究の方向を展望できる。
・受講者自身の研究テーマにもとづく資料集成を実践できる。
・集成した資料の分類と分析を一定の基準の下で実践できる。
・分析を元にした考察をまとめ、新たな展望を得ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者の設定した研究テーマの学史的背景と妥当性を検討するとともに、対象となる資料の分析視点を絞り込んでいく。次いで資料の分類と分析に進み、その手順と理解の妥当性を検討する。最終的に考察された内容が資料にもとづいて正確になされているかについて討論し、最新の研究成果との相関性や先進性について理解を深めていく。
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	先史社会研究の実戦に向けた諸段階
第2回	研究テーマの学史的検討（1）	先行研究の展開過程
第3回	研究テーマの学史的検討（2）	研究史上の転換点・画期
第4回	研究テーマの学史的検討（3）	現状の研究の方向性と展望
第5回	資料集成（1）	資料集成の目的と方向性
第6回	資料集成（2）	目的にもとづく資料集成方法の検討
第7回	資料の分析（1）	資料のもつ諸属性の理解
第8回	資料の分析（2）	観察視点と属性抽出方法
第9回	資料の分析（3）	資料分析の実践と問題
第10回	資料の分析（4）	分析結果の処理
第11回	分析結果の読み取り（1）	分析結果の提示・表現方法
第12回	分析結果の読み取り（2）	分析結果の解釈と考察
第13回	成果の検討	研究テーマと結論の相関性および最新研究との関連性の検討
第14回	総括	研究論文の内容と構成の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。受講者のテーマに関連する研究論文の渉猟、考古学的方法論に関する理解。

【テキスト（教科書）】
用いない。

【参考書】
授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】
授業内の発表・討論（70％・必須）、レポート（30％・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline (in English)】
The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.
Students will be able to examine the image of prehistoric societies based on the analysis of material sources and present a constructive perspective.
Students will develop the ability to construct a multi-faceted thesis based on a specific theme related to prehistoric societies.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: results of the research presentation and participation in the discussion (70%), and the final report (30%).

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅠ

塩沢　裕仁

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が中国古代物質（特に考古）資料についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
　研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養うとともに博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　東アジア文化の発達やその変遷を探索し、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。本授業では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解や内容に対する議論を通して中国物質文化への理解を深め、その成果を以て論文作成を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	中国考古学の状況と考古学報告活用の意味
第2回	資料講読（1）	研究史の整理（1）
第3回	資料講読（2）	研究史の整理（2）
第4回	資料講読（3）	研究史の整理（3）
第5回	資料講読（4）	研究史の整理（4）
第6回	資料講読（5）	研究史の整理（5）
第7回	資料閲読（1）	研究資料の検証（1）
第8回	資料閲読（2）	研究資料の検証（2）
第9回	資料閲読（3）	研究資料の検証（3）
第10回	研究所訪問（1）	研究資料の収集（1）
第11回	研究所訪問（2）	研究資料の収集（2）
第12回	研究計画発表（1）	研究方針の検証
第13回	研究計画発表（2）	研究水準の検証
第14回	まとめ	研究計画の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで十分に対応ができる。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。 また、学会への積極的な参加も求める。

【テキスト（教科書）】
　授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】
　塩沢裕仁『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010 年
　塩沢裕仁『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【成績評価の方法と基準】
資料解釈の深度と発表内容：100

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理
＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態 環境。＜主要研究業績＞『東漢魏晋南北朝都城境域研究』洛陽博物館文化叢書、2009 年 『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010 年 「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新 67 号、2010 年 「洛陽から四方に通じる大道とその遺跡」『古代東アジアの道路と交通』勉誠 出版、2011 年 「洛陽における都城遺跡の保護とその問題点」『中国考古学』11 号、2011 年 「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012 年 『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【Outline (in English)】
【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports , we will able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.
【Learning activities outside of classroom】Need two hours in a day.
【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＡⅡ

塩沢　裕仁

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　本授業は、受講生が中国古代物質（特に考古）資料についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
　研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養うとともに博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　東アジア文化の発達やその変遷を探索し、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。本授業では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解や内容に対する議論を通して中国物質文化への理解を深め、その成果を以て論文作成を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	休暇中の課題整理
第2回	資料講読（1）	研究状況の整理（1）
第3回	資料講読（2）	研究状況の整理（2）
第4回	資料講読（3）	研究状況の整理（3）
第5回	資料講読（4）	研究状況の整理（4）
第6回	資料講読（5）	研究状況の整理（5）
第7回	研究活動報告（1）	学会参加報告（1）
第8回	研究所訪問（1）	研究資料の実地検証（1）
第9回	研究所訪問（2）	研究資料の実地検証（2）
第10回	研究活動報告（2）	学会参加報告（2）
第11回	研究発表（1）	研究成果報告（1）
第12回	研究発表（2）	研究成果報告（2）
第13回	研究発表（3）	研究水準の検証
第14回	まとめ	研究活動の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで十分に対応ができる。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。また、学会への積極的な参加も求める。

【テキスト（教科書）】
　授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】
　塩沢裕仁『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010 年
　塩沢裕仁『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【成績評価の方法と基準】
　資料解釈の深度と発表内容：100

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理
＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態 環境。＜主要研究業績＞『東漢魏晋南北朝都城境域研究』洛陽博物館文化叢書、2009 年 『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010 年 「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新 67 号、2010 年 「洛陽から四方に通じる大道とその遺跡」『古代東アジアの道路と交通』勉誠 出版、2011 年 「洛陽における都城遺跡の保護とその問題点」『中国考古学』11 号、2011 年 「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012 年 『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【Outline (in English)】
【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports , we will able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.
【Learning activities outside of classroom】Need two hours in a day.
【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学特殊講義ＡⅠ

高橋　健

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学者V.G.チャイルドの著作『考古学の方法』（日本語訳）をテキストとして、文献講読と議論を行う。
この授業の目的は、考古資料から人間の過去に迫るための方法論を学ぶことである。

【到達目標】
考古資料から過去の人間に迫るための方法と、そうした方法をめぐって展開されてきた考古学上の議論について理解する。自らの研究対象に対してどのようなアプローチが適切なのかを検討する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式とし、担当部分について発表した上で、議論しながら内容の理解を深める。受講者数によって進め方は変更するが、常時質問を受け付け、オープンに議論を行う。発表に対してのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の方針と内容の説明
第2回	V.G.チャイルドの考古学	講義
第3回	コッシナの文化論	講義
第4回	日本考古学における受容	講義
第5回	考古学とは何か	文献の講読と検討
第6回	考古学の起源と発達	文献の講読と検討
第7回	考古学的資料の本体	文献の講読と検討
第8回	機能の判定	文献の講読と検討
第9回	編年ー文化連続の設定	文献の講読と検討
第10回	時代と時期と年代	文献の講読と検討
第11回	分布区分の設定	文献の講読と検討
第12回	文化の変化	文献の講読と検討
第13回	考古学の本領	文献の講読と検討
第14回	まとめ	現代考古学における位置づけ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
テキストを熟読するとともに、関連する論文の検討が必要になる。

【テキスト（教科書）】
V.G. チャイルド（近藤義郎訳）1964『考古学の方法』（原著：V.G.Child 1983 Piecing together the past. Routledge &Kegan Paul, London.）

【参考書】
授業内で適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表（50％）とレポート（50％）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】
少人数の場合、教員による講義形式の割合を増やす。

【その他の重要事項】
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、実物資料の解釈を意識した授業を行う。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　考古学
＜専門領域＞
考古学
＜研究テーマ＞
北方考古学、骨角器・狩猟漁労具
＜主要研究業績＞
『日本列島における銛猟の考古学的研究』北海道出版企画センター　2008年
「オクヴィク遺跡における銛頭の再加工について」『比較考古学の新地平』同成社　2010年
「石倉貝塚における釣針の製作技法」『動物考古学』30　2013年
「アイヌ文化の骨角製品」『季刊考古学』133　2015年
「オホーツク文化の牙製婦人像」『横浜ユーラシア文化館紀要』9　2021年
「骨角器研究の進展」『季刊考古学』別冊42　2023年
「骨角製漁具の伝播と受容」『考古学研究』70(2)　2023年

【Outline (in English)】
（Course outline）
We will read and discuss "Piecing together the past" (Japanese translation) by V. Gordon Child.
（Learning Objectives）
The purpose of this class is to learn the methodology for approaching the human past from archaeological remains.
（Learning activities outside of classroom）
The standard time for preparation and review for this class is two hours each. Students are asked to read the text carefully and consider related papers.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on in-class presentation (50%) and. term-end report (50%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学特殊講義ＡⅡ

高橋　健

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
受講者それぞれの問題関心に沿った海外・国内の論文を講読し、議論する。さまざまな分野の考古学研究において、どのような方法が採用されているのかを学ぶ。

【到達目標】
考古学の先行研究においてどのような方法が採られているのか、それにはどのような背景があるのかを理解する。さらに、各自のテーマについてどのような方法が適切なのかを検討し、適用する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　対面授業の演習形態とするが、必要に応じて講義時間を設ける。各自の関心のあるテーマに沿った形でいくつかの論文を選び、講読・検討を行う。それを踏まえて、各自のテーマに対してどのような方法が適切であるのか、議論を通じて考察する。順番や内容は、受講者に応じて入れ替える場合がある。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の方法と内容
第2回	研究の実例1	講義とそれにもとづく討論
第3回	研究の実例2	講義とそれにもとづく討論
第4回	海外論文の検討1	発表とそれにもとづく討論
第5回	海外論文の検討2	発表とそれにもとづく討論
第6回	海外論文の検討3	発表とそれにもとづく討論
第7回	縄文時代の論文の検討1	発表とそれにもとづく討論
第8回	縄文時代の論文の検討2	発表とそれにもとづく討論
第9回	弥生時代の論文の検討1	発表とそれにもとづく討論
第10回	弥生時代の論文の検討2	発表とそれにもとづく討論
第11回	各自のテーマの検討1	発表とそれにもとづく討論
第12回	各自のテーマの検討2	発表とそれにもとづく討論
第13回	各自のテーマの検討3	発表とそれにもとづく討論
第14回	総括	振り返りと討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
担当する文献の事前の読み込みと資料作成が必要となる。

【テキスト（教科書）】
特に指定しない。

【参考書】
必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表・討論（50％）とレポート（50％）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【その他の重要事項】
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、考古資料を分析することを念頭において授業を実施する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
考古学
＜研究テーマ＞
北方考古学、骨角器・狩猟漁労具
＜主要研究業績＞
『日本列島における銛猟の考古学的研究』北海道出版企画センター　2008年
「オクヴィク遺跡における銛頭の再加工について」『比較考古学の新地平』同成社　2010年
「石倉貝塚における釣針の製作技法」『動物考古学』30　2013年
「アイヌ文化の骨角製品」『季刊考古学』133　2015年
「オホーツク文化の牙製婦人像」『横浜ユーラシア文化館紀要』9　2021年
「骨角器研究の進展」『季刊考古学』別冊42　2023年
「骨角製漁具の伝播と受容」『考古学研究』70(2)　2023年

【Outline (in English)】
（Course outline）
Students will read and discuss international and domestic papers that are relevant to their own issues and interests.
（Learning Objectives）
Students will learn what methods are used in archaeological research in various fields.
（Learning activities outside of classroom）
The standard time for preparation and review for this class is two hours each. It is necessary to read the relevant literature in advance and create handout materials.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based in-class presentation and discussion (50%) and term-end report (50%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学特殊講義ＢⅠ

山口　英男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】
平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第3回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第4回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第5回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第6回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第7回	行政実務関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第8回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第9回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第10回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第11回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第12回	武芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	武芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します
第13回	武芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第14回	武芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】
事前に印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】
『大日本史料』第１・２・３編
『訳注延喜式』上・中・下
『読み解き古代史料』（山川出版社　2024年）
「駒牽関係史料」（『山梨県史　資料編３』山梨県、2001年、山口英男編纂担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史　通史編１』2004年、山口英男執筆担当）
「編年史料編纂支援資源化データベースMIDOH」（東京大学史料編纂所）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w28/search
「大日本史料総合データベース」（同上）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w61/search

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】
授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『読み解き古代史料』山川出版社　2024年（共著）
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年
「畿内近傍の牧と馬寮の馬」（広瀬和雄・山中章・吉川真司編『講座畿内の古代学』Ⅳ軍事と対外交渉　雄山閣　2022年）
「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店　2021年）
「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社　2021）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）

【Outline (in English)】
Course outline
To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.
Learning Objectives
Be able to read and understand historical materials related to government affairs and ceremonies in the Heian period
Learning activities outside of classroom
Read through the historical materials to be covered in class in advance. The standard time for preparation and review for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
The grade will be assessed comprehensively based on active participation in class, the content of the report, the materials prepared, participation in discussions, and the content of the report.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学特殊講義ＢⅡ

山口　英男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】
平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	仏事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	仏事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第3回	仏事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第4回	仏事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第5回	仏事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第6回	神事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	神事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します
第7回	神事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第8回	神事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第9回	神事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第10回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式書・法制史料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第11回	朝廷儀礼関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第12回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第13回	朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第14回	平安時代の政務・儀式の展開と特質	平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】
担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】
『読み解き古代史料』山川出版社、2024年
『大日本史料』第１・２・３編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史　資料編３』山梨県、2001年、山口英男編纂担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史　通史編１』2004年、山口英男執筆担当）
「編年史料編纂支援資源化データベースMIDOH」（東京大学史料編纂所）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w28/search
「大日本史料総合データベース」（同上）https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w61/search

【成績評価の方法と基準】
授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】
授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『読み解き古代史料』山川出版社　2024年（共著）
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年
「畿内近傍の牧と馬寮の馬」（広瀬和雄・山中章・吉川真司編『講座畿内の古代学』Ⅳ軍事と対外交渉　雄山閣　2022年）
「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店　2021年）
「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社　2021）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）

【Outline (in English)】
Course outline
To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.
Learning Objectives
Be able to read and understand historical materials related to government affairs and ceremonies in the Heian period
Learning activities outside of classroom
Read through the historical materials to be covered in class in advance. The standard time for preparation and review for this class is 2 hours each.
Grading Criteria /Policy
The grade will be assessed comprehensively based on active participation in class, the content of the report, the materials prepared, participation in discussions, and the content of the report.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学特殊講義ＣⅠ

末柄　豊

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
室町時代の日記を読む

【到達目標】
室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明5年（1473）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	概要の説明、分担箇所の決定
第2回	輪読１	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読２	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読３	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読４	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読５	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読６	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読７	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読８	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読９	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】
『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】
元木泰雄・松薗斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】
報告内容および討論への参加（100％）

【学生の意見等からの気づき】
該当なし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞室町時代の政治史・文化史・史料論
＜主要研究業績＞
『戦国時代の天皇〈日本史リブレット82〉』（山川出版社、2018年）
「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）
「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

【Outline (in English)】
In this course, students will read a diary from the Muromachi period. The purpose of this course is to learn how to read and understand diaries, as well as to deepen understanding of politics, society, culture, religion, etc. of the period.
The presenter will examine the diaries in detail, and will also wade through relevant historical documents and previous research in order to present a thorough report. Grading will be based on the content of the report and participation in the discussion (100%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学特殊講義ＣⅡ

末柄　豊

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
室町時代の日記を読む

【到達目標】
室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明5年（1473）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	輪読１	担当者の報告、質疑応答、解説
第2回	輪読２	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読３	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読４	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読５	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読６	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読７	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読８	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読９	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読14	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】
『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】
元木泰雄・松薗斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】
報告内容および討論への参加（100％）

【学生の意見等からの気づき】
該当なし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞室町時代の政治史・文化史・史料論
＜主要研究業績＞
『戦国時代の天皇〈日本史リブレット82〉』（山川出版社、2018年）
「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）
「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

【Outline (in English)】
In this course, students will read a diary from the Muromachi period. The purpose of this course is to learn how to read and understand diaries, as well as to deepen understanding of politics, society, culture, religion, etc. of the period.
The presenter will examine the diaries in detail, and will also wade through relevant historical documents and previous research in order to present a thorough report. Grading will be based on the content of the report and participation in the discussion (100%).

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学特殊講義ＤⅠ

山崎　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自ら研究テーマを設定した上で、そのテーマに関する研究状況を整理して論点を導き出し、必要な史料を博捜して丁寧に読み解くことで答えを出す力を身につけることを目標とする。

【到達目標】
①研究成果を学会で発表できる。
②研究成果を論文として発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、授業の概要説明、発表順の決定
第2回	研究発表（１）	研究発表と質疑
第3回	研究発表（２）	研究発表と質疑
第4回	研究発表（３）	研究発表と質疑
第5回	研究発表（４）	研究発表と質疑
第6回	研究発表（５）	研究発表と質疑
第7回	論文講読（１）	論文の講読と質疑
第8回	論文講読（２）	論文の講読と質疑
第9回	論文講読（３）	論文の講読と質疑
第10回	論文講読（４）	論文の講読と質疑
第11回	論文講読（５）	論文の講読と質疑
第12回	研究計画発表（１）	テーマ設定と研究史整理
第13回	研究計画発表（２）	テーマ設定と史料状況
第14回	まとめ	総括と質疑

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
各自研究を進める。論文講読にあたっては、事前に対象論文を読んでおくこと。また、この講読を機に関係する主要論文も読むことが望ましい。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
質疑の時間を十分にとり、受講者の疑問点を掘り下げたり、問題意識を確認したりする。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞地域社会論、災害史
＜主要研究業績＞「近世水害村の存続条件―赤沼河原新田と千曲川―」（『中央大学文学部紀要・史学』70号、2025年）、『近世幕領地域社会の研究』（校倉書房、2005年）

【Outline (in English)】
（Course outline）
The aim of this course is to help students acquire historical research methods.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
- Be able to present research results at academic conferences.
- Be able to publish research results as a paper.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course contents.
（Grading Criteria /Policy）
Final grade will be calculated according to the following process
In-class contribution.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学特殊講義ＤⅡ

山崎　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自ら研究テーマを設定した上で、そのテーマに関する研究状況を整理して論点を導き出し、必要な史料を博捜して丁寧に読み解くことで答えを出す力を身につけることを目標とする。

【到達目標】
博士論文の作成に必要な能力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックする。史料講読は、事前に割り当てを決めず、全員で検討するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（１）	研究発表と質疑
第3回	研究発表（２）	研究発表と質疑
第4回	研究発表（３）	研究発表と質疑
第5回	研究発表（４）	研究発表と質疑
第6回	研究発表（５）	研究発表と質疑
第7回	史料講読（１）	順番に史料を読み下し、現代語訳し、内容を検討する。
第8回	史料講読（２）	順番に史料を読み下し、現代語訳し、内容を検討する。
第9回	史料講読（３）	順番に史料を読み下し、現代語訳し、内容を検討する。
第10回	史料講読（４）	順番に史料を読み下し、現代語訳し、内容を検討する。
第11回	史料講読（５）	順番に史料を読み下し、現代語訳し、内容を検討する。
第12回	研究計画発表（１）	テーマ設定と研究史整理
第13回	研究計画発表（２）	テーマ設定と史料状況
第14回	まとめ	総括と質疑

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
質疑の時間を十分にとり、受講者の疑問点を掘り下げたり、問題意識を確認したりする。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞地域社会論、災害史
＜主要研究業績＞「近世水害村の存続条件―赤沼河原新田と千曲川―」（『中央大学文学部紀要・史学』70号、2025年）、『近世幕領地域社会の研究』（校倉書房、2005年

【Outline (in English)】
（Course outline）
The aim of this course is to help students acquire historical research methods.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to acquire the skills necessary to write a doctoral dissertation.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course contents.
（Grading Criteria /Policy）
Final grade will be calculated according to the following process
In-class contribution.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学特殊講義ＥⅠ

森田　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　渋沢栄一は、９１年の生涯に約５００の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。
　近代日本の社会構造について、渋沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】
　近代日本の社会構造について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②論点を構成する能力を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　テーマと史料は、第１回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。
　受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。
　発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	渋沢栄一	渋沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（１）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（２）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（１）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（２）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（１）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（２）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（１）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（２）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（１）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（２）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（１）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（２）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。
本授業の準備・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
適宜、レジュメ・資料を配布する。

【参考書】
適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
報告内容（70％）、コメント等の授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】
２０２５年度とテーマを継続しています。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・Zoom接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近現代史
＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史
＜主要研究業績＞
森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）
森田貴子『三野村利左衛門と益田孝――三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）
森田貴子「華族資本の形成と家政改革――岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済――資本主義への道』日本経済評論社、2004年）
森田貴子「不動産――岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市３　インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline (in English)】
This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business. The goals of this course are to acquire the technique of criticizing historical materials and the ability to compose issues. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B4（史学 / History 500）

日本史学特殊講義ＥⅡ

森田　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　渋沢栄一は、９１年の生涯に約５００の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。
　近代日本の社会構造について、渋沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】
　近代日本の社会構造について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②論点を構成する能力を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　テーマと史料は、第１回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。
　受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。
　発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	渋沢栄一	渋沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（１）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（２）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（１）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（２）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（１）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（２）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（１）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（２）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（１）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（２）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（１）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（２）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。
本授業の準備・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
適宜レジュメ・資料を配布する。

【参考書】
適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
報告内容（70％）、コメント等の授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】
２０２５年度とテーマを継続しています。
対面授業を予定していますが、事情によりオンライン（リアルタイム）での実施へ変更することがあります。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・Zoom接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近現代史
＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史
＜主要研究業績＞
森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）
森田貴子『三野村利左衛門と益田孝――三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）
森田貴子「華族資本の形成と家政改革――岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済――資本主義への道』日本経済評論社、2004年）
森田貴子「不動産――岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市３　インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline (in English)】
This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business. The goals of this course are to acquire the technique of criticizing historical materials and the ability to compose issues. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋史学特殊講義ＡⅠ

大島　誠二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』下巻を用いる。前期は、「中国古代都城考古学述論」を輪読する。どのように中国古代都城に対する研究が進展したのか、その過程を追い、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考察する。

【到達目標】
①文物や遺構など、考古学資料の分析を通して、社会の在り方を考察する研究方法を身に付ける。
②都市の形成過程を学ぶことにより、中国社会の特質について理解を深める。
③都市の機能と構造を復元することにより、当時の社会の特質を考察し、多角的な視座で古代中国古像を構築できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式。受講者の発表によって進行する。
課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の確認
第2回	中国歴史上的古代都城研究	中国における都城研究の歴史的推移をたどる
第3回	中国古代都城考古的発展①	「中国古代都城考古学的始創期」を読み、殷墟発掘を中心とする戦前の都城遺跡調査の状況を学ぶ。
第4回	中国古代都城考古的発展②	「中国古代都城考古学的発展期」を読み、中華人民共和国建国直後の都城遺跡の調査状況を学ぶ。
第5回	中国古代都城考古的発展③	「中国古代都城考古学的発展期」を読み、1960年代前半の都城遺跡の調査状況を学ぶ。
第6回	中国古代都城考古的発展④	「中国古代都城考古学的継続発展期」を読み、1970年代の都城遺跡の調査状況を学ぶ。
第7回	中国古代都城考古的発展⑤	「中国古代都城考古学的継続発展期」を読み、1980年代の都城遺跡の調査状況を学ぶ。
第8回	中国古代都城考古的発展⑥	「中国古代都城考古学的継続発展期」を読み、1990年代の都城研究の状況を学ぶ。
第9回	中国古代都城研究術略①	「中国古代都城考古学研究」を読み、報告書の出版状況と、研究の深化について学ぶ。
第10回	中国古代都城研究術略②	「中国古代都城的歴史学研究」を読み、都市論の変化について学ぶ。
第11回	中国古代都城研究術略③	中国古代都城的歴史地理研究」「中国古代都城的建築史学研究」を読み、古代都城史研究が、歴史地理史、建築史に与えた影響について学ぶ。
第12回	中国古代都城考古学理論与方法的発展①	「関于古代都城界定認識変化的理論志向」を読み、都城の定義について考察する。
第13回	中国古代都城考古学理論与方法的発展②	「中国古代都城考古発現所掲示都城布局形制変化的理論認識」を読み、都城の配置や形態の変化から、都城の果たしていた機能について考察する。
第14回	まとめ	中国古代の都城についてその特色を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参加者は、事前にテキストを読んでおく。
発表担当者は、注の文献などにも目を通して、内容の理解を深め、参加者の理解のためにレジュメを作成する。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
参加者は、博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】
劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』下巻　社会科学文献出版社　2016年1月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】
中国社会科学院考古研究所『中国考古学　夏商巻』中国社会科学出版社　2003年（2011年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学　両周巻』中国社会科学出版社　2004年（2011年重印）

【成績評価の方法と基準】
発表50％、レポート作成50％

【学生の意見等からの気づき】
画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国古代史、中国考古学
＜研究テーマ＞秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究
＜主要研究業績＞
「秦の東進と陝県社会」『アジア史における制度と社会』　刀水書房　1996年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版部　2005年
「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行　2008年

【Outline (in English)】
【Course outline】
Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.
As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief,“The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital” Second volume. In this term, we read the part of 〝A Review of the Archaeology of Ancient Chinese Capitals〟. We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the “Development of the city and the formation of an ancient state”.
【Learning Objectives】
By the end of the course,students should be able to do the followings:
A.Acquire research methods for examining social structures through the analysis of archaeological materials, such as artifacts and architectural remains.
B.Deepen understanding of the characteristics of Chinese society by studying the processes of urban formation.
C.Develop the ability to reconstruct the functions and structures of ancient cities in order to examine the characteristics of past societies and to construct a multifaceted understanding of ancient China.
【Learning activities outside of classroom】
Before after each class meeting,students will be expected to spend two hours to understand the course content
【Grading Criteria/Policies】
Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report 50 % , and in-class contribution 50%

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋史学特殊講義ＡⅡ

大島　誠二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』下巻を用いる。今期は、「古代都城布局形制與社会形態変化研究」を輪読する。どのように中国古代都城に対する研究が進展したのか、その過程を追い、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考察する。

【到達目標】
①文物や遺構など、考古学資料の分析を通して、社会の在り方を考察する研究方法を身に付ける。
②都市の形成過程を学ぶことにより、中国社会の特質について理解を深める。
③都市の機能と構造を復元することにより、当時の社会の特質を考察し、多角的な視座で古代中国古像を構築できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式。受講者の発表によって進行する。
課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の確認
第2回	中国古代都市遺址布局形制的考古発現概述①	「夏商西周時期都城遺址布局形制的考古発現」を読み、上古三代の都城遺跡の概要を学ぶ。
第3回	中国古代都市遺址布局形制的考古発現概述②	「春秋戦国時期都城遺址布局形制的考古発現」を読み、春秋戦国の都城遺跡の概要を学ぶ。
第4回	中国古代都市遺址布局形制的考古発現概述③	「秦漢時期都城遺址布局形制的考古発現」を読み、秦漢帝国時代の都城遺跡の概要を学ぶ。
第5回	中国古代都市遺址布局形制的考古発現概述④	「魏晋南北朝至隋唐時期都城遺址布局形制的考古発現」を読み、魏晋南北朝時代から隋唐帝国時代の都城遺跡の概要を学ぶ。
第6回	中国古代都市遺址布局形制的考古発現概述⑤	「宋遼金元時期都城遺址布局形制的考古発現」を読み、宋遼金元時代の都城遺跡の概要を学ぶ。
第7回	史前聚落、城、都城発展史与社会形態的考古学研究①	「史前時期聚落的考古発現」を読み、旧石器時代から新石器時代に至る集落内の変化を学ぶ。
第8回	史前聚落、城、都城発展史与社会形態的考古学研究②	「史前時期城址的考古発現」を読み、新石器後期に出現する城址遺跡の構造を学ぶ。
第9回	史前聚落、城、都城発展史与社会形態的考古学研究③	「古代文明形成、国家建立与古代都城出現」を読み、国家形成と都城建設の関係を学ぶ。
第10回	史前聚落、城、都城発展史与社会形態的考古学研究④	「中国古代都城、城的等級与王国、帝国的社会政治架構」を読み、政治機構の発展と都市構造の関係について考察する。
第11回	“単城制”“双城制”“三城制”与社会形態変化的考古学研究①	「“単城制”与“邦国”“方国”的社会形態研究」を読み、城郭集落と社会の発展について学ぶ。
第12回	“単城制”“双城制”“三城制”与社会形態変化的考古学研究②	「“双城制”与“王国”社会形態的研究」を読み、宮城の出現と国家組織の発展について学ぶ。
第13回	“単城制”“双城制”“三城制”与社会形態変化的考古学研究③	「“三城制”与“帝国”時代社会形態的研究」を読み、皇城の出現と国家組織の発展について学ぶ。
第14回	まとめ	城郭遺跡から、どのように社会形態の変化を読み取るかを考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参加者は、事前にテキストを読んでおく。
発表担当者は、注の文献などにも目を通して、内容の理解を深め、参加者の理解のためにレジュメを作成する。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
参加者は、博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】
劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』下巻　社会科学文献出版社　2016年1月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】
中国社会科学院考古研究所『中国考古学　夏商巻』中国社会科学出版社　2003年（2011年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学　両周巻』中国社会科学出版社　2004年（2011年重印）

【成績評価の方法と基準】
発表50％、レポート作成50％

【学生の意見等からの気づき】
画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国古代史、中国考古学
＜研究テーマ＞秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究
＜主要研究業績＞
「秦の東進と陝県社会」『アジア史における制度と社会』　刀水書房　1996年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版部　2005年
「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行　2008年

【Outline (in English)】
【Course outline】
Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.
As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief,“The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital” Second volume. In this term, we read the part of ｀Research on the layout and form of ancient capitals and changes in social structure｀. We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the “Development of the city and the formation of an ancient state”.
【Learning Objectives】
By the end of the course,students should be able to do the followings:
A.Acquire research methods for examining social structures through the analysis of archaeological materials, such as artifacts and architectural remains.
B.Deepen understanding of the characteristics of Chinese society by studying the processes of urban formation.
C.Develop the ability to reconstruct the functions and structures of ancient cities in order to examine the characteristics of past societies and to construct a multifaceted understanding of ancient China.
【Learning activities outside of classroom】
Before after each class meeting,students will be expected to spend two hours to understand the course content
【Grading Criteria/Policies】
Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report 50 % , and in-class contribution 50%

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋史学特殊講義ＢⅠ

徳留　大輔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【授業の概要】陶磁器から社会を考える―― 中国陶磁史を中心に
【目的・意義】人類にとって初めて化学変化を利用した道具であるやきもの（陶磁器）。東北アジアは長いやきものの歴史を有する。本授業では中国陶磁史を中心に、土器・陶磁器の歴史的な展開・様式の変遷を学ぶ。そして陶磁器がもつ器としての機能以外に、社会にどのような役割や意義を有してきたのか、「技術」・「様式」・「交流」・「秩序」・「権力」といった視点を持ちながら陶磁器から各時代の社会のあり方を学ぶ。

【到達目標】
陶磁器の種類・造形・意匠が多様化した背景には、技術の発展と異文化との接触・交流がある。この背景を「考古学」「美術史」「歴史学」の研究方法から探る。つまり本講義では「考古学」「美術史」「歴史学」的研究方法と思考を習得できる。また陶磁史を理解する上で中国・日本・朝鮮や東南アジア・西アジアの歴史・美術の知識の習得もでき、あわせて「国際性」を身につけることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の形態は講義方式を中心としますが、陶磁器・考古学に関するテーマから受講生自身が興味ある資料を調べ・発表する時間も設けます。また陶磁器に関する展覧会を１～２回、博物館・美術館にて見学する予定（事前に予定は調整します。また交通費は各自で準備すること）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	「陶磁器（やきもの）」とはいったいどのような物質なのか。やきものは何のために、なぜ生まれたのか？ 素材の特徴や分類など、陶磁器の基本的な基礎知識について理解を深める。
第2回	中国新石器時代の土器文化ーその1	中国考古学における陶磁器研究の学史と枠組み（「区系類型論」など）を理解した上で、紀元前8000年頃～3000年頃における新石器時代前中期の土器文化について理解を深める。とくに彩陶を中心に紹介する。
第3回	中国新石器時代の土器文化ーその2	紀元前3000年頃～2000年頃における新石器時代後期・末期の土器文化について理解を深める。社会の複雑化が進むこの時代における土器様式はどのような展開を見せるのか。また社会の階層化の進展と土器製作における専業化などにとくに注目する。
第4回	初期王朝時代の土器文化	中国の初期の王朝とされる夏商周時代（なお夏王朝の存在については様々な見解がある）、中でも夏王朝の時代とされる二里頭時代の土器文化、また青銅器の出現し広がりをみせるなかでの土器の有する社会的・機能的な変化について理解を深める。
第5回	戦国秦漢時代の陶磁器	この時代、鉛釉陶器や彩色陶器、建築・動物模型など墓に副葬するための陶磁器が数多く作られる。鉛釉はどこから来たのか。また副葬明器にはどのような種類や思想が込められているのかについて理解を深める。さらに陶磁器を含め工芸品に着目すると、海上ルートを利用した東アジアと西アジアの交流がはじまる。青銅器、ガラス製品を含めて東西交流の歴史の始まりについて考察する。
第6回	魏晋南北朝時代の陶磁器	南北朝時代、とくに北方地域では明器が中心となるが複雑な造形・意匠の陶磁器文化が展開する。それと同時に中国の南方地域に起源がある青磁が北方地域でも流通し、また生産されるようになる。また中国陶磁史上はじめて白磁が登場する。白磁は後に、青花（染付）が生まれるために必須の陶磁器である。ただしこの白磁の起源については諸説存在しており、この陶磁史上における重要な学説についても認識を深める。
第7回	唐時代の陶磁器文化	唐代に唐三彩に代表される新たな陶磁文化が形成される。それらの造形はユーラシア交易の富の象徴や貴族を中心に人々の死後の世界観も大きく反映されている。中でも金銀器、ガラス製品は陶磁器文化と密接な繋がりをもつ。またこれらは国際色豊かな唐時代の社会・文化を極めてよく表すものである。東西交流の中身の理解について陶磁器の造形性や意匠などから迫る。
第8回	宋時代の陶磁器文化	宋代には宮廷による直接的な陶磁生産（官窯）が始まる。一方で民窯の陶磁生産も各地で発達する。官窯と民窯のそれぞれの特質および相互の影響関係について文献史学・考古学の成果から整理する。
第9回	元時代の陶磁器文化	中国陶磁器を代表する青花磁器（染付）。西アジア地域の交流の中でその様式は生み出され、西アジアへ輸出されるだけでなく、中国国内でも広く流通する。どのようなインパクトにより、元青花が生まれ、それは他の国・地域にどのような影響を与えたのか。そのプロセスを見ていく。

第10回	明清時代の陶磁器文化	中国陶磁史上大きな画期を迎える明時代。陶磁生産を支える官僚機構も整備される。ここでは、どのような多様な陶磁文化が明時代に形成され、それが清時代に継承されていくのか、景徳鎮で生み出された各種作品を通してその大枠を理解することを目的とする。
第11回	陶磁・考古学に関する 研究発表	あらかじめ定めたテーマを受講生自身で調べて、発表を行う。 一人 20 分程度。またその内容をもとに参加者同士でディスカッション を行う。
第12回	中国の窯業技術の変遷ー新石器時代から明清時代まで	中国における窯業技術の発展を窯業技術という視点から理解する。とくにハードウェアとして位置づけられる窯構造の変化と技術の伝播、また国家や王朝と主要な手工業生産である窯業の関わりに注目していく。
第13回	博物館における陶磁器の見学	展覧会を通して実際の陶磁器作品を見る。またどのようなコンテクストで各時代の陶磁器が位置づけられているのか、理解する。
第14回	まとめ	本学期の内容について整理を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
講義の際にレジュメの配布ならびに内容にあわせて参考文献を紹介します。授業の前・後に読んで要点をまとめて授業に臨んでください。また授業では課題を出しますので、次回の講義時に提出してください。

【テキスト（教科書）】
講義では教科書は使用しません。毎回レジュメを配布します。ただし、【参考書】に関してはぜひ一読してください。

【参考書】
葉喆民原著、出川哲朗 監訳、徳留大輔／新井崇之 訳『中国陶磁史』科学出版社東京、国書刊行会、2019年
徳留大輔責任編集『茶の湯の茶碗　唐物茶碗』淡交社、2021年

【成績評価の方法と基準】
期末レポート60％、各講義時に課す課題（宿題）20％、平常点20％

【学生の意見等からの気づき】
受講生が研究テーマとしている内容などに関しては、積極的に学生の研究成果と結びつけながら、講義参加者全員でディスカッションを行い、新しい研究上の課題や方向性を議論するようにしている。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
本講義の担当者者は美術館に勤務する学芸員であり、陶芸を中心とする工芸分野を担当しています。可能な限り、実物作品の実見や資料などの観察の方法のレクチャーや資料にふれる機会を設けるようにします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞考古学・東洋陶磁史
＜研究テーマ＞中国初期王朝形成過程の考古学的研究、中国陶磁史
＜主要研究業績＞
徳留大輔責任編集『茶の湯の茶碗　第一巻　唐物茶碗』淡交社、2021年
葉喆民原著、出川哲朗 監訳、徳留大輔／新井崇之 訳『中国陶磁史』科学出版社東京、国書刊行会、2019年
徳留大輔編集『宋磁ー神秘のやきもの』（展覧会・図録）、出光美術館、2018年

【Outline (in English)】
（Course outline）Considering Society through Ceramics: Focusing on the History of Chinese Ceramics
（Learning Objectives）Ceramics was the first tool that utilized chemical change for human beings. Northeast Asia has a long history of ceramics. In this class, we will study the historical development and stylistic transition of earthenware and ceramics, focusing on the history of Chinese ceramics. We will also study the role and significance of ceramics in society, in addition to their function as vessels, from the perspectives of "technology," "style," "exchange," "order," and "power," as well as the state of society in each period.
（Learning activities outside of classroom）Visiting exhibitions at museums
（Grading Criteria /Policy）Final report: 60%, homework assignments: 20%, regular marks: 20%.

HIS500B4（史学 / History 500）

東洋史学特殊講義ＢⅡ

徳留　大輔

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
【授業の概要】陶磁器から社会を考える②—— 中国陶磁の歴史とその受容を中心に
【目的・意義】前期に行った中国陶磁史の展開における理解を深めた上で、中国陶磁史における代表的な陶磁器の種類である白磁・青磁、黒釉、青花、色絵について理解を深める。またそれら中国だけでなく日本や世界でどのように受容され、またそれぞれの地域でどのような新しい文化や伝統を築いてきたのかについて、比較しながら陶磁文化を学ぶ。そして古代から近世における様々な国や地域における中国陶磁器の「受容」の歴史を、「考古学」「美術史」「歴史学」の研究方法を取得しながら学ぶ。そして中国・韓国・日本、東南アジア、西アジアなどで展開される「模倣」「創造」という視点から交流の歴史を学ぶとともに、「国際性」を身につけることができる。

【到達目標】
前期に行った中国陶磁史の展開における理解を深めた上で、中国陶磁史における代表的な陶磁器の種類である白磁・青磁、黒釉、青花、色絵について理解を深める。またそれら中国だけでなく日本や世界でどのように受容され、またそれぞれの地域でどのような新しい文化や伝統を築いてきたのかについて、比較しながら陶磁文化を学ぶ。そして古代から近世における様々な国や地域における中国陶磁器の「受容」の歴史を学び研究するための、「考古学」「美術史」「歴史学」の研究方法を取得できる。そして中国・韓国・日本、東南アジア、西アジアなどで展開される「模倣」「創造」という視点から交流の歴史を学ぶとともに、「国際性」を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
授業の形態は講義方式を中心としますが、陶磁器・考古学に関するテーマから受講生自身が興味ある資料を調べ・発表する時間も設けます。また陶磁器に関する展覧会を１～２回、博物館・美術館にて見学する予定（事前に予定は調整します。また交通費、入館料は各自で準備すること）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	官窯の歴史	皇帝・宮廷用の陶磁器生産における官窯とその生産システムの歴史的展開を学ぶ。
第2回	白磁・青花の歴史	白磁ならびに青花の技術・様式的展開について学ぶ
第3回	青磁の歴史	青磁の技術・様式的展開について学ぶ
第4回	黒釉の歴史	黒釉の技術・様式展開について学ぶ
第5回	色絵・五彩の歴史	色絵・五彩磁器の技術・様式展開について学ぶ
第6回	沈没船が語る陶磁史	中国陶磁器の流通と消費、また年代を考える上で近年沈没船から引き揚げられた陶磁器が注目されている。発見された沈没船は時代・場所により、航路や目的地が異なるため積載される陶磁器の組合せは様々である。東アジア・東南アジアの海域で発見されている沈没船資料を紐解きながら、交流の歴史を探る
第7回	エジプトフスタート遺跡出土の中国陶磁器	東アジアから遠く離れたエジプトカイロに所在する都市遺跡のフスタート遺跡。ここから8世紀から19世紀頃まで、中国陶磁をはじめ、日本陶磁や東南アジア、またそれらの影響をうけて在地で作られた陶磁器が出土している。それらがエジプトでなぜ発見されているのか、どのような交易・交流の歴史があったかの、発見されている陶磁器を通して学ぶ。
第8回	韓国陶磁史における中国陶磁の影響	中国陶磁の朝鮮半島における流通とその影響について、理解を深める。この中では簡単に韓国陶磁史についても学ぶ。
第9回	茶の湯にみる陶磁史	日本における中国陶磁の船来は、唐物という言葉にも知られるように大きな影響を与えた。中でも茶の湯における中国陶磁器の重要は極めて大きい。陶磁器の受容史を「茶の湯」という視点から見ていく。この講義では黒釉碗、天目、青磁を中心に学ぶ。
第10回	儀礼と陶磁器—— 大名の儀礼・御成と陶磁器	日本における中国陶磁の船来は、唐物という言葉にも知られるように大きな影響を与えた。この講義では、儀礼と陶磁器の関係に注目する。具体的には江戸時代における大名儀礼・御成において、中国陶磁器がどのような役割を果たしたのかを理解を深める。
第11回	欧州におけるアジアの陶磁文化の影響	大航海時代以降、中国陶磁、日本陶磁は欧州へ輸出され大きな影響を与えた。それは欧州における陶磁史にも新しい創造をもたらした。その影響関係が見られる陶磁作品を通して、影響・模倣・創造のプロセスについて学ぶ。
第12回	近代における陶磁器鑑賞の歴史	明治時代以降、中国陶磁器に対する見方は多様化する。唐物・茶の湯（煎茶を含む）・華道以外に、鑑賞陶器という捉え方が生み出される。欧州からの影響を受けた新しい陶磁器の見方・受容のあり方について学ぶ。
第13回	博物館見学	講義に関連する陶磁器の見学を行う。
第14回	後期のまとめ	後期で学んだことについて、まとめと整理を行う。また事前にテーマを選び受講生が興味をもった陶磁器・考古学のテーマに関して具体的に作品を選び、それに関する研究発表を行う。一人15点程度。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。講義の際にレジュメの配布ならびに内容にあわせて参考文献を紹介します。授業の前・後に読んで要点をまとめて授業に臨んでください。また授業では課題を出しますので、次回の講義時に提出してください。

【テキスト（教科書）】
講義では教科書は使用しません。毎回レジュメを配布します。ただし、【参考書】に関してはぜひ一読してください。

【参考書】
葉喆民原著、出川哲朗 監訳、徳留大輔／新井崇之 訳『中国陶磁史』科学出版社東京、国書刊行会、2019年
徳留大輔責任編集『茶の湯の茶碗　唐物茶碗』淡交社、2021年

【成績評価の方法と基準】
期末レポート50％、各講義時に課す課題（宿題）20％、平常点30％

【学生の意見等からの気づき】
受講生の研究内容と結びつけながら、いくつか物質文化資料をとりあげて、受講生どうしてその資料に関するディスカッションを行う。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
本講義の担当者者は美術館に勤務する学芸員であり、陶芸を中心とする工芸分野を担当しています。可能な限り、実物作品の実見や資料などの観察の方法のレクチャーや資料にふれる機会を設けるようにします。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞考古学・東洋陶磁史
＜研究テーマ＞中国初期王朝形成過程の考古学的研究、中国陶磁史
＜主要研究業績＞
徳留大輔責任編集『茶の湯の茶碗　第一巻　唐物茶碗』淡交社、2021年
葉喆民原著、出川哲朗 監訳、徳留大輔／新井崇之 訳『中国陶磁史』科学出版社東京、国書刊行会、2019年
徳留大輔編集『宋磁ー神秘のやきもの』（展覧会・図録）、出光美術館、2018年

【Outline (in English)】
(Course outline) Considering Society through Ceramics (2) – Focusing on the History of Chinese Ceramics and its Acceptance
(Learning Objectives) After deepening their understanding of the development of Chinese ceramic history in the first semester, students will deepen their understanding of the representative types of Chinese ceramics history: white porcelain, celadon, black glaze, underglaze blue, and overglaze, as well as the new cultures and traditions that have developed in each region. Students will also learn about ceramic culture by comparing how ceramics were accepted not only in China but also in Japan and other country or regions, and how new cultures and traditions were established in each region. The history of the "reception" of Chinese ceramics in various countries and regions from ancient times to the modern period will be studied while acquiring research methods of "archaeology," "art history," and "historiography. Then, students will learn the history of exchange from the viewpoint of "imitation" and "creation" developed in China, Korea, Japan, Southeast Asia, and West Asia, as well as acquire "internationality".
(Learning activities outside of classroom) Visiting exhibitions at museums
(Grading Criteria /Policy) Final report: 60%, homework assignments: 20%, regular marks: 20%.

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊講義ＡⅠ

内川　勇太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、初期中世ブリテンに関する英語で書かれた学術的文献を講読することで、研究を遂行するために必要な語学力や、文献の扱い方、初期中世ブリテンに関する知識を習得することを目指す。

【到達目標】
この授業は、以下の3点を到達目標に設定する。
（1）英語で書かれた学術文献を正確に読むことができる。
（2）初期中世ブリテン史における基礎的事項を体系的に理解できる。
（3）文献における論点を正確に把握し、さらに掘り下げることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
この授業では、初期中世ブリテンの政治・社会・文化に関する英語文献を講読する。 授業は、輪読形式で進められ、受講者には事前にテキストを読み授業に臨むことが求められる。ある程度テキストが読み進められた段階で、それまで出てきた問題点などについて、受講者に報告をしてもらうことも考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方の確認。文献に関する説明。
第2回	文献講読1	第1章講読
第3回	文献講読2	第1部第2章講読
第4回	文献講読3	第1部第3章講読
第5回	文献講読4	第1部第4章講読
第6回	文献講読5	第1部第5章講読
第7回	文献講読6	第1部第6章講読
第8回	文献講読7	第1部の重要事項の確認と調査報告。
第9回	文献講読8	第2部第7章講読
第10回	文献講読9	第2部第8章講読
第11回	文献講読10	第2部第9章講読
第12回	文献講読11	第2部第10章前半講読
第13回	文献講読12	第2部第10章後半講読
第14回	まとめ	第2部の重要事項の確認と調査報告。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に指定された英文テキストの箇所を読んでくること。また、該当箇所に出てくる人物名や地名、史料なども可能な限り調べてくること。

【テキスト（教科書）】
講読する文献として、R. Naismith, Early Medieval Britain: c. 500-1000 (Cambridge, 2021)を考えている。なお、こちらでコピーないしはPDFファイルを用意するので、購入の必要はない。

【参考書】
1.近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社2010
2.青山吉信編『世界歴史体系イギリス史１：先史- 中世』山川出版社1991
3.トマス・チャールズ=エドワーズ編・常見信代監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史２：ポスト・ローマ』慶應義塾大学出版会2010
4.ウェンディ・デイヴィス編・鶴島博和監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史３：ヴァイキングからノルマン人へ』慶応義塾大学出版会2015
5.川北稔編『新版世界各国史11イギリス史』山川出版社1998

【成績評価の方法と基準】
平常点100%
授業に臨む姿勢（準備や討論への参加）と内容理解度から総合的に判断する

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class, we will develop the skills necessary to carry out research (language skills, how to handle documents, and knowledge about early medieval British history) by reading academic literature written in English on early medieval British history.
【Learning Objectives】
This class will set the following three goals.
(1) Be able to read academic literature written in English accurately.
(2) Be able to systematically understand basic matters in early medieval British history.
(3) Be able to accurately grasp the points at issue in the literature and dig deeper into them.
【Learning activities outside of classroom】
The standard time for preparation and review for this class is two hours each. Read a portion of the English text specified in advance. Also, try to investigate as much as possible the names of people, places, and historical materials that appear in the relevant passages.
【Grading Criteria /Policy】
Class engagement 100%
Comprehensively judged based on attitude toward class (preparation and participation in discussion) and level of understanding of content.

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊講義ＡⅡ

内川　勇太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、初期中世ブリテンに関する英語で書かれた学術的文献を講読することで、研究を遂行するために必要な語学力や、文献の扱い方、初期中世ブリテンに関する知識を習得することを目指す。

【到達目標】
この授業は、以下の3点を到達目標に設定する。
（1）英語で書かれた学術文献を正確に読むことができる。
（2）初期中世ブリテン史における基礎的事項を体系的に理解できる。
（3）文献における論点を正確に把握し、さらに掘り下げることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
この授業では、初期中世ブリテンの政治・社会・文化に関する英語文献を講読する。 授業は、輪読形式で進められ、受講者には事前にテキストを読み授業に臨むことが求められる。ある程度テキストが読み進められた段階で、それまで出てきた問題点などについて、受講者に報告をしてもらうことも考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	復習	春学期の復習
第2回	文献講読1	第3部第11章講読
第3回	文献講読2	第3部第12章前半講読
第4回	文献講読3	第3部第12章後半講読
第5回	文献講読4	第3部第13章講読
第6回	文献講読5	第3部第14章前半講読
第7回	文献講読6	第3部第14章後半講読
第8回	文献講読7	第3部第11章から第14章の重要事項の確認と調査報告。
第9回	文献講読8	第3部第15章講読
第10回	文献講読9	第3部第16章講読
第11回	文献講読10	第3部第17章講読
第12回	文献講読11	第3部第18章講読
第13回	文献講読12	第3部第15章から第18章の重要事項の確認と調査報告。
第14回	まとめ	授業全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に指定された英文テキストの箇所を読んでくること。また、該当箇所に出てくる人物名や地名、史料なども可能な限り調べてくること。

【テキスト（教科書）】
講読する文献として、R. Naismith, Early Medieval Britain: c. 500-1000 (Cambridge, 2021)を考えている。なお、こちらでコピーないしはPDFファイルを用意するので、購入の必要はない。

【参考書】
1.近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社2010
2.青山吉信編『世界歴史体系イギリス史１：先史- 中世』山川出版社1991
3.トマス・チャールズ=エドワーズ編・常見信代監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史２：ポスト・ローマ』慶應義塾大学出版会2010
4.ウェンディ・デイヴィス編・鶴島博和監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史３：ヴァイキングからノルマン人へ』慶応義塾大学出版会2015
5.川北稔編『新版世界各国史11イギリス史』山川出版社1998

【成績評価の方法と基準】
平常点100%
授業に臨む姿勢（準備や討論への参加）と内容理解度から総合的に判断する

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class, we will develop the skills necessary to carry out research (language skills, how to handle documents, and knowledge about early medieval British history) by reading academic literature written in English on early medieval British history.
【Learning Objectives】
This class will set the following three goals.
(1) Be able to read academic literature written in English accurately.
(2) Be able to systematically understand basic matters in early medieval British history.
(3) Be able to accurately grasp the points at issue in the literature and dig deeper into them.
【Learning activities outside of classroom】
The standard time for preparation and review for this class is two hours each. Read a portion of the English text specified in advance. Also, try to investigate as much as possible the names of people, places, and historical materials that appear in the relevant passages.
【Grading Criteria /Policy】
Class engagement 100%
Comprehensively judged based on attitude toward class (preparation and participation in discussion) and level of understanding of content.

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊講義ＢⅠ

篠原　琢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
18世紀末から第一次世界大戦期までの「長い19世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝国的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。
ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い19世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった・・・。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation Stateを近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。
　果たして帝国の19世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。

【到達目標】
受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ1. 帝国概論	ハプスブルク帝国とはどのような帝国だったのか、概説的に解説する。
第2回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ2. 帝国を思い出す	ハプスブルク帝国崩壊後、帝国にどのようなイメージが存在したのか、代表的な流れを考える。
第3回	ハプスブルク帝国史研究の歴史1. 帝国解体は必然だったのか？	ハプスブルク帝国後継諸国の歴史認識を問う。
第4回	ハプスブルク帝国史研究の歴史2. 時代錯誤の帝国？	Oscar Jaszi, The Dissolution of Habsburg Monarchy
第5回	ハプスブルク帝国史研究の歴史3. 帝国の長い解体過程	Alan Sked, The Fall and Decline of the Habsburg Monarchy
第6回	ハプスブルク帝国史研究の歴史4. 帝国解体は必然ではない！	Pieter Judson, Habsburg Empire. New History
第7回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史1. 諸国民社会の形成	Miroslav Hroch, Social Preconditions of National Revival in Europe
第8回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史2. できごととしてのネイション	Rogers Brubacker, Nation without Groups
第9回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史3. National Indifference	Tara Zahra, "Imagined Non-communities"
第10回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史4. 国民化する帝国	Alexei Miller, Nationalizing Empires
第11回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国1. ガリツィア・ブコヴィナ	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第12回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国2. 文明化の使命	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第13回	ハンナ・アーレント『全体主義の起原』から帝国を考える	ハンナ・アーレント、『全体主義の起原』のうち、第二巻「帝国主義」を扱う。
第14回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業時に扱うテキストはPDFで配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備してくること。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New Historyを教科書とする。

【参考書】
授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】
演習への貢献度、演習時の報告を40%、学期末のレポートを60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は受講者がいなかったので、特に該当しない。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中央ヨーロッパ近現代史
＜研究テーマ＞中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline (in English)】
Learning Objectives
We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleologicl concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of defferent territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic exixtence by itsself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anormality deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summerizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.
Learning activities outside of classroom:
Critical reading of academic essays on the topic in advance.
Grading Criteria:
Comments and discussion in the class: 40%
Final report: 60%

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊講義ＢⅡ

篠原　琢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
18世紀末から第一次世界大戦期までの「長い19世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝国的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。

ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い19世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった・・・。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation Stateを近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。

果たして帝国の19世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。前期は帝国史について、方法論を主に検討したが、後期は帝国の諸地域を具体的に検討する。

【到達目標】
受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ボヘミア（ベーメン）史1. チェコ「国民再生」の思想と運動 1.	「国民再生」概念について概説する。
第2回	ボヘミア（ベーメン）史2. チェコ「国民再生」の思想と運動 2.	Vladimír Macuraを読む
第3回	ボヘミア（ベーメン）史3. 1848年革命　1	「フランクフルトへの手紙」を考える
第4回	ボヘミア（ベーメン）史4. 1848年革命　2	「フランクフルトへの手紙」を考える
第5回	ボヘミア（ベーメン）史5. 19世紀後半のチェコ社会	チェコ・ナショナリズムと「ボヘミア王国の歴史的権利」
第6回	ボヘミア（ベーメン）史6. 「言語闘争」	19世紀のハプスブルク帝国の「ナショナリズム」問題について、「言語闘争」は典型的だと考えられてきた。その問題について批判的に検討を加える。
第7回	ボヘミア（ベーメン）史7. 第一次世界大戦とチェコ社会	第一次世界大戦中の「帝国愛国主義」とチェコスロヴァキア独立論について検討する。
第8回	チェコにおけるユダヤ人社会	ボヘミア・モラヴィアにおける「ユダヤ人社会」、その同化とユダヤ・ナショナリズムを考える。
第9回	ガリツィア史1. 「ガリツィアの虐殺」	1846年のガリツィア蜂起、およびそれに伴って起こった「ガリツィアの虐殺」をナショナリズムの観点から考える。
第10回	ガリツィア史2. ポーランド貴族とポーランド王国の正統性	ポーランド分割後のポーランド貴族の政治的影響力について考える。
第11回	ガリツィア史4. 農民ナショナリズムの進展	19世紀後半のポーランドの国民形成過程を農民を中心に考える。
第12回	ガリツィア史5. ウクライナのピエモンテ？	ポーランド貴族の政治的・文化的ヘゲモニーに抗して進展したウクライナ・ナショナリズムをリヴィウを中心に考える。
第13回	ガリツィア史6. ガリツィアにおけるユダヤ人社会	ガリツィアにおけるシオニズム、ユダヤ自治主義、同化主義の問題を考える。
第14回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業時に扱うテキストはPDFで配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備してくること。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New Historyを教科書とする。

【参考書】
授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】
演習への貢献度、演習時の報告を40%、学期末のレポートを60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の数が少ないことが見込まれるので、各自の研究内容に充分配慮しながら授業を進める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中央ヨーロッパ近現代史
＜研究テーマ＞中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline (in English)】
We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleological concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of defferent territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic exixtence by itsself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anormality deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summerizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.
Learning activities outside of classroom:
Critical reading of academic essays on the topic in advance.
Grading Criteria:
Comments and discussion in the class: 40%
Final report: 60%

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊講義ＣⅠ

中込　さやか

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代西洋社会で構築されたジェンダー秩序は、近代国民国家と近代社会の重要な構成要素として、西洋社会のみならず植民地社会やその他の国や地域に国境を超えて「近代化」の一要素として普及した。本授業では近代社会のジェンダー秩序が西洋社会においていかに構築され、維持され、そして変化したのかを、近代イギリスの社会と教育に関連するテーマに基づいて、歴史的アプローチを用いて検証する。
各授業回では上記のテーマに関連した文献読解とディスカッションを行う。
また、履修学生の学位論文の執筆に関連するテーマの文献講読や研究報告、ディスカッションも行う。

【到達目標】
学生は、欧米の歴史・社会・教育・ジェンダーに関する日本語文献や外国語文献を正確に読解した上で、その内容について検討し、自らの見解を述べる力を身に付けることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は演習形式で行う。授業参加にあたり、学生は以下に取り組むことが求められる。
1) 各授業回で扱う文献を批判的に読解し、授業内ディスカッションに備える。
2) 各授業回の報告担当者は報告用スライド（またはハンドアウト）を準備する。
3) 履修学生の学位論文のに関する研究報告を行い、その内容についてディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の概要と本授業で取り扱うテーマの意義について説明する。 第2回以降で取り扱う文献の決定、各回の報告担当者を決定する。
第2回	文献輪読 1-1	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第3回	文献輪読 1-2	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第4回	文献輪読 1-3	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第5回	文献輪読 1-4	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第6回	文献輪読 1-5	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第7回	文献輪読 1-6	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第8回	研究報告 1	学生自身の研究テーマに関連する報告を行う。
第9回	文献輪読 2-1	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第10回	文献輪読 2-2	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第11回	文献輪読 2-3	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第12回	文献輪読 2-4	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第13回	文献輪読 2-5	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第14回	研究報告 2	学生自身の研究テーマに関連する報告を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の事前学習では、各授業回で取り扱う文献の該当部分をよく読んだ上で文献の重要な点、疑問点を準備すること。
復習では、配布された授業内で共有されたスライド等を元に文献や議論の内容を改めて検討し、理解を深める。
事前学習、復習について各２時間程度の学習が必要になる。

【テキスト（教科書）】
参考文献にあげたものが文献講読で使用するテキストの候補である。ただし、最終的には履修学生の研究テーマ等を考慮して初回授業時にテキストを設定する。

【参考書】
Rose, S. O. (2010). What is gender history? Polity.
Davidoff, L &Hall, C. (2019). Family fortunes: Men and women of the English middle class, 1780-1850) (3rd ed.). Routledge.
Thane, P. (1996). The Foundations of the Welfare State (Longman Social Policy In Britain Series) (2nd ed.). Longman.
河村貞枝・今井けい編（2006）『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店。
香川せつ子・河村貞枝編著（2008）『女性と高等教育：機会拡張と社会的相克』昭和堂。

【成績評価の方法と基準】
平常点100%。各回の事前学習、授業用スライド等の作成、授業時の議論への参加、各自の研究テーマに基づく報告等を元に総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
本年度から新規のため過去のフィードバックはなし。授業の進め方、内容、文献講読のテキスト等は、適宜、履修学生からの相談や意見を踏まえて適宜変更する。

【学生が準備すべき機器他】
毎回の授業にノートPCを持参すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
近現代イギリス女子教育史、比較教育社会史、ジェンダー史
＜研究テーマ＞
①1870～1910年代のイギリスのミドルクラス向け女子教育における家庭科／家政学の実施について
②明治～大正期の日本人女性教育者のイギリス留学、日・英・ヨーロッパにおけるトランスナショナルな家庭科／家政学の伝播
＜主要研究業績＞
・Sayaka Nakagomi. (2025). Ō e Sumi's transnational experience in the UK, Europe, and Japan: The construction of the modern Japanese housewife and mothers through domestic economy from the 1900s to the 1920s. In Joyce Goodman& Setsuko Kagawa. (Eds.). Women and Educational Reform in History: Japan in a Transnational World. Routledge.

・中込さやか（2022）「ミドルクラスの「女性らしさ」と女子教育：ノース・ロンドン・コリージェト・スクールと家庭科関連科目群1871～1894年」『歴史学研究』1018、1-14。
・Keiko Sasaki, Yuri Uchiyama, Sayaka Nakagomi. (2020). Study Abroad and the Transnational Experience of Japanese Women from 1860s – 1920s: Four Stages of Female Study Abroad, Sumi Miyakawa and Tano Jōdai. Espacio, Tiempo y Educación, 7(2), 5-28.

【Outline (in English)】
The modern gender order constructed in modern Western societies served as an important component of modern nation-states and modern societies.
The modern gender order was widely shared across national borders beyond Western societies in colonial societies and other countries and regions, as an element of 'modernization'.
In this course, we will examine how the gender order was constructed, maintained, and transformed in Western societies, based on themes related to modern British society and education and taking an historical approach.
Each session will involve critical reading and discussions related to the above themes based on the given reading materials.
Additionally, students are also asked to do readings, presentations and discussions based on their own research interests.
The goal of this course is 1) to accurately understand reading materials written in Japanese and foreign languages in the fields of history, society, education, and gender in the Western world and 2) to examine the contents, and to develop the ability to express their own opinions.
In preparation for this class, students must carefully read the relevant sections of the reading material to be covered in each class, and prepare for discussion points.
In review, to deepen their understanding of the topics, students are expected to reconsider the contents of the reading material and discussions based on the course slides shared in class.
About two hours of study each will be required for preparation and review.
In-class points 100%. Comprehensive judgment will be made based on students' class participation and their understanding of the topic.

HIS500B4（史学 / History 500）

西洋史学特殊講義ＣⅡ

中込　さやか

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
近代西洋社会で構築されたジェンダー秩序は、近代国民国家と近代社会の重要な構成要素として、西洋社会のみならず植民地社会やその他の国や地域に国境を超えて「近代化」の一要素として普及した。本授業では近代社会のジェンダー秩序が西洋社会においていかに構築され、維持され、そして変化したのかを、近代イギリスの社会と教育に関連するテーマに基づいて、歴史的アプローチを用いて検証する。
各授業回では上記のテーマに関連した文献読解とディスカッションを行う。
また、履修学生の学位論文の執筆に関連するテーマの文献講読や研究報告、ディスカッションも行う。

【到達目標】
学生は、欧米の歴史・社会・教育・ジェンダーに関する日本語文献や外国語文献を正確に読解した上で、その内容について検討し、自らの見解を述べる力を身に付けることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は演習形式で行う。授業参加にあたり、学生は以下に取り組むことが求められる。
1) 各授業回で扱う文献を批判的に読解し、授業内ディスカッションに備える。
2) 各授業回の報告担当者は報告用スライド（またはハンドアウト）を準備する。
3) 履修学生の学位論文のに関する研究報告を行い、その内容についてディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の概要と本授業で取り扱うテーマの意義について説明する。 第2回以降で取り扱う文献の決定、各回の報告担当者を決定する。
第2回	文献輪読 1-1	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第3回	文献輪読 1-2	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第4回	文献輪読 1-3	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第5回	文献輪読 1-4	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第6回	文献輪読 1-5	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第7回	文献輪読 1-6	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第8回	研究報告 1	学生自身の研究テーマに関連する報告を行う。
第9回	文献輪読 2-1	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第10回	文献輪読 2-2	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第11回	文献輪読 2-3	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第12回	文献輪読 2-4	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第13回	文献輪読 2-5	文献の内容についての発表とその内容についてのディスカッションを行う。
第14回	研究報告 2	学生自身の研究テーマに関連する報告を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の事前学習では、各授業回で取り扱う文献の該当部分をよく読んだ上で文献の重要な点、疑問点を準備すること。
復習では、配布された授業内で共有されたスライド等を元に文献や議論の内容を改めて検討し、理解を深める。
事前学習、復習について各２時間程度の学習が必要になる。

【テキスト（教科書）】
参考文献にあげたものが文献講読で使用するテキストの候補である。ただし、最終的には履修学生の研究テーマ等を考慮して初回授業時にテキストを設定する。

【参考書】
Goodman, Joyce &Martin, Jane. (eds.). (2002). Gender, colonialism and education: The politics of education. Routledge.
Fuchs, Eckhardt Fuchs&Vera, Eugenia Roldán. (eds.). (2019). The transnational in the history of education: Concepts and Perspectives. Palgrave Macmillan.
Mayer, Christine&Arredondo, Adelina (eds.). (2020). Women, power relations, and education in a transnational world. Palgrave Macmillan.
Yamaguchi, Midori. (2014) Daughters of Anglican clergy: Religion, gender and identity in Victorian England. Palgrave Macmillan.

【成績評価の方法と基準】
平常点100%。各回の事前学習、授業用スライド等の作成、授業時の議論への参加、各自の研究テーマに基づく報告等を元に総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
本年度から新規のため過去のフィードバックはなし。授業の進め方、内容、文献講読のテキスト等は、適宜、履修学生からの相談や意見を踏まえて適宜変更する。

【学生が準備すべき機器他】
毎回の授業にノートPCを持参すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
近現代イギリス女子教育史、比較教育社会史、ジェンダー史
＜研究テーマ＞
①1870～1910年代のイギリスのミドルクラス向け女子教育における家庭科／家政学の実施について
②明治～大正期の日本人女性教育者のイギリス留学、日・英・ヨーロッパにおけるトランスナショナルな家庭科／家政学の伝播
＜主要研究業績＞

・Sayaka Nakagomi. (2025). Ō e Sumi's transnational experience in the UK, Europe, and Japan: The construction of the modern Japanese housewife and mothers through domestic economy from the 1900s to the 1920s. In Joyce Goodman& Setsuko Kagawa. (Eds.). Women and Educational Reform in History: Japan in a Transnational World. Routledge.
・中込さやか（2022）「ミドルクラスの「女性らしさ」と女子教育：ノース・ロンドン・コリージェト・スクールと家庭科関連科目群1871～1894年」『歴史学研究』1018、1-14。
・Keiko Sasaki, Yuri Uchiyama, Sayaka Nakagomi. (2020). Study Abroad and the Transnational Experience of Japanese Women from 1860s – 1920s: Four Stages of Female Study Abroad, Sumi Miyakawa and Tano Jōdai. Espacio, Tiempo y Educación, 7(2), 5-28.

【Outline (in English)】

The modern gender order constructed in modern Western societies served as an important component of modern nation-states and modern societies.
The modern gender order was widely shared across national borders beyond Western societies in colonial societies and other countries and regions, as an element of 'modernization'.
In this course, we will examine how the gender order was constructed, maintained, and transformed in Western societies, based on themes related to modern British society and education and taking an historical approach.
Each session will involve critical reading and discussions related to the above themes based on the given reading materials.
Additionally, students are also asked to do readings, presentations and discussions based on their own research interests.
The goal of this course is 1) to accurately understand reading materials written in Japanese and foreign languages in the fields of history, society, education, and gender in the Western world and 2) to examine the contents, and to develop the ability to express their own opinions.
In preparation for this class, students must carefully read the relevant sections of the reading material to be covered in each class, and prepare for discussion points.
In review, to deepen their understanding of the topics, students are expected to reconsider the contents of the reading material and discussions based on the course slides shared in class.
About two hours of study each will be required for preparation and review.
In-class points 100%. Comprehensive judgment will be made based on students' class participation and their understanding of the topic.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅠ

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて１つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】
最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも２本程度（できれば３本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者をまねき、論文構想・執筆過程についても紹介してもらう。
発表へのフィードバックについては、次回の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整。
第2回	博士課程院生執筆の論文検討(1)	賜姓源氏をめぐって1
第3回	博士課程院生執筆の論文検討(2)	賜姓源氏をめぐって2
第4回	博士課程院生執筆の論文検討(3)	賜姓源氏をめぐって3
第5回	博士課程院生執筆の論文検討(4)	賜姓源氏をめぐって4
第6回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(2)	日渤交渉の歴史定義
第8回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(3)	日渤交渉の変質
第9回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(4)	外交儀礼の特徴
第10回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(6)	日本古代駅制の特質
第12回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(7)	駅伝制の検討
第13回	博士課程学位取得者執筆の論文検討(8)	中国と日本の古代交通制度の比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。
発表者の事前準備は標準的に2時間。受講生の事前準備は標準的に1時間を要する。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】
最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90％）。
演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10％）。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本古代史
＜研究テーマ＞
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
＜主要研究業績＞
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
To finish the research as a doctorate in the course, Profeesor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅡ

小口　雅史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて１つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】
最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも２本程度（できれば３本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生執筆論文の検討(1)	聖徳太子信仰の形成再考
第3回	博士課程院生執筆論文の検討(2)	聖徳太子信仰の展開再考
第4回	博士課程院生執筆論文の検討(3)	聖徳太子信仰の史料論再考
第5回	博士課程院生執筆論文の検討(4)	聖徳太子信仰の歴史的意義再考
第6回	博士課程在籍者の執筆論文検討(1)	人姓とは何か再考
第7回	博士課程在籍者の執筆論文検討(2)	複姓氏族の検討
第8回	博士課程在籍者の執筆論文検討(3)	舎人の語原再考
第9回	博士課程在籍者の執筆論文検討(4)	舎人氏族の実態
第10回	博士課程在籍者の執筆論文検討(5)	関東の国造の特質
第11回	基本論文の輪読（１）	石母田正『日本の古代国家』第１章
第12回	基本論文の輪読（２）	石母田正『日本の古代国家』第２章
第13回	基本論文の輪読（３）	石母田正『日本の古代国家』第３章
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しない。

【参考書】
その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】
最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する。
演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本古代史
＜研究テーマ＞
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
＜主要研究業績＞
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】
To finish the research as a doctorate in the course, Profeesor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅠ

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本中世史に関係する論文の構成や内容について個別に相談する。また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】
日本中世史に関係する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表（1）	研究報告と議論
第6回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表（2）	研究報告と議論
第10回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表（3）	研究報告と議論
第14回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点５０%、学期末レポート点５０%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞日中国際交流史・日本仏教史
＜主要研究業績＞『中世禅律仏教論』（山川出版社、2009年）・『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅡ

大塚　紀弘

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本中世史に関係する論文の構成や内容について個別に相談する。また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】
日本中世史に関係する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表（1）	研究報告と議論
第6回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表（2）	研究報告と議論
第10回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表（3）	研究報告と議論
第14回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点５０%、学期末レポート点５０%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】
議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞日中国際交流史・日本仏教史
＜主要研究業績＞『中世禅律仏教論』（山川出版社、2009年）・『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

【Outline (in English)】
The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅠ

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
①査読付学術雑誌に論文を掲載する。
②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（１）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（２）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（３）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（４）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（５）	学術雑誌への投稿をめざして
第7回	論文講読（１）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（２）	論文構成の方法
第9回	論文講読（３）	史料批判
第10回	論文講読（４）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（５）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（１）	今後の方針
第13回	研究計画発表（２）	史料採訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００％で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞都市論、記憶論
＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】
This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅡ

松本　剣志郎

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
①査読付学術雑誌に論文を複数掲載する。
②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（１）	研究史との格闘
第3回	研究発表（２）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（３）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（４）	表の効果的使用
第6回	研究発表（５）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（１）	分野の選定
第8回	論文講読（２）	表現力の問題
第9回	論文講読（３）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（４）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（５）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（１）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（２）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし。

【参考書】
『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度等をみて、平常点１００％で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】
教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近世史
＜研究テーマ＞都市論、記憶論
＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】
This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅠ

内藤　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近現代史に関する発表や専門書・論文の検討などを行い、博士論文を完成させるために必要な能力を養う。

【到達目標】
本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向の把握、②独創的な研究テーマの確立、③高い水準の論文の作成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で行う。具体的には、受講生による、①論文の構想発表、執筆中の論文の中間発表と質疑応答、②関心をもった専門書・論文の合評会、③最新の研究や史料の紹介、などを中心とする。課題等の提出やフィードバックなどは主に「学習支援システム」を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	研究発表1	明治史研究（1）
第3回	研究発表2	明治史研究（2）
第4回	研究発表3	明治史研究（3）
第5回	研究発表4	明治史研究（4）
第6回	研究発表5	大正史研究（1）
第7回	研究発表6	大正史研究（2）
第8回	中間総括	中間総括と質疑応答
第9回	研究発表7	昭和戦前史研究（1）
第10回	研究発表8	昭和戦前史研究（2）
第11回	研究発表9	昭和戦前史研究（3）
第12回	研究発表10	昭和戦後史研究（1）
第13回	研究発表11	昭和戦後史研究（2）
第14回	全体総括	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。論文評に際しては、事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に用いない。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100％）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムが利用可能なIT機器

【その他の重要事項】
・「史学特殊演習」AⅡ（秋学期）との継続履修を推奨する。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course mainly reports on the modern history of Japan, criticizes academic books and dissertations, and discusses them. Through these processes, you will acquire the abilities necessary to complete your doctoral dissertation.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
－ A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.
－ B.Create an original research theme.
－ C.Complete a high-level dissertation.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and the quality of the dissertation.Combine all elements to make 100%

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅡ

内藤　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本近現代史に関する発表や専門書・論文の検討などを行い、博士論文を完成させるために必要な能力を養う。

【到達目標】
本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向の把握、②独創的な研究テーマの確立、③高い水準の論文の作成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式で行う。具体的には、受講生による、①論文の構想発表、執筆中の論文の中間発表と質疑応答、②関心をもった専門書・論文の合評会、③最新の研究や史料の紹介、などを中心とする。課題等の提出やフィードバックなどは主に「学習支援システム」を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	研究発表1	論文構想発表（1）
第3回	研究発表2	論文構想発表（2）
第4回	研究発表3	論文構想発表（3）
第5回	研究発表4	論文構想発表（4）
第6回	研究発表5	論文合評（1）
第7回	研究発表6	史料紹介（1）
第8回	中間総括	中間総括と質疑応答
第9回	研究発表7	論文構想発表（5）
第10回	研究発表8	論文構想発表（6）
第11回	研究発表9	論文構想発表（7）
第12回	研究発表10	論文合評（2）
第13回	研究発表11	史料紹介（2）
第14回	全体総括	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。論文評に際しては、事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
特に用いない。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100％）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】
現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムが利用可能なIT機器

【その他の重要事項】
・「史学特殊演習」ＡⅠ（春学期）との継続履修を推奨する。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記（新訂版）』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）、『弥彦と啄木』（芙蓉書房出版）

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course mainly reports on the modern history of Japan, criticizes academic books and dissertations, and discusses them. Through these processes, you will acquire the abilities necessary to complete your doctoral dissertation.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
－ A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.
－ B.Create an original research theme.
－ C.Complete a high-level dissertation.
（Learning activities outside of classroom）
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
（Grading Criteria /Policy）
Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and the quality of the dissertation.Combine all elements to make 100%

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅠ

内田　康太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
西洋前近代史の博士論文執筆に必要な専門的技術・知識を習得するとともに、研究者・教育者として自立するための基盤を形成する。

【到達目標】
この授業の到達目標は以下のとおり。
・西洋前近代史の研究に必須となるラテン語史料を正確かつ批判的に読解できること。
・自らの研究を学会で発表するための準備、論文のかたちで投稿するための準備ができること。
・これまでに習得した専門的技術・知識に基づき、修士課程在籍生の学習をサポートできること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は、受講生による研究の現状報告、博士論文完成に向けた原稿作成とそれらに対する指導を中心とする。第10回～第13回は修士課程科目「西洋史学演習Ⅰ」との合同授業とし、修士課程在籍生によるラテン語史料読解および修士論文中間報告などについて、教員と共に指導してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	受講生の研究テーマと研究状況の確認
第2回	博士論文報告（1）	受講生による博士論文中間報告と質疑応答・討議
第3回	博士論文報告（2）	受講生による博士論文中間報告と質疑応答・討議
第4回	研究の活字化にむけて（1）	受講者がまとめた論文原稿について検討
第5回	研究の活字化にむけて（2）	受講者がまとめた論文原稿について検討
第6回	史料講読（1）	受講者が論文で使用する史料の読解
第7回	史料講読（2）	受講者が論文で使用する史料の読解
第8回	論文の投稿にむけて（1）	受講者がまとめた論文の修正原稿について検討
第9回	論文の投稿にむけて（2）	受講者がまとめた論文の修正原稿について検討
第10回	教育・指導（1）	「西洋史学演習Ⅰ」受講生によるラテン語史料講読を補助
第11回	教育・指導（2）	「西洋史学演習Ⅰ」受講生によるラテン語史料講読を補助
第12回	教育・指導（3）	「西洋史学演習Ⅰ」受講生による修士論文報告に対するコメント
第13回	教育・指導（4）	「西洋史学演習Ⅰ」受講生による修士論文報告に対するコメント
第14回	まとめ	到達度と今後のスケジュールの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の授業外学習時間は４時間をはるかに上回る。博士論文の完成に向けて自身の研究を進めることはもとより、修士課程在籍生の学習をサポートするための準備を行うことが求められる。

【テキスト（教科書）】
（第10回・第11回）
J. M. Carter, *Julius Caesar, the Civii War*. Books I and II, Warminster, 1991.

【参考書】
（第10回・第11回）
カエサル『内乱記』（國原吉之助訳），講談社学術文庫，1994年.
カエサル『カエサル戦記集　内乱記』(高橋宏幸訳), 岩波書店, 2015年.
C. Damon, *Caesar, Civil War*, Cambridge / Massachusetts / London, 2016.
P. Fabre, *César, Guerre civile, Livres I et II*, Paris, 2019.

【成績評価の方法と基準】
博士論文完成に向けた研究への取り組み（70％）
修士課程在学生に対する学習サポートの準備度（30％）

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は開講されなかったためフィードバックできない。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞古代ローマ史
＜研究テーマ＞共和政末期から帝政初期の政治史・法制史
＜主要研究業績＞
・『元老院と民会　共和政末期ローマにおける立法』，山川出版社，2023年.
・「共和政期ローマの執政官選挙と優先投票ケントゥリア（Centuria Praerogativa）」『西洋古典学研究』第61号，2013年.
・（共著）『名著で読む世界史120』，山川出版社，2016年.

【Outline (in English)】
(Course outline) This course helps students acquire the professional skills and knowledge to write their doctoral dissertation in pre-modern western history. It also lays the foundation for their becoming an independent researcher and educator.
(Learning Objectives) The followings are the goals of this course.
- Students are able to read accurately and critically historical sources written in Latin.
- Students are able to prepare to make presenations at academic conferences and to submit papers for journals.
- Students are able to help students in the master's course based on the skills and knowledge acquired throughout their career.
(Learning activities outside of classroom) Students' study time will be far more than four hours for a class. They are expected to progress their own research in order to accomplish their dissertation, and prepare to help students in the master's course.
(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on students' effort to accomplish their own dissertation (70%), and their preparation to help students in the master's course (30%).

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅡ

内田　康太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
西洋前近代史の博士論文執筆に必要な専門的技術・知識を習得するとともに、研究者・教育者として自立するための基盤を形成する。

【到達目標】
この授業の到達目標は以下のとおり。
・西洋前近代史の研究に必須となるラテン語史料を正確かつ批判的に読解できること。
・自らの研究を学会で発表するための準備、論文のかたちで投稿するための準備ができること。
・これまでに習得した専門的技術・知識に基づき、修士課程在籍生の学習をサポートできること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
この授業は、受講生による研究の現状報告、博士論文完成に向けた原稿作成とそれらに対する指導を中心とする。第10回～第13回は修士課程科目「西洋史学演習II」との合同授業とし、修士課程在籍生によるラテン語史料読解および修士論文中間報告などについて、教員と共に指導してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	受講生の研究状況確認
第2回	博士論文報告（1）	受講生による博士論文中間報告と質疑応答・討議
第3回	博士論文報告（2）	受講生による博士論文中間報告と質疑応答・討議
第4回	博士論文の完成にむけて（1）	受講者がまとめた博士論文原稿について検討
第5回	博士論文の完成にむけて（2）	受講者がまとめた博士論文原稿について検討
第6回	史料講読（1）	受講者が博士論文で使用する史料の読解
第7回	史料講読（2）	受講者が博士論文で使用する史料の読解
第8回	博士論文の仕上げにむけて（1）	受講者がまとめた博士論文の修正原稿について検討
第9回	博士論文の仕上げにむけて（2）	受講者がまとめた博士論文の修正原稿について検討
第10回	教育・指導（1）	「西洋史学演習II」受講生によるラテン語史料講読を補助
第11回	教育・指導（2）	「西洋史学演習II」受講生によるラテン語史料講読を補助
第12回	教育・指導（3）	「西洋史学演習II」受講生による修士論文報告に対するコメント
第13回	教育・指導（4）	「西洋史学演習II」受講生による修士論文報告に対するコメント
第14回	まとめ	到達度と今後のスケジュールの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の授業外学習時間は４時間をはるかに上回る。博士論文の完成に向けて自身の研究を進めることはもとより、修士課程在籍生の学習をサポートするための準備を行うことが求められる。

【テキスト（教科書）】
（第10回・第11回）
J. M. Carter, *Julius Caesar, the Civii War. Books I and II*, Warminster, 1991.

【参考書】
（第10回・第11回）
カエサル『内乱記』（國原吉之助訳），講談社学術文庫，1994年.
カエサル『カエサル戦記集　内乱記』(高橋宏幸訳), 岩波書店, 2015年.
C. Damon, *Caesar, Civil War*, Cambridge / Massachusetts / London, 2016.
P. Fabre, *César, Guerre civile, Livres I et II*, Paris, 2019.

【成績評価の方法と基準】
博士論文完成に向けた研究への取り組み（70％）
修士課程在学生に対する学習サポートの準備度（30％）

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は開講されなかったためフィードバックできない。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞古代ローマ史
＜研究テーマ＞共和政末期から帝政初期の政治史・法制史
＜主要研究業績＞
・『元老院と民会　共和政末期ローマにおける立法』，山川出版社，2023年.
・「共和政期ローマの執政官選挙と優先投票ケントゥリア（Centuria Praerogativa）」『西洋古典学研究』第61号，2013年.
・（共著）『名著で読む世界史120』，山川出版社，2016年.

【Outline (in English)】
(Course outline) This course helps students acquire the professional skills and knowledge to write their doctoral dissertation in pre-modern western history. It also lays the foundation for their becoming an independent researcher and educator.
(Learning Objectives) The followings are the goals of this course.
- Students are able to read accurately and critically historical sources written in Latin.
- Students are able to prepare to make presenations at academic conferences and to submit papers for journals.
- Students are able to help students in the master's course based on the skills and knowledge acquired throughout their career.
(Learning activities outside of classroom) Students' study time will be far more than four hours for a class. They are expected to progress their own research in order to accomplish their dissertations, and prepare to help students in the master's course.
(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on students' effort to accomplish their own dissertation (70%), and their preparation to help students in the master's course (30%).

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅠ

齋藤　勝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国古代史研究の展開
自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】
中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。課題に対してのフィードバックは、講読、整理発表の中で適宜行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	概論	授業の趣旨と進め方
第2回	漢文史料を読む	講読 『三国志』
第3回	前回の史料についての検討	『三国志』の成書と内容についての検討
第4回	漢文史料を読む	講読 『晋書』
第5回	前回の史料についての検討	『晋書』の成書と内容についての検討
第6回	漢文史料を読む	講読 『世説新語』
第7回	前回の史料についての検討	『世説新語』の成書と内容について
第8回	歴史評論を読む	講読 『日知録』
第9回	『日知録』を理解するために	顧炎武とその時代について
第10回	『日知録』を読むために	典故について
第11回	『日知録』を考える	講読 『日知録』についての諸研究
第12回	これまでの整理	これまで読んできたものについての比較検討
第13回	参加者各自の問題意識と先行研究	講読 参加者任意の文献
第14回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】
授業計画参照。適宜、配布します。
扱う内容は受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】
随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点100％
課題の達成度よって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　中国古代史
＜研究テーマ＞　唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容
＜主要研究業績＞
「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年
「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年
「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline (in English)】
Course outline: The aim of this course is to help students improve skills and critical minds to study the history of ancient China.
Learning objectives: At the end of the course, students are expected to promote their understanding of the way to describe the history in ancient China.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅡ

齋藤　勝

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
中国古代史研究の展開
自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】
中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。課題に対してのフィードバックは、講読、整理発表の中で適宜行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	概論	授業の趣旨と進め方
第2回	漢文史料を読む	講読 『資治通鑑』
第3回	前回の史料についての検討	『資治通鑑』の成書と内容について
第4回	研究文献を読む	講読 陳垣『通鑑胡注表微』
第5回	前回の文献についての検討	陳垣とその時代について
第6回	前回の文献に関する補足	胡三省とその時代について
第7回	研究文献を読む	講読 桑原隲蔵の諸論文
第8回	前回の文献についての検討	桑原隲蔵とその時代について
第9回	研究文献を読む	講読 陳垣の諸論文
第10回	研究の比較	桑原隲蔵と陳垣の比較検討
第11回	研究文献を読む	講読 陳寅恪の諸論文
第12回	研究の比較	陳寅恪と陳垣の比較検討
第13回	参加者各自の問題意識の提示	講読 参加者任意の文献
第14回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各２時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】
授業計画参照。適宜、配布します。
扱う内容は受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】
随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点100％
発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　中国古代史
＜研究テーマ＞　唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容
＜主要研究業績＞
「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年
「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年
「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline (in English)】
Course outline: The aim of this course is to help students improve skills and critical minds to study the history of ancient China.
Learning objectives: At the end of the course, students are expected to promote their understanding of the way to describe the history in ancient China.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅠ

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。それをもとに博士論文作成を進めるための力量を培い、独自の研究の確立につなげていく。

【到達目標】
・先史社会の内実を物質資料の分析に基づいて検討し、批判を加えつつ建設的な展望を提示することができる。
・先史社会に関する特定のテーマをもとにした論文を多面的に構成するための能力が高まる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者が関心を寄せる先史時代の社会に関する先行研究を講読し、受講者の研究テーマを設定するために検討と討論を重ねる。関連する諸研究を横断しながら、研究の現状と課題を明らかにし、受講者の問題意識の形成につなげ、資料の分析方法を見通していく。
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	先史社会研究の意義
第2回	構想発表（１）	受講者の目指す論文構想
第3回	構想発表（２）	現状の論文構想の課題と問題の検討
第4回	学史的研究論文の検討（１）	主に1990年代までの研究分野をリードしてきた先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第5回	学史的研究論文の検討（２）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第6回	学史的研究論文の検討（３）	上記論文の考察と展望に関する検討
第7回	近年の研究論文の検討（１）	2000年代以降の研究分野を形成した先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第8回	近年の研究論文の検討（２）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第9回	近年の研究論文の検討（３）	上記論文の考察と展望に関する検討
第10回	最新の研究論文の検討（１）	当該分野における最新研究のテーマと目的に関する検討
第11回	最新の研究論文の検討（２）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第12回	最新の研究論文の検討（３）	上記論文の考察と展望に関する検討
第13回	先史社会研究の発達過程と多面的な方向性	受講者の掲げたテーマの有効性と問題点の摘出
第14回	総括	研究テーマと方針の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。当該分野の諸研究に関する論文集成および研究史の概要把握。

【テキスト（教科書）】
用いない。

【参考書】
授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】
授業内の発表・討論（70％・必須）、レポート（30％・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline (in English)】
The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.
Students will be able to examine the image of prehistoric societies based on the analysis of material sources and present a constructive perspective.
Students will develop the ability to construct a multi-faceted thesis based on a specific theme related to prehistoric societies.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: results of the research presentation and participation in the discussion (70%), and the final report (30%).

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅡ

小倉　淳一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。この授業では受講者の研究テーマを先行研究の中に確実に位置づけたうえで、資料の実践的な検討と考察を行い、博士論文作成に資することとする。

【到達目標】
・諸研究を総合的に検討することで受講者自身が新たな研究の方向を展望できる。
・受講者自身の研究テーマにもとづく資料集成を実践できる。
・集成した資料の分類と分析を一定の基準の下で実践できる。
・分析を元にした考察をまとめ、新たな展望を得ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者の設定した研究テーマの学史的背景と妥当性を検討するとともに、対象となる資料の分析視点を絞り込んでいく。次いで資料の分類と分析に進み、その手順と理解の妥当性を検討する。最終的に考察された内容が資料にもとづいて正確になされているかについて討論し、最新の研究成果との相関性や先進性について理解を深めていく。
授業形式は対面授業を基本とする。
レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	先史社会研究の実戦に向けた諸段階
第2回	研究テーマの学史的検討（1）	先行研究の展開過程
第3回	研究テーマの学史的検討（2）	研究史上の転換点・画期
第4回	研究テーマの学史的検討（3）	現状の研究の方向性と展望
第5回	資料集成（1）	資料集成の目的と方向性
第6回	資料集成（2）	目的にもとづく資料集成方法の検討
第7回	資料の分析（1）	資料のもつ諸属性の理解
第8回	資料の分析（2）	観察視点と属性抽出方法
第9回	資料の分析（3）	資料分析の実践と問題
第10回	資料の分析（4）	分析結果の処理
第11回	分析結果の読み取り（1）	分析結果の提示・表現方法
第12回	分析結果の読み取り（2）	分析結果の解釈と考察
第13回	成果の検討	研究テーマと結論の相関性および最新研究との関連性の検討
第14回	総括	研究論文の内容と構成の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。受講者のテーマに関連する研究論文の渉猟、考古学的方法論に関する理解。

【テキスト（教科書）】
用いない。

【参考書】
授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】
授業内の発表・討論（70％・必須）、レポート（30％・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline (in English)】
The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.
Students will be able to examine the image of prehistoric societies based on the analysis of material sources and present a constructive perspective.
Students will develop the ability to construct a multi-faceted thesis based on a specific theme related to prehistoric societies.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: results of the research presentation and participation in the discussion (70%), and the final report (30%).

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅠ

塩沢　裕仁

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、受講生が中国古代物質（特に考古）資料についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
　研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養うともに博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　東アジア文化の発達やその変遷を探索し、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。本授業では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解や内容に対する議論を通して中国物質文化への理解を深め、その成果を以て論文作成を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	中国考古学の状況と考古学報告活用の意味
第2回	資料講読（1）	研究史の整理（1）
第3回	資料講読（2）	研究史の整理（2）
第4回	資料講読（3）	研究史の整理（3）
第5回	資料講読（4）	研究史の整理（4）
第6回	資料講読（5）	研究史の整理（5）
第7回	資料閲読（1）	研究資料の検証（1）
第8回	資料閲読（2）	研究資料の検証（2）
第9回	資料閲読（3）	研究資料の検証（3）
第10回	研究所訪問（1）	研究資料の収集（1）
第11回	研究所訪問（2）	研究資料の収集（2）
第12回	研究計画発表（1）	研究方針の検証
第13回	研究計画発表（2）	研究水準の検証
第14回	まとめ	研究計画の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで十分に対応ができる。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。 また、学会への積極的な参加も求める。

【テキスト（教科書）】
　授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】
　塩沢裕仁『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010 年
　塩沢裕仁『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【成績評価の方法と基準】
資料解釈の深度と発表内容：100

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理
＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態 環境。＜主要研究業績＞『東漢魏晋南北朝都城境域研究』洛陽博物館文化叢書、2009 年 『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010 年 「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新 67 号、2010 年 「洛陽から四方に通じる大道とその遺跡」『古代東アジアの道路と交通』勉誠 出版、2011 年 「洛陽における都城遺跡の保護とその問題点」『中国考古学』11 号、2011 年 「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012 年 『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【Outline (in English)】
【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports , we will able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.
【Learning activities outside of classroom】Need two hours in a day.
【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

HIS700B4（史学 / History 700）

史学特殊演習ＢⅡ

塩沢　裕仁

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　本授業は、受講生が中国古代物質（特に考古）資料についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】
　研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養うとともに博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　東アジア文化の発達やその変遷を探索し、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。本授業では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解や内容に対する議論を通して中国物質文化への理解を深め、その成果を以て論文作成を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	休暇中の課題整理
第2回	資料講読（1）	研究状況の整理（1）
第3回	資料講読（2）	研究状況の整理（2）
第4回	資料講読（3）	研究状況の整理（3）
第5回	資料講読（4）	研究状況の整理（4）
第6回	資料講読（5）	研究状況の整理（5）
第7回	研究活動報告（1）	学会参加報告（1）
第8回	研究所訪問（1）	研究資料の実地検証（1）
第9回	研究所訪問（2）	研究資料の実地検証（2）
第10回	研究活動報告（2）	学会参加報告（2）
第11回	研究発表（1）	研究成果報告（1）
第12回	研究発表（2）	研究成果報告（2）
第13回	研究発表（3）	研究水準の検証
第14回	まとめ	研究活動の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで十分に対応ができる。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。また、学会への積極的な参加も求める。

【テキスト（教科書）】
　授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】
　塩沢裕仁『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010 年
　塩沢裕仁『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【成績評価の方法と基準】
　資料解釈の深度と発表内容：100

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理
＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態 環境。＜主要研究業績＞『東漢魏晋南北朝都城境域研究』洛陽博物館文化叢書、2009 年 『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、2010 年 「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新 67 号、2010 年 「洛陽から四方に通じる大道とその遺跡」『古代東アジアの道路と交通』勉誠 出版、2011 年 「洛陽における都城遺跡の保護とその問題点」『中国考古学』11 号、2011 年 「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012 年 『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【Outline (in English)】
【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports , we will able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.
【Learning activities outside of classroom】Need two hours in a day.
【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究Ⅰ

福田　由紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　自分の研究テーマに関して，その先行研究群を批判的に概観して，展望論文を作成する。

【到達目標】
①自分の興味にあったテーマに関連する先行研究群を柔軟に検索できる。
②当該の先行研究群を批判的に読み，問題点や改善点を指摘できる。
③②を受けて，新しい提案ができる。
④当該のテーマに関連した展望論文を作成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　授業の最初に展望論文の作成の仕方について，討議を行う。それを受けて，前半の授業では，自分の興味に合ったテーマに関連する先行論文群を精読し，発表する。そして，論文を作成し，ピアレビューを通して完成度の高い展望論文を完成させる。また，提出された課題のフィードバックは，授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第2回	展望論文の概説	展望論文の特性について理解を深める。
第3回	種論文の発表１	自分のテーマにあった，核となる論文を各自発表する。
第4回	種論文の発表２	自分のテーマにあった，核となる論文を各自発表する。
第5回	種論文から派生した論文の発表１	種論文から派生した論文の発表をする。
第6回	種論文から派生した論文の発表２	種論文から派生した論文の発表をする。
第7回	種論文から派生した論文の発表３	種論文から派生した論文の発表をする。
第8回	先行研究群の問題点・改善点の発表１	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第9回	先行研究群の問題点・改善点の発表２	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第10回	展望論文の骨子に関する発表１	展望論文の骨子に関する発表する。
第11回	展望論文の骨子に関する発表２	展望論文の骨子に関する発表する。
第12回	展望論文の発表１	作成した展望論文をピアレビューする。
第13回	展望論文の発表２	作成した展望論文をピアレビューする。
第14回	修正展望論文の講評	修正した展望論文を講評し，全体で討議する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　モデルとなる展望論文を精読し，その特性に関してレジュメを作成する。
第2・3回　自分にあったテーマの種論文を精読し，発表の準備を行う。
第4～6回　種論文から検索できる先行研究群を精読し，発表の準備を行う。
第7・8回　先行研究群の問題点・改善点についてレジュメにまとめ，発表の準備を行う。
第9・10回　展望論文作成のための骨子をレジュメにまとめ，発表の準備を行う。
第11・12回　展望論文を作成する。
第13回　第11・12回におけるピアレビューを受け，展望論文を修正する。
本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特になし。適宜，紹介する。

【参考書】
福田由紀（編）(2012). 言語心理学入門　培風館
日本読書学会（編）(2019). 読書教育の未来　ひつじ書房
石黒圭　(2020). 段落論　光文社新書

【成績評価の方法と基準】
発表15%，発表への質問・コメント15%，討論への積極的な参加20%，展望論文の提出50%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
　2025年度の授業では，受講生が1名であったため，アンケートは実施されませんでしたが，受講生から「授業で得られたこと」は，「論文の各段落の組み合わせ方や記述統計量でデータを検討する方法をすごく勉強になりました。」でした。論文をがんばって書きましょう。応援しています。

【その他の重要事項】
受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語心理学
＜研究テーマ＞読みと感情，コミュニケーションにおける言語活動の役割
＜主要研究業績＞
1. 常深 浩平・望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅰ）―努力の最小限化とその対策例―』（読書科学，66,1-10. 2024）
2. 福田 由紀・井関 龍太・望月 正哉・常深 浩平『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅱ）－ Instructional Question Check 通過に影響する要因の検討－』（読書科学，66,11-25. 2024）
3. 井関 龍太・望月 正哉・菊池 理紗・福田 由紀『現代語小説の品詞構成に基づく文体印象の分析－イメージ性と展開の早さの主観的印象を説明する試み－』（計量国語学，34，158-173. 2023年）
4. 井関 龍太・菊池 理紗・望月 正哉・福田 由紀・石黒 圭『品詞構成に基づく文体指標は読者の印象とどのように関わるか－ MVR と品詞構成率の心理学的検討－』（計量国語学，33，493-509. 2022年
　この論文は計量国語学会の論文賞を拝受しました）
5. 望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀・長田 友紀・常深 浩平・石黒 圭『読者がもつ物語の認知的ジャンルの測定』（読書科学，63,160-174. 2021）
＜ＨＰ＞
「ことばのこころ研究室」http://www.zc.em-net.ne.jp/ psy-language/

【Outline (in English)】
Course outline：The purpose of this course is to learn how to write a review paper.
Learning Objectives：By the end of the course, students should be able to do the following:
－ A. search for information on previous studies interested to oneself
－ B. read them critically and point out problems and a refinement
－ C. propose new suggestion
－ D. write a review report
Learning activities outside of classroom ： Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.

Grading Criteria ： Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 15%, comment for the presentation of other people: 15%, review report: 50%, in-class contribution: 20%.

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 II

福田　由紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　自分の興味にあった心理学的なテーマに関して，実験・調査の計画・実施・発表・論文の作成を通して，心理学の研究のプロセスを実践的に学ぶ。

【到達目標】
①自分の興味にあったテーマに関して，適切な実験・調査計画を立てることができる。
②自分の計画を実際に行うことができる。
③実験・調査結果を適切に分析・考察できる。
④分析・考察したことを的確に他者に伝達できる。
⑤論文を作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　自分の興味にあったテーマに関して研究計画を立て，授業で発表をする。ピアレビューを通して，仮説の設定，変数の決定，統制の仕方，材料の収集，分析手法を洗練していく。その研究計画にそった実験・調査を実施する。その結果を発表し，完成度の高い実証的な論文を完成させる。提出された課題のフィードバックは，授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第2回	研究テーマの設定	研究テーマを発表する。
第3回	実験・調査立案における注意１	仮説，変数，統制の仕方，材料の収集の仕方を発表し，全員で討議する。
第4回	実験・調査立案における注意２	具体的な分析方法を発表し，全員で討議する。
第5回	研究計画申請書の発表	法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会宛の書式にそった研究計画申請書を発表し，全員で討議する。
第6回	実験・調査の実施１	実験・調査を遂行し，その進捗状況を発表し，全員で討議する。
第7回	実験・調査の実施２	実験・調査を遂行し，その進捗状況を発表し，全員で討議する。
第8回	データの分析	分析結果を発表し，全員で討議する。
第9回	考察	結果と先行研究の知見を利用して論理的に考えられる考察を発表し，全員で討議する。
第10回	要旨の作成	学会発表で求められる要旨を作成し，ピアレビューをする。
第11回	論文の作成	学術論文の書き方について確認する。
第12回	成果発表１	与えられた時間内に効果的に発表し，全員で討議する。
第13回	成果発表２	与えられた時間内に効果的に発表し，全員で討議する。
第14回	論文の提出と総括	実証的な方法を使って学術論文を作成し，提出し，そのプロセスに関して振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
第1回　自らの研究テーマの発表の準備を行う。
第2・3回　自分の目的にあった実験・調査計画を立て，発表の準備を行う。
第4回　研究計画申請書を作成し，発表の準備を行う。
第5〜6回　実験・調査を実施する。
第7回　データを分析し，発表の準備を行う。
第8回　分析結果をもとに考察行い，発表の準備を行う。
第9回　要旨を作成し，発表の準備を行う。
第10回　論文を作成する。
第11・12回　成果発表の準備を行う。
第13回　提出する論文の作成・見直しをする。
本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特になし。適宜，紹介する。

【参考書】
福田由紀（編）(2012). 言語心理学入門　培風館
日本読書学会（編）(2019). 読書教育の未来　ひつじ書房
石黒圭 (2020). 段落論　光文社新書

【成績評価の方法と基準】
発表15%，発表への質問・コメント15%，討論への積極的な参加20%，論文の提出50%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
　2025年度は受講生が1名であったため，アンケートは実施されませんでしたが，受講生から「授業で得られたこと」は，「論文の各段落の組み合わせ方や記述統計量でデータを検討する方法をすごく勉強になりました。」でした。論文をがんばって書きましょう。応援しています。

【その他の重要事項】
受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語心理学
＜研究テーマ＞読みと感情，コミュニケーションにおける言語活動の役割
＜主要研究業績＞
1.常深 浩平・望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅰ）―努力の最小限化とその対策例―』（読書科学，66,1-10. 2024）
2.福田 由紀・井関 龍太・望月 正哉・常深 浩平『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅱ）－ Instructional Question Check 通過に影響する要因の検討－』（読書科学，66,11-25. 2024）
3. 井関 龍太・望月 正哉・菊池 理紗・福田 由紀『現代語小説の品詞構成に基づく文体印象の分析－イメージ性と展開の早さの主観的印象を説明する試み－』（計量国語学，34，158-173. 2023年）
4. 井関 龍太・菊池 理紗・望月 正哉・福田 由紀・石黒 圭『品詞構成に基づく文体指標は読者の印象とどのように関わるか－ MVR と品詞構成率の心理学的検討－』（計量国語学，33，493-509. 2022年
　この論文は計量国語学会の論文賞を拝受しました）
5. 望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀・長田 友紀・常深 浩平・石黒 圭『読者がもつ物語の認知的ジャンルの測定』（読書科学，63,160-174. 2021）
＜ＨＰ＞
「ことばのこころ研究室」http://www.zc.em-net.ne.jp/ psy-language/

【Outline (in English)】
Course outline：The purpose of this course is to learn how to conduct psychological research.
Learning Objectives：By the end of the course, students should be able to do the following:
－A. make one's experiment/survey plan
－B. carry it out
－C. analyze it appropriately
－D. present it effectively
－E. make a paper of one's research

Learning activities outside of classroom ： Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.
Grading Criteria ： Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 15%, comment for the presentation of other people: 15%, paper: 50%, in-class contribution: 20%.

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 I

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。受講生は、それぞれ自分の問題意識から研究テーマを選び、標的となる行動を決め、その制御変数を実験によって見つけながら、この方法論を習得します。博士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、修了後、それぞれの仕事に役立つ技術を習得することを目指します。

【到達目標】
　この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です。
(1) 標的行動を具体化し、測定方法を決めること、
(2) 標的行動の制御変数に関する先行研究を網羅的に調べること、
(3) 制御変数の候補を複数推定し、その中から実験で検討する変数を選び、実験計画を立案すること、
(4) 実験計画書を作成し、発表すること、
(5) 実験装置や測定システムなどを準備し、予備実験からそれを改善すること、
(6) 本実験を実施し、データを分析すること、
(7) 実験結果をまとめ，先行研究と対比し，新たな知見を位置づけること，
(8) 図表や文章、口頭発表などでコミュニケーションすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　受講生各自の博論の進捗にあわせ、毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業およびSlackで行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業内容と方法、約束事を説明します。実験計画のプレゼン方法、注意すべきこと、研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。
第2回	実験計画の発表1	独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などについて、博論実験の計画をしながら討論します。
第3回	実験計画の発表2	博論の研究テーマについて討論し、予備実験の準備を進め、報告します。
第4回	実験計画の発表3	博論の予備実験の準備を進めます。刺激や装置、教示や記録用紙など、具体的な材料を持ち寄り、確認と質疑応答をします。
第5回	予備実験の報告1	予備実験の結果を報告し、データ視覚化と分析、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（本実験の計画）などについて討論します。
第6回	予備実験の報告2	予備実験の結果をまとめ、プレゼンします。データから「わかったこと」「わからなかったこと」をわかりやすく、見て伝わる資料を作成できているか、相手にわかるように話せているかどうかを評価し、フィードバックします。
第7回	予備実験の報告3	次の予備実験あるいは本実験の実験計画についてプレゼンし、話し合います。
第8回	先行研究をまとめる1	先行研究や参考書、統計資料などを読み、現在の研究の流れや社会のニーズの中に自分の実験を位置づけます。
第9回	先行研究をまとめる2	先行研究の中に本実験をどのように位置づけるかを話し合い、討論します。
第10回	本実験の準備	本実験の準備を進め、予備実験から改訂した刺激や装置、教示や記録用紙など、具体的な材料を持ち寄り、確認と質疑応答をします。
第11回	本実験の報告1	本実験の結果を報告し、データ視覚化と分析、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（次の実験計画）などについて討論します。
第12回	本実験の報告2	本実験の結果をまとめ、プレゼンします。データから「わかったこと」「わからなかったこと」をわかりやすく、見て伝わる資料を作成できているか、相手にわかるように話せているかどうかを評価し、フィードバックします。
第13回	次の実験の計画	次の実験計画についてプレゼンし、話し合います。
第14回	まとめ	自分の研究のセールスポイントを抜き出し、これを伝える題目を考えて発表します。 博論のストーリーを端的に伝える練習をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい（以下に一例）。
○興味がある実験について標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の３つを考え、提案する資料を作成する。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
島宗 理 (2019). ワードマップ　応用行動分析学 新曜社

【参考書】
　以下、シングルケースデザイン法に関する参考書です。
○ Barlow, D. H., &Hersen, M. (1984). Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change. Pergamon.（バーロー, D. H.・ハーセン, M. 高木俊一郎・佐久間 徹（監訳）一事例の実験デザイン ―ケーススタディの基本と応用― 二瓶社）
○ Cooper, J. C., Heron, T. E., &Heward, W. L. (2007). Applied Behavior Analysis. Pearson Education.（クーパー, J. C., ヘロン, T. E., &ヒューワード, W. L. 中野良顯（訳）(2013) 応用行動分析学　明石書店）

【成績評価の方法と基準】
○学期初めに受講生が計画し，承認した研究計画to-doリスト上の達成率（最大100%）にもとづいて成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度はサバティカルで授業を担当しませんでした。

【その他の重要事項】
○オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の3限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including functional analyses of behavior, systematic observation and recording procedures, single-case designs, and visual inspection of time series data to evaluate effectiveness of an intervention. Students will select their own research topic, conduct a literature review, develop a research proposal, and run experiments.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students should be able to do the followings:
1) identify behavioral objectives, 2) design and conduct experiments, 3) analyze data, and 4) present research outcomes.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on task completion (100%).

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 II

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。この授業では、博士論文の実験計画書や研究論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、論理的な文章作成や根拠に基づいた提案、プレゼン、討論の練習をしていきます。

【到達目標】
　この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です。
1) 自分の実験を社会的、学術的な文脈に位置づけること)、
2) 研究の中心的なテーマについては先行研究を展望し，これまでわかっていること，わかっていないこと，今後の課題などを展望論文の形式でまとめること，
3) 実験から得られたデータを分析し、わかったこと、
4) わからなかったことを整理し、わからなかったことはどうすればわかるようになるかを実験計画として提案すること，
5) わかったことを数量化し、図表にまとめ、読み手や聞き手にわかりやすいように発表すること、
6) 論理的に一貫した、読みやすい文章を書くこと，
7) 論文を投稿する学術雑誌を特定し，その論文の投稿規定にあわせて論文を整形すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
　毎週、受講生各自の博論研究の進捗にあわせた課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業および掲示板で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業内容と方法、約束事を説明します。 博論実験の内容を１分間でプレゼンする練習をします。
第2回	論文を書く： アウトラインを書く	アウトラインを書いてから本文を書く方法を解説します。「方法」の章を使って練習をします。
第3回	論文を書く： データの視覚的な提示	実験の中心的なデータを選び、それを視覚的に伝える図を描きます。独立変数と従属変数の関係性がわかりやすく提示できているかどうか、「手引き」やゼミの「チェックリスト」にそっているかどうかを確認します。
第4回	論文を書く： 推敲する(1)	方法の章の完成版を提出し、チェックリストに基づいて推敲します。読み手がその実験を追試できるように書かれているかどうか、読み手の立場から自分の論文を読み直して推敲する練習をします。
第5回	論文を書く： 事実を書く	アウトラインから書く方法を結果の章を使って練習します。読み手に自分の研究のセールスポイントをわかりやすく伝えるために、順序や論理展開を工夫する練習です。
第6回	論文を書く： 先行研究をまとめる	先行研究をまとめて表にし、「手引き」に即した作表方法を学びます。先行研究を紹介する段落を書き、文献引用の作法を練習します。
第7回	論文を書く： 研究を位置づけるアウトラインを書く	第6回でまとめた先行研究の展望を活かし、また春学期に作成したストーリーを振り返り、序論のアウトラインを作成します。パラグラフ・ライティング法を解説し、練習します。
第8回	論文を書く： 推敲する(2)	第5回で作成したアウトラインに肉付けをして結果の章をまとめます。データの分析や統計が適切に、かつ充分に行われているかどうかを確認します。
第9回	論文を書く： 推敲する(3)	パラグラフ・ライティング法を使って序論を完成させます。チェックリストを使って推敲する練習を続けます。
第10回	論文を書く： 執筆ルールに基づいて校正する	引用文献一覧を作成します。本文と見合わせて、引用の方法が適切かどうかも確認します。
第11回	論文を書く： 推敲する(4)	研究論文の初稿を用い、推敲の練習をします。また、自分で書いた文章を自分で推敲するのは困難であることを自覚するために、他の受講生の論文を校正する練習もします。
第12回	論文を投稿する： 学術雑誌への投稿手順	論文を学術雑誌へ投稿する手順やその後のやりとりについて解説します。
第13回	研究計画(1)	次年度に行う実験の計画を発表し、討論します。
第14回	研究計画(2)	次年度に行う実験の計画を発表し、討論します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい（以下に一例）。
○日本心理学会の『執筆・投稿の手びき』およびゼミの『論文執筆チェックリスト』を用いて「結果」の章を推敲し、提出する。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
　テキストはありませんが、研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します。

【参考書】
　以下、パラグラフライティング法に関する参考書です。
○倉島保美　論理が伝わる世界標準の「書く技術」　ブルーバックス
○野田直人　小論文・レポートの書き方―パラグラフ・ライティングとアウトラインを鍛える演習帳―　有限会社人の森

【成績評価の方法と基準】
○学期初めに受講生が計画し，承認した研究計画to-doリスト上の達成率（最大100%）にもとづいて成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度はサバティカルで授業を担当しませんでした。

【その他の重要事項】
○オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の3限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
The purpose of this course is to master basic principles, procedures, and research methods pertaining to applying behavior analysis in schools or in other educational or therapeutic settings. Focus will be placed on knowledge and skills in applying basic concepts of learning to interpret behavioral phenomena in real-world educational or societal settings.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students should be able to do the followings:
1) identify behavioral objectives, 2) design and conduct experiments, 3) analyze data, and 4) present research outcomes.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on task completion (100%).

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究Ⅰ

藤田　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
記憶を中心とした認知心理学および，主に学習過程に焦点を当てた教育心理学に関連する先行研究を批判的に読み，研究目的とそれを達成する方法論および分析法について議論をすることを通じて，自分の研究計画の基礎とする。さらに博士後期課程の院生は，各自で研究を遂行できるようになるために必要な諸々の力を向上させることが授業の目的である。そのために必要な研究活動を自分自身で計画し，実行し，成果を自己評価して，次の計画に活かすというPDCAサイクルを体得する。

【到達目標】
＜博士後期課程の受講生向け＞
半期の授業が終了した時点で，以下の各要素を身につけていることが，授業の具体的な到達目標となる。
a.的確に自分自身の研究能力を現状分析できること。
b.博士後期課程全体の目標，各年度での中期目標，セメスター単位での小目標を合理的に立案できる。
c.上記a，bの内容をふまえて，具体的な行動計画および達成指標を考案できる。
d.上記a，b，cの内容をふまえて，実際に行動する。
e.上記a，b，c，dの内容をふまえて，セメスター単位での到達度を適正に自己評価できる。
f.上記eの自己評価を，次の目標設定に活かすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
修士・博士の受講生ともに，先行研究について正確に理解した上で，その研究方法・分析方法・論理の首尾一貫性について口頭で説明することを具体的な作業課題として設定する。
研究論文の構成について教員が解説した上で，受講生自身が実際に発表し，全員で討論を行う。
具体的な授業の進め方は次の通りである。一人の受講生が自分の興味ある研究領域の論文を読んでレジュメを作成し，毎回の授業の前半で，その内容を説明する。その際には単に論文に沿って紹介するだけでなく，批判的な目を持って，問題点や改善点を指摘することに重点を置く。もし問題点・改善点に気づかない場合には，その研究方法の優れている点を指摘することとする。毎回の授業の後半では，発表された内容について受講生全員で討論を行い，その議論を踏まえて，発表した研究と同じテーマで，より適切な研究を行うための研究計画を各自が提案する。
それに加えて，博士後期課程の受講生は，博士後期課程を通じての自分自身の目標を，複数の観点から立てる。次に，その全体目標を達成するための中目標として，当該学年での目標を立てる。さらに，小目標として当該学期（セメスター）での目標を立てる。何をどのようにすれば各レベルの目標が達成できるのかを考えること自体が課題である。
発表は3種類の趣旨のものになる。1.現状分析と目標設定，2,目標を達成するために各自が設定した課題（複数回），3.目標達成度に対する自己評価と今後の改善策。
授業ではそれぞれの発表に対して全員で意見交換をして，自己評価基準の適正化を図る。
修士・博士とも，それぞれの発表課題の評価基準はルーブリックによって事前に公表する。ルーブリックに沿って行われる質疑応答が，実質的なフィードバックの機会となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業の概要と到達目標，評価方法の説明
第2回	論文の構成とは	論文を読む際に留意すべきポイントを担当教員が説明する
第3回	議論の進め方	担当教員が発表の例示をし，議論の進め方について説明する
第4回	目標設定の発表（博士）	学位論文作成に向け，現状分析を踏まえた春学期の各自の目標
第5回	論文発表１	発表者（一人目）が論文の内容を紹介し，全員で討論
第6回	論文発表２	発表者（二人目）が論文の内容を紹介し，全員で討論
第7回	論文発表３	発表者（一人目の２回目）論文の内容を紹介し，全員で討論
第8回	論文発表４	発表者（二人目の２回目）が論文の内容を紹介し，全員で討論
第9回	各自課題１（博士）	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の１回目
第10回	研究相談	修論・博論の研究実施に向けた相談の回
第11回	論文発表５	発表者（一人目の３回目）が論文の内容を紹介し，全員で討論
第12回	論文発表６	発表者（二人目の３回目）が論文の内容を紹介し，全員で討論
第13回	各自課題２（博士）	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の２回目
第14回	目標達成度の自己評価（博士）および総括	博士の受講生は達成指標に基づいた目標達成度の自己評価と海瀬何の発表。修士の受講生は授業の到達目標の確認，授業で修得できたことの振り返り。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・学習時間は，各回4時間を標準とする。詳細は下記の通り。
第１回 自分の興味ある研究テーマを明確にして，文献検索のためのキーワードを準備する
第２回 自分の興味ある研究テーマの文献を収集する
第３回 先行研究の熟読，レジュメによる発表の準備
第４回～第13回 各回の発表に対して，受講生全員が，よりよい研究計画や改善案を考案して，学習支援システムの掲示板に掲載する
第14回 この授業で学んだことを振り返り，目標到達度に応じて研究計画を修正する

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】
藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　　北大路書房
そのほか，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
＜博士後期課程の受講生向け＞
平常点40％…授業へ出席し，討論に参加していること自体を評価対象とする。
各自課題30％…発表の仕方（プレゼン技術），発表の内容，発表資料の質を評価対象とする。
目標設定発表20％…発表の仕方，目標設定の水準および適切さ，目標の実現可能性，現状分析の適　　切さを評価対象とする。
自己評価発表10％…発表の仕方，期末の自己評価の妥当性を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度は開講せず。

【その他の重要事項】
　授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず事前に相談すること。
　この授業は，修士課程と博士後期課程の合同科目である。また，複数年度にわたって重複履修することが可能である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　認知心理学，教育心理学
＜研究テーマ＞
　単なる経験則に終わらない，研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。
＜主要研究業績＞
藤田哲也（編）（2006）．大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　北大路書房
藤田哲也（2006）．心理学を活かした教育実践のために　井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法ver.2　認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために　8章　北大路書房，pp.135-155.
藤田哲也（編）（2021）．絶対役立つ教育心理学［第2版］－実践の理論，理論を実践－　ミネルヴァ書房

【Outline (in English)】
[Course outline]
The goal of this class is to improve the various powers necessary for graduate students of Doctoral Course to be able to carry out their own research. For that purpose, students will acquire the PDCA cycle to plan and execute research activities, self-evaluate results, and make use of it in the next plan.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the following:
a. Students can accurately analyze their own research abilities.
b. Students can reasonably formulate goals for the entire doctoral course, mid-term goals for each year, and small goals for each semester.
c. Students can devise concrete action plans and achievement indicators based on the contents of a and b above.
d. Students actually act based on the contents of a, b, and c above.
e. Students can properly self-evaluate their achievement in semester units based on the contents of a, b, c, and dabove.
f. Students can utilize the self-evaluation of e above to set the next goal.
[Learning activities outside of classroom]
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
[Grading Criteria/Policy]
The overall grade of the class is determined based on the following.
In-class contribution 40%, tasks set by each student 30%, presentation about goal setting 20%, presentation about self-evaluation 10%.

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 II

藤田　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
記憶を中心とした認知心理学および，主に学習過程に焦点を当てた教育心理学に関連する特定分野の複数の先行研究を批判的に読み，オリジナリティのある研究目的を達成するための適切な研究計画を考案する。自分の研究領域の先行研究と自分自身の研究の関係性を明確にするために，レビューを行うことを全員の課題に含める。
修士課程2年生は計画に沿って研究を実施した上で，結果を分析し考察する。
博士後期課程の院生は，各自で研究を遂行できるようになるために必要な諸々の力を向上させることを授業の目的とする。年度当初（春学期）に立てた各年度の中期目標を達成するために，秋学期の小目標を立て，具体的な研究活動を計画，実行し，成果を自己評価して，次の年度の計画に活かすというPDCAサイクルを体得する。

【到達目標】
半期の授業が終了した時点で，以下の各要素を身につけていることが，授業の具体的な到達目標となる。
＜博士後期課程＞
a. 的確に自分自身の研究能力を現状分析できること。
b. 博士後期課程全体の目標，各年度での中期目標，セメスター単位での小目標を合理的に立案できる。
c. 上記a，bの内容をふまえて，具体的な行動計画および達成指標を考案できる。
d. 上記a，b，cの内容をふまえて，実際に行動する。
e. 上記a，b，c，dの内容をふまえて，自分の研究を先行研究の中に適切に位置づけることができる。
f. 上記a，b，c，d，eの内容をふまえて，セメスター単位での到達度を適正に自己評価できる。
g. 上記fの自己評価を，次の目標設定に活かすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
心理学の特定の領域に関連した一連の先行研究を概観した上で，一般的に用いられているパラダイムを吟味し，自分自身の研究計画に反映させることを具体的な作業課題として設定した演習である。
具体的な授業の進め方は次の通りである。毎回の授業の前半で，一人の受講生が自分の興味ある研究領域の複数の論文をレビューし，新たな問題提起を行い，自分自身の研究計画を2回発表する。毎回の授業の後半では，発表された研究計画について受講生全員で討論を行い，より適切な研究を行うための方法論上のアドバイスを各自が行う。それに加えて，修士課程2年生は，修論研究の中間発表と最終発表の2回を通して，研究計画から結果の分析及び解釈まで，自分自身の研究について論旨の一貫性を向上させる。修士課程1年生は，1回の修論計画発表を通して，自分自身の研究を行う意義・目的と対応した方法論について理解を深める。
博士後期課程の在籍者は，春学期の「心理学特殊研究I」において，博士後期課程を全体での自分自身の目標を，複数の観点から立てた。次にその全体目標を達成するための中目標として，当該学年での目標を立てた。春学期の成果をふまえて，新たな小目標として当該学期（セメスター）での目標を立てる。何をどのようにすれば各レベルの目標が達成できるのかを考えること自体が課題である。
発表は4種類の趣旨のものになる。1. 現状分析と目標設定，2, 目標を達成するために各自が設定した課題，3. 自分の研究領域における先行研究の概観（レビュー），4. 目標達成度に対する自己評価と今後の改善策。
修士・博士とも，それぞれの発表課題の評価基準はルーブリックによって事前に公表する。ルーブリックに沿って行われる質疑応答が，実質的なフィードバックの機会となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション＋研究計画上の留意点	この授業の概要と到達目標，評価方法の説明＋研究計画を立てる上で留意すべきポイントを担当教員が説明する
第2回	聴き手が行うこと＋発表準備	各発表回に聴き手が行うべき具体的な活動とその意義の説明
第3回	秋学期の目標設定の発表（博士）	博士学位論文作成に向け，現状分析を踏まえた秋学期の各自の目標
第4回	研究計画発表１	修士の発表者（一人目の1回目）の研究計画に対して，全員で討論
第5回	研究計画発表２	修士の発表者（二人目の1回目）の研究計画に対して，全員で討論
第6回	研究計画発表３	修士の発表者（三人目の1回目）の研究計画に対して，全員で討論
第7回	各自課題１（博士）	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表
第8回	レビュー発表１	修士の発表者（一人目の2回目）のレビュー発表に対して，全員で討論
第9回	レビュー発表２	修士の発表者（二人目の2回目）のレビュー発表に対して，全員で討論
第10回	レビュー発表３	修士の発表者（三人目の2回目）のレビュー発表に対して，全員で討論
第11回	各自課題２（博士，レビュー発表とする）	博論の第１章に相当するレビュー発表に対して，全員で討論
第12回	修論最終発表	M2の受講生が研究全体の構成を発表し，全員で討論
第13回	修論計画発表	M1の受講生が修論研究計画を発表し，全員で討論
第14回	目標達成度の自己評価（博士）および総括	達成指標に基づいた目標達成度の自己評価と改善案の発表（博士）と，授業の到達目標の確認，授業で修得できたことの振り返り（修士）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は，各2時間を標準とする。授業前の準備学習の詳細は下記の通り。
第１回 自分の興味ある研究領域の複数の論文をレビューする
第２回 複数の論文をレビューし，新たな問題設定を行う
第３回～第13回 レジュメおよびパワーポイントのスライド作成
授業後に行う学習として，第４回以降の各発表内容に対して，研究計画等を改善するためのアドバイスを学習支援システムの掲示板に記載する。また，第14回にはこの授業で学んだことを振り返り，研究実施の際の留意点を集約する。

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】
藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　　北大路書房
そのほか，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
＜博士後期課程＞
平常点40％…授業へ出席し，討論に参加していることが評価対象。
各自課題15％…発表の仕方（プレゼン技術），発表の内容，発表資料の質。
レビュー発表15％…発表の仕方（プレゼン技術），発表資料の質，発表内容。
目標設定発表20％…発表の仕方，目標設定の水準および適切さ，目標の実現可能性，現状分析の適　　切さ。
自己評価発表10％…発表の仕方，期末の自己評価の妥当性。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度は開講せず。

【その他の重要事項】
授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず事前に相談すること。
この授業は，修士課程の「心理学研究法演習II」との合同科目。複数年度にわたって重複履修することが可能である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
認知心理学，教育心理学
＜研究テーマ＞
単なる経験則に終わらない，研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。
＜主要研究業績＞
藤田哲也（編）（2006）．大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　北大路書房
藤田哲也（2006）．心理学を活かした教育実践のために　井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法ver.2　認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために　8章　北大路書房，pp.135-155.
藤田哲也（編）（2021）．絶対役立つ教育心理学［第2版］－実践の理論，理論を実践－　ミネルヴァ書房

【Outline (in English)】
[Course outline]
The objective of this class is to improve the various abilities necessary for graduate students of Doctoral Course to be able to carry out research. In order to achieve the middle-term goals of each fiscal year established at the beginning of the spring semester, students set small goals for the fall semester and acquire the PDCA cycle on research activities. In order to clarify the relationship between the previous research and the student's own research, students review the preceding research.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the following:
a.Students can accurately analyze their own research abilities.
b.Students can reasonably formulate overall goals for the doctoral program, mid-term goals for each year, and small goals for each semester.
c.Students can devise concrete action plans and achievement indicators based on the contents of a and b above.
d.Students actually act based on the contents of a, b, and c above.
e.Students can appropriately position their research in the previous research based on the contents of a, b, c, and d above.
f.Students can properly self-evaluate their achievement in semester units based on the contents of a, b, c, d, and e above.
g.Students can utilize the self-evaluation of f above for the next goal setting.
[Learning activities outside of classroom]
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
[Grading Criteria /Policy]
The overall grade of the class is determined based on the following.
In-class contribution 40%, review presentation and tasks set by each student 30%, presentation about goal setting 20%, presentation about self-evaluation 10%.

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究Ⅰ

木村　健太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自身の関心のある研究テーマについて、高水準かつ学術的な意義の高い研究を実施するため、先行研究の調査と既存の研究手法を整理し、適切な研究計画を立案します。

【到達目標】
自身の関心のある研究テーマを高水準かつ学術的な意義の高い研究として実施するため、適切な先行研究の調査を実施、先行研究の課題を抽出することで研究課題を設定し、研究計画を立案するスキルの獲得を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・授業は演習方式で進めます。受講生による自分の研究の発表とそれにもとづく議論が中心となります。
・授業内で取り扱う関連論文は、受講生と教員で相談して適切な論文を選択します。
・論文及び受講生の研究に関連する生理心理学の実験手法（脳波、心電図など）について実習形式で学ぶこともあります。
・授業時間内に質疑応答の時間を設け、疑問や問題について議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方、興味のあるテーマの確認
第2回	先行研究の調査（1）	研究テーマに関連する論文のレビューと報告
第3回	先行研究の調査（2）	研究テーマに関連する論文のレビューと報告
第4回	先行研究の調査（3）	研究テーマに関連する論文のレビューと報告
第5回	先行研究の方法論の検討（1）	研究テーマに深く関連する論文の研究手法の検討
第6回	先行研究の方法論の検討（2）	研究テーマに深く関連する論文の研究手法の検討
第7回	問題の設定	先行研究の課題の抽出
第8回	研究課題の設定	研究課題の明確化、研究目的の設定
第9回	仮説の設定	研究計画の策定、研究仮説の設定
第10回	研究計画の立案	研究計画書の作成、倫理申請書の作成
第11回	研究計画書の発表（1）	研究計画の発表、議論
第12回	研究計画書の修正	フィードバックにもとづく研究計画の修正
第13回	研究計画書の発表（2）	修正した研究計画書の発表
第14回	まとめ	春学期の授業の振り返り、夏季休暇中の作業の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間合計4時間を標準とします。
・授業時間内は、発表にもとづく議論や解説を中心に行うため、論文などの情報収集、実験準備、資料作成などの作業は授業時間外に行います。
・特に、実験に用いるプログラムの作成、データ取得、データの分析などは授業時間外に実施することになるため、授業時間を有意義に活用するためにも事前準備が重要になります。

【テキスト（教科書）】
特に指定しません。

【参考書】
適宜必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
成績は、平常点50%（授業への積極的な関与等）、発表・レポート50%として総合点により評価します。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度は未開講でした。

【学生が準備すべき機器他】
・必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。
・脳波室で実験機器を用いた授業を行うことがあります。

【その他の重要事項】
・授業の進め方や授業計画、授業目標の説明をしますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。
・オフィスアワー：春・秋学期ともに木曜日3限（BT1109研究室）。訪問希望者は、メール（k.kimura[at]hosei.ac.jp）等で前日までに連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
生理心理学、認知神経科学、感情科学
＜研究テーマ＞
感情が認知機能や意思決定に作用する認知神経学的機序の研究、内受容感覚と脳ー身体の相互作用機序についての研究
＜主要研究業績＞
Kimura, K, Kanayama, N., &Katahira, K. (2023). Cardiac cycle affects risky decision-making.Biological psychology, 176, 108471
Kimura, K., Sawada, H., &Katayama, J. (2018). Outcome evaluations in group decision-making using authority rule: An electrophysiological study.
Neuropsychologia, 119, 271-279.
Kimura, K., Kimura, M., &Iwaki, S. (2016). Temporal prediction modulates the evaluative processing of “good” action feedback: An electrophysiological study.
Psychophysiology, 53 (10), 1552– 1559.

【Outline (in English)】
(Course outline)
In this class, we will discuss the knowledge and skills necessary for doctoral thesis preparation in seminar form.
(Learning Objectives)
The goals of this course are, based on systematic review of previous work and the understanding of the significance of the research theme, to create own design of experiments and to plan, carry out, and analyze physiological psychology experiments.
(Learning activities outside of classroom)
Before/after each class, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria / Policy)
Final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution (50 %), presentation and reports (50%).

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 II

木村　健太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
自身の関心のある心理学の研究テーマについて、高水準かつ学術的な意義の高い研究を実施・発信するため、研究計画にもとづいて研究を実施し、取得したデータの分析と考察を行い、研究成果を論文や口頭で発表します。

【到達目標】
自身の関心のある研究テーマを高水準かつ学術的な意義の高い研究として実施するため、研究計画にもとづいて研究を実施し、取得したデータの分析と考察を行い、研究成果を論文や口頭で発表するスキルの獲得を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
・授業は演習方式で進めます。受講生による自分の研究の発表とそれにもとづく議論が中心となります。
・必要に応じて、取得したデータの分析手法（統計、生体データ分析）について実習形式で学ぶこともあります。
・授業時間内に質疑応答の時間を設け、疑問や問題について議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究計画の確認	夏季休暇中の進捗確認、春学期に立案した計画の確認
第2回	実験実施の準備（1）	倫理申請書の作成、実験参加者募集方法の検討
第3回	実験実施の準備（2）	刺激、プログラムの作成、測定機器の準備
第4回	実験実施の準備（3）	刺激、プログラムの作成、測定機器の準備を完了
第5回	実験実施の準備（4）	データ分析に用いるプログラム作成
第6回	データ分析（1）	取得したデータの分析、統計量の整理
第7回	データ分析（2）	取得したデータの分析結果を整理、図表作成
第8回	中間報告	研究結果の中間報告、フィードバック
第9回	研究結果の考察	研究結果を先行研究の知見を踏まえて検討
第10回	論文作成（1）	研究結果の方法、結果の執筆方法
第11回	論文作成（2）	研究結果の序論、考察の執筆方法
第12回	論文作成（3）	論文の体裁、論文の投稿先の雑誌種別、査読プロセス
第13回	研究成果の発表（1）	口頭発表の仕方、伝わる発表資料の作成方法
第14回	研究成果の発表（2）	質疑への対応、秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間合計4時間を標準とします。
・授業時間内は、発表にもとづく議論や解説を中心に行うため、論文などの情報収集、実験準備、資料作成などの作業は授業時間外に行います。
・特に、実験に用いるプログラムの作成、データ取得、データの分析などは授業時間外に実施することになるため、授業時間を有意義に活用するためにも事前準備が重要になります。

【テキスト（教科書）】
特に指定しません。

【参考書】
適宜必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
成績は、平常点50%（授業への積極的な関与等）、発表・レポート50%として総合点により評価します。

【学生の意見等からの気づき】
2025年度は未開講でした。

【学生が準備すべき機器他】
・必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。
・脳波室で実験機器を用いた授業を行うことがあります。

【その他の重要事項】
・授業の進め方や授業計画、授業目標の説明をしますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。
・オフィスアワー：春・秋学期ともに木曜日3限（BT1109研究室）。訪問希望者は、メール（k.kimura[at]hosei.ac.jp）等で前日までに連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
生理心理学、認知神経科学、感情科学
＜研究テーマ＞
感情が認知機能や意思決定に作用する認知神経学的機序の研究、内受容感覚と脳ー身体の相互作用機序についての研究
＜主要研究業績＞
Kimura, K, Kanayama, N., &Katahira, K. (2023). Cardiac cycle affects risky decision-making.Biological psychology, 176, 108471
Kimura, K., Sawada, H., &Katayama, J. (2018). Outcome evaluations in group decision-making using authority rule: An electrophysiological study.
Neuropsychologia, 119, 271-279.
Kimura, K., Kimura, M., &Iwaki, S. (2016). Temporal prediction modulates the evaluative processing of “good” action feedback: An electrophysiological study.
Psychophysiology, 53 (10), 1552– 1559.

【Outline (in English)】
(Course outline)
In this class, we will discuss the knowledge and skills necessary for doctoral thesis preparation in seminar form.
(Learning Objectives)
The goals of this course are, based on systematic review of previous work and the understanding of the significance of the research theme, to create own design of experiments and to plan, carry out, and analyze psychophysiological experiments.
(Learning activities outside of classroom)
Before/after each class, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria / Policy)
Final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution (50 %), presentation and reports (50%).

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究Ⅰ

越智　啓太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業概要
主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】
自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	春学期の研究計画について具体化する。
第2回	研究報告と討論(おもに文献検討)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第3回	研究報告と討論（おもに内容）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第4回	研究報告と討論（おもに分析）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第5回	研究報告と討論（おもに論理展開）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究報告と討論（おもに理論）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究報告と討論（おもに全体構成）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第8回	研究報告と討論（おもに論文フォーマット）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第9回	研究報告と討論（まとめ１）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第10回	研究報告と討論（おもに実験計画）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第11回	研究報告と討論（おもに実験の実施法）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第12回	研究報告と討論（おもに実験手続き）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第13回	研究報告と討論（おもに実験実施上の問題点）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第14回	研究報告と討論（まとめ２）おもに	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回、各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。各回のテーマ（おもに～と記載されているもの）をとくに重視してまとめること。
毎回4時間程度の予習と1時間程度の復習が必要である。

【テキスト（教科書）】
使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】
使用しない。

【成績評価の方法と基準】
自分の研究計画に沿って研究を進行できたか（４０%）。
他人の研究について適切なコメントができたか（６０%）。
授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】
学会発表のためのサポートを充実させるとともに統計手法についてのコメントをより詳細なものにします。

【学生が準備すべき機器他】
各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】
毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業をとるものは、この授業の参加をほかのすべての行事よりも優先すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞犯罪心理学
＜研究テーマ＞犯罪捜査への心理学の応用
＜主要研究業績＞「犯罪捜査の心理学」（化学同人）

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class, empirical experimental research on forensic and criminal psychology and presentation training will be conducted.
【Learning Objectives】
You will be able to study psychology yourself. Specifically, the following points.
Research theme selection
Searching and organizing prior literature
Design of experiments
Analysis of experimental results
Creating reports and dissertations
Oral and poster presentation
【Learning activities outside of classroom】
Each lesson requires 4 hours of preparation and 1 hour of review.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Report on research progress(40%) + class contribution (60%)

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 II

越智　啓太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業概要
主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】
自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	秋学期の研究計画について具体化する。
第2回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習１）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第3回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習２）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第4回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習３）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第5回	研究報告と討論（おもにデータ分析についての討論、実習、問題点の修正１）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究報告と討論（おもにデータ分析についての討論、実習、問題点の修正２）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究報告と討論（おもにプレゼンテーションの準備１）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第8回	研究報告と討論（おもにプレゼンテーションの準備２）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第9回	研究報告と討論（おもに研究のプレゼンテーションとその相互評価１）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第10回	研究報告と討論（おもに研究のプレゼンテーションとその相互評価２）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第11回	研究報告と討論（おもに研究プレゼンテーションの修正と実習）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第12回	研究報告と討論（おもに学会発表の準備、実習）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第13回	研究報告と討論（おもに論文執筆の準備）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第14回	研究報告と討論（年間の研究業績の発表と討論）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回、各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。毎回4時間程度の予習と1時間程度の復習が必要である。

【テキスト（教科書）】
使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】
使用しない。

【成績評価の方法と基準】
自分の研究計画に沿って研究を進行できたか（４０%）。
他人の研究について適切なコメントができたか（６０%）。
授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】
論文指導に関しては、論文の読み合わせ、口頭発表のシミュレーションなどを充実させます。

【学生が準備すべき機器他】
各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】
毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業受講者は他のすべての行事よりもこの授業への参加を優先すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞犯罪心理学
＜研究テーマ＞犯罪捜査への心理学の応用
＜主要研究業績＞「犯罪捜査の心理学」（化学同人）

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class, empirical experimental research on forensic and criminal psychology and presentation training will be conducted.
【Learning Objectives】
You will be able to study psychology yourself. Specifically, the following points.
Research theme selection
Searching and organizing prior literature
Design of experiments
Analysis of experimental results
Creating reports and dissertations
Oral and poster presentation
【Learning activities outside of classroom】
Each lesson requires 4 hours of preparation and 1 hour of review.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
Report on research progress(40%) + class contribution (60%)

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 I

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
高水準の研究を行うためのプロセスとして，自分が研究したい分野の研究史を作成し，研究計画を立案する。

【到達目標】
自分が関心のある研究テーマについて先行研究を調査し，研究史をまとめ，未解決の問題を追究するための研究計画を立てることを春学期の目標とする。関連する学術論文等を多読かつ精読し，先行研究を批判的に整理し，博士論文の構成を意識した体系的なレビューの作成を目指す。また，先行研究では未検討の独自のリサーチクエスチョンを設定し，詳細な研究計画を立案することを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
心理学に関わる問題を自ら設定し，研究を実施し，論文やプレゼンとしてまとめ上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで，研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。春学期は，研究テーマに関する先行研究の知識を深めるための研究史（レビュー）を執筆したり，独自の研究の内容を記述した研究計画書を作成したりする。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式のため，学生による活動報告やディスカッションが中心となる。授業および学習支援システムを通して，課題や発表に対するフィードバックを個別または全員に向けて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	シラバスの説明，達成目標の設定
第2回	研究テーマの設定（1）	キーワードの選定，先行研究の検索・講読
第3回	研究テーマの設定（2）	キーワードの選定，先行研究の検索・講読
第4回	文献の検索・講読（1）	先行研究の検索・講読，研究史の作成
第5回	文献の検索・講読（2）	先行研究の検索・講読，研究史の作成
第6回	研究史としての文献の発表	研究史の発表
第7回	研究史の見直し	他者からのフィードバックの検討
第8回	修正研究史発表	修正版の研究史の発表
第9回	問題の設定	問題意識と研究目的の設定
第10回	変数の整理，仮説の設定	従属変数・独立変数の整理，目的に沿った研究仮説の設定
第11回	研究計画の立案	研究の目的・方法・予想される結果の検討，研究計画書の書き方，倫理審査のための準備
第12回	研究計画書の発表	研究計画の発表
第13回	研究計画書の見直し	他者からのフィードバックの検討
第14回	修正研究計画書発表，総括	修正版の研究計画書の発表，春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究の流れに沿って，ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し，次の回までに研究を進展させる。進捗状況を授業にて報告するための資料を準備する。本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキストは特にない。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】
南風原 朝和・市川 伸一・下山晴彦（編）(2001)．心理学研究法入門　―調査・実験から実践まで―　東京大学出版会.
高野 陽太郎・岡 隆（編）(2004)．心理学研究法　―心を見つめる科学のまなざし―　有斐閣アルマ.
松井 豊（2006）．心理学論文の書き方―卒業論文や修士論文を書くために―　河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】
平常点25%，進捗状況報告25%，発表（研究史・研究計画書）50%の割合で評価する。原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または無断で発表を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
博士後期課程科目につき授業改善アンケートを実施せず。

【その他の重要事項】
授業計画や運営方針の説明などをしますので，受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳 (2017). 『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010). 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
To help students develop a high-quality research program in psychology, students in this course will conduct a thorough survey of the research literature and construct a research agenda in their field of interest.
[Learning objectives]
The goal of the spring semester is for students to survey previous research on a topic of the their own interest, summarize the research history, and formulate a research plan aimed at addressing unresolved issues in the field. In addition, students are expected to read a wide range of relevant academic papers closely, critically organize prior research, and produce a thorough review with the structure of the doctoral dissertation in mind. Furthremore, students are expected to formulate original research questions and to develop a detailed research plan.
[Learning activities outside of classroom]
Students will set appropriate goals and strive to achieve those goals by the next class meeting. Presentation materials should be prepared as needed. The standard amount of time for preparation and review of this course is two hours each.
[Grading criteria/policy]
Your overall grade will be determined based on the following: in-class contribution 25%, progress report 25%, presentation 50%. As a rule, if you are absent for more than 4 classes without a legitimate reason or fail to present in class, course credit will not be granted.

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 II

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
高水準の研究を行うためのプロセスとして，自分で設定した研究計画に沿った研究の実施と，研究成果の発表および研究論文の執筆を行う。

【到達目標】
春学期に立てた研究計画に従って研究を実施し，学会発表や論文投稿を視野に入れた発表・論文を準備することを秋学期の目標とする。収集したデータに対して高水準の図表による要約および統計解析を自身で行えることが求められる。また，博士論文の構成を見据えた新規性および学術的有効性の高い論文を執筆すること，聴衆に合わせて研究成果を効果的に口頭発表することを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
心理学に関わる問題を自ら設定し，研究を実施し，論文としてまとめ上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで，研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。秋学期は，研究計画に沿って研究を実施し，必要なデータを収集・分析・解釈した上で，研究論文の執筆や効果的なプレゼンといった形で成果をまとめることを目指す。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式なので，学生による活動報告やディスカッション，教員によるフィードバックが主体となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	研究計画の確認，進捗状況報告
第2回	研究の実施（1）	研究の実施，経過報告
第3回	研究の実施（2）	研究の実施，経過報告
第4回	研究の実施（3）	研究の実施，経過報告
第5回	データの整理・分析（1）	データの入力・整理
第6回	データの整理・分析（2）	データの入力・整理
第7回	記述統計量の計算	記述統計量の算出，効果的な図表の作り方
第8回	中間報告	研究結果に関する中間報告・討論
第9回	推測統計の適用	適切な検定の適用，検定結果の解釈
第10回	論文の執筆（1）	研究論文の書き方，「方法」「結果」の書き方
第11回	論文の執筆（2）	「導入」「考察」の書き方
第12回	論文の執筆（3）	タイトルのつけ方，参考文献の書き方，原稿の推敲
第13回	口頭発表の仕方（1）	口頭発表の心得，効果的な発表資料の作り方
第14回	口頭発表の仕方（2），総括	論文提出，最終成果発表の準備，質疑への準備，秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究の流れに沿って，ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し，次の回までに研究を進展させる。進捗状況を授業で報告するための資料を準備する。本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
テキストは特にない。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】
南風原 朝和・市川 伸一・下山晴彦（編）(2001)．心理学研究法入門　―調査・実験から実践まで―　東京大学出版会.
高野 陽太郎・岡 隆（編）(2004)．心理学研究法　―心を見つめる科学のまなざし―　有斐閣アルマ.
松井 豊（2006）．心理学論文の書き方―卒業論文や修士論文を書くために―　河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】
平常点25%，進捗状況報告25%，発表50%の割合で評価する。原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または無断で発表を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
博士後期課程科目につき授業改善アンケートを実施せず。

【その他の重要事項】
授業計画や運営方針の説明などをしますので，受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳 (2017). 『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010). 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
To help students maintain a high-quality research program in psychology, students will carry out research based on their research agenda, and summarize the results into a coherent presentation and research paper.
[Learning objectives]
In the fall semester, students will conduct research based on the research plan developed in the spring semester, and present the results in the form of a paper and a presentation. Students are expected to independently produce high-quality summaries and visualizations of the collected data and to conduct appropriate statistical analyses. In addition, they are expected to write a paper with a high degree of originality and academic significance, taking into account the structure of the doctoral dissertation, and to present their research effectively in oral presentations tailored to the audience.
[Learning activities outside of classroom]
Students will set appropriate goals and strive to achieve those goals by the next class meeting. Presentation materials should be prepared as needed. The standard amount of time for preparation and review of this course is two hours each.
[Grading criteria/policy]
Your overall grade will be determined based on the following: in-class contribution 25%, progress report 25%, presentation 50%. As a rule, if you are absent for more than 4 classes without a legitimate reason or fail to present in class, course credit will not be granted.

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 I

竹島　康博

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
知覚心理学および認知心理学領域での研究テーマを自身の興味に基づいて決定し，必要な研究方法を学びます。先行研究の精読を通して当該分野の研究についての知識を深め，自身の研究計画の立案のトレーニングを行います。立案した計画で実験データを取得し，分析・報告を行うことで研究活動に必要な要素を学ぶことが本講義の目的です。

【到達目標】
先行研究のレビュー，実験計画の立案，データの取得と分析，そして分析結果の解釈を通じて必要なスキルを取得し，受講者自身の研究テーマに関する研究を行うことができる。加えて，受講者自身の研究課題を解決するための一連の研究計画を立案することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業は演習形式で行い，前半は書籍の指定した節の内容について受講者が発表，教員および受講者同士で議論を行います。後半は，当該書籍で未輪読の節について，受講者が興味を持った説の内容を発表，全員で議論を行います。
毎週の課題の提出およびフィードバックは，授業中ないしDiscordを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方の説明 興味のあるテーマについて発表
第2回	先行研究の精査(1)	自身の研究テーマの関連論文を読んで報告
第3回	先行研究の精査(2)	自身の研究テーマの関連論文を読んで報告
第4回	先行研究の精査(3)	研究テーマに関連した研究手法を学ぶ
第5回	先行研究の精査(4)	研究テーマに関連した研究手法を学ぶ
第6回	研究計画の立案(1)	先行研究を基に研究計画を考える
第7回	研究計画の立案(2)	実験計画や解析方法について検討する
第8回	研究計画の立案(3)	実験として取得するべきデータを検討する
第9回	実験の準備（1）	研究倫理申請書や募集チラシなど実験に必要なものを作成する
第10回	実験の準備(2)	実験に必要な実験プログラム等を作成する
第11回	実験の準備(3)	実験に必要な実験プログラム等を作成する
第12回	実験の報告(1)	実験データに対して計画していた解析を実施した結果を報告
第13回	実験の報告(2)	実験データに対して探索的に行った実験結果について報告
第14回	まとめと今後の展望	実験結果の報告に対する議論をもとに，次の実験の方針を確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献の読み込みや発表資料の作成といった授業準備は，事前に授業時間外に行います。また，各回の内容は目安ですので，学生の研究の進捗にあわせて進めていきます。授業内で指示された活動を復習として行ってください。授業の準備・復習の時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
必要に応じて教員が研究テーマに関連した文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】
授業への参加態度を含めた平常点40%と，研究遂行の進捗度の評価60%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は未開講でした。

【学生が準備すべき機器他】
必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。

【その他の重要事項】
重複履修が可能です。
授業内容は通年で2つの実験を行う計画にしていますが，研究内容に応じて実験の数は変えてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
知覚心理学，認知心理学
＜研究テーマ＞
異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究，視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究
＜主要研究業績＞
竹島 康博 (2024).　視聴覚刺激の提示タイミングに対する同時性知覚の柔軟性　VISION, 36(4), 150-155.
Takeshima, Y. (2024).　The influence of spatial frequency information on temporal synchrony perception on audiovisual stimuli. Perception, 53(11-12), 803-811.
Takeshima, Y. (2023). Change of rapid temporal recalibratgion magnitude for audiovisual asynchrony with modulation of temporal binding window width: A preliminaryh investigation. i-Perception, 14(4), 1-10.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course enables students to determine a research topic in the fields of perceptual psychology and cognitive psychology based on their own interests and to learn the necessary research methods.　Through close reading of prior research, students will deepen their knowledge of research in these fields and develop skills in designing their own research plans. By collecting experimental data based on their proposed plans and conducting analysis and reporting, students will learn the essential components required for research activities.
[Learning activities]
The goals for students are to acquire the necessary skills through reviewing prior research, designing experimental plans, collecting and analyzing data, and interpreting the results, enabling them to conduct research on their own research topics.　In addition, students will be able to design a series of research plans to address their own research questions.
[Learning activities outside of classroom]
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting.
[Grading Criteria /Policy]
Grading will be decided based on class contribution (40%) and assessing the research progress (60%).

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 II

竹島　康博

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
知覚心理学および認知心理学領域での研究テーマを自身の興味に基づいて決定し，必要な研究方法を学びます。春学期に実施した実験の結果から，研究課題の遂行のために必要な追加実験について計画・実施し，研究論文という形でアウトプットするための技能を学ぶ。

【到達目標】
受講者の研究課題の解決のために，先行して実施した実験の結果を受けてどのような追加実験を行うべきかを検討し，適切な実験計画の立案，データ収集と解析，結果の解釈を行うことができる。加えて，学術誌への掲載という形で研究成果をアウトプットすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
受講者が計画した実証的研究を実施する工程を，本授業を通して支援します。受講者が進捗について報告をし，教員および受講者同士で議論しながら，次回までの課題を確認していきます。
毎週の課題の提出およびフィードバックは，授業中ないしDiscordを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	春学期の研究成果の振り返り	春学期に立案した研究計画や実施した実験の結果について確認する
第2回	追加実験実施の準備(1)	研究倫理申請書や募集チラシ等を作成する
第3回	追加実験実施の準備(2)	実験プログラム等を作成する
第4回	追加実験実施の準備(3)	実験プログラムの動作を確認して実験の準備を完了する
第5回	データ分析の準備(1)	解析コードを事前に作成する
第6回	データ分析の準備(2)	動作確認した際の自身のデータを使って，解析コードの挙動を確認する
第7回	データ分析(1)	収集したデータについてメインの解析を行う
第8回	データ分析(2)	収集したデータを確認した上で，副次的な解析を行う
第9回	追加実験結果の解釈(1)	追加実験の結果を確認し，関連する文献を検索しながら解釈する
第10回	追加実験結果の解釈(2)	追加実験の結果を確認し，関連する文献を検索しながら解釈する
第11回	論文の執筆	一連の実験結果のまとめ方の方針を確認する
第12回	研究成果のまとめ(1)	得られた研究の成果から次の研究に繋がる点を議論しつつ確認
第13回	研究成果のまとめ(2)	得られた研究の成果から次の研究に繋がる点を議論しつつ確認
第14回	論文の推敲	まとめの議論内容を踏まえて論文の内容を推敲する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究テーマの設定や文献収集および読み込み，実験プログラムの作成など研究実施に向けての各工程は，基本的に授業時間外に進めます。授業時間内では，これらの作業を進める上で検討が必要なポイントについての議論し，方向性を決めることを中心に活動します。授業内で指示された活動を復習として行ってください。授業の準備・復習の時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
必要に応じて教員が研究テーマに関連した文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】
授業への参加態度を含めた平常点40%と，研究遂行の進捗度の評価60%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度は未開講でした。

【学生が準備すべき機器他】
必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。

【その他の重要事項】
重複履修が可能です。
授業内容は通年で2つの実験を行う計画にしていますが，研究内容に応じて実験の数は変えてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
知覚心理学，認知心理学
＜研究テーマ＞
異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究，視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究
＜主要研究業績＞
竹島 康博 (2024).　視聴覚刺激の提示タイミングに対する同時性知覚の柔軟性　VISION, 36(4), 150-155.
Takeshima, Y. (2024).　The influence of spatial frequency information on temporal synchrony perception on audiovisual stimuli. Perception, 53(11-12), 803-811.
Takeshima, Y. (2023). Change of rapid temporal recalibratgion magnitude for audiovisual asynchrony with modulation of temporal binding window width: A preliminaryh investigation. i-Perception, 14(4), 1-10.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course enables students to determine a research topic in the fields of perceptual psychology and cognitive psychology based on their own interests and to learn the necessary research methods.　Based on the results of experiments conducted in the spring semester, students will plan and conduct additional experiments required to carry out their research projects and will acquire the skills necessary to produce their work in the form of a research thesis.
[Learning objectives]
The goals for students are to be able to determine what additional experiments should be conducted based on the results of previously conducted experiments in order to address their research questions, and to carry out appropriate experimental planning, data collection and analysis, and interpretation of results. In addition, students will be able to disseminate their research outcomes in the form of publication in an academic journal.
[Learning activities outside of classroom]
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting.
[Grading Criteria /Policy]
Grading will be decided based on class contribution (40%) and assessing the research progress (60%).

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究Ⅰ

荒井　弘和

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
博士後期課程の大学院生が、主体的に研究を行い、論文を作成して投稿し、その論文が受理されるまでの一連の過程を実践できるようになることを目的とします。

【到達目標】
(1) 研究テーマに関連する先行研究のシステマティックレビューを行うことができる。
(2) 研究計画申請書を作成することができる。
(3) 研究を実施してデータを収集することができる。
(4) 論文を作成して、投稿することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎回の授業では、各受講生の研究に関する発表と、それに対する意見交換を行います。受講生が将来、自立した研究者として活動することができるよう、主体的な活動を求めます。
課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストなどを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	各自の目標設定	この授業の受講を終えたとき、どのような成果を得ていたいか明確にする。
第2回	先行研究のシステマティックレビュー（1）	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第3回	先行研究のシステマティックレビュー（2）	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第4回	先行研究のシステマティックレビュー（3）	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第5回	先行研究のシステマティックレビュー（4）	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第6回	研究計画申請書の作成（1）	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第7回	研究計画申請書の作成（2）	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第8回	研究の実施状況の報告（1）	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第9回	研究の実施状況の報告（2）	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第10回	研究の実施状況の報告（3）	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第11回	研究の実施状況の報告（4）	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第12回	研究の実施状況の報告（5）	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第13回	投稿論文の作成	投稿論文を作成して発表し、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第14回	目標の振り返り	授業開始時の目標を振り返り、今後の自らの研究活動を展望する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回、(1) 授業中に提示された課題、(2) 発表資料の作成に取り組みます。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】
必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
(1) 発表の内容が60%、(2) 意見交換への参加状況が40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の要望に添って、受講生の研究業績に直接的につながるような授業を行えるよう工夫します。

【その他の重要事項】
今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
スポーツ心理学
＜研究テーマ＞
アスリート・コーチのメンタルサポート
＜主要研究業績＞
荒井弘和 (編著) (2020). アスリートのメンタルは強いのか？ ―スポーツ心理学の最先端から考える― 晶文社
Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. European Journal of Physical Education and Sport Science, 3(7), 38-50.
Arai, H., Suzuki, F., &Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. Journal of Physical Education Research, 3(4), 12-24.
Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. Journal of Physical Education and Sport, 15, 64-69.

【Outline (in English)】
（Course outline）
The purpose of this course is to enable doctoral students to independently conduct research, prepare and submit a paper, and practice the series of processes until the paper is accepted.
（Learning Objectives）
(1) To be able to conduct a systematic review of previous studies related to the research topic.
(2) To be able to prepare a research plan application.
(3) To be able to conduct research and collect data.
(4) To be able to prepare and submit a paper.
（Learning activities outside of classroom）
In each class, students will work on (1) assignments presented during the class, and (2) preparation of presentation materials.

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
（Grading Criteria /Policy）
(1) 60% of the grade will be based on the content of the reports and presentations you make, and (2) 40% of the grade will be based on your participation in opinion exchange and group work. If you are absent or late, your evaluation will be lowered.

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 II

荒井　弘和

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
博士後期課程の大学院生が、主体的に研究を行い、論文を作成して投稿し、その論文が受理されるまでの一連の過程を実践できるようになることを目的とします。

【到達目標】
(1) 論文を作成して、投稿することができる。
(2) 査読に対して回答し、論文を受理してもらうことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
毎回の授業では、各受講生の研究に関する発表と、それに対する意見交換を行います。受講生が将来、自立した研究者として活動することができるよう、主体的な活動を求めます。
課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストなどを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	各自の目標設定	この授業の受講を終えたとき、どのような成果を得ていたいか明確にする。
第2回	投稿論文の作成（1）	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第3回	投稿論文の作成（2）	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第4回	投稿論文の作成（3）	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第5回	投稿論文の作成（4）	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第6回	投稿論文の作成（5）	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第7回	投稿論文の作成（6）	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第8回	査読に対する回答（1）	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第9回	査読に対する回答（2）	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第10回	査読に対する回答（3）	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第11回	査読に対する回答（4）	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第12回	査読に対する回答（5）	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第13回	査読に対する回答（6）	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第14回	目標の振り返り	授業開始時の目標を振り返り、今後の自らの研究活動を展望する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回、(1) 授業中に提示された課題、(2) 発表資料の作成に取り組みます。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】
必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
(1) 発表の内容が60%、(2) 意見交換の参加状況が40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の要望に添って、受講生の研究業績に直接的につながるような授業を行えるよう工夫します。

【その他の重要事項】
今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
スポーツ心理学
＜研究テーマ＞
アスリート・コーチのメンタルサポート
＜主要研究業績＞
荒井弘和 (編著) (2020). アスリートのメンタルは強いのか？ ―スポーツ心理学の最先端から考える― 晶文社
Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. European Journal of Physical Education and Sport Science, 3(7), 38-50.
Arai, H., Suzuki, F., &Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. Journal of Physical Education Research, 3(4), 12-24.
Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. Journal of Physical Education and Sport, 15, 64-69.

【Outline (in English)】
（Course outline）
The purpose of this course is to enable doctoral students to independently conduct research, prepare and submit a paper, and practice the series of processes until the paper is accepted.
（Learning Objectives）
(1) To be able to prepare and submit a paper.
(2) To be able to respond to peer review and have the paper accepted.
（Learning activities outside of classroom）
In each class, students will work on (1) assignments presented during the class, and (2) preparation of presentation materials. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
（Grading Criteria /Policy）

(1) 60% of the grade will be based on the content of the reports and presentations you make, and (2) 40% of the grade will be based on your participation in opinion exchange and group work. If you are absent or late, your evaluation will be lowered.

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究Ⅰ

渡辺　弥生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人間の発達の多様性や可変性を理論的・実証的観点から批判的に理解し、心理学研究の動向を踏まえて独創的な研究課題を設定する力を身につける。その上で、独自の研究方法を構想・実施し、データの収集・高度な分析・解釈を通して学術的に意義ある知見を創出できる研究遂行力を養う。
さらに、学会発表、査読付き論文の投稿、研究費申請などを主体的に行う研究者としての能力を涵養する。

【到達目標】
人間の発達の多様性や可変性などマクロな視点から理解する。つぎに、心理学研究が着目してきた研究の流れを把握した上で、どういった研究テーマがあるかを理解する。そのうえで、自分の研究テーマを決定し、独自の研究方法を考案し、データの取りかたや、予測できる分析のしかたを学ぶとともに、分析した結果の考察の重要性を理解する。前期のなかで研究者としての研究行動として、学会発表、査読つき論文への投稿の方法と行動、研究費の獲得などについても理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式とする。各自が積極的に研究を報告しディスカッションする。前期は、特に自分の研究テーマが発達心理学研究のどのような立ち位置にあり、どういった研究の貢献が可能であるか俯瞰できるようにする。毎回、レジュメとパワーポイントで説明できるようにする。課題のフィードバックは、学習支援システムなどで行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	春学期の本授業の目標た具体的な予定について理解する。
第2回	発達心理学および発達臨床心理学、学校心理学などの体系について理解する。	ハンドブックなどをもとに、研究をマクロな視点から理解する。
第3回	マクロな視点から自分の興味あるテーマを考える。	自分の興味が、これまでの研究の流れのなかでどのような位置にあるかを理解する。
第4回	自分の興味あるテーマに関する文献のリストアップ	キーワードを駆使して、自分の興味ある研究テーマの論文をリストアップし、可能な論文は入手する。
第5回	研究テーマに関する興味ある論文を発表する（1）。	自分の興味のある論文を発表し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究テーマに関する興味ある論文を発表する（2）。	自分の興味のある論文を発表し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究テーマに伴うさまざまな意見をまとめる（1）。	同じテーマでも対立する考えを見出し、まとめてみる。
第8回	研究テーマに伴うさまざまな意見をまとめる（2）。	同じテーマでも対立する考えを見出し、まとめてみる。
第9回	貢献できるフィールドを考えて見学する。	自分の研究テーマがによって将来貢献できるフィールドを考える。発表する。
第10回	貢献できるフィールドを考えて見学する。	自分の研究テーマがによって将来貢献できるフィールドを考えて、訪問する。できれば発表する。
第11回	大枠でリサーチクエスチョンを考え、研究計画を練る（1）。	各自の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第12回	大枠でリサーチクエスチョンを考え、研究計画を練る（2）。	各自進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第13回	研究構想を発表と討論（1）	研究構想を発表し合い、ディスカッションする。
第14回	緩急構想の発表と討論（2）	継続して、研究構想を発表し、ディスカッションする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
レヴューとなる研究論文や書籍を読破するとともに、常に最新の研究論文をチェックし、問題と目的を明確にし、研究計画をたて実施し、分析し、考察することをデフォルトにできるようにする。また、長期的な展望のなか学会発表や論文の投稿を計画し毎回自主的に実施していく。

【テキスト（教科書）】
使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】
使用しない。ただし、4月までに良書が紹介できたら、授業の開始時に伝える。

【成績評価の方法と基準】
毎回の研究活動を基にしたリサーチレポートの提出（100%）。

【学生の意見等からの気づき】
授業では全体指導であるが、それに関連する個別のサポートを明確にし、互いに連動できるようにする。

【学生が準備すべき機器他】
つねに、何が必要かどうすれば研究が進むかをメタ認知し、必要な機器を準備する。

【その他の重要事項】
この授業の参加を優先すること。自分からやりたいことを提案できるようにモチベーションを高くもてるようレジリエントになること。新型コロナウイルス感染状況によってオンラインに変更する可能性あり。

【担当教員の専門分野等】
https://sites.google.com/site/emywata/Home ＜専門領域＞発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
＜研究テーマ＞社会性、道徳性、感情のメカニズムの解明と社会や学校での危機問題の予防
Homepage参考

【関連論文１】
児童の感情リテラシーは教育しうるか―発達のアウトラインと支援のありかたー　エモーション・スタディーズ
第2巻 第1号 pp. 16―24 2016年

【関連論文２】
健全な学校風土をめざすユニヴァーサルな学校予防教育―免疫力を高めるソーシャル・スキル・トレーニングとソー
　シャル・エモーショナル・ラーニング　教育心理学年報 Vol.54,126-141. 2015年8月25日

【関連論文３】
「学校予防教育に必要な『道徳性・向社会的行動』の育成」発達心理学研究 2014年12月20日第25巻 ,第4号,422-431.

【関連論文４】
School psychology research and practice in East Asia: Perspectives on the past,present,and future directions

of the field. School Psychology International,1-26. dii: 10.1177/014034316671354.
(with Brown,J.A.,Lee,D.H.,&McIntosh ,K.)

【Outline (in English)】
< Course outline > The aim of this course is to understand the diversity and variability of human development from the viewpoint of psychological research.
< Learning Objectives > The purposes of this course are to study the mechanisms of human development, and to learn about research methods that can contribute to educational and clinical research deeply related to developmental psychology.
< Learning activities outside of classroom > Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.
< Grading Criteria > Students will be required to submit a report (100%) based on the assumption that they will complete the assignments in each class.

PSY700B6（心理学 / Psychology 700）

心理学特殊研究 II

渡辺　弥生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人間の発達の多様性や可変性を、心理学研究の理論的・実証的視点から多角的かつ批判的に捉え、その基盤にある発達メカニズムについて体系的に理解する。その上で、発達心理学に深く関連する教育的・臨床的課題を自らの研究問題として再構成し、既存研究の知見や限界を踏まえた独創的な研究課題を設定する力を養う。さらに、質的・量的手法を含む高度な研究方法を自立的に構想・実施し、得られたデータを理論的枠組みと往還させながら精緻に分析・解釈することを通して、教育および臨床実践に学術的根拠をもって貢献できる研究遂行力の獲得を目標とする。

【到達目標】
心理学特殊研究Ⅰで形成した研究課題と方法論を基盤として、具体的かつ実現可能な研究目標を設定し、研究成果を学会等で発表するとともに、査読付き論文として執筆・公表することを目標とする。あわせて、研究分野ごとに求められる論文の構成や執筆要項、評価基準の違いを理解し、研究の独自性と学術的意義を的確に示すための高度な発表能力および論文執筆能力を体系的に身につける。
（1）明確な研究目標のもとで研究を計画・遂行し、学会等で発表するとともに研究論文としてまとめる能力を有する。
（2）研究分野ごとに求められる研究論文の多様性、執筆要項、投稿規定、研究評価の観点を理解し、それらに即した研究成果の発信ができる能力を有する。
研究の独自性や学術的意義を的確に示し、専門的内容を論理的かつ説得的に伝える発表スキルおよび論文執筆スキルを有する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式とする。各自が積極的に研究を報告しディスカッションする。後期は自分の研究テーマが発達心理学研究のどのような立ち位置にあり、どういった研究の貢献が可能であるかを明確にし、毎回アウトプットできるようにする。課題のフィードバックは、学習支援システムで行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	秋学期の本授業の目標と具体的な予定について理解する。
第2回	学術研究論文の特徴と執筆要項を学ぶ	関連する学術雑誌の特徴と執筆要項について理解し、発表する。
第3回	注目している和文の文献をレポートする（1）。	各自注目している和文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第4回	注目している和文の文献をレポートする（2）。	各自注目している和文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第5回	注目している英文の文献をレポートする（1）。	各自注目している英文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第6回	注目している英文の文献をレポートする（2）。	各自注目している英文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第7回	研究を発表する（学会発表スキル）（1）	学会発表をするための具体的な行動を学ぶ。
第8回	研究を発表する（学会発表スキル）（2）	学会発表をするための具体的な行動を学ぶ。
第9回	研究論文を執筆する（1）。	自分の研究したいことをまとめられるようにスキルを考える。
第10回	研究論文を執筆する（2）。	自分の研究したいことをまとめられるようにスキルをアップする方法を考える。
第11回	研究論文を執筆する（3）。	先行研究の技術を発見する。
第12回	研究論文を執筆する（4）。	実際に執筆してみる。
第13回	互いに査読しあう（1）。	どのようなことが研究するに必要かを体感できるようにする。
第14回	互いに査読しあう（2）。	さらにチャレンジできるように総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
レヴューとなる研究論文や書籍を読破するとともに、常に最新の研究論文をチェックし、問題と目的を明確にし、研究計画をたて実施し、分析し、考察することをデフォルトにできるようにする。また、長期的な展望のなか学会発表や論文の投稿を計画し毎回自主的に実施していく。

【テキスト（教科書）】
使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】
使用しない。

【成績評価の方法と基準】
毎回の活動目的を遂行した上でのリサーチレポートの提出（100％）。

【学生の意見等からの気づき】
授業では全体指導であるが、それに関連する個別のサポートを明確にし、互いに連動できるようにする。

【学生が準備すべき機器他】
つねに、何が必要かどうすれば研究が進むかをメタ認知し、必要な機器を準備する。

【その他の重要事項】
この授業の参加を優先すること。自分からやりたいことを提案できるようにモチベーションを高くもてるようレジリエントになること。英語論文の書き方、また海外の学会参加及び発表の仕方も伝える。新型コロナウイルス感染状況によって、オンラインに変更する可能性あり。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
＜研究テーマ＞社会性、道徳性、感情のメカニズムの解明と社会や学校での危機問題の予防、ソーシャルエモーショナルラーニング
Homepage参考
https://sites.google.com/site/emywata/

【関連論文１】
児童の感情リテラシーは教育しうるか―発達のアウトラインと支援のありかたー　エモーション・スタディーズ
第2巻 第1号 pp. 16―24 2016年

【関連論文２】
健全な学校風土をめざすユニヴァーサルな学校予防教育―免疫力を高めるソーシャル・スキル・トレーニングとソー
　シャル・エモーショナル・ラーニング　教育心理学年報 Vol.54,126-141. 2015年8月25日

【関連論文３】
「学校予防教育に必要な『道徳性・向社会的行動』の育成」発達心理学研究 2014年12月20日第25巻 ,第4号,422-431.

【関連論文４】
School psychology research and practice in East Asia: Perspectives on the past,present,and future directions of the field. School Psychology International,1-26. DOI: 10.1177/014034316671354.
(with Brown,J.A.,Lee,D.H.,&McIntosh ,K.)

【Outline (in English)】
【Course Outline】This course examines human developmental diversity and plasticity from psychological perspectives and develops advanced research skills relevant to education and clinical practice.
【Learning Objectives】Students will be able to understand developmental mechanisms, formulate original research questions, and conduct independent research in developmental psychology.
【Learning Activities Outside of the Classroom】Students engage in independent reading, research design, data collection, analysis, and preparation of academic outputs.
【Grading Criteria / Policy】Grades are based on participation, research progress, and the quality of written and oral research outputs.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

大学教員心理学基礎講座

藤田　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
博士後期課程の院生が，将来大学教員になったときに知っておくべき知識や，身につけておくべきスキルを獲得することが授業の目的である。具体的には，授業担当以外に行うべき「大学教員の職務」について理解すること，関連して現在の大学および大学教員が求められていることを示した「大学設置基準」の読み解き方や，大学教育の在り方に大きく影響を及ぼす「中央教育審議会の答申等」の概要把握を踏まえた適切な「シラバス」の書き方，公募において自分自身の研究・教育上の展望・特長を魅力的に伝えるための「自己PR」「模擬授業」を修得することなどを含む。大学教員になった後に行うFD（ファカルティ・ディベロップメント）の大学院生版であり，大学教員となった際に不適応に陥らないための職能開発を行う。

【到達目標】
半期の授業が終了した時点で，以下の各要素を身につけていることが，授業の具体的な到達目標となる。
a.現在の大学および大学教員が職務を遂行する上で知っておくべき諸概念を自分の研究・教育活動の中で説明できる。
b.半期の授業計画を適切に立てることができる。
c.高い教育効果を見込める方法を取り入れた授業を行うことができる。
d.目標に対する到達度について，受講生相互に的確な評価を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
基本的な授業の進め方は，各回のテーマについて事前に予習をし，自分で理解したことをふまえて授業内で出される課題に取り組み，発表や討論を行うというものである。すなわち，受動的に知識を獲得するのではなく，自主的な理解と他者への説明活動を通じたアクティブ・ラーニングが授業の中核をなす。
具体的に取り組む課題としては，複数種類の「シラバスの作成」，公募での自己PRを想定した「大学教員としての抱負の文章化」および「履歴書・研究業績表の作成」の，また，人事選考面接を想定した「15分間の模擬授業の実施」を予定している。授業ではそれぞれの発表に対して，全員で評価者の視点からの討論を行い，改善への方向性を明確にする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要および各課題の説明
第2回	大学教員の基礎知識1	大学設置基準～FD，三つのポリシー，自己点検・評価活動，キャリア教育
第3回	大学教員の基礎知識2	中教審の答申～学士課程教育，初年次教育，アクティブ・ラーニング
第4回	シラバス作成1	内容に関する留意点，書式・表現上の留意点
第5回	シラバス作成2	「心理学概論」シラバス相互チェック
第6回	シラバス作成3	「専門の講義」シラバス相互チェック
第7回	公募書類作成1	「履歴書・業績表」作成上の留意点，「自己PR・就職後の抱負」ですべきこと
第8回	公募書類作成2	公募書類相互評価
第9回	公募書類作成3	修正版公募書類相互評価
第10回	模擬授業1	模擬授業に反映させるべきこと，技術的な留意点
第11回	模擬授業2	模擬授業実施と相互評価1
第12回	模擬授業3	模擬授業実施と相互評価2
第13回	模擬授業4	模擬授業実施と相互評価3
第14回	総括	授業の振り返りと各自の今後の課題の明確化

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備時間は3時間，復習時間は1時間を標準とする。各回の内容は関連があるので，以前の授業内容を復習した上で授業に参加すること。準備学習についての詳細は下記の通り。
心理学概論および，各自の専門領域の講義科目を想定した「シラバス」を作成すること，他の受講生の作成したシラバスに対して改善点等を指摘すること。
公募での自己PRを想定した「大学教員としての抱負」を文章化し，「履歴書・研究業績表」を作成すること，それらの書類について，他の受講生に対して改善のアドバイスを行うこと。
人事選考面接を想定した「15分間の模擬授業」の準備をすること。

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】
藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　　北大路書房
そのほか，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点40％…授業へ出席し，討論に参加していること自体を評価対象とする。
専門の講義のシラバス20％…「授業の概要と目的」「到達目標」「授業の進め方と方法」「授業計画と授業時間外学習」「成績評価の方法と基準」の記載内容を評価対象とする。
公募書類15％…「自己PRおよび着任後の抱負」の体裁と記載内容を評価対象とする。
模擬授業25％…「授業の概要と目的及び本時の到達目標」「授業の進め方と方法」「授業内容の明示」「授業内容の水準の適切さ」「時間配分」を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート未実施科目

【その他の重要事項】
授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず事前に相談すること。
この授業は，複数年度にわたって重複履修することが可能である。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
認知心理学，教育心理学
＜研究テーマ＞
単なる経験則に終わらない，研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。
＜主要研究業績＞
藤田哲也（編）（2006）．大学基礎講座　改増版－充実した大学生活をおくるために－　北大路書房
藤田哲也（2006）．心理学を活かした教育実践のために　井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法ver.2　認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために　8章　北大路書房，pp.135-155.
藤田哲也（2010）．記憶過程と学習　三宮真智子（編）教育心理学　2章　学文社，pp.22-37

【Outline (in English)】
[Course outline]

In this class, graduate students of Doctoral Course acquire knowledge to know and skill to be acquired when becoming a university faculty member. The content of this lesson is a graduate edition of FD (Faculty Development).
[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the following:
a.Students can explain in their research and educational activities the concepts that current universities and faculty members should know in performing their duties.
b.Students can properly plan their half-year class.
c.Students can give class that incorporate methods that can be expected to have a high educational effect.
d.Students can accurately evaluate each other's achievement of goals.
[Learning activities outside of classroom]
The standard preparation time for this class is 3 hours, and the standard review time is 1 hour.
[Grading Criteria /Policy]
The overall grade of the class is determined based on the following.
In-class contribution 40%, Syllabus of the course of the student's own research specialty 20%, application documents for open call for participants 15%, simulated lesson 25%.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

心理学英語論文作成指導

田嶋　圭一

備考（履修条件等）：9/7（月）1-4限、
9/8（火）1-4限を予定
それ以降のコマは、秋学期に2- 3週間に1回の頻度で開講。
開講日・曜日・時限は受講生と相談のうえ決定

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
心理学分野で高水準の英語論文を自分で執筆するための知識やスキルを学ぶ。

【到達目標】
1. 論文の構想から投稿・査読・採択までの具体的な流れを把握する。
2. 日本語論文との比較を通して英語論文の特徴をつかむ。
3. 英語学術雑誌に投稿可能な高水準の論文を執筆するためのノウハウを習得する。
4. 論文にふさわしい英語表現のレパートリーを可能な限り蓄積する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
英語論文執筆に関する解説→表現演習→解答レビュー＆フィードバックというサイクルを繰り返しながら授業を進める。表現演習の前半では教員が準備した教材や既存の論文等を題材とするが，後半では受講者自身が取り組んでいる論文等を題材とする予定である。英語論文作成の経験量や熟達度は個人差があることが予想されるため，受講生の進度に応じた指導を行う予定である。なお，本科目の前半は集中講義として9月前半に実施するが，受講者の同意が得られれば後半は秋学期に2-3週に1回の頻度で開講する形式を取る予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入，英語論文の特徴	授業の目的と計画の説明，論文とは，英語論文の特徴，着想から投稿・採択まで，英語論文作成のメリット
第2回	英語表現演習（1）	語彙・表現英訳
第3回	英語表現演習（2）	全文英訳
第4回	英語タイトルの特徴・表現演習	日本語タイトルと英語タイトルの比較
第5回	英語アブストラクトの特徴	英語アブストラクトの特徴，読み方
第6回	英語アブストラクト表現演習（1）	第三者のアブストラクトの英訳
第7回	英語アブストラクト表現演習（2）	自分のアブストラクトの英訳
第8回	英語アブストラクト表現演習（3）	解答に関するディスカッション・フィードバック
第9回	自分の研究の英語表現演習（1）	方法・結果の英語表現
第10回	自分の研究の英語表現演習（2）	方法・結果の英語表現
第11回	自分の研究の英語表現演習（3）	導入・考察の英語表現
第12回	自分の研究の英語表現演習（4）	導入・考察の英語表現
第13回	自分の研究の英語表現演習（5）	引用文献の書き方，最終発表のテーマ選定
第14回	最終発表，授業の総括	最終発表＆ディスカッション，授業全体のまとめ，フィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、計4時間を標準とする。毎回の授業で指定された課題に取り組み，次の授業に備えること。

【テキスト（教科書）】
英語論文作成に関しては多数の書籍が出版されている。心理学に特化したものもあればより一般的なものもある。以下にその一部を記載する。
1. 坂本 真士，大平 英樹（2013）.『心理学論文道場―基礎から始める英語論文執筆』世界思想社.
2. 羽生 和紀（2014）.『心理学のための英語論文の書き方・考え方』朝倉書店.
3. 高橋 雅治，デイビッドシュワーブ，バーバラ・シュワーブ（2013）.『心理学のための英語論文の基本表現』朝倉書店.
4. 崎村 耕二（1991）.『英語論文によく使う表現』創元社.
5. 安原 和也（2013）.『基本例文200で学ぶ英語論文表現―アウトプット練習問題集』三修社.
6. エディテージ（著），熊沢 美穂子（訳）（2016）.『英文校正会社が教える英語論文のミス100』ジャパンタイムズ.

【参考書】
【テキスト（教科書）】の項目を参照。

【成績評価の方法と基準】
平常点40%，課題・発表60%の割合で評価する。原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または無断で発表を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
独自に受講生に授業感想を聞いたところ，次のようなコメントをいただきました。
英語で自分の研究課題について表現してみることや心理学の分野の知識をレビューすることはとても役に立ちました。また、他の人の書き物をレビューすることによって自分もよく犯したミスなどに気づいて、直そうと思いました。さらに、研究論文を執筆するときの表現などについての英語単語帳のような本も紹介していただき、本当に役に立ちます。改善点として，ピアレビュー＆先生からのコメントでフィードバックをもらえることは非常によかったと思いますが、ピアレビューの方法としてファイルが複数に分散していてでまとめるのが大変だったので、共有ファイル等で、コメントや直しをわかりやすくできたらよいと思いました。
いただいたコメントを参考に，ピアレビューなど好評だった要素は残しつつ，レビューの方法などについて改善方法を検討したいと思います。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳 (2017).『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010).「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this course, students will acquire the knowledge and skills necessary to write high-quality psychology-related academic papers in English.
[Learning objectives]
1. To understand the process of writing an academic paper, from planning to journal submission, review, and acceptance.
2. To grasp the characteristics of English papers via comparison with Japanese papers.
3. To develop practical skills in writing publishable quality papers in English.
4. To enhance the repertoire of English expressions and phraseology appropriate for academic papers.
[Learning activities outside of classroom]
The standard study time required before and after each class is 4 hours total. Students should work on assigned homework and be ready to present their work in the next class.
[Grading criteria / policy]
Grades will be based on class attendance and participation (40%) and homework and presentation (60%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

知覚認知心理学特殊講義

竹島　康博

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究法を中心に解説を行います。フリーのソフトウェアを使い，これらの研究法を使った実験についても作成してもらいながら授業を進めます。その他，再現可能な実験を進めていく方法についても説明していきます。

【到達目標】
知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究法を，実際に実験課題を作成しながら学ぶことにより，自身の専門分野の研究方法にとらわれず柔軟な研究計画を立案できる思考力を身につけます。併せて，オープンサイエンスを意識した研究活動を進められる能力を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究方法や，再現可能性を高める研究の進め方について，教員が解説を行います。加えて，ソフトウェアを使ってこれらの研究法を使った実験課題の作成や，解析コードの書き方の実習を行います。最終回には，受講者が興味を持った研究について，研究法を中心に自身が興味深いと感じた点や今後の課題についても含めて発表をしてもらいます。
課題については次週の授業内で確認し，そこでコメントやアドバイス等のフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	授業全体の概要説明 知覚研究の基礎知識について学ぶ
第2回	知覚研究の機器紹介	知覚研究でよく用いられる実験機器，測定機器について解説する
第3回	知覚研究の外観	他の心理学分野の研究法と比較した上での知覚研究の手法の特徴を学ぶ
第4回	知覚実験の紹介（1）	主観的等価点を測定している知覚実験の論文を取り上げて紹介する
第5回	知覚実験の紹介（2）	刺激のパラメーターを参加者ごとに事前測定して決定している知覚実験の論文を取り上げて紹介する
第6回	ポズナー課題	ポズナー課題についての解説，実験課題の作成を行う
第7回	強制二肢選択課題	強制二肢選択課題についての解説，実験課題の作成を行う
第8回	オリジナルの課題（1）	受講者自身が作成する課題を自由に決めて，実験課題の作成を行う
第9回	オリジナルの課題（2）	受講者自身が作成する課題を自由に決めて，実験課題の作成を行う
第10回	再現可能な研究の進め方(1)	再現可能な研究を進めるための解析コードの作成について実習する
第11回	再現可能な研究の進め方(2)	再現可能な研究を進めるための解析コードの作成について実習する
第12回	再現可能な研究の進め方(3)	再現可能な研究を進めるための技能をデータの視覚化の観点から実習する
第13回	再現可能な研究の進め方(4)	再現可能な研究を進めるためのマテリアルの共有や事前登録の在り方について議論する
第14回	受講者による発表	総括として，授業内で学んだ内容を自身の今後の研究にどのように活かせるかについて発表する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
各回で作成した実験課題について，自分が使うことを想定して受講者自身でアレンジしてみてください。また，14回目に行う発表に向け，授業で取り上げた実験課題を自らが活用できる可能性について検討する作業を毎回の授業時間外学習とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。

【参考書】
村上郁也（編著）『心理学研究法1 感覚・知覚』 2011　誠信書房
十河宏行『PsychoPy/Pavloviaによるオンライン実験』 2022　朝倉書店
高橋康介『再現可能性のすゝめ Rstudioによるデータ解析とレポート作成』 2018　共立出版

【成績評価の方法と基準】
平常点20%，提出課題の内容30%，実践活動の報告内容50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】
PsychoPyを使った実験課題の作成実習ではこれまで教員側で用意したものを作成してもらっていましたが，自分の研究分野やテーマに近い課題を作成する方が受講生の学びとして有益なようです。今年度も，PsychoPy実習の後半は受講生自身が選んだ課題を作成してもらうことにします。

【学生が準備すべき機器他】
実験課題の作成を行いますので，可能であれば自分のノートPCをご持参ください。

【その他の重要事項】
授業で募集する知覚心理学・認知心理学に関わる実験や調査などへの参加による学習についても評価に加味する場合があります。

【【担当教員の専門分野等】】
＜専門領域＞
知覚心理学，認知心理学
＜研究テーマ＞
異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究，視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究
＜主要研究業績＞
竹島 康博 (2024).　視聴覚刺激の提示タイミングに対する同時性知覚の柔軟性　VISION, 36(4), 150-155.
Takeshima, Y. (2024).　The influence of spatial frequency information on temporal synchrony perception on audiovisual stimuli. Perception, 53(11-12), 803-811.
Takeshima, Y. (2023). Change of rapid temporal recalibratgion magnitude for audiovisual asynchrony with modulation of temporal binding window width: A preliminaryh investigation. i-Perception, 14(4), 1-10.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course deals with perceptual and cognitive studies and the aim of this course is to help students perform their own study.
[Learning objectives]

The goals are to acquire flexible thinking skills that enable students to develop research plans without being constrained by the methodologies of their own specialized field, by learning research methods commonly used in perceptual psychology and cognitive psychology while actually creating experimental tasks. In addition, the goal is to develop the ability to conduct research activities with an awareness of open science.
[Learning activities outside of classroom]
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
[Grading Criteria /Policy]
Grading will be decided based on in-class contribution (20%), the quality of the submitted assignment (30%), and class presentation (50%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

生理心理学特殊講義

木村　健太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、生理心理学の基礎と研究論文作成過程で用いられるさまざまな生理指標について講義と実習形式で学びます。

【到達目標】
各生理指標が反映する心理状態について高度な知識を身につけた上で、自身の研究テーマに関わる生理指標を適切に測定・分析し、学会等で発表する能力を獲得します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture、E 実験/実習/実技 /Experiment

【授業の進め方と方法】
・生理心理学の基本的なアプローチである電気生理機器の仕組みと測定の方法を学びます。
・実際に機器を使用して、心理状態と生理指標の変化の関連性を体験・確認します。
・実習で対象とする課題等は、受講者の希望に配慮してテーマを決めていきます。
・講義では、生理指標の実社会への活用事例も説明します。
・授業時間内に質疑応答の時間を設け、疑問点の解消や課題へのフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	生理心理学の基礎と授業の概要についての説明
第2回	機器説明	生理心理学で用いられる生理指標と計測機器の説明
第3回	生理指標の測定法	アーチファクトなど生理指標測定時の注意点
第4回	脳波（1）	脳波の発生機序、脳波の測定法
第5回	脳波（2）	脳波の測定実習
第6回	脳波（3）	脳波の分析実習
第7回	心電図（1）	心電図の機序、心電図の測定法、分析方法
第8回	心電図（2）	心電図の測定、分析実習
第9回	心電図（3）	心電図のR-R間隔から自律神経系活動を推定
第10回	循環器活動	血圧の機序、血圧の測定法、分析方法
第11回	ウェアラブルデバイス	日常生活中の生理指標の測定、生理指標の活用事例
第12回	感情の評価（1）	生理指標を用いた感情の評価方法
第13回	感情の評価（2）	感情の評価・分析の実習
第14回	まとめ	授業の振り返り、レポートの説明

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
・授業で取り上げる生理指標に関するレポートを課します。
・各回の授業後には、配布した資料に再度眼を通すとともに、紹介した文献を参考にして各指標に関する理解を深めて下さい。

【テキスト（教科書）】
特に指定しません。

【参考書】
適宜必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】
成績は、平常点50%（授業への積極的な関与等）、発表・レポート50%として総合点により評価します。

【学生の意見等からの気づき】
2026年度から開講の授業です。

【学生が準備すべき機器他】
・必要に応じて自分のノートPC等の情報機器を持参してください。
・脳波室で実験機器を用いた授業を行うことがあります。

【その他の重要事項】
・授業の進め方や授業計画、授業目標の説明をしますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。
・オフィスアワー：春・秋学期ともに木曜日3限（BT1109研究室）。訪問希望者は、メール（k.kimura[at]hosei.ac.jp）等で前日までに連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
生理心理学、認知神経科学、感情科学
＜研究テーマ＞
感情が認知機能や意思決定に作用する認知神経学的機序の研究、内受容感覚と脳ー身体の相互作用機序についての研究
＜主要研究業績＞
Kimura, K, Kanayama, N., &Katahira, K. (2023). Cardiac cycle affects risky decision-making.Biological psychology, 176, 108471
Kimura, K., Sawada, H., &Katayama, J. (2018). Outcome evaluations in group decision-making using authority rule: An electrophysiological study.
Neuropsychologia, 119, 271-279.
Kimura, K., Kimura, M., &Iwaki, S. (2016). Temporal prediction modulates the evaluative processing of “good” action feedback: An electrophysiological study.
Psychophysiology, 53 (10), 1552– 1559.

【Outline (in English)】
(Course outline)
In this class, we will learn about the fundamentals of psychophysiological research and various physiological indices with practical training.
(Learning Objectives)
The goals of this course are to acquire the ability to appropriately measure and analyze physiological indices relevant to own research topics and present their findings at academic conferences and other venues.
(Learning activities outside of classroom)
Before/after each class, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria / Policy)
Final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution (50 %), presentation and reports (50%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

発達心理学特殊講義

渡辺　弥生

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
発達心理学において重要なトピックからいくつか選び出し、その研究の背景と課題、方法論について理解する。その上で、現在の社会問題に貢献するためにどのような研究が必要かを検討し、具体的に計画するとともに発表する。

【到達目標】
（1）学術的に子どもにかかわる事実や現象をマクロに認識する。
（2）子どもの発達を学んでいくための発達心理学の役割について認識を深める。
（3）子どもを通して人間や社会のいろいろな問題に気づき、深めていくことができることを、それぞれの領域における研究事例から学ぶ。
（4）授業者としても発達心理学を教えられるスキルを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
最初の時間に、この講義の進め方を説明する。発達心理学の学問体系を理解し、大学の授業を実施するにあたって必要な知識およびスキルを習得する。選んだトピックについての基本と最新の知見をリサーチし、大学生に伝える必要のある内容をまとめ、課題の設定や、説明の仕方などの体験をするため、授業のシミュレーションを実施する。課題などのフィードバックは学習支援システムまたGoogle Classroomを活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	生涯発達心理学という学問が目指すものと体系の理解、発達という概念、方法論など。
第2回	生涯発達についての著名な理論にはどのようなものがあるか？ また方法論は？	Freud,Erickson, Piaget,Kohlberg,など。縦断的研究、横断的研究、観察、調査、実験、コホートなど。
第3回	どのような研究がなされてきたのか。	胎児期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期
第4回	発達研究の選択	様々な研究分野の中から、この授業で発表するトピックスを選ぶ。テキスト参考。
第5回	リサーチ１	先行研究の問題意識の流れを知る。
第6回	リサーチ２	先行研究の問題意識の流れを知る。
第7回	ノートづくり１	教えるための知見をまとめる。誰に、どのくらいの質と量の知見を伝えるか考える。
第8回	ノートづくり２	教えるための知見をまとめる。誰に、どのくらいの質と量の知見を伝えるか考える。
第9回	今後の課題	この分野の研究課題をまとめる。
第10回	新しい研究の検討	どのような研究が重ねられる必要があるか、具体的に考える。
第11回	授業シミュレーション	大学での発達心理学の講義をシミュレーションした形でプレゼンをする。
第12回	授業シミュレーション	大学での発達心理学の講義をシミュレーションした形でプレゼンをする。
第13回	授業シミュレーション	大学での発達心理学の講義をシミュレーションした形でプレゼンをする。
第14回	総括	全体の反省と今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
いずれの回も課題を明確にして、次の授業につなげられるよう、2時間ずつの予習と復習を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業において適宜紹介する。

【参考書】
渡辺弥生・西野泰代編著(2020).ひと目でわかる発達　誕生から高齢期までの生涯発達心理学　福村出版
渡辺弥生/杉村伸一郎編著(2008).原著で学ぶ社会性の発達 ナカニシヤ出版

【成績評価の方法と基準】
プレゼンテーション(50%)と課題の提出(50%)で評価する。

【学生の意見等からの気づき】
昨年講義がなかったので，特に無し。

【学生が準備すべき機器他】
授業時に説明する。

【その他の重要事項】
履修に必要な科目かどうか確認して受講してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
＜研究テーマ＞社会性と感情の発達および、学校危機予防教育
＜主要研究業績＞
https://sites.google.com/site/emywata/参照。

【Outline (in English)】
< Course outline > We will select several important topics in developmental psychology The aim is to understand the background, challenges, and methodology of related research.
< Learning Objectives> Based on this understanding, students will be expected to examine what kind of research is necessary to contribute to current social problems, formulate concrete plans, and present them.
< Learning activities outside of classroom > Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.
・Students will be required to submit a report (100%) based on the assumption that they will complete the assignments in each class.
< Grading Criteria> Evaluation will be based on presentations (50%) and submission of assignments (50%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

言語心理学特殊講義

福田　由紀

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　読解力とは何か？ それを伸ばすために何をしたらよいか？ について，心理学的な観点から検討することが本授業のテーマである。具体的には，まず，日本やそれ以外の国で行われている指導法について，模擬授業を通して体感する。次に，文章読解のプロセスやそれに影響する要因について学習をする。それらをもとに読解力を高めるためにどのようにしたらよいかを考える。

【到達目標】
①日本とそれ以外の国で行われている読解力向上の指導法を理解し，説明できる。
②文章読解に影響する要因に関する文献を探すことができる。
③文章読解に影響する要因とプロセスについて理解し，説明できる。
④読解力向上のための指導法を提案する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　授業の前半は日本とUKで使用されている学習指導方法にそって，模擬授業を行う。その後，読解のプロセスや読解力の定義，読解力に影響を与える要因に関する文献を講読し，発表を行う。授業の最終段階では，各自が考える読解力の定義とそれを向上させるための指導方法を発表する。また，提出された課題のフィードバックは，授業中ないしは授業支援システムを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。グループ分け。
第2回	日本式模擬授業１	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第3回	日本式模擬授業２	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第4回	UK式模擬授業１	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第5回	UK式模擬授業２	指導本にしたがって，模擬授業を行う。最後に，読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第6回	読解力を伸ばすための指導法の日英比較の発表	模擬授業を通して実感したUKと日本の目指している読解力の相違点と共通点を比較検討した結果を発表する。
第7回	読解力に影響する要因に関して考える１：読解力の発達の様相	読み書きの発達の様相に関する論文を全員が読み，担当者が説明する。
第8回	読解力に影響する要因に関して考える２：語彙量，ワーキングメモリ	読解力に影響を与える要因として語彙量とワーキングメモリを取り上げる。具体的には，それらの要因がどのように読解力に影響を与えるかの概略を担当者が説明する。
第9回	読解力に影響する要因に関して考える３：認知・思考の発達	読解力に影響を与える要因として認知・思考力を取り上げる。具体的には，文章理解時にどのような推論をしているのか，発達的な観点に関して概略を担当者が説明する。
第10回	読解力に影響する要因に関して考える４：文書の理解	読解力に影響を与える要因として非連続型テキストである文書の理解を取り上げる。具体的には，文書の理解と文章の理解の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第11回	読解力に影響する要因に関して考える５：PISAの読解力	PISAが提案している読解力と，日本の教育で目指している読解力の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第12回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方についての発表１	読解力の定義を明確にし，それを伸ばすための方法を発表する。その際，対象はだれか，具体的な方法を発表する。
第13回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方についての発表２	読解力の定義を明確にし，それを伸ばすための方法を発表する。その際，対象はだれか，具体的な方法を発表する。
第14回	講評会	12回と13回で行った発表に関して全員で講評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
第1回～第4回　模擬授業を行うための準備を行う。
第5回　指導法の日英比較発表の準備を行う。
第6回～第10回　発表者は論文の発表準備を行う。それ以外の院生は，発表予定の論文を読み込んでくる。
第11回・第12回　次週の発表の準備を行う。
第13回　授業での発表や議論を振り返り，講評を作成する。

【テキスト（教科書）】
　教科書は特に指定しない。毎授業時にプリントを配付する。また，課題に必要な文献はその都度伝える。

【参考書】
福田由紀（編）(2012). 言語心理学入門　培風館
大村彰道（監修）(2001). 文章理解の心理学　北大路書房

【成績評価の方法と基準】
　発表40%，発表への質問・コメント20%，討論への参加40%などを総合的に評価する。特に，討論への積極な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】
　2025年度は担当しませんでした。よって，2024年度の分を以下に再掲します。
　日本の国語教科書「おにたのぼうし」とUKのそれ「Not Now Bernard」を使って模擬授業をしてもらいました。その活動を通して，読解力の捉え方の両国の相違，そして，自分が考える読解力とその伸ばし方を最後に発表しました。発表が多かったことやそのフィードバックの豊かさ，アジェンダの存在がよかったようです。続けていきますね。
　・発表ひとつひとつについて，議論の時間を多くとれたのが良かったです。普段接しない分野でしたが，分からないことを質問したりできて助かりました。発表回数も多かったので，毎回楽しく授業に参加できました。

・講義の初めに，Excel ファイルで，学期を通した到達目標，スケジュール，課題内容などを細かに説明してくださったので，到達目標に向けて明確な見通しをもって学習を進めることができました。結果として，最終的な目標である「読解力の伸ばし方」について自分なりによく考察を深めて計画を練ることができたので，習得できたものが多かったように感じます。また，これまで触れることがなかった言語心理学という分野の研究を精読したことで，自分の専門分野と少なからず共通点を見つけることができ，自身の研究に役立つような知見が得られたことも大きな収穫でした。総じて，非常に有意義な授業だったと思います。

【その他の重要事項】
　グループ分けや発表論文の割り当てをするので，受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語心理学
＜研究テーマ＞読みと感情，コミュニケーションにおける言語活動の役割
＜主要研究業績＞
1.常深 浩平・望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅰ）―努力の最小限化とその対策例―』（読書科学，66,1-10. 2024）
2.福田 由紀・井関 龍太・望月 正哉・常深 浩平『ウェブ調査による物語文章理解研究の困難さ（Ⅱ）－ Instructional Question Check 通過に影響する要因の検討－』（読書科学，66,11-25. 2024）
3. 井関 龍太・望月 正哉・菊池 理紗・福田 由紀『現代語小説の品詞構成に基づく文体印象の分析－イメージ性と展開の早さの主観的印象を説明する試み－』（計量国語学，34，158-173. 2023年）
4. 井関 龍太・菊池 理紗・望月 正哉・福田 由紀・石黒 圭『品詞構成に基づく文体指標は読者の印象とどのように関わるか－ MVR と品詞構成率の心理学的検討－』（計量国語学，33，493-509. 2022年
　この論文は計量国語学会の論文賞を拝受しました）
5. 望月 正哉・井関 龍太・福田 由紀・長田 友紀・常深 浩平・石黒 圭『読者がもつ物語の認知的ジャンルの測定』（読書科学，63,160-174. 2021）
＜ＨＰ＞
「ことばのこころ研究室」http://www.zc.em-net.ne.jp/ psy-language/

【Outline (in English)】
Course outline：The purpose of this course is to learn the text comprehension from a psychological point of view.
Learning Objectives：By the end of the course, students should be able to do the following:
－ A. understand teaching method for text comprehension at Japan and UK
－ B. search for information on previous studies about text comprehension
－ C. understand factors about text comprehension and its process
－ D. propose a more efficient teaching method for text comprehension
Learning activities outside of classroom ： Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.
Grading Criteria ： Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 40%, comment for the presentation of other people: 20%, in-class contribution: 40%.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

行動分析学特殊講義

島宗　理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
社会の問題や個人の悩みは、よくよく考えてみると何らかの行動の問題であることが多いものです。心理学は行動の科学として“行動の予測と制御”に関わる法則を見いだしてきました。こうした法則をうまく適用すれば、社会の問題を解決し、個人の悩みを解消することも可能です。この授業では、社会的・個人的に重要な課題を行動問題としてとらえ、個人攻撃の罠に陥らず、環境を整備しながら問題を解決していく行動分析学の考え方を学びます。

【到達目標】
行動分析学の基礎的な概念を理解し、人や動物の発達や認知に関する様々な現象を、強化や弱化の随伴性を分析することで解釈できるように学びます。基礎的な概念を説明できるようになり、それらの概念を応用して、社会や学校、家庭における行動問題の解決方法を立案できるようになること、そうした解決方法を基礎的な概念を使ったコミュニケーションを介して討議し、協調すること、さらに、課題分析やABC分析、行動の観察・記録法を実施できるようになることを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
毎週、教科書の指定された章を読んで、関連する課題を行い、それについて授業中に討論したり、演習します。課題へのフィードバックは授業中の討論を介して行います。
学習目標や参考図書などの教材は下記のURLを参照してください。
https://docs.google.com/document/d/1XqZ7yScRRs24S2HJX8g1DLKW7CDnLTwm6FvUotXHZT8/edit?usp=sharing

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	行動分析学の概説、教科書の紹介、プロジェクトについての話し合いなど。
2	好子、嫌子とは	好子、嫌子、行動随伴性の定義や具体例について学ぶ（教科書、第1-2章）：行動の定義、死人テスト、医学モデル、説明のレベル、循環論。
3	強化と弱化	基本的な４つの随伴性について学ぶ（教科書3-5章）：PTSDや汚言症の治療における強化、社会的悪循環、科学における節約性、自閉症の療育における代替行動の分化強化、社会的妥当性、学級経営のための集団随伴性、反応コストとタイムアウト。
4	消去と復帰、分化強化 と分化弱化	消去と復帰、分化強化と分化弱化について学ぶ（教科書6-7章）：精神科病棟での問題行動修正、夜泣きの消去、バーストと自発的回復、自閉症児の自己刺激行動、消去と忘却の区別、スポーツのコーチング、課題分析、カウンセラーによる無意識の条件づけ、創造性。
5	シェイピング、強化スケジュール	シェイピングと強化スケジュールについて学ぶ（教科書8-9章）：失語症の行動療法、部分強化と連続強化、累積記録、FI、FR、VI、VR、消去抵抗、強化スケジュールよって生じる反応パターン。
6	生得性好子、生得性嫌子、特殊な確立操作、習得性好子、習得性嫌子	行動分析学における「動機づけ」について学ぶ（教科書10-12章）：遮断化と飽和化、確立操作、行動内在的随伴性と付加的随伴性、プリマックの原理、多飲症、攻撃行動と攻撃性好子、依存性好子、妄想を減らす行動療法、価値変容の原理、トークンエコノミーシステム。
7	刺激弁別、刺激般化、概念形成、模倣	弁別学習や概念学習、模倣による学習について学ぶ（教科書13-15章）：弁別刺激、概念の行動的定義、読字指導、刺激性制御、学習障害、機械利用型指導法、直感、プロンプトとフェイディング、遅延誘導手続き、リダクション、模倣と般化模倣。
8	阻止による強化、阻止による弱化、並立随伴性	回避行動、選択行動について学ぶ（教科書16-18章）：姿勢の矯正プログラム、自閉症における視線合わせ、警告刺激、ADHD、非両立行動の分化強化、対応法則。
9	刺激反応連鎖と反応率随伴性、レスポンデント条件づけ	複雑な行動の学習、レスポンデント条件づけについて学ぶ（教科書19-20章）：逆行連鎖化、順行連鎖化、総課題提示法、トイレットトレーニング、自立訓練、早食いの抑制、恐怖症とその治療、高次条件づけ、系統的脱感作法。
10	言語行動	言語行動論について学ぶ（教科書21章）：マンド、タクト、イントラバーバル、エコーイック、テクスチャル、書き取り、聞き取り、書き写し、オートクリティック、私的刺激。
11	強化モドキ、ルール支配行動	直接効果的随伴性、間接効果的随伴性について学ぶ（教科書22-23章）：拒食症の治療、随伴性形成行動、ルール支配行動、コミュニティ心理学、イメージトレーニング、パフォーマンス・マネジメント、自己管理。
12	ペイ・フォー・パフォーマンス、道徳と法による行動の制御	ルール支配行動によるマネジメントについて学ぶ（教科書24-25章）：作文指導、就労支援プログラム、銀行におけるペイ・フォー・パフォーマンス、法律と道徳（倫理）、宗教、性同一性障害。
13	行動の維持、行動の転移	学習した行動を維持させ、転移させる要因について学ぶ（教科書26-27章）：行動の罠、般化を促進させる要因、自己教示。

14	研究法	行動分析学における研究法、特にシングルケースデザインについて学ぶ（教科書28章）：社会的妥当性、観察法、観察の信頼性、反転法、多層ベースライン法、基準変化法、条件交替法、内的妥当性、外的妥当性。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
○毎回、次の週の授業で討論する具体的なテーマに関する予習課題を提示するので、受講生は関連する教科書の章を読み、予習課題に取り組み、討論の準備をすること。
○本授業の準備・復習時間はあわせて平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
『行動分析学入門(第2版)』（杉山・島宗・佐藤・マロット・マロット，産業図書，2023） *第2版を使います。ご注意ください。

【参考書】
適宜、紹介します。

【成績評価の方法と基準】
○授業参加点 40%、課題点 60%で成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】
昨年度はサバティカルで授業を担当しませんでした。

【その他の重要事項】
○オフィスアワーは春学期，秋学期ともに火曜日の3限，場所は研究室（富士見坂校舎6F9号室）です。訪問希望者は前日までにSlackのDMで連絡してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
法政大学学術研究データベース:https://kenkyu-db.hosei.ac.jp/tmp/1968/profile.html

【Outline (in English)】
【Course outline】
The purpose of this course is to master basic principles, procedures, and research methods pertaining to applying behavior analysis in schools or in other educational or therapeutic settings. Focus will be placed on knowledge and skills in applying basic concepts of learning to interpret behavioral phenomena in real-world educational or societal settings.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students should be able to do the followings:
1) focus on behaviors, 2) conduct ABC/AB analyses, and 3) measure target behaviors, and 4) explain about single-case research design.
【Learning activities outside of classroom】
Students are expected to complete weekly assignments (average of 4 hours).
【Grading Criteria /Policy】
Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

司法犯罪心理学特殊講義

越智　啓太

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業の目的：
　この授業では、犯行現場から犯人の動機や行動、その属性を予測するプロファイリング技術について、講義と論文読解、実際のケース分析によって、学んでいく。本年は、とくに連続殺人事件、大量殺人事件とテロリズムについて扱う。
授業の概要：
　連続殺人のタイプと犯人の動機と行動、大量殺人と犯人の動機と行動、テロリストの動機と行動について、学び、具体的なケースについて各自検討して、発表する。
心理学以外の専攻の方の受講もその専攻が許せば可能であるが、とくに他専攻であることは考慮しないで授業を進行するので、実質的に単位取得は極めて困難であることを了解して受講されたし。

【到達目標】
（1）連続殺人、大量殺人、テロリズムについてのプロファイリング技術の最先端について理解し、説明できるようにする。
（2）上記の事件について、基本的なプロファイリング（犯人属性の推定）ができるようになる。
（3）上記の事件のプロファイリングについて、専門家として警察官や検察官、裁判官に説明できるようになる。
（4）以上のことを日本語でのみでなく、英語でできるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
はじめに連続殺人、大量殺人、テロリスムに関する基本的な文献や知識をレビューし、その上で、計量的な方法によるプロファイリングとFBI方式のプロファイリングについての基礎について学習する。それが終了した時点で、具体的な事件資料を基に犯人の行動や属性を推定する実習を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション、犯罪捜査への心理学の応用	オリエンテーション、プロファイリング研究の現状についての講義
2	連続殺人：連続殺人研究についてのレビュー１	論文の読解と議論
3	連続殺人：連続殺人研究についてのレビュー２	論文の読解と議論
4	大量殺人：大量殺人研究についてのレビュー１	論文の読解と議論
5	大量殺人：大量殺人研究についてのレビュー２	論文の読解と議論
6	テロリズム：テロリズム研究についてのレビュー１	論文の読解と議論
7	テロリズム：テロリズム研究についてのレビュー３	論文の読解と議論
8	犯罪捜査１	捜査手法の概要についての講義と議論
9	犯罪捜査２	鑑識、科学捜査の概要についての講義と議論
10	事例研究１	連続殺人の事例研究
11	事例研究２	大量殺人の事例研究
12	事例研究３	テロの事例研究
13	事例研究４	応用問題についての事例研究とディスカッション
14	事例研究５	応用問題についての個人での問題解決とプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎週２～５本の英語論文を読んでいく。受講者の人数によるが、基本的に毎週1本程度の論文を読解し、レジュメを作成することが必要となる。毎週、上記のテーマにしたがった論文を探して準備し、十分に精読してレジュメを作成してくること。

【テキスト（教科書）】
犯罪心理学の基盤ジャーナルを中心として論文を紹介し、それを元に授業を進める。具体的には授業時に指定する。

【参考書】
授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】
（1）殺人とテロリズムのプロファイリングについての授業内でのプレゼンテーションと質疑応答（５０%）
（2）各自が選択した、殺人事件についての調査と分析レポート（５０%）

【学生の意見等からの気づき】
プロファイリングについての最新の知識を習得できるのは日本の大学ではこの授業が唯一であり、受講者の意欲と満足度は非常に高い。

【その他の重要事項】
警視庁科学捜査研究所等における実務経験があるので、その経験なども含めて指導する。司法関係に就職を希望する人（警察官、家裁調査官、法務技官など）を歓迎する。

【担当教員の専門分野等】
専門領域 犯罪心理学、社会心理学
研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用
主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ　犯罪捜査の心理学；越智啓太 2015 恋愛の科学　実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで学ぶ犯罪心理学　北大路書房；越智啓太　2008　犯罪捜査の心理学　化学同人；越智啓太ほか　2008　自伝的記憶の心理学　北大路書房

【Outline (in English)】
【Course outline】
Theme: offender profiling of mass murderers, serial murderers, and terrorist using psychological and mathematical methods.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to explain the current level of research achievements in serial, mass murderer and terrorist.
【Learning activities outside of classroom】
Each lesson requires 2 hours of preparation and 2 hours of review.
【Grading Criteria /Policy】
(1) In-class presentation and Q&A on profiling homicide and terrorism (50%)
(2) Research and analytical report on a homicide case of each student's choice (50%)

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

学習心理学特殊講義

藤田　哲也

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　人間の学習活動を支えている「記憶」について，主に記憶の測定法という観点から捉える。これまでの記憶研究の主要な成果を，単なる知識として獲得するだけでなく，それぞれの知見が導かれた研究の過程についても理解し，自分自身の研究計画をより洗練させるのに役立たせる。

【到達目標】
　半期の授業が終了した時点で，以下の各要素を身につけていることが，授業の具体的な到達目標となる。
１．人間の記憶を測定する方法（実験のパラダイム）について，資料等を参照しなくても説明ができる程度に理解する。
２．その測定法上の工夫や留意点を，記憶以外の心理学領域に応用できる。
３．上記１，２をふまえて，自分自身の取り組んでいる研究領域で，実験・調査・観察等の研究計画を立てることができる。
４．研究計画を，第三者にも正確に伝えることができる，理解しやすい，客観的で適切な文章で記述できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　短期記憶および作動記憶の性質を検討する上での二重課題法，意味記憶の構造を明らかにするための間接プライミング，エピソード記憶の伝統的な測度である再生・再認について，理論的な背景と実験手続との関連から，実際に使用する際の注意点を説明する。さらに，無意識的であるが故に測定が困難であった潜在記憶の測度である直接プライミングをはじめとした，近年の記憶研究の動向にも触れる予定である。測定法が妥当であるかどうかについて判断を下すためには，理論との整合性が重要であることから，様々な種類の記憶のモデルについても理解を深めることになる。とりわけ長期記憶においては，符号化と検索の過程の一致度が重要であることを強調する。
　半期の前半の授業では，主に講義形式によって，上記の内容について解説を行う。後半の授業では，授業で得た知識を活用して，各自が研究計画を立て，それを発表し，教員と受講生全員で討論を行うという形式をとる。
　最終的には，学術論文執筆を念頭に置き，研究方法を適切な文章で記述したものをレポートとして作成し，提出することになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	この授業の概要と到達目標，評価方法を担当者が説明する
2	記憶の分類	短期記憶vs.長期記憶，手続記憶vs.宣言記憶，意味記憶vs.エピソード記憶について担当者が説明する
3	作動記憶の測定法	作動記憶のモデルおよび，そのモデルの根拠となっている研究の詳細を担当者が説明する
4	反応時間からわかること	反応時間とモデルによる解釈，意味記憶研究における間接プライミング効果を担当者が説明する
5	再生と再認	再生と再認の実施法，再生と再認の違いを担当者が説明する
6	再生と再認の理論	自由再生の二段階説，符号化特定性原理，再認の二過程説を担当者が説明する
7	潜在記憶の定義・測定法	潜在記憶とは何か，潜在記憶が我々の認知に及ぼす影響を担当者が説明する
8	記憶法則の一般性	記銘材料と記憶法則の関係，記憶テストと記憶法則の関係，実験手続きの違いと記憶成績の関係を担当者が説明する
9	この授業での課題	「模擬実験計画」のポイント，レポートのポイントを担当者が説明する
10	模擬実験計画：発表１	受講生が発表を行い，その内容に，これまでの授業内容が反映されているか全員で討論する
11	模擬実験計画：発表２	受講生が発表し，発表された実験計画の内容を，より適切なものにするように全員で討論する
12	模擬実験計画：発表３	受講生が発表し，その研究方法が，研究目的から見て妥当かどうかを全員で討論する
13	総括＋レポート作成	記憶分野の知識の復習と整理を行い，研究法として学んだことの復習と確認，発表の総括をする
14	レポート提出	成績評価基準の説明を担当者が行い，各自で確認し，授業内容の応用に向けてのアドバイスを担当者が行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　本授業の準備・復習時間は，各2時間を標準とする。詳細は下記の通り。
第１回 以前に学んだことのある「記憶」研究について復習
第２回 それぞれの記憶が，日常生活のどのような場面で活用されているのかを考え，理解を深める
第３回 作動記憶の測定法を，自分の研究分野や自分自身の認知活動・学習活動に当てはめて考える
第４回 反応時間を指標にする際の注意点をまとめ，具体的な研究計画に活かす
第５回 自分の研究で再生あるいは再認を用いる場合の，得られる結果の違いについて考える
第６回 自分の研究に，再生と再認のいずれを用いるべきかを理論的に説明できるよう考える
第７回 潜在記憶が自分の日常生活のどのような現象に関わっているのかを考える
第８回 これまでの授業内容を総括的に復習し，疑問点を整理する
第９回 自分なりの問題設定と発表準備
第10回 自分の発表の振り返り，他者の発表に対するコメント整理，発表の準備
第11回 自分の発表の振り返り，他者の発表に対するコメント整理，発表の準備
第12回 自分の発表の振り返り，他者の発表に対するコメント整理，発表の準備
第13回 レポート作成
第14回 レポートの見直しと修正

【テキスト（教科書）】
教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】
藤田哲也（1999）．潜在記憶の測定法　心理学評論, 42, 107-125.
藤田哲也（2001）．潜在記憶と行為の記憶に関する研究　風間書房
藤田哲也（2006）．「無意識」に踊らされるあなた－日常記憶としての潜在記憶研究　太田信夫（編）記憶の心理学と現代社会　有斐閣
その他，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点40％…授業へ参加し，他者の発表へコメントすることを評価対象とする。
授業内での発表30％…発表の内容，発表資料における記述のしかた，発表のしかたを評価対象とする。
レポート30％…レポートの内容，学術論文としての体裁（書式）を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】
2026年度からの新規科目です。

【その他の重要事項】
修士課程の「学習心理学特論」との合同科目。授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず初回の授業より前に相談すること。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
記憶
＜研究テーマ＞
様々な記憶の測定法と，その理論
＜主要研究業績＞
藤田哲也（1999）．潜在記憶の測定法　心理学評論, **42**, 107-125.
藤田哲也（2001）．潜在記憶と行為の記憶に関する研究　風間書房
藤田哲也（2006）．「無意識」に踊らされるあなた－日常記憶としての潜在記憶研究　太田信夫（編）　記憶の心理学と現代社会　有斐閣

【Outline (in English)】
[Course outline]
In this class, students understand "memory" that supports human learning activities mainly from the viewpoint of measurement method of memory.
[Learning Objectives]
By the end of the course, students should be able to do the following:
1.Students will understand how to measure human memory (experimental paradigm) to the extent that they can explain it.
2.Students can generalize their measurement method ideas and precautions to psychological fields other than memory.
3.Based on the above 1 and 2, students can make research plans such as experiments, surveys, and observations in their own areas of interest.
4.Students can describe their research plans in objective and appropriate sentences that can be accurately communicated to others.
[Learning activities outside of classroom]
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
[Grading Criteria /Policy]
The overall grade of the class is determined based on the following.
In-class contribution 40%, presentation 30%, report 30%.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

音声言語科学特殊講義

田嶋　圭一

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人間に特有の能力とされる言語がどのような原理によって成立しているのかを科学的に追究する言語学の基礎を概観する。

【到達目標】
言語の音（音声学，音韻論），語彙（形態論），文の作り方（統語論），語句の意味や対話の中での役割（意味論，語用論）など，言語学の諸分野について，基礎概念を学び，問題を解く能力を身に付けることを本授業の目標とする。授業では言語学を初めて学ぶ学生を想定しているが，受講生の既有知識に応じて進度を適宜調整する。授業終了時には，言語に関する様々な現象や疑問について吟味し解決できるようになることを目指す。さらに，言語に関連する学術論文等を精読し，先行研究を批判的に検討した上でレビュー発表を行うことにより，当該分野における研究の位置づけを理解し，自らの研究課題の設定や発展に結び付けることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
言語学の諸分野の中から適宜重要なトピックを取り上げる予定である。扱う内容については受講者と相談のうえ重み付けを調整する可能性がある。日本語や英語などの諸言語から様々な具体例を検討し，問題を実際に解く作業を通して，言語学の基礎概念や分析方法を身に付ける。また，音声学分野で広く利用されているフリーソフトPraatの実習も取り入れる予定である。授業は，教員による講義，課題に関するディスカッション，教員から全員に向けてのその場でのフィードバックなどを織り交ぜながら進める予定である。さらに，学期終盤では学生によるレビュー発表および討論を行う予定である。レビュー発表を通して当該分野の先行研究を批判的に整理し，研究上の課題や自身の研究との関連についても議論することを求める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入，言語と言語学	シラバスの説明，言語と言語学，話し言葉と書き言葉，「真の言語」
第2回	音声学・音韻論：母音と子音	発話のメカニズム，母音と子音
第3回	音声学・音韻論：音素	音素，音素分析，日本語の音韻変化
第4回	音響音声学：基礎	音の種類，音を可視化する方法，フィルタ，アナログ信号とデジタル信号
第5回	音響音声学：音源フィルタ理論	音声産出の音源フィルタ理論，基本周波数，フォルマント周波数
第6回	実験音声学：音声分析	Praatを使った音声の録音・可視化・編集・分析・ラベリング
第7回	実験音声学：音声合成	Praatを使った音声の再合成，レビュー発表の進捗報告
第8回	実験音声学：音声知覚	Praatを使った音声知覚実験
第9回	形態論：形態素，語形成	心内辞書と一般辞書，形態論と形態素，形態素の種類，偶発的な語形成，少し規則的な語形成，規則性の高い語形成，複合
第10回	形態論：複合，派生	主要部，複合語の種類，複合語の意味，派生語の樹形図
第11回	形態論：屈折，形態素解析	屈折と活用，形態素解析の方法
第12回	統語論：導入，カテゴリー，意味役割，マージ	格，言語の階層構造，項と意味役割，マージ，樹形図（ツリー）
第13回	統語論：文の組み立て，レビュー発表	句の主要部と補部，文の樹形図，レビュー発表およびディスカッション
第14回	総括，振り返り	文の樹形図，期末レポート

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回，テキストの指定範囲を読み，課題に取り組み，次回の授業で解答を発表したり議論したりするための準備をすること。本授業の準備学習・復習時間は，計4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
以下の文献の一部を授業で使用する予定。
西光 義弘（編集）（1999）．日英語対照による英語学概論：増補版　くろしお出版.
北原 真冬・田嶋 圭一・田中 邦佳（2017）．音声学を学ぶ人のためのPraat入門　ひつじ書房.

【参考書】
参考書は適宜授業内にて紹介する。

【成績評価の方法と基準】
平常点・課題40%，期末レポート40%，レビュー発表20%の割合で評価する。言語学は知識の段階的な学習とともに，問題を解く能力の習得が求められるので，授業参加と課題を重視する。原則として，正当な理由なく4回を超えて授業を欠席した場合または無断で発表を怠った場合は，単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】
開講初年度につき過去にアンケートを実施していない。

【その他の重要事項】
授業計画や運営方針の説明などをしますので，受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞　音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原 真冬・田嶋 圭一 (2011). 音声分析ソフトウェアPraatを用いた聴取実験：F0再合成による刺激作成と実験の制御　日本音響学会誌, 67, 345-350.
田嶋 圭一・川上 紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して　法政大学文学部紀要, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline (in English)】
[Course outline]
This course introduces students to the fundamentals of linguistics, the scientific study of language.
[Learning objectives]
Students should develop an understanding of the basic principles and terminology in subareas of linguistics such as phonetics, phonology, morphology, syntax, semantics, and pragmatics, and be able to solve various problems in these areas. By the end of the course, students should be able to identify and attempt to solve practical problems related to language. Furthermore, students will closely read academic papers pertaining to language, critically evaluate previous research, and present reviews to understand the positioning of studies within the field, and to develop and refine their own research questions.
[Learning activities outside of classroom]
(1) For each class period, students should do the assigned reading, work on homework assignments, and prepare for presentation and discussion for the next class. (2) Toward the end of the course, students should select and read an academic paper pertaining to language, and present its contents to the class. The standard study time required before and after each class is 4 hours total.
[Grading criteria/policy]
Grades will be determined based on class participation and homework (40%), final exam (40%) and review presentation.

PSY500B6（心理学 / Psychology 500）

健康心理学特殊講義

林　容市

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
様々な事象，対象について，健康心理的視点から捉え，該当分野における研究の現状を理解する。

【到達目標】
個人の健康観に関する心理的・身体的・社会的要因およびその相互関係を理解する。
さらに，身体活動が心理的・社会的要因に及ぼす影響を踏まえて，自らの生活を適切に評価し，改善に向けた行動をとることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
本授業では，個人や社会における健康に関する基礎的理論・概念を理解した上で，最新の研究結果を踏まえて健康に関する心理的要因を論議する。毎回，主たるテーマを設け，基礎的な情報の提供を受け，それらを踏まえて参考文献を読み，受講者全体で討論した上で，複数回の発表を行う。これらを通じ，研究の視点および方法について視野を広げ，研究活動に資する知識・技術を獲得する。
また，前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては，授業内で全体に対してフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	オリエンテーション，健康に関する研究の現状の紹介
第2回	健康に対する意識と主観(1)	健康度評価に関する研究の展開
第3回	健康に対する意識と主観(2)	クオリティ・オブ・ライフの意味するもの
第4回	健康に対する意識と主観(3)	健康観や健康行動におけるパラダイムシフト
第5回	様々な対象における健康と心理(1)	生活習慣病や障害と満足度研究と実際的応用
第6回	様々な対象における健康と心理(2)	高齢者のサクセスフルエイジングと健康
第7回	様々な対象における健康と心理(3)	医療者・患者間コミュニケーション，インフォームドコンセント
第8回	様々な対象における健康と心理(4)	女性における健康と心理
第9回	社会環境的側面からの健康(1)	地域・ネットワーキングと保健・医療の新しい展開
第10回	社会環境的側面からの健康(2)	コミュニティにおけるヘルスプロモーションの展開
第11回	健康行動としての身体活動と心理的背景(1)	心理行動的要因と様々な行動変容モデル
第12回	健康行動としての身体活動と心理的背景(2)	身体活動時の感覚と生理的状態
第13回	健康行動としての身体活動と心理的背景(3)	主観的努力観と身体活動・スポーツ
第14回	健康行動としての身体活動と心理的背景(4)	運動習慣・健康行動と自己効力感

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業ごとに指示された調査および論文を事前に読む予習を行う。プレゼンテーションの担当となった場合には，スライドや発表資料の作成を求める場合がある。また，毎回の授業内容についてとりまとめ，次回以降の授業内でのディスカッションに備える必要がある。なお，これらの各回の授業に対する準備および復習等の時間は，それぞれ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
学術雑誌に掲載されている論文を使用し，必要に応じて指示する。その他の資料は適宜授業中に配布する。

【参考書】
田中喜代次，大蔵 倫博 (編)．健康運動の支援と実践．金芳堂．

【成績評価の方法と基準】
授業への参画（出席ではない）状況：50%，プレゼンテーション（資料等の評価も含む）：50%

【学生の意見等からの気づき】
新規開講科目のため，特になし。

【学生が準備すべき機器他】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　生理心理学，応用健康科学，健康心理学
＜研究テーマ＞　運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し、健康維持、減量などに効果的な身体活動を検討する
＜主要研究業績＞　林容市 他．個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係．体力科学57：197-206，2008　ほか

【Outline (in English)】
【Course outline】This course examines contemporary research and major issues related to health from a health-psychological perspective. Students will explore how psychological, physical, and social factors interact in shaping individual views of health.
【Learning Objectives】By the end of the course, students will be able to understand the psychological, physical, and social factors underlying individual views of health and their interrelationships. In addition, students will be able to appropriately evaluate their own lifestyles in light of the effects of physical activity on psychological and social factors and take actions toward improvement.
【Learning activities outside of the classroom】Students are required to read assigned research articles and materials in advance of each class. Students responsible for presentations must prepare slides and related materials beforehand. In addition, students are expected to summarize the content of each class and prepare for subsequent discussions. The standard time required for preparation and review is approximately two hours each.
【Grading Criteria/Policy】Grades will be determined based on class participation (excluding attendance) (50%) and presentations, including the quality of presentation materials (50%).

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究Ⅰ

君嶋　泰明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』（1927年）を読みます。同書でハイデガーは、「存在」という概念がその意味をつねに「時間」から得ている／同概念がつねに「時間」を地平として理解されていると考え、そのことを論証しようとしました。同書をドイツ語原文で精読することを通じて、これがいかなる企図かを理解することを目指します。ドイツ語が読めない受講生は英訳での参加も可です。ドイツ語初学者の参加も歓迎します。
博士後期課程に所属する学生を対象に、上記に加え、博士論文執筆のための研究指導を行います。

【到達目標】
①『存在と時間』のドイツ語原文（ないし英訳）の正確な訳読ができる。
②同書の思想を理解し、自分の理解したことを噛み砕いて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示します。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深めます。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行います。
なお、以下の授業計画のページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	『存在と時間』の概要の説明
第2回	『存在と時間』の読解①	報告と討議（1-3頁）
第3回	『存在と時間』の読解②	報告と討議（4-6頁）
第4回	『存在と時間』の読解③	報告と討議（7-9頁）
第5回	『存在と時間』の読解④	報告と討議（10-13頁）
第6回	『存在と時間』の読解⑤	報告と討議（14-16頁）
第7回	『存在と時間』の読解⑥	報告と討議（17-19頁）
第8回	『存在と時間』の読解⑦	報告と討議（20-22頁）
第9回	『存在と時間』の読解⑧	報告と討議（23-25頁）
第10回	『存在と時間』の読解⑨	報告と討議（26-28頁）
第11回	『存在と時間』の読解⑩	報告と討議（29-31頁）
第12回	『存在と時間』の読解⑪	報告と討議（32-34頁）
第13回	『存在と時間』の読解⑫	報告と討議（35-36頁）
第14回	『存在と時間』の読解⑬	報告と討議（37-39頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨みます。参加者は該当箇所を熟読してきます。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer.
希望者には該当箇所のコピーを配布します。

【参考書】
適宜授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】
担当者としての評価が80%、議論への参加度の評価が20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
現象学、技術の哲学
＜研究テーマ＞
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討、技術と人間の関係の研究
＜主要研究業績＞
・「ハイデガーの存在概念を再構成する」（『哲学研究』613号、2025年）
・「初期ハイデガーの実存思想――キルケゴール受容の観点から」（『法政哲学』20号、2024年）
・「存在要求の要求とそれへの応答――ハイデガー技術論の理解のために」（『Heidegger-Forum』17号、2023年）
・「ボルグマンからハイデガーへ――ハイデガー技術論再考」（『法政哲学』18号、2022年）
・「「存在忘却」とは何か」（『法政大学文学部紀要』82号、2021年）
・「信仰と哲学――ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」（『アルケー』26号、2018年）

【Outline (in English)】
(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's *Sein und Zeit*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand the thought in *Sein und Zeit*.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究 II

君嶋　泰明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
春学期に引き続き、マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』（1927年）を読みます。同書でハイデガーは、「存在」という概念がその意味をつねに「時間」から得ている／同概念がつねに「時間」を地平として理解されていると考え、そのことを論証しようとしました。同書をドイツ語原文で精読することを通じて、これがいかなる企図かを理解することを目指します。ドイツ語が読めない受講生は英訳での参加も可です。ドイツ語初学者の参加も歓迎します。
博士後期課程に所属する学生を対象に、上記に加え、博士論文執筆のための研究指導を行います。

【到達目標】
①『存在と時間』のドイツ語原文（ないし英訳）の正確な訳読ができる。
②同書の思想を理解し、自分の理解したことを噛み砕いて説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示します。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深めます。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行います。
なお、以下の授業計画のページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	『存在と時間』の概要の説明
第2回	『存在と時間』の読解①	報告と討議（40-42頁）
第3回	『存在と時間』の読解②	報告と討議（43-46頁）
第4回	『存在と時間』の読解③	報告と討議（47-49頁）
第5回	『存在と時間』の読解④	報告と討議（50-53頁）
第6回	『存在と時間』の読解⑤	報告と討議（54-56頁）
第7回	『存在と時間』の読解⑥	報告と討議（57-59頁）
第8回	『存在と時間』の読解⑦	報告と討議（60-62頁）
第9回	『存在と時間』の読解⑧	報告と討議（63-65頁）
第10回	『存在と時間』の読解⑨	報告と討議（66-68頁）
第11回	『存在と時間』の読解⑩	報告と討議（69-71頁）
第12回	『存在と時間』の読解⑪	報告と討議（72-74頁）
第13回	『存在と時間』の読解⑫	報告と討議（75-76頁）
第14回	『存在と時間』の読解⑬	報告と討議（77-79頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨みます。参加者は該当箇所を熟読してきます。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer.
希望者には該当箇所のコピーを配布します。

【参考書】
適宜授業で指示します

【成績評価の方法と基準】
担当者としての評価が80%、議論への参加度の評価が20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】
受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
現象学、技術の哲学
＜研究テーマ＞
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討、技術と人間の関係の研究
＜主要研究業績＞
・「ハイデガーの存在概念を再構成する」（『哲学研究』613号、2025年）
・「初期ハイデガーの実存思想――キルケゴール受容の観点から」（『法政哲学』20号、2024年）
・「存在要求の要求とそれへの応答――ハイデガー技術論の理解のために」（『Heidegger-Forum』17号、2023年）
・「ボルグマンからハイデガーへ――ハイデガー技術論再考」（『法政哲学』18号、2022年）
・「「存在忘却」とは何か」（『法政大学文学部紀要』82号、2021年）
・「信仰と哲学――ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」（『アルケー』26号、2018年）

【Outline (in English)】
(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's *Sein und Zeit*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand the thought in *Sein und Zeit*.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究Ⅰ

川﨑　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
音声/音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる力を身につけることを目的とする。

【到達目標】
本授業では、特に音韻分野の第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
論文を読み、毎回全員で発表・議論する演習方式で行う。主に音声・音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。
授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	リサーチメソッド・授業プランの作成	課題論文リストの提示と概要の説明
3	研究計画書の確認	今年度の研究計画を作成する
4	先行研究の発表	学生による先行研究の発表
5	研究計画の発表	研究計画・方法の発表
6	パイロット実験の作成	パイロット実験の作成と実施
7	実験結果のとりまとめ	実験結果の発表
8	論文のドラフト作成（1）	アブストラクトの執筆
9	論文のドラフト作成（2）	グラフ・統計
10	論文のまとめ	結果・結論部分のレビュー
11	ポスターの作成	研究発表用ポスターの作成
12	学生による発表（1）	レビュー論文
13	学生による発表（2）	学生による論文のポスター発表（1）
14	学生による発表（3）	学生による論文のポスター発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】
授業内でその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】
授業での議論への参加：40%
授業内発表・ポスター発表：40%
論文執筆：20%

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　音韻論、第二言語習得
＜研究テーマ＞　音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など
＜主要研究業績＞
川﨑貴子・田中邦佳「L 2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)
川﨑貴子 「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)
Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Through reading SLA Phonetics/Phonology papers, students will learn how to set their research theme and test their hypotheses.
Learning Objectives: This course aims to deepen the student's understanding of theories of SLA and research methodologies in the field and help them find their research topics.
Learning activities outside the classroom: Students must read the assigned papers before class.
Students are required to study for about 4 hours outside of the classroom.
Grading Criteria:
In-class participation/poster presentation：40%
Research abstract：20%

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究 II

川﨑　貴子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
音声/音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することで、第二言語音韻習得研究の研究手法を学ぶ。また、毎週、自身の研究を進めていくことで博士論文の執筆を進めていく。

【到達目標】
本授業では、特に音韻分野の第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
論文を読み、毎回全員で発表・議論する演習方式で行う。主に音声・音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。
授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	リサーチメソッド・授業プランの作成	課題論文リストの提示と概要の説明
3	研究計画書の確認	今年度の研究計画を作成する
4	先行研究の発表	学生による先行研究の発表
5	研究計画の発表	研究計画・方法の発表
6	パイロット実験の作成	パイロット実験の作成と実施
7	実験結果のとりまとめ	実験結果の発表
8	論文のドラフト作成（1）	アブストラクトの執筆
9	論文のドラフト作成（2）	グラフ・統計
10	論文のまとめ	結果・結論部分のレビュー
11	ポスターの作成	研究発表用ポスターの作成
12	学生による発表（1）	レビュー論文
13	学生による発表（2）	学生による論文のポスター発表（1）
14	学生による発表（3）	学生による論文のポスター発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】
授業内でその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】
授業での議論への参加：40%
授業内発表・ポスター発表：40%
論文執筆：20%

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　音韻論、第二言語習得
＜研究テーマ＞　音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など
＜主要研究業績＞
川﨑貴子・田中邦佳「L 2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)
川﨑貴子 「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)
Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Students learn research methodologies in second language phonological acquisition by reading and presenting papers on second language speech/phonology acquisition. Additionally, make progress on doctoral dissertation by advancing personal research weekly.
Learning activities outside the classroom: Students must read the assigned papers before class.
Students are required to study for about 4 hours outside of the classroom.
Grading Criteria:
In-class discussion: 40%
In-class participation/poster presentation：40%
Research paper：20%

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究Ⅰ

尾谷　昌則

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代日本語研究で博士論文を書くための知識および研究方法を学ぶ

【到達目標】
(1)意味論・語用論・統語論の基礎概念を理解し、適切な具体例を用いて説明できるようになる。(2)それらの分野における様々な研究・分析・論証の方法を理解し、自身でも実践できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学会誌などに掲載された学術論文を精読し、言語学における基礎概念や分析方法について学ぶ。
▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。
▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	論文について	論文の構成について
第2回	論文リポート１　名詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第3回	論文リポート２　動詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第4回	論文リポート３　形容詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第5回	論文リポート４　接続詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第6回	論文リポート５　語用論と意味論	受講生による発表・討論
第7回	論文リポート６　語用論推論	受講生による発表・討論
第8回	論文リポート７　ポライトネス	受講生による発表・討論
第9回	論文リポート８　インポライトネス	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート９　対人的モダリティ	受講生による発表・討論
第11回	論文リポート１０　対事的モダリティ	受講生による発表・討論
第12回	論文レポート１１　若者ことば	受講生による発表・討論
第13回	論文レポート１２　文末表現	受講生による発表・討論
第14回	論文レポート１３　ネットスラング	受講生による発表・討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（２時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと（１時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（１時間程度）。

【テキスト（教科書）】
読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】
『新編　認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キーターム事典』　（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】
宿題40％　発言等受講態度30％　期末レポート30％

【学生の意見等からの気づき】
博士論文のテーマだけに絞らず、言語学全般についての理解・知識が深められるコースワークになるよう、幅広い内容の研究論文を取り上げるよう心がけている。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
＜研究テーマ＞
　認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
＜主要研究業績＞
　「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）
　「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）
　「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第7号, pp.17-30. 2005年）
　『構文ネットワークと文法　―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline (in English)】
We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.
The objectives of this class are as follows. (1)To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.
Students will be expected to have completed the required assignments before each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
Grading will be decided based on asignments (40%), the quality of the students' experimental performance in the lab (30%), and the final report (30%).

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究 II

尾谷　昌則

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代日本語の意味を分析するための手法を学ぶ

【到達目標】
(1)意味論の専門用語・諸概念について理解し、説明できる。(2)意味を研究するための様々な分析手法を理解し、実践できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学会誌などに掲載された学術論文を精読し、意味研究における基礎概念や分析方法について学ぶ。
▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。
▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	意味を分析する上での諸注意
第2回	論文リポート１　多義	受講生による発表・討論
第3回	論文リポート２　メタファー	受講生による発表・討論
第4回	論文リポート３　メトニミー	受講生による発表・討論
第5回	論文リポート４　スキーマとプロトタイプ	受講生による発表・討論
第6回	論文リポート５　意味ネットワーク	受講生による発表・討論
第7回	論文リポート６　拡張と動的用法基盤モデル	受講生による発表・討論
第8回	論文リポート７　文法化と意味変化	受講生による発表・討論
第9回	論文リポート８　主体化と文法化	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート９　語用論的強化と文法化	受講生による発表・討論
第11回	論文リポート１０　接続詞と文法化	受講生による発表・討論
第12回	論文レポート１１　接尾辞と文法化	受講生による発表・討論
第13回	論文レポート１２　否定表現の拡張	受講生による発表・討論
第14回	論文レポート１３　コーパスと定量的分析	受講生による発表・討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（２時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと（１時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（１時間程度）。

【テキスト（教科書）】
読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】
『認知言語学研究の方法 ― 内省・コーパス・実験』（辻幸夫監修、ひつじ書房）
『日本語教育のためのコーパス調査入門』（李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子著、くろしお出版）
『新編　認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キーターム事典』　（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】
宿題40％　発言等受講態度30％　期末レポート30％

【学生の意見等からの気づき】
論文の具体的な書き方が理解できるよう、また博士課程らしい専門性が身につけられるよう、言語（意味）変化について深く理解するための研究論文を取り上げるよう心がけた。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
　現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
＜研究テーマ＞
　認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
＜主要研究業績＞
　「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）
　「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）
　「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第7号, pp.17-30. 2005年）
　『構文ネットワークと文法　―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline (in English)】
We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.
The objectives of this class are as follows. (1)To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.
Students will be expected to have completed the required assignments before each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
Grading will be decided based on asignments (40%), the quality of the students' experimental performance in the lab (30%), and the final report (30%).

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究Ⅰ

伊海　孝充

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本講義では、世阿弥伝書のうち、『花伝』第二物学条々を読む。世阿弥伝書の概略と『花伝』研究の現状を確認した上で、物学条々の諸本比較・校訂本文作成を行ない、作品研究に結びつける問題点を探る。

【到達目標】
本講義では、『花伝』第二物学条々の精読を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法の習得を目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点の見つけ、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式によって進める。参加者で当該資料を分担し、諸本比較・注釈等を行なう。また、その資料の解釈をもとに、自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談
第2回	世阿弥伝書概略（1）	世阿弥伝書の種類
第3回	世阿弥伝書概略（2）	先行研究
第4回	『花伝』概略（1）	構成と諸本
第5回	『花伝』概略（2）	先行研究
第6回	物学条々「女」	校異と校訂本文の作成
第7回	物学条々「老人」	校異と校訂本文の作成
第8回	物学条々「直面」「法師」	校異と校訂本文の作成
第9回	物学条々「物狂」	校異と校訂本文の作成
第10回	物学条々「修羅」	校異と校訂本文の作成
第11回	物学条々「神」	校異と校訂本文の作成
第12回	物学条々「鬼」	校異と校訂本文の作成
第13回	物学条々「唐事」	校異と校訂本文の作成
第14回	まとめ	本講義内容の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業内に指示する。

【参考書】
授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】
講義での発表　７０％
講義での発言　３０％

【学生の意見等からの気づき】
専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞能楽
＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011年）「「江戸時代初期観世流整版謡本群の研究（三）」（『能楽研究』49号、2025年3月）

【Outline (in English)】
Course Outline: In this lecture we will study the theory of Noh mimicry as described in “Kaden”. In the process, we learn about the outline of the scrolls written by Zeami.
Learning Objectives: The goals of this course are to learn how to treat classical literature and how to read variant kana through exposure to a large number of sources.
Learning Activities Outside of the Classroom: Your study time will be more than four hours for a class.
Grading Criteria/Policy: Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究 II

伊海　孝充

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この講義では、春学期から引き続き、世阿弥伝書を通して、能の物真似理論を研究する。具体的には、以下の２点。
①　世阿弥の物真似理論の展開を考察する。
②　具体的な作品を用いて、世阿弥の物真似理論を考察する。

【到達目標】
本講義では、世阿弥伝書と作品の分析を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法の習得を目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、世阿弥伝書と作品を関係づけて分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
演習形式によって進める。参加者で当該資料を分担し、伝書・作品を分析する。また、発表者には「結論」がある考察を示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談
第2回	『花伝』第二物学条々の概略	春学期の復習
第3回	世阿弥伝書概略	春学期の復習
第4回	「先能其物成」	『花鏡』を中心に
第5回	「似せぬ位」	『花伝第七別紙口伝』を中心に
第6回	「似得る位」	『拾玉得花』を中心に
第7回	「無主風」「有主風」	『至花道』以降の伝書
第8回	「女」の物真似	受講者による作品分析
第9回	「老人」の物真似	受講者による作品分析
第10回	「修羅」の物真似	受講者による作品分析
第11回	「物狂」の物真似	受講者による作品分析
第12回	「神」の物真似	受講者による作品分析
第13回	「鬼」の物真似	受講者による作品分析
第14回	まとめ	本講義内容の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
授業内に指示する。

【参考書】
授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】
講義での発表　７０％
講義での発言　３０％

【学生の意見等からの気づき】
専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学
＜研究テーマ＞能楽
＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011年）「「江戸時代初期観世流整版謡本群の研究（三）」（『能楽研究』49号、2025年3月）

【Outline (in English)】
Course Outline: This lecture examines the theory of mimicry in Noh based on the treatise written by Zeami. It also applies this theory to the analysis of specific works.
Learning Objectives: The goals of this course are to learn how to treat classical literature and how to analyze Noh plays on my own.
Learning Activities Outside of the Classroom: Your study time will be more than four hours for a class.
Grading Criteria/Policy: Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究 I

髙田　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業で゛は、グローバルな視点から、日本社会の「成り立ち」や、現在の「変化」をとらえる視座をやしない、それらを研究をしていくためのアプ゜ローチや方法論についてセミナー形式で学ぶ゛。グローバ゛ルな視点とは、他国・他地域との「比較」、あるいは他国との「トランスナショナるなつなが゛り」から日本社会を調査、分析するもので゛ある。こうした視点を念頭に置きなが゛ら、本授業て゛は、特に以下の課題をカバ゛ーする: ①テーマ と問いの設定、②先行研究調査、③研究計画、④理論とデ゛ータの関係。また、広く質的調査の方法を習得し、受講者の学位論文のテーマを明確化、発展させていく。

【到達目標】
受講者は、以下の知識の習得を通し゛てオリジ゛ナルな研究を計画し、学位論文を執筆で゛きるようになる。
- 日本の戦後・現代の社会と思想を調査、研究するための視座と方法を養う。
-「比較」と「トランスナショナル」のアプローチを学ぶ。
- 日本社会の諸問題についての理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、T 卒業論文/卒業研究/卒業制作 /Thesis

【授業の進め方と方法】
本授業は、セミナー形式で゛実施する。講義、文献講読、研究報告をベ゛ースに討論をおこなう。参加者自身の経験、文化的な背景を織り交ぜ゛なが゛ら日本の社会や思想について論じ゛、受講者たちか゛互いに学び゛合う場を形成する。従って、報告発表へのフィート゛バ゛ックについても、主にデ゛ィスカッションの場において実施する。その他、個別にフィート゛バ゛ックが゛必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダ゛クション	授業の進め方、研究について
第2回	研究計画 I：問題意識	なぜ研究するのか？
第3回	研究計画 II：問いの設定	良い問い、悪い問い
第4回	研究計画 III：先行研究整理	先行研究レビューの方法と必要性
第5回	研究計画 IV：理論	理論とは何か？ 理論と実証の関係性
第6回	研究計画 V：方法論	比較の方法・トランスナショナルな方法
第7回	質的調査を学ぶ I：質的調査とは何か？	質的調査の特徴と量的調査との違い
第8回	質的調査を学ぶ II：エスノグラフィー	参与観察の基礎を学ぶ
第9回	質的調査を学ぶ III：インタビュー	誰にどのように話を聞くか
第10回	質的調査を学ぶ IV：文献調査	理論・思想研究の調査方法
第11回	質的調査を学ぶ V：資料調査	歴史（社会学）の調査方法
第12回	論文指導 I：進展	研究の進展を報告
第13回	論文指導 II：中間報告	直面する課題の相談
第14回	論文指導 III：最終	研究計画書の仕上げを相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポ゜イントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 受講者は、自身の関心テーマを探し、掘り下げ゛、それについてまとめ、報告する準備をおこなう。
- 本授業の準備(予習)および゛復習時間は、各 2 時間を標準とするが゛、文献および゛研究報告をする週には、さらに 2 時間程度の準備の時間が゛必要な場合が゛ある。

【テキスト（教科書）】
上野千鶴子、2018年『情報生産者になる』筑摩書房
質的データ分析のテキストについては授業初回に指定する。

【参考書】
- Robert, Alford, 1998. The Craft of Inquiry: Theories, Methods, Evidence, Oxford University Press.
- Ragin, Charles. 2010. Constructing Social Research: The Unity and Diversity of Method. Sage.

【成績評価の方法と基準】
- 授業参加・発言: 20%
- 文献・個人研究プ゜レセ゛ンテーション: 40%
- 最終レポ゜ート: 40%

【学生の意見等からの気づき】
各々の研究へのフィードバックの機会を十分に設ける。

【学生が準備すべき機器他】
パーソナル・コンピューター

【その他の重要事項】
授業計画についての詳細は初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】
< 専門領域>
政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学
< 研究テーマ>
- 日本の市民社会と社会運動
- トランスナショナリズムと日本の社会変容
< 近年の主要著書>
-「「第一世界」と「第三世界」のはざまで ―日本の60 年代における「第三世界論」との出会いと戸惑い―」『国際日本学』第21号、2024年、27-58頁。
-「トランスナショナルな日本研究に向けて」『国際日本学』第20号、2023年、21-45頁。
-「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 ―誰に向けて、どのように日本を語るか ―」『国際日本学』第 19 号、2022年、27-60 頁。
-「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法 ―」『国際日本学』第 18 号、2021 年、3-36 頁。
- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarno□ci, 2020, pp. 137 - 155.
- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.
- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture , 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor &Francis.

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【Outline (in English)】
In this course, we will learn various approaches and methods for understanding the development and changes in Japanese society from a global perspective. A global perspective means researching and analyzing Japanese society through comparison with other countries and regions and exploring transnational connections and linkage between Japan and foreign countries. The course will particularly discuss the following topics for social research - finding a research topic, literature reviews, planning research, and the relationship between theory and data. Also, we will learn different methods for qualitative research and explore and deepen students' dissertation topics.
[Learning activities outside of classroom]
Students are required to read assinged text in advance and prepare for discussion.
The presenter needs to carefully read the texts and prepare slides that include the main argument of
each text and questions to discuss during class.
Generally, students need about two hours of advance study to prepare for the class. However, you will need at least two more hours when you are assigned to present.
[Grading Criteria /Policy]
Class Participation and Discussion: 20%
Presentation: 30%
Final Report: 50%

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究 II

髙田　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業で゛は、グ゛ローバ゛ルな視点から、日本社会の「成り立ち」や、現在の「変化」をとらえる視座をやしない、それらを研究をしていくためのアプ゜ローチや方法論について学ぶ゛。グ゛ローバ゛ルな視点とは、他国・他地域との「比較」、あるいは「トランスナショナルなつなが゛り」 から日本社会を調査、分析するもので゛ある。こうした視点を念頭に置きなが゛ら、本授業で゛は、特に以下の課題をカバ゛ーする: 1デ゛ータ収集、2質的デ゛ータ分析、3アウトプ゜ット。また、質的データ分析の方法を広く学び、各人の学位論文プロジェクトの進展を図る。

【到達目標】
受講者は、以下の知識の習得を通じ゛てオリジ゛ナルな研究を計画し、学位論文を執筆で゛きるようになる。
- 日本の戦後・現代の社会と思想を調査、研究するための質的データ分析について学ぶ。
-「比較」と「トランスナショナル」のアプローチを学ぶ゛。
- 日本社会の諸問題についての理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar、T 卒業論文/卒業研究/卒業制作 /Thesis

【授業の進め方と方法】
本授業は、セミナー形式で゛実施する。講義、文献講読、研究報告をベ゛ースに討論をおこなう。参加者自身の経験、文化的な背景を織り交ぜ゛なが゛ら日本の社会や思想について論じ゛、受講者たちか゛互いに学び゛合う場を形成する。従って、報告発表へのフィート゛バ゛ックについても、主にデ゛ィスカッションの場において実施する。その他、個別にフィート゛バ゛ックが゛必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方
第2回	研究実践 I：データ分析	「何を調べたのか」についての報告
第3回	研究実践 II：構成	論文の構成をどのように組み立てるか
第4回	研究実践 III：書き方	論文の執筆実践
第5回	研究実践 IV：校正と修正	論文の仕上げ方
第6回	研究実践 IV：アウトプット	プレゼンテーション技法
第7回	データ分析 I：会話分析	インタビュー調査の分析
第8回	データ分析 II：言説分析	ディスコースの分析方法
第9回	データ分析 III：ドキュメント分析	資料分析
第10回	データ分析 IV：比較分析	比較を通じて明らかにする
第11回	データ分析 V：データと理論	理論とデータの再統合
第12回	論文指導 I：進展	研究の進展を報告
第13回	論文指導 II：中間報告	直面する課題の相談
第14回	論文指導 III：最終	論文の仕上げを相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポ゛イントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 受講者は、自身の関心テーマを探し、掘り下げ゛、それについてまとめ、報告する準備をおこなう。
- 本授業の準備(予習)および゛復習時間は、各 2 時間を標準とするが゛、文献および゛研究報告をする週には、さらに 2 時間程度の準備の時間が゛必要な場合が゛ある。

【テキスト（教科書）】
- 上野千鶴子、2018年『情報生産者になる』筑摩書房
質的データ分析のテキストについては授業初回に指定する。

【参考書】
- Robert, Alford, 1998. The Craft of Inquiry: Theories, Methods, Evidence, Oxford University Press.
- Ragin, Charles. 2010. Constructing Social Research: The Unity and Diversity of Method. Sage.

【成績評価の方法と基準】
- 授業参加・発言: 20%
- 文献・個人研究プ゜レゼ゛ンテーション: 40%
- 最終レポ゜ート: 40%

【学生の意見等からの気づき】
各々の研究へのフィードバックの機会を十分に設ける。

【学生が準備すべき機器他】
パーソナル・コンピュータ

【その他の重要事項】
授業計画についての詳細は初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】
< 専門領域>
政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学
< 研究テーマ>
- 日本の市民社会と社会運動
- トランスナショナリズムと日本の社会変容
< 近年の主要著書>
-「「第一世界」と「第三世界」のはざまで ―日本の60 年代における「第三世界論」との出会いと戸惑い―」『国際日本学』第21号、2024年、27-58頁。
-「トランスナショナルな日本研究に向けて」『国際日本学』第20号、2023年、21-45頁。
-「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 ―誰に向けて、どのように日本を語るか ―」『国際日本学』第 19 号、2022年、27-60 頁。
-「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法 ―」『国際日本学』第 18 号、2021 年、3-36 頁。
- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarno□ci, 2020, pp. 137 - 155.
- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.
- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture , 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor &Francis.

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【Outline (in English)】
In this course, we will learn various approaches and methods for understanding the development and changes in Japanese society from a global perspective. A global perspective means researching and analyzing Japanese society through comparison with other countries and regions and exploring transnational connections and linkage between Japan and foreign countries. The course will particularly discuss the following topics for social research - gathering data, analyzing qualitative data, and outputs. Also, we will deepen our knowledge about Japan and, at the same time, further explore individuals' research projects through reading books and articles on various historical and global changes in Japanese society and politics. Also, we will learn different methods for qualitative analysis and further develop participants' individual projects.
[Learning activities outside of classroom]
Students are required to read assinged text in advance and prepare for discussion.
The presenter needs to carefully read the texts and prepare slides that include the main argument of
each text and questions to discuss during class.
Generally, students need about two hours of advance study to prepare for the class. However, you will need at least two more hours when you are assigned to present.
[Grading Criteria /Policy]
Class Participation and Discussion: 20%
Presentation: 30%
Final Report: 50%

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究Ⅰ

福元　広二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
語用論や社会言語学に関する研究で博士論文を書くための知識および研究方法を学びます。

【到達目標】
学生は、語用論および社会言語学における主要な概念や理論を十分に理解し、説明できるようになります。また、博士論文のために明確な研究課題を設定したり、適切な研究方法を選択して、データ収集や分析をすることができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
研究書や学術論文を精読し、言語学における基礎概念や分析方法について学びます。
必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行います。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡します。
課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の説明
第2回	論文講読	論文（1）
第3回	論文講読	論文（2）
第4回	論文講読	論文（3）
第5回	論文講読	論文（4）
第6回	論文講読	論文（5）
第7回	プレゼンテーション	第1回
第8回	プレゼンテーション	第2回
第9回	論文講読	論文（6）
第10回	論文講読	論文（7）
第11回	論文講読	論文（8）
第12回	プレゼンテーション	第3回
第13回	プレゼンテーション	第4回
第14回	まとめ、総括	授業の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で学んだ内容を振り返り、授業の復習を行ってください。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しない

【参考書】
特になし

【成績評価の方法と基準】
発表、ディスカッションへの参加、プレゼンテーション、タームペーパーで、総合的に判断します。(タームペーパー40%、平常点60%)

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
英語学・英語史
＜研究テーマ＞
初期近代英語期の文法
＜主要研究業績＞
「第6章　Shakespeareの英語」
『英語教師のための英語史』
開拓社 (2018)

【Outline (in English)】
This course provides students with the knowledge and research methods necessary to write a doctoral dissertation in the fields of pragmatics and sociolinguistics. Students will explore key theories, current research trends, and methodological approaches.

By the end of this course, students will be able to demonstrate a comprehensive understanding of key concepts and theories in pragmatics and sociolinguistics.

Your study time will be more than four hours for a class.

Final grade will be calculated according to the following process: term-end paper (40%), and in-class contribution (60%)

OTR700B7（その他 / Others 700）

国際日本学研究 II

福元　広二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
語用論や社会言語学に関する研究で博士論文を書くための知識および研究方法を学びます。

【到達目標】
学生は、語用論および社会言語学における主要な概念や理論を十分に理解し、説明できるようになります。また、博士論文のために明確な研究課題を設定したり、適切な研究方法を選択して、データ収集や分析をすることができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
学術論文を精読し、言語学における基礎概念や分析方法について学びます。
必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行います。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡します。
課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の説明
第2回	論文講読	論文（1）
第3回	論文講読	論文（2）
第4回	論文講読	論文（3）
第5回	論文講読	論文（4）
第6回	論文講読	論文（5）
第7回	プレゼンテーション	第1回
第8回	プレゼンテーション	第2回
第9回	論文講読	論文（6）
第10回	論文講読	論文（7）
第11回	論文講読	論文（8）
第12回	プレゼンテーション	第3回
第13回	プレゼンテーション	第4回
第14回	まとめ、総括	授業の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で学んだ内容を振り返り、授業の復習を行ってください。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
使用しない

【参考書】
特になし

【成績評価の方法と基準】
発表、ディスカッションへの参加、プレゼンテーション、タームペーパーで、総合的に判断します。(タームペーパー40%、平常点60%)

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
英語学・英語史
＜研究テーマ＞
初期近代英語期の文法
＜主要研究業績＞
「第6章　Shakespeareの英語」
『英語教師のための英語史』
開拓社 (2018)

【Outline (in English)】
This course provides students with the knowledge and research methods necessary to write a doctoral dissertation in the fields of pragmatics and sociolinguistics. Students will explore key theories, current research trends, and methodological approaches.

By the end of this course, students will be able to demonstrate a comprehensive understanding of key concepts and theories in pragmatics and sociolinguistics.

Your study time will be more than four hours for a class.

Final grade will be calculated according to the following process: term-end paper (40%), and in-class contribution (60%)

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

国際日本学特殊講義ＢⅠ

滝浦　真人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、それのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。春学期は、文字、音、語、文といった言語学的単位に沿いながら、ひと味違った角度からトピックを眺めていく。

【到達目標】
(1)日本語が漢字をどのように取り入れたかを理解し説明できるようになる。
(2)日本語の音声をコミュニケーションの観点で理解し説明できるようになる。
(3)言語の変化というものの正しい捉え方を理解し説明できるようになる。
(4)「ハ」と「ガ」を語り方の構えの相違として理解し説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、チャットやGoogleフォームなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	日本語の「性格」とはどういうことかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第2回	漢字と日本語	日本語が漢字をどのように取り入れたかを見て、そこから漢字使用の日本語らしさを見出す。
第3回	日本語の表記	漢字・ひらがな・カタカナを併用することの意味を、それぞれの経緯に遡って考える。
第4回	日本語の語種	日本語の語彙を構成する和語・漢語・外来語という語種のもつ機能的相違を探る。
第5回	日本語の音とリズム	モーラと音節の相違を理解した上で、日本語のリズムがどう構成されるか考察する。
第6回	音象徴と日本語	日本語で好まれる擬音・擬態語を支える音象徴を普遍と特殊の側面から考察する。
第7回	日本語のオノマトペ	擬音・擬態語の日本語的な特徴を検討しつつ、それが活用されてきた様を概観する。
第8回	連濁と日本語①	連濁が音声現象に見えてそうではないことを、生起／不生起環境の考察から見出す。
第9回	連濁と日本語②	連濁の機能を理解した上で、アクセントなどによる類似の機能についても検討する。
第10回	ラ抜き言葉	「日本語の乱れ」と言われたラ抜き言葉が、長い言語変化の一局面だったことを理解する。
第11回	指示詞コソア	指示詞コソアの３系列は“近中遠”ではないことを押さえた上で、その使われ方を理解する。
第12回	終助詞	なぜ現代日本語で終助詞が欠かせないのかを明らかにし、その語用論的機能を理解する。
第13回	「ハ」と「ガ」の語り	日本語の特徴である助詞「ハ」と「ガ」を対比的に取り上げ、語り方の構えとして考察する。
第14回	日本語でもの言うこと	まとめを兼ねて、もの言うことの“日本語らしさ”がどこにあるかを検討していく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】
教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】
滝浦真人編（2020）『日本語学入門』放送大学教育振興会
ほか授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業内での課題やディスカッション等）　60％
期末レポート　40％

【学生の意見等からの気づき】
学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】
昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語学・語用論・コミュニケーション論
＜研究テーマ＞ポライトネス、日本語語用論
＜主要研究業績＞（参考書に挙げたもの以外で）
滝浦真人（2016）『日本語リテラシー』放送大学教育振興会
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

【Outline (in English)】
・Class Title
Characteristics of the Japanese Language I
・Outline and Objectives
Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by its native speakers. In the spring semester, we will examine linguistic functional aspects, focusing on writing systems, phonetics and phonemics, vocabulary, and grammar from unique and alternative viewpoints.
・Goals
(1) Understand and explain how the Japanese language adopted Chinese characters.
(2) Comprehend and describe Japanese phonetics and phonemics from a communicative perspective.
(3) Develop a proper understanding of linguistic change and describe it adequately.
(4) Understand and explain differences between "wa" and "ga" as distinct discourse strategies.
・Work to Be Done Outside of Class (Preparation, etc.)
Students are expected to spend approximately two hours on preparation and review for each class session.

Preferably, they should review the reference books in advance and reinforce their understanding by reading relevant sections before and after class.
Additionally, students should revisit the handouts distributed in class as starting points for further consideration and discussion.
・Grading Criteria
Class participation (assignments, discussions, etc.): 60%
Final report: 40%

LIN500B7（言語学 / Linguistics 500）

国際日本学特殊講義ＢⅡ

滝浦　真人

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、それのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。秋学期は、日本語に特徴的な対人関係表現をはじめ「語用論的」な面に着目して、“人が言葉で何をなすか？ ”について、中国語などとも比較しながら考えていく。

【到達目標】
(1)日本語を語用論的に見るための基礎知識を理解する。
(2)ポライトネスの考え方を理解し説明することができる。
(3)対人関係の表現に関わる諸現象を考察することができる。
(4)現代日本語の成立事情を理解し他言語と比較考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、チャットやGoogleフォームなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	日本語の「性格」とはどういうことかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第2回	語用論の基本	グライスの協調の原理と会話の原則をはじめ、語用論の基礎知識を再確認する。
第3回	効率と配慮	伝達効率と対人配慮が反比例の関係にあることを確認し、具体的に考察する。
第4回	ポライトネス	ポライトネスの理論的枠組みを理解し、日本語のポライトネス的性格を考察する。
第5回	呼称	対人関係専用の手段として呼称をとらえ、理論的と具体的の両面から考察する。
第6回	あいさつ	あいさつという行為の意味に立ち返り、あいさつの意味論と語用論を考察する。
第7回	感謝・謝罪	非常に基本的な言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第8回	依頼・勧誘と応諾・断り	典型的な言語行為の１つを取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第9回	褒め／褒められ・フェイスワーク	フェイスに直接関わる言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第10回	敬語（意味論）	対人関係専用手段としての敬語を取り上げ、それが対人的な〈距離〉の表現として機能していることを理解する。
第11回	敬語（語用論）	敬語は人間関係の像を表現するとの考えに立った上で、敬語の語用論を考察する。
第12回	授受表現	授受動詞を3系列有する日本語話者が、それによって何をやりとりしているのか考察する。
第13回	標準語と日本語	近代日本語の成立事情による影響を確認し、日本語のありかたについて考える。
第14回	日本語はどこへ向かっているか？	“気になる日本語”がいつも取り沙汰され、敬語などの“馬鹿丁寧化”が感じられる日本語の行く末を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】
教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
椎名美智・滝浦真人編（2022）『「させていただく」大研究』くろしお出版

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業内での課題やディスカッション等）　60％
期末レポート　40％

【学生の意見等からの気づき】
学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】
授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】
昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語学・語用論・コミュニケーション論
＜研究テーマ＞ポライトネス、日本語語用論
＜主要研究業績＞（参考書に挙げたもの以外で）
滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
滝浦真人（2005）『日本の敬語論　ポライトネス理論からの再検討』大修館書店
加藤重広・滝浦真人編（2016）『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房

【Outline (in English)】
・Class Title
Characteristics of the Japanese Language II
・Outline and Objectives
Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by its native speakers. In the fall semester, we will examine pragmatic aspects such as politeness and honorifics, focusing on interpersonal expressions unique to Japanese. We will also make comparative considerations with other languages such as Chinese.
・Goals
(1) Acquire foundational knowledge for analyzing Japanese from a pragmatic perspective.
(2) Understand and explain the concept of politeness.

(3) Examine various phenomena related to interpersonal expressions.
(4) Understand the historical development of modern Japanese and conduct comparative analysis with other languages.
・Work to Be Done Outside of Class (Preparation, etc.)
Students are expected to spend approximately two hours on preparation and review for each class session.
Preferably, they should review the reference books in advance and reinforce their understanding by reading relevant sections before and after class.
Additionally, students should revisit the handouts distributed in class as starting points for further consideration and discussion.
・Grading Criteria
Class participation (assignments, discussions, etc.): 60%
Final report: 40%

CUA500B7（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500）

国際日本学特殊講義ＣⅠ

ヤナ・ウルバノヴァー

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の古典文学と和歌、沖縄の琉歌から読み取れる日本の伝統文化について考えていきます。日本の文学と沖縄の文学の比較だけでなく、東洋と西洋の文学、文化、考え方も紹介し、それぞれの特徴について学んでいきます。グローバル世界に置かれている日本の伝統文化の位置付けに関する意識を深め、考察力を促します。受講生には、授業内に行われる発表や最後に提出して頂くことになるエッセイを書くために、授業で取り上げたテーマに関する資料を十分に復習し、考察を深めることが求められる。授業内のディスカッションへの積極的な参加および発表、期末のエッセイの提出がこのコースの評価基準となります。

【到達目標】
この授業を通じて次のスキルが獲得できます
1. 代表的な文学作品、表現、修辞法について学ぶことで、その文化や歴史的な背景に関する理解が深まります
2. 日本と沖縄、また東洋と西洋の文化、文学、世界観の特徴に関する知見を養うことができます
3. 学んだことや気付いたことについて各自が意見交換、議論、プレゼンテーションすることによって幅広い考察力を身に付けることができます
Through this course you will acquire the following skills:
1. You will deepen your understanding of Japanese culture, history and literature by studying classical Japanese literary works together with literary devices and expressions
2. You will further enhance your understanding of culture and literature by comparing literary works and cultures of Japan and Okinawa as well as comparing them with Western philosophical and literary approaches
3. You will learn how to express your ideas in speaking and writing by engaging in discussions and presentations and submitting a final essay on a designated topic

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
プリントや映像資料を使用した講義形式での授業を基本としますが、コースの後半において、受講生には、各自が学んだ知識を最大限に活用し、関心のある関連分野について考察した成果を発表してもらう機会を設けます。また、最終回には授業で取り上げたテーマに関してのエッセイを提出して頂きます。
課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行います。そこでは受講生からの質問も受け付けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、受講の心構え、成績評価の方法、発表の日程についての説明
第2回	日本文学の概要	奈良時代と平安時代を中心とした日本古典文学の代表的な作品やその時代背景の紹介
第3回	日本人の自然観	自然を愛する日本人、四季の意味、陰陽思想。自然に見る日本および西洋の文化・考え方の違い
第4回	日本美意識における主要な概念	兼好法師による『徒然草』から読み取れる日本文化や文学における美意識の四つの主要な概念
第5回	日本の神話世界	『古事記』に見られる古代日本の世界観
第6回	西洋の神話世界	ギリシャ神話、聖書から伝わるそれぞれの世界観
第7回	日本と西洋の神話世界の比較	日本の神話、ギリシャ神話、聖書から伝わるそれぞれの世界観をめぐるディスカッション
第8回	沖縄の歴史と文化	琉球列島における歴史と、文化の発達について（琉球王国から沖縄県へ）
第9回	沖縄の言葉①	琉球語の中にある沖縄語
第10回	沖縄の言葉②	琉歌に代表される言葉と表記法
第11回	学生の発表	本コースに関連するテーマについての学生の発表
第12回	琉歌の世界	琉歌の特徴（言葉、形式、作者、伴奏など）、古典音楽と民謡
第13回	恩納なべと吉屋つる	琉歌の伝説的な女流歌人二人の生涯と代表的な琉歌の紹介
第14回	まとめ	これまでの授業で取り上げたテーマを振り返る。エッセイの提出。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
前回の授業で学んだことを復習し、授業内に行われる発表および最後に提出するエッセイを書くための十分な考察を進めて頂きたい。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
Please revise all the materials distributed in class, as they will form the basis for the discussions and final essay. In addition, each student will be asked to deliver an oral presentation on a designated topic and to submit a final essay at the end of the semester.
Preparatory study and review time for this class are 2 hours each.

【テキスト（教科書）】
テキストは指定せず、プリントを使用します。

【参考書】
他の参考書については授業の進行にそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への参加、毎時提出するリアクションペーパー、ディスカッションへの参加等、約30%）、発表（40%）、エッセイ（30%）により評価します。
Grading criteria:
- Active participation in class (expressing opinions, engaging in discussions): 30%
- Oral presentation: 40%
- Final essay: 30%

【学生の意見等からの気づき】
国際的な視点で、伝統文化の重要性および異文化の存在について考察し、意見の交換ができる環境作りに努めます。受講生からのコメントを歓迎します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞

【＜専門領域＞】
日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【＜研究テーマ＞】
琉歌の表現研究―和歌やオモロとの比較

【＜主要研究業績＞】
●Portrayal of the Spiritual Otherworld in Okinawan Poetry in Light of the Transition from Epic to Lyric （沖縄の歌謡（琉歌、オモロ）における スピリチュアルな他界の描写―叙事から抒情への変移に関する考察―）（『言語と文化』21号、言語・文化センター、2024年1月）
●「琉歌における「天」について」（『日本文學誌要』107号、法政大学国文学会、2023年3月）
●「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123号（第52巻1号）、沖縄文化協会、2019年6月）
●「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122号（第51巻2号）、沖縄文化協会、2018年3月）
●「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121号（第51巻1号）、沖縄文化協会、2017年8月）
●The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs.（「沖縄の歌である琉歌における四季について－古典の和歌と沖縄のオモロとの比較－」）（『Studia Orientalia Slovaca (SOS)（スロバキアの東洋研究)』第15巻1号、Comenius University, Department of East Asian Studies（コメニウス大学東アジア研究学科）、2016年）
●『琉歌の表現研究―和歌・オモロとの比較から―』（森話社、2015年）
●「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015年）

【Outline (in English)】
This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.

CUA500B7（文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500）

国際日本学特殊講義ＣⅡ

ヤナ・ウルバノヴァー

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の古典文学と和歌、沖縄の琉歌から読み取れる日本の伝統文化について考えていきます。日本の文学と沖縄の文学の比較だけでなく、東洋と西洋の文学、文化、考え方も紹介し、それぞれの特徴について学んでいきます。グローバル世界に置かれている日本の伝統文化の位置付けに関する意識を深め、考察力を促します。受講生には、授業内に行われる発表や最後に提出して頂くことになるエッセイを書くために、授業で取り上げたテーマに関する資料を十分に復習し、考察を深めることが求められる。授業内のディスカッションへの積極的な参加および発表、期末のエッセイの提出がこのコースの評価基準となります。

【到達目標】
この授業を通じて次のスキルが獲得できます
1. 代表的な文学作品、表現、修辞法について学ぶことで、その文化や歴史的な背景に関する理解が深まります
2. 日本と沖縄、また東洋と西洋の文化、文学、世界観の特徴に関する知見を養うことができます
3. 学んだことや気付いたことについて各自が意見交換、議論、プレゼンテーションすることによって幅広い考察力を身に付けることができます
Through this course you will acquire the following skills:
1. You will deepen your understanding of Japanese culture, history and literature by studying classical Japanese literary works together with literary devices and expressions
2. You will further enhance your understanding of culture and literature by comparing literary works and cultures of Japan and Okinawa as well as comparing them with Western philosophical and literary approaches
3. You will learn how to express your ideas in speaking and writing by engaging in discussions and presentations and submitting a final essay on a designated topic

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
プリントや映像資料を使用した講義形式での授業を基本としますが、コースの後半において、受講生には、各自が学んだ知識を最大限に活用し、関心のある関連分野について考察した成果を発表してもらう機会を設けます。また、最終回には授業で取り上げたテーマに関してのエッセイを提出して頂きます。
課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行います。そこでは受講生からの質問も受け付けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、受講の心構え、成績評価の方法、発表の日程についての説明
第2回	和歌の修辞法	和歌の序詞、枕詞、掛詞の役割
第3回	やまとうたと西洋の詩	和歌と西洋の詩における伝統的な技法と発想の比較
第4回	物語の世界	作り物語（『竹取物語』）と歌物語（『伊勢物語』）を中心に物語というジャンルの紹介
第5回	琉歌と和歌の表現－「面影」をめぐって	和歌における「面影」の琉歌への影響と琉歌が持つ独自性
第6回	琉歌と和歌の表現－「影」をめぐって	「影」を扱った和歌と琉歌の類似性と特徴
第7回	琉歌と和歌の表現－四季をめぐって	季節にまつわる和歌と琉歌の表現の比較
第8回	琉歌と和歌の表現－「冬」をめぐって	「冬」を詠んだ琉歌の独自性と和歌からの影響
第9回	琉歌と和歌の表現－「雪」をめぐって	和歌、琉歌、オモロに見られる「雪」に対する発想
第10回	学生の発表	本コースに関連するテーマについての学生の発表
第11回	琉歌とオモロにおける大和のイメージ	琉歌とオモロから窺える大和の姿
第12回	琉歌における他界観	琉歌における「天」の特徴
第13回	琉歌の構造に関する特徴	琉歌における句切れや体言止めなどの特徴
第14回	まとめ	これまでの授業で取り上げたテーマを振り返る。エッセイの提出。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
前回の授業で学んだことを復習し、授業内に行われる発表および最後に提出するエッセイを書くための十分な考察を進めて頂きたい。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
Please revise all the materials distributed in class, as they will form the basis for the discussions and final essay. In addition, each student will be asked to deliver an oral presentation on a designated topic and to submit a final essay at the end of the semester.
Preparatory study and review time for this class are 2 hours each.

【テキスト（教科書）】
テキストは指定せず、プリントを使用します。

【参考書】
他の参考書については授業の進行にそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業への参加、毎時提出するリアクションペーパー、ディスカッションへの参加等、約30%）、発表（40%）、エッセイ（30%）により評価します。
Grading criteria:
- Active participation in class (expressing opinions, engaging in discussions): 30%
- Oral presentation: 40%
- Final essay: 30%

【学生の意見等からの気づき】
国際的な視点で、伝統文化の重要性および異文化の存在について考察し、意見の交換ができる環境作りに努めます。受講生からのコメントを歓迎します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞

【＜専門領域＞】
日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【＜研究テーマ＞】
琉歌の表現研究―和歌やオモロとの比較

【＜主要研究業績＞】
●Portrayal of the Spiritual Otherworld in Okinawan Poetry in Light of the Transition from Epic to Lyric （沖縄の歌謡（琉歌、オモロ）における スピリチュアルな他界の描写―叙事から抒情への変移に関する考察―）（『言語と文化』21号、言語・文化センター、2024年1月）
●「琉歌における「天」について」（『日本文學誌要』107号、法政大学国文学会、2023年3月）
●「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123号（第52巻1号）、沖縄文化協会、2019年6月）
●「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122号（第51巻2号）、沖縄文化協会、2018年3月）

●「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121号（第51巻1号）、沖縄文化協会、2017年8月）
●The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs.（「沖縄の歌である琉歌における四季について－古典の和歌と沖縄のオモロとの比較－」）（『Studia Orientalia Slovaca (SOS)（スロバキアの東洋研究）』第15巻1号、Comenius University, Department of East Asian Studies（コメニウス大学東アジア研究学科）、2016年）
●『琉歌の表現研究―和歌・オモロとの比較から―』（森話社、2015年）
●「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015年）

【Outline (in English)】
This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.

PHL500B7（哲学 / Philosophy 500）

国際日本学特殊講義ＤⅠ

髙田　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業で゛は、「日本を超えて日本を捉える思考と手法」の習得を目指し、欧米の社会理論・社会思想の重要文献とそれに関連する日本の思想・理論、そして日本社会について学ぶ゛。欧米社会の現実から生まれた理論と日本をベ゛ースとした理論の差異を捉えつつ、欧米理論の日本やその他非西洋圏への 応用 (不) 可能性を考察する。春学期のテーマは、「文化・文明・近代化」である。前半は、ノルベルト・エリアスによる西洋をモデルとした文明化概念を検討する。後半は、S.N.アイゼンシュタットによる歴史社会学の分析を通じて日本の文明化・近代化を考察する。日本・西洋を比較しつつ、現在の社会学的到達点から見て、文明・近代概念がどこまで有効かを検証していく。

【到達目標】
-文化社会学・近代化の理論を学ぶ。
-西洋の文明化・近代化、日本の文明化・近代化のプロセスを学ぶ。
-西洋と日本の違いについて考えを深める。
-西洋理論の日本への応用(不)可能性を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は、セミナー形式で゛実施する。講義、文献講読、プレゼンテーションをベ゛ースに討論をおこなう。学際的、国際的な視点から、互いに学び合う空間を形成する。報告発表へのフィード゛バ゛ックについても、主にデ゛ィスカッションの場において実施する。その他、個別にフィード゛バ゛ックが゛必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業概要説明
第2回	『文明化の過程・上』序論・序言	西洋的文明化
第3回	『文明化の過程・上』第１部・第１章	ドイツの文化・文明
第4回	『文明化の過程・上』第１部・第２章	フランスの文化・文明
第5回	『文明化の過程・上』第２部・第１章～３章	「礼儀」の変遷
第6回	『文明化の過程・上』第２部・第５章～７章	生理的欲求と文明化
第7回	Multiple Modernities	複数の近代化論
第8回	『日本文明論的考察1』序文・第１章	日本の謎
第9回	『日本文明論的考察1』第２章	明治国家と近代日本社会
第10回	『日本文明論的考察1』第３章	近現代日本
第11回	『日本文明論的考察1』第４章	近代日本社会の試練
第12回	『日本文明論的考察1』第５章	「不調和」、紛争、抗議とそれらの影響
第13回	『日本文明論的考察1』第６章	近現代日本の政治・社会システム
第14回	『日本文明論的考察3』第１６章	文明間比較

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポイントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 本授業の準備(予習) および復習時間は、各2 時間を標準とするが、文献および研究報告をする週には、さらに2 時間程度の準備の時間が必要な場合がある。

【テキスト（教科書）】
ノルベルト・エリアス『文明化の過程・上』法政大学出版局
S.N. アイゼンシュタット『日本比較文明論的考察』岩波書店
その他の使用テキストは授業内に提示する。

【参考書】
適宜授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】
- 授業参加・発言: 20%
- プレゼンテーション: 30%
- 最終レポート: 50%

【学生の意見等からの気づき】
報告へのフィードバックを適宜行なう。

【学生が準備すべき機器他】
パーソナルコンピューター

【その他の重要事項】
授業の詳細については初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】
< 専門領域>
政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学
< 研究テーマ>
- 日本の市民社会と社会運動
- グローバル化と日本の社会変動
< 近年の主要著書>
-「「第一世界」と「第三世界」のはざまで―日本の60 年代における「第三世界論」との出会いと戸惑い―」『国際日本学』第21号、2024 年、27-58 頁。
-「トランスナショナルな日本研究に向けて」『国際日本学』第20号、2023 年、21-45 頁。
-「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと国際日本学―誰に向けて、どのように日本を語るか―」『国際日本学』第19 号、2022 年、27-60 頁。
-「グローバル地域研究としての国際日本学―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法―」『国際日本学』第18 号、2021 年、3-36 頁。
- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarno☒ci, 2020, pp. 137 - 155.
- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.
- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture , 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor &Francis.

【Outline (in English)】
[Learning Objectives]

In this course, we will learn various approaches and methods for understanding the development and changes in Japanese society from a global perspective. A global perspective means researching and analyzing Japanese society through comparison with other countries and regions, and exploring transnational connections and linkages between Japan and foreign countries. The course will particularly discuss the following topics for social research - finding a research topic, literature reviews, planning research, and the relationship between theory and data. Also, we will learn different methods for qualitative research and explore and deepen students' dissertation topics.
[Learning activities outside of the classroom]
Students are required to read assinged text in advance and prepare for discussion.
The presenter needs to carefully read the texts and prepare slides that include the main argument of each text and questions to discuss during class.
Students are required to develop their research topic and prepare to present their progress to the class.
Generally, students need about two hours of advance study to prepare for the class. However, you will need at least two more hours when you are assigned to present.
[Grading Criteria /Policy]
Class Participation and Discussion: 20%
Presentation: 30%
Final Report: 50%

PHL500B7（哲学 / Philosophy 500）

国際日本学特殊講義ＤⅡ

髙田　圭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、「日本を超えて日本を捉える思考と手法」の習得を目指し、欧米の社会理論、社会思想の重要文献とそれに関連する日本の理論・思想を学ぶ。欧米社会の現実から生まれた理論と日本をベースとした理論の差異を考察しつつ、欧米理論の日本やその他非西洋圏への応用（不）可能性を考察する。秋学期は、人種（race）をテーマに、この分野の古典であるフランツ・ファノンの思想を学ぶ。後半では、ファノンの思想をもとに日本の人種主義の特徴について考察する。ディスカッションを通じて欧米の人種主義と日本のそれとを対比的に論じながら、人種がもたらす差別の政治について理解を深める。

【到達目標】
-ファノンの人種論を学ぶ。
-日本の人種主義の特徴を捉える。
-西洋と日本の人種概念の差異を考察する。
-西洋理論の日本への応用(不)可能性を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
本授業は、セミナー形式で゛実施する。講義、文献講読、プレゼンテーションをベ゛ースに討論をおこなう。学際的、国際的な視点から、互いに学び合う空間を形成する。報告発表へのフィード゛バ゛ックについても、主にデ゛ィスカッションの場において実施する。その他、個別にフィード゛バ゛ックが゛必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業テーマと授業計画
第2回	『黒い皮膚・白い仮面』序文・はじめに・第１章	黒人と言語
第3回	『黒い皮膚・白い仮面』第２章・第３章	黒い皮膚
第4回	『黒い皮膚・白い仮面』第４章・第５章	依存コンプレックス
第5回	『黒い皮膚・白い仮面』第６章・第７章	精神病理学
第6回	『黒い皮膚・白い仮面』結論	ファノンの認知
第7回	『日本の人種主義』はじめに・第１章	欧米の人種概念
第8回	『日本の人種主義』第２章	日本の人種概念
第9回	『日本の人種主義』第３章	人種混淆
第10回	『日本の人種主義』第４章	多様な人種主義
第11回	『日本の人種主義』第５章	差別
第12回	『日本の人種主義』第６章	偏見とステレオタイプ
第13回	『日本の人種主義』第７章	アイデンティティ
第14回	まとめ 総括ディスカッション	総括ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポ゛イントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 本授業の準備(予習)および゛復習時間は、各 2 時間を標準とするか゛、文献および゛研究報告をする週には、さらに 2 時間程度の準備の時間が゛必要な場合が゛ある。

【テキスト（教科書）】
フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』（みすず書房、2021年）
河合優子『日本の人種主義ートランスナショナルな視点からの入門書』（青弓社、2024年）
その他の参考テキストは適宜授業内で提示する。

【参考書】
小野正嗣 、NHK「100分de名著」2月はファノン『黒い皮膚・白い仮面』（NHK出版、2021年）
その他の参考テキストは適宜授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】
- 授業参加・発言: 20%
- プレゼンテーション: 30%
- 最終レポ゛ート: 50%

【学生の意見等からの気づき】
適宜報告についてのフィードバックを行なう。

【学生が準備すべき機器他】
パーソナル・コンピューター

【その他の重要事項】
授業の詳細については初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】
政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学
< 研究テーマ>
- 日本の市民社会と社会運動
- トランスナショナリズムと日本の社会変容 < 近年の主要著書> -「「第一世界」と「第三世界」のはざまで ―日本の60 年代における「第三世界論」との出会いと戸惑い―」『国際日本学』第21号、2024年、27-58頁。 -「トランスナショナルな日本研究に向けて」『国際日本学』第20号、2023年、21-45頁。 -「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 ―誰に向けて、どのように日本を語るか ―」『国際日本学』第 19 号、2022年、27-60 頁。 -「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本を とらえる、思考と手法 ―」『国際日本学』第 18 号、2021 年、3-36 頁。
- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarno☒ci, 2020, pp. 137 - 155.
- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.
- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture , 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor &Francis.

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【None】
None

【Outline (in English)】
[Learning Objectives]

In this course, we will learn various approaches and methods for understanding the development and changes in Japanese society from a global perspective. A global perspective means researching and analyzing Japanese society through comparison with other countries and regions, and exploring transnational connections and linkages between Japan and foreign countries. The course will particularly discuss the following topics for social research - finding a research topic, literature reviews, planning research, and the relationship between theory and data. Also, we will learn different methods for qualitative research and explore and deepen students' dissertation topics.
[Learning activities outside of the classroom]
Students are required to read assinged text in advance and prepare for discussion.
The presenter needs to carefully read the texts and prepare slides that include the main argument of each text and questions to discuss during class.
Students are required to develop their research topic and prepare to present their progress to the class.
Generally, students need about two hours of advance study to prepare for the class. However, you will need at least two more hours when you are assigned to present.
[Grading Criteria /Policy]
Class Participation and Discussion: 20%
Presentation: 30%
Final Report: 50%

HIS500B7（史学 / History 500）

国際日本学特殊講義ＥⅠ

得能　壽美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
琉球からみた東アジアとの関係史を、琉球・中国・日本の基本的な史料講読を中心に考察する。

【到達目標】
前近代琉球を考えるためには、その歴史的環境から、中国・日本の史料、当然ながら琉球の史料にあたらなくてはならない。史料講読は琉球史料を中心に進め、一定程度の理解と読解能力を身に着け、琉球史を考える眼を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
前半は琉球史の概括的な理解と、史料の全体的な把握にあたる。後半は、琉球史料から、その解読方法を学びつつ、東アジアにおける関係史をみる。基本的には講義だが、史料講読に際しては、習熟度によっては担当部分を決めて報告を求めることも考えたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の紹介と、琉球・中国・日本の関係史を概括的にみる
2	日本史と琉球史の史料論	日本史研究と琉球史研究における史料論と、その相違
3	古琉球期史料にみる対外関係（中国・日本古代史料）	古代の琉球をめぐる中国と日本の史料について
4	古琉球史料にみる対外関係（歴代宝案・朝鮮王朝実録・琉球史料）	中世の琉球をめぐる中国・朝鮮・琉球の史料について
5	近世琉球史料にみる対外関係（島津関係史料）	1609年以降の島津による琉球統治関係史料について
6	近世琉球史料にみる対外関係（琉球史料）	いわゆる日中両属に関する琉球史料について
7	史料講読　中山世譜・中山世鑑・球陽	史料講読。首里王府編纂史料にみる近世琉球のありかた
8	史料講読　羽地仕置	史料講読。羽地朝秀の施策にみる琉球の立場と政治的転換
9	史料講読　御教条	史料講読。蔡温の琉球史の認識と立場
10	史料講読　農務帳と絵画史料	史料講読。近世琉球の農業政策と絵画にみる農業
11	史料講読　尚家文書	史料講読。王家文書の概要と利用
12	史料講読　評定所文書	史料講読。首里王府最高議決機関の史料
13	史料講読　琉球家譜史料	史料講読。琉球士族の家譜を読む
14	史料講読　地方史料と在台湾琉球関係史料	史料講読。琉球内政関係と、台湾で確認されている琉球関係史料について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
全体的に下記で示す参考書を読む。毎回の授業では史料等を配布する。該当する史料の概要について、事前に調べる。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。史料等を配布する。

【参考書】
『沖縄からアジアが見える』比嘉政夫　岩波ジュニア新書
『アジアのなかの琉球王国』高良倉吉　吉川弘文館（歴史文化ライブラリー47）
『琉球王国』高良倉吉　岩波新書
『沖縄入門－アジアをつなぐ海域構想』浜下武志　ちくま新書

【成績評価の方法と基準】
平常点50％　レポート50％
毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極的にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、それぞれの研究テーマに即しつつ、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認し、さらに史料による考察を加えてほしい。

【学生の意見等からの気づき】
毎回、時間の許す限り、史料の読み方などを基礎から説明する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　琉球史　近世史
＜研究テーマ＞　八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論
＜主要研究業績＞
『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク－』単著（榕樹書林　2007年　316頁）
『日本近世生活絵引　奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター　2014）
『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（沖縄県石垣市教育委員会　2015）

【Outline (in English)】
The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.
Learning activities outside of classroom
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Your required study time is at least one hour for each class meeting.
Grading Criteria /Policies
Final grade:
In-class participation: 50％　Report: 50％

HIS500B7（史学 / History 500）

国際日本学特殊講義ＥⅡ

得能　壽美

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
琉球からみた東アジアとの関係史を、具体的な論考で使用した史料を確認しつつ考察を進める。論文作成のための課題設定、史料調査の方法、史料の所在なども、具体的事例をもとに講義する。

【到達目標】
史料について理解と読解能力を身に着けられるようにする。日本史とは異なる琉球史の方法と史料によって、新たな研究テーマの創成を考えられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
具体的な論考に使用した史料を講読しつつ、近世琉球の生産と税制、物流を、具体的な産物をとりあげて、東アジアにおよぶ広がりをみる。史料講読から新たな研究テーマを創成し、その報告を求めることも考えたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の概要と、琉球・中国・日本の関係史を概説する
2	近世琉球産品の由来と島産化Ⅰ	東アジアにおける技術などの移動
3	近世琉球産品の由来と島産化Ⅱ	琉球国内の島産化の展開と商品流通
4	ナマコⅠ	琉球関係史料にみる生産と上納
5	ナマコⅡ	薩摩・幕府への献上と中国との貿易
6	海人草	近世琉球の専売制、近現代における生産・流通
7	上布	人頭税と八重山上布
8	木綿Ⅰ	伝搬と栽培の広がり
9	木綿Ⅱ	近世における利用と商品としての展開
10	ジュゴン	近世の税制・捕獲・信仰
11	イノシシ	近世おける害獣駆除と利用
12	牛馬	近世の利用と規制
13	アダン	近世における上納と民衆生活での利用
14	パインナップル	近代の導入事情と展開

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
全体的に下記で示す参考書を読む。

【テキスト（教科書）】
「移動するナマコと変化するその役割」（得能、『琉球・沖縄研究』第３号）など、それぞれのテーマに関連した論文のコピーを配布する。

【参考書】
『琉球王国』高良倉吉　岩波新書
『琉球・沖縄史の世界』豊見山和行（編）　吉川弘文館（日本の同時代史18）
『近世八重山の民衆生活史』得能壽美　榕樹書林

【成績評価の方法と基準】
平常点50％　レポート50％
毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認するとともに、新たな研究テーマについて提案してほしい。

【学生の意見等からの気づき】
毎回、時間の許す限り、史料の読み方を解説する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　琉球史　近世史
＜研究テーマ＞　八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論
＜主要研究業績＞
『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク－』単著（榕樹書林　2007年　316頁）
『日本近世生活絵引　奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター　2014）
『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（石垣市教育委員会2015）

【Outline (in English)】
The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.
Learning activities outside of classroom
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Your required study time is at least one hour for each class meeting.
Grading Criteria /Policies
Final grade:　In-class participation: 50％　Report: 50％

HIS500B7（史学 / History 500）

国際日本学特殊講義ＦⅠ

明田川　融

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
沖縄戦（1945年）から80年以上が、そして沖縄の「本土復帰」（1972年）からも半世紀以上がたつ。いわゆる本土の、沖縄に対する米国の軍事植民地意識、そして「構造的差別」は消え去っていない。むしろ、そうした意識や差別は、より執拗になってさえいるように思われる。本授業では、沖縄・日本本土・米国の、ときに引き合い、ときに反撥し合う力学が、戦後沖縄の形成にどのような影響を及ぼしたかを解き明かす糸口を学生とともに探りたい。

【到達目標】
学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
以下に列挙するトピックを道標として、2022年に刊行された『沖縄県史　各論編　第七巻　現代』（以下『沖縄県史』と略記する。書誌データの詳細は「テキスト（教科書）」欄を参照のこと）を精読したい。
第2回以降、授業のはじめに、前回授業で教員が提起した課題等に対する個々の受講生の応答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	沖縄戦中～沖縄戦後	『沖縄県史』第1部概説および第1章を精読する（以下、精読する箇所のみ記す）。
第2回	「自治」のはじまり	第1部第2章
第3回	混乱期の暮らし	第1部第3章
第4回	占領初期の教育・文化政策	第1部第4章
第5回	恒久基地化の決定	第1部第5章およびコラム
第6回	琉球政府	第2部概説および第1章
第7回	海兵隊の沖縄移駐	第2部第2章
第8回	島ぐるみ闘争	第2部第3章およびコラム
第9回	「自立経済」をめざして	第2部第4章
第10回	沖縄統治のアメとムチ	第2部第5章およびコラム
第11回	統治手法の転換と宣撫政策	第3部概説および第1章
第12回	日本政府の援助と施政権返還問題	第3部第2章
第13回	自治・人権と復帰運動	第3部第3章およびコラム
第14回	ベトナム戦争と〝基地沖縄〟	第3部第4章および第5章

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参考までに、本学学則に鑑みた場合、この授業の準備学習・復習時間は4時間以上が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かずで、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じることが望ましい。
「国際日本学特殊講義ＦⅡ」をも履修することが望ましい。

【テキスト（教科書）】
沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史　各論編　第七巻　現代』（沖縄県教育委員会、2022年）。
くわえて、古典のなかの古典といえますが、さしあたり手ごろな通史として中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』（岩波書店、1976年）、および宮里政玄ほか編著『戦後沖縄の政治と法―1945-72年』（東京大学出版会、1975年）を、また、沖縄をめぐる日米関係史について書かれた研究として、河野康子『沖縄返還をめぐる政治と外交―日米関係史の文脈』（東京大学出版会、1994年）、宮里『日米関係と沖縄―1945-1972』（岩波書店、2000年）、沖縄国際大学公開講座委員会編集・発行『基地をめぐる法と政治』（2006年）、我部政明『戦後日米関係と安全保障』（吉川弘文館、2007年）、平良好利『戦後沖縄と米軍基地　「受容」と「拒絶」のはざまで　1945-1972年』（法政大学出版局、2012年）を挙げておきます。近年の示唆にとむ研究成果として、鳥山淳『沖縄基地社会の起源と相克　1945-1956』（勁草書房、2013年）および櫻澤　誠『沖縄現代史―米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』（中央公論新社、2015年）、さらに野添文彬『沖縄返還後の日米安保―米軍基地をめぐる相克』吉川弘文館、2016年もぜひ一読されたい。
ここ2、3年の研究成果として、野添文彬『沖縄米軍基地全史』（吉川弘文館、2020年）、前田勇樹・古波藏契・秋山道宏編『つながる沖縄近現代史―沖縄のいまを考えるための十五章と二十のコラム』（ボーダーインク、2021年）、平良好利・高江洲昌哉編『戦後沖縄の政治と社会　「保守」と「革新」の歴史的位相』（吉田書店、2022年）、宮城 修『ドキュメント　〈アメリカ世〉の沖縄』（岩波書店、2022年）をも参照されたい。

【参考書】
拙著『沖縄基地問題の歴史―非武の島、戦の島』（みすず書房、2008年）。

【成績評価の方法と基準】
出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100％）

【学生の意見等からの気づき】
アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムにアクセスできるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】
受講生は学習支援システムを小マメにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　日米関係史、日本政治外交史
＜研究テーマ＞　日米地位協定の成立過程
沖縄と日米安保体制の歴史
日本と核兵器との関係史
＜主要研究業績および刊行物＞
・『日米行政協定の政治史―日米地位協定研究序説―』法政大学出版局、1999年。
・『沖縄基地問題の歴史―非武の島、戦の島―』みすず書房、2008年（第30回沖縄協会・沖縄研究奨励賞[社会科学部門]受賞）。
・『日米地位協定―その歴史と現在―』みすず書房、2017年。
・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第1回配本分、全7巻）現代史料出版、2017年。
・「核兵器と『国民の特殊な感情』」1～6（雑誌『みすず』に2013年6月号より2015年8月まで不定期連載）。
・ジョン・ハーシー『ヒロシマ　増補版』法政大学出版局、2003年（共訳）。
・ジョン・W. ダワー著『昭和　戦争と平和の日本』みすず書房、2010年（監訳）。
・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ　「パックス・アメリカーナ」か「パックス・アジア」か』ＮＨＫ出版、2014年（共訳）。
・『占領期年表 1945-1952年　沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015年（監修）。
近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する〝国民感情〟と政府の安全保障政策との連関について研究をまとまるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。
また、1950年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしえたことと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。
現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授および河野康子・法政大学名誉教授ならびに平良好利・中京大学准教授らによる監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集成の編集補佐がおもな仕事となっている。この仕事においては、第1回配本（全7巻）および第5回配本（全6巻）の解説を執筆した。

【Outline (in English)】
【Course outline】
Eighty years have passed from the battle in Okinawa, and fifty years from the reversion of Okinawa. Okinawa still seems to be under U.S. military colonialism. It suffers structural discrimination by the people of Japan proper as well. In post-war Okinawa and foreign relations 1, we consider and discuss the dynamism that formed post-war Okinawa. In this class, post-war means the period from the battle in Okinawa to the end of the cold war.
【Learning objectives】
The goal of this course is to understand Ryukyu/Okinawa and its foreign relations after World War II.
【Learning activities outside of classroom】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading criteria/policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
In class contribution:100%

HIS500B7（史学 / History 500）

国際日本学特殊講義ＦⅡ

明田川　融

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
　これまで沖縄には在日米軍専用基地が著しく偏在してきた。その基地には米軍が排他的管理権を行使し、さらに、基地の外の軍用機事故等に対する捜査・検証から日本側が排除されるといったことも少なくない。また、1972年の施政権返還まで、米軍構成員・軍属・それらの家族に琉球民裁判所の裁判権は及ばず、施政権返還後も日本側の裁判権行使はままならない。本授業で学生は、これらの事柄に象徴される「戦後」沖縄が負わされた――おもに施政権返還後の――歴史を考察することになる。

【到達目標】
　学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
　以下に列挙するテーマを道標として、『沖縄県史　各論編　第七巻　現代』（以下『沖縄県史』と略記する。書誌データの詳細は「テキスト（教科書）」欄を参照のこと）を読み進めて行きたい。
　第２回以降、授業のはじめに、前回授業で教員が提起した課題等に対する個々の受講生の応答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第１回	施政権返還へ向けた動き	『沖縄県史』第４部概説および第１章を精読する（以下、精読する箇所のみ記す）。
第２回	米軍基地と返還	第４部第２章およびコラム
第３回	復帰対策要綱・特別措置・振興法	第４部第３章およびコラム
第４回	開発と住民運動	第４部第４章
第５回	米軍基地存置と自衛隊の配備	第４部第５章
第６回	沖縄振興と観光業	第５部第１章およびコラム
第７回	返還後の基地問題	第５部第２章
第８回	沖縄戦の記録と記憶	第５部第３章
第９回	基地・開発・環境	第５部第４章
第10回	島嶼と離島の歴史・現状・課題	第５部第５章およびコラムならびに第６部第５章
第11回	沖縄戦の影	第６部第１章
第12回	異文化と伝統、県民意識の移り変わり	第６部第２章およびコラムならびに第３章
第13回	基地の島の教育と労働	第６部第４章
第14回	移民と世界の「ウチナーンチュ」	第６部第６章

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
　参考までに、本学学則に鑑みた場合、この授業の準備学習・復習時間は4時間以上が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設を〝粛々と〟強行している名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じることが望ましい。
　「国際日本学特殊講義ＦⅠ」をも履修することが望ましい。

【テキスト（教科書）】
　沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史　各論編　第七巻　現代』（沖縄県教育委員会、2022年）。

【参考書】
　「国際日本学特殊講義ＦⅠ」の参考書として挙げたものの他に、近年に刊行された以下の文献を挙げておく。
　拙著『日米地位協定　その歴史と現在』（みすず書房、2017年）。
　山本章子『日米地位協定　在日米軍と「同盟」の70年』（中央公論新社、2019年）。
　信夫隆司『米軍基地権と日米密約　奄美・小笠原・沖縄返還を通して』（岩波書店、2019年）。
　信夫隆司『米兵はなぜ裁かれないのか』（みすず書房、2021年）。

【成績評価の方法と基準】
　出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100％）

【学生の意見等からの気づき】
　アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】
　学習支援システムにアクセスできるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】
　受講生は学習支援システムを小マメにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　日米関係史、日本政治外交史
＜研究テーマ＞　日米地位協定の成立過程
　沖縄と日米安保体制の歴史
　日本と核兵器との関係史
＜主要研究業績および刊行物＞
・『日米行政協定の政治史―日米地位協定研究序説―』法政大学出版局、1999年。
・『沖縄基地問題の歴史―非武の島、戦の島―』みすず書房、2008年（第30回沖縄協会・沖縄研究奨励賞[社会科学部門]受賞）。
・『日米地位協定―その歴史と現在―』みすず書房、2017年。
・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第１回配本分、全７巻）現代史料出版、2017年。
・「核兵器と『国民の特殊な感情』」1～6（雑誌『みすず』に2013年6月号より2015年8月まで不定期連載）。
・ジョン・ハーシー『ヒロシマ　増補版』法政大学出版局、2003年（共訳）。
・ジョン・W. ダワー著『昭和　戦争と平和の日本』みすず書房、2010年（監訳）。
・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ　「パックス・アメリカーナ」か「パックス・アジア」か』ＮＨＫ出版、2014年（共訳）。
・『占領期年表 1945-1952年　沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015年（監修）。
　近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する〝国民感情〟と政府の安全保障政策との連関について研究をまとまるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。
　また、1950年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしえたことと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。
　現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授および河野康子・法政大学名誉教授ならびに平良好利・中京大学准教授らによる監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集成の編集補佐がおもな仕事となっている。この仕事においては、第１回配本（全７巻）および第５回配本（全６巻）の解説を執筆した。

【Outline (in English)】
【Course outline】
　United States military bases in Japan unevenly exist in Okinawa prefecture. U.S. armed forces exercise exclusive rights over them. And the Japanese authorities often can not exercise the right of search or inspection with respect to the accidents of U.S. military aircraft. Before the reversion of Okinawa, Okinawan court could not have criminal jurisdiction over the members of U. S. armed forces, civilian component and their dependents. Even after the reversion, Japanese court often cannot exercise the criminal jurisdiction over them. In post-war Okinawa and foreign relations 2, we consider the U.S.-Japan Status of Forces Agreement (SOFA or Chii-Kyotei) providing the conditions of the stationing of the U.S. military forces. And focusing SOFA problems, we discuss the history of the U.S.-Japan-Ryukyu/Okinawa relations.
【Learning objectives】
　The goal of this course is to understand Ryukyu/Okinawa and its foreign relations after reversion of Okinawa.
【Learning activities outside of classroom】
　Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading criteria/policy】
　Your overall grade in the class will be decided based on the following
　In class contribution:100%

ART500B7（芸術学 / Art studies 500）

国際日本学特殊講義ＧⅠ

高橋　悠介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本の中世には、聖徳太子関連寺院を中心に、太子の伝記が連綿として編まれた。こうした太子伝には、聖徳太子をめぐる伝承のみならず、仏教教説や寺院における注釈学、太子関連の諸寺院の動向など、様々な背景がうかがえる。また、聖徳太子の伝記は絵画化されて絵解きが行われ、特徴的な太子像も造像された。ここでは、後世への影響力の大きかった『聖徳太子伝暦』と、鎌倉後期の『正法輪蔵（聖法輪蔵）』という二つの太子伝から、特徴的な場面を取り上げて、読み比べつつ、これらと関連の深い太子絵伝や太子像などの造形作品について検討したい。なお、『正法輪蔵（聖法輪蔵）』の記事が欠けている部分は、他の文保本系太子伝を参照する。

【到達目標】
・図像資料とその背景にある文献資料を、複合的に読解する技術を身につける。
・寺院圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
・日本の寺院における学問についての基礎知識を身に付け、中世の聖徳太子信仰をはじめ、日本の仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
最初は、聖徳太子伝の展開に関する概要と太子関連の造形作品、講読にあたっての基本的な知識について、講義形式で授業を進める。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。また、広く仏教美術に関わる展覧会の見学を、校外学習として予定している。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要・進め方について説明。
第2回	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本・太子絵伝の展開	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本、聖徳太子の伝記の造形化（彫刻・絵画）について講義。
第3回	仏教美術に関する校外学習	都内の美術館・博物館見学を予定。
第4回	太子三十三歳条（一）	山城楓野関係の記事を講読し、その造形を比較。
第5回	太子三十三歳条（二）	太子未来記について検討。
第6回	太子三十三歳条（三）	太子未来記と中世の未来記の検討。
第7回	仏教美術に関する校外学習	都内の美術館・博物館見学を予定。
第8回	太子三十四歳条	鞍部鳥の造像記事を講読し、その造形を比較。
第9回	太子三十五歳条（一）	勝鬘経講讃の記事を講読。
第10回	太子三十五歳条（二）	勝鬘経講讃の記事を検討し、その造形を比較。
第11回	太子三十六歳条（一）	衡山持経の記事を講読。
第12回	太子三十六歳条（二）	衡山持経の記事を検討し、その造形を比較。
第13回	太子三十六歳条（三）	衡山関係説話の講読。
第14回	太子三十六歳条（四）	衡山関係説話を検討し、その造形を比較。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各２時間を標準とします。指定した講読文献の当該記事をよく読んで利解すると共に、関連する複数の造形を見て比較検討すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。

【参考書】
・『東大寺図書館蔵文明十六年書写『聖徳太子伝暦』影印と研究』（桜楓社、1985年）
・『日本庶民文化史料集成』第二巻（三一書房、1974年）
・慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『中世聖徳太子伝集成』（勉誠出版、2005年）
・『日本の美術442 中世の童子形』（至文堂2003年）
・図録『聖徳太子展』（NHK・NHK プロモーション、2001年）
・図録『聖徳太子ー日出づる処の天子』（日本経済新聞社、2021年）
その他、授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表５０%、平常点５０%。

【学生の意見等からの気づき】
該当なし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学
＜研究テーマ＞ 中世仏教文学・芸能・寺院資料論
＜主要研究業績＞
・『禅竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014 年）
・「荒神の図像について―如来荒神を中心に―」（仏教美術論集第二巻『図像学Ⅰ―イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、2012年5 月）
・「律院称名寺と聖徳太子伝―釋了敏の写本を中心に」（『説話文学研究』52 号、2017 年9 月）
・「湛睿説草と『発心集』『唐物語』」(『古典文学研究の対象と方法』花鳥社、2024年3月）

【Outline (in English)】
This course deals with the biography and image of Prince Shotoku.
At the end of the course, students are expected to become able to read and understand ancient Buddhist documents.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Grading will be decided based on lab reports (50%), and in-class contribution (50%).

ART500B7（芸術学 / Art studies 500）

国際日本学特殊講義ＧⅡ

高橋　悠介

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
仏教図像集として知られる『覚禅抄』のうち、「造塔」の巻の記事を講読しつつ検討する。『覚禅抄』は、金胎房覚禅（1143-?）が編纂した図像集で、『百巻鈔』とも呼ばれ、先行する『図像抄』『別尊雑記』等もふまえた、真言密教の事相や図像に関する重要資料となっている。経典や儀軌、古記録からの引用や先例・故実などが記されており、それぞれの本文を丁寧に読み、関連する図像や先行する図像集も比較しながら、検討したい。

【到達目標】
・『覚禅抄』の講読を通して、日本中世の仏教文献を読解する技術を習得する。
・文献と図像資料を複合的に読解する技術を身につける。
・『覚禅抄』を通して、日本の仏教文化や図像に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
S 演習/ゼミ /Seminar

【授業の進め方と方法】
最初は、『覚禅抄』や仏教図像についての基本的な知識について、講義形式で授業を行う。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。授業内で議論できなかったことも、リアクションペーパー等の方法により意見を集め、次回に取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義の概要・進め方について説明。
第2回	『覚禅抄』の概要と仏教図像	『覚禅抄』を講読する上での基礎知識について講義。
第3回	仏教美術に関する校外学習	都内の美術館・博物館等の見学を予定。
第4回	『覚禅抄』「造塔」造塔法具書～塔与率都婆差別事	造塔法具書～塔与率都婆差別事の記事等の講読・検討。
第5回	『覚禅抄』「造塔」塔荘厳～小塔事	塔荘厳～小塔事の記事等の講読・検討。
第6回	仏教美術に関する校外学習	都内の美術館・博物館等の見学を予定。
第7回	『覚禅抄』「造塔」芥子計塔事～薄福人可造塔事	芥子計塔事～薄福人可造塔事の記事等の講読・検討。
第8回	『覚禅抄』「造塔」以七宝可造塔事～安住長者栴檀塔事	以七宝可造塔事～安住長者栴檀塔事の記事等の講読・検討。
第9回	『覚禅抄』「造塔」八萬四千里水精塔事～塔安置法花経事	八萬四千里水精塔事～塔安置法花経事の記事等の講読・検討。
第10回	仏教美術に関する校外学習	都内の美術館・博物館等の見学を予定。
第11回	『覚禅抄』「造塔」塔安尊勝陀羅尼事～雁落所立率都婆事	塔安尊勝陀羅尼事～雁落所立率都婆事の記事等の講読・検討。
第12回	『覚禅抄』「造塔」得名～五輪塔	得名～五輪塔の記事等の講読・検討。
第13回	『覚禅抄』「造塔」身体塔同事～表白・同釈	身体塔同事～表白・同釈の記事等の講読・検討。
第14回	『覚禅抄』「造塔」開眼～波斯匿王延寿事	開眼～波斯匿王延寿事の記事等の講読・検討、及び最後のまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。『覚禅抄』の当該記事をよく読み、関連図像を含めて理解すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しない。

【参考書】
『大日本仏教全書』第51巻覚禅抄第7（大法輪閣、2007年）
『大正新脩大蔵経図像部』第四巻・第五巻（大蔵出版、1975・1976年）
覚禅鈔研究会編『覚禅鈔』1-14（親王院堯榮文庫、2000年-）
覚禅鈔研究会編『覚禅鈔の研究』（親王院堯榮文庫、2004年）

【成績評価の方法と基準】
発表５０%、平常点（出席状況等）５０%

【学生の意見等からの気づき】
該当なし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学
＜研究テーマ＞中世仏教文学・芸能・寺院資料論
＜主要研究業績＞・「称名寺聖教中の春日関係資料と『春日権現験記絵』」(『説話文学研究』46、2011年7月)・「貞慶をめぐる説話と律院ー「異砂記」・狛行光春日霊験譚」(『説話文学研究』55、2020年9月)・「正楽寺蔵・荒神曼荼羅について一蔵王権現と習合した忿怒相の荒神像と諸尊」(『寺院文献資料学の新展開第五巻中四国諸寺院Ⅰ』臨川書店、2020年3月)

【Outline (in English)】
This course deals with the "Kakuzen-Sho" (A book compiling Buddhist iconography and the historical precedents of Buddhist rituals,while quoting sutras).
At the end of the course,students are expected to become able to research Buddhist iconography and rituals independently.
Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Grading will be decided based on lab reports(50%), and in-class contribution(50%).

PRI500B7（情報学基礎 / Principles of informatics 500）

国際日本学特殊講義ＪⅠ

田中　邦佳

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて統計学的分析を行う必要がある。本授業では演習を通じ、いくつかのデータ分析の方法を知り、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か学ぶ。

【到達目標】
(1) データ分析の手法について理解する。
(2) 統計的な数値の意味を理解する。
(3) テーマに応じて適切なデータ分析ができるようになる。
(4) 上記の3つの項目を踏まえて、参加者各自の研究計画でどのような手法を用いるのが適切か提案できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と演習形式で行う。
参加者は、Excel と R を用いたデータ処理や統計に関する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	授業の進め方の説明
第2回	記述統計と推測統計	記述統計と推測統計の違い
第3回	記述統計で用いた数値	平均・標準偏差
第4回	データのバラツキ	正規分布・標準偏差
第5回	Excelでのデータの集計(1)	Excelを用いたデータの集計
第6回	Excelでのデータの集計(2)	Excelを用いたデータの集計
第7回	Excelでのデータの集計(3)	Excelを用いたデータの集計
第8回	R でのデータの集計(1)	R を用いたデータの集計
第9回	R でのデータの集計(2)	R を用いたデータの集計
第10回	R でのデータの集計(3)	R を用いたデータの集計
第11回	Excelでの論文用の表の作成	Excelを用いた表の作成
第12回	Rでの論文用の表の作成	Rを用いた表の作成
第13回	言葉での報告	集計結果の文章での報告
第14回	総合演習	データの統計的分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参加者は、各種データの分析を行う。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
山田剛史, &村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】
60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）
40%: 期末課題
欠席回数が通算4回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】
分析課題を行う時間をより多く設定します。

【学生が準備すべき機器他】
Microsoft Excel （PC版）が使える環境。

【【担当教員の専門分野等】】
＜専門領域＞
第二言語習得
＜研究テーマ＞
第二言語の音韻習得やリーディングについて
＜主要研究業績＞
北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房(2017)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Course outline: In this course, students will learn the basic statistical methods.
Learning Objectives: At the end of the course, students are expected to do the followings:
(1) Reading various types of graphs.
(2) Making graph data according to specific cases.
(3) Reporting data objectively in writing.
(4) Summarizing some data in a poster
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy: Final Assignment 40%, Class Assignment 60%

PRI500B7（情報学基礎 / Principles of informatics 500）

国際日本学特殊講義ＫＩ

田中　邦佳

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて分析し、その結果を可視化（グラフ化）して示す必要がある。本授業では演習を通じ、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か、データ化や可視化における注意点について学ぶ。

【到達目標】
(1) ExcelやRを使用して基本的なデータの処理ができるようになる。
(2) Excel や R を使用してデータの適切なグラフ化ができるようになる。
(3) データの種類に応じた適切な分析・可視化ができるようになる。
(4) 上記の3つの項目を踏まえて、参加者各自が関心を持つ研究テーマで用いられている手法の利点を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
講義と演習形式で行う。
参加者は、Excelを用いたデータ処理や作図する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	授業の進め方の説明
第2回	データの入力	Excelを使いデータの入力、注意点について
第3回	データの代表値の提示	平均値
第4回	平均値以外のデータの代表値の提示	中央値・最頻値
第5回	データのバラツキの提示	標準偏差
第6回	データの集計	集計結果のまとめ方
第7回	グラフを用いたデータの可視化	棒グラフ・折れ線グラフ
第8回	データの頻度の可視化	ヒストグラム
第9回	複数のタイプのデータの可視化	複数の要素が含まれたグラフ
第10回	複数のデータを扱うタイプのデータの可視化	散布図
第11回	データの量が多い場合の分析	大きなデータの分析
第12回	データ分析の結果の言葉での説明	データ分析の結果の文章化
第13回	研究テーマに合った分析と可視化	適切な分析手法の選択
第14回	総合演習	データ分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
参加者は、各種データを読み取って文にまとめたり、数値データをまとめてグラフなどの形に作図し準備しておく必要があります。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
プリントを配布します。

【参考書】
山田剛史, &村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】
60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）
40%: 期末課題
欠席回数が通算4回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】
具体的なデータを用いた分析演習の時間をより長く設定します。

【学生が準備すべき機器他】
Microsoft Excel （PC版）が使える環境。

【【担当教員の専門分野等】】
＜専門領域＞
第二言語習得
＜研究テーマ＞
第二言語の音韻習得やリーディングについて
＜主要研究業績＞
北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房(2017)
川﨑貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制―日本語母語話者による英語摩擦音習得―」白畑知彦・須田孝司　編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】
Course outline: In this course, students will learn the basic approach to summarizing data and methods for visualizing data.
Learning Objectives: At the end of the course, students are expected to do the followings:
(1) Reading various types of graphs.
(2) Making graph data according to specific cases.
(3) Reporting data objectively in writing.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.
Grading Criteria /Policy: Final Report 40%, Class Assignment 60%

LIT500B7（文学 / Literature 500）

国際日本学特殊講義ＬⅠ

倉本　さおり

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代のポップカルチャーはインターネットやSNSをはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。この授業では漫画やアニメ、ライトノベル、映画、ドラマ、2.5次元舞台、アイドルなどのポップカルチャーを中心に、具体的な作品やコンテンツを取りあげ批評的に鑑賞するスタイルを採用します。さまざまな角度から積極的に楽しみつつ、ときに批判を交えた分析を行うことで、思考停止に陥らず、流動的な現実や個々の社会そのものの在り方を主体的に捉えるための視点や方法を学んでいきます。

【到達目標】
・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる
・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら建設的な意見を述べることができるようになる
・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる。
・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
履修生の人数と各自の状況を考慮したうえで、対面での授業を基本としつつオンラインを併用した講義を行う予定です。
講義では画像や映像サンプルを用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したのち、各自「サブカル歴」をまじえつつ自己紹介をしてもらいます。これまで自分がどんな文化の中で育ってきたのか、どんなジャンルやコンテンツに興味があるのか改めて意識することで、サブカルチャーないしポップカルチャーというものの存在がどのような手続きを経て人びとの自己形成に関わっていくのか主体的に確認していきます。
第2回	メディアとポップカルチャーの現況	アニメ『違国日記』（2026年、原作・ヤマシタトモコ）をイントロダクションに、OP曲や劇伴（BGM）の効果に注目しつつ、をイントロダクションに、複数のメディアと連動して発展していくサブカルチャーないし現代のポップカルチャーの特徴について概説します。
第3回	大衆とカルチャーと「物語」	フランスの民話「美女と野獣」と、その受容の歴史、そして現代の広告表現などに見られるイメージの変容を検証しながら、「物語」というものがポップカルチャーにおいてどのように援用／転用されてきたか考えていきます。
第4回	ポップカルチャーの諸相①（物語と声）	アニメ映画史上初めてアカデミー賞作品賞にノミネートされたディズニー制作の『美女と野獣』（1991年）を鑑賞し、現在流通している「美女と野獣」の物語の特徴を確認しながら、当時評価された本作の革新性について検証していきます。
第5回	ポップカルチャーの諸相②（時代という装置）	1740年に発表された『美女と野獣』（ヴィルヌーヴ夫人版）と1756年に発表された『美女と野獣』（ボーモン夫人版）を比較しながら、第3回の授業で検証した「物語」の継承と変容について考察を深めていきます。
第6回	ポップカルチャーの諸相③（社会の要請）	2017年にエマ・ワトソン主演で制作された実写映画『美女と野獣』を鑑賞し、これまで複数回にわたって映像化されてきた「美女と野獣」というモチーフをめぐる作品群の解釈や演出の違いに着目しつつ、ディスカッションを通じて立体的に検分していきます。
第7回	ポップカルチャーの諸相④（枠組みとイメージの転用）	2021年に公開された細田守監督のアニメーション映画『竜とそばかすの姫』を鑑賞しながら、「美女と野獣」のモチーフが日本の社会の中でどんなイメージを担ってきたのか検証します。その後、前回の授業を踏まえ、「枠組み」や「イメージ」の転用がポップカルチャーの中で果たす意味について考えます。
第8回	中間発表会	これまでの授業を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。その後クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第9回	解釈とアダプテーション①（アダプテーションの考え方）	田辺聖子の短篇小説「ジョゼと虎と魚たち」（1985年）を読んだうえで、犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』（2003年）を鑑賞し、原作となったテクストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されたのか分析していきます。
第10回	解釈とアダプテーション②（時代背景の変化から考える）	前回の授業を踏まえ、タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』（2020年）を鑑賞し、どのようなプロセスを経て翻案に至ったのか、特に時代背景や社会環境の変化に着目しディスカッションしながら考察していきます。
第11回	解釈とアダプテーション③（社会環境の差異から考える）	キム・ジョングァン監督によるリメイク版『ジョゼと虎と魚たち』（2020）を鑑賞し、第９回で検討した要素を念頭に入れたうえで、アダプテーションの様相についてディスカッションします。
第12回	解釈とアダプテーション④（アイコンと文脈と社会の変容）	新海誠監督の『すずめの戸締まり』を鑑賞し、『君の名は。』『天気の子』から続く「災害と犠牲」というモチーフの変容と共通点を洗い出しながら、日本のポップカルチャーの論点について語り合います。
第13回	ミニレポート発表会	これまでの授業（物語、文脈、表象）を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。その後クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第14回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて資料を配布します。

【参考書】
※そろえる必要はありません
・橋本陽介『ナラトロジー入門――プロップからジュネットまでの物語論』（水声社）
・東浩紀『動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
・三原芳秋、渡邊英理、鵜戸聡＝編著『クリティカル・ワード 文学理論 読み方を学び文学と出会いなおす』（フィルムアート社）
・河野真太郎『戦う姫、働く少女』（POSSE 叢書）、『新しい声を聞くぼくたち』（講談社）
・堀あきこ、守如子＝編『BLの教科書』（有斐閣）
・永田大輔、松永伸太朗 ＝編『アニメの社会学―アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』（ナカニシヤ出版）

・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く――「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
・一柳廣孝 『怪異の表象空間　メディア・オカルト・サブカルチャー』（国書刊行会）
他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】
授業への参加態度20％、授業内で執筆・提出する課題30％、期末レポート50％

【学生の意見等からの気づき】
特に対面とオンラインを併用する場合は、個々の学生の発言が建設的な意見交換へとつながるよう、適宜調整を行いながら活発な議論の場を用意する。また授業ごとに論点の整理を行い、議論の足場をわかりやすく設定していく。

【学生が準備すべき機器他】
パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【その他の重要事項】
本科目は他専攻学生の履修も受け入れます。

【担当教員の専門領域等】
国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。小説トリッパー「カルチャー放談」連載中。文學界「新人小説月評」(2018)、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」(2019)、共同通信文芸時評「デザインする文学」(2020～2023)、TBSラジオ「文化系トークラジオLife」サブパーソナリティ。

【Outline (in English)】
【Course outline】
Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you will critically appreciate and discuss pop culture content such as manga, animation, light novels, movies, TV dramas, 2.5dimentional musicals, and idols. By identifying and analyzing problems from various angles, you will learn perspectives and methods for actively grasping dynamic reality and social situations without stopping thinking.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to apply the perspectives learned in class to discover problems on their own, and to think about pop culture from multiple perspectives using information formed by a variety of media, and identify research problems based on the differences and commonalities among different cultures.
【Learning activities outside of classroom】
In addition to researching literature and viewing art related to each theme, students will be expected to take notes on pop culture-related news and other topics of interest and use them in class discussions.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
The overall grade for the class will be determined based on the following Attitude toward class participation: 20%, assignments to be written and submitted in class: 30%, final report: 50%.

LIT500B7（文学 / Literature 500）

国際日本学特殊講義ＬⅡ

倉本　さおり

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代のポップカルチャーはインターネットやSNSをはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。後期の授業では「ジェンダー化されたマンガ・コンテンツ」としての側面を持つ『週刊少年ジャンプ』に注目し、現代社会の論点をあぶりだすと共に、ポップカルチャー批評が豊饒な未来へとつながるような提言を模索していきます。

【到達目標】
・授業中に学んだジェンダーに関わる視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる）
・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら建設的な意見を述べることができるようになる
・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる。
・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【主な授業方法】
L 講義 /Lecture

【授業の進め方と方法】
履修生の人数と各自の状況を考慮したうえで、対面での授業を基本としつつオンラインを併用した講義を行う予定です。
講義では画像や映像サンプルをふんだんに用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえてポップカルチャーとジェンダーをめぐる諸問題について学んでいきます。
授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介と授業の進め方についての説明。また、ジェンダーをめぐるいくつかの論題を紹介し、サブカルＮチャーないしポップカルチャーと呼ばれているものから社会規範や人びとの自己認識をかたちづくるプロセスを読み解くための有効な視点や手法について考えていきます。
第2回	マンガ雑誌とジェンダー、メディア文化と再帰性	今なお日本で最も発行部数の多い雑誌メディアであり、かつ「(区分上)ジェンダー化されたコミック雑誌」という複合的な性格を有する『週刊少年ジャンプ』の今日に至るまでの位置づけと変化について、国内外のメディアにおける言及のされ方を参照しつつ社会的な文脈から検証します。また、読者アンケートが作品の掲載順や内容にまで影響を及ぼしていた同メディアの特徴を取り上げ、メディアとコンテンツとコミュニティの流動的な関係性に焦点を当てていきます。
第3回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ①（バトル形式と物語の展開）	近年の世界的人気アニメ『ダンダダン』や『チェンソーマン』をイントロダクションに、週間発行部数653万部を記録し黄金期と呼ばれていた1990年代の『週刊少年ジャンプ』掲載作品（鳥山明『ドラゴンボール』、冨樫義博『幽遊白書』、井上雄彦『SLUM DUNK』等）を取り上げ、その展開と結末の様相をめぐって噴出した言説から、当時の日本の「少年マンガ」の像がどのような論点を社会に提示したのか考えていきます。
第4回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ②（ヒーローの相対化）	堀越耕平『僕のヒーローアカデミア』におけるヒーローとヴィラン（≒敵役）の描き方に着目し、いくつかの論文を参照しながら、近年の「少年マンガ」がどのような文脈で社会に受容されているか検討していきます。
第5回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ③（チーム化とロジック化）	葦原大介『ワールドトリガー』の構造に着目し、近年の「少年マンガ」が90年代に提示された〈バトル〉をめぐる論点をどのような形で更新しようと試みてきたか考えてみます。
第6回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ④（勝者と敗者の解体）	2.5次元ミュージカルという分野でも大きな注目を浴びている古舘春一の『ハイキュー!!』368話「なにもの」にスポットを当て、群像劇としてのスポーツマンガの影響と可能性について多角的に検証していきます。
第7回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツの主人公／主要キャラクターを取り上げ、その動機付けと物語の展開について、オリエンテーションで紹介した有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈成長〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第8回	中間発表会	自分が興味のあるコンテンツや派生したメディアのトピックから期末レポートに向けた論点を見つけ出し、簡単な発表を行ってもらいます。
第9回	「少年マンガ」とジェンダーロール①（テクストとしてのキャラクター）	戸塚慶文『アンデッドアンラック』における主人公像／ヒロイン像の変化に着目し、テクストとしてのキャラクターが形成されるプロセスについて検証していきます。
第10回	「少年マンガ」とジェンダーロール②（「少年マンガ」における女性性）	前回の授業の踏まえつつ、芥見下々『呪術廻戦』における女性キャラクターの様相に着目し、彼女たちがどのようなジェンダーロールを内面化し、あるいはそれを乗り越えようとしているか考察していきます。
第11回	「少年マンガ」とジェンダーロール③（少年マンガにおける「母」）	90年代に連載されていた井上雄彦『SLAM DUNK』の父子像と2022年公開の映画『THE FIRST SLAM DUNK』に登場する母親の造型を参照することで、従来の少年マンガにおいて「母」がどんな磁場のもとに存在していたか検証していきます。
第12回	「少年マンガ」とジェンダーロール④（ラブコメの類型と逸脱）	過去に掲載されてきた作品のうち「ラブコメ」と呼ばれるジャンルを中心に、読者の反応を参照しつつ、これまで「少年マンガ」の磁場においてジェンダー規範とロマンチック・ラブがどのように受容され、変化してきたか考えていきます。
第13回	「少年マンガ」とジェンダーロール⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツを取り上げ、そのキャラクター造型や物語の構造について有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈ジェンダー〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第14回	まとめとフィードバック	期末レポートに向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定・発表し、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。
本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要に応じて資料を配布します。

【参考書】
※無理にそろえる必要はありません
・東浩紀『動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
・足立加勇『日本のマンガ・アニメにおける「戦い」の表象』（現代書館）
・金水聡『役割語研究の展開』（くろしお出版）
・河野真太郎『戦う姫、働く少女』（POSSE 叢書）、『新しい声を聞くぼくたち』（講談社）
・押山美知子『少女マンガ ジェンダー表象論　〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』（アルファベータブックス）

・堀あきこ、守如子＝編『BLの教科書』（有斐閣）
・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く――「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】
授業への参加態度30％、授業内で執筆・提出する課題30％、期末レポート40％

【学生の意見等からの気づき】
特に対面とオンラインを併用する場合は、個々の学生の発言が建設的な意見交換へとつながるよう、適宜調整を行いながら活発な議論の場を用意する。また授業ごとに論点の整理を行い、議論の足場をわかりやすく設定していく。

【学生が準備すべき機器他】
パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【その他の重要事項】
本科目は他専攻学生の履修も受け入れます。

【担当教員の専門領域等】
国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。小説トリッパー「カルチャー放談」連載中。文學界「新人小説月評」(2018)、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」(2019)、共同通信文芸時評「デザインする文学」(2020～2023)。TBSラジオ「文化系トークラジオLife」サブパーソナリティ。

【Outline (in English)】
【Course outline】
Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you focus on "Weekly Shonen Jump" one of the magazine media that has been characterized from the perspective of gender, and learn about issues facing modern society and suggestions for leading criticism of pop culture to a prosperous future.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to think about pop culture from a variety of perspectives by applying the gender-related perspectives learned in class to discover issues on their own, and by using information formed by various media., and identify research problems based on the differences and commonalities among different cultures.
【Learning activities outside of classroom】
In addition to researching literature and viewing art related to each theme, students will be expected to take notes on pop culture-related news and other topics of interest and use them in class discussions.
The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
The overall grade for the class will be determined based on the following Attitude toward class participation: 30%, assignments to be written and submitted in class: 30%, final report: 40%.

法政大学
HOSEI University